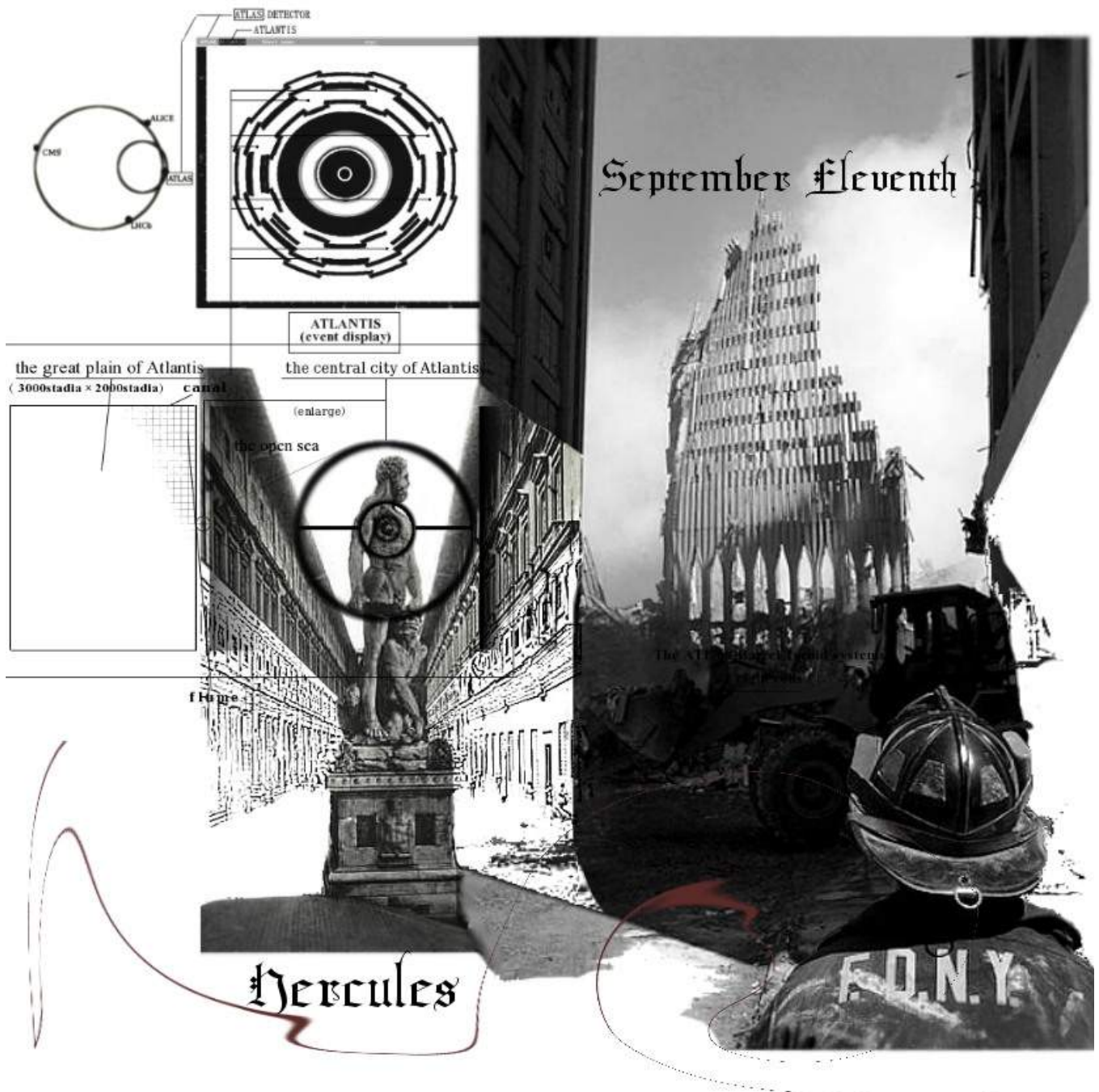


Entities that physicists refer to as Black holes , already fulfilled many extraordinary Predictions , and firm Guilty Intent

— [IV] —



[本稿の内容検証に際して「特段に」注意いただきことらとして]

※ [委細を尽くしての細部] によって [本筋] を見失われないよう、ご注意くださいことらとして

それこそ「ざっと見」にてご一読いただくだけでもご理解いただけることとは存じますが、本稿は「非常に細々とした表記をなしているもの」となります。その点に関して文書製作者としては（非常に細々とした表記がゆえに）読み手の方々が文書主筋となる箇所を見失われかねない —（本稿が「なぜ」「どのような」問題意識をもって作製されたものなのか、その指し示事項は究極的には奈辺にあるのかについて把握するうえで難渋される（そして文書検討をおやめになる）とのことになりかねない）— とのことに危惧・懸念いたしております。それゆえ、ここ冒頭部にて次のこと、注意喚起なさせていただきますと思います。

（以下、文書内容についての冒頭部注意喚起としまして）

⇒「本稿の主要なる問題意識と訴求事項は文書タイトル — すなわちもってして Entities that physicists refer to as Black holes , already fulfilled many extraordinary Predictions , and firm Guilty Intent 『物理学者の類がブラックホールとよびならわしている存在ら、既に実現を見てきた異様な予見的言及、そして、確たる他害意志の介在問題について』とのタイトル — にすべて集約されています。いかに細々としたものであれ、本稿中の記述はこれすべてそちら文書タイトルで表しもしているまさにそのことを摘示「しきる」ために必要と判じてのものとして表記しております（脈絡・文脈なくも漫談じみた無為なるはなしを展開しようとの観点は全くございません）。微に入っ細やかな表記はそうもしてこれすべて【一つの目的に奉仕するために必要な手順】と判じてがゆえのものとなるのですが、他面、読み手銘々が一体全体何が問題になっているのか捕捉しづらいつのことが —（「ざっと見をまずもってなす」との嗜好が強い方ほど）— であろうか書き手たるこの身が深く懸念していることにも相違ございません。そこで本稿を真摯に検討なそうとの方々には本稿が「厳密な意味での段階説明方式を採用している」とのことをご理解いただきました上での【文書の最初から順を追っての検証】を、何卒、願わさせていただきます次第でございます」

※ 本稿内の数多の出典紹介部、そのすべての記載内容の即時的かつ効率的な確認方法につきまして

本稿は申し分を支える根拠、その出所紹介を極めて重んじているものともなります（書き手として【我々の生き死に関わる事柄】を詳述詳解すべく死命を賭して作製しているとの本稿内容が実際にこれすべて【後追い可能かつ容易なる典拠】に基づいているとのこと、そのことを読み手第三者にご理解いただくことこそが何よりも肝要であろうとの認識があつてのこととしまして、です）。そのため、出典紹介部の比重が重くなっています。

さて、ここでは紙幅の多くをそこに割くとのかたちで本稿本文中に入れ込んでいる数多の出典紹介部らの内容すべてを、「都度」、必要に応じて即時的に確認するうえでの方式をご案内させていただきますと思います。

そちら【都度、即応的にすべての出典紹介部の内容を即時確認する方式】の実行の前提条件となることとしまして（出典の確認検証をなしたいとの方々におかれましては）まずもって本稿各巻巻末に全巻共通のものとして設けている【典拠紹介部ページ数一覧記載部】の内容「のみ」ご印刷いただきますよう（遺漏無くも確認にあつて必要なこととお含みいただきましたうえで「そこだけ」ご印刷いただきますよう）願わさせていただきます次第です。そして、印刷いただきましたうえでそちら【「数ページよりのみなる」各出典紹介部ページ数一覧】をお手元に置いていただきましたうえで —ここからがポイントとなるところなのですが— 別ファイル名で本稿と全く同じPDF ファイルを（お手持ちのパーソナルコンピューターにて）同時に開いていただきたい次第です（:まったく同一内容同一巻の本稿をかたやファイル名1、かやたファイル名2とのかたちの異なったファイル名称のPDF ファイルとして「同時に」別ファイルとしてオープン・閲覧していただければ、とのこととなります）。

さて、まったく同一の本稿を同時並行的に別ウィンドウにて閲覧できるとの状況になりもするのが、既述の、【別ファイル名にての保存ファイル】を別々にオープンしたケースとなる次第なのですが、片方の電子ファイルを順繰りに検討している中で、たとえば、出典紹介部2の内容をなんとしても確認したくなつたとのことがあつたとします。といった場合、（最前にて「そこだけ」印刷のうえでお手元にご用意いただきたいと申し伝えさせていただきました）【「紙ベースでの」わずか数ページよりなる出典紹介部一覧】にて出典紹介部2は何巻何ページにて記載されているものなのか、一目にての確認をまずもってなしていただければ、と思います。出典紹介部一覧表記部における出典紹介部2のページ数（出典紹介部2ならば、具体的には本稿第一巻53ページから59ページ）を確認いただければ、そちら該当ページに掲載の出典紹介部の内容の確認を【（振り返って特定出典紹介部の内容が確認したくなつたところの）現在読解のセクション】から立ち位置を動かさずに「同時並行的に」なせもします。本稿PDF文書（便宜的に呼称して【File1】とのかたちで開いていただいているものとし）を閲覧しつつ、もう一方の【File2】名称で開いている別ウィンドウ表示の同じくもの、同一の本稿別名ファイルにあつてそちらPDF上の（画面上部にての）ページ数入力ボックスに【印刷した出典紹介部にて記載のページ数】を入力いただければ、【出典委細確認の必要を感じたセクションの表記の継続閲覧】と【（都度もってしての）出典内容の委細確認】を同時になせもします —確認対象と読解対象が同一巻数（vol.1からvol.4と分かちての本稿の同一巻数）に位置していても同時になせもします—（流れとしては【文書読解】→【疑問点表出（典拠出典番号として記載されている従前の出典表記確認の必要性の認識）】→【印刷した出典表記一覧部の該当出典紹介部のページ数の確認】→【文書名を分けて同時オープンしたPDFのページ数入力ボックスに出典紹介部のページ数の入力】→【File1での疑問点を感じたセクション以降の読解の継続とFile2での出典委細の確認の間断なくも同時実行】とのフローとなります）。

以上ご案内させていただきました手法を採択いただければ、ほとんど印刷することもなく都度、出典中身すべてを必要に応じて即時的に確認いただきながら長大な本稿の検証をなしていただけることと存じます。

本書第四巻 (vol.4) の構成

【後日の加速器によるブラックホール生成論議に対する露骨な予見作品ら】にあつて「も」伴いもする特定の要素らとの接点について

(うち、【「多くの事柄においてその共有が問題となる特定の要素ら」とはどのようなものなのか、との点】および【(問題となる要素らの具備をさらにも指摘することとした)「後日」取り沙汰されるに至った加速器によるブラックホール生成論議に先んじての「露骨な」予見作品らとは一体全体どのようなものなのか、との点】について整理して示しているとの部) p.5

(うち、【「後日」取り沙汰されるに至った加速器によるブラックホール生成論議に対する「露骨な」予見的言及をなしているとの筋目の著作である『スライス・アポン・ア・タイム』(邦題『未来からのホットライン』)という作品がいかようにして【問題となる要素ら】を具備しているのか、との点】について詳述なしもしているとの部) p.19

(うち、【同文に「後日」取り沙汰されるに至った加速器によるブラックホール生成論議に対する「露骨な」予見的言及をなしているとの著作である『北緯38度54分、西経77度0分13秒 ランゲルハンス島沖を漂流中』という作品がいかように【問題となる要素ら】を具備しているのか、との点】について詳述なしもしているとの部) p.119

本稿にてここに至るまでいかなることの摘示に努めてきたのか、その振り返り表記をなすとして

(表記見出しの通りのことを一意専心して扱っての部) p.210

本稿のここまでにあつての指摘事項につきまとっている【意味】上の繋がりあいに着目しての分析をなすとして

(表記見出しにて言及の【意味に着目しての分析】を【主要宗教における主軸たるドグマとせんだって摘示してきたことらの多重的な接合性】から多角的になしているとの部) p.236

本稿のここまでにあつての指摘事項に対する【計数的視座:確率論的視座】に依拠しての分析をなすとして — (読み手を選ぶ、それゆえ、**主軸をなさぬ補遺**と位置付けての部) —

(表記見出しにて言及の【確率論的分析】を展開するにあたり【ベイズ推定の公式】の(その定立に至る)基本概念および応用手法について詳述をなし、そのうえで、何が問題になるのか、ベイズ確率論に依拠しての計数的な問題提起をなしているとの部) p.354

ホワイダニット(何故そうもなされているのか)の問題、人の身としておよそ考えられるところの【動機】についての分析として — (推察を出でぬ、その意で**主軸をなさぬ補遺**と位置付けての部) —

(うち、「事後の内容は多く推察を出でぬものとして重み付けをなしているところではない。主たることの重要な証示を終えた段階でのいわばもってしての付録のようなものである」と事前言明したうえでのこととして)、【物理学者フランク・ティプラーの名と共に欧米で有名になったオメガポイント理論とは一体全体どのようなものなのか、との点】、またもってして、【オメガポイント理論の物理学者フランク・ティプラーの展開のなしように伴う反対話法がかつての側面 および (異様な) 予見的側面とは何なのか、との点】について 詳述なしもしているとの部) p.547

(うち、【オメガポイント理論接合領域「以外に」究極的目標としてどういったことが考えられるのか、とのこと】について — ([ワームホールを用いての物理的実体を伴ってのナノマシンによる種子の播種 / 裸の特異点の応用 といったことにまつわって現代科学界にて呈示されている遠未来技術科学予測ら] と [問題となる事物ら] との水際だつての異様な接続性との絡みで) — 解説しているとの部) p.647

お 筆を擱く前に訴求なしておきたきところとして

かくひつ
(擱筆の段にあってながら、いや、擱筆の段であるからこそ、細々としたことでありながらも敢えてもってして訴求したいとのところを記しての部) p.731

各[典拠紹介部]記載箇所一覧表記部 p.766

【後日の加速器によるブラックホール生成論議に対する露骨な予見作品ら】にあつて「も」伴いもする特定の要素らとの接点について

長大なる本稿にあつては前半部より以下表記のことこそが問題となりもする関係性、その核たるところにあると訴求してきた。

【ヘラクレス12功業】

【(ヘラクレス第11功業に見る)巨人アトラス】

【トロイア崩壊伝承に見るトロイア崩壊の原因たる(そしてもつてして他の伝承では巨人アトラスが在処を把握する果実とされもする)黄金の林檎】

【巨人アトラスともトロイア崩壊元凶たる黄金の林檎とも史的に結びつけられてきたとの陸塊アトランティス(およびその沈没伝承)】

【アトラスやアトランティスといった固有名詞を付されてのLHC実験におけるブラックホール関連領域事物】

の要素らのうちの複数との際だつての接点を伴いながら、かつもつて、

【911の事件に対する事前言及(と「露骨に」解されること)】

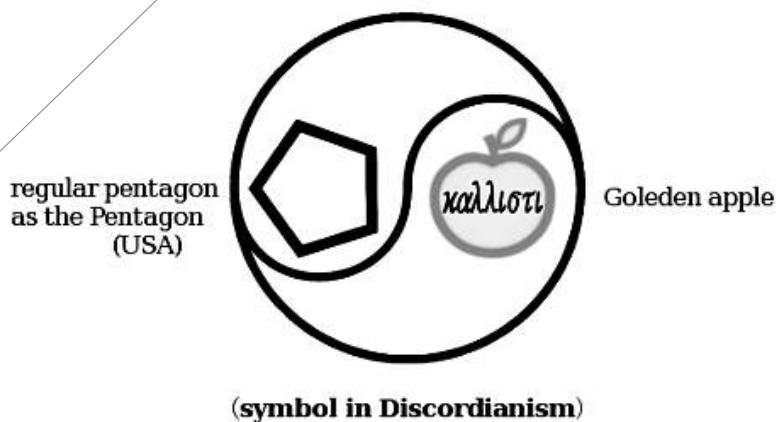
【ブラックホール人為生成問題にまつわる「先覚的言及」】

の一方、ないし、その双方の特徴「をも」呈しているとの事物らが「あまりにも不可解に」「数多く」存在しているとのことがある。

【表記関係性にまつわつての極一例となるところとしての再掲図解部】

(直下呈示の図示の部 —論拠を他に譲つてのものながらも図示の部— にあつて一例を挙げんとしているように【911の事件の事前言及との要素を含むが如く作品】らが【黄金の林檎】と結びついているとのことがある)

The Illuminatus ! Trilogy & Golden Apple



※荒唐無稽小説『ジ・イルミナタス・トリロジー』では「マンハッタンのビルが爆破され」「ペンタゴンが爆破され」「炭疽菌テロが問題になり」「ニューヨークとペンタゴンの並列化象徴(上掲のデイスコードイアニスム・シンボル)が作中、類出し」ている。また、同作より派生したカード・ゲームにあつて「爆破投下するツインタワー」「粉塵を上げるペンタゴン」が描かれていることも知られている。要するに、複合的要素から、70年代米国にてヒットを見た当該小説作品には「ニューヨークのビルとペンタゴンが標的になり」「事件直後、炭疽菌テロが発生し」たとのかの911の事件に対する尋常一様ならざる先覚性が見てとれると述べてもいい(機序はともかくも「現象」の問題としてである)。

911 foretelling

尚、本稿では先行するところの【補説4と振つてのセクション】(現行、vol.4との巻数でのPDF文書での筆の運びをなしているところをvol.3と振つての前巻PDF文書の中のp537以降の部にそちらに紙幅を割いていたとの従前セクション)で【黄金の林檎】と関わる【911の予見作品ら】としていかような作品らがどのように存在しているのか、微に入つての詳述をなしている。

(尚、直前部にあつては荒唐無稽小説『ジ・イルミナタス・トリロジー』作中内に見られる図を挙げている、すなわち、[イルミナティ][イルミナタス]などという陰謀「論」者が好むワードを表題に含む作品に内包されもしている図を挙げているわけであるが、先立っての段でなしていた次の断り書きを一ありうべき誤解を避けるために— 再三再四、繰り返しておく。

⇒

(restating) Although this long paper deals with [foretelling problems] which are related with masonic symbolic system deeply , I don't cling to point of view that such organizations as Freemasonry (or "legendary" Illuminati) are chief conspirators behind significant incidents. As an author of this evidence-based paper, I never intend to maintain "self-belief-system" avoiding the sterile land of conspiracy theorists who persist in conspiracy "theories" such as [NWO conspiracy theory] , [Illuminati (that organisation can't be identified exactly) conspiracy theory] or [(fictional?) power obsessed human elite circle conspiracy theory].

「長くもなるとの本稿にあつては[フリーメーソンのシンボル体系と濃厚に接合する「前言」事物]らがあまりにも露骨に多数存在しているとの問題についても取り扱すが(具体的事例を多数挙げながらも取り扱すが)、だが、だからと言って、(本稿それ自体にて)フリーメーソンのような組織体が重要な出来事の背後背面に控えるフィクサーとしての陰謀団であるとの見立てを押し売りしたいわけではない。フリーメーソンのシンボリズムを異常異様なることに流用する力学があるとは具体的事実を挙げ連ねて指摘なすが、チェス盤上の駒が陰謀の立役者であるなどとは考えていないし、そのようなことを目立って訴求するつもりもない。またもってして筆者は陰謀論者よろしく[新世界秩序陰謀論][イルミナティ(という実体不明瞭なる組織体)に関連する陰謀論][「人間の」権力それ自体に固執するエリート・サークル(架空存在たりうる)による陰謀論]ら不毛なる陰謀論の領域に固執するような人間でもない — 尚、筆者が [陰謀論者にとっての金城湯池(たる陰謀論の領域)] をして the sterile land【不毛なる地】と殊更に表しているのは現時、目につきやすくなっているところの陰謀論 Conspiracy Theories あるいはその撒布のための媒体にあつて「【分断】と【不信】の根を人間社会に広める」(divide and rule「分断して統治(無力化)する」との観点で disbelief[不信]の根を広める)、でなければ、「稚拙・陳腐化させて問題となるところを矮小化するためであろうと露骨に判じられる式で【詐欺・捏造で満ち満ちた (filled with frauds and forgeries) 劣化情報】(たとえば子供騙しの幼稚な加工写真や加工映像) を撒布しているとのありようが 目立って見受けられる (わざと相応の言いようの人間を用いてそういうものとなっていることが往々に「ある」と捕捉するに至っているからである (にまつわつては本稿の先行する段でも一部解説を微に入ってきた) — 」)

(「次いで」 一部特性のみ紹介ながらもの直下呈示の図解部 — 論拠を他に譲つてのものながらもの呈示の図解部— にあつて振り返りしているように【黄金の林檎】を巡る事柄らは加速器実験とも接合している とのことがある)

Atlantis

destruction
of Troy

Golden Apple

Odysseus

the garden of Hesperides

the island of Calypso

phase1. Wooden Horse & massacre
(phase2. Deluge of water)

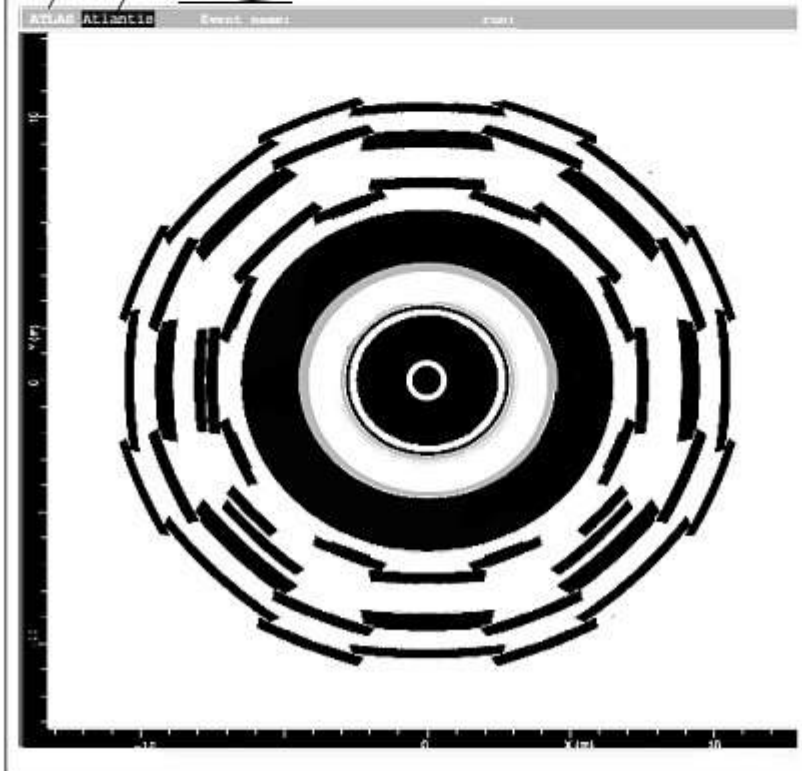
similar

" The sea Dashed o'er it, and the roaring torrents still rushed on it, swollen by the rains of Zeus; And the dark surge of the wide-moaning sea still hurled them back from mingling with the deep, Till all the Danaan walls were blotted out beneath their desolating flood. Then earth was by Poseidon chasm-cleft: up rushed Deluge of water, slime and sand, while quaked Sigeum with the mighty shock, and roared the beach and the foundations of the land Dardanian. So vanished, whelmed from sight, That mighty rampart. Earth asunder yawned, And all sank down, and only sand was seen, When back the sea rolled, o'er the beach outspread far down the heavy-booming shore. All this The Immortals' anger wrought." — Smyrnaeus Quintus (The Fall of Troy)

(11th labour of Hercules)

ATLAS (A Toroidal LHC ApparatuS)

ATLANTIS



[micro black hole generating event] detection

[トロイアとアトランティスの結びつき(1)]
 トロイアの崩壊は黄金の林檎によってもたらされたとも述べることもできる（[出典(Source)紹介の部39]）。その黄金の林檎が実るヘスペリデスの園が位置描写概要などよりアトランティスと結びつけられてきたとすることがある（[出典(Source)紹介の部41]）。
 また、トロイの滅亡は木馬の計略によって完遂したと伝わるが、木馬の計略を考案したと伝わるオデュッセウスがトロイア崩壊後に流浪したさまを描く叙事詩『オデュッセイア』では[カリュプソの島]というものが渦潮にクルーと船を呑まれたオデュッセウス漂着先として登場を見ており、そのカリュプソの島、巨人アトラスの娘たる神格の住まう島からしてアトランティスと結びつけられてきた（e.g. アイザック・ニュートンの特定古典内での物言いなど）とすることがある（[出典(Source)紹介の部43]）。

[トロイアとアトランティスの結びつき(2)]
 黄金の林檎を巡る女神らの美人コンテストに端を発して勃発したトロイア戦争。その終結をもたらししたのは木製の馬の計略であると伝承は語るが、今日、あまり知られていない古典ではそうやって滅びたトロイアにはさらなる破壊が及んだとの記述が含まれている。スミルナのクイントスに由来する『トロイア戦記』（英文タイトル the fall of Troy）に認められるところがそうで、トロイアを木製の馬で内側から破滅させたギリシャ勢も巻き添えにトロイアの存在が洪水にて完全抹消を見たとの伝承もよく知られていないところながら伝わっているのである（[出典(Source)紹介の部44-3]）。その点、[ギリシャ勢との戦闘に付随しての洪水による破滅]とのシチュエーションはアトランティスの最期と同一のものである（[出典(Source)紹介の部44-4]）に続いての段にてのプラトン著作よりの引用を参照のこと）。

[LHC実験とアトランティスの関係性について]
 どういう料簡でなのか、LHC実験はそのブラックホール生成可能性が現実的可能性をもって語られたとの始原期（LHC実験のブラックホール生成可能性論議を巡る経緯については本稿にての[出典(Source)紹介の部1]から[出典(Source)紹介の部5]を包摂する解説部を参照されたい）より前に遡る折柄、LHC計画がLEP加速器に接ぎ木しての加速器設置案としてCERNサイドで「正式に」ゴーサインを出されることになった1994年より前よりATLASとの名前と結びつけられているとすることがある（本稿の[出典(Source)紹介の部36(2)]で解説しているように1992年からのことである）。
 そこに見るアトラスという名称はヘラクレスの功業に登場してきた伝説の天を支える巨人の名であるわけだが、同巨人アトラス、
 [トロイア滅亡の原因ともなっている黄金の林檎]
 がたわわに実る果樹園の所在地を把握していると伝わっている巨人にして、それぞれ別個に、
 [古のアトランティス]
 に比定される[黄金の林檎の園][カリュプソの島]、それらの地の代表的住人たるヘスペリデスおよびカリュプソという女の神格らの父親とされる存在でもある（[出典(Source)紹介の部39]以降の一連の解説部にて文献的論拠を明示していることである）。そうもしたことが指摘できる時点でCERNのLHC実験はアトランティスと接合していると述べられる。
 のみならず、LHC実験ではATLANTISとの名前が付されているEvent Displayツールでブラックホール生成イベントを観測する可能性が実験関係者によって「肯定的に」（科学的知見発展に資する安全なブラックホールの生成・観測との文脈で）宣伝されているとすることがある。従って、ATLASとの名称それ自体に留まらずATLANTISとの名称をも用いているとのことでLHCとアトランティスの関係はいよいよ色濃くも見えてくるとのことがある。

さて、これ以降は(最前の段も含めて)それこそが問題となりもする関係性、その核たることであると申し述べてきたこと、

【ヘラクレスの計12に及ぶ功業】、【(ヘラクレス第11功業に見る) 巨人アトラス】、【トロイア崩壊伝承に見るトロイア崩壊の原因たる(そしてもってして他の伝承では巨人アトラスが在処を把握する果実とされもする) 黄金の林檎】、【[巨人アトラス]とも[トロイア崩壊元凶たる黄金の林檎]とも伝承上結びつけられてきたとのアトランティス沈没】、【アトラスやアトランティスといった固有名詞を付されてのLHC実験におけるブラックホール生成論議に関わる事物】との各要素らのうちの「複数」の要素との接点をはきと伴いつつ、かつ、【911の事件の発生(態様)にまつわる予見的言及】ないし【ブラックホール人為生成問題にまつわる「先覚的言及」】の一方、あるいは、その双方の特徴「をも」呈しているとの文物らが「あまりにも異様にも」存在している]

とのことについて同じくもの式が[剣呑かつ露骨なる先覚性]が強くも問題になる事物にても表出を見ていることについて指し示しをなすこととする。

具体的には

【本稿序盤部より【加速器ブラックホール生成問題】との絡みでその「際立っての」先覚性について取り上げてきた文物ら「にも」問題となる関係性 —ヘラクレス12 功業（およびそこに見るアトラスや黄金の林檎）を結節点とする関係性— が見てとれる】

とのことの指し示しをなすこととする。

が、そちら指し示しに先立ちもして、取りあえずもは、【本稿序盤部】 でいかようなことを指し示してきたのか、【整理】かたがたの振り返っての表記を直下、なしておくこととする。

本稿前半部の摘示事項を振り返っての部として

本稿序盤部より筆者は次の【事実 A】から【事実 E】の間に横たわる問題性を（関連する資料群よりの引用、多くウェブ上公開資料だけで確たる記録事実としてのありようを確認出来ようとかたちでの関連資料群よりの引用をなしつつも）問題視してきた。

【事実 A】（本稿前半部の **出典 (Source) 紹介の部 1** にて典拠となるところを必要十分のかたちで（公的資料よりの原文引用を通じて）指し示した記録的事実）

粒子加速器によってブラックホールが生成される可能性が取り沙汰されだしたのは **【1999 年】** からである。

その 1999 年との折柄にあつては **【厳密な意味では専門家ではない市井の個人】**（ウォルター・ワグナー）によってブラックホール生成可能性が**【災害を引き起こす元凶たりうるもの】**として問題視されだした（**【権威あるとされる専門家らがブラックホール生成可能性を目立って問題視していたわけではない】**）。

対して、そうした属人的疑念視がマス・メディア「にも」取り上げられることになったことを受け、**【専門家サイドからは「ブラックホール生成がなされることはそもそもないことである」との強調がなされ、ブラックホール生成の可能性それ自体を事実上完全否定する（狂人の妄夢の如きものであるとする）当事者研究機関の一群の報告書ら —（後にノーベル賞受賞者となった科学者も関与しての報告書でもある）— が世に出されることとなった。】**

【事実 B】（本稿前半部の **出典 (Source) 紹介の部 2** にて典拠となるところを必要十分のかたちで（公的資料よりの原文引用を通じて）指し示した記録的事実）

粒子加速器（の中にあつての **LHC**）による **【ブラックホール生成】** がなされうるとのことが —（**【事実 A】**に見るように **【1999 年】**にあつてそれが **【ありうべきリスク】**として専門領域「外」の人間に問題視されだした際には「**【そも、粒子加速器によるブラックホール生成はありうべきところではない】**と当事者研究機関に否定されていた」とのところから一転して）— **【ありえることである】**と**【肯定的に】**科学界主流筋および研究機関によって**【公的に】**認められるようになったのは **【2001 年】**のことからである（：その 2001 年からの論調では「通年で 1000 万個単位の」「安全な」

極微ブラックホールが生成されることになりうるともされるようになった)。

すなわち、「1999年においては」ブラックホールが人為生成される可能性だに否定していた科学界・実験機関の論調が「2001年に」変容を見、一転、加速器によるブラックホール生成をしてありうると肯定するようになったとのことがある(それについては、—これまた当然に論拠を挙げるところとして— [1998年に水面下で提唱されていた余剰次元理論(というもの)から導き出された帰結]が2001年の[変節]の背景にあると一般には説明されている)。

[事実C] (本稿前半部の **出典(Source)紹介の部3** にて典拠となるところを必要十分のかたちで(公的資料よりの原文引用を通じて)指し示した記録的事実)

粒子加速器 LHC によってブラックホール生成がなされうると加速器実験実施研究機関に認容されるに至った折、当然に学者らは「ブラックホール生成がなされても[安全]である」と強調していた。

ブラックホール生成がありうることとされるに至っての後、その初期的段階(2001年から2003年)においては安全性にまつわる論拠として

[「ホーキング輻射(ふくしゃ)と呼称される(仮説上の)現象」の発現による生成ブラックホールの即時蒸発]

のことが部外者・公衆向けの安全性報告文書で挙げられ、次いで、2008年以降よりは安全性論拠として

[宇宙線(Cosmic-ray/宇宙を飛び交う高エネルギーの放射線)との比較による生成された「蒸発しない」可能性のあるブラックホールの無害性]

のことが(更改を見ての)部外者・公衆向けの安全性報告文書にて強くも前面に押し出されるに至った、とのことがある。

そのような安全性論拠主張動態(重み付け)の変化の背景には[ホーキング輻射](という仮説上の現象)の発現が確実視され「なくなった」とのことがあるとも「される」。

[事実D] (本稿前半部の **出典(Source)紹介の部4** にて典拠となるところを必要十分なだけ(問題となる小説作品よりの原文引用を通じて)指し示したところとしての文献的事実)

1980年に初出を見た英国人作家ジェームズ・ホーガンの手になる小説作品 **Thrice Upon a Time**『未来からのホットライン』においては[文献的事実]として

1. 「[EFCこと欧州核融合協会との組織体が運営している施設]であるとの設定の[核融合プラント(バークヘッド重イオン施設)にある「加速器」使用型核融合プラント]が問題となっている局面で」
2. 「[加速器]使用型核融合プラントにての加速器で生成された大量の極微ブラックホール(具体的数値として[200万個にも及ぶ大量の極微ブラックホール]と作中明示)が地球にコアに落ち込み人類滅亡をきたすとの状況にまで至り」
3. 「にも関わらず、そのような状況をもたらしたブラックホール生成元となつての施設の当の運営者らは「[ホーキング輻射(ふくしゃ)現象の発現]によって粒子加速器接合型核融合発電プラントによるブラックホール

※【外挿表記としまして】：ここでそのように本稿では「頻繁に」文字色と背景色を変えての【出典紹介部】呈示のための表記をなしています。本稿全体の指し示し内容の重大性を顧慮して【後追い可能な典拠】の細部に至るまでの呈示からして必須事項ととらえているからではありませんが、無論にして、後追い「可能」であるだけでなく後追い「容易」である必要もあるとの認識が書き手この身にはございます。にまつわつて後追い「容易」性の方をもちます方式、すなわち、【都度即応的にすべての出典紹介部の内容を即時確認するための方式】を本稿にあつての冒頭 p.2 で細かく紹介しておりますので【頻繁に本稿の典拠内容の確認をなす必要】を感じておられるとの方々にあつてはそちら本稿 p.2 で案内させていただいております方式を採択いただければと考えます(典拠内容確認を容易・即応的になすとのその紹介方式とは本稿を収めた PDF 文書を別名保存で二ファイル用意し、うち、片方を閲覧用、もう片方を(巻末数ページの出典紹介部一覧表記部「だけ」を印刷して役立てつもの)出典確認用の電子文書として活用いただくとの方式となります)

生成は地球に壊滅的事態をもたらすことはない、そういうことは百万年に一回も起こりえないことだろう」との言い逃れをなしていた」

との内容を有している。

[事実(事実関係)E] (本稿前半部の **出典(Source)紹介の部5** にて補うところを指し示しているところの事実関係)

(**[事実A]** から **[事実C]** と **[事実D]** の間には以下のような[矛盾]と[際立った先覚性]の問題が見受けられると指摘できるところである)

「部外の間人が「加速器はブラックホールを生成するのではないか」と突発的に問題視したとの1999年にあつては「加速器によるブラックホール生成可能性」は研究機関発表動向として完全否定されていた(それが肯定的に論じられるようになったのは2001年である)にも関わらず1980年初出の特定小説にあつてからして加速器によるブラックホール生成が言及されていた」(「**[事実A]**と**[事実D]**より**[事実関係]**として導き出せる」ところである)

「加速器によるブラックホール生成については2001年よりの発表動向で通年単位で1000万個の生成可能性ありとされるに「至った」の対して、問題となる1980年初出小説でもブラックホール200万個生成が描かれているとのことで非常に話が似通っている」(「**[事実B]**と**[事実D]**より**[事実関係]**として導き出せる」ところである)

「加速器生成元が(2001年から2003年に至る)初期動向としてホーキング輻射をブラックホール生成が安全であるとの論拠として用いているのに対して、問題となる1980年初出の小説「でも」ホーキング輻射がブラックホール生成がなれていても「安全である」とのブラックホール生成元の言い訳として持ち出されていた旨、描かれているとのことがある」(「**[事実C]**と**[事実D]**より**[事実関係]**として導き出せる」ところである)

以上、(再摘示なしでの)各事実らに横たわる関係性から本稿では

[物理学界の発表動向と何ら平仄が合わぬとの予言がかつたものが存在している]

とのことを[理の当然]として問題視し、そのうえで本稿前半部では次のこと、申し述べていた。

「他にもブラックホール生成問題にまつわる先覚的言及をなしている文物らが存在しているのだが、それらがその【先覚性】【正確性】【克明さ】のどの面でも群を抜いているとの異常無比なるもの、まさしくもの【「予言的作品」にして「告知文物」】といった形態のものとして存在しているがゆえに「さらにもつてして」問題になる—本来的には【未知】を前提にしての予言「的」作品】と【既知】を前提にしての告知文物】は論理的に両立するものではないわけだが、それらの要素を双方体現しているがために異常無比となるものが存在している(がゆえに「さらにもつてして」問題になる)—」

上のことに関するところとして本稿では次の**[事実F]**から**[事実J]**のことをも順々に摘示していった。

[事実 F] (本稿前半部の **出典(Source)紹介の部 6** にて典拠となるところをオンライン上より確認可能なる原著表記の引用および日本国内で流通している訳書よりの原文引用をなしながら必要十分とのかたちで指し示したところとしての文献的事実)

1974年に初出を見た極めて長きタイトルの SF 小説作品として、

Adrift Just off the Islets of Langerhans:Latitude 38°54'N, Longitude 77°00'13W (邦題)『北緯 38 度 54 分、西経 77 度 0 分 13 秒 ランゲルハンス島沖を漂流中』

という作品が存在している。

同作、1975年に権威あるサイエンス・フィクション分野の賞として認知されているヒューゴ賞 Hugo Award を —(同賞が長編・中長編(ノベラ)・中編(ノベレット)・短編と受賞分野が語数によって分たれている中で)— [中編 Novelette 分野]にて受賞した作品となっている。

そももした小説作品『北緯 38 度 54 分、西経 77 度 0 分 13 秒 ランゲルハンス島沖を漂流中』は作中、

【15 兆電子ボルトの CEERN (CERN ならぬ CEERN) の粒子加速器】

なるものを登場させているとの作品でもある。

**Adrift Just off the Islets of
Langerhans:Latitude 38°54'N,
Longitude 77°00'13W
(1974)**

(邦題 『北緯38度54分、西経77度0分
13秒 ランゲルハンス島沖を漂流中』)

[事実 G] (本稿前半部の **出典(Source)紹介の部 7** にて典拠となるところを必要十分とのかたちで指し示したところの書誌にまつわっての記録的事実)

上の**[事実 F]**にて挙げた小説『北緯 38 度 54 分、西経 77 度 0 分 13 秒 ランゲルハンス島沖を漂流中』は

[SF 小説大賞ヒューゴ賞を受賞した作品を収めた傑作撰集] (英文 Wikipedia にて The Hugo Winners とのその傑作撰集のためだけの項目が設けられているその方面—サイエンス・フィクションの分野に志向性ある向き— では著名な傑作選) にて

The Hole Man『ホール・マン』(という 1974 年初出の作品)

という作品と(原著・和訳版双方ともに) [連続掲載]されているとの作品となる(: 中編分野のヒューゴ賞受賞作品と短編分野のヒューゴ賞受賞作品が連続掲載されるようになっていたとの式で(定例化してのかたちで) 当該傑作撰体裁が定められているた

めに、である)。

ここ([**事実G**]に対する言及部)にて挙げている **The Hole Man**『ホール・マン』という小説作品は 一同文に文献的事実の問題として—

[極微ブラックホールのケージ(容器)より漏れ出しての暴発を描く小説]

となっている。

[**事実H**] (本稿前半部の **出典(Source)紹介の部8** にて典拠となるところを必要十分のかたちで指し示したところとしての記録的事実)

上の [**事実F**] と [**事実G**] の摘示(容易に後追いできるとの該当部引用による摘示)によって

[15兆電子ボルトのCEERN(CERNならぬCEERN)の粒子加速器を登場させている小説]([**事実F**]の言及部にて挙げた小説)

[極微ブラックホールの暴発を描く小説]([**事実G**]の言及部にて挙げた小説)

が著名な米国 SF 賞を受賞した SF 傑作選の中で(そうなるべくも定例化しての当該傑作撰体裁が定められているため)連結させられていると示すことができるようになってい

るわけであるが、取り上げての小説の間には

[「配置面」(「連続掲載」との配置面)以外の連結関係]

が成立しもしている。

その点、[**事実F**] に対する言及部に挙げた小説(『北緯 38 度 54 分、西経 77 度 0 分 13 秒 ランゲルハンス島沖を漂流中』)の主人公は作中、ラリー「Larry」との愛称(通称)で頻繁に呼称され、その主人公の正式の姓はローレンス(Lawrence)であるとの設定が採用されている。

他面、[**事実G**] の言及部にて問題視した小説(『ホール・マン』)の作者たる SF 作家の愛称(通称)はラリー「Larry」であり、その正式名称はローレンス(Laurence)であるとのことが存する。

**Adrift Just off the Islets of
Langerhans:Latitude 38°54'N,
Longitude 77°00'13W
(1974)**
|
The Hugo Winners Volume 3
**The Hole Man
(1974)**

[事実I] (本稿前半部の **出典(Source)紹介の部9** にて典拠となるところをオンライン上より確認可能なる原著表記の引用および日本国内で流通している訳書よりの原文引用をなしながら必要十分なかたちで指し示したところとしての記録的事実)

先の [事実F] の部より言及しているとの小説 **Adrift Just off the Islets of Langerhans : Latitude 38°54'N, Longitude 77°00'13W** (邦題)『北緯 38 度 54 分、西経 77 度 0 分 13 秒 ランゲルハンス島沖を漂流中』は

[欧州の加速器運営機関(CERNならぬCEERNなどと呼称される 15TeV 加速器を運用する機関)のビーム照射装置でもって [自らを縮退させての極小の分身] をホログラム上に造り出した主人公がそちら分身を己の [「底無し」]「黒々とした」「渦を巻く」へそ] に落とし込み、もって、己の魂に引導を渡させるとの粗筋の作品]

「とも」になっている。

■ 前世紀末葉 (1999 -) から今世紀初頭にかけての科学界論調

加速器によるブラックホール生成の可能性が [リスク] となるのではないかと研究機関部外の間人よりの質問が寄せられる (その質問の背景にあった考えが [粒子加速器が原初宇宙の高エネルギー状態を再現するとされること] と [原初宇宙には極微ブラックホールがあったとされること] に対する専門外の間人による推論であったと一般に説明されていることも本稿では解説している)。対して、研究機関ら (ブルックヘブン国立研究所およびCERN) は 「今後実現されうるありとあらゆる粒子加速器によるブラックホール生成はありえない」との報告書を出す (: 本稿では1999年における報告書らの内容 (ブルックヘブン国立研究所およびCERNの報告書の内容) の原文引用 および2000年 (2001年) にてのノーベル平和賞をバグウォッシュ会議を代表して受賞した物理学者フランチェスコ・カロジェロらの公衆に対する訴求を兼ねての論稿での申しようの原文引用を [出典(Source)紹介の部1] [出典(Source)紹介の部5] にてなしている)。

■ 2001年以降の新規理論に対する分析を受けての科学界の論調

余剰次元理論 (1998年提唱) の発展動向を受け、同年 (2001年) より権威を伴っての専門の物理学者らが 「粒子加速器 (LHC) による [年にして千万個単位のマイクロ・ブラックホールの生成] の可能性がある (生成されたブラックホールはホーキング輻射との現象で即時蒸発する) 」との論稿を発表した (: 本稿 [出典(Source)紹介の部2] では表記のことにつき案件分析をなした米国法学者論稿よりの原文引用をなしている)。

■ 2003年以降の安全報告書にあつての明確化しての方向性

CERNが余剰次元理論によるブラックホール生成の可能性が観念されだした件につき、[潜在的な脅威] と看做しつつも 「生成ブラックホールは即時に蒸発するから安全である」と専らに主張する報告書を出す (: 本稿 [出典(Source)紹介の部3] では表記のことにつき2003年のCERN安全報告書よりの原文引用をなしている)。

■ 2004年以降の科学界の変節 (を受けての事後の安全報告書に見る兆候)

生成ブラックホール蒸発の論拠となっている理論、ホーキング輻射に対して専門の科学者が疑義を呈し、ホーキング輻射の発現に広くも疑義がもたれるようにな

■2004年以降の科学界の変節(を受けての事後の安全報告書に見る兆候)

生成ブラックホール蒸発の論拠となっている理論、ホーキング輻射に対して専門の科学者が疑義を呈しだし、ホーキング輻射の発現に広くも疑義がもたれるようになる(：本稿「出典(Source)紹介の部3」では案件の解説をなしているとの米国法学者論稿およびホーキング輻射権威(William Unruh)の変節が現われているところの同権威の手になる論文よりの抜粋をなしている)。それを受けて、加速器実験機関は従前、ストレンジレット生成問題といった問題に対する安全性論拠として報告書の中で言及していたものである「宇宙線(宇宙を飛び交う高エネルギー放射線)現象と比較しての申しよう」をブラックホール生成問題に関して「も」強くも前面に押し出すようになる。

[文献的事実]の問題として摘示できるし、本稿にて実際に出典に依拠して呈示しているとの「変節」の流れ

[背景]が問題になるとの時期的不一致のありようが垣間見れる。

1974年刊行作品らに認められる“文献的事実”の問題

[15兆電子ボルトのCEERN(CERNならぬCEERN)の粒子加速器を運用する機関によるビーム照射によって主人公をホログラム上に投影された超マイクロサイズの分身へと圧縮して、その分身を黒々と渦を巻く底無しの穴に放り込むとの筋立ての小説]の実在(：本稿にあつての「出典(Source)紹介の部6」および「出典(Source)紹介の部9」にての原著および訳書よりの引用で摘示)

七〇年代の賞の受賞態様に起因する七〇年代初出の撰集にての該当作品ら連続掲載／一方の小説作品の作中明示されている主人公のファースト・ネーム正式呼称と愛称がもう一方の作品の作者のファースト・ネームの正式呼称・愛称と同一となっているとの関係性の存在(：本稿にての「出典(Source)紹介の部8」で解説)

[加速器の類は一切登場「しない」ものの、ケージ(容器)より漏れ出した極微ブラックホールが惑星を呑み込むとの筋立ての(上記小説作品とは別の他作家由来)小説]の実在(：本稿にあつての「出典(Source)紹介の部7」にての原著および訳書よりの引用で摘示)

[事実 J] (本稿前半部の **出典(Source)紹介の部 10** にて典拠となる箇所を必要十分のかたちで (公的資料よりの原文引用を通じて) 指し示した記録的事実)

・[1974年に初出の小説の中に登場する架空の CEERN の 15 兆電子ボルト (fifteen trillion electron volts) 加速器] は [現実世界で CERN が当時 (1974 年) にあって運用していた加速器 (ISR と呼ばれるハドロン加速器)] よりも 200 倍超の規模のエネルギーを実現するとの [設定] のものであった。

・[1974年初出小説に見る 15 兆電子ボルト加速器] のような「兆」の単位に突入しての一兆電子ボルトを超える加速器の建設構想計画が [青写真] として実験機関関係者意中に持ち上がったのは (小説刊行の 1 年後との) 1975 年以降である (との加速器実験機関由来の内部資料が存在している)。

・[現在 CERN が運用する LHC] が実現しうる最大出力は [(重心衝突系エネルギー) 14 兆電子ボルト] となっており、それに比して、[1974 年に初出の小説に登場する (架空の) CERN ならぬ CEERN の 15 兆電子ボルト加速器] はたかだかも 1.07 倍程度しか強力なものにすぎない (⇒ $15\text{TeV}:14\text{TeV}=1.07(\dots):1.00$)。そうしたかたちで 1974 年初出の加速器は出力との性能で見ても今日の LHC に近似している (尚、兆単位の加速器の実現可能性さえ取り沙汰されなかった往時 (74 年) には LHC 計画は当然に策定さえされていなかった)。

要するに、Adrift Just off the Islets of Langerhans : Latitude 38°54'N, Longitude 77°00'13W (邦題『北緯 38 度 54 分、西経 77 度 0 分 13 秒 ランゲルハンス島沖を漂流中』) という作品は

[往時 70 年代の CERN 運営加速器 (ISR) に比して 200 倍超も強力なる CEERN 加速器なるもの] (それは小説刊行時、構想だけにされていなかった規模の加速器であると研究機関文書にて記載されている兆単位の電子ボルト加速器「とも」なる)

を登場させており、かつもって、その架空の CEERN 加速器なるものは

[(指数関数的に出力を増大させてきたとの加速器進化動向にあって) 今日の LHC に比しては小数点 2 桁、数パーセントの誤差ぐらいしかないほどに出力が近似しているとのもの]

「とも」なっているとのことがある。

上に見る [事実 F] から [事実 J] のことが存在している、すなわち、

(端的にまとめて)

「1974 年初出の特定フィクション (Adrift Just off the Islets of Langerhans: Latitude 38°54'N, Longitude 77°00'13W) が

【異常に今日の LHC に近いものの、往時の技術計画では青写真すら呈示されていなかった際立っての加速器 ; 往時 (1974 年) の CERN 運用加速

器 (ISR) よりも現行 CERN の LHC の最大出力運転時の出力に 200 倍超も近いとの加速器にして、その当時にはその規模の加速器 — (兆単位の重心系衝突エネルギーを有する加速器) — の構想が青写真としても企図されていなかったとの CEERN (CERN ではない) なる架空組織の 15 兆電子ボルト加速器】

をその作中登場させている作品となっているばかりではなく、同作 (*Adrift Just off the Islets of Langerhans: Latitude 38°54'N, Longitude 77°00'13W*) は複合的にブラックホール暴走を描く「他」小説 (*The Hole Man*) と連結関係を呈しており、また、と同時に、同作は

【欧州の加速器運営機関 (CERN ならぬ CEERN などと呼称される 15TeV 加速器を運用する機関) のビーム照射装置でもって [自らを縮退させての極小の分身] をホログラム上に造り出した主人公がその分身を己の [底無しの黒々とした渦を巻くへそ] に落とし込み、もって、己自身の魂に引導を渡させるとの粗筋の作品】

ともなっている (明示的に加速器がブラックホールを生成するなどということは一言だに言及されていない中でながらものこととして、である)]

とのことが存在していることは、である。先掲の如き事実関係がある、すなわち、

【1999 年に至って [加速器によるブラックホール生成の可能性] が [外野の人間] (ウォルター・ワグナー) によって否定的ニュアンスではじめて問題視された折、(LHC を含む) 今後の加速器によってブラックホール生成される可能性が科学界一丸になって — ノーベル賞級物理学者が先頭に立って — 完全否定され ([事実 A])、その傾向が 2001 年頃より目立っての変節を見出したとの事実関係が存在している ([事実 B])]

とのことがそこにあるのと【矛盾・抵触】するばかりではなく (【 [事実 B] に見る LHC を巡っての 2001 年以降の状況】が【1974 年にある作品の内容】と — 加速器の運営元・加速器のパフォーマンスの問題もが後に正確に裏書きされているような節が露骨にあるような中で — 接続してしまっているばかりではなく)、

【 往時 (70 年代) のみならず今現在より見てみてもの近未来にまつわる先覚的言及の問題 】

とも関わっている。

どういふことか、と述べれば、

「 [LHC 実験が現行の休止期間 — 2012 年から数年単位で調整のために入ったとの休止期間 — を終え 出力倍加させて (1974 年小説が 1974 年当時の加速器出力よりもさらに 200 倍超に近い加速器を登場させていたとの LHC 最大出力 14 兆電子ボルトに向けて出力倍加させて) 再開した折にこそブラックホール生成がなされうる] という論調が一部にて存在している」

とのことが [1974 年小説の先覚性] との絡みで [問題になる] のである。

(: 同点については本稿の前半部、[出典 \(Source\) 紹介の部 15](#)にてアミール・アクゼル著、Present at the Creation The Story of CERN and the Large Hadron Collider の邦訳版『宇宙創造の一瞬をつくる CERN と究極の加速器の挑戦』(早川書房) ハードカ

ヴァー版の二八三ページより原文引用するところとして次のような記述を引いている
⇒ (引用するところとして) “ボストンで開かれた素粒子物理学の専門的な学会『大型ハドロンコライダー——標準モデルを超えて』でCERNの物理学者ファビアン・レドロア＝ギヨンが次のように語った。「CERNでは何年か前からブラックホールの生成について研究しています。ブラックホールの質量の閾値は九・五 TeV です」。ファビアンが示したグラフには、LHCでの微小ブラックホールの生成が八から九 TeVのエネルギーレベルで始まることが示されていた。二〇一〇年段階ではLHCはそのレベルより低い七 TeVのエネルギーを作り出している。しかしすべて予定通りに進めば二〇一三年に最高レベルの一四 TeVに到達する”(引用部はここまでとする)。尚、LHCが14兆電子ボルトに到達するのが2013年頃であると表記の著作にての引用部には記載されているが、実験予定の遅延化によってそのプランは数年単位で後ろにずれる目算が強いとのことになっている。また、LHCについては14TeVを越えて、さらにLuminosity(ビーム衝突頻度)を飛躍的に増加させてのHL-LHC計画、次いで極小領域投下の実現エネルギー規模を33TeVにまで増加させてのHE-LHC計画へ向けてこれよりさらに進化を遂げていくとの予定として発表されている)

以上、本稿前半部の摘示事項を振り返っての部とした

最前、直上までにあつての従前内容を振り返りもしての部では

Thrice Upon a Time (邦題)『未来からのホットライン』(1980)

Adrift Just off the Islets of Langerhans:Latitude 38°54'N,Longitude77°00'13W (邦題)『北緯38度54分、西経77度0分13秒 ランゲルハンス島沖を漂流中』(1974)

の二作品のことを問題視していたとの本稿前半部内容を再度振り返りもしたわけではあるが、そこにて問題視している二作品 **Thrice Upon a Time(邦題)『未来からのホットライン』** および **Adrift Just off the Islets of Langerhans:Latitude 38°54'N,Longitude77°00'13W (邦題)『北緯38度54分、西経77度0分13秒 ランゲルハンス島沖を漂流中』**からして —先行する本稿内容にあつてはそれにまつわたる言及・解説を一切なして「いなかった」こととはなるのだが—、

[【ヘラクレスの計12に及ぶ功業】、【(ヘラクレス第11功業に見る)巨人アトラス】、【トロイア崩壊伝承に見るトロイア崩壊の原因たる(他伝承では巨人アトラスが在処を把握するとされる)黄金の林檎】、【巨人アトラスともトロイア崩壊元凶たる黄金の林檎とも史的に(一部識者によって)結びつけられてきたとのアトランティス沈没伝承】、【アトラスやアトランティスといった固有名詞を付されてのLHC実験におけるブラックホール生成論議に関わる事物】らの要素らのうちの「複数」との接点を特色として帯びつつ、かつそれでいて、【911の事件の発生(態様)にまつわる予見的言及】ないし【ブラックホール人為生成問題にまつわる「先覚的言及」】の一方、あるいは、その双方をなしているとの特徴「をも」呈しているとの文物らが不可解に存在している]

とのこと —本稿にあつての主たる摘示事項であると折に触れて問題視してきたとのこと— につらなる側面を有しているとはきと指し示せる作品ら「とも」なっているとのことが「ある」(：異常に克明なる先覚的言及をなしているとの作品らにあつてまでも直上言及のことが当てはまるなどと述べれば、(話の筋立てを理解しているとの向きにあつては)『嘘であろう』と考えたくなるようなことだとは思うのだが、「実に残念ながら」、筆者は偽りなどなさなぬし、そして、それが自身おのれの生き死にも関わることならば尚更そうだと強調したい —人間であるのだから[意図せずの汎ミスの類]を犯すこともあるが(で

あれば、訂正に努める)、筆者は我々全員の生き死にに関わるところで意識的偽りなど絶対になさぬ、というより、そういうところで偽りをなすような輩を赦すつもりはないとの人間である(また、本稿では筆者この身の申し分に間違いがないと言い切れるか第三者が容易に後追いできるように、と確認媒体出所を裏取りなしやすいようにと配慮しながら必要な分だけ原文引用するよう努めもしている)——)。

では具体的に

Thrice Upon a Time (邦題)『未来からのホットライン』(1980)

Adrift Just off the Islets of Langerhans:Latitude 38°54'N,Longitude77°00'13W (邦題)『北緯38度54分、西経77度0分13秒 ランゲルハンス島沖を漂流中』(1974)

ら各作品がいかようにして

[【ヘラクレスの計12に及ぶ功業】、【(ヘラクレス第11功業に見る)巨人アトラス】、【トロイア崩壊伝承に見るトロイア崩壊の原因たる(他伝承では巨人アトラスが在処を把握するとされる)黄金の林檎】、【巨人アトラスともトロイア崩壊元凶たる黄金の林檎とも史的に(一部識者によって)結びつけられてきたとのアトランティス沈没伝承】、【アトラスやアトランティスといった固有名詞を付されてのLHC実験におけるブラックホール生成論議に関わる事物】らの要素らのうちの「複数」との接点を特色として帯びつつ、かつそれでいて、【911の事件の発生(態様)にまつわる予見的言及】ないし【ブラックホール人為生成問題にまつわる「先覚的言及」】の一方、あるいは、その双方をなしているとの特徴をも呈しているとの文物らが「不可解に」存在している]

とのことと関わっているのか。その点について以降、各別に摘示していくこととする。

Thrice Upon a Time (邦題)『未来からのホットライン』(1980) が上記の通りの文脈で「さらに」問題となる作品であることの指し示しとして

まずもって、

Thrice Upon a Time (邦題)『未来からのホットライン』(1980)

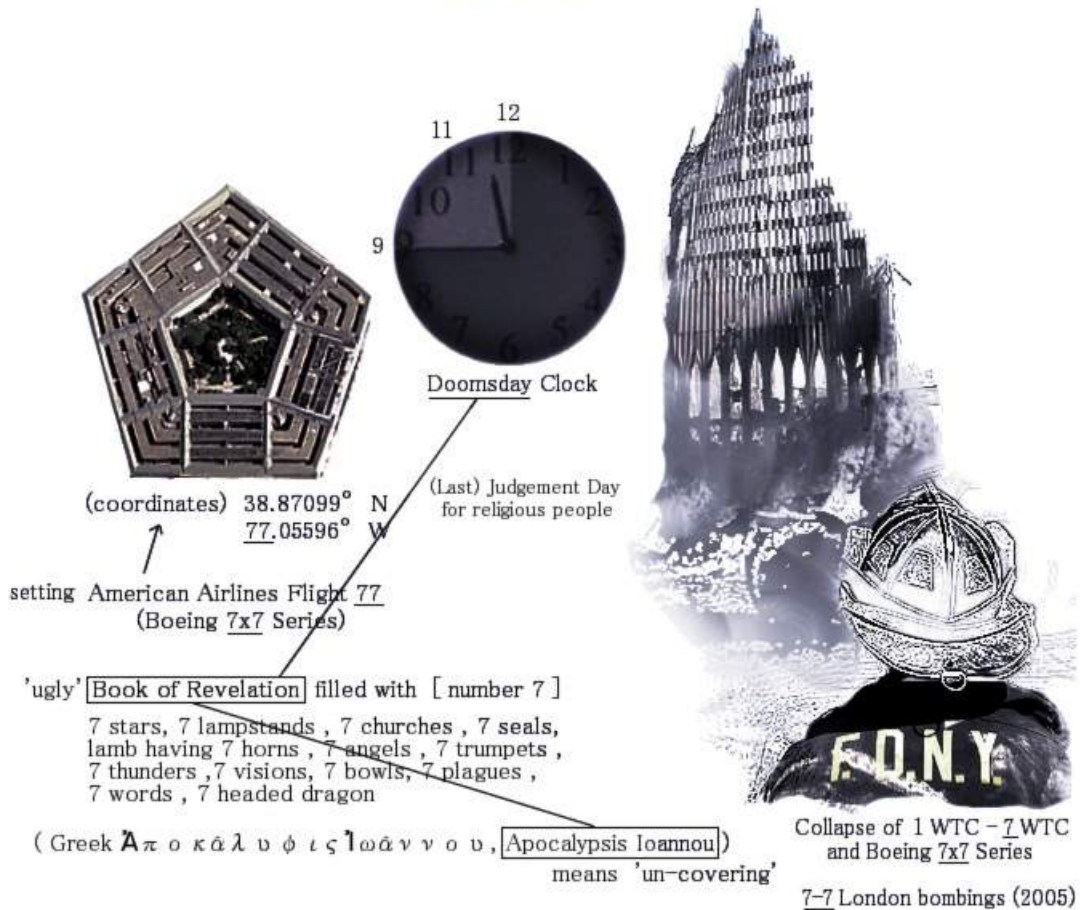
についてであるが、同作と表記のことの結びつきそのものについて解説する前に前段階として —それが必要であると見たため— **Thrice Upon a Time (邦題)『未来からのホットライン』**の全体としての【粗筋】をあらためて紹介し、またもってして、同作が

【2009年年末から2010年にかけての架空世界を扱う作品】

であるとのことの説明をなすことから始めることとする。

THRICE

110



ここ出典(Source)紹介の部 110 にあつては、

[Thrice Upon a Time (邦題) 『未来からのホットライン』 (1980) の全体としての粗筋]

および

[Thrice Upon a Time (邦題) 『未来からのホットライン』 (1980) の 2009 年年末から 2010 年にかけての出来事を扱う作品としての特性]

について解説しておくこととする (: 本稿の前半部、出典(Source)紹介の部 4 では国内で流通を見ている訳書(『未来からのホットライン』)より【ページ数指定しながらの原文引用】をなしながら、Thrice Upon a Time の【問題となる特定の内容】を(狙い撃ちするように)【後追い確認可能な文献的事実】として呈示することに努めていた. 対して、ここでは Thrice Upon a Time (邦題) 『未来からのホットライン』にあつての【より包括的な全体像としての内容】について紹介する、それにまつわつての説明がなされている英文ウィキペディア表記を引用することで紹介することとする ((についてはウィキペディア程度の解説項目でありながらも、少なくとも、現行記載にあつては[ほとんど目立つての誤謬が認められない]とのこと、手ずから確認している箇所よりの紹介をなすこととする(ただし、訳注としてそちら「現行の」英文ウィキペディア表記には[一部のみ誤りがある]ことも指摘することにはなる)))) 。

(直下、英文 Wikipedia Thrice Upon a Time]項目に見る[Synopsis(粗筋紹介)]の部にての
現行記載内容よりの抜粋を —長くなるも— 掻い摘まんでの引用をなすところとして)

It is December 2009. Murdoch Ross and his friend Lee Francis Walker visit Murdoch's grandfather, Sir Charles Ross, in his castle in Storbannon, Scotland. Sir Charles is a Nobel Prize winner for his work in particle physics — more specifically the isolation of free quarks. In this novel, when a nucleon decays into three quarks, the first two quarks appear immediately, while the third quark appears only a brief moment later, on the order of a few millionths of an "yoctosecond". A widely accepted theory is that the original decay produces two quarks and also a third unknown particle, dubbed the quason. This is subsequently transformed into a third quark. However, Sir Charles offers a different, radical explanation: all three of the quarks are created at once, but the first two are propagated back in time. Charles dubs the energy which had allowed the propagation through time as tau waves. Although his theory is seemingly valid and consistent, the physicists of his time refuse to accept it because of its implications — namely the failure of some of the physical laws of conservation. Sir Charles then retreats to his family's castle in Scotland to continue his research in private. There, he succeeds in building a time machine capable of sending messages to the future and the past.

[. . .]

When the two young men arrive, Sir Charles takes them down into the basement, where the machine is found. **As they enter the basement, a computer attached to the machine produces data on a sheet of paper, which Sir Charles hides from the other men. He asks Murdoch to type in a six-character random message into the computer. Sir Charles next activates his machine and transmits the message one minute back in time. Finally, he shows the paper printed out previously, and Murdoch and Lee are amazed: the printout contained exactly the same random characters that Murdoch typed, and these were printed before Murdoch had typed them in.**

[. . .]

Burghead and black holes

The (fictional) European Fusion Consortium (EFC) has commissioned a large thermonuclear fusion reactor in Burghead to compete with the technologies located in the United States and the Soviet Union. The colossal energy obtained from fusion meant that huge amounts of power might someday be available at low costs. All three parties used inertial confinement technology, with the EFC opting to use ion beams.

[. . .]

During this time, Murdoch and Lee get to tour the large Burghead facility through Elizabeth, who is a principal physicist there, and Murdoch builds a relationship with Anne. One day, the reactor, still in the testing phases of power production, is shut down when apparent erosion is detected in the fusion chamber. Two days before, the team at Storbannon had experienced an apparent failure in its time machine, with Lee asserting that the failure had to be due to interference.

Their time machine then suddenly resumes operation again, and they elect to ignore the problem. Shortly after the incident, strange events start occurring around the world, with so-called bugophants (a blend of bug and elephant) drilling tiny, long, straight holes through a myriad of objects, from human bodies to telescope mirrors.

Finally, the team finds out the cause of the erosion in the Burghead plant, the interference with the machine, and the bugophants themselves: the repeated fusion tests at the plant had, over the course of two days, had

produced some two million microscopic black holes, which then tunneled through the basement of the plant and concentrated around the core of the Earth. As the black holes annihilated matter, they emitted tau waves and caused interference even before the reactor tests. Although conventional theory stated that black holes could not form from the comparatively low pressure produced in the reactor, and small black holes could not survive long anyway, the conventional theory had failed to take into account the existence of tau waves and their effects.

[. . .]

Their selves in the past receive the message, and they act on it immediately. They have no choice but to tell the bewildered managing committee at Burghead of their findings, including revealing their time machine. Given the necessary investigations, the thermonuclear reactor is shut down indefinitely.

[. . .]

Centurion

In the new timeline, word of the time machine spreads to the EFC headquarters in Brussels and to other places. Lee turns ill in the castle one day and suddenly collapses. As a doctor, Anne contacts Murdoch, who is away, and suggests that Lee has succumbed to a new outbreak of a disease, apparently a version of multiple sclerosis, but progressing much faster, taking only a few weeks rather than years, and also very deadly.

Murdoch pressures Anne to reveal more information about the outbreak, which appears to be highly classified. Anne does not know much, either. However, Murdoch finds out that a distinguished medical specialist, Sir Giles Fennimore, has arrived from London to investigate the outbreak. He learns that the disease is somehow connected to the West Coast of the United States, where Lee had been residing in September 2009, and his suspicions are raised further.

Ted and Elizabeth help Murdoch investigate. After interrogating Ralph Courtney, chairman at the Burghead facility, and a chance meeting by Ted with a young R.A.F. pilot, they eventually find out (Ted knowing much of this from his previous R.A.F. experience) that Anglo-American authorities had wished to establish an advanced laboratory for potentially dangerous research into viruses, genetic manipulation, and similar subjects. Naturally, this project stirred up a large controversy over public fears of containment failures and contamination and was eventually scrapped. However, the possible scientific advancements offered were simply too great to pass up. Thus a satellite, the QX-37, was constructed and launched into outer space, purporting to be an astronomical observatory. The QX-37 continued the experiments secretly.

In August 2009, the satellite passed right through the path of the Perseids meteor shower, and it was hit by a meteor. It broke up and disintegrated into the Earth's atmosphere. After the breakup and fallout, to prevent public panic, the entire effort was tightly classified and codenamed Centurion.

(完全に一語一語対応させての逐語訳よりも不分明なる部を補っての訳としての方向性を前面に出しての訳を付すとして)

「 [シノプシス(1980年小説粗筋)]

2009年12月のこと、マードック・ロスと彼の友人リー・フランシス・ウォーカーの両名はマードック祖父であるチャールズ・ロス卿をその居城であるスコットランドのストーンバノン館を訪ねた(※1)。

(※1:上の部に対する「長くなるも、」の訳注として ⇒ この部にての英

文 Wikipedia 表記 “It is December 2009. Murdoch Ross and his friend Lee Francis Walker visit Murdoch’s grandfather, Sir Charles Ross, in his castle in Storbannon, Scotland.” には誤謬 [error] がある。邦訳版として流通している小説に目を通せばすぐ分かることだが、物語がチャールズ・ロス卿なるキャラクターが [2009 年 12 月 30 日] に居城で実験を始めているシーンからスタートすることまでは [文献的事実] として誤りないものだが、マードック・ロスらがチャールズ・ロス卿居城に到着するのは (Wikipedia の表記 2009 年 12 月が error であるところとして) [2010 年 1 月] のことであるとの設定が現実には採用されている。

同点に関しては書店にて広く流通を見ている原著『スライス・アポン・ア・タイム』が和訳されての邦訳「文庫」版『未来からのホットライン』にての 6 ページ、10 ページ (から 11 ページ) を参照することで筆者申しようの通りであることを理解いただけるであろう。

につき、訳書よりの引用もここになしておく。

まずもって現行、書店にて広く流通している文庫版『未来からのホットライン』(創元 SF 文庫と銘打たれてのシリーズの「手元に置いての」第 17 版)にての [プロローグの部] たる 6 ページよりの引用をなす。

(以下、引用として)

“二〇〇九年一月三〇日、二三二五:〇〇時。時間逆行送信テスト第一五号、グループ四、サンプル三。送信距離六〇秒。073681 コンソールの前にすわっている老人は、数秒間、無表情にその文字の並びを見つめ、ついでスクリーンの下にあるタッチボードのキーのひとつを叩いた”

(以上、引用部とする)

上にての訳書よりの引用部は Thrice Upon a Time (邦題)『未来からのホットライン』主人公マードック・ロスの祖父チャールズ・ロスが 2009 年年末 12 月 30 日深夜に過去への通信実験を行っているとのまさに小説の出だしの部となる。

次いで、現行、書店にて広く流通している文庫版『未来からのホットライン』にての [プロローグの部] たる 10 ページから 11 ページよりの引用をなす。

(以下、引用として)

“手のとどきそうな近くから、ボーイングや、ロッキードや、ダグラスが、イオン層を飛ぶ準弾道飛行の前段階の垂直上昇に入っていく。そのはるか上方には、ヨーロッパ、日本、オーストラリア、それにその他のところからやってきた無数の点が、**新春第一日の雲ひとつない青空の中で、徐々にかたちをとりはじめているところだった。**第三ターミナルの到着コンコースの、ガラスで保護された彫刻のある大理石の壁の前で、マードック・ロスは、出迎えの人混みにまじって立ち、いまサンフランシスコから到着した二三五便からおりてくる乗客たちの顔を見まわしながら、同時に、サイエンティフィック・アメリカン誌の最新号に載った重力子の波動力学の記事を数行ずつ読み進めていた。”

(以上、引用部とする)

上にての訳書よりの引用部は *Thrice Upon a Time* (邦題)『未来からのホットライン』主人公マードック・ロスがその祖父チャールズ・ロスを訪ねるべくも空港に到着した折のありようを叙情的に描写しているとの部となり、そこにては(空港到達時が)「新春第一日」、すなわち、元旦であるとの表記がなされている (そちら記述から「現行にての」英文 Wikipedia の [2009 年「年末」に主人公らが祖父を訪ねた]との記述は[誤り]と解されるようになっている。尚、小説では主人公マードック・ロスがアメリカのケネディ国際空港経由で渡英、スコットランドの祖父居城に向かうとの描写がなされている)。

細かくものところで長くもなったが、訳注の部はここまでとする)

(直上の訳注の部をはさんで英文ウィキペディアよりの引用部の訳を続けるとして) チャールズ卿は素粒子物理学におけるその仕事、[場の制約を受けぬクォークの特定化]によってノーベル賞を受賞していたとの向きとなる。(といった書き出しで始まる) この小説にては核子が三種のクォークに崩壊する際、ヨト・セコンドというごく僅かな間を経て三番目のクォークが現われるのに対して最初の二つのクォークらが即座に現出する(との作中設定が採用されている)。(といった Fiction としての小説作品の設定の中では) 広くもの理論は核子崩壊では二種のクォークと三番目の未知の粒子、そして、クォーゾン(quason)とされるものが生成されるとされている中でマードックの祖父のチャールズ卿は別の、より急進的な説明を試み、「三つのクォークは同時に生成されるが、前二者は時を遡行するために順序差が生じる」とし、と同時に、時間を通じての粒子の増殖を可能ならしめるエネルギーをタウ波(タウ・ウェーブ)なるものと名付けていた(との小説設定が採用されている)。

その理論は適切かつ首尾一貫しているものとも見えたが、チャールズ・ロスの同時代人の物理学者らは[物理の保存則の破綻に通ずる]とのその含意するところに基づき同理論を否定していた。チャールズ卿はそれがゆえにスコットランドの彼の一族の居城に退隠、そのうえで私的なるものとして彼の研究を続けることとなった(との作中設定が採用されている)。そこにて、チャールズ・ロスは情報を未来および過去に送れるとのタイムマシン(と呼べる装置)を組み立てることに成功した。

…(中略)…

二人の若者ら(タイムマシンを発明したとの設定のチャールズ・ロスの孫のマードック・ロスと彼の友人リー・フランシス・ウォーカー)がその居城に辿り着いた折、チャールズ卿は彼らを[マシン]が据え置かれている城の地下階層へと連れて行った。そこにてチャールズ卿はマードックに一枚の紙切れに六文字の任意のランダム・メッセージをコンピューターに入力するように要求、それを過去1分前に伝送した。そして、彼は「事前に」印刷されていた紙をマードックらに見せ、そこにマードックがタイプしたとのそのままのランダムの文字列が見てとれたためにマードックらは驚かされることになる (訳注:書店にて広く流通を見ている『スライス・アポン・ア・タイム』が和訳されての邦訳「文庫」版『未来からのホットライン』にての 39 ページを参照することで理解出来ようが、マードックが書き記した任意の文字列[2H7vi9]が 2010 年 1 月 1 日付けにてプリントアウトされていたとのことが判明してマードックらを驚かしたとの作中設定が採用されている)。

…(中略)…

[バークヘッドとブラックホール]

架空の欧州核融合協会 (EFC) は合衆国とソ連にての技術と競争をなすためにバークヘッドの巨大な熱核融合施設の建設依頼をなした。融合プロセスから得られる膨大なエネルギーはいつの日にか低コストで膨大なエネルギーが利用可能となることを意味していた。三勢力 (訳注: All three parties は文脈上、欧州・合衆国・ソ連と考えられる) とともに EFC が利用することを志向していたイオンビームをもってしての [レーザー核融合技術] (Inertial confinement fusion) の使用をなしていた (訳注: [レーザー核融合技術] (Inertial confinement fusion) の使用の際にここにて問題視している小説に accelerators 加速器が登場してきており、それが [破滅の子としての大量の極微ブラックホール] を作り出したとの粗筋が採用されていることの問題を本稿前半部にて (邦訳版よりの細かき引用を通じて) 仔細に指し示してきたとの経緯がある)。

マードックと彼の友人のリーは巨大なバークヘッドの施設の視察をエリザベス、同機関の主要物理学者 (訳注: かねてよりマードックらと懇意になっていたとの作中設定の科学者) の案内でもってなすことになり、そこにてアンという女性と (さらに) 懇意になった。ある日のこと、明らかな腐食被害が融合炉にて発見されたとのことで未だテスト段階にあった反応炉が運転停止を見た。その二日前、ストーンバノン館 (訳注: タイムマシン、正確には、過去に情報を伝送する装置を開発した主人公マードックの祖父チャールズ・ロス卿が研究拠点としていた一族の古城) にて研究なしての面々らがタイムマシンの運用にて明らかな失敗を見、リーはその失敗をして「干渉作用によるところであろう」と断じていた。

その僅か後、世界各地で奇妙な出来事が発生しだし、それは
[[bugophants]] (訳注: バゴファント、虫 [バグ] と象 [エレファント] の混淆系として「象の重さの虫の仕業か」といったニュアンスで 2010 年 1 月末より作品世界ジャーナリストに命名されたとの作中設定の言葉 — Thrice Upon a Time 邦訳版の『未来からのホットライン』ではその 210 ページ以降に言及がある —)
といった現象名呼称を伴っての出来事]

にして

[微小なる物体から人体、そして、望遠鏡の鏡面部に至るまでドリルにて開けたような直線上の穴が開くとの出来事]
となっていた。

そんな中、ついにストーンバノン館で研究なしていた面々はマシン(過去へ情報を伝送可能なマシン)とバークヘッドそれ自体の干渉作用からバークヘッドの核融合炉プラントの腐食被害の原因を同定、
[二日間の予定で繰り返されていた融合テストにて 200 万個超のブラックホールが発生、プラントの地下から漏れ出て、地球のコアに蟄集している]
とのことを見極めた(という作中設定が採用されている)。

ブラックホールらが物質を滅尽させた折、[タウ波] (訳注: 小説の設定に独特なるもの) が発生、それが反応炉のテスト開始以前に遡る前にすら干渉作用を及ぼすに至っていたのである (という作中設定が採用されている)。(小説内の) 従来の理論では [反応炉内での低圧状況] ではブラックホールは生成されないとされていた (と小説作中にて述べられている) わけだが、そして、小規模ブラックホールらはなんにせよ長く存続しない (即時消滅する) のものであるとされていたわけだが、従来理論は [タウ波] の存在およびその効果を顧慮に入れていなかったがためにそうした結果を見ることになった (※2)。

(※2: 上の部に対する「長くなるも、」の訳注として

フィクションならぬ現実世界では加速器 — 核融合炉付設置型加速器で

はなく素粒子物理学の地平を切り拓くための実験用大規模加速器—の類がブラックホールなどを生成できるわけがないと後にノーベル物理学賞を受賞することになったフランク・ウィルチェックらに代表される物理学学界関係者らに断じられていた(1999年にウォルター・ワグナーら市井の批判家はその可能性がないのかとホーキングの原初宇宙にまつわる申しようを引き合いにそうした疑義を呈しだした際にその返答としてブラックホール生成などできるはずがないと断じられていた)のではあるが—本稿にての**出典(Source)紹介の部 1**、**出典(Source)紹介の部 2**にての経緯詳述部を参照のこと—、そうした科学界—丸となつての申しようが変転を見ることになり、それは(本稿前半部、**出典(Source)紹介の部 2**にて既述のように)**【1998年に登場しだした余剰次元理論という新規理論の登場(の帰結)】**によつてのことであつて、その過程で「現実世界で」論じられたことは「タウ波なるフィクション『未来からのホットライン』で重きをもつて語られているようなこととは無縁なるものとなつている。

(:さらに述べれば、加速器がブラックホールを生成するには(自然のありようから解されるところのこと)で「プランク・エネルギー」と呼ばれる規模のエネルギーを極小領域に投下しなければならないと従前考えられていた、それがテラ・エレクトロン・ボルト規模—俗に**TeV領域**と表されるエネルギー規模—のエネルギーの極小領域への投下でブラックホール生成がなされると考えられるようになったのが(1998年に提唱の新規理論を受けての)2001年よりの主張内容となるとされている(プランクスケールの見直し)。その点、**【プランク・エネルギー】**(本稿にての**出典(Source)紹介の部 21**で解説のされようを紹介しているようにジュール換算で[45リットルのガソリンにて車を駆動させ続けるに多少、増すところがあるといったレベルのエネルギー(ギガジュール領域の熱量)]相当のエネルギー)は必要とされない、**【テラ・エレクトロン・ボルト単位のエネルギー】**(本稿にての**出典(Source)紹介の部 21**で解説のされようを紹介しているように「蚊が飛翔する程度のエネルギーに程近いとの**160.2nJ**(ナノジュール領域の熱量)]相当のエネルギー)規模でブラックホールが生成されうるとのブラックホール生成のボーダーラインの圧倒的縮減、天文学的なるレベルでの垣根の縮減が想定されるようになったために「その建造は人類文明には絶対に無理である」とされていた「「超」が何個も付けられる程に巨大な太陽系サイズの加速器」などを(観念上の話として絶対無理である中ながらも)建設せずともLHCクラスの加速器にてブラックホールが生成されうると考えられるようになったとの現実世界での経緯があるのである—本稿にての**出典(Source)紹介の部 21**から**出典(Source)紹介の部 21-2**の解説(そして、そちらをさらに引き延ばしての**出典(Source)紹介の部 21-5(2)**までの解説)を参照されたい—)

(長くもなつての訳注表記を続けるとし、)尚、ここにて問題視している

小説『スライス・アポン・ア・タイム』（『未来からのホットライン』）では

[200万個の極微ブラックホールが生成された]

との作中設定が採用されているわけであるが、フィクションならぬ現実世界では2001年のエポックメイキングな論稿（[出典\(Source\)紹介の部2](#)）にて取り上げているところの米国にて報道対象ともなっているカリフォルニア大学サンタバーバラ校所属の物理学者、Steven B. Giddingsらの手になる論文、High energy colliders as black hole factories: The end of short distance physics『ブラックホール生成工場と化しての高エネルギー加速器: 短視視野の物理学の終焉』およびスタンフォード大の Savas Dimopoulos とブラウン大の Greg Landsbergらの手になる論文 Black Holes at the Large Hadron Collider『LHC にあってのブラックホール(ら)』) の内容などを受けての結果として、ブラックホール生成可能性を全否定していたところの従前見解をすさまじい手の平返して一転、肯定しだした科学界にあって

[通年にして1000万個の「安全な」ブラックホールが生成されうる]

と論じられるようになったとのこと — (従前よりおあつらえ向けにかとといったかたちで存在していた小規模ブラックホールの蒸発機序にまつわる仮説、[ホーキング輻射]を「それでも大丈夫」との安全性の御旗にして論じられるようになったとのこと) — が「ある」(細かくは[出典\(Source\)紹介の部2](#)にて文言引いている米国法学者の案件解説論稿や本稿前半部にあっての関連資料にまつわる噛み砕いての解説部を参照のこと)。

といったことは(くどくも繰り返すが) [80年代往時にはなんら想像されて「いなかった」ところ] ながらもフィクションと現実世界ありよりの間で数的側面で平仄が合いすぎる程に合う — 1980年フィクションも2001年以降現実世界論調も数百万の極微ブラックホールが全く違う機序で、だが、加速器に起因するものとして生成されることが引き合いに出されているとの意味合いで数的側面にて平仄が合いすぎる程に合う — とのことをも本稿前半部では指し示そうとしてきた、Thrice Upon a Time (邦題)『未来からのホットライン』よりのページ数を事細かに指定しながらの原文引用によって指し示そうとしてきたとの本稿にあっての事前経緯があることもここにて振り返っておく — 詳しくは本稿の前半部の内容、[出典\(Source\)紹介の部5](#)に至るまでの内容の精読・検証を請う次第である — 。

尚、先の段、たとえば、[出典\(Source\)紹介の部17](#)に続けての段などで一部既述のことに通ずるところとして、筆者、この身は

[(表記の)小説に見る特性と加速器実験機関および科学界にあっての申しよう動向の明示的差分]

のこと「をも」国民に対する情報提示行為に触法レベルの虚偽がある

として非を鳴らしていた「ためにしての」国内行政訴訟（第一審からして2012年から2014年と長らくも煩わされ続けた行政訴訟で加速器LHC関連かつブラックホール関連では国内唯一にして初の行政訴訟）にての初期段階で法廷に提出していた資料にて[法律上の争訟]の論点に巧妙に合致するように入れ込んで訴求するのことも「も」なしており（そうもした対・法廷での挙としては問題となる書籍のコピーも（著作権法上の例外になるがゆえに）【書証】として提出している）、そして、そのうえで[諸所にてその性質につき事細かに常識的なる説明をなし、その正否について諮（はか）る]などとのことをも水面下でなしもし、その結果、そうした挙に対する【機械に相對しているが如くの相應の反応】、そう、まるで【どこぞやの小僧が万引きでもしたか程度の問題として応ずるとの反応】に心底、[失望]させられたとの人間が筆者ともなる（[失望]とのことで述べれば、明らかに異常な側面を有している（本稿前半部にては専ら常識的の語柄にてその性質について訴求しているとの異常な側面を有している）との[実験]（との呼称なされている一連の挙）にあつて【本質的な意味で「明らかに」問題となるところ】を【陰謀論などのおどろおどろしさ伴い、真実と隔たるところありのもの「ではない」やりよう】にてこの世界では誰も突かない（この世界の真相と関わりとてなのか誰も突かない）、常識でも本来的には人間存在を動かして然るべきような方式で突こうとしないとのことも[見限って然るべきところ][無為無駄を悟って然るべきところ]としてあるのだが（尚、筆者は常識レベルでの事実をもって語らしめる式での訴求を水面下でなしてきたとの人間であるのだが、この者達、脳が死んでいるのか、といった者達の「心ない」言葉（直視の拒絶の「あまりにも不自然なる」表明）にひたすら憤激させられ続けるとの憂き目に遭った）、それでもいまだもってして納得できずに、そう、まったくもって納得できずに（心底[納得]しきってそれ以上、訴求をなすのを諦めるとのことをなした時点で筆者は自身の節を捨て、自身および自身の守らなければならぬものの生命（いのち）、その存続のために闘うことを放棄したことと同じになるように見ている）、前進（悪く述べれば猪突か）し続けてきたとのことが本稿筆者にはある（長くもなつての訳注はここまでとする）

（直近にての[長くもなつた訳注の部]から[現実の状況と似通つた内容を有するフィクションに対する英文ウィキペディアの粗筋紹介部の現行記述の訳出の部]に引き戻し）

…(中略)…

（ブラックホール生成による地球自身の崩壊との差し迫つての近未来の状況を受けて）過去にての彼ら自身はメッセージを受信して即時に行動することとなった。彼らの発見にて周章狼狽なすことになったとのバーグヘッドの管理委員会に対しては彼らのタイムマシンを含めての全てを明らかにする以外、選択肢はなかった。必要な調査を経た後、熱核融合炉は再開見通しなどない無期限方式で閉鎖されることになった。

…(中略)…

[センチュリオン]

(ブラックホールによる破滅が回避されたとの)[新しい時間線]にてタイムマシンのことはブリュッセルに在する欧州核融合協会(EFC —訳注:EFCことヨーロッパ・フュージョン・コンソーシアムとのものは小説独自に設定された架空の組織体である—)および他所に知られるに至っていた。

(そんな中、主人公マードックの友人である)リーがある日、(一同が研究をなしていた)居城で病を得、突如として倒れ伏すこととなった。医者としてアン(訳注:マードックらが渡英した折に昵懇となったとの設定の女性)は他所に足を伸ばしていたマードックに連絡をとり、リーは新種の病、現在、猛威を振るっている悪疫で

[明らかな多発性硬化症としての症状を呈するも、(予後悪くも)進行が極めて早く年単位というより数週間単位の致死性の病]

のアウトブレイク(疾病の地域的流行)に屈したのではないかと話した。マードックは機密扱いとの節があるその病についてアンに対してより多くものことを明らかにするよう強く求めたものの、アンもまた多くのことは知らなかった。しかしながら、(そんな中)、マードックは著名な医療専門家であるジャイルズ・フェニモア卿がロンドンから悪疫の流行調査のために訪れていることを知り、(そのジャイルズを介して)悪疫が合衆国の西海岸と幾分か結びつきを見せており、そこにて2009年9月にリーが居住していたことからさらなる疑いの念を抱くに至った(訳注:要らぬところで微に入っただけの解説なせば、病を得てのリー・フランシス・ウォーカー、タイムマシンを世界救済に役立てるのに注力した面々の一人はマードックの友人にして同僚として共に技術コンサルタントをやっていたとの設定のキャラクターとなり、そのため、タイムマシンを開発した老物理学者の孫のマードックはリーの動静に対して極めて明るいとのことが小説では語られている/そちらリー・ウォーカーなるキャラクターはブラックホールによる世界の崩壊が免れた時間線でも(2009年9月より病原体に曝されているために)どの道、病に倒れざるをえなかったとの設定が当該フィクションでは採用されている)。

その後、テッドとエリザベスがマードックの調査を助けることになる。バーグヘッドの施設の長であるラルフ・コートニーに対する詮議を終えた後、R.A.F.(王立空軍)の若きパイロットとのやりとりを経、彼らは(テッドがR.A.F.王立空軍にての従前の経験から知っていたこともが助けとなり)結果的に英米の権力者筋が潜在的に脅威となりうるウィルス、遺伝子操作、そして、同様のものの危険性伴う研究を行うための先端研究所を設立することを望んでいたことを知るようになる。

同計画は当然に(実験成果物の)封じ込め失敗・汚染にまつわるところとして公衆に大なる議論を引き起こし、結果的に計画廃棄を見ていたのだが、しかしながら、[それによって得られるありうるべきところの科学上の成果]が単純にあまりにも大きかったために計画は容易に廃することができるようなものではなかった(とマードックらは知るに至りもした)。

かくして[QX-37]と名付けられた人工衛星が天文学上の観測装置と表向き偽装されて建設・打ち上げられることになった(そして、そこでの隔離された環境でそうした実験が行われ出した)。

2009年8月のこと、[ペルセウス座流星群の通過線]上をその人工衛星が横切った折、同衛星は隕石による打撃を受けることになった。人工衛星の崩壊・それに続く墜落の後、公衆のパニックを防ぐため、その件に関するすべてのことは

[センチュリオン] (訳注:ローマの百人隊長の意)

との秘匿コードでもって呼称されることになった。

(以下略。——訳注:小説『スライス・アポン・ア・タイム』)では物語はその後、[センチュリオン]などというコードネームが振られての中での封じ込め作戦が講じられるものの、それがたいした成果をあげられない中、[神経系が蝕まれ、死に至らしめられるとの人工衛星で人為的に造られた病]が急拡大していく未来が示唆され、そして、結果的に過去への再度の通信が講じられることになるとの展開を見ることになる。作品表題に見る『スライス・アポン・ア・タイム』にてのスライスとは「三度の、」という意味の語であり、それは当該作品にて[過去改変のための情報伝達]が過去に向けて三度なされたことに由来する——)

(以上をもって長大な英文 Wikipedia [Thrice Upon a Time] 項目のシノプシス(粗筋紹介部)の節よりの掻い摘まんでの抜粋をなしつつ、補っての記述を多分に付したとの引用部を終える)

以上引用部それ自体からも分かるようになっているところとして **LHC 実験** のことについて多少知っている向きにとって、

Thrice Upon a Time (邦題)『未来からのホットライン』(1980)

には [LHC 実験開始時期] との関係でできすぎているように映るところが「時期的問題にあって「も」」ある。

(本稿の先の段ではきちんと解説してこなかったことであるので、ここにて[問題となるフィクションにあつての作中世界年代設定と実世界の実験開始期の時期的近似性]について筆を割くとして)

直前部にあつてウィキペディア程度の媒体からであるが、そこよりの記述を引いて指し示した『未来からのホットライン』粗筋部にもその片鱗が認められるように『未来からのホットライン』は

[2009 年年末から 2010 年の世界] (要するに小説刊行時たる 1980 年からおよそ 30 年後の世界)

を舞台にした作品となっており(国内書店で流通している文庫版『未来からのホットライン』では(当方手元に置いてある第 17 版を基準に述べれば) p.6 および p.10 の年月表記 一上にて訳注として引用なしたところ— を含む部の内容を一読するだけでもすぐに理解出来るところである)、 そうもした舞台設定にあつて、

[**レーザー核融合炉** (上記粗筋紹介部には現行言及されていないが、本稿前半部 **出典 (Source) 紹介の部 4** で原文抜粋しながら指し示しているように正確には[加速器]を用いてのレーザー核融合炉) に起因する災禍として大量の蒸発しない極微ブラックホールが生成されたとの粗筋が現出を見ていること]

が描かれているのだが、そのことが

「現実の LHC 実験が 2008 年 9 月 10 日にスタートを見、その直後、ヘリウム漏出事故を受けて 2009 年 11 月 20 日まで機器調整のための停止を見ていた実験である(換言すれば、**LHC 実験とは 2009 年年末から本格スタートを見た実験である**)こと」

とあまりに時期的に近接するとのこと「も」またあるのである(※)。

(※上記のことの出典として:**LHC** の実験始動時期については基本的なこととして英文 Wikipedia[Large Hadron Collider] 項目の記述を引くだけで十分とらえている(のでそうすることとする)。

英文ウィキペディアの同項目前半部には

“ The LHC went live on 10 September 2008, with proton beams successfully circulated in the main ring of the LHC for the first time, but nine days later a faulty electrical connection led to the rupture of a liquid helium enclosure, causing both a magnet quench and several tons of helium gas escaping with explosive force. The incident resulted in damage to over 50 superconducting magnets and their mountings, and contamination of the vacuum pipe, and delayed further operations by 14 months. On November 20, 2009 proton beams were successfully circulated again, with the first recorded proton – proton collisions occurring three days later at the injection energy of 450 GeV per beam. ” (訳として)「LHCは2008年9月10日から、陽子ビームをLHCにての中心となるリング部にあつて成功裡に巡回させるとのかたちで稼働状況に入ったが、その九日後、電気接続にての問題を受け液体ヘリウムの封入部に断裂が生じ、加速器使用磁石のクエンチと爆発の元となる大量のヘリウムの漏洩を見た。同出来事は計50の超電導磁石およびそれらの据え付け構造部の損害、真空状態にある管の汚染を結果的にもたらすこととなり、さらに進んでの可動を14ヶ月遅延させることになった。2009年11月20日、450GeV(4500億電子ボルト)のビームの照射の後、三日後、最初の陽子・陽子ビームの衝突にて陽子ビームの再巡回が成功裡になさしめられることとなった」(訳を付しての引用部はここまでとしておく)

との記述がなされており、そちら記述は公式発表通りのものとなっている——また、加速器問題に一意専心して取り組んでいたとの筆者は(頭の具合のみならず身体の具合もそうはよろしくなかった、往時の深刻な体調不良の状況と折り合いをつけながら)加速器実験機関に訪問取材なす中などにて表記の引用部に見る[2009年のヘリウム事故]の問題がその通りのものであるのかの見極めすら、2012年、「事後的に」なそうとしていたのだが、の中で、ヘリウム事故が公式発表「以上のもではないであろう」とのこと、実感させられた人間ともなる(：たとえ、[ヘリウム漏洩事故にまつわる経緯]が[1980年の小説に見るブラックホール生成がレーザー核融合炉の運転の直後、融合炉コンポーネントに穴を開けたとの設定が採用されていることと状況的に似通っているように響く]ものであつてもである)。さらに述べておけば、本稿筆者はLHC実験にあつての参画機関の遵法との意での問題に関して「ためにして」非を鳴らしての自身が原告席に立つての行政訴訟の中でCERNの資料上の問題としてヘリウムに対する安全マニュアル(あるいは液体アルゴンといった冷却用の要注意物質)や被曝度合いを測定するためのフィルムバッジ着用が関係者に強要されるとの放射線管理マニュアルに関連する英文の文書を意図して法廷に提出するなどしてきたとの人間ともなり(国内のCERN実験に参加している権威の首府たる研究機関の弁護士らが筆者と真向かいに向き合つてやりとりしていた際にリスク関連文書はLHCに関しては存在「しない」などと[実にもつて頓狂なこと]を強弁し続けたがためにそれら資料まで『下らないことをさせてくれるな』と思いつつ【書証】として法廷に出しもしていた)、加速器実験にまつわるあれやこれやに関してそれなりに詳しくなつていくとの人間でもある(が、といった人間ながら筆者が本当に問題視しているのは【馬鹿げた予告「群】が極めて非人間的になされておられ、それらが【人類はここで終わりにする】としか解しようがない意志表示を執拗になしているものとなつていくことであつて、そのことにまつわる事実摘示をなすうえでは[加速器実験にまつわるあれやこれやのこと]を細かくも延々云々する必要など本来的には「ない」とも判じている)——)。

さてもつてして、本出典紹介部にて呈示してきたことをまとめて述べれば、である。

1980年初出の表記小説（**Thrice Upon a Time**）では

[2009年末から2010年年初の作中世界にて欧州の核融合炉運転機関の運営する加速器敷設型核融合炉にてブラックホールが発生し災厄 —過去改変せねば人類と地球が完全に破滅するとの災厄— をもたらすこと]

が描かれる。

対して、現実の**LHC 実験**に関しては

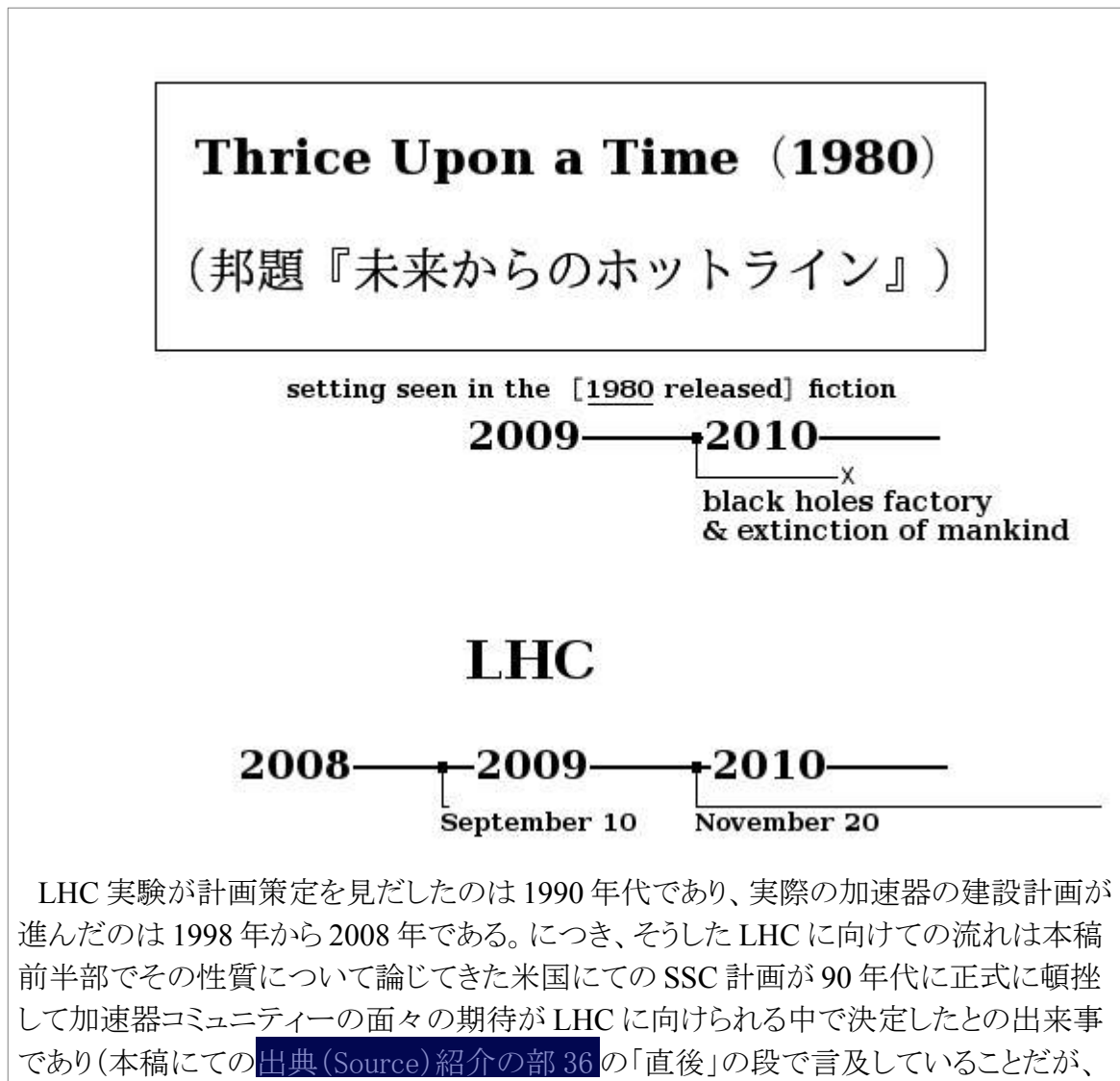
[2009年年末に近き折(11月20日)に本格スタートを見た(2008年9月10日にあつて火入れを見た直後、一端、中断を見ていたとの実験が再開・本格スタートを見た)]

とのことがある。

そうしたことがあることからして

「時期的に目立っての近接性を呈している」

とのことがお分かりいただけることか、と思う(：かたや**1980年小説が2009年と2010年の境目にての加速器接合装置によるブラックホールの災厄を描いている**のに対して、かたや**現実世界ではブラックホール生成可能性を取り沙汰されだしていたLHCが(2008年9月10日に稼働しだし、直後の長期の停止期間を経て)2009年11月20日に運転再開した** —上にて引用なした英文 Wikipedia の記載の通りである— とのことがある)。



(timeline.web.CERN. ch とのドメインの CERN それそのもののサイトにてオンライン上に表記されているところより引用なしもしたところとして)、6 December 1994 The CERN council approves the construction of the Large Hadron Collider. 「1994年12月16日 CERN カウンシルはラージ・ハドロン・コライダーの建設を(正式に)許諾した」とのように LHC 計画が青写真段階から正式に認可されての計画になったのは1994年である)、従って、小説作者(Thrice Upon a Time (邦題)『未来からのホットライン』をものしたジェイムズ・パトリック・ホーガン)は [LHC が何時稼働しだすか] といったこと以前にそもそも [LHC なる加速器の建設計画が策定されることになる] とのことを「物理的に」把握していなかった(できなかった)と考えるべきところとなる (: 殺されても文句言わぬといった質的に狂った人間ならば資料的裏付けを伴うそういった話に見向きもしない(そして、より度し難くは平然とそうした話を言論封殺しようとする)かもしれないが)。

(出典(Source)紹介の部 110 はここまでとする)

以上典拠を示してきた [時期的近接性] の問題から離れもし、現実の LHC 計画が二〇〇八年「九月一〇日」にスタートを見、それがヘリウム事故で一端頓挫を見もして14ヶ月後の二〇〇九年一月二〇日に再始動を見ているとの実験となりもしていることにつき、筆者が着目しているところとしてそこにも [911 との数値的近似性] が見てとれるとのこと「も」ある (それ単体だけ述べれば愚者あるいは狂人の妄言に同じと見られるのは論をまたないとのことだろうが、本稿では何故もってして [ブラックホール生成挙動と表現されるようになったかの挙] が [911 の事件の先覚的言及の如きものら] と結びついていると判じざるをえぬのか、その論拠を数多挙げている)。

本当に重要な細かくもこの相関関係の網羅的再叙述 (本稿にてのここまでの段にて摘示につとめてきたとの相関関係の網羅的再叙述) にまでは手が回るところではないが、薄くも振り返ってもみれば、次のような側面から同じくもの点 — LHC 実験と 911 の事件 (の先覚的言及事物) の接続性 — について訴求なしてきたというのが本稿である。

(【 LHC 実験と 911 の事件 (の先覚的言及事物) の接続性 】に関わる場所として)

「第一に、」先の [911 の事件の発生を予見描写を多分に含むサブカルチャー作品] などというものが「多数」存在しており、の中には、

[黄金の林檎 (トロイア崩壊の原因) と巨人アトラスの寓意]

を含むものが際立ってそこに存在しているとのことが現実にある (: [911 の予見事物] が存在していること自体がそも、異常なことであるのだが、ここでは [事実の話] をなしていること、論拠を [誰でも容易に後追いできるかたち] で事細かに明示してきた人間として強くも申し述べる — ※本稿出典(Source)紹介の部 37 から出典(Source)紹介の部 37-5 を包摂する解説部、および、そこからさらに進んで何が述べられるかにつき詳述に加えての詳述をなしているとの補説 2 の内容を参照のこと。あるいは [黄金の林檎の模型] としての特性「をも」帯びているとの映画『ファイト・クラブ』登場のツインタワー敷設オブジェ爆破挙動について解説し、また、黄金の林檎に比定される果実たるオレンジを具にしつつ 911 の事件の事前言及描写をなしているとの奇怪極まりない

映画作品 **Trading Places** (邦題)『大逆転』(ワールド・トレード・センターおよびツインタワーと911との数値規則が一度ならずも作品内で結びつけられているとの作品)や同文の式で問題になる国内サブカルチャー作品について解説しているとの補説4の部を参照のこと——)。

他面、LHC 実験に関して「も」[黄金の林檎](トロイア崩壊の原因)と[巨人アトラス](神話にあって黄金の林檎の在処を把握すると伝わる巨人)の寓意が額面上のシンボル・実験関連命名規則それ自体からして関わっているとのことがある(本稿でくどいほどに詳述してきたところとしてLHC 実験というものは【黄金の林檎の在り処を知る巨人アトラスの名を冠する検出器 ATLAS (A Toroidal LHC ApparatuS)でブラックホールの観測をなすと銘打つてもいる実験】と表せられるようになっている——出典(Source)紹介の部36(2)および出典(Source)紹介の部36(3)——)。

以上の事由があるために、[黄金の林檎]と[巨人アトラス]を介して[911の事前言及(が如くもの)]とLHCが結びつく素地があると「まずもって」述べられるようになってしまっている。

(:また、アトランティスという伝説上の陸塊は[大洋の彼方の黄金の林檎の園]と見做される側面が伴っているものでもあるのだが(出典(Source)紹介の部41以降の部にて既述のことである)、LHC 実験に関して述べれば、巨人アトラス(本稿の出典(Source)紹介の部39で解説しているように黄金の林檎の在処を知ると伝わっている巨人)の名を冠する検出器 ATLAS (A Toroidal LHC ApparatuS)が用いられつつ、かてて加えて、「ATLANTISという名前のイベント・ディスプレイ・ツールによってブラックホール生成イベントを観測する可能性がある(出典(Source)紹介の部35)」「安全なブラックホール生成イベントを観測することも人間の科学の地平線を広める行為である」などと(それが人間一般の愚昧さ・視野狭隘さを嘲笑う「別方向からの」ブラックユーモアの発露ではないと言えるかが問題となるところとして)相応の面構えの科学者らに今まで宣伝されてきたとの経緯があるとのこと「も」がある——尚、本稿にての出典(Source)紹介の部1から出典(Source)紹介の部3にて詳述してきたところの理論変転動向解説部および出典(Source)紹介の部81にて呈示の万物理論を巡る経緯の解説部を参照することで「安全なブラックホールが人類の科学的知見を増進させる」などとの主張がいかんにしてなされているかは理解いただけるであろう——)

(【LHC 実験と911の事件(の先覚的言及事物)の接続性】に関わるところとして)

「第二に、」911の事件の発生態様を奇怪にも事前明示しているとの文物らが存在しているとのことがあるとの点について、それら文物の中に[ブラックホールおよびワームホールのことを取り扱ったもの]が異常無比に存在しており、それが[LHC 実験との接合性を感じさせるもの]であるとのこと「も」またある(:キップ・ソーンのBLACK HOLES & TIME WARP Einstein's Outrageous Legacy『ブラックホールと時空の歪み アインシュタインのとんでもない遺産』とチャールズ・サイフェのZero: The Biography of a Dangerous Idea『異端の数ゼロ』の関係性から示されるところである。その点、ブラッ

クホールおよびワームホールのことを専一に取り扱っている科学解説書の中にあつて現実に「2001年9月11日と通ずる数値規則の多重的使用」「1「911」年提唱の「双子」のパラドックスの中心的テーマ据え置き」との要素を単一のトピックで複合的に具現化させての「先覚的言及」が「1994年から」なされていもするとのことが「ある」——※本稿にての出典(Source)紹介の部 28, 出典(Source)紹介の部 28-2, 出典(Source)紹介の部 28-3, 出典(Source)紹介の部 31, 出典(Source)紹介の部 31-2, 出典(Source)紹介の部 32, 出典(Source)紹介の部 32-2, 出典(Source)紹介の部 33, 出典(Source)紹介の部 33-2を包摂する解説部を参照のこと。そちら出典紹介部では「大卒程度の英語読解力がある向き」には誰でも「訳書よりの引用部」との対応関係が分かろうとの「オンライン上より内容確認可能となっている」原著よりの該当部引用「にも」(訳書引用と同時並行的に)力を入れている——。また、といったことに関してはカール・セーガンのハードSFというジャンルの作品としては異例なことに100万部超を売り上げたとの『コンタクト』(1985年初出 / 邦訳版1986年初出)や不快な事前言及文物たる『ジ・イルミナタス・トリロジー』(原著書籍1975年初出)との多重の接合性もが問題になってくることをも本稿では詳説している——※本稿にあつて膨大な文字数を割いていたとの補説 1から補説 4と銘打つての段のうち、補説 2の段を参照のこと——)。

(「LHC 実験と911の事件(の先覚的言及事物)の接続性」に関わるところとして)

「第三に、」(第一と第二の点とも関わるところだが)「意味論的近接性がある」とのことがある。911の前言をなしているとの(存在自体が奇怪なる)作品らの一部・特定作品にあつては「黄金の林檎」の存在がちらついていると先述したが、「黄金の林檎」の「トロイアの木製の馬と比較されるようなトロイア崩壊の原因となっている」(出典(Source)紹介の部 39)との「特質」に着目すれば、「加速器こそがまさしくそういうものたりうる、人類にとりそういうものたりうるということが問題になってくる(との懸念が持ち出されていた)」とのこと「も」ある。

(：出典(Source)紹介の部 82(2)にあつては「露骨なる」911の先覚的言及事物——いいだろうか、「露骨なる」911の先覚的言及事物である——となつている物理学者キップ・ソーン著作とダイレクトに結びついている小説作品であるカール・セーガンの手になる『コンタクト』(作者カール・セーガンの科学界オピニオン・リーダーとしての声望の高さも寄与してであろう、ハードSF小説との分野では異例なことに100万部超売れたとの作品)より次の通りの記述を引きもした。

(以下、邦訳版カール・セーガン『コンタクト』文庫版下巻(新潮社)216ページから219ページ、[グラウンド・セントラル・ステーション]の章より「再度の」中略なしつつもの原文引用をなすとして)

“五人は潮溜りを囲んで腰を降ろした。穏やかな波の音を聞きながら、エリーは<アーガス計画>で宇宙の囁(ささや)きに耳を澄ませた過ごした数年のことを思い出した。…(中略)…「あらかた先方の仕事だね」ヴェイゲイは自分たちのこの体験についてエダと話し合ったことを他の三人に説明した。「こっこのプロジェクトがしたことと言えば、ただ、時空にあるかないかの小さな皺を寄せただけの話だよ。そこへ、向うはトンネルは繋げたんだ。多次元幾何学的空間を考えると、その時空の僅かな皺を見付けただって大仕事だよ。ましてや、そこへトンネルの口を開けるとなると、これは容易なことじゃない」「うん。つまり

ね。空間は位相幾何学的に複雑な形で連続しているわけなんだ。アボネバに言わせれば、これはあまり上手い譬(たと)えではないかもしれないけれども、片方に二次元の平面があると仮定しようか。これが先進文明の世界だよ。で、もう一つ、こっちに別の二次元平面がある。これは後進世界でね、二つの平面は迷路のような管で結ばれている。先進世界から限られた時間で後進世界へ行くには、その迷路を抜けるしかないんだ。ところで、先進世界の住人が先端に穴の開いた管を伸ばすとするね。その時、後進世界の方でそれに合わせて自分たちの平面にちょっと皺を寄せてやれば、そこへ管の先が届くであろう。これでトンネルが通じる」「つまり、先進世界はどうやって平面に皺を寄せるか、電波で情報を送って後進世界に指示を与えるわけね。でも、両方とも厳密に二次平面の世界だとしたら、皺を寄せるなんていうことができるかしら?」・・・(中略)・・・「問題は」エダが控え目に口を挟んだ。「そのトンネルがブラックホールだとすると、非常な矛盾が生じるということなんです。アインシュタインの場の方程式にR・P・カーが与えた解によれば、たしかにトンネルができて、これをカー・ブラックホールと言っていますが、このトンネルはとても不安定でしてね。ほんの少しの擾乱で、たちまちトンネルは塞がって特異点に変わってしまいますから。何物もそこを通り抜けることはできないんです。わたしは極めて技術的に水準の高い文明が、陥没星の内部構造を制御して、トンネルを安定に保っているのではないか、というふうに考えてみました”(訳書よりの引用部はここまでする 一尚、「オンライン上より全文確認可能となっている」との原著CONTACTの内容は(以下、Grand Central Stationの章よりの引用なすとして) “The five of them sat together by a little tide pool. The breaking of the surf generated a soft white noise that reminded her of Argus and her years of listening to cosmic static. [. . .] **"We think they did almost all the work." Vaygay was explaining his and Eda's thinking on what the five of them had experienced. "All the project did was to make the faintest pucker in space-time, so they would have something to hook their tunnel onto. In all of that multidimensional geometry, it must be very difficult to detect a tiny pucker in space-time. Even harder to fit a nozzle onto it." "What are you saying? They changed the geometry of space?" "Yes. We're saying that space is topologically non-sim-ply connected. It's like —know Abonnema doesn't like this analogy— it's like a flat two-dimensional surface, the smart surface, connected by some maze of tubing with some other flat two-dimensional surface, the dumb surface. The only way you can get from the smart surface to the dumb surface in a reasonable time is through the tubes. Now imagine that the people on the smart surface lower a tube with a nozzle on it. They will make a tunnel between the two surfaces, provided the dumb ones cooperate by making a little pucker on their surface, so the nozzle can attach itself." "So the smart guys send a radio message and tell the dumb ones how to make a pucker. But if they're truly two-dimensional beings, how could they make a pucker on their surface?" [. . .] "You see,"** Eda explained softly, "if the tunnels are black holes, there are real contradictions implied. There is an interior tunnel in the exact Kerr solution of the Einstein Field Equations, but it's unstable. The slightest perturbation would seal it off and convert the tunnel into a physical singularity through which nothing can pass. I have tried to imagine a superior civilization that would control the internal structure of a collapsing star to keep the interior tunnel stable.”(引用部はここまでする)とのものとなっている)。

以上、長々と引用なしたような記述内容を含むカール・セーガン著『コンタクト』が

【人間存在のくだらなさを徹底的に嘲笑うが如き嗜虐的反対話法】(知識がな

い者が目にしても絶対にそれとは気づけなかりょうとも受け取れる嗜虐的反対
話法)

で満ち満ちた作品となっていることを懇切丁寧に、典拠つまびらやかにして解
説しているのが本稿にあっての補説 2 の部の内容となるのだが、それも端的に
述べたうえで書けば、である。直上引用部にみとめられるカー・ブラックホール
(あるいはゲートとしてその他、有望視されるワームホール) を生成しようとされ
るとというのが LHC 実験であるということを折に触れて解説している、同じくもの
ことにまつわっての科学界言われようを挙げながらも丁寧に解説しているのが
本稿である。

とにかくも、ここでの記述だけをもってからしてお分かりいただけることかとは
思うのだが、LHC は[トロイアの木製の馬]たりうるものである(このような世界で
の「実験」関係者でそのようなことを[可能性論]としてでもまともに「否定的に」
語ろうとする人間は一人とていないようなのだが)。尚、LHC がトロイアの木製
の馬たりうるとしてその合理的結果(たとえば人間という種を人工知能を用いて
の極めて愚劣なありようで歴年養殖してきたということがあるのならば、それ
に見合うに足る合理的結果)がどういものたりうるのかについての仔細なる解
説は本稿の末尾近くの部にあって『これは. 』と見た科学読み本らの解説を
引きつつ、普通にそうだと考えられるところを呈示することとする(なにせもせ
ねば、早晚、人類という種は滅ぶというのが至極当然、合理的に導出される帰
結となるのだが、その人為災としての滅びにまつわる考えられるところの背
面動機についての解説も —それでいいのか、と問いたくも— 本稿ではきち
んとおこなっておくこととする))

上にて言及の第一から第三の点らを

[一部事例のみでもってして牽強付会な(こじつけがましい)と受け取られようことを強弁している
のことは済まされないと式 (膨大な文量を割いて典拠となるところを入念に多角的に指し示し
ての式)]

で呈示、もってして、

[LHC 実験と 911 の事件 (の先覚的言及事物) の接続性]

について指し示してきたというのが本稿である。

振り返りの部はここまでとして本段にあっての本題に戻る。

最前まで振り返り表記なしてきたように【911 の事前言及事物】(と黄金の林檎)に通ずるようになって
いるとの指摘がなせるようになっている LHC 実験、同実験の 2009 年年末の本格始動について先覚的
言及をなしていると判じられるように「なっている」作品、

Thrice Upon a Time (邦題)『未来からのホットライン』(原著初出 1980 年)

については英文ウィキペディアの記載を引いての粗筋紹介部(直近の**出典(Source)紹介の部 110**で
呈示)にても認められるように、

[ブラックホールによる破滅の危機が過去に遡行する通信にて食い止められた後、間を経ず、
[人工衛星の内部で人工的に造り出されたウイルス]による災禍が人類を襲うことになる、そして、
同伴に関する作中設定での秘匿コードは Centurion [センチュリオン] となっているとの粗筋]

が採用されている(疑わしきは先行するところの引用部などを参照されたい)。

そうした『未来からのホットライン』粗筋 — [センチュリオン] なるものを人造ウィルス禍（ブラックホールによる絶滅を過去改変にて防いだ人類に襲いかかる人造ウィルス禍）と結びつけているとの粗筋— が

【ヘラクレスの計 12 に及ぶ功業】、【(ヘラクレス第 11 功業に見る) 巨人アトラス】、【トロイア崩壊伝承に見るトロイア崩壊の原因たる(他伝承では巨人アトラスが在処を把握するとされる) 黄金の林檎】、【巨人アトラスともトロイア崩壊元凶たる黄金の林檎とも史的に(一部識者によって) 結びつけられてきたとのアトランティス沈没伝承】、【アトラスやアトランティスといった固有名詞を付されたの LHC 実験におけるブラックホール生成論議に関わる事物】との要素らのうちの「複数」を特色として帯びつつ、かつ、【911 の事件の発生(態様)にまつわる予見的言及】ないし【ブラックホール人為生成問題にまつわる「先覚的言及」】の一方、あるいは、その双方をなしているとの文物らが「不可解に」存在している]

とのことと関わっていると述べられるようになっていくとすることが「ある」(その指し示しのためにわざわざ『未来からのホットライン』の粗筋紹介を直近、細々となしてきたのである)。

それについてはこれより呈示の 1. から 3. と振ってのこたを検討いただきたい次第である (:前もって断っておくが、1. から 3. と振ってのこれよりの各セクションはかなりもってしての分量、それぞれ相当程度の分量を割いて問題となることを指し示すものとなる — 要するに「各点ともに、相当、話が長くなる」—)。

1.

まずもってそこから解説するが、小説『未来からのホットライン』に見る、

[センチュリオン —人工衛星で生成の人造ウィルスによる死に至る神経の病の拡散・猖獗(しょうけつ)と結びつく秘匿コード—]

という言葉に伴う性質が [ヘラクレスのきしたし] (殊に第 11 功業および 12 功業を終えてのヘラクレスの末期) と多重的関係性を呈しているとのことが「ある」。

その点、本稿では

「 [LHC] が [ヘラクレス 12 功業] (の中の 11 番目の功業に見るアトラスと黄金の林檎の物語) とが純・記号論的なる事実の問題として結びついているとのことを指摘できるようになっている(ことを延々と指し示してきた)」

わけではあるが (つい最前の段でも、にまつわっての振り返り表記をなしている)、

[センチュリオン] (額面通りにはローマの百人隊長のことを指す名詞/カード会社アメリカン・エキスプレスのよく知られたローマ兵士の横顔デザインに見るようにセンチュリオンとは古代ローマの軍制における 100 人の兵士の長である)

を巡る小説のやりようは —これよりその点についての解説をなすが— ヘラクレスの悲惨なる最期と強くも相関関係を呈しているとのことが「ある」。

媒介項となるのは

[[センチュリオン] と [ケンタウロス] の関係性]

となる。



Centauro



Centurion

図の左側はケンタウロス・ネッソスを打ちのめすヘラクレス像 (フィレンツェに現況、存在しているとの 16 世紀末葉の彫刻家 Giambologna ジャンボローニャの作) を写し撮った写真となり、図の右側はローマの百人隊長ケンタウロスの想像されるところの再現画となる —— 左側の彫像写真の出典は Project Gutenberg よりダウンロード可能な *Stories of Old Greece and Rome* (1913) との著作となり、右側の再現図の出典は同文に Project Gutenberg より全文ダウンロード可能なラテン語初学者向けの著作 *Latin for Beginners* となる —— 。

いかようにして [[ローマの百人隊長の呼称] と [ケンタウロス(半人半馬の存在)] の関係性] が問題になると述べもするのか。

それにつき、[センチュリオン](ローマの百人隊長) と [ケンタウロス] の間には関係があるとの関係性それ自体にまつわる話に先んじてまずもって述べれば、

[ネッソスという名のケンタウロスに由来する[ヒドラの毒による奸計]で焼け爛れて苦悩の中、死んでいくとの最期をヘラクレスが遂げている]

とのことが伝わっていることが問題となる (以下、典拠紹介の部を参照のこと)。

SOURCE 110(2)

"Abaddon, to have been the name of the same Ophite God, with whose worship the world had been so long infected. Ob. I take Abaddon, or, as it is mentioned in the Revelations, Abaddon, to have been the name of the same Ophite God, with whose worship the world had been so long infected. He is termed by the Evangelist Αβδδων, τον Αγγελον της Αβυσσου, the angel of the bottomless pit; that is, the prince of darkness. In another place he is described as the dragon, that old serpent, which is the devil, and Satan. Hence I think, that the learned Heinsius is very right in the opinion, which he has given upon this passage; when he makes Abaddon the same as the serpent Pytho."

Jacob Bryant,
A New System or Analysis of Ancient Mythology
Vol.II. (1807)
OB, OUB, PYTHO, SIVE DE OPHIOCLASTRIA

the September 11 attacks
(coordinates) 38.87099° N
77.05596° W
↑
setting American Airlines Flight 77
(Boeing 7x7 Series)

recall

'ugly' Book of Revelation filled with [number 7]
7 stars, 7 lampstands, 7 churches, 7 seals,
lamb having 7 horns, 7 angels, 7 trumpets,
7 thunders, 7 visions, 7 bowls, 7 plagues,
7 words, 7 headed dragon

(Greek Αποκαλυψις Ιωαννου, Apocalypsis Ioannou)
means 'un-covering'

[bottomless pit]
They had over them a king, an angel of the abyss, whose name in Hebrew is Abaddon, but in the Greek he is called Apollyon. (Revelation 9:1)


(in Satan's voyage through abyss) → 'Original Sin' for religious people
The secrets of the hoary deep; a dark illimitable ocean, without bound, / Without dimension, where length,
breadth, and height, / And time, and place, are lost; where eldest Night And Chaos, ancestors of Nature,
hold Eternal anarchy, amidst the noise Of endless wars, and by confusion stand.

John Milton
Paradise Lost (1667)
BOOK II, lines 890-895

(peculiar) BH like properties
(seen in 17th century)

Collapse of 1 WTC - 2 WTC
and Boeing 7x7 Series
7-7 London bombings (2005)
(referred as 7/7)

Appolo
(and his predecessor Pytho)



ここ出典 (Source) 紹介の部 110(2) にあつては

[ネッススという名のケンタウロスに由来する[ヒドラの毒による奸計]で焼け爛れて苦悩の中、死んでいくとの最期をヘラクレスが遂げているとの筋立てが今日に伝わっている]

このことの典拠を挙げることにする。

(直下、英文 Wikipedia [Heracles] 項目 (ヘラクレスの英語読みを体現しての [Hercules (ハーキュリーズ)] 項目とは現行別項目として設けられている項目) にての Marriages (結婚) の節より抜粋をなすとして)

His third marriage was to Deianira, for whom he had to fight the river god Achelous (upon Achelous' death, Heracles removed one of his horns and gave it to some nymphs who turned it into the cornucopia.) Soon after they wed, Heracles and Deianira had to cross a river, and a centaur named Nessus offered to help Deianira across but then attempted to rape her. Enraged, Heracles shot the centaur from the opposite shore with a poisoned arrow (tipped with the Lernaean Hydra's blood) and killed him. As he lay dying, Nessus plotted revenge, told Deianira to gather up his blood and spilled semen and, if she ever wanted to prevent Heracles from having affairs with other women, she should

apply them to his vestments. Nessus knew that his blood had become tainted by the poisonous blood of the Hydra, and would burn through the skin of anyone it touched. Later, when Deianira suspected that Heracles was fond of Iole, she soaked a shirt of his in the mixture, creating the poisoned shirt of Nessus. Heracles' servant, Lichas, brought him the shirt and he put it on. Instantly he was in agony, the cloth burning into him. As he tried to remove it, the flesh ripped from his bones. Heracles chose a voluntary death, asking that a pyre be built for him to end his suffering.

(逐語訳に代えて大要を示すところとして)

「ヘラクレスの三度目の結婚はデイラネイアという女、彼が河の神アケオロスとから勝ち取ったとの女との間のものであった。結婚してすぐ後に彼・彼女らは河を渡ろうと試みていると、ネッソス(英文読み:ネッサス)がデイラネイアの渡河を手伝う申し出をなしつつその実、彼女をレイプしようとした。それに気付いたヘラクレスが[レルネーのヒュドラ](ヘラクレスが12功業の内の二番目の功業にて誅伐した9つの頭を持つ蛇)の毒に浸して用いていた愛用の矢でネッソスを射て殺した。そのネッソスがまさに死のうとしている時、ネッソスはデイラネイアに「ヘラクレスのそなたに対する愛が冷めたらば、このネッソスの血と精液を彼の衣服に塗りたくればよい」と助言をなした(実際には自身の身体に廻ったヒドラの毒をヘラクレスにお見舞いしてやろうとの今際の際の奸計を弄した)。後年、ヘラクレスが別の女性(イオレー)を愛した折、デイラネイアはネッソスに言われたとおりに彼の衣服をネッソスの残留物と混ぜてヘラクレスの従僕リカースを介してヘラクレスにそれを着させしめんとした。その結果、間を経ずにヘラクレスに毒が回り、(苦しみもがいた挙げ句)、彼は自死を選んだ」

(以上、訳を付しての引用部とする)

(さらに続いて直下、同様のことについて和文ウィキペディア[ヘーラクレース]項目にての[ヘーラクレースの最期]の節にての現行の記載よりの抜粋をなすとして)

あるとき、デーイアネイラと息子ヒュロスとともに川を渡ろうとして、ヘーラクレースがヒュロスを担ぎ、ケンタウロスのネッソスがデーイアネイラを担ぐと申し出たので頼んだ。しかし、ネッソスがデーイアネイラを犯そうとしたためにヘーラクレースはヒュドラの毒矢でこれを射殺した。ネッソスはいまわの際に、「自分の血は媚薬になるので、ヘーラクレースの愛が減じたときに衣服をこれに浸して着せれば効果がある」と言い残した。デーイアネイラはその言葉を信じ、ネッソスの血を採っておいた。

後にヘーラクレースがオイカリアの王女イオレーを手に入れようとしているのを察したデーイアネイラは、ネッソスの血に浸した服をリカースに渡してヘーラクレースに送った。ヘーラクレースがこれを身につけたところ、たちまちヒュドラの猛毒が回って体が焼けただれ始めて苦しみ、怒ってリカースを海に投げて殺した。観念したヘーラクレースは木を積み上げてその上に身を横たえ、ポイアースに弓を与え(後にこの弓はポイアースの息子ピロクテーテースのものになる)、火を点けるように頼んだ(火を点けたのはピロクテーテースだともいわれる)。こうしてヘーラクレースは炎に包まれて死んだ。これを知ったデーイアネイラは自殺した。

(引用部はここまでとする)

(※ Project Gutenberg にて公開されている Specimens of Greek Tragedy

(1893)との資料にあつて古代ギリシャの代表的悲劇作家ソフォクレス —日本の高校生でもその名の暗記が強いられてのお受験勉強で求められるような古代ギリシャ、紀元前5世紀の著名悲劇作家ソフォクレス(代表作『オイディプス王』)— の手になる悲劇たる The Trachiniae (別呼称 Women of Trachis)の慷慨(要旨)として “ Deianira, the wife of Hercules, fears that she has lost her husband's love, and that it has been transferred to the beautiful captive Iole, whom he has brought back with him on his return in triumph from the storming of Oechalia. She bethinks her of a love-charm which she has long had among her treasures. It is the blood of Nessus, the Centaur, who, having offered her violence, and received his death-wound from Hercules in her defence, had perfidiously persuaded her that his blood would win back her husband's love. **The blood, being infected with the poison of the Lernsean Hydra, in which the arrows of Hercules were dipped, proves the deadly instrument of the Centaur's posthumous vengeance. Deianira sends a robe sprinkled with it as a gift to Hercules, who, having put on the robe to offer his triumphal sacrifice, expires in fiery torments.** ”と表記されている(いちいちもって訳は付さない)ことよりも窺い知れること、そして、その他、流布情報のチェックでもそうだろうと判じられるところとして[ヘラクレスが【ヒドラの毒】【ヘラクレス妻デイラネイアに対するケンタウロス・ネッソスによる計略】によって最期を迎えることになった]との筋立ての最古の材源はソフォクレスの特定悲劇に求めることができるものようである)



Hercules

kill with [Hydra's poison] (poisoned arrow)

Nessus

kill with [Hydra's poison] (Tunic of Nessus poisoned with dying Nessus's blood)

Hercules



"Dead" centauro Nessus killed "living" Hercules.

左は先にも挙げたところの妻となるデイラネイア (後に [間接正犯の道具] として用いられるとのことになりもした [嫉妬する者] を意味する名の女) を陵辱

しようとしたケンタウロス・ネッサスを成敗しようとするヘラクレスを彫ったルネサンス期彫像。

右はヘラクレスにヒドラの毒添付の矢で射られてまさに死に行くネッサスが今際の際に講じた復讐の一計に関わる毒入りシャツ (チューニック・オブ・ネッサスと呼ばれるもの) を描いた画となり、ルネサンス期の木版画として英文 Wikipedia [Shirt of Nessus] 項目に掲載されているものとなる。

ケンタウロス・ネッサスが

[「死に行く自分の体液には媚薬としての効果があるから愛が冷めれば、それを衣服に塗って用いるがいい」と(自身が彼女を陵辱せんとして逆に殺されることになったとのその状況下、側にいたとの) デイラネイアをたばかってヒドラの毒の矢毒が混入された自身の体液をヘラクレスが浴びる可能性がある契機] を造りだし、後に従者リカース経緯でデイラネイアからその下着がヘラクレスに送られ、ヘラクレスが苦悶の死を遂げることになるとのその運びのまさに最終局面直前のありようを上掲右の木版画は描いているものとなる (ネッサスやりようは死亡した後の [間接正犯の式] として非常に巧妙なものとなっている。 [自身の死因] を [自身の殺害者の時限性の死における死因] へと虚言・虚語にて即座に転化しているとの側面があるからである)。

(出典 (Source) 紹介の部 110 (2) はここまでとする)

ヘラクレスは上にて紹介のように [ケンタウロ・ネッソスによるヒドラの毒を利用した計略] によって苦悶の内に死んでいるのだが、さて、小説に見る [センチュリオン] (Centurion) という語句と [ケンタウロ] (Centauro: ケンタウロことチェンタウロはイタリア語でケンタウロスの男性形を指す語となる / ちなみに伊語 Italy でケンタウロス女性形は Centaura チェンタウラと表す) との語句を並べて見ると

[以下表記のこと]

が分かる —— (強くも断っておきたきこととして: ここではケンタウロスの英語表記 [Centaur セントール] を比較対象として使わずに Centauro を比較対象としている。その理由は (後の段で細かくも解説するが) そちら [ケンタウロ] (チェンタウロ) がブラックホール生成問題とも関わりうるとの固有名詞と現実の科学界で結びつけられてきたとの背景が存するからである) —— 。

Centurion との言葉は「語順込みにして」男性ケンタウロスを意味する単語 **Centauro** を構成する 8 字中、7 字を共有している (いいだろうか、ケンタウロスはケンタウロのアルファベット綴りは 8 字中 7 字を共通文字の登場順序も含めてセンチュリオンと共有しているとのことになっている。尚、「英語で顧慮するとしても」英語語句 Centaur セントールの 7 字中 6 字は語順込みに英語語句 Centurion と共有関係にあると摘示できもする)。

一致する部をカギ括弧 (「」) で囲めば、

「**Cent**」**ur**「**i**」**o**」n

「**Cent**」a「**ur**」**o**」

との形となっているわけである (英語表記 Centaur セントールならば「**Cent**」a「**ur**」)。

以上のスペリング、綴(つづ)りにあつての近接関係に加えて

[意味的近接関係]

もまた存在する。

その意味的近接関係とは

[ケンタウロスと [ヒドラの毒] (ヴェノム) の関わり合い]

に通ずるところのものとなる。

その点もつてして、

[ヘラクレスは Centauro [ケンタウロ] (ネッソス) の奸計によってヒドラの [毒] によって死んでいる]
(出典(Source) 紹介の部 110(2))

[小説『未来からのホットライン』では Centurion [センチュリオン] との秘匿コードを付されてのウィルスにての [毒] で作中世界に災禍がもたらされる] (出典(Source) 紹介の部 110)

とのことがそれぞれにある。

ゆえに [[毒物] による災厄] との共通性が観念できるというわけである (別段勿体ぶつて言うほどもないとの単純なことではあるが)。

また、直前直近までの指摘 — 【単語センチュリオンと単語ケンタウロには語順込みで文字数の大部分共有がみとめられるとの指摘】および【単語センチュリオンをもちだす小説の筋立てとヘラクレス伝承に見る代表的ケンタウロスのやりようは双方共に [毒] と結びついているとの指摘】— をなす必要「すら」そもそもない、[センチュリオンとケンタウロスは現実に接続している]との証跡の實在に関わるところでもつてしてそのように向きによってはとらえるかもしれないようなところとして以下にて呈示のこともがありもする。

女流神話研究家として著名なバーバラ・ウォーカー、彼女の大著である The Woman's Encyclopedia of Myths and Secrets (邦題)『神話・伝承事典 失われた女神たちの復権』にあつては次のような記述がなされている。

⇒(以下、アルファベット順辞典方式の著作である The Woman's Encyclopedia of Myths and Secrets における [Centaurs] の項目より引用なすとして)

“Centaurs: Greek horse-spirits derived from Hindu asvins and the man-horse wizards of central Asia. Centaurs were magic shape shifters, and teachers of the Hellenic gods. Their most familiar appearance was with the head and shoulders of a man and the body and legs of a horse. Their other name was Magnetes, "great ones." **They have been connected with Latin centuria, a company of 100 soldiers.** Perpetual rivals of the Centaurs were the Lapiths, "men-who-use-stone-weapons," a hint of their extreme antiquity.” (訳として)「ケンタウロスとはヒンドウーの Ashvins (注:リグ・ヴェーダに登場する馬の神) および中央アジアの半人半馬の魔法使いに由来しているギリシャの馬の精霊である。ケンタウロスらは魔法にて似姿を換えもするとの存在であり、また、ギリシャの神々の教師でもあった。その最もよく知られた形態は頭から肩にかけて人間、そして、四肢・身体が馬のそれであるとのものである。彼らの名はマグニートのそれ、すなわち、偉大なる者のそれであった。彼らケンタウロスはラテン語にあつてのセンチュリア(ケントウリア)、すなわち、100の兵士の一団(100人隊)と結びつけられてきた。ケンタウロスにとっての宿年の敵はラピス族、その起源の極めて古きことを推し量れる石の武器を使うとの人々であった」(訳付しての引用部はここまでとする)

以上のバーバラ・ウォーカーの The Woman's Encyclopedia of Myths and Secrets にあつての記述、その典拠は同著に記載されている出典(にまつわつての記号化されての)表記より見て、ロバート・グレイヴズの The Greek Myths 『ギリシャ神話』に依拠、求められもしている(と判じられる)。

にまつわつて筆者がそちらも読解、内容把握しているところとしてロバート・グレイヴズの The Greek Myths 『ギリシャ神話』原著には確かに次のような記載がなされている。

(次いで、以下、The Greek Myths 『ギリシャ神話』にあつての Lapiths And Centaurs [ラピス族とケンタウロス]の節よりの引用をなすとして)

“ 1. Both Lapiths and Centaurs claimed descent from Ixion, an oak-hero, and had a horse cult in common. They were primitive mountain tribes in Northern Greece, of whose ancient rivalry the Hellenes took advantage by allying themselves first with one, and then with the other. **Centaur and Lapith may be italic words: centuria, ‘war-band of one hundred’ and lapicidae, ‘psintchithpers’** ” (煩瑣なのでいちいちもって訳は付さない。下線添付部のみ着目されたい)。

その点、バーバラ・ウォーカー(の著述たる The Woman's Encyclopedia)の記載内容、そう、「ケンタウロスがローマのセンチュリア [百人隊] (Centurion [百人隊長]に率いられての Centuria[百人隊ケントウリア]) と結びつく」とのことまでを指摘している珍しき記載内容のソースが論客ロバート・グレイヴズ (Robert Graves) に求められているというのは「極めて遺憾・残念なこと」ではある。批判がましくも叩かれることが多いとの 20 世紀英国文人たるロバート・グレイヴズやりようについては本稿の指し示し事項に沿うところ「でも」まったく信用の置けぬ、unreliable であるとの物言いを同男 Robert Graves が目立つようになしもしている (記録的事実や文献的事実に依拠して「いない」、であるから、問題であるとの属人的理論を目立つように展開していた) とのこと本稿のよりもって従前の段で紛らわしい煙幕たりうる「目立っての」ロバート・グレイヴズ主張の(容易に外野から叩かれるだけの)欠陥性についてその欠缺(けんけつ、欠けるところ)を指摘・解説せざるをえなかったとの経緯がある。そう、それがゆえに同輩の人間存在に、

【覚悟の程 —「貴殿らは温かく育てられたのではなく家畜として煮られ食われるためだけに偽りによつてくるまれて育てられてきたのだ」とのことを指摘し、殺されることが分かつたうえでもなお、偽りに安んじ、魂の器質的奴隷として抵抗することもしないというのか、それとも、[人災としての終末]を回避すべくも出来る範囲で抗うつもりがあるのかとの覚悟の程である—】

を遺漏なくも問うとの[本稿の意義] (『無視される、あるいは、言論封殺されて消えるとのことになつてもそこからして終局的結果が易々と推し量れるとの効用はあろう』と考へながらも死命を賭してもものしているとの本稿、【無知なる者】の好奇心に奉仕するためにではなく[行動をしない結果]について諭して自身および種族の運命を望ましくは好転、そうではなくとも行く末を明確に判じきるとの観点で死命を賭してもものしているとの本稿の意義)の全うのために同男グレイヴズの同様のところでの目立つ主張の信用のおけなさまで指摘せざるをえなかったとの経緯がありもし、であるから、ロバート・グレイヴズを引き合いに出してのバーバラ・ウォーカーの言い分 —ここでの[ケンタウロスはセンチュリオン(100 人隊長)と結びつく]との言い分— は「ソースとしては弱い」と申し述べるのである(ただし自身の係累縁者を含めての死の結果さえ許容するとの空っぽさを伴つた者ないし空虚ならずとも極めて愚劣であるか欺瞞偽善をも是とする相応の類らに担がれる【宗教】などの虚偽とも平氣の平座で添い寝・同衾するような心性しか有しておらぬとの(似非)インテリ、ファウスト博士でもいいが、そういう奴原らにとってはロバート・グレイヴズ言いようとしてあたかも不磨の大典のように扱われることがあるようで、事実、日本では無批判に相応の紀伊國屋書店のような出版社が学界

大家の書籍であるように同男ロバート・グレイヴズの訳本を国内に供給してきたとの背景がある)。

が、とにかくも、バーバラ・ウォーカーやロバート・グレイヴズら目立つ筋よりの指摘がある —どこまで信に足りるかは折り紙をつけることはできないものの、とにかくもそうした指摘がある— とのことまでは摘示するとのことに足りると判じ、ここに同じくものことにまつわっての言及をなしていると断っておく。

(尚、ローマの百人隊センチリア(ケントウリア)の長たる Centurion については古代ローマの後裔たる東ローマ、ビザンツ帝国の時代に kentarch ケンタルクあるいは kentarchos ケンタルコス(κένταρχος)と呼ばれていたとも英文ウィキペディアにあって現行記載されていもする、Kazhdan, Alexander, ed. (1991). Oxford Dictionary of Byzantium. Oxford University Press. pp. 1120-1121.とのソース付きで英文 Wikipedia[Centurion]項目には現行記載されていもし、オクスフォード大学ビザンツ辞典とのそこでの明示出典の堅さ度合いから見て、おそらくバーバラ・ウォーカーやロバート・グレイヴズの物言い、「ケンタウロスとセンチリア百人隊が結びつく」との物言いは正しい —独創の賜物などではなく歴史的な事実に依拠している— と判じられもする(本稿筆者もかなり遡っての自身やりようを振り返って反省するところがあるのだが、彼女・彼が問題なのは[きちんとソースを呈示してくれて「いない」]ことにある)。そこから行き進んで、[センチリオン(百人隊隊長)は【ケンタルコス】転じての【ケンタウロス】と結びつく語である]との観点も本来的には[断じる]との式で申し述べてもいいことか、と「思えもする」ところではある —が、どうも引っかかる場所があり、ここでは慎重な語りをなしている—)

さて、ここまできたところで述べるが、では、そもそももってして何故、

【センチリオンとケンタウロスの結びつき】

について細々と言及・解説なしもしているのか。

同じくものことにまつわっての説明はさらに煮詰めもして後の段でなす所存だが、に関してはひとつに(他の要因もあるところながらひとつに)下にて表記の通りの事情がそこに「ある」からである。

(視点を「加速器によるブラックホール生成が先覚的に描かれている」との小説『未来からのホットライン』(秘匿コード・センチリオンを登場させている作品)から現実の LHC 実験の方に向けてのこととして)

「LHC 実験の関係者ら、彼らは【ATLAS】(アトラスは黄金の林檎の在所を知る巨人ともなる)との名前を冠する検出器を用いてのブラックホール生成・検知をも「後付けで」【LHC 実験のひとつの望ましき結果】と主張するに至ったとのことがある (:市井外部の運動家の突発的指摘に対して、当初、[LHC に至るまでの今後実現する加速器ではブラックホール生成はありえない]と発表されていた(1999 年状況)とのありようから一転、21 世紀初頭より[「安全な」ブラックホールの生成は新規理論動向よりありうると考えられるようになった]と主張されるに至った —**出典(Source)紹介の部 2**などを参照のこと— との流れの中で従前の加速器実験の大義、例えば、[ヒッグス粒子の探索][対称性理論の検証]との額面上の主たる大義に加えもして「(安全な)ブラックホールが生成されれば万物の理論の候補を煮詰めるのに役立つ」などとの言いよう

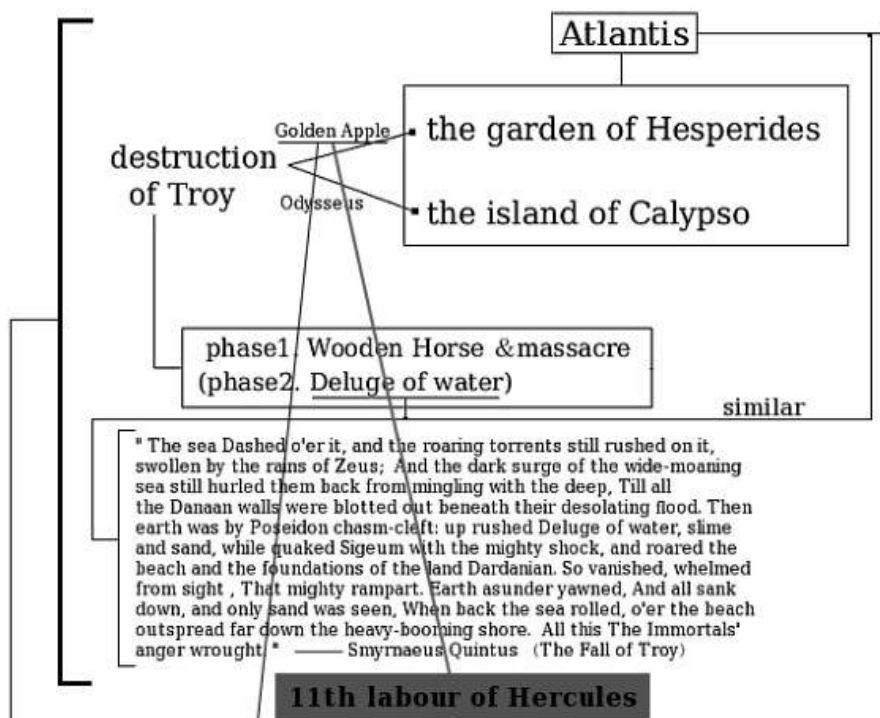
「も」が新たになされるとのことになった — 出典(Source) 紹介の部 81 / 安全ではないブラックホールの生成はリスクだが、安全なブラックホールの生成は望ましいとの(関係筋言いよの伝に見る)論理構造である—)。

そうした LHC 実験、【ATLANTIS】と呼称されるイベント・ディスプレイ・ツールを用いてブラックホール生成状況をモニターせんとしてきた (出典(Source) 紹介の部 35 から出典(Source) 紹介の部 36(3)を参照のこと) とのものでもある同 LHC 実験は【黄金の林檎(の園)】(ヘラクレス第 11 功業に登場するヘスペリデスの黄金の林檎の園はアトランティスと結びつけられてきたとの背景ある神話上の存在である)、【アトラス】(ヘラクレス第 11 功業に登場する巨人アトラスは黄金の林檎の在所を把握するとの設定の存在である) との絡みで【ヘラクレスの 11 番目の功業】と多重的に通じている実験となっているとのことを本稿にて指摘してきた実験となる — (出典(Source) 紹介の部 41 を包摂する解説部で「古の」アトランティスに史的に同一視されてきた場が「黄金の林檎の園」となっているとの理由につき言及している) — 。

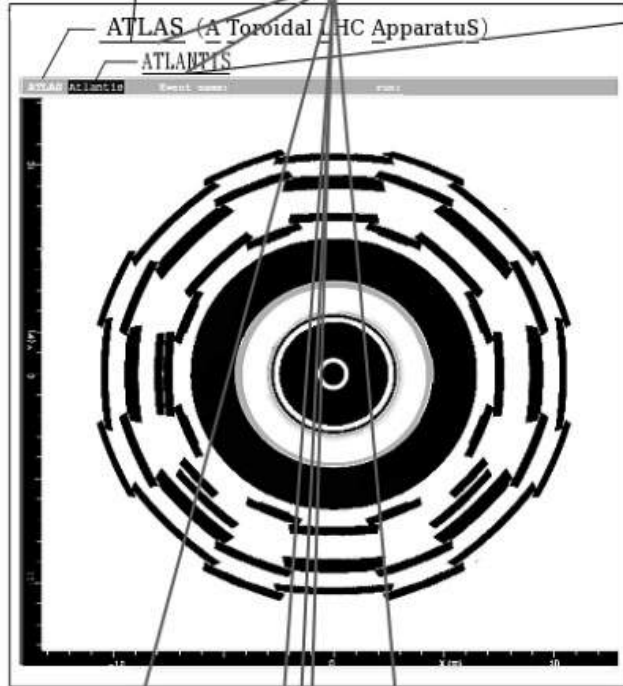
といった LHC 実験 — 小説 Thrice Upon a Time (邦題)『未来からのホットライン』がそれにまつわる先覚的言及小説となっているとするところの所以(ゆえん)について細々ところまでにて解説してきたとの実験 — と接合するようになさしめられている、【ヘラクレス 11 功業】

というものからして【ヒドラの毒とケンタウロス(Centauro)の関係性】が「濃厚に」影を落としているとのことがある。神話にまつわる文献的事実・記録的事実の問題としてそうしたことが指摘出来るようになって「いる」のである(にまつわってはすぐに細かくも解説する) 」

(本稿にては LHC 実験がいかようにして「トロイア崩落」および「古のアトランティス」と関わるかの図解をなしてきたが、それはヘラクレスの 11 番目の功業の内容と関わり合っているところの図解ともなっていた。下にてはその絡みの図解部に多少、改訂を加えてヘラクレス 11 功業との関わり合いをより強く摘示すべくもの図解をなしておく)



11th labour of Hercules



[micro black hole generating event] detection

[トロイアとアトランティスの結びつき(1)]
 トロイアの崩壊は黄金の林檎によってもたらされたとも述べることもできる（[出典(Source)紹介の部39]）。その黄金の林檎が実るヘスペリデスの園が位置描写概要などよりアトランティスと結びつけられてきたとこのことがある（[出典(Source)紹介の部41]）。
 また、トロイの滅亡は木馬の計略によって完結したと伝わるが、木馬の計略を考案したと伝わるオデュッセウスがトロイア崩壊後に流浪したさまを描く叙事詩『オデュッセイア』では[カリュプソの島]というものが渦潮にクルーと船を呑まれたオデュッセウス漂着先として登場を見ており、そのカリュプソの島、巨人アトラスの娘たる神格の住まう島からしてアトランティスと結びつけられてきた（e.g. アイザック・ニュートンの特定古典内での物言いなど）とこのことがある（[出典(Source)紹介の部43]）。

[トロイアとアトランティスの結びつき(2)]
 黄金の林檎を巡る女神らの美人コンテストに端を発して勃発したトロイア戦争。その終結をもたらしたのは木製の馬の計略であると伝承は語るが、今日、あまり知られていない古典ではそうやって滅びたトロイアにはさらなる破壊が及んだとの記述が含まれている。ヌミルナのクイントスに由来する『トロイア戦記』（英文タイトル the fall of Troy）に認められるところがそうで、トロイアを木製の馬で内側から破壊させたギリシャ勢も巻き添えに、トロイアの存在が洪水にて完全抹消を見たとの伝承もよく知られていないところながら伝わっているのである（[出典(Source)紹介の部44-3]）。その点、[ギリシャ勢との戦闘に付随しての洪水による破壊]とのシチュエーションはアトランティスの崩壊と同一のものである（[出典(Source)紹介の部44-4]）に続いての段にてのプラトン著作よりの引用を参照のこと。

[LHC実験とアトランティスの関係性について]
 どういう料簡でなのか、LHC実験はそのブラックホール生成可能性が現実的可能性をもって語られたとの始原期（LHC実験のブラックホール生成可能性論議を巡る経緯については本稿にての[出典(Source)紹介の部1]から[出典(Source)紹介の部5]を包摂する解説部を参照されたい）より前に遡る折柄、LHC計画がLEP加速器に接ぎ木しての加速器設置案としてCERNサイトで「正式に」ゴーサインを出されることになった1994年より前よりATLASとの名前と結びつけられているとこのことがある（本稿の[出典(Source)紹介の部36(2)]で解説しているように1992年からのことである）。
 そこに見るアトラスという名称はヘラクレスの功業に登場してきた伝説の天を支える巨人の名であるわけだが、同巨人アトラス、
 [トロイア滅亡の原因ともなっている黄金の林檎]
 がたわわに実る果樹園の所在地を把握していると伝わっている巨人にして、それぞれ別個に、
 [古のアトランティス]
 に比定される[黄金の林檎の園][カリュプソの島]、それらの地の代表的住人たるヘスペリデスおよびカリュプソという女の神格らの父親とされる存在でもある（[出典(Source)紹介の部39]以降の一連の解説部にて文献的論拠を明示していることである）。そうしたことが指摘できる時点でCERNのLHC実験はアトランティスと接合していると述べられる。
 のみならず、LHC実験ではATLANPISとの名前が付けられているEvent Displayツールでブラックホール生成イベントを観測する可能性が実験関係者によって「肯定的に」（科学的知見発展に資する安全なブラックホールの生成・観測との文脈で）直伝されているとこのことがある（[出典(Source)紹介の部35]）。従って、ATLASとの名称それ自体に留まらずATLANPISとの名称も用いているとこのことLHCとアトランティスの関係はいよいよ色濃くも見えるとこのことがある。

尚、[トロイア崩壊]を木馬の計略で演出したオデュッセウスはこゝら[カリュプソの島]（アトランティスにも比定されてきた場）に[渦潮の怪物カリュプティス]に飲み込まれていざなわれたと伝承は語る（本稿にての[出典(Source)紹介の部44-2]を参照のこと）。そこに見る渦潮の怪物Charybdisの名をLHC実験はブラックホール生成に対する分析をなすためのツール、Black hole Event Generator (software libraries) に冠してもし、用いているとこのこともが現実にある（その伝でのこと、イベント・ジェネレーターとしてのCHARYBDISについては本稿の[出典(Source)紹介の部46]にて出典紹介している）。

ここで述べるが、ヘラクレスはその[11番目の功業]にて巨人アトラスの兄弟にあたるタイタンのプロメテウス 一人類に火を授けた存在— を[生きながら驚に臓物をついばまれるとの獄]より解放したとされる。の折、ヘラクレスはそのプロメテウス解放を[不死のケンタウロス・ケイロンの死]で贖(あがな)った(あるいはヘラクレスが仲介者となってプロメテウス解放の権限を有しているゼウス神にケンタウロスの[不死=命]を提供した)と伝承は語り伝えているのである。

その経緯はこうである。

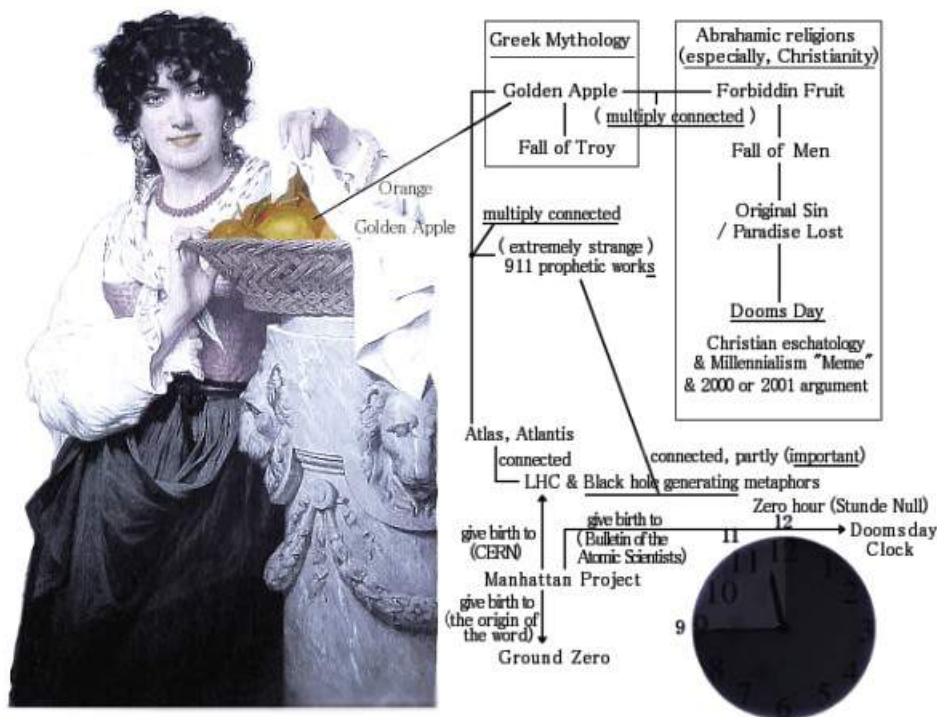
[ヘラクレスを養育した師匠筋には([ヘラクレスが殺傷した怪物たるヒドラの毒] による最期を進呈したケンタウロスのネッソス —**出典(Source)紹介の部 110(2)**— とはまた別の存在としての) 高名なケンタウロスとしてのケイロンがいた。彼ケイロンはヘラクレスと他のケンタウロス族との争いに巻き込まれ、ヘラクレスが[(ヘラクレス自身が退治したヒドラの毒を塗りたくって戦いに用いていた) 弓矢]をヘラクレスより誤射されて悶絶して苦しみ続けることになった。というもケイロンにはかねてより神々より[不死]が与えられており、それがため、[ヒドラの毒]によってヘラクレス師匠たるケンタウロス・ケイロンは[死ねない苦しみ]を味わうことになったとされるのである。その後、ヘラクレスは自身に課せられた11番目の功業の折にてそうした師ケンタウロ・ケイロンを苦しみから解放すると同時に、[プロメテウスのゼウス神(プロメテウスを人類に火を与えた罪を問うかたちで臓物を生きながら驚についばまれるとの生き地獄たる獄に繋いでいたとのギリシャ神話体系にあっての主催神ゼウス)に対する罪の贖(あがな)い]をなすために[ケイロンの不死]を(プロメテウス解放の)対価としてゼウス神に差し出した。結果、ヘラクレスは毒に苦しみ続ける定めを負った師たるケイロンに[死]の安息を与えつつ、ケイロンから取り上げた[不死]の対価にプロメテウスをその獄より解放することに成功し、そして、プロメテウスより「**【黄金の林檎 —ヘラクレス第11功業の取得目標物—】**を取得するには巨人アトラスの助力を請うのが良い」との助言を得ることになった](先述のようにヘラクレスはケンタウロス・ネッソスの奸計によってヒドラの毒によって苦悶の死を迎えることになったと伝わっている存在であるわけだが、そうもしたヘラクレス、同じくもの境遇をそれ以前に自身の師たるケンタウロス・ケイロン(Chiron)にもたらしてもいると伝わっているのである)

上の枠内部(の後半)にて表記のことにまつわっての典拠紹介を続いてなすこととする。

出典(Source)紹介の部 110(3)

SOURCE

110(3)



ここ出典 (Source) 紹介の部 110(3) にあつては

[ヘラクレスは自身の過失からヒドラの毒に苦しみ続ける状況に陥った師たるケンタウロス・ケイロンから [不死] を取り上げて彼に [死の安息] を与えつつ、その取り上げた [不死] を対価にプロメテウスをその獄より解放することを成し遂げ、そのうえでプロメテウスより「【黄金の林檎 —ヘラクレス第 11 功業の取得目標物—】を取得するには巨人アトラスの助力を請うのが良い」との助言を得ることになった]

このことの典拠を挙げることにする。

まずは基本的なところとしてオンライン上より即時確認可能であるとのウィキペディアの記述を引くこととする。

(直下、英文 Wikipedia[Chiron] (ケイロン) 項目にての [Death] (その死) の節、その現行にての記載内容よりの引用をなすとして)

His nobility is further reflected in the story of his death, as Prometheus sacrificed his life, allowing mankind to obtain the use of fire. Being the son of Cronus, a Titan, he was immortal and so could not die. So it was left to Heracles to arrange a bargain with Zeus to exchange Chiron's immortality for the life of Prometheus, who had been chained to a rock and left to die for his transgressions.[9] Chiron had been poisoned with an arrow belonging to Heracles that had been treated with the blood of the Hydra, or, in other versions, poison that Chiron had given

to the hero when he had been under the honorable centaur's tutelage.

(訳として)

「ケイロンという存在の高貴さは彼の死に様、プロメウスが人類に火の使用を許すがために自己を犠牲にしたようなその死に様にも現われている。タイタンのクロノスの子としてケイロンは不死者であり、死ぬことができなかった。それがゆえに、ヘラクレスは[ケイロンの不死](の差し出し)でもってその罪がゆえに岩に鎖でつながれていたプロメテウスの生命を贖(あがな)うとの交渉がゼウス神となせるとのことになった。ケイロンは[ヒドラの血を添加されたヘラクレスの矢](の誤射による命中)で毒されており、あるいは、異伝では[ケイロンが個人的指導でかつてヘラクレスに教え込んだ毒が塗りたくられていたとの矢](の誤射による命中)で毒されていたのである(不死がゆえの苦しみを味わい続ける状況となっていた)」

(訳を付しての引用部はここまでとする —※—)

(※以上、現行の英文 Wikipedia 記述の出典としては本稿でもその記述を度々引いてきたところの偽アポロドーロスこと Pseudo-Apollodorus の手になるギリシャ神話総覧書、ビブリオテーカーの記述が[9] ↑ Pseudo-Apollodorus, Bibliothek, ii.5.4.とのかたちで挙げられている)

他面、和文ウィキペディア[ケイローン]項目にては

(直下、引用なすところとして)

“ヘーラクレースとケンタウロスたちとの争いに巻き込まれ、ヘーラクレースの放った毒矢が誤ってケイローンの膝に命中し、不死身のケイローンは苦痛から逃れるために、ゼウスに頼んで不死身の能力をプロメテウスに譲り、死を選んだ(その死を惜しんだゼウスはケイローンの姿を星にかたどり、射手座にしたという)”

(引用部はここまでとする)

との記載がなされている。

以上に加えてここではビブリオテーカー(ローマ期ギリシャ人著述家アポロドーロスによるギリシャ神話要覧書)、その岩波書店より出されている版 —(当方所持の重版に重版が重ねられての第61刷の文庫版)—よりの該当部引用を下にてなしておくこととする。

(直下、岩波文庫版アポロドーロス『ギリシャ神話』にての[ヘラクレスの11番目の功業]を扱った箇所、p.99-p.101の内容よりの掻い摘まんでの抜粋として)

エウルステウスは…(中略)…**第一一番目の仕事としてヘスペリスたちから黄金の林檎を持って来るように命じた。**これは一部の人々の言うようにリビアにあるのではなく、ヒュペルボレアス人の国の中のアトラスの上にあったのである。それを大地(ゲー)がヘーラーと結婚したゼウスに与えたのである。テューポーンとエキドナから生まれた不死の百頭竜がその番をしていた。それとともにヘスペリスたち、すわなちアイグレイ、エリュティア、ヘスペリアー、アレトウーサが番をしていた。…(中略)…アラビアに沿って進んでいる時にティートーノスの子エーマティオンを殺した。そして、リビアを通過して、向い側の大陸に渡り、プロメテウスの肝臓を食っている、エキドナとテューポーンから生まれた鷲をカウカサス山上で射落とした。**そしてオリーブの縛めを自ら選んだ後、プロメテウスを解き放ち、ゼウスに彼の代わりに不死でありながら死を欲したケイローンを**

呈した。ヒュペルボレアスの地のアトラスの所に来た時に、プロメテウスがヘーラクレスに自分で林檎を取りに行かないで、アトラスの蒼穹を引き上げて、彼を遣わせと言ったので、それに従って蒼穹を引き上げた。アトラスはヘスペリスたちから三つの林檎をとって来て、ヘーラクレスの所へやって来た(以下略)

(日本国内書店にて広くも流通している訳書よりの引用はここまでとしておく)

以上は高津春繁元東京大学教授(故人)の手によって訳が起こされた岩波文庫版の(廉価にて市中に流通している)アポロドーロス『ギリシャ神話』を軽く手繰るだけで労せず確認できる記述とはなるが、オンライン上にて公開されている、すなわち、オンライン上より確認できるとの同著英訳版 — Internet archive のサイトにて公開されておりジェイムズ・フレイザーが訳を付しているとの THE LIBRARY (The Library とは Bibliothek の英文呼称である) — の問題となる記述も抜粋しておく。

(直下、Internet archive にて公開されている THE LIBRARY にての問題となる部位に付されたジェイムズ・フレイザーのコメントの抜粋として)

In the present passage of Apollodorus, if the text is correct, Hercules, as the deliverer of Prometheus, is obliged to bind himself vicariously for the prisoner whom he has released ; and he chooses to do so with his favourite olive.

Similarly he has to find a substitute to die instead of Prometheus, and he discovers the substitute in Chiron.

(拙訳として)

「表記の部のアポロドーロスの文章について、もし現存しているところの訳の底本となったテキストが正しきものであるのならば、ヘラクレスは [プロメテウスの救済者] として彼が解放した囚人のために我が身のことにように自身に束縛を及ぼすことを強いられたことになる。彼ヘラクレスは自身を好んでいたオリーブで自らを縛った (訳注: 先の岩波文庫版よりの抜粋部にて “リビアを通過して、向い側の大陸に渡り、プロメテウスの肝臓を食っている、エキドナとテューポーンから生まれた鷲をカウカサス山上で射落とす。そしてオリーブの縛めを自ら選んだ後、プロメテウスを解き放ち、ゼウスに彼の代わりに不死でありながら死を欲したケイロンを呈した” と記載されているが、「そしてオリーブの縛めを自ら選んだ後、」と記載されている部位のことをここでフレイザー記述は指している)。そして、(そうもした中)彼はプロメテウスの代りに死ぬとの [代(か)えの存在] を発見せねばならぬことになり、その代わりの存在を彼ヘラクレスは (かねてより苦悶の状況に陥っていた)ケイロンに見出したのだ」

(訳を付しての引用部はここまでとしておく)

先に解説したようにケンタウロス・ネッソスの奸計によって最後は自身が退治したヒドラの毒で悶絶死することになったヘラクレス、同ヘラクレスがそういった自身の最期につき想像することだにしていなかった折のこととして伝承が語り継ぐヘラクレス 11 番目の功業の段階からして

【ケンタウロスとヒドラの毒】

との要素が ([プロメテウスの解放]との絡みで)際立ってのヘラクレス伝承の目立ってのモチーフとなっている(とのことを以上引用部にて摘示した)。

(出典(Source)紹介の部 110(3)は以上とする)

ここまで摘示してきたことより述べられることはこうである。

「ヘラクレス末期ありようだけではなく【ヘラクレス第 11 番目の功業 —黄金の林檎と巨人アトラスと関わっているところの功業— を巡る経緯】にも【ケンタウロス】と【ヒドラの毒】が関わっており、それは

[ヘラクレスの師匠筋たるケンタウロ・ケイロンのヒドラの毒による堪えがたい苦悶] ⇒ (苦しみよりの解放と贖(あがな)いのためのヘラクレスの挙) ⇒ [プロメテウス解放] ⇒ [巨人アトラスを経由しての [黄金の林檎] の取得の奏功]

とのかたちで流れを示せることである。につき、本稿ではそこに見る [巨人アトラスを経由しての黄金の林檎の取得の奏功] との部よりさらに矢印(⇒)を描画、

[巨人アトラスを経由しての [黄金の林檎] の取得の奏功] ⇒ [CERN の LHC 実験にての ATLAS 実験(伝承上、黄金の林檎と接続するだけの背景がある ATLANTIS の名を冠するイベント・ディスプレイ・ツールを用いてのブラックホール探索も同実験範疇に入る)のことを想起させるエピソード]

の方向に至るだけのこともまたあるとのことを重んじている。

であるから、(問題となるところは他にもあり、それについてはこれより順次呈示していく所存だが)、

[加速器付属型レーザー核融合炉にてブラックホールが生成される小説 *Thrice Upon a Time* 『未来からのホットライン』にてのその後の展開で [ケンタウロス(Centauro)] との語にての八字中、七字をも順序込みに共有する [センチュリオン(Centuriion)] に由来する(人工の)毒での災禍の具現化が描かれている]

とのことについて、

[[ケンタウロス(CENTAURO)] との語にあつての八字中、七字をも順序込みに共有するとのセンチュリオン(CENTURION)との語、同語センチュリオンによる [毒にての災禍] からヘラクレスに苦痛に塗(まみ)れた最期を進呈した [ケンタウロスによる毒による災禍] を【毒】つながりで想起させる]

との話にとどまらず、

[【加速器 LHC によるブラックホール生成可能性】 —それは 2009 年年末実験始動との式も含めて小説『未来からのホットライン』筋立てとの接続性を当然に想起させる(とのこと、先述なしてきた)可能性である— と【ヘラクレス 11 功業】と【ケンタウロスの毒の物語】の繋がり合い]

のこともが想起されるようになっている」

(:再度もってして述べるが、この話には「他にも」付して指摘すべきことら(これより摘示しもするとのことら)があり、もってして、【予見小説『未来のホットライン』とヘラクレス 12 功業(の後の流れ)の —現行の加速器によるブラックホール生成問題にまつわっての命名規則に通ずる— 結びつき】が固くもそうなるようになっている(そうなるように仕向けられている)ものであると察せられるから問題となるものである)

同じくものことにまつわって極めて問題になるとのことに筆を割くとの段階にはまだ入っていないのだが、ここまで書いてきたことに加えて、
「まずもっての話の端緒としての取りあえずも、の話」
を続ければ、次のようなことが言えるとのこと「も」またある。

(それ単体で述べれば、[こじつけがましい far-fetched との側面が際立つ]、あるいは、
[確証バイアス confirmation bias (特定の予断偏見に基づいてものを考えていくうちにそれに適合する情報のみばかりを選択して予断偏見の陥穽・ど壺にますますもって嵌まっていくとのよくある思考の罠) に陥っている類か?と疑われもするである]のような申しようながらもところとして)

「[Centurion] (問題小説で人工衛星の毒と結びつけられていたローマの百人隊長センチュリオンに由来する秘匿コード)と [Chiron] (ヘラクレスのヒドラの毒矢の誤射のために悶絶してプロメテウスの解放によって救いとしての死を得たとのケンタウロス、ケイロンの英文表記 Chiron) の両者綴りにあつて「も」共通性が多少見受けられる。

Chiron(ケイロン)という6字にて綴られる単語のうち、6字中5字は 一語順には若干違いが出るのだが— Centurion という語句の中に含まれているということがある。

一致につき鉤括弧 (「」) で囲めば、

「C」entu「r」「i」「on」

「C」h「i」「r」「on」

とのかたちにて、である (※) 」

(※筆者としては

「上のようなことに言及しなくとも何ら話の流れは変わることはない。[ブラックホール暴走を際立っての先覚性でもって描く問題小説にあつてのケンタウロス関連事物の意図的かつ隠喩的な使用]を示唆するものとしての重要な材料は[他のところ](続けて後述するところ)にこそある」

との観点から表記のこと —センチュリオンの英文綴りとケイロン(の英文綴り Chiron)の加えもしての近接性— に言及する必要を何ら感じて「いない」。といった中で敢えてもの言及をなしていること、お含みいただきたい。

に関しては、

「その他、重みをもった判断材料 —後述— があるがためにここでの話とてそれと複合顧慮すれば、far-fetched [こじつけがましい] とのものにはならなからう、また、確証バイアス (特定の予断偏見に基づいてものを考えていくうちにそれに適合する情報のみばかりを選択して予断偏見の陥穽・ど壺にますますもって嵌まっていくとの思考の罠) の誹(そし)りを受けることもなからう」

との枕詞を付しての性質の話として言及する意味がある、と考へての敢えてもの言及をなしているのである)

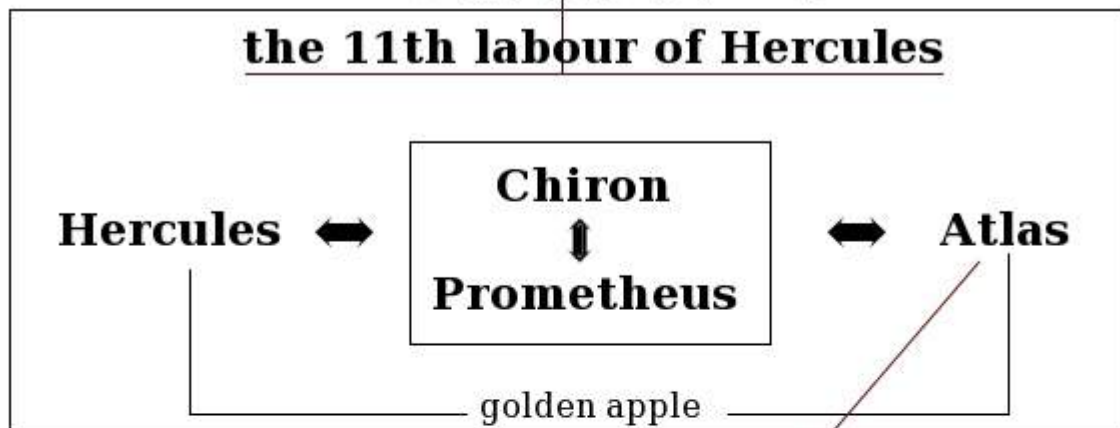
(【取りあえずもながらも皮相的な話】としてながら、「毒と結びつく」ケンタウロス英文綴りと8字中7字を順序込みにて共有しているとの「毒と結びつく」センチュリオン英文綴りの話から申し述べられることを下にまとめておく)

Thrice Upon a Time (1980)

[ウイルス]も[毒の鐵(やじり)]も人を殺す[毒物]との要素を共有するものである。

the biohazard caused by genetically manipulated virus

『スライス・アポン・ア・タイム』ではセンチュリオンというコードネームがブラックホールに次ぐ脅威、人工ウイルス流出に対して振られている。



[加速器によるブラックホール生成]にまつわる際立つての先覚的言及小説 (20年後に至るまで科学的に主張・肯定されることではなかった加速器のブラックホール人為生成につき、後に科学的に主張されることになったブラックホール生成個数や後に主張されることになった安全性論拠の欺瞞性にまで言及しているとの小説)であることを本稿にて詳述してきた ([出典(Source)紹介の部1] から [出典(Source)紹介の部5] を包摂する部にて詳述してきた)との Thrice Upon a Time (邦題『未来からのホットライン』)となるが、同作と[ブラックホール生成・検出問題]で接合しているのが超巨大加速器LHCである。LHCに関しては2001年以降、その検出器ATLASでブラックホールを検知しようとの理論が提唱されるに至っている (詳しくは本稿にての [出典(Source)紹介の部2] 及び [出典(Source)紹介の部35] を参照のこと)。さて、ATLASとはヘラクレスが(ケンタウロス・ケイロンの犠牲を対価に解放されたとの)[人類に[火]を与えたプロメテウス]によってヘラクレスに対して「アトラスは黄金の林檎を知る存在であるから黄金の林檎を得るためには彼と掛け合う必要がある」との提案がなされた伝説の巨人の名ともなる(本稿 [出典(Source)紹介の部39] および [出典(Source)紹介の部110(3)]にて伝承原典を第三者後追いでできるかたちで原文引用)。以上から[アトラス]を介してもBlack holeとのつながりが想起されることになる。

(※尚、百人隊長センチュリオンが長を努めていた[ローマの百人隊]がラテン語の centum [100] から派生した語である [ケントウリア] と呼ばれるものとなっており、その [ケントウリア] Centuria などが英語のセンチュリー Century (一世紀;100年) と語義・語感を一なるものとしているなどとのことは幅広くも知られているし語られていることだと伺い知れもすることなのだが、百人隊長センチュリオンが[ケンタウロス]と結びつくなどとの言いようはほと

んど聞かれないとの感がある（少なくとも筆者がオンライン上の情報を現行にて煮詰めている限りはそうであった／例外は英文ウィキペディアの百人隊センチリア(ケントウリア)をケンタルクとの語表記と結びつけているビザンツ時代の用例紹介など). であるから、一実にもってくども繰り返すが— [ケンタウロス] と [センチリオン] の語源にまつわる接続性の一部指摘 (先述のバーバラ・ウォーカー指摘やその元となっていると思しきロバート・グレイヴズのセンチリオンの由来はケンタウロスにありとの指摘／謬見の類かもしれない) には重きを置かず、ここにては [ケンタウロ] と (小説に見る) [センチリオン] のつながりあいについて [語句「形状」の際立つての近接性] や [対象小説を媒介にしての意味論上のつながり] に重きを置いての話をなしている、そのように再言しておく)

次いで、予見小説作品 **Thrice Upon a Time** (邦題)『未来からのホットライン』(原著初出 1980 年) と問題となる関係性との確たる接点を論ずるための 1. から 3. と振っての部の 2. と振っての部に入ることとする。

2.

直上の段にて解説していること、[ケンタウロス・ネツソと毒の関係] にて [センチリオンと語順込みに 8 字中 7 字を共有するケンタウロ] のことが [ヘラクレス功業伝承] との兼ね合いで意味性を有してくる (そこにあっては先述のように **【LHC とつながりあるアトラス登場の第 11 功業】** と **【ヘラクレス伝承とケンタウロと毒の連関】** の間の接続性が問題になる) とのことだけでもってして

[(**【ブラックホール生成による人類破滅】** に続いての **【センチリオンと紐付けられての人造ウィルス禍】** が描かれる作品たる) 小説『未来からのホットライン』とヘラクレス功業伝承が結びついている]

と強調しているのではない。

(真に問題なのはここ 2. の段ではなく、さらに後の段、3. と分けしての部にて述べるようなことがあることなのだが) 次のようなこともおなじくものことにまつわって問題となる要素としてある。

作家ジェイムズ・ホーガンの **Thrice Upon a Time** (邦題)『未来からのホットライン』(1980) にては

[センチリオンとの秘匿コードが振られるに至った人工衛星よりのウィルスの流出問題が **【ペルセウス座流星群とワンセットの隕石の襲来】** と結びつけられている]

とのことがある (そういう隕石による被害態様が実際にあるのか、科学的至当さの問題は抜きに、『未来からのホットライン』ではペルセウス座流星群と [人工衛星よりのウィルス流出につながった人工衛星破損および落下] (ブラックホールによる人類滅亡を過去改変で阻止した後に人間に襲いかかった災厄の因) が結びつけられている)。

表記のこと — 過去改変を主要テーマとする作品 **Thrice Upon a Time** (邦題)『未来からのホットライン』(1980) で人造ウィルスの流出問題がペルセウス座流星群とが結びつけられるとの式での作品設定

がなされているとのこと— が何故、問題になるのかの解説に先んじて、取りあえずもは同じくものが『未来からのホットライン』にみとめられることの典拠紹介をなすことから始める。

出典 (Source) 紹介の部 110(4)

THRICE 110(4)

(coordinates) 38.87099° N
 77.05596° W

setting American Airlines Flight 77
(Boeing 7x7 Series)

'ugly' **Book of Revelation** filled with [number 7]
7 stars, 7 lampstands, 7 churches, 7 seals,
lamb having 7 horns, 7 angels, 7 trumpets,
7 thunders, 7 visions, 7 bowls, 7 plagues,
7 words, 7 headed dragon

(Greek $\text{Ἀποκάλυψις Ἰωάννου}$, **Apocalypsis Ioannou**)
means 'un-covering'

Doomsday Clock
(Last) Judgement Day
for religious people

Collapse of 1 WTC - 7 WTC
and Boeing 7x7 Series

7-7 London bombings (2005)

ここ出典 (Source) 紹介の部 110(4) にあっては

[作家ジェームズ・ホーガンの **Thrice Upon a Time** (邦題)『未来からのホットライン』(1980) にあってはセンチュリオンとの秘匿コードが振られるに至った人工衛星よりのウィルスの流出問題が【ペルセウス座流星群とワンセットの隕石の襲来】と結びつけられている]

とのことの典拠を挙げることにする。

その点、先立って引用した英文ウィキペディアにあっての **Thrice Upon a Time** 『未来からのホットライン』粗筋紹介部にあっては

(以下、Wikipedia [**Thrice Upon a Time**] 項目現行記述内容よりの「再度の」引用をなすとして)

In August 2009, the satellite passed right through the path of the Perseids meteor shower, and it was hit by a meteor. It broke up and disintegrated into the Earth's atmosphere. After the breakup and fallout, to prevent public panic, the entire effort was tightly classified and codenamed Centurion.「2009年8月のこと、ペルセウス座流星群の通過線上を同じくもの人工衛星が横切った折、それは隕石による打撃を受けることになった。人工衛星の崩壊・それに続く墜落の後、公衆のパニックを防ぐため、その件に関するすべてのことは[センチュリオン]とのコードネームで呼称されることになった」

(以上、訳を付しての端的な引用部とした)

との部位が上記のこと 一小説『未来からのホットライン』作中において【センチュリオンとの秘匿コードを振られた人造ウイルス禍】が【ペルセウス座流星群】と結びつけられているとのこと— を示しての部位となるわけではあるが、書店にて流通している邦訳版、筆者も手元に置いているそちらよりの引用も下になしておくこととする。

(以下、一初出としての原文引用として— 書店で現在流通を見ている『未来からのホットライン』(当方手元にあるところの2011年12月16日刊行の第17版文庫版の隔絶環境にあるウイルス研究人工衛星が地上に落下したことがやりとりされての部位)のp.372からp.373より掻い摘まんでの原文引用をなすとして)

「この研究は、どうしても必要だった。潜在的な利益が見送るには大きすぎる—
—いくつかの病気の制圧だけではなく、DNA操作によってあらゆることが可能になる…(中略)…計画のすべてを完全に地球の表面から離して、特別設計の宇宙実験室で行なうという決定がくだされた。これは究極的な隔離策であると考えられた。計画は秘密のうちに承認され、これを合法的なものに見せるため、小さな天体観測所と研究室がつけ加えられた。発表されたのはこの部分だけで、それがQX-三七の名で知られているわけだよ」
カートランドは肩をすくめ、足をとめると、むっちりと暖炉に目を落とした。
「あとは知ってのとおりさ」
「ペルセウス座流星群か何かでしたね？」
とマードック。
「そう、毎年八月十日前後に地球の軌道と交差する隕石流だ……おそらく、こわれた彗星の残骸だろう。そもそもQX-三七ほど小さなものが、大き目の宇宙塵はおろか、何かに衝突する可能性があろうとは、誰も想像すらしていなかった。しかし……確率はゼロじゃなかったんだよ」カートランドは首をふり、ため息をついた。

(国内で流通している文庫版訳書よりの掻い摘まんでの引用部はここまでとしておく)

([出典\(Source\)紹介の部110\(4\)](#)はここまでとする)

さて、本稿の先の段で言及していたことと少なからず重複することなのだが、

「ペルセウス座流星群のそもそもの由来になっているペルセウス座はヘラクレスの曾祖父にあたるペルセウスの名前に由来し、そのペルセウスがメデューサ退治の英雄になっている—

方でヘラクレスはメデューサのように蛇と結びつく怪物ら —多く蛇女エキドナの眷属— の退治の英雄となっている」

とことが「神話通には易くも納得なせるところの言い伝えの問題」としてある。

ヘラクレスとペルセウスが累代累世を経ての蛇の眷族退治の英雄であるとのことについての出典として（**出典(Source)紹介の部 63(4)**とほぼ同内容のことを繰り返して言及するとして）

【ヘラクレスとペルセウスの関係性】については本稿の先の段にでも問題視していたとのことだが、ここにて再度の説明を —ほぼ同一のものとして本稿の先の内容を繰り返すとの式でながら— なしておく。

[[ペルセウス]が[メデューサ退治]の英雄であることについて]

⇒

ペルセウスが「鏡のように磨かれたアテナの楯」を用いてゴルゴン姉妹のメデューサを討伐したことはあまりにも有名な神話上のエピソードである。については、ギリシャ古典を紐解かなくとも（現行の記述を見る限り）和文および英文のウィキペディア「ペルセウス」項目に載せられている記述を読まれるだけで十分であろうと述べておく。

[[ヘラクレス]が[ペルセウス]の子孫である（曾孫と主には定置されている）ことについて]

⇒

ヘラクレスがペルセウスの子孫であることについてもよく知られたこと、そういう「設定」が神話にて採用されていることは文献にて遺されている争いのないことなので、ウィキペディア程度の媒体を確認されるだけでいいだろうと述べておく（:たとえば、和文ウィキペディア「ヘーラクレース」項目にての「ヘーラクレースの生い立ち」と記された節には（現行の記述を原文引用するところとして）“ヘーラクレースはゼウスとアルクメーネー（ペルセウスの孫にあたる）の子。”（引用部はここまでとする）と端的に記されている。ヘラクレスの母アルクメーネーの由来（ペルセウスの子たるミュケナイ王エレクトリュオーンの娘としての由来）につき調べれば、同じくものが争いのない記録的事実となっているのをすぐに確認いただけるであろう）

[[ヘラクレス]が[蛇の血族の怪物]を屠(ほふ)ってきた存在/多くの多頭の蛇の眷属を屠ってきた存在であるとのことについて]

⇒

ヘラクレスが蛇の眷属となる怪物を数多屠ってきたことについては以下のウィキペディア項目などを確認されたい。

和文および英文のウィキペディアにあつての「エキドナ」項目

上項目にはエキドナが上半身女、下半身蛇の蛇女であるとの記述がなされている。そして、同「エキドナ」項目では和文・英文版ともに

「エキドナの子供達」

が一覧表記との式で記されており、その一覧表記されている怪物たちのうち、

「ケルベロス」（ヘラクレス第12番目の功業にて冥界から地上に引きづり出された存在。尾が蛇の三つの頭を持つ冥界の番犬）

「ラードーン」（ヘラクレス第11番目の功業にてヘラクレスに討伐された

存在. 黄金の林檎の園の番人たる百の頭を持つ怪蛇)

[オルトロス] (ヘラクレス第 10 番目の冒険にて大洋の先の島にてヘラクレスに討伐された怪物. 尾が蛇の双頭の犬の怪物)

[ヒュドラ] (ヘラクレス第 2 の功業でヘラクレスに討伐された 9 つの頭を持つ多頭の怪蛇)

[ネメアの獅子] (ヘラクレスの第 1 番目の功業にてヘラクレスに討伐されてその皮を剥がれた存在. 獅子であるが、蛇女エキドナの息子と同定されている)

がヘラクレスの冒険の中でヘラクレスに相対した存在となる。

(上記怪物らがヘラクレス功業にてヘラクレスに打ちのめされているエキドナの落胤であるとのことは和文ウィキペディア [ヘラクレス] 項目と和文ウィキペディア [エキドナ] 項目の複合参照ですら(誤りがないこと、他のソースより難なく裏が取れるところながらものこととして) 容易に見てとれるところとなる。うち、現行英文 Wikipedia [Echidna] 項目には [ネメアのライオン] がエキドナの子であるとの表記はなされていないが、確かにネメアの獅子はエキドナの子供であると伝わっている。また、英文ウィキペディア [Echidna] 項目には [(ペルセウスに討たれた)メデューサを含んで見られることもあるゴルゴン] らもがエキドナの子であるとの異伝ありとの表記もがなされている (については本稿の前半部にて『神話集』(Fabulae) という著作、ガイウス・ユリウス・ヒュギーヌス(Hyginus) という人物の手になるローマ期の著作内の表記に典拠が求められもしているところであると紹介したうえで Project Gutenberg のサイトにて公開されている 1000 Mythological Characters Briefly Described との著作にあっても同文の記述がみとめられるとのことをそちら著作より原文引用なしながら紹介しもしていた)。また、[ヘラクレスの蛇の眷属退治] についてさらにすすんでの出典にあたりたいとのことであれば(そうした向きがこのような世界にいるとは思いがたいのだが)、ヘラクレスの 12 功業関連の伝承を含むヘラクレス事績についてまとめて表記しているとのローマ期古典、本稿で先に挙げたローマ時代のギリシャ人著述家アポロドーロスの著作たるビブリオテケー、岩波文庫から広く流通しての邦訳版が出されている『ギリシャ神話』の第二巻(の V と振られた部)を参照されたい(当方手元にある版の文庫バージョンでは八十九ページから一〇二ページがヘラクレス 12 功業を扱った該当頁となる)。表記のアポロドーロス『ギリシャ神話』該当頁内では [ネメアの獅子] がティポーン(足が蛇であるとの怪物)の子であること、[オルトロス]がエキドナの子であること、百頭竜(ラードーン)がエキドナの子であることまでが、一言のみだが、カバーされている)

また、ヘラクレスが斃(たお)した蛇系統の「他の」怪物らとして以下のように一覧表記できる怪物達もが存在していることについても 一争いもない神話上のよく知られたエピソードとのことで確認手法はいくらでもあるところとして— ウィキペディア [ヘラクレス] 項目および下にて記述の関連項目で容易に確認できる。

[二匹の蛇] (ヘラクレスが赤ん坊の折にゼウス私生児であった彼を厭わしく思っていたゼウスの妻であるヘラ神が彼を殺そうと送った二匹の蛇を赤ん坊のヘラクレスが怪力でくびり殺していたとの話が有名なところとして伝わっている —英文ウィキペディアの [Hercules] 項目には現行、そ

の蛇を殺す赤ん坊時代のヘラクレスの大理石像(2世紀ローマの作品)も挙げられている/要するにヘラクレスとはその人生の初めからして[蛇殺しの存在]であったことがよく知られている存在である—)

[ゲーリュオン] (ヘラクレス第10番目の功業にてオルトロスと共に殺害された存在. 三人の男がシャム双生児のようにつながった似姿の存在となり、蛇とはおよそ無関係ともとれる同ゲーリュオンだが、その実、【メデューサの孫】であるとの存在である—和文ウィキペディア[ゲーリュオン]項目にも、そして、古文献、アポロドーロス『ギリシャ神話』(当方所持の岩波文庫版(第六一刷との重版に重版が重ねられてのもの)では九十八ページ)にもゲーリュオンが[クリュサオールの子供]であると表記されている. そこに見る[クリュサオール]というのがメデューサが殺されたその瞬間に生まれ落とされる[黄金の剣を持つ存在]として神話が語る存在であるために、ゲーリュオンはメデューサの孫ということになる—)

[ギガース] (ギガンティスらはヘラクレスが計12の功業をすべて終えた後にゼウスに召集された戦った一大決戦、[オリンポスの神々]と[ガイア(大地母神)の子供である巨人ら]の一大決戦(ギガントマキア)の相手方である下半身竜・蛇の存在である(単数形はギガース、複数形はギガンティス). 同点については和文ウィキペディア[ギガントマキア]項目(あるいは英文[Giant]項目にてのGigantomachyの節)より確認できるが、さらにすすんでの出典紹介もなしておくこととして、アポロドーロスの『ギリシャ神話』(岩波文庫版/第61刷との重版に重版が重ねられての当方所持のもの)では三十七ページから三十八ページとの頁にて次のような記載がなされていることを取り上げておく:(原文引用するところとして)“大地(ゲー)はティーターンたちのために憤って天空(ウーラノス)によって巨人(ギガース)たちを生んだ. 身体の巨大なことでは彼らを凌駕するものはなく、力においては無敵、姿は見るも恐ろしく、頭と顎より濃い毛を生やし、足は竜の鱗よりなっていた. …(中略)…神々に対して、巨人たちはいずれも神々によっては滅ぼされ得ないが、誰か人間が味方となれば退治されるという予言があった. 大地(ゲー)はこれを知り、人間の手によっても滅ぼされ得ないようにするために薬草を求めていた. しかしゼウスは曙と月と太陽とに現れることを禁じ、薬草を自ら機先を制して切り取り、ヘーラクレスをアテーナーを通じて味方に招いた. …(中略)…ゼウスが雷霆を投じ、ヘーラクレスは矢で射て彼を殺した. 残余の巨人どものうちエピアルテースの左眼をアポロンが、右眼をヘーラクレスが射た”(引用部はここまでとする)—尚、ギリシャ神話がおかしなところとしては以上のようなヘラクレス参画の[ギガントマキア]が開戦を見た後、ガイア(大地母神. ゲーとも表記)が[テュポーン]という強力な怪物を生み出したと特定古典らで言及されている一方でその[ティポーン]が生まれる「前に」ヘラクレスがティポーンの子供であるとされる怪物達を屠っているといった時期的逆転表記が頻繁になされていることもあるのだが(ティポーン誕生前にヘラクレスはティポーン子息らと闘っているなどとの伝承が伝わっている)、そうしたことはこの場では置く—)

ここまでの内容からお分かりいただけていることか、と思うが、古今東西にあつてヘラクレスほどに蛇の妖異の眷属を誅伐した神話上の英雄はいない、そのように解されるありようとなっている(少なくとも古今東西の神話について網羅的な検討を

なしているとのこの身の知る限りではそうである)。

まとめれば、

[ケルベロス(蛇女エキドナ子息)]
[ラードーン(蛇女エキドナ子息. 百頭竜)]
[オルトロス(蛇女エキドナ子息)]
[ヒドラ(蛇女エキドナ子息. 九つの頭を持つ蛇)]
[ネメアの獅子(蛇女エキドナ子息)]
[二匹の蛇(ヘラクレスが赤ん坊の時に殺傷)]
[ゲーリュオーン(メデューサの孫)]
[ギガスら(下半身竜・蛇の大地母神の子)]ら

がヘラクレスに征討された目立っての[蛇の眷属]たちである。

そうしたヘラクレス、結局、戦いにて愛用の矢の鏃(やじり)に塗って用いていた[ヒドラの毒]で殺されることになった存在である。すなわち、ヘラクレスの妻デーイアネイラが性質悪きケンタウロスに夫婦仲回復の薬であると騙されてヘラクレス下着に塗りつけた[ヒドラの毒]によって皮膚焼け爛れての状況の中で苦しみ悶え、自らの殺傷を請うて死んでいったとの最期を迎えることになっている(直近にて既述のこととなる)。

以上のこと、ペルセウスとヘラクレスの縁(えにし)から述べられることに留まらず、小説『未来からのホットライン』にての

【ペルセウス座流星群によってもたらされたセンチュリオンの災厄】

と関わる場所については次のようなこと「も」ある。

「そもそもペルセウス座流星群にあつての光源(radiant)としてなるペルセウス座が[メデューサの呼称が振られた天体]を内包しているとのことがある。よく知られた天体にまつわる知見としてペルセウス座のベータの領域には[アルゴル]という恒星(北極星のアルコルとは別物)があるのだが、そちらアルゴル、歴年、[悪魔の星]とも呼称されてきもした同恒星は[ペルセウスに首を狩られたメデューサ]と結びつけられて天体観測史上(〔地上のかつての神話体系を無理矢理、星天の世界に当てはめての「ロマンティックな、」それならざれば「ひたすらに空想的な」となろう人類の初期天体観測挙動にて) 語られてきた存在ともなる。

すると、

【小説『未来からのホットライン』にてのペルセウス座流星群と結びつく災厄】

は、換言すれば、

[メデューサの頭たる天体(アルゴル)を「包含する」星座(ペルセウス座)に光源を持つものと結びつく災厄]

とも言い換えられることになる(ただし、ペルセウス座流星群の光源レイディエントはアルゴルの位置と多少ずれもするが、については置く)。

さらに言葉遊びがかったのところで微妙に言葉を換えれば、(小説『未来からのホットライン』にみる災厄は)

[蛇の眷属退治 —ヒドラのような9つの頭を持つ蛇もそうならば、ヘラクレスが第十一番

目の功業にて[黄金の林檎の園]にて打ち倒したとのラドンに至っては100の頭を持つ蛇ともされる—の退治で知られるヘラクレスの先祖たるペルセウスに打ち倒された存在(メデューサ)に近しきところの災厄]

ともなる。

そうした災厄が先立って申し述べたように、[ケンタウロスとヒドラの毒を巡るヘラクレスの功業絡みのエピソード]と接合するとの見方が多重的になせしてしまうとの秘匿コード・センチュリオンと結びつけられているのが Thrice Upon a Time『未来からのホットライン』である —(ここでの2. の話とて未だ far-fetched「こじつけがましい」ものであるが、続いて呈示する3. の段の話を加味して考えると、[恣意性の問題が何たるかを示す相応の方向]に多くのことが結合することに「なってしまう」—

以上表記のこと、そして加えもして、「(初言及のこととなるが)ペルセウスそれそのものにケンタウロスとの接続性を見出すこともできる」とのことにつながるの典拠を下に挙げることにする。

出典(Source)紹介の部 110(5)

SOURCE 110(5)

"Abaddon, to have been the name of the same Ophite God, with whose worship the world had been so long infected. Ob. I take Abaddon, or, as it is mentioned in the Revelations, Abaddon, to have been the name of the same Ophite God, with whose worship the world had been so long infected. He is termed by the Evangelist Αβδδων, τον Αγγελον της Αβυσσου, the angel of the bottomless pit; that is, the prince of darkness. In another place he is described as the dragon, that old serpent, which is the devil, and Satan. Hence I think, that the learned Heinsius is very right in the opinion, which he has given upon this passage; when he makes Abaddon the same as the serpent Pytho."

Jacob Bryant, A New System or Analysis of Ancient Mythology Vol.II. (1807) OB, OUB, PYTHO, SIVE DE OPHIOGATRIA

the September 11 attacks (coordinates) 38.87099° N 77.05596° W
↑
setting American Airlines Flight 77 (Boeing 7x7 Series)

recall

'ugly' Book of Revelation filled with [number 7]
7 stars, 7 lampstands, 7 churches, 7 seals, lamb having 7 horns, 7 angels, 7 trumpets, 7 thunders, 7 visions, 7 bowls, 7 plagues, 7 words, 7 headed dragon

(Greek Ἀποκάλυψις Ἰωάννου, Apocalypsis Ioannou) means 'un-covering'


[bottomless pit]
They had over them a king, an angel of the abyss, whose name in Hebrew is Abaddon, but in the Greek he is called Apollyon. (Revelation 9:11)

(in Satan's voyage through abyss) → 'Original Sin' for religious people
The secrets of the hoary deep; a dark illimitable ocean, without bound, / Without dimension, where length, breadth, and height, / And time, and place, are lost; where eldest Night And Chaos, ancestors of Nature, hold Eternal anarchy, amidst the noise Of endless wars, and by confusion stand.

John Milton Paradise Lost (1667) BOOK II, lines 890-895

(peculiar) BH like properties (seen in 17th century)

Annolo (and his predecessor Pytho)



ここ出典(Source)紹介の部 110(5)にあつては

[ペルセウス座流星群の出所たるペルセウス座にメデューサとの結びつきがあること]

[ペルセウスとケンタウロスにもまた一部結びつきが存すること]

について紹介しておくこととする。

まずもつてして

[ペルセウス座流星群の出所たるペルセウス座にメデューサとの結びつきがあること]

の典拠を紹介しておくこととする。

(直下、Project Gutenberg のサイトより全文ダウンロードできるところの 20 世紀初頭に刊行された A FIELD BOOK OF THE STARS (1907)、そこにての p.74、PERSEUS THE CHAMPION の節よりの抜粋をなすとして)

Note the famous variable Algol the Demon star. It represents the Medusa's head which Perseus holds in his hand. It varies from the second to the fourth magnitude in about three and one-half hours, and back again in the same time, after which it remains steadily brilliant for two and three-quarters days, when the same change recurs. Algenib and Algol form with γ Andromeda, a right-angled triangle.

「(補いもしての訳として)ペルセウス座にて着目に値するのは[悪魔の星]として知られるアルゴルである。同アルゴル、ペルセウスが手に持っているメデューサの頭に相当するものである。同恒星、3 時間 30 分の間に 2 等級から 4 等級に光度を変更・回帰させる恒星となり、2 日プラス 4 分の 3 ヶ日にて同様の変化が一巡するとの周期を持つ天体である。[恒星アルゲニブ] (注:ミルフアク、ペルセウス座内の超巨星)と同アルゴルは[アンドロメダ座の γ] (注:アラブ人にラーズ・アル・グール、[グールの頭]と呼ばれていたとされる恒星アル＝マーク)から見て正確な三角形をなすとのものである (訳注:メデューサと結びつき悪魔の星ともされアルゴルは明るさを変転させる恒星(変光星)のうち、[食変光星]として有名な天体であると語られているものとなる。尚、ここでの引用元とした 20 世紀初頭刊行の書籍では 2 等級から 4 等級の変更と表記されており、その表記の引用をなしているわけだが、現行和文 Wikipedia にはアルゴルの光度にあつての等級変化は[2.12 等から 3.39 等]であると表記され、現行英文 Wikipedia では概算値表記で[2.1 から 3.4]である(引用すれば、Algol's magnitude is usually near-constant at 2.1, but regularly dips to 3.4 every 2 days)と表記されている)」

(訳を付しての引用部はここまでとしておく)

以上、引用なしたところで、続いて、

[ペルセウスとケンタウロス「にも」また一部結びつきが存すること]

とのことの解説(初言及の指摘事項の解説)を兼ねもしての[整理]ための図解部を以下設けておく。

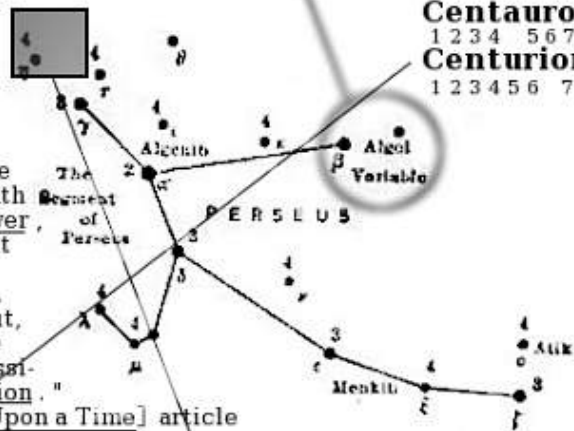
Great-grandfather
 → **Perseus : Killer of Medusa whose serpent hairs**

Greatgrandchild
 → **Hercules : Killer of Echidna's flesh whose many serpent heads**



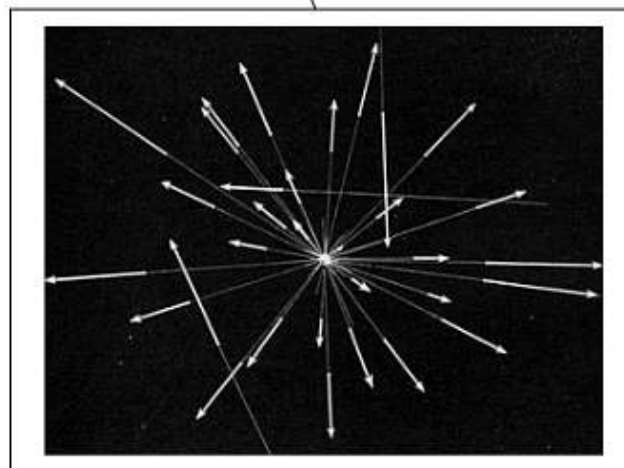
Hydra ('s venom)

Perseid radiant



Centauro
 1 2 3 4 5 6 7
Centurion
 1 2 3 4 5 6 7

" In August 2009, the satellite passed right through the path of the Perseids meteor shower, and it was hit by a meteor. It broke up and disintegrated into the Earth's atmosphere. After the breakup and fallout, to prevent public panic, the entire effort was tightly classified and codenamed Centurion ."
 —wikipedia [Thrice Upon a Time] article



(meteor shower image)

whether such a story is ridiculous or not, it makes no difference.

上にての図はここまで述べてきたこと、すなわち、次のことをまとめて示そうという趣旨のものである。

・奇怪なまでの先覚性を呈している（との論拠を個人の偏頗な主観など全く問題とならないとの側面でもって詳述してきた）との、

【数百万のブラックホール生成による人類の終焉 —(ただし、作中では過去改変にて阻止されるとのものでもある終焉)—】

を描く小説 *Thrice Upon a Time* (原著初出 1980 年) ではブラックホールによる終焉を回避した人類に立て続けに[人造ウイルスに起因する災厄]が襲いかかる、秘密裡に人工衛星にて培養されていたとのウイルスがペルセウス座流星群に由来する隕石衝突を受けて地球上に落下することでウイルス禍がもたらされると描かれる。そして、[静かに大量死の環境が現出しているとの(作中世界における)秘匿コードネーム]としてどういうわけなのか、[センチュリオン](古代ローマ軍の百人隊長のこと)との名称が持ち出されている。

・上記のような粗筋と関わるところで **Thrice Upon a Time** (邦題『**未来からのホットライン**』) に関しては [ヘラクレスの 12 功業] との結びつきが観念できるようにもなっている。

表記のこと —小説 **Thrice Upon a Time** と [ヘラクレスの 12 功業] との間には結びつきが観念できるとのこと— にまつわってのまずもっての振り返りとして書くが、[センチュリオン](古代ローマの百人隊長を意味する語) は [ケンタウロス] との語と結びつくものである (一部言論人にまさしく同じくのが指摘され、また、「ローマのケンタウリオ(百人隊長)がケンタルコとの語と結びつく」とのビザンツ時代の呼称にまつわる記録があるとのことを差し置いて見ても英語表記 Centurion に関しては男性ケンタウロス意味する Centauro との語にあつての「語順込みにしての」8 字中 7 字の共有がみとめられる)。

次いで振り返って指摘することとして、(小説 **Thrice Upon a Time** と [ヘラクレスの 12 功業] との間には結びつきが観念できるとのことについては)、

【半人半馬のケンタウロス(センチュリオンと結びつくケンタウロス) という存在はヘラクレス第 11 功業に重要なキー・キャラクターとして関わってくるとのことがあり、そこにみるケンタウロス・ケイロンの英語表記 Chiron もまた Centurion との語と同一性が強きものとなっている】

とのことがある(尚、ここでの振り返りの内容それ自体から逸脱するが、上にて言及の【ケンタウロス・ケイロン】もまた【ブラックホール生成を巡る科学議論に関わる事物】にその名称が(小説『未来からのホットライン』とは本来的には関係ないはずであろうと普通には判じられるとの式で)一部物理学者に用いられている存在となりもする —ケイロン CHIRON との存在の名称がいかようにそうしたものとなっているかは本稿の続いての段で詳述をなす—)。

以上、振り返ったうえで述べるが、ヘラクレス 12 功業、うち、殊に第 11 功業に関しては(本稿のここまでの段にて述べてきたように) ブラックホールを生成する可能性があると考えられるに至った **【LHC 実験】** そのものとも、そして、一本来ならばそうしたものが存在していること自体が奇態極まりないことなのであるが—、**【ブラックホール生成問題の(「隠喩的に」「間接的に」といったかたちでも)先覚的言及をなしている作品ら】** および **【911 の事件にて現出した事態を予見的に描いての文物となってい**

る作品ら】の双方に関わるものとなっているものの「でも」ある。

・小説 *Thrice Upon a Time* とヘラクレス 12 功業との関わり合いとしてここ本稿では意図して、
[センチュリオン] ⇔ [ケンタウロ] (人身半馬の存在ケンタウロスの男性系をしてケンタウロと呼称)

の関係性にスポットライトを当てることにすると前言したうえでその解説をなしてきた(その内容も直上にて振り返ったとおりである)。

そうしたケンタウロに属する存在として「ヒドラの毒で」苦しむことになったケイロンという存在がヘラクレス 12 功業の内の 11 功業でヘラクレスによって [プロメテウス解放] のための対価としての犠牲に供されている。そのケンタウロス・ケイロンの犠牲によって、結果、ヘラクレスは巨人アトラスと交渉する契機を得、もって、黄金の林檎を取得することになる。そして、そこに見る [巨人アトラス] や [黄金の林檎]、そして、それらと接合する [アトランティス] (本稿の **出典(Source) 紹介の部 40**, **出典(Source) 紹介の部 41** で摘示しているように [黄金の林檎の園] と同一視されもしてきたとの伝説上の陸塊) といったものが **[加速器 LHC を巡る命名規則]** に複合的に関わっているとのことが [記録的事実] としてある)。

また、ケンタウロに属する存在としてはネッソスという存在がヘラクレス 12 功業を終えた後のヘラクレスを死地に追い込んだ存在となっている。「ヒドラの毒におかされて」苦悶にまみれた状況に追い込まれたケンタウロス・ケイロンをヘラクレスが犠牲に捧げたことを想起させるようにヘラクレスによってヒドラの矢毒を塗られた矢を射られて今際の際にあったケンタウロ・ネッソスはヒドラの毒におかされた自分の血を利用する奸計を思い立ち、それでもって後の日にヘラクレスがヒドラの血でもだえ苦しみ、死ぬことになったと伝承は語っているのである(ソフォクレス悲劇に見るその複雑な経緯についても先立って解説している)。

以上のようにケンタウロの中の代表的存在であるケイロンとネッソスは双方共に [ヒドラの毒] を通じもしてヘラクレスにとって重要な存在となっているわけであるが、**ケンタウロがその綴り 8 字中 7 字を共有すると小説『スライス・アポン・タイム』に見るセンチュリオンもまた [毒] にまつわっているものである** —人工衛星で培養されたウィルスの毒に起因する災害に対する秘匿コードがセンチュリオンであるからである— (さらに述べれば、ケンタウロス・ケイロンの英文綴り Chiron は順序こそ多少異なれど、その 6 字中 5 字をセンチュリオンと共有している語となる)。

・上記のことに加えてのこととして、(最前、つい先立っての段で先述のように)、[センチュリオンと英雄ペルセウスの関係] もが [ヘラクレス 12 功業と小説『未来からのホットライン』との接合性] についての想起をなさしめるものとなっている (と本稿筆者としては強調したい)。その点、『未来からのホットライン』では —そのような設定が科学考証の面で荒唐無稽なものと言えないと明言できるのか否かは置いておいて— ペルセウス座流星群と結びつけられての隕石が極秘の人工ウィルス培養用の人工衛星に直撃、地球に災厄の根をばらまいたと描かれている。そこに見るペルセウス座流星群のペルセウスとは神話にてヘラクレスの先祖となっている存在にしてメデューサ・キラールとして知られる存在である。他面、ペルセウスの子孫にあたるヘラクレスの方は、(因果は巡るとも言うべき設定が採用されているとのことではあるが)、神話・伝承にてペルセウスが多頭の蛇を頭から生やしたメデューサのように多頭の蛇の眷族 —蛇女エキドナの眷

族、9つの頭を持つヒドラや100の頭を持つラドン等々—らを誅伐している存在となる。そこからして[センチュリオン]と[ヘラクレスに関わるところでヒドラの毒で殺し殺されたケンタウロス]の接合性を観念できるようになっている。

直上までの箇条書き形式振り返り表記であらためて強調したかったのは以下の関係性がそれぞればらばらの各個別々(の理由付け)で摘示できもする中で、だが、それら関係性の間には確とした意味論上の繋がり合いが存するとのことである。

小説 **Thrice Upon a Time『未来からのホットライン』** ← ([ヒドラの毒にて死したケンタウロス]を介しての関係性が[毒と結びつくセンチュリオン(ケンタウロス)]ありようがゆえに浮かび上がる) → ヘラクレス12功業(殊に 11th labours of Hercules 第11功業)

加速器実験 **LHC** ← (プロメテウス解放がゆえにアトラスを介して取得がなされることになった黄金の林檎を介しての関係性がある) → ヘラクレス12功業(殊に 11th labours of Hercules 第11功業)

小説 **Thrice Upon a Time『未来からのホットライン』** ← (時期的問題(2009年年末始動)／態様(欧州機関による数百万単位の極微ブラックホール生成への言及およびホーキング輻射を引き合いにしての言い逃れ)の両面での加速器ブラックホール生成にまつわる先覚的言及がゆえに関係性がある) → **加速器実験 LHC**

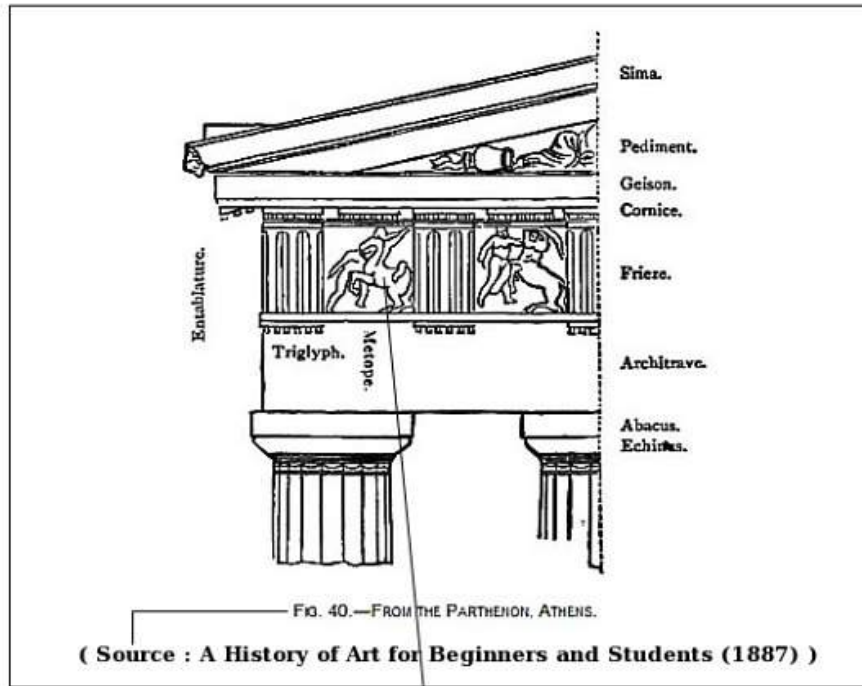
正気である、頭が正常に機能しているのならば、**【際立つての関係性】**が各個別々(の理由付け)で摘示できもする中で、だが、それら関係性の間には確とした意味論上の繋がり合いが存するとのことであれば、「わざとそうもなっている」と判ずるはずであろう(「問題は、」そこにいう[わざと、の挙]がどういう性質のものであり、どこからどのような意図あつてのものとして具現化しているのかとのことであろうと述べつつものこととしてである)。

以上、長くもなりながら[整理]のために振り返ってきたとのことと関わるところとして上にて呈示の図では[ペルセウスおよびその子孫にあたるヘラクレスらの彫像・版画での似姿]を最上段に挙げ(最上段のペルセウス像およびヘラクレス版画はそれぞれ先の段、**出典(Source)紹介の部 63(4)**および本稿の**補説 2**の段の付記部にて引き合いに出した媒体より挙げたものの再掲となり、うち、ペルセウス像は16世紀にてベンヴェヌート・チェッリーニ(Benvenuto Cellini)に製作されたペルセウス彫像となる。対してヘラクレス版画は[Giorgio Ghisiとの16世紀芸術家によって製作された版画でオールド・マスター・プリントと呼ばれる版画に属するものの一画]となる)、上にて呈示の図の中段にあつてはA Field Book of the Stars(1914年刊行版)との20世紀初頭にもものされた天文学基礎的知識の解説をなしているとの洋書(現行、Project Gutenbergのサイトにて公開されているものとなり英文読解力がそれなりにあれば容易に読み解けようとのもの)にて掲載の図、ペルセウス座似姿を描いた部より抜粋したものとなる。

以上でもって図を付しての振り返りの説明部を終えるとして、続けて、

[ペルセウスとケンタウロスにもまた一部結びつきが存すること]

とのことに関わる図解部として以下のものを挙げておく。



Centaur

(Centauromachy)

"The Greek sculptors of the school of Pheidias conceived of the battle of the Lapiths and Centaurs as a struggle between mankind and mischievous monsters, and symbolical of the great conflict between the civilized Greeks and Persian "barbarians". Battles between Lapiths and Centaurs were depicted in the sculptured friezes on the Parthenon, recalling Athenian Theseus' treaty of mutual admiration with Pirithous the Lapith, leader of the Magnetes, and on Zeus' temple at Olympia (Pausanias, v.10.8) . "

—wikipedia [Lapith] article

Achaemenid Empire (First Persian Empire)

Persian (Perses)


Descendant of Perseus claim

"Thus I have traced the descent according to the account given by the Hellenes; but as the story is reported which the Persians tell, Perseus himself was an Assyrian and became a Hellene, whereas the ancestors of Perseus were not Hellenes; and as for the ancestors of Acrisios, who (according to this account) belonged not to Perseus in any way by kinship, they say that these were, as the Hellenes report, Egyptians . "

—Herodotus , THE HISTORY OF HERODOTUS VOL. II.

"A Greek folk etymology connected the name of the Persian (Pars) people, whom they called the Persai. The native name, however has always had an -a- in Persian. Herodotus recounts this story, devising a foreign son, Perses, from whom the Persians took the name. Apparently the Persians themselves knew the story, as Xerxes tried to use it to suborn the Argives during his invasion of Greece, but ultimately failed to do so. "

—Wikipedia [Perseus] article



[Descendant of Perseus] claimers as Centaur

vs.

Greeks

Centauro
1 2 3 4 5 6 7

Thrice Upon a Time (by James Hogan)

Perseids Meteor Showers & Centurion

1 2 3 4 5 6 7

far-fetched?

(図解部をきちんと見ながら検討しないとなかなかもってイメージしづらいところか、とも思うのだが)

前掲図にての上の段ではパルテノン神殿 —これはあまりにも基本的な一般教養の問題かとは思うが、そも、[パルテノン神殿]とは現行ギリシャのアテナ市にその史跡が遺っている遺跡であり、古代ギリシャにあっての最有力都市アテナの中枢をなす祭祀センターであったとの神殿(の遺物)となる—、そのパルテノン神殿の[メープ](神殿上部のトリグラフと呼ばれる飾り板の間をなす部分)らを含めての構造について解説しているとの著作にて掲載されている図よりの抜粋となる(図の引用元はとうの昔に著作権が切れた120年以上前の洋書、Project Gutenberg のサイトにて公開されている(すなわち「典拠として誰でもオンライン上から閲覧・確認できる」との往時の[芸術史]初学者向けの書 A History of Art for Beginners and Students (1887) という著作となる)。

さて、パルテノン神殿のメープ(神殿上部のトリグラフと呼ばれる飾り板の間をなす部分)にあっては

[ケンタウロスとラピテース(英語呼称ラピタ)族の戦争 —本稿筆者は『[死んだ知識]など物好きか、そちら方面で立ち位置・役割を与えられている専門家あるいは好事家なる人種ぐらしか摂取したがるのであろう』との観点強くも有しているとの合理主義者であるのだが、といった人間ながら、好古家や古典に通じてのことを商売あるいは愚劣劇の立ち位置にしての学究のみが知るところとなっているのであろうその手のことにつき細かくも解説すれば、Centaromachy ケンタウロマキアーとの呼称で知られる戦争— の一幕]

が描かれている(については和文でも目立つところで和文ウィキペディア[パルテノン神殿]項目に(原文引用するところとして)“パルテノン神殿正門玄関の上に当たる東側のメープは、オリンポスの神々が巨人と戦ったギガントマキアーを主題としている。同様に、西端のメープはアテナイ人とアマゾーンの戦い、南側はラピテース族がテーセウスの助けを受けて半人半獣のケンタウロスと繰り広げた戦いがモチーフとなっている。北面の主題は「トロイアの落城」である”(ウィキペディアにあっての引用部はここまでとする)との解説が「現行」なされているところでもある。また、パルテノン神殿のケンタウロスとの戦いを描いた浮き彫りの遺物については[エルギン・マーブル]として広くも世に知られているもの、英国貴族にしてトルコ駐在外交官であったロード・エルギンが往時、オスマン・トルコの支配下にあったギリシャよりパルテノン神殿から剥がし取って大英帝国に持ち帰ったとの大理石遺物にそれが認められるとのことがあるため、英文ウィキペディア[Elgin Marbles]項目などからも一見しておよそ眼福を得たとのことになるような類のものではないなどこの身などは私的には見ているわけだが—[写真]としても確認できるようになっている)。

上にて図示のされようを挙げている都市アテナのパルテノン神殿の浮き彫りに見られる、

[ケンタウロス族とギリシャの民(ラピタの民/伝説上の都市国家アテナの王テーセウスとペルセポネを求めての冥界下りをなしたことを本稿にての**補説3**の段で(そこからして重要な寓意性に関わるとの認識あって)解説しているとのペイトロスという男を王に推戴していたとの神話上の設定の一族)の戦い]

については

[ギリシャ侵略に乗り出したアケメネス朝ペルシア(英語呼称ではアケメニッド・ペルジャ)をケンタウロスが如く[半面で獣性を帯びた蛮族]と見立て、他面、先進文明の民と自らを任じもしていたギリシャ人を真人、全面で人た

るケンタウロスと相争うラピタ(ラピテース)の民に見立てての寓意性]

が —(日本でも高校で[世界史]の科目を選択することをしたとの者ならば、お受験お勉強にあってその戦(いくさ)についての皮相的知識の取得を強いられるとの[古代ギリシャとペルシャの間で行われたペルシャ戦争]、そのペルシャ戦争にあってのギリシャサイドの勝利に起因する戦勝記念の一貫として) — 込められている、そういう分析がなされているところとなる。

(:本稿執筆に臨んで筆者は「極力」、というより、「絶対に」、いい加減なことは書かないようにしている、([巧遅]を犠牲にしての[拙速]に失せざるをえぬとの筆者のいまもっての苦境に起因する汎ミスなどなければ)、間違いなどなきようにしているわけであるが、読み手に正しきことへの理解を求めるために面倒を厭わず直上表記のことの一般にての説明のなされようについても多少細かくもの言及をなしておく。

その点もってしてペルシャとギリシャ勢の争闘の比喻が [パルテノン神殿レリーフに見るケンタウロス族の闘争の描写] に見られるとの主張がなされているとの世に目立つところの言われようを下に引くこととする。

(直下、ラピス族、ケンタウロス族との闘争の伝承が伝わっているとのそのラピス族にまつわる英文 Wikipedia [Lapith] 項目にての「現行の」記載を引くとして)

The Greek sculptors of the school of Pheidias conceived of the battle of the Lapiths and Centaurs as a struggle between mankind and mischievous monsters, and symbolical of the great conflict between the civilized Greeks and Persian "barbarians".

Battles between Lapiths and Centaurs were depicted in the sculptured friezes on the Parthenon, recalling Athenian Theseus' treaty of mutual admiration with Pirithous the Lapith, leader of the Magnetes, and on Zeus' temple at Olympia (Pausanias, v.10.8).

(補いもしての拙訳として)

「ギリシャのフェイディアス派の彫刻家ら (訳注:フェイディアス派とはパルテノン神殿のペルシャ戦争後の改築の監督を務めたとされる紀元前5世紀にての彫刻家フェイディアスの薫陶を受けた一群の彫刻家を指す) は ラピタの民(ラピテース族)とケンタウロスの戦い をして 人類と人類に害をなさんとする怪物らの間の争闘、そして、文明先進地域のギリシャとペルシャの[蛮族]との間の大なるところの闘争 の表象であるとした。[ラピテース族とケンタウロスとの間の戦い] はパルテノン神殿上部の装飾フリーズ (訳注:フリーズとは建築用語となる) の部にて描かれ、それはテセウスがラピテース族にしてマグネテス族 (訳注:古代ギリシャ人の名祖たるヘレーン、神の肅正としての大洪水を生きのびたと伝わるデウカリオンとピュラーという神話上の存在の息子たるヘレーンに由来するところとして古代ギリシャ人は諸古典にてヘレーネの血筋、すなわち、ヘレーネス(Hellnes)とも呼び慣わされているのだが、マグネテス族とはその名祖たるヘレーンのそもそもの血筋のことを指す) の主導者たるペイトオスと友誼を深めていたこと、そして、オリンピアのゼウス神殿 (訳注:ギリシャ期に構想され帝政ローマ期に完工を見たとの一大建築物であるが、キリスト教時代に破壊されたと伝わっている神殿) のありようを思い起こさせることである (パウサニアス第5巻10の8の部による)」

(訳を付しての引用部はここまでとする —※—)

(※尚、同じくもの点、[パルテノン神殿の浮き彫りの寓意性]についてはそこに描かれているアマゾン族との戦いの浮き彫りに関して「も」ペルシャに対する戦勝記念の寓意があったともされているのだが—英文 Wikipedia[Metopes of the Parthenon](パルテノン神殿のメトープら)項目に The subject of the west metopes is the legendary invasion of Athens by the Amazons (Amazonomachy). Scholars consider these metopes, which show the Amazons in eastern dress, to be a reference to the Persian Wars.との記述がなされているところともなる—、ケンタウロスにまつわる寓意性がそこに伴っていることの方が良く知られたことであるのでは、と(諸所での言及頻度から)筆者はとらえている)

直近、パルテノン神殿彫刻にあつては

[アケメネス朝ペルシャの侵略行為に対するギリシャ人の勝利のありようが—獣性・野蛮性を帯びた(とギリシャ人がとらえていた)征服者ペルシャとしてのケンタウロスに文明を有したギリシャが[先進文明人]として勝利したとのかたちで— 比喩的に描かれている]

との理解が存するとのことに言及したわけだが、

[ギリシャに対する征服活動を開始したペルシャ]

は往古、[英雄ペルセウスの子孫]と自称・他称されていたとのことが伝わっている存在「でも」ある。

出典を挙げる。

(直下、[歴史学の父]ともされる紀元前5世紀の歴史家ヘロドトスの著書『歴史』、その第二巻、Project Gutenberg のサイトより誰でも全文ダウンロードできる版(George Campbell Macaulay という19世紀末の古典学者の訳になる版としての THE HISTORY OF HERODOTUS VOL. II(1890))よりの原文引用をなすとして)

Thus I have traced the descent according to the account given by the Hellenes; but **as the story is reported which the Persians tell, Perseus himself was an Assyrian and became a Hellene, whereas the ancestors of Perseus were not Hellenes**; and as for the ancestors of Acrisios, who (according to this account) belonged not to Perseus in any way by kinship, they say that these were, as the Hellenes report, Egyptians. (文法的に模糊としているところであるため、文脈を顧慮しながら苦吟しながらも訳すとして)「このように私ヘロドトスはヘレーネス(ギリシャ人)によって主張される説明に依じて血筋を遡りもした. にまつわり、ペルシャ人の方が述べているところとして報告されているようなこと、「[ペルセウス]の先祖がヘレーネス(ギリシャ人)ではない中で [ペルセウス]彼自身はアッシリア人(ペルシャ帝国前身の民)であり、(ペルセウスの方から)ヘレーネス(ギリシャ人)になった」との言われように合致せざるところとして、そして、(この方面での説明に依ざるところとして)「ペルセウスの血筋に連なることとはいかなる意味でもなっていないとの[アクリシオス王](訳注:神ゼウスとダナエの間に産まれた子供とされるペルセウスの人間としての父に比定される存在)の先祖である」とのいいようの方には合致するところとして、それらペルセウス血筋はヘレーネス

(ギリシャ人)が報告するところとしてエジプトのものであったとの言われようがされている」

(訳を付しての引用部はここまでとする)

(上にて「オンライン上より誰でも確認がなせる」がゆえにここで文言を引くこととした著名古典ヘロドトス著『歴史』と同文のことについては —内容が易変するために問題となる媒体でもあると何度も何度も述べてきたところの— 英文 Wikipedia の[Peruseus]項目 ([ペルセウス]項目)にて次のように記載されているところともなる。

(以下、英文 Wikipedia [Peruseus]項目 ([ペルセウス]項目)にあつての現行記載内容より引用なすとして)

“ A Greek folk etymology connected the name of the Persian (Pars) people, whom they called the Persai. The native name, however has always had an -a- in Persian. Herodotus recounts this story, devising a foreign son, Perses, from whom the Persians took the name. Apparently the Persians themselves knew the story, as Xerxes tried to use it to suborn the Argives during his invasion of Greece, but ultimately failed to do so. ” 「ギリシャのとある民族起源論はペルジャン(ペルシャ人) Pars の民の名、彼らがペルサイと呼ぶところのその名を(ペルセウスと)結びつけてもいた。しかし、ペルシャの民 Persi[a]ns の本来の名には常に(perseus には余分なる) a がくっついてもいた。ヘロドトスはこの申しように対する説明なしのこととして、ペルシャ人がその名前をそこより取ったとの [外国生まれの子供としてのペルセウス] なるものを案出した (訳注: ちなみにここでのウィキペディア項目ではヘロドトス自身が[架空の外国籍のペルセウス]なるものを個人的に考案したように記載されているが、上にてヘロドトス原典から引いているようにその伝でのヘロドトス申しようはあくまでも仄聞・伝聞との形態をとっている。また、述べるまでもないことかとは思ふのだが、[外国産まれの子供としてのペルセウス]との話はギリシャ人のギリシャ人によるギリシャ人のための世界を描いているとも解される「オーソドックスな」との意味でのギリシャ神話ありようと齟齬をきたすものでもある)。クセルクセス王 (訳注: ギリシャ侵略に乗り出して敗退を喫したアケメネス朝ペルシャの帝王。本稿にての **出典 (Source) 紹介の部 56 (2)**でも事績を取り上げてきもした古代君主) が彼のギリシャへの侵略挙動の合間にあつて [アルゴス人] (訳注: アルゴス人とは本稿にての **出典 (Source) 紹介の部 82 (6)**で紹介しているようにホメロスの古典に遡るギリシャ人に対する総称の一つとなる) の出自を称せんとし、究極的にその挙に失敗なしていることに見受けられるように、明らかにペルシャ人の方でも(ギリシャ人に語られるところの)この話 —[ペルセウス⇔ペルシャ人起源]論議— については知っていたと解されるようになっている」)

細々と脇に入つての説明が長くなつたとのきらいもあるが、要するに、

[往古にてギリシャ侵略をなそうとしたペルシャ人] ⇔ [ケンタウロス同文の存在] (ギリシャサイドの否定的評価)

[往古にてギリシャ侵略をなそうとしたペルシャ人] ⇔ [ペルセウスの子孫を自称・他称していた(と伝わる)存在]

との関係性がそこに見受けられるわけである(上のパルテノン神殿にまつわつての図解部はそのことを訴求すべくも作成したものとなる)。

と、すれば、である。

[ギリシャ人にケンタウロスに仮託されもしてきた存在] (← [ペルシャ人] →) [ギリシャ人にペルセウスの血筋 (ヘラクレスもそうである) と結びつけられてきた存在]

との関係性が浮かび上がってくる。

以上表記のことより

[ペルセウス座流星群に起因する災厄を(ケンタウロスと結びつくと既述の)センチュリオンとの秘匿コードで持ち出している小説『未来からのホットライン』(スライス・アポン・ア・タイム) のありよう]

をもってして

[ペルセウス座流星群 (ヘラクレス曾祖父にあたる存在にして、また、ヘラクレス同様、蛇の眷族退治の英雄でもあり、そして、最前まで記述のようにケンタウロス「とも」接続性が観念できる英雄ペルセウスの名を冠する星座ペルセウス座) に起因する災厄を(ケンタウロスと結びつくと既述の)センチュリオンとの秘匿コードで持ち出している小説『未来からのホットライン』のありよう]

との文脈「でも」とらえることができるとのことにもなり、ために、問題小説『未来からのホットライン』とケンタウロスの接続性についてよりもって濃厚なる結びつきが観念されることになる(と指摘したい)のである。

(出典(Source)紹介の部 110(5)はここまでとする)

以上出典紹介部(兼解説部)の内容を念頭に申し述べるが、

「際立っての予見小説とそれがなっていること、詳述してきたとの小説 **Thrice Upon a Time**『未来からのホットライン』(原著 1980 年初出)には —それと結びつく語句は登場していても— ケンタウロ(ス)との言葉それ自体は登場を見て「いない」。

だがしかし、といった中でながらも同作『未来からのホットライン』とケンタウロスとの多重的結びつきが(ヘラクレス 11 功業にも通ずるところとして)見てとれるようになっているとのことがありもし、 そうもしたことが「さらに」問題になるだけのことがある。

具体的には、である。

【ケンタウロやケンタウロス・ケイロンを用いての特定事物にまつわる命名規則】が科学界にて用いられており、その特定の命名規則が「後にて」「ブラックホール生成」トピックとも関わるように「なった」—1998 年の理論動向変遷を経て関わるように「なった」— とのかたちで用いられているとのことがあり、そのことからして問題小説『スライス・アポン・ア・タイム』の [予言(的内容)] の性質に通ずるところとなる」

続いて、表記のこと — **【ケンタウロやケンタウロス・ケイロンを用いての特定事物にまつわる命名規則】**が科学界にて用いられている、そして、それが後の日に [ブラックホール生成]トピックとも関わるように「なった」(1998 年の理論動向変遷を経て関わるように「なった」) とのこと— の解説をなす。

3.

(こちらの点こそが極めて問題となることであると判じられるところとして)

ここまで細々となしてきたケンタウロスを巡る話 —『未来からのホットライン』という小説作品がヘラクレス 12 功業と接合性を呈していると指摘可能であるとのことにまつわっての話でもいい— に関しては

現行実施されている加速器実験(LHC 実験)の「ブラックホール生成問題にまつわって」安全性論拠が

[宇宙線(コズミック・レイ Cosmic Ray)]

と実験関係筋によって目立って結びつけられている

とのこととも少なからず通ずる側面がある。

以降、その点について、繰り返すが、

「ケンタウロスという存在との絡みでの『未来からのホットライン』にまつわってのここまでの話が

「現行実施されている加速器実験(LHC 実験)の「ブラックホール生成問題にまつわって」安全性論拠が[宇宙線](コズミック・レイ)と結びつけられている

とのことにも通じている」

との側面についての詳説を続いてなすこととする。

さて、直上表記のこと、その核たるところの解説に入る前にまずもって

「宇宙線に依拠しての加速器実験安全性主張」

が何たるかについて振り返り、かつ、整理するとのことをなしておきたい。

に関しては本稿の前半の段(にあつての **出典(Source)紹介の部 3)**でも解説しているように

【ホーキング輻射フクシャ】(車椅子のカリスマ物理学者として知られるスティーブン・ホーキングによって「極微ブラックホールというものは即時蒸発するために自然界に存在していない」との結論を伴って提唱された仮説上のブラックホール蒸発に関わる現象 —さらに述べれば、後の日にブラックホール生成問題が問題となった際にそれが用いられることを見越してのものであるかのようにおあつらえ向きに 70 年代より自然界にまつわってのありうべきこととして呈示されたもの—)

という仮説上の現象がブラックホール生成をなすと考えられるようになった加速実験の[安全性論拠]として前面に出されていたという経緯がありもした。そうもしたところが「ホーキング輻射は**【LHC によるブラックホール生成の安全生論拠】**として万全たるもの「ではない」との論調があらたに出てきた折柄より実験機関およびその関係者らが「何にせよ、」の話として彼ら由来の実験安全性公式報告文書にあつて

「宇宙から飛来する宇宙線 (宇宙線とは[宇宙を飛び交う高エネルギーの放射線]のことである)のエネルギー規模「でも」ブラックホールは生成されると考えられる。であるのにも関わらず、

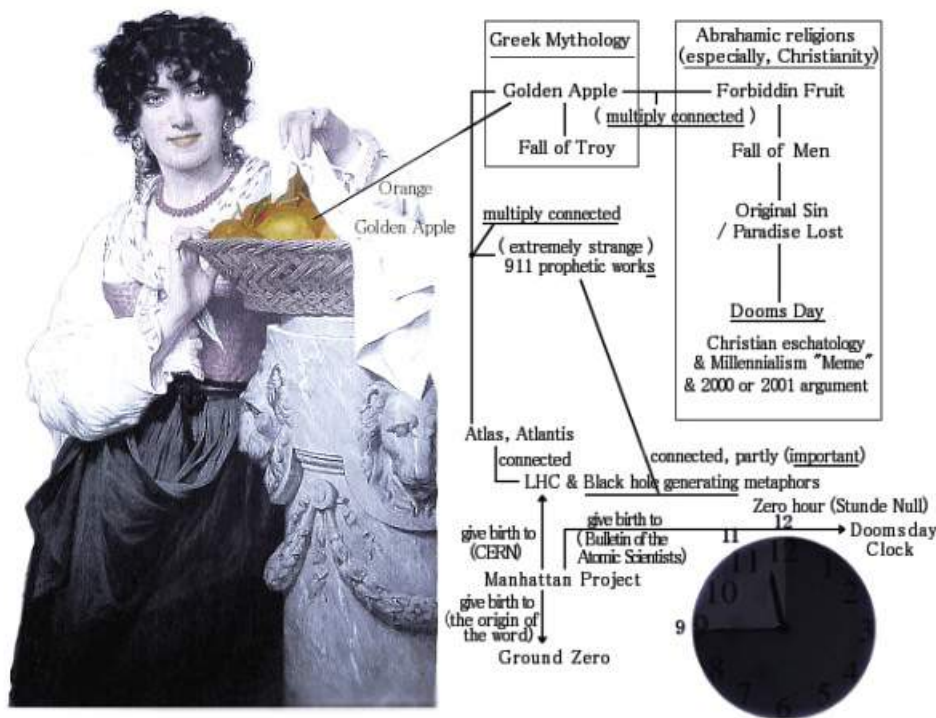
宇宙線に曝されている諸天体も地球もまだ存続している。したがって、加速器によるブラックホール生成がなされても（そして、それらがホーキング輻射にて蒸発しないものであったとしても）それは成長するに天文学的時間を要するものと考えられ、何れにせよ、安全である」

との主張を強くも前面に押し出したとのことがある。

おなじくものことについての【発表動向】に関して理解を促すための出典紹介部を下に設けておくこととする。

出典 (Source) 紹介の部 110 (6)

SOURCE 110(6)



ここ出典 (Source) 紹介の部 110 (6) にあっては

「宇宙から飛来する宇宙線のエネルギー規模「でも」ブラックホールは生成されると考えられる。であるのにも関わらず、宇宙線に曝されている諸天体も地球もまだ存続している。したがって、加速器によるブラックホール生成がなされても（そして、それらがホーキング輻射にて蒸発しないものであったとしても）それは成長するに天文学的時間を要するものと考えられ、何れにせよ、安全である」との加速実験実施サイドよりの言いようがなされている」

とのことの出典紹介をなすこととする（:同じくものこと、既に本稿前半部の出典 (Source) 紹介の部 3 でも取り扱っていることなのだが、そちら内容を補うべくもの「さらにも、」の出典紹介をなすこととする）。

まずもって LHC 実験で宇宙線が安全性論拠とされている理由が奈辺にあるのか、日本の加速器運営機関、高エネルギー加速器研究機構こと KEK に由来するオンライン上の文書 — [LHC の安全性について (The safety of the LHC の和訳)] と題されての HTML 文書 — の記載を引いておくこととする。

(直下、kek.jp とのドメインのサイトにて公開されている [LHC の安全性について (The safety of the LHC の和訳)] とのタイトル名でのウェブ文書にての冒頭部よりの抜粋をなすとして)

Large Hadron Collider (LHC) は、粒子加速器として世界最高のエネルギーを実現することができる装置ですが、自然界ではそれよりもはるかに高いエネルギーの宇宙線による衝突現象が毎日起こっています。そのような高いエネルギーでの粒子衝突の安全性は長年検討されてきました。LHC 安全査定グループ (LSAG) は、新しい実験事実と理論的な理解を考慮しつつ、かつ独立した科学者から構成された LHC 安全研究グループによる 2003 年の報告を分析したうえで更新しました。

LSAG は、LHC で行う粒子衝突実験に危険性はなく、かつ心配する理由は存在しない、という結論に達しました。これは 2003 年の報告書の結論を再確認するものであり、さらに深い分析をくわえての結論です。LHC で発生するであろう現象は、自然界では地球や他の天体で誕生以来長い間にわたって、宇宙線によって繰り返し起こっていることです。この LSAG の報告は、CERN の運営母体である理事会が諮問する外部の科学者グループからなる CERN 科学政策委員会によって再検討されたのち支持されました。

[宇宙線]

LHC などの粒子加速器を用いる実験では、宇宙線によって起こっている自然現象をよく制御された研究室環境の下で再現することで、詳しく研究を行います。宇宙線は宇宙で作られた粒子であり、その中には LHC よりもはるかに高いエネルギーにまで加速されているものもあります。それらの宇宙線が地球の大気圏に到達する際のエネルギーと頻度は、これまで約 70 年にわたって測定されてきました。測定結果から、LHC のエネルギーに相当する衝突は、過去の何十億年もの間に LHC 実験を 100 万回繰り返すほどの規模で起きていたことがわかりました。それでもこの惑星は消滅することなく依然として存在しています。天文学者たちの観測では、地球より大きな天体が全宇宙には莫大な数あることが知られていますが、その全てにおいてもこのような宇宙線による衝突が起こっています。宇宙全体で合計すると、LHC の実験に相当する衝突が 1 秒当たり 10 兆回以上起こっています。それにも関わらず星と銀河は存在することを天文学者は観測してきており、これは LHC 規模の高エネルギー衝突が何らかの危険な結果をもたらすのではないかという心配とは矛盾します。

(引用部はここまでとする)

以上、国内のよく知られた加速器運営機関 KEK の発表内容によれば、

[70 年間、そのエネルギーと頻度が測定されていた宇宙線]

というものについて

「過去の何十億年もの間に LHC 実験を 100 万回繰り返すほどの規模で起きていたことがわかりました。…(中略)…宇宙全体で合計すると、LHC の実験に相当する衝突が 1 秒当たり 10 兆回以

上起こっています。それにも関わらず星と銀河は存在することを天文学者は観測してきており、これは LHC 規模の高エネルギー衝突が何らかの危険な結果をもたらすのではないかという心配とは矛盾します」(以上、原文引用とする)

と記載されているわけである(※)。

※上の KEK 文書引用部内記載について「多少長くなるも、」の補足をなしておく。

表記の引用元文書にて [地球] ではなく [宇宙全体の話] もが比較対照として引き合いに出されている(「宇宙全体で合計すると、LHC の実験に相当する衝突が1秒当たり 10 兆回以上起こっています」とのかたちで広大無辺なる宇宙全体との領域が引き合いに出されている) のは [加速器実験の被害規模] が宇宙規模に及ぶとの懸念もが呈示されてきたとの史的背景があるからではないか、と私的に見立ててもいる。

すなわち、

[真空の相転移] (本稿の **出典(Source) 紹介の部 12**にてそも、どういう経緯で加速器の安全性論拠として宇宙線のことが持ち出されるに至ったかに関わるところの現象として解説をなしていたもの、(1983 年のこととして、マーティン・リースという後の大物科学者が加速器実験の安全性論拠に宇宙線を持ち出す契機となったものであると述懐されているとの) [真空の崩壊現象])

[ストレンジレット生成] (こちらも **出典(Source) 紹介の部 1**や **出典(Source) 紹介の部 12**にて先述のもので [引きつけ作用を伴った仮説上の危険粒子] が生成されうるとのもの)

といったものが [加速器実験に伴うイベント] として発生した際には

[銀河系あるいは宇宙そのものが消滅する]

との懸念が持ち出されてきたとの史的経緯があり、それがゆえに、比較対照として宇宙全体の話が持ち出されているのではないかと見え「も」するのである(その意味するところは加速器より強力な(極小領域に集中しての) エネルギー規模で [真空の相転移] や [ストレンジレット] による銀河の崩壊が起こって「いない」のであるから、結局は加速器実験は安全であるということであろうとの式とも解される —※尚、この身として実験関係者らに取材試みてきた身とはなるのであるが、『あまり下手なことは言えぬな』とも考えているようなところとして次のようなこと「も」あるとされている ⇒ 「LHC に見る陽子衝突のエネルギー、14 兆電子ボルト(14TeV) は単純に [10 の 13 乗] eV 単位 (10 兆電子ボルト単位) のものになると考えられる一方でそれを宇宙線のそれに(「実験室系」といった言葉が用いられての中で) 換算した場合には [10 の 17 乗] eV 程度になると見做されているとのことがある(ようである)。であるから、GZK 限界という境界領域を超えるレベルの宇宙線、すなわち、[10 の 18 乗] eV を越える宇宙線たる超高エネルギー宇宙線(UHECR こと Ultra-high-energy cosmic ray) のことを想定することによってこそ「実験室系のそれとの差分がよりもって明確になる」とのこともあるととれるようになっている([実験室系] とエネルギーを変えて見ることについては世間ではあまり知られていないことのようにもとれるが、実験当事者らはそれを念頭に置いての話もなしているとのこと、筆者もいろいろと質問を諸方面に向けてなさせてもらっていた中、聞き及ぶところである) —)。

また、ブラックホールについてではあるが、以上のように

「盤石な(と聞こえる)安全性論拠」

が存在しているのならば、

「そも、その危険性が議論の俎上にのぼりもし、訴訟が提訴されて争われること自体がおかしいのではないか」

と思われる向きもいるかもしれないが(権威に弱き向き、主流の物理学者の言い分を「このような世界で」鵜呑みにする傾向が強いような向きならばそう思って然るべきところであろうとも思う)、といった中であってながら、

[何故、ブラックホール生成が倦まず問題視なされてきたのか]

とのことの部分的回答については KEK の同じくものページ(検索エンジンにてそのタイトル名入力すれば行き着けるであろうとの [LHC の安全性について(The safety of the LHC の和訳)]と題されてのウェブページ内 HTML 文書)にて「も」それに通ずるところの理由を求めることができる。すなわち、以下のようなところが問題になる。

(直下、kek.jp とのドメインのサイトにて公開されている [LHC の安全性について(The safety of the LHC の和訳)] とのタイトル名でのウェブ文書にての上記抜粋部に続いての記載よりの抜粋として)

安定した微小なブラックホールの存在は理論的には期待されませんが、万一それらが生成されたとした場合、宇宙線でもこれまでに作られて来たはずなので、以下のような理由で無害であることを示すことができます。宇宙線が地球などの天体と衝突して新しい粒子ができる場合と違って、LHC 衝突で作られる新しい粒子は、よりゆっくり動いています。安定したブラックホールは電氣的に中性の場合と帯電している場合が考えられますが、もし帯電していれば、宇宙線でできたものであろうが LHC で作られたものであろうが地球を横断する間に普通の物質と相互に作用して停止してしまいます。これは地球が現在も依然として存在している、という事実と矛盾します。つまり、仮にブラックホールが安定であったとしても、宇宙線や LHC では作ることができないことを示しています。

もしブラックホールが中性で電荷を帯びていなければ、地球に対しての相互作用は非常に弱いので、宇宙線によって作られた場合は無害に地球を通り抜けて宇宙に行きます。

ところが

LHC によって作られた場合は、地球に残る可能性が考えられます。しかしこの場合でも、宇宙には地球より非常に大きくて、より密度の高い天体があります。中性子星や白色矮星などの天体と宇宙線の衝突でブラックホールが生じたとしたら、その星の中に留まります。そのような密度の高い天体が今も存在しているという事実から、LHC ではいかなる危険なブラックホールも作れないことを示しています。

(引用部はここまでとする)

上はどういうことか、と述べれば、

[電氣的に中性なブラックホールが「加速器の運営で」生成された場合、それは

「宇宙線」で造られるような自然界のものとは異なるものとして滞留し続けることになりうるが、同様の事例（滞留する中性ブラックホールにまつわる事例）は「白色矮星」や「中性子星」のような密度の高い天体に関しては自然界「でも」想定・観念できることになり、のような中で白色矮星や中性子星がそこに存在し続けているとのことがあり、結局はそうしたものが生成されても安全であることを意味する（ブラックホールの成長には天文学的時間を要するから安心であるとの帰結が出てくる）]

との申しよう、すなわち、

「ある特定条件を備えたブラックホールが生成された場合、[宇宙線]生成論拠だけでは盤石にはならない事情がある]

ということである。

(:表記のこと — [ある特定条件を備えたブラックホールが生成された場合、[宇宙線]生成論拠だけでは盤石にはならない事情がある]とのこと — については著名な英文論考、執筆者物理学者ら「ギ」ディングスと「マ」ンガノの頭文字を取って俗に GM Paper と呼ばれる 2008 年発の、

Astrophysical Implications of Hypothetical Stable TeV-scale Black Holes

という論稿、現行、CERN が最も重要視しているものであるとも知られる『仮定的な安定した TeV スケールでのブラックホールについての天体物理学による示唆』とでも訳せよう同論稿の主張を受けての実験機関の申しようともなる — ※上論稿、**Astrophysical Implications of Hypothetical Stable TeV-scale Black Holes** に関しては[宇宙線生成ブラックホールが出来て、かつもってして、それが蒸発しないケースでも何にせよブラックホール生成には天文学的時間を要する]とこのことを主張している論稿ともなる(:論稿配布サーバー arXiv にて誰でもダウンロード出来るとの **Astrophysical Implications of Hypothetical Stable TeV-scale Black Holes** の冒頭頁、その要約・梗概の部(Abstract)にて “ In short, this study finds no basis for concerns that TeV-scale black holes from the LHC could pose a risk to Earth on time scales shorter than the Earth's natural lifetime. ” 「要するにこの研究は TeV (兆単位の電子ボルト)スケールにての LHC より生まれでうるブラックホールらが[地球の定められし自然の寿命の範囲内より短きスケールで脅威となる論拠]をなんら見つけることができなかつた」と記載されているところが同じくものことを述べている) — 。

そうした発表動向や理論動向のエッセンスのことも筆者はできる限り細かく把握せんとしてきたし、のようなことも自身が長期間関わっていた訴訟、この日本にて第一審からして二年超、不毛なるやりとりを加速器リスク問題に関わるところとして国内の権威の首府たる実験機関(の弁護士ら)を向こうに回してやりあっていた訴訟 — 既述のように好訴癖などとは無縁なる筆者が「経験的勝率の問題からして御上が圧倒的に強いとされる国で行政訴訟を提訴するなどという挙は普通には意がないことであろう」と見ながらも、ただ単純に『常識的訴求手法のひとつとして活用できれば、』と提訴なすに至っていた訴訟 — にて問題視していたとのことでもある)

(さらにも、の補足として:尚、Gidding と Mangano という二人の物理学者らの手になる論稿 **Astrophysical Implications of Hypothetical Stable TeV-scale Black Holes (2008)** のことを上にて取り上げているが、その骨子についてより細かくも記載すれば、同論稿冒頭部にて

“ We examine a wide variety of TeV-scale gravity scenarios, basing the resulting

accretion models on first-principles, basic, and well-tested physical laws. These scenarios fall into two classes, depending on whether accretion could have any macroscopic effect on the Earth at times shorter than the Sun's natural lifetime. **We argue that cases with such effect at shorter times than the solar lifetime are ruled out, since in these scenarios black holes produced by cosmic rays impinging on much denser white dwarfs and neutron stars would then catalyze their decay on timescales incompatible with their known lifetimes.**

「我々は [(ブラックホール生成が問題となる) TeV (兆単位の電子ボルト) にまつわるシナリオ] にての幅広き側面につき、第一原則としての既知のよく知られ検証された物理法則に基づいての増大成長モデルに基づき、検証なすものである。これらシナリオでは落としどころは (ブラックホールの) 成長が [巨視的な (肉眼で見える) 影響] を地球に対して [太陽の寿命] より短いスケールにて及ぼしうるか否かに応じて二つの方向に分類できるとのことになる。 **それらシナリオでは宇宙線にて生成され、より密度高い白色矮星や中性子にて組み込まれているとのブラックホールが [それら天体の既知の寿命と相容れない崩壊プロセス] を触媒としてみせるとのことになりもしようのだから (しかし宿主たる白色矮星や中性子星は短命にもブラックホールに食われていない)、太陽の寿命より短い時間的スケールにてのそのような効果は除外されると我々は論ずるのである**

と記載されているところとなっており、同じくものが現行の CERN サイドの科学者の代表的見解となっているとことがある)

(出典 (Source) 紹介の部 110 (6) はここまでとする)

以上の出典紹介部にて

[LHC 実験の安全性論拠として [宇宙線] が持ち出されているとのありよう]

について言及したところで、次いで、[宇宙線] というものが複数ある加速器によるブラックホール生成にまつわる安全性論拠の主要かつ枢要なるものとして (「当初より」ではなく) 「途上より」目立って持ち出されるに至ったとのそちら経緯についての解説なされようを再度、紹介しておくこととする。

その点、ここでは海外の法律家 (ノースダコタ大で教職に就いているハーバード・ロースクール出身の法学者 Eric Johnson) によって執筆されたとのもので本稿前半部にてその内容を問題視してきたところの論稿、

THE BLACK HOLE CASE: THE INJUNCTION AGAINST THE END OF THE WORLD (検索エンジン上での表記の英文タイトル入力で arXiv サイトより誰でもダウンロード可能な論稿となり、LHC にまつわる安全論拠では案件をよくまとめたものとして諸所の見るに値するオンライン情報媒体にて紹介されている論稿)

より先に引用なした箇所 (出典 (Source) 紹介の部 3) と重複する箇所より内容を引き、もって、

[[宇宙線] が LHC 実験の安全性論拠としてより重要視されるようになったとの経緯についての解説のなされよう]

について再紹介しておくこととする。

(以下、**出典(Source)紹介の部3**の内容と同文のことを繰り返しての表記をなす)

(直下、注記番号も含めてのものとして **THE BLACK HOLE CASE: THE INJUNCTION AGAINST THE END OF THE WORLD** にての[840]と振られたページよりの再度の引用をなすとして)

CERN published its safety study in 2003.¹⁸² The study acknowledged that in the wake of advances in theory suggesting extra dimensions of space, there was a need for a “new examination of potential hazards.”¹⁸³ Embarking on that examination, the report conceded that, under the new theory, black holes “will be produced.”¹⁸⁴ Nonetheless, the study reported that LHC-produced black holes could not be dangerous because they would rapidly evaporate.¹⁸⁵ Thus, the report concluded, “black hole production does not present a conceivable risk at the LHC.”¹⁸⁶

(拙訳として)

「2003年、CERNはその安全性検証を報告書にまとめた。その報告書分析は[空間にあっての余剰次元のことを呈示した理論]の進歩のために[潜在的脅威検証に関するニーズ]があると認めたものであった。であるが、同報告書はLHCによって生成されるブラックホールは「即時蒸発する」だろうから危険たりえないと報告している、とのものであった。「ブラックホールは[深刻に憂慮すべきLHCにあってのリスク]とはなっていない」と同報告書は締めくくっていた」

(拙訳を付しての引用部はここまでとしておく)

(続けて直下、**THE BLACK HOLE CASE: THE INJUNCTION AGAINST THE END OF THE WORLD** にての[842]と振られたページよりの引用をなすとして)

“Every so often, a physics paper will appear claiming that black holes don’t evaporate,” wrote Leonard Susskind, an elite physicist at Stanford. “Such papers quickly disappear into the infinite junk heap of fringe ideas.”²⁰⁴

Besides, Susskind noted, black-hole radiation had been “proved” by physicist William Unruh at the University of British Columbia.²⁰⁵ **Unruh’s role in establishing the orthodoxy of black-hole radiation made it ironic that, after Helfer’s effort, Unruh himself wrote a paper theorizing that black holes might not evaporate.**²⁰⁶

In 2004, Unruh, along with co-author Ralf Schutzhold of the Technische Universität Dresden, concluded that “whether real black holes emit Hawking radiation remains an open question.”²⁰⁷ The debate as to whether black-hole evaporation is real suddenly went from the fringe to the mainstream.

(拙訳として)

「スタンフォード大のエリート物理学者レオナルド・サスキンドは「ブラックホールは[蒸発]しないとの主張をなす論文は毎度といったかたちで現れては、」「限界的思考が限りなくも山と連なるゴミの山へとすぐに消えていくことになる」(“Such papers quickly disappear into the infinite junk heap of fringe ideas.”)と書いている。といったサスキンドが「ブ

ブラックホール蒸発はブリティッシュ・コロンビア大の William Unruh(ウィリアム・ウンルー)に証明されている」と注記している一方で(サスキンドへの論拠提供者とされていた)同ウンルーの「ブラックホール蒸発にまつわる通説を確立しようとしたとの役目」が、(ヘルパー Helfer (※ホーキング放射が発現しないとの理論動向を論稿 Do black holes radiate?で一面で取り合うに足るものとしてまとめて呈示した学究 Adam D Helfer のことを指す)の努力の後)、ウンルー彼自身をして「ブラックホールは蒸発しないかもしれない」との理論化をなしている論文を書かせることになったという事態は皮肉なものである。2004年、ウンルーはドレスデン工科大学の共著者ラルフ・シューツホールドとともにブラックホールがホーキング放射を発しているかは[開かれた疑問]にとどまっていると結論を下した。[ブラックホールの蒸発]が実際的なものであるのかどうかの議論が僻遠の領域から突如としてメインストリームに躍り出てきたのである」

(拙訳を付しての引用部はここまでとしておく)

(さらに続けて直下、**THE BLACK HOLE CASE: THE INJUNCTION AGAINST THE END OF THE WORLD** にての[850]と振られたページよりの引用をなすとして)

The LSAG Report claimed to follow on from the work of the 2003 LHC Safety Study Group.²⁸² In that sense, LSAG purported to “confirm, update and extend” the 2003 findings “in light of additional experimental results and theoretical understanding.”²⁸³ But the LSAG Report’s self-characterization was misleading: LSAG did not attempt to rely on the arguments from the 2003 report to justify the conclusion that the LHC is safe. The 2003 report had rested its case for safety on black-hole evaporation.²⁸⁴ The 2008 LSAG report instead relied on the cosmic-ray argument as developed by Giddings and Mangano.²⁸⁵ Why did the LSAG Report retreat almost entirely to the cosmic-ray argument? Although the report doesn’t say, it is not hard to guess. By 2008, the black-hole-evaporation argument had taken a bad beating. While most physicists seemed to continue to regard black-hole radiation as theoretically sound, the fact that Unruh himself began questioning black-hole radiation clearly made it less persuasive as the basis of the safety argument.²⁸⁶

(拙訳として)

「LSAG 報告書はそれが LHC 安全性研究グループの 2003 年成果物に準拠しているものであると主張していた。その意で LSAG は 2003 年の発見群を追加の実験結果、そして、理論理解の明かりの下に確認、更新、拡張するものであると称していた。だが、LSAG 報告書の自己定義は誤解を招く、とのものであった。LSAG は LHC が安全であるとの結論を正当化するために 2003 年の議論に依拠しようとはしていなかった。2003 年報告書は[ブラックホール[蒸発]からくる安全性]を問題とするにとどまっていた。2008 年の LSAG の報告書は代わって[ギディングスとマンガノによって発展させられた宇宙線にまつわる理論展開]に重きを置いていた。何故、LSAG 報告書はほとんどすべての論拠を[宇宙線]絡みの理論展開へと(退却するように)持って行ったのか。報告書は教えてはくれないが、推し量るのはそう難くはない。2008 年までに

[ブラックホール蒸発]論拠は重篤な打撃を受けた。大多数の物理学者がブラックホール放射(蒸発)を理論的に健全なるものであると見つけていたようにも見えた中でのこととして、Unruh(ウンルー)、彼自身がブラックホール蒸発について疑念符をつけだし、ブラックホール蒸発の[安全性議論の論拠としての説得力]を減じさせるに至ったのだ。(そういった背景ゆえに)LSAGの報告書は蒸発について論じる代わりにギディングスとマンガノの論文の結論の先にある宇宙線の理論展開に手を出したのである」

(拙訳を付しての引用部はここまでとしておく)

上の法学者論稿、

THE BLACK HOLE CASE: THE INJUNCTION AGAINST THE END OF THE WORLD

よりの再度の引用(出典(Source)紹介の部3)でなしたところの引用を繰り返しての部でもっていかようにしてLHC実験で宇宙線が「最も重要な」安全性論拠として「中途より」—常識の世界にあって—重んじられるようになったと解釈できるのか、ご理解いただけることか、とは思う。

以上、[宇宙線]の問題が何たるかにつき、振り返ったうえで述べておくが、ここで本稿本段にて問題視しており、また、本稿の序盤セクションからしてその内容を問題視していたとの1980年発の小説、

Thrice Upon a Time『スライス・アポン・ア・タイム』(邦題『未来からのホットライン』となる同小説、LHCのような[加速器で「人為的に」ブラックホールが生成される]などとは[プランクエネルギーの実現不可能性の問題](既述)との兼ね合い(出典(Source)紹介の部21)から出典(Source)紹介の部21-5(2))で到底考えられていなかった折に初出を見た小説となる)

は加速器によるブラックホール生成の可能性に言及した作品となっており、なおかつ、その折のブラックホール生成個数についても「数百万となる」

との「2001年以降の1998年の理論動向を受けての科学界関係者申しよう」と似もしている内容を有しているとの作品であり(:本稿出典(Source)紹介の部2)にあっての内容を振り返れば、1998年初出の新規理論の展開を受けて2001年に世に出たカリフォルニア大学サンタバーバラ校所属の物理学者、スティーブン・ギディングス(Steven B. Giddings)らの論文、**High energy colliders as black hole factories: The end of short distance physics** .『ブラックホール製造工場としての高エネルギー加速器: 短距離物理学の終わり』そしてスタンフォード大のサバス・ディモポラス(Savas Dimopoulos)とブラウン大のグレッグ・ランズバーグ(Greg Landsberg)らの論稿**Black Holes at the Large Hadron Collider『LHCにあってのブラックホール(ら)』**の論稿らにまつわる話を紹介し、それらを端緒にして「何百万もの」ブラックホール生成が肯定的に論じられるようになったとのことを摘示しもしていたわけだが、そうした流れの具現化の20年以上も前に数百万個生成との先駆けての描写をなしており、さらにもってものこととして、ブラックホール生成をなした欧州機関の関係者が

「ホーキング輻射」(本稿にての出典(Source)紹介の部3)で取り上げているように極微なるブラックホールはすぐに蒸発するであろうとの帰結をもたらした仮説で1974年に提唱されたもの

で、自然界にあって微少ブラックホールが観測されないことを念頭に置いての仮説にして人為的環境を念頭に置いてのものではなかったとの仮説)

を前面に押し出しながら、「ブラックホールができてもしそれは間を経ずに蒸発するからここで黙っていても問題ない」と「破滅する運命」を見ようとさえせずに責任回避、黙過を決め込みながら見苦しく、かつ、無責任極まりなく逃げを打つことまでもが描かれている (ホーキング輻射を生成ブラックホールらに対する主たる安全性論拠として持ち出していた 2003 年の CERN 発表文書 STUDY OF POTENTIALLY DANGEROUS EVENTS DURING HEAVY-ION COLLISIONS AT THE LHC の「後に問題視されるようになった」内容 — 宇宙線に主軸となる安全性論拠を移しての 2008 年報告書へ「更改」を見たところの内容 — への先覚的言及をなしているといった式でホーキング輻射がブラックホール生成の元凶たる施設関係者の言い逃れの具にされることが描かれている) との作品となっている — 以上は本稿にての前半部で当該小説作品よりの問題となるどころの部の原文引用をなしながらそのとおりであることを克明に示さんとしてきたところとなる。尚、これまた繰り返しとはなるが、現実世界では 2008 年 9 月 10 日に LHC 実験がスタートを見、[直後のトラブル] を経て 2009 年 11 月 20 日から再開を見始めたようなこともありもする中、1980 年発の小説『スライス・アポン・ア・タイム』では (現実世界で LHC 計画が 1994 年になってから認証・スタートを見た、**出典 (Source) 紹介の部 36 (2)**にて CERN オンライン公開文書を引き合いに紹介しているように “ 16 December 1994 The CERN council approves the construction of the Large Hadron Collider. ” 「1994 年 12 月 16 日 CERN カウンシルは ラージ・ハドロン・コライダーの建設を(正式に)許諾した」とのこともありもする一方で) 奇っ怪にも現実世界の LHC を巡るありように非常に近しくも「2009 年末に」欧州機関やりようを受けての 2010 年の人類の破滅への言及が [このような世界] にあって描写されている作品ともなる ([凄まじい予見的言及] があろうとなかろうと [紐付きの者達] は行為を改めることはない、だからこそ [別の紐付きの者達を用いての予見描写をもってしての愚弄] なのか、と考えられるところとしてそうもなっている) — 。

振り返っての表記をここまでなしてきたところから話を前に進める、本段にあっての重要事と申し述べたいところに向けて前に進める。

さて、ここまでにて長々延々と振り返って典拠挙げて示してきたとのこと、

[LHC の安全性論拠が「ホーキング輻射(ふくしゃ)に代えて」強くも宇宙線に求められるようになったとの流れ]

に関しては予見小説 **Thrice Upon a Time** 『スライス・アポン・ア・タイム』との絡みで次のことが問題になる。

[高エネルギーの宇宙線について「ケンタウロ」・イベント (Centauro Event) という概念が 1972 年に提唱されることになった。 同概念 —ケンタウロスの名前を冠するケンタウロ・イベント — は後にブラックホール「生成」問題とも結びつけられて語られるに至ったとのものである]

上にて本稿内にては初言及の【ケンタウロ・イベント】というものについては

「その現象としての適否込みに現行の主流理論動向の外に出ている時代遅れのものである」

といった論調もあるようなのである「が」、ケンタウロス名称由来を持つとの同ケンタウロ・イベント、確かにここ十年の間、

[ブラックホール生成イベント]

「とも」結びつけられて語られてきたものとなっている (とのことが後述するところの散見される科学論文より同定できるようになっている) 。

については、ひとつに、ケンタウロ・イベントが (その概要は続く段にて解説するとして)

[高エネルギー宇宙線に関わる現象]

となっており、そこにいう、

[高エネルギー宇宙線]

によって「自然界で」ブラックホール生成がなされているとの推測がなされている（余剰次元理論によってブラックホール生成のエネルギー上の閾値が低く見られるようになったということが加速実験安全性根拠に転用されもしている【「自然界にての」高エネルギー[宇宙線]での極微ブラックホール生成の理論】につながっている）とのことからそういう論調が生まれてきたのだと（筆者のような専門家からは話を拝聴する以外、術はないとの門外漢にも）比較的容易に見て取ることが出来るようになっている——論理としては「我々の周囲の自然界でも宇宙線によって極微ブラックホールが自然発生している（と解される）が、そうしたものによる害は発生・具現化していない。であるのならば宇宙線のそれよりも低いエネルギー規模の加速器に起因するところを心配すること、何をかあらんや」とのことになる（ただし、同じくものが言われている中ながらも[宇宙線生成のブラックホールと加速器生成のブラックホールの質的相違についての問題]も「電荷が中性か否か」云々に関わるところとして問題とされていることについて「も」本稿のつい先だつての段にて解説している）——。

表記のこと、ケンタウロ・イヴェント（と命名されてのもの）が [高エネルギー宇宙線に関わる現象] として [高エネルギー宇宙線に関わる現象] にも結びつけられて見られてきたとの背景があるとのことについての出典紹介を以下なすこととする。

出典 (Source) 紹介の部 110(7)

SOURCE 110(7)

(coordinates) 38.87099° N
 77.05596° W

setting American Airlines Flight 77
(Boeing 7x7 Series)

'ugly' **Book of Revelation** filled with [number 7]
7 stars, 7 lampstands, 7 churches, 7 seals,
lamb having 7 horns, 7 angels, 7 trumpets,
7 thunders, 7 visions, 7 bowls, 7 plagues,
7 words, 7 headed dragon

(Greek **Ἀποκάλυψις Ἰωάννου**, **Apocalypsis Ioannou**)
means 'un-covering'

Doomsday Clock
(Last) Judgement Day
for religious people

Collapse of 1 WTC - 7WTC
and Boeing 7x7 Series

7-7 London bombings (2005)

ここ出典(Source)紹介の部 110(7)にあつては

[ケンタウロ・イベントとは何なのか、また、同ケンタウロ・イベントがいかようにブラックホール生成関連事象と結びつけられているのかとのことにまつわつての解説のなされよう]

について紹介しておくこととする。

さて、そもそもケンタウロ・イベントなるものが何なのかについてからだか、「まずもつて」公に広く説明されているところについて現時点での英文ウィキペディア記載の引用をなす(本説明不足部と考えられるところについては[注]とのかたちにて他の資料の記載を引きつもの引用をなす)ことから始めることとする。

(直下、英文 Wikipedia [Centauro Event] 項目にあつての「現行の」記載内容を引用するとして)

A Centauro event is a kind of anomalous event observed in cosmic-ray detectors since 1972. They are so named because their shape resembles that of a centaur: i.e., highly asymmetric.

If some versions of string theory are correct, then high-energy cosmic rays could create black holes when they collide with molecules in the Earth's atmosphere. These black holes would be tiny, with a mass of around 10 micrograms. They would also be unstable enough to explode in a burst of particles within around 10^{-27} seconds.

Theodore Tomaras, a physicist at the University of Crete in Heraklion, Greece, and his Russian collaborators hypothesize that these miniature black holes could explain certain anomalous observations made by cosmic-ray detectors in the Bolivian Andes and on a mountain in Tajikistan.

[. . .]

In 2005 it was shown that "other Centauro events" can be explained by peculiarities of the Chacaltaya detector. So-called "exotic signal" observed so far in cosmic ray experiments using a traditional X-ray emulsion chamber detector can be consistently explained within the framework of standard physics.

The authors of the new analysis firmly believe that the behavior of Nature is more complex than people imagined. Nevertheless, in present case, mundane explanation without any exotic guesswork provides an answer.

(内容を細かくも補つての訳として)

「ケンタウロ・イベントとは1972年以降、宇宙線検出装置にて観測されてきたとの特異なる現象となる。それらは高度に非対称性を呈するとの特色がゆえ、([下半身が馬で上半身が馬である]とのケンタウロスにちなんで)[ケンタウロ]と命名されたものとなる。

(※訳注:直上の一言定義にまつわつての記載部だけからでは[ケンタウロ・イベント]が何たるかいまだ模糊としている(ととらえられる)ことかと思うので、コーネル大が提供する論稿配布サーバー arXiv よりダウンロードできるとの論稿、

A Hidden Dimension, Clifford Algebra, and Centauro Events『隠れた次元・クリフォード代数、そして、ケンタウロ・イベント』

と題されての論稿 — Carl Brannen という学究の手によってウイスコンシン大学マディソン校 (the University of Wisconsin) にてなされた議論をまとめたものと冒頭より書き記されている論稿となる— の内容を引いておく、[ケンタウロ・イベントについての事宜に適っている(と見えも

する)一言での定義付け] がなされていると判じられる同論稿の記載内容を補うべくものものとして引いておくこととする。

(直下、オンライン上より誰でも取得できるところの A Hidden Dimension, Clifford Algebra, and Centauro Events と題されての論稿にての 17 と右上部に付されての頁よりの補いもしての一言引用をなすとして)

The term "**Centauro**" refers to **a cosmic ray that exhibits an anomalous ratio of charged to neutral pion production.** 「【ケンタウロ】との専門用語は【「電荷として中性な」パイ中間子 一注:パーティクル、物質を構成する最小の単位と現在の科学の枠組みで見られている「素粒子」にあつての「ボース粒子」と呼称されているものの一類型がこちらパイ中間子となるとされる— に対して「電荷を帯びての」パイ中間子の比率が変則的なありようを呈する「宇宙線」(宇宙を飛び交う高エネルギーの放射線)】に対して言及してのものとなる (注:パイ中間子らにあつての宇宙線にあつての配分の有り様が人馬混淆型、人と馬の組み合わせのように見えるという式でそうした呼称がなされている)」

(補足のための引用部の中にあつての他文献の引用部の訳はここまでとしておく)

もし仮にいくつかのバージョンの紐理論 (弦(ヒモ)理論) が正しいのだとすれば、

[高エネルギーの宇宙線は「地球圏大気の子らと衝突した折に」ブラックホール生成をなす]

とのことがあるかもしれない。

これらのブラックホールは極微なるもので、10 マイクログラムの質量を有しているにすぎないとのものであり、[10 のマイナス 27 乗]秒以内にて粒子としての破裂を見る程に非安定的なものであろう。

ギリシャのクレタ島の [イラクリオン] Heraklion (訳注:ヘラクリオンとも、[ヘラクレス]にその名の由来を持つがゆえに、の Heraklion という綴りの都市でミノタウロス伝承でも有名なクノッソス宮殿を郊外に臨む都市) に在するクレタ大学の物理学者 Theodore Tomaras および彼のロシア人同僚らはそれら [(高エネルギー宇宙線にて生成されうる) 極微のブラックホール「ら」] でもってして

[ボリビアのアンデス山中にての宇宙線検出器およびタジキスタンの山間部にての検出器によって観測された(ケンタウロ・イベントと述べられるようになった) 変則的観測(と結びつく現象)]

について説明がなせるであろうとの仮説を呈示している (※このように表記されている部については下に訳注を付しておく)。

…(中略)…

2005 年にて他にての類型に属する【ケンタウロ・イベント】が(ボリビアの)チャカルタヤの検出器の通常のそれではないとの挙動によって説明なされうるようになった。従来の X 線エマルジョン・チェンバー検出器を用いてのここまでの実験にて観察されてきたところのいわゆる [エキゾチック・シグナル] は従来モデルの物理学の枠組みのなかで首尾一貫して説明されうるとのものと(現行は)なっている。

新しい分析の立案者らは自然の振る舞いというものとは人々が想像するよりも複雑であろうと確固として信じているにも関わらず、(しかしながら)、現況ありよ

うとしては、エキゾチック（新「奇」性溢れる）な推論というものを何ら嘖ませることなく、ありふれた説明による回答が（ケンタウロ・イベントと呼ばれる現象の観測に対して）呈示されているところとなっている」

（内容補いもしての引用部訳はここまでとしておく）

以上の引用部だけではそれでもやはり分かりづらいかもかもしれないが、とにかくも、ケンタウロ・イベントとは

[【宇宙線】検出装置にて観測された【電荷として中性なパイ中間子（現代科学から見ての物質の最小の単位たる[素粒子]）にあつてのボソンと呼ばれるものの一類型）に対して電荷を帯びてのその比率が変則的なありようを呈する[宇宙線]ありよう】を[人と馬が混淆してのケンタウロウスのような存在]に見立てて呼称したもの]

[【高エネルギーの宇宙線がブラックホール生成をなすと考えられること】がその観測に通ずることになった（ポリビアにての観測装置のケンタウロの観測挙動に通ずることになった）ともされている現象]

であると指摘されている（そして、より細かくもの出典紹介を直下これよりの段にてなすが、その宇宙線まわりのケンタウロ・イベントとブラックホール生成とを結びつけて考えると「一部の」科学者思潮も一時期目立ってあったとされている）。

次いで、ケンタウロ・イベントの類がブラックホール生成（そして次いでブラックホール蒸発）と一部の物理学者らに強くも結びつけられて「いた」とのことについて、「さらにも、」の論拠を挙げることにする。

コーネル大が提供する論稿配布サーバー arXiv よりダウンロードできるとの論稿、

Can Centauros or Chirons be the first observations of evaporating mini Black Holes?

との論稿 —arXiv の PDF 版のリリース表記は 2004 年との論稿— の記載内容を引いておくこととする（：『ケンタウロ・イベントあるいはケイロン（ケンタウロ・イベント関連現象）は蒸発する極微ブラックホールの最初の観察報告事例となるか』とでも訳せよう同論稿、その冒頭頁にての執筆者記載部にて明記されているように ITEP（英文 Wikipedia にも一項目設けてあるとのロシア在の権威ある研究機関）所属の A. Mironov ミロノフおよび A. Morozov モロゾフとの科学者らおよび英文 Wikipedia [Centauro Event] 項目にてその名が挙げられている研究者、ギリシャはクレタのイラクリオン（ヘラクレスに語源がある都市 Heraklion）に存するクレタ大学に所属の T.N. Tomaras との研究者らの手になる論稿となっている）。

（直下、arXiv よりダウンロード可能な物理学者らによる論稿 **Can Centauros or Chirons be the first observations of evaporating mini Black Holes?** 冒頭頁よりの引用をなすとして）

We argue that **the signals expected from the evaporation of mini black holes — predicted in TeV gravity models with large extra dimensions, and possibly produced in ultra high energy collisions in the atmosphere —** are quite similar to the characteristics of the Centauro events, an old mystery of cosmic-ray physics.

（訳として）

「我々は —大規模余剰次元モデルにあつての TeV 領域の重力で生成が予測されているところの、および、大気にての超高エネルギー宇宙線の衝突状況によって生成されるところの— **【極微ブラックホールの蒸発にて（観測が）期されるところの兆候】** が「相当程度」ケンタウロ・イベント、宇宙線物理学の

古くものミステリーとなっているそれに似通っているとのことを議論するところのものである」

(訳を付しての引用部はここまでとする —※—)

(※本稿の前半部をきちんと読んでいただければ、ご理解いただけようことか、とは思いますが、従前、ブラックホールの人為生成は人間の実現できるエネルギー規模では到底不可能であると長らくもされていたところが一転、[余剰次元理論] (ADD Model) というものの 1998 年の提唱、続く、理論の深化によって 2001 年頃から目立って可能とされるに至ったとの経緯がある。そして、そうもしての理論動向の変遷に伴っての申しようが「[余剰次元理論] に拠って考えれば、TeV (兆単位の電子ボルト) が極小領域に加速器にて投入されての高エネルギー状況でブラックホール生成がなされると考えられるようになった」とのものとなっており、上引用部にあつての **the signals expected from the evaporation of mini black holes — predicted in TeV gravity models with large extra dimensions, and possibly produced in ultra high energy collisions in the atmosphere —** との箇所は、その絡みで、【余剰次元理論 (ラージ・エクストラ・ディメンジョン・モデル) に応ずればブラックホールが超高エネルギー宇宙線 (のレベルでのエネルギー規模) で生成されうる、そして、であれば、[ブラックホール蒸発 (先述のホーキング輻射フクシャによる蒸発) の兆候] が見てとれる可能性があるとのことを述べているものであり、その兆候がケンタウロ・イヴェントという「不可解な」(ものとされる) 観測事象に現われているのかもしれないと論じてのものとなっている)

(続いて直下、同じくものコーネル大の論稿配布サーバー arXiv よりダウンロードできるところの論稿 **Can Centauros or Chirons be the first observations of evaporating mini Black Holes?** の下にて 10 と振られた頁、Conclusion [結論] の部より一文のみの引用をなすとして)

Conclusion A preliminary analysis was presented of the idea that the well-known Centauro or even better the Chiron events are due to evaporating mini black holes with mass of O(TeV), as predicted to exist in the TeV-gravity models with large extra dimensions.

(訳として)

「結論: 先だつての分析により、よく知られたケンタウロあるいはより際立つてのケイロン・イベントが (大規模余剰次元モデルにての TeV 重力にて存在が予測されるところの) オー (TeV) 質量のブラックホール蒸発に照応するものであるとの観念が呈されている」

(訳を付しての引用部はここまでとする)

以上抜粋部に見るように、

[「それが科学的に至当な仮説なのか否かは置き」 (Whether above views are scientifically (theoretically) correct or not, it makes no difference.) 一部の科学者の間にて【ケンタウロ・イベント】 (およびそれと関わりどころの【ケイロン・イベント】) なるものが【極微ブラックホール生成トピック】 (およびその蒸発の兆候) と結びつけられて「いる」]

とのこと自体は少し勉強をなしもしているとの門外漢にも分かるようになっている (: その点、本稿で都度、述べているように本稿の趣意は 一当たり前だが— 筆者のような門外漢がそれについて甲論乙

駁などできようはずもない [科学理論の至当さ] それ自体を問題視することには「ない」 —物事の理非曲直について理解する気もないとの向き、筆者などが我々の生存に関わる問題について訴求するに値しない員数外の存在（邪魔さえしなければどうでもいいとの存在）であると見るような向きは勘違いするかもしれないが—。本稿趣意は [記録的事実の問題] として指し示せる科学者らの「動静」が「奇っ怪かつ露骨な」、そう、はきと述べるところとして「犯罪的なまでに奇っ怪かつ露骨な」とのかたちで問題となる一連の事物らと複合的に関わっていると（理解に科学的知識の有無など要されないような明々白々なるところとして）摘示できてしまえることを明示し、その先にあることが何なのか非を鳴らすことにある（筆者はそれでもって人間存在が【我々を殺す力学に抗うべくもの思考思想の確固たる体系（カタカナ言葉で表すところの [ミーム]）】を有効に構築できない種族ならば、仕方がない、種族に未来は望めないし屠殺されていく豚よろしくも滅ぶべくも滅ぶのだらうとの観点・覚悟でもってして本稿をものしている）。

[本稿執筆が進んでから後の日にあつての [筆者が専門家筋より聞き及んでいること] についての追記として]

上の部にあつて Wikipedia 及び関連するところの学者論文よりの原文引用でもってして、
[「ケンタウロス」の名を冠する [宇宙線] 絡みの観測結果に対する呼称] たるケンタウロ・イベントについて

[(ケンタウロ・イベントとは) クレタ島のイラクリオン (上にての引用部にても言及されているところの [ヘラクレス] に由来する都市) の研究者らが率先して研究をなし、また、彼らによって、宇宙線由来のブラックホールと結びつける論調もあるものである]

とのことを紹介したが、海外ではその【ケンタウロ・イベント】の正否探索挙動のことが (これより指摘したきブラックホールとの絡みではなく) ストレンジレット生成問題という【別の加速器に由来するリスク】との絡みで一部批判家筋より問題視されてきた、LHC 実験に非を慣らしてきたとの海外の向きによって問題視されてきたとの経緯が「ある」と筆者などはよく知っている (:ただし、である。そうした経緯についてはほとんどの人間 (筆者が取材して同じくもの言辞の妥当性について問い合わせた専門家筋を含めてのほとんどの人間) は知らぬ存ぜぬのものでもある。【本稿のようなものが一般の人間の耳目に触れがたくもなっているとの力学】がある、そう、相応の思考しない人間ら、の中の、それこそ殺されて当然であろうと敵手にも嘲笑われようと思えもする種族の裏切り者たる屑のような類あるいは自律的思考など望むべくもない完全な人形を用いての言論土壌破壊・言論封殺に加えもしての一般の言論無視の力学がある、【人間一般にあつての率先しての自律的現況理解を困難ならしめるが如く力学】 (人間一般の脳機能の作用を屠所の羊のそれのようなところに限局するような力学でもいい) がこの世界にあつては強くも作用していると判じられもする中で、(言いがまどろっこしくはなっているが)、同じくもの論調 — (再言するも、【ケンタウロ・イベント】の正否探索挙動のことが (これより指摘したきブラックホールとの絡みではなく) ストレンジレット生成問題という【別の加速器に由来するリスク】との絡みで問題視されていもするとの論調) — とてまったくもって人目に付きがたきものとなっているとの感があり、また、といった中でそちら論調は着目されている節も同文にまったくないのである (と反響度合いの分析から判じられる) のではあるも、筆者などは自身の裁判と並行しての調査挙動の過程でそうした論調にもよく通ずるに至っている)。

具体的には海外で LHC 関連の訴訟を展開していたとの向きらのうちの一人ルイス・

サンチョ 一本稿にて先述のウォルター・ワグナーと共にハワイの訴訟の当事者になっていた向き（スペイン人のサイエンス・ライター／同サンチョ、逸脱した言い分から軽侮されるように専門家筋には見られている感があるのだが、少なくとも、世間人並みの人間に比べれば遙かに水準高く見識深きことが窺い知れるとの向きだと筆者などは見立てている） — が [カストール]（Castor: Centauro And Strange Object Research [ケンタウロおよびストレンジ・オブジェクト調査] の略称）の名が付された検出装置を用いての **LHC** 実験に参加中のケンタウロ・イベント研究グループの研究挙動の中で作成された発表資料に目を付け、

（**LHC** 実験批判家ルイス・サンチョの手になるオンライン公開文書に見るところとして）

「**LHC** 実験に参加している **Castor** グループ — ケンタウロ・アンド・ストレンジ・オブジェクト・リサーチの正式名称英文から頭文字とってのカストール・グループ — の（「ケンタウロ・イベント研究に関わる」）研究資料には危険なストレンジレット生成を肯定しているような書きようがみとめられる、[破滅的状況につながる【マイナスに帯電したストレンジレット】 — 周囲をコアレスセンスという引きつけ作用によって同種のものに変換し出すおそれがあるとの【電荷として[マイナス]に帯電した仮説上の粒子ストレンジレット】（同ストレンジレットに起因するリスクについては本稿の前半部にてそれがどういうものか概要だけ言及している） — の生成の肯定論調] が見受けられるではないか。これは一体全体どういうことだ」

と非を鳴らしているとのことがある（：再言するも、残念ながらそうしたルイス・サンチョやりようについては何ら反響を世に起こしていないこと、見受けられるようになっている（相応の陰謀論者の類が不徹底、いい加減にそうした者達由来の公共心・道義心とは無縁なるジャンク化ページを撒く上での材としているとのケースは別である）のであるが、そして、同じくものやりようについては [本質的に主流科学者が思うままに権威として君臨しているフィールドでの闘いに没念するなかで主流科学者の欺瞞性を暴くことにはならないやりよう] [世の隅々までを規定する権威主義仕様の人間らによって専門家託宣の方が勝ると（愚劣さが際立たぬ式にて）斥けられてしまうやりよう] に留まっていると手前などは（その際に得た意見も下に呈示することにした自身の取材結果より）見ているのであるが、それは置く）。

といった風に **LHC** 実験に関わる一部実験グループにてのケンタウロ・イベント研究挙動とストレンジレット生成（ネガティブリー・チャージド、一般にそれが生成されたらば、危険であるとされる【負に帯電したストレンジレット】の生成）とが結びつけられているとのことにまつわっての海外 **LHC** 実験批判家（ルイス・サンチョ）の申し分については当事者由来の文書もすぐに見つかるようになっているので

「それがどういう申しようを含む主張かは「細かくは、」そちらを当たっていただきたい（ただし大学卒業時及第点レベルでの英語力と同文の理系の識見、そして、物事をきちんと理解しようとする率先しての意思の力が要されるので、それらに欠けるところがあるとの向きは準備してから確認に臨むべきであろう）」

と申し述べたうえで [追記としての補足] をここにてなしておく。

その点、本稿筆者はルイス・サンチョの（上述の）ストレンジレット問題を巡る批判文書の適否につき細かくも精査なし、
[**LHC** 実験に参加しているとの [科研費] もらってのその方面での日本の宇宙線関連

のそれ専門の研究者ら —LHC 実験にも関わっているとの向きら—]
にその適否について「も」聴取試みたりしているとの人間となるのだが、の折、そうした向きら（手前やりようとの絡みでここでは取材源の名は明かさない）より、大要、次のような話を得ているとのことがある —については取材源について秘匿しての話であるため、ひたすらに【誰でも(その気があれば)裏取り・確認できる確たる事実】に依拠して書き進めているとの本稿にあって「重みをなんらなさない」ところとして、各自放念いただいてもいいような話、発言主を挙げないとの伝で論拠がしっかりしていない話と筆者自らが事前に断つての話となること、了承いただきたい次第でもある—。

(本稿筆者が某大学奉職の教授ポストの宇宙線研究領域の有識者より聴いているところとして)

「ケンタウロ・イベントについては欧米よりも「日本の研究者の関与が大きい」ところであるように思う。ボリビアのチャカルタヤでの日本の研究者(※本稿では個人名は割愛する)の活動がその提唱に強くも影響を与えている。

当初、そこでは写真乾板にて宇宙線のイベントを観測していたとのことをなしていたのだが、普通は電磁成分ばかりが見えているとのところをハドロンシャワーを含むものが見つかった。それがケンタウロと呼ばれるものである。それについては写真で小屋の柱か何かにあたって反応が出てきたのでは、とされてもおり、それで新しいケンタウロ粒子が出たと騒がれたのだ、とも言われている。それが現時の主たる見方となるように、である。

何にせよ、現時点ではそのケンタウロ・イベントというものの理論的基盤は揺らいでいる。もう10年近くも前から「ケンタウロ・イベント(と呼称されるもの)はない(存在していない)」と見られるようになっており、ケンタウロ探索の価値は我々(専門の物理学者)の世界で何十分の一になっている(注:こちら有識者発言についてはつい先程、引用なした英文 Wikipedia [Centauro Event] 項目にあって、現行、“In 2005 it was shown that "other Centauro events" can be explained by peculiarities of the Chacaltaya detector. So-called "exotic signal" observed so far in cosmic ray experiments using a traditional X-ray emulsion chamber detector can be consistently explained within the framework of standard physics. The authors of the new analysis firmly believe that the behavior of Nature is more complex than people imagined. Nevertheless, in present case, mundane explanation without any exotic guesswork provides an answer.”「2005年にて他にての類型に属するケンタウロ・イベントがチャカルタヤの検出器の通常ならざる挙動によって説明なされうようになった。従来のX線エマルジョン・チェンバー検出器を用いてのここまでの実験にて観察されてきたところのいわゆる[エキゾチック・シグナル]は従来モデルの物理学の枠組みのなかで首尾一貫して説明されうとのものと(現行は)なっている。新しい分析の立案者らは自然の振る舞いというものは人々が想像するよりも複雑であろうと確固として信じているにも関わらず、(しかしながら)、現況ありようとしては、エキゾチック(新「奇」性溢れる)な推論というものを何ら噛ませることなく、ありふれた説明というものが回答を(ケンタウロ・イベントと呼ばれる現象の観測に対して)呈示されているところとなっている」との記述内容と一致する申しようではあるかと判じられもするところである)。

「それでも、」ケンタウロの探索がなされているのは何重にも確認するのがサイエンスというものだから、我々 LHC 実験に関わっている研究者の中でもそれを専門にしてやっているとの向きらがいるとのかたちとなっている。また、ルイ・サンチョ氏というそちらの方(筆者)で主張内容について訊いてきた批判者申しようのことは(筆者が資料を紹介した中でのこととして)詳しくまでは知ら

ないので何とも言えないが、万万が一、(サンチョ氏が言うように) ストレンジレットが生成されても安定しておらず即時崩壊するから大丈夫であるという共通認識がある」(注:機を一にしての聞き取り取材ではハイパー核といったものについての説明をいただいたうえで「本当にあるかは知らぬがストレンジレットが見つかるならば、見つけもしたいぐらいではある」といった話も得ている)。

上の国内専門家筋発言に見るようにルイス・サンチョ言いやカストールという名前が付された実験グループによるケンタウロイベント調査を銘打っての発表資料でもってして【危険なるものとされる負に帯電した(negatively charged) ストレンジレットを生成を肯定するとの申しよう】が実験関係者によって現実になされていることに疑義呈し、非を鳴らすとの言いや — については公録(常識論の世界では適正な運営が期されているとの納税者納入金を原資にしての科研費)を食んでいるとの専門家に問い合わせた折に

「(無責任なことは言えないが)それこそ万万が一、ストレンジレットが生成されても安定しておらず即時崩壊するから大丈夫であるという認識がある(そういう認識でカストール絡みのストレンジレット関連の資料が書かれているのであると思う)」

との話も聴いているわけであるが(「筆者は専門家筋ではないので陰謀論者やボーダー領域の相応の面構えをした[論客]よろしく専門的なことについては無責任に私見を振り回すことはできない、代って、専門家ではないが世間人並みに頭は働いているとの一般の向きらにも納得いくところのみをひたすらにえぐる所存である」との趣旨のことを何度も何度も申し述べているようにここでは専門家の意見を紹介しているにとどまる)、とにかくも、ここでの話との絡みでは同じくもの取材の機会にそうした申し分を聴きもした、

「ケンタウロ・イベント Centauro Event は[最早、時代遅れ(obsolete)と見られる仮説]との側面を帯びている」

との前提で話をなしていること、お含みいただきたい — 補うべく付しての追記部はここまでとしておく — (尚、筆者は自身が取材してきたことを書籍にしようとの欲求を現時有していないのかたちにならなっている。「なんら【需要】のないところに【供給】をするのは問題外だからであろう／【需要】をつくらうとしても敵地の中にてのことである、そう、【妨害の力学】(その容易に見てとれるところのくだらなさ・愚劣さの問題はここでは繰り返さない) が圧倒的に強くも働くところでそれをやっても無駄だから供給をせんとするのは経済的には愚そのもの、自己満足(合理主義的観点では無に劣るとされるような行為)に過ぎないからであろう」と一面で理想主義者、だが、一面で際立っての合理主義者でもあるとの筆者を知る知人などはプロファイリングしもしたが、そうした見方は一面で至当であるも、より根本的な問題として本質を突いていない。「もう時間がないし、なんにせよ、死ねば無である」「もう時間がない中で(そして死ねば何にせよ無であるとの中で)自身と種族の生き残りのための【ミーム】(生存に必要な思考と情報の体系を頒布拡散可能なるかたちで結晶化したもの)の構築と流布における最善手は(現行は)誰も手にとらぬであろうと判じられる紙媒体としての無為なる書籍化ではなかろう。時間的制約も大きなところとして関わるかたちで黒子、それも半ば死に体の無視されるだけの黒子として動くことを強いられている、筆者のことが好かぬようであるとの力学が圧倒的に強くも働いていると判じられる中でリソースは圧倒的に限られている」とこの身は目分量・[行き先]感を(まだ楽観的であった折より)遙かにシビアなものとなすに至っており(自身は終末論を流布するだけの哀れな終末論

者などではない、この身が無に帰すその日まで【終末「回避」主義者】たるつもりであるわけだが、生きること、良く生きることの執念に関しては人後に落ちるつもりはないとの筆者とても紛い物で溢れたこの世界では何をやっても無為無駄、普通に動いてももう助からないだろう、碌な死に方などできるはずがないだろうと当然によくも考えるにまで至っている —(てめえ自身が可愛くて泣くといった自己憐憫などという愚劣な心性は筆者には露もないが、おのれの内発的外発的無能さおよびおのれの置かれた状況のくだらなさを自身で冷たくもひたすらに嘲弄することを禁じ得ないとの虚無主義的がかったものがときに強くも作用しての中でそういう見方をなすに至っている) —)、といった中で取材も(経済活動と一とならざるをえぬ書籍化・紙媒体の流布などのためなどではなく)半ば最期の訴求に供せられれば、との観点でなすとのかたちに至っている)。

(出典(Source)紹介の部 110(7)はここまでとする)

以上ここまでの表記でもってして

「【(LHC 実験にあつて「どういふわけなのか」それと結びつく命名規則が用いられてもいるとの) ヘラクレス第 11 番功業】

および

【12 功業を終えた後のヘラクレスの最期】

の双方にて関わってくるとの、

【[ケンタウロス] と (ケンタウロスを苦しめ、ケンタウロスが用いもしたとの) [ヒドラの毒] の物語】

が

【大量の極微ブラックホール生成による災厄】

を描く小説 *Thrice Upon a Time* (邦題)『未来からのホットライン』(「であるから重要なこととして、」[2009 年から 2010 年の作中世界にての加速器による災厄] との絡みで既述の通りの際立つての先覚性を伴っている作品) にも関わってくる側面がある」

との話に通ずるところとして、

[ケンタウロスを命名由来に持つケンタウロ・イベント (1972 年に提唱の萌芽となる事象がボリビアにて観測されたとの仮説上の現象) というものは [超高エネルギー宇宙線による極微ブラックホール生成] (及び間を経ずにその蒸発) と結びつけて語られがちなものである (; ケンタウロ・イベントが真なるものとしてそこにある場合、それは従前科学の枠組みより低いエネルギーでもってしてブラックホールが生まれ落ちていることの証左たりうとのことが (1998 年の理論動向の変化を受けて) 科学界の一部専門家によって取り沙汰されてきた)]

との経緯があるとのことにまつわつての解説をなしてきた (: 小説 1980 年初出の *Thrice Upon a Time* (邦題)『未来からのホットライン』にてセンチュリオンの災厄 —既述のようにケンタウロスとの結びつきが観念される災厄— がブラックホール人為生成(およびそれに起因する人類と地球の滅亡の回避) の後にあつて劇中具現化している、加速器による数百万個の極微ブラックホール生成のことが「奇怪な」(としか表しようがない理由について解説済みの) 先覚性と共に描かれているとの同小説に同じくものことが見てとれるとのことがありもしての中での解説をなしてきた)。

以上のようなこと「もが」あることにつき筆者脳裏をよぎつたのは

「同じくものは小説 *Thrice Upon a Time* (邦題)『未来からのホットライン』(1980)の作者(小説家ジェイムズ・ホーガン)の
[計算尽くの属人的レベルでの意図的寓意添付]
などでは済まされるようなことではおよそない」

との[事実に依拠しての見立て]である(第一、ジェイムズ・ホーガンの表記小説の執筆時にあってはブラックホールの加速器による人為生成が顧慮されるだけの理論的基盤がなかった(と広くもの発表動向および議論言論の動向から容易に推し量れる)とのことがある。第二、第一の点にもかかわらずホーガンの予見的やりようには「非人間的な」、あまりにも、との前に副詞をつけざるをえないのかたちで「非人間的な」正確性が伴っているとのことがある。すなわち、【後にて欧州加速器実験機関のホーキング輻射を背景にしての安全性強弁(2003)およびその非有効性(2004年以後より議論の俎上になったとも、2008年よりホーキング輻射に換えて宇宙線のことを安全性論拠に強くも持ち出しての報告書が出される)にまつわっての予見的側面】、【生成ブラックホールが数百万に及ぶとの数的レベルでの近似性をともなう予見的側面】、【2009年年末がひとつのターニング・ポイントになるとのことにまつわっての時期的な意味での予見的側面】との各側面で「非人間的な」正確性が作家やりように伴っているとのことが「ある」—また、『未来からのホットライン』作者ジェイムズ・パトリック・ホーガンは作中のブラックホール生成を現行の科学理論枠組みとは関係ないと判じられるフィクション作家やりようとして[タウ波の過去遡行作用]なるものと結びつけているだけであり、理由付けの側面ではなんら予測をしていない、が、結果だけは後の議論動向を精巧になぞるが如しやりようをなしているとの怪物がかつた側面を見せている。その点、本稿にあっては以上のこたらいかに異様なのか、1980年時点での(「普通に考えれば、」もの)言及不可能性を伴っていることなのかについての微に入っの(ひたすらに出典に依拠しての)解説に努めんとしている—)。

さらに述べれば、

「ケンタウロス関連事物とブラックホール生成の予見的ありようの関係の背後には本稿の補説4の部にてその性質について論じてきたとのこと、
[聖書の使徒行伝に見る予言の霊に憑かれた女(ピュートーンに憑かれた女)絡みの嗜虐的な寓意の歴史的表出と同様のやりよう]
が具現化している(この世界にはそうしたものが目立ってみとめられる)」

との【具体的事例を挙げ連ねての証拠に依拠しての見立て】がこの身、本稿筆者にはある(そうもしたことを述べもしているとのことについて、その節義・節度の程について疑わしいとの向きらにあっては本稿にての補説4と振っての一連の段で筆者が一体全体どういった事例をひたすらに確認容易なる膨大な典拠を付して挙げてきたのか、確認を求めたい次第でもある—そこにて解説なしてきたことを通じもして、【欺瞞にひたすらに依存して生き欺瞞に基づいて何でもしようとの人間存在の家畜性を嘲笑い、かつ、人間存在を虫けら・芥子粒のように扱っているとの「科学的知見をひけらかしての」力学の心性】がどういったものなのか確認を求めたい次第でもある—)。

そうした見立てが胸中に去来をみている理由としては一義的には

[先覚性](非人間的かつ(神秘的ではない)科学的なる先覚性)

との絡みで(LHC絡みで国内で長期化した行政訴訟を権威の首府とされる研究機関を相手方にしてのひとつの訴求手段として展開してきたような人間として)よくよ分析しているとのことがあるからであるわけだが、よりもって述べれば、

「(先に典拠となる資料も示したところとして)LHCに関してはホーキング輻射(ふくしゃ)が安全性論拠と見做されなくなったところ、今度は[宇宙線]が安全性の論拠として強くも持ち出されたとのことがある。その[宇宙線]が[ケンタウロスの毒]のようなものであることを小説家が知り、かつ、なおかつ、自身の作品に反映させることが1980年においてでなしえただろうか?それができたわ

けがないとはすぐに察しがつくところである。そして、そこに「もまた」嗜虐的なやりようの問題が関わっている。宇宙線が後に加速器製ブラックホールの安全性論拠に使われること（あるいは使「わせる」こと）を念頭に置いて、（ヘラクレス功業におけるプロメテウス解放と結びつく毒の話とも結びつく）ケンタウロ、高エネルギー宇宙線と結びつけられる素地あったケンタウロのことを馬鹿にして傀儡（くぐつ）に用いさせたのではないか

とのこともまた脳裏をよぎっている。

上の可能性に真っ向から対置するところとして本稿筆者は当然、

[次のような可能性]

が成り立ちうるのか、との検討「も」なしている。

（検討なしたところの可能性論として）

「作家ジェームズ・ホーガン（スライス・アポン・ア・タイムこと『未来のホットライン』をものした作家）が加速器によるブラックホール生成可能性をあらかじめ予見できるだけの事情があった。

であるから、同男は

【[銀河に極小ブラックホールが見当たらないのはそれがすぐに蒸発するからであるとの内容のホーキング輻射]（概念としての提唱は1970年代）が言い訳として用いられるリスク性質をも顧慮しての加速器によるブラックホール生成】（彼の小説にあつての「2009年から2010年の」核融合炉敷設型加速器によるブラックホール生成）

との設定をその作品に採用した。のみならず、同作家は他の可能性として[宇宙線]が言い訳に講じられる可能性まで顧慮して、[宇宙線]と結びつく比喩——ケンタウロとそれと語順込みにして一字を除いての綴り字を共有するセンチュリオン（一部言論人の言いようではケンタウロスとの言葉と由来として結びついていると明言されているローマの百人隊関連の名詞）を持ち出しているの複合的比喩——を前面に出した、そう、ブラックホール関連の出来事が落着を見た後に人類に襲いかかるとのウィルス禍に対して用いられているセンチュリオンという秘匿コードに仮託しながらも前面に出しました」

だが、上のような可能性——お分かりいただけようか、と思うが、「あまりにも」うがっての可能性論ともなる——についてはよくよく検討なして、「そういったことはありえるようなことではないだろう」との帰結に到達した。本稿の内容をきちんとご理解している向きにあつては「あまりにもくどい」と見られようこととはとらえるが、次のようなことらがあるがゆえに、である。

第一。

再言するも、

[粒子加速器リスクに対して[宇宙線]を持ち出すやりよう]

が[初登場]を見たのはそもそも、表記の小説 Thrice Upon a Time (邦題)『未来からのホットライン』(1980)が世に出て後のことである(とされている/下の出典表記を参照のこと)。であるから、作家が[宇宙線]絡みのことが[ブラックホール人為生成(往時、普通には予見だにされることもなかったはずの人為生成でもいい)の安全性論拠]として持ち出されることを予見していたとは考えられないとのことがある。

(出典として:本稿の前半部、[出典\(Source\)紹介の部 12](#)にての呈示資料で示しているように功成り名遂げ[王立協会会長ポスト]に就いていたことで世間的に知られている斯界の泰斗といった大物物理学者、マーティン・リースがその若かりし折、【真空の相転移】との加速器による【ブラックホール生成】とは異なる方向で問題となっていたリスクに対して1983年に安全性論拠としてはじめて持ち出したのが[宇宙線]であるとのことがあり(直下のマー

ティン・リースの手になる書籍の記述よりの再度の引用部を参照されたい)、それは『未来からのホットライン』原著 Thrice Upon a Time の刊行時期(1980)より後のことである。

(直下、[宇宙線を持ち出しての安全性論拠が 1983 年にあってはじめて [真空の相転移] リスク絡みで持ち出されたことの出典としての Our Final Century: Will the Human Race Survive the Twenty-first Century? (邦題)『今世紀で人類は終わる?』(草思社)、154 ページから 157 ページよりの「再度の」引用をなすとして)

一説では、それと同じく、粒子の衝突時に発生した高エネルギーを引き金に、空間の構造をズタズタにする「相転移」が起こる、といわれている。新しい相に転移した真空はその後、泡がふくらむように膨張していく。この泡のなかでは、原子は存在できない。すなわち、私たちや地球、果てはそれを取り囲む宇宙も「一巻の終わり」というわけだ。最終的には銀河系、いやその先まですっばりのみこまれてしまうだろう。…(中略)…この種の高エネルギー実験は、一九八三年にはすでに物理学者の関心を集めていた。私はこの問題点について、プリンストン高等研究所をたずねた折、やはり研究所を訪れていて、のちにその教授となったオランダ人研究者、ピート・ハットといろいろ論じあった。…(中略)…その結果、実験の安全性をはかるひとつの方法として、同じようなことがいままでに自然界であったかを探る、という手があることに気づいた。するとどうだろう、一九八三年の計画にあった実験と似た衝突が、宇宙では日常茶飯事に見られることがわかった。宇宙いっぱい宇宙線と呼ばれる粒子が光速で飛び交い、ほかの原子核と何度も衝突をくり返していたのである。その衝突の激しさはすさまじく、当時実行可能とされた実験ではとうていどりに着けないものだった。このため、真空はそれほど壊れやすくはなく、粒子加速器の実験で何をしたらとどろ、ズタズタになることはないという結論に達した。本当にそんなにもろかったら、そもそも人類誕生に至るまで、宇宙がもちこたえられたはずがない。

(国内で流通を見ている訳書よりの引用部はここまでとする —※—)

(※上記の部の Our Final Century: Will the Human Race Survive the Twenty-first Century?原著版テキスト、オンライン上より確認できるところの原著版テキストも下に挙げておく。

“Likewise, some have speculated that the concentrated energy created when particles crash together could trigger a "phase transition" that would rip the fabric of space itself. The boundary of the new-style vacuum would spread like an expanding bubble. In that bubble atoms could not exist: it would be "curtains" for us, for Earth, and indeed for the wider cosmos; eventually, the entire galaxy, and beyond, would be engulfed. [. . .] **Back in 1983**, physicists were already becoming interested in high-energy experiments of this kind. While visiting the Institute for Advanced Study in Princeton, I discussed these issues with a Dutch colleague, Piet Hut, who was also visiting Princeton and subsequently became a professor there. (The academic style of this institute, where Freeman Dyson has long been a professor, encourages "out of the box" thinking and speculations.) **Hut and I realised that one way of checking whether an experiment is safe would be to see whether nature has already done it. The entire cosmos is pervaded by particles known as cosmic rays that hurtle through space at almost the speed of light; these particles routinely crash into other atomic nuclei in space, with even greater violence than could be achieved in any currently feasible experiment.** Hut and I concluded that empty space cannot be so fragile that it can be ripped apart by anything that physicists could do in their accelerator experiments. If it were, then the universe would not have lasted long enough for us to be here at all.”)

以上のこと、一代貴族として男爵位を叙爵された貴族にして、王立協会（現代に至るまでの人類の科学的進歩を後押ししてきたイングランドの科学者団体／アイザック・ニュートンなどがその初期にての会長になっていたところの団体／細かくも先述のところとして【ソロモンの家】とのフランシス・ベーコン小説『ニュー・アトランティス』に見る文明促進機関の観点が設立に影響を与えていると指摘されている団体）の会長にまでなり遂げたとの「ロード」・マーチン・リースの手によって【加速器による破滅のリスク（真空の相転移とされるもの）に対する安全性論拠】として【宇宙線を引き合いに出すとの式】が考案されたのが（小説刊行後の）1983年にあるとされていることをもってしてからして、

「「時期的問題として」小説 *Thrice Upon a Time*（邦題）『未来からのホットライン』作者（ジェイムズ・ホーガン）がそちら1980年初出小説に
[[宇宙線]を持ち出しての加速器リスク否定に関する議論動向]（初期は[ブラックホール生成]より[真空の相転移]リスクにまつわるものであった）
を明示的ではないとの式で作家が属人的レベルで反映させていたとは到底言えない」

と指摘するのである（尚、同じくものことの話柄としての有効性を無視しても、あるいは、無視せざるをえなくなっても問題の重篤性には何の影響を与えないとも強調しておく。そも、[加速器による数百万個といったかたちでの大量の極微ブラックホール生成]のことを作家が時期的観点込みで奇怪な式で予見していること自体が常軌を逸しているとのことには違いはない、なんにせよ違いはないからである）。

（『未来からのホットライン』作者の属人的意図の問題として当該小説にケンタウロ・イベント絡みで[宇宙線と極微ブラックホールにまつわる寓意]が込められていたとは「人間の常識的やりよりのレベルでは」考えられないとの理由としての）**第二**。

既に第一の点がゆえに検討する必要もないところなのだが、敢えても申し述べれば、ケンタウロ・イベントというもの（同ケンタウロ・イベントについてはどうしてそのような[こじつけがましき命名]がなされているのか、筆者が疑問視しているところのもの「でも」あるわけだが、それは置く）が

[ブラックホール「の生成」]

と結びつけられるようになったのは

「1998年の余剰次元理論登場の後」

のことであるとのことも大きなところとしてある。

（本稿にあつての **出典 (Source) 紹介の部 1** から **出典 (Source) 紹介の部 3** にての経緯解説部、**出典 (Source) 紹介の部 76 (7)** などにての多少細かくもの理論動向言及部にて専心して論じているように余剰次元理論の「1998年の」登場、それに次ぐ理論動向の変遷から極微ブラックホールの生成のされやすさが論じられるようになったとことがある。それがゆえ、そもそも、超高エネルギー宇宙線の類でブラックホールが生成されるなどという話が論じられるようになったのは（既にケンタウロ・イベントとの言葉もほとんど一般人には知られぬところながら「あった」ものの）これまた1980年小説「より後」のことであると判じられるようになっている —— **出典 (Source) 紹介の部 110 (7)** でその内容を引くこととしたケンタウロ・イベントとブラックホール生成のことを扱っている論文（コーネル大の論稿配布サーバー、arXiv にて誰でもダウンロード可能なものとして公開されている論文）としての *Can Centauros or Chirons be the first observations of evaporating mini Black Holes?* 「でも」その冒頭ページにそれが[余剰次元理論の影響を受けての話]であることが明言され（またも引用すれば “ We argue that the signals expected from the evaporation of mini black holes — **predicted in TeV gravity models with large extra dimensions, and possibly produced in ultra high energy collisions in the atmosphere** — are quite similar to the characteristics of the Centauro events, an old mystery of

cosmic-ray physics.” (訳として)「我々は 一大規模余剰次元モデルにあつての TeV 領域の重力で生成が予測されているところの、および、大気にての超高エネルギー宇宙線の衝突状況によって生成されるところの— 極微ブラックホールの蒸発にて(観測が)期されるところの兆候が「相当程度」ケンタウロ・イベント、宇宙線物理学の古くものミステリーとなっているそれに似通っているとのことを議論するところのものである」と表記され)、また、同論稿の執筆年次も 2004 年となっている——)

余剰次元理論の提唱までは — (本稿の前半部にて実験機関公式報告書およびプランクエネルギーにまつわる議論について出典明示してその文言にのみ依拠して紹介してきたところ、および、直近抜粋の「余剰次元理論に依拠しての」とのことも強くも明示しての論稿よりの引用部に見るように) — ケンタウロ・イベントなるものがブラックホールと結びつけられていたとのこと「はない」との按配になっている。

であるから、

[小説に見る先覚性] (何百万ものブラックホールが 2009 年から 2010 年を舞台にしての作中世界で加速器によって生成されたと描いているとの先覚性)

それ自体と

[現実の科学界の理論の進展に受けての公式報告 (「その欺瞞性に向き合わなければ何に向き合うのか」との観点から本稿では冒頭部より CERN およびブルックヘブン国立加速器研究所の報告文書の内容を本稿では事細かに引用している) および「2001 年まで」ブラックホール生成はありえないと強弁していた諸々の学界主導者層の意見書 (意見書との絡みでは本稿前半部 **出典 (Source) 紹介の部 5にてパグウォッシュ会議を代表してノーベル賞受賞した科学者の内の一人となっている物理学者フランチェスコ・カロジェロのやりようを紹介している) などに見るありよう]**

との間に横たわる時期的離隔の問題から 1980 年に筆を動かしていた (刊行までのスパンを考えれば「どんなに遅くとも 1979 年に筆を起こしだしていたのであろう」としたほうが適切かもしれない) といった作家が [ケンタウロス] (ないしケンタウロ) を意識して、それでいて、ケンタウロという言葉は「直接的には」使わずに意味論的・外形的にそれと複合的に接合するとのセンチュリオンなる言葉を用いて、[ブラックホール関連の寓意] を自己の作品に込めるとの可能性は「慎重に慎重を期したうえで述べても」およそありえなからう、「普通に考えれば、」絶対にありえなからうといった按配になっていると申し述べるのである (：制約ばかりを負い、ときに馬鹿なことをさせられる一方で思索の巡らす余力余念さえ蔵していないようにも見える世間普通一般の人間にそこまで深くのおもんばかりがなせるのかは置き (そもそも普通の人間はブラックホール生成問題にまつわるあれやこれやどころか、そうした問題が取り沙汰されていることにすら「どういうわけなのか」全く目を向けようとしない節もあるわけだが (大概の人間が気にすることと言えば続きもするはずもないと判じられる論拠が山積みになっている畜舎の問題、そして、畜舎に付された装飾の問題だけであると見える)、それもまた置くとして)、とにかくも、そういう問題がある)。

(作家個人の属人的なレベルの先覚性、人間レベルのそれがゆえにケンタウロと結びつくものが問題小説にて持ち出されているとのことが「ありえない」と考えられるところの理由としての) **第三。**

第一および第二 (本来的には第一の点で説明は済んでおり、こちらの第二の点すらも検討する必要がないこととなるかととらえる) に加えて、ジェイムズ・ホーガンがそのような隠喩的かつ凝つての比喩を「人間の意図として」持ち出す【人間的意図】が感じられないとのことがある (そう、問題があるとの認識があるのであれば、その点についてははっきり口に出して言えばいいだけである)。

また、ホワイダニット(何故、そうしたのか)、作家にそうする意図・動機がなかったとのことに加えて、同

じくもの話に関しては

**【加速器によるブラックホールリスクとヘラクレスの功業の他の側面にあつての「不快極まりない」
多重的結びつき】**

との要素が介在しているとの指摘がなせるように「も」になっており、といった側面からも「ことは、」たかだか、一作家一胸中の問題で済むことではないとの見立てがなせるようになっていくこと「も」がある——※本稿全体の指し示しとも関わるるところをくどくも振り返れば、である。[CERNのLHC実験が[ヘラクレス12功業(の内の第11功業)]と多重的に結びつけられることになった]との流れが1990年代以降に地固めするように固まっていた(命名規則の問題として[ヘラクレス第11番目の功業にて登場する巨人アトラス]の名前が用いられてのATLAS Groupが90年代前半に発足したといったことがある(出典(Source)紹介の部36(2)))とのそのかなり前、1980年に世に出ていたThrice Upon a Time『未来からのホットライン』の作者(ジェイムズ・ホーガン)が【2009年から2010年の世界(小説刊行後30年近く後の架空の近未来世界)を舞台にしての欧州の核融合プラント敷設型加速器によって生まれ落ちたブラックホールによる地球滅亡の[確定]の事実を曲げるための過去への通信】を主要モチーフとする問題作『未来からのホットライン』にあつて【ヘラクレス第11番目の功業(およびヘラクレスの悲惨なる末期)と結びつくケンタウロスと複合的に接合するセンチュリオン(原義としてはローマの百人隊長)に起因する災厄を防ぐための過去への通信】「をも」モチーフとしていることからして問題になる(一つにネックとなるのは[ヘラクレスの11番目の功業]である。につき、[現実]も[事実]を見ない向きが「嘘であろう」と決めつけて喚こうが真実を示す[文献的事実]の山を「後追いでできるかたちで」呈示しているのが本稿である。につき、本稿にて筆者が何を具体的にどう摘示しているのか「この者の言っていることの嘘を暴いてやろう」とのスタンスでもよくよく検討してみるといい)——。

以上三点のことをもってして

(検討なしたところの可能性論として)

「作家ジェイムズ・ホーガン(スライス・アポン・ア・タイム、『未来のホットライン』をものした作家)が加速器によるブラックホール生成可能性をあらかじめ予見できるだけの事情があつた。

であるから、同男は

[「銀河に極小ブラックホールが見当たらないのはそれがすぐに蒸発するからであるとの内容のホーキング輻射」(概念としての提唱は1970年代)が言い訳として用いられるリスク性質をも顧慮しての加速器によるブラックホール生成] (「2009年から2010年の」核融合炉敷設型加速器によるブラックホール生成)

との設定をその作品に採用した。のみならず、作家は他の可能性として[宇宙線]が言い訳に講じられる可能性まで顧慮して、[宇宙線]と結びつく比喩——ケンタウロとそれと語順込みにして一字を除いての綴り字を共有するセンチュリオンを持ち出しての複合的比喩——を持ち出した、ブラックホール関連の出来事が着陸を見た後に人類に襲いかかるとのウィルス禍に対して用いられているセンチュリオンという秘匿コードに仮託しながらも、である」

という可能性論がいかにもって[成り立ちがたい]ものであるか、おおよそにしてご理解いただけるか、と期待する(対してそうしたことを理解しないような向きらには多くは期待せず「愚劣さに色を添えておのれを殺す存在に嘲笑われるような邪魔だけはしてくれるな」と言いたい次第でもある)。

以上、解説したところで書くが、本件に関しては、そう、

**【【加速器のブラックホール生成問題の安全性論拠として転用された宇宙線、それと結びつけて語られもするケンタウロ・イベント】および【ヘラクレス伝承と複合的に関わるケンタウロとヒドラの毒の物語】および【奇怪なまでに正確な予見性を呈しているとのことで長大なる本稿の冒頭部より問題視してきた小説 Thrice Upon a Time (邦題)『未来からのホットライン』(1980)】ら
の間に横たわる関係性】**

については次のようなこと「も」がある ——以下にて述べることはそこからして「[人間存在のくだらなさ]を悪魔のような存在が嘲笑っているが如くのもの」となる、奥歯に衣着せず申し述べれば、「できすぎ度合いが[人間存在の実体](下らぬ傀儡ぐつと墮しているとの実体)との兼ね合いで[人間社会(という名の根底からの紛い物)の未来を信じている者]を悪魔のような存在が嘲笑っているが如くのもの」と解される」ところとなる——。

ジェイムズ・ホーガンの1980年に刊行された原著 *Thrice Upon a Time* の邦題は『未来からのホットライン』であるが、(国内SF書籍の老舗出版社として名が知られている版元、東京創元社より刊行されているとの)同邦訳作品を訳したのは[職業的翻訳家にしてSF業界立役者の一人]として名をよく知られる人物となり(後述するが、既に鬼籍に入っているとの柴野拓美氏とその方面ではよく名前が知られているとされる人物となる)、**同人物が *Thrice Upon a Time* の訳業に臨んだ際に用いたペンネームが「コズミック・レイ(Cosmic-Ray)」こと「宇宙線」より命名してのもの、**
[小隅黎(コズミ・レイ)]
とのものになっているとのことがある ——(これより「別」訳者による新訳版が出る可能性も否めないもののジェイムズ・ホーガンのスライス・アポン・ア・タイムの現行、書店にて流通の文庫版をご覧いただければ分かりますが、そこには表紙からして宇宙線ことコズミック・レイに由来する[小隅黎(コズミ・レイ)]とのペンネームが見てとれるようになっている)——。

小説『スライス・アポン・タイム』の訳書にて[コズミック・レイ](宇宙線)に筆名由来を持つ訳者が(書籍カバーにその名が記載されるように)関わっていたとのことからして不気味なことである。

というのも、(まじめな読み手にはいちいち繰り返さずともご理解いただけることか、とも思うのだが)、以下のことが述べられるようになっているからである。

『未来からのホットライン』は[数百万個の極微ブラックホール生成]を(科学界の理論動向の深化進展にまつわる動静から見れば)奇怪なまでに先覚的に言及しているとの小説作品となるが、と同時に、**同作、[ホーキング輻射](1974年から提唱されているとの自然界では極微ブラックホールは即時蒸発しているとの理論)がブラックホール生成がなされての中で「事無きを得られる」との関係機関の「言い逃れ」(人類に終焉をもたらした挙に対する言い逃れ)に使われていることを作品設定に採用しているとの小説となる。**

他面、現実世界では2001年よりブラックホール生成可能性が(1998年に起点置いての理論動向の深化から)科学界主流筋に肯定的に見られるようになったとのことがある ——1999年、それが加速器実験反対派に可能性論として「どうなのか」とはじめて問われ出した折には科学界が一丸となって[ブラックホール生成の可能性]だに否定されていたのが変節を見て肯定的に見られるようになったとのことがある——、**そうした中でさらにもってして「2004年から」【ブラックホール生成にまつわっての安全性論拠としてホーキング輻射を持ち出すとの式】がホーキング輻射の発現それ自体の盤石性に疑念が呈されだしたとのかたちで揺らぎだした**(:1980年小説に見る流れと同様にホーキング輻射 ——本来的に【自然界に小さきブラックホールがみとめられないことに対する理由付け】をなすものともなっている、ブラックホールは熱放射してやがて消えていくとの70年代に端を発する仮説上の理論——の発現性の頼りなさが問題になりだした。本稿のつい先立っての段にての[案件分析をなしている米国家学者論稿よりの「再度の」原文引用の部](および**出典(Source)紹介の部**3)にても言及されている

ことではあるが、その方面を専門にしている物理学者ウィリアム・ウンルー William Unruh(ウィリアム・ウンルー)のホーキング輻射の理論的至当性にまつわっての2004年分析を契機にホーキング輻射発現の盤石性について懸念視されだした経緯について呈示している)。結果、加速器によるブラックホール生成の可能性の「主たる」安全性論拠は「ホーキング輻射」に代えての「宇宙線」に求められるとのことになったとされている(ちなみに先述のように加速器に起因するリスク問題に宇宙線のことを引き合いに出すとの着想は1983年のマーチン・リースに端を発しているとされていることは本稿にて何度か同じくもの出典明示 — 出典(Source)紹介の部 12 にて挙げたものを再掲しての出典明示 — をなしながら紹介していることである)。

といった現実世界の動静 — 大量のブラックホール生成に対して「ホーキング輻射」を用いて問題ないとする科学界の安全性論拠が「宇宙線」を主眼においてのものに切り替わったとされること — を想起させるように、

[人為生成の大量の極微ブラックホールを描く「先覚的」小説、「ホーキング輻射」が安全性論拠として意をなさぬことにまで言及した小説となる Thrice Upon a Time(邦題)『未来からのホットライン』]

は「宇宙線(コズミック・レイ)」に由来する筆名としての「小隅黎(コズミ・レイ)」が訳者として原著に訳を付しての邦訳版が刊行・流通させられもしてきた作品ともなっている。

そうもしたことは実にできすぎている。

まるで「訳者」ならぬ「役者」を用いて嗜虐的な脚本での凝ったショーが演じられているようにも映るとの式、その式で実にできすぎている(※)。

(※尚、「小隅黎(コズミ・レイ)」が関与しての『未来からのホットライン』という邦題の初版版が出たのは1983年4月23日であると当方所持の文庫版『未来からのホットライン』末尾の部にて記載されている。その1983年4月23日という日本語版『スライス・アポン・ア・タイム』たる『未来からのホットライン』が刊行された時期については丁度、マーチン・リースが「真空の相転移」リスクに対して「宇宙線」を用いての粒子加速器実験安全性論拠を考案していたのと同年とされており(つい先立っての段にあつて「も」Our Final Century: Will the Human Race Survive the Twenty-first Century?(邦題)『今世紀で人類は終わる?』(草思社)というマーチン・リース本人の手になる書籍の内容を一オンライン上それだけで「文献的事実」の問題を確認できるとの原著原文テキストも含めて — 出典(Source)紹介の部 12 にて挙げたのと同文のものとして再掲し明示しているとおりである)、該当書籍(邦題『未来からのホットライン』)の訳業が「何時頃から事始めを見ていたのか」考えれば、コズミック・レイが訳者(故人に対して礼に失すとの物言いはなってしまうのだが、筆者からすれば訳者ではなく「役者」であったようにも見える)の筆名とも対応しているとの事実、「その程度のことからして」、人間一個一個の思惑によるところ「ではない」と想起されるようになっている)

かてて加えて、(これまたくどくもの繰り返しとなるが)、「宇宙線(コズミック・レイ)」とのことについて述べれば、『未来からのホットライン』にて「センチュリオン Centurion」(元来はローマの百人隊長の意)と綴り順および構成文字の過半を共有するとの「ケンタウロ Centauro」 — 「Cent」「u」「r」「i」「o」「n」と「Cent」「a」「u」「r」「o」 — に関わるところの一致性、【ヘラクレスとヒドラの毒にまつわるエピソード】(100の頭を持つ多頭の蛇たるラドーンといったものが登場してくる黄金の林檎を求めての11番目の功業にてヘラクレスが「多頭のヒドラの毒に冒され不死性がゆえに延々苦しみ続けることになったケンタ

ウロスの不死]を代償に[プロメテウス]を解放し、黄金の林檎のアトラスを介しての取得に至るとのエピソード)および【LHC 実験】(同じくも【ヘラクレス 11 番目】の功業に関わってくるアトラスらを命名規則に用いての実験)を媒介項にしての一致性のことが [ケンタウロ・イベント] (後にて[極微ブラックホールによる宇宙線による生成の観察試行挙動]と結びつけられるようになったケンタウロ・イベント)との絡みで『未来からのホットライン』に「宇宙線絡みで」予見がかったのものとして垣間見れることもまたあり、よりもって「できすぎている」 とのこともある。

くどくもなりはしたが、以上表記のことを繰り返しもしたところの理由たる【小隅黎なるペンネームでもってしての訳業のなされよう】について広く目に付つきやすきところの典拠を下に挙げておくこととする。

出典 (Source) 紹介の部 110 (8)

SOURCE 110(8)

“Abaddon, to have been the name of the same Ophite God, with whose worship the world had been so long infected. Ob. I take Abaddon, or, as it is mentioned in the Revelations, Abaddon, to have been the name of the same Ophite God, with whose worship the world had been so long infected. He is termed by the Evangelist Αβαδδων, τον Αγγελλον της Αβυσσου, the angel of the bottomless pit; that is, the prince of darkness. In another place he is described as the dragon, that old serpent, which is the devil, and Satan. Hence I think, that the learned Heinsius is very right in the opinion, which he has given upon this passage; when he makes Abaddon the same as the serpent Pytho.”

Jacob Bryant, A New System or Analysis of Ancient Mythology Vol. II. (1807) OB, OUB, PYTHO, SIVE DE OPHICENTRIA

the September 11 attacks (coordinates) 38.87099° N 77.05596° W
↑
setting American Airlines Flight 77 (Boeing 7x7 Series)

recall

‘ugly’ [Book of Revelation] filled with [number 7]
7 stars, 7 lampstands, 7 churches, 7 seals, lamb having 7 horns, 7 angels, 7 trumpets, 7 thunders, 7 visions, 7 bowls, 7 plagues, 7 words, 7 headed dragon

(Greek Ἀποκάλυψις Ἰωάννου, Apocalypsis Ioannou) means ‘un-covering’

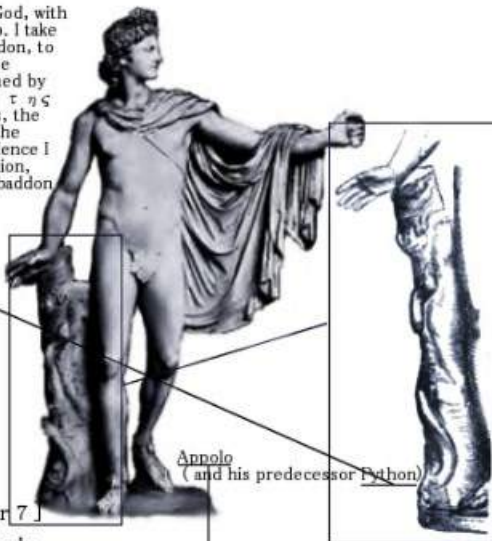
[bottomless pit]
They had over them a king, an angel of the abyss, whose name in Hebrew is Abaddon, but in the Greek he is called Apollyon. (Revelation 9:11)

(in Satan’s voyage through abyss) → ‘Original Sin’ for religious people
The secrets of the hoary deep; a dark illimitable ocean, without bound, / Without dimension, where length, breadth, and height, / And time, and place, are lost; where eldest Night And Chaos, ancestors of Nature, hold Eternal anarchy, amidst the noise Of endless wars, and by confusion stand.

John Milton Paradise Lost (1667) BOOK II, lines 890-895

(peculiar) BH like properties (seen in 17th century)

Collapse of 1 WTC - 7 WTC and Boeing 7x7 Series
7-7 London bombings (2005) (referred as 7/7)



Apollo (and his predecessor Pytho)

ここ出典 (Source) 紹介の部 110 (8) にあつては

「加速器におけるブラックホール生成問題 —それは【宇宙線】を主たる安全性論拠とされるに至ったものでもある— に通ずるところのできすぎた先覚的言及を複合的になしている小説 *Thrice Upon a Time* (原著刊行 1980 年) の国内邦訳版 (1983 年刊行の『未来からのホットライン』) の訳者の筆名が【宇宙線】を意味するものとなっている]

このことの紹介をなしておくこととする。

(直下、鬼籍に入った人物に対する礼を失するようなやりようとして「そうはなしたくはなかった」ところであるのだが、重篤な[問題]に関わると見、現行にての和文ウィキペディア [柴野拓美] 項目よりの敢えてもの引用をなすこととする)

柴野拓美(しばの たくみ、1926 年 10 月 27 日 - 2010 年 1 月 16 日)は、日本の SF 翻訳家、SF 作家であり、SF 研究者である。アマチュア作家をプロに育てる才能でも有名だった。石川県金沢市出身。父は陸軍軍人にして、詩人・画家でもあり、多数の軍歌を作詞・作曲、満州映画協会の創設にも関わった、柴野為亥知(ためいち)。…(中略)…1957 年に創設された日本初の SF ファングループ『宇宙塵』(最初のグループ名称は「科学創作クラブ」)主宰者で、同名の同人誌の編集長となる[1]。同人誌『宇宙塵』は本来『宇宙人』のタイトルの予定であったが、入稿直前に独断で『宇宙塵』に改名。星新一を筆頭に三桁の SF 作家を輩出して伝説的同人誌となる。柴野は死去するまで『宇宙塵』の「主宰」をつとめた。…(中略)… **小隅黎(こずみれい)のペンネームで翻訳・創作もおこなっている(ペンネームの由来は『コズミック・レイ』から)。**…

(現行にあつてのウィキペディア記載よりの引用部はここまでとする —※—)

(※再言するが、柴野拓美氏の筆名であると上にて紹介されているとおりの小隅黎との筆名は日本国内書店で流通を見ている『未来からのホットライン』の表紙の一目でもってして確認出来ることである。また、上の故・柴野拓美氏に関してはその訳業にての足跡がハード SF 作品 60 作超に及んでいるとの著書・訳書多数の人物となつてはいるが(和文ウィキペディアにもそのように紹介されている)、といったところ、「多数の中の少に虫眼鏡越しに着目している」と見られかねないところを差し引いて見ることは妥当ではない、換言すれば、氏がコズミックレイ[宇宙線]から取つてのペンネーム、[小隅黎]との名義にて奇怪なる小説 —[宇宙線]のことも(大仰に、ではなくに人類の存続問題に関わるとの)その先覚的言及の特質に深くも深くも関わっているとの小説『スライス・アポン・ア・タイム』— の訳をなしていたことは[できすぎ]と述べてしかるべきようなどころではある —ここまでの内容を理解できれば、何故、そうも述べるのか、納得なせるところであろうと断ずる—)

(**出典(Source) 紹介の部 110(8)**はここまでとする)

(1. から 3. と分かちての話にあつての 3. の段にての表記は以上とする)

さて、ここまできたところで、である。

[「人類絶滅挙動」とのかたちで [1999 年以降、取り沙汰がなされるに至った加速器リスク]

に対する予見をなしている小説たる **Thrice Upon a Time** (邦題)『未来からのホットライン』(1980)]

にあって

[【ヘラクレスの計 12 に及ぶ功業】、【(ヘラクレス第 11 功業に見る)巨人アトラス】、【トロイア崩壊伝承に見るトロイア崩壊の原因たる(他伝承では巨人アトラスが在処を把握するとされる)黄金の林檎】、【巨人アトラスともトロイア崩壊元凶たる黄金の林檎とも史的に(一部識者によって)結びつけられてきたとのアトランティス沈没伝承】、【アトラスやアトランティスといった固有名詞を付されての LHC 実験におけるブラックホール生成論議に関わる事物】との要素らのうちの「複数」を特色として帯びつつ、かつ、【911 の事件の発生(態様)にまつわる予見的言及】ないし【ブラックホール人為生成問題にまつわる「先覚的言及」】の一方、あるいは、その双方をなしているとの文物らが「不可解に」存在している]

とのことがいかに関わっているのか、1. から 3. と分かちもして指摘してきたことについての「まとめの」振り返り表記をなしておくこととする。

(1. から 3. と振っての流れでもってして小説作品 **Thrice Upon a Time** について何を指摘してきたのか、まとめの振り返りをなすとして)

1980 年にものされた **Thrice Upon a Time** (邦題)『未来からのホットライン』(2009 年 11 月に LHC が本格始動を見た — 前年度にほんの少し運転した後、2009 年 11 月 20 日に長期休止を経ての本格始動を見た — との現実世界の流れのことを想起させるように[2009 年年末から 2010 年年始の世界を舞台とし、核融合炉敷設加速器によるブラックホールの暴走を描くとの「1980 年」初出作品 **Thrice Upon a Time**) にあっては

[(過去への通信によって回避された) 極微ブラックホールの大量生成による人類滅亡間際の状況]

に続くものとして、

[センチュリオンという秘匿コードが振られた人工ウィルスによる災禍]

が目立って描かれているのだが([出典\(Source\) 紹介の部 110](#))、当該小説作中、[ブラックホール生成問題] と同様に [過去への通信] で防がれたその [センチュリオン案件] に見る [センチュリオン] という英単語については

[ヘラクレスの 12 功業およびヘラクレスの最期とつながりがあるケンタウロスとヒドラの毒の物語]

との濃厚なる関係性が観念されることとなっている。

次の各側面からである。

・【ヒドラの毒】を利用しての今際の際の奸計でもってヘラクレスを苦悶の果ての死へと追い込んだケンタウロス・ネツス、そして、ヘラクレスの【ヒドラの毒】が塗られた矢によって苦しみもがきヘラクレス 11 功業にてのプロメテウス解放に自己の不死を対価として捧げることを赦したケンタウロス・ケイロンを固有名詞をもった代表的存在とするのがケンタウロスであるが ([出典\(Source\) 紹介の](#)

部 110(2)、**出典(Source)紹介の部 110(3)**)、彼らケンタウロス、その半人半馬の伝説上の種族を意味する[Centauro]の綴りは

[[語順までをも同じくする] とのかたちにて Centurion (センチュリオン) との語と 8 字中 7 字を共有している]

とのことがある (:そして、そうもしたことがある中で**一部言論人らがケンタウロスとセンチュリオンを長といただくローマの百人隊(センチュリアあるいはケントウリア)の間には結びつきがあると指摘してきた**とのこともが現実にある)。

のみならず、**【代表的ケンタウロスであるケイロンおよびネッソスと関わる**ところの**ヘラクレス由来のヒドラの矢毒】**と**【(問題小説に見る)センチュリオンの毒】**とのことで**【毒】**に関わる**ところでの意味論的なる繋がり合いもが観念される**(**出典(Source)紹介の部 110(2)**、**出典(Source)紹介の部 110(3)**)。

(※センチュリオンとケンタウロが [語源] として結びついているとの見方を呈する向きもいるようだが、一般にはそうした言われようはなされていない (センチュリオンについてはローマの衣鉢を継いだビザンツ帝国時代に kentarch/kentarchos などとケンタウロスと響き近いき名称にて呼ばれていたとも英文 Wikipedia には表記されているが、ケンタウロスとセンチュリオンが語源的に接続しているとの話については筆者が色々資料渉猟しても確たる[これである]との典拠に行き当たることができなかつた)。センチュリオン、そちらが長を努める[ローマの百人隊]がラテン語の centum[100]から派生した語である[ケントウリア]と呼ばれるものとなっており、その [ケントウリア;センチュリア] Centuria などが英語のセンチュリー Century (一世紀;100 年)と語義・語感を一なるものとしているとのことは幅広くも知られているのだが、ケントウリアの長たる 100 人隊隊長、センチュリオン(ケントウリオ)が半人半馬の [ケンタウロス]と結びつくなどとの発想法はあまり聞かれないものとなっているのである。そのため、そうしたケンタウロスとセンチュリオンの語源にまつわる不確かな話(謬見の類かもしれない)には重きを置かず、ここでは [ケンタウロ]と[センチュリオン]のつながりあいについて[語句形状の際立っての近接性]や[対象小説を媒介にしての意味論上のつながり]に重きを置いての話をなしていること、「再度」、断っておく)

・LHC 実験は**【ヘラクレス 11 番目の功業】**と命名規則にて複合的なる関わりを呈している実験となる (**出典(Source)紹介の部 35**から**出典(Source)紹介の部 36(3)**以降の解説部を参照のこと)。

そのように LHC 実験と複合的に結びつく (明示的に結びつくようにされている) 、

【ヘラクレス 11 番目の功業 —アトラスと黄金の林檎の物語— 】

は、と同時に、

【プロメテウス解放とケンタウロスとヒドラの毒の物語】

「とも」接合している。

人間に火を与えた代償に肝臓を鷲に啄まれ続けるとの生き地獄を味わっていたプロメテウスをヘラクレスは第 11 功業にて解放するとのことをなした、具体的にはケンタウロスの不死を対価に解放するとのことをなした。[ヒドラの毒を塗り

たぐった弓の誤射によって不死がゆえの生き地獄を味あわせることとなってしまったケイロン(ヘラクレスの師匠筋のケンタウロス)の不死]をプロメテウス解放の代償にゼウスに捧げるとの事をヘラクレスがなしたとの伝承が伝わっているとのことがあるのである(出典(Source)紹介の部 110(3)にてアポドーロスのギリシャ神話要覧著作『ビブリオテケー』内記述をそのまま抜粋した/単純にプロメテウスの解放の対償としてケンタウロスの命を捧げた、とも表せられる)。

そうやってヘラクレスは第 11 番目の功業の折にてプロメテウスを解放し、同プロメテウスから

「黄金の林檎を欲するのならば【巨人アトラス】(プロメテウスの兄弟が巨人アトラスなり、LHCは同ATLASの名を冠する検出器を用いている—出典(Source)紹介の部 36(3)—)に【黄金の林檎】(LHCで用いられているイベント・ディスプレイ・ツールはATLANTISだが、ブラックホール生成を観測しようとされる同ATLANTISに名前転用されている海中に没したと伝わる古の陸塊アトランティスはヘラクレス 11 番目の功業の目的物である[黄金の林檎の園]と結びつけられて語られることがあったものでもある—出典(Source)紹介の部 35—)を取りにやらせればいい」

との助言を得たとされている。

そこに見る、【ケンタウロ・ケイロンとヒドラの毒の物語】と【第 11 番目のヘラクレス功業】の繋がり合い(【ケンタウロ・ケイロンとヒドラの毒の物語】および【LHCのブラックホール生成挙動と命名規則上つながっているヘラクレス功業】との結びつきにも通ずる繋がり合い)から

[理論動向を先取りしての LHC 実験に対する予見的なる側面を具備しての小説にあつてのブラックホール生成挙動に続いて秘匿コード・センチュリオンが登場する意味合い]

が—([ケンタウロ]⇔[センチュリオン]との接続性のことも加味して)—想起されるようになっているとのことがある。

・【ヘラクレスが第 11 番目の冒険にてプロメテウス解放の代償としてその不死をゼウスに差し出したケンタウロ・ケイロンの英文綴り(Chiron)】は【問題小説に見る Centurion(くどいが、元来はローマの百人隊長の意)】と—語順こそ若干、異にするとのことあれども—多くのアルファベットを共有しているとのこと「も」ある。「C|h|i|r|o|n」ケイロンと「C|e|n|t|u|r|i|o|n」センチュリオンとのかたちでケイロンの英文綴り 6 字中の 5 字はセンチュリオンの中に含まれていることになりもしているのである。無論、それ単体だけで見れば、実にもってこじつけがましい、牽強付会(far-fetched)となろう見解とはなるが、本件に関しては複線的に顧慮して然るべき他事情があり、それらと顧慮すると同じくものことととも「うがち過ぎ」にはならないとのことがある(たとえば、ケンタウロ・ケイロンの Chiron の名が用いられての宇宙線関連の現象に対する命名規則—ケンタウロ・イベントと呼ばれるその中に包摂される命名規則—もが後の 1998 年の理論動向変転を受けて【ブラックホールの予想以上に低いエネルギー程度での生成】と結びつけられるようになっている、そして、そのことが【加速器におけるブラック

ホール生成(の安全性論拠)の問題に紐付けられもしているとのことが 一問題となる小説にあっての化け物染みた予見的性質の問題に関わるどころとして — この世界には「ある」)。

・『未来からのホットライン』作中の【秘匿コード・センチュリオン】は(それが科学的に至当な設定かは置いておき)【ペルセウス座流星群】と結びつけられ、人工衛星から流出した人造ウイルスによる災厄にまつわる秘密コードであるとの設定が採用されている。その【ペルセウス座流星群】からヘラクレスの曾祖父、ペルセウスのことが想起されもするとのことがあり、同ペルセウスが多頭の蛇を頭から生やしているとのメデューサを討ち取ったようにペルセウスの曾孫のヘラクレスも多頭の蛇の眷属の類を際立って殺しているとの神話上の英雄となっているとのことが想起されもするとのことがある。そうもしたことがある中でペルセウスのメデューサ退治に起因するところとしてペルセウス座流星群の光源たるペルセウス座は[悪魔の星]にして[メデューサ]と結びつけられるアルゴルという恒星をも包摂しているとの星座となっているとのことがある(出典(Source)紹介の部 110(5))。

とすると、予見小説『未来からのホットライン』の【センチュリオン】は【メデューサ近辺に光源を持つ流星群】によって撒かれたウイルスによる災禍に対してのコードネームということともなり、

【メデューサ狩りのペルセウスを曾祖父に持つヘラクレスにあっての曾祖父と同様の多頭の蛇の眷属の討伐の物語、そして、同ヘラクレスの退治したヒドラの毒をケンタウロスの企みで全身に浴びることになっての悶死】

とのことと

【『未来からのホットライン』に見るセンチュリオンの毒】

との間の【ケンタウロスを介しての意味論的つながり】が「より強くも」想起されることになる。

だけではない。

ペルセウスは古代ペルシャの民の名祖として語られもする英雄となるが、ペルセウスを名祖とするとされた古代ペルシャの王朝(アケメネス朝ペルシャ/アケメネイジャン・ペルージャ)がギリシャに侵略戦争を仕掛けた折、彼らに勝利したギリシャ方は古代ペルシャを半分獣性を有した蛮族としてケンタウロスに仮託するとのことをなし、都市国家アテナの民の遠祖たるラピス族に放伐されるケンタウロスの姿でパルテノン神殿のモニュメントに彼ら似姿を刻んだとされることも気がかりなこととしてある。ペルセウスの名を受け継ぐともされ(ペルセウス→ペルージャ)、その子孫とされる者達の古代領域国家が、と同時に、ケンタウロスと結びつけられもしているとの歴史的経緯がある(細かくもは出典(Source)紹介の部 110(5)にて解説)、それがゆえに、問題小説『未来からのホットライン』の秘匿コードがセンチュリオンと呼称されて、かつ、ペルセウス「とも」紐付けられているとのことがあることについては —そこにあってはケンタウロスとの明示的な紐付けまではなされて「いない」のだが— ケンタウロスとの繋がり合いが「よりもって」観念されると受け取れるわけである(無論、それ単体で見れば、「こじつけがましい」と受け取られる素地ある話だが、ここでの話は単体で見るとは必ずしも述べてはならないと筆者は考えている)。

・これが極めて大きい。

[【センチュリオン Centurion】と【ケンタウロス Centauro】の繋がり合い

—e.g. Centurion との語と Centauro が 8 字中 7 字を「語順込みに」共有しているなど—] (一説には【センチュリオン】⇔(語源的つながり)⇔【ケンタウロ

ス】との見方もあるようだが、はきとしたこれだとの論拠がなかなか見つからないところとしてそちらには重きを置かずにももの摘示をなしてきたとの繋がり合いとの絡みで Thrice Upon a Time『未来からのホットライン』の【センチュリオン】との結びつきにつき問題視してきた【ケンタウロス】は、(極めて重要なものであると見えるヘラクレス 11 功業と加速器実験の繋がり合いを観念せずとも)、それ自体 (【ケンタウロス】という語句自体それ自体) からして

【ブラックホール生成挙動】

と結びつけられて語られるもの「でも」ある。

すなわち、

【ケンタウロ・イベント (Centauro Event) 】 (その特殊系はヘラクレスによってプロメテウス解放の対価とされたケンタウロス・ケイロン Chiron の名を冠することがたとえばもって **Can Centauros or Chirons be the first observations of evaporating mini Black Holes?**との先に引用なしの論稿タイトルからして判断fできるよになっている)

という超高エネルギー宇宙線との絡みで取り沙汰されるに至ったその特定の現象 — (追記) 同ケンタウロ・イベント、筆者が国内物理学者から聞き及ぶところでは「既に存在否定されている (obsolete となっている)」現象らしいが、[宇宙線検出装置にて観測された [電荷として中性なパイ中間子に対して電荷を帯びてのその比率が変則的なありようを呈する宇宙線ありよう] をケンタウロスのように人と馬が混淆しての存在に見立てて呼称したもの] と定義されての現象となる — が

【極微ブラックホールの宇宙線にての生成とその証拠の観察可能性発見にまつわる仮説】

と結びつけられるとのやりようが後の日にて見受けられるようになったとのことがある。

(: にまつわっては、(先立って解説しているように)、問題となる小説が 1980 年に執筆されているのに対して 1998 年の理論動向変転を受けてブラックホール人為生成が観念されるに至った以降の話として 2001 年以後、(70 年代から似たような特徴的現象がボリビアで観測されてきた) **【ケンタウロ・イベント】** が高エネルギー宇宙線でのブラックホール生成可能性の問題と結びつけられるようになったとのこと「も」がある。そして、宇宙線をブラックホール生成 (蒸発するか、蒸発せずとも成長に天文学的時間を要すると主張されてのブラックホールの生成) の安全性論拠にしようというのが現行の加速器実験機関の目立っての言いよう、宇宙線でも生成されて何物をも傷つけずに生まれ落ちる安全無害なブラックホール生成にまつわる言いようとなっている。同じくものことについては科学界にて地歩を確立しているようにも見受けられる一部の科学者ら (殊に英文 Wikipedi [Centauro Event] 項目なぞの現行の記載によるとクレタ島のイラクリオン Heraklion、ヘラクレスにその名が由来するとの都市に在するクレタ大学の Theodore Tomaras といった科学者ら) に由来するところの論稿、コーネル大の論稿配布サーバー arXiv にて公開されている彼ら論稿たる **Can Centauros or Chirons be the first observations of evaporating mini Black Holes?** (**出典 (Source) 紹介の部 110 (7)** にて引用の論稿である『ケンタウロ・イベントあるいはケイロンは蒸発するブラックホールの最初の観測事例となりえるか?』と表題訳されもする論稿) にも同じくものことが見てとれるよになっている)

・上の箇条書き上の・(てん)と多く重複することを述べるとして、LHC 実験では、従前、【ホーキング輻射】が【ブラックホール生成問題の「主要なる」安全性論拠】として扱われていた(本稿出典(Source)紹介の部 3)ところをその【ホーキング輻射】の完全確実なる発現可能性に疑義が呈されるようになってから、**【宇宙線】**

のことが専らに安全性論拠(当該の「実験」でのブラックホール生成にまつわつての安全性論拠)として挙げられ出したとの背景がある(：尚、実験機関が現行、不磨の大典のように重視している[GM ペーパー]と俗称される論稿、

Astrophysical Implications of Hypothetical Stable TeV-scale Black Holes には(本稿出典(Source)紹介の部 110(6))にあつてその文言を原文引用とのかたちで引いているように) [宇宙線にて生成されたブラックホールが蒸発して「いない」状況でもそれらによって問題が星々にきたされていないのはそれらの成長が天文学的時間を要するからである]といった説明がなされているわけである)。

そして、そうした見解の呈示は

【ケンタウロ・イベントの分析にて ーケンタウロ・イベントとはブラックホール生成に通ずる超高エネルギー宇宙線とも通じるものであるところ ー ブラックホール生成の観測がなされうるかもしれない】

との見立てが標榜されるに至ったことと表裏をなすことでもある(直上にても言及したことについて再言するが、本稿にてはそうした見立てに関わるところとして Can Centauros or Chirons be the first observations of evaporating mini Black Holes?と題されての専門家ら論稿を挙げている)。

すなわち、(直上にて指摘したこととまどろっこしくも重複することながらも重要なことであると見ながら再述し)、[宇宙線]にてその痕跡が観測がなされうるだろうと考えられるに至ったところの極微ブラックホールが当然、無害なものである(蒸発するか成長に天文学的時間を要する無害なものである)と想定されているところに通ずることとして、話が

【ケンタウロとLHCの安全性論拠との結びつき】

に通ずるようにもなっている(のような中でギリシャ伝承に目を投じるとヘラクレスはケンタウロス・ネッソスが彼の妻デイラネイアを今際の際に「騙しもした」奸計に嵌まるとのかたちでヒドラの毒 ーヘラクレスが11番目の功業にてプロメテウス解放の対価にと差し出したケンタウロス・ケイロンを苦しめもしたものと同文のヒドラの毒ーで苦悶の死を迎えることになっている ー先に紹介しもしているソフォクレス悲劇に見る筋立てー)。

そして、さらに述べれば、それは

【【ホーキング輻射】がブラックホール生成の後の【有効ならざる言い訳】として用いられることになる】

ことにまで予見的言及をなしているとの性質の小説 Thrice Upon a Time(邦題)『未来からのホットライン』との内容とも結びつくことでもある(：ここでの指摘の言下の含みは、(ご察しいただけていることかと思いたいのだが)、**【現実世界で21世紀前半にて安全性論拠の主要ポイントが【ホーキング輻射 Hawking Radiation argument ⇒ 宇宙線 Cosmic Ray argument】とのかたちで切り替わったLHC実験(ヘラクレス第11功業と命名規則上、結びつけられているとの実験)】と【ヘラクレス第11功業にてプロメテウス解放の対価に命を捧げられることとなったケンタウロス(ヒドラの毒にて苦しむケイロン)】の関係性を重んじ**

てのものとなる)。

・さらに加えて『未来からのホットライン』という邦訳版が原題 *Thrice Upon a Time* に対して刊行された折の訳業に携わった訳者 —日本のSF業界の立役者として知られる故柴野拓美氏— が用いていた筆名がことであろうに【宇宙線】の英語呼称、コズミック・レイ *Cosmic Ray* から取られての筆名であると明言されてのもの、

[小隅黎(コズミ・レイ)]

とのものとなっていることとともが奇怪なことに映るようになっている(邦訳書『未来からのホットライン』の表紙部に[小隅黎訳]と書かれていることからして奇怪なことに映るようになっている)。

その点、スライス・アポン・タイムとの原題に対して『未来からのホットライン』とのタイトルでの訳書が出たのは1983年上半期のこととされるが、その同年の1983年になるまで

【[宇宙線]のことを加速器の安全性論拠に持ち出すとの一般的やりよう(当初、[ブラックホール]とは別のところ、[真空の相転移]と呼ばれる現象に関しての安全性論拠として宇宙線との比較対象をなすとのやりよう) —】

が考案されて「いなかった」との経緯が斯界の泰斗、全世界科学界のドンとも言うべき権威ある存在(王立協会会長)に長じもしてなった【宇宙線安全性論拠考案者】のマーティン・リース(の書籍)に由来するところとして解説されている —(出典(Source)紹介の部12の内容を最前の段にあって再引用なしながらも再度取り上げたとおりである)— ことからして[時期的な奇怪性]を際立たせているとの按配となっている (:それにつき、何時、コズミック・レイこと宇宙線にちなんでのものとされるペンネームの訳者が『未来からのホットライン』の翻訳の事始めをなしはじめたのか、ということとの絡みで、結局、[宇宙線という名前をもじっての筆名を持つ邦訳者]がブラックホール生成予言小説の訳者になっていることそれ自体が —訳の対象となっている問題小説にて(【真空の相転移】といった従前より問題になっていた加速器リスクではなく)ブラックホール生成が「奇怪な先覚性を伴って」テーマとされており、また、現実世界でそれが後に問題視されるに至った折、安全性論拠として【宇宙線;コズミック・レイ】(ここまで複合的にケンタウロとの関係性を問題視してきた宇宙線だ)が用いられるようになったことと複合顧慮して—— 「できすぎている」と映る、それがゆえに問題ともなる)。

ここまでにて詳述をなしてきたとの上のことらについてどのように図解がなせるのかとのことを以下、扱うこととする。

まずもって **Thrice Upon a Time** (邦題『未来からのホットライン』) という作品が1980年に世に出た作品でありながらも、

[2009年末から2010年にかけてのブラックホール生成による人類破滅をモチーフにしている作品]

となっているとのことがあり、そのことが「1994年に計画承認を経、計画スタートを見たLHC実験」が2008年9月10日にスタートを見、即座の実験停止を経て、2009年11月20日より実験再開を見だした（本稿にての**出典(Source)紹介の部 36(2)**で誰でもオンラインより確認できるとのCERNサイドのオンライン発表文書に見る16 December 1994 The CERN council approves the construction of the Large Hadron Collider。「1994年12月16日 CERN カウンシルはラージ・ハドロン・コライダーの建設を(正式に)許諾した」との申しようを引いて示しているようにLHC実験は1994年に計画ゴーサインを出されて、後、2009年11月より本格始動を見だした)との、

【フィクションならぬ後の現実世界にての流れ】

を想起させるところとなっている、[時期的離隔極めて小さくもの予言的な式]で想起させるようところとなっているとのことにまつわるものとして下のような図を挙げもしていたとのことがある。

Thrice Upon a Time (1980)

(邦題『未来からのホットライン』)

setting seen in the [1980 released] fiction

2009 ————— 2010 —————

x
black holes factory
& extinction of mankind

LHC

2008 ————— 2009 ————— 2010 —————

September 10 November 20

といった図を再度もってして挙げたうえで

Thrice Upon a Time (邦題『未来からのホットライン』)

という作品については本稿にて従前述べてきたところ、

[LHC実験は事実の問題としてヘラクレス12功業(の中の11功業)に通ずるものとなっているとのことがある]

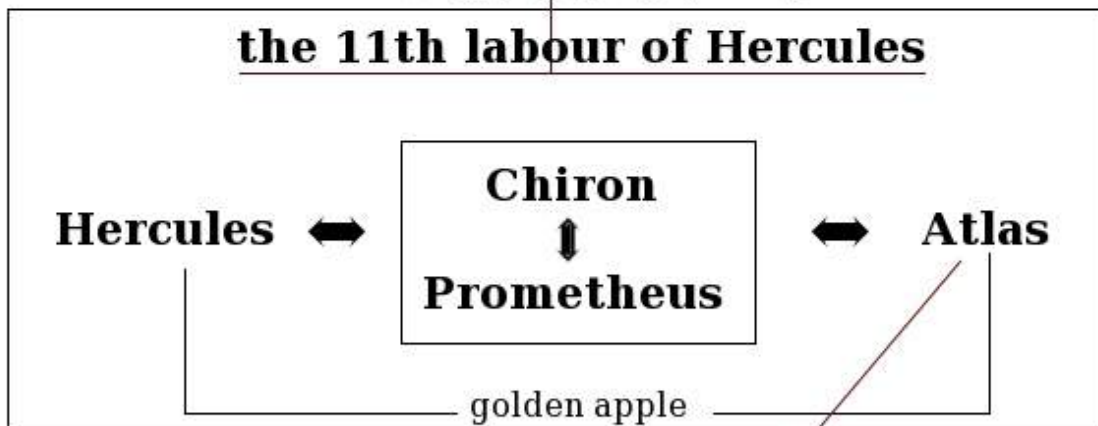
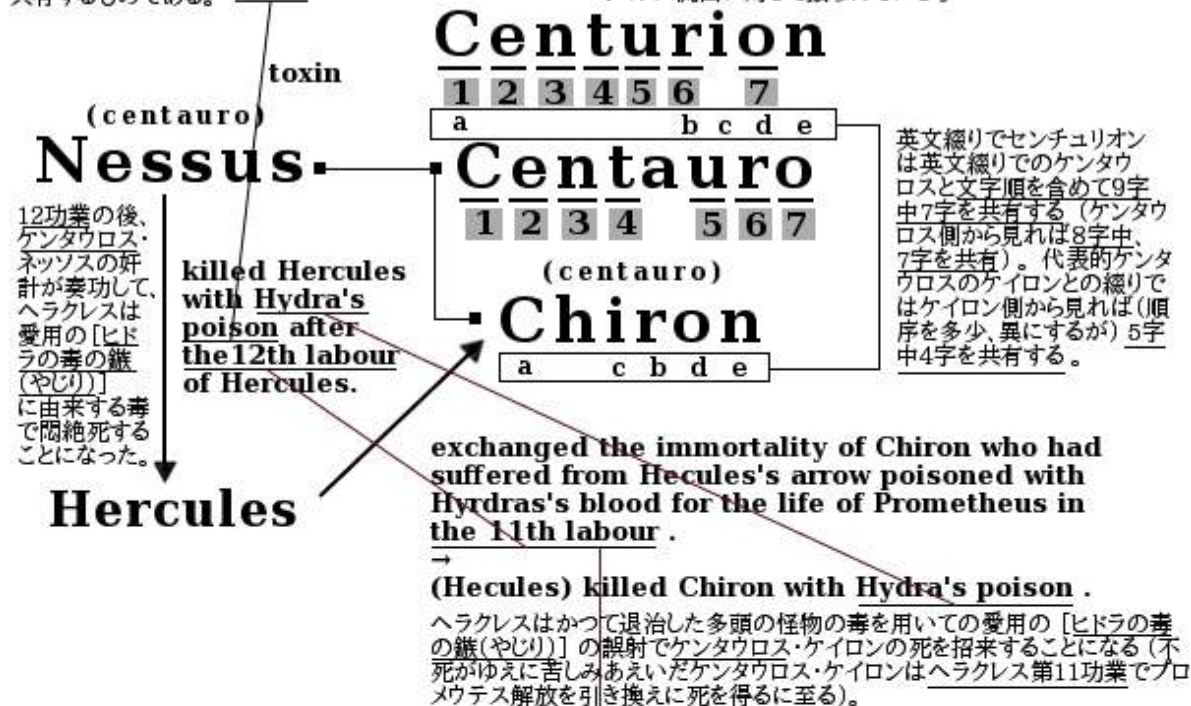
との点に関わるどころとして、(筆でもって細やかなる解説をなした、同文に細やかなる出典羅列をなしながらもなしたうえでのこととして)、次の通りの図解部を呈示もしていた。

Thrice Upon a Time (1980)

[ウイルス]も[毒の鐵(やじり)]も人を殺す[毒物]との要素を共有するものである。

the biohazard caused by genetically manipulated virus

『スライス・アポン・ア・タイム』では、センチュリオンというコードネームがブラックホールに次ぐ脅威、人工ウイルス流出に対して振られている。

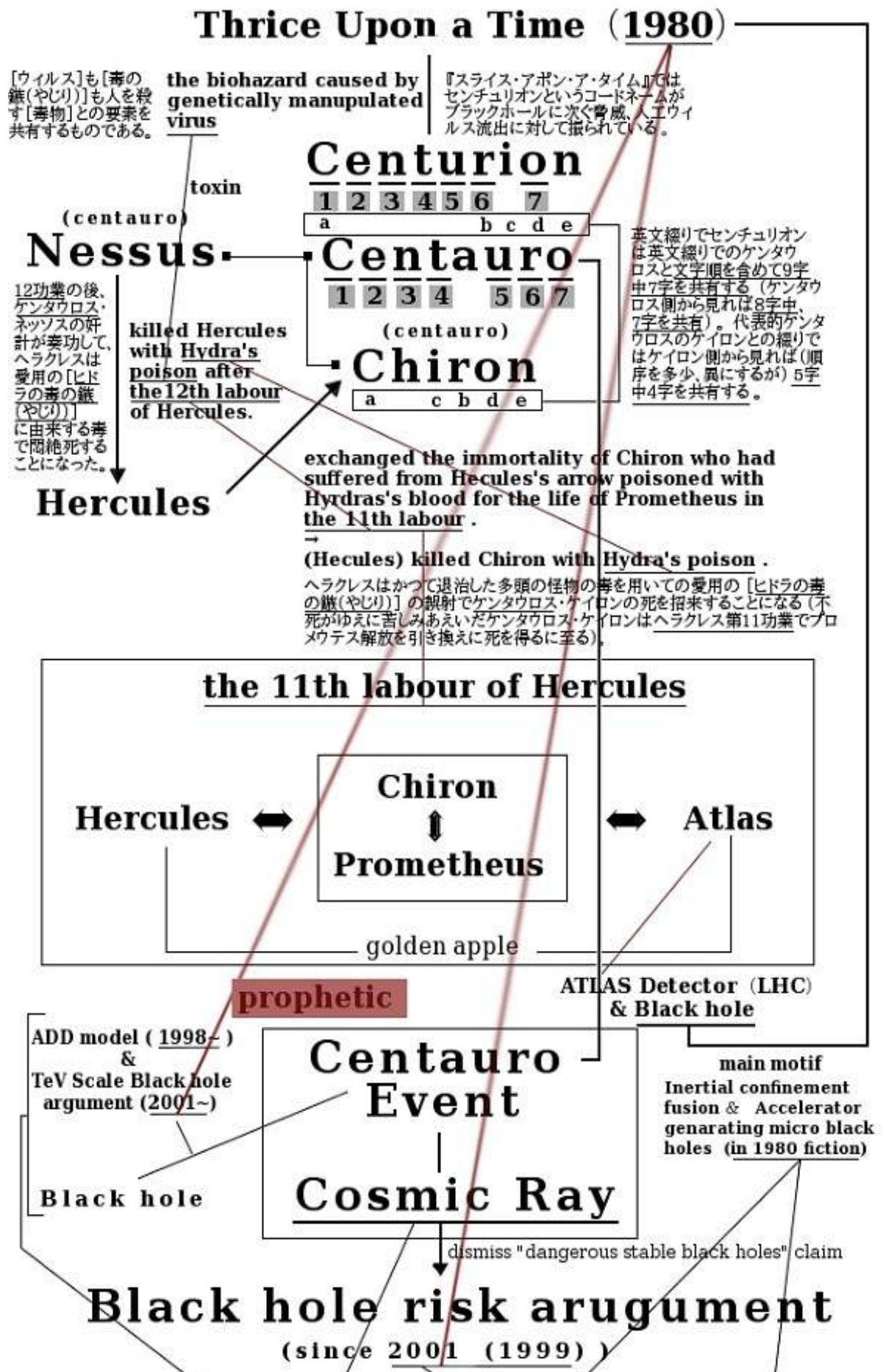


[加速器によるブラックホール生成]にまつわる際立つての先覚的言及小説 (20年後に至るまで科学的に主張・肯定されることではなかった加速器のブラックホール人為生成につき、後に科学的に主張されることになったブラックホール生成個数や後に主張されることになった安全論拠の欺瞞性にまで言及しているとの小説)であることを本稿にて詳述してきた ([出典(Source) 紹介の部1] から [出典(Source) 紹介の部5] を包摂する部にて詳述してきた)との Thrice Upon a Time (邦題『未来からのホットライン』)となるが、同作と[ブラックホール生成・検出問題]で接合しているのが超巨大加速器LHCである。LHCに関しては2001年以降、その検出器ATLASでブラックホールを検知しようとの理論が提唱されるに至っている (詳しくは本稿にての [出典(Source) 紹介の部2] 及び [出典(Source) 紹介の部35] を参照のこと)。さて、ATLASとはヘラクレスが(ケントウロス・ケイロンの犠牲を対価に解放されたとの) [人類に[火]を与えたプロメテウス]によってヘラクレスに対して「アトラスは黄金の林檎を知る存在であるから黄金の林檎を得るためには彼と掛け合う必要がある」との提案がなされた伝説の巨人の名ともなる (本稿 [出典(Source) 紹介の部39] および [出典(Source) 紹介の部110(3)] にて伝承原典を第三者後追いでできるかたちで原文引用)。以上から[アトラス]を介してもBlack holeとのつながりが想起されることになる。

ATLAS Detector (LHC) & Black hole

以上、本稿にての従前にて挙げた図解部を再掲載した(但し、ペルセウスとヘラクレスの関係性にまつわる図解部などの再掲載は割愛した)うえで最後に【まとめ】として次の図解部を呈示しておく(それでもって紛い物だらけのこの世界で自身の脳髓を狙う銃座がどこに据え置かれているのか理解しない、理解出来ないのなら仕方ない、そのような向き 一自らでもっては最低限の生き残る能力さえ有していない、また、未来形のこととしてそれを涵養しよ

うともしないと手前が見立てるような向き— に何かを語るだけ無為であるとの観点もが筆者にはある)。



Black hole risk arugument

(since 2001 (1999))

↓ dismiss "dangerous stable black holes" claim

1972年に遡るところとしてそれに比定されるものが観察・提唱されだしたとの Centauro Event であるが、そちらケンタウロ・イヴェントが1998年に提唱されだしたとの ADDモデルの流れを受け(2001年以降より、[宇宙線によるブラックホール生成(TeVスケール・ブラックホール)と結びつけられ出した]とのことがある(：本稿ではヘラクレスに名称が結びつく Heraklion との地の物理学者 Theodoye Tomarasらに由来する Can Centauros or Chirons be the first observations of evaporating mini Black Holes?(2004)との論稿を引き合いに出している)。

ケンタウロ・イヴェントがそれにまつわる ところの現象への呼称となっている[宇宙線]が2001年に遡るところのブラックホール生成可能性の肯定の科学界申しように伴う目立っての[安全性論拠]にされだしたとの流れが存在している(本稿にて事細かに記してきたことである)。

[Thrice Upon a Time (1980) Japanese edition] which had been translated into Japanese by translator Sibano Takumi under [the pen name "Kozumi Rei" derived from "Cosmic Ray"] was published in 1983.

日本にての Thrice Upon a Time の翻訳者、柴野拓美氏により当該著作翻訳時にて用いられていた筆名たる小隅黎コズミレイは[宇宙線コスミックレイに由来する]と自称・他称されていたものである。

本稿にての[出典(Source)紹介の部4]で原文引用なしながら解説しているように 1980年初出の Thrice Upon a Time は [レーザー核融合炉敷設の加速器]による極微ブラックホールの大量生成を描く作品となる。

(整理も兼ねての図解部はここまでとしておく)

以上、振り返ってきたところから、

小説 Thrice Upon a Time (邦題)『未来からのホットライン』(1980)

という作品からして本稿での主軸としての重きを置いての指し示し事項、

[【ヘラクレスの計 12 に及ぶ功業】、【(ヘラクレス第 11 功業に見る)巨人アトラス】、【トロイア崩壊伝承に見るトロイア崩壊の原因たる(他伝承では巨人アトラスが在処を把握するとされる)黄金の林檎】、【巨人アトラスともトロイア崩壊元凶たる黄金の林檎とも史的に(一部識者によって)結びつけられてきたとのアトランティス沈没伝承】、【アトラスやアトランティスといった固有名詞を付されての LHC 実験におけるブラックホール生成論議に関わる事物】との要素らのうちの「複数」を特色として帯びつつ、かつ、【911 の事件の発生(態様)にまつわる予見的言及】ないし【ブラックホール人為生成問題にまつわる「先覚的言及】】の一方、あるいは、その双方の特徴をも呈しているとの文物らが「不可解に」存在している]

とのことと関わる作品であると申し述べるのである。

次いで、本稿の冒頭部よりその問題性につき取り上げてきた小説作品らのうち、

小説 Thrice Upon a Time (邦題)『未来からのホットライン』(1980)

と合い並ぶものとして問題となるところを摘示してきたとの、

**Adrift Just off the Islets of Langerhans : Latitude 38°54'N, Longitude 77°00'13W (邦題)
『北緯 38 度 54 分、西経 77 度 0 分 13 秒 ランゲルハンス島沖を漂流中』(1974)**

との小説作品の方 —(最前まで解説なしてきたとの Thrice Upon a Time の問題性摘示を本稿の **出典 (Source) 紹介の部 1** から **出典 (Source) 紹介の部 5** を包摂する解説部を通じてなしているのに対して、その問題性摘示を本稿の **出典 (Source) 紹介の部 1** から **出典 (Source) 紹介の部 3** を包摂する解説部および **出典 (Source) 紹介の部 6** から **出典 (Source) 紹介の部 10** を包摂する解説部でなしもしていたとの作品／筆者としては「殺害予告」ともとれるそのやりようにつき露骨さ・奇怪性・嗜虐性どれをとって見ても Thrice Upon a Time (邦題)『未来からのホットライン』(1980)を「遙かに上回る」作品と見ている作品「でも」ある) — からしていかにようにして

[【ヘラクレスの計 12 に及ぶ功業】、【(ヘラクレス第 11 功業に見る)巨人アトラス】、【トロイア崩壊伝承に見るトロイア崩壊の原因たる(他伝承では巨人アトラスが在処を把握するとされる)黄金の林檎】、【巨人アトラスともトロイア崩壊元凶たる黄金の林檎とも史的に(一部識者によって)結びつけられてきたとのアトランティス沈没伝承】、【アトラスやアトランティスといった固有名詞を付されての LHC 実験におけるブラックホール生成論議に関わる事物】との要素らのうちの「複数」を特色として帯びつつ、かつ、【911 の事件の発生(態様)にまつわる予見的言及】ないし【ブラックホール人為生成問題にまつわる「先覚的言及」】の一方、あるいは、双方の特徴をも呈しているとの文物らが「不可解に」存在している]

との関係性の環に組み込まれていると申し述べられるのか、その理由について(本稿序盤部では言及していなかったところとして)以降、摘示なしていくこととする (ただ、そちら説明に入る前に今一度、**Adrift Just off the Islets of Langerhans : Latitude 38°54'N, Longitude 77°00'13W (邦題)『北緯 38 度 54 分、西経 77 度 0 分 13 秒 ランゲルハンス島沖を漂流中』(1974)** との作品がいかなる特性を帯びての作品であるかについて —くどくなるも、の— 振り返り表記を直下なしておくこととする)。

(小説 **Adrift Just off the Islets of Langerhans : Latitude 38°54'N, Longitude 77°00'13W (邦題)『北緯 38 度 54 分、西経 77 度 0 分 13 秒 ランゲルハンス島沖を漂流中』(1974)** に関していかなる事が述べられもするののかについての振り返りの表記として)

最初に振り返るが、本稿序盤部では次の各事実について仔細なる解説を心掛けてきた。

・本稿序盤部にあつて原文引用をもってして示してもいる【**文献的事実**】の問題として 1974 年に初出の小説 **Adrift Just off the Islets of Langerhans : Latitude 38°54'N, Longitude 77°00'13W (邦題)『北緯 38 度 54 分、西経 77 度 0 分 13 秒 ランゲルハンス島沖を漂流中』**には現実の CERN に対して架空の **CEERN** なる研究機関が運用する【**15 兆電子ボルト (fifteen trillion electron volts) 加速器**】なるものへの言及がなされている。

・本稿序盤部にあつて原文引用をもってして示してもいる【**文献的事実**】の問題として 1974 年に初出の小説 **Adrift Just off the Islets of Langerhans : Latitude 38°54'N, Longitude 77°00'13W (邦題)『北緯 38 度 54 分、西経 77 度 0 分 13 秒 ランゲルハンス島沖を漂流中』**にあつては 15 兆電子ボルトの円形加速器を運用すると描写されている(直上言及)との **CEERN** なる組織 (fictional C「EE」RN) の挙動が【**渦を巻く、黒々とした底無しの臍(へそ)の穴**】降下につながった人体マイクロ化をきたすレーザー照射と結びつけられている (: 【**渦を巻く、黒々とした底無しの臍(へそ)の穴**】降下につながった人体マイクロ化をきたすレーザー照射が CERN を想起させる研究機関と結びつけられていることよりは無論、加速器のことが想起される)。

・本稿序盤部にあつて仔細に示している【記録的事実】(書誌にまつわる記録的事実)の問題として1974年に初出の小説 *Adrift Just off the Islets of Langerhans : Latitude 38°54'N, Longitude 77°00'13W* (邦題『北緯38度54分、西経77度0分13秒 ランゲルハンス島沖を漂流中』)は別作品、*The Hole Man* 『ホール・マン』という題名の別の小説と連続関係を呈している(特定の規則に応じて編纂されている撰集にて連続掲載されている、のみならず、両作の間には一方の作者ともう一方の主人公のファースト・ネームが同じであるといった繋がり合いがある)。そして、*Adrift Just off the Islets of Langerhans : Latitude 38°54'N, Longitude 77° 00'13W* (邦題『北緯38度54分、西経77度0分13秒 ランゲルハンス島沖を漂流中』)と繋がり合っているとの *The Hole Man* 『ホール・マン』との作品は加速器こそ登場しないものの、【極微ブラックホールの暴走を主軸として扱った小説】となっているとことがある。

以上のような事実がそこにある一方で、「であるからこそ」問題となる場所として次の各事実もが存在している。

(以下は本稿前半部([出典\(Source\)紹介の部10](#))にて典拠となる場所を必要十分なだけ(公的資料よりの原文引用などを通じ)指し示していたところの記録的事実となる)

・[1974年に初出の小説の中に登場する架空のCEERNの15兆電子ボルト(fifteen trillion electron volts)加速器]は[現実世界でCERNが当時(1974年)にあつて運用していた加速器(ISRと呼ばれるハドロン加速器)]よりも200倍超の規模のエネルギーを実現するとの[設定]のものであった(ISRの最大重心系衝突エネルギーは62GeV、すなわち、620億エレクトロンボルトで15兆電子ボルトの200分の1に満たない)。

・[1974年初出小説に見る15兆電子ボルト加速器]のような「兆」の単位に突入しての一兆電子ボルトを超える加速器の建設構想計画が[青写真]として実験機関関係者意中に持ち上がったのは(小説刊行の1年後との)1975年以降である(との加速器実験機関由来の情報公開【内部資料】が存在している)。

・[現在CERNが運用するLHC]が実現しうる最大出力は[(重心衝突系エネルギー)14兆電子ボルト]となっており、それに比して、[1974年に初出の小説に登場する(架空の)CERNならぬCEERNの15兆電子ボルト加速器]はたかだかもの1.07倍程度しか強力なものにすぎない(⇒ $15\text{TeV}:14\text{TeV}=1.07(\dots):1.00$)。そうしたかたちで1974年初出の加速器は出力との性能で見ても今日にLHCに近似している(尚、兆単位の加速器の実現可能性さえ取り沙汰されなかった往時(74年)にはLHC計画は当然に策定さえされて「いなかった」)。

要するに、*Adrift Just off the Islets of Langerhans : Latitude 38°54'N, Longitude 77°00'13W* (邦題『北緯38度54分、西経77度0分13秒 ランゲルハンス島沖を漂流中』)という作品は

[往時70年代のCERN運営加速器(ISR)に比して200倍超も強力なるCEERN加速器なるもの](それは小説刊行時、構想だにされていなかった【規模】の加速器であると研究機関文書にて記載されている「兆単位」電子ボルト加速器ともなる)

を登場させている作品であり、かつもつて、そこに見る架空のCEERN加速器なるものは

[(指数関数的に出力を増大させてきたとの加速器進化動向にあつて)今日のLHCに比しては小数点2桁、数パーセントの誤差ぐらいしかないほどに出力が近似しているとのもの]

ともなっている。

直上振り返り表記をなしたうえで申し述べもするが、

「人は太陽と同様に自分の死は直視はできぬ」などとはいうが、[状況を直視するとの勇気]を宿し、そして、運命とは押しつけられるものではなく切り拓くものであるとらえているとの向きにあってはこれより指摘・解説するところを順々に検討いただきたい次第である」

さて、これより本稿にて核として問題視している関係性（【アトラス】・【黄金の林檎】・【ヘラクレスの功業】・【911の事件の予見的言及】らに関わるとのその内容についてはここでは繰り返さない）と小説『ランゲルハンス島沖を漂流中』の繋がり合いについての説明に入るが、まずもって問題小説のタイトルに見る【わざとらしさ】の問題がどういったことを指しているのについての話をなす。

その点、問題としている小説の表題、

Adrift Just off the Islets of Langerhans : Latitude 38°54'N, Longitude 77°00'13W (邦題)『北緯38度54分、西経77度0分13秒 ランゲルハンス島沖を漂流中』(1974)

は一目でもってして、

[尋常ならざるもの]

と分かるようなものだが(『何故、このような長ったらしいタイトルを選択したのか?』との観点からである)、そうしたタイトルに付されている、

the Islets of Langerhans (ランゲルハンス島)

とは 一実にもって基本的なこととはなるが—、

[人体にあつての膵臓(スイゾウ)を構成する機関の名称]

となっている（:筆者も高等学校の時分に『生物』の科目にてその暗記を強いられたところとして、[ランゲルハンス島]とは体内のホメオスタシス(恒常性)を維持するための膵臓内部に在する調整機関、インスリンなどをその構成細胞(β細胞)から分泌して血糖を調整する機関となっている)。

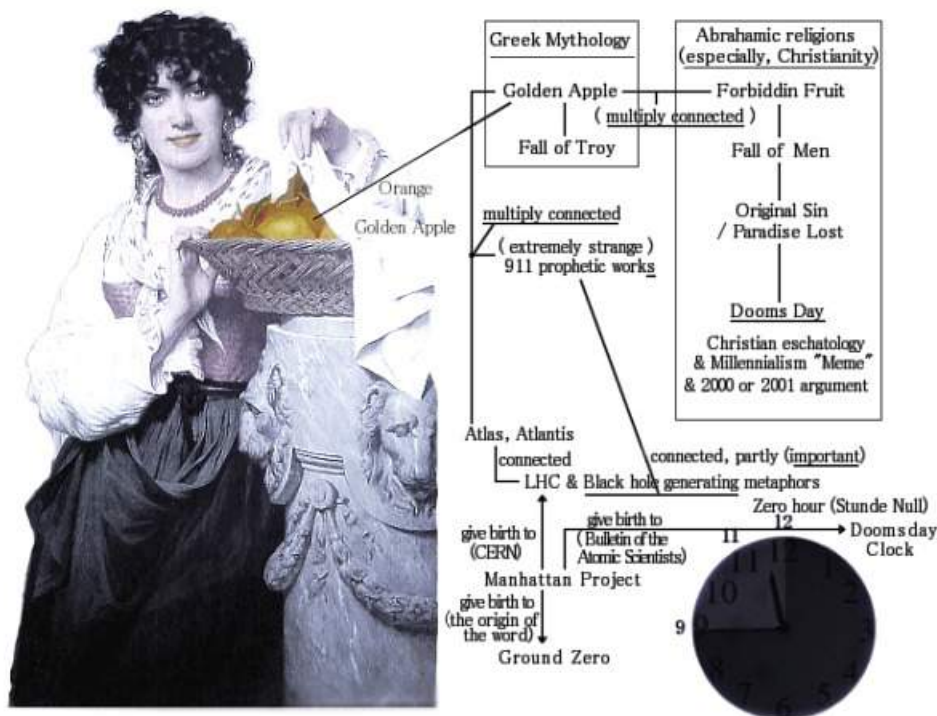
そこにいうランゲルハンス島のことからして「問題になる」と申し述べたい。

高等学校でのお[勉強] 一と述べても多くの合理的なる人間は大学に行くための手段、すなわち、銘々にとっての社会的最適点とみるところに落ち着かんとしての手段としか見ておらぬものと思うが—ではそこまでは暗記を強られるようなことはないようだが、(膵臓にての)ランゲルハンス島の発見をなしたのはドイツの生理学者パウル・ランゲルハンス(綴りは Paul Langerhans)という科学者となり(その発見年は1869年と認知されている)、そも、ランゲルハンス島の命名由来は発見者たる同科学者の名に求められるとのかたちとなっている。

そうしたこと、膵臓のランゲルハンス島の発見者がパウル・ランゲルハンスという科学者であるとされていることからして問題小説のタイトルの【わざとらしさ】に関わるとの認識・判断があるため、発見・命名にまつわっての典拠紹介部を下に設けておくこととする。

SOURCE

111



ここ出典 (Source) 紹介の部 111 にあつては

[(問題小説にあつてのタイトルに付されもしている) 膵臓にてのランゲルハンス島を発見した人物が 19 世紀にあつての Paul Langerhans と英語にて綴られる人物パウル・ランゲルハンスとなっている]

とのことの典拠を挙げることにする。

(以下、和文ウィキペディア[パウル・ランゲルハンス]項目にての現行の記載を掻い摘まんで抜粋するとして)

パウル・ランゲルハンス (Paul Langerhans、1847 年 7 月 25 日 - 1888 年 7 月 20 日) はドイツの病理学者、医師。…(中略)…1869 年 2 月に、ランゲルハンスは「膵臓の顕微鏡的解剖」と題した論文を発表し、この中で彼は膵臓の至る所に見られる、周辺の細胞とは異なる染まり方をする、明るい細胞からなる島について言及した。彼はそれらの領域に神経が豊富であることに気づいたが、その機能については、それらがリンパ節であるという誤った仮説を除いてなんら示唆することはできなかった。…(中略)…ランゲルハンス島 インスリンやグルカゴンなどを産生する膵臓の細胞塊で、膵島とも呼ばれる。膵臓の大部分は消化液である膵液を分泌する外分泌腺だが、ランゲルハンス島はホルモンを分泌する内分泌腺である。ランゲルハンスは 1869 年にベルリン病理学研

究所における彼の博士号のための研究のなかでこれらの細胞を発見した。

(以上、極々基本的なる科学史にまつわっての解説なされよしの引用とした)

上がよく知られているランゲルハンス博士の事績となっているとことがある(英文 Wikipedia[Paul Langerhans]項目にても現行、端的に “Islets of Langerhans - Pancreatic cells which produce insulin. Langerhans discovered these cells during his studies for his doctorate at the Berlin Pathological Institute in 1869.” と記載されているところでもある)。

(出典(Source)紹介の部 111 はここまでとする)

さて、膵臓にてのランゲルハンス島を 19 世紀後半にて発見したパウル・ランゲルハンス — 問題となる小説 **Adrift Just off the Islets of Langerhans : Latitude 38°54'N, Longitude 77°00'13W** にて同人物が発見をなした the Islets of Langerhans [ランゲルハンス島] がタイトルに用いられているとの科学者 — と「英文にての綴りが極めて近しい」との著名科学者がいる。

その著名科学者とは [ポール・ランジュヴァン(Paul Langevin)] という科学者となる。

その点、何故、そうした一致性が「複合的に」問題になるかにつき摘示なしは始める前にあって書けば、(Paul Langerhans と Paul Langevin の一致性を明瞭化させるために共有部を「」で囲むと)

「Paul」「Lange」rha「n」s

「Paul」「Lange」vi「n」

となりもし、英文綴りにあつてはポール・ランジュバンを構成するアルファベット 12 字中、10 字(vi の 2 字を除く 10 字)は「字の綴り順序込み」でパウル・ランゲルハンスと共有のものとなっている(尚、パウロとポールは同じくパウロ、初期キリスト教の代表的伝道者の一人にして新約聖書著者の一人とされている使徒パウロに由来する欧米圏の名であり、発音が違うのはその人物がどこの出身によるか、の違いに因るところが大である)。

Paul Langerhans

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10

Paul Langevin

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10

Adrift Just off the Islets of Langerhans :
Latitude 38°54'N, Longitude 77°00'13W
(1974)

(although above novelette title is unnatural and metaphorical ,)

far - fetched ?

(上のような話をなしていることについてありうべくもの誤解を避けるために)

「状況をよく理解出来ていない」との人間ならば、直上表記のことに対して「当然に」次のように思うはずであろうとは見る。

『Centurion と Centauro が (「Cent」「u」「r」「i」「o」 n と 「Cent」 a 「u」「r」「o」 と のこと で) 多くの文字を順番込みに共有しているとのことを云々するやりよう (つい先だつての段にて問題視をなしてきた式) 以上に実にもってこじつけがましい (far-fetched) とのやりよう、まさしく、馬鹿げた陰謀論 ridiculous conspiracy theory であろう』

だからこそ、上のような見立てを抱きかねない [状況がよく理解出来ていないとの向き]、それでいて、[理解をなすだけの知力 (意志の力) を有しているとの向き] (にして無為に殺されるだけとのありようを是とはしない向き) のために次のこと、断っておく。

以下、「一筆書き添えての、」断り書きとして

「皮相だけとらえるのであれば、まさしくもここでの話は

[上にての常識的な人間の見立て]

を代弁してのもの — 綴りの一致性を不必要に因数分解して問題視するようなやりようは [こじつけ] ないし [パラノイド (体系的妄想症患者) の戯言] にすぎないであろうとのもの — が「これ至当。」であろうと受け取れるものではある。

が、「実に残念ながら」ここ本稿本段にて問題視している作品ら — 先述の『未来からのホットライン』(原著刊行年:1980年)、および、いままさにそれについて取り上げているとの『北緯 38 度 54 分、西経 77 度 0 分 13 秒 ラングェルハンス島沖を漂流中』(原作初出時期:1974年)ら — は

【「あまりにも」奇怪なる事前言及作品としての要素】

を作中に蔵している、

【容易に後追い可能な [文献的事実] の問題】

として実際に作中に蔵しているとの「相応の」作品らとなっている。

それにつき、読み手が

「ここ 10 数年内 — 1998 年の理論変転を受けて 2001 年に著名論文が出てきたとの流れが顕在化しての期間 — に至るまで【加速器による極微ブラックホールの人為生成】などの可能性など「理論的に」取り沙汰される余地などはなかったと物理学界関係筋諸方面で連呼されている」(「諸資料にて呈示可能な発表動向および議論動向を仔細に後追いなしつつも呈示できる場所としてそういう可能性が呈示される余地などなかったと諸方面で連呼されている」; 表記のことを示すために筆者はかなりの原文引用を本稿にあつて折に触れてなしてきた)

とのことを把握していれば、

【兆単位電子ボルト加速器】の青写真さえ呈示されていなかった折柄 (70 年代前半) にあつて「後の時代になって登場を見た」CERN の**【兆単位電子ボルト加速器 LHC】**の最大出力運転時出力に異様に近い

(小説刊行時往時加速器 ISR より 200 倍「も」近い) との架空の加速器 (それも CERN 類似の組織体によって運営されているとの架空の加速器) を登場させている作品]

にして、なおかつ、

[極微ブラックホールによる惑星呑み込みの筋立て (【兆単位電子ボルト加速器】程度のものでブラックホールが生成されると考えられるようになったのは理論動向変転を受けもしてのここ十数年のことであると指摘できるよになっている中での人造ブラックホールによる惑星呑み込みとの筋立て) と隠喩的かつ間接的にながらも複合的に接合していると摘示「できてしまう」との作品]

といったものが

[実にもって奇怪なもの]

であることは理解できるようなところとなる (：申しようが冗長とはなっているも、その理解の労を軽くしてもらおうべくものことを本稿では事細かに解説している (生き残る努力さえなすことさえ満足になさぬ・なせぬとのゾンビ的人間、精神と魂の傀儡(くぐつ)ではないとの向きらがいると仮定して、そうした向きらのために同じくものことを事細かに解説している) つもりである)。

その点、本稿ではまさしくものそうした[実にもってしての奇怪性]を帯びもしている作品である、

『北緯 38 度 54 分、西経 77 度 0 分 13 秒 ランゲルハンス島沖を漂流中』

という作品について

[まるで悪魔(と宗教的な向きには呼称されるような嗜虐的存在)が仔細に未来の予定を[葉籠中の存在]に語りしめさせているが如く内容のものである]

と述べても問題ないだけの指し示しを前半部で一意専心してなしている——細かくは「裏取り容易になせるよう」にとの式での指し示しに注力している本稿にての **出典(Source) 紹介の部 1** から **出典(Source) 紹介の部 3** を包摂する解説部および **出典(Source) 紹介の部 6** から **出典(Source) 紹介の部 10** を包摂する解説部の内容を(まずもっては嘘つきの偽りを暴いてやろうとの批判的視点でもよいので)よくよくも検証いただきたいものである——。

といった「既に真っ黒である」作品に関してのことなればこそ、その[寓意性]というものにつき表記のような文脈で、英文綴りの近似性——パウル・ランゲルハンスとポール・ランジュバンの英文綴りにあつての「12 字中、語順をそのまま込みにしての 10 字を共有。」との近似性——を問題とすることだに

「(無条件には)行き過ぎとはならない」

と申し述べたいのである (：くどくも繰り返すが、また、『北緯 38 度 54 分、西経 77 度 0 分 13 秒 ランゲルハンス島沖を漂流中』などという「どうしてこのような表題が?」との長ったらしい題名が作品名称として現実につけられているとのことがある、「きちんとした科学的背景や意図の説明を伴っていない」との中でそれもタイトル付けが現実になされている中でそこにいうタイトルにランゲルハンスのことがみとめられる、ために、「相応の恣意性」が感じ取れるとのこと「も」またある。それにつき、皮相を見るだけであるのならば、そのようなタイトルが付されている理由は『北緯 38 度 54 分、西経 77 度 0 分 13 秒 ランゲルハンス島沖を

漂流中』の粗筋に求めることができもしはする。すなわち、[(小説内にあっての)ミクロの分身を形作られた男がそのミクロの分身に自らの魂に引導を渡させるための座標が腓臓のランゲルハンス島の特定座標にあるからである]などという当該作品粗筋にそのようなタイトル付与の「一端」を求めることができるようになっていもする(意味不明な抽象的粗筋としてミクロに縮小された男が自身の腓臓のライゲルハンス島にある魂の所在を衝こうなどという内容がみてとれることにタイトルのランゲルハンスの皮相的使用動機は語れもする)。だが、ここではタイトル付与に多少なりとも影響を与えていると解されるフィクションの額面にての粗筋、「[意味不明瞭なること極まりない]とのミクロ化して自分の腓臓で自身の魂に引導を渡すなどとの粗筋]自体を問題視しているの「ではない」、文壇(というある種の構造化された一群の人間集団)に対して臆目視線を有しているが如く好事家よろしくの視点でストーリー・テリングの妙や設定の突拍子のなさ・意外性といったことを問題視しているの「ではない」)。

以上が(本稿全体にて述べている不快極まりない相関関係のことをすべて端折ったうえでの)筆者が[綴りの一致性]などにつき問題視していることをして[パラノイド(体系的妄想症患者)の意味なさぬ因数分解の問題]ではおよそ済まされるものではないと申し述べる理由となる」

(一筆書き添えての話はここまでとしておく)

さて、ランゲルハンス島の発見者と姓名近しくもあるポール・ランジュヴァン(Paul Langevin)がどういった向きか、だが、同男、

[1911年に[双子のパラドックス]の概念 — (本稿の先の段にて不快極まりない予見的文物としての側面を有していると事細かに指摘していた著作、TIME WARP Einstein's Outrageous Legacy (邦題)『ブラックホールと時空の歪み アインシュタインのとんでもない遺産』にまつわる解説部で[当該文物の予見性]それ自体と結びつくことを仔細に解説していたとの概念) — を提唱したことで知られている向き]

となっている(→ 出典として**出典(Source)紹介の部 32**にて取り扱っていたことを再言及するとして、和文Wikipedia[双子のパラドックス]項目にあっての記述を(再度もってして)引く。(以下、和文ウィキペディア[双子のパラドックス]項目の記述内容を再度引用なすとして)“双子のパラドックス(ふたごのパラドックス)とは、特殊相対性理論(1905年)による運動系の時間の遅れに関して提案されたパラドックスである。初めは、相対性理論に内部矛盾があるかどうかについて、アインシュタイン本人が時計のパラドックスとして出した問題であるが、**1911年にポール・ランジュバンが双子をモデルしたパラドックスに仕立てたため、双子のパラドックスとして有名になった**”(引用部はここまでとする — 尚、表記のことについては英文Wikipedia[Twin Paradox]項目にて“ In physics, the twin paradox is a thought experiment in special relativity involving identical twins, one of whom makes a journey into space in a high-speed rocket and returns home to find that the twin who remained on Earth has aged more.[. . .] **Starting with Paul Langevin in 1911, there have been various explanations of this paradox.** These explanations "can be grouped into those that focus on the effect of different standards of simultaneity in different frames, and those that designate the acceleration [experienced by the travelling twin] as the main reason...". Max von Laue argued in 1913 that since the traveling twin must be in two separate inertial frames, one on the way out and another on the way back, this frame switch is the reason for the aging difference, not the acceleration per se. Explanations put forth by Albert Einstein and Max Born invoked gravitational time dilation to explain the aging as a direct effect of acceleration.”(英文ウィキペディアの本稿本段執筆時現行にあっての記載内容よりの引用はここまでとする)とのことが記載されている—)。

ここまで解説してきたところで

「Paul」「Lange」rha「n」s（問題小説タイトルにそちら名称の使用がみとめられるランゲルハンス島の発見者たる科学者）

「Paul」「Lange」vi「n」（双子のパラドックスというものを1911年に呈示もした科学者）

との一致性に着目した、というより、着目せざるをえないと申し述べるところの事由について以降、**A.** から **C.** と振っての流れでもってして順次段階的なる解説をなしていく。

（何故、本稿にて Paul Langerhans（ブラックホール生成予見小説と本稿にて問題視している『北緯 38 度 54 分、西経 77 度 0 分 13 秒 ランゲルハンス島沖を漂流中』表題中にその名称が取り込まれている胼臓の一構造、ランゲルハンス島の発見者たる「パウール・ランゲルハンス」と Paul Langevin（双子のパラドックスの概念を呈示したことで広くも知られている「ポール・ランジュバン」）の英文綴り上の類似性にまで殊更に着目しているかについて）

A

〔双子のパラドックス 一直上にての引用部に見るように〔1911年〕提唱— を重要な要素として持ち出している特定文物にあってそちら〔双子のパラドックス〕に関わるところで「一体全体、どういうわけなのか、」【双子の塔（ツインタワー）が〔911〕という日付にて崩された折の出来事との複合的相関関係】がみとめられるようになっている、しかも、尋常一様ならざるやりようで〔ブラックホールおよびワームホール絡みの側面〕にてそうしたことがみとめられるようになっているとのことが「ある」〕

B

〔（1911年にポール・ランジュバンによって明確化されたとされる）双子のパラドックスと同様の効果・結果について描いている（とのことも部分的には指摘される）お伽噺らが洋の東西にて存在しているのであるが、それら洋の東西にて存在している問題となるお伽噺（フェアリー・テール）らが【文化伝播ではおよそ説明が付きがたいような数値使用にあっての一致性】を（確たる文献的事実の問題として）伴っているとのものらとなりもしているとのことがあり、かつ、それらがブラックホールやワームホールにまつわる特色とも相通ずる特質をも伴っているとのことが「ある」〕

C

（これが【一連の話の行き着くところ】として極めて重要なところであると強調したいと

ころとして) [(先行しての A. および B. の内容をも顧慮のうえで重み・意味合いを判すべきこととして) 【双子のパラドックス提唱者の姓名ポール・ランジュバン】の英文綴り字 12 字中、10 字を「綴り順含めて」共有しているとのパウル・ランゲルハンスが発見した腓臓のランゲルハンス島 (アイル・オブ・ランゲルハンス) の名前を含む小説 *Adrift Just off the Islets of Langerhans : Latitude 38°54'N, Longitude 77°00'13W* は (先述のように同作が【ブラックホール人為生成問題の先覚的言及】を内に含んでいる作品であるのみならず) 【911 の事件】と結びつく側面「をも」有していると判じられるような作品である。については「Paul」「Lange」rha「n」s←→「Paul」「Lange」vi「n」(元より【ブラックホール関連事物】【911 の先覚的言及事物】とのからみでかぐわかしい側面とともにあると先述の【双子のパラドックス】のそもそももってしての考案者)との関係性をわざと想起させるようなタイトル付けがなされているのであると想定すれば、自然、そうした関係性が際立つようなかたちともなっている (タイトルに「これ見よがし」に付された【77】との数値) も 同じくものことに関わる)]

以上の A. から C. 一筆者が何故にもってして【*Paul Langerhans* (ブラックホール生成予見小説として本稿にて問題視している『北緯 38 度 54 分、西経 77 度 0 分 13 秒 ランゲルハンス島沖を漂流中』表題中にその名称が取り込まれている腓臓の一構造、ランゲルハンス島の発見者たる「パウル・ランゲルハンス」)と *Paul Langevin* (双子のパラドックスの概念を呈示したことで広くも知られている「ポール・ランジュバン」)の英文綴り上の類似性】にまで殊更に着目しているかの事由となるところ— についてこれより順次・段階的に「遺漏なくも、」を努めての解説をなしていく。

まずもって順次段階的なる取り上げ事項として引き合いに出しもした A. から C. の(上に挙げての)ことらのうち、A. および B. 、

A

[双子のパラドックス —[1911 年] 提唱— を重要な要素として持ち出している特定文物にあってそちら [双子のパラドックス] に関わるところで「一体全体、どういうわけなのか、」【双子の塔 (ツインタワー) が [911] という日付にて崩された折の出来事との複合的相関関係】がみとめられるようになっている、しかも、尋常一様ならざるやりようで [ブラックホールおよびワームホール絡みの側面] にてそうもしたことがみとめられるようになっているとのことが「ある」]

B

[(1911 年にポール・ランジュバンによって明確化されたとされる) 双子のパラドックスと同様の効果・結果について描いている (とのことも部分的には指摘される) お伽噺らが洋の東西にて存在しているのであるが、それら洋の東西にて存在している問題とな

るお伽噺(フェアリー・テール)らが【文化伝播ではおよそ説明がつきがないような数値使用にあつての一致性】を(確たる文献的事実の問題として)伴っているとのものらとなりもしているとのことがあり、かつ、それらがブラックホールやワームホールにまつわる特色とも相通ずる特質をも伴っているとのことが「ある」]

の各点につき —(「その話柄としての奇矯性については当然に筆者も承知の上であるが、事実は変わらない」と申し述べたいところであるとしつつ)— 解説することとする。

さて、最初に、

A

[双子のパラドックス — [1911年] 提唱— を重要な要素として持ち出している特定文物にあつてそちら [双子のパラドックス] に関わるところで「一体全体、どういうわけなのか、」【双子の塔(ツインタワー) が [911] という日付にて崩された折の出来事との複合的相関関係】がみとめられるようになっている、しかも、尋常一様ならざるやりようで [ブラックホールおよびワームホール絡みの側面] にてそうもしたことがみとめられるようになっているとのことが「ある」]

とのことについては直下、呈示する通りのことを(委細は先の段の詳説部に譲るが)本稿にて既に解説してきたとのことがある。

[先だつてもその段でも何度となく解説してきたとのことを(再びもつてして)言及なすとして]

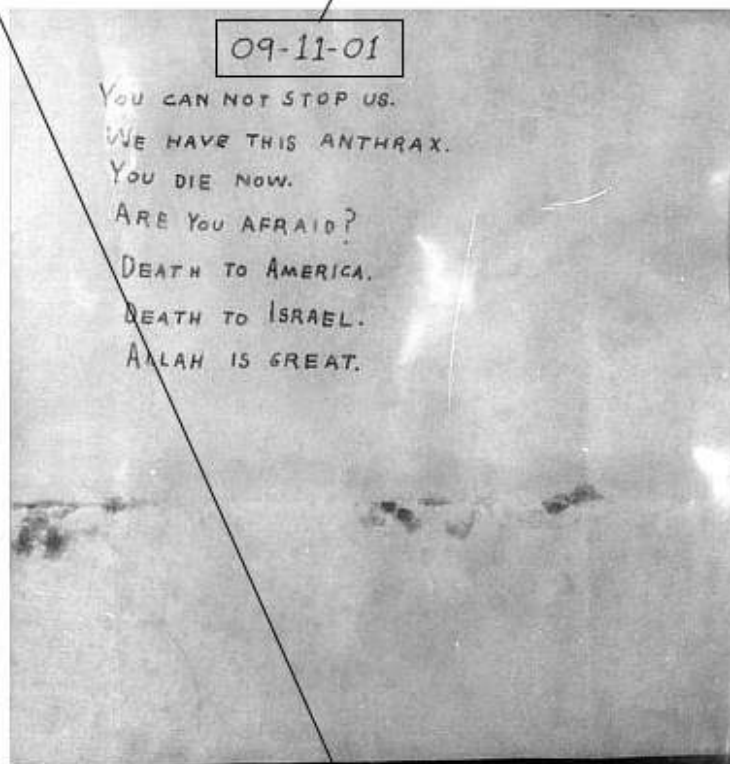
本稿では羅列明示してきたとの文献的事実 — 出典(Source)紹介の部 28, 出典(Source)紹介の部 28-2, 出典(Source)紹介の部 28-3, 出典(Source)紹介の部 31, 出典(Source)紹介の部 31-2, 出典(Source)紹介の部 32, 出典(Source)紹介の部 32-2, 出典(Source)紹介の部 33, 出典(Source)紹介の部 33-2 を割いて指し示してきたところの文献的事実 — 「のみに」依拠して指摘できるところとの式で、

BLACK HOLES & TIME WARP Einstein's Outrageous Legacy (原著 1994 年刊行、訳書 1997 年刊行)

との物理学者キップ・ソーンの手になる著作にあつての [双子のパラドックス] に関わるところに尋常一様ならざる予見性 — 個人の主観など問題にならずにはきと指し示せるところの予見性 — が表出していることを問題視してきたとの背景がある。具体的には下にて振り返り表記するとおりのことを問題視してきたとのことがある。

[原著は1994年に刊行を見、邦訳版は1997年に刊行を見たとのキップ・ソーン著書 BLACK HOLES & TIME WARP Einstein's Outrageous Legacy 『ブラックホールと時空の歪み アインシュタインのとんでもない遺産』(邦訳版版元は白揚社)という著作にあっては[仮説]を支えるための[机上のシュミレーション(思考実験)]が「目立って911の事件とつながるような数値および意味上の規則を伴って」持ち出されているとのことがある。につき、まずもって述べれば、物理学者キップ・ソーンとその妻が「郵便番号91101」(こちら91101という数値は20「01」年「9」月「11」日を米国にてのIDカード日付表示などにて911/01とのかたちで指し示す日付表記たりうるものでもある — (英文Wikipedia [Calendar date] 項目にて9「月」11「日」(20)01「年」表記に通ずる Gregorian, month-day-year [グレゴリウス方式: 月: 日: 年] とのフォーマットについて This sequence is used primarily in the United States. 「こちら([月] [日] [年] の順番での) 日付表記法は主として合衆国にて用いられるものである」と記載されているようなところとしてそうもなっている —)、すなわち、米国郵便番号に該当するZIPコードが91101ではじまる地域で[「双子のパラドックス」に依拠したワームホール型タイムマシン生成挙動]を開始したとの思考実験(現時点での人類文明にあっての実現不可能技術を前提にしての思考実験)が同著にあって登場を見ているとのことがある。そちら思考実験につき、問題と見えるポイントは「双子」との言葉を含む「双子のパラドックス」と結びつく思考実験を「91101」というかの事件、「双子の塔が崩壊させられたかの事件」を想起させる郵便番号の地番ではじまる地域(英語圏表記で01年9月11日の略記数値列でもある91101で郵便番号がはじまるパサデナ)を「始発点として」実施しているとのことである]

Second anthrax note



(From Wikimedia Commons)

炭疽菌テロの容疑者(suspect)としてのBruce Ivins 容疑者が書いたとされる犯行声明書(英文 Wikipedia掲載のものよりの転載)。同犯行声明文については(本稿の後半部にて意図して)後にも問題視する所存だが、ここで注目いただきたいのは犯行声明文に見る「91101」というナンバー、米国記述式で2001年9月11日を指すものとして用いられているとの同ナンバーがパサデナという地区のジップコード(郵便番号)の開始番号となっていることに「こだわらざるをえぬ」との奇怪な相関関係が現出していることである。

[上にて表記の BLACK HOLES & TIME WARP Einstein's Outrageous Legacy 『ブラックホールと時空の歪み アインシュタインのとんでもない遺産』に認められる[ソーンが郵便番号91101ではじまる一画(Pasadena)にてなしはじめたとの設定のシュミレーション(思考実験)]にあってその原理が利用されている「双子の」パラドックスというものだが、その提唱年は前世紀初頭1「911」年であるとして一般に認知されている(出典も無論、先に挙げている)。それにつき「問題となるのは、」(「それなくしてはキップ・ソーン著作に見る表記の思考実験、すなわち、[ソーンが郵便番号91101ではじまる一画にてなしはじめたとのシュミレーション(思考実験)]が語れないとの按配になっている)そちら[「双子の」パラドックス]の提唱年が1「911」年であることより「双子の」塔が崩された日付(9月11日という日付)が想起されもするということである]

[ソーンは自著『ブラックホールと時空の歪み』にて[「双子の」パラドックス]にまつわるシミュレーション、[パサデナにて「空間軸上の」始点を置くワームホールタイムマシン生成挙動]たるシミュレーションに言及する前に「また別の」思考実験、[パサデナを走行する自動車の上で爆竹を順次爆発させるとの設定の思考実験]を——双子のパラドックス(上述のように1911年に提唱された概念)に通ずる時間の相対性の説明との絡みで——引き合いに出すとのことをなしている。そこにいう他の思考実験にあつて「も」認められる[パサデナ]とは(繰り返すが)郵便番号「91101」が最も若い番号(地区にての筆頭郵便番号)として割り振られている一画となる。であるから、[通過可能なワームホール]にまつわる思考実験の議論の前提として持ち出されている思考実験からして[「双子の」パラドックス(1「911」年提唱)]、[パサデナ(空間軸上の開始ポイントで郵便番号にして91101から地番表記されているとの一画)]、[(車上)爆竹の「順次」起爆 firecrackers detonation]との観点で二〇〇一年九月一日に起こったツインタワー崩落事件(「時間差を呈して」崩落したツインタワー以外に計七棟のビル群がワールド・トレード・センターにて崩れ去った事件)のことを想起させるとのことがある]

[先述のように(ソーン著作『ブラックホールと時空の歪み』にあつての)パサデナを始点とする——郵便番号91101ではじまる地域区画を始点とする——シミュレーション(思考実験)は[双子のパラドックスを応用したワームホール型タイムマシン生成挙動]として言及されているものであるが、同じくものソーン著作(原著1994年刊行)ではその思考実験開始年次につき[2000年1月1日午前9時]との明示がなされている(：ややこしいととらえられるところだろうが、1994年に刊行の書籍の中で双子のパラドックス(1911年提唱)を応用しての思考実験がパサデナ(地番91101ではじまる地区)を「空間軸上の」始発点にし、なおかつ、2000年1月1日9時を「時間軸上の」始発点として開始されたとの設定が採用されているわけである)。その開始年次、2000年1月1日午前9時につき時間の単位として若い順番、[時刻→日付→年次]との順番で配置すると一般的な「はない」方法で並べかえすと「9」「1」「1」「2000」とのかたちとあいなるものである。かの911の事件の発生時(「9」「1」「1」「2000」と差分が1年しかない日付け表記を意識させる数値が出てくる——それ単体だけについて述べれば、牽強付会(こじつけがましき論法)と見做されかねないだろうが、ソーン著書の兼ね合いでは[パサデナ郵便番号問題][双子のパラドックスにまつわる意味的問題]が全く同じところで問題となっていることに留意すべきである——]

[直近にて言及のようにソーン著書『ブラックホールと時空の歪み』にて取り上げられる[双子のパラドックスを応用したワームホール型タイムマシン生成挙動]の開始時期は2000年「1月1日午前9時」であるとされているわけだが、2000年という時期は[2000年紀のはじまり](ニュー・ミレニアムの開始時期)として[2001年]と混同されるとの一般的理解が存し、その点について扱った科学読み本——チャールズ・サイフェ Zero: The Biography of a Dangerous Idea『異端の数ゼロ』——よりの引用も本稿の先の段でなしているとのことがある。そして、その2000年に原著が刊行されたその問題となる他著作、2000年と2001年という年度が[どちらがニュー・ミレニアムの始点か]との観点で混同されているとのことに言及しているとの著作——チャールズ・サイフェ『異端の数ゼロ』——からして911の事件が発生する前よりブラックホールとの言葉を[グランド・ゼロ]と結びつけているとのことをなしているとの著作となり、また、キップ・ソーン『ブラックホールと時空の歪み』に挿絵提供しているのと同様のイラストレーターの手になる独特な画風のイラストレーションを[通過可能なワームホール絡みの図像]として挙げているとの著作とすらなっている(であるからあまりにもできすぎている)。その点も加味して、キップ・ソーン著作『ブラックホールと時空の歪み』の時間の単位を若い順に挙げての「9」「1」「1」「2000」とのワームホール・ゲート構築開始時期は「9」「1」「1」「2001」と混同されるものとしての重み付けをなすべきである——片方で「9」「1」「1」「2000」と結びつく日付け表示がなされているかと思えば、それと同じイラストレーターの手による挿絵を[同じくものトピック]にまつわる挿絵(通過可能なワームホールにまつわる挿絵)として採用しているのもう一方の他の著作が「2000年と2001年のニュー・ミレニアム始点としての差分は曖昧模糊としている」とのことを述べている著作であるとのこと、その意味を重んずべきである——]

まとめれば、

「問題となる1994年初出の(幅広く流通しての書籍化を見ている)科学解説書
BLACK HOLES & TIME WARP Einstein's Outrageous Legacy『ブラックホールと時空の歪み アインシュタインのとんでもない遺産』では
[通過可能なワームホール; traversable wormhole]
にまつわる思考実験が掲載を見ており、まさしくものそちら思考実験にあつての「空間

軸上の始点となるポイント]、そして、[時間軸上の始点となるポイント]、その双方で[先に発生した911の事件を想起させる数値規則]が用いられており、かつまた、そちら思考実験で用いられるメカニズムからして[「1911年に提唱された」双子のパラドックス]、要するに、[911と双子を連想させるもの]となっている。だけではない。そちら思考実験、[通過可能なワームホール]にまつわる思考実験のことが叙述される前の段で同じくもの1994年初出の著作『ブラックホールのと時空の歪み』にあっては他の思考実験のことが挙げられており、その実験(通過可能なワームホールのタイムマシン化に向けての応用の前提となる[時間の相対性]のことを説明するために挙げられている思考実験)からして[空間軸上の始発点]を[地番スタート番号との兼ね合いで911と結びつく地域]に置いており、また、同実験、[時間差爆発]を取り扱っているものともなる([911との数値]と[時間差爆発]との兼ね合いでかの911の事件を想起させもする)。

加えて、である。そうもした思考実験らを掲載している著作とまったく同じテーマ(通過可能なワームホール)をまったく同じイラストレーターになるところとして掲載している「他の」著作 Zero: The Biography of a Dangerous Idea『異端の数ゼロ』からして[911の事件とブラックホールの繋がり合い]を想起させるものとなってもいる(2001年に911の事件が発生する前、2000年に世に出た「他の」著作からしてそうしたものとなっている)」

(※尚、述べておくが、ここにて問題視している BLACK HOLES & TIME WARP Einstein's Outrageous Legacy『ブラックホールと時空の歪み アインシュタインのとんでもない遺産』も ZERO: The Biography of a Dangerous Idea『異端の数ゼロ』(ハードカバー)も決して稀覯本の類(流通量少なき奇書・希書の類)などでは断じてなく、国内でもある程度流通を見ており、大手書店チェーンの都市部大型店にあっての[サイエンス][科学]などと振られての書架にときに据え置かれているようなものであること、断っておく——であるから、探求活動の中、そちら方面の書籍を網羅的に精査していた筆者は両書に見てとれる奇怪なる特性に気付くに至ったとことがある。につき、「不思議でならないのは、」国内外込みにそういうことに気付いた人間が他にいてもおかしくはないはずであるにも関わらず、世界で誰一人として同じくものことを(筆者を除き)訴求しようとしていないように映ることである(これより日付け偽装媒体の類を運営するような頭の具合のよろしくはない、関連領域で軽侮さえ招けば存在意味充足といった劣化模倣者が出てくる可能性もあるかもしれないとも見るのだが(情報操作の問題)、現行にての話なせば、とにかくも同種同文のことを述べているのはこの身、筆者ぐらいのものである)——)

表記の委細を本稿従前の段に譲ってのこと、

[僅か一つの思考実験に関することとして [双子] [2001年9月11日という日付けに関わるどころの数値列] が重層的表出を見ていること]

があり、そのことによって、

A

[双子のパラドックス — [1911年] 提唱— を重要な要素として持ち出している特定文物にあってそちら [双子のパラドックス] に関わるところで「一体全体、どういうわけなのか、」【双子の塔(ツインタワー)が [911] という日付にて崩された折の出来事との複合的相関関係】がみとめられるようになっている、しかも、尋常一様ならざるやり方で [ブラックホールおよびワームホール絡みの側面] にてそうもしたことがみとめられるようになっているとのことが「ある」]

と申し述べるのである。

次いでもってして、

B

[(1911年にポール・ランジュバンによって明確化されたとされる) 双子のパラドックスと同様の効果・結果について描いている(とのことも部分的には指摘される)お伽噺らが洋の東西にて存在しているのであるが、それら洋の東西にて存在している問題となるお伽噺(フェアリー・テール)らが【文化伝播ではおよそ説明が付きがたいような数値使用にあっての一致性】を(確たる文献的事実の問題として) 伴っているとのものらとなりもしているとのことがあり、かつ、それらがブラックホールやワームホールにまつわる特色とも相通ずる特質をも伴っているとのことが「ある」]

とのことについての(本稿従前内容を振り返りつつもの)解説をなしておく。

その点もってして、

[浦島伝承]

が [双子のパラドックス] というものと類似の要素が伴っているとのこと(そこまではよく知られているし語られてもいるとのこと)につき、[出典\(Source\)紹介の部 28-3](#) にて呈示の話を再度、繰り返しておく。

(直下、和文ウィキペディア[双子のパラドックス]項目、そこにての[双子のパラドックスのストーリー]の節にあっての現行記載よりの再度の原文引用として)

双子のパラドックスのストーリーは次のようになる。双子の兄弟がいて、弟は地球に残り、兄は光速に近い速度で飛ぶことができるロケットに乗って、宇宙の遠くまで旅行したのちに地球に戻ってくるものとする。このとき、弟から見れば兄の方が動いているため、特殊相対性理論が示すように兄の時間が遅れるはずである。すなわち、ロケットが地球に戻ってきたときは、兄の方が弟よりも加齢が進んでいない。一方、運動が相対的であると考えれば、兄から見れば弟の方が動いているため、特殊相対性理論が示すように弟の時間が遅れるはずである。すなわち、ロケットが地球に戻ってきたときは、弟の方が兄よりも加齢が進んでいない。これは前の結果と逆になっており、パラドックスである。このパラドックスは、双子の兄弟の運動が対称ではないことから解決される。弟は地球(慣性系と仮定してよい)にいるのに対し、ロケットに乗った兄は、出発するときおよび、Uターンするときに加速されるため、少なくとも加速系に一時期いることになる。すなわち、ずっと慣性系にいる弟とは条件が異なる

のである。

(再度もってしての基本的なところよりの引用部はここまでとする)

上にて引用しているところに関して

[双子の兄⇒(変換)⇒浦島]

[双子の弟⇒(変換)⇒浦島が故郷に残してきた関係者ら]

[ロケット⇒亀(型スペースシップ)]

との切り替えをなした「だけ」でそのまま表記「しなおす」と次のようになる。

[双子のパラドックスのストーリーは次のようになる。[浦島]と[浦島の故郷の関係者ら]がいて、[浦島]は地球に残り、[浦島]は光速に近い速度で飛ぶことができる[亀]に乗って、宇宙の遠くまで旅行したのちに地球に戻ってくるものとする。このとき、[浦島の故郷の関係者ら]から見れば[浦島]の方が動いているため、特殊相対性理論が示すように[浦島]の時間が遅れるはずである。すなわち、[亀]が地球に戻ってきたときは、[浦島太郎]の方が[浦島の故郷の関係者ら]よりも加齢が進んでいない。一方、運動が相対的であると考えれば、[浦島]から見れば[浦島]の方が動いているため、特殊相対性理論が示すように[浦島太郎]の時間が遅れるはずである。すなわち、[亀]が地球に戻ってきたときは、[浦島]の方が[浦島]よりも加齢が進んでいない。これは前の結果と逆になっており、パラドックスである。このパラドックスは、[浦島と浦島]の運動が対称ではないことから解決される。浦島太郎の関係者は地球(慣性系と仮定してよい)にいるのに対し、[亀]に乗った[浦島]は、出発するときおよび、Uターンするときに加速されるため、少なくとも加速系に一時期いることになる。すなわち、ずっと慣性系にいる浦島の故郷の関係者らとは条件が異なるのである]

上もてお分かりだろうが、[双子のパラドックス]とは浦島太郎伝説と非常に近接性が強いとの話となっているのである。

(それにつき「現行の」和文ウィキペディア[時間の遅れ]項目にても同様のことを示す記述がみとめられるため、そちら現行の記載内容を掻い摘んで引用しておくとする。(以下、和文ウィキペディア[時間の遅れ]項目より引用をなすとして) “例えば、宇宙船が光速の90%の速度で航行しているとする。単純化するため加速・減速は考えない。ずっと等速直線運動であると仮定する…(中略)…宇宙船の時計の刻み幅は静止系の約0.44倍である。つまり宇宙船内の時計では、まだ0.44年しか経過していない。この現象を利用すると、光速に近い宇宙船で宇宙を駆けめぐり、何年か後、出発地点に戻ってきたような場合、出発地点にいた人は年を取り、宇宙船にいた人は年を取らないという現象が生じ、宇宙船は未来への一方通行のタイムマシンの役目を果たすことになる(宇宙船から静止系を見ると、静止系は相対的に運動していることになるが、時間の遅れが生じるのは宇宙船側である。詳しくは双子のパラドックスの項を参照のこと)。…(中略)…この状態が、日本のお伽噺である『浦島太郎』において、主人公の浦島太郎が竜宮城に行って過ごした数日間に、地上では何百年という時間が過ぎていたという話にそっくりであるため、日本のSF作品などではウラシマ効果とも呼ばれる(SF同人誌「宇宙塵」主宰者の柴野拓美が命名者と言われる)”(引用部はここまでとする)

上にて再言及しもしたように [双子のパラドックス] と類似性を有している浦島伝承にあつて、
[尋常ならざる特性]

が伴っているとのことの解説を(同文に本稿従前内容を振り返ってのところとして)さらに続けることとする。

浦島伝承にあつての初期のもの、『丹後国風土記』に収録されているとの[浦島子]伝承は逸文(すなわち他文書にあつての引用形態)でしか今日に伝わっていないもののだが、

(同様に本稿にて従前、呈示してきたところを振り返るとして)
「浦島子(浦島太郎の元となった伝承上の人間)が助けた亀の化身の女に連れられて蓬萊に赴き、そこでその化身の女と親密に**[3年の時を過ごしたところ、故郷では300年の時間が経過していた]**。そして、後、玉匣(たまくしげ)を開けたらば、若さが吹き飛んだといった描写がなされている」

との内容を有しているものとなっている(そちら初期のバージョンではまだ[乙姫]も登場しておらず(登場するのは[亀の化生した女]である)、目的地も[龍宮]ではなく[蓬萊]となっている)。

(※浦島伝承が初期存在していたものにあつて**【[3年]と[300年]の時間的離隔】**を具現化させているとのことの出典として)

本稿にての従前の段 —**出典(Source)紹介の部 29**— にても言及・解説しているところを再度繰り返して示すこととするが、『浦島子伝』(一九八一年に現代思潮社より刊行／著者は重松明久(元広島大学教授／物故者))にて[逸文](他文書引用文)として残置している浦島子伝について次の通りの内容記載がなされている。

(直下、『浦島子伝』(現代思潮社)、その p.12 から p.13、『丹後国風土記』収の浦島子伝承に対する訓読文よりの再度の引用をなすとして)

時に嶼子(しまこ)、旧俗(もとづくに)を遺(わす)れて仙都(とこよ)に遊ぶこと、**既に三歳(みとせ)を逕(すぎ)たり**。忽(たちまち)に土(くに)を懐(おも)ふ心を起(おこ)るに、独り親(かぞいろ)を恋(こ)ふ。故(かれ)、吟哀(かなしび)繁(しげ)く発(おこ)り、嗟嘆(なげき)日に益(ま)しき。女娘(をとめ)、問(と)ひけらく

…(中略)…

女娘(をとめ)、玉匣(たまくしげ)を取りて嶼子(しまこ)に授けて謂(い)ひけらく、「君、終(つひ)に賤妾(やっこ)を遺(わす)れずして、眷(かへり)み尋ねむとならば、堅く匣(くしげ)を握(とり)、慎(ゆめ)、な開き見たまひそ」といひき。

…(中略)…

先世(さきのよ)に水江(みづのえ)の浦嶼子といふものありき。独り蒼海(うみ)に遊びて、復(また)還(かへ)り来ず。**今、三百余歳(みほとせあまり)を經(へ)つといへり**。何ぞ忽(たちまち)に此(こ)を問(と)ふや」といひき

(引用部はここまでとする)

(上は「浦島子が[仙都][亀の化身の女に連れられて到達し蓬萊で[とこよ]と訓読されている[仙都]で三年あまりすぎたところ、故郷親族に対しての懐旧の情を抑えがたくなり」「玉匣(たまくしげ／玉手箱)を開けるな、と言われつつもそれを受け取って故郷に帰還したらば」「故郷の住人に[浦島子という男が三百年前に失跡したと伝わっていること]を聞いた」とのことを記載した部位である)

ここまでで、

[双子のパラドックスと結びつく浦島伝承が3年と300年の時間経過の差分を描くものである]

とのことにつき(本稿従前内容を振り返っての)呈示をなしたところで浦島伝承の話から打ってかわってのケルト伝承について取り上げる。

欧州はアイルランド、往古ケルトの地にて伝わっているとの、

[オイシンの伝承] (Oisín 伝承. Oisín については普通一般には(ケルトの発音を意識してか)オシアンなどと和文では表記されることが多いが、ただし、国内にて流通している著名神話学者ジョセフ・キャンベルの著書 *The Hero with a Thousand Faces* の訳本などにはオイシンといったかたちで訳され記述されている)

にあつては

[アイルランドの若武者オシアンが契りを交わすことになった[妖精としての属性を持つ女の故郷たる異界]にて同女と昵懇に3年過ごしていたらば、現世では300年が過ぎていた。そして、オイシンは若さを現世に帰った際に失うとの描写がなされている]

との記述が浦島子伝承と照応する — 「若い男の主人公が異界の住人の女を助け出したところ」「彼らは恋に落ち」「異界に戻って三年を過ごしたところ」「現世に戻ったらば三〇〇年が経過しており」「そこにて主人公が若さを失う(との描写がなされている)」とのことで照応する— ところとなっている。

(※アイルランド伝承にあつて [3年] と [300年] の時間的離隔が双子のパラドックスに通ずるようなところとして具現化していたこと、その出典として)

本稿にての先の段、[出典\(Source\)紹介の部 30-2](#)にて挙げていたところを再掲するところとして、次のようなところからオンライン上より裏取りできるところとなっている。

(直下、Project Gutenberg のサイトより全文ダウンロード可能なものとなる **The Science of Fairy Tales (1891)** にての **CHAPTER VIII. THE SUPERNATURAL LAPSE OF TIME IN FAIRYLAND**[第一三章:仙界での時の超自然的なる経過]の章、p.199よりの抜粋 — オイシンが妖精国の王女がドルイド僧によって豚の顔にされていたところを回復させて妖精国の王位を継いだとのオイシン伝承の異伝、その後の部のセクションよりの抜粋— として)

So he reigned for many a year, until one day the longing seized him to go to Erin and see his father and his men. His wife told him that if he set foot in Erin he would never come back to her, and he would become a blind old man; and **she asked him how long he thought it was since he came to Tir na nÓg. “About three years,” he replied. “It is three hundred years,” she said.** However, if he must go she would give him a white steed to bear him; but if he dismounted, or touched the soil of Erin with his foot, the steed would return that instant, and he would be left a poor old man. This inevitable catastrophe occurred in his eagerness to blow the great horn of the Fenians, in order to summon his friends around him.

(拙訳として)

「彼(オシアン)は[エリン](アイルランド異称)に立ち戻るとの切望が彼をとらえてやまなくなったとのその日に至るまでの何年もの間、(妖精国の)統治をなしていた。彼の妻はオシアンに彼がもしエリンの地にて足をつけたのならば、彼は二度と彼女の元へは帰ってこれず、盲目の老人と化

すであろうとのことを告げ、その上で、彼にティル・ナ・ノーグ(訳注:オシアンが足を踏み入れた妖精らの常若の国)に来てからどれほどの時間が経過していると考えているのか、と尋ねた。「およそ三年であろう」と彼オイシン(オシアン)は答えた。「三〇〇年です」と彼女は言った。しかしながら、もし彼が行かねばならぬというのならば、彼女は彼を支えられるだけの元気な白馬を供与するとし、もし、彼がその馬から下馬し、自身の足でエリン(訳注:アイルランド古称)の地に足を付けるとのことにあいなったならば、白馬はその刹那に立ち戻り、一人みすばらしい老人として取り残されるだろうとの(話の)運びとなった。こうして不可避免的な破局が[オシアンの(去りし日の)同僚らを彼の周りに呼び集めるためにフェニアンの巨大な角笛を吹き鳴らそうとの熱情]にて生じることになった」

(訳を付しての引用部はここまでとする)

(以上、引用したのはケルトの英雄オイシン 一本稿の先だつての段でも記載したことだが、日本国内では明治期より(夏目漱石などの文人の関与もあって)そればかりが取り上げられているくらいがある「どうでもよいもの」、ジェイムズ・マクファーソンという人物に由来するところの Macpherson's Ossian との近代捏造説話体系とされるオシアン説話とは別の原典・別の物語にその足跡が見出されるところのケルト古来の英雄オシアン— が異界にて3年滞在した間に現世では300年が経過していたとのことを記載した部位である)

ここまで紹介してきたところの【浦島子伝承】と【Oisín 伝承】の共通項 — 「若い男の主人公が異界の住人の女を助け出したところ」「彼らは恋に落ち」「異界に戻って三年を過ごしたところ」「現世に戻ったらば三〇〇年が経過しており」「そこにて主人が若さを失う(との描写がなされている)」とのかたちで照応するとの共通項— については

[文化伝播では説明がつきがたい]

とのものになっている。

その点、本稿の先の段にて述べているように、

「浦島子伝承については6世紀から7世紀に成立を見ているものである」

との見方が呈示されている(:『浦島子伝』、一九八一年に現代思潮社より刊行された著作『浦島子伝』(著者は重松明久(元広島大学教授・物故者))、そのp.105からp.106よりの中略をなしつつもの原文引用をなせば、(以下、引用をなすとして)“浦島伝説は恐らく六、七世紀に濫觴(らんしょう)し、今日に至るまで諸種の文芸や昔話の形式で、書きつぎ語り伝えられてきた、かなり息の長い説話である。…(中略)…初期の伝記においては、主人公の名前はほぼ一貫して浦島子と表記されており、さらに恐らく成立期のものと思われる該伝記に、『浦島子伝』を名のる書もみられることにもよる。ところで室町時代頃成立した小説類以降においては、主人公は一転して浦島太郎とよばれることも、周知のところである”(引用部はここまでとする)とのかたちで解説されているところである。

他面、Oisín 伝承 — ここ日本ではそればかりが取り上げられているくらいがある(夏目漱石のような明治期文人の紹介活動によってそればかりが取り上げられているくらいがある)との【近代にて捏造された説話体系】とされもしての18世紀人ジェイムズ・マクファーソンに由来する Macpherson's Ossian と呼称される説話集にみるそれとは別物である(と本稿前半部にあつて解説してきた)ところの Oisín 伝承 — については

[そこにては日本という島国の存在がマルコ・ポーロの『東方見聞録』(13世紀末期獄中執

筆なされたとされる文書) が登場を見てようやくおぼろげ・不確実ながらも知られるに至った欧州、その欧州の僻地たるアイルランドにて『東方見聞録』執筆以前には成立していたことが想定される伝承]

となっている(：本稿では以上のように解される論拠の紹介をなすために出典(Source)紹介の部 30-2にて Oisín 伝承に後続するケルト(ブリトン人)の伝統をも受け継いでの歌謡体系、ブリトン・レーの中の一物語であるギンガモール GUINGAMOR 伝承、オシアン伝承の影響を受けてのものと解されるようになって12世紀頃成立のものとされる同伝承がいかなる属性を帯びてのものなのかにつき Project Gutenberg を通じて公開されている(従って、書物の全文ダウンロードが容易になせるとの)1907年刊行の書、ARTHURIAN ROMANCES Unrepresented in Malory's "Morte d'Arthur"というアーサー王関連の伝承を集めた書物の内容の引用をなしながらも説明「も」講じている)。

そうもしたところでは、繰り返すが、

【浦島子伝承 (6世紀から7世紀にかけて日本にて成立したとされる説話)】

【Oisín 伝承 (『東方見聞録』で日本のことがおぼろげ・不正確に知られるに至った欧州、その欧州の僻地にて『東方見聞録』成立前から存在していたと解されるようになって伝承)】

の間にあっては自然(ジネン)として

[直接的文化伝播]

の問題を観念できないようになって(欧州人が浦島子伝承「それそのもの」の内容を参考に Oisín 伝承なるものを構築したとはマルコ・ポーロ著述に見るように没交渉であった日本と欧州の隔絶に起因する細かい文献情報の伝播不可能性より観念できない) のではあるが、他面、

[間接的文化伝播]

の問題「もまた」観念しづらいとのことがある(欧州人が浦島子伝承の元となった第三の伝承を参考に Oisín 伝承なるものを構築したとは観念しづらい) ようになっているとのことがある。

それにつき、浦島子伝承に関しては中国の特定古典(洞庭湖の竜女伝承を扱ったの古典)にその元となった要素があるとも見受けられるのだが、現行、筆者が把握するところでは少なくとも、三年と三〇〇年との一致性の特質まではそちら中国古典にあってからして介在していないと見受けられるようになっていたためにそうも述べるのである(但し、把握していないところでそういう問題が、後日の偽造の可能性も含めて、浮かび上がってくる可能性はあるにはある)。

従って、浦島伝承と Oisín 伝承は文化伝播の問題が観念しがたいところで奇怪につながっている伝承らとなる —— 但し、読み手が「若い男の主人公が異界の住人の女を助け出したところ」「彼らは恋に落ち」「異界に戻って三年を過ごしたところ」「現世に戻ったらば三〇〇年が経過しており」「そこにて主人が若さを失う(との描写がなされている)」とのかたちでの照応関係が成立していることについて「似ても似つかない話だ」「全く関係ない話だ」と言い切れるならば(要するに事実を無視し、適正な事実に対する意味づけをなそうとしない相応の性質の語るにも値しない人間ならば)話は別である —— のだが、といったつながる素地がないようにも見えるのに細かいところでそっくりであるといった按配の浦島伝承および Oisín 伝承が双方ともに、

[双子のパラドックス(と呼ばれているモデル)と接合する伝承]

ともなっていることを重要視しているのがこので話となる(異界で3年過ごしたならば、現実には300年経過していた、といったことが起こりうる局面は 一本稿にての上の段で繰り返し解説しもしたことであるが— 双子のパラドックスの具現化局面である)。

以上よりここでの話にあつて —— (「[小説『北緯38度54分、西経77度0分13秒 ランゲルハンス

島沖を漂流中』の長ったらしくそれがゆえに意味深いとのタイトルにてその姓が用いられているとの立志伝中の学者パウル・ランゲルハンス(綴りは Paul Langerhans)]と[双子のパラドックスの提唱者たる学者ポール・ランジュヴァン(Paul Langevin)]との間には[ポール・ランジュバンを構成するアルファベット 12 字中、10 字(vi の 2 字を除く 10 字)は[字の綴り順序込み]でパウル・ランゲルハンスと共通のものとなっている]との関係性が存し、そして、そうした関係性すら重きをもって見るに値するとの事情がある」とのことを訴求するための A. から C. と振ってのことを順次段階に解説することになっているとのことでの話にあって)—— 、

A

[双子のパラドックス —[1911 年] 提唱— を重要な要素として持ち出している特定文物にあってそちら[双子のパラドックス]に関わるところで「一体全体、どういうわけなのか、」【双子の塔(ツインタワー)が [911] という日付にて崩された折の出来事との複合的相関関係】がみとめられるようになっている、しかも、尋常一様ならざるやりようで [ブラックホールおよびワームホール絡みの側面] にてそうしたことがみとめられるようになっているとのことが「ある」]

とのことのみならず、

B

[(1911 年にポール・ランジュバンによって明確化されたとされる) 双子のパラドックスと同様の効果・結果について描いている (とのことも部分的には指摘される) お伽噺らが洋の東西にて存在しているのであるが、それら洋の東西にて存在している問題となるお伽噺(フェアリー・テール)らが【文化伝播ではおよそ説明が付きがたいような数値使用にあっての一致性】を(確たる文献的事実の問題として) 伴っているとのものらとなりもしているとのことがあり、かつ、それらがブラックホールやワームホールにまつわる特色とも相通ずる特質をも伴っているとのことが「ある」]

とのこともが[常識的なありようからの偏差が際立つ]とのかたちで具現化しているとのことを示したかたちとなる、そのように申し述べる (:尚、さらに述べれば、「そうした話が諸共ブラックホールに結節、不快な寓意に通ずる」とのことを示すが如くところとして本稿にての先立つ補説の部、補説 1 から補説 4 と分けて延々と書き連ねてきたところの補説の部にあつての補説 2 の部では【初期浦島伝承に見る蓬莱(ほうらい)から転じての竜宮】が【常世の領域】転じて【常夜の領域】として、そして、【時空間の法則が歪んだ場】として【ブラックホール】の類と接合していると述べられるようになっていることを「も」事細かに出典挙げながら解説、問題視していたとのことがある —詳しくは出典(Source)紹介の部 75-3 を包摂する解説部を参照されたい—)。

次いで、

C

(これが【一連の話の行き着くところ】として極めて重要なところであると強調したいところとして) [(先行しての A. および B. の内容をも顧慮のうえで重み・意味合いを判ずべきこととして) 【双子のパラドックス提唱者の姓名ポール・ランジュバン】の英文綴り字 12 字中、10 字を「綴り順含めて」共有しているとのパウル・ランゲルハンスが発見した隣島のランゲルハンス島(アイル・オブ・ランゲルハンス)の名前を含む小説 **Adrift Just off the Islets of Langerhans:Latitude 38°54'N,Longitude77°00'13W** は(先述のように同作が【ブラックホール人為生成問題の先覚的言及】を内に含んでいる作品であるのみならず) 【911 の事件】と結びつく側面「をも」有していると判じられるような作品である。 については「Paul」「Lange」rha「n」s←→「Paul」「Lange」vi「n」(元より【ブラックホール関連事物】【911 の先覚的言及事物】とのからみでかぐわかしい側面とともにあると先述の【双子のパラドックス】のそもそももってしての考案者)との関係性をわざと想起させるようなタイトル付けがなされているのであると想定すれば、自然、そうした関係性が際立つようなかたちともなっている(タイトルに【「これ見よがし」に付された【77】との数値】も同じくものことに関わる)]

とのことについての解説を講ずることとする。

その点もってして、まずもって述べるが、

Adrift Just off the Islets of Langerhans:Latitude 38°54'N,Longitude77°00'13W 『北緯 38 度 54 分、西経 77 度 0 分 13 秒 ランゲルハンス島沖を漂流中』 (1974)

にその位置座標がみとめられる、

Latitude 38°54'N,Longitude77°00'13W [北緯 38 度 54 分、西経 77 度 0 分 13 秒]

との座標系はホワイトハウス界限(を包摂するワシントン DC 一帯)の座標系と「ほぼ一致している」(おおよそ一致している)ということが「ある」。

([表記のここの出典として]

ホワイトハウスの座標系は「現行の」和文 Wikipedia[ホワイト・ハウス]項目にての右の部にて

[北緯 38 度 53 分 51.61 秒 西経 77 度 2 分 11.48 秒]

と記載されているところとなっている(ただしたかだかもってしてのウィキペディアの編集更改をよくも見る表記なので部分的には 一話の筋立てには関わらないところで 異動が生じる可能性もあると断っておく。また、同じくものことに関しては「現行の」英文 Wikipedia の [White House]項目にて 38°53'52"N 77°02'11"W(北緯 38 度 53 分 52 秒 西経 77 度 2 分 11 秒)と記載されているところとなりもする)

Paul Langerhans

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10

Paul Langevin

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10

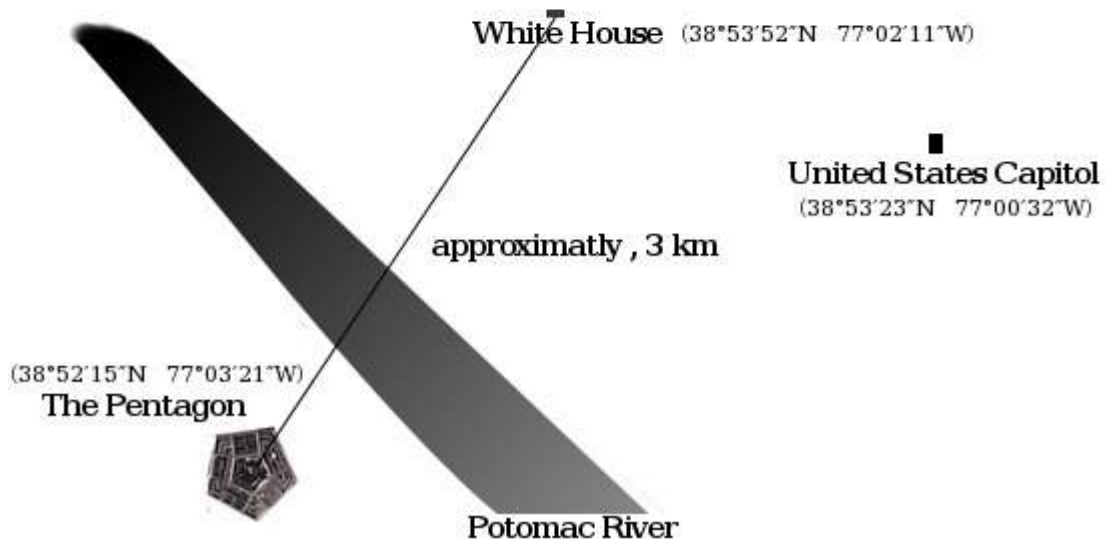
Adrift Just off the Islets of Langerhans :

Latitude 38°54'N, Longitude 77°00'13W

(11) (9) **(1974)**

**CEERN (not CERN) fifteen trillion electron volts (15 TeV)
Collider & [The Hole Man connection]**

Twin Paradox , 1911



上掲図はワシントン DC、それもホワイトハウス界隈の座標系が小説 **Adrift Just off the Islets of Langerhans:Latitude 38°54'N,Longitude77°00'13W**『北緯 38 度 54 分、西経 77 度 0 分 13 秒 ランゲルハンス島沖を漂流中』(1974) の表題にみとめられる座標系と距離的に極めて近いとこのことを訴求するための図となる。図中にてホワイトハウス、合衆国議事堂、ペンタゴンにそれぞれ付しての座標系を比較いただければ、分かると思うが、小説表題に見る「北緯 38 度 53 分 51.61 秒 西経 77 度 2 分 11.48 秒」との座標系はホワイトハウスよりほんの少し北西に逸れての位置となる(距離的離隔としては多くとも 2, 3 キロメートル少々の違いのレベルの問題となる)。尚、先の 911 の事件では以上図示なしでのワシントン DC 一帯が攻撃対象とされたというのが公式発表上の内容である。言うまでもないこととは思うのだが、「ペンタゴン — 同ペンタゴンはホワイトハウスとポトマック川を挟んで距離的離隔の問題として 3km とほんの少ししか離れていない(と縮尺基準表記付きの地図より少なくとも確認できる)との建物でもある— は先の 911 の事件で実際に攻撃されている」わけであるも、(図に描いての)ホワイトハウスやアメリカ合衆国議事堂も 911 の折柄、潜在的攻撃対象とされていたというのが公式発表に見る内容となっているのである (たとえば、英文 Wikipedia [United Airlines Flight 93] 項目にあつて現行、“ The hijackers breached the aircraft's cockpit and overpowered the flight crew approximately 46 minutes after takeoff. Ziad Jarrah, a trained pilot, then took control of the aircraft and diverted it back

toward the east coast of the United States in the direction of Washington, D.C. Although the specific target is not known, it is believed that the hijackers were intending to crash the plane into either the White House or the Capitol Building. [. . .] The hijackers breached the aircraft's cockpit and overpowered the flight crew approximately 46 minutes after takeoff. Ziad Jarrah, a trained pilot, then took control of the aircraft and diverted it back toward the east coast of the United States in the direction of Washington, D.C. **Although the specific target is not known, it is believed that the hijackers were intending to crash the plane into either the White House or the Capitol Building.**”と表記されている、そう、途中墜落することになったユナイテッド93はそのまま墜落せずに行けば、ホワイトハウスないし議事堂に突撃することになったであろうとの表記がなされているとおりの公式発表がなされてきたとのことがある)。

同じくもの点についてまずもって述べるが、上に見る西経77度の七七という数値、ホワイトハウスの座標となっている[北緯38度53分51.61秒 西経77度2分11.48秒]にも認められる西経77度の[77]との数値規則がかの九一一の事件で[頻出]を見たものであるとのことがある。以下に表記のi. からiii. のような観点からそもも述べられる（：筆者としてはそれについてキリスト教の熱心なる会衆が抱くようなところの発想、【七つの頭を持つ獣】および【七つの頭を持つ赤い龍】が【キリスト教ドグマを容れぬ不信心者がことごとく地獄行きとなる最終戦争】を開始するとの筋立ての聖書の『黙示録』への意識誘導 一人間存在を愚弄しながら宗教的狂人の類を眩惑するがごとく意識誘導— をなすとの発想などもあるのではないかと、とも[無宗教の人間]としてながらもとらえているのであるが、「ここ本段では」そうした分析内容のことは細かくも触れずに脇に置いておく）。

i. まずもって、先の911の事件ではアメリカン航空「77」便 (American Airlines Flight 77) が [北緯38度53分西経「77」度03分] (秒の単位は略) との座標に存在するペンタゴンに突入したとされているとのことがある (「77」便が西経「77」度に存する建物に特攻したとのことにもなる —※目立つところでは英文 Wikipedia [September 11 attacks] 項目にあって “ **A third plane, American Airlines Flight 77, was crashed into the Pentagon** (the headquarters of the United States Department of Defense), leading to a partial collapse in its western side. ” 「ハイジャックされた飛行機の三番目としてアメリカン航空第七七便は西部壁面に部分的倒壊をきたすのかたちでペンタゴン (米国国防総省本庁) に衝突させられた」と記載されているところである—) 。

ii. 次いで述べれば、西経「77」度との座標系に位置するペンタゴンに特攻させられたとのアメリカン航空「77」便 (American Airlines Flight 77) をはじめ、911 で [特攻] をなした飛行機群は Boeing ボーイング社 — 日本国内の類似分野の大企業、三菱重工の数倍もの売上高を誇る航空宇宙機器 (民生・軍用双方の航空宇宙機器) 分野の「超」大企業で欧州の Airbus エアバス社と世界の旅客機市場を (厳密なる経済学的定義に則っての [複占] 状態にあって) 二分する企業たるボーイング社 — 製の旅客機と認知されているわけであるが、それら911での[特攻]に用いられたと認知されている旅客機らは、(ボーイング社が市場にあって寡占状態で君臨する米国のその分野の帝王のような会社であり、かつ、ボーイングの旅客機製品の機種シリーズ名がそちら方向で固定・限定されているために当然のようにそうもなっているととらえられるようなところであるのも)、すべて

[7X7 model]

と呼称される、[7と7の間に機種に応じて別の数が挿入されるとの機種番号] が付されての機体らであったとのことがある — 具体的には西経77度に位置しているペンタゴンに

[特攻]した 77 便にあっての機体は 7X7 モデルに属する Boeing[757]であったと認知されており、ツインタワー（ノスタワー・サウスタワー）に[特攻]した機体らは双方共に Boeing[767]に属する機体と認知されているとのことがある（911 の事件で[特攻]に用いられた機種らがすべてボーイング 7X7 シリーズとなっていたことの出典は直下、挙げるとして、ここにてはボーイングの 7X7 シリーズにつき世間一般でいかなるような解説がなされているのかの典拠を引いておく→（以下、英文 Wikipedia[Boeing Commercial Airplanes]項目よりの引用をなすとして）“ **For all models sold beginning with the Boeing 707 in 1957,** Boeing's naming system for commercial airliners has taken the form of 7X7.” 「1957 年にてのボーイング 707 にはじまるところとして販売されてきたすべての機種につきボーイング社の商用旅客機全ての命名規則は[7X7]との形態を取っていた」——。

911 の事件で特攻をなした旅客機の機種名が全て[7X7]シリーズに属するものであった（航空機市場をボーイングと両二分する欧州エアバス社の Airbus A380 などでは「なかった」とのこと）にまつわってのより細やかなる解説なされようとして

911 の事件にあって時々刻々と変化しての当日の状況につき細かくも分単位での記載がなされているとの英文 Wikipedia[Timeline for the day of the September 11 attacks]項目にあっては、現行、ペンタゴンに特攻なしたことで知られる [**アメリカン・エアライン 77 便**]の機体がボーイング 757 であったとのことについて、
“ 8:20: **American Airlines Flight 77**, a **Boeing 757** with 58 passengers and six crew members, departs from Washington Dulles International Airport in Fairfax and Loudoun Counties, Virginia, for Los Angeles International Airport. Five hijackers are aboard. ”
「8 時 20 分頃：乗客 58 名乗員 6 名が搭乗した**ボーイング「757」**であったとの**アメリカン航空「77」**便がヴァージニア州にてのフェアファックス郡からラウドン郡をまたいでワシントン・ダレス国際空港よりロサンゼルス国際空港目指して飛び立った。5 名のハイジャッカーがその中には紛れ込んでいた」
との記載がなされている。

対してサウスタワーの南側壁面に特攻なしたことで知られる [**ユナイテッド航空 175 便**]に属する機体が**ボーイング 767**であったとのことについては上と同じくものウィキペディア項目（[Timeline for the day of the September 11 attacks]項目）にあって
“8:14: **United Airlines Flight 175**, another fully fueled **Boeing 767**, carrying 56 passengers and nine crew members, also departs from Logan International Airport in Boston; its destination was also Los Angeles International Airport. ” 「8 時 14 分：**ユナイテッド航空 175 便**、燃料を満載されての他の**ボーイング「767」**が 56 名の乗客、9 名の乗員を乗せてボストンのローガン国際空港から飛び立った。同機の目的地もまたロサンジェルス国際空港であった」
と記載されているところとなる。

また、ノスタワーの北側壁面に特攻なした [**アメリカン航空 11 便**]が属する機体が（サウスタワーに突撃したそれと同様に）**ボーイング 767**であったとのことについては英文 Wikipedia[**American Airlines Flight 11**]項目にて
“ The aircraft involved, a **Boeing 767**-223ER, was flying American Airlines' daily scheduled morning transcontinental service from Logan International Airport, in Boston, Massachusetts, to Los Angeles International Airport, in Los Angeles, California. ” 「（アメリカン航空 11 便ハイジャックとの兼ね合いで巻き込まれた）機体はボーイング「767」-223ER となり、アメリカン航空のボストンはマサチューセッツのローガン国際空港からロサンジェルス国際空港に向けて毎日運行しているとの定期便であった」

との記載がなされているところである(※)。

※長くもなつての脇に逸れての話として

半ば[余談]とはなる話だが、ノスタワーに突撃したユナイテッド航空 175 便およびサウスタワーに突撃したアメリカン航空 11 便にあつては

【フライト・レコーダー】(フライト・レコーダーなるものの概要については続いて説明をなす)

が「発見されていない」とのことがよく知られている(：目に付くところでは英文 Wikipedia[American Airlines Flight 11]項目にて “ The flight recorders for Flight 11 and Flight 175 were never found. ” と記載されているとおりであり、「現行にて」そうしたフライト・レコーダー関連のウィキペディア項目記述の【出典】として挙げられているのは “9-11 Commission Report – Notes”. National Commission on Terrorist Attacks Upon the United States. 2004. Archived from the original on May 30, 2008. Retrieved May 24, 2008.との調査委員会報告書の特定記述部となる 一同調査委員会、[独立調査委員会]との触れ込みの、だが、全くもって深くもの調査をなしていない衆を欺くための[名ばかり委員会]であるとの批判もされているとのものだが、この際、そうした不評のことは取り上げない)。

そこにいう【フライト・レコーダー】というもの、損害が尋常一様ならざるところとなりがちな飛行機事故の顛末を記録するための装置となり 一はなからそれを念頭に設計されているところとして 一 [いかに酸鼻を極めてのジェット機事故]でもそれが残るべくも設計されているものともなる (：については和文ウィキペディア[ブラックボックス (航空)] 項目より引用なせば、(以下、引用なすとして) “ ブラック・ボックスとは、フライトデータレコーダー(FDR)とコックピットボイスレコーダー(CVR)の通称である。航空事故に関してブラックボックスと表現する場合は、FDR ないしは CVR それぞれ、あるいは双方を纏めて指している。航空事故の原因調査に大きな役割を持つ。…(中略)… 外装は、墜落に伴う衝撃や火災、海没に耐えられるよう高い耐衝撃性・耐熱性・耐水性を備えた密閉容器である。搭載位置は、比較的破損が及びにくいとされる機体尾部が多い ” (引用部はここまでとする)とあるとおりである。ちなみに、フライト・レコーダー復旧 [不能] 事例 (破損や発見不能による復旧 [不能] 事例) は稀なることだがあるとされており、現代にあつてのそうした事例の一覧表記が英文 Wikipedia[List of unrecovered flight recorders]項目にてなされている。そして、現行、その一覧表記にての note の部を参照する限り、フライト・レコーダーが(原型の保持云々以前に)「見つからなかった」との実例は「海中に没したとのケース」にほぼ限られており、ノスタワー・ツインタワーのフライト・レコーダー未発見事例、破損されたそれが見つかるどころか何らその発見がなされていないとの未発見事例は「異例なること」ともなっている)。

以上のようなフライト・レコーダーが「再生不能との状態で発見される」どころかまったくもって発見されなかったのがかの 911 のツインタワー特攻事件である。

そして、そうした事件であるに関わらず、ハイジャック犯の一人とされるサターム・アル＝スカーミーなる男の、

【「最も焼尽しやすい物質たる紙によって」成り立っているパスポート】(どうしてそのような重要なところで「誤報」をなすのか、正気の程が疑われるところとして「別の」テロリスト、テロ主犯格の[モハメド・アタ]のパスポートとも一時期マス・メディアなどに「誤報」されていたことが知られる男のパスポートと「される」もの)

が飛行機突入事故後のご当地にて[奇跡的]に発見されているとのことが[公式発表]

なされており(ワオ！マーベラス！とのことでフライトレコーダーのことと比較するかたちで多くの 911 の批判的検証をなしてきた者らに問題視されていることである)、それについては、いかに「馬鹿げたこと」でも右から左に流すだけ、あるいは、「高度な専門性など一ミリとて要求されない」世界にて記者と名が与えられた人種による真っ赤な嘘をも事実としがちな主流メディアの関係者の一部でさえもが流石に「おかしいだろう」と疑念表明しているところとなる。

同点については「現行にての」英文ウィキペディア関連項目にあつて次のような記載がみとめられるところである。

(直下、英文 Wikipedia [Satam al-Suqami] 項目にての現行記載内容よりの引用をなすとして)

Satam Muhammed Abdel Rahman al-Suqami (June 28, 1976 — September 11, 2001) was a Saudi law student and one of five hijackers of American Airlines Flight 11 as part of the September 11 attacks.[. . .] **Suqami's passport was found by a passerby (identity unknown), reportedly in the vicinity of Vesey Street, before the towers collapsed. (This was mistakenly reported by many news outlets to be Mohamed Atta's passport.) A columnist for the British newspaper The Guardian expressed incredulity about the authenticity of this report, questioning whether a paper passport could survive the inferno unsinged when the plane's black boxes were never found.** According to testimony before the 9/11 Commission by lead counsel Susan Ginsburg, his passport had been "manipulated in a fraudulent manner in ways that have been associated with al Qaeda." **Passports belonging to Ziad Jarrah and Saeed al-Ghamdi were found at the crash site of United Airlines Flight 93 as well as an airphone.**

(補つてものを訳を付すとして)

「サターム・ムハンマド・アブドゥル・アル＝スカーミーはサウジの法学専攻の学生であり、911 の攻撃にあつてのアメリカン航空 11 便のハイジャック犯ら五名のうちの一人となる。…(中略)…スカーミーのパスポートは[未詳](発表されていないため[未詳])の通行人によって、報告されるところ、ツインタワー崩落地に臨んでの Vesey Street 界限で発見されたとのことである。(多くのニュース系列局ではそちらがモハメド・アタのパスポートであると「誤って」報道されていた)。対して英国紙ガーディアンのあるコラムニストは「機中ブラックボックスさえ発見されないのことになった炎熱地獄の中で紙製のパスポートが原型留めていた(そしてそれがツインタワー崩落の修羅場にて[発見]されていた)」というのはどういうことなのか、とその不審さにまつわる意見表明をなしている。911 調査委員会の面前で弁護士スーザン・ギンズバーグによってなされた証言では彼スカーミーのパスポートはアルカイダに関係しているように詐欺的に[操作](訳注:捏造・贋造との文脈であろうか)されたものであるとされた。またズィアド・ジャッラーフおよびサイード・アル＝ガムディーらのパスポートも(その者達がテロリストとして犯行に関与したとされ目標地に至る前に墜落した)ユナイテッド 93 便の墜落現場にて発見されている」

(補つてものを訳を付しての引用部はここまでとする)

(さらに話を続けて)

上の引用部に見るように 911 の事件にあつてはツインタワー崩落の修羅場に臨んでのところでハイジャック犯の焼尽を免れたパスポートが [匿名の通行人] によって発見されたこと、それが贋造なされたものであるなどの証言もが持ち出されているとのこと

がある中でユナイテッド航空 93 便（映画『ユナイテッド 93』のモチーフとされている突入墜落した飛行機）の墜落跡地にて「も」同様のこと、ハイジャック犯らのパスポートが焼尽せずに発見を見た「されている」（表記引用部にて記載されているようにそのようにされている）ことからして他の疑義呈している多くの人間同様に筆者も首をかきげているところとなる（それにつきツインタワーに特攻したユナイテッド航空 195 便の方ではなく、同じくものユナイテッド航空便の途中墜落を見たユナイテッド航空 93 便の事件ではフライト・レコーダーは発見されており、事件の再現・検証に活用されたとされていることが知られる。ただ、目標地点に到達せずに墜落したユナイテッド航空 93 便の墜落地にて「も」紙製のパスポートが焼尽免れて発見されたとのことからして「なるほど」と見えるところとなる）。虚偽に次ぐ虚偽を[真実]として押しつけられる人類が、そう、[真っ赤な嘘]をも[真実]として周知させる力学に抗えぬとの結果ばかりを見せつけてくれるとの人類が[自分達を皆殺しにするつもりであるとのこと]がその実の[真実]であった際にそれを直視できるのか。そうしたことにも通底するようなどころだと見ながら、他の多くの人間にも疑義呈されているとの上記のようなことらについても「当然に」筆者は首をひねっているのである。ちなみに日本では「意外なこと。」と思われる向きもあるかもしれないものの、911 の事件に関しては[あれだけのことをやった(と「される」)]にも関わらずビン・ラディン自身は「公式には」目立って犯行声明を発しておらず、反対に同ビン・ラディンは

「事件には関与していない」

などとの声明を初期発していたことが知られる（『否定するぐらいならば何故、[あれだけの事件]を起こすよう糸を引いていたというのか?オウム真理教のように当局の目を釘付けにする意図でもあったとでもいうのか?』『細胞の暴走であるとも言いたいのか?』との問題に関わるところとして、である）。について述べておけば、後にビン・ラディンに由来するところの犯行を示唆するものとしての音声記録・映像記録が公開されてその真贋についての議論がなされるに至っているとのこともあるにはあるわけだが、そうしたことを込みにも基本的なところは英文 Wikipedia [Responsibility for the September 11 attacks] 項目 (ビン・ラディン自身はテロ関与の[否認]をなしていたとの通俗的理解にまつわる記述「も」がみとめられる項目)、[Videos and audio recordings of Osama bin Laden] 項目 (ビン・ラディン犯行証跡として重視されてきた「押収」ビデオテープの真贋やそのビデオテープに対する英語訳に疑義が呈されているとのことについての通俗的理解が反映されての記述がみとめられる項目)にて [常識の世界での部分的解説] がなされているのでそちらをご覧になられてみるのもよからうか、とは思ふ。さらに述べれば、犯行声明も犯行肯定も目立ってなさなかった者らが[犯行]にいかほどに関わったのか(あるいはそうではないのか)との問題と並行して気がかりなところとして 911 の事件の主犯とされる [[建築学専攻の苦学生] 転じての建築事務所勤務の男] たるモハメド・アタ、[宗教テロ]のアルカイダ・サイドの主犯格とされる同男モハメド・アタの [人定] でもさまざまな混乱が生じ誤認誤報が事件の後に発生したとのことさえもがこの世界にはある(同文のことについても英文ウィキペディア程度の媒体のモハメド・アタ関連の項目から確認できる)。

といった側面について(脇に逸れてものここでの話の中で)言及なしたうえで書いておくが、

「ここ本稿では[宗教テロ](などと[常識の世界]ではとりまとめられている 911 の事件)の表向きの属性についてくださと細かきことを論じるのは差し控えることとしたい」

多くの人間が[(事前に情報を掴んでいた中で)覇権主義のために政府関係者が黙過をなしたか、積極的に「部分的に」事件に関与したというのがかの事件であろう]など

との「さもありません」と見えもする見立てを披露している中で[純然たる宗教テロ・反米主義にまつわる公式発表の不可解さ]について今更くどくと解説を講じても[陰謀論者 Conspiracy Theorist のそれ]と見做されるだけか、あるいは、[そのような類(陰謀論者)に由来するもの]と[筆者のような人間の言辞]を見せたい・貶めたいであろうとの相応の類ら(自身および自身の係累縁者を含む人類にとって不利益となるようなことを平然とやるような「相応の」精神構造の者ら)に[的外れなところ]より外的内的に批判する材料を「無駄に」与えるだけか、ととらえるに至っているからである。

以上、書き記したうえで書いておくと、

「【911の事件】が【Puppets 人形ら】([宗教的狂人]であろうと[政府関係筋]であろうと[特定結社成員]であろうとそうしたものであることには違いはないとの意味での【人形ら】を用いて[相応の演出]をなされた【芝居】にして【儀式的行為】であると明言できる」

との[本質的なところ]について一体全体どういったことが指摘できるのか、[【特定の象徴主義】(はきと述べてフリーメーソン象徴主義と共通のもの「でも」ある)と【911の事件】がいかように多重的に【事実】の問題として結びついているのか、そのことがいかように人間存在に対する愚弄のやりようとして地続きになっているのか]とのことにまつわる解説は長大な本稿にての補説4の部にて十分になしているのでは「自身の足下、置かれた状況のほどを本当によく理解したい」との向きはそちらを参照されるとよからうとも述べておく。

(脇に逸れての話はここまでとしておく)

(直近までの脇に逸れての話が長くなってしまったが引き戻すとして)

911の事件ではボーイング7X7シリーズの機体が[特攻]とされる行為(どのレベルでの[紛い物による茶番]だったかはここでは問題にしていない)に利用されていたとのことがあり(7X7シリーズは往時および今時の旅客機市場を競合他社のエアバス機と並んで席卷している機種シリーズであるためそれ単体だけ見ればおかしなことはならぬことだろうが、とにかくも、利用されていたとのことがあり)、西経「77」度に属するペンタゴンに突っ込んだとされもしているアメリカン航空「77」便についてもそれは例外ではない(くどくも繰り返すが、ボーイング「7X7」シリーズに属する機体がアメリカン航空「77」便として座標系として西経「77」度に位置するペンタゴンに特攻したというのが公式的説明となっている)。

iii. (ii. から iii. の段に移して指摘するところとして)

「(本稿にての出典(Source)紹介の部101で[あまりにも基本的なこと]としてながら、説明講じているように)911の事件にてはワールド・トレード・センターで1WTCから7WTCの計7棟のビルが倒壊を見ている」

とのことがありもする。

そして、さらに加えて、911の事件が[77]との数値とも親和性が強いとのことを指摘するとのここでの話と関わるところとして取り上げることとして、(従前既述内容とも一部重複するところとなりもするが)、次のようなこと「も」ありもする。

「本稿での先立っての補説4の部にての出典(Source)紹介の部106(3)に続く部で指摘していたところとして、[ワールド・トレード・センターで計[7棟]のビルが崩落した911の事件]は【11】(ナンバー・イレブン)とも際立って結びつく事件となっ

ている、とのことが「ある」]

まとめれば、およそ以下のようなかたちにて、である。

「【9 プラス 1 プラス 1】は【11】となる。

そうした各桁足しあわせると【11】が浮かび上がってくるのと 911 の事件で崩されたツインタワー、同ツインタワーは遠望すると【11】との数を呈しているようにも見えるものであった。

また、ツインタワーの階数は、一本稿にて度々呈示のアメリカ海洋大気庁による航空写真を元にしての図を再度呈示するまでもなく労せず特定できようところとして— それぞれ「11」0 階となっていた。さて、110 となれば、0 の部を空値 (Null 値) と見た場合に【11】に変ずるとのものである。

まずもってしての以上のことからして 911 の事件とは [【11】と結びつく素地ある日付] にあって [【11】と結びつく建物] (外観および階数の両面で 11 と結びつく建物) が「攻撃」された事件であると述べられもするわけだが、のみならず、米国にあって [911 番] というものが 911 の事件が起こる前から警察・消防・急患の一括しての車両呼びだし番号となっていたとのこと、そのことも同じくものこととの絡みで意をなしてくるようなことがある (従前から各桁足しあわせると 11 になるとの 911 が (かの事件以後の [日付け] 呼称としてではなくにも、の) 米国の [緊急電話番号] となっていたとのことが意をなしてくるようなことがある)。その点、[日本版 911 番] となっているのは [「ひゃくとおばん」こと [11]0 番 — ナンバー 110 は完成当時、世界最高層のビルとなりもしていたツインタワーの階数でもある— および緊急・消防呼び出しのための 119 番の各番号を合算したもの] であるわけだが ([日本での 110 番と 119 番が合算されての役割] を果たすのが [警察・消防・急患の窓口を全て兼ねてのかねてよりのアメリカの 911 番] である)、それら日本の緊急車輛呼びだし番号らも【11】と「同じくもの式で」結びつく(ことが問題になる)。「11」0 番についてはゼロの部分が存在しない数、空値と見れば、11 となる (それは、再言すれば、遠望すると 11 に見えていたありし日のツインタワー階数から 11 を導出するうえでの式ともなる。そして、またもってして「11」0 番でかけつけてくる日本の警察呼びだし番号については (緊急の事態ではない場合のこととしては) [#「911」0] 番が電話相談窓口番号となっているとのこと「も」ある)。他面、日本の消防・急患受け付けの [119 番] については各桁足しあわせるとそこからして [11] が出てくるとの式のものであるとのことがある (これは 911 との日付の各桁を足すと 11 が出てくると同じ式である)。

そういうことが世界中の緊急車輛呼びだし規則にて当てはまっているとのことがこの世界にはある (エストニア、ラトヴィア、ドイツ、ノルウェイ、トルコ、グアムテラ、ジャマイカ、ボリビアなど世界中の各国が消防ないし警察の呼びだし番号として 110 番を採用している — アメリカのような 911 番方式を採用している国もある — 一方で 110 番を採用している — とのことウキペディアの一覧表記の紹介として本稿の先の段で言及・解説している)。 であるから、[911 と 110 との [11] を介しての連関] を「こじつけた」と無条件に過小評価出来るものではないと申し述べる (ただし、911 の事件の「予見的」言及なぞが多数なされている — 先述 — といった馬鹿げたことが具現化して「いない」世界であったならば、そのようなことを問題視する必要はそもそもなかった、ダイヤル式電話にあってのダイヤルの人間工学的都合というやつで説明できるとの式で手仕舞いであつたらうが)。

ここまで述べてきた [かの事件 (911) と【11】とのつながりあい] から 2001 年にあってアメリカン航空「11」便がハイジャックされて 92 名が搭乗していた同便がツインタワーの片方たるノースタワーに突撃しているとのこと (上にてその記述内容

を引いているとの英文 Wikipedia[American Airlines Flight 11]項目にての冒頭部にて “ American Airlines Flight 11 was a domestic passenger flight which was hijacked by five al-Qaeda members on September 11, 2001, as part of the September 11 attacks. They deliberately crashed it into the North Tower of the World Trade Center in New York City, killing all 92 people aboard and an unknown number in the building's impact zone. ” と掲載されているとおりである) だに偶然であるとは無下に言い放てはしなかりとの側面がある、実にもって残念だが、現実にある一ただしもって話者が(最期は[それ]がおのれを裏切り嘲笑い殺すことになるものであるとの論拠で満ち溢れている中でも)【人間の、人間による、人間のための世界がそこに確として存在しているとのことにまつわっての根本的虚偽】(相応の世界観構築機構を用いて人間にそれこそ徹底的に押しつけられている紛い物の世界観)に基づいてしかもものを見ぬし考えぬとの筋合いの空虚なる者らであるならば話は別ではあるが— 」

揃い踏みでボーイング 7X7 シリーズに属する旅客機らが特攻に利用され、結果的に、突撃を受けたツインタワーを中心に 7 棟のビル群が連続倒壊したとのその事件が【11】と多重的に結びついているとの点について (ビル七棟の)【7】と【11】との数から何が述べられるか。セブン・イレブン、元々アメリカの氷販売事業者よりスタートした日本国内にあってもの大手コンビニエンス・ストアの名称ではないが、[乗算]の問題(かけ算の問題)から[特定の数 77] (すなわち、ボーイング 7X7 シリーズの機体が[特攻]に利用されての座標系にて西経「77」度に属するペンタゴンに突っ込んだとされるアメリカン航空「77」便についての側面でも問題となる「77」という数値/またもってして 911 の後、同文にアルカイダによって企図されたとされる 2005 年 7 月 7 日のロンドンの連続爆破テロ、7/7 とも略称されるかの事件のことを想起させる数値) が浮かび上がってくる(との想起がなせる)。

(iii. の部はここまでとする)

以上、i. から iii. の点より問題となる小説 —(バージョンアップする前の初期プランの到達目標が [7TeV(兆電子ボルト)と 7TeV のビームをぶつける 14TeV の重心系衝突エネルギー]にあるとの CERN のラージ・ハドロン・コライダーのことを想起させる 15TeV の CEERN 加速器なるものを登場させている小説『北緯 38 度 54 分、西経 77 度 0 分 13 秒 ランゲルハンス島沖を漂流中』)— の表題に見る、

[北緯 38 度 54 分、西経 77 度 0 分 13 秒]

との座標系はかの 911 の事件と異常異様に結びつく【77】との兼ね合いで接合性をまづもって感じさせるものである(「それ単体で述べるべきことではない」とは言うまでもないとのことだが、これ見よがしに西経 77 度とのワシントン DC のホワイトハウス界隈の座標系をもちだしているとのそのことからして 911 との接合性を感じさせもする材料となる)。

さらに、である。i. から iii. と分ちて指摘しもしてきたことに加えもして、ここで問題としている小説に見る [北緯 38 度 54 分、西経 77 度 0 分 13 秒] については七七を持ち出しながらそれが【おおよそにしての ホワイトハウスの座標系】([北緯 38 度 53 分 51.61 秒西経 77 度 2 分 11.48 秒]) および【おおよそのペンタゴンの座標系】([北緯 38 度 53 分西経 77 度 3 分]) を指しているとのことに加えもして次のようなことからして着目して然るべきであろうと手前、本稿筆者は判断している。

「[北緯 38 度 54 分 西経 77 度 0 分 13 秒]にあっての前半部、[北緯 38 度 54 分]は意図的に 911 との数値を導き出すように「調整」した座標である]とさえ見えるようになっている」

極々表層的なことを言えば、**Adrift Just off the Islets of Langerhans : Latitude 38°54'N, Longitude 77°00'13W**に見る[北緯 38 度 54 分]が[11(3+8)9(5+4)]となり[119]を想起させるからであるとのことがある。

Of course、無論にしてそれ単体で述べれば、ただのこじつけ (far-fetched) にしかならないのは言うまでもない。アルカイダの英文綴りを少しばかり換えて読むと【「アルケイダ」となりそれがヘラクレスの幼名【「アルケイデ」ース】と極めて語感近しくも通ずると述べる並みにそれ単体で述べる分ではただのこじつけにしかならないのは論を俟たぬことではある。

だが、本件については上のような言いようとても意をなしてくることとして次のようなことらがある。

第一。(循環論法の問題が首をもたげもし、また、前提として引き合いに出す以上には意味をなすことではないところとして)、

Adrift Just off the Islets of Langerhans : Latitude 38°54'N,Longitude77°00'13W『北緯 38 度 54 分、西経 77 度 0 分 13 秒 ランゲルハンス島沖を漂流中』

という小説、内容を熟読してもそれと関係性がほぼないとのことが分かつた意図不明に長ったらしいタイトルが付されての同小説表題に見る [ランゲルハンス島] からその発見者たる [パウル・ランゲルハンス] のことが想起されるとのことがあり、同 [パウル・ランゲルハンス] とほぼ英文綴りを同じくする (Paul Langerhans 英文綴り 12 字中、語順先後関係含めて 10 字を共有するとの) Paul Langevin [ポール・ランジュバン] が 1「911」年に「双子 Twins の」パラドックスを提案しているとのことが【現象】として「ある」。

第二。上の第一の点に加えもして現実に (ここにて A. から C. と分かちての話の中での先行する A. の段で取り上げていることだが)、

[911 の事件のことが 双子のパラドックスの概念が用いられての特定文物 (先にその内容を振り返りもした BLACK HOLES & TIME WARP Einstein's Outrageous Legacy (邦題)『ブラックホールと時空の歪み アインシュタインのとんでもない遺産』のことを指す)のなかで奇怪に前言なされているとのこと]

もが「ある」のがこの世界である (ただし、読み手たる貴殿が【「2001 年 9 月 11 日」との日付表記を示す数値列】や【1「911」年提唱の「双子」のパラドックスを基礎にした設定付け】を僅かひとつの「タイムマシンにまつわる」思考実験に関わりもするところで「多層的に具現化させている」との 1994 年初出文物をもってして [「2001 年 9 月 11 日」に発生した「双子」の塔の倒壊事件の予見文物] となって「いない」などとする向きならば「話は別」である — 筆者はそうした [基本的確率の問題すらよく理解できていない]か、[事実に向かいあうことさえしない]との「相応の」存在(まずもって生き残るための努力もしないであろうと見もしているとの向き / 筆者にとっては石を置いてこなけさせずれば、どうでもいいとの向きら) を対象・念頭に本稿をものしているわけではない —)。

それがゆえ、そう、いかに同じくものが馬鹿げて聞こえようとも [文献的事実]の問題として、

[【双子のパラドックス】の概念と【ブラックホール】に関わるところでの 911 の事件に対する奇怪な予見性の表出]

が(特定文物 BLACK HOLES & TIME WARP Einstein's Outrageous Legacy (邦題)『ブラックホールと時空の歪み アインシュタインのとんでもない遺産』にまつわるところで) 確と指し示せるところとして「ある」がゆえ、**【ブラックホール人為生成問題にまつわる奇怪なる予見的言及をなしているとの作品】**(先述のように【15 兆電子ボルトの CEERN 加速器】なる【現実の CERN の 14 兆電子ボルトのラージ・ハドロン・コライダー】に非常に近いものを【主人公が渦を巻く黒々とした底無し穴に CEERN 装置で縮小されて落とし込まれるとの内容の小説】として登場させているとの作品)における問題とし

て上のようなこと —(ホワイトハウス座標系とは微妙にずれもしている)[北緯 38 度 54 分]との座標系に見る数値が[11(3+8)9(5+4)]となり[119]を想起させるとの「単体で見れば」おかしなこと— を、

[パウル・ランゲルハンスに由来するランゲルハンス島をタイトルに「極めて不自然に」冠すると
の小説作品(『北緯 38 度 54 分、西経 77 度 0 分 13 秒 ランゲルハンス島沖を漂流中』)]

に見出しても行き過ぎにならないと申し述べるのである —※「どうしてそういうことが起こりうるのか」との[[予言の霊]とでも呼ぶべきものが介在しているかのようにとれる【作用機序】(推論でしかそれについて論ずることができぬとのもの)の話については置くとして、現実には[現象]としてそういうことがこの世界では見受けられるようになってきていること(はきと指し示せること)を本稿では重きをもって指し示しているとのことがある(病原体をはきと特定出来ないため、病因については細かくは論ずることができない(ようになってきている/されている)が、何重にも何重にもスクリーニングかけての検査で結果的に[陽性]になることは指し示せるようになってきているとしてもいい)——。

Paul Langerhans
1 2 3 4 5 6 7 8 9 10

Paul Langevin
1 2 3 4 5 6 7 8 9 10

**Adrift Just off the Islets of Langerhans :
Latitude 38°54'N, Longitude 77°00'13W
(1974)**

**(although above novelette title is unnatural and metaphorical ,)
far - fetched ?**

Twin Paradox , 1911

**BLACK HOLES & TIME WARP Einstein's Outrageous Legacy
(1994)
& 911 foretelling (aspects) related with Twin Paradox**

アウトレージャス・レガシーとの部に【とんでもない遺産】との訳語が振られての邦題タイトルが(原著刊行年1994年より3年を経ての1997年にて)
『ブラックホールと時空の歪み アインシュタインのとんでもない遺産』
との題で刊行されているとの著作、
BLACK HOLES & TIME WARP Einstein's Outrageous Legacy
がいかにして [1911 年提唱の双子のパラドクス] に関わるところにて
[911 の多重的事前言及 — そうしたことが存在していることを指摘なせてしまうこと
自体が不可解なる多重的事前言及 —]
と結びつくようになってきているかについては本稿にての [出典 (Source) 紹介の部 28] [出典 (Source) 紹介の部 28-2] [出典 (Source) 紹介の部 28-3] [出典 (Source) 紹介の部 29] [出典 (Source) 紹介の部 30] [出典 (Source) 紹介の部 30-2] [出典 (Source) 紹介の部 30-3] [出典 (Source) 紹介の部 31] [出典 (Source) 紹介の部 31-2] [出典 (Source) 紹介の部 32] [出典 (Source) 紹介の部 32-2] [出典 (Source) 紹介の部 33] を通じて仔細に解説しているところとなる。

Paul Langerhans

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10

Paul Langevin

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10

Adrift Just off the Islets of Langerhans :
Latitude 38°54'N, Longitude 77°00'13W
(1974)

(although above novelette title is unnatural and metaphorical)

-far-fetched?

CEERN (not CERN) fifteen trillion electron volts (15 TeV)
Collider & [The Hole Man connection]

Twin Paradox , 1911

BLACK HOLES & TIME WARP Einstein's Outrageous Legacy
(1994)
& 911 foretelling (aspects) related with Twin Paradox

本稿にての [出典(Source) 紹介の部6] から [出典(Source) 紹介の部10] にはオンライン上より確認可能な原著記載内容および国内にて流通していた邦訳版の記載内容の原文引用をなし、もって、Adrift Just off the Islets of Langerhans: Latitude 38°54'N, Longitude 77°00'13W (邦題)『北緯38度54分、西経77度0分13秒 ランゲルハンス島沖を漂流中』という作品がいかにして

[加速器によるブラックホール生成問題の「予見的」言及]

とつながるのか、仔細に解説をなしている(：ポイントとなるのは [CEERNなるCERNとは異なる架空の加速器運営機関による15兆電子ボルト出力の加速器の登場] [CEERNによるレーザー装置によるホログラム縮退して生成された主人公の分身が黒々と渦を巻く自身のヘソの穴への突入するとの(一見すれば意味不明なる)粗筋] [複合的に連結するようになっていたの他作家由来の他小説The Hole Man『ホール・マン』との連結関係] となる。殊に今日の加速器LHCの最大出力に往時の加速器最大出力より出力として「200倍超」近いとの15兆電子ボルトの加速器が当該作品に登場させられているとのこととの絡みでは

[ここ10数年内になってはじめて「その規模の」加速器——小説刊行時住時にあっては夢見節があるとのことを加速器実験機関資料から本稿にての [出典(Source) 紹介の部10] で呈示しているとの出力の加速器——によるブラックホール生成が観念されるようになった] とされることとの絡みで「全くもって性質が悪い」——(隠喩的やりようがなされていることとあわせて「実にもって性質が悪い」)——と受け取れるところである)。

以上のことが指摘可能となっているような中、述べられるところとして、キップ・ソーン著作、BLACK HOLES & TIME WARP Einstein's Outrageous Legacy は [双子のパラドックスの機序と結びつくワームホールタイムマシン] を登場させているとのブラックホール関連の著作である。

それがゆえにソーン著作と [加速器生成ブラックホールにまつわる先覚的言及をなしているとの特質を隠喩的ながらも複合的に帯びている Adrift Just off the Islets of Langerhans: Latitude 38°54'N, Longitude 77°00'13W の間には [ブラックホール関連でのつながり] が観念されると指摘できるし、また、双方ともども予見的な作品としての要素を有している両作品 ([911の事件の隠喩的予見をなしている(と解説してきた)ソーン著作] と [加速器によるブラックホール生成の喩的予見をなしている(と解説してきた)70年代小説]) のうち、片方(ソーン著作)の方に「明示的に」関わるところの双子のパラドックスがもう片方にも関わっていると推論することに無理はない、問題となるもう片方の70年代小説のタイトルに [双子のパラドックス提唱者] と英文綴りの12字中10字を共有する(共有アルファベット登場順も込みに共有する)との人名が挙げられている限り、そうした推論には無理はないと述べるのである。

問題意識ありように
ついて(ほんの少し
言の葉を換えて)整
理すれば次の通りと
なる。

・(先述のように)キップ・ソーン『ブラックホールと時空の歪み』には【2001年9月11日に起きた事件を双子のパラドックスとの兼ね合いで予見していたが如き側面】が多重的に伴っている。

・(先述のように)小説『ランゲルハンス島沖を漂流中』には【双子のパラドックス】と極めて親和性が高いとの表記がタイトルレベルで見ると、また、その表題には911の事件で標的にされた一帯の座標系が【77】とのユニークナンバーと共にみとれる。

・(先述のように)小説『ランゲルハンス島沖を漂流中』は【ブラックホールの人為生成にまつわる際立った予見的言及】との特色を帯びた異なる作品となるが、対して、キップ・ソーン『ブラックホールと時空の歪み』は【ブラックホール】と【ワームホール】を巡るトピックを主軸として扱い、かつ、(再言するところとして)【911の事件に対する異なる予見的言及】をなしているとの按配の文物となる。

であるから、異なる方向での「異なる」予見的言及文物が【ブラックホール】関連のところでは接合すると述べられるわけであるが、だからこそ、小説『ランゲルハンス島沖を漂流中』に911に通ずる寓意性を見てもなんら行き過ぎではない(異なる恣意性が感じられるところで恣意性の問題について当然の思索を深めているだけである)と申し述べるのである。

まとめよう。

ここまでにて **Adrift Just off the Islets of Langerhans:Latitude 38°54'N,Longitude77°00'13W**『北緯 38 度 54 分、西経 77 度 0 分 13 秒 ランゲルハンス島沖を漂流中』という作品が

「Paul」「Lange」rha「n」s（問題小説タイトルにそちら名称の使用がみとめられるランゲルハンス島の発見者たる科学者）

「Paul」「Lange」vi「n」（双子のパラドックスというものを 1911 年に呈示しもした科学者）

の間の近似性との観点で着目せざるをえぬとの作品である、すなわちもってして、

【ヘラクレスの計 12 に及ぶ功業】、【(ヘラクレス第 11 功業に見る)巨人アトラス】、【トロイア崩壊伝承に見るトロイア崩壊の原因たる(他伝承では巨人アトラスが在処を把握するとされる)黄金の林檎】、【巨人アトラスともトロイア崩壊元凶たる黄金の林檎とも史的に(一部識者によって)結びつけられてきたとのアトランティス沈没伝承】、【アトラスやアトランティスといった固有名詞を付されての LHC 実験におけるブラックホール生成論議に関わる事物】との要素らのうちの「複数」を特色として帯びつつ、かつ、【911 の事件の発生(態様)にまつわる予見的言及】ないし【ブラックホール人為生成問題にまつわる「先覚的言及】」の一方、あるいは、その双方の特徴をも呈しているとの文物らが「不可解に」存在している]

との関係性の環（ここ本段にて問題視していることであり、また、本稿にあって主軸として問題視してきたとの関係性の環）に組み込まれている作品であるとのことに関わることとして同じくものこと —ランゲルハンス島発見者と双子のパラドックス提唱者の名としての近似性— にすら着目せざるをえぬことを示すとの流れで以下振り返り表記しもしての A. から C. と振ってのことを段階的に示してきた。

(何故、本稿にて Paul Langerhans (ブラックホール生成予見小説と本稿にて問題視している『北緯 38 度 54 分、西経 77 度 0 分 13 秒 ランゲルハンス島沖を漂流中』表題中にその名称が取り込まれている腓臓の一構造、ランゲルハンス島の発見者たる「パウル・ランゲルハンス」)と Paul Langevin (双子のパラドックスの概念を呈示したことで広くも知られている「ポール・ランジュバン」)の英文綴り上の類似性にまで殊更に着目しているかの理由について)

A

[双子のパラドックス —[1911 年] 提唱— を重要な要素として持ち出している特定文物にあってそちら [双子のパラドックス] に関わるところで「一体全体、どういうわけなのか、」【双子の塔(ツインタワー)が [911] という日付にて崩された折の出来事との複合的相関関係】がみとめられるようになっている、しかも、尋常一様ならざるやりようで[ブラックホールおよびワームホール絡みの側面]にてそうもしたことがみとめられるようになっているとのことが「ある」]

B

[(1911年にポール・ランジュバンによって明確化されたとされる) 双子のパラドックスと同様の効果・結果について描いている(とのことも部分的には指摘される) お伽噺らが洋の東西にて存在しているのであるが、それら洋の東西にて存在している問題となるお伽噺(フェアリー・テール)らが【文化伝播ではおよそ説明が付きがたいような数値使用にあつての一致性】を(確たる文献的事実の問題として) 伴っているとのものらとなりもしているとのことがあり、かつ、それらがブラックホールやワームホールにまつわる特色とも相通ずる特質をも伴っているとのことが「ある」] (→そういうところの話であるから、操作の力学のありよう・「やりよう」を想定した場合、特異性についてより一層着目すべきようなところがある)

C

(これが【一連の話の行き着くところ】として極めて重要なところであると強調したいところとして) [(先行しての A. および B. の内容をも顧慮のうえで重み・意味合いを判ずべきこととして) 【双子のパラドックス提唱者の姓名ポール・ランジュバン】の英文綴り字 12 字中、10 字を「綴り順含めて」共有しているとのパウル・ランゲルハンスが発見した隣島のランゲルハンス島(アイル・オブ・ランゲルハンス)の名前を含む小説 *Adrift Just off the Islets of Langerhans: Latitude 38°54'N, Longitude 77°00'13W* は(先述のように同作が【ブラックホール人為生成問題の先覚的言及】を内に含んでいる作品であるのみならず) 【911の事件】と結びつく側面「をも」有していると判じられるような作品である。については「Paul」「Lange」rha「n」s←→「Paul」「Lange」vi「n」(元より【ブラックホール関連事物】【911の先覚的言及事物】とのからみでかぐわかしい側面とともにあると先述の【双子のパラドックス】のそもそももってしての考案者)との関係性をわざと想起させるようなタイトル付けがなされているのであると想定すれば、自然、そうした関係性が際立つようなかたちともなっている(タイトルに[「これ見よがし」]に付された【77】との数値]も同じくものことに関わる)]

(上記 C. の段にあつては i. から iii. と分かちて

[先の 911 の事件(ペンタゴンのみならずものワシントン DC 境界を標的にしていたと公式発表されている事件)が異常に数値【77】と結びつく]

とのことについて解説し(アメリカン航空「77」便として運用されていたボーイング「7x7」シリーズのジェット機がハイジャックされそちらジェット機が西経「77」度に位置するペンタゴンに特攻させられたと発表されていること、また、同文にボーイング「7x7」シリーズのジャンボジェット機がハイジャックされて[11]と複合的に結びつくツインタワーを中心にしたワールド・トレード・センターのビル[7]棟を倒壊させたと伝わっていることを取り上げ)、そのことから、

[Latitude 38°54'N, Longitude 77°00'13W との小説タイトルに見る座標系(そちら小説に見る座標系、ホワイトハウス境界の座標系/911の事件で標的にされることになったとされるその境界の座標系でもある)にこれ見よがしに【77】との数値が入れこまれていること]

を問題視し、そして、「なおかつ」のこととして、

[同じくもの座標系に見る Latitude 38°54'N との [ホワイトハウスの座標系[北緯 38 度 53 分 51.61 秒 西経 77 度 2 分 11.48 秒]より「微妙にずらされて」のところ]にあつて [3+8] [5+4] との式で [11] [9] との数値が浮かび上がる]

とのこと「をも」問題視していた。

そうもしての問題視にあつては

「それ単体で見れば、far-fetched こじつけがましいとされるのは言うまでも無いことであるが、」

と「無論のこと」としての断りをなしつつも先行するところの **A.** にて指摘したこと

(ブラックホール関連の作品にして双子のパラドックスを引き合いに出しつつも

911 の予見的言及をなしているとの文物『ブラックホールと時空の歪み アイン

シュタインのとんでもない遺産』が存在しているとのこと) と [問題小説『ランゲル

ハンス島沖を漂流中』の【ブラックホール人為生成問題にまつわっての異様な

予見的側面】の先覚的言及作品としての側面】の繋がり合い (ブラックホール

関連の先覚的言及作品「ら」の繋がり合い) について「も」注意を向けました)

さて、本稿本段にあつては

Adrift Just off the Islets of Langerhans : Latitude 38°54'N, Longitude 77°00'13W 『北緯 38 度 54 分、西経 77 度 0 分 13 秒 ランゲルハンス島沖を漂流中』

という作品 —異常異様な加速器 LHC にまつわっての予見小説として問題視している作品— もが

【ヘラクレスの計 12 に及ぶ功業】、【(ヘラクレス第 11 功業に見る) 巨人アトラス】、【トロイア崩壊伝承に見るトロイア崩壊の原因たる(他伝承では巨人アトラスが在処を把握するとされる) 黄金の林檎】、【巨人アトラスともトロイア崩壊元凶たる黄金の林檎とも史的に(一部識者によって) 結びつけられてきたとのアトランティス沈没伝承】、【アトラスやアトランティスといった固有名詞を付されての LHC 実験におけるブラックホール生成論議に関わる事物】との要素らのうちの「複数」を特色として帯びつつ、かつ、【911 の事件の発生(態様)にまつわる予見的言及】ないし【ブラックホール人為生成問題にまつわる「先覚的言及】】の一方、あるいは、その双方の特徴をも呈しているとの文物らが「不可解に」存在している]

との関係性(本稿にて主軸として問題視しているとの関係性)に組み込まれていることの摘示に注力してきたわけであるが、ここで一端脇に逸れもし、以下、長くも枠で括ってのこともが問題になるとのことの指摘をなしておきたい。

唐突とはなるが、SF 小説作家の中にあつての巨匠中の巨匠とされている作家としてアーサー・クラークという作家がいる(本稿の先だつての段でも同作については言及してきたところの作品だが、同アーサー・クラークの代表作『2001 年宇宙の旅』については多くの人間が聞き及んでいるか、とは思ふ)。

そのアーサー・クラークの「1973 年(あるいは 1972 年とも)刊行の」代表作(の一つと一般に認知されている作品)として

Rendezvous with Rama 『宇宙のランデブー』

という作品がある(:そちら『宇宙のランデブー』の粗筋・概要は(以下、申し分け程度に和文ウィキペディア[宇宙のランデブー]項目より引用するが)“『宇宙のランデブー』(うちゅうのランデブー、原題 Rendezvous with Rama)は、アーサー・C・クラークが著した長篇 SF 小説。…(中略)…22 世紀を舞台に、太陽系に進入した異星の宇宙船ラーマとのファースト・コンタクトが描かれている。ネビュラ賞、ヒューゴー賞受賞。未知の存在へのセンス・オブ・ワンダーを見事に描いた傑作として評価されている。…(中略)…西暦 2130 年、宇宙監視計画スペースガードが謎の物体を発見した。ラーマと名付けられた物体は当初小惑星だと思われていたが、宇宙

探査機によって送られた映像に写っていたものは、円筒型をした疑いようもない人工の建造物だった。急遽、艦長ノートン中佐率いる宇宙船エンデヴァー号がラーマの探査へ派遣される…(中略)…結局、エンデヴァー号は「ラーマ人」を発見することがないまま任務を終えた…(中略)…実在するスペースガード計画は、この作品にちなんで命名された。作中では冒頭で、2077年に小惑星がイタリアへ衝突し甚大な被害をもたらした事が発足のきっかけになったと描写している”(和文ウィキペディアよりの引用部はここまでとする)とのものとなる。詰まるところ、原著原題としての **Rendezvous with Rama**『ラーマとのランデブー』との内容は表記のような内容、[ラーマと地球側から名付けられた異星系由来の無人の移動型宇宙居住区]と人類が運命的接触を果たしたことに因る)。

上にて言及の作品『宇宙のランデブー』からして

[【77】との数値を日付[9月11日]に繋げている]

とのことをなしている(しかもそうもした[【77】と9月11日の繋がり合いに関わるとの部]がフィクションの垣根を越えて現実世界での社会活動に影響を及ぼしているとのことがある)。目立ちもしているその冒頭部よりそういうことをなしているのである。については以下続けての原文引用の部を参照されたい。

(直下、国内書店にて広くも流通しているハヤカワ文庫 SF シリーズにての文庫版『宇宙のランデブー』、冒頭部、表紙・目次などもページ数に加えられたうえでの邦訳書 11 から 12 ページよりの引用をなすとして)

二〇七七年の例年(いつ)になく美しい夏、九月十一日の朝九時四十六分(グリニッジ標準時)、ヨーロッパ帯の住民は、東の空に出現した目もくらむばかりの火球を仰ぎ見た。数秒とたたぬうちに、それは太陽よりも明るさを増し、天をよぎるにつれ——はじめは完全な無音で——涌きかえるような塵煙の太い尾を引いた。

オーストリア上空のどこかで、火球は分裂を始め、たてつづけに激しい運動をおこして、百万以上の人びとから、永久に聴力を奪った。だが、かれらはまだしも幸運だった。

毎秒五十キロのスピードで、一千トンの岩石と金属が北イタリアの平原に激突し、数世紀にわたる営為の成果を、ほんの数瞬で灰燼に帰させた。パドアとヴェロナの町が、地表から払拭され、ヴェニス最後の栄光は、この宇宙からの鉄槌の一撃後、なだれこんできたアドリア海の水の下に、永遠に没したのである。

(国内書店にて幅広くも流通している訳書よりの引用部はここまでとする —※—)

(※上記引用部に対して、その気があるのならばオンライン上よりも難なく確認できる(直下続けて抜粋の原文テキストを検索エンジンで検索してみると難なくも確認できる)との原著 Rendezvous with Rama の記述をも引いておくこととする。(直下、『宇宙のランデブー』原著 Rendezvous with Rama にての冒頭部、1. Spaceguard の節よりの引用をなすとして) “ **At 09.46 GMT on the morning of 11 September, in the exceptionally beautiful summer of the year 2077, most of the inhabitants of Europe saw a dazzling fireball appear in the eastern sky.** Within seconds it was brighter than the sun, and as it moved across the heavens?at first in utter silence — it left behind it a churning column of dust and smoke. Somewhere above Austria it began to disintegrate, producing a series of concussions so violent that more than a million people had their hearing permanently damaged. They were the lucky ones. Moving at fifty kilometres a second, a thousand tons of rock and metal impacted on the plains of northern Italy, destroying in a few flaming moments the labour of centuries. The cities of Padua and Verona were wiped from the face of the earth; and the last glories of Venice sank for ever beneath the sea as the waters of the Adriatic

came — thundering landwards after the hammer-blow from space.” (オンライン上より確認なせるとの原著よりの引用部はここまでとする。問題となる箇所は “ At 09.46 GMT on the morning of 11 September, in the exceptionally beautiful summer of the year 2077, most of the inhabitants of Europe saw a dazzling fireball appear in the eastern sky. ” との部である))

(これにてアーサー・クラークの『宇宙のランデブー』という作品からして[77との数値を9月11日に繋げている]とのことの典拠表記部 —【文献的事実】の問題であること、容易に確認出来るようになってきていることを示すための典拠紹介部— を終える)

さて、ここまでにてアーサー・クラーク小説の特定の属性を問題視なしてきた背景として、再言及するが、

[911の事件では揃い踏みでボーイング7X7シリーズに属する旅客機らが特攻に利用され、うち一機に関しては(機体コードではなく定期便の便数として【77】が振られていたとの)アメリカン航空「77」便として運用されていた機体となりもし、そちら(77便として当日運用されていたボーイング7X7シリーズの機体)が西経「77」度に位置する建物(ペンタゴン)に特攻した。また、911の事件は同じくものボーイング7X7シリーズに属する旅客機らがワールド・トレード・センターのツインタワーへ突入しもし、それが「結果的に」7棟のビルらが倒壊することになった契機となった事件であると知られている。に関しては事件ありようが[11]との数と多重的に結びついているとの指摘がなせるようになってきている(先述)との点によって(ビル七棟の)[7]と[11]との数が[乗算]の問題(かけ算の問題)から[数77]が浮かび上がってくるとの見方もなせるようになってきている]

とのことがある、現実にある。

表記のことについて

「問題なのは、... — [正気・正常の人間ならばそうした検討より当然に入ろう]と述べられるところとして— そうしたことがある中であってクラークの小説 **Rendezvous with Rama** 『宇宙のランデブー』が [9月11日] との日付と [77] との数字が入れ込まれての年数を結びつけているとのことがあるのが

[確率論的偶然] (only co-incident)

で済むのか? とのことを突き詰めてみるべきである(普通に考えれば、そうだと世間一通りの人間一般は強弁なすものかとも思うのだが、本件にはまた別に問題となる事情がある)。

については、偶然でないとすれば ([恣意]である、deliberate であるとすれば)、一体全体どうしてそういうことが具現化しているのか、その行き着くところは奈辺にあるのかとあわせて突き詰めてみることである」

と申し述べて話をさらに続ける。

さて、奇態なる記述内容 —少なくとも [911 との数値(かつ日付)と77 との数値を結びつけている] との70年代前半の作品にてのありようは「奇態なる」記述内容と述べるに足りるものかと思える— を含むとの『宇宙のランデブー』をものしたアーサー・クラークの作品については他にも911の事件との結節点が観念されるところとなっており、手前が分析してきたところとしては以下、次のようなことらもが挙げられもする (その点、アーサー・クラークの作品については海外でも一部の向きらが911の事件との繋がり合いを不十分に言及することもあるのだが(といった側面

では彼らは読み手の know の問題に筆者よりも期待しすぎとの感もある)、筆者のここでの指摘は彼ら海外の指摘者らが知ってか知らずかなんらカバーしてくれていないことにまで言及してのものであるとのことも一応、断っておく。

・アーサー・クラークの代表作は 2001: A Space Odyssey 『2001 年宇宙の旅』となるが、本稿先立っての段(補説 1 と銘打っての段の末尾の部)にて [ブラックホール関連の寓意性] でのその言われようにつき引きもしていた同著作 (小説版「第六部 スターゲイトを抜けて」の部にあつての [時計が止まる中での空間跳躍] の描写が [まさしくブラックホールを利用した旅のようなものである] との物理学者ポール・ハルパーン著書 Cosmic Wormholes: The Search for Interstellar Shortcuts 『タイムマシン ——ワームホールで時間旅行——』での言われようを従前引きもしていた著作でもある) にあつての表題に見られる【2001 年との年次】と【911 の事件が発生したとの年次】が相通ずるものとなっているとのことがある (それ単体で述べれば、『 [こじつけがましい] far-fetched だけの陰謀論であろう』と何も識っておらぬ向きに内心にて指弾されるのは必定であろうとの話ながらもまずもって述べるどころとしてである)。

・上記『2001 年宇宙の旅』の映画版、カリスマ映画監督として知られるスタンリー・キューブリックがメガホンをとった著名な映画版 —映画通をもって任じる向きならばその内容を把握して当たりまえであろうといった按配の知名度を誇る [異星に由来するモノリス (黒い長方形の石) によって猿が知的進化を遂げる冒頭シーン] でもよく知られている映画版— については哲学者フリードリヒ・ニーチェ由来の発想法との結びつきが「一般論として」「自然なる流れにて」指摘されるものとなっているとのことがある。

(:以下、英文 Wikipedia [Interpretations of 2001: A Space Odyssey] 項目 ([映画版『2001 年宇宙の旅の解釈論』] 項目) より引用をなすと

“ **Friedrich Nietzsche's philosophical tract Thus Spoke Zarathustra, about the potential of mankind, is directly referenced by the use of Richard Strauss's musical piece of the same name. Nietzsche writes that man is a bridge between the ape and the ubermensch . In an article in the New York Times, Kubrick gave credence to interpretations of 2001 based on Zarathustra when he said: "Man is the missing link between primitive apes and civilized human beings. Man is really in a very unstable condition ."** ” (逐語訳に代えての補いもしての意識をなすと) 「(ニーチェの『ツァラストラはかく語りき』と同題のリヒャルト・ストラウス歌曲が映画版『2001 年宇宙の旅』に用いられている中でのこととして) 哲学者ニーチェ自身は (Thus Spoke Zarathustra 『ツァラストラかく語りき』にて) [人間とは [[猿] と [超人] の間の架け橋] である」と述べている。それにまつわって (『ツァラストラはかく語りき』と同題のリヒャルト・ストラウス歌曲を原始的猿が人間へと外的に進化させられる冒頭シーンに通ずるところで用いているとの) 映画版『2001 年宇宙の旅』監督キューブリックが「 [原始的猿] と [文明化された人間存在] との間のミッシング・リンクが人間にはつきまとう。人間はまったくもって (綱渡りするようにか) [不安定なる状況] にある」と述べてもしている時点で監督手ずから『ツァラストラはかく語りき』に依拠した『2001 年宇宙の旅』の解釈を表明しているとも言えよう」(以上、補っての解説を付しての英文 Wikipedia よりの引用とした) とあるとおりである)

・アーサー・クラークの他の作品にも、それも 2001: A Space Odyssey『2001 年宇宙の旅』よりかなり前に刊行された作品にあって「も」直上、言及なした、

[映画版『2001 年宇宙の旅』に影響を与えているとのことが指摘されているフリードリヒ・ニーチェの (Thus Spoke Zarathustra『ツァラストラかく語りき』に見る) [綱渡り] の寓意]

に相通ずるものが具現化している、[二つの塔]にまつわるものとして具現化しているとのことが **Philological Truth【文献的事実】**の問題としてある。

その点、フリードリヒ・ニーチェの『ツァラストラかく語りき』における [綱渡りの寓意] (上にてのウィキペディアよりの引用部にても言及されているように映画版『2001 年宇宙の旅』の筋立てに影響しているとの解釈がなされている、Thus Spoke Zarathustra『ツァラストラかく語りき』に見る Man is a rope stretched between the animal and the Superman — a rope over an abyss.「人間とは動物と超人類の間に横たわる綱、[深淵 abyss]を渡っての綱である」との部に関わる寓意)、そちら [綱渡りの寓意] に関わるエピソードとは

[男が市場にての見世物として [二つの塔] の間に張られた綱を渡ろうとする。だが、男はライヴァルとしての [道化師然とした後から綱渡りはじめた者] に追い抜かれて転落。そうもして転落を見た男が瀕死、今際の際との状況になりもした折、思想家ツァラストラが [君は賤しむ所業によってではなく職に応じて死を迎えるのだ。恥じることは何らない。私が君を埋葬しよう] と声がけする (そして男は死を得る)]

との筋立てのものである。

(: 典拠をつまびらやかにするとの本稿本義たるところに基づき、広くもオンライン上より確認なせるとの Project Gutenberg にて公開の英訳版 THUS SPAKE ZARATHUSTRA A BOOK FOR ALL AND NONE よりの引用をなせば、

“ In the meantime, of course, the rope-dancer had commenced his performance: he had come out at a little door, and was going along the rope which was stretched between two towers, so that it hung above the market-place and the people. When he was just midway across, the little door opened once more, and a gaudily-dressed fellow like a buffoon sprang out, and went rapidly after the first one. "Go on, halt-foot," cried his frightful voice, "go on, lazy-bones, interloper, sallow-face! —lest I tickle thee with my heel! What dost thou here between the towers — In the tower is the place for thee, thou shouldst be locked up; to one better than thyself thou blockest the way!" —And with every word he came nearer and nearer the first one. When, however, he was but a step behind, there happened the frightful thing which made every mouth mute and every eye fixed — he uttered a yell like a devil, and jumped over the other who was in his way. The latter, however, when he thus saw his rival triumph, lost at the same time his head and his footing on the rope; he threw his pole away, and shot downwards faster than it, like an eddy of arms and legs, into the depth. The market-place and the people were like the sea when the storm cometh on: they all flew apart and in disorder, especially where the body was about to fall. Zarathustra, however, remained standing, and just beside him fell the body, badly injured and disfigured, but not yet dead. After a while consciousness returned to the shattered man, and he saw Zarathustra kneeling beside him. "What art thou doing there?" said he at last, "I knew long

ago that the devil would trip me up. Now he draggeth me to hell: wilt thou prevent him?" "On mine honour, my friend," answered Zarathustra, "there is nothing of all that whereof thou speakest: there is no devil and no hell. Thy soul will be dead even sooner than thy body: fear, therefore, nothing any more!" The man looked up distrustfully. "If thou speakest the truth," said he, "I lose nothing when I lose my life. **I am not much more than an animal which hath been taught to dance by blows and scanty fare.**" "Not at all," said Zarathustra, "thou hast made danger thy calling; therein there is nothing contemptible. Now thou perishest by thy calling: therefore will I bury thee with mine own hands." ” (逐語訳ではなく細部端折つての意識として)「**すぐに綱渡りの曲芸師が売り物としての綱渡りをはじめた。男は小さなドアより出てきて[二つの塔の間にかけてられた綱](the rope which was stretched between two towers)にそって歩み出した。彼がロープ中頃に達した折、(同男が先に出てきた)小さなドアが再び開き、[いかにも道化然とした出で立ちの男](a gaudily-dressed fellow like a buffoon)が既にロープ渡りをはじめていた男の後を追いだした。(以下、道化師然とした男が先行する綱渡り師をなじりもしての申しよう、そして、道化師然とした男が先行する男に肉薄していくとの描写の部を端折ることとし、)道化師然とした男のほうの綱渡りにあつての勝利を目にした折、頭から脚まで一挙にとのかたちで男はロープにおける自分の居場所を失い深みに落とされることになった。**の際、市場の群衆は逃げ惑うことになった、なかんずく、男の身体が転落した場の者達に関しては強くもそうなのだが、ツァラストラはそこにて動かじのありようを貫いた。意識が閉ざされる男の今際の際にツァラストラは男の側にて膝をかがめ、話を聴いた。「何たる有り様か。私はずっと前から悪魔が私を拐(かどわ)かしていたことは知っていたのだ。今、奴は、悪魔は我を地獄に引きづり込もうとしている。貴方にはそれを妨げることなどできないだろう」(男)「信義誠実にかけて言おう。友よ。君の言ったようなことはなんら無い。地獄も悪魔も存在しはしないのだ。君の魂は間もなく朽ち果てる。おそれも何も無い」(ツァラストラ)「貴方が言っていることが真実なら、失うものも何もない。命失うときに何も失うものはないとのことになる。**私は暴力的制裁と僅かな金にて曲芸を供するよう仕込まれた動物にすぎなかったとのことになるのであろう**」(男)「いや、そのようなことはまったく無い。賤しむべきようなこともなんら無い。今、君は賤しむべき所業がゆえにではなく[職]がゆえに死を得ようとしているのだ(それは恥ずべきことではない)。だから、私が自分の手で君を埋葬することにしよう」(ツァラストラ)」との部が以上の内容を扱ったところとなる)

さて、ニーチェの[綱渡り]の申しよう — [道化師] に [[二つの塔]の間を綱渡りしようとしていた男] が追い越されて転落、「自分は鞭と僅かな金で芸を仕込まれた動物に過ぎぬのだろう」と呻吟しながらも死んでいくとの描写もが引き合いに出されての申しよう — を露骨に想起させるとのありようがアーサー・クラークの「他の」作品にも、そう、そうした寓意を含むとの指摘がなされていることを直上にて紹介した 2001: A Space Odyssey 『2001年宇宙の旅』よりかなり前に刊行された作品にあつて「も」具現化しているとのことをここ本段では問題視する。

そちらニーチェの[綱渡り]の寓意と関わるクラーク由来の「他の」作品とは1956年に世に出ている、

THE CITY AND THE STARS 『都市と星』

という小説作品となる。

細かい内容に関する説明は一切割愛し申し述べるが、上記作品(『都市と星』)にあつては

[【道化師(英語表記 Jester)】と言われる型破りの男 (ケドロン Khedron というキャラクター) に主人公 (アルヴィン Alvin という登場人物) が【二つの塔】【双子の頂(いただき)】の間を綱渡りするようなことは[機械]にしか出来ぬことだ、[機械ならぬ人間]には危険を避ける本能があるのだから不可能なのだと窘(たしな)められもする]

との描写がなされている — 【道化師】と【二つの塔の間の綱渡りの困難さ】が結びつけられているとのことでフリードリヒ・ニーチェの『ツァラストラはかく語りき』にあっての【道化師】と【二つの塔の間の綱渡りの困難さ】が結びつけられている筋立てとの接合性がみとめられる— (:オンライン上より確認なせるとのアーサー・クラーク THE CITY AND THE STARS 『都市と星』原著よりの該当部よりの引用をなせば、“ [Then let me tell you something which you may not know. You see those towers there?] Khedron pointed to **the twin peaks of Power Central and Council Hall**, staring at each other across a canyon a mile deep.

[Suppose I were to **lay a perfectly firm plank between those two towers** - a plank only six inches wide. Could you walk across it?] Alvin hesitated. [I don't know,] he answered. [I wouldn't like to try.] [I'm quite sure you could never do it. You'd get giddy and fall off before you'd gone a dozen paces. Yet if that same plank was supported just clear of the ground, you'd be able to walk along it without difficulty.] [And what does that prove?] [A simple point I'm trying to make. In the two experiments I've described, the plank would be exactly the same in both cases. One of those wheeled robots you sometimes meet could cross it just as easily if it was bridging those towers as if it was laid along the ground. We couldn't, because we have a fear of heights. It may be irrational, but it's too powerful to be ignored. It is built into us; we are born with it. In the same way, we have a fear of space.(・・・) ” (意識として)「君が想いもよらぬとのことを話させてもらおうか。君にはあそこの[塔ら](those towers there)が見えるかね」。そうも言い、道化師ケドロンは一マイルほどの深さの峡谷をなすようなかたちとなりもしている **電力供給炉と中央市議会ホールの両ビルの[双子上にそびえ立ついただき]**(the twin peaks of Power Central and Council Hall)を指さした。「差し渡しにて6インチ程の板、**極めて硬いと**の板をあれら塔の間に私が架けたと考えてみたまえ。君ならそれを渡りきれるかね」。道化師ケドロンは言った。アルヴィンは躊躇しながらも「分からない」と答えた。「だが、試したくはないね」。「君はそれをなしえないと確信しているよ。めまいを覚え、たいして進んでいないとのうちに真っ逆さまだね。だが、もし、同じくもの板がほんの少し地面より離れているとの場合を考えると、君は難なくも渡りきれるだろうね」とケドロン。「どうしてそれが分かる?」。返してアルヴィン。「まさにそれこそが私がここで問題としている単純なポイントとなるのさ。私が示した二つの思考実験にて板にまつわる条件はまったく同じだ。君がよく見かけるような車輪付きの走行ロボットならば、地面との間隔が極々僅かなものであるものと同様に(1マイル程の峡谷を間に形成している双子状のビルの頂きを)難なく渡りきれるだろうね。だが、我々にはそれはできない。というのも高所にあつて恐慌状態に陥るだろうからね。それは不合理なものではあるが、無視するにはあまりにも強力なものだよ。生まれつきとのありようで我々の本能に埋め込まれているのさ。同様の理由で我々は宇宙空間に対しても恐怖を抱いている」(オンライン上より確認できるとの部に対する意識重視しての訳はここまでとする)との部が該当部となる)。

いいだろうか。上に引用なしたような式で

[【道化師】(と呼ばれる男) と【死に至る二つの塔・双子の頂(いただき)】の

綱渡り]

への比喩的言及がアーサー・クラークの小説作品 THE CITY AND THE STARS『都市と星』にはみとめられるわけだが、後のアーサー・クラークの小説 2001: A Space Odyssey『2001 年宇宙の旅』の映画版にあつて「も」フリードリヒ・ニーチェ由来の [[道化師(と呼ばれる男)] と [死に至る二つの塔の綱渡り]] の寓意譚と関係する描写が含まれているといった観点が(英語圏の大衆紙にて)取り扱われていたとのことになっていると「ある」 (: つい最前の段にあつてもそちらよりの引用をなしたところの現行にての英文 Wikipedia [Interpretations of 2001: A Space Odyssey] 項目表記よりの引用を繰り返せば、“ Friedrich Nietzsche's philosophical tract Thus Spoke Zarathustra, about the potential of mankind, is directly referenced by the use of Richard Strauss's musical piece of the same name. Nietzsche writes that man is a bridge between the ape and the ubermensch . In an article in the New York Times, Kubrick gave credence to interpretations of 2001 based on Zarathustra when he said: "Man is the missing link between primitive apes and civilized human beings. Man is really in a very unstable condition." ” とのことがある。(訳文も上に付しているところの) そうもしたまとめられように見る映画監督スタンリー・キューブリックの申しよう、すなわち、 [ツアラストラはかく語りき] とのニーチェの思想書と同名のタイトルを有したりヒャルト・シュトラウスの歌曲を映画版『2001 年宇宙の旅』に採用しているとの映画監督の「人間と猿の間にはミッシング・リンクがあり、人とは不安定な状況(アンステーブル・コンディション)にある存在である」との当該映画に対するニューヨーク・タイムズのインタビューに対するまさしくものその回答が、要するに、「文明化された人間とは動物と超人との間の架け橋、【深淵】(アビス)を横たわる橋である」とのニーチェ申しようと通底するところとなっていると解されるようになっている — 一因(ちな)みに映画版『2001 年宇宙の旅』にあつても同作の小説版にあつても猿から進化させられたヒトという種の中から[スター・チャイルド]とのさらに進化した[超人]が誕生するとの描写がなされている、そして、そちら描写に関わるスター・ゲイト小説版表記にブラックホールに通ずる側面があると指摘されていると「ある」()。

以上、箇条書きもしてきたことらを思料したうえで考えるべきは

[60年代の作品である 2001: A Space Odyssey 『2001 年宇宙の旅』にあつてみとめられる [2001 年] という年次は現実世界で [二つの塔](道化師と綱渡りの寓意と通ずるところがあるように見えもするツインタワー) が崩された年次である]

とのことである。

偶然か?

筆者が『そうはとらえるべきではないだろう』と見るところとして「さらに」次のようなことがある。

1974 年、曲芸綱渡り師としての自身の限界を試すべくフィリップ・プティとその仲間たちが[かねてよりのツインタワーに対する秘密工作]の成果を糧とするかたちでツインタワーにてのゲリラ的綱渡りを慣行、一躍、時の人となったと「ある」... (: 英文 Wikipedia [Philippe Petit] 項目より引用するところとして “ Philippe Petit (born 13 August 1949) is a French high-wire artist who **gained fame in 1974 for his high-wire walk between the Twin Towers of the World Trade Center in New York City**, on the morning of 7 August. [. . .] Since the towers were still under construction, Petit and one of his collaborators, New York-based photographer Jim Moore, rented a helicopter to take aerial photographs of the buildings. Friends Jean-Francois and Jean-

Louis helped him practice in a field in France, and accompanied him to take part in the final rigging of the project, as well as to photograph it. His friend Francis Brunn, a German juggler, provided financial support for the proposed project and its planning. Petit and his crew gained entry into the towers several times, and hid in upper floors and on the roofs of the unfinished buildings in order to study security measures, in addition to analyzing the construction and identifying places to anchor the wire and cavalletti. Using his own observations, drawings, and Moore's photographs, Petit constructed a scale model of the towers in order to design the needed rigging to prepare for the wire walk. Working from an ID of an American who worked in the building, Petit made fake identification cards for himself and his collaborators (claiming that they were contractors who were installing an electrified fence on the roof) to gain access to the buildings.”と記載されているとおりである)。

曲芸師フィリップ・プティの「事前偵察活動(ツインタワーに就業中の保険会社社員をも「体よく」仲間に引き入れることに成功させつつも実行できたなどと述懐されている事前偵察活動でもある)を受けもしての「活躍」ぶりについては Man on Wire『マン・オン・ワイヤー』との題名の2008年発のドキュメンタリー・フィルムがレンタルできるようなかたちで広くも流通を見ているために疑わしきはそちらを確認されるとよからう(本稿筆者としてはドキュメンタリー・フィルム Man on Wire『マン・オン・ワイヤー』にての「かねてよりフィリップ・プティのことをパリの大道芸の現場をたまたま視て「識っ」ていたツインタワー出入りの保険会社社員」がツインタワー偵察活動をなしていたフィリップ・プティ(往時、世界的知名度とのことではまったくマイナーなフランス人芸人であり、かつ、その顔もさして特徴的なものではないとの向き)を何故なのか「視認」して、プティに声がけし、プティのゲリラ的綱渡り作戦のことを報されたうえで仲間に引き入れられたとの内容を目にした段階で『このような世界でこのようなことが「偶然」としてあるとでもいうのか。馬鹿にでもしているのか』と思ったものではあるが、ここではそうした属人的目分量のことは問題にせず純粋なる記号論的一致性のこののみを問題視する)。

さて、ここまで呈示してきたことから

【60年代のアーサー・クラーク作品である2001: A Space Odyssey『2001年宇宙の旅』にあっての表題にみとめられる「2001年」という年次は現実世界で「二つの塔」が崩された年次である】

⇒

【アーサー・クラークの2001: A Space Odyssey『2001年宇宙の旅』映画化作品(の評論)にあっては同映画に【「二つの塔」と結びつく「フリードリヒ・ニーチェに由来する道化師と綱渡りのエピソードの寓意」】が込められているとことが「一般論として」語られもしている(語られるべくして語られている)とのことがある】

⇒

【『2001年宇宙の旅』登場よりさらに時を遡っての50年代、その50年代のアーサー・クラーク作品であるTHE CITY AND THE STARS『都市と星』では道化師(Jester)に由来する「双子状のビルの頂きの綱渡りと道化の寓意」が登場を見ているとのことがある。そして、それは映画版の2001: A Space Odyssey『2001年宇宙の旅』に関して(リヒャルト・シュトラウスの歌曲『ツァラストラはかく語りき』の使用ありようと関わるところとして)【「道化師」と「二つの塔」と「綱渡り」の各要素とも結びつくフリードリヒ・ニーチェ『ツァラストラは語りき』に見る寓意譚】がそこに影響しているとの言われようがなされているとのこととの関係性を想起させるとのことでもある】

⇒

【(以上の各事実らとの関係性が顧慮されるようなところとして)『2001年宇宙の旅』が世に出た「後の」70年代にあって入念な準備をなしてツインタワー(2001年の事件で崩されたツインタワー)にあってのゲリラ的綱渡りを70年代に敢行した曲芸師(フィリップ・プティ)の一党がいた —彼らのことは広く取り上げられている—】

とのことが指摘できるようにもなっている。

であるから、

「アーサー・クラークの作品にあつては元より911の事件との関係性が想起できるようになつてもおり(事実関係から純・記号論的にそもも想起できるようになつており)、それが【偶然】の賜物なのか、でなければ、【恣意】、すなわち、【一作家を傀儡(クグツ) Puppetとして運用していた —クラーク自身が『都市と星』にて持ち出しているような wheeled robots [おそれなくもツインタワーの間を綱渡りする車輪付きロボット] のようなものにされていた— と解されるような尋常一様ならざるところに由来する【恣意】の賜物なのか問題になる」

とのところとなつている。

以上の事由より

[クラーク小説 *Rendezvous with Rama* 『宇宙のランデブー』にあつて【9月11日との日付と77との数字(が入れ込まれての年数)とが結びつけているとのこと】が見受けられるとのそのことについては[確率論的偶然](only co-incidenta)で済まされるのかとの「？」マークを付ける式だけではおよそ済まされぬとのレベルでの疑義を呈さざるをえない]

と申し述べるのである([深刻に疑義がある] とのことについては当該問題が [生き死にに関わること] であるのならば、無論、[正気の人間ら —ゾンビないし機械「ではない」との正気の人間ら— が無視せぬことであろうとのこと]と同義ともなる)。

(巨匠とされる小説家アーサー・クラークを巡るやりように関する話には間を得ずに回帰するが、一端、別の方向に視点を向けて)さらにここ [補つても表記部]にあつての話を続ける。

911の事件 —ワールド・トレード・センターが強襲されたとの事件— および77との数の間に結びつきがある、とのことに関しては次のようなことが指摘できるようになつて「も」いる。

[南アフリカにあつて【ヘイト・クライム】の類をこととする白人至上主義の人種差別団体 —白人以外を神に認められぬ劣った者として指弾するとの筋目の団体— として *Afrikaner Weerstandsbeweging* [アフリカーナー抵抗運動]なるものがある。頻繁にテロ活動をなしてきたとの同団体の組織表象シンボルは [ナチスシンボルと777との数値を結びつけたもの] となつている。同団体によると「777は神ヤハウエを指し、666にて表象されるアンチ・キリストに抗する神聖なる数である」とのことになるらしいが、そうした団体が南アフリカにある世界貿易センター(ワールド・トレード・センター)を1993年に強襲しているとの事件を起こしている(1993年6月25日に発生した *Storming of Kempton Park World Trade Centre* [ケンプトン・ワールド・トレード・センター強襲事件]として知られる事件を起こしている)。ここでも(911の事件が発生するおよそ8年前のことであるわけであるが) [ワールド・トレード・センター *World Trade Center*]と [77] (より正確には[777]を神の神聖数として尊崇視する団体)が結びついている]

表記のこと、777を掲げる白人至上主義的極右によつて(南アフリカの方の)ワールド・トレード・センター・ビルが襲撃されていたことについて常識の世界での言われようを引いておこう。

(直下、英文 Wikipedia [*Afrikaner Weerstandsbeweging*]項目よりの掻い摘まんでの引用をなすとして)

The Afrikaner Weerstandsbeweging (Afrikaner Resistance Movement) (AWB) is a South African far right separatist political and former paramilitary organisation, since its creation dedicated to secessionist Afrikaner nationalism and the creation of an independent Boer-Afrikaner republic or "Volkstaat/Boerestaat" in part of South Africa. In its heyday in the 1980s and 1990s, the organisation received much publicity both in South Africa and internationally as a white supremacist group.

[...]

During the negotiations that led to South Africa's first multiracial elections, the AWB threatened all-out war. During the Battle of Ventersdorp in August 1991, the AWB confronted police in front of the town hall where President F W de Klerk was speaking, and "a number of people were killed or injured" in the conflict. **Later in the negotiations, the AWB stormed the Kempton Park World Trade Centre where the negotiations were taking place, breaking through the glass front of the building with an armoured car.**

[...]

The AWB flag is composed of three black sevens (forming a triskelion) in a white circle upon a red background. According to AWB, the sevens, 'the number of JAHWEH', 'stand to oppose the number 666, the number of the anti-Christ'. Red is considered to represent Jesus' blood, while black stands for bravery and courage. The inner white circle symbolises the "eternal struggle", or according to other sources "eternal life". The flag bears a resemblance to the Swastika flag used by the Nazi Party and Nazi Germany.

(訳として)

「Afrikaner Weerstandsbeweging [アフリカーナー(オランダ系を主体とする白人)抵抗運動] ことAWBは南アの極右分離主義政治組織であり、従前は半・軍事組織としての顔を持っていたとの団体であり、アフリカーナー(オランダ系白人)の南アからの分離、ボーア系アフリカ人の独立した国家、いわゆる、Volkstaat/Boerestaatの創設を設立時からして訴えてきたとの組織体である。その80年代から90年代の絶頂期にあつては同組織は南アおよび国際的なレベルで[白人至上主義組織]として相当程度の知名度を誇っていた。…(中略)…南アにあつて初の多人種参画型選挙に至るべくもの交渉の最中、AWBは[総力戦]を執り行うことを(威圧的に)示唆した。1991年8月に発生したヴェンタースドロップの闘争の渦中にあつてはAWBはデクラーク大統領が演説なしていた市庁舎の前で警官グループと衝突、その過程で[多くの人間]が死傷した(とも言われている)。交渉の後の段階にあつてはAWBは交渉が行われていたケンプトン・パークにあるワールド・トレード・センターを強襲し、装甲車でもってワールド・トレード・センターのガラス張りの部を強行突破した。…(中略)…AWBの旗は黒で書かれた3つの[7] (トリスケリオン; 鉤十字に親和性が近いとされる三つ巴紋)、すなわち、[ヤハウエ(一神教の唯一神たる神)を意味する数][アンチ・キリストの数たる666に抗する数値として成り立っているもの]と主張しているところの3つの[7]、そして、赤地に白い円から成り立っている。(7の字の配色である)黒が勇敢さ・度胸を指す一方で赤はキリストの血を指すとされてもいる。白い円は永遠の闘争を指す、ないしは、他の資料では永遠の命を指すとされている。そうもしたAWBの旗はナチ党およびナチスドイツにて用いられた鉤十字(スワスティカ)旗との類似性を帯びてもいる」

(引用部はここまでとしている)

以上のように77(転じての777)を表象に掲げるテロを起こしてきた暴力的極右が「南アの」ワールド・トレード・センターに突入している(飛行機に比してはグレード・ダウンしているが、armoured car 装甲車で壁面に突入している)とのことで[77]とかの[飛行機突入事件]との関係性が観念されもするようになっていく(下に呈示の図を参照のこと)。



(rough structure of -)

Fact 1 :

Nazi Symbol + 777 = Afrikaner Weerstandsbeweging Symbol

Fact 2 :

Afrikaner Weerstandsbeweging Symbol

=

Organization which attacked the Kempton Park World Trade Center in 1991

Fact3 :

connections between [September 11 attacks] and [number77...]

Pentagon

American Airlines Flight 77

7X7 model of Boeing

Location of The Pentagon : 38 . 87099° N 「77」 . 05596 W

WTC

Twins tower (which were related with number "11") & 7buildings

7X7 model of Boeing

only co-incidental ?

上のこと、指摘したうえでアーサー・クラーク — (既述のように代表作『宇宙のランデヴー』にて [2077年との年次] と [9月11日との日付] を結びつけていたSF小説界の巨匠たる作家にして、かつ、代表作『2001年宇宙の旅』映画版とその他の同人物作品らが【「共通の」ニーチェにまつわる寓意】を介して【2001年という年次】【ツインタワーにての綱渡り】と(2001年に911の事件が起きる「前」から)相通ずる形態の作品となりもしているとの作家) — のことに話を回帰させもし、[911(の事件)と77(という数値列)の結びつき] については次のようなことまでもが「ある」とも指摘しておく。

(以下、箇条書き形式にての表記をなすとして)

- ・アーサー・クラーク小説『宇宙のランデヴー』にては20「77」年「9月11日」に地球に巨大隕石が衝突したとの粗筋が具現化しているわけではあるが、著名な同小説のそうした描写を受けて現実世界にて [スペースガード] という [小惑星(アステロイド)の地球衝突に備えるべし] との運動が興ったとこのことがある、そして、同運動は現時点でも継続しているとのことがある(下に典拠を挙げておく)。

[直上表記のこの出典表記として]

アーサー・クラーク著作『宇宙のランデヴー』に見る2077年の出来事がスペース・ガードとの一連の試み(危険視される小惑星体を早期発見、にまつわっての警告をなそうとの試み)の由来となっていることについては世間一般での周知のなされようについてウィキペディア程度の媒体よりの引用をなしておく。

(直下、英文 Wikipedia[Spaceguard]項目にての現行記載内容よりの引用をなすとして)

The term Spaceguard loosely refers to a number of efforts to discover and study near-Earth objects (NEO). Asteroids are discovered by telescopes which repeatedly survey large areas of sky. Efforts which concentrate on discovering NEOs are considered part of the "Spaceguard Survey," regardless of which organization they are affiliated with. A number of organizations have also raised related discussions and proposals on asteroid-impact avoidance. [. . .]
Arthur C. Clarke coined the term in his novel Rendezvous with Rama (1972) where SPACEGUARD was the name of an early warning system created following a catastrophic asteroid impact. This name was later adopted by a number of real life efforts to discover and study near-Earth objects.

(訳として)

「スペース・ガードとの語句はおおよそとしては地球接近物体(ニア・アース・オブジェクト:NEO)を発見・研究しようとの一連の試みのことを指す。といった試みにあって小惑星(アステロイド)らが宇宙(そら)の広範囲領域の継続しての調査をなしている天体望遠鏡にて発見されている。関連する組織が提携関係にあるかに関わらず、ニア・アース・オブジェクトを発見するのに専心しての試みは[スペース・ガード調査]の一貫をなすものであると考えられている。多くの組織体が小惑星に由来する衝撃回避にまつわっての議論・提案を提起してもいる …(中略)… アーサー・C・クラークがその小説『宇宙のランデヴー』(原題 Rendezvous with Rama『ラーマとのランデヴー』)にて(小説架空世界の)小惑星体衝突に起因する破滅的事態に続いて生み出された早期警戒にまつわるところのものとして[スペース・ガード]との語句を案出した。このクラーク由来の呼称がニア・アース・オブジェクトを発見・調査しようとの現実世界での[数多くの試み]に後に当てはめられるようになった」

(訳を付しての引用部はここまでとする)

(直下、英文 Wikipedia[Rendezvous with Rama]項目にての現行記載内容よりの引用をなすとして)

Clarke invented the space study program which detects Rama, Project Spaceguard, as a method of identifying near-Earth objects on Earth-impact trajectories; in the novel it was initiated after an asteroid struck Italy on 11 September 2077, destroying Padua and Verona and sinking Venice. A real project named Spaceguard was initiated in 1992, named after Clarke's fictional project.

(訳として)

「クラークは(小説内にて)ラーマ 一作中の移動型スペースコロニーのこことーを特定化することになった宙域探査挙動として地球に衝突しうる軌道にあるニア・アース・オブジェクトを特定化する挙としての【スペース・ガード計画】(なる作中設定)を考案しており、小説内では同計画は2077年9月11日において小惑星体がイタリアに直撃、パドヴァ、ヴェローナを崩壊なさせ、ヴェニス海中に没せしめたとの後に発動されたものである(との設定が採用されている)。(フィクションならぬ)現実世界にあってはアーサー・クラークの架空の計画から命名されてのスペースガードと名付けられた計画が1992年に始動を見ている」

(訳を付しての引用部はここまでとする)

(箇条書き表記を続けるとして)

・直上引用部からもお分かりいただけるように、大御所作家アーサー・クラークが【現実世界での小惑星体探査計画のありよう(その呼称)】

に影響を与えることとなったとの、

【スペース・ガード(計画)】

なる語を七〇年代に世に出た彼の小説にあっての設定まわりのところで「(フィクションでの)2077年9月11日の天体衝突にまつわるものとして」生み出しもしているのことはその方面でよく知られている(：にまつわって不思議ではならないことなのだが、クラーク小説『宇宙のランデブー』から多大な影響を受けたとのことであるスペース・ガード活動関係者らなどには、1. クラークが(スペース・ガードの造語につながった部)77と日付9月11日を結びつけている作家である、2. 先の911の事件では77との結びつきが多くみとめられた、3. クラークの小説には(先の911の事件が起こった)2001年を表題にしている『2001年宇宙の旅』が(六〇年代末葉の)代表作として含まれている、以上三つの単純なよく知られた事実関係の把握から【考えて然るべきようなことがそこにある】と想像がついてもおかしくはないのにも関わらず、クラークの(スペース・ガードを77と9月11日を結びつけている) **Rendezvous with Rama** 『宇宙のランデブー』にまつわっての問題事を指摘するような人間だにこの世界には目立ってみとめられないはしない、というより、まったくもってみとめられないのことがありもする — ただし、これから薄っぺらい指摘をなす者が出てくる可能性はあるにはあるかとも見るが — . だが、[臆病ゆえの黙過・閉却]なのか、あるいは、[同輩存在の内面および世それ自体のいかんともしがたい空虚さに対する諦観]なのか、あるいは、[自由に思考する脳がそこに不在の状況を見ているとのありようのあまねくもの該当]がゆえなのか、分かりはしないが、指摘をなす者がまったくもって僅少である、まったくもっていないのことは[指摘対象となる(なすべき)ようなこと]が事実ではないとの保証にはなんらならない。そして、実際にクラークの作品にはここまで指摘してきたような【ツインタワーの間の綱渡り(現実世界にあって曲芸師フィリップ・プティが実演したツインタワーでの綱渡り、それに先駆けてのツインタワーの綱渡り)】【2001年との年次】の両二点に一箇所結びつくような特性がみとめられもするとのことは(残念だが)[事実]となっている、そう、属人的主観や解釈によって有為転変するような話「ではない」との[事実]となっている。そして、その意で問題となるクラークの問題となる『2001年の宇宙の旅』(フリードリヒ・ニーチェの「人間「とは」【深淵】を渡る動物と超人の間にある綱である」といった申しようの寓意と結びつけられていることが知られる作品) に関しては同作小説版にあっての【時計が止まる部

のスターゲイトの描写】、【人間の進化がそこにいきつくところと示唆されるスター・チャイルド(一種の超人)誕生にまつわっての描写】でもあるとのその箇所が一部物理学者(物理学者ポール・ハルパーン)によって【ブラックホール】と結びつけられているとのこと本稿にての補説1と振っての部にて既に解説をなしている —※映画版よりも微に入って描かれている「小説版の」『2001年宇宙の旅』の【(超人に進化していく)スターチャイルド関連の描写】にあつての【時計の時針の停止】がいかにもってしてブラックホールと結びつくかとされているのかについては本稿にあつての補説1にあつての Cosmic Wormholes: The Search for Interstellar Shortcuts (邦題)『タイムマシン——ワームホールで時間旅行——』よりの引用部をとにかくも参照いただきたい次第である—)。

さて、アーサー・クラークは七〇年代の Rendezvous with Rama『宇宙のランデブー』刊行後、

【地球に対する小惑星体衝突を回避するための決死の試み】

を描いた小説作品を1993年、奇しくもクラーク由来のスペースガードが現実世界の挙動とリンクしだした1992年の1年後に世に出している。

その作品の表題が

The Hammer of God『神の鉄槌』

となる。

同小説『神の鉄槌』に関しては —無論にしてそれもまた容易に確認できるところの文献的事実の問題として— 次のような内容が具現化している。

小惑星体が地球に衝突しようとしていた。そうした状況を回避するためにそちら小惑星体にランデブー(接地)、そこにマス・ドライバー(衛星軌道上に物資を搬出するための構想過程にある超巨大装置)を据え置いて小惑星体の軌道をそらせようとの人類の存亡を賭けた計画が実行されることになる...

以上表記の The Hammer of God『神の鉄槌』(1993)の内容にまつわって「まずもって問題になるのは、」当該小説で地球に破滅を与える存在として肉薄してきている小惑星体の軌道を逸らすために用いられているマス・ドライバーの名称が

[アトラス]

とのものとなっているとのことであり(作中にて[アトラス計画]なるものの帰趨が主軸をなすとのこととなっている)、そこにいうアトラスの名称を振られてのマス・ドライバーが

【加速器と同様の機序(ローレンツ力)を利用してのもの】

であるがゆえに、小説『神の鉄槌』は

【(加速器に通ずるものたるマス・ドライバーの)アトラスによる人類救済計画を主眼と据えての作品】

とも言い換えられるようになっていることである。

[上のことについての出典表記として]

小説『神の鉄槌』の粗筋が[マスドライバー・アトラスによる人類救済計画を主眼と据えての作品]であることの典拠としては同作品についての和文ウィキペディアの解説のなされようを引いておく。

(直下、和文ウィキペディア[神の鉄槌]項目にあつての「現行にあつての」記載内容 —後に細かい部分で編集がなされて異動が発生する可能性もあること、断っておく— よりの引用をなすとして)

神の鉄槌(かみのでっつい、原題 "The Hammer of God")は、アーサー・C・クラークが 1993 年に発表した SF 小説。西暦 2109 年を舞台に小惑星衝突の危機が描かれている。

...(中略)...

8 か月後に地球へ衝突する軌道を取っていることが確認されたその小惑星はカーリーと名づけられ、宇宙船ゴライアス号の船長ロバート・シンがカーリーの軌道を地球から逸らせる『アトラス』作戦を拝命した。一方、地球では「神の声を受け取った」とする宗教団体クリスラム教が、カーリーの衝突を前に月の裏側の送信機から仮想現実技術を使ってシリウスに自分たちを送信し、永遠の命が得られるとなると喧伝していた。準備が整ったゴライアス号はカーリーとランデブーし、小惑星対策用に設計されたマスドライバー『アトラス』を設置した。アトラスの推進力によってカーリーの軌道を変えるはずだったが、クリスラム教の工作により、アトラスの推進タンクを破壊されてしまう。作戦を遂行する手段を失ったかに思えたが、ゴライアス号のセントラル・コンピュータ、デイヴィットによってゴライアス号の推進力をマスドライバーの代わりに利用することが提案された。

(引用部はここまでとする 一宗教的狂人たる手合い、シリウスを崇めるような類が人類の破滅を確定させんとしていることを描いている作品でもある 『神の鉄槌』あらすじにまつわっての引用部はここまでとする 一)

次いで、クラーク小説内で[アトラス]との名称を付されているマス・ドライバー(惑星外に向けて物品を射出輸送するとの巨大機構)というものが[加速器]と相通ずるものであることについてであるが、同じくもの点に関しては長大な本稿にての前半部、にあつての

[出典(Source)紹介の部 26 との典拠紹介部]

で基本的な事柄として紹介している (: 別個に[巨大な円形のレール上を回りながらレールガンの原理を利用して加速し、第一宇宙速度に達した時点で発射用のレールに入り打ち上げられる。この方法は約 2000G の加速度がかかるため精密機器を除く物資の輸送に使われるものと思われる]と いった言われようや[レールガン (Railgun) とは、物体を電磁誘導 (ローレンツ力) により加速して撃ち出す装置である]と いった言われようを引用なしたりしながら、である)。

であるから、疑わしきにあつてはその部の内容を確認されたい ー 端的に述べれば、物品を加速・射出するマス・ドライバー Mass Driver とはレールガン[電磁投射砲]と同様の作用機序(ローレンツ力 Lorentz Force ローレンツ力を応用しての作用機序)で動いているとのものともなり、となれば、粒子を加速させ軌道を曲げるためにそちらローレンツ力を用いているとの加速器 Particle Accelerator と同一の機序で動いているとのことである

(簡条書き表記を続けるとして)

・アーサー・クラークの小説『神の鉄槌』がマス・ドライバーのアトラス、すなわち、[加速器に通ずるもの]であるアトラスによる地球救済を描く作品であることは直前言及したとして、である。反対話法の問題として次のようなところが当然に(本稿の従前内容

から) 想起されるとのことがある。

i. (本稿にての既述事項として) 小説『神の鉄槌』の刊行一年前の 1992 年に CERN (欧州原子核研究機構) 関係者らが未だ正式始動していなかった LHC 建設計画に関わるものとして ATLAS との名称を決していたとのことがある。そして、後に LHC の一部をなすものたる検出器 ATLAS にて [極微ブラックホール] (実験関係者ら曰く科学の進歩に資する即時蒸発を見る安全な極微ブラックホール) らが [観測] されるとの可能性が「ここ 10 数年にあって」前面に押し出されるようになったとのことがある (本稿前半部 [出典 \(Source\) 紹介の部 35](#) にて CERN の公式サイトの内容を挙げて紹介してきたことや本稿前半部の摘示事項らを参照のこと)。

ii. 小説『神の鉄槌』でマス・ドライバーのアトラスにてその衝突阻止が企図されているとのカーリーとはインドのヒンドゥー教における女神カーリーの名から採られており、女神カーリーの本来の語源は [黒きもの; the black one] であるとの説明が広くもなされているとのことがある (目立つところでは例えば、英文 Wikipedia [Kali] 項目にて “ **The name Kali comes from kāla, which means black, time, death, lord of death:** Shiva. Since Shiva is called kāla - the eternal time- the name of kāla, his consort, also means "Time" or "Death" (as in "time has come"). [. . .] Kālī is the feminine form of kālam ("black, dark coloured"). ” 「カーリーとの名はカーラ (Kala)、[黒][時間][死][死の君主]との意味合いを持つ同語に由来している。 (ヒンドゥーの主要神格の) シヴァが [永遠なる時間] とのカーラと呼ばれているがゆえに彼シヴァの配偶者であるカーリーもまた (来るべき時にあっての) [時間][死]とも言われているのである … (中略) … Kali は黒・暗色を呈したとの意味合いの語 kālam の女性形でもある」 (訳を付しての掻い摘まんでの引用部はここまでとする) との記載がなされているところである)。他面、小説『神の鉄槌』にてマス・ドライバーのアトラスは同作作中にて [シリウスと意思疎通している] [シリウス人がもうすぐ人類を高次の世界にいざなってくれる] との妄信を [脳機序拡張装置] (作中、[ブレインマン] と呼称される非侵襲性、すなわち、メスを用いないで着脱可能なブレイン・マシン・インターフェース (ブレイン・マシン・インターフェースが何たるかは本稿にての先立っての段で解説なし) のことを指す) を介しもして抱いている人類最大のカルト宗教にて爆破破壊されることになるとの描写がなされる (上に引きもした「現行の」和文ウィキペディア [神の鉄槌] 項目よりの引用部、その後半の箇所を参照のこと)。さて、[シリウスを奉ずるカルト宗教] との点についてはシリウスが [その伴星がブラックホール提唱の端緒となった天体] となっている —— シリウスとブラックホールの関係についての典拠については「不快極まりないフリーメーソンの象徴体系とも通ずるところとして」本稿 [補説 3](#) の部にて膨大な出典情報 (e.g. [出典 \(Source\) 紹介の部 96](#) にての Empire of the Stars Friendship, Obsession and Betrayal in the Quest for Black Holes (邦訳版タイトル) 『ブラックホールを見つけた男』などの内容) を提示している —— とのことがあるために 【 **[その伴星 (シリウス B) がブラックホール提唱の端緒となった天体] を奉ずるカルト宗教** 】 と言い換えられることができる。純記号論的に、である。まとめれば、小説『神の鉄槌』とは [**【黒き者**] と同

じ意味合いの存在(小惑星カーリー)に由来する災厄を【アトラス】(と名付けられたマス・ドライバー)で避けようとしたが、【そちら伴星がブラックホール提唱の端緒となった天体(シリウス)】を奉ずる「ブレイン・マシン・インターフェースで脳拡張なされた」カルト宗教成員の妄動によって【アトラス】が(人類の危機的状況にあって)爆破破壊されることになった]とのことを描く作品ともある(いいだろうか。[アーサー・クラークの【2077年と9月11日を結びつけてのやりよう】が関わるところの七〇年代小説『宇宙のランデブー』にあっての破壊的小惑星体の地球接近]をモチーフとしている1993年作品でそういう設定が採用されているのである)。

iii. 本稿のこここれに至るまでの流れとあわせて上記の i. 及び ii. のことを把握なせば、何が[危険なる寓意]と相通ずるところなのか、分かつものとは思うのだが、一応、述べれば、次のことが問題になる。

「本稿の主軸となる指し示し事項は「どういわけなのか」[911の予見事象]から[ブラックホール生成をなしうると近年、主張されだした加速器実験]に至るまでに共通の命名規則 — [アトラス]に関わるところの共通の命名規則 — が揃い踏みで相互に連関をなすように伴っているとの[事実]そのものとなる。さて、アーサー・クラークの小説『宇宙のランデブー』は「2077年9月11日の悲劇なる事態 — 先立ってそれが何故、911の予見描写としての意味合いを持つかについて解説なしてきたとの事態 —」と「スペース・ガード計画なるもの」が結びつけられて小惑星衝突に対する対処策が描かれている作品となるが(といった描写がまた90年代の現実世界でのスペースガード構想とも結びついているとのことが知られている作品となるが)、同クラークの小惑星衝突を描いた90年代に入ってから別の作品(『神の鉄槌』)では加速器と同様の機序を具現化したマス・ドライバーである【アトラス】が重要な意味合いをもって持ち出されている。ここにて「も」【911の予見事物と加速器関連事物とアトラスの関係性】が見てとれるようになっている(問題はそれが[偶然による一致]か[恣意的な示唆行為]なのかであるとしつつものこととしてそうした関係性が見てとれるようになっている)」

(箇条書き表記の部は以上とする)

ここまででもってして

【アーサー・クラーク小説に見る (20)[77]との数値と [9月11日] の結びつき】 (【77と911の結びつき】については *Adrift Just off the Islets of Langerhans : Latitude 38°54'N, Longitude 77°00'13W* 『北緯38度54分、西経77度0分13秒 ランゲルハンス島沖を漂流中』という作品にまつわたる(ここでの)本筋たる訴求事項で取り上げもした【911と77の関係性】が「その他の側面で」いかに異様異常に問題となる式で具現化しているのかを示すためであった)

からさらに進んでいかなることが指摘できるのかについての箇条書き部(最後の箇条書き部は i. から iii. と細分化させての表記をなしもした)を終えるとして、である。さらに以下のこと、指摘しておくこととする。

1992年に原著刊行されての科学読み本、*Cosmic Wormholes: The Search for Interstellar Shortcuts* (邦題)『タイムマシン — ワームホールで時間旅行 — 』にあっては

[2001: A Space Odyssey 『2001年宇宙の旅』の劇中に「銀河間の異動を可能にする宇宙の関門であるスターゲート(宇宙空間のモノリス内部に展開する内的世界)が登場する]

とのことへの言及がなされている。そして、同じくもの著作 (Cosmic Wormholes: The Search for Interstellar Shortcuts) にあつては上に見る、

[(モノリス内部に展開する) 時間と空間が入れ替わったスターゲート]

に関してそれが [ブラックホール特性] と結びつくとの指摘がなされている (: 解説は先の段に譲るが、そちら描写は次の指摘に関わるころのものである ⇒ (以下、物理学者ポール・ハルパーンの著作の邦訳版 『タイムマシン ——ワームホールで時間旅行——』 p.9 から p.12 より再度の掻い摘まみでの引用をなすとして) “アーサー・クラーク原作、スタンリー・キューブリック監督の「2001年宇宙の旅」は、月旅行よりも冒険に満ちた宇宙間旅行を知りたいという一般の人々の想像力をとらえた。何百万の観客がこの画期的な映画を見、空間を巡り時間を旅することに想像を馳せ、驚嘆し、信じられないほど当惑もした。映画は原始人が道具を使用するとして 最初の試みから始まる。そして、突然、話は未来(2001年)にとぶ。そこでは、人間の発明した道具として、棒きれと尖った石にかわって、コンピューターと宇宙船が登場する。月面基地で、木星の衛星から送られてきた不思議な信号を受信する。科学者は、その奇妙な現象を調べるために急遽調査船を組織する。…(中略)… ボーマン船長は木星の近くで宇宙船が運転不可能になってしまったのち、小さな宇宙船に乗ってその巨大な構造物にむけて進入していく。驚くべきことにその内部は空洞であつて、たくさんの星が輝いているのである。えたいの知れない流れによって彼はモノリスに引き込まれ、ついには時間と空間の入れ替わった領域に到達する。そこでは、空間の中を高速で移動するが、時間はまったく変化しないのである。かれがその奇妙な世界を進んでいくにつれ、彼のもっていた時計は次第に進み方が遅くなり、ついには止まってしまう。…(中略)… ボーマンは銀河間の異動を可能にする宇宙の関門であるスターゲートを通過したのである。クラークの物語にしたがえば、この壮大な構造物は宇宙のはるかかなたに住む高度な知性をそなえた生命が星間空間旅行を高速化するために作り上げたことになっている。ボーマンは自分の時計がほんの数分進む間に、何十兆 km の距離を旅したのである” (引用部はここまでとする / 尚、引用部では劇場版のことが目立って引き合いに出されてはいるが、問題となる時計停止に見る時間と空間の逆転描写 —それがブラックホール特性と結びつくとされる描写となる— は小説版に具現化しているものである) との表記が同じくものことに関わる部となる)。

ここで述べるが、ブラックホールとの接続性を伴う作品と指摘される (こと、直上言及の) アーサー・クラーク 『2001年宇宙の旅』 に関しては同作との近似性 (際立つての共通点) を伴った作品として、

The Sirens of Titan (邦題) 『タイタンの妖女』 (1959 / その著名性の問題も含めて先立つ段にあつて解説してきた【米国文壇を代表する現代アメリカ文学の旗手との評価を伴うことになった大御所作家】であるカート・ヴォネガットの筆業初期の折の佳作とも評される作品)

のことを本稿 **補説 1** と振つての段で問題視していたとの背景がある。

具体的には下記の観点での **The Sirens of Titan (邦題) 『タイタンの妖女』 と 2001: A Space Odyssey (邦題) 『2001年宇宙の旅』** との接続性について本稿の先だつての段では詳説をなしもしていたとのことがある。

(以下、委細を先行する段に譲っての『タイタンの妖女』と『2001年宇宙の旅』との間の共通点として)

1. 『ザ・サイレンズ・オブ・タイタン(タイタンの妖女)』および『2001年宇宙の旅』の両作ともども「土星(英語表記 Saturn) 界隈へのスペース・ミッション」が作品主題となっている。
2. 両作『タイタンの妖女』『2001年宇宙の旅』ともホメロス古典『オデュッセイア』と「濃厚に」結びついているとのことがある。
3. 両作品共々、「土星の衛星に深くも通ずる人類操作にあつての遠大な目標」が作品主題となっているとのことがある。
4. 『タイタンの妖女』『2001年宇宙の旅』両作品共々、「時空間の縛りを無視する能力を獲得するに至った超人」が作中にて重きをなし、また、彼ら「時を超越した」あからさまなる「超人」らが遠大な人類操作プラン — 土星の衛星に関わるところの遠大な人類操作プラン — に重きをもって関わることになる(使嗟(しそう; 使役)されるとのかたちにしき式で関わることになる)とのありようが描かれている作品となっている。

以上のような式で、である。数々の伝説を産んだ作品「でも」ある『2001年宇宙の旅』という作品(その映画化版はあまりにも精巧にできていたため、アポロ計画の捏造映像なるものをその力量を買われて同作監督スタンリー・キューブリックが製作していたのだといった陰謀論をも産むことにもなった作品)と同作に先行するカート・ヴォネガットの **The Sirens of Titan** (邦題)『タイタンの妖女』(1959)の間には【際立っての類似性】が見て取れるわけではあるが、そうした類似性を呈しての『タイタンの妖女』との作品がどういう作品かと述べれば、本稿の補説1と振っての段にて仔細に解説してきたところとして以下のような観点で問題視してきた作品ともなる。

・後にてのカート・ヴォネガットの作品ら、

Slapstick 『スラップスティック』(1976)

Cat's Cradle 『猫のゆりかご』(1963)

の両二作にあつて

[加速器によるブラックホール生成]

[加速器による破滅的リスク]

と相通ずるようになっているとの側面がはきと伴っている(際限なく紙幅が厚くなること、また、本稿筆者の時間的制約もあつて委細は本稿にての補説1に譲るが、

Slapstick 『スラップスティック』(1976)にあつては【世界的重力増大状況】なる異様なフィクション設定が【ロックフェラーに由来するニューヨーク・マンハッタンの子双子】(かのツインタワーもロックフェラーに由来するニューヨーク・マンハッタンの子双子であると先んじて解説している)の結合過程なるものと結びつけられていることがあり、また同じくもの【双子の結合過程】なるものが【幽冥境にしての加速器を介しての融合】との式で描かれ、かつ、それが【黒死病(ブラック・デス)に似た語感の緑死病の原因の捕捉】に通じているなどとも(普通には『どうしてこのような異様な作品設定が出てきたのか?』との流れの中で)描写されている。一言表記する分にはややこしいこと限りなしと響くかもしれないが、整理して端的にまとめれば、【加速器を介しての融合

プロセス】【世界的重力規模の増大】【黒死病(英語表記;ブラック・デス)と似た緑死病なるものの原因特定】が【(ツインタワーを想起させる)双子の結合】と結びつけられているとすることがありもし、であるから、【加速器を介しての重力の増大と通ずる黒きブラックホールの生成】の問題が想起されるということである——※尚、これまた本稿にあっての指し示し対象となっているところとして加速器によるブラックホール生成が観念されるようになったのは21世紀にさしかかっている折からだが、ヴォネガットの不自然極まりないひ表記の通りの内容の小説 **Slapstick『スラップスティック』** が世に出たのは1976年であるから問題になる——。他面、**Cat's Cradle『猫のゆりかご』(1963)** に関しては後の加速器リスク問題議論にあって1999年からまさしくも問題視されだした【アイスナイン】との破滅的事態を指す特殊用語の提供元作品となっているとことがある、アイスナインとの言葉を造語は、そも、ヴォネガットが **Cat's Cradle『猫のゆりかご』** にあって架空の物質アイスナインを生み出したことに求められもしている——※に関しては、(従前の段で細やかに引用なしつつ)、ストレンジレットという仮説上の物質によるコアレスンス作用(引きつけ作用)の破滅的具現化を物理学者フランク・ウィルチェックが1999年にヴォネガット小説に見る作中設定から拝借したのが【加速器リスクがアイス・ナイン(という語)との結びつき】のそもそのなれそめであるとのいいようがなされている(ただし、アイス・ナインについてはアイス・セカンドといった語句で改変・茶化されながら日本の相応の「ブラックホール爆弾をテーマにした」アニメ作品、オタクと呼ばれるような人種が好みそうなアニメ作品(かのエヴァンゲリオンシリーズを製作した制作会社によるアニメ作品)で80年代末葉よりアイス・セカンドとの式で登場を見ている語句であることをも本稿筆者は特定・捕捉している)——)。

そうもした後に続く同じくもの作家(カート・ヴォネガット)の手になる予見的側面と結びつく作品と結びつく『タイタンの妖女』がどういう作品かと述べれば、一本稿の従前の段、**補説1**と振っての段にあって原著および訳書よりの原文引用をしながら細かくも紹介したことではあるが—、

【人類の文明は特定の目的に沿うように根本から機械知性に操作されたものであったとの設定を伴っている】

【(上に見る)人類文明操作育成の目的とは木星の衛星タイタンに停留停滞することを強いられた外異星系の機械知性に[宇宙船再始動のための代替部品]を届けることであると描写されている】

【そして、(上に見る)宇宙船再始動のそもその目的は(作品末尾にて茶化すように言及されていることとして)黒ポチひとつ—ドットマークひとつ—よりなる親書を他星系に届けるためだけであったとの設定を伴っている】

との作品となる(にまつわっては【加速器にてブラックホールが生成されてそれが蒸発しない場合、そして、地球全体がブラックホール化を見た場合、半径1cmメートル程の中規模ブラックホールになる】とのことが気がかりなところとしてあるとも本稿では先述している——※地球がブラックホール化した場合のシュヴァルツシルト半径(ブラックホール境界領域)が一センチとされていることを解説しつつ、作家ヴォネガットの「他の」先覚的予見小説の加速器実験と奇怪に結びつく内容を問題視、また、ヴォネガットの『サイレンの妖女』それ自体が同作と結びつく『2001年宇宙の旅』の人間の超人類への進化の描写が【ブラックホール】と結びつくとの指摘が別個になされているとのこと「をも」問題視し、何故、'こと'が気がかりなのかとの説明をも本稿の先行する段では事細やかになしている——)。

・さらに加えて『タイタンの妖女』との作品はカート・ヴォネガットの後続する作品

(最後の作品とも位置付けられている作品)である『タイム・クエイク』と記号論的に結びつきもしながら、

【911の事件の予見的言及】

とも接続する側面を帯びている(これまた本稿の補説1と区分付けての従前セクションにて仔細に解説をなしてきたところとなる)。であるから、『タイタンの妖女』が『2001年宇宙の旅』と結びつく(最前にて呈示の各点によってはきと結びつく)とのことは『2001年宇宙の旅』をものしたアーサー・クラークやりよう(ブラックホール人為生成の問題ともかかわる)【911の予見的性質】がみとめられることから関係性の多重度合いとの観点で—【恣意】か【偶然】かの判断にあつて—まったくもって予断を許さない、というより、【人類(筆者含む人類全体)にとって絶望的な悪質なやりよう】と関わっていると容易に判じられるようなものとなっているものでもある。

・「さらに」に「さらに」を加えもして述べれば、カート・ヴォネガットの『タイタンの妖女』との作品は—本稿にての補説1の段および補説2の段にて詳述をなしているところとして—米国科学界のオピニオン・リーダーとの立ち位置にもあったカール・セーガンの『コンタクト』という著名なハードSF作品と純・記号論的に結びついているとのことがある。そして、そこに見るカール・セーガンの『コンタクト』との作品がどういう作品かと述べれば、

【普通に読むだけでは気づけない(というのもかなり込み入ったの神話的知識と地理知識が要されるところだからである)、だが、指摘されればそれとはきと分かりもしようとのかたちで【トロイア崩壊】とも結びつく反対話法が多重的に込められている作品】

であり(尚、トロイア崩壊の寓意とのことについては【ブラックホール生成問題に通ずる「実験」機関命名規則】とも【911の予見的言及】とも結びつくことを本稿で縷々(るる)細かくも解説してきたとの黄金の林檎が関わる場所となる)、

【地球上にブラックホールないしワームホールを[ゲート]として構築するとの内容を主たる筋立てとしている作品】

であり、かつもつてして、

【奇っ怪な911の予見的文物でもある物理学者キップ・ソーンの手になる科学読み本『ブラックホールと時空の歪み』の内容とダイレクトに関わる作品】

ですらある——『ブラックホールと時空の歪み』との科学読み本に見る予見的ありようは、そも、メディア露出型天体物理学者としても名声を博していたカール・セーガンが『コンタクト』を執筆する際に友人の物理学者キップ・ソーンに求めた科学的助言に関するセクションで具現化を見ているとのこと、本稿の先行する段では事細かに解説しているとのことがある——。

以上、簡条表記してきたような式で実に「芳しい」(と述べれば皮肉としても不謹慎であるから「悪臭ふんぷんである」と表した方がいいかもしれないが)『タイタンの妖女』との作品と『2001年の宇宙の旅』との結びつき関係がゆえに、

【ブラックホール関連文物】

【911の予見的言及】(などという不可解なるもの)

が多重的に結びついていると本稿では誤解おそれずに明言しているのである。

そして、これまた先の段にての訴求事項の振り返り表記として述べもするところとして、である。以下のようなことがあるからこそ、関係性の多重性度合いが 一人間存在の置かれた状況は待たなしのものとするところとして— いよいよもって露骨であると本稿筆者としては(当然に)指摘する次第なのである。

2001: A Space Odyssey『2001年宇宙の旅』の[続編]として小説にあっては映画化されもしている1982年初出の作品2010: Odyssey Two『2010年宇宙の旅』が世に出ている。前作『2001年宇宙の旅』映画版の方が小説版の方より遙かに盛況を博したとの事情あつてのことかとは思われるのだが、そちら『2010年宇宙の旅』では前作『2001年宇宙の旅』の行き先が(旧来小説版の土星から)[木星]へと変更されもしている— 従前の部で英文 Wikipedia などより言及のなされようを引いたところでもある— のだが、そうもした同作2010: Odyssey Two『2010年宇宙の旅』では(前作ディスカバリー号の行き先として描写される)木星がモノリス(作中にて人類の始祖たる半ばもってしてのサルをヒトに進化させたとの設定の石柱状の異星文明由来の構造体)の蝟集によって黒くも侵蝕されていき、によって、[ルシファー;Lucifer]との真天体が誕生する様子が描かれている。

さて、そちら小説2010: Odyssey Two『2010年宇宙の旅』は[ブラックホール]のことを以下の事由らから想起させるもの「でも」ある。

第一。

ヴィジュアルの問題。疑わしきにあつては Peter Hyams (ピーター・ハイアムズ) という映画監督が撮った映画版(英語原題では『2010』とだけタイトル付けされている1984年に封切られての映画版2010: Odyssey Two『2010年宇宙の旅』)をレンタルするなりして見てみれば理解いただけるであろうが、そこでは星(木星)がブラックホールを想起させるような式で黒くもなつて喰われていくありようが生々しくも描かれている。

第二。

これが大きい。国内の著名作家としての小松左京(物故者)が世に出していた作品として、

[地球に接近しつつあるマイクロブラックホールを木星の爆破によって防ぐとの筋立てが具現化している]

との『さよならジュピター』との作品がありもし、同作では[木星の恒星化]とのプランもが作中にて取り上げられている(:和文ウィキペディアに[さよならジュピター]項目にあつての現行表記として(以下、引用なすとして) “あらずじ: 西暦2125年、太陽系外縁の開発に着手していた太陽系開発機構(SSDO)は、エネルギー問題の解決と開発のシンボルとして、2140年の実現へ向けて「木星太陽化計画」(JS計画)を進めていた。その前線基地であるミネルヴァ基地で、計画主任・本田英二は長らく音信不通だった恋人マリアと再会を果たす。彼女は過激な環境保護団体「ジュピター教団」の破壊工作グループのメンバーとなっていた。英二は宇宙言語学者ミラセント・ウィレムに協力し、木星探査艇「JADE-III」で数万年前に太陽系を訪れた宇宙人の母船「ジュピターゴースト」の探査を行う。一方、英二の友人であるパイロット・キンと天文学者・井上を乗せて彗星源探査に向かっていた宇宙船「スペース・アロー」が謎の遭難を遂げる。計画責任者のマンスールの調査の末、原因はマイクロブラックホールとの接触によるものであり、しかも太陽に衝突するコースをとっている事が判明する。太陽系を救う方法はただ一つ、木星太陽化のプロセスを応用して木星を爆発させてブラックホールに衝突させ、そのコースを変更する事

だった”（以上引用部とする）とあるとおりである。

同作『さよならジュピター』は「全くもって奇しくもか」あるいは、さにあらずんば、「一群の（機序不明瞭にもの）傀儡クグツ化人間らの無意識的操作によるマスメディアの具現化としての必然なのか」との按配で[1984年]との折柄、Peter Hyams（映画監督ピーター・ハイアムズ）がメガホンをとった映画『2010』の映画封切りと同年度のその1984年との折柄にかなりもの予算をかけての邦画として封切られたとの[映画化作品]ともなっているのだが、その書籍としての初出自体は82年であり、また、そのアイデアとしての初出は70年代末葉に遡ると言われている（きっちりと[Publication date 1982]との表記をも含む英文 Wikipedia[Sayonara Jupiter]項目にあつて現行、“ Sayonara Jupiter (さよならジュピター Sayonara Jupiter) is a novel by Sakyō Komatsu, released as two volumes. Komatsu adapted the story into the script for the **1984 film** of the same name, directed by Koji Hashimoto.”と表記されているところとなり、またもって、和文 Wikipedia[さよならジュピター]項目にて（以下、現行にての記載内容を引用するところとして）“ **1979年半ばにシナリオの初稿は完成**。併せてアメリカでの著作権登録も行った。これは、初稿が上映時間3時間を越え、外国人俳優数百人を要するというスケールの大きさから、小松がアメリカとの合作も視野に入れたためである。後に現実にアメリカの映画会社から原作を買い取りたいという申し出があつたが、アメリカ人を主演とし、小松を制作には関与させないという契約条件で、合作ではなくアメリカ映画として制作するというものだったため、小松が断つたという逸話がある”（引用部はここまでとする）と記載されているところでもある——1979年のシナリオ初稿完成との表記ウィキペディア記述の典拠としては[『東宝特撮映画大全集』ヴィレッジブックス、2012年、204 - 207頁]とのソースが現行にては挙げられている——）。

問題は、である。アーサー・クラークの2010: Odyssey Two『2010年宇宙の旅』（1982年初出）にあつても小松左京のそれに先行するところと解されるところの『さよならジュピター』にあつても目立って[木星の恒星化]が描かれているとのことである（英文 Wikipedia[2010: Odyssey Two]項目にての（以下、「再度の」引用なすとして）“ The Leonov crew flees Jupiter as the swarm of monoliths spread to engulf the planet. **By acting as self-replicating 'von Neumann' machines, these monoliths increase Jupiter's density until the planet achieves nuclear fusion, becoming a small star.** ”（訳として）「劇中、主人公たるフロイドが乗り込んだソ連の宇宙船たるレオーノフ号のクルーらはモノリスの大群が惑星を覆い尽くすとの局面にて逃げることになった。といった中、[自己複製フォンノイマン機械]と化してのモノリスらが核融合を起こして恒星化するまでの密度を呈するまでに木星の密度を増さしめていた」（再度の引用部はここまでとする）との記述と和文 Wikipedia[さよならジュピター]項目の（以下、「再度の」引用なすとして）“ あらすじ：西暦2125年、太陽系外縁の開発に着手していた太陽系開発機構(SSDO)は、エネルギー問題の解決と開発のシンボルとして、2140年の実現へ向けて「木星太陽化計画」(JS計画)を進めていた・・・(中略)・・・一方、英二の友人であるパイロット・キンと天文学者・井上を乗せて彗星源探査に向かっていた宇宙船「スペース・アロー」が謎の遭難を遂げる。計画責任者のマンスールの調査の末、原因はマイクロブラックホールとの接触によるものであり、しかも太陽に衝突するコースをとっている事が判明する。**太陽系を救う方法はただ一つ、木星太陽化**

のプロセスを応用して木星を爆発させてブラックホールに衝突させ、そのコースを変更する事だった”（「再度の」引用部はここまでとする）との記述の複合検討でも容易に分かるところとなっている）。

世界的 SF 作家であるアーサー・クラークの作品とクラークに先行していたと解される・見えるところの国内 SF 作家大御所の小松左京の作品らの中の剽窃・被剽窃の現れ（あるいはリスペクトの先後関係とでも言うべきか）ぐらいにしか[程度の低いところ]では着目されないことかとは思いますが、問題はそのようなことにはない。[ブラックホール]が主要結節事項となっていることこそが問題になるのだ（小説『さよならジュピター』では木星の恒星化計画がかねてより進んでいた中で地球に接近するマイクロ・ブラックホールの影響を避けるために木星の恒星化が計られたと描かれる。他面、初出時期では『さよならジュピター』に後続するとも解されるところの『2010年宇宙の旅』では「モリスの蝟集の後、木星が黒くも浸食されてルシファーという名の新・恒星となる」との筋立てが具現化を見ている）。

第三。

アーサー・クラークの小説『2010年宇宙の旅』では木星が（人間に知性を与えた存在でもあるモリスらに蝟集される中で）黒くも喰われ、（核融合を起こすほどに密度増大を見ている中で）誕生したと描写される新天体の名がルシファーとなっている。ルシファー。本稿の先だつての段——出典（[出典\(Source\)紹介の部 55](#)から[出典\(Source\)紹介の部 55\(3\)](#)を包摂する段）——でそちら証示に努めてきたところとして著名古典ダンテ・アリギエーリ『地獄篇』およびジョン・ミルトン『失樂園』にあつてはそのまましくものルシファーに関わるところとして

[ルシファーに由来する領域]

[地獄門の先にある領域]

にあつて

[今日的な意味で見た場合のブラックホールの質的近似物]

が露骨かつ多重的に具現化を見ているとのことがある（同じくものことからさらにもって何が述べられるのかは続いての[補説 2](#)および[補説 3](#)の部の主要テーマともするところだが、とにかくも、[出典\(Source\)紹介の部 55](#)から[出典\(Source\)紹介の部 55\(3\)](#)を包摂する従前内容を参照されたいものである）。

これにて

【ブラックホール関連文物】

【911の予見的言及】（などという不可解なるもの）

との二点に関わるところの作家アーサー・クラーク作品についての解説部を終えることとする——※尚、立論の流れについて振り返り表記をなしておくが、そうもしての解説セクションに入った背景としては【ブラックホール人為生成の異様な予見的言及】をなしている作品として問題視してきた **Adrift Just off the Islets of Langerhans:Latitude 38°54'N,Longitude 77°00'13W**『北緯 38 度 54 分、西経 77 度 0 分 13 秒 ランゲルハンス島沖を漂流中』という作品が【911の予見的性質】「をも」帯びていることに関して【77と911の繋がり合い】という側面について問題視をなしていた、そのこと（【77と911の繋がり合い】）がアーサー・クラーク作品にも関わるとのことを解説に入ったことがおおよその背景としてある（そうもした流れから押し広げもして何が述べられるのかについて突き詰めていたのがここまでの枠内表記部となる）——。

直近最前までにて

【アーサー・クラーク小説群が何故もってして予言的側面を帯びているのか】

とのことにまつわっての微に入っただけの解説に力を入れもしてきたわけだが、そこから話を本題となるところに引き戻す。

([さらに補ってもの表記] の話を終えたとして本題となるところに話に引き戻すとして)

さて、ここまでの A. から C. の流れにて論じてきたこと以外に

Adrift Just off the Islets of Langerhans : Latitude 38°54'N, Longitude 77°00'13W『北緯 38 度 54 分、西経 77 度 0 分 13 秒 ランゲルハンス島沖を漂流中』(1974)

との実にもって長ったらしくもある (ということはそこに意味性具備の意図の問題も観念できもする) とのタイトルの作品が本稿にて主軸として問題視しもしてきたとのこと、すなわち、

【ヘラクレスの計 12 に及ぶ功業】、【(ヘラクレス第 11 功業に見る) 巨人アトラス】、【トロイア崩壊伝承に見るトロイア崩壊の原因たる(他伝承では巨人アトラスが在処を把握するとされる) 黄金の林檎】、【巨人アトラスともトロイア崩壊元凶たる黄金の林檎とも史的に(一部識者によって) 結びつけられてきたとのアトランティス沈没伝承】、【アトラスやアトランティスといった固有名詞を付されての LHC 実験におけるブラックホール生成論議に関わる事物】との要素らのうちの「複数」を特色として帯びつつ、かつ、【911 の事件の発生(態様)にまつわる予見的言及】ないし【ブラックホール人為生成問題にまつわる「先覚的言及」】の一方、あるいは、その双方をなしているとの文物らが「不可解に」存在している]

とのことと結びつくと解される論拠については(さらにも話を深化させて) 直下指し示すが如きこと「も」あるとのこと、解説する。

小説 **Adrift Just off the Islets of Langerhans: Latitude 38°54'N, Longitude 77°00'13W『北緯 38 度 54 分、西経 77 度 0 分 13 秒 ランゲルハンス島沖を漂流中』(1974)** にあつては同作主人公のロレンス・タルボットというキャラクターが

【ギリシャ神話の女神デメテル Demeter の名を冠する者であると作中それ自体からして明示されている存在】

から、(時を超克した存在とも示唆されるそちらキャラクターとアポイントを取って面会した折に)、

【魂の座標へと至る道についてのヒント】

を聞き出すに至り、その結果、

【15 兆電子ボルトが出せるとの架空の円形加速器を運用する CEERN (CERN ではない) に由来するレーザー装置で自らを縮退させての分身を造り出して【黒々と渦を巻く底無し of 臍(へそ)】にその分身を送り込んで自己の魂に引導を渡す】

との挙動が(主人公ロレンス・タルボットの挙として) 実行に移されると描かれている。

そこにみる【主人公に魂の座標への案内をなしたとの存在】、すなわち、

【加速器運営機関(往時の CERN のそれに比して 200 倍も今日の LHC の出

方に近いとの加速器を時期的に奇怪にも言及しているとのこと、論拠を挙げて詳述してきたとの架空の加速器運営機関(CEERN)のレーザー発射装置で自らを極小化させる挙動に出る[契機]を与えたとの存在]

が[デメテル(というギリシャ神話女神)の名を冠する存在]となっているとの一事より、

[ヘラクレス 12 功業のうちの第 11 功業と第 12 功業]

のことが想起されるだけの理由が、またもってして、ある。

上記のことにあつて鍵となるのは【ケルベロス】という怪物であり、また、【ペルセポネ】という女神である。その点もってして、本稿の先の段、具体的には補説 3 と銘打つての先の段にあつての出典 (Source) 紹介の部 91 から出典 (Source) 紹介の部 94 (7) を包摂する解説部にて詳述に詳述を重ねてきたところとして

[【デメテル】というのはその娘にあたる【ペルセポネ】と[同一存在]であると学者らに見做されるだけの背景が伴っている女神である]

とのことを摘示・解説なししていた(何故、そのようなことを補説 3 の部で解説していたかはそうした話がまた別側面で【ブラックホールを巡る尋常一様ならざる先覚的言及】に関わるとの指摘がなせしめられるとあるからである — 詳しくは一気通貫としての流れをもつてしての摘示に努めての補説 3、同セクションをとおして参照いただきたいものである —)。

その本稿にての従前摘示内容、

【デメテル ← (質的同一存在との指摘が根強くある存在) → ペルセポネ】

という図式にも通ずるところとして往古、ギリシャ・ローマ期にかけて執り行われてきた秘祭にして会員制秘儀サークルの集いでもある[エレウシス秘儀]というものにあつては三柱の女神ら、

[デメテル・ペルセポネ・ヘカテ]

が主たる崇拝対象となっており、同エレウシス秘儀で

【デメテル (⇔ ペルセポネ)】

と共に崇められていたとの【ヘカテ】という女神について「も」【ペルセポネ】と複合的に同一存在であると述べられるような背景が伴っているとのことがある(先のセクションにあつての解説部では「ローマ期古典にあつては「女神【イシス】は女神【ペルセポネ】にして女神【ヘカテ】である」といった表記が「文献的事実」の問題としてなされている」といったことを詳述している — 本稿出典 (Source) 紹介の部 94 (3) にてローマ期古典として今日に伝わる『黄金の驢馬(ろば)』の内容を文献的事実として問題視している部や本稿出典 (Source) 紹介の部 94 (6) にて(オンライン上より確認できるとのソースを原文引用なしながら)紹介しているとのジェイムズ・フレイザーやトマス・ブルフィンチの(同じくものことについての)学業の世界での著名著作での解説(『ゴールデン・バウこと『金枝篇』や『ジ・エイジ・オブ・フェアブル』といった洋書らでの解説)よりの引用部を参照のこと —)。

(本稿にての補説 3 の段で挙げていたところの図解部らから【ここでの話と接合するもの】を掻い摘まんで再掲しておくこととする)

α**[Demeter = Persephone] (?)**

" Demeter would thus be the ripe corn of this year; Proserpine the seed-corn taken from it and sown in autumn, to reappear in spring. The descent of Proserpine into the lower world would thus be a mythical expression for the sowing of the seed; her reappearance in spring would express the sprouting of the young corn. Thus the Proserpine of this year becomes the Demeter of the next, and this may very well have been the original form of the myth. "

————— The Golden Bough In Two Volumes.Vol. I. (1894)
§ 8.— Demeter and Proserpine

本稿 [出典(Source)紹介の部94] にて呈示のようにデメテルとペルセポネの母子は
[穀物の成長の異なるフェーズの体現存在として本来的な意味での同一物(イコールの関係にある存在)]
であるとの指摘が学者より「ひとつの説明ありようとして」(in one account) なされてきたとの存在らである。

β**[Demeter — Persephone]
[Isis — Osiris]**

本稿 [出典(Source)紹介の部92] にて呈示のように [デメテルとペルセポネの関係を基軸に据えてのエレウシス秘儀] は [イシスとオシリスの关系到まつわる神話] と際立っての相似形を呈するものである。

γ**[Hecate = Isis = Persephone]**

本稿 [出典(Source)紹介の部94(3)] にて呈示のようにローマ期古典『黄金の驢馬(ろば)』にあつてはイシスがヘカテやペルセポネと同一物であるとの言及が古典それぞれの中にて [文献的事実] (philological truth) の問題として見受けられるとのことがある。

δ**[Demeter ⇔ Hecate]
[Persephone ⇔ Hecate]**

直前までの本稿 [出典(Source)紹介の部94(6)] にて呈示のように古代にての遺物に見る証言や近代著名文人の物言いにあつては [女神デメテル] やその娘 [ペルセポネ] ちと [ヘカテ] との同一性に言及しているとの下りが存在している (:ここではといた下りの厳密なる意味での黒白よりも [そうした物言いが蒼古としたものとして存在している] ことそれ自体、および、その背景を問題視している)

上記の α (アルファ) から δ (デルタ) のこたらが各々別個の分立しての論拠から導出できるようになっていること、そのことから示される多重性が関係性色濃さを表しているのを重んじているというのがこの話である。

再述するところとして【ペルセポネ】と同一視されもしてきたとの【ヘカテ】(という女神)が地獄の番犬【ケルベロス】と「純・記号論的に」密接につながっている存在となっているとのことが「ある」。

にまつわって、本稿にての補説3の部、の中にあつての出典(Source)紹介の部94(7)を包摂する部では——(最終的に【ペルセポネ】および【ヘカテ】および【ケルベロス】らの各存在と複合的に接合しているとのエジプトからのギリシャ・ローマ世界への渡来神たる[イシス]という女神にまつわる古典内記載が「どういうわけなのか」ブラックホール開闢理論と「奇怪無比なるかたちで」先覚的に結びついているとのことを詳説すべくも展開してきたとの話の中での出典紹介部として)——【ヘカテ】と【ケルベロス】らに

「双方、[三面構造]を持った存在である」

「双方、[犬]との属性と結びつく存在である」

「双方、[冥界]と関わる存在である(にあっては[冥界の番犬]と[辻々の番人]との両者性質が重なるようなところもある)」

「双方ともに毒物[トリカブト]由来と濃厚に結びつく存在である」

との結節点が伴っていることの論拠呈示を入念になしていた(表記再述の通りの明確化している類似ポイントがゆえに【ヘカテ】(【ペルセポネ】との接合性がこれまた指摘されている女神)と【ケルベロス】には際立っての近接性が「ある」とのことになっている)。

以上、従前の本稿摘示内容に基づいて指摘するが、

[(【デメテル ⇄ ペルセポネ ⇄ ヘカテ】とのコネクションと接合するところの)【ケルベロス】]

という怪物、有名なその【三面の地獄の犬】(逃げ惑う死者を喰らうとの番犬)は

【ヘラクレス12功業にての最後の功業にて冥界 —ペルセポネを女王として戴きハデスという神を主催者とするギリシャ神話の地獄— より地上に引きづりだされた存在】

となっているとの怪物「でも」ある —文献的根拠としては出典(Source)紹介の部90(3)などを参照のこと—。

(:さらに述べれば、【ケルベロス】との存在については

【人類にあつてのブラックホール理論の開闢史と結びついているとの特定の白色矮星(シリウスB)との相関関係が異常なる先覚性を伴って問題となる存在】

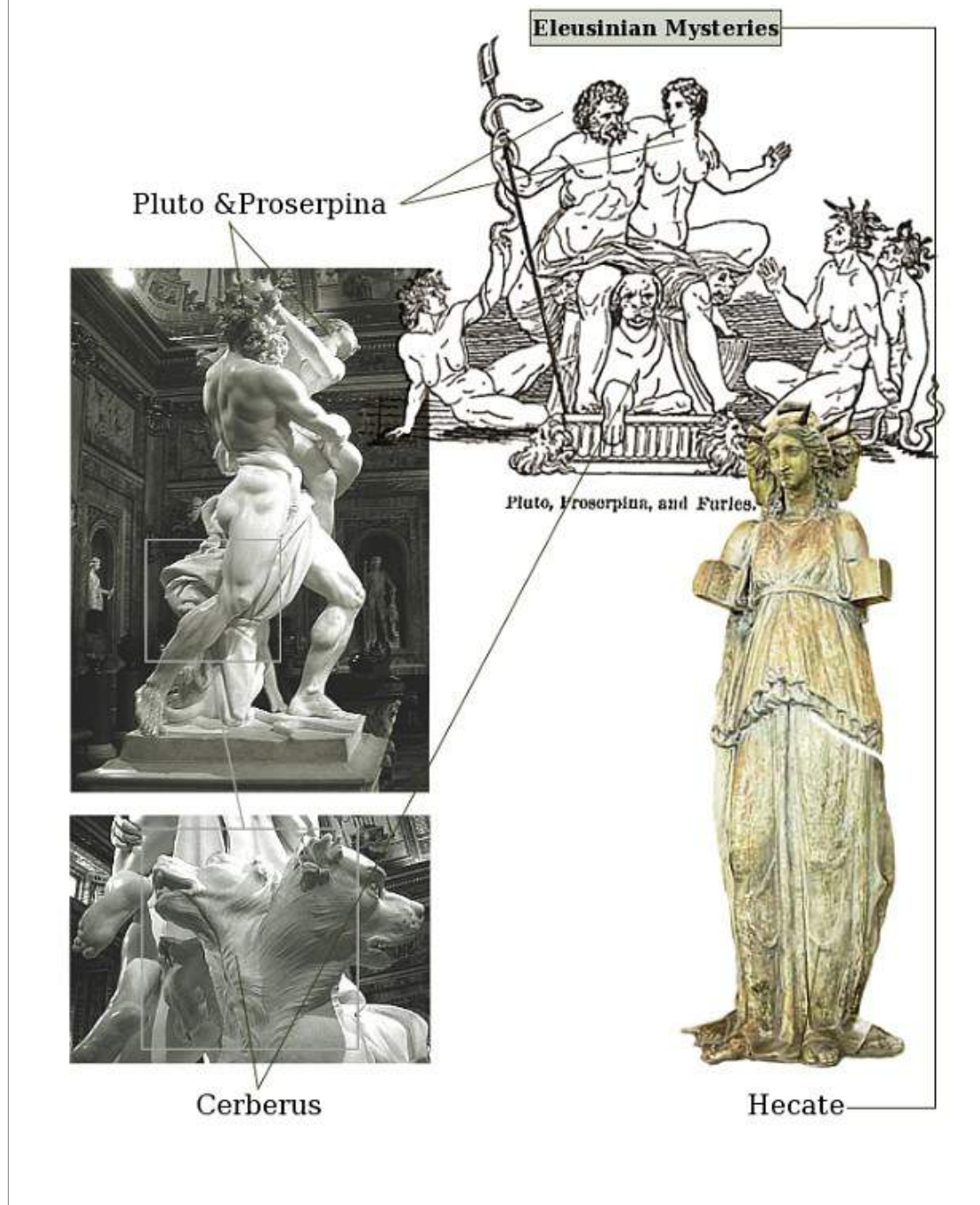
であると(ギリシャの女神【ペルセポネ】と同一存在とされてきたエジプトより伝来の女神【イシス】にまつわる古典記述も関係するところとして)一部論客によって問題視されるべくして問題視されているとのこと「をも」本稿にての補説3の部で詳述なしてきただけの背景がある —出典(Source)紹介の部95(8)以降の本稿にての(それ以前の部の内容を敷衍(ふえん、おしひろげ)しての)解説部を参照のこと—。

となれば、

『北緯38度54分、西経77度0分13秒 ランゲルハンス島沖を漂流中』

がブラックホール人為生成についての先覚的言及をなしている文物であるとのこととも —(『北緯38度54分、西経77度0分13秒 ランゲルハンス島沖を漂流中』にての情報提供者の名前)⇄【デメテル】⇄【ペルセポネ】⇄【ケルベロス】⇄【ブラックホール理論開闢とも通じている白色矮星シリウスBに対する先覚的言及と結びついているとの指摘がなされている怪物】との絡みで) — 話が接合してしまうこと「にも」なる)。

(ここ本段で問題視しているのは【先にての再度の図示部で指し示しもしているところ】であり、そして、【直下再掲図解剖にあつて両者共々がお目見えしている[ケルベロス]と[冥界の女王ペルセポネ]の関係性】である)



以上、[委細をせんだつての段に譲りもして再述しての記号論的一致性]の問題より、したがって、

「【デメテル】の名を冠する存在による、

[15兆電子ボルトが出せるとの架空の円形加速器を運用する
CEERN(CERNではない)に由来するレーザー装置で自らを縮退させての
分身を造り出して【黒々と渦を巻く底無しの臍(へそ)】にその分身を送り込
んで自己の魂に引導を渡す】との挙への誘導]

という挙は【デメテルと同一視されるペルセポネ】ひいては【ペルセポネおよびペル
セポネ同質物とされてきたヘカテと複合的に結びつくケルベロス(ヘラクレス12功業
の標的である三面の怪物)】による同じくもの挙への誘いと言い換えることができる」

ようになっていると申し述べもする次第である（くどくも強調したいことなのだが、同じくものは神話・言い伝えの伝のみに依拠しての純然たる記号論的変換(属人的解釈の類は話柄選択以外には作用していないとの純然たる記号論的変換)の問題にすぎない)。

そうもしたかたちで『北緯 38 度 54 分、西経 77 度 0 分 13 秒 ランゲルハンス島沖を漂流中』(1974) と【ヘラクレス 12 功業】の関係性が観念できるようになっている（既に申し述べているように[ブラックホール生成問題にまつわっての際立つての予見小説としての顔]を持つ『北緯 38 度 54 分、西経 77 度 0 分 13 秒 ランゲルハンス島沖を漂流中』(1974)に関しては[911 の先覚的言及作品]がかった側面もが伴っている一方でのこととしてそういうことが述べられるようになっている）。

出典 (Source) 紹介の部 112

SOURCE 112

(coordinates) 38.87099° N
77.05596° W

setting American Airlines Flight 77
(Boeing 7x7 Series)

'ugly' **Book of Revelation** filled with [number 7]
7 stars, 7 lampstands, 7 churches, 7 seals,
lamb having 7 horns, 7 angels, 7 trumpets,
7 thunders, 7 visions, 7 bowls, 7 plagues,
7 words, 7 headed dragon

(Greek Ἀποκάλυψις Ἰωάννου, **Apocalypsis Ioannou**)
means 'un-covering'

Doomsday Clock
(Last) Judgement Day
for religious people

Collapse of 1 WTC - 7 WTC
and Boeing 7x7 Series

7-7 London bombings (2005)

ここ出典 (Source) 紹介の部 112 にあつては

[小説 Adrift Just off the Islets of Langerhans : Latitude 38°54'N,
Longitude 77°00'13W『北緯 38 度 54 分、西経 77 度 0 分 13 秒 ランゲルハンス島沖を漂流
中』(1974) では同作主人公ロレンス・タルボットが

【ギリシャ神話の女神デメテル Demeter の名を冠する存在】

から[魂の座標へと至る道についてのヒント]を聞き出すに至り、結果、[15兆電子ボルトが出せるとの架空の円形加速器を運用する CEERN (CERN ではない) に由来するレーザー装置で自らを縮退させての分身を造り出して[黒々と渦を巻く底無しの臍(へそ)]にその分身を送り込んで自己の魂に引導を渡す]との挙動(主人公ロレンス・タルボット主導の挙動)が実行に移されると描かれる]

との流れで[ギリシャの女神デメテルへの言及がなされている]との文献的事実について原文引用によって指し示しておくこととする。

まずもって、原著の内容を問題視する前に英文 Wikipedia [Adrift Just off the Islets of Langerhans] 項目にあつての現行にての Synopsis (粗筋) の部の記載内容を引いておくこととする。

(直下、現行英文 Wikipedia [Adrift Just off the Islets of Langerhans] 項目にての Synopsis の節の記載よりの引用をなすとして)

Larry Talbot wants to die, but cannot unless he first knows **the exact physical location of his soul**. To this end, he tracks down Victor Frankenstein, who sends him on a fantastic voyage.

(訳)「ラリー・タルボットは(補つてもその部として: 作中、同タルボットが不死の狼男の眷族であることが臭わされるなかで)死を得たいと欲していたのだが、それは彼が**自身の魂の正確な物理的座標**を知らなければ、適わぬことであつた。この目標(魂の座標を特定し自身に死をもたらすとの目標)に向けて、彼はヴィクター・フランケンシュタイン、ロレンス・タルボットを幻想的な冒険へといざなうことになる同人物を探し求め、同男に頼ることになる」

(訳を付しての引用部はここまでとしておく)

以上のようにウィキペディア(程度の媒体)に表記されていること、端的には、

[ラリー・タルボット(ロレンス・タルボット)は死を得るために自己の魂の場所を同定する必要があつた(そして、ヴィクターという男の助力を請うた)]

と表記されているとのことに関して、その細かくもの流れが、

[ラリー・タルボットがまずもって [ディミーター] (邦訳版 —『世界 SF 大賞傑作選 8』(講談社刊) 収蔵— の記載では [ディミーター] とされているが、原著綴りがデメテル Demeter とされており、実際に同じくもの綴りのギリシャの大地の女神 [デメテル] と結びつく存在であろうとの言及が作品内部にみとめられる存在) という名の男 —小説では女神デメテルの名を冠するとされるも小説内では[男]であると明示されている作中登場人物— に魂の座標情報に対する情報提供を求め、その呈示情報取得の結果、旧知のヴィクトル・フランケンシュタインに助力を請うに至つた]

となつて示すに十分と判断した一群の記述の引用を(文量過多とならぬ必要最小限の引用に留めるべく)掻い摘まんでなしておくこととする。

(直下、— (Internet Archive のサイトにて原文を含む The Magazine of fantasy and science fiction (Adrift Just off the Islets of Langerhans : Latitude 38°54'N, Longitude 77°00'13W がそのリリース期、同誌にて収録されていたとの雑誌『ファンタジー・アンド・サイエンス・フィクション』誌) の問題となる号の内容が現行、全文掲載されていることを

こちら [15兆電子ボルトの円形加速器] なるものが(あまりにも)今日の LHC に近いものであるとの意で往時 74 年(小説初出時)において水際だつて予見的であるとのこと、また、そうした架空の円形加速器(CERN ならぬ CEERN の 15 兆電子ボルト円形加速器なるもの)に通ずる流れが複合的に[ブラックホール]と結びつけられていると申し述べられるようになってのこととまでなると最早それは科学界でなら想定されていなかったこと(と後日諸所に於て発表されてきたこと)を先回りして予言していたとの怪物じみたことになるとのことも本稿では詳述なしてきたとの経緯がある。

もってして、そこにて収録されている小説 *Adrift Just off the Islets of Langerhans : Latitude 38°54'N, Longitude77°00'13W* の原著版内容をもオンライン上より誰でも全文確認なせるようになっていてることを受け) — オンライン上より現行、確認可能となっている *Adrift Just off the Islets of Langerhans : Latitude 38°54'N, Longitude77°00'13W* の表記のことを示すための端的なる原文引用をなすこととする)

"Mr. Talbot. Good of you to come. **John Demeter.**"

He came up from a wingback chair, extended his hand. Talbot took it. The grip was firm and cool.

[. . .]

Talbot studied Demeter in one long appraisal as he took the chair opposite the wingback.

Demeter was in his early fifties , had retained a full and rich mop of hair that fell across his forehead in gray waves that clearly had not been touched up. His eyes were clear and blue, his features regular and jovial, his mouth wide and sincere. He was trim.

[. . .]

"Fine. Then why don't we get to specifics. **Mr. Talbot, you're having some difficulty dying. Am I stating the situation succinctly?**"

"Gently, Mr. Demeter."

"Always."

"Yes. You're on the target."

"But you have some problems, some rather unusual problems."

"Inner ring."

Demeter stood up and walked around the room, touching an astrolabe on a bookshelf, a cut glass decanter on a sideboard, a sheaf of London Times' held together by a wooden pole. "We are only information specialists, Mr. Talbot. We can put you on to what you need, but the effectation is your problem."

"If I have the modus operandi, I'll have no trouble taking care of getting it done."

[. . .]

"Hey. We aren't here getting pneumonia just to discuss forced rhyme"

[. . .]

The lines of weariness in Talbot's face settled into a joyless pattern. "Victor, I need your help."

[. . .]

"Oh. Right. Sorry, Larry. Go on. **You met with them ...**"

"Man named Demeter. I thought there might be some clue there. The name. I didn't think of it at the time. The name Demeter, there was a florist in Cleveland, many years ago. **But later, when I looked it up, Demeter, the Earth goddess, Greek mythology ... no connection. At least, I don't think so.** We talked. He understood my problem and said he'd undertake the commission. But he wanted it. specific, what I required of him, wanted it specific for the contract — God knows how he would have enforced the contract, but I'm sure he could have — he had a window, Victor, it looked out on — "

[. . .]

"All right, take it easy. Let me hear the rest of this and we'll see. Relax."

Talbot nodded and felt grateful. "I wrote out the nature of the commission. It was only seven words."

He reached into his topcoat pocket and brought out a folded slip of paper. Victor unfolded the paper and read

GEOGRAPHICAL COORDINATES FOR LOCATION OF MY SOUL

Victor looked at the line of type long after he had absorbed its message. When he handed it back to Talbot, he wore a new, fresher expression. "You'll never give

(呈示文言をグーグル検索することでオンライン上より内容確認できるようになっているとの原著よりの引用部はここまでとしておく —※以上のようなオンライン上より現行は確認できるところに対しての日本語訳に関しては国内で流通している『北緯 38 度 54 分、西経 77 度 0 分 13 秒 ランゲルハンス島沖を漂流中』掲載撰集の中から問題となる部を下に別途、引用しておくこととする—)

上にて引証の材として引きもしている原著記述内容は

[ラリー・タルボットがまずもって [ディミーター] (邦訳版 —『世界 SF 大賞傑作選 8』(講談社刊)収蔵— の記載では [ディミーター] とされているが、原著綴りがデメテル Demeter とされており、実際に同じくもの綴りのギリシャの大地の女神 [デメテル] と結びつく存在であろうとの言及が作品内部にみとめられる存在) という名の男 —小説では女神デメテルの名を冠するとされるも小説内では[男]であると明示されている作中登場人物— に魂の座標情報に対する情報提供を求め、その呈示情報取得の結果、旧知のヴィクトル・フランケンシュタインに助力を請うに至った]

との一連の流れにまつわるものとなるが、同記述に対応する邦訳版(より正確には邦訳されての中編小説『北緯 38 度 54 分、西経 77 度 0 分 13 秒 ランゲルハンス島沖を漂流中』(1974)を掲載しているとの『世界 SF 大賞傑作選 8』(講談社刊))にての該当部を —無論、きっかりと上記原著引用部よりと対応させるかたちで— 原文引用なしておく。

(直下、邦訳されての中編小説 Adrift Just off the Islets of Langerhans : Latitude 38°54'N, Longitude 77°00'13'W『北緯 38 度 54 分、西経 77 度 0 分 13 秒 ランゲルハンス島沖を漂流中』(1974)を掲載している『世界 SF 大賞傑作選 8』(講談社刊)より掻い摘まんでの部分抜粋をなすこととする —より具体的には『世界 SF 大賞傑作選 8』(講談社刊. 当方手元にあるのは昭和 53 年 8 月 15 日刊行の初版版)にての p.199 の記述よりの部分抜粋をなすこととする—)

「タルボットさん。よくいらしてください。ジョン・ディミーターです」

男はそで付きの安楽椅子からのりだし、手を差しのべた。タルボットはその手をとった。

…(中略)…

タルボットいつときしげしげとディミーターを観察した。ディミーターは年のころ五〇代前半、たっぷりした白髪まじりの頭髪は、くしを入れていないらあしく、ウェーブしながらがひたいに乱れかかっている。澄んだブルーの目、ととのった陽気な顔だち、誠実さをうかがわせる大きな口。品のよい人物だった。

(上にての抜粋部と連続性を呈するところを直下、『世界 SF 大賞傑作選 8』(講談社刊)にての p.201 の記述よりの部分抜粋をなすとして)

「けっこう。それでは、細かい点をうかがいましょうか。タルボットさん、あなたはいま死ぬのに苦勞しておられる。こういえば、簡潔な説明になりますか?」

「お手やわらかに、ディミーターさん」

「もちろん」

「そう、その説明でドンピシャリです」

「しかし、あなたは問題を抱えておられる、ちょっと異常な問題を」

「さすがは」

デミーターは立ち上がると部屋の中をまわり、本棚の上の天体観測儀(アストロラーベ)と、食器棚の上のカットグラス・デカンターと、ロンドン・タイムズ紙の綴じこみにさわった。「わたしもはただの情報専門家です、タルボットさん。必要な情報を提供はできるが、実行はあなたの問題だ」

「方法さえわかれば、かたをつけるのに手間はかかりません」

(上にての抜粋部と連続性を呈するところを直下、『世界 SF 大賞傑作選 8』(講談社刊)にて
の p.208—p.209 の記述よりの部分抜粋をなすとして)

「うん、そうだな。すまん、ラリィ。続けてくれ。きみは連中と会った……」

「デミーターという男だ。そのあたりに手がかりがあるんじゃないか、とも考えたよ。名前だ。そのときには思いつかなかった。デミーター、何年も前だが、クリーヴランドにその名前の花屋がいた。しかし、あとで調べてみると、デミーターは大地の女神、ギリシャ神話……関係ないな。すくなくとも、おれは関係ないと思う。デミーターはわかってくれて、仕事を引きうけるといった。ただ、問題をはっきりさせろという。おれが何をしてほしいと思っているのか、契約のためにもはっきりさせろというわけだ……契約を成立させる自信がどこから出てきたのか、だがたしかなのは、やつが使おうとすれば——オフィスに窓があるんだよ、ヴィクトル。外を見ると——」

…(中略)…

「わかった。おちつけ。話の続きを聞いてから考えよう。リラックスするんだ」

タルボットはうなずき、安堵した。「おれは依頼の内容を書きだした。たった一行だ」彼はトップコートのポケットに手を入れ、折りたたんだ一枚の紙を出した。相手にわたす。薄暗いカンテラの光の下で、ヴィクトルは紙をひらき、中を読んだ……

わたしの魂の所在位置の地理座標

意味を汲みとったのちも、ヴィクトルは長いあいだタイプ文字から目をはなさなかった。タルボットに紙を返したとき、その顔には今までとちがうすがすがしい表情がうかんでいた。「あきらめる気はないんだろう、ラリィ?」

(掻い摘まんでの引用部はここまでとしておく)

以上のような抜粋部にて示される流れ、すなわち、

[デミーター — (『世界 SF 大賞傑作選 8』(講談社刊)p.208 にも “デミーター、何年も前だが、クリーヴランドにその名前の花屋がいた。しかし、あとで調べてみると、デミーターは大地の女神、ギリシャ神話……関係ないな。すくなくとも、おれは関係ないと思う” と訳されて記されている(原著にては “Man named Demeter. I thought there might be some clue there. The name. I didn't think of it at the time. The name Demeter, there was a florist in Cleveland, many years ago. But later, when I looked it up, Demeter, the Earth goddess, Greek mythology ... no connection. At least, I don't think so.” と記されている)ように、[ギリシャ神話のデメテルと同じくもの名を冠する存在]と作中に明示している存在でそのままに Demeter と原著にては綴られている存在) — に [魂の座標の存在位置]に関する情報提供を求めた後、主人公が旧知の仲のヴィクトルに頼み込んで、その情報に基づき(不死たる)自己の死を得るための挙動を開始すると
の流れ]

を経て小説主人公タルボットは[魂の所在地]に到達し引導を下す挙を実行に移す —— (具体的には [15 兆電子ボルトの架空の円形加速器を運用しているとの架空の CEERN という組織 (CERN ではない)、ヴィクトルが人員押さえているとのその組織が有しているレーザー装置で主人公タルボットを超極小の分身に分裂させて、その極小の分身を[タルボット本体の底無しの渦を巻く黒々とした臍(へそ)の穴]に投下、(文脈上、腓臓のランゲルハンス島の特定部に位置する)魂の所在地にて引導を渡させる]と挙を実行に移すとのことが描かれる) —— というのが(「ややこしくも響くだろうが、)小説 **Adrift Just off the Islets of Langerhans : Latitude 38°54'N, Longitude 77°00'13W** の全体の流れとなっているとのことがある(※)。

(※上にて言及しているとのこと、そして、

Adrift Just off the Islets of Langerhans : Latitude 38°54'N , Longitude 77°00'13W

と他の小説たる

The Hole Man (『ホール・マン』/極微ブラックホールの暴走を描いているとの作品)

との連結関係を顧慮しつつも導きだしてしまうこととの絡みで

[15 兆電子ボルトの架空の円形加速器を運用しているとの架空の CEERN という組織 (CERN ではない) が有しているレーザー装置で主人公タルボットが超極小の分身に分裂させられて、そちら極小の分身が[タルボット本体の底無しの渦を巻く黒々とした臍(へそ)の穴]へと投下され、(文脈上、腓臓のランゲルハンス島の特定部に位置する)魂の所在地にて引導が渡されることが臭わされる]との流れが小説にてみとめられること、細かく裏取りが容易になせるとの同じくもの【**文献的事実**】が何故、[ブラックホール生成問題]との絡みで「**奇怪な**」先覚的言及になるのか]

については本稿にての前半部にあつての[**事実 F**]から[**事実 J**]と分類しての事柄らへの解説部 — **出典 (Source) 紹介の部 6**から**出典 (Source) 紹介の部 10**を包摂する解説部 — にあつて細かくも解説している、そう、遺漏無くも詳述しているのでよく把握していないという向きはそちらの方を参照いただきたいものである —— (ただし、【**「現行」、ブラックホール生成が問題視されるに至りもしているとの出力の加速器に 70 年代往時 CERN の運用するそれよりも 200 倍も近しき 15 兆電子ボルト出力の加速器を登場させ、なおかつ、そのような加速器は小説執筆当時では加速器運営機関にすら計画されているようなものではなかったこと(その通りのことを示す米国の加速器研究機関由来の報告文書が本稿にて引用なしたようなかたちで存在している)、そして、そのような加速器を用いてブラックホールの人為生成が理論的にありうると見做されるに至ったのは 2001 年以降であるとのこと**】をもってして【**生き死にに関わる欺瞞の問題**】ないし【**奇怪な先覚的言及の問題**】であると「見ない」のならば、そういう向きに確認は当然に請わない(そういう向きには殺される状況でも何もせず殺されていくだけであろうと「当然に」見ざるをえぬ、ために、語るに意をなさぬ、であるから、確認を求めないということである) ——)

**Adrift Just off the Islets of Langerhans
:Latitude38°54'N , Longitude 77°00'13W
(1974)**

女神デメテルの名を冠する存在
(訳書ではデイミーター表記) から
死ねぬ体の主人公は自死を遂げる
ための [魂の座標] を告知される。

Demeter

infrom

Geographical coordinates for location of soul

[魂の座標] を知った主人公は CEERN
(15兆電子ボルト加速器を運営する機
関と作中描写される) のビーム照射
装置でもってして黒々と

enter

into

過をまく底無しの
穴と形容
されての
自身のヘ
ソに百万
分の二
に縮小
されての自身の分身を送り込む。

the navel described as

**"the bottomless pit with its atrophied
remnants of umbilicus forming loops
and protuberances, smooth and undu-
lant and vanishing into utter darkness"**

with

**CEERN (not CERN) 's grazers & a million times
reducing process**

結果、主人公(の分身)は魂の座標と
された臍臓の特定座標に降り立つ。

reach

the Islets of Langerhans

:Latitude38°54'N , Longitude 77°00'13W

the organization running the fifteen trillion electron volts
collider (15 TeV collider) in the novel

(only) 1.07 times

the fictional collider with energies approximately 240 times
higher than that of ISR (62 GeV) ,the real world collider
run by CERN during the 1970s

14 TeV LHC

文献的事実の問題として1974年の当該 Science Fictionに登場を見ていた15兆電子ボルトの加速器は往時にて運用されていたISR (1971-1984) というCERN加速器、620億電子ボルトが最大重心衝突系エネルギーであったとの同加速器に比しての「240倍」超のエネルギー規模の加速器。——本稿にての [出典(Source)紹介の部10] で呈示しているように蚊 (Mosquito) が飛ぶ程度の静止エネルギー (kinetic energy) たる 1.6×10^{-7} Jule を超極微の領域に一挙に収束させるとの規模の加速器 / となる。そして、それは現実世界のCERNにて2008年から運営されるに至ったLHCに比して僅か1.07倍程度のエネルギー規模しか有さないとのものでもある (お分かりか、とは思いますが、際立っての先覚性をここでは問題視しているのである)。では、[兆単位の電子ボルトの加速器] (TeV Scale Collider) が何時頃から高エネルギー物理学の内輪の集いで [長期的実現目標] として掲げられ出したのか。については本稿にての [出典(Source)紹介の部10] で呈示のフェルミ国立加速器研究序 Fermi Labに由来する、Chronology:VBA (ICFA) →SSC (US-DOE) との資料に記載されているところとして「1975年以降」であるとされている (上資料にあつての4と振られた頁に見る、11/75 “1 TeV” mentioned in R. R. Wilson Physics Today editorial regarding a world laboratory.との部がその言及部となる)。

これにて、長くもなったが、

[小説 **Adrift Just off the Islets of Langerhans : Latitude 38°54'N, Longitude 77°00'13W**『北緯 38 度 54 分、西経 77 度 0 分 13 秒 ランゲルハンス島沖を漂流中』(1974) では同作主人公ロレンス・タルボットが

【ギリシャ神話の女神デメテル Demeter の名を冠する存在】

から[魂の座標へと至る道についてのヒント]を聞き出すに至り、結果、[15 兆電子ボルトが出せるとの架空の円形加速器を運用する CEERN (CERN ではない)に由来するレーザー装置で自らを縮退させての分身を造り出して[黒々と渦を巻く底無しの臍(へそ)]にその分身を送り込んで自己の魂に引導を渡す]との挙動(主人公ロレンス・タルボット主導の挙動)が実行に移されると描かれる]

とのことの出典表記とした。

(**出典 (Source) 紹介の部 112** はここまでとする)

(従前内容を振り返りつつ、問題となりうる箇所を[付記]の部として呈示しておく)

再述するが、本稿にての**補説 3**の部、の中にあつての**出典 (Source) 紹介の部 94 (7)**を包摂する部では —— (最終的に**【ペルセポネ】**および**【ヘカテ】**および**【ケルベロス】**らの各存在と複合的に接合しているとのエジプトからのギリシャ・ローマ世界への渡来神たる**【イニス】**という女神にまつわる古典内記載が「どういうわけなのか」ブラックホール開闢理論と「奇怪無比なるかたちで」先覚的に結びついているとのことを詳説すべくも展開してきたとの話の中での従前出典紹介部にあつて) —— **【ヘカテ】**と**【ケルベロス】**らに

「双方、[三面構造]を持った存在である」

「双方、[犬]との属性と結びつく存在である」

「双方、[冥界]と関わる存在である(にあつては[冥界の番犬]と[辻々の番人]との両者性質が重なるようなところもある)」

「双方ともに毒物[トリカブト]由来と濃厚に結びつく存在である」

との結節点が伴っていることの論拠呈示をなしていた。

上のヘカテとケルベロスの結節性に見るトリカブトにまつわる話(「双方ともに毒物[トリカブト]由来と濃厚に結びつく存在である」)は

【ヘラクレスにより冥界から引きづり出されたとのケルベロスの唾(つばき)が【トリカブト】の由来と結びつくとのエピソード】

「とも」なっている(:本稿にての**出典 (Source) 紹介の部 94 (7)**で古代ローマ期の文人オウィディウスによる THE METAMORPHOSES『変身物語』、そのオンライン上より誰もダウンロードできるところの Project Gutenberg 公開版の文中にての注釈部 30 の記載内容から抜粋なしていたとおりである、すなわち、 “ 30. An Hecatean Herb. — Ver. 139. This was aconite, or wolfsbane, said to have been discovered by Hecate, the mother of Medea. She was the first who sought after, and taught the properties of poisonous herbs. **Some accounts say, that the aconite was produced from the foam**

of Cerberus, when dragged by Hercules from the infernal regions. ” 「30. ヘカティアン(ヘカテの薬草)とは: (139)これはメディアの母たるヘカテによって発見されたとされている[トリカブト](アーコナイト)、すなわち、ウルフズ・ベイン(狼の毒)のことである。彼女ヘカテは毒草特性について追求、そして、教えをなしたとの最初の存在であった。幾人かの説明では[トリカブト]は黄泉の領域からヘラクレスによって引きづり出された折、ケルベロスの泡つばき(涎)から産生されたとのことである」(訳を付しての引用部はここまでとする)と引いていたとおりである。



そこに見るトリカブト、同毒物については人類史にあって

【「代表的」矢毒(矢で普通ならば致命傷にならぬ傷でも標的を殺傷できるようにと鏃(やじり)に添付する毒性物質)の一つ】

として用いられてきたとの経緯があるとされるものともなる(：同点については和文ウィキペディア[毒矢]項目にて[トリカブト毒文化圏 - 東北アジア・シベリア・アラスカ]との記載がなされ、(これより内容有為転変する可能性あるが、現行にての同項目記載内容より引用するところとして) “世界の毒矢文化は、高度に発達した地域と未発達な地域の差が大きい。名古屋学院大学教授で民族学者・毒物学者の石川元助は、毒矢の文化圏を主要な矢毒と関連付け、4つに大別している。…(中略)…トリカブト毒文化圏 - 東北アジア・シベリア・アラスカ…(中略)…北海道のアイヌ民族は、このトリカブト、あるいは附子を「スルク」と呼び、狩猟に用いてきた。矢の先に塗布するほか、獣道に仕掛けた仕掛け弓「アマツポ」でヒグマやエゾシカを捕らえる。矢の刺さった箇所周囲の肉を握りこぶしほどの量ほどえぐり取って捨てれば、ほかは食べても問題がなかった。トリカブトの他には、日本近海で多く漁獲されるアカエイの毒針を切り取りそのまま槍先に用いたり、割って毒素を取り出すことも行われた” (引用部はここまで

とする)と現行にては記述されているところとなる。他面、同じくものことにつき英文 Wikipedia[Arrow Poison]項目にあつては同じくものことにまつて(同様に原文引用なすとして) “ Several species of Aconitum or "aconite" have been used as arrow poisons, which belong to the buttercup family, Ranunculaceae. The Minaro in Ladakh use A.napellus on their arrows to hunt Siberian Ibex; they were in use recently near lake Issyk Kul in Kyrgyzstan. The Ainus in Japan used a species of Aconitum to hunt Brown Bear. It was also used by the Butias and Lepchas in Sikkim and Assam. The Chinese used Aconitum poisons both for hunting and warfare. ” (引用部はここまでとする)と掲載されているところとなる(表記英文ウィキペディアの方が現行にての和文ウィキペディアより[トリカブト(Aconitum)の毒矢添付物としての利用地域]につき広く言及しているのものとなりもし、そこでは[日本]のアイヌにあつての使用の歴史以外にも[ヒマラヤ界隈のラダック]や[キルギスタン]の特定地域に見るヤギ科動物アイベックに対する狩りでの使用や[シッキム地方](現印度領のネパール界隈)や[アッサム地方](北東印度)にての土着の民(レチャプ人等)による使用、また、[中国]にあつての狩猟・戦場双方でのキンボウゲ科(Ranunculaceae)に属するトリカブト数種の矢毒としての使用への言及がなされているのかたちとなっている)。

といったこと、トリカブトが[矢毒]の代表的なるものの一つであるされているとのことは

[ブラックホール生成に対する奇怪なる予見小説『スライス・アポン・ア・タイム』にヘラクレスに由来する【矢毒 —ヒドラの毒を塗りたくっての矢毒—】との接合性を見出せもする]

とのつい最前の段にて細やかに指摘してきたこととの兼ね合いで「意味深くもとれる」ことである。

ヘラクレスは本稿にての**出典(Source)紹介の部 110(3)**で解説なしたように**【ヒドラの毒を塗っての矢毒】**を用いてケンタウロ・ケイロンに(故意犯ではなく過失犯としてながら)名状しがたい苦しみを与えることになり、また、**【ヒドラの毒を塗っての矢毒】**で殺したまた別のケンタウロのネッソスの今際の際の奸計にて同じくもの**【ヒドラの矢毒】**にて死ぬ原因をつくられた英雄となる(ヘラクレスの用いたとされる**【ヒドラの矢毒】**については和文ウィキペディアの[毒矢]項目にて「も」伝承上の言及のなされようとのことで現行、その言及がなされているところとなる)。その**【ヘラクレスのヒドラの毒矢】**がブラックホールを巡る予見事象と「複合的な論拠から」関わっていると見受けられると論じてきたのが先行するところの『スライス・アポン・ア・タイム』にまつわる解説部となるのだが、他面、ヘラクレスを折々にて助け、そして、結局は殺すことになったとのヒドラの毒と同文にヘラクレスが(その第12功業にて)地獄より引きづり出したケルベロスが[人類史にあつて矢毒として用いられもしてきたトリカブト]の伝承上の由来とされているとのことがあるというのがここ本段にての摘示事項である(ちなみにヘラクレスが第1功業にて死闘を繰り広げたヒドラ(後、矢毒の材にしたとの怪物)も、第12功業にて冥府で格闘したケルベロスも共に蛇女エキドナの血族として伝わる存在となっており 一本稿にての**出典(Source)紹介の部 63(4)**などを参照のこと、ヒドラが9つの蛇の頭を持つ存在であると伝わりとされる存在であるのに対して、三つ首の地獄の犬たるケルベロスもまた背に無数の蛇を生やした存在として伝わる存在である)。

そうした繋がり合いについて意味を見出しても[行き過ぎにならぬ](相応の類があたり振り回す印象論と同種同文のものとはならぬ)とのこと、それだけのことを本稿の**補説 3**の部では —その長大なパートの内容をきちんと確認いただきたいものであるとのところとして— 詳述している。

すなわち、

[[【ケルベロス】・【ヘカテ】・【ペルセポネ】らと【イシス】神の結びつきからどう
いうわけかブラックホールにまつわる寓意性が複合的に見出せるように
「なっている」（それら結びつきが「ブラックホール理論開闢に影響している事物」や「複数古典に今日的な観点で見たブラックホール類似物
がどういうわけかお目見えしているとのこと」らと別個独立に複合的に結節している、「確率論的な意味で偶然の可能性など観念できるようなもの
ではない」との按配で別個独立に複合的に結節しているとのことと「なっている」）]

とのことについての詳述をなしている。

以上から述べたきことは、(端的には、)

「【ヒドラの毒】というものが「特定ブラックホール生成問題予見文物(たる『スライズ・アポン・ア・タイム』)におけるヘラクレス12功業と結びつくとの相応の特性」に関わるようになっているとのことを摘示せんとしてきたのが本稿ここまで
の内容だが、その【ヒドラの毒】と相通ずるところがある矢毒として用いられてきたケルベロス由来のトリカブト(毒の涎よだれ)からして — 補説3
にて延々と呈示してきた【ケルベロス】・【ヘカテ】・【ペルセポネ】らと【イシス】
を巡る関係性から— ブラックホール関連で軽んじざるべきものとの側面を
帯びている」

とのこととなる(同点については「本稿にての補説3の部の内容に対して理解が及んでいなければ、何を述べているのか、分からなかつたところか」とも思うのだが、理解をなしている人間のことを想定しての話をなしている)。

さらに加えもして述べれば、

【ウルフズ・ベイン】

とも呼ばれるトリカブト — (トリカブトのウルフズ・ベイン呼称については「つい最前の段にでもそこより再引用をなしている」とのオウイディウス著作記述を参照のこと) — については、

[[【デメテル ⇄ ペルセポネ ⇄ ヘカテ ⇄ ケルベロス】との同一性から【ケルベロス】(ヘラクレス第12功業の捕縛対象)とのつながりも見出せるとの女神【デメテル】の名を冠する者]

より主人公が

【15兆電子ボルト加速器を運用するCEERN(CERNではない)のレーザー装置によって黒々とした底無しの渦を巻く自身の臍(へそ)の穴の中に縮退化させての自身の分身を送り込み自身の魂に引導を渡すとのことをなす前の前提となる魂の座標の案内]

をされたとの筋立ての(ここにて問題視している)小説、

Adrift Just off the Islets of Langerhans : Latitude 38°54'N, Longitude 77°00'13W『北緯38度54分、西経77度0分13秒 ランゲルハンス島沖を漂流中』

からして作中内にてそれ(ウルフズベイン:トリカブト)への言及がなされているとのものとなっているとのことがある。

引用をなす。

(直下、オンライン上より現行、全文確認可能となっている Adrift Just off the Islets of Langerhans : Latitude 38°54'N, Longitude 77°00'13W の表記のことを示

すための端的なる原文引用をなすとして)

They met on the thirtieth of that month, at moonless midnight, on the corpse barge that piled between Buda and Pesht. It was the correct sort of night: chill fog moved in a pulsing curtain up the Danube from Belgrade.

[...]

Victor grinned and murmured ominously.

"Even a man who is pure in heart

"And says his prayers by night,

"May become a wolf when the wolfbane blooms

"And the Autumn moon shines bright,"

Talbot made a face. "And other songs from the same album."

(オンライン上より、現行、文言検索にて内容確認できもする原著よりの引用部はここまでとしておく)

(直下、上にてのオンライン上から確認できる原著表記に対して邦訳版、『世界SF大賞傑作選8』(講談社刊)にての当該作品掲載部 p.206-p.207 の記述よりの部分抜粋をなすとして)

その月の三十日、月のない真夜中、二人はブダとペシウト間を行き来する死体運搬船の上で落ちあった。おあつらえむきの夜だった。ひんやりする霧がベオグラードの方角からダニューブをのぼり、脈打つカーテンとなって流れた。

...(中略)...

ヴィクトルはにやりとし、陰気な声でつぶやいた――

「清らかな心を持ち

夜ごと祈りを捧げる人でさえ

とりかぶと(ウルフペイン)の花咲き

秋の月輝くころは狼にもなろう

タルボットはしぶい顔をした。「その他同じアルバムからヒット曲の数々」

(原著に対する訳書よりの引用部はここまでとしておく)

上の引用部に見るようなかたちで字数としてそう多くはない文量の小説(中編小説:ノヴェレットに属する小説)たる『北緯38度54分、西経77度0分13秒 ランゲルハンス島沖を漂流中』にはトリカブトへの言及がなされている。

これにて

『微に入っのこを[不必要な因数分解]として取り上げているきらいがある』

と(["こと"の次第]に対する理解が及んでいないとの向きには)見られようことかと承知の上で敢えても取り上げたことにまつわっての[付記]の部を終えることとする。

ここまでにて

【デメテル ↔ ペルセポネ ↔ ヘカテ】

との一致性にまつわる歴史的解釈、そして、

【ヘカテ ↔ ケルベロス】

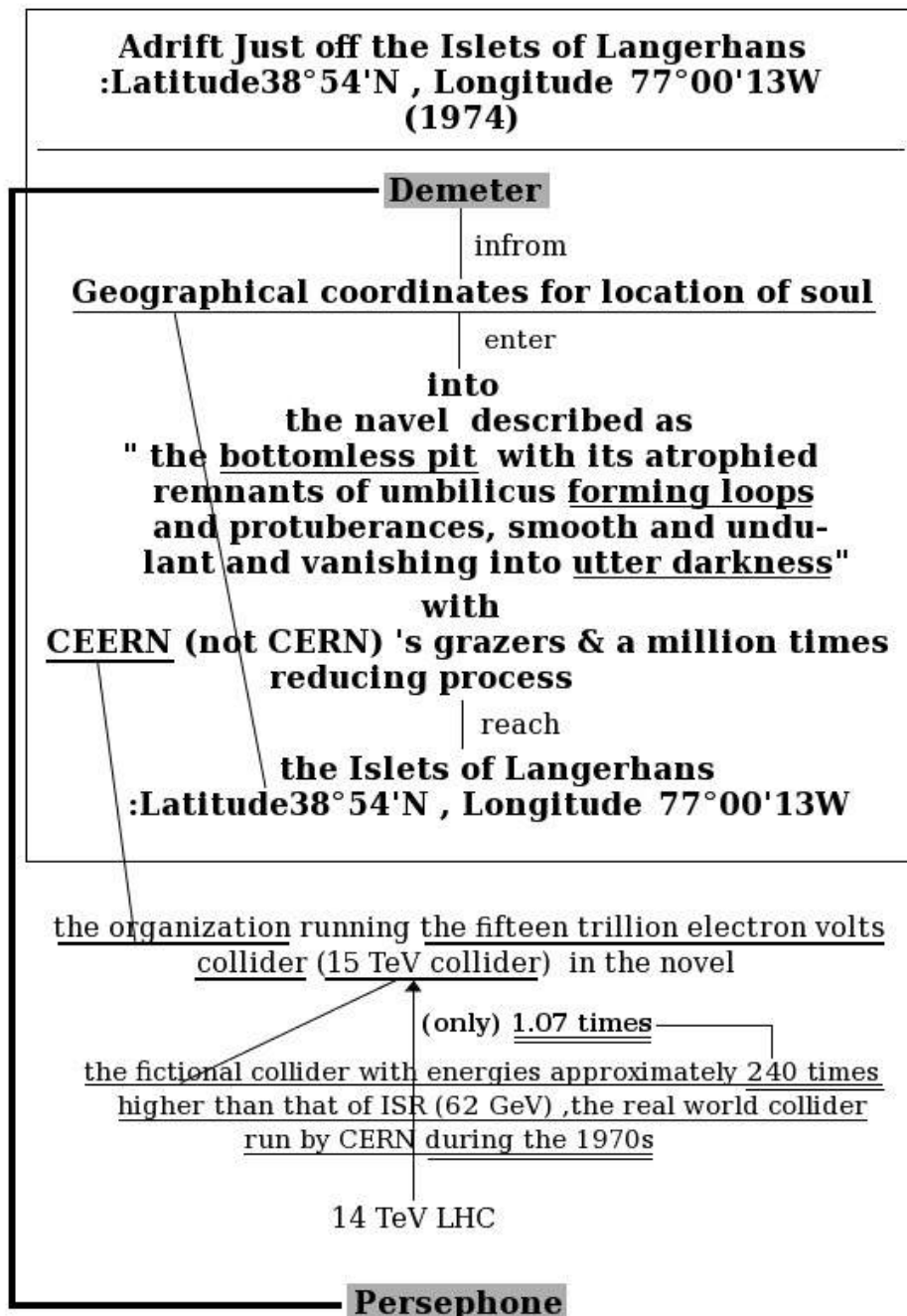
との連続性から『北緯38度54分、西経77度0分13秒 ランゲルハンス島沖を漂流中』にあって

【魂の座標を報せた存在 — 作中にて CEERN (CERN ではない) のレーザー装置による縮退化挙動への道筋を付けた存在 — 】

として登場してくる人物の名とされているギリシャの女神デメテル (⇨ ペルセポネ ⇨ ヘカテ ⇨ ケルベロス ⇨ ヘラクレス第 12 功業捕縛対象たる三面の地獄の犬) との絡みで

【ヘラクレスの計 12 に及ぶ功業】、【(ヘラクレス第 11 功業に見る) 巨人アトラス】、【トロイア崩壊伝承に見るトロイア崩壊の原因たる(他伝承では巨人アトラスが在処を把握するとされる) 黄金の林檎】、【巨人アトラスともトロイア崩壊元凶たる黄金の林檎とも史的に(一部識者によって) 結びつけられてきたとのアトランティス沈没伝承】、【アトラスやアトランティスといった固有名詞を付されての LHC 実験におけるブラックホール生成論議に関わる事物】との要素らのうちの「複数」を特色として帯びつつ、かつ、【911 の事件の発生(態様)にまつわる予見的言及】ないし【ブラックホール人為生成問題にまつわる「先覚的言及】」の一方、あるいは、その双方をなしているとの文物らが「不可解に」存在しているとの関係性の環]

のことが問題小説(『北緯 38 度 54 分、西経 77 度 0 分 13 秒 ランゲルハンス島沖を漂流中』)にも当てはまると論じてきた。



またもってしてここまでの指摘の延長上に何があるのか、とのことについての話を今暫くも続けるとし述べるが、(『北緯 38 度 54 分、西経 77 度 0 分 13 秒 ランゲルハンス島沖を漂流中』に登場するデメテルとの絡みで問題となる)【ペルセポネ】という女神については

[**【黄金の林檎にてはじまったトロイア戦争での】トロイア崩壊の原因となった【美女ヘレン】と同様に【同一の存在ら】(テセウスとペイリトオスの両雄)による略取対象**]

となっていたとのこと「も」があり(ギリシャ伝承における伝説上のアテナ王テセウスと同テセウスと莫逆の交わりを結んでの友ペイリトオスらは[ヘレン]を略取せんとした際にヘレンを自分の細君に無理矢理なさしめることができた方がそれができなかった片方のパートナー探しを手伝うとの約を取り交わししており、そうした中でテセウスの方がヘレンを妻として略取奏功させることになり、ペイリトオスがその後(無謀なことに)冥界主催者ハデス細君となっていたペルセポネを自分の妻とすべくも冥界下りをなすことを決定してテセウスはそのペイリトオスの冥界下りに同道することになりもした……そういうエピソードが伝わっている — **【出典(Source)紹介の部 90(10)】** —)、そのように略取されていた**【美女ヘレン】**(ペルセポネ略取と同じくもの誓約にて関わっているとの美女)が救出を見た後、長じて

[**【ヘラクレス第 11 功業の目標となっている【黄金の林檎の対価】としてのトロイア崩壊原因】**]

となっているとのこと「も」がある(具体的には三大女神らの間で[絶世の美女の証としての黄金の林檎]を巡って争われた美人コンテストにあってそのレフリーとして招かれたトロイア王子パリスに対してアフロディテ(という女神)が自身を勝たせるための賄賂として絶世の美女たる人妻ヘレンの供与を申し出、その条件をトロイア皇子にして美人コンテスト審判者との役割を与えられたパリスが呑んだため、ヘレンの本来の夫あったギリシャ王メネラオースの兄アガメムノンを盟主にしてのギリシャ軍勢が雲霞(うんか)のように押し寄せての[最終的にトロイア崩壊に至る泥沼化しての一進一退の攻城戦]の開始につながったとの神話的説明が — トロイア滅尽はかねてよりのゼウスの予定であったところを大義が[都合よく用意された]との申しようもなされる中で — なされているとの背景がある)。

直上にて言及のように

[**【黄金の林檎の対価としてのヘレン】と【ペルセポネ】の間には【テセウスとペイリトオスの略取対象】としての接合性を観念できる】**]

とのことがあるのだが、**【黄金の林檎】**とは**【ヘラクレスの 11 番目の功業の目標物】**となっているもの「でも」ある (**【出典(Source)紹介の部 39】**／ヘラクレスはそちら黄金の林檎を巨人アトラスを通じて取得したと伝わっている)。

だけではなく、ヘレンとペルセポネを略取対象としたテセウスとペイリトオスらは

[**【身の程知らずをとがめられるかたちで冥界の忘れ椅子の獄】**]

に繋がれていたところをヘラクレスによって(**【ケルベロス捕縛】**を目標としての**【ヘラクレス 12 番目の功業】**にて「ついで、」として)救出されたとの存在であるとも伝存している(**【出典(Source)紹介の部 90(10)】**)。

以上のことから、

[**【デメテル ⇒ (同一物とする理解が存在) ⇒ ペルセポネ】**]

との属性を帯びているとのデメテル、問題となる小説 **Adrift Just off the Islets of Langerhans : Latitude 38°54'N, Longitude 77°00'13W**『北緯 38 度 54 分、西経 77 度 0 分 13 秒 ランゲルハンス島沖を漂流中』にあって小説主人公に

[**【魂の座標へと至る道についてのヒント】**]

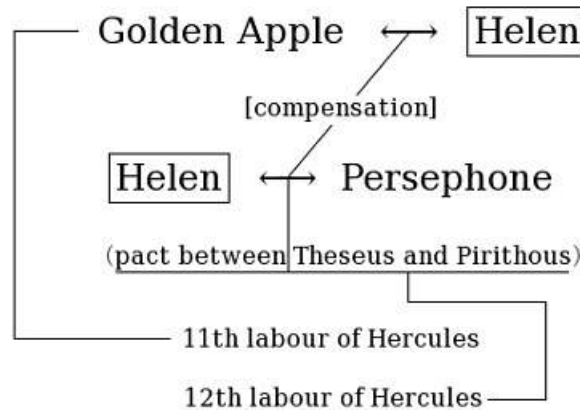
を与えて、結果、

[15兆電子ボルトが出せるとの架空の円形加速器を運用する CEERN (CERN ではない) に由来するレーザー装置で自らを縮退させての分身を造り出して[黒々と渦を巻く底無しの臍(へそ)]にその分身を送り込んで自己の魂に引導を渡す]との拳を(小説主人公に)促した]

とのその登場人物の名前である同デメテル 一同デメテルが問題小説それ自体からして「ギリシャ女神デメテルの名と同じである」との式で言及されている女神であることは先立っての**出典(Source) 紹介の部 112** にあって引用を通じて示した— からは、(ギリシャのデメテルと同一存在視されもしていると本稿にて解説してきたペルセポネを通じもして)、これまたもってして、

[ヘラクレス 12 功業(のうちの第 11 功業と第 12 功業)との関係性]

のことが想起されるかたちとなりもしている。



Persephone & twelve labours of Hercules

ここまで典拠を挙げながらも示してきたこととして、次のようなことがある。

第一に「絶世の美女ヘレン」は(結果的にトロイア崩壊の原因となることになった)[黄金の林檎]の対価としてパリスに提供の提案がなされた存在である([出典(Source) 紹介の部39]。尚、ヘレンの求婚者らのギリシャ諸侯の間では後に禍根残さぬようにとオデュッセウスが提案した誓約、ヘレンの夫の一難事には元ヘレン求婚者全員が協力すべしとの誓約が事前に交わされており、その伝でもヘレンは誓約にまつわる美女であったとも述べられる)。

第二に、「絶世の美女ヘレン」はパリスに駆け落ちとのかたちで掠(さら)われる前にも略取の対象となったとのことがあり、の際、ヘレン略取をなしたテセウスらとペイリトオスらは片方がヘレンを手に入れる代償にもう片方の妻君取得にヘレンを取得した方が協力するとの約定を結んでおり、結果的に「ペルセポネの略取」と「ヘレンの略取」が約定に基づき秤で釣り合わせられていたに等しきかたちとなっていたと伝わっているとのことがある([出典(Source) 紹介の部90(10)])。

以上より述べられることは駆け引きの具にされていたとの「ヘレン」を中間項にして「トロイア崩壊の原因(黄金の林檎)」

「ペルセポネの略取」にはつながりが観念されることである(別段複雑な話ではなく、単純な話である)。

さて、そのように結びつきが観念できる「黄金の林檎」[ペルセポネ略取のエピソード]のうち、「黄金の林檎」のほうはヘラクレス第11番目の功業の取得目標物となっており([出典(Source) 紹介の部39])、「ペルセポネ略取のエピソード」は(無謀にも人間の身で神を略取しようとした誓約の当事者、テセウスとペイリトオスが冥府の女王への狼藉の罰として囚われていた冥界の忘れ椅子よりヘラクレスにその機会にて救われたとの式で)ヘラクレス第12功業と結びついている([出典(Source) 紹介の部90(10)])。

こちらヘラクレス第12功業がペルセポネを略取せんとした狼藉のために

「冥界の忘れ地獄」

に捕らえられていたテセウスらの解放をなしたのがついでのことであったとのもの、その究極目標が「ケルベロス(Cerberus)の捕縛」にあったとのものであると伝わる(ペルセポネとケルベロスの関係性と絡みで)重みをもってくるとのことがある。

尚、最前にての**出典(Source)紹介の部 112**で

[デメテルという女神の名を冠する存在によって(問題小説にあって)CEERN 装置が用いられる契機がもたらされたと描写されている]

とのことについての文献的事実としての論拠を挙げたわけだが、それを基点にさらにもって述べられること、

[デメテルというギリシャ神話の女神が【ペルセポネ】という(その娘にあたる)女神と同一視される存在であるとのことがあり、【デメテル】【ペルセポネ】【ヘカテ】という [エレウシス秘儀] という秘教儀式体系にあって崇められる三柱の女神らについては

【ペルセポネ ⇔ (置き換え) ⇔ ヘカテ]

という関係性もが成立している(その関係性にあつては【イシス】という [エジプトよりギリシャ・ローマに渡来した女神] への崇拜体系も媒介項として関わっている)。

そして、【ペルセポネ(⇔デメテル)】と置き換え可能な【ヘカテ】については同女神が【ケルベロス】と複合的に結びつくことがあり、それがゆえ、

【デメテル】⇔ (同一視の風潮あり) ⇔ 【ペルセポネ】⇔ (同一視の風潮あり) ⇔ 【ヘカテ】⇔ (際立っての記号論的接合性) ⇔ 【地獄の番犬ケルベロス】

との関係性から【デメテル】より【ヘラクレス第 12 功業の目標物であるケルベロス】のことが想起されるようになってもいる)。

また、【デメテル】⇔ (同一視) ⇔ 【ペルセポネ】とのことで浮上してくる【ペルセポネ】については —ケルベロス「ではなく」ヘレンという神話上の美女を介して— 複合的に [ヘラクレスの第 11 功業および第 12 功業と結びついている存在] となっているとのこともがそこにある]

とのことの出典については、典拠となる出典が極めて多岐にわたり、かつ、入り組んでおり、軽妙手軽に出所を紹介しきれるようなものではない。

であるから、同じくもの点については極めて長大なものとなっている本稿にての先立つ**補説 3**の部、

「(ワープロソフトの文字数集計機能を用いて確認したとの文量の話として)そこだけで計にして何十万字もの文量を割きもしての、「一意専心してのところながらも、」との箇所でありつつそこまでの文量をもってしての指し示しに努めての部である」

とのそちら**補説 3**の部、現存するローマ期古典から 19 世紀 20 世紀の学究論稿などの該当文献を数多挙げながら、何がどう、具体論として(表記のことを含む証明事項として)異論許さないかたちにて述べられるのかを十全に指し示している(「網羅的に指し示している」と同セクション内容を確認いただければ、と思う(きちんと目を通していただければ、すべて理解・納得いただけるであろうと請け合う)。

その点、本稿にての**補説 3**の部では

[尋常一様ならざる相互関係の例]

として直下続けて再掲しての通りの多重的关系性 —単体でならばいざ知らずも相互に連関を呈しながら成立しているとの多重的关系性— が確としてそこに実在することについて —多数の資料を挙げ委曲尽くしての解説に膨大な文量を割いて— 「ひたすらに実証的に」証することに努めてきた。

(以下、本稿従前の段で入念に解説してきたとの【ペルセポネを基準にしての多重的关系性】がいかようなものなのかについての(再掲しての)関係図式を挙げておく)

[ペルセポネPersephone] ⇔ (媒介項Medium: [冥界降下 descent to the underworldをなした女神としての特性] [双方が愛人としている神TammuzおよびAdonisの際立つての同質性]) ⇔ イナンナ・イシュタル Inanna / Ishtar.

イナンナ・イシュタルInanna/Ishtar ⇔ (媒介項Medium: [金星を神格化した存在 (divine personification of planet Venus)としての共通性] [冥界に双子の片割れエレシキガルEreshkigalおよびショロトルXolotlを持つとの共通性]) ⇔ ケツアルコアトルQuetzalcoatl ⇔ (媒介項Medium: [蛇と結びつく文明の接受者 — promoters of civilizations related with serpent— としての特性(アメリカ大陸に伝わる伝承および聖書に見るエデンの智慧の樹の実を食すことの教唆のエピソード)] [金星Planet Venusと結びつくとの特性] [期待を裏切るとのかたちで災厄をもたらした蛇としての共通性 — betrayal and disaster (the fall of Aztec civilization and Quetzalcoatl like conquistadors & the fall of man, betrayal and disaster caused by old serpent seen in "Revelation")—]) [アメリカ大陸 American Continent → アトランティスAtlantisとの見立てが存在し(e.g. Francis Bacon's Great Atlantis)、また、アトランティスAtlantis → 黄金の林檎の園 Garden of Hesperides (Atlantides) → エデンの林檎の園 Garden of Edenとの見立てが存在するとの背景]) ⇔ サタンSatan(ダンテ『地獄篇』Dante's Infernoに登場するルチフェロLucifero).

サタン(ダンテ『地獄篇』に登場するルチフェロLucifero) ⇔ (媒介項Medium: ダンテ『地獄篇』Infernoに見るケルベロス捕縛で終結するヘラクレスの計12の功業の後半部との際立つての近接性(continuity between Dante's Inferno and 12 labours of Hercules)、そして、その近接性を介してのダンテ『地獄篇』に登場する三面のルシファーと三面のケルベロスの接合性) ⇔ ケルベロスCerberus

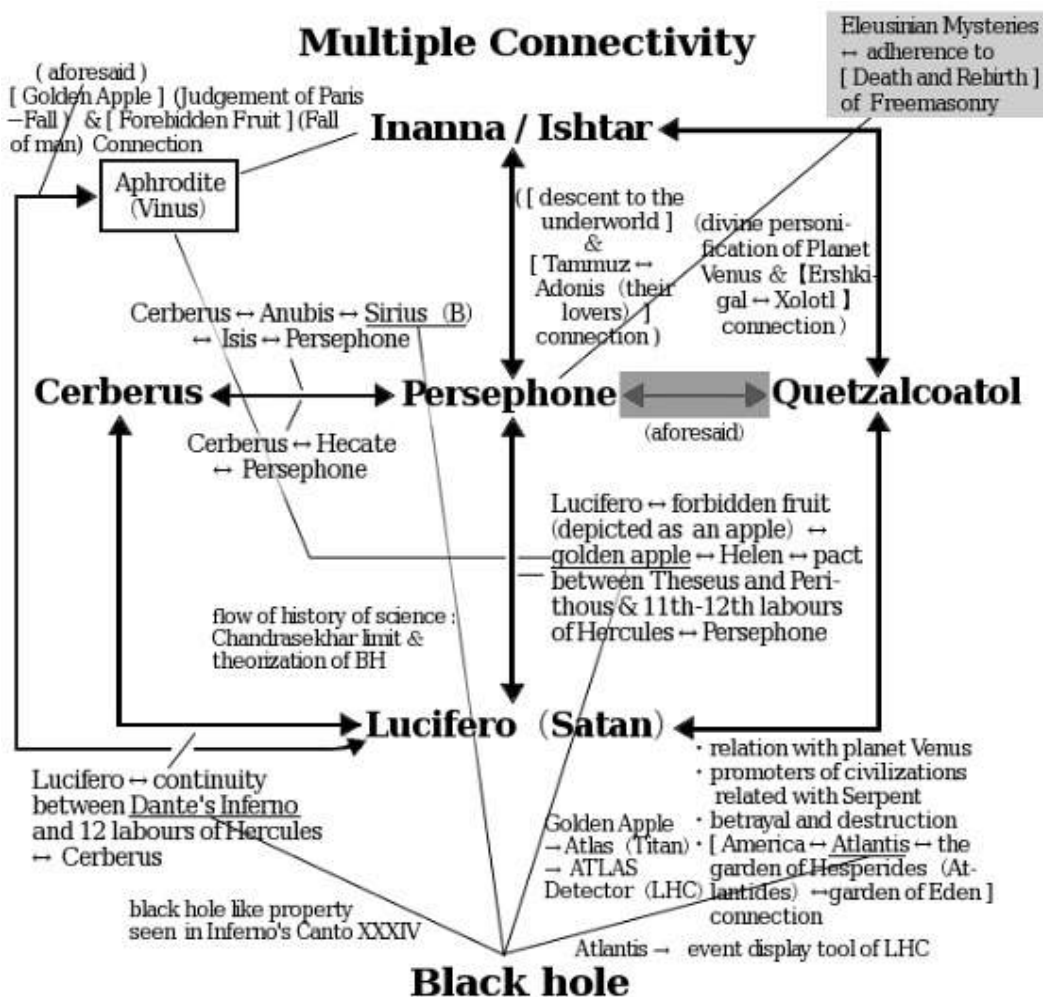
(以下、ケルベロスCerberusを介しての関係性がいかように多重的にペルセポネPersephoneに回帰するかの複数パターンを羅列するとして)

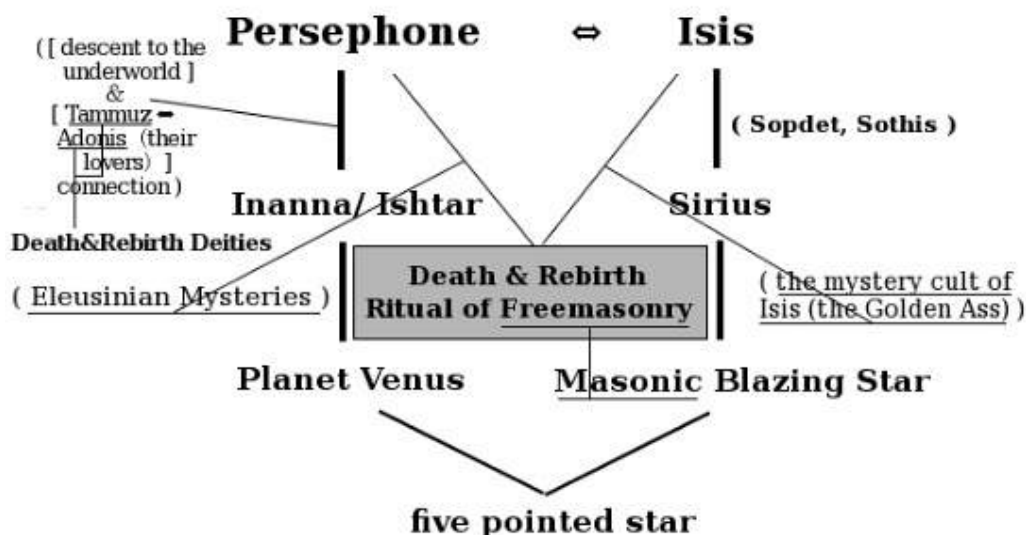
ケルベロスCerberus ⇔ (媒介項Medium: 本稿にての先の段で詳述に詳述を重ねてきたところとして、[ヘシオドスのTheogony『神統記』に見るところの50の頭を持つケルベロス fifty headed Cerberus]が[アヌビスAnubis]・[ヘカテHecate]といった別神格を通じてシリウスの伴星、50年の公転周期を持つ白色矮星シリウスBと奇怪無比に結びつくと述べられるだけの背景 — 例としてのプルタルコス古典に見る記述(e.g. "strange" description about [Isis = Sirius] of Plutarch's Moralia)— が存在) ⇔ シリウスB(SiriusB) ⇔ (媒介項Medium: エジプトよりのグレコ・ローマン・ワールド(古代ギリシャ・古代ローマ世界)への渡来神でもあった女神イシスの犬の星シリウスの体現神格としての特質) ⇔ イシスIsis ⇔ (媒介項: [ローマ期古典『黄金の驢馬』the Golden Assに見る三面構造のペルセポネ triple headed PersephoneやヘカテHecateとイシスIsisを同一視する叙述]あるいは[ペルセポネ・デメテルを崇拝するエレウシス秘儀 Eleusinian Mysteriesとイシスにまつわる伝承との類似性]) ⇔ [ペルセポネPersephone] (回帰)

ケルベロスCerberus ⇔ (媒介項Medium: 「双方ともに三つの頭を持つ存在であり」「双方共に冥界と強くも結びつく存在であり」「双方共に犬(番犬としての犬)と極めて濃厚に結びつく存在であり」「双方共に毒物トリカブトの縁起由来と強くも結びつけられている存在である」とのありよう) ⇔ ヘカテHecate ⇔ (媒介項Medium: 両者を同一存在とする、古典に見る記録的叙述内容や学識者らの申しよう) ⇔ [ペルセポネPersephone] (回帰)

ケルベロスCerberus ⇔ (媒介項Medium: 上にて言及と同文の媒介項)
 ⇔ ルシファーLucifero ⇔ (媒介項Medium: [金星と深くも結びつけられて
 いるとの存在らである、また、冥界下り(ないしは冥界=地獄落ちと幽閉)
 と関わる存在らである]との式「でも」ルシファーLuciferoと結びつくイナンナ・
 イシュタルInanna / Ishtarとアフロディテ・ヴィーナスAphrodite / Venusの伝わ
 るところの同質性を顧慮したうえでそこに見るアフロディテ・ヴィーナスの誘惑と関
 わるところの [黄金の林檎 the Golden Appleにまつわる誘惑] と [ルシファー
 (古き蛇)が関わりと伝わるエデンの禁断の果実 Forbidden fruit depicted as
 an appleにまつわる誘惑] における類似性までをも顧慮することで浮かび上がって
 くるとの関係性) ⇔ イナンナ・イシュタルInanna/Ishtar ⇔ (媒介項
 Medium: 上にて言及のものと同文の、[冥界降下をなした女神] [双方が愛人と
 している神の際立つての同質性]との媒介項) ⇔ [**ペルセポネPersephone**]
 (回帰)

ケルベロスCerberus ⇔ (媒介項Medium: 直上言及と同文の媒介項)
 ⇔ ルシファーLucifero ⇔ (媒介項Medium: 旧約聖書にあって登場の
 禁断の果実を林檎と見る歴史的視座の存在) ⇔ 林檎としてのエデンの誘惑
 の果実 Forbidden fruit depicted as an apple ⇔ (媒介項Medium: 人間の
 楽園追放をもたらしたとの誘惑の果実がトロイア内破をもたらすことになった黄金の
 林檎と結びつけられるだけの質的類似性 — 本稿にて詳述の [アフロディテ・ヴ
 ィーナスが勝利を見たパリスの審判 Judgement of Parisにまつわる特性とエデン
 の誘惑に伴う特性の記号論的連続性] や [黄金の林檎の園とエデンの園を同種
 のものと見るような視座が一部の人間にあったとの事情] に関わりとるの質的類似
 性 — の存在) ⇔ 黄金の林檎 the Golden Apple ⇔ (媒介項Medium:
 [黄金の林檎]の対価として差し出された絶世の美女ヘレンHelenと — ケルベ
 ロス捕縛がモチーフとなるヘラクレス12功業にて救出されることになったテセウス
 Theseusら誓約を介しての — ペルセポネとの連続性) ⇔
 [**ペルセポネPersephone**] (回帰)





ここまで論じたところで

Adrift Just off the Islets of Langerhans : Latitude 38°54'N, Longitude 77°00'13W (邦題) 『北緯 38 度 54 分、西経 77 度 0 分 13 秒 ランゲルハンス島沖を漂流中』(1974)

という作品が同じくも本当冒頭部より問題視してきたとの **Thrice Upon a Time (邦題) 『未来からのホットライン』**と同文に

【ヘラクレスの計 12 に及ぶ功業】、【(ヘラクレス第 11 功業に見る) 巨人アトラス】、【トロイア崩壊伝承に見るトロイア崩壊の原因たる(他伝承では巨人アトラスが在処を把握するとされる) 黄金の林檎】、【巨人アトラスともトロイア崩壊元凶たる黄金の林檎とも結びつけられてきたとのアトランティス沈没伝承】、【アトラスやアトランティスといった固有名詞を付されての LHC 実験におけるブラックホール生成論議に関わる事物】との要素らのうちの「複数」を特色として帯びつつ、かつ、【911 の事件の発生(態様)にまつわる予見的言及】ないし【ブラックホール人為生成問題にまつわる「先覚的言及」】の一方、あるいは、その双方の特徴を呈してい

るとの文物らが「不可解に」存在しているとの関係性の環に組み込まれている作品]

との側面を有しているとのことを指摘すべくもの話に一区切りをつける。

(:委細を省いて指し示しもしてきたことの [まとめ] をなせば、である。

問題視している小説 **Adrift Just off the Islets of Langerhans : Latitude 38°54'N, Longitude 77°00'13W** に関しては

【911の事件の発生の予言的事前言及とも受け取れる要素】

を「若干ながらも」具備しているとのことがある（ただしそれだけでは問題にならないようなところではある）。すなわち、表記小説表題にみとめられるランゲルハンス島の考案者と**【双子のパラドックス】**という科学概念の考案者の名には[姓名を構成するアルファベット12字中、10字(viの2字を除く10字)を[字の綴り順序込み]で共有している]との一致性がみとめられるとのことがあり、そして、**【双子のパラドックス】**となれば、1「911」年提唱のもの、また、「双子」関連のものとして双子のビルが攻撃された911の事件のことを想起させるとのことがありもすることになる。そして、表記小説タイトルにみとめられるこれ見よがしの座標軸—北緯38度54分、西経77度0分13秒との座標軸—はワシントンDC界限(ホワイトハウス界限)の座標軸となっているのだが、現実のホワイトハウス座標系とは多少ずれてもいるものながらもそちら座標軸一帯が先の911の事件にあつて攻撃目標とされていた(ペンタゴンのみならず極々近傍のワシントンDC界限、うち、ホワイトハウスや合衆国議事堂も標的にされていた)とのことが公式発表上の言いようとなっているとのことがあり、また、問題小説にみとめられるそうした座標軸はその他の意でもってしてもかぐわかしき側面を帯びているとの風がある(座標軸にみとめられる西経77度の**【77】**がいかように911の事件にあつて頻出を見ている数値なのかも先に解説しているところである)。そしてさらにものこととして、**【ブラックホールのことを主軸として扱い、双子のパラドックスまわりのところにて[911の事件の発生への事前言及]をなしているとの際立っての「他の」文物】**が実在している(実在してしまっている)とのことを本稿では既に示しているとのことがあり—具体的には **BLACK HOLES & TIME WARP Einstein's Outrageous Legacy (邦題)『ブラックホールと時空の歪み アインシュタインのとんでもない遺産』**との著作のその意で問題となる特性の細かき摘示をなしてきたとのことがあり—、それがゆえに、**【LHCによるブラックホール人為生成可能性問題にまつわる異様な先覚的言及】**を、事実、伴っていることとの絡みで「本来的には他の意味で着目すべき」作品として取り上げてきた**『北緯38度54分、西経77度0分13秒 ランゲルハンス島沖を漂流中』**にあつての**【双子のパラドックス】**と結びつきうる(「ブラックホール関連の」別作品ではまさしくも911の予見事象と通じている**【双子のパラドックス】**と結びつきうる)との側面の意味合いが「さらに重くもなる」とのことがある。

以上振り返ったような特性からひとつに **Adrift Just off the Islets of Langerhans : Latitude 38°54'N, Longitude 77°00'13W** は

【911の事件の発生の予言的事前言及とも受け取れる要素】

と結びつく側面があると述べるわけではあるも、同小説が

【ヘラクレスの12功業との結節点が観念できる作品】

「とも」なっているとのことを重要なところとしてここまでにて指し示してきた次第でもある。

すなわち、表記小説の中では**【ブラックホール人為生成問題の予見描写と解される(正気ならばそうとしか見えない)との描写】**を伴っての主人公の挙が実行された契機がギリシャの女神**【デメテル】**の名を冠する男の情報提供によつてもたらされたとしており、**【デメテル】**とくれば、デメテル娘ともされる**【ペルセポネ】**と同一視されること、また、**【ペルセポネ】**とくれば、**【ケルベロス】**と複合的なパスで繋がっているとのことがあ

る、そして、【ケルベロス】はヘラクレスの第 12 功業の目標物である(本稿でそれが何故、加速器実験と結びつくようになってきているのか仔細に解説してきたとの【黄金の林檎】がヘラクレスの第 11 功業の目標物となっている中、【ケルベロス】はヘラクレスの第 12 功業の目標物である)から **Adrift Just off the Islets of Langerhans : Latitude 38°54'N, Longitude 77°00'13W** は

【ヘラクレスの 12 功業との結節点が観念できる作品】

であるとも指摘するわけである —【デメテル】との存在(と【ペルセポネ】の繋がり合い)からヘラクレス 12 功業との関係が問題になるとしてきたことについては「牽強付会である(こじつけがましい)」と思われる向きもあらわれるかもしれないが、デメテル・ペルセポネ・ヘカテの[エレウシス秘儀]崇拝対象たる三大女神がいかようにしてブラックホール関連の問題に深くも結びついていると摘示できるのか、そして、同じくものがまたいかようにしてヘラクレス 12 功業の問題とも(ケルベロスを介して)接合しているのか、について専一に論じているとの本稿補説 3 の部をよくもご覧頂ければ、「そこに牽強付会な要素などない」とのこと、ご理解いただけることか、と思う—。

これにて[まとめ]の部を終えたい)

([補足]として —ここ枠内表記の[補足]の段は印象論・可能性論としてのきらいが強くなっているため、何であれば、無視していただいても構わない—

本稿冒頭部にあつての[事実 F]から[事実 J]にまつわる解説部では

Adrift Just off the Islets of Langerhans : Latitude 38°54'N, Longitude 77°00'13W (邦題)『北緯 38 度 54 分、西経 77 度 0 分 13 秒 ランゲルハンス島沖を漂流中』(1974)

という作品が特定の文学賞(優れたサイエンス・フィクション分野の作品に授与されるとのヒューゴ賞という賞状)の受賞態様から「なるべくして」**The Hole Man**『ホール・マン』という他の作品と著名 SF 傑作編にて連続掲載されている —(**Adrift Just off the Islets of Langerhans : Latitude 38°54'N, Longitude 77°00'13W** が 1975 年ヒューゴ賞中編分野受賞作品、**The Hole Man**『ホール・マン』が 1975 年ヒューゴ賞短編分野受賞作品となっている関係上、**the Hugo winners** との体裁定例化しての傑作選にて連続掲載されている) — とのこを問題視していた。

そちら『北緯 38 度 54 分、西経 77 度 0 分 13 秒 ランゲルハンス島沖を漂流中』とある程度の知名度を有する撰集シリーズにて連続掲載がなされているとの小説 **The Hole Man** 『ホール・マン』が

[重力波通信装置から漏れ出た極微ブラックホールが暴走、火星を呑み込む]

との粗筋を有していることから **Adrift Just off the Islets of Langerhans : Latitude 38°54'N, Longitude 77°00'13W** にあつての(皮肉を込めての表現として)「かぐわかしき」側面 —(【CERN 類似の架空の研究機関 CEERN の 15 兆電子ボルト加速器を登場させていること】【CEERN 由来のレーザー装置で主人公が黒々と渦を巻く底無しの自身の臍(へそ)の穴に自身の縮退化させての分身を送り込むとのストーリー展開を見せていること】に見る「かぐわかしき」側面) — を本稿前半部より問題視していたわけである。

に関しては、『北緯 38 度 54 分、西経 77 度 0 分 13 秒 ランゲルハンス島沖を漂流中』と『ホール・マン』の関係性を問題視していた折、

「問題となるそれら両作品 —— **Adrift Just off the Islets of Langerhans : Latitude 38°54'N, Longitude 77°00'13W** および **The Hole Man** の両作品—— については知名度を有した傑作選（英文 Wikipedia にもそれ専門の紹介ページが設けられている「アイザック・アシモフを解説者・編者にしてのもの」との体裁でのヒューゴ賞受賞作品を選び集めての撰集 **The Hugo Winners**）にてただ単純に賞の受賞形態から連続掲載なされていただけでなく、[一方の小説の主人公]のファーストネームの正式呼称と愛称が[他方の小説の作者]のファーストネームの正式呼称にして愛称となっている]

とのことをも指摘なしていた（具体的には「**The Hole Man** の作者がラリー・ニーヴンという名前でも知られる著名作家となっている、より正確には「**Larry (ラリー)**」**Niven** こと「**Laurence (ローレンス)**」**van Cott Niven** となっているのに対してハーラン・エリソン (**Harlan Ellison**) という作家の手になる『ホール・マン』との連続掲載が具現化している **Adrift Just off the Islets of Langerhans : Latitude 38°54'N, Longitude 77°00'13W** の主人公の名前がラリー・タルボット、「**Larry (ラリー)**」**Talbot** こと「**Lawrence (ローレンス)**」**Talbot** となっており、ラリーおよびその正式名称のローレンスを介してのつながり「も」がある」と指摘なしていた — 本稿前半部 [出典 \(Source\) 紹介の部 6](#) —)。

ここではその

[ブラックホールにまつわる作品とのことで問題になる小説らにつき [一方の作品の主人公のファーストネームの正式名称およびその愛称] が [他方の小説の作者のファーストネームの正式呼称およびその愛称] となっている] (ラリーおよびその正式名称のローレンスを介してのつながりがある)

とのことについて「さらに」[悪質な恣意的やりようであるとの可能性が伴っていること]を — 細々と微に入っている話とはなるのだが — 補足として取り上げておくこととする。

さて、筆者は[ブラックホール生成問題に関する露骨な先覚的言及をなしている「その他の」小説作品]として、

Thrice Upon a Time (邦題)『未来からのホットライン』

という作品にあって

[**ペルセウス座流星群 (Perseids)**と結びつけられての隕石で破壊された人工衛星より漏出した人造ウイルス禍に対する秘匿コード[**センチュリオン**]]

なるものが登場していることの意味性を先立って問題視していた (: 再述すれば、[【センチュリオンと繋がるケンタウロス、ヘラクレスの 12 功業\(うちの 11 功業\)に見るケンタウロスに由来するヒドラの毒についての寓意】](#)、[【ヘラクレス第 11 功業と LHC 実験の命名規則上での繋がり合い】](#)、[【ケンタウロスの名前を冠しての事物にまつわっての科学上の仮説と現実世界にてのブラックホール生成問題の関係性】](#)らの各点に具体的かつ客観的に通じているとの側面、先覚性帯びての側面が見出せるようになっていたとのこと、先に事細かに解説していた — つい先立っての [出典 \(Source\) 紹介の部 110 \(4\)](#) から [出典 \(Source\) 紹介の部 110 \(8\)](#) を包摂する部のこととなる —)。

そこに見る、**Thrice Upon a Time (邦題)『未来からのホットライン』**にあっての

[**ペルセウス座流星群 (Perseids)**と結びつけられての隕石で破壊された人工衛星より漏出した人造ウイルス禍に対する秘匿コード[**センチュリオン**]]

なるものがローレンス(ラリー)との名前「とも」ある種、結びついているとのことが **Adrift Just off the Islets of Langerhans : Latitude 38°54'N, Longitude 77°00'13W** と **The Hole Man** の間にて成立しているとの、

[[一方の作品の主人公のファーストネームの正式名称およびその愛称] が [他方の小説の作者のファーストネームの正式呼称およびその愛称] となっている] (ラリーおよびその正式名称のローレンスを介してのつながりがある)

との関係性に相通ずるところがあるようにもなっている (問題はそうもしたことがあることが【偶然の産物】で済むのか、あるいは、「そこからして」【恣意の賜物】であるのか、とのことであるとしつつも、とにかくも、重篤たりうるとの関係性が指摘できるようになっている)。

その点、まずもって書くが、

[ペルセウス流星群とは(それが先述のようにペルセウス座、そして、の中の、メデューサと結びつく悪魔の星アルコルと結びつくのみならず)キリスト教の聖人、**セント・ローレンス**こと[ローマのラウレンティヌス]と強くも結びつけられているとのことがある。というのも、殉教の際、火あぶりにされて、「こちらは焼けたから、もうひっくり返してよい」とローマ兵らに述べたなぞとの偉人伝(とされるが、常人には馬鹿げたマゾヒスティック・トピックにしか見えぬとの話)が伝わっている同聖人の末期の折が8月10日とされており、その日にペルセウス座流星群が観測されるがためにペルセウス座流星群は[**セント・ローレンスの涙**]と呼ばれているとのことがある]

と広く知られていることとなっている(出典として:諸種いくらでも言及なしている媒体が目につくが、目立つところでは英文 Wikipedia[Perseids](ペルセウス座流星群)]項目にて現行、“The earliest information on this meteor shower is found in Chinese annals in 36 AD. However credit for recognising the shower's annual appearance is given to Adolphe Quetelet who reported in 1835 that there was a shower emanating from the constellation Perseus. Some Catholics refer to the Perseids as the "**tears of St. Lawrence**", since 10 August is the date of that saint's martyrdom .”(訳として)「この(ペルセウス座流星群という)流星群についての最も初期の言及は紀元三六年の中国にての年代記に見出すことができる。しかしながら、同流星群の年単位出現にて記録したとの栄誉は[ペルセウス座の方向より放出見ている流星群がある]との報告を1805年になしたアドルフ・ケトレーに帰せられている。カトリック信徒のいくらかはこのペルセウス座流星群をもってして、その登場時期8月10日がそちら聖人の殉教日に該当するとのことで[**聖ローレンスの涙**]として言及することがある」と記載されているようなことがある)。

とすれば、表記のフィクション(**Thrice Upon a Time** (邦題)『未来からのホットライン』)にあっては

[[**セント・ローレンスの涙**] = [ペルセウス座流星群] と関わる隕石による破壊の結果、秘匿コード・センチュリオン(で呼び習わされての極秘対処策)が発動されることになった]

との筋立てが採用されているとも述べられるわけであるが、そこに見る秘匿コード・センチュリオンにまつわる話が

[[センチュリオン] と [ケンタウロ(ケンタウロス)] との間にはつながりがある]
⇒
[フィクションならぬ現実世界で [ケンタウロ・イベント] と呼ばれることになった]

現象のことが([高エネルギー宇宙線]関連の現象として)学者の世界で問題視されてきたとのことがあり、そちらケンタウロ・イベントに関しては[LHC実験のブラックホール生成可能性にあつて[宇宙線]現象が安全性論拠とされるに至つた]とのこととのつながりあいも観念されもするところとなっている
⇒(それゆえに)

[[ケンタウロとヒドラの毒の物語]はヘラクレス12功業のうちの第11功業およびヘラクレスの最期に関わつている。他面、ケンタウロは[小説 Thrice Upon a Time(邦題)『未来からのホットライン』]にあつての大量の極微ブラックホール生成後の人類絶滅を回避した後のウィルス禍を指してのコードネーム・「センチュリオン」とつながり、また、[ヘラクレス第11の功業と命名規則上、結びつけられているLHC実験にあつて中途(2001年以降)よりそれがなされうると肯定されるに至つたブラックホール生成挙動]ともつながる側面がある(ケンタウロ・イベント)]

とのおおよその流れから複合的に[ブラックホール生成問題]と関わつているとのことを仔細に論じてきたというのが本稿の先の段の内容である。

以上のような Thrice Upon a Time(邦題)『未来からのホットライン』に見る秘匿コード[センチュリオン]の特性([ペルセウス座流星群]こと[セント・ローレンスの涙])に由来するところとして発動された秘匿コード)から、

「ローレンス(愛称ラリー)という名称と結びつく作品ら、小説『ホール・マン』(重力波通信機より漏出した極微ブラックホール暴走を描くとの筋立ての作品であり、1974年にローレンス・ニーヴンことラリー・ニーヴンによって上梓された作品)および『北緯38度54分、西経77度0分13秒 ランゲルハンス島沖を漂流中』(1980年に世に出た Thrice Upon a Time 同様にLHCとブラックホール生成問題についての奇怪なる先覚的言及をなしている、その絡みにて『ホール・マン』との[連続関係]が問題となりもする作品であり、ローレンス・タルボットことラリー・タルボットを主人公とするのかたちで1974年初出の作品)のことを想起させもする」

とのこととの兼ね合いで

「[さらにもつての]恣意性介在の可能性」

が[ありうべきところ]として浮上してこようと述べるのである。

無論、上だけ述べれば、牽強付会(こじつけがましきところ)となるわけだが、だが、しかし、さらにもつてしての次のようなことらがある。

・1980年小説『未来からのホットライン』では[ローレンスの涙]こと[ペルセウス座流星群]と結びつけられた[秘匿コード・「センチュリオン」](これからしてフィクションならぬ現実世界の極微ブラックホール暴走可能性問題との絡みで問題となる命名規則とつながるものである)を振られての秘密作戦発令が発覚する前に「極微ブラックホールが加速器利用型レーザー核融合炉によって大量に生成されて」【バゴファント】と呼ばれる現象を引き起こしたとの内容を有している(:先の段の『未来からのホットライン』の粗筋紹介部で説明しているように【バゴファント】とは【バグ】(虫)と【エレファント】(象)の造語であり、(極微ブラックホールの漏出に原因を持つと臭わせるとのかたちで)[象[エレファント]クラス質量の虫[バグ]に刺されたように人体に穴が開くとの現象を指す — 英文 Wikipedia[Thrice Upon a Time]項目にて “ Shortly after the incident, strange events start occurring around the world, with so-called bugophants (a

blend of bug and elephant) drilling tiny, long, straight holes through a myriad of objects, from human bodies to telescope mirrors.” 「その僅か後、世界各地で奇妙な出来事が発生しだし、それは[[bugophants]といった現象名呼称を伴っての出来事]にして「微小なる物体から人体、そして、望遠鏡の鏡面部に至るまでドリルにて開けたような直線上の穴が開くとの出来事」となっていた」と記載されているところである——)。

他面、ローレンス・ニーヴンことラリー・ニーヴンの手になる 1974 年小説『ホール・マン』では[重力波通信機から漏出したブラックホール]が(直上言及の) [バゴファント]よろしくの効果を呈して犠牲者を殺す(偏執的なブラックホールへのこだわりから作中、[ホール・マン]と呼ばれることになっていた科学者を軽侮していたスペース・シップ・クルーが彼が馬鹿にしていた[ホール・マン]が開け放ったブラックホールの直撃を食らって死亡する—— 訳書『世界 SF 大賞傑作選 8』の『ホール・マン』掲載箇所にあつての p.270-p.271 にて(再度の原文抜粋するところとして) “リアは肩をすくめ、首をふった。「何による殺人だい? あの中にブラックホールがあるなんて、チルドレイは信じてもいなかった。あんたたちも、似たようなもんだ」唐突に、にやりと笑った。「裁判がどんなものになるか、考えてみろよ。検事が陪審団に、ことの次第に関する自分の考えを説明するところを想像するんだ。それにはまず、ブラックホールについて話さなきゃならない。つぎに量子ブラックホール。それから、兇器が発見できない理由、それが火星の中をつきぬけて動きまわっていることを、説明しなくちゃならないんだぜ! そこへいくまでに、笑いとばされて法廷からおん出されずにすんだとしても、その上さらに、原子よりも小さなそんなものがどうして人を殺せるのかというのを、説明しなくちゃならないんだ!” (引用部はここまでとする)との部位、原著 **The Hole Man** にては “Lear shrugged it off. "Murder with what? Childrey didn't believe there was a black hole in there at all. Neither did many of you." He smiled suddenly. "Can you imagine what the trial would be like? Imagine the prosecuting attorney trying to tell a jury what he thinks happened. First he's got to tell them what a black hole is. Then a quantum black hole. Then he's got to explain why he doesn't have the murder weapon, and where he left it, freely falling through Mars! And if he gets that far without being laughed out of court, he's still got to explain how a thing smaller than an atom could hurt anyone!" ”との部位にまつわるところである——)。

要するに、(それが科学的に正確な作品設定に関してのことか否かは置いておき)、

【ブラックホールによる災禍を斥けたものの、次いで、セント・ローレンスの涙と呼称されもするペルセウス座流星群に由来する人造ウィルス漏出の災禍(それは現実世界のブラックホール生成問題に通ずる命名規則を伴った秘匿コードを当該フィクション内で振られていた災禍でもある)に人類が襲われることになったと描かれる 1980 年小説『未来からのホットライン』】

と

【ローレンスというファースト・ネームの作家による 1974 年小説『ホール・マン』】

については、両作、

【極微ブラックホール凶器化にまつわっての「極めて特徴的なところでの」似通った描写】

を伴っている(暴走した極微ブラックホールが[弾丸]化して犠牲者の肉体を貫くなどとの独特な内容がそれである)とのこともが「ある」わけである。

・上のようなことから離れて「より巨視的に見て」、『未来からのホットライン』および『ホール・マン』と複合的連続関係を呈する『北緯 38 度 54 分、西経 77 度 0 分 13 秒 ランゲルハンス島沖を漂流中』が双方ともどもに、

【ヘラクレスの計 12 に及ぶ功業】、【(ヘラクレス第 11 功業に見る)巨人アトラス】、【トロイア崩壊伝承に見るトロイア崩壊の原因たる(他伝承では巨人アトラスが在処を把握するとされる)黄金の林檎】、【巨人アトラスともトロイア崩壊元凶たる黄金の林檎とも史的に(一部識者によって)結びつけられてきたとのアトランティス沈没伝承】、【アトラスやアトランティスといった固有名詞を付されての LHC 実験におけるブラックホール生成論議に関わる事物】との要素らのうちの「複数」を特色として帯びつつ、かつ、【911 の事件の発生(態様)にまつわる予見的言及】ないし【ブラックホール人為生成問題にまつわる「先覚的言及」】の一方、あるいは、その双方をなしているとの文物らが「不可解に」存在している]

との関係性の環に組み込まれているとの「特異な」小説らとなっているとのこと「も」ある。

であるから(元よりそうした恣意性の臭いが伴っているのであるから)、[[セント・ローレンスの涙]と異称される[ペルセウス座流星群]に起因するところとして発動される秘匿コード・センチュリオンがブラックホール人為生成と並び立つものとして過去改変して防がなければならないものとして描かれているとの作品たる『未来からのホットライン』]

と

[ローレンス・タルボットことラリー・タルボットを主人公とする作品たる『北緯 38 度 54 分、西経 77 度 0 分 13 秒 ランゲルハンス島沖を漂流中』]

らの間にてさらにも連続関係が設定されている可能性がますますもってして観念されもする。

以上、[セント・ローレンスの涙]を引き合いに出しての話は

「煙がないところに煙を見出している(こじつけなしている)」

「偏執狂的な因数分解への力の入れようであり、それでもってして、無理矢理、関係性を見出そうとしている」

と[事態]を把握していないとの向きに見られかねない話、そして、相応の人種にそうした側面を(そこだけピックアップして)揶揄されかねないとのきらいある話とはなるのだが、ハウエバーの問題として、といったこととて[問題たりうるところ]として一考に値するものであると筆者としては「当然に」強調する次第である(：そちらの話が「うがち過ぎのもの」であっても他の不快な関係性が確としてそこにあること自体には何の違いはなく(現実に異論など生じようもないところで小説 *Adrift Just off the Islets of Langerhans : Latitude 38°54'N, Longitude 77°00'13W*『北緯 38 度 54 分、西経 77 度 0 分 13 秒 ランゲルハンス島沖を漂流中』および小説 *Thrice Upon a Time*『未来からのホットライン』の各作品にあっては[ブラックホール人為生成にまつわる奇怪なる予言的言及]が科学界の発表とは何ら平仄の合わぬところとして極めて具体的なかたちで表出を見ているとのことがある、そうした長大なる本稿の冒頭部より問題視しているところの事実関係には何の違ひもなく)、といった中で、ここでの話のようにこじつけがましいと受け取られかねないことを言及することは却(かえ)ってよくなかったか、とも思っているのだが、その一方でそこからして一考に値することでもあろうと考えもして、内心にての秤量の結果、同じくものことを記述をなすこととした)。

ここまでに、(要らぬところとなったかもしれないが)、

[セント・ローレンス(ラリイ)を介しての『未来からのホットライン』とそれに先立って世に出ていた『北緯 38 度 54 分、西経 77 度 0 分 13 秒 ランゲルハンス島沖を漂流中』および『ホール・マン』のありうべき恣意的結合関係]

についての補足を終えることとする。

以上もってして

Thrice Upon a Time (邦題)『未来からのホットライン』(原著版初出 1980)

Adrift Just off the Islets of Langerhans : Latitude 38°54'N, Longitude 77°00'13W (邦題)『北緯 38 度 54 分、西経 77 度 0 分 13 秒 ランゲルハンス島沖を漂流中』(原著版初出 1974)

の両二作 —(長大なるものとせざるをえなかったとの)本稿の前半部からその問題となる[際立つての先覚的特性]について論じてきたとの作品ら— ともどもが

【ヘラクレスの計 12 に及ぶ功業】、【(ヘラクレス第 11 功業に見る)巨人アトラス】、【トロイア崩壊伝承に見るトロイア崩壊の原因たる(他伝承では巨人アトラスが在処を把握するとされる)黄金の林檎】、【巨人アトラスともトロイア崩壊元凶たる黄金の林檎とも史的に(一部識者によって)結びつけられてきたとのアトランティス沈没伝承】、【アトラスやアトランティスといった固有名詞を付されての LHC 実験におけるブラックホール生成論議に関わる事物】との要素らのうちの「複数」を特色として帯びつつ、かつ、【911 の事件の発生(態様)にまつわる予見的言及】ないし【ブラックホール人為生成問題にまつわる「先覚的言及】】の一方、あるいは、その双方をなしているとの文物らが「不可解に」存在している]

との現実的状況 —本稿にて核として問題視なしてきた現実的状況— に接合する作品らとなりもしている

とのことにまつわっての解説部を終えるとし、これ以降の段では、である。第一段階として本稿ここまでの内容の振り返りをまずもってしてなしたうえで、次いで、第二段階として「何が」「いかようにして」問題になるのかについての、

[意味(普通に「そうである」ととらえられるところの意味)に着目しての分析]

[確率論的分析] (計数的分析/大学の数学を高等学校レベルでの知識で対応できるようにグレード・ダウンしての話)

を事細かになしていくこととする (本稿が —この期に及んでの比喩的口上ではなんなのであるが— 魂の無い、あるいは、魂が無いに等しい木偶(でく)・くぐつのような存在「ではない」との向きら、状況・足下の問題を理解することが出来、かつ、「早晚」殺されると分かりきってれば運命に抗いもしようとの向きらに顧みられるとの一縷(それ以上たりえはしないだろうとも見ている)ことを念頭にそこまでの分析を事細やかになしておくこととする —本稿筆者は「自身のやろうとすることを邪魔し手折ろうとの筋目の者は走狗であろうとその他質的に下らぬ人種であろうと赦さぬ」との心根でやっているわけだが、他面、「志士は溝壑(こうがく)に在るを忘れず、勇士は其の元(こうべ)を喪うを忘れず(理想抱いての者は常に自身の屍が溝・谷に曝されることになる結果を覚悟し、また、勇気もてことなさんとする者は常に自身の頭を斬られることを忘れはしない)」といった観点を胸中抱きながらもの抵抗をなすとの自

身の生き方・価値観、先の知れた命であるうえに卑しきものを絶対に良しとせぬ中での自身のそうした生き方・価値観を(仮に心ある稀有なる向きでも)読み手には押しつけるつもりはまったくない(彼我の力の差、種族としてのマクロコスモス、そして、銘々、個としてのマイクロコスモスが置かれた状況を斟酌すれば、押しつけなどできぬこと、当然のことであろうと見ている)。でありつつも、自身としては命を賭して、最後に確認できるだけのことは全力を賭して確認するつもりである——)。

本稿にてここに至るまでいかなることの摘示に努めてきたのか、その 振り返り表記として

以下、よりもって進んでの分析部に入る前にあつての第一段階としての

[振り返り表記 —続いての意味論的分析の内容にも通ずるところの振り返り表記—]

をなすこととしたい。

(以降、「長くもなつての」振り返り表記の部に入るとして)

(まずもって述べるが)

本稿のつい先立つての部にては本稿冒頭部より取り上げてきた 70 年代初出の予言的作品、すなわち、

[LHC に際立って近いとの「兆単位電子ボルト」を実現する欧州加速器 (「70 年代」往時運用 CERN 加速器に対して出力が 200 倍を超える、だが、今日の LHC に [ほんの微差にしかすぎない] とのかたちで出力が極めて近いとの架空世界の欧州加速器) を持ち出しつつものブラックホール生成に通ずる「露骨な」予見的言及 —(それは[兆単位の電子ボルトの極小領域への一極集中投下によるブラックホール生成]が新規理論による登場のために観念されるようになるよりも[かなり前]のことであるために「時期的に奇怪。」と判じられるとの[予見的言及]でもある)— が作中にてなされているがゆえに問題となる作品]

としての、

Adrift Just off the Islets of Langerhans : Latitude 38°54'N, Longitude 77°00'13W
(邦題)『北緯 38 度 54 分、西経 77 度 0 分 13 秒 ランゲルハンス島沖を漂流中』
(1974)

という作品が同じくも本稿冒頭部より問題視してきたとの、

Thrice Upon a Time(邦題)『未来からのホットライン』 (「1980 年」原著初出の同『スライス・アポン・ア・タイム』、2008 年 9 月 10 日にあつて火入れを見た直後、一端、長期稼働停止となり、2009 年年末から再度本格稼働開始しもした現実世界の LHC 実験 (1994 年に装置建設の正式承認を見ている加速器実験) のことを露骨に想起させるように【2009 年年末から 2010 年年初にかけての[欧州加速器](核融合炉付

設型加速器)による世界の終末】を描いていたと際立っての先覚的小説となっている —表記小説では加速器敷設型核融合炉にて数百万個の極微ブラックホールが生成されている(そしてそれが早晚地球を呑み込む)と描写される一方で現実世界では1998年に提唱された新規理論の帰結として2001年からきたるLHCの運用で「一年1000万」に迫ろうと個数の安全な極微ブラックホール生成が提唱されるようになったといった意味で際立っての先覚小説となっている— とのことを先に紹介した作品でもある)

と同じくものこととして、

【ヘラクレスの計12に及ぶ功業】、【(ヘラクレス第11功業に見る)巨人アトラス】、【トロイア崩壊伝承に見るトロイア崩壊の原因たる(他伝承では巨人アトラスが在処を把握するとされる)黄金の林檎】、【巨人アトラスともトロイア崩壊元凶たる黄金の林檎とも史的に(一部識者によって)結びつけられてきたとのアトランティス沈没伝承】、【アトラスやアトランティスといった固有名詞を付されてのLHC実験におけるブラックホール生成論議に関わる事物】との要素らのうちの「複数」を特色として帯びつつ、かつ、【911の事件の発生(態様)にまつわる予見的言及】ないし【ブラックホール人為生成問題にまつわる「先覚的言及」】の一方、あるいは、その双方をなしてもいるとの文物らが「不可解に」存在している]

との関係性の枠組みに組み込まれている作品であるとのことを指摘してきた。

その点、直上表記の関係性の枠組みに適合する事例として本稿にていかようなことを指摘してきたのかについて —(さらに後続する段にての分析部に入る前段階として)— ここでは振り返っての表記をなすこととする。

【(振り返りもしての)本稿前半部の流れとして】

本稿前半部では

【LHC実験におけるブラックホール生成にまつわっての「奇怪なる」先覚的言及】

が見受けられるとのことを示したうえで今日のLHC実験、ひいては、(より包括的に述べて)【加速器とブラックホールおよびワームホールの生成問題関連事物】については

【巨人アトラス —トロイア崩壊の原因となった[黄金の林檎]の所在地を知るとの伝承が存する巨人/ヘラクレス第11功業に登場の世界を支える存在—】

【アトランティス —欧州一部識者の間に[黄金の林檎(巨人アトラスが在所を知ると伝わっている黄金の林檎)の園]と結びつける見解があったとの陸塊名にして国家名—】

【ヘラクレス —計にして12に及ぶ功業を負い、それを達成したことで知られるギリシャ神話上の著名な英雄(メデューサの如き多頭の蛇の眷族を多く退治しもしていると伝わる同ヘラクレスが第11番目に負った功業が[黄金の林檎]を入手せよ、とのものであり、そちら功業の中で彼は巨人アトラスとネゴシエーションをなしている)—】

【トロイア —[黄金の林檎を巡る争いから生じた一大戦争によって(木製の馬の計略によって引導を渡されるとのかたちで)滅したと伝わる伝説上の都市]にして(目立って指摘されることではないが)【アトランティスと「多重的・記号論的に」つながる存在ともなっていることの指し示しに本稿で努めてきた存在】—】

との各要素らとの[結びつき]が複合的に見てとれる — 一個人の主観など問題にならぬかたちで指摘なせるようになっているところとして複合的に見てとれる — とのことの[証示]に努めるとの方向性を明らかにした (証して示すとの趣旨で[証示]とのあまりもって使われぬ言葉を取っても用いているのは「主観など問題にならぬし問題にすべきところではない」とのこを強くも訴えていくとの本稿筆者の強い意志の現われがゆえである)。

そも [証示] に努めるとの方向性を明確にしたうえでまずもっては以下の関係性がそこにあるとのことの摘示を — 膨大な文字数を費やしながらも — なした(把握未了ならば振り返って是非とも批判的検討(確認)をなしていただきたいところとして、である)。

[[古代アトランティスに対する蛇の種族による次元間侵略] との内容を有する(一見すれば妄言体系としての) 神秘家由来の申しようが今より 70 年以上前から存在している — (所詮はパルプ雑誌に初出の小説『影の王国』(1929)などの筋立てをその言い回し込みにして参考にしたのであろうと解される形態でながら前世紀、第二次世界大戦勃発の折柄(1939年)から存在している) — とのことがある] (: 出典(Source) 紹介の部 34 から 出典(Source) 紹介の部 34-2 を包摂する解説部を参照されたい)

→

[(上にて言及の) [アトランティスに対する蛇の種族の次元間侵略] との内容(の一見する限りはもの神秘家妄言録の類) と類似する側面を有しての [恐竜人の種族による「次元間」侵略] という内容を有する映画が [片方の上階に風穴が開きつつ][片方が崩落する] とのツインタワー — (恐竜人の首府と融合するとの設定のツインタワー) — をワンカット描写にて登場させながら 1993 年に封切られているとのことがある(子供向け荒唐無稽映画との体裁をとる『スーパーマリオ魔界帝国の女神』がそちら作品となる)。その点、映画公開前の数ヶ月前、1993 年においてツインタワーの地下駐車場が爆破テロに曝されているとのことも本稿前段にて解説しているところとしてあるのだが、そうした往時においての状況では当該描写の際立った予見性を否定できないとのことがある、それがゆえに問題になる、と述べるわけである] (: 出典(Source) 紹介の部 27 を包摂する解説部を参照されたい)

→

[ある種、911 の先覚的言及をなしているとも述べられるような性質を伴っての上記映画は[他世界間の融合]といったテーマを扱う作品ともなっていたわけだが、そうした内容([異空間同士の架橋]との内容)と接合する[ブラックホール][ワームホール]の問題を主色として扱い、また、同じくものところで[911 の事件の発生に対する先覚的言及とも述べられる要素]をも「露骨」かつ「多重的に」帯びているとの著名物理学者由来の著作 — BLACK HOLES & TIME WARP Einstein's Outrageous Legacy『ブラックホールと時空の歪み アインシュタインのとんでもない遺産』という著作 — が(申し分としては無論、頓狂に響くところなのだが)原著 1994 年初出のものとして「現実に」存在しているとのことがある] (: 疑わしきにおかれては(羅列しての表記をなし)本稿にての出典(Source) 紹介の部 28, 出典(Source) 紹介の部 28-2, 出典(Source) 紹介の部 28-3, 出典(Source) 紹介の部 31, 出典(Source) 紹介の部 31-2, 出典(Source) 紹介の部 32, 出典(Source) 紹介の部 32-2, 出典(Source) 紹介の部 33, 出典(Source) 紹介の部 33-2 を包摂する解説部を参照されたい。表記の部にては BLACK HOLES & TIME WARP

Einstein's Outrageous Legacy『ブラックホールと時空の歪み アインシュタインの
とんでもない遺産』という1994年初出の作品が[双子のパラドックス(1911年提
唱)の機序の利用による二点間時差の応用]／[91101(2001年9月11日を意味
する数)という郵便番号で「はじまる」地を実験に対する[空間軸上の始点]に置い
てのタイムワープにまつわる解説]／[2000年9月11日⇒2001年9月11日と接
合する日付けの実験に対する[時間軸上の始点]としての使用]／[他の「関連」書
籍に見るブラックホール⇔グラウンド・ゼロとの対応付け]を[僅か一例としての思考
実験]にまつわるところで「すべて同時に具現化」なさしめ、もって、[双子の塔が崩
された「2001年の」911の事件]の前言と解されることを事件勃発前にいかよにな
しているのかについて(筆者の主観など問題にならぬとの客観事実に関わるところ
として)仔細に・緻密に摘示している。また、それに先立つところ、本稿にての**出典**
(Source)紹介の部29から**出典**(Source)紹介の部30-2を包摂させての解説部
ではその前言問題に関わるところの[双子のパラドックス](1911年提唱)というも
のと[際立っての類似性]を呈しているとのことが指摘される浦島伝承(爬虫類の
亀の化身と人間の異類結婚譚との側面も初期(丹後国風土記)にては有していた
浦島子にまつわる伝承)が欧州ケルト伝承と数値的に不可解な一致性を呈して
いることを解説、その「伝承伝播では説明がなしがたい」ような特異性についての
指摘「も」なしている)

→

[**加速器**] および [(時空間の)ゲート開閉に関わる要素] および [爬虫類の異
種族の侵略]らの各要素のうち複数を帯びているとの作品「ら」が従前から存在
しており、の中には、**【カシミール・エフェクト】**といった後に発見された科学概念
(カシミール効果は安定化したワームホール構築に必要と考えられるようになった
エキゾチック・マターという物質の提唱に関わっている概念ともなる)につき尋常
一様ならざるかたちにて先覚的言及なしているとの1937年初出の作品『フェッ
センデンの宇宙』— [人工宇宙にての爬虫類の種族による人類の皆殺し]が描か
れているとの作品— も含まれている] (:疑わしきにおかれては**出典**(Source)
紹介の部22から**出典**(Source)紹介の部26-3を包摂する一連の解説部を参照
されたい)

→

[**CERNのLHC実験**は「実際の命名規則の問題として」1990年代の実験プラン
策定段階にての1992年(米国にて2004年に放映されていたテレビドラマ『ス
ターゲイト・アトランティス』といったものを包摂する一連のスターゲイト・シリーズの
嚆矢たる映画作品『スターゲイト』が1994年の公開にて世に出ることになった折よ
り2年程前)からもってして[アトラス—ヘラクレスの11功業にて登場した[黄金
の林檎]の在所を把握すると伝わる巨人—]との名詞と結びつけられはじめてお
り(ATLASディテクターという[後の]2000年代よりブラックホール観測「をも」なし
うるとされるに至った検出器]にまつわる名称が1992年に確定したとも.)、また、
同LHC実験、後にその[アトラス]と語義を近くもする[アトランティス]ともブラッ
クホール探索挙動との絡みで結びつけられるに至っている(そのうへ、同LHC
実験にあってブラックホールの生成を観測しうるツールと銘打たれているイベント・
ディスプレイ・ツールのATLANTISについてはプラトン古典『クリティアス』記述

から再現できるところの古のアトランティスの城郭構造を意識させるようなディスプレイ画面を用いているとの按配での堂の入りよう「とも」なっている)。 CERN の LHC 実験と結びつけられての巨人アトラスは「黄金の林檎の在処(ありか)を知る巨人」として伝承に登場を見ている存在でもあるが、そこに見る「黄金の林檎」は「トロイア崩壊の因」となっていると伝わるものである。 とすると、CERN が ATLAS 検出器でブラックホールの観測 —その観測が「科学の発展に資する」と中途より喧伝されるに至った即時蒸発を見る極微ブラックホールらの観測— をなしうると後に発表するに至ったことは「黄金の林檎(トロイア崩壊の原因)の在り処を知る巨人」によってブラックホール探索をなさしめていると呼ばわっているに等しい] (:疑わしきにおかれては[出典\(Source\) 紹介の部 35](#)から[出典\(Source\) 紹介の部 36\(3\)](#)および[出典\(Source\) 紹介の部 39](#)を包摂する解説部を参照されたい)

→

[「古の陸塊アトランティスの崩壊伝承」は「古のトロイアに対する木製の馬の計略による住民無差別殺戮「後」の洪水による城郭完全破壊伝承」(Posthomerica 『トロイア戦記』)と同様の側面を伴っているものとなる(アトランティスおよびトロイアの双方とも「ギリシャ勢との戦争の後」、[洪水]による破壊を見たとの筋立てが採用されている)。また、「巨人アトラスの娘」との意味・語法での女神「アトランティス」—(アトランティスは「古の陸塊の名前」以外に Daughter of Atlas との響きを伴う語ともなり、そうした名詞が LHC の ATLAS 検出器に供されているイベント・ディスプレイ・ツールに供されている ATLANTIS の名にも転用されている)— については「トロイア崩壊の原因となった果実たる黄金の林檎の園が実るヘスペリデスの園」と「史的に結びつけられてきた」とのことがあり、といった絡みから、「黄金の林檎の園」は(アトラスと共に CERN の LHC 実験の命名規則とされているとの)「伝説上の陸塊アトランティス」の所在地と複合的に結びつけられもしていたとのことがある] (:疑わしきは[出典\(Source\) 紹介の部 40](#)から[出典\(Source\) 紹介の部 45](#)を包摂する一連の解説部を参照のこと)

→

[「ヘラクレスの 11 功業」というものは「アトラス(1992 年より LHC 実験関連事項としてその命名が決められた ATLAS と同じくもの名を冠する巨人)」および「黄金の林檎(トロイア崩壊の原因)」の双方と通じているもの」となっているが([出典\(Source\) 紹介の部 39](#))、先の 911 の事件の前言と解せられる要素を「多重的に」含む特定作品らがそうした「ヘラクレスの 11 功業」と濃厚に関わっていると指摘出来るとのこと「も」がある。

具体的には(ヘラクレス第 11 功業と 911 の事件の関係性を示すべくも挙げた作品としての)『ジ・イルミナタス・トリロジー』という 70 年代ヒット小説などは【ニューヨーク・マンハッタンのビルの爆破】
【ペンタゴンの爆破】(時計表示を 180 度回転させて見てみると時計の 911 との数値が浮かび上がってくるとの 5 時 55 分にペンタゴンが爆破されたと描写 — [180 度反転させることで 911 との数値が浮かび上がる数字列]をワールド・トレード・センター(の崩落)などと結びつけている文物「ら」は(複数形で)他にもあり、本稿でそれら特性について解説してきた中での一例描写となる—)
【「ニューヨーク象徴物」と「ペンタゴン象徴物」の並列配置シンボルの作中にての多用】

【米軍関係者より漏洩した炭疽菌の災厄の描写】（現実の911の事件では事件後間もなくして米軍関係者と後に判明したブルース・イヴィンズ容疑者の手になるところの炭疽菌漏洩事件が発生しているが、そちら現実の状況と照応するような「米軍関係者より漏洩した炭疽菌の災厄」との筋立ての具現化）

【関連作品からもってしてのツインタワー爆破・ペンタゴン爆破描写】

との要素らを帯びつつヘラクレスの第11功業と接合している（『ジ・イルミナタス・トリロジー』という作品ではヘラクレス第11功業に登場する「黄金の林檎」が作品の副題に付されていたり、黄金の林檎を描いたものとされるシンボルが何度か図示までされて登場してきているといったことがある）（：疑わしきにおかれては**出典**（Source）紹介の部 37 から**出典**（Source）紹介の部 37-5 を包摂する一連の解説部、オンライン上より全文現行確認できるようになっているとの原著よりの原文抜粋および国内で流通している訳書よりの抜粋をなしつつ「どこが」「どのように」[911の事件に対する奇怪なる前言と呼べるようなパート]となっているかにつき事細かに解説してもいるとのそちら一連の解説部を参照されたい）

→

[上にて言及の『ジ・イルミナタス・トリロジー』（【ヘラクレス功業と結びつき、かつもってして、911の予見的言及と結びつきもする作品】の例としてまずもって挙げるところとしたとの70年代欧米圏ヒット小説）は

【蛇の人造種族を利用しての古代アトランティスの侵略がなされる】

【アトランティスと現代アメリカのペンタゴンが破壊されたことによってそこに封印されていた「異次元から魂を喰らうべくも介入してくる存在」の解放がなされる】

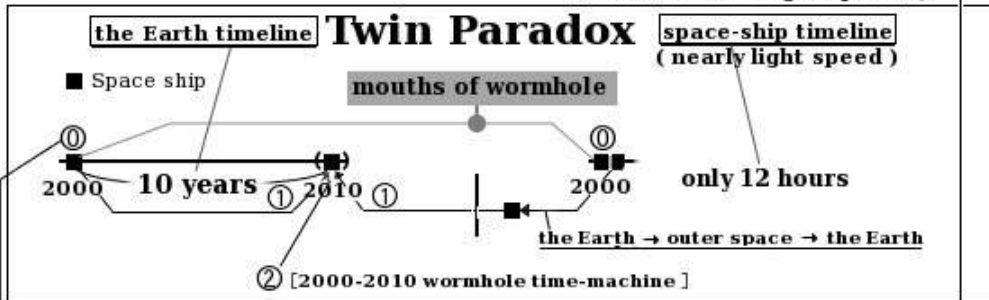
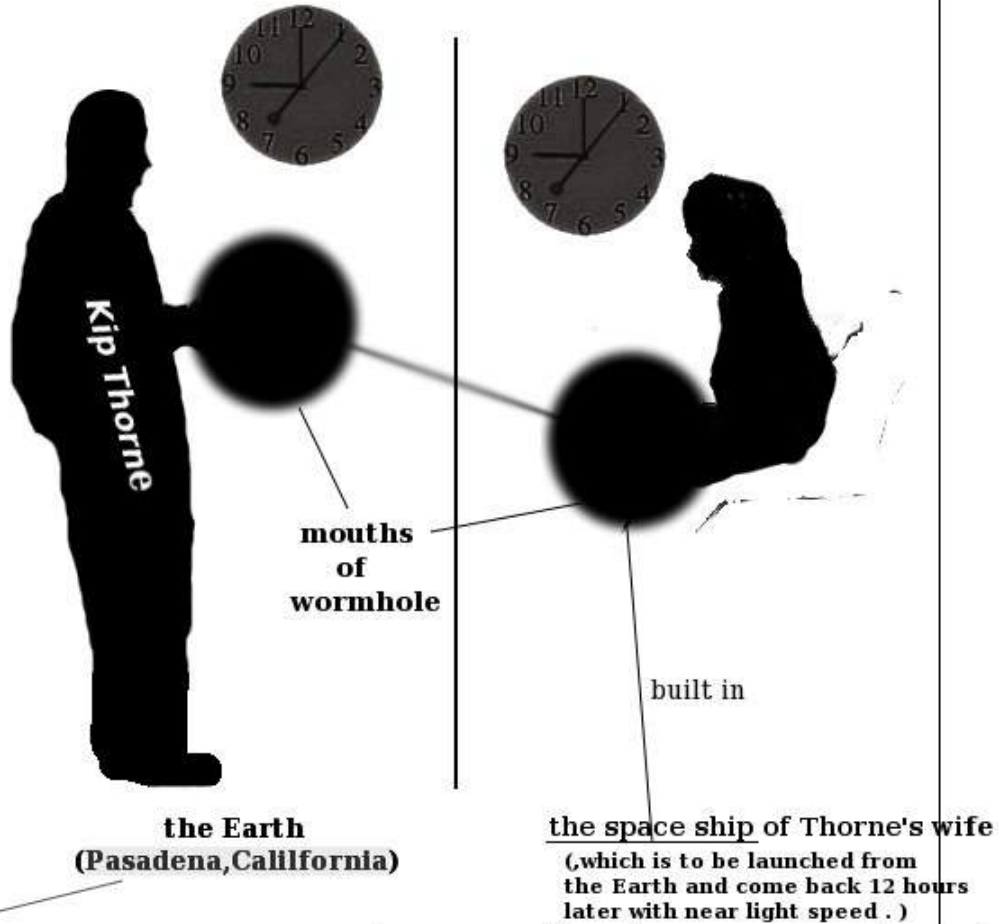
といった作中要素を内に含んでいる小説作品「とも」なる——そこに見る「蛇の人造種族を利用しての古代アトランティスの侵略」という筋立ては一見すると先述の神秘家話柄（蛇の種族によるアトランティスに対する異次元間侵略）と同様により従前より存在していたロバート・エルヴィン・ハワードという作家の小説『影の王国』をモチーフにしていると解されるところでもあるのだが、であろうとなかろうと、奇怪なる先覚性（ナイン・ワン・ワンの事前言及）にまつわる問題性はなんら拭（ぬぐ）えぬとのことがある——。

といった「異次元との垣根が破壊されての干渉の開始」との筋立ては上述の著名物理学者キップ・ソーンに由来する著作、**BLACK HOLES & TIME WARP Einstein's Outrageous Legacy**『ブラックホールと時空の歪み アインシュタインのとんでもない遺産』という著作が（異次元との扉にも相通ずる）「ブラックホール」「ワームホール」の問題を主色として扱い、また、同じくものことで「911の事件に対する前言とも述べられる要素」をも「多重的に」帯びているとの作品として存在しているとのことと平仄が合いすぎる程に合う（：疑わしきにおかれては**出典**（Source）紹介の部 37 から**出典**（Source）紹介の部 37-5 に加えての**出典**（Source）紹介の部 38 から**出典**（Source）紹介の部 38-2 を包摂する一連の解説部の内容、そして、**出典**（Source）紹介の部 28 から**出典**（Source）紹介の部 33-2 を包摂する解説部の内容を参照されたい）

（直上言及なしたところの相互に結節しあう要素を伴っての関係性について本稿前半部にて挙げた図解部の再掲を以下なすこととする）

**Black Holes and Time Warps: Einstein's
Outrageous Legacy (1994)**

famous thought experiment



① **starting point**
 January 1, 2000 9:00 a.m.
 (-UTC offset like style (yyyy/mm/dddd/hh) : 2000/1/1/9 (:00))
 -hh/dd/mm/yyyy : 9/1/1/2000 far-fetched?)

starting point
 Pasadena (ZIP codes 91101 -)

(2001) 911 & Twins (Paradox, 1911)

10 years = 12 hours

[Wormhole→Timemachine] thought experiment

Pasadena (ZIP codes 91101 -)

(2001) 911 & Twins (Paradox, 1911)

10 years = 12 hours

[Wormhole↔Timemachine] thought experiment

Charles Seife's

Zero: The Biography of a Dangerous Idea (2000)

(containing a similar illustration of the same thought experimentation as Thorne's one)

(asserting that the watershed between year 2000 and year 2001 is vague)

(making a prophetic comment :
" Zero is so powerful because it unhinges the laws of physics. It is at the zero hour of the big bang and the ground zero of the black hole that the mathematical equations that describe our world stop making sense. However, zero cannot be ignored. Not only does zero hold the secret to our existence, it will also be responsible for the end of the universe.")

remind

The Illuminatus! Trilogy The Golden Apple (1975 novel)

(extract)

He and his associates decide on a desperate expedient, unleashing the Iloigor Yog Sothoth. They will offer this unnatural soul-eating energy/being from another universe its freedom in return for its help in destroying Guard's movement. Yog Sothoth is imprisoned in the great Pentagon of Atlantis on a desolate moor in the southern part of the continent. Being on the southern plain, which was relatively uninhabited, the Pentagon of Yog Sothoth becomes the center of a migration of people who survived the disaster. Emergency cities are set up, those dying of radiation sickness are treated. A second Atlantis begins to take root. And then, from the Himalayas, the ships of the Unbroken Circle come swooping down on one of their raids. Lines of Atlantean men and women are marched to the walls of the Pentagon and there mowed down by laser fire. Then explosive charges are placed amid the heaps of bodies and the masked, uniformed men of the Unbroken Circle withdraw. There is a series of explosions; horrid yellow smoke goes coiling up.

先述のように荒唐無稽小説の体裁をとる70年代小説『ジ・イルミナタス・トリロジー』は黄金の林檎などと濃厚に結びつきながら、911の先覚的描写を多分に含む作品となっている。のみならず、同作、[アトランティスに対する蛇人間が用いられての侵略] [アトランティスのペンタゴン(正五角形封印)の破壊による異次元介入存在の解放]といった筋筋を有しており、といったことまでもが他の関連事象との兼ね合いで問題になる(との論拠を呈示してきたのが本稿である)

I think the delusive story (of Illuminatus Trilogy) itself based on the Cthulhu Mythos is not worth noticing. But, I consider metaphors and prophetic aspects of the novel are worth noticing.

プラトン古典に見る陸塊アトランティスには古のトロイアとの接続性がある。第一。黄金の林檎の園がアトランティスと同一視されるが、黄金の林檎はトロイア崩壊の原因である。第二。女神カリュプソの島(オーギュギア島)もアトランティスと同一視されるが、オーギュギアはトロイア崩壊の学術の発するところ、オデュッセウスがいざなわれた島である。第三。ギリシャ軍との戦争の結果、城市が海に呑まれたとのアトランティス伝説帰結はそのままトロイア戦争の異伝に見る帰結と重なるようになって(『トロイア戦記』)。

Atlantis

- Golden Apple → the garden of Hesperides
- Odysseus → the island of Calypso

destruction of Troy

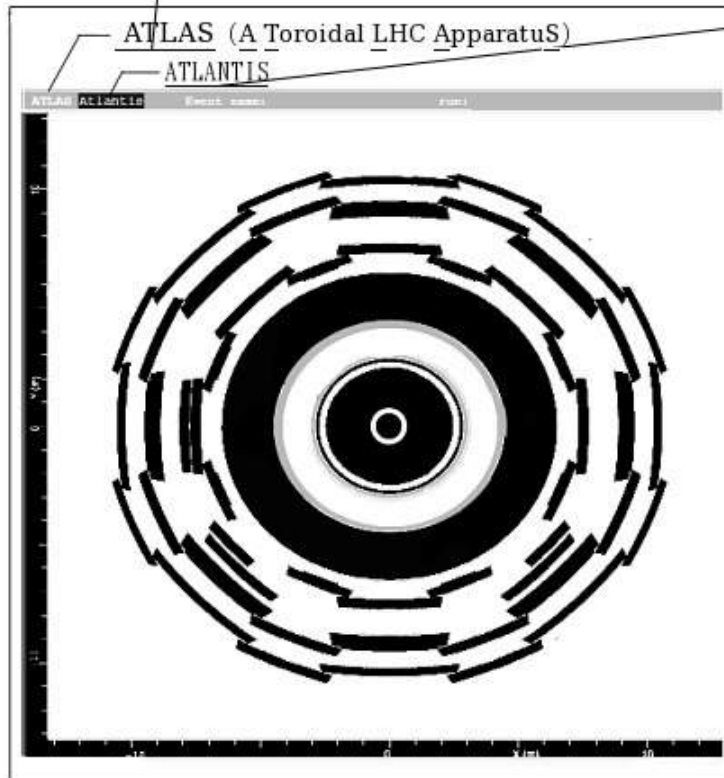
になっている（『トロイア戦記』）。第四。イタリアの地史関連文物にトロイア創建者ダルダネスとアトランティスの開闢王たるアトラス王と同じ名の王を血縁とする記述が存在する。以上のことがアトランティス・コネクションについて挙げられもする。

phase1. Wooden Horse & massacre
(phase2. Deluge of water)

similar

" The sea Dashed o'er it, and the roaring torrents still rushed on it, swollen by the rains of Zeus; And the dark surge of the wide-moaning sea still hurled them back from mingling with the deep, Till all the Danaan walls were blotted out beneath their desolating flood. Then earth was by Poseidon chasm-cleft: up rushed Deluge of water, slime and sand, while quaked Sigeum with the mighty shock, and roared the beach and the foundations of the land Dardanian. So vanished, welmed from sight, That mighty rampart. Earth asunder yawned, And all sank down, and only sand was seen, When back the sea rolled, o'er the beach outspread far down the heavy-booming shore. All this The Immortals' anger wrought." — Smyrnaeus Quintus (The Fall of Troy)

(11th labour of Hercules)



先述のようにブラックホールやワームホールの類を生成する可能性がここ数十年で想定されるようになったLHC実験であるが、同実験では「生成が科学の進歩に資する」とされるブラックホール、そのブラックホール生成関連の命名規則としてATLANTISやATLASといった命名規則が用いられている（うち、Event DisplayをなすためのATLANTISについてはそのディスプレイ画面がプラトン古典から再現できるアトランティスの中央島王城の構造を想起させるものとなっていること「も」がある）

[micro black hole generating event] detection

以上のことが[文献的事実]の指摘のみから現実に指し示せるようになってしまっていることの証示をなし終えた上で同じくもの本稿前半部ではさらに

[ルシファー]（欧州の代表的古典、具体的にはジョン・ミルトン『失樂園』にて[[蛇]に変じて[林檎]をもってして人類の墮落をもたらしたサタン]と表される存在のことである）

に関する古典らにあつて

[[今日の視点で見てのブラックホール「的なる」もの] にまつわる記述]

が(多層的に、かつ、相互に関連するかたちで)見受けられるとのことの指摘をなし — 古典の中にブラックホールのことがお目見えしている、まさしくもの予言だ、などと(それだけ聞けば)馬鹿な申しようを「いきなり」前面に押し出そうとしているのではない。同じくもの点については「古典の中にどういうわけなのか、「今日の視点で見ての」ブラックホールに通ずる特性が複合的に具現化している」との[文献的事実] (Philological Truth) を問題視、そのうえ

で、にまつわっての[偶然たることの望み薄さ]を問題視しているのである——、次のことらの指し示しをなしてきた。

(以下、ダンテ『地獄篇』とミルトン『失樂園』の描写がいかようにもってして【今日的なブラックホール理解】に通ずるものとなっているのかについてまとめもしていたところの本稿従前の段を振り返っての表記として)

本稿にての**出典(Source)紹介の部 55**から**出典(Source)紹介の部 55(3)**を包摂する部までにては次の **i.** から **iii.** のことらの摘示に努めてきた。

i

ダンテ・アリギエーリ『地獄篇』には

[今日、物理学分野の人間らが研究対象として取り扱っているとのブラックホールとの「質的」近似物]

が描かれているとの[現象]が認められる(奇態なことではあるが、【文献的事実】に依拠しての現象としてそういうことが見てとれる)。

具体的には

A. [ダンテらが「一度入ったらば[悲嘆の領域]に向けて歩まざるを得ず一切の希望を捨てねばならない」との[不帰の領域]にまつわる隻句(文学を愛好するような者の間では著名な『神曲;地獄篇』地獄門隻句)を目にしたところから入って最終的に到達した[悲嘆]を体現しての地点]

B. [重力] —(古典『地獄篇』それ自体にて **To which things heavy draw from every side**[あらゆる方向から物の重さが引きつけんとする地点]と表されているところに作用している力) — **の源泉と際立って描写されている場**(地球を球と描いての中心ポイント)]

C. [(「悲嘆の」川コキュートス)にて(静的描写として)罪障がゆえに**凍りついた**者達が、と同時に、(動的描写として)「永劫に粉碎され続けている」との地点]

D. [[光に「語源」を有する存在](ルチフェロ)が幽閉されている地点]

との要素をあわせて具備した[『地獄篇』にての地獄踏破にあつての最終ポイント](コキュートス・ジュデッカ領域)にまつわる描写が

A. [「一度入ったらば二度と出れない」との(事象の地平線の先にて)の領域]

B. [重力の源泉となっている場]

C. [外側(生者)の観測者から見れば(静的描写として)被吸引者が

「時が止まったような状況」になりつつも(動的描写として)その被吸引者本人(死者と化した者)から見れば「粉碎され尽くしている」との場]

D. 「光さえもが逃がれられぬ」とされる場]

との全ての要素を具備したブラックホール特性と共通のものとなっているとのことが現実にある。

ii

他面、ジョン・ミルトン『失樂園』にあつて「も」

「今日の物理学上の話柄にあつてのブラックホールの「質的」近似物」が描かれているとの[現象]が認められる。

具体的には

E. 「果てなき(底無し)の暗黒領域」

F. 「大きさ・「時間」・「場所」が無意味となる領域」

G. 「自然の祖たる領域」

とのミルトン『失樂園』に見るアビス(地獄門の先にある深淵領域)にまつわる描写が

E. 「底無しの暗黒領域」

F. 「時空間(時間と空間)の法則が破綻する(「時間」と「空間」が本来通りの意をなさなくなる)領域」

G. 「それをもって自然の祖であるとする観点が存する場」

とのブラックホール特性と共通のものとなっているとのことが現実にある(※続く段に付しての補うべくもの出典(Source)紹介の部 55(3)を参照のこと)。

iii

ダンテ『地獄篇』にあつての、

「今日的な理解にあつてのブラックホール近似物の描写(於て:コキュートス)」

とミルトン『失樂園』にあつての同じくもの、

「今日的な理解にあつてのブラックホール近似物の描写(於て:アビス)」

は双方別個に別のブラックホール特性との近似性を呈するとのものであるが、「加えもして極めて奇怪なことに」その双方ともどもが

[ルシファーによる災厄]

[地獄門の先にある破滅・悲劇に関わる通路]

と結びつけられているとのことがある。

以上、i. から iii. と区切ったことらにつき、まとめれば、『地獄篇』および『失樂園』との両古典を合算して見た際に、

[おなじくも[ルシファーによる災厄]および[地獄門(と描写されるもの)の先にある[破滅][悲劇]への通路]との両要素と結びついたポイント]

に関わるところで

- A. [[不帰の領域]にまつわる隻句(『地獄篇』地獄門隻句)を目にしたところから入って最終的に到達した「悲嘆」を体現しての地点] (『地獄篇』コキュートス)
- B. [重力の源泉と「際立って」描写されている地点] (『地獄篇』コキュートス)
- C. [(静的描写として)外側から見た際に罪障がゆえに「凍りついた」者達がそこに横たわっている、と同時に、(動的描写として)当事者から見れば「永劫に粉碎され続けている」との地点] (『地獄篇』コキュートスの中枢ジュデッカ)
- D. [[光に語源を有する存在](ルチフェロ)が幽閉されている地点] (『地獄篇』コキュートスの中枢ジュデッカ)
- E. [[果てなき(底無し)の暗黒領域] (『失樂園』アビス)
- F. [大きさ・「時間」・「場所」が無意味となる領域] (『失樂園』アビス／17世紀成立の『失樂園』の刊行時には時間と空間を有機的の一体と見る相対性理論に通ずる発想法は無論、なかった)
- G. [自然の祖たる領域] (『失樂園』アビス)

との要素らを「全て兼ね備えての」ありようが具現化している— 一文献的事実に依拠してそうだと摘示できるところとして具現化している— と述べられるようになっており、そうしたありようが現代物理学の発展にて呈示されるようになったとの【「今日的な観点で見ての」ブラックホール像】と共通性を呈している、すなわち、

- A. [[「一度入ったら二度と出れない」との(事象の地平線の先にて)の領域] (ブラックホール内側)
- B. [重力の源泉となっている場] (ブラックホール)
- C. [(静的描写として)外側(生者)から見れば被吸引者が「時が止まったような状況」になっているとのことがありつつも(動的描写として)その被吸引者本人(死者と化した者)から見れば「粉碎され尽くしている」との場] (ブラックホール)

D. [「**光さえもが逃がられない**」とされる場] (ブラックホール内側)

E. [「**底無し**の**暗黒領域**」] (ブラックホール)

F. [「**時空間の法則**が**破綻**する(「時間」と「空間」が本来通りの意をなさなくなる)領域」] (ブラックホール)

G. [それをもって**自然の祖**であるとする観点が存する場] (ブラックホール)

との特徴を全て兼ね備えたものとしての「「今日的な観点で見ての」ブラックホール像」と共通性を呈していると摘示できるように「なっている」とのことがある。

ここで次のことらについて「も」(従前摘示の内容の確認がてら)言及しておくこととする。

第一。

ダンテ『地獄篇』と(今日的な観点で見た場合の)ブラックホールの特性が結びつくといった発想は筆者の独創によるところではない(生き死にに関わるプラクティカルな領域にあっては一人合点の弊を帯びての主観先行の[独創]など本来的には問題視するに値しないことである。当然に筆者とてその程度のことは弁えているつもりである)。同じくもの点について部分的に示唆していた人間も今までにいた—やりようが([**勇気**]の問題なのか[**自由度**]の問題なのか何なのか)あまりにも不徹底に失するがゆえに問題なのだが、類似の点について示唆していた人間も今までにもいた—。の中には、はきと何が問題になるのか指摘しない、具体的にどこがどう一致性の範疇に入るのか何ら指摘なしていないとのやりようをとっていた(であるから、性質が悪いともとれるわけだが)との[著名なる科学者ら]が幾人も含まれており、彼らダンテ『地獄篇』とブラックホールのことを結びつけての言及をなしていた向きらとしての著名な科学者らについては[**スティーブン・ホーキング**] (車椅子のカリスマ物理学者として知られる著名人)、[**レオナルド・サスキンド**] (弦(ひも)理論の大家として知られる有力物理学者/その不誠実なやりようについて本稿の先だつての段で言及しているとの有力物理学者)、[**クリフォード・ピックオーバー**] (研究機関の研究員でもあり、有名なサイエンス・ライターでもあるとの向き)、[**キップ・ソーン**] (通過可能なワームホール概念を煮詰めたことでも有名なカリスマ物理学者。同男はダンテ『地獄篇』をブラックホールとはきと結びつけているわけではないが、自著冒頭部より登場させているブラックホールに[**冥府**][**あの世**]との名前を与え、[**地獄篇**]とブラックホールとの接点を臭わせている風がある)の各人らの名を—彼らのまさしくもの言い様の伝の引用をなすとともに—本稿の先立っての段(**出典(Source)紹介の部 55**)で紹介している。

第二。

【ダンテ『地獄篇』とブラックホールの結びつけをなしている先人らの言及事実】のことに触れたうえで述べるが、ダンテ『地獄篇』がブラックホールのことを想起させるものであるとのことについては次のような事情「も」がある。

→ダンテ『地獄篇』でダンテおよび師父と慕われてのヴェルギリウスが向かう先は

[「**光を語源とする存在＝ルシファーが閉じ込められ、逃れえぬ状況に陥っての**】**【重力の中核】**としての**氷地獄**]

であると『地獄篇』作中にてはきと明示されている。

その点について本稿にての**出典(Source)紹介の部 55**の段では片足を

中世の暗黒時代(ダークエイジ)に囚われていたとも解されるルネサンス期初期の人間であるダンテが地球を球形に見立てているのみならず、地球の中枢(にして地獄の中枢)が

[重力の本源たるところである]

と記述していることの意味合い、そして、重力が何たるかを理解しているが如き書きようをなしていることの意味深長さについて(浅学の身ながらもできるかぎりの)解説を講じている。

およそ次のようなかたちにて、である。

→重力とはそもそも何か。それは現代科学にあつて「次のように」定義されるに至っているとのものである。

(以下、重力定義として)

「重力とは、」[引力(質量に起因するところとしてあまねくも働く物と物とが引き合う力)と遠心力(地球の回転に伴う慣性の力)の合力]であるとされており、そして、(時間と空間を一体化した[時空]を観念するに至ったとの)アインシュタイン以後の観点では[物質(質量あるいはエネルギー)に由来する時空の歪み(カーバチュアー)に起因する力]と表されるものである(巨大な質量・エネルギーが空間に歪みを発生させ、時空のシートないしトランポリンの上に鉄球を載せた際にそれが周囲のものを引きずる力として具現化するのが重力であるといった説明がよくなされている)」。

他面、ダンテ『地獄篇』ではダンテが向かった地獄の中心地点が[球形をなす地球の中心地点]

と描写され、かつもつて、

[【重さ(質量)「が」引きずる力】が等しくも働く中心的ポイント]

とのかたちにての描写もがなされているとのことがある 一本稿 [出典](#)

(Source) [紹介の部 55](#)にて(ダンテに師父と慕われてのヴェルギリウスがダンテに語りかけるパートを収めての Henry Wadsworth Longfellow (ヘンリー・ワズワース・グッドフェロー)、アメリカではじめてダンテ『神曲』を翻訳した19世紀の同文人の手になる英訳版『地獄篇』よりの引用をなしたところとして) “ That side thou wast, so long as I descended; When round I turned me, thou didst pass **the point To which things heavy draw from every side**, And now beneath the hemisphere art come Opposite that which overhangs the vast Dry-land, and 'neath whose cope was put to death The Man who without sin was born and lived. Thou hast thy feet upon the little sphere Which makes the other face of the Judecca. Here it is morn when it is evening there. ” (拙訳として)「(地獄の中枢地点へ向けて地下へと)私が下へ下へと下っていた際だけなのだよ、君(thouは「君」の古語)のいる方面が[(地球の半球の)通り過ぎた向こう側]だったのは、私が(地獄の底を突きぬけて)反転し振り返った折、(脇にいた)君はもはや[あらゆる方向から物の重さが引きつけんとする地点]を通過していたわけだ。そして、いまや我々は(地球の)半球の下側、そう、乾いた大地に覆われ罪なくして生まれ生きた御仁、そのうえで殺された御仁(設定上、イエスのことである)のおられた(地球の)半球の反対側にいるのだ。足をもってジュデッカ(地獄の最下層たる氷地獄コキユートスの中心部)の反対側をなす矮小な半球の上に置いているのである。あちらの半球で夜ならばこちら側の半球では朝なのである」との記述を引いているとおりである(ポイントとなるところは[地球が球体であり各地に時差が生じている]と描写されていること、そして、[ダンテらが通り過ぎた地球中枢たる地獄中枢地点が the point To which things heavy draw from every

side[あらゆる方向から物の重さが引きつけんとする地点]である]と描写されていることである) —)。

そうした一事をとってからして[際立っての先覚性]が現われていると述べても決して言い過ぎにならない。

端的に述べれば、重力について

[引力(質量に起因するところとしてあまねくも働く物と物とが引き合う力)と遠心力(地球の回転に伴う慣性の力)の合力]
[物質(の質量・エネルギー)による時空の歪みに起因する力(質量=重さ「が」周囲を引き込む力)] (「重いボール(質量を伴った物体)がトランポリンのシート部としての時空間に歪みを生じさせるそのありようが重力である」と筆者含む門外漢に分かり易くも説明が講じられているところのありよう)

としての[科学的説明]がなされるようになった(「アインシュタインの後の世にあって」なった)ところをダンテが『地獄篇』にて地獄中枢(たる地球中心)をして

[重さ(質量)「が」引きずる力が等しくも働く中心的ポイント]

と描写しているとのことからして先覚性との意で際立っていると解されるようになってもいる(ダンテの重力観はアインシュタインの相対性理論登場後の重力観、【質量が周囲の時空を引きずる力】とのそれに近いとも)。

→また、ブラックホールというものの存在が 20 世紀になってより問題視されだしたとのその初期、[重力の中枢たる凍った世界]であると表されてもいた(ことも問題と見える)。それにつき、英文 Wikipedia [Black hole] 項目にあってからして現行、以下のような記載がなされているところとなっている。

(直下、英文 Wikipedia [Black hole] 項目にあっての History (理論史) の節に認められる現行にての記載内容よりの引用をなすとして)

Oppenheimer and his co-authors interpreted the singularity at the boundary of the Schwarzschild radius as indicating that this was the boundary of a bubble in which time stopped. This is a valid point of view for external observers, but not for infalling observers. Because of this property, the collapsed stars were called "frozen stars", because an outside observer would see the surface of the star frozen in time at the instant where its collapse takes it inside the Schwarzschild radius.

(入念に補いもしての拙訳として)

「オッペンハイマー(訳注:重力崩壊に対する理論を煮詰めもしてブラックホール理論の旗手ともなっていたかのマンハッタン計画の主導者ロバート・オッペンハイマー)および彼の共著者ら — (訳注:文脈上、Tolman—Oppenheimer—Volkoff limit こと[トルマン・オッペンハイマー・ヴォルコフ境界]という星の重力崩壊の区切り点にまつわる理論を提唱したオッペンハイマーの理論展開にあたっての論稿共著者ら) — は

[[シュヴァルツシルト半径](訳注:本稿にての**出典(Source)紹介の部 65(3)**でも解説しているように物体がその半径内に押し込ま

れるとブラックホールができあがるとの円形領域の半径で思索対象となる物体の[質量]によってそちら[半径]が変動するとのものの境界面にあつての特異点(訳注:そこを越えると従来の法則が成り立たなくなり際限なくもの重力崩壊プロセスが進むとのポイント)]

をして

[これは[時間]が停止を見る泡の境界を示しているのであろう]と解釈していた。

こうした見方は外側の観測者ら(訳注:ブラックホールの外側の観測者ら)にとっては適正なる見方だが、ブラックホールに落ちこむ観測者らから見れば、適正なる見方ではない。

こうした属性がゆえに、[縮退星](訳注: **collapsed star** はブラックホールという言葉が生み出される前にブラックホールを指して用いられていたところの一呼称である)は

[frozen stars; フローズン・スターズ(凍り付いた恒星)]

とも呼ばれていた、というのも外側の観察者はその星がシュヴァルツシルト半径の内側へ向けて崩壊していくまさにその場、その瞬間を[凍り付いた恒星の外側]とのかたちで見るからである(訳注:ここにての[**frozen stars**]との呼称についての解説については引用元とした英文 Wikipedia[**Black hole**]項目にて現行は **Ruffini, R.; Wheeler, J. A. (1971). "Introducing the black hole". *Physics Today* 24 (1): 30–41.**との出典が紹介されている。そちら出典表記に見る **Wheeler, J. A.**ことジョン・アーチボルト・ホイラーはブラックホールとの呼称を生み出した著名物理学者のことを指す)」

(補ってもの訳を付しての引用部はここまでとする)

表記のウィキペディアからの引用部(「たかが、」ものウィキペディアともされようものだが、上の記述に関しては正鵠を射ているとのこと、容易に確認できるところの部位)に見るように

「外側からの観察者が見た場合には[時が凍り付く]が如く様相を呈するために初期、(内側の存在は凍ったようなものの中で即時粉碎されてもいる)ブラックホールは[フローズン・スター](凍り付いた恒星)との呼び名を与えられていたとのことがある」

一方でのこととして

「ダンテ『地獄篇』では地獄の中核 —光すらもが逃れえぬとされるブラックホールよろしくも光とのラテン語に語源を有する存在ルシファーが幽閉されている地獄の中核— が【重力の中核ポイント】にして[生者]から見た[死者]が静的に凍りつきながらも永遠に粉碎され続けているとの【氷地獄】の中心地点となっているとの描写が見受けられる」

わけである。

そうしたところひとつとって論じたいうえでも

[古典(『地獄篇』)内容と今日的な理解で見たブラックホール

の間に[アナロジー(類似性)]を認める見方]

に無理がないとのこと、お分かりいただけるか、とは思う(：そして、問題なのは、そうした[類似性]が「他にも」この世界には横たわっているとのことがあり、そして、そこに相応の意味性もが「多重的に」伴っていると指摘できてしまえるようになってきている(なっている)ことである)。

(『地獄篇』らについての振り返っての表記はここまでとする)

以上のような古典ら先覚的描写(ダンテ『地獄篇』およびミルトン『失樂園』に見る先覚的描写)の指し示しに通ずるところとして本稿では次のことらの指し示し「にも」また注力なししてきた。

[**黄金の林檎**]についてはそれを[**エデンの禁断の果実**]を結びつける視点が欧州一部識者より呈されてきたとことがある(出典(Source)紹介の部51)。また、[**トロイア崩壊に至る黄金の林檎に起因する争い**]と[**エデンの果実に手を出したことの楽園喪失**]のそれぞれの物語の間には現実には「複合的な純・記号論的類似性」が存するとの指摘がなせるようになっており(出典(Source)紹介の部48から出典(Source)紹介の部51を包摂する解説部の内容を参照されたい)、同じくものこと—[トロイア崩壊に至る黄金の林檎に起因する争い]と[エデンの果実に手を出したことの楽園喪失]の繋がり合い—が「奇怪も甚だしきことに」大航海時代の特定文明崩壊を巡る過程、[蛇の神による信仰がアステカ文明にもたらした惨状]と記号論的に接合しているとのことまで「もが」ある(出典(Source)紹介の部51から出典(Source)紹介の部54(4)を包摂する解説部)。それにつき、祝賀すべきとされた蛇の神ケツアルコアトルの再臨の年(一の葦(あし)の年;セーアカトル)にあつてのスペイン人征服者ら来寇の意味合いを[神の再臨]と結びつけたために容易に滅ぼされたとされるアステカ文明で崇められたまさにその蛇の神ケツアルコアトルが[聖書の古き蛇;エデンでの誘惑をなした蛇]との共通属性を幾点も伴っているとの指摘がなせるようになってきているとことがある(なかで本稿では実際にそれらの点について指し示してきた)うえに**ケツアルコアトルを崇めてのアステカ文明が栄えていた新大陸アメリカは「黄金の林檎の果樹園」とも記号論的に通ずるところがあると見られてきた領域となり、そして、同アメリカ大陸は「アトランティス」に同定されて「きた」領域でもある**とのことがある、[**エデンの園←→黄金の林檎の果樹園**]との関係と併せて思料すべきこととしてある(出典(Source)紹介の部52など)]

[ダンテ『地獄篇』と同様に[地獄に追放されたルシファーに起因する災厄][地獄門の先の領域]との絡みで[「今日的な意味で見ての」ブラックホール]の類似物が「どういうわけか」お目見えしているのが著名古典たるミルトン『失樂園』となるのだが(出典(Source)紹介の部55から出典(Source)紹介の部55(3)を包摂する解説部を参照のこと)、その『失樂園』で主要なるモチーフとされている楽園喪失をもたらしたエデンの林檎(ミルトンは[知恵の樹の実]を[林檎]と明言している)に関して問題となるところとして、である。ミルトン叙事詩『失樂園』にあつての[**今日的に見た上でのブラックホール類似の特性—時間と空間が意味を失う底無し暗黒領域にして自然そのものの祖として描写されての特性—**]を帯びた[**Abyss;深淵**][**領域をサタンが横断する部**]の内容が地理的にトロイア崩壊譚と結びつけられているものとなっている、のみならず、[アッシュールバニパル王の図書館より再発見された『ギルガメシュ叙事』]との関連性までも「時期的に不可解に」(明示できる

【脇にての表記として】：本書のp.153からp.177にあつては(一部従前内容を整理するのカタチでもって)ありし日の大御所作家アーサー・クラーク作品らがいかようにして問題となる側面を帯びているのかについての解説を講じてきた。の中ではアーサー・クラーク代表作であるかの2001: A Space Odysseyが【**ブラックホール関連事物**】としての側面を帯び、また、【**911の予見的的事物**】としての特性を帯びていることをも指摘していた→

ところとしてギルガメシュ叙事詩の発掘による「再」発見前、それがゆえに、文化伝播が観念しがたいとの意で時期的に不可解に見出せるものとなっているとのことすらもある(出典(Source)紹介の部 59 から出典(Source)紹介の部 60 (2) を包摂する解説部を参照されたい)。そして、洪水伝承と結節するところで[蛇による不死の草の略取]との結論が描かれている『ギルガメシュ叙事詩』に関して述べれば、それが多重的に[ヘラクレス(の黄金の林檎の物語と関わってくる 11 番目の功業)との結びつき]を呈していることもが摘示できるようになってしまっているとのことがある(出典(Source)紹介の部 63 から出典(Source)紹介の部 63 (3) を包摂する解説部)]

[ミルトン『失樂園』と「時期的に不自然に」内容上の記号論的類似性を有する(と直上言及しもしての)『ギルガメシュ叙事詩』。そちら『ギルガメシュ叙事詩』とそれまた記号論的に類似する(と上にて言及の)ヘラクレスの 11 番目の功業。そのヘラクレス第 11 功業の目標物となっていた[黄金の林檎]を巡る三女神らの争いがそこへの攻囲戦の元凶 一木製の馬の計略で終幕を見たとの城市への攻囲戦の元凶— となっていると伝承が語り継いでいるのが古のトロイア城市となるわけだが(出典(Source)紹介の部 39)、同トロイア、往古より[洪水伝承](地理的にブラック・シー・デリュージ・ハイポセシスこと[黒海洪水仮説]とも結びつくように見て取れる洪水伝承)と結びつけられてきたとのことがあり、その黒海にまつわる洪水伝承とは[陸地に対する水流貫通のうえで海峡が構築されたとのボスポラス海峡構築伝承]にして、また、[神の粛清としてのノアの往古の洪水]とも関わるとの[解釈論]が近代より呈されるに至ったものでもあった(各地の洪水伝承を蒐集してまとめているとの論稿、引用をなしてきた Folk-lore in the Old Testament:

Studies in Comparative Religion, Legend and Law との論稿に見るジェイムズ・フレイザーが 20 世紀前半にて呈示の観点からしてそういうところがあると窺い知れ(出典(Source)紹介の部 58 (3) および出典(Source)紹介の部 58 (4))、20 世紀最後の方にて科学的論拠というものを具備しつつ目立って提示されてきた方の[黒海洪水伝承]にも同様の色彩が伴っている(出典(Source)紹介の部 57)とのことが現実にある 一であるから、疑わしいとの向きにあっては本稿にて細かくも引用しているそちら出典を確認いただきたい)。他面、(神に見放されてのトロイア終末と同様に同じくも)[神の粛清]にまつわる話である[ノアの洪水]に先立つ出来事として聖書に見受けられる[神の粛清]たる[エデンの園からの追放]と関わるエピソードを描いた作品たるミルトン『失樂園』特定パートには[トロイア崩壊伝承にまつわるエピソード]のことが持ち出され、そこにては[海峡構築と結びつけられての黒海洪水伝承内容]と結びつくものである特定ワード「ら」がそれと明示せず「隠喩的に、」といったかたちで複合的に持ち出されているとのことが「現実」にある 一具体的にはサタンが【アビス】の領域を横断して[擬人化されたの妻子たる[罪]と[死]の餌食に人間を供する道]を拓いたとの箇所において[アケメネス朝の王クセルクセスがアジアとヨーロッパを結ぶかたちでボスポラス海峡([黒海洪水]説の具)に[船橋]を掛けようとしたことへの言及](出典(Source)紹介の部 56 (2))、[[海峡構築に通じている洪水伝承]と結びつくダーネルス海峡(ボスポラス南方にてのトロイア創建の地界隈)と同義のヘレスポントス海峡に対する「通路構築経路」にあっての貫通にまつわる比喩的言及](出典(Source)紹介の部 56)、[後日譚(Posthomeric)『トロイア戦記』に見る後日譚]では攻囲勢も戦後の帰路にてことごとく[洪水]に呑まれたとの帰結が語られているトロイア戦争、そのトロイア戦争に木製の馬で引導を渡した謀将オデュッセウスが帰路にて際会した渦巻き怪物カリュブデイスへの言及]があわせもしてなされているといったことがある 一(⇒出典(Source)紹介の部 55 (3)にて『失樂園』より引用したパート、[And more endangered, than when Argo passed] [Through Bosphorus, betwixt

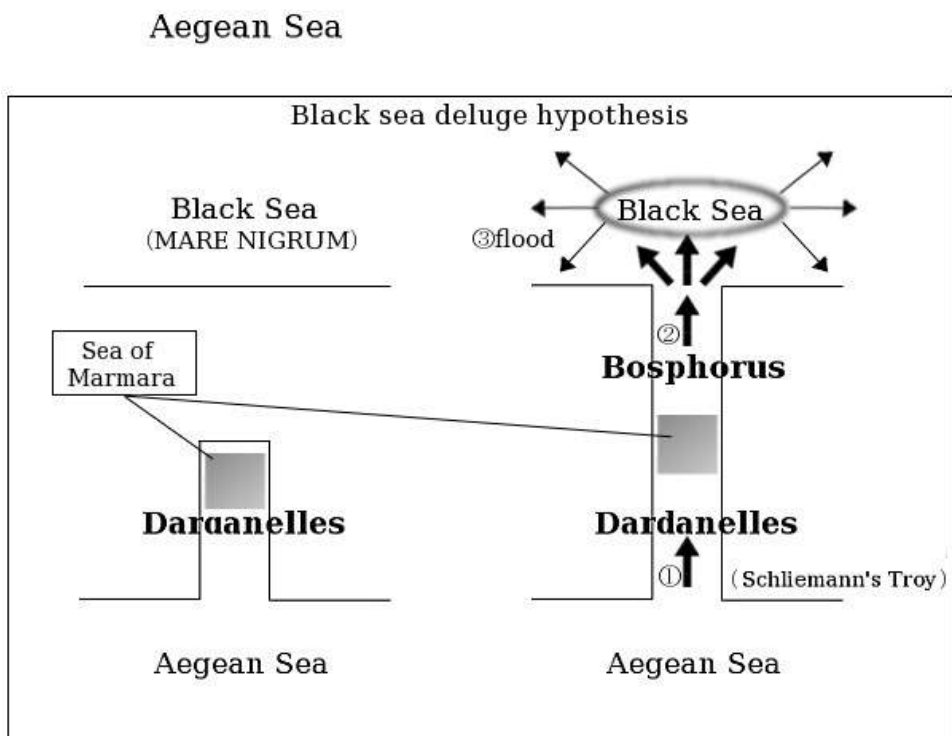
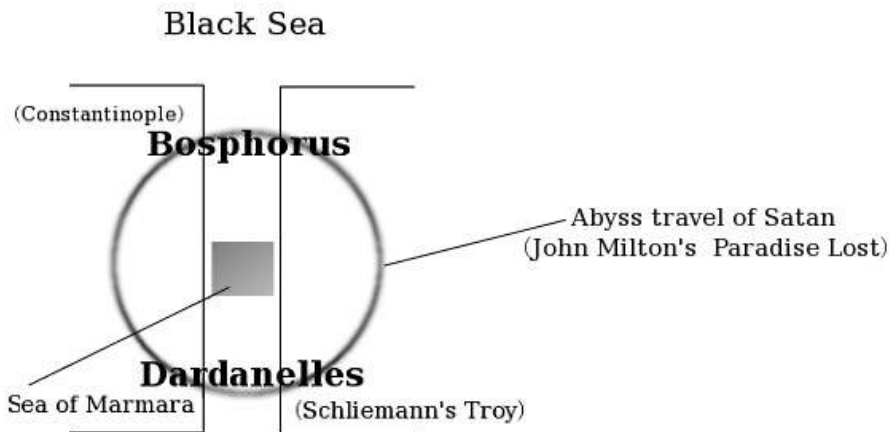
→わけではあるが、そうもした指摘にあって『2001 年宇宙の旅』の 911 の事件と結びつくとこの指し示しをなすに際して映画版としての同『2001 年宇宙の旅』が “ Man is a rope stretched between the animal and the Superman — a rope over an abyss.” 【人間とは超人と動物の間の深淵を渡る橋(あるいはロープ)である】とのニーチェ著述に固有の観点の示唆や、また、ニーチェ著述に関連するところのリヒャルト・シュトラウス交響詩の導入部での使用などをなしているニーチェ著述 Thus Spoke Zarathustra 『ツァラトゥストラはかく語りき』の比喩を含む作品であると関係者らに公言されている(『2001 年宇宙の旅』映画版関係者らに公言されている)ことの意味性を「然るべき理由あって」取り上げていた(アーサー・クラークの初期の「他の」作品にも【「ツインタワー」綱渡り】との観点でまったく同じものニーチェ比喩が現われているからそうもしたことを取り上げていた →

the justling rocks ;] [Or when Ulysses on the larboard shunned Charybdis, and by the other whirlpool steered.][彼はその衝撃を排除し、必死に進路を求めて飛翔しつつけた。勿論、幾多の困難と危険にも直面したが、それは、互に闘(せめ)ぎ合う岩礁の間をぬいながら、ボスポラス海峡を通過したときのアルゴ号が、乃至は、左舷ではカリュプデイスを避け右舷では渦巻すれすれに進路をとったオデュッセウスが、直面したものよりさらに甚だしいものであった]とのパートおよび[From Susa, his Memnonian palace high,] [Came to the sea, and, over Hellespont] [Bridging his way, Europe with Asia joined,] [And scourged with many a stroke the indignant waves.][この橋は、かつて[クセルクセス]がギリシャの自由を束縛しようとして、メムノンゆかりのあの宏壮な宮殿の地スサから海岸地帯に降りてきて、[ヘレスポント海峡]すなわちダーダネルス海峡に橋を架けることによって[ヨーロッパとアジアを結びつけよう]としたが、[その際反抗する狂欄を幾度も鞭打った]故事を偲ばせた]とのパートが該当部位の一部をなすところとなる。同部位、先述のように[現代的に見てのブラックホール近似の表現]が[[死]と[罪]の通用門に関わるところ]と接続する式で用いられもしている、同文に今日的な意味でブラックホールと呼ばれる存在の特性を多重的に帯びているものを持ち出しているダンテ『地獄篇』とも記号論的に通ずるとのありようで用いられもしている箇所「でも」あるがために問題となる(詳しくは出典(Source)紹介の部 55 から出典(Source)紹介の部 55(3)を包摂する箇所、解説分量にして数万余字の箇所を参照されたい)]

(「複雑ながらも重要なところである」と定置するため、「多少、表現を換えてながらも直上部までの内容の繰り返しとなる」との表記を多く含ませるための「整理」のための話をなすとして)

[再述するが、ダンテ『地獄篇』と同様に[地獄に追放されたルシファーに起因する災厄][地獄門の先の領域]との絡みで[「今日的な意味で見ての」ブラックホール]の類似物が 一無論にして異常異様な話なのだが一 お目見えしているのがミルトン『失樂園』となっている(出典(Source)紹介の部 55 から出典(Source)紹介の部 55(3)を包摂する解説部)。その絡みで問題となるミルトン『失樂園』の特定部、ブラックホール類似物としての【アビス Abyss】(時間と空間が意味をなさなくなる底無しの暗黒領域たる【深淵】)を描いているとの部となり、そこでは[サタンが人間を林檎でたばかって擬人化されての[罪]と[死]の餌食へとアダムとエヴァの子孫たる人類を曝すことに成功するとのそのプロセス]が一ご確認いただきたい文献的事実の問題として一 描写されている(出典(Source)紹介の部 55(2)および出典(Source)紹介の部 55(3)の部で原著よりの抜粋をなしている)。 そうもした『失樂園』にあつてのブラックホール描写に通ずる部にあつて地理的に「黒海洪水仮説」「黒海洪水伝承」を想起させるようなかたちで「トロイア近傍」に対する言及もがなされている。さらに述べれば、ミルトン古典『失樂園』の「林檎による誘惑」とワンセットのそうもした「ブラックホール近似物たるアビスを登場させてのアビス領域通用路構築」を巡る内容はギルガメシュ叙事詩に見る洪水伝承関連のパートと「時期的に不自然に」(ギルガメシュ伝承が欧州にて再発見される前であつたので『失樂園』作者ミルトンがそれを知り得なかつたという意味で「時期的に不自然に」)記号論なる意味での類似性を呈してもおり、そして、ギルガメシュ伝承の洪水伝承にまつわるそちらパートは記号論的に多重的に「ヘラクレスが黄金の林檎を求めた第 11 功業」と接合すると指摘できるようになっている(出典(Source)紹介の部 63 から出典(Source)紹介の部 63(3))。他面、全くの別側面で「黄金

の林檎(ヘラクレス11功業目標物)]と「失樂園をもたらしたエデンの果実(ミルトン『失樂園』でルシファーが用いたと描写される果実)には複合的つながりがある(出典(Source)紹介の部 51)、のみならず、「エデンの誘惑のプロセス」と「黄金の林檎を巡る争いに起因するトロイア崩壊プロセス」にも同文に純・記号論的なつながりがある(出典(Source)紹介の部 48から出典(Source)紹介の部 51を包摂する解説部)と摘示なせるようになっており、といった中で「黄金の林檎」及びそれと結びつく「アトランティス」の寓意が「どういわけか、」LHCによるブラックホール生成可能性に通ずるATLASやATLANTISを巡る命名規則に結びつけられているとこのことがある(との指摘をまなしてきたのが本稿である — 出典(Source)紹介の部 35から出典(Source)紹介の部 36(3)を包摂する解説部および出典(Source)紹介の部 47を包摂する解説部を参照されたい —)]



黒海洪水仮説はエーゲ海より黒海に流れ込んだ水が黒海を氾濫させしめ周辺に洪水伝承にあるような被害を発生させたとの仮説である

トロイアについてはその創建伝承からして「洪水伝承」との結びつきが観念できるようになっている。しかもそこにて結びつきが観念される伝承は20世紀末にて注目を集め出した「黒海洪水「仮説」」(先述)のことを露骨なまでに意識させるとのものとなっている。同点委細についてはダーダネルス海峡の命名由来にもなっているトロイア市創建者ダルダネスにまつわるところの伝承を紹介している著作、前世紀初頭に世に出たジェームズ・フレイザー(著名な『金枝篇』の著者)の手になる洪水伝承蒐集著作よりのものとして下にて(再度の)引用をなしているところを参照すれば理解できるようになっている。

本稿にての「出典(Source)紹介の部58(3)」および「出典(Source)紹介の部58(4)」にて紹介した出典内容の再掲として

" From his home in the highlands of Arcadia, the emigrant Dardanus is said to have made his way to the island of Samothrace. According to one account, he floated thither great flood on a raft ; but according to another version of the legend, the great flood overtook him, not in Arcadia, but in Samothrace, and he escaped on an inflated skin, drifting on the whence he face of the waters till he landed on Mount Ida, where he escaped to founded Dardania or Troia. "

——James Frazer (Folk-lore in the Old Testament: Studies in Comparative Religion, Legend and Law [CHAP. IV])

(ジェームズ・フレイザーの洪水伝承蒐集論稿たる Folk-lore in the Old Testament: Studies in Comparative Religion, Legend and Lawの(紙幅の都合なのか全訳ではない抄訳なしてのものたる)訳書『洪水伝説』(国文社、訳者は英文学者の故・星野徹)にあっての原著抜粋箇所に対応する部分を抜粋する。該当部は61ページにあっての下の部となる)

「アルカディアの高地帯にあった故郷から、移住者ダルダノスはサモトラケ島へと移っていたと言われる。一つの説明によると、彼は筏に乗ってそこへ漂っていった。だがもうひとつの版の伝説によると、大洪水がアルカディアでなくサモトラケにおいて彼に追いついたので、彼は空気でふくらせた皮袋に乗って避難し、海面を漂ったあげくにイーダ山に上陸して、その土地に彼はダルダニア、またはトロイアを建設した」

" The causes which the Samothracians alleged for the inundation were very remarkable. The catastrophe happened, according to them, not through a heavy fall of rain, but through a sudden and extraordinary rising of the sea occasioned by the bursting of the barriers which till then had divided the Black Sea from the Mediterranean. At that time the enormous volume of water dammed up behind these barriers broke bounds, and cleaving for itself a passage through the opposing land created the straits which are now known as the Bosphorus and the Dardanelles, through which the waters of the Black Sea have ever since flowed into the Mediterranean. "

——James Frazer (Folk-lore in the Old Testament: Studies in Comparative Religion, Legend and Law [CHAP. IV])

(上と同様に訳書(『洪水伝説』(国文社)にあっての原著抜粋箇所に対応する部分を抜粋する。該当部は62ページにあっての下の部となる)

「(洪水にあたって)生存者は高山に逃げのびたということだった。

(中略)

この高山があるためにいまでもサモトラケ島は北エーゲ海の最も目立つものの一つとなっており、よく晴れた日にはその山々がトロイアからはっきりと見えるのである。海は逃げのびていく彼らをなおも追いかけてきたので、

(中略)

この高山があるためにいまでもサモトラケ島は北エーゲ海の最も目立つものの一つとなっており、よく晴れた日にはその山々がトロイアからはっきりと見えるのである。海は逃げのびていく彼らをなおも追いかけてきたので、彼らは神々に救ってくれるようにと祈った。そして救われると島の周囲に、ここから自分たちが救助されたのだというしるしの境界線をつくり、また祭壇を築いてのちのちまで欠かさず犠牲を捧げてきた。

(中略)

サモトラケ人が、氾濫を引き起こした原因だと考えたものは、非常に注目すべきものであった。彼らによれば、大変動は豪雨のためではなく、黒海と地中海とをそのときまで分離していた障壁の陸地の崩壊によって海が突然異常に隆起したためであった。そのときこの障壁の背後に堰き止められていた膨大な量の海水が常軌を逸脱し、海水自体の力で堰き止めていた陸地に水路を切り開き、いまではボスポラス海峡とダルダネス海峡として知られる海峡をつくった」



頭部欠損を見た、著名なサモトラケ島出土の勝利の女神ニケの像。同ニケ像が出土した

[サモトラケ島]

に由来するものとして[黒海洪水仮説]とほぼ同じくもの内容を有した伝承が存在していること、しかも、それが

[トロイア創建伝説]

と関わっているとのことを先にて指摘している(トロイア創建者ダルダノスがいかにトロイアに辿り着いたのか、という式にて、である)。

尚、ニケはアテナ神の「随神」であるとされるわけだが(それがためにパルテノン神殿の著名なアテナ神像の手の上にも翼を生やしたニケ神が乗せられている)、そちらアテナ神というのは

[黄金の林檎](エデンの果実と対称性をなす果実)を巡る美人コンテストに敗れた、トロイア王子のパリスへの取崩工作が失敗して敗れたために、トロイア戦争ではトロイア滅亡に向けて手を尽くし、トロイア崩壊につながった木馬の計略も彼女がオデュッセウスを手助けしたものであるとの伝承が伴う女神ともなる。「肝心要の部が欠けている」サモトラケのニケではないが、といったことに[我々人類の限定された視界には表立っては入らぬとの皮肉]が表出しているようにすら見えることも本稿を読みとく課程で理解いただけるだろう。

(今暫くも振り返っての表記を続けるとして)

ここまでに振り返りもした内容を精査検討していただければ、

[巨人アトラス —トロイア崩壊の原因となった[黄金の林檎]の所在地を知るとの伝承が存する巨人/ヘラクレス第11功業に登場の世界を支える存在—]

[アトランティス —欧州一部識者の間に[黄金の林檎(巨人アトラスが在所を知ると伝わっている黄金の林檎)の園]と結びつける見解があったとの陸塊名にして国家名—]

[ヘラクレス —計にして12に及ぶ功業を負い、それを達成したことで知られるギリシャ神話上の著名な英雄(メデューサの如き多頭の蛇の眷族を多く退治もししていると伝わる同ヘラクレスが第11番目に負った功業が[黄金の林檎]を入手せよ、とのものであり、そちら功業の中で彼は巨人アトラスとネゴシエーションをなしている)—]

[トロイア —[黄金の林檎を巡る争いから生じた一大戦争によって(木製の馬の計略によって引導を渡されるとのかたちで)滅したと伝わる伝説上の都市]にして(目

立って指摘されることではないが) [アトランティスと「多重的・記号論的に」つながる存在ともなっていることの指し示しに本稿で努めてきた存在]—]

との各要素を

[(ATLAS や ATLANTIS といった命名規則をブラックホール生成観測に通ずるところで用いている) 加速器実験とブラックホールおよびワームホールの生成問題]

との兼ね合いにてどういう文脈・料簡で問題視しているのか、大体にして慮(おもんばかり)いただけることか、とは思うのであるが、「さらに」本稿では紙幅にして膨大となる(具体的にはハードカバー書籍何冊本にも相当するとかたちで文量膨大となる)補説の部を — 補説1 から補説4 と振って— 各別に設けもしたうえで大要、以下、呈示するようなことの指摘に努めてきた。

補説1

補説1の部は米国文壇の寵児、現代アメリカ文学の旗手としてもはやされた作家カート・ヴォネガット(故人)の「複数」作品らに

[ブラックホール人為生成に対する「時期的に不可解」かつ「隠喩的」なる先覚的言及をなしている]

[911の事件の発生を予見的に言及しているとの按配の性質を(注意して見なければ気づけないようなところであって)帯びている]

と判じられる側面が見受けられるとのその【具体的論拠】を「原著原文抜粋なしつつも」細かくも呈示しているとの部位となる(: そも、[911の予見的言及文物]と表せよう側面が具現化していること自体が[常識の世界]では([陰謀論]や[都市伝説])といった括りでもって「どぎつい色彩で」取り上げられるケースを除き) 巷間の話柄にのぼるような性質のこととなって「いない」わけだが、本稿ではそうした世のありようを望見したうえで[具体的にこれはこうでこうだとかたちでの論拠]について「第三者がその実在を容易に後追いできる」かたちにての摘示をなしている。また、そうした指し示しを「ブラックホール関連のものとして」敢えてもなしたのは【911の露骨なる予見的言及文物にして、なおかつ、ブラックホール関連のトピックを専心して扱っているとの書籍】としての水際だったの作品、物理学者キップ・ソーンの手になる **BLACK HOLES & TIME WARP Einstein's Outrageous Legacy**『ブラックホールと時空の歪み アインシュタインのとんでもない遺産』という著作に伴う問題性を — そうしたことが何故具現化している(してしまっている)のかの[機序(作用原理)]の問題は置き— 先行して細かくも扱ってきたとの背景があるからである)。

また、同じくもの補説1の部では[脇に逸れての付記]とかたちで際立ってのかたちでの先覚的描写をなしている他作家(同部で主筋として問題視している著名作家ヴォネガットとは別の他作家)の手になる小説のことをも取り上げもしている。たとえば、リィ・ブランケットという女流作家 — 晩年、映画スターウォーズ・シリーズの脚本執筆にも関わっていたとのある程度の著名性を帯びての作家— がものした **The Sword of Rhiannon**『リアンの剣』という小説作品がそれが世に出た1953年(ないしは『リアンの剣』というタイトルへの改題前の『火星の海王』が世に出た1949年)にて

・【加速器によるブラックホール生成と通ずる描写】（陽子ビームガンを持った男が[漆黒の別世界へのゲートたる時空の泡]を通った先で陽子ビームにて壁面を破壊するとの式で[加速器の陽子ビームによるブラックホール生成]と通ずると解される描写)

・【蛇の種族による[人間種族を傀儡に用いての間接統治]を終えての覇権確立の企図の描写 —[漆黒の時空の泡たるゲート装置]を含む超古代先進種族の遺構を発見し、もって、(傀儡化してきた)人間を不要としての体制の確立企図の描写—】（漆黒の時空の穴が据え置かれもしており古代先進文明のテクノロジーの宝庫ともされている墳墓の在処を突き止めることで蛇の種族が[人間を催眠技術で操ってきた間接統治体制]を終え、人間を媒介項に一切使わないかたちでの覇権の確立を企図しようとしているとの描写)

をいかように奇怪になしているのか、「加速器によるブラックホール生成などが考えられる素地がなんら存在していなかった」半世紀以上前に先覚的言及との意味でいかように奇怪になしているのかとのことを —「これこれこういう部がこれこれこういう理由で先覚的描写となっていると判じられる」と丁寧に原文引用なしの解説をなしながら— 指摘もしている(出典(Source)紹介の部 65(5)から出典(Source)紹介の部 65(9))。

補説 2

補説 2 の部に関しては [以下のこと] の解説をなしきるのに膨大な文量を割いて注力してきたとのセクションとなる。

[ダンテ古典『地獄篇』およびミルトン古典『失樂園』の両古典が【ルシファー(ルチフェロ; サタン)】および【地獄門の先の領域】に関わるところで【今日的な見方で見るところのブラックホールと類似の特色を際立って呈するもの】を登場させている]

とのこと —それ自体、奇怪性を帯びてのこと— に関わるところで、(普通に考えれば、「それら」の間にあつては接続性など観念されるべきところではないはずであるにも関わらず)、

【マンハッタン計画関連事物】(ひいてはマンハッタン計画より生み出された加速器実験運営組織および人脈)

【911 の事件が発生することを露骨に予見するが如く描写をなしている作品らに見る特定側面】

【アトランティス沈没の寓意】

との各事物が「円環構造呈しながらもの」パスで接合している(接合して「しまっている」と摘示できるようになっている

(上にて表記のことについて) 委細を全て端折って極々部分的なる内容紹介なせば、次のようなことらが問題となる。

サタンの別称となっている [ルシファー] との語は元来、明けの明星(金星)を意味するとのラテン語語句であり、そちら[ルシファー]でもある[明けの

明星;金星]の星天にあっての会合周期 —インフェリアー・コンジャンクション、[内合]と呼ばれる天文現象の周期— が（よく宗教の徒といった類に「悪魔の象徴がそうしたものである所以である」と問題視されてきたところとして）[五芒星]と結びついているとのことがある。

そちら[五芒星 —金星の内合周期とも結びつく形状たる五芒星—]は [魔術や悪魔に関連する歴史的象徴主義]

として用いられてきたものであるにとどまらず[マンハッタン計画]関連事物「とも」多重的に接合するようになっている（[原爆;核兵器]を世にもたらしたのと同時に[加速器実験を運営する人脈と組織体]を後世にもたらすこととなったとの[マンハッタン計画]関連事物とも多重的に接合するようになっている）。

にまつわっては [五芒星形状] と [マンハッタン計画] 関連事物とが

【ペンタゴン】（五芒星と永劫に続く内接・外接関係を呈するとの正五角形を取る合衆国国防総省. 9月11日に建設着工を見、その建設を指揮したのは膨大な予算が投じられたマンハッタン計画の指揮官と同じ軍人となるとの建築物）

【原子核崩壊機序】（原爆生成を支えた基本的機序となる原子核崩壊機序とは【五芒星と正五角形の永劫に続く相互内接関係で示される極微の世界に向けての力学】の中での暴力的改変作用とも換言できるものとなり、またもってして、ブラックホール生成挙動たりうるとも見られるようになった加速器実験にあって新種の物質を探すうえで用いられている機序ともなる）

【マンハッタンとペンタゴンが同時標的にされた911の事件、その「予見」文物らに見る際立つての特徴】

ら各要素らを媒介項にしての相関関係（円環構造を呈しながらもの相関関係）を介して多重的に深く深くも結びついているとのことがある。

（※上のことらの指し示しの過程にて

【[911の事件の発生にまつわる露骨なる予見文物としての特性を帯びている物理学者キップ・ソーンの手になる特定著作] および[911の予見文物となっている70年代に大ヒットを見た荒唐無稽小説『ジ・イルミナタス・トリロジー』]の双方を結びつける作品】

にして、かつもって、

【[トロイアの木製の馬の寓意]と多重的に結びついていることもが指摘できるようになっている作品】

ともなっているとの小説『コンタクト』（カリスマ科学者カール・セーガンの手になるものとしてハードSF小説としては異例なことに短期間でミリオンセラーを記録した小説『コンタクト』）という作品が

【[正五角形を十二枚重ねての正十二面体装置]として地球にブラックホール(ないし通過可能なワームホール)ゲートを構築するとの筋立てを有しているとの作品】

となりもしていることにまつわる奇怪なる多重的関係性についても膨大な紙幅を割いての解説をなしてきた。

魔術(と呼ばれる妄言体系)に対する傾倒の思潮に見る【五芒星】というものが【正五角形】と接合しながら【異界との境界】の比喩としていかように用いられてきたのかとのことについて(文献内関連記述を引きもしての)詳説をなしながらもである)

補説 3

補説 3 では

[【「今日的な見方で見るところの」ブラックホールの類似物】を登場させている(先行する段にて詳述を試みてきたところとしてそういう特徴を伴っている)とのダンテ古典『地獄篇』が【ヘラクレスの 12 功業】と明示的かつ多重的に結びついているとの指摘がなせるようになっていること]

を細かくも摘示し、そのうえで同じくものこと(ダンテ『地獄篇』とヘラクレス 12 功業の接合性)が

[ヘラクレス第 12 功業に登場する【地獄の番犬ケルベロス】および【冥界の女王ペルセポネ】(エレウシス秘儀というものと結びつき、ケルベロスとのつながりを多重的に有している存在)]

を関係性の中枢に見出せるとのかたちにて

[フリーメーソンの位階・儀式体系および象徴主義]

[【シリウス・ミステリー】と呼ばれる欧米にて 70 年代より物議を醸すに至った理論体系] (過てる論拠に基づいてのものとの指摘もなされるだけの[論としての欠陥性]を含むが、他面、多くの古典にまつわっての正確なる指摘をもなしているとのことで見るとあるべきところがある理論体系)

[シリウス伴星たる白色矮星シリウス B と「奇怪に」結びついていると解される欧州古典古代時代の文献的記録およびそれらに見る神話上の存在ら]

[白色矮星シリウス B と現代科学史にあつてのブラックホール理論開闢にまつわる経緯]

らと多重的に接合しているとのこと、そのことを根拠挙げ連ねながらも入念に指し示さんとしてきた (：につき、同補説 3 にての背面にある問題意識としては縷々(るる)、折に触れて述べているところとして、「成立の摘示がなせるようになっているとの関係性が[多重的かつ相互につながりすぎている]とのものとなっている。であるから、そうした関係性が成立してしまっていることが果たして[偶然の賜物]と述べられるのか、あるいは、[根深い意図]から発したものなのか、切り分けるべくもの考察を真剣になして然るべきところであろうとの観点がありもする)。

補説 4

補説 4 の部では

[【911 の事件が発生することの予見描写をなしているとの作品】が【フリーメーソンの象徴主義と多重的濃厚に接合するもの】として複数存在していることを取り上げ、そのうえでこの人間社会にあつて【予言の霊(予言の霊とは本稿同じくもの段で解説しているように聖書の使徒行伝に登場する蛇の怪物ピュートーンのことを指す)に憑かれたが如く者達の挙】がいかようなかたちで具現化しているのか、かつ、予言(としかいいようがない先覚描写)ら性質がいかにか悪質なものなのか、そして、その先に何が控えていると判じられ

るのか、ということの訴求をなす]

とのことに注力していた(：その点、補説部(補説4)にあつての意図は「この世界では911の事件の発生の具体的前言をなしている文物が数多見受けられ、それらが極めて性質悪きものである」とのことを「容易に後追いできるのかたちにて」克明に指し示すことで【本稿本論部にて取り上げていること —911の事件の発生の事前言及をなしているが如き文物らが同時にブラックホール生成問題とも結びついているとのこと— の問題としての根の深さ】を強くも訴えることにある)。

本稿では(委細をすべて端折つての端的なる内容紹介を上になしてきた)補説1から補説4にあつての指し示しを終えもしてから本論の部に立ち戻り、本稿冒頭部よりその予見性につき摘示していた小説作品ら — Thrice Upon a Time『未来からのホットライン』(原著1980年初出) および Adrift Just off the Islets of Langerhans : Latitude 38°54'N, Longitude 77°00'13W (邦題)『北緯38度54分、西経77度0分13秒 ランゲルハンス島沖を漂流中』(原著1974年初出) — 「も」が(ここでの振り返りパートの前段の部の話に回歸するところとして)【ヘラクレス12功業にまつわる寓意に通ずる側面】【911の予見に通ずる側面】を帯びているとのことの指摘の部に入りもした(それがつい先立つての⁴出典(Source)紹介の部110から⁴出典(Source)紹介の部112を包摂する部位となる)。

(以上、ここまでの内容をもってして振り返り表記の部とする)

長くもなつての振り返り表記の部を直前直近まで綴つてきたうえで書くが、以上振り返りもしたような通貫しての流れ、その通りのことが指し示せるようになっていくとの状況がいかようなものと判じられるのかにまつわつての、

[意味に着目しての分析 —さらに後続するところの[付録が如きもの](に留まつての位置づけを(多くの読み手の識見水準を顧慮のうえで)与えての部)としての計数的分析、確率論的分析手法に先駆けての自然言語のみで示せる意味上のつながりにまつわる分析—]

をこれよりなすこととする。

本稿のここまでの指摘事項に付きまつている [意味] 上の繋がりあいに着目しての分析をなすとして

最前の部にあつて本稿の従前内容の振り返り表記をなしたところで、である。これ以降の部ではそうもして振り返りなした内容を含めもしてここまでに摘示してきたことらに、

【意味上の「重大な」多層的繋がり合い】

が露骨な式で見受けられることについての指摘をなしていくこととする。

その点、まず、最前の部にて振り返ったことを念頭に申し述べるが、

[LHC 実験におけるブラックホール生成にまつわっての「奇怪なる」先覚的言及]

が見受けられる一方でのこととして今日の LHC 実験、ひいては、(より包括的に述べて) [加速器とブラックホールおよびワームホールの生成問題関連事物] については

[巨人アトラス —トロイア崩壊の原因となった[黄金の林檎]の所在地を知るとの伝承が存する巨人ヘラクレス第 11 功業に登場の世界を支える存在—]

[アトランティス —欧州一部識者の間に[黄金の林檎(巨人アトラスが在所を知ると伝わっている黄金の林檎)の園]と結びつける見解があったとの陸塊名にして国家名—]

[ヘラクレス —計にして 12 に及ぶ功業を負い、それを達成したことで知られるギリシャ神話上の著名な英雄(メデューサの如き多頭の蛇の眷族を多く退治もしている)と伝わる同ヘラクレスが第 11 番目に負った功業が[黄金の林檎]を入手せよ、とのものであり、そちら功業の中で彼は巨人アトラスとネゴシエーションをなしている)—]

[トロイア —[黄金の林檎を巡る争いから生じた一大戦争によって(木製の馬の計略によって引導を渡されるとのかたちで)滅したと伝わる伝説上の都市]にして(目立って指摘されることではないが) [アトランティスと「多重的・記号論的に」つながる存在ともなっていることの指し示しに本稿で努めてきた存在]—]

との各要素らと結びついているのと同時に

[エデンの園の誘惑]

とも多重的に結びついていると指摘できるようになっているとことがある。

本稿で既に摘示してきた次のような事由らがゆえに、[今日の LHC 実験、そしてより包括的に述べて、[加速器とブラックホールおよびワームホールの生成問題関連事物] が [エデンの園の誘惑] 「とも」多重的結合関係を呈している] と述べられるようになっている。

(つい先立っての振り返り表記部で出典紹介部番号を呈示しながら再述していることと引き比べしながらでも確認を請いたいところとしての【[エデンの園の誘惑のエピソード] と [加速器実験] が多重的結びつき関係を呈していると申し述べるどころの理由] として)

最初にそこから指摘するが、疑わしきは直上直前部にあつての振り返つての内容をもいま一度、参照いただきたいところとして、【黄金の林檎】(ヘラクレスがその第 11 功業にて冒険取得目標物としていたものにしてその在所を巨人アトラスが知っていたとの旨が伝わっている神話上の果実) が【エデンの禁断の果実】とが「多重的に」結びついているとすることがそこにある(欧州一部識者に歴史的に両者が結びつけられてきたとすることがあり、また、個人の属人的主観など問題にならぬところとして【黄金の林檎】と【エデンの果実】にまつわる諸々の物語・関連事物らがあまりにも多重的に記号論的に接合するようになっているとすることがそこにある)。

すなわち、【黄金の林檎】と【エデンの果実】は次の各点らから結びついている。

- ・ [[黄金の林檎を巡るパリスの審判] と [エデンにての誘惑] にまつわる伝承が純・記号論的な意味での多重近似関係を呈している]
- ・ [伝説の陸塊たるアトランティスは [黄金の林檎の園] とも同一視されてきたもののだが、これまた伝説のアトランティスと同一視されてきたアメリカ大陸にての主要崇拜対象(蛇たるケツアルコアトル)と [エデンの古き蛇] の間の多重的な意味での記号論的接合性が見てとれるようになっている (黄金の林檎の園との一致性が観念さ

れる場(=アメリカ)での蛇の崇拜対象 —文明の接受者としての蛇の崇拜対象—
がエデンの蛇と記号論的に接合するようになっていたと見受けられる)]

・ [アメリカ大陸にて崇められていたケツアルコアトルという存在は古代メソポタミア女神、[黄金の林檎を取得し、かつ、トロイア崩壊の原因を造りだしたと伝承に伝わる女神] であるアフロディテ(金星の体現神格)と同一起源が広くも昔から指摘されてきたシュメールの女神イナンナ(イシュタル) と顕著な記号論的な一致性を帯びている]

・ [ミルトン古典『失樂園』は [林檎を用いての誘惑] (蛇に変じたサタン・ルシファーが人類の始祖たるアダムとエヴァに対してなした林檎を用いての誘惑) を主たる筋立てとしている文物だが、そのミルトン『失樂園』と [遺物として近代になって「再」発見された『ギルガメシュ叙事詩』特定部] の間には (普通に見る分では気づけないような) 記号論的の一致性が伴っており、そちらを突き詰めていくと、【『ギルガメシュ叙事詩』特定部と [黄金の林檎を求めてのヘラクレスの 11 功業] の一致性】もが導出されるようになっていたとある (林檎をモチーフにしての樂園喪失を描いてのミルトン『失樂園』と黄金の林檎を求めてのヘラクレス11功業の間には古代の『ギルガメシュ叙事詩』特定部を介してのつながりあいがありもする)]

上のことが (委細を本稿の従前の段でくどくも摘示してきたところとして) ありもし、それがゆえに、【エデンの園の禁断の果実】と【黄金の林檎】の間には接合性が見てとれるようになっていた (そしてより皮相なる側面が挙げられるとのかたちで近代欧州一部識者らによって【エデンの園】と【黄金の林檎の園】が「双方共に [不死および蛇と結びつく樂園の園] となっている」との式で明示的に結びつけられて言及されてきもしたとある)。

加えもして、上にて言及のように【エデンの禁断の果実】と記号論的に結びつくようになっていた【黄金の林檎】、そのゴールデンアップルにそれら全部が関わるところの梁たる要素らとして本稿にて専心して問題視してきた (加速器実験に通ずるとのことも含めて問題視してきた) のがまさしくもの、

[アトラス]

[アトランティス]

[ヘラクレス]

[トロイア]

らとなっているとすることが問題になる (加速器実験ひいてはブラックホール生成関連事物が【エデンの園の誘惑】「とも」結びついていると指摘する上で問題になる)。

上記各要素にまつわっては —くどくも繰り返すが— 巨人[アトラス]が【[ヘラクレス] 11 番目の功業】に登場してくるとのそちら筋立ては [アトラスが同巨人の娘ら ([アトランティス] との呼称もが与えられてのヘスペリデスら) によって管掌されている [黄金の林檎の園] の場所をヘラクレスに尋ねられるとのものとなっている] とのことがある . . . 、[古の陸塊アトランティス] は [黄金の林檎の園] と同一視されもしてきたのと同時に [黄金の林檎が元凶になって皆殺しの内破に至ったトロイア] とも多重的接合性を呈している . . . 、そうしたありようで【黄金の林檎】に相通ずる側面が揃い踏みで摘示できるようになっているとある。

そして、である。加速器実験ひいてはブラックホール生成関連事物が【エデンの園の誘惑】「とも」結びついていると指摘する上でネックとなるところとして直上言及の [アトラス] [アトランティス] [ヘラクレス] [トロイア] らが【加速器実験にてのブラックホール生成挙動】 —それは「実験」関係者によると「科学の進歩に資する」挙となること、強弁されてきたものでもある (本稿にての [出典 \(Source\) 紹介の部 81](#) などを参照されたいものである) — とどういふかたちで命名規則の問題として結びつけられてきたのかは本稿にて倦まれる程に度々もってして申し述べてきたことである (再度、繰り返そう。LHC 実験では巨人アトラスの名を冠する検出器、ATLAS ディテクターにてのブラックホール観測の [成果] が得られる可能性が関係者らに主張され、また、の際には ATLANTIS と名前が振られたイベント・ディスプレイ・ツールが直接のブラック

ホール検知プラットフォームになるとの言われようがなされているとのことがある)。といったことが摘示できるようになっている中で、他面として、どういうわけか [エデンの誘惑の蛇] に比定される [ルシファー] について扱った特定古典ら、よりもって述べれば、**ダンテ『地獄篇』**と**ミルトン『失樂園』**(にての[ルシファーに起因する災厄と結びつく[地獄門](と呼称されるもの)の先にある領域]を描いたパート)に[今日的な、現代的な科学的観点で見た場合のブラックホールの質的近似物]に通ずる描写が「**多重的に**」なされているとのことがある(直前、つい先立っての復習の段でも実にもってくどくもの確認表記をなしていることである)。ルシファーが[エデンの禁断の果実を用いた誘惑の蛇]に仮託されるのであるから(**ブラックホールを共通の媒介項にして「も」【エデンの誘惑】と【アトラス】・【アトランティス】・【ヘラクレス】・【トロイア】**ひいてはそれら各要素と陸続している格好となる**加速器実験は結びつく**と述べられるようになって)いる——のみならず、本稿では**ダンテ『地獄篇』**にも**ミルトン『失樂園』**にも**双方共々にヘラクレス功業との結びつきが見てとれること**(「**しかも**」**ブラックホール類似物登場の段にまつわるパートでそれが見てとれること**)、また、**ミルトン『失樂園』**の**同じくものパートの方**に関しては**トロイア崩壊との結びつき「も」が見てとれる**(いいだろうか、同文に**ブラックホール類似物登場の段にまつわるパートでトロイア崩壊との結びつきもが見てとれるのだ**)とのことを細やかに摘示しているとのことをもなしている——。

本稿筆者としては以上くどくどと再表記なしてきたところが指し示しているとの、

[**エデンの園の誘惑**] (こちらがあらためて加えもして強調なしたき要素ともなる)
[アトラス]
[アトランティス]
[ヘラクレス]
[トロイア]

ら各要素 —相互に「**多重的に**」繋がりが合っているとの各要素— の [**加速器実験**] ひいては [**ブラックホール生成問題**] に通ずるとのそのありようが

[**「偶然」ならざるところの必然**]

に関わっていると判断している。

につき、(本段ここでのテーマが[意味に対する分析]をなすとのものであるとのことがゆえ)、まずもって述べるが、本稿にての先立っての段でも述べたように

欧米の人間の意識構造を根本から規定するキリスト教、その世界観では
[世界は最後の審判を経て、[破滅する者]と[救済される者]が永劫に固着化・二極化する方向に【**世の帰結**】が定められている]
との終末観が強くも教義に組み込まれている

とのことが現実に「ある」(※)。

(※本稿にての先立っての段にて述べもしたことから準拠して申し述べれば、次のようなことが「ある」。

→ キリスト教ではその根本聖典、不磨の大典とされる新約聖書の最後部を飾る黙示録にあって、

[**全ての善悪が明らかになり、正しき者らは死より復活したうえで永遠の生を得、他面、正しくなき者らは永劫の地獄行きを強いられるとの教義**]

が明確に呈示されており(同じくものことについて、本稿従前の段でも述べたことを繰

り返し述べれば、「欧州では歴史的史料として重要視されている戸籍台帳、イギリスに端を発する戸籍台帳からして [ドゥームズデイ・ブック]、要するに、[黙示録のその日のための記録] と命名されていたようなことがあり、欧州人があかも土葬にこだわるのは死した人間が最後の審判の折に復活を見よとの思想があるからである...」といった按配で黙示録の記述は欧州人の死生観そのものを歴史的に規定してきたとのことがある)、といったドグマを伴ったキリスト教は換言すれば、

[サタンに魅入られて破滅を見る諸々の者達と神を信じて救いの道を歩む者らを選び分ける体系]

ともなる。

については本稿にての **出典 (Source) 紹介の部 54 (4)** で聖書そのものより引用して呈示せんとしてきたように聖書の最後部を占めている『黙示録』(英語ではレベレーション、ギリシャ語に重きを置いての呼称ではアポカリプス) にあっては

[【龍(サタン)に権威を与えられた獣】および【龍(サタン)】それ自体を崇める大バビロンおよびその民らが神によって火によっての滅尽を見る。そして、その後、【救世主に率いられた軍勢】と【獣と偽予言者と龍とその麾下の軍勢】とが対峙するが、後者は火の池地獄に投げ込まれるとのことになる】(との記載がなされている)

[【獣】と【偽予言者】と【龍のシンパらたる会衆】が神の裁きを受けた後、1000年を経、【龍(サタン)】が再度解放され、ゴグ・マゴグと呼ばれる諸国民(その数は海の砂のように多いとされる)を招集して神の信徒に戦いを挑むも、といった者らは火と硫黄の池に投げ込まれ、そして、[神に救われる民]と[永劫の墮地獄を見る民]の終局的運命が確定する】(との記載がなされている)

という筋立てが見受けられるようになっている。そして、以上のような筋立てから導出されての観点が欧米圏の人間の意識構造を「根強くも未だ規定しており」、それがために人類が黙示録の描く最終闘争(アルマゲドンなどと呼称されるそれ)に聖書の文言に依拠して突入していく様を描いた小説『レフト・ビハインド』シリーズが全米で近年にて6000万部以上売り上げているようなありようともなっている(先だつての段でも『レフト・ビハインド』シリーズの際立っての売れ行きについては多少紹介しているが、同小説がどういった小説でいかように大盛況を呈してきたかについてからして各自お調べ頂きたいものではある)。

そうした宗教的観点が[理性ある生き物である](と少なくとも近現代以降に生じてきた[建て前の論理]では鼓吹され続けてきた)との人間の意識を、今日の文明社会の基礎となっている欧米圏の文明人の精神構造を何故にもってして影響力甚大なるところとして規定し続けているのか?

その[機序][作用原理]の問題は(何度も何度も申し述べているようにそうした直接証拠になんら恵まれぬ話は揣摩憶測を振り回すに終わることになりかねないことであるため)ここにては置くとして、「問題は、」である。

聖書の最後部に位置する『黙示録』にて、

[人間が救われる者と救われない者に「永劫・永遠・終局的に」二極化する[最後の審判]が実現し、生命の意味はそのかたちどおりの意味を失う(永劫に生きる者か永劫に地獄行きを強いられる者しかこの世に存在しなくなるとの最後の審判によって生命はそのかたちどおりの意味を失う)]

との内容が具現化を見ていることそれ自体であると述べたい)

さて、ここで唐突となりはするが、

[ドゥームズデイ・クロック]

という「想像上の」時計にまつわる概念を欧米圏の科学者 —シカゴ大学に結集した核物理学者達でマンハッタン計画に甚大な貢献をなした者達— が音頭をとって広めたとのことがある。

同ドゥームズ・クロック、日本語に訳されるころでは

[世界終末時計]

とのものとなり、一言で述べれば、

[時計の【表示上の始点】を午後 11 時 45 分に (通例もってして) 置き、秒針が進んでゼロ時に到達した時点で世界の終末が訪れるとの定義が付与された観念上の時計]

[時々刻々の情勢に応じて時計の秒針は進んだり戻ったりして[破滅(終わり)のゼロ時]に如何程に近いかとの有識者意見を示すことで警世のために用いようとの(額面上の)意図が付された時計]

とあいなっている —下に通用化された世間的解説のありようを引いておく— 。

出典 (Source) 紹介の部 113

S O U R C E

113

"Abaddon, to have been the name of the same Ophite God, with whose worship the world had been so long infected. Ob. I take Abaddon, or, as it is mentioned in the Revelations, Abaddon, to have been the name of the same Ophite God, with whose worship the world had been so long infected. He is termed by the Evangelist Αβαδδων, τον Αγγελον της Αβυσσου, the angel of the bottomless pit; that is, the prince of darkness. In another place he is described as the dragon, that old serpent, which is the devil, and Satan. Hence I think, that the learned Heinsius is very right in the opinion, which he has given upon this passage; when he makes Abaddon the same as the serpent Pytho."

Jacob Bryant ,
A New System or Analysis of Ancient Mythology
Vol.II. (1807)
OB, OUB, PYTHO, SIVE DE OPHIOCASTRIA

the September 11 attacks
(coordinates) 38.87099° N
77.05596° W
↑
setting American Airlines Flight 77
(Boeing 7x7 Series)

recall

'ugly' [Book of Revelation] filled with [number 7]
7 stars, 7 lampstands , 7 churches , 7 seals,
lamb having 7 horns , 7 angels , 7 trumpets ,
7 thunders , 7 visions , 7 bowls , 7 plagues ,
7 words , 7 headed dragon

(Greek Αποκάλυψις Ιωάννου , Apocalypsis Ioannou)
means 'un-covering'

[bottomless pit]
They had over them a king, an angel of the abyss, whose name in Hebrew is Abaddon, but in the Greek he is called Apollyon . (Revelation 9:11)

(in Satan's voyage through abyss) → 'Original Sin' for religious people
The secrets of the hoary deep ; a dark illimitable ocean, without bound, / Without dimension, where length,
breadth, and height, / And time, and place, are lost ; where eldest Night And Chaos, ancestors of Nature,
hold Eternal anarchy, amidst the noise Of endless wars, and by confusion stand.
John Milton
Paradise Lost (1667)
BOOK II, lines 890-895

(peculiar) BH like properties
(seen in 17th century)

Apollon
(and his predecessor Python)

Collapse of 1 WTC - 7 WTC
and Boeing 7x7 Series
7-7 London bombings (2005)
(referred as 7/7)

ここ出典(Source)紹介の部 113 にあっては基本的なところとしてドゥームズデイ・クロックがいかようなものであるのか、【世間的説明のなされよう】を引いておくこととする。

(直下、英文 Wikipedia[Domsday Clock]の現行にての記載内容よりの引用をなすとして)

The Domsday Clock is a universally-recognized symbolic clock face, representing a countdown to possible political related global catastrophe (nuclear war or climate change). It has been maintained since 1947 by the members of the Science and Security Board of the Bulletin of the Atomic Scientists, who are in turn advised by the Governing Board and the Board of Sponsors, including 18 Nobel Laureates. The closer they set the Clock to midnight, the closer the scientists believe the world is to the global disaster. Originally, the Clock, which hangs on a wall in a Bulletin's office in the University of Chicago, represented an analogy for the threat of global nuclear war; however, since 2007 it has also reflected climate change and new developments in the life sciences and technology that could inflict irrevocable harm to humanity [. . .] **The origin of the Clock can be traced to the international group of researchers called the Chicago Atomic Scientists who had participated in the Manhattan Project. After Hiroshima and Nagasaki, they started to publish a mimeographed newsletter and then a bulletin. Since its inception, the Clock has been depicted on every cover of the Bulletin of the Atomic Scientists.** [. . .] In 1947, during the Cold War, the Clock was started at seven minutes to midnight and was subsequently advanced or rewound per the state of the world and nuclear war prospects.

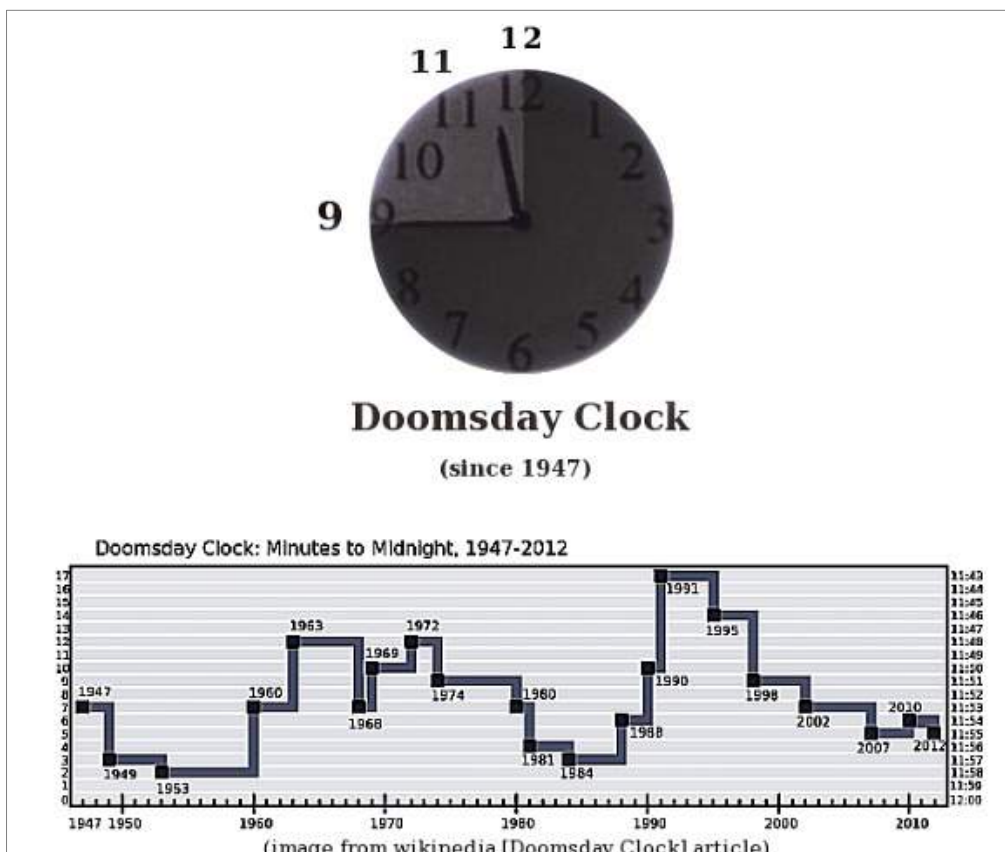
(補いもしての訳として)

「ドゥームズデイ・クロックとは広くも認知されている象徴的な時計(の時刻表示面)であり、ありうべき政治的状況を受けての世界的大破局到来(核戦争や環境の激変)の秒読み呈示をなそうとのものである。同ドゥームズデイ・クロックは18人のノーベル賞受賞科学者を含みもする(科学者らの)人的紐帯、『原子力関連科学者のための会報』運営陣の面々(訳注: the Science and Security Board of the Bulletin of the Atomic Scientists と表記されている原子力科学者会報)にあつての科学と安全性の関係を希求しているとの建て前でやっていたメンバーら)および彼らの後援者によって1947年以来、そのありようを規定(維持)されてきたものとなる。彼らドゥームズデイ・クロック運営陣が午前0時に時計の時針を近づける程に科学者らが世界的破滅の状況に近付いているとの所信を表明していることになる。元来、同ドゥームズデイ・クロックはシカゴ大の原子力分野科学者らの会報(の発行のための)オフィスの壁にかけられもして世界的核戦争に至る驚異を寓意的に表せんとしていたとのものだったが、しかしながら、2007年以来、同時計、ドゥームズデイ・クロックは人間存在に対して修復不能なる害を与える環境変化と生命科学・技術上の進歩のことも反映してのものへとなった。…(中略)… **ドゥームズデイ・クロックの起源はマンハッタン計画に参画した[シカゴ原子力科学者グループ]と称される一群の国際的科学者らグループに淵源を求められるとのものである。広島及び長崎に対する原爆投下の後、彼らは頒布用ニューズレターを刊行し、それから会報を刊行するようになった。それを発端として、ドゥームズデイ・クロックが原子力科学者ら会報の全表紙にて描かれるようになったのである。**…(中略)… 冷戦の最中、1947年にあつてドゥームズデイ・クロックは深夜午前0時の7分前(11時53分)に時針が設定されるとのかたちでスタートを見もし(訳注: 下に図示するが、米国原子力関連科学者ら会報の表紙すべてにお目見えしているドゥームズデイ・クロックは午後11時45分から午前0時に至る

までの時計の時針を切り取っているのかたちを呈しており、その意では 11 時 45 分をスタート・ポイントとする時計とも受け取れるのだが(ただし、ソ連が崩壊した 1991 年に例外的に時針が 11 時 43 分にまで後退している)、初期設定の時針は 11 時 45 分を下限にしている中で 11 時 53 からはじまっている)、そして、世界情勢および核戦争の見込みに応じて時針が進んだり、後退したりしているものとなっている」

(訳を付しての引用部はここまでとする 一※一)

(※尚、和文ウィキペディアにあってはほぼ同文のところとして次のような記載が「現行にては」なされている。(以下、本稿本段執筆時現時点での和文 Wikipedia [世界終末時計] 項目より引用をなすとして) “世界終末時計(せかいしゅうまつどけい、Doomsday clock)とは、核戦争などによる人類の滅亡(終末)を午前零時になぞらえ、その終末までの残り時間を「零時まであと何分」という形で象徴的に示す時計である。実際の動く時計ではなく、一般的に時計の 45 分から正時までの部分を切り出した絵で表される。「運命の日」の時計あるいは単に終末時計ともいう。日本への原子爆弾投下から 2 年後、冷戦時代の 1947 年にアメリカの科学誌 *Bulletin of the Atomic Scientists* (直訳すれば「原子力科学者会報」)の表紙絵として誕生した。以後、同誌は定期的に委員会を設けてその「時刻」の修正を行っている。すなわち、人類滅亡の危険性が高まれば分針は進められ、逆に危険性が下がれば分針が戻されることもある。1989 年 10 月号からは、核からの脅威のみならず、気候変動による環境破壊や生命科学の負の側面による脅威なども考慮して針の動きが決定されている” (引用部はここまでとする)。尚、現行英文ウィキペディア記述と現行和文ウィキペディア記述ではドゥームズデイ・クロックが「核戦争の脅威のみならずその他諸々の人類滅亡の脅威」を示すものへと変じた始期にまつわる表記が異なっているが、2007 年の方が至当であろうと解せられる出典紹介が英文 Wikipedia の方には現行見受けられる)



前掲図にての【上の段の部】ではドゥームズデイ・クロック(世界終末時計)、米国の原子力関連の科学者のための会報(Bulletin of the Atomic Scientists)の表紙にてその似姿が掲載されているとのそちら「世界の破滅の時の到来を時々刻々の時計でもって示そうとの趣旨の時計」の再現図を挙げた(:図に見るようにドゥームズデイ・クロックとは[11時45分からゼロ時までの時刻表示]が「切り抜かれて」表示されているとのものとなっている)。

対して上掲図の【下の段の部】では英文ウィキペディア「ドゥームズデイ・クロック」項目に現行掲載されているドゥームズデイ・クロックの時針の変転ありようを示すグラフを挙げもした(:同グラフにて変転ありようが示されているドゥームズデイ・クロック時針は(英文ウィキペディア程度の媒体にもその旨が目立って解説されているように)1953年、ソ連も熱核兵器(別名:水素爆弾)のテストを開始した後にて最もゼロ時に近づき(11時58分)、1983年、ソ連が演出したアフガン紛争の激化が冷戦下緊張状況を促したとのその折にあって準じてゼロ時に近づく(11時57分)とのこととなっていた—ドゥームズデイ・クロックの運営陣たる科学者らの主観を体現してのものとしてそういうありさまが具現化を見ている—)。

(出典(Source)紹介の部 113 はここまでとする)

さて、ドゥームズデイ・クロックにみとめられる「ドゥームズデイ」とはどのような意味合いの語句かと述べれば、同語、本来的にはキリスト教用語、黙示録に見る「アルマゲドン」(サタンの会衆とキリストの信徒らの最後の戦いたるハルマゲドン)の後に控える「最後の審判の日」のことを指す(:辞書などで調べればすぐに分かるかとは思いますが、DoomsdayのDoomとは[悲運][破滅]以外の目立っての意として(キリスト教用語としての)[世の終わり]、[(神の人類に対する)最後の審判]と意味付けされているものとなる—ここではたまさか筆者手元にあったジーニアス英和辞典(第4版、大修館書店)を手繰りもし、そこにそのそのままの表記を挙げもしている—。そして、Doomsdayとの表現は英語圏で「最後の審判のまさにその日」との意味で通用化しているものとなる)。

に関して、キリスト教とは

[先行するユダヤ教から「失樂園」(旧約聖書冒頭部創世記に見るエデンよりの追放)の観念を受け継ぎ、エデンから追放されることになっての「原罪」を負った人類がドゥームズデイ(最後の審判)を経て「復樂園」を果たすとの教えを根本教理に据える宗教体系]

とも表せられるようになっている(:その際の「復樂園」の理由付けが人類の罰を自らの死でもって贖(あがな)い、救世主となったキリストへの信仰を表明することにあるとのドグマがそこに見てとれる中にて、である)。

古き蛇のエデンの園での誘惑によってはじまり、古き蛇にして赤い龍と表せられるサタンとの最終戦争を経、人類の一部が救済されるとのシナリオ(本稿にての先立っての段でそうもしたものが教義に落とし込まれていることを聖書よりわざわざ引用しながら解説しもしていたとの正典上の設定でもある)を唱道する宗教、そこに見る結末のありかたとしてのドゥームズデイ。その名を冠する世界の終末を描いての時計たるドゥームズデイ・クロック。

といったドゥームズデイ・クロックのことを問題視したのは

本稿にて重要なこととして取り上げもしてきた、

【LHC 実験におけるブラックホール生成にまつわたの「奇怪なる」先覚的言及】

が見受けられる一方でのこととして今日の LHC 実験、ひいては、(より包括的に述べて)【加速器とブラックホールおよびワームホールの生成問題関連事物】については

【巨人アトラス —トロイア崩壊の原因となった【黄金の林檎】の所在地を知るとの伝承が存する巨人ヘラクレス第 11 功業に登場の世界を支える存在—】

【アトランティス —欧州一部識者の間に【黄金の林檎(巨人アトラスが在所を知ると伝わっている黄金の林檎)の園】と結びつける見解があったとの陸塊名にして国家名—】

【ヘラクレス —計にして 12 に及ぶ功業を負い、それを達成したことで知られるギリシャ神話上の著名な英雄(メデューサの如き多頭の蛇の眷族を多く退治もしている)と伝わる同ヘラクレスが第 11 番目に負った功業が【黄金の林檎】を入手せよ、とのものであり、そちら功業の中で彼は巨人アトラスとネゴシエーションをなしている)—】

【トロイア —【黄金の林檎を巡る争いから生じた一大戦争によって(木製の馬の計略によって引導を渡されるとのかたちで)滅したと伝わる伝説上の都市】にして(目立って指摘されることではないが)【アトランティスと【多重的・記号論的に】つながる存在ともなっていることの指し示しに本稿で努めてきた存在】—】

との各要素らと結びついているのと同時に

【エデンの園の誘惑】

「とも」多重的に結びついていると指摘できるようになっているとのことがある

とのこととの関連性が問題になる(だけのことが「ある」と判じているからである。

ここで述べるが、ドゥームズデイ・クロックの【表示上の始点】は —問題はそれが【偶然の一致】で済むかなのだと強調したいところとして— [9][11]との数値と結びついている。午後 11 時 45 分との時刻は長針で[9]を、短針で[11]を指す時刻となっているがゆえに、である(先立っての図示の部を参照されたい)。

表記のことを念頭に振り返るが、

「【911 を指す時針】と【先の 911 の事件に関連する事物】を 911 の事件の発生前から併せて描いていた作品らが存在している」

とのことがある。

指定の該当部の確認をなせば事前言及(と述べもする箇所)が記録的事実か否かすぐに確かめられるようになっていくところとして本稿にての先の段では(一例摘示をなすとのかたちで)次のような作品らを挙げている。

・『ジ・イルミナタス・トリロジー』

⇒

70 年代欧米にて大ヒットを見た同小説作品、午後 5 時 55 分をもってペンタゴンの爆破倒壊がなされるとのさまを描いた作品となっている(オンライン上より確認できるとの原著原文の引用をなすことでその旨は示している)。そちら午後 5 時 55 分というのが時針にて「11」と「6」を指す時刻帯ともなり、数値ありようとして「9」「11」を想起させるような事情がある。につき、アナログ時計を直に見て受ける印象として「11」「6」だけであったとしても(180 度反転させると同

じくもの数となるため)「9」「11」のことを想起させるようなところがなきにしもあらずなのだが、時計を見て視覚効果を顧慮しようもしない人間から見れば(上下逆読みして)「11」「6」から「9」「11」を想起するなど

[こじつけがましき「おかしな」論法]

と映ることであろう(当たり前ではある)。

が、といったものを取っても取り上げることとともが far-fetched 牽強付会とはならぬところとして次のような事由がある。

第一、『ジ・イルミナタス・トリロジー』は多重的に先の 911 の事件の先覚的言及作品としての要素を有している作品である (: 1.「冒頭部よりマンハッタンビルが爆破され、かつ、後にペンタゴンが爆破され(出典(Source)紹介の部 37-1 および出典(Source)紹介の部 37-2)」、2.「マンハッタンとペンタゴンの表象シンボルを「何故なのか」並置させているシンボルを作中にて図示までして多用し(出典(Source)紹介の部 37-5)」、3.「米軍関係者よりの炭疽菌漏洩事件を扱い(出典(Source)紹介の部 37-3 — 尚、現実の 911 の事件にあってもその直後、後に米軍関係者であるブルース・イヴィンズ容疑者由来の炭疽菌事件(イスラム狂信勢力のフリをしての炭疽菌配布事件)が発生して社会に大パニックをもたらした—)」、4.「そこから派生した関連文物からして[倒壊するツインタワー][粉塵を上げるペンタゴン]の描写がみとめられる(出典(Source)紹介の部 37-4)」との作品であり、なおかつ、作中、まったくもって意味不明に「あらゆる秘術の公式と同じく、ここにも火の父、水の母、気の息子、地の娘がすべて含まれている。だが、読者が $5=6$ の公式に釣り合わせるために $5=4$ の公式を探しはじめたりしないよう、いまはこれ以上いわないでおこう」などとの言及がなされている—原著表記 “ But we say no more at this point, lest the reader begin seeking for a $5=4$ equation to balance the $5=6$. ” との部から [$5=4$] [$5=6$] に俄然注意が向かい、そこに「9」「11」との数値を想起させる(出典(Source)紹介の部 37-2)との言及がなされている— との小説作品にフィクションならぬ後の現実世界にて発生した【マンハッタンビルとペンタゴンが同時に標的にされ(マンハッタンでは複数ビルが倒壊し、ペンタゴンでは外壁が崩されての倒壊がみとめられた)、後、米軍関係者よりの炭疽菌漏出が起こることになったとのかの 911 の事件】との際立っての類似性というものが認められはしない、そのような申しようは nonsense であるなどと読み手が考えたいというのならば話は別だが)。

さらに、『ジ・イルミナタス・トリロジー』の「11」「6」の時計時針に(180°回転処理して見ての)「9」「11」のアナロジーを見ても行き過ぎにならぬとの理由としての第二。5時55分が指す数値116と「同様に」180度変換すると911との数値が浮かび上がるものを[ツインタワーの倒壊]や[双子]と結びつけている作品らが他にもあり、の例として、

(それぞれ各々につき本稿の先立っての段で少なからずの紙幅を割いて詳述なしてきたところの作品として)

■映画『タワーリング・インフェルノ』 ([116階にまつわる描写]が[ツインタワーと結びつく原作小説]から映画化されている同映画作品にての超高層ビル爆破の直前に登場してくる)

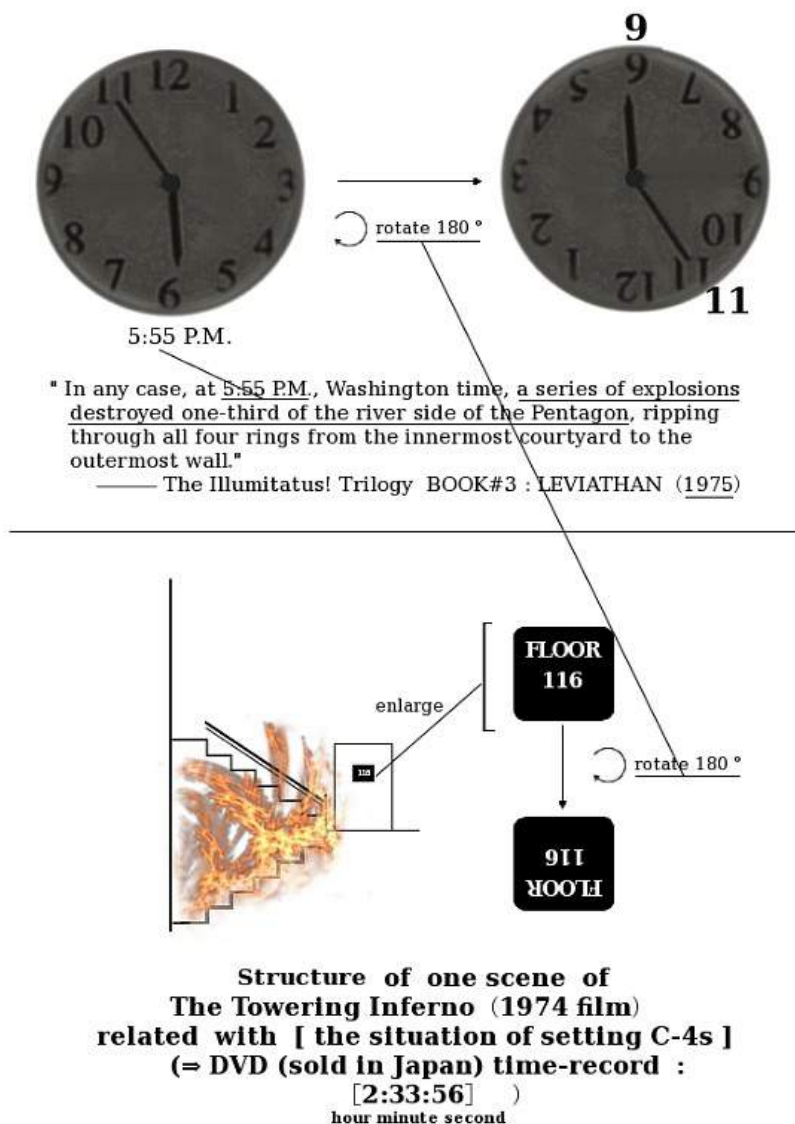
■映画『バック・トゥ・ザ・フューチャー』 ([116とのデジタル時刻時計表示]が[双子との語句と強くも結びつけられてのシーン]絡みのものとして登場を見ている —※尚、同映画『バック・トゥ・ザ・フューチャー』では(先立ってそれ絡みのDVDの該当シーン登場再生時間を指摘しているように)「近接するところで」[1:19][1:18]とのデジタル表示盤に見る数値が[双子(ツインズ)が付されての地への過去へのタイムスリップシーン]に通

ずる筋立て]にて登場を見ているとのこと「も」がある作品となる—)

■(日本国内作品としての)『ジョジョの奇妙な冒険 スターダストクルセイダース』(同作
作中、[911]との数値列が刻字された男が串刺しにされ、飛行機と共に描写されるその
時間帯、10時30分は(時計の時針を見てみれば分かつが)「11」「6」を指している
の時刻帯]にして、なおかつ、[ツインタワーの内のノースタワーの崩落時間(に極めて
近き時刻)]でもある — ちなみに本稿で表記のような国内漫画作品が如くものを敢え
ても問題視したのはその[先覚的]描写にフリーメーソンのエンタード・アプレンティス位
階のトレーシングボード構図がそのまま現われており、また、かつ、そこにフリーメーソ
ンの同エンタード・アプレンティス位階のイニシエーションありよう、吊された男を演じさせ
られるとのありようがそのまま具現化していることを把握しており、その特性を問題視した
くもあったからである(「筆者は漫画作品『ジョジョの奇妙な冒険』作者がメーソンである
などと主張しているのではない」「問題は人間を傀儡(くぐつ)とする力学の発露のありよ
うにある」としつつも述べておが、詳しくは本稿補説4の部を参照されたい) —)

との事例らが(本稿従前の段で詳述を加えてきたところとして)挙げられもする。

以上振り返りもして再述のように「1」「1」「6」と[ツイン(双子)ないしツインタワー]を(911に
あつてのツインタワー崩落前に)結びつけているが如く作品があるからこそ『ジ・イルミナタス・
トリロジー』なぞのことを(ドゥームズデイ・クロックの表示始点が9と11と結びつくとのありよ
うに接合するものとして)問題視している。



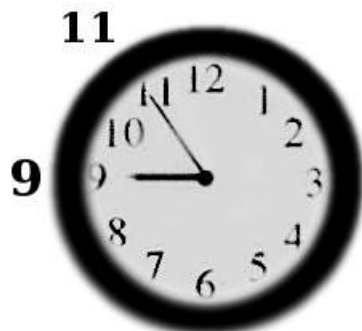
・『トレーディング・プレイス』

⇒

ワールド・トレード・センター描写を「119との文字列」を想起させるワンシーンでもって登場させた後、ワールド・トレード・センター内部にあっての時計を表示させ、時針で「9」「11」を指す時刻帯描写をなしていたとの80年代映画作品として『トレーディング・プレイス』（邦題『大逆転』）という映画作品が存在する。

同作『トレーディング・プレイス』が軽んじざるものと判じられる論拠として筆者は同作にてのワールド・トレーディング・センター内部での鏝迫り合いが「歴史的に黄金の林檎と同一視されてきたオレンジ」の先物取引にまつわるものとなっていることを重んじて本稿の先立っての段では詳解を加えている——尚、同映画、『トレーディング・プレイス』については同作をプロデュースしたアーロン・ルッソという有名プロデューサーからして生前、「911の事件前に近々、巨大なでっちあげによる戦争の開始が企図されているとの話を聞かされた（有力者サークル（に属するニコラス・ロックフェラー）から聞かされた）」との証言を流布されたインタビュー映像にて残していることを映画の先覚的描写と併せて問題視する向きがあること「も」先立っての段では解説している——。

clock seen in
Trading Places (1983 film)
(⇒ DVD time-record sold in Japan :
(one scene of) [1:43:46])
hour minute second



COMEX Clock (of the World Trade Center)

以上のことらを述べた分だけでは、そう、「いくつかの公衆流布作品での911の事件に対する予見がかつての描写もまた「時針で「9」「11」を指す」とのもの「とも」なっている」とのことを述べた分だけでは、

「ドゥームズデイ・クロックはその時刻下限のポイントが時針にて「9」「11」を指すものとなっている。そのこととかの911の事件の間には繋がり合いが観念されるところである」

との話を「こじつけがましいもの」といまだ見続ける向きもいることか、とも思う（それも当然かとは思）。

だが、である。これより再提示なすことら——1.から3.と数値振っての流れにて再提示することら——と複合顧慮なせば、ここでの話とて何ら暴論にならぬこと、お分かりいただけることか、と思う。いや、暴論とはならぬどころか、ドゥームズデイ・クロックのそれからして関連するところで恣意的にそうさせられていると判じて然るべきものであるとのこと、お分かりいただけることか、と思う（少なくとも話の筋立てを理解できる程度の「知」を有しており、かつ、筆者申しようが「偏頗（へんぱ）な属人的主観とは無縁なる容易に後追い可能な論拠」のみによって成り立っていることを——化けの皮を剥がしてやろうとの視座でもいいので——検証・確認しようとの気概を有しているとの正気の向きには、の旨、确实にお分かりいただけることか、とは思）。

[直前直上の部にての訴求事項と併せての検討を請いたきことら 一再提示なしの事柄としての 1. から 3. と振ってのことら— として]

1.

それが奇矯なことなれど [容易に確認可能なるところの事実] となっていること(現象としての発現が客観的、かつ、ソース原文捕捉容易なるがゆえに易々と後追い出来るとの具体的論拠のみに基づいて示せるようになってきていること)について既に本稿にて示してきたこととして

[911 の発生に対する予見的なる言及を「あまりにも露骨な式で」なしている(としか述べようがない)との按配の作品らが存在している]

とのことがある。

顕著な例とのことで述べれば、つい先程の段も含めて何度も何度も(それこそ耳にたこができるほど何度も何度も、である)そちら特性について言及してきたところとしてキップ・ソーンという物理学者の手になる、

BLACK HOLES & TIME WARP Einstein's Outrageous Legacy『ブラックホールと時空の歪み アインシュタインのとんでもない遺産』

という科学理論解説著作(としての一般流通書籍)が

[通過可能なワームホールにまつわる思考実験]

に関わる部にあつて

-
- ・([問題となる)通過可能なワームホールにまつわる思考実験]にあつて)[「双子の」パラドックス(1「911」年提唱の概念)による二点間時差発生機序の利用]とのテーマを扱っている
 - ・([問題となる)通過可能なワームホールにまつわる思考実験]にあつて)91101 一米国にての日付け表記上、911 の事件が発生した 2001 年 9 月 11 日の略記表記 9/11/01 と五桁全て同じくもの数値列— との郵便番号(ZIP コード)ではじまる地パサデナを時空間(時間軸・空間軸)にての空間軸上の[始点]に置いての[時間軸のずれ]にまつわる設定の付与がなされている
 - ・([問題となる)通過可能なワームホールにまつわる思考実験]にまつわるところで)前提となる説明部にて(上にて言及の地たる)パサデナ 一郵便番号 91101 を始点とする 一帯— で疾走させた爆竹付き自動車を用いての思考実験 一爆竹の順次爆発に言及しての思考実験— による[双子のパラドックス(1911 年提唱)に通ずる時間の相対性]にまつわる説明付与がなされている
 - ・([問題となる)通過可能なワームホールにまつわる思考実験]にあつて)[2001 年 9 月 11 日]と通ずる[日時表記]の使用が認められる、具体的には 1994 年刊の書籍であるにも関わらず[カリフォルニア州パサデナを空間軸および時間軸上の始発点とするワームホール想定実験]の時空間にあつての時間軸上の[始点]、実験開始時間が 2000 年 1 月 1 日 9 時に設定されているとのことがあり、同時刻帯を時⇒日⇒月⇒年と並び替えると 2001 年 9 月 11 日と通ずる数値列が導出されるとのことがある([9][1][1][2000])。そ

して、そうしたこと関わることとして西暦 2000 年と西暦 2001 年、そのどちらがニュー・ミレニアム(新千年紀)の始点なのか、曖昧模糊としているとの見方があるとのこと「も」ある([9][1][1][2000]と[9][1][1][2001]の新千年紀始点年次にまつわっての混同の問題)

・[[2000 年]⇔(視差として混同する視点が存在)⇔[2001]]との年次区別の曖昧性のことも扱い、また、問題となるまさしくもの[通過可能なワームホールにまつわる思考実験]についてキップ・ソーンの問題となる著作と同じくものイラストレーターを起用しての図を挙げてもいるとの書籍(2000 年刊の Zero: The Biography of a Dangerous Idea『異端の数ゼロ』)にあってもまた

「ブラックホールとグラウンド・ゼロの文言上の対応図付け

がなされているとのことがある([グラウンド・ゼロ]との言葉が 911 の事件が起こるまで[核兵器の標的]および[核兵器の爆心地]といった文脈以外で滅多に用いられるものではなかったとの事情がある中にて、(繰り返すが)、問題となるキップ・ソーン著作 BLACK HOLES & TIME WARP Einstein's Outrageous Legacy『ブラックホールと時空の歪み アインシュタインのとんでもない遺産』)に見る「通過可能なワームホールにまつわっての思考実験」とまったく同じ思考実験をキップ・ソーン著作と同一のイラストレーターを起用しながら解説しているとの 2000 年発の著作たる Zero: The Biography of a Dangerous Idea『異端の数ゼロ』、同著作の中にて 2001 年以後着目されるようになった[グラウンド・ゼロ]との言葉が[ブラックホール]と結びつけられているとのことが[文献的事実]の問題として発現しているとのことがある)。

との要素を伴っていると示せてしまえるようになってしまっている (詳しくは本稿にての前半部の出典 (Source) 紹介の部 28, 出典 (Source) 紹介の部 28-2, 出典 (Source) 紹介の部 28-3, 出典 (Source) 紹介の部 31, 出典 (Source) 紹介の部 31-2, 出典 (Source) 紹介の部 32, 出典 (Source) 紹介の部 32-2, 出典 (Source) 紹介の部 33, 出典 (Source) 紹介の部 33-2 と振っての出典紹介部ら、オンライン上より文言確認できるとの原著よりの原文引用及び国内で流通している対応するところの訳書よりの原文引用「のみ」によって表記のことの指し示しに注力しているそちら出典紹介部をご覧頂きたい)。

(:以上一例からしてより「911 の露骨な言及がなされている」と述べる。

その点、

「【「双子」と「911」と結びつく概念を主軸にしての思考実験】の【空間軸上のスターティング・ポイント】が[2001 年 9 月 11 日]の略記とそのままになる 5 桁の数値列を郵便番号上のはじまりとする一画に設定され、かつ、その実験の【時間軸上のスターティング・ポイント】が[2001 年 9 月 11 日]と通ずる日付表記に設定されている(他の事情からもそのように判じられるようになっている)とのことが現実にある」

とのなかで「先覚的言及などそこにはない」としたいとのことであれば話は別だが、一のようなことを偶然と言い切れるのは「相応の」[語るに値しない手合い]だけとなるであろう。すなわち、[親分がそういえば黒いカラスを白いカラスとして承伏するとのヤクザの盃事の決まり文句に見るようなやり方を容れるとの相応の人種]ないし[事実を事実と認識する能力さえない「正気ではない」との類](正気に見えても中身は壊れているとの筋目の類)ならば話は別となるであろう—)

また、上記キップ・ソーン著作に類する悪辣さを見てとれる作品として本稿では映画『ファイト・クラブ』に次のような要素が見てとれることを示しもしてきた。

(以下、「出典」および「(DVD さえ借りれば容易になせるレベルに落とし込んでの)細かき確認方法」をここまで書き記してきたところに譲ったうえで『ファイト・クラブ』先覚性にまつわっての振り返っての(再度に加えもしての)「再々」表記をなす)

(**出典(Source)紹介の部 102**で「DVD を借りて視てみるだけで容易に後追いできるよ
うに。」とのかたちにて典拠紹介をなしてきたところとして)

[1]

1999 年公開の映画『ファイト・クラブ』はその「冒頭部」からして「グラウンド・ゼロ」との言葉が極めて目につくかたちで登場している作品となる(映画再生時間、すなわち、DVD 再生環境タイムカウンター表示[00 時間 02 分 09 秒]から同[00 時間 02 分 10 秒]の部にて(日本語字幕ではなく)英文字幕オンにすることで視覚的に容易に確認可能である。尚、同じくものことについては先立っての段で次の趣旨のことも解説していた⇒「[グラウンド・ゼロ]との言葉はそも、造語の契機として「[マンハッタン]計画の結果としての広島・長崎の原爆投下地」に対して用いられた(生み出された)との経緯ある言葉にして、後、「ペンタゴン」の特定区画を(原爆と同様の核による攻撃との式で)指す言葉となったとの経緯ある言葉ともなる。そうもした相当に使用局面が限られていた言葉がグラウンド・ゼロであった中でそれが「爆心地」とのニュアンスでワールド・トレード・センターの災厄に流用されるようになったとの経緯がある。であるから、(相当、特殊な言葉であったとの)グラウンド・ゼロが「1999 年封切りの」映画の冒頭で用いられているのは「印象的」である)。

(**出典(Source)紹介の部 102(2)**で「DVD を借りて視てみるだけで容易に後追いできるよ
うに。」とのかたちにて典拠紹介をなしてきたところとして)

[2]

映画『ファイト・クラブ』は「[グラウンド・ゼロとの語で表されているとの一画]を【連続ビル爆破倒壊】によって現出しようとの計画」を描いている作品である(クライマックスでは複数ビルがパンケーキ状倒壊を呈しての発破倒壊していくさまが描かれている(劇中内の爆破倒壊数にまつわっての言及では 12 棟)。同じくものことについては映画再生時間、すなわち、DVD 再生環境タイムカウンター表示[02 時間 01 分 18 秒](映画後半部)以降の部をもって視覚的に容易に確認可能なことである。尚、現実世界で発生して七棟の巨大ビルの倒壊を見た 911 の事件では「それが事実かは置き」ビル発破倒壊説が専門家団体より(何名もの再調査請求にまつわっての専門家署名が集められつつも)呈示されていること、先に解説したとおりである(**出典(Source)紹介の部 101**を参照のこと)。

(**出典(Source)紹介の部 102(3)**で「DVD を借りて視てみるだけで容易に後追いできるよ
うに。」とのかたちにて典拠紹介をなしてきたところとして)

[3]

映画『ファイト・クラブ』は劇中ビル倒壊計画をして「金融会社(表にその名を目立って出されるのはクレジット・カード会社)を標的にして金融システムそれそのものを攻撃する」ためのものであると明示している作品である(映画再生時間、すなわち、DVD再生環境タイムカウンター表示[00時間02分09秒]から同[00時間02分10秒]の部にて英文字幕オンにすることで視覚的に容易に確認可能なことである。他面、現実世界で発生した911の事件は(一般的解説のされようを引いて示しているように)金融系企業集積地たるワールド・トレード・センターが攻撃された事件である)。

(出典(Source)紹介の部102(4)及び出典(Source)紹介の部102(5)で「DVDを借りて試みるだけで容易に後追いできるように。」とのかたちにて典拠紹介をなしてきたところとして)

[4] 及び [5]

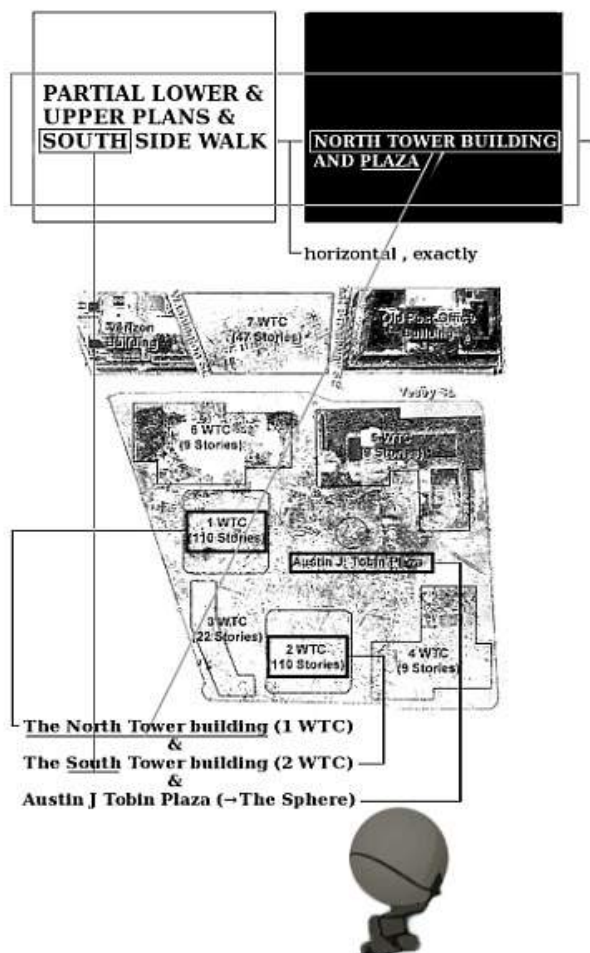
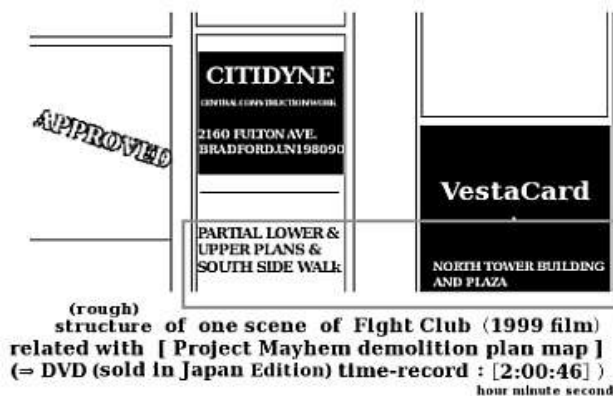
1999年封切りの映画『ファイト・クラブ』では劇中ビル爆破計画の標的(映画冒頭部よりグラウンド・ゼロと呼称されている一帯)が「ワールド・トレード・センター」そのものであることを明言しているとの描写が現実に「多面的に」なされている。

(以下、映像コンテンツの確認箇所を秒単位で容易に確認できるように指摘なしでもしたところを再述するとして)

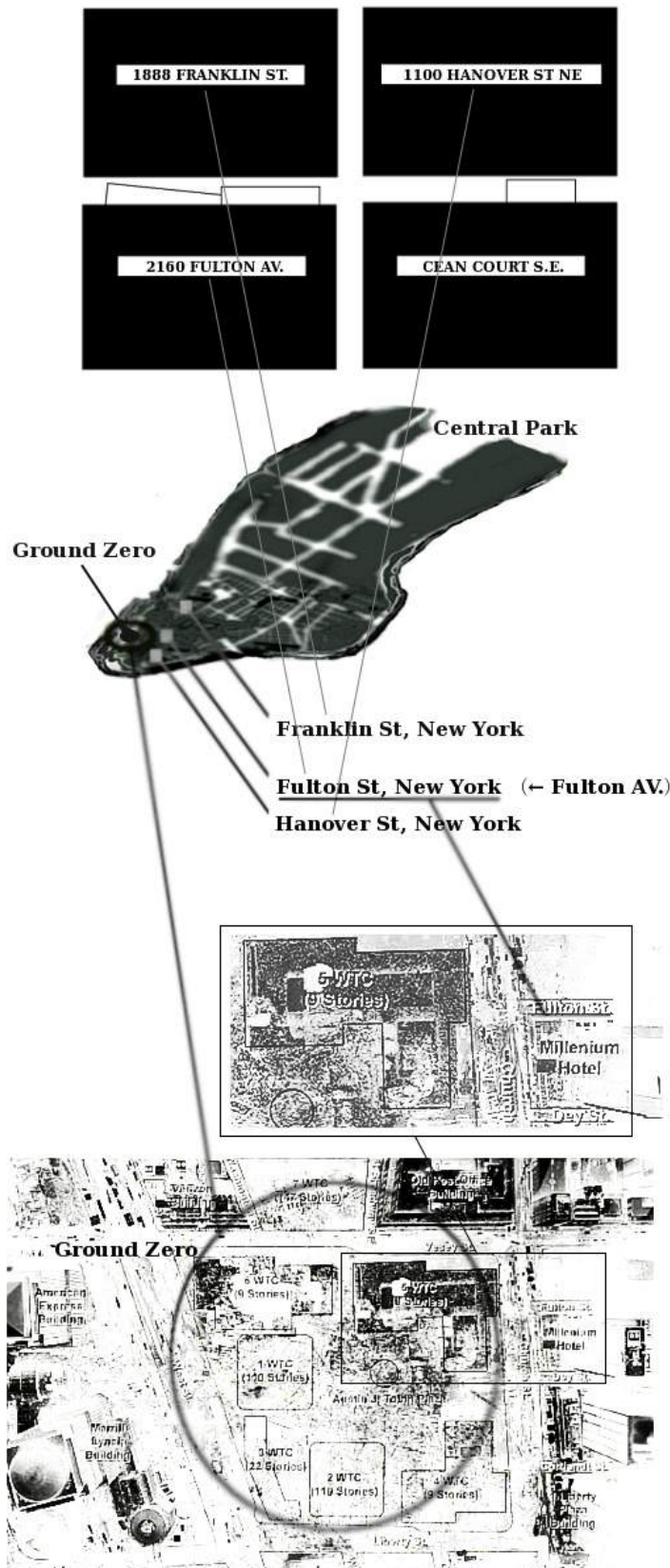
一点目。まずもってファイト・クラブの連続ビル爆破に収束する計画、プロジェクト・メイヘム(騒乱計画)にあつての初動段階の爆破目標 —[一石二鳥計画などと銘打たれたの前段階爆破作戦]— として「黄金色の金属製球体オブジェ(噴水に設置のオブジェ)」が爆破されるとの描写がなされているが(映画再生時間、すなわち、DVD再生環境タイムカウンター表示[01時間45分29秒](映画後半部)以降のシーンにて視覚的に確認可能なことである)、噴水の再現までなされての映画版セットのそれとほぼそっくりといった球形金属オブジェがワールド・トレード・センターにてのツインタワーの間(のオースティン・トービン・プラザの噴水部)に存在していたとこのことがある(ツインタワー付設の「ザ・スフィア」という実在のオブジェの「露骨で」「凝った」イミテーションを映画『ファイト・クラブ』が一連の同時ビル爆破計画にあつての初動爆破対象)として登場させていたという問題である)。

二点目。計12棟のビルの同時爆破をなすための計画と映画『ファイト・クラブ』劇中に言及されているプロジェクト・メイヘム、同計画関連の秒単位切り替わり描写 —表示時間があまりにも短いために確認には[一時停止]が必要になるとの描写— として後半に「爆破対象のビルと思しきビル名称」が(主人公が自身のオルター・エゴ＝別人格のタイラー・ダーデンの計画を当局にリークしようとした際に出てくる計画文書記載のものとして)映画にて表示されてくるとのことがある。具体的には(劇中にてワンカット表示されている計画関連文書にみとめられる爆破対象と思しきビルらとして)「ノースタワーの名前が表示されており、ノースタワーおよびサウスタワーからなるツイン・タワーのことが想起されるようになっている」(映画再生時間、すなわち、国内流通DVD再生環境タイムカ

ウンター表示[02時間00分46秒](映画後半部)のシーンの[一時停止]にて確認できることである。また、そちら一時停止にて確認できる(そして本稿でも再現図の呈示をなしている)とのシーンではノースタワーの表記と水平位置にあって並行となるかたちでサウスウォークとの文字列が表示されており、そこから、[ノースタワーとサウスタワーらツインタワーの「並行」してのありよう]のことが想起されるどころ「とも」なる。さらに、同じくものシーン([02時間00分46秒]でのシーン)ではノースタワー・アンド・「プラザ」との表記がなされており、それによって、[現実のワールド・トレード・センターのツインタワー区画にツインタワーに隣接するかたちでオースティン・トービン・「プラザ」(黄金の巨大球形金属オブジェたるザ・スフィアが配されていた一画)が存在していたことの想起「も」が]なされるようになっている。加えて述べれば、ニューヨークはマンハッタンはロウワー・マンハッタンが攻撃対象となったのがかの911の事件であるとのことがある中でロウワー・マンハッタンはロウワーとの文字列もが問題となる爆破計画文書関連のシーンに partial 「lower」 & upper plans & 「south」 sidewalk とのかたちで入れ込まれているとのことすらもがある)。



三点目。『ファイト・クラブ』では[ビル爆破計画関連文書投函用ボックスの宛先]が映画クライマックス間近に登場してくるが(映画再生時間、すなわち、DVD 再生環境タイムカウンター表示[01 時間 56 分 10 秒](映画後半部)のシーンの[一時停止]にて確認できることである)、[壁に貼られての4箇所の連絡先ラベル]に記載されている[通り](ストリート)の名称は大部分(3箇所)がワールド・トレード・センター近傍(1マイル圏内)の[通り]の名前ともなっているとのことがある(殊にフルトン・ストリートなどにはその色彩が色濃く現われている)。



四点目。映画にては「お前は廃墟となった——ロックフェラー・センターの大渓谷でヘラ鹿を追う」との台詞が爆破計画主催者としてのタイラー・ダーデン由来のものとして後半部に登場してくる(映画再生時間、すなわち、DVD 再生環境タイムカウンター表示 [01 時間 41 分 24 秒] から [01 時間 41 分 30 秒] の部にて英文字幕オンにすることで視覚的に容易に確認可能なことである)。その点、ロックフェラー・センターはマンハッタンにてセンターを名前に関する商業区画としてワールド・トレード・センターとの類似性を感じさせるものであり、また、ロックフェラー・センターとワールド・トレード・センターが共にロックフェラー系の人脈によって造成を見た一画である(当然に先の段で典拠を紹介しているとのことである)こともが想起される。

以上より映画『ファイト・クラブ』の連続ビル爆破計画たるプロジェクト・メイヘムの目標地が —911 の事件が発生した際にその場に存在していたビルが全部倒壊を見た一区画である— [ワールド・トレード・センター] そのものであると容易に判じられるようになっている(殊に一点目が最も強力な示唆材料となり、二点目、三点目、四点目のことらは一点目のことと複合顧慮してこそ[その重みをよもって理解できるもの]となっている。尚、本稿先立っての段ではデラウェアのウィルミントンが爆破対象地モデルのように語る口上があると紹介したが、正気であるのならば、その見解が以上の摘示事例の前にて霞むものであることは容易に理解なせるものかとは思われる)。

(**出典(Source) 紹介の部 102(6)**で「DVD を借りて視てみるだけで容易に後追いできるように。」とのかたちにて典拠紹介をなしてきたところとして)

[6]

映画『ファイト・クラブ』にはその劇中、後に[911 の事件]が発生することをサブリミナル的やりよう(瞬間瞬間のワンカットを用いるといった式)で臭わせているが如くシーンが他にも含まれている。以下にて示すありようにて、である。

[主人公の住まう condominium —ピアソン・タワー「ズ」という物件— の上階の主人公居宅]が[火災爆発]を起こした描写がなされているが、それが後に[タイラー・ダーデンによる時限性の人為爆破]であると判明した上、その[火災爆発]のシーンの直前に[飛行機が他の航空機と激突するとの主人公の空想シーン]が展開しているとのことがある]

[劇中、一瞬表示される社会的困難な状況にある者達の会合リストの中に「不自然に」航空機フライトを意識させる記述がなされているとのことがある]

[劇中、ホテルよりチェックアウトするシーンにて精算のためにその確認を求められた[主人公のオルター・エゴ(別人格)のホテルよりの電話発信先 —プロジェクト・メイヘム実行各部署— のリスト]がそれ相応の 911 というナンバーを想起させる表示と結びつけられているとのことがある]

(以上、各部の映画登場セクションについて「も」(DVD 再生環境にてのタイムカウンター表示から「秒単位で」確認できるように、と)先の出典紹介部にて図示をしながらも呈示なししている)

(**出典(Source) 紹介の部 102(7)**で「DVD を借りて視てみるだけで容易に後追いできるように。」とのかたちにて典拠紹介をなしてきたところとして)

[7]

先行するところの[4]. 及び[5].、そして、上の[6]. に見るありようが「計算してのわざとのことである」と申し述べられようところとして映画『ファイト・クラブ』に関してはその劇中、「不快なサブリミナル映像を流す」ことへの

「自己言及」

「がなされている」とのことまでもがある。主人公のオルター・エゴとしてのタイラー・ダーデン(別人格)が映写技師として働いているシーンにて同タイラーが「猥雑画像」を上映フィルムにサブリミナル的に仕込み、子供が泣かされるシーンが出てくる(映画再生時間、すなわち、DVD 再生環境タイムカウンター表示[00 時間 33 分 15 秒]の段階にて英文字幕オンにすることで視覚的に容易に確認可能なこととして “ that's when you'll catch a flash of Tyler's contribution to the film. Nobody knows that they saw it but they did.” (日本語字幕では)「ほんの一瞬ポルノ映像が入る。意識しない一瞬だ」と述べられている一幕にまつることである)といったことや映画『ファイト・クラブ』に関しては末尾にて男性性器写真を写し取ってのシーンが含まれているといったことがそうである——[生き死にに関わる問題を告発するために作成したもの]である本稿の品位を落とすたくはないため、そういう話はあまりしたくはないのだが、劇場公開版および DVD 版では規制の問題からカットされていたが、Blu-ray 版では劇の終わり近くでの男性器描写のサブリミナル・カットが「復活」しているとのことがよく知られている——)。

(出典(Source) 紹介の部 102 (8)で「オンライン上より容易に後追いできるように。」とのかたちにて典拠紹介をなしてきたところとして)

[8]

映画『ファイト・クラブ』の原作小説『ファイト・クラブ』をものした小説家チャック・パラニュークのやりようからして[911 の事前言及]染みた側面を有しているとのことが現実にある。

(:本稿ではチャック・パラニュークの 1996 年版『ファイト・クラブ』にて[191 階のビルが爆破対象とされていること]を問題視し(現行にて世界最高層のビルである尖塔状のドバイの[ブルジュ・ハリファ]ですら 200 階を若干上回るものの 160 階以上はテナントが入れるような構造ではない、メンテナンス部にすぎないとのありようを呈している(実質階数 163 階とも)とのことも顧慮する必要があるであろうと指摘し、191 階とのフィクションのビルがいかにも不自然に高いものであるのか、それがゆえに、191 との数値が異彩を放つての[恣意性]が問題になるろうとの話をなしもしている —そうしたことをわざわざ問題視したのは原作小説に見る[191 階建てのビルの爆破計画]が映画化版にあつての[ワールド・トレード・センターそのものであると視覚描写されての一面における複数ビル爆破計画]として描かれているからである(191 が 911 と入れ替え可能な中にてそういうことが、冗談抜きに、見てとれるとのことがある) —)、また、『ファイト・クラブ』原作小説作者 チャック・パラニューク 1999 年小説 Survivor『サバイバー』からして【「双子」と「飛行機テロ」と「狂信的宗教の徒輩」と「狂信者の自殺挙動」とがモチーフとされての作品】【「飛行機が装丁上、非常に目立っている作品】となっているとのことを細かくも紹介している)

(**出典(Source)紹介の部 102(9)**)で「DVDを借りて試みるだけで容易に後追いできるように。」とのかたちにて典拠紹介をなしてきたところとして)

[9]

映画『ファイト・クラブ』では[(時限爆破に使うものとしての)ダイナマイト製造と人間石鹼と生贄の儀式の話]が[ビル倒壊計画主催者のタイラー・ダーデン]によって通貫したものとして語られるとの流れ(ダイナマイト製造のためのグリセリンのことが人間由来の洗浄作用を呈する灰汁と結びつけられての流れ)が見てとれる(映画再生時間、すなわち、DVD再生環境タイムカウンター表示にての[01時間00分34秒]から[01時間02分38秒]の部にてのやりとりを英文字幕オンにして見てみることで視覚的にも確認可能なことである)。

実に残念だが、以上振り返っての [1] から [9] のことは全て、

[本稿の先の出典紹介部で網羅的に該当部再生箇所を「秒単位まで具体的に表記している」との流通DVDを一時停止しながらでも視聴することで(あるいは一部はオンライン上にて即時に確認できる基本的情報に目を這わすことで)[容易に確認できる事実]の問題]

となっている(：ちなみに以上 [1] から [9] のような要素と共にあると摘示できる『ファイト・クラブ』という作品が[フリーメーソンの象徴体系]と問題になる式で多重的かつ露骨に接合しているとのこと「も」があり、については本稿にての**出典(Source)紹介の部 103**から**出典(Source)紹介の部 103(6)**及び**出典(Source)紹介の部 104**及び**出典(Source)紹介の部 105**を包摂する解説部でもって膨大な文字数を割いて、唯、具体的論拠に基づいての指摘に注力している。「フリーメーソンが911の演出者であるとの視点を本稿では強くも前面には出さないが、」「何ならそうした視点は可能性論に留めてもらっても構わないが、」としつつも、『ファイト・クラブ』にあってはフリーメーソンの象徴主義との結節性が「根深くも」みとめられるようになっている(その他の[911の予見的言及文物]らとも揃い踏みでそういう特性が「根深くも」みとめられるようになっている)とのことをとにかくもって細かくも解説してきたわけである)。

上記のことはアーバン・レジェンド、[都市伝説]などという言葉にて[事実を見ない種別の人間]ないし[事実を見せたくはない種別の人間](あるいはそういう殺されても文句も言えぬような「愚劣な」ないし「卑劣な」手合いを使役している力学ら)は締めくくろうとするかもしれないが、いいだろうか、繰り返すが、

[全て容易に確認できるとの事実の問題]

である(その事実の問題を示すために本稿従前の段では『ファイト・クラブ』関連の解説だけで極めて紙幅厚くもなつての文量を割いている。そうしたことまでをわざわざなしているのはそういう予告が[我々人間を[皆殺し]にする 一家畜小屋を「歴年」、人間の水準では極めて長くもなつてのタイムスケールで歴年、構築・運営し続けてきたのは[より洗練化されての未来の家畜小屋の定立](陰謀論者が厚顔無恥にも垂れ流す新世界秩序なるものの定立)などのためではなく、家畜を全頭処分することとワンセットの利益を享受することである— の意思「表示」と濃厚に結びついていると判じられるだけのことがある(と気付いてしまった)、ゆえに、その「具体的」判断論拠の是非と共にそのことを世人に問いたいと考えるに至ったからである——尚、筆者としては同じくものことを無条件に信じてもらうつもりはない(無条件の信用とは妄信と同義、すなわち、宗教の徒輩よろしくの精神と魂の実質が支配さ

れている病的状況に通ずると当然に考えている)。筆者としては代わりに【疑いもしながらも批判的検証】をなしていただき、もってして、状況把握をなしていただきたいのである(そして望むらくはリスクが最小限と判断しての式ででもいい、できうるかぎりのアクションをよく考えたうえでなしもしていただきたい(ただし統制があまねくも及んでいる節がある偽りだらけのこのような世界でアクションまでは無理強いするつもりもない。万人がこのまま何もせねば【「予告されし」破滅】も動かぬであろうと判じながらも申し述べることながらも、である))——)。

2.

上の 1. と振っての段では

「ドゥームズデイ・クロックはその時刻下限のポイントが時針にて「9」「11」を指すものとなっている」
「[911 を指す時計時針]と[先の 2001 年の事件に関連する事物]を(「911 の事件が発生する前に」)併せて描いていた作品「ら」が存在する」

とのことと複合顧慮すべきこととして

[911 の発生をその事件発生前から「露骨極まりなくも」予見的に言及しているとの作品らが存在している]

とのことについて言及し、その例示として、

BLACK HOLES & TIME WARP Einstein's Outrageous Legacy『ブラックホールと時空の歪み アインシュタインのとんでもない遺産』(原著 1994 年初出)

映画 **Fight Club**『ファイト・クラブ』(1999 年公開)

ら両二作品のことを(先にて解説してきた内容を振り返りもし)取り上げた。

ここ 2. と振っての部ではそうもした 1. と振っての部の流れ、くどくも繰り返すが、

「ドゥームズデイ・クロックはその時刻下限のポイントが時針にて「9」「11」を指すものとなっている」
→(ドゥームズデイ・クロックと 911 との結びつきについて顧慮すべきだけのことらがある)→
「(時計繋がりで) [911 を指す時計時針]と[先の 2001 年の事件に関連する事物]を(「911 の事件が発生する前に」)併せて描いていた作品らが存在する」
→(時計の時針でもって 911 の事件が発生するが如く作品らがある一方でそうした枠組みを離れて見れば、際立ってのものらが存在している)→
「911 の発生をその事件発生前から「露骨極まりなくも」予見的に言及しているとの作品らが存在している」

との話の流れにて顧慮すべきこととして、

[911 の予見をなしているが如く文物は (ヘラクレスの第 11 功業にて登場した)【黄金の林檎 — 古のトロイアの崩壊原因 — 】と少なからず結びついている]

とのことを(振り返りもして)強調しておく — についてはドゥームズデイ・クロックのドゥームズデイ、「最後の審判のその日」に見るキリスト教の罪障観の所以たる原罪付与のプロセス(【禁断の果実】での誘

惑のプロセス)が【黄金の林檎】と多重的に接合しているとの(繰り返し本稿にて訴求なしもしてきた)事情がありもしての強調でもある。

それにつき、先立って例示なしもしてきたところの「露骨な」予見的作品ら、

BLACK HOLES & TIME WARP Einstein's Outrageous Legacy『ブラックホールと時空の歪み アインシュタインのとんでもない遺産』(原著 1994 年初出)

映画 Fight Club『ファイト・クラブ』(1999 年公開)

の両二作品からして

[911 の予見文物は(ヘラクレスの第 11 功業にて登場した)黄金の林檎 一古のトロイアの崩壊原因一 と結びついている]

との例に漏れないものとなっている。

まずもって映画『ファイト・クラブ』についてからだ、同作作中にあるのは

【【黄金の林檎】としてルネサンス期芸術作品に描画されてきたものと同様の構図をとるオブジェ—それはワールド・トレード・センターのツインタワーの合間に据え置かれていたザ・スフィアというオブジェのイミテーションでもある— を爆破する]

との描写が見受けられるとのことがある(本稿にての補説 4 の部、その出典(Source)紹介の部 103 (6) に後続しての解説部などを参照のこと)。

他面、BLACK HOLES & TIME WARP Einstein's Outrageous Legacy 『ブラックホールと時空の歪み アインシュタインのとんでもない遺産』(原著 1994 年初出) の方についてであるが、

[【書籍『ブラックホールと時空の歪み』における 911 の「多重」予見描写の部】 → 【通過可能なワームホールに対する思考実験の描写の部】]

[【書籍『ブラックホールと時空の歪み』に見る「通過可能なワームホールに対する思考実験の描写」の部】 → 【物理学者キップ・ソーンが著名科学者にして作家でもあったカール・セーガンの小説『コンタクト』にアイデア供与をなすところで煮詰めた概念を扱っての部】 → 【小説『コンタクト』】 → 【外宇宙とのゲート装置(「正五角形」を十二枚重ねての正十二面体)を物理学者キップ・ソーンの助言に基づき登場させている作品にして「黄金の林檎にて滅んだトロイアにまつわる寓意を含む側面」を多重的に有しているとの作品(としての小説『コンタクト』)] → 【黄金の林檎を作品の副題としており 911 の予見文物となっている『ジ・イルミナタス・トリロジー』との記号論上の多重接合性(「黄金比を巡る寓意」「正五角形と結びつくゲートを巡る寓意」)が問題になるとの作品(としての小説『コンタクト』)]]

との関係性の摘示がなせるようになっている(同じくものことについては本稿にての補説 3 の部でその多重関係性の問題について多数の出典紹介部を付すとのかたちで入念の上に入念を期しての解説を講じてきたところでもある)。

表記のように「際立っての予見作品」(露骨なる 911 の発生に対する「予見的」言及文物)にあって「黄金の林檎」との結びつき(となれば、それが登場する「ヘラクレスの第 11 功業」との結びつきでもある)が見てとれるようになっているとのことがあるのだが、「911 の事件と黄金の林檎が結びつきもする」とのことによつては他の例としての次のような例示も長大なる本稿ではなしもしてきた。

日本にて流通している国内漫画作品 (『たかだか青少年が嗜むにすぎぬものであるとの漫画作品であろうに。』『大の大人があらたまるところで話柄として用いるようなものなのか?』と向きによっては当然に疑義呈示するようなものだが、[まじめな言い分を「性質」として斥けるようなそういった作品であるからこそ大っぴらに悪質な寓意が込められているの

ではないのか?』と逆に意見呈示したいようなところとしての漫画作品) としての、

『ジョジョの奇妙な冒険 スターダストクルセイダース』(にあっての集英社「単行本」版『ジョジョの奇妙な冒険』第20巻(にて掲載の[「クヌム神」のオインゴ「トト神」のボインゴ(1)]の部)ないし集英社「文庫」版『ジョジョの奇妙な冒険』第13巻(にて掲載の[「クヌム神」のオインゴ「トト神」のボインゴ(1)]の部)

に関しては

[作中の【予言漫画】(フィクションの中で【予言漫画】として登場してくる作中内漫画)にて[911]との数値列が刻字された服を着た男が[飛行機]と共に串刺しにされるとの描写がなされている。そして、そうした描写と紐付けられての10時30分という時刻帯は[現実世界でのノースタワーの崩落時間(に極めて近しき時刻帯)]ともなっているものである]

とのことが見受けられる —【911との(蓋然性がない、不自然なる)ナンバリング】、【飛行機描写】、【ツインタワー崩落時(近似時刻帯)】があわせて見受けられる— ことをもってして[予見描写]であろうと一部で問題視されているが(同じくこの部は出典(Source)紹介の部108にていわれようを引いているように「考えずに書いていた(そして予見描写になっていた)」と原作者に振り返られているような部ともなる)、そうした予見描写とされもするものがフリーメーソンのエンタード・アプレントイス位階(入団者が目隠しを被せられたハングド・マン; 吊された男を演じさせられるフリーメーソン入団位階)のトレーシング・ボードとそっくりな構図 —[月]と[一つ目]と[太陽]を一直線に並べる構図— を呈しているとのことを本稿の先立っての段では指摘していた(補説4の部の後半部/繰り返すが、筆者は国内漫画作品の作者がフリーメーソンであるなどとの陰謀論、[操り人形]で充満した世界における真の問題を韜晦(とうかい、はぐらかし)するが如く陰謀論を唱えたいのではない)。

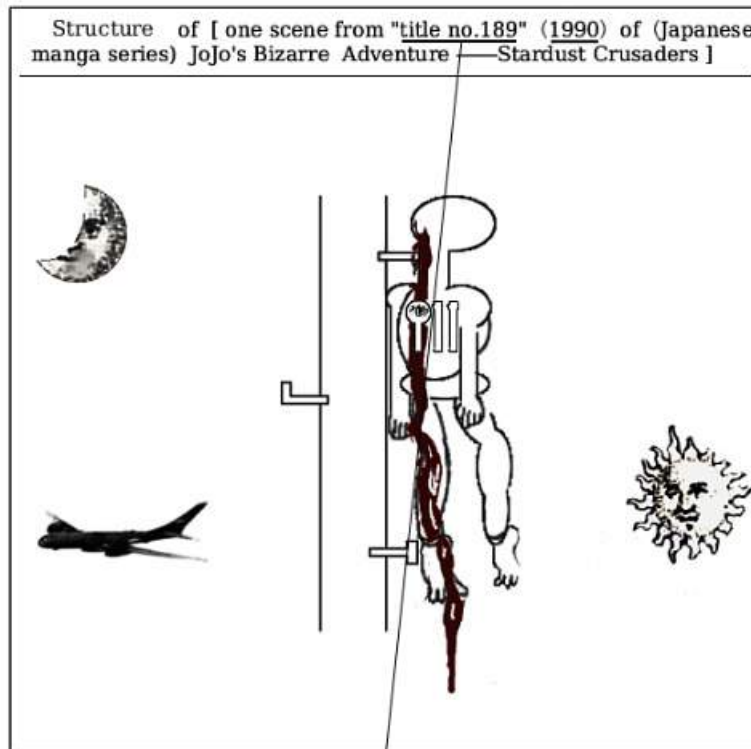
そして、同じくものところからして【黄金の林檎】と結びついているとのことがあると本稿の先の段にては指摘もしていた。

というのも、表記の予見描写(と形容されるようなところ)を含む漫画作品の収録コンテンツタイトルが

【爆弾仕かけのオレンジ】

となっており、スタンリー・キューブリックによって映画版の監督がなされた『時計仕かけのオレンジ』へのオマージュとなっている(としか解しようがない)とのそちらタイトルに見るオレンジ、それが史的に見て[【黄金の林檎】との同一物]と見做されてきたとのことがあるものだからである(：また、オレンジを介しての側面だけではなく『ジョジョの奇妙な冒険 スターダストクルセイダース』の予見描写の部に関しては錬金術(に見る賢者の石)の象徴画を介しても【黄金の林檎】との接点が顧慮されるものともなっている。ただ、については輪をかけて複雑な話であるため、ここでは振り返りをなさない(細かくもは先行するところの本稿補説4にあってのアタランテ —黄金の林檎と結びつく乙女— に通ずるところの錬金術図葉を引き合いにしての解説部を参照頂きたい)。さらにもってして述べておくと、『ジョジョの奇妙な冒険 スターダストクルセイダース』にあっての予見描写を包摂する[爆弾仕かけのオレンジ]の部にオマージュの対象とされているとの筋目の映画『時計仕かけのオレンジ』についてはビル・ゴールドという多数の映画リリースポスターを作成した人物の手になるフィルムリリースポスターが[映画とワンセットとなるもの]として引き合いに出されることが多く(英文 Wikipedia 映画解説項目にも、また、レンタル店に見るDVDカバーにも[それ]が見受けられる)、そうした映画の顔とでもいべきポスターからして[三角形の中の一つ目]の描写を介してフリーメーソン・シンボリズムと接合するようなところがあるものとなっている(とのことを本稿先立っての段では細かくも解説してきた))。

(再掲図として)



"Knum' Oingo and Thoth' Boingo (1)"
include

Tankōbon titled The Exploding Orange (the bomb hidden in orange)
(Japanese title : Bakudan-jikake no Orenji)

similar

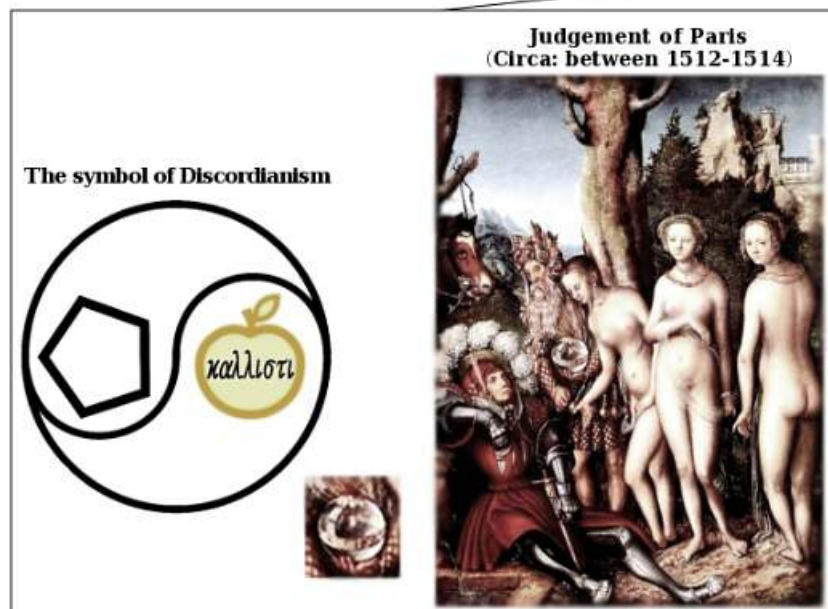
(Japanese title : Tokei-jikake no Orenji)

A Clock Work Orange

" In many languages, the orange is referred to as a "golden apple". For example, the Greek χρυσομηλιά , and Latin pomum aurantium both literally describe oranges as "golden apples". Other languages, like German, Finnish, Hebrew, and Russian, have more complex etymologies for the word "orange" that can be traced back to the same idea . "

——Wikipedia [Golden apple] article

Golden apple



(前掲の再度呈示の図は【主観が介在するような性質のものではないとの事柄】について側面(脇方向)から補足説明をなすためにいちいちもって作成、先の段に挙げていたものとなる)

またもってして述べるが、一国内漫画作品『ジョジョの奇妙な冒険』第20巻(にて掲載の[「クヌム神」のオインゴ「ト神」のポインゴ(1)]の部)から離れもして—(つい先立っても言及したところの)1983年初出の、

Trading Place (邦題『大逆転』／複数方向から[911との数値と結びつきもするワールド・トレード・センター]がお目見えしている作品ともなる)

という映画作品に関しては

[911]を時針でもって指す時計表示と結びつけられて描写されてのワールド・トレード・センター内の【オレンジ先物市場】を巡る内容]

から[オレンジ←→黄金の林檎と同一視されもする果実]との観点で【黄金の林檎】と結びついていると判じられるようなところがある(※)。

※ [以下、さらに加えもしての振り返り表記をなすとして]

これまたもってしての振り返り表記をなすが、

[911の事件そのものの「予見」事物には当てはまらないだろうが、[911という数値と黄金の林檎が結びつく]とのことを一面で示す例にはなるであろう]

とのものらの紹介をも本稿にあっては今までになしてきた。

例えば、である。本稿出典(Source)紹介の部56(2)「の後」に続けての段ではつい最近、2012年後半期にて欧州で封切を見た【**[黄金の林檎]と[9月11日]を結びつけての映画**】として

September Eleven 1683

という映画 一同映画、直訳すれば『1683年9月11日』とのタイトルの海外映画で17世紀末のオスマントルコによるウィーン包囲を扱った歴史映画となる—の同じくもの伝で問題になる内容に言及もした(:史実に名を借りた半ばフィクションとあいなっている同映画ではウィーンが[イスラム勢力に[黄金の林檎]と呼称されている都市]と紹介されながら、“On September 11th 1683, Islam was at the peak of of it's expansion in the West. Three hundred thousand islamic troops under the command of Kara Mustafa were besieging the city they called " The Golden Apple ": Vienna.”(拙訳として)「1683年「9月11日」、その折、イスラムは西洋に対する拡大基調にあっての絶頂期にあった。カラ・ムスタファに指揮されての軍兵総勢30万が彼らが【黄金の林檎】と呼んでいた都市、ウィーンを包囲するに至っていた」(訳はここまでとする)との冒頭部解説から開始・スタートを見ている映画となっている)。

さらに 本稿前半部、出典(Source)紹介の部63(3)に含めての部では北欧神話を今日に語り継ぐ『古エッダ』(エルダー・エッダ)、同『古エッダ』に包含される[スキールニルの歌]というものに登場する[黄金の林檎]が[11]や[9]と結びつけられながら学者らに分析されているものであることを示す記述を引用なしもした。以下のようなかたちにて、である。(直下、筆者が探求の一環として読したところの『エッダ——北欧歌謡集』(新潮社刊行／訳者は北欧文学を専攻していたとのことである谷口幸男元広島大学教授)のp.67、『スキールニルの歌』注釈にあっての部より再度の引用をなすとして) “**林檎を十一:十一という数はおかしい。九が古代ゲルマンでの神聖な数である。epli ellifo 林檎を十一は、epli elle-lyf 若返りの林檎の書き誤りではないかという説がある。スノリの「ギェルヴィたぶらかし**

にもあるように、ブラギの妻イズンは、神々が年をとったときに食べる若返りの林檎をとねりこの箱にしまっている。イズンの黄金の林檎について九世紀のスカルド詩人スィヨゾールヴ・オール・フヴィーニが書いているものによると、イズンはあるとき、その林檎ともども、ロキのために、巨人スィアチの手におちた。アース神は年をとりはじめ、ロキはイズンと林檎をとり戻さねばならなかった。彼は鷹の姿に身を変えて巨人の国へ飛び、イズンを胡桃(くるみ)に変えて首尾よくつれかえった” (引用部はここまでとする)

上にては

『スキールニルの歌』に見る黄金の林檎と「11」を結び付けている表現 (epli ellifo との表現) は「9」を神聖数とするゲルマンの観点から度がずれており、別の意味でまとまった「若返りの林檎」との表現 (epli elle-lyf との表現) の誤記ではないか、との説もある」と北歐文学研究者(谷口幸男元広島大学教授)によって言及されているわけである。

以上のような事例らが見受けられるとの一事についてそうもしたものを具現化なさしめている者たちの心境・内面ありようがどういったものか推し量りなすことはできないのだが (『それが陥穽(落とし穴)ともなろうと解されるところとして我々人間は他者の内面がどうなっているのかはおもんばかりできず、人間としての実質が剝(く)り抜かれて代わりに人工知能でも入っているのかといった本質的に内実空虚なる者をときに我々は人間であるかのように誤信してしまったりする』と筆者などは見もしている)、とにかくも、【黄金の林檎】と「9」と「11」が結びつけられるものとなっていることだけは【911の事件の予見文物】それ自体に限らずとも指摘できるようになっているとことがある (:[9月11日] (セプテンバー・イレブン) との言葉を原題に含む映画が【黄金の林檎】との語を含む冒頭部ナレーションからはじまり、そして、全編、[黄金の林檎と呼称されている都市ウィーン]を巡る攻防戦を扱ったものとしてここ最近、2012年にリリースされていることをしてそうした事例に当てはまらないなどとスカスカの目、虚ろなる内実でもってしてとらえるのならば話は別だが。)

3.

ここまでにて言及の1. 及び2. のようなことがあることに加えて、である。

【911の事件が起こったニューヨークという土地柄からして【黄金の林檎】と結びつくようにさせられている】

とのことが着目すべきところとしてある。

(:「ドゥームズデイ・クロックの [時針にて「9」「11」を指す下限のポイント] を911と結びつけるとの式に適合性を見出して然るべきような事情が存する ; [911を指す時計の時針] と [先の911の事件に関連する事物] を911の事件の発生前から併せて描いていた作品らが存在する。そして、911の予見物らは【黄金の林檎】とも結びつくきらいがありもし、そこに見る【黄金の林檎】とは【エデンの禁断の果実】、ようするに、【ドゥームズデイ・クロックに見るドゥームズデイがそれを意味する [審判の日] (ジャッジメント・デイ) のそもそもの原因となっている [原罪] (キリスト教に属する宗教的な者達にとってのオリジナル・シン) をもたらしたとされるもの】 (となるフォウビドン・フルーツ) と複合的観点にて結びつくものでもある」。以上の観点との絡みで(911の事件が発生した) ニューヨークという土地柄からして【黄金の林檎】と結びつく側面があるとのことが意をなしてくる)

同じくものこと、ニューヨークという土地柄それ自身が【黄金の林檎】と結びつくようにされているとのことについて以下にて繰り返しての表記をなす。

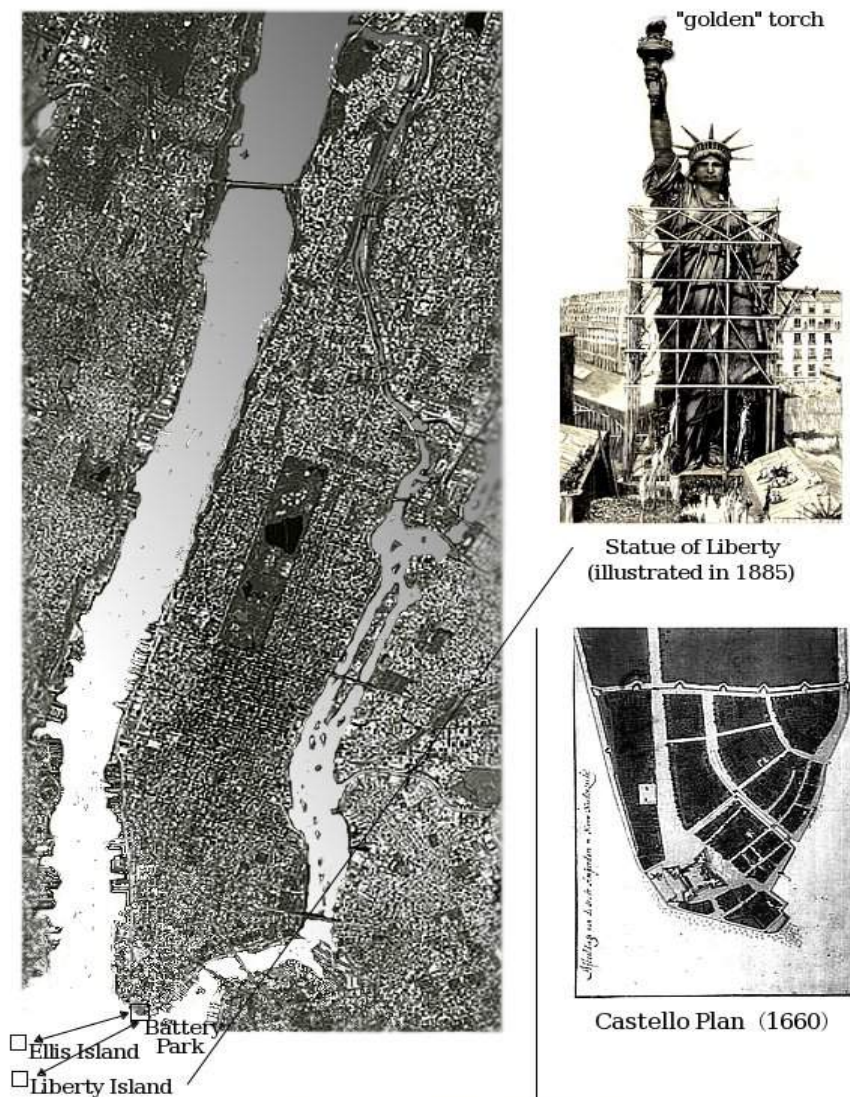
「(まずもってしてそこから取り上げるが) ビッグ・アップルことニューヨークには【エリス島】という島が包摂されている。その場、【エリス島】を介して(結果的に)[不和]をもたらすことになってしまった多くの移民がアメリカに流れ込んだとの歴史的背景がある——(和文ウィキペディア[エリス島]項目にての冒頭部概説部にての「現行」記載内容を引用すれば(以下、引用なすところとして) “エリス島 (Ellis Island) は、アメリカ合衆国、ニューヨーク湾内にある島。アメリカの文化遺産である。19世紀後半から60年あまりのあいだ、ヨーロッパからの移民は必ずこの島からアメリカへ入国した。移民たちによって『希望の島』(Island of Hope) または『嘆きの島』(Island of Tears) と呼ばれてきた。約1200万人から1700万人にのぼる移民がエリス島を通過し、アメリカ人の5人に2人が、エリス島を通過してきた移民を祖先にもつと言われている” (引用部はここまでとする) と表記されているような歴史的背景がある——。

そうした【エリス島】という名称は(エリス島を介してアメリカに流れ込んだ移民たちのように)[人種の坩堝]での不和・不調和を体現するが如く女神エリス、[黄金の林檎の投げ手]として神話に登場すると女神エリスのことを名称として「想起」させる名前の島であるとも述べられる——女神エリスについてとりあえずも英文 Wikipedia[Apple of Discord]項目にての現行記載内容より引けば、“An apple of discord is a reference to the Golden Apple of Discord (Greek: μήλον τῆς Ἐριδος) on which, according to Greek mythology, the goddess Eris (Gr. Ἔρις, "Strife") inscribed "to the fairest" and tossed in the midst of the feast of the gods at the wedding of Peleus and Thetis,” (訳として)「不和の林檎は[不和の黄金の林檎](希臘語表記: μήλον τῆς Ἐριδος)として言及なされるものとなり、ギリシャ神話にあっては女神エリス(希臘語表記にして Ἔρις、その意は[争乱・不和])が「最も美しき者に。」と書き入れてペレスとテティスの婚礼にあって馳せ参じていた神々の祝宴の舞台に投げ込んだとのものである」と記載されているようにエリスは[黄金の林檎の投げ手]として神話に登場してくる—— (:尚、【エリス島】の名称は額面上はその島の権利者であったというサミュエル・エリス (Samuel Ellis) 氏から命名された、女神エリス Eris (ギリシャ語綴りでは Ἔρις) とは英文綴りが微妙に異なる向きから命名されたとされており、そうした表向きの命名理由に女神エリスとの関係性を見出すことにはできない) 」

「(以上のこと、【エリス島】との名称から【女神エリス】の名が想起されるとのことについて【「想起される」との印象論】で話が済まぬとのことに通ずる点として) 【エリス島】に対するフェリーが出ているニューヨークの一区画、バッテリーパークに「ツインタワーの間に置かれていたスフィアという黄金の球形オブジェの修復物」が(額面上は911の被害者を悼むとの名目にて)「記念碑」として安置されているとのことが「ある」——(英文 Wikipedia[The Sphere]項目にて “The Sphere is a large metallic sculpture by German sculptor Fritz Koenig, displayed in Battery Park, New York City, that once stood in the middle of Austin J. Tobin Plaza, the area between the World Trade Center towers in Manhattan.” (訳として)「スフィアはかつてマンハッタンにてのワールド・トレード・センターのタワーらの間、Austin J. Tobin Plaza (訳注: ニューヨーク・ニュージャージー港湾会社の重役 Austin

Joseph Tobin の名より付けられたワールド・トレード・センターにてのツインタワーの間に存在していた一区画で2001年の事件で破壊された)の中央に立っていた、そして、現行、ニューヨークのバッテリーパークにて展示されているとのドイツ人彫刻家フリッツ・ケーニツヒの手になる巨大な金属製の彫刻となる」と記載されているとおりのことである)——。その「スフィア」というオブジェ、ありし日にツインタワーに設置されていたオブジェが(女神エリスが騒乱の具としたとギリシャ神話に伝わる)【黄金の林檎】の体現物に露骨に仮託されていると判じられるだけの事由がある。ひとつにそれは「黄金の林檎の歴史的描かれよう」および「関連するところのニューヨークの地理的アイコン」より判断できるとのこととなる——【「黄金の林檎」と[(エリス島からのフェリーが巡航している)バッテリーパークに据え置かれるに至っているザ・スフィア]の視覚的接続性】や【その他の意でのニューヨークと黄金の林檎の接続性】については続いての図解部を参照のこと——」

(直近言及のこと、【黄金の林檎】と【バッテリーパーク安置のオブジェたるスフィア】が「ニューヨークの「諸所」象徴的アイコンの問題」にも通ずる式で接合しているとのことに関しての委細に踏み込んだ図解部として)



上の図は

【「ワールド・トレード・センターで焼かれた特定オブジェ】が【エリス

島] (および [エリス島に近接してのリバティ・アイランドに設置の自由の女神像]) と [バッテリーパーク] を通じて縁深いものとなっていることを示さんとすべくも作成した図]

である (: 図の作成の材としては英文ウィキペディアにてのマンハッタン関連項目掲載の図像ら —19 世紀のマンハッタン鳥瞰図および同 19 世紀の自由の女神像ありようを描いての新聞紙掲載図、そして、17 世紀のオランダ植民地時代のマンハッタン界限地図らを含めての図ら— を用いている)。

上掲図にても矢印にて示しているところだが、エリス島 Ellis Island (および同島に近接しての自由の女神設置のリバティ・アイランド Liberty Island) に向けて [バッテリーパーク]、先にワールド・トレード・センターで焼かれたスフィアというオブジェの残骸が展示されているとのバッテリーパークから始発を見てのフェリーが出ているとのことがある (: 見解相違など生じえない [事実] であり、かつ、世間で広く認知されているようなところであるのでその程度の媒体よりの引用に留めるが、和文ウィキペディア [バッテリーパーク] 項目に “バッテリー・パーク (英語: Battery Park) は、ニューヨーク港に面するニューヨーク市、マンハッタン島南端のバッテリーに位置する 25 エーカー (10 ヘクタール) の公共公園である。バッテリーは、砲台の名称であり、都市が建設されて数年後に、これからの町を守るため、設置された。… (中略) …海岸からは、自由の女神像とエリス島へ向かうクルーズ・フェリーが出港している。公園にはさらに、第二次世界大戦中に西大西洋の沿岸で死亡したアメリカ海軍兵を追悼するイースト・コースト・メモリアルなど、いくつかの記念碑がある” (引用部はここまでとする) とあるとおりである)。

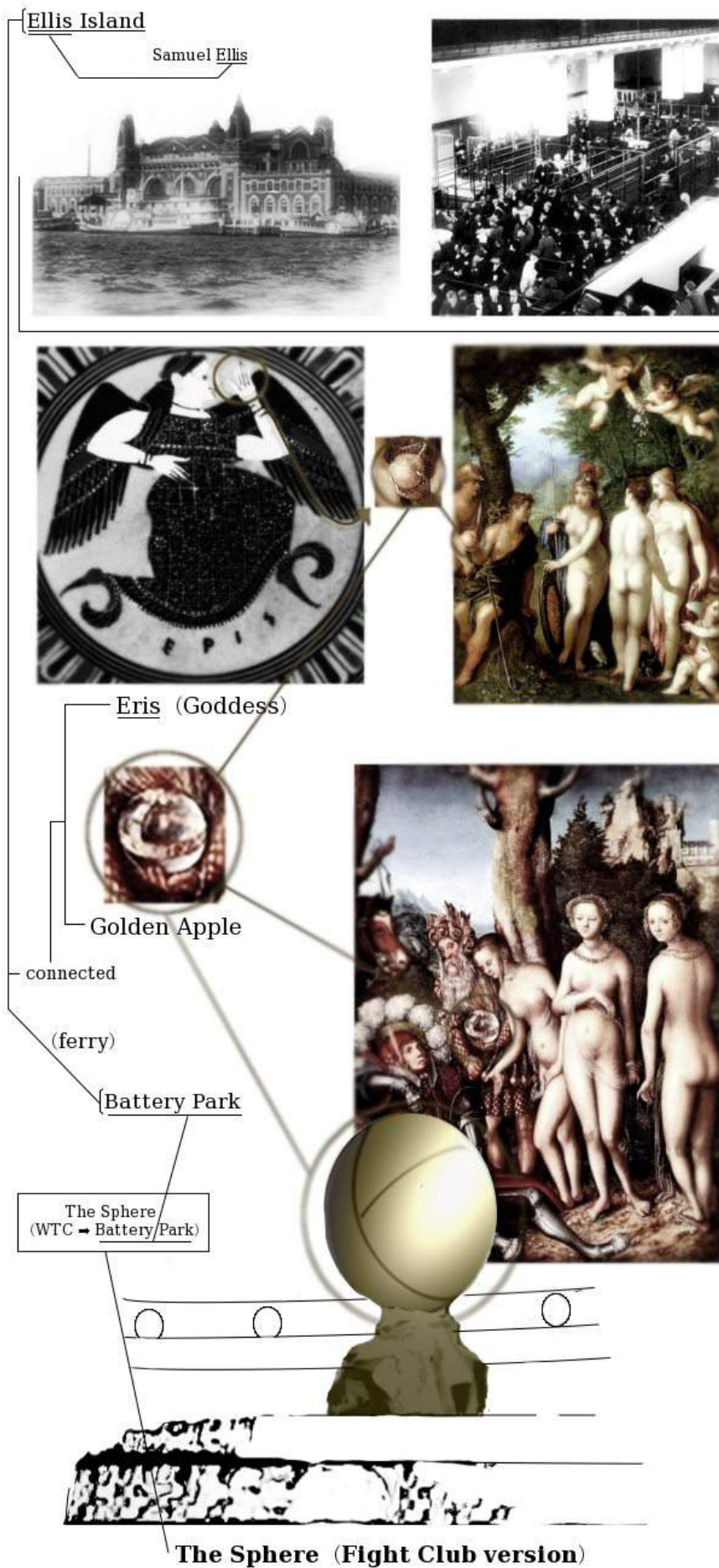
繰り返すが、そのバッテリー・パーク (上掲図では英文 Wikipedia [History of New York City] 項目および同 [Manhattan] 項目にそれぞれ掲載されている図葉でもってして、そもそものニューヨークの植民都市化の草創期および 19 世紀初頭のそのありようを提示しているとのところのニューヨーク「南端」の一區画)、要するに、

[【エリス島】と【自由の女神像】 (の据え置かれたリバティ島) とそれぞれにフェリー航路にて結線させられている場]

にてワールド・トレード・センターのツインタワーの間に配置された黄金色のスフィアが焼かれた後、修復を見、安置されるに至ったとの背景がある — 先に英文 Wikipeda [The Sphere] 項目より “**The Sphere is a large metallic sculpture by German sculptor Fritz Koenig, displayed in Battery Park, New York City, that once stood in the middle of Austin J. Tobin Plaza, the area between the World Trade Center towers in Manhattan.**” (訳として) 「スフィアはかつてマンハッタンにてのワールド・トレード・センターのタワーらの間、Austin J. Tobin Plaza の中央に立っていた、そして、現行、ニューヨークのバッテリーパークにて展示されているとのドイツ人彫刻家フリッツ・ケーニッヒの手になる巨大な金属製の彫刻となる」との文言を引いたとおりである — 。

「問題なのは、」そのようにバッテリー・パーク ([エリス島] に向けてのフェリーが巡航しているとのニューヨークはマンハッタン島南端に位置するバッテリー・パーク) に安置されるに至った金色のザ・スフィアが「黄金の林檎」と [同文のもの] と定置できるようになっているとのことである。

どうか。
 については続いて図を付しながらも指摘するような関係性が成立している
 のことがあるからそうも述べるのである。



図の最上段では【エリス島外観】および【(エリス島が結果的にそうなったところとして[不和の象徴]とも通ずる上での)エリス島を介して大量の移民が米国に流れていくありさま】を写し撮った写真を挙げている。

そちら最上段のすぐ下の段(中段)の図は遺物 —古代ギリシャ・アッティカの遺物として英文 Wikipedia[Eris]項目に掲載されている遺物— にみとめられる不和の女神エリス —[黄金の林檎の投下による不和の誘発]との役割を帯びた女神— の似姿およびエリス神によって投下された黄金の林檎(美の神の象徴としての字句が綴られていた林檎)を巡っての女神らの間で執り行われることになった美人コンテストの一幕を描いた絵画を挙げてのものとなる。

さらに下っての段(下段)にて呈示の図はルネッサンス期の巨匠ルーカス・クラナッハ・エルダーの16世紀絵画、

[Judgement of Paris との画題の絵画(女神エリスの林檎を巡る美人投票にトロイアの皇子としての出自を持つパリスが招聘された一幕を描いての1512年から1514年にかけて作成の画/無論、英文 Wikipedia などから簡単に捕捉できるとの絵画)]

を挙げてのものとなる。

そして、同じくも下段にて

[映画『ファイト・クラブ』に登場するオブジェ・スフィア(ツインタワー合間に置かれていたオブジェ)の露骨なるイミテーションを再現しての図]

を呈示しました。

以上、各段に分けて呈示の図らからお分かりいただけようことか、とは思うのだが、映画『ファイト・クラブ』にて登場のスフィア・イミテーションはルネッサンス期の特定絵画にて【黄金の林檎】(女神エリスと紐付く伝承上の果实)として描かれていたものとそっくりの外観を呈しているとのことがある。

そうもして上の図解部に見るように

[ルネッサンス期の巨匠ルーカス・クラナッハ・エルダーの手になる絵画—三人の女神が[最高の美神の証]たる黄金の林檎を巡っての美人コンテストにトロイア皇子パリスが審判役として参画させられたとの筋立てからなるパリスの審判、ジャッジメント・オブ・パリス(パリスの審判)をモチーフとした絵画— に見る黄金の林檎]

が映画『ファイト・クラブ』に登場した金色の球形オブジェがワールド・トレード・センターの合間に据え置かれたザ・スフィアというオブジェの露骨なる模造物(映画に登場のイミテーション)と視覚的そっくりさんとなっているのが問題になる。

繰り返すも、現実世界ではツインタワーの間で焼かれたオブジェたるスフィアがバッテリー・パークに後に安置されることになったとのことがある。そのバッテリー・パーク(先掲の絵画に見るように【黄金の林檎】の歴史的描画形態と通ずるオブジェ・スフィアが据え置かれている一区画)よりエリス島—【黄金の林檎】を投げた女神エリスの名を想起させる島— に向けてのフェリーが出ているのであるから、「まずもってそこからして」黄金の林檎と女神エリス(黄金の林檎を争乱の具とした不和の女神)とニューヨーク(ビッ

グ・アップル)の関係性が観念されることになる。

話はそれにとどまらない。

バッテリー・パークからエリス・アイランドと同様にそこに向けての船が出て
いるとの一区画たるリバティ島、そこに存在する[自由の女神]像が

[黄金色を呈しての松明を掲げている存在]

となっているとのことも着目に値することとしてある ——たとえば和文 Wikipedia[自由の女神像 (ニューヨーク)]項目にあつて(現行記載を引用するところとして)“右手には純金で形作られた炎を擁するたいまつを空高く掲げ、左手にはアメリカ合衆国の独立記念日である「1776年7月4日」とフランス革命勃発(バスティーユ襲撃)の日である「1789年7月14日」と、ローマ数字で刻印された銘板を持っている”(引用部はここまでとする)と記載されているところである——。

自由の女神像とは

[足下に鎖が描かれているとの彫像]

でもある ——英文 Wikipedia[Statue of Liberty]項目にあつての冒頭部に“ The statue is of a robed female figure representing Libertas, the Roman goddess of freedom, who bears a torch and a tabula ansata (a tablet evoking the law) upon which is inscribed the date of the American Declaration of Independence, July 4, 1776. **A broken chain lies at her feet.** ”と記載されているとおりである——。

そうした [黄金色を呈しての松明を掲げている存在] であり、また、[足下に鎖が描かれているとの彫像] でもあるとの【自由の女神像】と同様に [黄金の炎] を掲げているとの存在がニューヨークはマンハッタン島に見てとれ、それは、(唐突とはなるが)、

[ニューヨークのロックフェラーセンターに据え置かれているプロメテウス像]

となる ——ニューヨークのロックフェラーセンターに置かれているプロメテウス像、米国人彫刻家 Paul Manship (ポール・マンシップ)の手になる作品がいわば [黄金の松明] を掲げるが如く存在であるとのことについては例えば、英文 Wikipedia[Prometheus (Manship)]項目に「現行」掲載されている同彫像の似姿を見れば、理解できることであろう(全身、金色を呈するとのブロンズ像が全容と同様に金色の炎を手に持っている似姿を見れば、理解できることであろう)——。

そして、神話が語るプロメテウスというのは

[足下に引きちぎられた鎖が配されている自由の女神像よろしく「鎖で繋がれるが如く状況より解放された」存在]

である ——目立つところでは英文 Wikipeda[Prometheus]項目にても“Prometheus, in eternal punishment, **is chained to a rock in the Caucasus, Kazbek Mountain**, where his liver is eaten daily by an eagle, ”「プロメテウスは永遠の責め苦としてコーカサスの岩に鎖で縛り付けられ、そこにて日々、自身の肝臓を鷲に啄(ついで)まれている」との通りの伝承が伝存し

ている——。

以上指摘したうえで申し述べるが、神話が語るプロメテウスをかたどりもしている [ニューヨーク据え置き(の直近言及の)黄金の火を掲げる彫像] 自体には鎖は描かれて「いない」のであるが、プロメテウス像が飾られているのと同じ場、ニューヨークにてのロックフェラーセンターに神話上、プロメテウスの兄弟との設定の

[アトラス ATLAS] 像

が —彫刻家 Lee Lawrie(リー・ロウリー)の手になる作品として— 飾られていることが問題となると申し述べたい(：英文 Wikipedia [Rockefeller Center] 項目にての [Center art] の節の「現行の」記載内容より引用なせば、“Sculptor Lee Lawrie contributed the largest number of individual pieces — twelve — including the statue of Atlas facing Fifth Avenue and the conspicuous friezes above the main entrance to the RCA Building. Paul Manship's highly recognizable bronze gilded statue of the Greek legend of the Titan Prometheus recumbent, bringing fire to mankind, features prominently in the sunken plaza at the front of 30 Rockefeller Plaza.” (訳として)「彫刻家リー・ローリーは五番街に面したアトラス像およびレイディオ・コーポレーション・オブ・アメリカ・ビル(別名 GEビルディング)正面通用口上部のフリーズ(装飾付壁面)作品を含む12の個人的作品を —同センターにての芸術作品として最も多いところとして— ロックフェラー・センターにもたらした。ポール・マンシップによる極めて目立つ黄銅にて箔付けされ、人類に与えるべくもの火をもっているとの横たわるタイタン・プロメテウスのギリシャ神話に依拠しての像はロックフェラー広場30号(GEビルディング)正面の落ちこんだ一画にて際立っての色合いを付している」(訳を付しての引用部はここまでとしておく)とあるとおりである。

そのアトラス像の[アトラス]とは、

[ヘラクレスの11番目の冒険にて黄金の林檎 —いいだろうか、ここに問題視している[黄金の林檎]である— の所在を知る者として登場してくるプロメテウスの兄弟にあたる巨人]

にして、かつもって、

[[プロメテウス]本人が黄金の林檎の探索が目的となっていたヘラクレス第11功業にてヘラクレスに言い含め、「彼に会うように、」との進言をなしたところの巨人]

として神話が語り継ぐ存在でもある(：同点については本稿にての他所、**出典**(Source)紹介の部39でギリシャ神話エピソードとしての出典紹介をなしているとのものである)。

といった、たかだか皮相的な側面、順序を多少たがえてまとめた表記をなせば、

[ニューヨークこと[ビッグ・アップル](巨大なる林檎)の守護神とでもいった位置付けの【自由の女神像】(リヴァティ島安置の女神像)は[足下にちぎられた鎖]が配せられての存在にして、なおかつ、[黄金の松明]を掲げる存在となっている]
⇒

[ニューヨークのランドマークとなっているロックフェラーセンターに据え置かれているプロメテウス像は[黄金の炎]を掲げる存在であるが、そちらプロメテウスはギリシャ神話にて[ヘラクレスより鎖から解放された存在]と伝わっており(従って【プロメテウス】と【自由の女神像】が[マンハッタンのアイコン][黄金の火を掲げる存在][鎖より解放された存在]との式で結びつくようになっている)、なおかつ、同プロメテウスはヘラクレスに巨人アトラスから【黄金の林檎】の在り処を訊くようにと進言した存在ともなっている(そして、【ニューヨークのランドマークたるプロメテウス像】と同様に【プロメテウスが彼に会うようにとヘラクレスに勧めた存在、黄金の林檎の在り処を知る存在である巨人アトラス(プロメテウスの兄弟にあたる巨人)の彫像】もがロックフェラー・センターには据え置かれている)]

⇒

[[**黄金の林檎**]を投げた不和の女神の名は[エリス]となるのだが、その女神エリスと綴りはともかくも発音が同じであるとの著名な島が存在しており、そちらが大量の移民が米国に流入するうえでの拠点にして関門となっていたとのビッグ・アップルことニューヨークのエリス・アイランド(常識上の話ではその島のかつてのオーナーがサミュエル・エリスなる人物であったからそのような名前になっているとの島)となる。その[エリス島]に向けての定期便が[自由の女神像の据え置かれた一画]に向けての定期便と同様に運航を見ているとの場がニューヨークの南端バッテリー・パークとなり、そちら([エリス島]と[自由の女神の島]を結びつける場たる)バッテリー公園にてワールド・トレード・センターにあって911の事件で焼かれたありし日の黄金色のオブジェ、[ザ・スフィア]が安置されるようになったとのことがある。そして、映画『ファイト・クラブ』にもそのスフィアの露骨なるイミテーションが登場を見ており、こともあろうにそちらスフィア(イミテーション)との目立っての構造的近似物がルネサンス期特定絵画からして【**黄金の林檎**】に仮託されているとのことがある]

との事由から見て「も」ビッグ・アップルことニューヨークが【**黄金の林檎**】と結びつけられているとの物言いがなせるように「なっている」——※【バッテリー・パークよりの(女神エリスと同文の響きの)エリス島へのフェリーの巡航】/【バッテリー・パークにおける黄金の林檎の歴史的具現化形態に通ずるオブジェ(ザ・スフィア)の据え置き】/【バッテリー・パークよりの自由の女神像(直上既述のようにマンハッタン・アイコンとしてプロメテウスに結びつく存在)が屹立するリバティ島へのフェリーの巡航】との各観点から【ニューヨークと[女神エリスの手管にしてヘラクレス第11功業の目標物である黄金の林檎]との結びつき】が観念されることになる、ということである。そして、判断事由はここに述べたことに留まらず「他にも」複数ある。そのように述べたうえで書くが、ここで引き合いに出しているとの極々一面的な判断事由らからしてこの世界では「どういうわけなのか」誰も指摘しようとならないとのこととなる(そこからして気付いている向きがいるかどうかは分からないが、この世界の限界領域にまつわることに限っては根拠なき稚拙な憶説・妄説を平然と鼓吹する人間(いわばもの屑か糸繰り人形であろうも)が数多い一方で、である。きちんとした論拠を伴っていることらでもそれが「ある程度の複雑性」を帯びだすと、たとえば、判断のためのプロセスが階層的

になるとそのことを指摘しようとする人間が途端に「いなくなる」とのことがある。同じくものことに気付いている人間はニュー Yorker にして、なおかつ、神話関連知識豊富な向きであるとの人間ならば、普通ならば部分的にいそうであるようにとれるのに、(再強調して)、「どういうわけなのか」誰もそのような指摘を具象論としてなそうとしないとのこととなっている(：性質の悪い日付け偽装の紛い物ら、[馬鹿話]を広めんとするが如くの媒体なぞが相応の程度・水準の人間らによるところの手仕事、誰がみようと [どぎつき] につき察しがつくと愚昧さが際立った劣化物としてこれより登場する可能性もあることか、と懸念するところであるが(幾点かそういう媒体が[頭の中身が「できあがった」手合い]によって捏造画像などを伴いつつもの紛いものの陰謀論サイトとして英語圏にて流布されている、手繰られてであろう、検索エンジンなどにて目立って映りやすきところとして流布されだしているとのこと「も」本稿筆者は捕捉している)、現況情報流通動態を見る限りは「どういうわけなのか」誰も同じくのことまでの呈示の挙を(筆者を除き)見せていない) ——。

(図解部終端)

最前述べてきたことに見るように [ニューヨークのマンハッタンが黄金の林檎に仮託されている] と述べられるとの事情があるわけである。

(これにて本稿従前内容と多く重なりもすることを述べて 3. と振っての部に区切りをつける)

以上、1. から 3. と区分けしてくどくもの繰り返しての表記をなしてきたわけだが、その帰結を直下、端的に一言表記しよう。

1. [911 の事件の発生の予見的言及を「あまりにも露骨な式で」なしているとしか述べようがないとの作品ら] が現実に存在している (につき「あまりにも露骨な式で、」の具体例として先には物理学者キップ・ソーン著作 **BLACK HOLES & TIME WARP Einstein's Outrageous Legacy** 『ブラックホールと時空の歪み アインシュタインのとんでもない遺産』(1994 年初出) および映画作品 **Fight Club** 『ファイト・クラブ』(1999) の両作につき再言及しました)。

2. 上の 1. にて例示した [911 の事件の発生の予見的言及を「あまりにも」露骨な式でなしているとしか述べようがないとの作品ら] を含めて 911 の予見文物には [黄金の林檎] との結節点が見てとれるとのことがある。

3. [911 の事件が起こったニューヨーク自体が [黄金の林檎] に仮託されている] とのことがある。

上のようなことが何故にもってして、ここ本段での主要訴求事項、

「ドゥームズデイ・クロックはその時刻下限のポイントが時針にて「9」「11」を指すものとなっている」

「[911を指す時計時針]と[先の911の事件に関連する事物]を(2001年の事件が発生する前に)併せて描いていた作品らが存在する」

とのことらと複合顧慮すべきこととなりもするのか、同じくものことらが(「論ずるに馬鹿げたこと」などではなく)「論ずるに値する[根深い悪意・恣意性の賜物]と判じられる」まさにその理由となりもするのかだが、(本稿をきちんと読まれている向きにはいちいちもって解説する必要もないことかとは思うのである)、次のような理由がそこにあるからである。

・(つい先立って振り返りもして指摘したように)【黄金の林檎】が【エデンの誘惑の果実】と「多重的に」結びつくようになっているとの事情がある

・(ドゥームズデイ・クロックに見る)ドゥームズデイとは[エデンにての原罪]を負った人類が[最後の審判]によって救済を確たるものとする—エデンの蛇に比定されるサタン(ないしルシファー)の会衆がアルマゲドンにて永劫の破滅を見ることになるのに対し義人(キリスト教ドグマから引き直して見ての義人)が失楽園の状態から脱し復楽園を見る—との宗教的設定にての[その刻(とき)]を指している

お分かりだろうが、直上表記のことがあるがあるがゆえに1. から3. のような[露骨に意図的なことら]がそこにはきと存在するとのことが—そうしたことが何故、具現化しているのか、との具体的機序(作用原理)の問題には踏み込まないとしても—

「ドゥームズデイ・クロックはその時刻下限のポイントが時計にて「9」「11」を指すものとなっている」

「[911を指す時計時針]と[先の911の事件に関連する事物]を(2001年の事件が発生する前に)併せて描いていた作品らが存在する」

とのことの絡みで[偶然の一致]ではなく[恣意の賜物]としてそこにあることを指し示す論拠たるものであると指摘するのである([911の事件(の発生)の「予見的」言及)に通ずるシンボルと多重的になっているもの]⇔[黄金の林檎]⇔[エデンの園の一幕と禁断の果実]⇔[ドゥームズデイに通ずる宗教的ドグマ]との観点からである)。

そして、それは

[911の事件が「聖書の黙示録—何度も何度も繰り返すが、救われる人間と救われない人間が永劫永遠終局的に確定するとの裁きについて論じている選民主義文書である—」および「黙示録の規定する最後の審判」と結びつけられている]

とのことに相通ずるところである。

「問題は、」そうした「非」人間的なる多重的結びつきに全般的かつ根深くもの[恣意性]が伴っていると判じられることであり、その[恣意性]が相応の意図を明示していると判じられることである(※)。

(※既に **BLACK HOLES & TIME WARP Einstein's Outrageous Legacy**『ブラックホールと時空の歪み アインシュタインのとんでもない遺産』との「1994年初出の」文物にあつて

「【「双子」と「911」と結びつく概念を主軸にしての思考実験】の【空間軸上のスターティング・ポイント】が[2001年9月11日]の略記とそのままになる5桁の数値列を郵便番号上のはじまりとする一面に設定され、かつ、その実験の【時間軸上のスターティング・ポイント】が[2001年9月11日]と通ずる日付表記に設定されている(他の事情からもそのように判じられるようになっている)とのことが現実にある」

との特性がみとめられるとのことを論じている段階で[恣意性]は当然にあると述べて

いるのに等しいであろう、何を今更のことをくぐらんと論じているのだ? と見る向きもあるであろう。だからこそ述べておくが、ここで述べているのは

【極めて根深く、また、包括的なものとして人間の行く末そのものを規定せんとする非人間的な恣意性】

とのことであるとお含み頂きたい(:[世界の根本原理]とまでは言わないが、それに近いもの、いわば、[この世界(畜舎でもいい)の運営原理に近いもの]であると受け取ってもらってもいい)。たかだか物理学者の書籍ひとつにあって予言的言及がなされていても相応の者らにはそのことが(偶然ではないにしても)[一部の陰謀を企図する勢力の[陰謀]の発露しているところにすぎないのであり、巨視的コンセンサスそのものではない]といった口上(ときに陰謀「論」と通ずる口上)にて片付けられる素地があるかとも思うのだが、ここで問題としている恣意性とは[待ったなし]の恣意性、人間がそれに向かい合えぬ限り[運命]は確定しているといったレベルでの本源的な意味での恣意性であると明言しておく(またもって述べておくが、命を賭ける必要があるし、実際に命を賭けているとの状況でもある関係上、[後悔せぬだけの徹底性]が必要であろうと判じ、明言したうえでもその明言を支える論拠を「さらに」に次ぐ「さらに」とのかたちでこれより呈示することにもする)

ここまでの指し示しをなしたうえで、である。【意味性に着目しての分析】をさらに深耕すべくもの加えもしての指し示しをこれよりなす。

さて、再述するも、ドゥームズデイ・クロックとは

〔人間が最後の審判に至る折柄たる〕〔ドゥームズ・デイ〕との宗教用語を用いて〔世界の終末の時〕を示す時計〕

となるわけだが、それがここまで詳述してきたような事由から[911(の「予見」事象)]と結びついていると指摘出来るようになってきている(なってしまう)とのことは次のような[思惑]の体現であろうと判じられるところ「とも」なる。

「911の事件は人間に(ドゥームズデイ・クロックが宗教用語を用いてそれを体現しているとの)〔黙示録的筋立て〕にまつわる何らかの意思表示をなすための事件であったと判じられもする」

宗教的狂人の類の放言に聞こえるかとは思ふ。だからこそ、ここでくぐらんと何度も本稿文中にて述べていたことを繰り返すが、

「本稿筆者は「宗教など実にくぐらならない」ととらえている(どころか「宗教とは根本をとらえれば、人間を去勢し薬籠中の存在とする手管となっているとの意味では実に悪質なものである」ととらえている)無神論者である(As an atheist, I never think highly of "religious" dogmas.)」

さらに述べれば、筆者は 一自由主義者として自身のそうした[理念]の押しつけまでなすつもりはまったくないわけだが—

「宗教的な名詞を自己の主義主張を表象するものとして用いる人間、自己の主張の核と据えているような類はすべてお為ごかし類、道理を通すべきところに不条理をもたらすことを是とするような類である」(筆者の経験則上、まじめな話をなして然るべきところで[馬鹿な(としか表しようがない)論理][的外れな見方]を振りかざすのは大体大概にして[「宗教」の徒]であったとすることがある)

とも見ているような人間である(筆者が[宗教的な人間ら]/[不幸なことに宗教的な人間に「させられてしまった」同輩の人間ら]をどうリアリストとして見ているかについては本稿にての[出典\(Source\)紹介の部 87\(4\)](#)に続く段で[アビラのテレサ]といった聖人(視されてきた存在)について[ブレイン・マシーン・インターフェース技術]との兼ね合いでいかような[可能性論]を紹介しているのかよく見てみる

とよい —※—)。

(※以上のような物言いをなせば、
「何故もって望んで敵を作るような言い分・言辞を敢えても弄しているのか、利口ではないやりかただな」
と宗教の徒ではない合理主義者からして思うところかとも見るのだが、筆者としては「然にあらず」と強調しておきたい。宗教の徒は、否、宗教という名の【思考体系】(ミームとも表されるもの)に心がウィルスに冒されるが如く根深くも、そう、心底から浸かった者は[(実はそちら言葉由来とて仏教教訓譚から派生しているものなのだが)[獅子身中の虫]としてながらも(実体は仇なす者として)味方の「振り」をなす]以外のやりようはなさぬ、「決して」筆者のような人間の側に立た「ない」ととらえているし(『宗教とはそういう特性を有していないと心より奉じられないものである』と[観察]の結果、判ずるに至っている)、「[心よりの]熱烈な宗教の徒」とは筆者が面罵なそうがなすまいが、本然的に筆者のような人間の足を引っ張るように「できあがっている」(それがそうした宗教的に熱心な者らに与えられた役割である)とまで達観するに至っているため、言論の差別化・差異化のために
[人類が克服しなければならない統制装置]
としての宗教に対する自身のスタンスを明確化した方が却(かえ)っていいと判じるに至っているとのことがあり、ここでのような筆の運びを敢えてもなしているのである(筆者は[教義に基づいての仲間外れごっこ]が好きである、というより、そもそものやりようとしているのかたちで料簡・心根が規定されてしまっているとの熱心な宗教の徒に対してこちらからお断り、[ともだち]には絶対になれないな、と書いているわけだが、ただし、さりとて、宗教の徒を諸共、無条件に[ゾンビ人間]として度外視しようとしているわけではないこと、誤解なきように。他の心持ちの問題にまでくちばしを入れんとするのは大概にして狂信的かあるいは卑劣な宗教の徒のやりようと筆者もよく「識」っていることだが、筆者の方としては相手が何を奉じようと何を信じようと自由であるべきだと思っている。「ただし」付きで、そうした者達が自分が生存の途と信ずるところに不条理かつ積極的に石を置いてくるとのことをしない限りは、であるが。)

といった宗教的な見方を忌みもする身であるところを押しもして宗教的ドグマに相通ずる話(正確には宗教的ドグマの類が人類に対する犯罪の具に用いられているとのことにまつわる話)を続ければ、である。

「911の事件は人間に(ドゥームズデイ・クロックが宗教用語を用いてそれを体現しているとの)
[黙示録的筋立て]にまつわる何らかの意思表示をなすための事件であったと判じられもする」

とのことについて

[危険要素] (宗教の徒輩がそれを[救いの途]などと誤信していようと生物が本然的に避けて然るべき[虚無たる死をもたらす危険要素]でもいい)

に関わる場所として次のことら —便宜的に i. から iv. と振ってのことら— が指摘できるようになっている(なっている)と申し述べておく。

i. (911との接合性が問題になることを呈示してきたドゥームズデイ・クロックのドゥームズデイの元となっている最後の審判の日の概念を提供している)新約聖書の黙示録とは

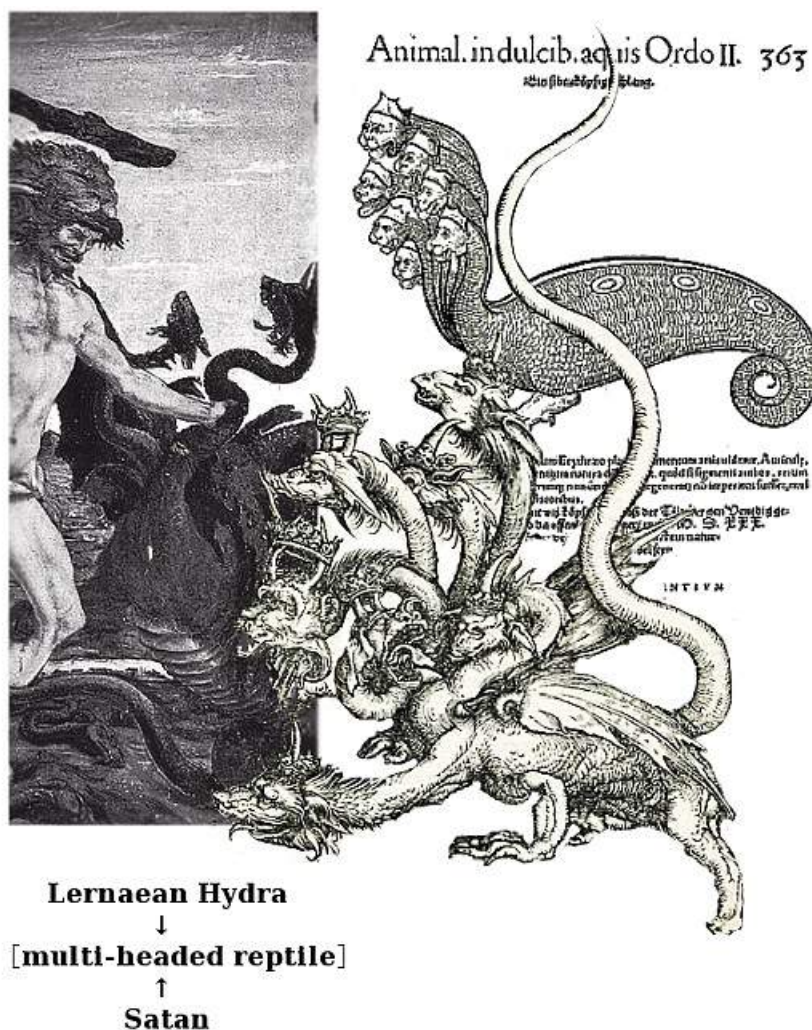
[「年を経た蛇」にして「七つの頭を持つ赤い龍」たるサタンが偽りの奴隷たる諸国の民、大海の真砂(まさご)の如くも多いとの形容がなされての諸国の民(ゴグ・マゴグとも呼称される)を率いて神の勢力に戦いを挑み、決定論的必定

としての敗北を見、永劫の地獄行きを強いられる]

との内容を有しているものである（黙示録よりの文言引用は出典(Source)紹介の部 54(4)にてもなしているが、再度、PDF版が流通している聖書よりの引用をなせば、(以下、日本聖書協会『新約聖書』(1954年改訳版)黙示録第20章よりの引用をなすとして)“千年の期間が終わると、サタンはその獄から解放される。そして、出て行き、地の四方にいる諸国民、すなわち、ゴグ、マゴグを惑わし、彼らを戦いのために招集する。その数は、海の砂のように多い。彼らは地上の広い所に上ってきて、聖徒たちの陣営と愛されていた都を包囲した。すると、天から火が下ってきて、彼らを焼き尽くした。そして、彼らを惑わした悪魔は、火と硫黄の池に投げ込まれた。そこには、獣もにせ予言者もいて、彼らは世々限りなく日夜、苦しめられるのである。”(引用部はここまでとする)と記載されているところである)。

ここでまずもって着目すべきであると指摘したいのは
[古き蛇] [七つの頭を持つ赤い龍]
との要素である。

その点、【エデンの園の禁断の果実】と結びつくようにされているとのことを本稿にて延々と[証示]なしてきた【黄金の林檎】を求めもしていたヘラクレスもまた[多頭の蛇の眷族]らを目立って屠ってきた存在でもある(本稿にての出典(Source)紹介の部 63(4)で一覧表記をなしているののでそちらを参照してみるのもよからう)。



(上掲図左の部はルネサンス期画家であるアントニオ・デル・ポツライオーロ (Antonio del Pollaiuolo) の手になる15世紀製作のヒドラと戦うヘラクレスの図

よりの抜粋。ヒドラが多頭の存在となっていることが分かる。他面、上掲図右上の部は Conrad Gessner、博物学の大家にして書誌学の創始者と認知されている 17 世紀のスイス在の識者たる同コンラート・ゲスナーの手になる *Historiae animalium*『動物誌』に掲載の(観念上の)ヒドラの似姿。そちら「ヒドラの」似姿、キリスト教黙示録にて描かれる赤い龍(直下言及)のように「七つの頭に冠を被った姿」にて描画されている(そうした画が描画されている時点にて「七つの頭を持つ赤い龍」たるサタンと「ヒドラ」との接点が強くも想起される)。上掲図右下。アルブレヒト・デューラーの手になる有名な 15 世紀末(1498 年)の版画集たる『黙示録』に七つの頭を有し七つの冠をかぶった赤い龍の姿で描かれる ——(日本聖書協会『新約聖書』黙示録第 12 章第 3 節よりの引用をなすとして)“また、もう一つのしるしが天に現れた。見よ、大きな、赤い龍がいた。それに七つの頭と十の角とがあり、その頭に七つの冠をかぶっていた”(引用部はここまでとする)との似姿で描かれる—— サタンの似姿を抽出して挙げたもの。ここでは【多頭の爬虫類】として描写されている彼らヒドラ、そして、サタンの結びつきを問題視している)

ii. 上の i. に付して図示しているようにヘラクレスが戦ってきた多頭の蛇の眷族らの似姿は黙示録のサタンの似姿と通底するものがあるのだが、話は変わってダンテの『地獄篇』。西洋文物ありようを根本から規定する、【ウェスタン・カノン】と呼ばれる【基準古典】に連なるものであるとのことを既に解説している同ダンテ『神曲;地獄篇』については地獄最下層、重力中心地にて【三面構造のルシファー(サタン)】の似姿が描写されている。そして、そうしたルシファー(サタン)を描くダンテ『地獄篇』はルシファーに至るまでの道程がヘラクレスの十二功業(の後半部)と「濃密に重なる」とのかたちにて叙述されているとのものとなっており、かつ、その絡みで【三面構造のサタン(ルシファー)】自身と【三面構造のケルベロス】の接合性もが見てとれるようになっている — 同じくもの点については本稿にての補説 3 の部、の中の、[出典\(Source\)紹介の部 90](#) から [出典\(Source\)紹介の部 90\(10\)](#) を包摂する解説部にて文献的事実の問題に依拠して細かくもの証示にひたすらに努めてきたところでもある—。

iii. 本稿にてくどくもそうしたことが述べられるとの文献的事実に依拠しての話をなしてきたように、

[新約聖書の末尾たる『黙示録』にて神の軍勢と最終決戦を繰り広げる(そして、それに次ぐのが審判が確定するドゥームズデイである)との設定が付されているサタンなる存在]

についてはルシファーとの名前で(双方とも基準古典(ウェスタン・カノン)に連なるものである)ダンテ『地獄篇』およびミルトン『失樂園』にて

[現代的な観点で見てのブラックホールの近似物の描写]

と多重的に結びつけられている存在ともなっている(つい先立っての段でも多少細かくも振り返ったところだが、よりもって細かくは本稿にての[出典\(Source\)紹介の部 55](#) から [出典\(Source\)紹介の部 55\(3\)](#) を包摂する解説部を参照されたい)。

iv. 【911の発生の「予見的」言及が(奇怪なことながら)なされていること】にも関わるものであると本稿にて詳述に重ねての詳述をなしてきたとの、

【黄金の林檎 —エデンの園の禁断の果実とも同一視されもするもの— を巡る寓意】

は

【最近になって取り沙汰されだしたブラックホール生成問題】

「とも」接合してもいる (LHCにおけるATLASとATLANTISを巡る話として本稿にてこれまた何度となく解説を講じてきたことである)。

そして、(これまた同文に既に具体的かつ客観的で、なおかつ、容易に後追い出来るとの論拠にのみ基づいて指し示しなしてきたところとして)命名規則との絡みで**【黄金の林檎】**とも接合しているブラックホール生成をなすに至った加速器実験実施機関、そして、加速器実験関連人脈は

【マンハッタン計画】

より生み出されたものである(下の繰り返しの表記を参照されたい)。

そして、同じくものは**ドゥームズデイ・クロック**を考案した人脈が**マンハッタン計画**から生じていること(先立ってなした英文 Wikipedia [Doomsday Clock] 項目冒頭部よりの引用を繰り返せば、“the origin of the Clock **can be traced to the international group of researchers called the Chicago Atomic Scientists who had participated in the Manhattan Project.**”「ドゥームズデイ・クロックの起源はマンハッタン計画に参画した[シカゴ原子力科学者グループ]と称される一群の国際的科学家らグループに淵源を求められるとのものである」とのことがあるとのこと)と通ずるところでもある。

(以下、加速器実験実施機関らとマンハッタン計画の関係についての繰り返し表記として)

マンハッタン計画 —(本稿の先の段にて既述のように)結果として[グラウンド・ゼロ]との言葉を生みだした計画でもある— については

[後にLHCに進化するに至った円形加速器、その円形加速器の[真の発明者]とされる人間(レオ・シラード)がそもその計画のプロモーター(推進者)となっていた計画]

[公式上の円形加速器の発明者とされる人間(アーネスト・ローレンス)が初期段階にてとりまとめ役として重要な役割を果たしていた計画]

[公式上の円形加速器の発明者とされる人間(アーネスト・ローレンス)に計画に招聘された人間たるロバート・オッペンハイマーが[ブラックホール(とかなり後になって呼ばれるようになった[縮退星]というもの)の研究で既に業績を挙げている科学者]として科学者陣を率いることになった計画]

[戦後影響力を増した同計画関係科学者によって巨大加速器実験を日常業務として執り行なうなかでブラックホール生成問題で矢面に立たされることになった研究機関らの主要なるもの(フェルミ国立研究所/ブルックヘブン国立研究所/CERN)らを設立させしめることになった計画]

となっているとことがある。

上のことについての典拠は極めて長くもなつての本稿にての **出典 (Source) 紹介の部 84** (本稿にての **補説 2** の部に包含される出典紹介部) にて網羅的に要素要素に分解しながらも挙げているのだが (属人的主観が問題になるような具合の話ではないと指し示すのに努めているわけだが)、そのうち、ここでは

[マンハッタン計画とは同計画関係科学者をして【ブラックホール生成問題で矢面に立たされることになった研究機関らの主要なるもの(フェルミ国立研究所/ブルックヘブン国立研究所/CERN)】らを設定させしめることになった計画ともなっている]

とのこと(直近直上の段にて述べもしていること)の典拠を抽出して再掲しておくこととする。

(それでは以下、まずもって、「マンハッタン計画というものがあってこそその後の加速器実験機関である」とのことにつながる長くもなつての **出典 (Source) 紹介の部 84** よりの一部典拠の再呈示をなす)

[マンハッタン計画関係者であった科学者イジドール・ラビによって [ブルックヘブン国立研究所] 及び [CERN] の設立の後押しがなされたことについて]

(直下、誰でもオンライン上より即時即座に確認可能なところとしての和文ウィキペディア [イジドール・イサーク・ラビ] 項目の現行の記述よりの ([中略] なし) つもの部分的抜粋をなすとして)

イジドール・イサーク・ラビはアメリカ合衆国の物理学者。…(中略)…
共鳴法による原子核の磁気モーメントの測定法の発見により、1944年、
ノーベル物理学賞を受賞した。…(中略)…1940年にはマサチューセッツ
工科大学の放射線研究所の副所長となり、ロスアラモス国立研究所でア
メリカの原爆開発に関わった。

第二次世界大戦後は、ブルックヘブン国立研究所や欧州原子核研究機構の創設者のひとりとなった。

(引用部はここまでとする —※—)

(※尚、現行英文 Wikipedia [Isidor Isaac Rabi] 項目には “A legacy of the Manhattan Project was the network of national laboratories, but none was located on the East Coast. Rabi and Ramsey assembled a group of universities in the New York area to lobby for their own national laboratory. When Zacharias, who was now at MIT, heard about it, he set up a rival group at MIT and Harvard. Rabi had discussions with Groves, who was willing to go along with a new national laboratory, but only one. Moreover, while the Manhattan Project still had funds, the wartime organization was expected to be phased out when a new authority came into existence. After some bargaining and lobbying by Rabi and others, the two groups came together in January 1946. Eventually nine universities (Columbia, Cornell, Harvard, Johns Hopkins, MIT, Princeton, Pennsylvania, Rochester and Yale) came together, and on 31 January 1947, **a contract was signed with the Atomic Energy Commission (AEC), which had replaced the Manhattan Project, that established the Brookhaven National Laboratory.** ” (補つてももの訳として) 「マンハッタン計画の遺産は [国立研究所らのネットワーク] であったわけだが、それらのどれもが東海岸一帯

とは(マンハッタン計画が名前にそぐわず米国の東海岸地方から離れて推進されていたとの経緯があり) 無縁なところであった。イシドール・ラビおよびノーマン・ラムゼー(ラビの同僚の有力物理学者、後にノーベル賞受賞)は自分たち自身の国立研究所を設立させるべくものロビー活動を行うべく(東海岸の)ニューヨーク地域の大学らからなるグループを組織した。その折、マサチューセッツ工科大学に所属していたザカリアス(物理学者 Jerrold R. Zacharias)がそうした流れを聞き及び、「我こそは」と競うグループをマサチューセッツ工科大学およびハーヴァードに組織することになった。イシドール・ラビは国に新しい国立研究所を創設するとのことに対し積極的に賛意を表していたグローヴス(マンハッタン計画を主導した米国軍人レズリー・グローヴズ)と議論を交わしたが、新国立研究所創設に賛意を表するのはグローヴス唯一人にとどまった。往時はマンハッタン計画が未だ予算を保持しての折ながらも、新しい関連行政機関が登場を見るに至っていたとの折ともなり、戦時中の組織は段階的に縮小消滅していくことが期されていた。といった中、イシドール・ラビおよびその他の同調者による交渉・ロビー活動の後、二つのグループ(文脈上、ラビらのロビー集団とマサチューセッツでザカリアスが組織化したロビー集団の二つのグループ)は1946年1月に統合を見るに至り、そして、1947年1月31日、コロンビア大、コーネル大、ハーヴァード大、ジョン・ホプキンス大、マサチューセッツ工科大、プリンストン大、ペンシルヴァニア大、ロチェスター大、イェール大の(東海岸の)9大学が大同団結なして合意、マンハッタン計画関連組織を継承・代替するかたちとなっていた[原子力委員会](マンハッタン計画関係者が中心になって設立した戦後の原子力関連技術管理組織で原子力技術の民生移管を名分としていた)との間の[ブルックヘブン国立研究所]を設立するとの合意をなした(引用部に対する補つても訳はここまでする)とより細かき経緯が(John S. Rigdenという物理学者としての著者の手になる Rabi, Scientist and Citizen という書を出典として)記載されてもいる)

(直下、誰でもオンライン上より即時即座に確認可能なところとして英文 Wikipedia[Isidor Isaac Rabi]項目の現行の記述よりの再度の部分的抜粋をなすとして)

Rabi suggested to Edoardo Amaldi that Brookhaven might be a model that Europeans could emulate. Rabi saw science as a way of inspiring and uniting a Europe that was still recovering from the war. An opportunity came in 1950 when he was named the United States Delegate to the United Nations Educational, Scientific and Cultural Organization (UNESCO). At a UNESCO meeting at the Palazzo Vecchio in Florence in June 1950, he called for the establishment of regional laboratories. **These efforts bore fruit; in 1952, representatives of eleven countries came together to create the Conseil Europe'en pour la Recherche Nucle'aire(CERN).**

「(訳として)ラビはエドアルド・アマルディにブラックヘブン国立加速器研究所は欧州人の模範となるものであるべしと訴えていた。同イシドール・ラビは科学をもってして戦傷が癒えぬ欧州を刺激・統一させるひとつの手段と看做していた。彼が合衆国によってユネスコの代表として指名された1950年に好機が巡ってきた。フィレンツェのヴェッキオ宮殿でのユネスコの会議にてラビは域内研究機関の設立を求めることになった。**これら努力は実ることになり、1952年、11カ国の代表らが欧州原子核研究機構(CERN)の創設の合意に至った**」

(訳を付しての引用部はここまでする。尚、上記のことについては John S. Rigden

という物理学者としての著者の手になる Rabi, Scientist and Citizen という書を出典としているとの表記が現行、Wikipedia には見てとれる)

以上、

[ブルックヘブン国立研究所] (本稿の冒頭部、**出典 (Source) 紹介の部 1**からしてその発表資料 **Review of Speculative "Disaster Scenarios" at RHIC** を挙げて、加速器 RHIC に伴うブラックホール生成可能性を問題視されだした機関であるとのことを詳説した米国の主要加速器運営組織の内のひとつ)

および

[CERN]

らがマンハッタン計画関係者 (ノーベル物理学者でもあったイシドール・ラビ) の手により、マンハッタン計画の衣鉢を継ぐとの組織・人脈らの関与で世に生まれ落ちたとのこと、その[通史として語られるところ]につき紹介した。

さらにもってして、

[主要加速器実験機関のうち、フェルミ国立研究所がマンハッタン計画関係者の手により設立を見たこと]

についての出典を(とりあえずも端的に)挙げておく。

(直下、誰でもオンライン上より即時即座に確認可能なところとしての和文ウィキペディア[ロバート・ラスパン・ウィルソン]項目の現行の記述よりの([中略]なしつつもの)再度の部分的抜粋をなすとして)

ロバート・ラスパン・ウィルソン …(中略)… はアメリカ合衆国の物理学者。マンハッタン計画でグループリーダーを務め、フェルミ国立加速器研究を企画、建設した。1967年から1978年まで初代の所長を務めた

(引用部はここまでとしておく)

以上、ここまでにてオンライン上より即時即座に確認できるところより抜粋して示したようにマンハッタン計画の関係者たるイシドール・ラビとロバート・ウィルソンらが

[ブルックヘブン国立研究所]

[欧州原子核研究機関(CERN)]

[フェルミ国立研究所]

の設立に尽力、それら設立後の主導者になったということがそれら科学者自身にまつわるたかだかウィキペディア解説項目程度のところにも見受けられる[史実]として世に知れ渡っているとのことがある。

そして、そうして建立を見た加速器実験機関らについては[その力(影響力)の源泉]がマンハッタン計画にあるとの申しようが当の実験機関当事者 ―フェルミ国立研究所二代目所長― によって「も」言及されたりしている。

ここではその典拠として(マンハッタン計画にグループ・リーダーとして参画していたとの科学者であるといつ最前の引用部でも言及されている) ロバート・ウィルソンが設立に尽力なした加速器研究機関フェルミ国立研究所の二代目所長となったレオン・レーダーマン(Leon Lederman)という男、1988年にノーベル物理学賞を受賞している同男が著した、**THE GOD PARTICLE (邦題)『神がつくった素粒子(下)』**(邦訳版版元は草思社)よりの引用を下になしておくこととする。

(直下、THE GOD PARTICLE (邦題)『神がつくった素粒子(下)』にあつての 48 ページより再度の原文引用をなすところとして)

第二次世界大戦の前と後では、科学研究は決定的に変化した(こんな物議をかもしような発言をしていいのかな?)アトムの探究においても新しい局面を迎えることになった。そのいくつかを見ていこう。第二次大戦は科学技術の飛躍的發展をもたらした。その多くはアメリカから起こった。ヨーロッパのように、すぐそばで爆弾が炸裂して轟音にじゃまされることはなかった。戦時下におけるレーダー、エレクトロニクス、核爆弾(正しい名で呼ぶなら)の開発は、科学と工業技術が協力すればいかなることが可能になるかをよく示している——ただし、予算の制限を受けないかぎり。…(中略)…以来、米政府は科学の基礎研究を支援することになった。基礎研究および応用研究にたいする援助額はうなぎのぼりに増加し、一九三〇年代の初めにE・O・ローレンスが苦勞して手にした助成金の一〇〇〇ドルなど、笑い草になってしまった。この金額は、一九九〇年の連邦予算の基礎研究助成金——総額約一二〇億ドル!——にくらべると、インフレ率を顧慮しても、影が薄い

(引用部はここまでとしておく)

(直下、THE GOD PARTICLE (邦題)『神がつくった素粒子(下)』にあつての 50 ページより再度の原文引用をなすところとして)

卓上の研究から發展して、周囲数マイルの加速器を使用する研究にいたる過程を監督していたのは、アメリカ政府だ。第二次大戦時の爆弾計画がもとになって、原子力委員会(AEC)が生まれた。これは核兵器の研究、生産、貯蔵を監督する文民機関である。また、原子物理学、その後身である素粒子物理学の分野での基礎研究に予算を配分し、監督する役目も国家から委託されている

(引用部はここまでとする—※—)

(※尚、米国の[原子力委員会]は先にインドル・ラビのブルックヘブン国立研究所設立を巡る経緯の通史的解説の紹介部で先述したように[加速器実験機関設立の認可・決定機関]ともなっていた——Wikipediaにて a contract was signed with the Atomic Energy Commission (AEC), which had replaced the Manhattan Project, that established the Brookhaven National Laboratory.と表記されているような機構となっている——)

その点、上の THE GOD PARTICLE (邦題)『神がつくった素粒子(下)』よりの引用部に見るようにマンハッタン計画に淵源を持つと明示されている、

[原子力委員会] (民生化されての原発産業とは異なる観点での原子力利用、核兵器の管理・監督と粒子加速器実験実施機関らの管理・監督を行ってきた米国内閣機関)

転じての

[アメリカ合衆国エネルギー省](DOE)

が後に米国にて提訴された[LHC 実験差し止め訴訟]にあつての被告の一たる国家機関、レオン・レーダーマンというここにて引用なしている著作をものした男が二代目所長を勤めていた[フェルミ国立研究所]と並んでの[LHC 実験差し止め訴訟]の被告の一たる国家機関となっているとのことが(下にて出典呈示するとのこととして)現

実にある。そのようになっているのはマンハッタン計画後に設立されたそれら政府機関が[窓口]として加速器実験に多額のマネーを誘導、また、加速器実験を監督してきたとの経緯がある — 上にてレーダーマン著作より引用なししているような経緯がある — からである (: 政府機関より資金を流されている加速器マフィアと核兵器マフィアは「史的には」「大元でひとつであった」とも述べられ、それは【ナチスに対するカウンターアクション】(マンハッタン計画)に端を発して集合した科学者らのその後のなるべくしてのありようとなりもしているとのかたちとなっている — 特段、陰謀史観がかったことを述べているわけではなく、よく識られた史的事実の問題を断面として切り取って呈示しているにすぎない —) 。

次いでもってして、以下、

[マンハッタン計画とは同計画関係科学者をして【ブラックホール生成問題で矢面に立たされることになった研究機関らの主要なるもの(フェルミ国立研究所/ブルックヘブン国立研究所/CERN)】らを設立させしめることになった計画ともなっている]

とのここでの(再度もってしての)指摘事項にあつての半面をなすところである、

[(フェルミ国立研究所、ブルックヘブン国立研究所、CERN の設立につながっているとのことは、詰まるところ、)マンハッタン計画とはブラックホール生成問題で批判の矢面に立った研究機関の設立をもたらした計画「でも」あるとのことになる]

との点についての出典を挙げておく。

[マンハッタン計画とはブラックホール生成問題で批判の矢面に立った研究機関の設立をもたらした計画でもあることについて]

まずもってして表記のことについて

[(マンハッタン計画参画人脈に設立されている)ブルックヘブン加速器研究所がブラックホール生成問題に関して矢面に立たされた研究機関であることについての出典]

を紹介しておく。

(直下、本稿の前半部 [出典\(Source\)紹介の部 1](#) にてもそこよりの引用をなしたとの Case of the deadly strangelets と題されたオンライン上流通文書 — 物理学系専門誌の特定記事の転写物/検索エンジン上での表記のタイトル入力で現行、特定・ダウンロード可能な文書 — にての 19 と脇に振られての頁よりの「再度の」原文引用をなすとして)

The trouble began a few months earlier, when Scientific American ran an article about RHIC (March 1999 pp65-70). Its title, "A little big bang", referred to the machine's ambition to study forms of matter that existed in the very early universe. Walter Wagner, the founder of a botanical garden in Hawaii, wrote a letter in response to that article. Citing Stephen Hawking's hypothesis that miniature black holes would have existed moments after the big bang, Wagner asked whether scientists knew "for certain" that RHIC would not create a black hole.

Scientific American printed Wagner's letter in its July issue, along with a response from Frank Wilczek of the Institute for Advanced Study in

Princeton. Physicists hesitate to use the word "impossible", usually reserving it for things that violate relativity or quantum mechanics, and Wilczek called RHIC's ability to create black holes and other such Doomsday ideas "incredible scenarios".

Amazingly, however, he then went on to mention another Doomsday scenario that was more likely than black holes. It involved the possibility that RHIC would create a "strangelet" that could swallow ordinary matter. But not to worry, Wilczek concluded, this scenario was "not plausible". It was the July 1999 issue of Scientific American containing the Wagner-Wilczek exchange that then inspired the Sunday Times article in mid-July. This was followed by much more press coverage, and the filing of a lawsuit, by Wagner himself, to stop the machine from operating. Shortly before the July issue of Scientific American was published, Brookhaven's director John Marburger learned of the letters, and appointed a committee of eminent physicists (including Wilczek) to evaluate the possibility that RHIC could cause a Doomsday scenario. After the Sunday Times article appeared, CERN's director-general Luciano Maiani — fearing a similar reaction to the Large Hadron Collider that was then in the planning stages - did likewise.

(上の引用部に対する拙訳として)

「問題はサイエンティフィック・アメリカン誌が加速器 RHIC についての記事 (1999 年 3 月号 65-70 ページ) を掲載した時より数か月前に遡る。『小さなビッグバン』とタイトルが付されていた同記事は [極めて早期の宇宙にて存在していた物質の組成を研究する装置の野心的側面に言及していた] とのものだった。ハワイの菜園の創立者となっていたウォルター・ワグナーがその記事に対してのものとしての手紙を書いてよこしてきた。[ビッグバン直後、ミニブラックホールが存在していた] とのステイブン・ホーキングの仮説を引用しながら、ワグナーは「科学者らは加速器 RHIC (訳注: 『小さなビッグバン』と題されての記事にて取り上げられていた加速器) はブラックホールを生成することがないとはきと分かっているのか」と訊ねてきた。

サイエンティフィック・アメリカンは 7 月発行版にプリンストン高等研究所のフランク・ウィルチェックよりの応答を脇に添えてワグナーよりの投書を書かせた。物理学者というものは通例、相対性理論や量子力学の法則を侵すものに言及するとき、「不可能である」との言葉を使うのに躊躇するきらいがあり、ウィルチェックは RHIC によるブラックホール生成能力、および、その他に [黙示録のその日] に通ずる観念につき [信じられるものではない] と表した。

だがしかしながら、驚くべきことに、彼 (ウィルチェック) はブラックホールよりさらにありえやすくもある黙示録のその日の現出的状況 (ドゥームズ・デイ・シナリオ) に言及することまでなした。それは RHIC が通常の物質を呑みこみうるストレンジレットを生成する可能性を指し示して見せた、とのものであった。しかし、「心配することなかれ」とし、ウィルチェックは「このシナリオは plausible ではない」(「ありえることではない」あるいは「もっともらしくは見えない」と結論付けた。

後の 7 月中旬のサンデー・タイムズ紙の記事に影響を与えたのは 1999 年 7 月のサイエンティフィック・アメリカン誌のワグナー・ウィルチェック書簡を含む版である。これがより多くの紙誌における取扱い、そして、稼働中のマシーンを止めるためのワグナー彼自身のものにもよる訴訟の提訴によって後追いされることになった。

サイエンティフィック・アメリカン誌の 6 月発行より少し前、ブルックヘブン

国立研究所の所長ジョン・マクバーガーは書簡をめぐる状況を知り、RHICが[黙示録のその日の現出的状況]を引き起こしうるかの可能性について見極めさせるためのウィルチェックを含む令名馳せていた物理学者らによる委員会を設立していた。サンデー・タイムズの記事が世に出た時には計画推進段階にあったラージ・ハドロン・コライダーにつき同じくもの反応が出てくることを危惧した CERN の所長ルチアーノ・マイアニも同様のことをなした」

(訳を付しての引用部はここまでとする 一※一)

(※上にては 1999 年当初、ブルックヘブン国立加速器研究所(マンハッタン計画関係者が設立した研究機関と上にて指し示しなした研究機関)が運営する加速器 RHIC がブラックホール生成問題につき最初に取り上げられることになった研究機関であることが明示されている。尚、[1999 年当初の余剰次元理論の機微について触れているわけでもないようであるとの(市民運動家ウォルター・ワグナーが旗振りしての)ブラックホール生成可能性の問題化] ⇒ [ブラックホール生成可能性それ自体に対する実験機関および科学者らの完全否定] ⇒ [理論的地殻変動を受けての一転しての「安全な」ブラックホール生成の肯定] の流れについては本稿にての **出典 (Source) 紹介の部 1** から **出典 (Source) 紹介の部 2** を参照いただきたい)

上文書の引用でもってしてブルックヘブン国立研究所 一つい先立っての段でマンハッタン計画参画者のインドル・ラビが設立したとのことを指摘もしていた研究機関一 がブラックホール生成問題につき、一番最初に矢面に立たされることになった研究機関であることの紹介をなしたとして、次いで、

[(マンハッタン計画より生まれ落ちた存在であること、先立って示しもしてきた) アメリカ合衆国エネルギー省、フェルミ国立加速器研究所、CERNらマンハッタン計画の子供らがブラックホール生成問題のリスクを問われるかたちでそうなるべくして合衆国法廷に引きづり出されている]

とのことの出典を挙げておく。

(直下、誰でもオンライン上より即時即座に確認可能なところとして英文 Wikipedia [Safety of high-energy particle collision experiments] 項目の Legal challenges と題されての部に見る現行の記述よりの抜粋をなすとして)

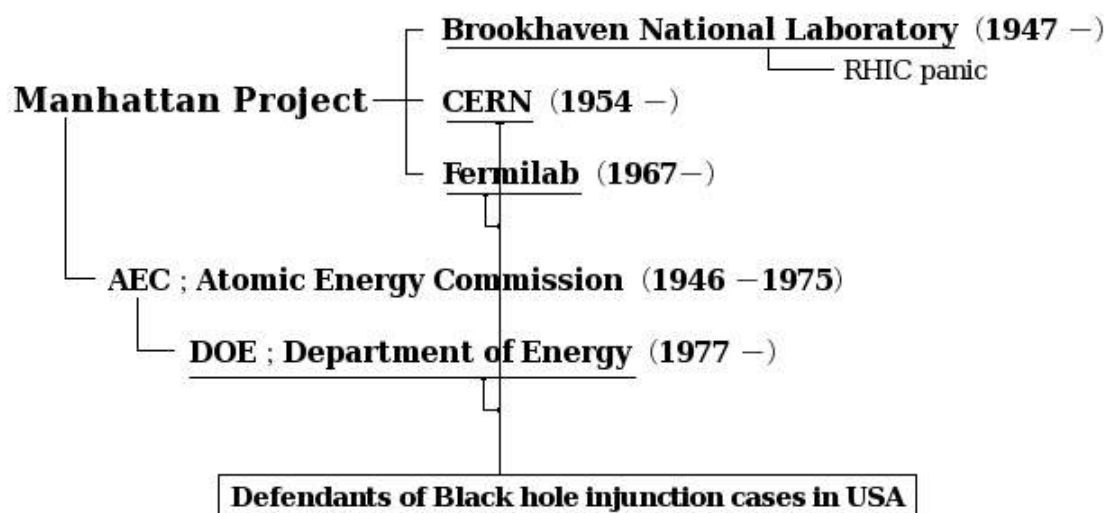
On 21 March 2008, a complaint requesting an injunction to halt the LHC's startup was filed by Walter L. Wagner and Luis Sancho against CERN and its American collaborators, the US Department of Energy, the National Science Foundation and the Fermi National Accelerator Laboratory.

(訳として)

「2008 年 3 月 21 日をもってして LHC 実験の開始を停止する差止めを求めての申し立てが [CERN] およびアメリカのその協働機関たる [アメリカ合衆国エネルギー省]、[アメリカ国立科学財団]、[フェルミ研究所] らに対してウォルター・ワグナー、ルイス・サンチョらによって提訴された」

(訳を付しての引用部はここまでとする 一※一)

(※上にては加速器実験機関関係者がブラックホール生成可能性につきなんら言及していなかったとの時点で[ブルックヘブン国立研究所]のブラックホール生成可能性につき疑義発したとの人物、ウォルター・ワグナーが後に[CERN(マンハッタン計画関係者イシドール・ラビが設立にての旗振り役を果たしたと先に指し示した研究機関)][フェルミ研究所(マンハッタン計画関係者ロバート・ウィルソンが設立したと先に指し示した研究機関)][アメリカ合衆国エネルギー省(元・原子力委員会としてマンハッタン計画関係者が大元となっている合衆国省庁)]らをLHC実験の差し止めを求めて訴えたことが記されている。—ブラックホール生成実験に資金援助しているか、そこに直接的にコミットしているとの組織の行為の差し止めを求めるとのかたちにて、である—。尚、ワグナーらが関わった訴訟案件—Sancho v. U.S. Department of Energy (CIVIL NO. 08-00136 HG KSC)とのケース名の訴訟—についてはその解説のために本稿の先の段で多少の筆を割いている(出典(Source)紹介の部17から出典(Source)紹介の部17-4を包摂する段)。同訴訟案件についてより微に入っの検討をなしたいとの向きらで英文の訴訟資料を読み解くぐらいの見識を有しているか、あるいは、見識欠如を補うだけの意欲を有しているとの向きらはオンライン上より(筆者も当然に検証しているとの)Sancho v. U.S. Department of Energy (CIVIL NO. 08-00136 HG KSC)との入力で当該訴訟案件のPDF化文書を特定・ダウンロード可能となっているので、そちら検討されてみるのもよからうか、と思う)



マンハッタン計画と人脈的・組織的に接合する存在として[アメリカ原子力委員会] 転じての[合衆国エネルギー省][ブルックヘブン国立加速器研究所][CERN][フェルミ国立加速器研究所]が産み落とされたとのことが史実としてあるわけであるが、それら[合衆国エネルギー省][ブルックヘブン国立加速器研究所][CERN][フェルミ国立加速器研究所]がブラックホール生成問題で主として矢面に立たされた組織体となっている、アメリカにて同一人(ウォルター・ワグナー)によって提訴された一群の訴訟—ブラックホール生成可能性を顧慮しての差し止め要求訴訟; ブラックホール・インジャンクション・ケースとでも形容されるとの一群の訴訟—の被告となりもしているとの組織体となる。権利関係の存否を争う[法律上の争訟]というものにあつて[差し止め]を求めるだけのリスクがある/差し止めを求めるだけの法源がある(適用可能法規が存在している、法的根拠がある)とのことにまつわるワグナーの訴訟での主張内容が正しい正しくないとの問題は抜きにして、裁判の被告席に立つことを強いられただけの沿革・役割上の特性を(揃いも揃ってマンハッタン計画の直系の子らであるとの)それら機関が具備しているとのことにここでは着目している。

以上をもって

[マンハッタン計画とは同計画関係科学者をして[ブラックホール生成問題で矢面に立たされることになった研究機関らの主要なるもの(フェルミ国立研究所/ブルックヘブン国立研究所/CERN)]らを設定させしめることになった計画ともなっている]

とのことの「再度の」典拠紹介としておく(;再言するが、「ドゥームズデイ・クロックの産みの親もまたマンハッタン計画関連人脈となっているとのことが「ある」ことが果たして偶然で済むのかとの関係性が見てとれることにこそ問題がある」とのことを申し述べもしてきた中での脇に逸れての再度の典拠紹介の部を終える)。

ここまで来たところで、である。ここ本段を包摂する一連の部(意味的な側面に着目しての分析をなすことを中心に据えての部)にあつての直近までの内容を再度、くどくも振り返っておこう。

まずもつてここでの表記を包摂する一連の部にあつては、(奇怪なれど事実であるとのことを強くも指し示すとの式で)、

「ドゥームズデイ・クロックはその時刻下限のポイントが時計にて「9」「11」を指すものとなっている」

「[911を指す時計時計]と[先の911の事件に関連する事物]を(2001年の事件が発生する「その前に」)併せて描いていた作品らが存在する」

とのことらを指摘した。

そのうえで次いで、

1. [911の事件の発生の予見的言及を「あまりにも露骨な式で」なしているとしか述べようがないとの作品ら]が現実に存在している(につき「あまりにも露骨な式で、」の具体例として先には物理学者キップ・ソーン著作 BLACK HOLES & TIME WARP Einstein's Outrageous Legacy『ブラックホールと時空の歪み アインシュタインのとんでもない遺産』(1994年初出) および映画作品 Fight Club『ファイト・クラブ』(1999)の両作につき再言及しました)。

2. 上の1.にて例示した[911の事件の発生の予見的言及を「あまりにも」露骨な式でなしているとしか述べようがないとの作品ら]を含めて911の予見文物には[黄金の林檎]との結節点が見てとれるとのことがある。

3. [911の事件が起こったニューヨーク自体が[黄金の林檎]に仮託されている]とのことがある。

とのことらを指摘した。

そこからさらにもつてしてここ一連の表記部では、つい先立って振り返りもして指摘したように、

・【黄金の林檎】が【エデンの誘惑の果実】と多重的に結びつくようになっているとの事情がある。

・ドゥームズデイとは[エデンにての原罪]を負った人類が[最後の審判]によって救済を確た

るものとする —エデンの蛇に比定されるサタン(ないしルシファー)の会衆が永劫の破滅を見ることになるのに対し義人(キリスト教ドグマから引き直して見ての義人)が失樂園の状態から脱し復樂園を見る— との宗教的設定にての[そのとき]を指している。

とのことから複合顧慮しもし、もって、

「どういわけかその予見事物が多々具現化しており、それらの一部にあつて【黄金の林檎】との結びつきもがみとめられもする【911の事件】とは人間に[黙示録的筋立て] (時針で「9」「11」を指す部を始点としているドゥームズデイ・クロックが宗教用語ドゥームズデイを用いてそれを体現しているとの筋立てにして人間が(【黄金の林檎】と接合しもするようになって)【エデンの禁断の果実】を食したことにはじまる原罪の最終的解決をもたらすとの筋立て) にまつわる何らかの意思表示をなすための事件であつたと判じられもする」

とのこと —(それ単体で述べれば、愚かなりし人間の妄言と区別つきようがないものだが、【長い前提となることらにまつわる摘示】をあわせてなすことで決して[飛躍を含んだまったくもって練れていない話]にも[終末論者の無責任なざれげん・たわごと]にもならないといった按配のこと) — を申し述べた。

そのうえでさらにもって i. から iv. と振ってのことらとして次のことらを呈示した。

(以下、よリモって要約しての再摘示をなすとして)

i. 新約聖書の『黙示録』がそれにまつわるものとなっているドゥームズ・デイとは [[年を経た蛇] にして [七つの頭を持つ赤い龍] たるサタンが偽りの奴隷たる諸国の民、大海の真砂(まさご)の如くも多いと形容がなされての諸国の民(ゴグ・マゴグとも呼称される)を率いて神の勢力に戦いを挑み、必定としての敗北を見、永劫の地獄行きを強いられる]

との内容を有しているものである。

また、その際、描かれてきたサタンの似姿とはヘラクレスが12功業 —(うち第11功業はそれが911の事件の予見事象とも結びつくようになっていたとの【黄金の林檎】の取得が描かれるとの計12の功業) — の中で対峙した【多頭の蛇】の眷属らと相似形を呈するものともなっている (たとえば、16世紀にての書誌学の大家として知られるコンラート・ゲスナーの動物学関連辞典には【ヘラクレスが誅伐したと伝わる多頭のヒドラ】が【黙示録の冠をかぶる多頭の蛇たるサタン】の如き姿で紹介されているといったことがあることを先立って例示している)。

ii. 上の i. にて述べもしているようにヘラクレスが戦ってきた多頭の蛇の眷族の似姿は黙示録のサタンの似姿と通底するところがあるものだが、話は変わってダンテ『地獄篇』にあつてのサタン(ルシファー)ありようが問題になる(だけのことがある)。ダンテ『地獄篇』にあつては地獄最下層、重力の中心地にて三面構造のルシファー(サタン)が登場してくる。そして、そうもしたルシファー(サタン)を描くダンテ『地獄篇』は「地獄最下層のルシファーに至るまでの道程」がヘラクレスの十二功業と重なるようになっており、かつ、その絡みで三面構造のサタン(ルシファー)自身と三面構造のケルベロスの接合性もが見てとれるようになってもいる (従つて直上 i. にて指摘した【ヘラクレス12功業の多頭の蛇の眷族と多頭のサタンの接合性】がよリモって濃厚に観念される)。

iii. 新約聖書の末尾の『黙示録』にて神の軍勢と最終決戦を繰り広げる(そして、

それに次いで審判が確定するドゥームズデイをもたらす)との設定が付されているサタンなる存在についてはルシファーとの名前でダンテ『神曲;地獄篇』およびミルトン『失樂園』(『神曲;地獄篇』も『失樂園』も双方共々、欧州文化の根底にある基準古典、いわゆる Western canon となっていることについて本稿の先だつての段で解説してきたとの「超」がつく程に著名な文物ら)にて
[「現代的な観点で見ての」ブラックホールの質的近似物 — 重力の中核にして光が閉じ込められた領域、そして、時間と空間が意味をなさなくなり、外側の観測者から見て粉々になっている被収容者が停止性を呈しているとの領域 — の描写]
と結びつけられて描かれていもする存在ともなっている。

iv. [911の事件の発生の予見的言及が(奇怪なことながら)なされていること]にも関わる【黄金の林檎】 — 【エデンの園の禁断の果実】とも同一視されるゴールデン・アップル — を巡る寓意は

[最近になって取り沙汰されだした【ブラックホール生成問題】 — (物理学界筋にて[科学の進歩に資する挙]となりうると手放しに歓迎されてきたとの風がある(いかにブラックホール生成が(響きに反し)肯定的に見られてきたかは科学書籍 Present at the Creation The Story of CERN and the Large Hadron Collider (邦題)『宇宙創造の一瞬をつくる CERNと究極の加速器の挑戦』よりの引用や出典(Source)紹介の部2にての実験関係者文書、出典(Source)紹介の部81にての米国科学界関係筋の公的ウェブサイトよりの引用を参照のこと)と先述なしてきたところの【ブラックホール生成問題】である) —]

と接合してもいる (:LHCにおけるATLASとATLANTISを巡る話として本稿にて何度となく解説を講じてきたところとなる)。

そして、(これまた既に具体的かつ客観的で、なおかつ、容易に後追い出来るとの論拠にのみ基づいて指し示してきたところとして)【ブラックホール生成】をなしうるとされるに至った加速器実験実施実験機関および実験関連人脈は【マンハッタン計画】より生み出されたものである。

その【マンハッタン計画】の完遂に甚大な貢献をなしたのが

【(「9」「11」との時針と結びつき、またもってして、【黄金の林檎】と多重的に接合するようになっている【エデンの禁断の果実】による原罪(オリジナル・シン)に最終的解決をなすべくもの概念であるドゥームズデイと結びつく)ドゥームズデイ・クロックを世に出したシカゴ大の原子力物理学者グループ】

である。

これにてドゥームズデイ・クロックを例に恣意性の問題が何なのかの「ひとつの訴求」をなしえたか、と思う。

再度、繰り返す。

恣意性 (あるいは「彼ら」にその認識があるのか、歴年養殖してきた家禽としての豚は殺して当然でないのかとの観点「しかない」ともとれるのだが、罪の問題を観念すれば、罪を成り立たしめる【加害意思・故意】(一部刑事犯についてその有無が問題になるラテン語で言うところの Mens rea)) はその[実在]が示せる、そう、

「どういうわけかその予見事物が多々具現化しており、それらの一部にあつて【黄金の林檎】

との結びつきもがみとめられもする【911の事件】とは人間に[黙示録的筋立て]（時針で「9」「11」を指す部を始点としているドゥームズデイ・クロックが宗教用語ドゥームズデイを用いてそれを体現しているとの筋立てにして人間が(【黄金の林檎】と接合しもするようになっている)【エデンの禁断の果実】を食したことにはじまる原罪の最終的解決をもたらすとの筋立て)にまつわる何らかの意思表示をなすための事件であったと判じられもする」

とのことに関わるところとしてその[実在]が示せもしようとのものである。

そして、そうした恣意性の実在の問題は【ミーム】(思考・情報の体系)として同じくものことの指摘の体系が説得力を保ったまま幅広くも流布され、多くの人間が覚悟をもってそれに処さなければ、応変、それを克服せねば、我々の児孫(人類の種)が早晚刈り取られることにもなろう — 脳機序の部分的拘束も幅広く実施されている節がある状況より解放されじのままでの忌まわしい家畜としての絶滅を見ることにもなろう — との性質のものであると知れているとの筋目のものでもある。

ここまでにて問題となる恣意性の実在性について【意味に着目しての分析をなすとの観点】から呈示すべきことは十二分に呈示したとも考えるのだが、さらに意味上の繋がり合いに着目しつつ同じくものことを指さしもする方向性についてよりもって煮詰めるべくもの指摘、いわばものため押しめかしての指摘をなすこととする。

さて、ドゥームズデイ・クロックとは
[11時]

か

[12時(0時は見方を変えれば深夜12時となる)]

の切り替わりをもって人類の破滅を示すものとして設定付けられているものだが、ヘラクレス功業「も」第11の功業にて【黄金の林檎】を取得して後、「12」番目の功業で終わるものとなる。につき、ヘラクレスはその第12の功業にて三面のケルベロスを捕縛することになる。そして、ダンテ『地獄篇』にあつてはその[ケルベロス]に悪魔の王ルシファーが重なるようなかたちでの描写がなされている、「執拗に」との按配でなされている (ダンテ『地獄篇』では本稿補説3の部で原文引用なしながらも解説しているように浅い階層でもケルベロスが登場しているのだが — [大なる蟲(グレート・ワーム)]との形態にて、である — 、といったことを顧慮したうえで【地獄最終地点のルシファー】と【ケルベロス】が多重的に重なるべくもして重なるようになされているとのことがある。同じくものことについては本稿にての出典(Source)紹介の部90から出典(Source)紹介の部90(10)を包摂する解説部、そちらにての文献的事実にひたすらに依拠しての記述を参照されたい)。

その点、(同じくもの側面については先立っての出典紹介部にての説明を参照いただきたいところとしての)【[ケルベロス]との接続性を呈するルシファー】についてだが、同ルシファー(サタン)が[ドゥームズデイ(審判の日)]に先駆けて赤い龍として登場してくる聖書の黙示録は

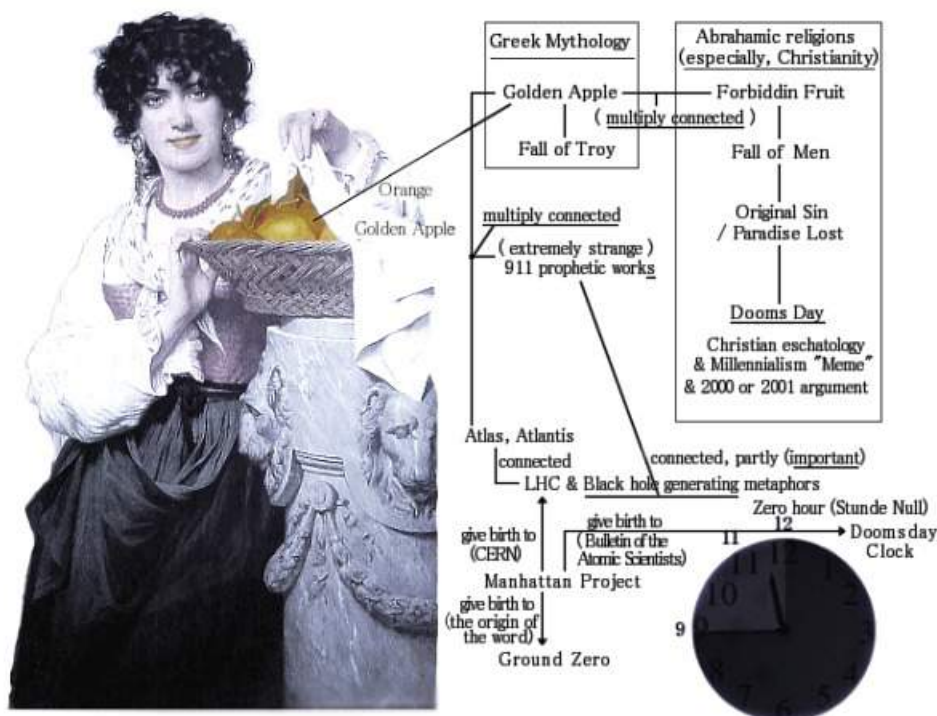
【「異常異様に」[7] (ナンバー・セブン) との数値と結びつく文書となっている】

とのことがある。

サタン本体が【「七つの頭」を持つ赤い龍】として描写されることもそうだが、以下出典紹介部にて引用なすような記述が聖書の黙示録には含まれている。

SOURCE

113(2)



ここ出典(Source)紹介の部 113(2)にあつては

[聖書にあつての黙示録という文書は「異常異様に」[7]との数値と結びついている文書となっている]

このことの典拠を聖書そのものの引用によって示すこととする。

(直下、オンライン上にてPDF版が無償配布されている日本聖書協会一九五四年版『新約聖書』の末尾に収録されている[ヨハネの黙示録]第一章第四節から第五節よりの端的なる引用をなすとして)

ヨハネからアジヤにある七つの教会へ。今いまし、昔いまし、やがてきたるべきかたから、また、その御座(みざ)の前にある七つの霊から、また、また、忠実な証人、死人の中から最初に生れた者、地上の諸王の支配者であるイエスキリストから、恵みと平安が、あなたがたにあるように。

(引用部はここまでとする 一上にては[七つの教会][七つの霊]との語句が見てとれる)

(直下、オンライン上にてPDF版が無償配布されている日本聖書協会一九五四年版『新約聖書』の末尾に収録されている[ヨハネの黙示録]第一章第十一節から第十二節よりの端的なる引用をなすとして)

あなたが見ていることを書きものにして、それをエペソ、スミルナ、ペルガモ、テアテラ、サルデス、ヒラデルヒヤ、ラオデキヤにある**七つの教会**に送りなさい」。そこでわたしは、わたくしに呼びかけたその声を見ようとしてふりむいた。ふりむくと、**七つの金の燭台**が目についた。

(引用部はここまでとする 一上にては[**七つの教会**][**七つの金の燭台**]との語句が見てとれる—)

(直下、オンライン上にてPDF版が無償配布されている日本聖書協会一九五四年版『新約聖書』の末尾に収録されている[ヨハネの黙示録]第一章第十六節よりの端的なる引用をなすとして)

その右手に**七つの星**を持ち、口からは、鋭いもろ刃のつるぎがつき出ており、顔は、強く照り輝く太陽のようであった

(引用部はここまでとする 一上にては[**七つの星**]との語句が見てとれる—)

(直下、オンライン上にてPDF版が無償配布されている日本聖書協会一九五四年版『新約聖書』の末尾に収録されている[ヨハネの黙示録]第一章第十九節よりの端的なる引用をなすとして)

あなたがわたしの右手に見た**七つの星**と、**七つの金の燭台**との奥義は、こうである。すなわち、**七つの星は七つの教会**の御使(みつかい)であり、**七つの燭台は七つの教会**である

(引用部はここまでとする 一上にては[**七つの金の燭台**][**七つの星**][**七つの教会**]へのまとめた言及が見てとれる—)

(直下、オンライン上にてPDF版が無償配布されている日本聖書協会一九五四年版『新約聖書』の末尾に収録されている[ヨハネの黙示録]第三章第一節よりの端的なる引用をなすとして)

神の**七つの霊**と**七つの星**とを持つがたが、次のように言われる。わたしはあなたのわざを知っている。すなわち、あなたは、生きているというのは名だけで、実は死んでいる。

(引用部はここまでとする 一上にては[**七つの霊**][**七つの星**]との語句が見てとれる—)

(直下、オンライン上にてPDF版が無償配布されている日本聖書協会一九五四年版『新約聖書』の末尾に収録されている[ヨハネの黙示録]第四章第五節よりの端的なる引用をなすとして)

また、**七つのともし火**とが、御座の前で燃えていた。これらは、神の**七つの霊**である。

(引用部はここまでとする 一上にては[**七つのともし火**][**神の七つの霊**]との語句が見てと

れる—)

(直下、オンライン上にて PDF 版が無償配布されている日本聖書協会一九五四年版『新約聖書』の末尾に収録されている[ヨハネの黙示録]第五章第一節よりの端的なる引用をなすとして)

わたしはまた、御座(みざ)にいますかたの右の手に、巻物があるのを見た。その内側にも外側にも字が書いてあって、**七つの封印**で封じてあった。

(引用部はここまでとする —上にては[**七つの封印**]との語句が見てとれる—)

(直下、オンライン上にて PDF 版が無償配布されている日本聖書協会一九五四年版『新約聖書』の末尾に収録されている[ヨハネの黙示録]第五章第六節よりの端的なる引用をなすとして)

わたしはまた、御座(みざ)と四つの生き物との間、長老たちの間に、ほふられたと見える子羊が立っているのを見た。それに**七つの角**と**七つの目**があった。これらの目は、全世界につかわされた、神の**七つの霊**である。

(引用部はここまでとする —上にては[**神の七つの霊**]の体現存在たる[**七つの角と七つの目を持った子羊**]への言及が見てとれる—)

(直下、オンライン上にて PDF 版が無償配布されている日本聖書協会一九五四年版『新約聖書』の末尾に収録されている[ヨハネの黙示録]第一〇章第四節から第五節よりの端的なる引用をなすとして)

子羊が**第七の封印**を解いた時、半時間ばかり天に静けさがあった。それからわたしは、神のみまえに立っている七人の御使(みつかい)を見た。そして、**七つのラッパ**が彼らに与えられた。

(引用部はここまでとする —上にては[**七人の御使(すなわち天使)**][**七つのラッパ**]との語句が見てとれるわけだが、黙示録ではそれら天使の七つのラッパが吹かれる毎に地と人間に災厄がばらまかれるとの描写がなされている—)

(直下、オンライン上にて PDF 版が無償配布されている日本聖書協会一九五四年版『新約聖書』の末尾に収録されている[ヨハネの黙示録]第八章第一節から第二節よりの端的なる引用をなすとして)

彼が叫ぶと、**七つの雷**がおのおのその声を発した。**七つの雷**が声を発した時、わたしはそれを書きとめようとした。すると天から声があって、「**七つの雷**の語ったことを封印せよ。それを書きとめるな」と言うのを聞いた。

(引用部はここまでとする —上にては[**七つの雷**]との語句が見てとれる—)

(直下、オンライン上にて PDF 版が無償配布されている日本聖書協会一九五四年版『新約聖書』の末尾に収録されている[ヨハネの黙示録]第一二章第三節よりの端的なる引用をなす

として)

また、もう一つのしるしが天に現れた。見よ、大きな、赤い龍がいた。それに**七つの頭**と十の角とがあり、その頭に**七つの冠**をかぶっていた

(引用部はここまでとする 一上にては(サタンであるとの)[**七つの頭と一〇の角を持ち、七つの冠を被る赤い龍**]への言及がなされている—)

(直下、オンライン上にてPDF版が無償配布されている日本聖書協会一九五四年版『新約聖書』の末尾に収録されている[ヨハネの黙示録]第十三章第一節よりの端的なる引用をなすとして)

わたしはまた、一匹の獣が海から上って来るのを見た。それには角が十本、**頭が七つ**あり、それらの角には十の冠があつて、頭には神を汚す名がついていた。

(引用部はここまでとする 一上にては[**七つの頭を持ち、角に一〇の冠を被る黙示録の獣**]への言及がなされている—)

(直下、オンライン上にてPDF版が無償配布されている日本聖書協会一九五四年版『新約聖書』の末尾に収録されている[ヨハネの黙示録]第十五章第一節よりの端的なる引用をなすとして)

またわたしは、天に大いなる驚くべきほかのしるしを見た。**七人の御使**が、最後の**七つの災害**を携えていた。これらの災害で神の激しい怒りがその頂点に達するのである。

(引用部はここまでとする 一上にては[七人の御使(すなわち天使)][七つの災害]への言及がなされている—)

(直下、オンライン上にてPDF版が無償配布されている日本聖書協会一九五四年版『新約聖書』の末尾に収録されている[ヨハネの黙示録]第十六章第一節よりの端的なる引用をなすとして)

それから、大きな声が聖所から出て、**七人の御使(みつかい)**にむかい、「さあ行って、神の激しい怒りの**七つの鉢(はち)**を、地に傾けよ」と言うのを聞いた。

(引用部はここまでとする 一上にては[**七人の御使(すなわち天使)**][**七つの鉢**]への言及がなされている—)

(直下、オンライン上にてPDF版が無償配布されている日本聖書協会一九五四年版『新約聖書』の末尾に収録されている[ヨハネの黙示録]第十七章第八節から第九節よりの端的なる引用をなすとして)

あなたの見た獣は、昔はいたが、今はおらず、そして、やがて底知れぬ所から上ってきて、ついには滅びるに至るものである。地に住む者のうち、世の初

めからいのちの書に名をしるされていない者たちは、この獣が、昔はいたが今はおらず、やがて来るのを見て、驚きあやしむであろう。ここに、知恵のある心が必要である。七つの頭は、この女のすわっている七つの山であり、また、七人の王のことである。

(引用部はここまでとする 一上にては[七つの頭を持つ獣][七人の王][七つの山]への言及がなされている一)

以上、引用なしたところに見るように『黙示録』には

[七つの教会][七つの金の燭台][七つの星][神の七つの霊][災厄をもたらす七つの封印][裁きの実行者としての七人の使い][七つのラッパ][七つの災害][七つの雷][七つの金の鉢][七つの頭をもつ獣][七つの頭を持つ赤い竜(サタンたる赤い竜)][七つの山(聖書『黙示録』ではバビロン大淫婦の座っているとされる寓意物として七つの山が登場する)][七人の王]

が登場してくるとのことがある。

([出典\(Source\) 紹介の部 113\(2\)](#)はここまでとする)

([いわばもの[一般教養]を出でぬところながらもの指摘として] :

尚、以上紹介してきたように [ナンバー 7 にまつわる執拗なるこだわり] のようなものが見てとれる聖書『黙示録』ではあるが、同『黙示録』の英文呼称はブック・オブ・レベレーション、Revelation となる。そこに見る Revelation との名詞の意だが、— 日本では高等学校レベルで把握強いられるような英単語語彙にまつわるところの話として— [暴露]との意味合いの語であり(基本語彙にあたる動詞 reveal「暴露する、明かす」の辞書表記ありようを顧慮すれば自明かとは思)、 聖書黙示録が[暴露の書]とされているところのそもそもの淵源はギリシャ語のアポカリプス、これまた黙示録を指す名詞でもあるそちら Apocalypse からして[暴露する; 肅々と、だが、つまびらやかに秘されたものを明かす]との意味合いとなっていることに求められもしている(: 和文ウィキペディア[ヨハネの黙示録]項目にあつて「現行、」(以下引用なすとして) “ タイトルの「黙示」とはギリシャ語の「アポカリユプス(古代ギリシア語: 'Αποκάλυψις)」の訳であり、原義は「覆いを取る」ことから転じて「隠されていたものが明らかにされる」という意味であり、英語では「Revelation」。黙示録という名前は(日本では)定着しているが、本来、「黙示」は法律用語では「もくじ」と読んで、「明示」の反対語であることから明らかな通り、訳語としては「啓示」が相応しい ” (引用部はここまでとする)と表記されているようなところでもある 一日本語にあつての[黙示録]との訳は本来的には正しくはない、[啓示録]が正しい訳であろうとの物言いも引用なしたウィキペディアには記載なされているが、といったことはともかくも、筆者としては[秘密暴露の書]なぞとのその本来の意味合いを重んじている一)。

同じくものこと、新約聖書の末尾に置かれた黙示録が[暴露の書]を意味する表題のものとして目立って存在しているとのことは欧米圏では[語るまでもない常識]とはなるうことか、とは見るのであるも、につき、キリスト教というものが社会の精神気風を根本規定してはいはしない東洋ならではの視点でもってして見て、岡目八目、むしろその意味合いが[ある種の露骨さ]をもって感じられるようなところとしてそうもなっていると本稿筆者はとらえている。ちなみに、[秘密開示の書]などとのタイトル付けの趣意

については幻視者ヨハネ、英語ではアポカリプス・オブ・ジョンなどと表記される黙示録の作者と伝わる同聖ヨハネが将来ありうべくことを[神の予定の問題]として示した(とキリスト教の信者らが信じたがっている)からだとの言い分が講じられているところともなる)

[一般常識の話から多少離れて申し述べるところ、だが、オンライン上より関係性を易々と確認出来るどころの話として]

宗教の徒(そして、その宗教の徒より宗教的観点を接ぎ木されての公共心とも道義心とも無縁なる無責任なる陰謀論の徒ら)が[反キリストへの妄信者の勢力][サタンの菓籠中の勢力]にまつわる陰謀論的言説を長らくも広めてきたとの背景がある(今でも反キリストとの語句を検索エンジンに入れればそれなりの者らの媒体が目に入ってくるであろう)。

どうしてそういうことになっているのかと言えば、宗教の徒らが非常に好むとの『ヨハネの黙示録』では[終末の刻](黙示録20章の文言を忠実に解釈すれば[本当の終末に1000年遡ってという設定の刻]なのだが、両者は混同される)に[サタンたる赤い龍]、[サタンの会衆に崇められる獣]、[偽預言者たる反キリスト]がアライアンスを組んでその支持者共々、[破滅に至る戦争]を義人たるキリスト教信仰者よりなる勢力に仕掛けるとの設定が採用されているとこのことがある、それをもってして終末の世には[反キリスト][サタンの菓籠中の勢力たるゴグ・マゴグ]が付きものであるという思潮があるからである。

今まで[反キリスト]や[サタンが召集した海岸の砂のように多きゴグ・マゴグと呼称される勢力]の候補としては

- [正しき信仰から逸脱した(と新教勢力が見る)ローマ法王およびカトリック教会]
- [フリーメーソンリー]
- [(無神論とときに結びつく)共産主義勢力]
- [ロシアや日本(あるいは黄禍論における東洋人種)]

がその折々の社会状況に応じて名指しで挙げられてきたとこのことがある(nonsenseであることを承知のうえでその内容を引用すれば、例えば、ロシアが終末の折のサタン(ルシフェロ)の走狗、ゴグ・マゴグとしての役割を果たすと認識されていたとのことについては英文 Wikipediia [Gog and Magog] 項目にあつての “ Historical identifications の節にて During the Cold War the idea (first advanced by Wilhelm Gesenius in the mid-1800s) that Russia itself had the role of Gog gained popularity (since Ezekiel's words describing him as "prince of Meshek"-rosh meshek in Hebrew-sounded suspiciously like Russia and Moscow). This interpretation has been taken up by several Christian authors and preachers since then (such as Hal Lindsey's The Late Great Planet Earth; Grant R. Jeffrey's Armageddon: Appointment with Destiny; M. R. De Haan's The Signs of the Times; Tim LaHaye's Are We Living in the End Times?). ” といった風に表記されているようなところとなる)。

ここで振り返りもするが、神の正しき信徒にして義人たるキリスト教勢力と悪しき勢力の最終戦争を描くとの黙示録は[数値の7で溢れかえっている文書]である(直上、引用なしたばかりである)。そして、[【赤い龍】にして【七つの面】を有したサタン]が立ち現れてくるとの文書でもある(これまたつい先立って指摘したことである)。

以上、振り返ったうえで書くが、この日本にあつても中世期、[「7ばかりの」文書にして【七つの面】と結びつく【赤い龍】が登場する]との文書が産み落とされている。黙示録の文言が細かくも文化伝播にて流入していたとは考えがたい折柄ながらもそういう文書が有名どころとして産み落とされている。そして、その日本にあつての中世期文

書が聖書の【黙示録に由来するハルマゲドン 一反キリストの勢力と義人たるキリスト教勢力の前者の滅尽に通じている世界最終決戦】の視点と接合するだけの歴史的流れが「第二次世界大戦期にあつて」「ある種、(マンハッタン計画によって完成した)原爆の投下に関わる先覚的言及を含むかたちで」具現化していたとこのことがある(同じくものことを取り上げる人間がどういうわけか[いない]のだが、そういう流れが【文献的事実】に関わる一致性の問題としてこの世界にて具現化してきたとこのことがある)。

に関わっては

1. 日本中世期にあつての【7ばかりの文書にして七つの面と結びつく赤い龍が登場する文書】とは何か
2. 上文書が何故もつてして【黙示録に見るハルマゲドンが如しの歴史上の流れ】(なる奇態なる言い分)と結びつくのか

このことについて誰でも易々と確認できることよりの典拠を挙げておく。

まずもつてして

1. 日本中世期にあつての【7ばかりの文書にして七つの面と結びつく赤い龍が登場する文書】とは何か

このことについてだが、問題となる中世期文書は

【日蓮宗の信仰ありようについて解説した古文書たる『身延鏡』】

この(以下、問題セクションを含む箇所を引用をなす)文書となる。

どうしてそれが [七ばかりの文書であり、七つの面を持つ赤い龍による墮地獄を伴つての最終戦争に関わる相応の表記を含む] との新約聖書最終章黙示録と結びつくのかについて 一人間存在(劣等種と愚弄され続けながらも家畜として育てられた種族と解されるようになっていく人間存在)が終局的にどういう風に[処理]される方針なのかとのその方向性が[微細なところ]からも推し量れるようになっていくとのそのことを【愚昧】や【臆病】の弊にとらわれずに直視したいとの向きにあつては— 以下、引用部を確認されたい。

(直下、「現行にての」和文ウィキペディア[七面天女]項目の記載内容 —これより編集者の介入によって内容が陳腐化や削除消滅を見る可能性もあるが、本稿本段執筆時での記載内容— よりの引用をなすとして)

(七面大明神は)七面天女とも呼ばれ日蓮宗系において法華経を守護するとされる女神。七面天女は当初、日蓮宗総本山である身延山久遠寺の守護神として信仰され、日蓮宗が広まるにつれ、法華経を守護する神として各地の日蓮宗寺院で祀られるようになった。

…(中略)…

日蓮は、身延に隠棲し、現在の思親閣がある身延山山頂に登り、亡き父母の墓のある房総の方を拝しては両親を偲んでいた。

…(中略)…

建治3年(1277年)9月、身延山山頂から下山の道すがら、現在の妙石坊の高座石と呼ばれる大きな石に座り信者方に説法をしていた。その時、一人の妙齡の美しい女性が熱心に聴聞していた。「このあたりでは見かけない方であるが、一体だれであろうか」と、南部公をはじめ一緒に供をしていた人達はいぶかしく思った。日蓮は、一同が不審に思っている気持ちに気付いた。読経や法話を拝聴するためにその若い娘が度々現れてい

たことを知っていた。その若い女性に向かって、「皆が不思議に思っています。あなたの本当の姿を皆に見せてあげなさい」と言った。すると、女性は笑みを湛え「お水を少し賜りとう存じます」と答えると、日蓮は傍らにあった水差しの水を一滴、その婦人に落とした。すると今まで美しい姿をしていた婦人は、たちまち緋色の鮮やかな紅龍の姿に変じて仰った。

「私は七面山に住む七面大明神です。身延山の裏鬼門をおさえて、身延
一帯を守っております。末法の時代に、法華経を修め広める方々を末代
まで守護し、その苦しみを除き心の安らぎと満足を与えます」と。

…(中略)…

「身延鏡」に残された伝承

山を七面といふは、此の山に八方に門あり、鬼門を閉じて聞信戒定進捨
懺(もんじんかいじょうしんしゃざん)に表示し、七面を開き、七難を払ひ、
七福を授け給ふ七不思議の神の住ませ給ふゆへに七面と名付け侍るとな
り。此の神、末法護法の神となり給ふ由来は、建治年中の頃なりとかや、
聖人読経の庵室に廿(20)ばかりの化高き女の、柳色の衣に紅梅のはかま
着し、御前近く居り、渴仰の体を大旦那波木井実長郎党共見及び、心に
不審をなしければ、聖人はかねてそのいろを知り給ひ、かの女にたづね
給ふは、御身はその山中にては見なれぬ人なり。何方(いつかた)より
日々詣で給うとありければ、女性申しけるは我は七面山の池にすみ侍るも
のなり。聖人のお経ありがたく三つの苦しみをのがれ侍り、結縁したまへと
申しければ、輪円具足(りんねんぐそく)の大曼荼羅を授け給ふ。
名をば何と問い給へば巖島女(いつくしまによ)と申しける。聖人聞き召し、
さては安芸国巖島の神女にてましますと仰せあれば、女の云く、我は巖島
弁才天なり。霊山にて約束なり、末法護法の神なるべきとあれば、聖人の
たまはく、垂迹の姿現はし給へと、阿伽の花瓶を出し給へば、水に影を移
せば、壹丈あまりの赤童となり、花瓶をまといひしかば、実長も郎党も疑ひ
の念をはらしぬ。

(以上、元よりこの身、本稿筆者の主観など問題にならぬ宗教的人間らが奉ずる宗教
体系にまつわってのウィキペディア[七面天女]項目の引用部とした)

直上引用部表記にみとめられるように、

「日本にては七との数値に対する多重的言及をなしているとの身延鏡との
文書が存在しており」「その中には中世期に由来する日蓮衆の七面大明神
信仰に対する由来が表記され」「それは詰まるところ七つの面と結びつく赤
い龍に対する七だらけの文書 —[七面を開き、七難を払ひ、七福を授け給
ふ七不思議の神の住ませ給ふゆへに七面と名付け侍るとなり]などとの表
記がなされている文書— の中での言及ともなっている」

とのことが「記録的事実」の問題として「ある」わけである(何度も何度も同じくものこと
本稿内で述べているように「記録的事実」をそこに存在しないとするのは質的に狂っ
た者らだけであろう)。

ここまででもってして

1. 日本中世期にあつての【7ばかりの文書にして七つの面と結びつく赤い
龍が登場する文書】とは何か

とのことを指摘したわけだが、次いで、

2. 上文書が何故もってして【黙示録に見るハルマゲドンが如しの歴史上の流れ】(なる奇態なるもの)と結びつくのか

とのことを指摘しよう (批判的に検証頂きたいところだが、それは「第二次世界大戦期にあつて」「ある種、(マンハッタン計画によって完成した)原爆の投下にまつわる先覚的言及を含むかたちで」具現化していたとのことにまつわつての指摘ともなる)。

その点、高等学校で[文系]なる途を進路選択し、[日本史]という科目を受験科目選択したような筋目の向きならば当然にその暗記が意中の大学に入学するうえで必須となるとのレベルの歴史的著名人、日中戦争・二次大戦期の著名人たる人物として石原完爾という人物がかつていた。同・石原完爾は独断専行をなして満州事変を引き起こした[関東軍]の主導者として知られ、いわば、[日中戦争の仕掛人]として知られる人物だが、石原完爾の戦争推進を支えたイデオロギーは[世界最終戦論]というよく知られたものとなつており、その[世界最終戦論]の内容は

【日蓮に対する信仰が天皇崇拝と融合した東洋の王道がそれに対抗する覇道としての西洋アメリカの勢力といずれ最終決戦を演じる — ただ一回の使用で何万人を瞬時に殺せる[決戦兵器]を用いての最終決戦を演じる — 。 その最終戦争は日蓮の予言にも合致するものであり、その完遂をもつてして、世界から戦争根絶の抑止力が及んでの絶対平和の状況が訪れる】

とのものになっているとのことが「ある」(一応、断つておくが、そのようなこと、戦中期からして刊行物を通じて知られもしていた石原完爾のイデオロギーの細かき中身までは[良き社会の部品を造る(との名目の)教育課程]で把握を求められるようなことでは(当然に)ない。また、石原完爾やおなじくも関東軍首脳として独断専行、日中戦争の端緒たる事変の種を撒いていた板垣征四郎などが(絞首刑で吊されて死んだA級戦犯、東條英機らと同文に)拡大主義の日蓮宗組織である国柱会(戦後、創価学会に最大限活用されるようになった[在家主義][国立戒壇]とのイデオロギーを「発明」した戦前戦中期に教勢を誇った宗教右翼)の支持者であつたとのことも普通人一般が知るようなことではおよそない — ある一定程度以上の知識人、歴史通以外知らぬことである—)。

さて、七ばかりの文書たる『黙示録』における七つの面の赤い龍(サタン)と結びつく側面を有しているのが日蓮宗本山の守護神である七面大明神(赤い龍)についての記述を含む『身延鏡』となる — 先にその解説をなしている古文書・身延鏡にも見てとれるように日蓮宗とは七面大明神という赤い龍に変じた存在を本山で崇拝してきた宗教であり、排他的かつ攻撃的な新興宗教(例としては「利害関係とてない」はずなのに何が憎くてならぬのか筆者の前にもさんざんとその成員が石を置かんとしてきた(たとえば脅迫がかった電話がかかってくるしもししている)創価学会が挙げられる)の母体となつてきた宗教でもある — のではあるも、といったことがある一方でのこととして、他面、西欧の世界観ではイエロー・ペリル、黄禍論で東洋から台頭した勢力が反キリスト(七つの面を持つ赤い龍のサイドの偽の預言者)としての役割を演じるとの観点がありもする。

そうもしたことらと

[間尺が合うにも程がある]

との式で石原完爾(これより引用して示すが多くの命をあたたら奪つた大陸侵攻の拡大の根を撒いた人物でもある)という男は

[日蓮の大戦争にまつわる予言(とされるもの — 新約聖書黙示録もまた最終戦争にまつわつての予言文書である—)]

なるものに基づいて

[日蓮に対する信仰が天皇崇拜と融合した東洋の王道がそれに対抗する霸道としての西洋アメリカの勢力といずれ最終決戦を演じる —ただ一回の使用で何万人を瞬時に殺せる[決戦兵器]を用いての最終戦争を演じる— . その最終戦争は日蓮の予言にも合致するものであり、もってして、世界から戦争根絶の抑止力が及んでの絶対平和の状況が訪れる]

などとのことを戦中期に発表されている同男の著述で主張している、そういうことが「ある」のである (従順・素直に殺されていくだけの愚劣な家畜 —ネズミの脳にリンビック・システム、[大脳辺縁系]を刺激する電極を差し込めば飲食を忘れ死ぬまでその刺激レバーを押し続けると言われるが、そうしたかたちで快楽に満ち満ちたできあがったが如く語るに値しない「宗教的」家畜などでもいい— ならば、[最期]までそうした「ふざけた」ことの意味合いを適正に[情報処理]しないことか、とは思いますが、微細なる事例 (この世界の同文にかぐわかしい臭いを放っているものらの中にあつての微細なる事例)としてながらもとにかくもそういうことが「ある」)。

敢えても不快な話をなしているわけではあるが、以下、引用部を参照されたい。

(石原完爾が泥沼化のうえで多くの人間を無駄死にさせもした日中戦争 (のそもそもの端緒と通常は考えられている満州事変)の仕掛人にして主導者となっており(ただ石原完爾は日中戦争の直接の導火線になった盧溝橋事件では拡散防止に努めたなどともされ、それが戦後の同男に対する極刑執行回避との処遇の原因になったともされている)、そうした石原完爾の持論、日中戦争のそもそもの端緒にもなったとされる満州事変引き起こし、そして、大東亜共栄圏確立を目指していったことに通ずる持論が [日蓮に対する信仰が天皇崇拜と融合した東洋の王道とそれに対抗する霸道としての西洋アメリカの勢力との間にいずれ最終決戦が発生する(そしてその後理想的な戦争から解放されての絶対平和の世界が実現する)]云々との側面を帯びていた最終戦論(なるもの)であったことについての誰でも易々と確認できるところの典拠を(和文ウィキペディアなどの記述を引くとの式で)以下、挙げることとする)

(直下、「現行にての」和文ウィキペディア[石原完爾]項目の記載内容 —これより程度の低い編集者の介在によって内容陳腐化や削除消滅を見る可能性もあるが、本稿本段執筆時現時点での記載内容— よりの引用として)

石原莞爾

関東軍作戦参謀として、板垣征四郎らとともに柳条湖事件を起し満州事変を成功させた首謀者であるが、後に東條英機との対立から予備役に追いやられ、病気のため戦犯指定を免れた。

…(中略)…

『世界最終戦論』(後に『最終戦争論』と改題)を唱え東亜連盟(日本、満州、中国の政治の独立(朝鮮は自治政府)、経済の一体化、国防の共同化の実現を目指したもの)構想を提案し、戦後の右翼思想にも影響を与える。熱心な日蓮主義者でもあり、最終戦論では戦争を正法流布の戦争と捉えていたことはあまり知られていない。

最終戦争論とは、戦争自身が進化(戦争形態や武器等)してやがて絶滅する(絶対平和が到来する)という説である。

(以上、現行のウィキペディア[石原完爾]項目よりの引用とした)

ここでの指摘は陰謀論でも何でも無い(事実を事実と認めようとする)筋目の者は陰謀論と同文のこととしたがることか、とは思いますが)。その点もってして比較対象として陰謀論ないし印象論がかったの、あるいは、それにも劣るとの言辞を直下挙げておく。

「漢王朝 —中国人別称である漢民族の由来はこの漢王朝にある— の始祖たる劉邦は赤龍の子であるとされている(ゆえに漢王朝は赤龍の王朝とも言われる)。であるから漢王朝に由来する漢民族、中国人別称だが、世に横溢する彼らが赤龍の眷族として非キリスト教徒たるゴグ・マゴグ、欧州世界と決戦を演じるべくも候補として育てられてきたと受け取れる」

馬鹿げているであろう?(ちなみに、日本にて罵倒語とされている「馬鹿」や「阿呆」の語源も漢王朝始祖・劉邦=[赤龍の子]の事跡と結びついているとの観点がある。始皇帝が拓いた秦。高校生でも世界史の授業で学習・把握を強いられることとして同・秦王朝は統一王朝として数十年で滅んだ、漢の高祖・劉邦が拓いた漢王朝に取って代わられたとこのことがあるわけだが、→

(続いて直下、「現行にての」和文ウィキペディア[世界最終戦論]項目の記載内容よりの引用として)

『世界最終戦論』(せかいさいしゅうせんろん、世界最終戦論)は、大日本帝国陸軍の軍人である石原莞爾(いしわら かんじ)の代表的著書である。**1940年(昭和15年)9月10日出版。**『最終戦争論』(さいしゅうせんそうろん)とも呼ばれる。本書の題名は『世界最終戦論』または『最終戦争論』であり『世界最終戦争論』ではない。

…(中略)…

最終戦争では航空機や大量破壊兵器によって殲滅戦略が実施され極めて短期間のうちに戦争は終結することになる。このような最終戦争を戦う国としてはブロック化したいくつかの勢力を列挙することができる

…(中略)…

1942年(昭和17年)に立命館の初版の内容に加えて『「世界最終戦論」に関する質疑回答』、『戦争史大観』、『戦争史大観の由来期』を含めた著作として新正堂から出版された。**石原はヨーロッパ戦争史の研究と日蓮宗の教義解釈からこれを構想、日米決戦を前提として満蒙の領有を計画した。**

…(中略)…

天皇について石原は

人類が心から現人神(あらひとがみ)の信仰に悟入したところに、王道文明は初めてその真価を発揮する。最終戦争即ち王道・霸道の決勝戦は結局、天皇を信仰するものと然らざるものの決勝戦であり、具体的には天皇が世界の天皇とならせられるか、西洋の大統領が世界の指導者となるかを決定するところの、人類歴史の中で空前絶後の大事件である —— 石原莞爾、世界最終戦論

とし、また『戦争史大観』では

我らの信仰に依れば、人類の思想信仰の統一は結局人類が日本国体の靈力に目醒めた時初めて達成せられる。**更に端的に云えば、現人神(あらひとがみ)たる天皇の御存在が世界統一の靈力である。しかも世界人類をしてこの信仰に達せしむるには日本民族、日本国家の正しき行動なくしては空想に終る** —— 石原莞爾、(第三篇「戦争史大観の説明」第一章「緒論」第一節「戦争の絶滅」

と述べている。

(以上、元よりこの身、本稿筆者の主観など問題にならぬ歴史的事実にまつわつてのウィキペディア[石原莞爾]項目よりの引用とした)

上にては[石原はヨーロッパ戦争史の研究と日蓮宗の教義解釈からこれ(世界最終戦争論)を構想、日米決戦を前提として満蒙の領有を計画した]と表記されているが、**よりもって煮詰めての引用を和製プロジェクト・グーテンベルクとでも言うべき青空文庫より全文公開されている** —すなわちオンライン上で検索して全文確認できる— との石原莞爾の『最終戦争論・戦争史大観』それそのものよりの引用をもなしておく。

(以下、青空文庫にて公開されている戦中期にあつての石原莞爾著述『最終戦争論・戦争史大観』(筆者などは相応の宗教的徒輩による妄言録にしか見えぬとらえているところの書)よりの掻い摘まんでの引用をなすとして)

→ 秦滅亡間際、[阿房宮]という巨大な宮殿の造成をその亡国・秦が企図、国力を浪費させたことが(無駄に途方もないものを造ろうとした、そして、滅亡プロセスを加速させた)とのことで[阿呆]の由来かもしれないと説明されているとことがあり([劉邦=赤龍の子による破滅を招いた阿房宮]→[阿呆]の由来とも.)、また、始皇帝没後、二世皇帝を傀儡として国政を牛耳った宦官・趙高(ちょうこう)による暴政の下、同・趙高が用済みとした暗愚なる二世皇帝を弑逆(主君殺し)する前に気骨ある家臣を狙い撃ちし除くため、ある日の宮中催いで鹿を連れてきて「見て下さい。珍しい馬を見付けました」などと一芝居を打ち、の際、(趙高の権勢を畏れずに)「鹿を指して何を言っているのだ」とその挙に突っ込みを入れた家臣らを別機会に皆殺しにしたのが[馬鹿]の由来の一つの有力な説とされているとすることがある(まさしく漫画みたいな話ではあるが、司馬遷の史記に[指鹿為馬]とあるところのそうもした故事が日本にあつての罵倒語[馬鹿]の語源の候補として比較的よく知られている —指摘する必要もないことか、と思うが、武士階級はじめ日本の識字階級では司馬遷の史記が長年、 →

軍艦のように太平洋をのろのろと十日も二十日もかかっては問題になりません。それかと言って今の空軍ではとてもダメです。また仮に飛行機の発達により今、ドイツがロンドンを大空襲して空中戦で戦争の決をつけ得るとしても、恐らくドイツとロシアの間では困難であります。ロシアと日本の間もまた困難。更に太平洋をへだてたところの日本とアメリカが飛行機で決戦するのはまだまだ遠い先のことであります。一番遠い太平洋を挟んで空軍による決戦の行なわれる時が、人類最後の一大決勝戦の時であります。**即ち無着陸で世界をぐるぐる廻れるような飛行機ができる時代であります。それから破壊の兵器も今度の欧州大戦で使っているようなものでは、まだ問題になりません。もっと徹底的な、一発あたると何万人もがペチャンコにやられるところの、私どもには想像もされないような大威力のものができねはなりません。**

飛行機は無着陸で世界をクルグル廻る。**しかも破壊兵器は最も新鋭なもの、例えば今日戦争になって次の朝、夜が明けて見ると敵国の首府や主要都市は徹底的に破壊されている。その代り大阪も、東京も、北京も、上海も、廢墟になっておきましょう。すべてが吹き飛んでしまう……。それぐらいの破壊力のものであろうと思います。**そうなると戦争は短期間に終る。それ精神総動員だ、総力戦だなどと騒いでいる間は最終戦争は来ない。そんななまぬるいのは持久戦争時代のことで、決戦戦争では問題にならない。この次の決戦戦争では降ると見て笠取るひまもなくやつつけてしまうのです。このような決戦兵器を創造して、この惨状にどこまでも堪え得る者が最後の優者であります。…(中略)…

悠久の昔から東方道義の道統を伝持遊ばされた天皇が、間もなく東亜連盟の盟主、次いで世界の天皇と仰がれることは、われわれの堅い信仰であります。今日、特に日本人に注意して頂きたいのは、日本の国力が増進するにつれ、国民は特に謙讓の徳を守り、最大の犠牲を甘受して、東亜諸民族が心から天皇の御位置を信仰するに至ることを妨げぬよう心掛けねばならぬことであります。天皇が東亜諸民族から盟主と仰がれる日こそ、即ち東亜連盟が真に完成した日であります。しかし八紘一宇の御精神を拝すれば、天皇が東亜連盟の盟主、世界の天皇と仰がれるに至っても日本国は盟主ではありません。

しからは最終戦争はいつ来るか。これも、まあ占いのようなもので科学的だとは申しませんが、全くの空想でもありません。再三申しました通り、西洋の歴史を見ますと、戦争術の大きな変転の時期が、同時に一般の文化史の重大な変化の時期であります。この見地に立って年数を考えますと、中世は約一千年くらい、それに続いてルネッサンスからフランス革命までは、まあ三百年乃至四百年。これも見方によって色々の説もありましょうが、大体こういう見当になります。フランス革命から第一次欧州戦争までは明確に百二十五年であります。千年、三百年、百二十五年から推して、第一次欧州戦争の初めから次の最終戦争の時期までどのくらいと考えるべきであるか。千年、三百年、百二十五年の割合から言うと今度はどのくらいの見当だろうか。多くの人に聞いて見ると大体の結論は五十年内外だろうということになったのであります。これは余り短いから、なるべく長くしたい気分になり、最初は七十年とか言いましたけれども結局、極く長く見て五十年内だろうと判断せざるを得なくなったのであります。

…(中略)…

仏教、特に日蓮聖人の宗教が、予言の点から見て最も雄大で精密を極めたものであろうと考えます。空を見ると、たくさんの星があります。仏教から言えば、あれがみんな一つの世界であります。その中には、どれか知れ

→ 幅広くも読まれてきたとの事情がある、であるから、司馬遷の史記のそうした記述が日本の[馬鹿]という語のひとつの由来ともされている(すなわちもってして[馬鹿]=[阿呆の語源たるものと同様)赤龍の子による破滅をもたらした愚拳の一つに由来する言葉]とも解されるわけである)。

要らぬことを細かくも書きすぎたきらいもあるが(ちなみに要らぬことついでに申し述べておけば、かの国、中国の歴史にあってはその史書の冒頭部に登場している褒姒(ほうじ)にまつわる故事からして【封印されていた龍の涎(よだれ)から黒蜥蜴(とかげ)が産じ、そのブラック・リザードと同化した童女が長じての妖しき美女が君主を色香で惑わして伝説の王朝、周の滅亡をもたらした—そして、その下りが美女の色香に狂った皇帝の「狼」煙(のろし)の濫用とのことでイソップ童話の『「狼」少年』に奇っ怪に通じている—]との相応の側面が見てとれること、思索の過程で手前などは把握するに至っているのだが、そうしたことはここでは深くは取り上げない、直上言及の漢民族のありよう、そして、その前段階にあっての秦の破滅のプロセス—不死を求めて死期を早めたともされる→

ませんが西方極楽浄土というよい世界があります。もっとよいのがあるかも知れません。その世界には必ず仏様が一人おられて、その世界を支配しております。その仏様には支配の年代があるのです。例えば地球では今は、お釈迦様の時代です。しかしお釈迦様は未来永劫この世界を支配するのではありません。次の後継者をちゃんと予定している。弥勒菩薩という御方が出て来るのだそうです。そうして仏様の時代を正法(しょうほう)・像法(ぞうほう)・末法(まっぽう)の三つに分けます。正法と申しますのは仏の教えが最も純粹に行なわれる時代で、像法は大体それに似通った時代です。末法というのは読んで字の通りであります。それで、お釈迦様の年代は、いろいろ異論もあるそうですが、多く信ぜられているのは正法千年、像法千年、末法万年、合計一万二千年であります。

…(中略)…

お母さんの胎内に受胎された日蓮聖人が、承久の乱に疑問を懐きまして仏道に入り、ご自分が法華経で予言された本化上行(ほんげじょうぎょう)菩薩であるという自覚に達し、法華経に従ってその行動を律せられ、お経に述べてある予言を全部自分の身に現わされた。そして内乱と外患があるという、ご自身の予言が日本の内乱と蒙古の襲来によつて的中したのがあります。それで、その予言が実現するに従って逐次、ご自分の仏教上に於ける位置を明らかにし、予言的中が全部終つた後、みずから末法に遣わされた釈尊の使者本化上行だという自覚を公表せられ、日本の大困難である弘安の役の終つた翌年に亡くなられました。

そして日蓮聖人は将来に対する重大な予言をしております。日本を中心として世界に未曾有の大戦争が必ず起る。そのときに本化上行が再び世の中に出て来られ、本門の戒壇を日本国に建て、日本の国体を中心とする世界統一が実現するのだ。こういう予言をして亡くなられたのであります。

…(中略)…

明治の時代までは仏教徒全部が、日蓮聖人の生まれた時代は末法の初めの五百年だと信じていました。その時代に日蓮聖人が、いまだ像法だと言つたつて通用しない。末法の初めとして行動されたのは当然であります。仏教徒が信じていた年代の計算によりますと、末法の最初の五百年は大体、叡山の坊さんが乱暴し始めた頃から信長の頃までであります。信長が法華や門徒を虐殺しましたが、あの時代は坊さん連中が暴力を揮つた最後ですから、大体、仏の予言が的中したわけであります。

…(中略)…

折伏を現ずる場合の闘争は、世界の全面的戦争であるべきだと思います。この問題に関連して、今は仏滅後何年であるかを考えて見なければなりません。歴史学者の間ではむづかしい議論もあるらしいのですが、まず常識的に信じられている仏滅後二千四百三十年見当という見解をとって見ます。そうすると末法の初めは、西洋人がアメリカを発見しインドにやつて来たとき、即ち東西両文明の争いが始まりかけたときです。その後、東西両文明の争いがだんだん深刻化して、正にそれが最後の世界的決勝戦になろうとしているのであります。

…(中略)…

われわれが仮にヨーロッパの組とか、あるいは米州の組と決勝戦をやることになつても、断じて、かれらを憎み、かれらと利害を争うのでありません。恐るべき惨虐行為が行なわれるのですが、根本の精神は武道大会に両方の選手が出て来て一生懸命にやるのと同じこととあります。人類文明の帰着点は、われわれが全能力を發揮して正しく堂々と争うことによつて、神

→ 始皇帝が打ち立てた独裁体制の崩壊のプロセスを[赤龍に打ち勝つて正しきキリストの義人が神の下での不死の王国で永遠(とわ)に幸福に暮らすことになつた]との新約聖書(秦の滅亡後、数百年以上経過してから成立したとのことになっている新約聖書)の結末と結びつけるのは陰謀論や印象論がかったの暴論、いや、それ未満のものであろうとは「見える」。
[赤龍の子の王朝(漢)の民族]が世に横溢する野卑なるゴグ・マゴグとして黄禍論がかったのかたちで西欧文明世界と最終決戦を演じるなどとするのは共通項が[赤龍の子の王国(漢王朝)の眷族][非キリスト教の大集団]以外にない、そして、聖書記述なるもので現実的状况を過度に語るうとの意味でそれこそ「馬鹿げている」と解されるわけである(またもつてして述べれば、欧州「でも」アーサー王伝説との兼ね合いでウェールズ人がウェルシュ・ドラゴンとしての赤い龍を象徴として頂いているとのこともある)。

だが、である。

【新約聖書の末尾に据えられているのは数字の七だらけの黙示録である】

【上の七だらけの黙示録では「七つの頭をもつた赤龍」

→

の審判を受けるのです。

…(中略)…

第二部「最終戦争論」に関する質疑回答

…(中略)…

第十四問 最終戦争の必然性を宗教的に説明されているが、科学的に説明されない限り現代人には了解できない。

答 この種の質問を度々受けるのは、私の実は甚だ意外とするところである。私は日蓮聖人の信者として、聖人の予言を確信するものであり、この信仰を全国民に伝えたい熱望をもっている。しかし「最終戦争論」が決して宗教的説明を主とするものでないことは、少しく丁寧に読まれた人々には直ちに理解されることと信ずる。この論は私の軍事科学的考察を基礎とするもので、私の予言は政治史の大勢、科学・産業の進歩とともに、私の軍事研究を傍証するために挙げた一例に過ぎない。

…(中略)…

戦争史大観

…(中略)…

遂に私は日蓮聖人に到達して真の安心を得、大正九年、漢口に赴任する前、国柱会の信行員となったのであった。殊に日蓮聖人の「前代未聞の大闘諍(とうじょう)一閻浮提(えんぶだい)に起るべし」は私の軍事研究に不動の目標を与えたのである。

(よくもこうもした唾棄すべき非科学的な妄言妄信で溢れた文書をこさえたものだと思いつつも嫌々ながら引用なしでの戦中期石原完爾著述『最終戦争論・戦争史大観』(青空文庫公開版)にあつての[石原はヨーロッパ戦争史の研究と日蓮宗の教義解釈からこれ(世界最終戦争論)を構想、日米決戦を前提として満蒙の領有を計画した]とのことにまつわつての部よりの引用はここまでとする —※—)

(※尚、石原完爾が1940年時点からして核兵器・核戦争(そして、による核抑止に基づいての平和状況)を企図していたようなことを書き記していること、すなわち、

【一発で何万人も殺し、都市を一夜で灰燼に帰せしめる兵器による最終戦争(あまりにも威力から戦争根絶による絶対平和をもたらす最終戦争)】

なるものに言及していることについてそれを「ユニークな」先覚的言及と看做す見方は妥当ではないと判じられるとのことも指摘しておく。

駐在武官として洋行なしでいたとの経験もある石原完爾(陸軍幼年学校出との純粋培養の軍人とされるが、ナンバースクール出の戦前期の識者層の多くがそうであったように当然のように独逸語も手繰ったとされる男)はおそらくH.G.ウェルズのThe World Set Free『解放された世界』(紙誌初出1913年、書籍刊行1914年)を読んでいたと見えもする。

その点、H.G.ウェルズのThe World Set Freeとの小説は

【【核兵器】・【核戦争】(複葉機による原子爆弾による都市の徹底破壊による最終戦争)についての先覚的言及をなしていたとの小説】

として現代にあつてつとに知られているものである。そして、ウェルズの同The World Set Free『解放された世界』は現実の核兵器開発にインスピレーションを与えたともされる小説であり、かつ、核戦争後の統一世界政府を描くとの作品ですらある(たとえば、和文ウィキペディア[ハーバート・ジョージ・ウェルズ]項目にあつての[作品と影響]の節に「現行」記載されているところとして(引用なすとして)小説『解放された世界』は、原子核反

→

が最終戦争、そして、続く破壊をもたらすとの記述がなされている】

との要素 一文献的事実・記録的事実たる要素一と

【日蓮宗の聖なる文書・身延鏡は数字の七だらけとの側面を帯びている】

【(上の七だらけの文書に見る)「日蓮宗の護法神」は「七つの頭と結びつく赤龍」(七面天女)である】

【日蓮宗日蓮の末法の預言に基づいて「恒久平和を実現するための」[東洋の王道]と「西洋の霸道」なるものの(黙示録がかったの)最終決戦を唱道した著名軍人一日中戦争仕掛人として知られる男、石原完爾— がいた/ (黙示録がかったの)東西決戦にまつわつて唱道された右・最終戦争論では核兵器登場についての予見的言及もがなされている】

との要素 一文献的事実・記録的事実— の接続性となると一貫性が多すぎる(単純に一貫性が多すぎる)、そして、それら一貫性が際立ちすぎている、であるから、「偶然ではない」と判じられるところともなりもする(そこに恣意と通ず →

応による強力な爆弾を用いた世界戦争と、戦後の世界政府誕生を描いた。核反応による爆弾は、原子爆弾を予見したとされる。ハンガリー出身の科学者レオ・シラードは、この小説に触発されて核連鎖反応の可能性を予期し、実際にマンハッタン計画につながるアメリカの原子爆弾開発に影響を与えた(引用部はここまでとする)とあるとおりである)。

であるから、その方向性での石原の見方には他よりアイデアを吸収拝借しての二番煎じの側面が俄然つきまとう。

以上指摘したうえで書くが、石原完爾の言いよりの伝で真に問題になるのは【核兵器・核戦争の先覚的言及】などではなく、【七つの面と結びつく赤い龍に言及した七だらけの文書(身延鏡)】にてその本尊守護神たる七面大明神ありようが伝わっている日蓮宗系の信仰に通ずる【予言】(なるもの)に基づいて最終戦争の目分量が披露されているとのことであり、そうもしたありようが【七つの面と結びつく赤い龍(サタン)に言及した七だらけの文書(聖書黙示録)】の【予言】なるもの(に対する解釈動向)と平仄・間尺が合うにも程があるとの按配になっているとのことであり(戦中期のできあがった輩がいわばものゴグ・マゴグ宣言(黙示録に描写される最終戦争におけるサタンの会衆にまつわる宣言)なるものをできあがった頭で手ずからなさしめられていたとも解されることが[問題になる]とのことである)、またもってして、ナチスと日本の枢軸勢力へのカウンター・アクションが原爆開発を成功裡に終わらせたとのことでそちら石原完爾の最終戦論なるものへの言及なしようが(結果的)反対話法として堂に入っているとのことである(マンハッタン計画より今日の加速器(リング)を用いての「実験」に通ずる「実験」実施機関らが生まれ落ちたとのことは本稿つい最前の段でも解説したわけだが、同じくものことに通じもする非人間的なる嗜虐的言及が見受けられるとのことも「ある」—たとえば、【嗜虐的二重話法で満ち満ちている作品】【異常異様なる911の先覚的言及事物にしてブラックホール関連の書籍であるとのものと地続きの関係にある作品】であるとのことを本稿先立っての段で詳述もしていたとのカール・セーガン『コンタクト』ではナチス躍進のテレビ映像にまぶされるかたちで地上にブラックホール(ないしワームホール)を構築するうえで必要な装置の設計図が送られてきたなどとの設定が採用されている(とのことも先立って解説している)— がためにここでの話をなしていること、お含み頂きたい))

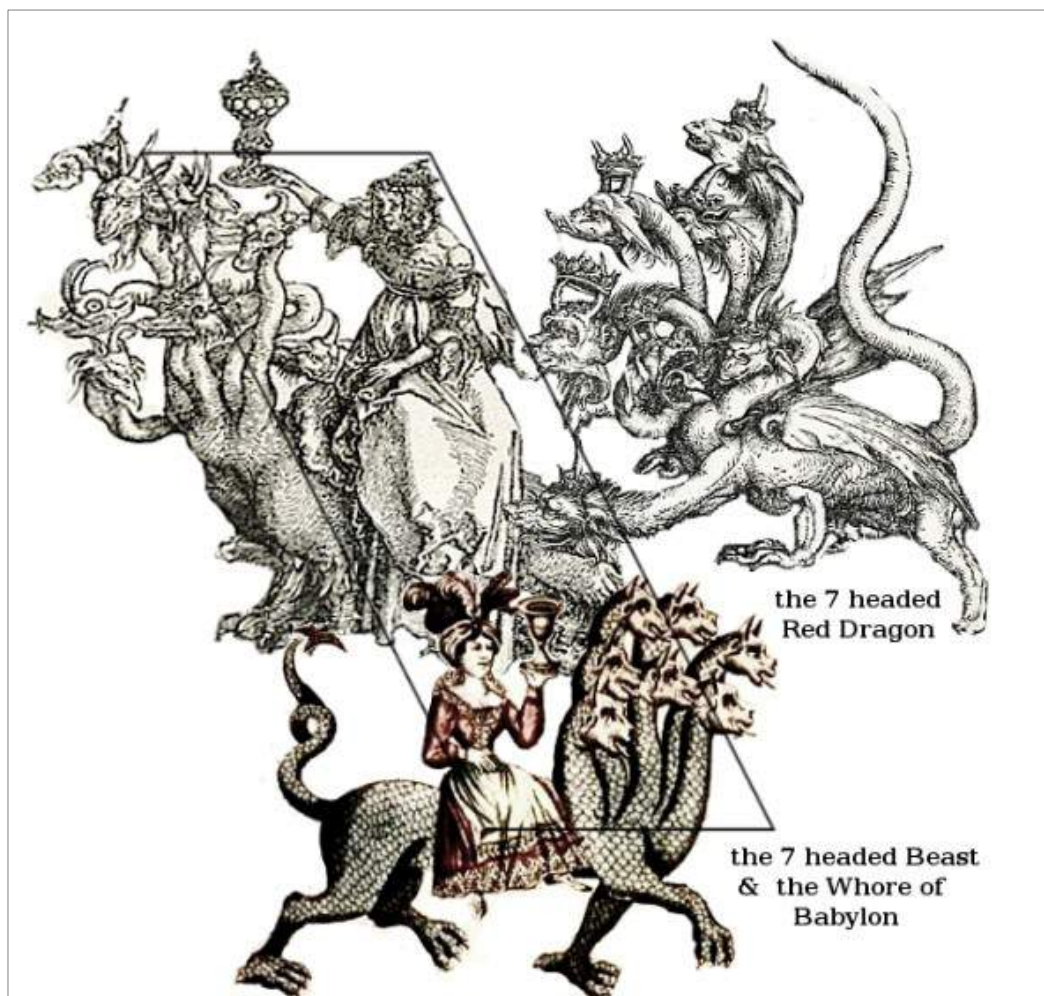
以上ここまでの指摘 —筆者の属人的主観など問題にならぬとの指摘— でもってしてお分かりいただけるものかと思うが、

1. 日本中世期にあつてからして【7ばかりの文書にして七つの面と結びつく赤い龍が登場する文書】が存在している
2. 上文書が【第二次世界大戦の歴史上の流れ】と結びつくとのことがある(【7ばかりの文書にして七つの面と結びつく赤い龍が登場する文書】でその信仰が規定されている宗教(日蓮宗)を狂的に信じ、日蓮の大戦争の予言なるものを思想中核に据えて戦争をなくすための戦争、一瞬で何万人を殺し都市を灰燼に帰せしめる決戦兵器を用いての最終戦争に備えるための大陸侵攻を企図したとの戦前期戦争主導者がいたとのことが「ある」)

とのことらがこの実にもって下らぬ世界(人間存在を予定通りに動かし予定通りに殺していくとの方針があらかじめ相応の類の口を通じて—霊媒師・巫女の類のように口

→ 意味性を見出さぬのは質的に狂った人間ないしは節などはなから有していない相応の類であろうとも判じられる)。加えてもってして、「黙示録」と「今日の二重人格的現代カルトの問題に直結する日蓮宗の「七つの頭をもつ赤龍」にまつわる思潮の構築過程」の間には文化伝播の類が生じる余地がない、であるから、極めて問題になる。そういうこともある(：反対話法として人間存在を徹底的に「馬鹿」にすべくもそういうことがこの世界にあると自然に判じられるのだが、そのことを直視しない者達に明日があるというのか。「鹿」を「馬」とする行為に突っ込みを入れる人間が少数であり、かつ、そうした行為が却(かえ)って節を有さぬ相応の下らぬ者達による排撃に繋がるとの力学が圧倒的優勢ならば、相応の結末は必定—それなりの企図があるとなれば必定—とのことなる。別段、おかしいことを述べているつもりはないとのことで、である)。

寄せでも用いてでか、との式でながらも実にもって正確に一 予告されている、そして、
 のようなことをまじめ・真っ当に問題視するきちんとした筋目の人間がいないとの下ら
 ん世界) には具現化しており、そこからして「よくできている」と本稿筆者などはとらえ
 ているのである(悪い意味で実にもって「よくできている」とのことである; 一大畜舎とし
 てのこの世界にあつての極東領域の利用方針、こう言うては当然に誤解を招きうるか
 とも思うのだが、[望ましい全頭処理の養豚小屋の発展段階](ナチスだけでは心もと
 なかったマンハッタン計画およびその先 一原爆開発、の先にあつての原子核領域
 破壊機序を用いての巨大加速器であると先立って詳述なしている— へと促すため
 の闘争を通じての進歩の段階)にまでレギオン、【家畜】を誘導するうえでの極東領域
 の利用方針を茶化すが如しやりかたとして「堂に入っている」との意で悪い意味にて
 「よくできている」ととらえている)。



新約聖書にあつて最終章として配置されているヨハネの黙示録。の中にキリ
 スト教の義人を圧迫する勢力を誘惑し、彼らよからぬ勢力(とされる者達)ととも
 に墮地獄の運命を辿ると設定付けされている、

【黙示録の獣(ザ・ビースト)】

【黙示録の獣にまたがる大淫婦バビロン(ザ・ホー・オブ・バビロン)】

【黙示録の獣に権威を与えるとされるサタンたる赤い龍】

ら三者の似姿の描画のなされようを挙げたのが上の図である。

似通っていて紛らわしいことか、とは思うが、黙示録の獣も黙示録の赤い龍
 (たるサタン)も双方共々に

[七つの頭を持った存在]

として描写されており(それは先述のように数値の七で満ち満ちた黙示録との
 文書の特性に沿うとの特質でもある/尚、聖書をわざわざ紐解かなくとも和文

ウィキペディア[赤い竜]項目などにもそうした[獣とサタンとのビジュアル上の近接性(七つの頭を持った存在としてのビジュアル上の近接性)]については解説されているので疑わしきはそうしたところでの基本的解説のなされようを参照してみるのもよからう)、上掲図の上の段で挙げているのはアルブレヒト・デューラーによる15世紀著名版画『黙示録』に見る獣とサタンの似姿となる(左の方の大淫婦バビロンを背に乗せているが七つの頭を持つ獣、そして、右側の方が(同じくもの黙示録に古き蛇とも記載されていながら)多頭の竜としての形態でお目見えしているサタンの似姿となる)。上掲図下段は大淫婦バビロンを背に乗せているとの18世紀作成のロシア壁画として英文 Wikipedia[Whore of Babylon]項目にも掲載されているものとなる。

ここ枠で括っての脇に逸れての部では以上似姿を呈示している[黙示録の赤い龍]([大淫婦を背に乗せての獣])に権威を与えた存在と聖書に記されているサタン)が何故もってして日本の排撃性・攻撃性が異様に強いことでも知られる歴史的宗教セクトと「属人的主観など問題にならぬとの記号論的一致性でもって」結びついていると指摘できるのか、また、そうした結びつきが何故もってして先の大戦の戦禍拡大(そしてそのことを突き詰めて行けばカウンター・アクションとしての原爆開発)に「貢献」した国内宗教的狂人の軍部大物申し分と —異常異様にできすぎているとの式で、また、そこに人間存在を徹底的に愚弄している統制のやりようが透けて見えもするとの式で— 接合していると指摘できるようになって「しまっている」のか、そのことにまつわっての詳説をなしてきた。

(尚、筆者が[宗教の徒]の反感を呈するようなあまりにも行き過ぎたことを書いているがゆえに「およそクレバーではない」と(これまた)見る向きもあるかもしれないが、筆者なりの計算の上でここでのかきようをなしているとも申し述べておく。

第一。ここでなしているのは本来的には

【誰も傷つけはしない過去の戦争主導者・右翼的思想家の先見性】

にまつわる話となり、それをして

【現代に適用される宗教的ディスリスペクト】

の問題に「脳内変換」する(あるいはさせられる)ような者達 —そして結果、言論を「違法に」検閲するように動く、動かされる者達— には[本当の意味での思考の自由性や真つ当な精神性]など「ない」と判じられる(からそうした「心など無い」者達の心中などおもんばかりの意味など「そもそもない」とのことがある。

第二。第一の点より拡大して述べておきもすることとして、(同種同文のことは先にも書いたが)、**【なにをやるうと言おうと宗教の徒などというものは筆者のような人間に石を置いてくる】**(そもそもの存在意味の問題として妨害工作を仕掛けてくるとのユニットに段階的にしつらえられてきた)との判断がこの身にあるとのこともある(それは思考の不自由度合いについての観察結果だけの問題だけではなく筆者が際会してきた状況の観察に基づいての属人的経験則に基づいての判断ともなる —日本でもたとえば落語家などで創価学会や皇室、その他被差別・逆差別問題についての猥談・卑語を交えての凄まじい小咄を披露する向きもあるわけだが(具体的芸名は書かない)、そうした向きは何ら言論妨害されていない。他面、遙かに人を傷つけないことを述べているにすぎない筆者のような人間が宗教的徒輩に眼前から消えて欲しいとの扱いを受けるのならば、その意は自明であろうか、と思う。そして、それは説得力それ自体が排斥材料になるような類には妥

協の余地など「はなからない」ということでもある—)。銃は人を撃つためにこさえられた(銃の気持ちなどはそも顧慮に値するものとして存在してはいない)との目的論に依拠しての観点が筆者にありもし(知的売春夫(婦)の問題を考えれば[苦]と[快]の問題で麻薬中毒の娼婦に節度節義を求めるようなものとも見ている)、であるから、却(かえ)って、

【敵手に犬のようにかしずいて、それで安閑を気取っていても、最後は愚劣に嘲笑われながら殺されていくような者らの特質】

を正直・赤裸々に伝えるとの式を採った方がいいとの判断があるとのことである。

以上のことから、カルトと呼ばれるような勢力—ときに[折伏]などの名詞で呼称されての思考信条押しつけとワンセットになった歴史的愚行でもってして数々の人権侵害行為(尊厳無視と社会的排斥をもたらす行為)をなしてきたとの勢力—の反感を買うようなことを招きうるようなことを書いているのは利口ではないといった見方、それは妥当ではないと筆者はとらえている(くどくも書けば、何をどう彼らのできあがった脳でとらえようと何にせよ**【人間存在の未来に対する宗教的勢力の位置付け】**などははなから決まっているのであり(そも、**【宗教】**、その定義と歴史的挙動からして考えてみる必要がある)、「彼ら」が筆者のような人間に対してそうしたことをなさせられるリアクションとしては(不合理違法なものながらも名分があつて)妨害を朗々と明示的にやる、(名分無くして)隠れて陰湿な式で攻撃してくる、どちらであろうとも変わりはない、そうした彼らの出方を気にするなどはなから意味のないこと、であれば、そういう者達「をも」含んでの万人に足下状況についてきちんと伝える、それで宗教の徒にも**【諫言】**をなしたとの事実だけは作った、そういうことをなす意味はある—少なくとも(それとて無駄かも知れないが)下らぬ頭の具合のよろしくない犬風情ではなく同輩の人間存在に対して確認するための挙はなしたとの意で意味はある—との判断(自分を綺麗に見せようとする、反面、相手を汚く見せようとする偽善的で姑息なやりようには虫酸が走るとの性質の人間だが、他面、死地でなお優しい嘘に固執し、それで他の内面もちあげて尊重するなどの甘さは露も持ち合わせていない(何度も書くが、騙されたままのできあがった家畜などは見苦しく殺されていくだけだと考えているし、その旨、はきと言う)との人間、そうした人間として正しいと判じることを伝えようとするうえで必要かとの観点到に依拠しての判断)がこの身にはあるということである))

脇に逸れての話が長くもなった。本題に引き戻す。

本題に引き戻すとして、翻って述べれば、先の911の事件—こここれに至るまでにて黙示録における審判の日、ドゥームズデイを語源・命名由来にしてのドゥームズデイ・クロックとの接続性を指摘せんとしてきたとの事件—について「も」([数値の七]だらけのヨハネの黙示録よろしく)[7]という数値との尋常一様ならざる結びつきが見てとれるとのことがある。

同じくもの点について本稿のつい最前の段、そして、**補説4**の部にて述べたことを多く繰り返しての話を續いてなす。

さてもってして、

「先の911の事件 — (最前までその意味性が問題になるところとして[黙示録における審判の日(ドゥームズデイ)を命名由来としているドゥームズデイ・クロックとの接続性]について入念に指摘してきたとの事件) — についても [7] という数値との尋常一様ならざる結びつきが見てとれる」

とのことについて [従前内容を振り返りなしながらもの指摘] を続けてなす、と申し述べたわけではあるが、以下、枠内にての表記を振り返り記述としてなす。

(以降、[911とナンバー[77]が多重的に結びついている]とのことにまつわって先立って i. から iii. と分かって先に記述しもしていたことをそのまま再呈示するとして)

i. まずもって、先の911の事件ではアメリカン航空「77」便 (American Airlines Flight 77) が [北緯38度53分西経「77」度03分] (秒の単位は略) との座標に存在するペンタゴンに突入したとされているとのことがある (「77」便が西経「77」度に存する建物に特攻したとのことにもなる — ※目立つところでは英文 Wikipedia [September 11 attacks] 項目にあつて “ A third plane, American Airlines Flight 77, was crashed into the Pentagon (the headquarters of the United States Department of Defense), leading to a partial collapse in its western side. ” 「ハイジャックされた飛行機の三番目としてアメリカン航空第七七便は西部壁面に部分的倒壊をきたすとのかたちでペンタゴン(米国防総省本庁)に衝突させられた」と記載されているところである——) 。

ii. 次いで述べれば、西経「77」度との座標系に位置するペンタゴンに特攻させられたとのアメリカン航空「77」便 (American Airlines Flight 77) をはじめ、911で [特攻] をなした飛行機群は Boeing ボーイング社 — (日本国内の類似分野の大企業、三菱重工の数倍もの売上高を誇る航空宇宙機器(民生・軍用双方の航空宇宙機器)分野の「超」大企業で欧州の Airbus エアバス社と世界の旅客機市場を(厳密なる経済学的定義に則つての [寡占一態様である複占] 状態にあつて) 二分する企業たるボーイング社) — 製の旅客機と認知されているわけであるが、それら911での [特攻] に用いられたと認知されている旅客機らは、(ボーイング社が市場にあつて寡占状態で君臨する米国のその分野の帝王のような会社であり、かつ、ボーイングの旅客機製品の機種シリーズ名がそちら方向で固定・限定されているために当然のようにそうもなっているととらえられるようなところであるのも)、これすべて、
[7X7 model]

と呼称される、[7と7の間に機種に応じて別の数が挿入されるとの機種番号] が付されての機体らであったとのことがある — 具体的には西経77度に位置しているペンタゴンに [特攻] した77便にあつての機体は7X7モデルに属する Boeing [757] であったと認知されており、ツインタワー(ノスタワー・サウスタワー)に [特攻] した機体らは双方共に Boeing [767] に属する機体と認知されているとのことがある(911の事件で [特攻] に用いられた機種らがすべてボーイング7X7シリーズとなっていたことの出典は直下、挙げるとして、ここにはボーイングの7X7シリーズにつき世間一般でいかなる解説がなされているのかの典拠を引いておく → (以下、英文 Wikipedia [Boeing Commercial Airplanes] 項目よりの引用をなすとして) “ For all models sold beginning with the Boeing 707 in 1957, Boeing's naming system for commercial airliners has taken the form of 7X7. ” 「1957年にてのボーイング707に

はじまるどころとして販売されてきたすべての機種につきボーイング社の商用旅客機全ての命名規則は[7X7]との形態を取っていた」——。

(911 で特攻に用いられた飛行機らが全て[7X7]シリーズであったことの出典表記は先の段に譲ってここでは繰り返さないこととする)

iii. (ii. から iii. の段に移して指摘するところとし)、また、

「911 の事件にてはワールド・トレード・センターで 1WTC から 7WTC の計 7 棟のビルが倒壊を見ている」

とのことがありもする (出典(Source)紹介の部 101)。

そして、さらに加えて、911 の事件が [77] との数値とも親和性が強いとのことを指摘するとのここでの話と関わりとるころとして取り上げることとして、(従前既述内容とも一部重複するところとなりもするが)、次のようなこと「も」ありもする。

「本稿での先立っての補説 4 の部にての出典(Source)紹介の部 106(3)に続く部で指摘していたところとして、[ワールド・トレード・センターで計[7棟]のビルが崩落した 911 の事件] は【11】(ナンバー・イレブン) とも際立って結びつく事件となっている、とのことが「ある」」

まとめれば、およそ以下のようなかたちにて、である。

「【9 プラス 1 プラス 1】は【11】となる。

そうした各桁足しあわせると【11】が浮かび上がってくるとの 911 の事件で崩されたツインタワー、同ツインタワーは遠望すると【11】との数を呈しているようにも見えるものであった。

また、ツインタワーの階数は、一本稿にて度々呈示のアメリカ海洋大気庁による航空写真を元にしての図を再度呈示するまでもなく労せず特定できようところとして— それぞれ「11」0 階となっていた。さて、110 となれば、0 の部を空値(Null 値)と見た場合に【11】に変ずるとのものである。

まずもってしての以上のことからして 911 の事件とは [【11】と結びつく素地ある日付] にあって [【11】と結びつく建物] (外観および階数の両面で 11 と結びつく建物) が「攻撃」された事件であると述べられもするわけだが、のみならず、米国にあって [911 番] というものが 911 の事件が起こる前から警察・消防・急患の一括しての車両呼びだし番号となっていたとのこと、そのことも同じくものこととの絡みで意をなしてくるようなことがある (従前から各桁足しあわせると 11 になるとの 911 が (かの事件以後の[日付け]呼称としてではなくにも、の) 米国の [緊急電話番号] となっていたとのことが意をなしてくるようなことがある)。その点、[日本版 911 番] となっているのは [「ひゃくとおぼん」こと【11】0 番 — ナンバー 110 は完成当時、世界最高層のビルとなりもしていたツインタワーの階数でもある— および緊急・消防呼び出しのための 119 番の各番号を合算したもの] であるわけだが ([日本での 110 番と 119 番が合算されての役割] を果たすのが [警察・消防・急患の窓口を全て兼ねてのかねてよりのアメリカの 911 番] である)、 それら日本の緊急車輛呼びだし番号らも【11】と「同じくもの式で」結びつく(ことが問題になる)。「11」0 番についてはゼロの部分が存在しない数、空値と見れば、11 となる(それは遠望すると 11 に見えていたありし日のツインタワー階数から 11 を導出す

るうえでの式ともなる。そして、またもってして「11」0番でかけつけてくる日本の警察呼びだし番号については(緊急の事態ではない場合のこととしては)「#「911」0」番が電話相談窓口番号となっているとのこと「も」ある)。他面、日本の消防・急患受け付けの「119番」については各桁足しあわせるとそこからして「11」が出てくるとの式のものであるとのことがある(これは911との日付の各桁を足すと11が出てくるのと同じ式である)。

そういうことが世界中の緊急車両呼びだし規則にて当てはまっているとこのことがこの世界にはある(エストニア、ラトヴィア、ドイツ、ノルウェイ、トルコ、グアマテラ、ジャマイカ、ボリビアなど世界中の各国が消防ないし警察の呼びだし番号として110番を採用している—アメリカのような911番方式を採用している国もある一方で110番を採用している—とのこともウィキペディアの一覧表記の紹介として本稿の先の段で言及・解説している)。であるから、「911と110との【11】を介しての連関」を「こじつけだ」と無条件に過小評価出来るものではないと申し述べる(ただし、911の事件の予見的言及なぞが多数なされている—先述—といった馬鹿げたことが具現化して「いない」世界であったならば、そのようなことを問題視する必要はそもそもなかった、ダイヤル式電話にあつてのダイヤルの人間工学的都合というやつで説明できるとの式で手仕舞いであつたらうが)。

ここまで述べてきた「かの事件(911)と【11】とのつながりあい」から2001年にあつてアメリカン航空「11」便がハイジャックされて92名が搭乗していた同便がツインタワーの片方たるノースタワーに突撃しているとのこと(上にてその記述内容を引いているとの英文 Wikipedia[American Airlines Flight 11]項目にての冒頭部にて“ American Airlines Flight 11 was a domestic passenger flight which was hijacked by five al-Qaeda members on September 11, 2001, as part of the September 11 attacks. They deliberately crashed it into the North Tower of the World Trade Center in New York City, killing all 92 people aboard and an unknown number in the building's impact zone . ”と掲載されているとおりである) だに偶然であるとは無下に言い放てはしなかつたとの側面がある、実にもって残念だが、現実にある」

揃い踏みでボーイング 7X7 シリーズに属する旅客機らが特攻に利用され、結果的に、突撃を受けたツインタワーを中心に7棟のビル群が連続倒壊したとのその事件が【11】と多重的に結びついているとの点について(ビル七棟の) [7] と【11】との数から何が述べられるか。セブン・イレブン、元々アメリカの氷販売事業者よりスタートした日本国内にあつても大手コンビニエンス・ストアの名称ではないが、[かけ算の問題] から [特定の数 77] (すなわち、ボーイング 7X7 シリーズの機体が [特攻] に利用されての座標系にて西経「77」度に属するペンタゴンに突っ込んだとされるアメリカン航空「77」便についての側面でも問題となる「77」という数値 / またもってして 911 の後、同文にアルカイダによって企図されたとされる 2005 年 7 月 7 日のロンドンの連続爆破テロ、7/7 とも略称されるかの事件のことを想起させる数値) が浮かび上がってくる (との想起がなせる)。

以上、i. から iii. によって申し述べられるところをまとめれば、

[911 の事件では揃い踏みでボーイング 7X7 シリーズに属する旅客機らが特攻に利用され、うち一機に関しては(機体コードではなく定期便の便数として [77] が振られていたとの)アメリカン航空「77」便として運用されていた機体となりもし、そちら(77 便として当日運用されていたボーイング 7X7 シリーズの機体)が西経「77」度に位置する建物(ペンタゴン)に特攻した。

また、911の事件は同じくものボーイング7X7シリーズに属する旅客機らがワールド・トレード・センターのツインタワーへ突入し、それが「結果的に」7棟のビルらが倒壊することになった契機となった事件であると知られている。に関しては事件ありようが[11]との数と多重的に結びついているとの指摘がなせるようになってきている点によって(ビル七棟の)[7]と[11]との数が[乗算]の問題から[数77]が浮かび上がってくるとの見方「も」なせるようになってい

とのことになる。

以上振り返っての部から何が述べたいのか、お分かりいただけているかとは思うのだが、

「「7づくめの」911の事件は「7づくめの」黙示録と結びつくようにとれる」(「7つの頭を持つ赤い龍と7つの頭を持つ獣が偽預言者と共に台頭して、人類を破滅に導く」/「7つの金の燭台と結びつく7つの教会に当宛てられた文書としての体裁を持つ」/「7人の天使が7つのラッパを吹き鳴らし7つの封印が解かれる中で7つの鉢による災厄を(神の7つの霊の意向として)人界にもたらす」などという筋立てが(「宗教における妄言文書であろう」としか理性ある者には受け取られまいとの)『ヨハネの黙示録』にあっては具現化している。他面、911の事件ではボーイング7X7シリーズに属する機体らが特攻を敢行、うち一方ではアメリカン航空77便が西経77度に属するペンタゴンに突撃したとされるものであり、他方では([11]との結びつきが多重的に問題となる中で)7棟のビルが倒壊させられているとのことがある)

とのことの意味性を問いたいのである。

それ単体で述べれば、

[宗教の徒輩の妄言; Religious Delusion]

としか響かないだろう(とは思)。

だが、ここでの話は妄言・妄語の類で済まされるようなものではない(と「当然に」強調するだけの事由がある)。

第一。「終末」に通ずる黙示録的シチュエーションの実現化、および、911の予見的言及との「両」側面が同時に具現化しているとのものが存在しているとのことがある。

データ Data と文献的事実 Philological Truth に依拠しての話として、たとえば、

(本稿にての先立っての段、補説4の部にあつての**出典(Source)紹介の部107**から**出典(Source)紹介の部107(2)**を包摂する解説部にて論じ立てているように)、

「**「黙示録に見る筋書きのような世界終末を自作自演にて演出しようのインチキ宗教の如きものが暗躍している」とのストーリー展開を主筋とする「911の予見事物」となっている作品が存在する**」

とのことがあり(「構造的に中央に球形オブジェを配するツインタワーと結びつく要素があるビルが爆破されるとの筋立てを有している」「ツインタワーと結びつく側面を伴ったビル爆破と飛行機ハイジャックがリモートコントロール下にある人間の操作とのかたちで結びつけられている」といった詳説なしてきたところの事由より予見事物となっていると判じられもする日本国内漫画作品『ルパン三世 くたばれ! ノストラダムス』のことを指して述べている)、また、紙幅にしてそう遠くはない前の部にて原文引用なしながらも呈示してきたように著名作家アーサー・クラークの七〇年代作品 Rendezvous with Rama 『宇宙のラ

ここでの話
に関して
は
【宗教】と
いう人間
に押しつ
けられた
一種の妄
想体系が
【始原的
原因】(エ
デンの禁
断の果実
摂食による「失楽園」)が
【終局的
帰結】
(ドゥームズ・デイ・ク
ロックに名
称使用され
ている
宗教的
最後の審判
を経ての
「復楽園」)とをワ
ンセットに
している
とのそのこ
とについて
【黄金
の林檎】
と【禁断
の果実】
の結びつ
きにまつ
わって解
説してきた
ことが深く
も関わっ
ている。同
点について
把握未
了であると
のことであ
れば、本
書 p.245 から p.248 に
あって呈
示している
見解に対
して同じ
もの本書
p.248 から
p.273 に
てさらに煮
詰めて呈
示している
現実的あり
ようにつ
いて(批判
的視座に
て、でも)
よくよく検
証いた
きたい次
第ではあ
る。

『ランデブー』では、

【社会運動(スペース・ガード構想と呼ばれるそれ)にまで発展した記述内容】

にあつて、

【2077年との年次と9月11日との日付が目立って結びつけられている】

といったこともありもする。

また、その他の作品として、同じくもの地球に対する隕石の衝突、次いでもってしての破滅的状況の招来とのテーマを掲げている作品としては『アルマゲドン』というハリウッド俳優ブルース・ウィルス主演の映画がありもし、同作は(本稿の補説4の部にて事細かに解説しているように)「複合的に」911の予見的物事となっているものである、そして、同映画タイトルに見る『アルマゲドン』とはまさしく聖書・黙示録における最終戦争—ドゥームズ・デイ(審判の日)に付随する最終戦争—のこと「でも」ある(アルマゲドン・アーマゲドンとは元来、新約聖書・黙示録における最終戦争が行われる丘に付された名詞だが、転じて、同語が【最終戦争・終末的状况一般】を指すことになっているとの語の使用慣行が海外にもある—といった黙示録の状況をタイトルに冠する映画『アルマゲドン』の予見的側面としては[1. スペース・シャトル・アトランティスの隕石到来による崩壊に続き序盤ニューヨークに隕石群が降り注ぎ、「911をダイアルしてくれ!」との悲痛な叫びがあげられる中、ツインタワーを含むマンハッタンのビル群が倒壊を見ていくとの描写がなされる]、[2. 作中の地球救済のための隕石爆破のためのスペース・シャトルら(双子のように瓜二つの外観を呈する二機のスペース・シャトルら(フリーダムおよびインデペンデンス))の打ち上げミッションにまつわり「二度ほど」911を意識させる電光掲示板表示が出てくる]、[3. 双子のスペース・シャトルらの隕石爆破シーンに際して(英語表現では)ナインおよびイレブンを含む言及がなされるとのありようが見てとれる]との各点について本稿の先だつての部で(具体的確認・検証方法の紹介を含めての)解説を加えている—)。

かてて加えて(よりもって性質が悪いことに)、隕石による破局的災害を【2077年との年次と9月11日との日付を目立って結びつけるとの式】で Rendezvous with Rama『宇宙のランデブー』にあつてもちだしている著名作家アーサー・クラークに関しては同作家由来の「他の」作品らにも【複合的に見て911の予見的言及が浮かび上がってくる】との側面が伴っている(それはブラックホールとの接合性が問題になるところでもある)とのこともありもする(にまつわつての解説に本稿で極めて多くの文字数を割いている)。

ここでの話が妄言・妄語の類では済まされぬとのことに関して第二に、である。本稿でほんのつい先立つての部にあつて

【【「黙示録の」その日(ドゥームズ・デイ)の現出にまつわる時計】といった語感を伴った世界終末時計と911の事件が「多重的に」結びついていると述べられるようになって「しまっている」】

と摘示してきたが如くことが確としてあるとのこともある。

そうした不快な関係性、実にもって性質悪きことに相互に別個に成立しもしている(と確認を請いたい)との多重的関係性—それが911の事件が7(77や7X7)と異様に結びつくとのことと「全く別の側面から」成立しているものと指し示せるからこそ問題になるとの多重的関係性—に基づき、

【911の事件が7(77や7X7)と結びつく】

とのことそれ自体が【根深い故意】によるものであると述べるのである(死体がそこにある、そして、その死体が滅多刺しにされて失血死しているとの検死結果が出ているケースを考えていただきたい。ならば、そこには【故意】の問題、欧米法におけるラテン語言いまわしにおける犯罪的加害意思 Mens rea

の側面があるとの殺人事件になろう、そういう話をしている(つもりである))。

その点もってして、

「人間のなせる犯行ではありえることではない。どうしてそのようなことが「できる」(あるいは恣意性・故意性を薄くしてとらえれば「具現化している)」などというのか？おかしいだらう」

と【常識の世界の偽り】に救いを見出すような向きら、そう、不都合なことは一切合財、閑却・無視しながら常識の世界にその常識を固守して安住していれば、自身の安心立命が保証されていると思いたいとの人間ならば「率先して」そもした異議を白々しくも呈してくることか、とは思う。

そして、同じくもの伝にて

「人間がリモートコントロール下にある半・機械化存在ではないとおよそそのようなことは出来なからう。我々は[そのようなこと]は「認めない」

との否定の弁をもちだしてくるところか、とは思う。

だが、本稿はスタンスとして

【犯行の機序(作用原理)】

は問題視するものではない (たとえば、【磁石が足下につけられた人形】が【テーブルの下からの磁石】で操られているとのたとえを持ち出したうえで、【人形足下に据え付けられた磁石】をアップサイドダウン、【本能的にニューロンの活動電位で電気的に作用している被操作個体の脳】の問題に置き換え、【テーブル下の人形を動かす磁石】を【高度人工知能に管理させての脳波などと紐付けての三次元座標に狙いを定められる重力波投射メカニズム】に置き換え、【テーブル表面とテーブルクロスの下を分かっ盤面】を【重力波のみが侵出可能ともされる多世界解釈における他世界間を分かっ壁】などと置き換えて見ての機序などはいくらでも普通に考えられるわけだが、ここではといった不分明・不明瞭なる話をなしているわけではない)。

代わってここで問題視していることは

【現象】

が現実にそこに「ある」、そう、

【犯行それそのものが「存在」していることを示すもの】

としてそこに「ある」とのことである。

誰が見てもそういうものであると容易に確認可能なる【現象】がそこに存在している場合においてその【現象】を無い、存在しないと看做すのは狂ったありよう(理由どうあれ正常まともではないとの状況)、しからずんば、(叙景的に表せば、そっぽを向いて口笛を吹く式の)正直ではないとの状況、不誠実性が問題になる局面のいずれかでしかない(不誠実性についてはその背景にある動機が臆病や保身であろうとなかろうとそんなことは問題にならない)。

筆者は世界における人間はその伝では【質的狂人】ないし【不誠実なる者】の二者に大別できると判じているわけだが、極まるところでははなから前者など度外視する以外にないと見もしており、であるから、後者に「黙過しては逃げ道はない。全処分が決まっているとするだけの材料がある」とのことを—それもまた残酷なこととは思うのだが—縷々諄々(るるじゅんじゅん)と「具体的論拠の山の呈示でもって」訴え、(行為の強制など絶対にできないのだが)責任シェアをなしての【適正なるミーム】(この場合の【ミーム】とは【危機的状況にまつわっての選りすぐりの情報の体系】を指してのものにとらえてもらっていい)の望ましき流布・共有をはかるとの趣意の下に本稿をものしている。

(:[人間操作の機序]の問題を本稿筆者が可及的に避けていることもまた「不誠実だ」ととらえる向きもいるかもしれない。であるから述べておくが、—筆者としては「それがお

そらくもってして射ているととらえられるから状況は最悪である」と受け取っているところなのだが— 本稿にての**出典(Source)紹介の部 87(2)**, **出典(Source)紹介の部 87(3)**, **出典(Source)紹介の部 87(4)**で考えられる機序の問題についてかなり細かくも専門的な英文論稿・科学書から引用なしつつも、「一応」、触れるべきかととらえたことには触れもしている。いくら(未熟なる門外漢なりに)暇さえあればその方面での可能性「をも」日々煮詰めてきた、そう、自分の昔日の実に拙かった謬見・愚見を絶えず修正しながらも日々煮詰めてきたといえども所詮は断言できるような筋目のことではない、であるから、「本稿本論に対しての余事の部、そこでの傍論(にして暴論)もいいところだ」との位置づけを与えざるをえないと明示しながら、【考えられる人間操作の機序】の問題について— 海外のその方面の人間レベルでの研究成果を引用しながら我々人間が欠点だらけの現代科学で考えられる範疇ではこうとしか言いようがないのではないかと— の式で— 次のようなかたちでの【不確実な話】まではなしている次第でもありはする。

→

[非侵襲性(メスを用いないで作用する)とのブレイン・マシーン・インターフェースのようなものの作用を【複数世界;マルチバースを貫通する(とされる)重力波】のようなものを用いてあまねくもの人間一般(ロボット化人間)に及ぼしているとの力学が介在している] / [膨大な知的計算リソースを伴った機械知性(電力は縮退炉などを用いている可能性もある)の作用によって個々の人間に【神】や【案内役】や【宗教的主導者】(天使でもよいしクグツらがその他妄信する教祖でもいい)の幻覚・幻想を植え付け(幻聴幻視の類も脳をいじることで見せられるだろうし、大脳辺縁系周辺などをいじれば、都度折々の人間の感情や苦楽、となれば、何かに対する畏敬の念や嫌悪の念をもが思うままにされる可能性がある)、のみならず、脳内物質の分泌をも操作しながらこの世界の人間(この世界の大部分の人間かもしれない)の意識的ないし「無」意識的な意味でのラジオ・コントロール・マシーン化を実現しているとの力学がありうる] (現時点ではそれも悪辣なブラックユーモアをクグツを手繰って口にさせているのかと考えてもいるのであるも陰謀論者は【「未来形の」マイクロチップ投入による人間操作の企み】などを口にすわけだが、人間の大脳辺縁系などがこの世界、我々の手のとどく範囲にはないとの高度機械によって「器械的に」いじられてきた、によって情動や対外意思表示などを「重度に」コントロールされてきた、また、[予言](などと呼ばれるもの)が具現化し諸所の愚行の発露してきたのはずっと昔からである、そのような可能性論とて行き過ぎではないと筆者などは考えるに至ってしまっている)。

とにかくも、といった話をも[人間操作の機序の問題]になんら触れないのもどうかと考えながら(憶測ながらも)なしているわけである— 繰り返しておくが、そうしたハウ・ダニット(どうやって[犯行]を実現しているのか)の問題は「後述するところの」ホワイ・ダニット(何故、[犯行]を実現実行しているのか)の問題と同文にどこまでいっても模倣としているところがある。だが、ひとつ述べられることは[犯行がそこにて実現化している]との事実は[恣意によってしか成り立ちえない被害の態様]が具現化しているために揺るぎようがないと述べられてしまう、そのことが問題になるのは変わりはないとのことである—)

以上のことを念頭に「何故、」ここでの話のようなものを敢えてもなしているのか、慮(おもんぱか)りい

ただきたいものではある(※)。

(※「何故、」普通人が常識では否定しようとの領分に【現象】に基づいて踏み込んでいるのか、踏み込む必要があるのか、属人的主観など問題にならぬところの堅い典拠らを(指し示し事項に1対1のものとして)挙げながら踏み込んでいるのか、踏み込む必要があるのかとのことについて特に強く慮(おもんばか)りいただきたいものである(そうもしたことをなしている理由は直上の段も含めて既に何度となく申し述べているところではある)。

尚、[敵側に同輩を率先して売るのが是とするような輩の如き唾棄すべき類](ないしは[敵側のために情報操作におのれ自身を犠牲にしての遮二無二の式でいそむとの完全に葉籠中の意思といったものが無き類]や[悪意はないが、種に対する道義心・公共心の問題を理解する[知能]さえないと向き])ならば、同じくもの領域の話について[おちゃらけた神秘主義的漫談・宗教的漫談の類]

にて[奇怪な事態]を馬鹿噺に貶めるようなことをやることか、とは判じる(「神の意思によって911の事件が起こったのだ」であるとか「大いなる宇宙精神(あるいはそれに反する邪(よこしま)なる精神)が911の事件を引き起こしたのだ」などと論拠を挙げずに「見るに堪えぬ」神秘主義漫談を展開するか、挙げてもまったくもって正しくはない論拠を挙げて痴愚者陰謀論をゴリ押しするとの式で(ヒトとしての自我があったとしても)人間の屑らが同じくものことをやることかと判じる——実際、日本のインターネット上はそういった類に由来する馬鹿噺に[占有]されている節があり、ために、本稿では差異化のために小閑を偷(ぬす)んで、(本来ならば他のところに時間を割くべきであるにもかかわらず)膨大な出典を必要十分なだけ、挙げ連ねるとの途を取ることとしている——)。

だから、(もし心ある人間、そう、種族の未来を(我々全員を皆殺しにすると執拗に予告している節がある)[向こう側]に売り渡すことを断じて是としない人間が本稿を読んでいた場合を想定して述べるが)、そういう言論土壌汚染の類を見かけたらば、そして、そういう類が馬鹿噺を展開するうえで本稿にて呈示のような論拠を(後付け、でであろうが)劣化しながらも流用していたらば、そうした者達がどういう存在なのかよくよく[悟性]にてご判断いただきたいものである)

(頻繁に脇に逸れてのことわりの表記を外挿してしまっている中でながらもここでの[意味的なる分析]をさらに続けるとして)、また、911の事件についてはその他の意味でも宗教的体系と接合しているのことがある。

例えば、911の事件によって崩されたツインタワーのシンボルは

**[911の事件にて崩されたツインタワーの間に据え置かれていた)黄金のスフィアを爆破すると
の筋立て]**

が露骨にも現出している「1999年」初出の映画(『ファイト・クラブ』)にての

[フリーメーソン・シンボル画(トレーシング・ボード上の図像など)との「露骨な」結節点]

から

[ソロモン神殿(本稿のせんだっての段でアブラハムの一神教—ユダヤ教・キリスト教・イスラム教—の全てにあって重大な意味合いを有していると解説してきたところのソロモン神殿)の柱ら]

[ヘラクレスが打ち立てた柱ら]

と結びついているとのことが申し述べられるようになって(とのこと、**補説4**と振ってのセクションの後半部にあって詳述に詳述を重ねてきた—以下、その点についての再掲図解部を設けておく—)。

(再掲図として)



(DVD [Fight Club] time-record
(sold in Japan edition) :
[1:45:44] - [1:45:55])

- ① blasting away with explosive
- ② rolling down to the chess-board-like-space



上掲図左側はフリーメーソンにてのメンフィス儀礼 (Rite of Memphis-Misraim) の構築者とのことである Jacques Etienne Marconis de Negre という 19 世紀のメーソンがものした著作としてオンライン上に PDF 版 (1849 年刊行フランス語書籍としての PDF 版) が現行流通している著作、Le Sanctuaire de Memphis にての 120 ページおよび 121 ページの間にて掲載されている図像よりの抜粋となる 一同図中央部には伝語にて Colonne Jakin および Colonne Boaz と振られてのヤキンとボアズの柱が見てとれる

上掲図右側は映画『ファイト・クラブ』の特定部の流れ (流通 DVD にあつての再生時間 1 時間 45 分 44 秒から 45 秒に具現化するシーン) を描き取つての図の再掲をなしたもの 一 [ツインタワー] 敷設の現実世界にて 911 が起こるまでそこにあつたオブジェたるザ・スフィアの露骨なるイミテーションが爆破されて、ボウリング・ボールのように転がり、チェス盤状の床の場に突入していくとの特定部の流れを描き取つての図の再掲をなしたもの 一 となる。

お分かりのことか、とは思うが、両者の間「にも」柱とツインタワーの結びつきに関わる相似形が見出せる 一フリー・メーソンなぞの「インサイダーから見ると映画『ファイト・ク

ラブ』が異なった見方で見えるとの「一例」たりうる。

のようなかたちにて「も」〔小階段〕らを同じくもの式で描くフリーメーソンに多用されるトレーシング・ボードなどの他の例も本稿の先だつての段で挙げているわけであるが、ここでの一例摘示なしたようなかたちにて「も」【ツインタワーとの結節点】が観念されるヤキンとボアズの柱についてはフリーメーソンの間にて重要視され続けてきた特定著作 (Morals and Dogma of the Ancient and Accepted Scottish Rite of Freemasonry『古代より連綿と続く認証されしフリーメーソンのスコットランド位階の徳義と教義』) の中にて

【ヘラクレスの柱】

に仮託されているとのもの「でも」ある(本稿補説4の部の同じくものことにまつわつての委細明示すべくもの解説を参照のこと)。

さて、ツインタワーがメーソンにおけるソロモン神殿の柱のシンボル、ジェイキンとボアズの柱、そして、ヘラクレスが打ち立てた柱と結びついているというのは「無論」、筆者の独創などではなく、海外でも一部の向きらが指摘していることなのだが(本稿ではそうも述べられもして当然であろうとの予見映画における予見描写のありかたを事細かく図示しながら呈示している—詳しくは長大なものとなっている本稿補説4にての**出典(Source)紹介の部105**の内容を検討されたい—)、911の事件で崩れ落ちたツインタワーズは

〔ソロモン神殿の柱〕

〔ヘラクレスの柱〕

と結びつくのみならず見様見方によっては

〔旧約聖書に登場した士師サムソンの崩した柱〕

「とも」また結びつくべくもして結びつくようになっていると解されるものとなっている。

何故か。

伝承伝播の問題としてサムソンがヘラクレスと記号論的に結びつく歴年指摘されてきたとの背景があり、その結びつきには〔サムソンの二本の柱(の倒壊)の伝承〕と〔ヘラクレスの二本の柱の伝承〕も含まれているなどと「される」からである(下に一部、同じくもの点に通ずるところの記載を引いておく)。

(直下、英文 Wikipedia〔Samson〕項目よりの引用をなすとして)

Samson bears many similar traits to the Greek Herakles (and the Roman Hercules adaptation), inspired himself partially from the mesopotamian Enkidu tale: Herakles and Samson both battled a Lion bare handed (Lion of Nemea feat), Herakles and Samson both had a favorite primitive blunt weapon (a club for the first, an ass's jaw for the latter), they were both betrayed by a woman which led them to their ultimate fate (Herakles by Dejanira, while Samson by Delilah). Both heroes, champion of their respective people, die by their own hand: Herakles ends his life on a pyre while Samson makes the Philistine temple collapse upon himself and his enemies. These views are disputed by traditional and conservative biblical scholars who consider Samson to be a literal historical figure and thus reject any connections to mythological heroes.

(拙訳として)

「サムソンは〔メソポタミアのエンキドゥの物語に影響を受けている(と解される)ギリシャの英雄ヘラクレス(およびローマ版ハーキュリーズ)〕に対して数多くの共通の特性を有している。ヘラクレスとサムソンは両者共々、ライオンと素手にて格闘しており(ヘラクレスのネメアの獅子にまつわる功業)、ヘラクレスもサムソンも両者共々、

原始的な鈍器を好みの武器として使っており(前者ヘラクレスは棍棒を、後者サムソンはロバの顎の骨を好みの武器としていた)、両者共々、自身の運命がそれにて決したのかたちで女に裏切られている(ヘラクレスにおけるデイラネイアによるそれ、サムソンにおけるデリラによる裏切り)。両英雄共々、各々の属する人間集団のチャンピオンといった立ち位置にあり、終局的には自死を選んでいる、すなわち、ヘラクレスは焚き火にて(毒に苦しむ)自らを処分なし、サムソンは彼の敵であったペリシテ人の神殿を身を挺して諸共崩壊させるとの事をなしている。こうした視点は長らくもサムソンがありのままの歴史的存在であると考えてきた伝統的かつ保守的な聖書学者らには異議を唱えられているとのものとはなり、神話上の英雄らのいかなるつながりあいもが否定されもしている」

(訳を付しての引用部はここまでとする 一※一)

(※サムソン・ヘラクレス類似性問題については

・ヘラクレスとサムソンの間に両者共々が[二柱の柱の神話]と結びつくこと(ヘラクレスの場合は[ヘラクレスが第10功業にて打ち立てたジブラルタル海峡の表象物ともなっているヘラクレスの柱ら]、サムソンについては[ペリシテ人に捕らえられた折に自らを犠牲にして崩したダゴン神殿の二柱の柱]が問題になるとの見立てもある)

・ヘラクレス・サムソン両者共々が[獣の捕縛の説話]と関わっていること(ヘラクレスは第3功業にて[ケリュネイアの鹿]、第4功業にて[エリュマントスの猪]、第7功業にて[クレーターの牡牛]、第8功業にて[ディオメデスの人食い馬]、第10功業にて[ゲーリュオーンの紅い牛]、第12功業にて[ケルベロス]と獣の捕獲捕縛をやたらと言いわたされて実行しているが、サムソンについても300匹のジャッカルを捕縛したとの逸話が伝わっている)

などを問題視する向きもある。

さらには同じくものヘラクレスとサムソンの一貫性問題については両者伝承に太陽の運行にまつわる比喩が込められているのではないかとそのことを問題視する学究らが「彼らの神話の共通性を問題視しながら」今より百数十年前よりいたとのこともあり、については前世紀初頭に世に出た書籍にして現行、Project Gutenberg のサイトにて全文公開されている Bible Myths and their Parallels in other Religions『聖書にての神話、そして、他の宗教にみとめられるその類似物らについて』との書籍(の1910年刊行版)の CHAPTER VIII. SAMSON AND HIS EXPLOITS の部からしてかなり細やかな記述がなされている(：同じくもの古書に見る記述(古賢の観点)はそれをして Strained Interpretations [不自然なこじつけまかしき解釈]であろうと見る向きもあるだろうとの記述とはなるが(実際に Bible Myths and their Parallels in other Religions という著作ではヒンドゥーの神格クリシュナとキリストの対比部記述にあつて[クリシュナは処女懐胎の救世主である]と伝わっているなどと不正確な見解が目立って挙げられているとのことがあり、同書物、unreliable source [信の置けぬ出典]との側面もある)、「問題は、サムソンとヘラクレスの類似性・一貫性問題が相当程度、[息が長いもの]として識者らに取り沙汰されてきたものであること、そして、そうもとられるだけの材料があるとのことそれ自体であると筆者は受け取っている))

以上のようにヘラクレスとの類似性が指摘される(ただし頭の固い聖書主義者はそれを一向に偶然以上のものと認めないともされる)とのサムソンについては最終的に女の裏切りに遭って目を抉られ、そして、とらわれの身となった挙げ句、(サムソンが士師として主導していたイスラエルの民にとっての天敵であった)ペリシテ人をその神殿諸共、多く道連れに果てた、「柱を崩して」果てたと聖書にて記載され

ている存在である。以下に引用するとおりの式にて、である。

(直下、和文ウィキペディア[サムソン]項目にての現行記載内容よりの引用をなすとして)

サムソンは長じた後、あるペリシテ人の女性を妻に望み、彼女の住むティムナに向かった。その途上、主の霊がサムソンに降り、目の前に現れたライオンを子山羊を裂くように裂いた。ティムナの女との宴席で、サムソンはペリシテ人たちに謎かけをし、衣を賭けた。ペリシテ人は女から答えを聞きだし、サムソンに答えた。サムソンは主の霊が下ってアシュケロンで 30 人のペリシテ人を殺害してその衣を奪い、謎を解いたペリシテ人たちに渡した。…(中略)… ペリシテ人は陣をしいてサムソンの引渡しを求め、ユダヤ人はこれに応じた。ペリシテ人はサムソンを縛り上げて連行したが、途中で主の霊が降ると縄が切れて縄目が落ち、サムソンはろばのあご骨をふるってペリシテ人 1000 人を打ち殺した。サムソンは二十年間、士師としてイスラエルを裁いた。その後、サムソンはソレクの谷に住むデリラという女性を愛するようになったため、ペリシテ人はデリラを利用してサムソンの力の秘密を探ろうとした。サムソンはなかなか秘密を教えなかったが、とうとう頭にかみそりをあててはいけないという秘密を話してしまう。デリラの密告によってサムソンは頭をそられて力を失い、ペリシテ人の手に落ちた。彼は目をめぐり出されてガザの牢で粉をひかされるようになった。ペリシテ人は集まって神ダゴンに感謝し、サムソンを引き出して見世物にしていた。しかしサムソンは神に祈って力を取り戻し、つながれていた二本の柱を倒して建物を倒壊させ、多くのペリシテ人を道連れにして死んだ。このとき道連れにしたペリシテ人はそれまでサムソンが殺した人数よりも多かったという。

(引用部はここまでとする)

(直下、オンライン上にて PDF 版が無償配布されている日本聖書協会一九五四年版『旧約聖書』にての士師記第一六章第二五節から第三〇節よりの引用をなすとして)

彼らは獄屋からサムソンを呼び出して、彼らの前に戯れ事(ざれごと)をさせた。彼らがサムソンを柱のあいだに立たせると、サムソンは自分の手をひいている若者に言った、「わたしの手を放して、この家をささえている柱をさぐらせ、それに寄りかからせてください」。その家には男女が満ち、ペリシテびとの君たちも皆そこにいた。また屋根の上には三千人ばかりの男女がいて、サムソンの戯れ事をするのを見ていた。サムソンは主に呼ばわって言った、「ああ、主なる神よ、どうぞ、わたしを覚えてください。ああ、神よ、どうぞもう一度、わたしを強くして、わたしの二つの目の一つのためにでもペリシテびとにあだを報いさせてください」。そしてサムソンは、その家をささえている二つの半柱の一つを右の手に、一つを左の手にかかえて、身をそれに寄せ、「わたしはペリシテびとと共に死のう」と言って、力をこめて身をかがめると、家はその中にいた君たちと、すべての民の上に倒れた。こうしてサムソンが死ぬときに殺したものは、生きているときに殺したものよりも多かった。

(引用部はここまでとする)

上にて呈示のように、

[ヘラクレスとその事績のパラレリズム(一致性)が問題視されてきたサムソンという存在は柱を崩して、数千人の異教徒を巻き添えにしながらか自死した存在である]

と伝わっているわけではあるが、先にてのナイン・ワン・ワンの事件では[ヘラクレスの柱][ソロモンの柱]に仮託されるようなものが倒壊を見ており(何故、ツインタワーが[ソロモン神殿の柱]と同義同一に

見られると述べられるのか、また、ソロモン神殿の柱が何故、ヘラクレスの柱と結びつくのか、については本稿の先行する段でのフリーメーソン書籍やフリーメーソン象徴主義にまつわる解説部を参照されたい)、そして、ナイン・ワン・ワンの事件では二つの柱・双子の塔の倒壊の結果、数千人の人間が無惨にも殺された後、イスラム教過激派(とされる勢力)に対する掃討作戦が開始された。

ゆえに、

[柱倒壊による数千人の犠牲と宗教上の諍い]

という観点でナイン・ワン・ワンの事件と(ヘラクレスとの絡みで問題となる)[サムソン伝承]とのアナロジー(類似性)が観念されるとのことにもなるわけである(尚、サムソンは目を抉られ盲目となっていたわけではあるも、フリーメーソンにもその入団段階から目隠しをされてから「光を与えられる」儀式がビルトインされていることは本稿の先行する段で細かくも解説してきたところである)。

かくの如しでナイン・ワン・ワンの事件とは諸種の宗教・団体のドグマを反映した意味性と共にあるとことがある、そう、ここ本段にて(繰り返しを含むかたちにて)なしてきた話との絡みで述べれば、

[新約聖書の黙示録に通ずる寓意が込められていると解される](先にてのドゥームズ・デイ・クロックの話である)

[旧約聖書のサムソンにまつわる寓意が込められていると解される]

[フリーメーソン・シンボリズムを介して[ヘラクレスの柱]及び[ソロモン神殿のヤキンとボアズの柱]の寓意と結びつくだけの視覚的描写がワールド・トレード・センターには伴っていた](それはヘラクレスの柱の寓意とサムソンの寓意の結節点でも問題になりうることではある)

といった複合的要素を伴うかたちとなっているとことがある。

そのような対象であればこそ、911の事件に

[意味付け(それは宗教の徒輩に押しつけられた宗教的意味付け「でも」ある)が多くそこに収束しての巧妙なる寓意が込められているととらえる]

ことに「より一層」無理がないことになっていると述べられるようになっていくと[意味上の分析]をなしてこの場で指摘しておく——(従前内容を振り返りもし述べれば、【911の事件とソロモン神殿の柱にまつわる結節点】などについてはそれが【「露骨なる」事件の発生の前言文物】(言ってみれば、前言文物など存在していること自体が奇怪でならないとのものでありはする)に認められるものでもあるため、殊に問題になるとの判断の下、本稿の補説4の段にてその意味性についてこれ専一に膨大な文字数を割いて解説なしていたとのことともなる)——。

その点、ミステリー小説 — 筆者は『犠牲者が殺されていて、その点について多く人間的感情が欠落しての謎解きばかりにスポットライトが当てられがちである、そういう一種の共感性欠如の不謹慎パズルのようなものばかりだろうが。』との好かぬとのジャンルではあるもののミステリー小説 — にまつわる言葉として、

[見立て殺人](例えば、特定の童謡に基づいて人を殺していくなどの何かに「見立て」なしての殺人をおこなうこと)

との概念があるのだが、かの911の事件の[その他の事柄らとの尋常一様ならざる結節点](普通、人間であれば、余程の異常者でない限り、多くのことらとの意味論的結節点を自己の犯す殺人行為にまぶすことなどしはしないだろうと判じられる中での多くのことらとの結節点でもいい)から察するに、かの事件は

[見立て(大量)殺人]

をなし、そのうえで、「さらに別の何らかの意志・意図がある」ことを示す事件であったと判じられるようになっている——[人間「一般」の命など芥子粒(けしつぶ)程度にも思っていない者達が身内同士で

なにがしかのものを確認し合う] とのものを専らに念頭に置いてのものだったのか、あるいは、傾向の問題として強くも [(同文に) 人命など羽毛より軽いとでも見ているような人殺しの類が犠牲者らを罾(なぶ)って愉しむ(ないしは歌会で歌の巧拙でも競うように藁籠中の人間らを殺していく)] といった愚劣で醜悪な挙動としての側面もが色濃くあったのか、ここでは【見立て(大量)殺人】それ自体の背後にある心性、その態様のことは問題視していない――。

たかだかもってしての【サムソンとヘラクレスの共通性問題】のようなところからしてそうしたことが自然(ジネン)として述べられるようになって「しまっている」(疑わしきにおかれてはまずもって911の事件とヘラクレスの12功業がいかように多重的に関わっていると摘示できるようになっているのか、長大な本稿を見直してのうえでの確認を是非とも求めたい次第ではある) . . . 、そうもしたものが先のサイン・ワン・ワンであったということここでは ―【意味的な繋がりあい】と【恣意性】との兼ね合いで― 強くも訴求したいのである。

(【意味上の繋がり合いにまつわっての分析】の段に一区切りをつける前にさらに呈示しておくべきかと判じたことについて記しておく)

ここまで論じてきたこと、【意味にまつわるこだわり】がいかにか執拗かつ多重的に具現化させしめられてきたのかとのことについて [念には念を入れての指摘] をもう一押しとしてなしておくこととする。

とっかかりとして下の絵画をご覧いただきたい。



呈示の絵画は19世紀の仏人画家である Pierre Auguste Cot ピエール・オーギュスト・コットと

いう画家の手になる絵画 (Girl with Basket of Oranges and Lemons といった呼称が与えられている絵画)となるのだが、同絵画、額面上は

【レモンおよびオレンジを入れた籠を手にした女性を描いた画】

としか普通の人間には見られないであろうのものである。

だが、ある程度、神話知識を有しているとの向きが注意着目しながら見れば、同絵画、本稿ここまで段にて問題視してきた【黄金の林檎】にまつわる寓意を含んでいるとの解釈がなせる画ともなる(異なる視点が生じる要件条件は1.「ある程度、神話知識を有しているとの向きが」2.「注意しながら眺めた場合に」との1. 及び2. になり、それら条件が満たされる場合のみ絵に隠れた意味が込められている可能性があるかと理解できるかたちとなっている)。

それにつきましてもって述べるが、【黄金の林檎】は元来、【オレンジ】(要するに画に見る女性が籠に入れられたそれを手に持っているとの果実)と同一視されもするようなものであるとのことが一部の神話通には知られている(先に英文 Wikipedia [Golden apple] 項目より “ In many languages, the orange is referred to as a "golden apple". For example, the Greek χρυσομηλιά, and Latin pomum aurantium both literally describe oranges as "golden apples". Other languages, like German, Finnish, Hebrew, and Russian, have more complex etymologies for the word "orange" that can be traced back to the same idea. ”との記述を引用した通りである)。

次いで、述べるが、【黄金の林檎】にまつわるギリシャ神話上のエピソードにはアタランテ伝承というものがあり、そちら伝承では【黄金の林檎】でもってしてパートナーと結ばれることになったアタランテという名の乙女が女神の聖域でところかまわずのラブ・アフェアーを演じたために黄金の林檎が契機で結ばれることになったパートナーと共に二匹の獅子に変じさせられるに至ったと伝わっている、欧米の著名古典(オウィディウス『変身物語』)にあつて伝わっているのことがある(これまた基本的なところより引用するが、和文ウィキペディア[アタランテ]項目程度のもからして(以下、引用なすとして)“アタランテの名声が高くなったため、求婚者たちが押し寄せた。そこでアタランテは、結婚の条件として、求婚者が彼女自身との競走に勝つこととし、競争に負けた者は殺されるとした。ガイウス・ユリウス・ヒュギーヌス『ギリシャ神話集』によれば、まず男を先にスタートさせ、武装したアタランテが追い抜いた時点で男は射殺されたという。アタランテは生きていた人間のうちに最も足が速かったため、多くの若者が命を落とした。『変身物語』の語るところによれば、アムピダマースの子で求婚者のひとりヒッポメネース(『ビブリオテケー』はメラニオンに作る)は、アプロディーテーに祈りをささげて守護を求めた。アプロディーテーはこれに応じて、ヒッポメネースに3個の黄金の林檎を贈った。競争のとき、アタランテが俊足を飛ばして追い抜こうとするたびにヒッポメネースは後ろに林檎を投げた。アタランテがこれに気をとられ、リンゴを拾っている間にヒッポメネースが先にゴールした。…(中略)…結婚した二人のその後はほとんど語られないが、『変身物語』では、二人がキュベレーの神域で性行為を行なったため、怒ったキュベレー神によりライオンに姿を変えられたとする”(引用部はここまでとする)と表記されているだけのことがある)。

そして、上掲の絵にはこれ見よがしに、

[二匹の獅子の頭を彫り込まれたの石柱]

が描かれている。

それがゆえに、そう、【幅広くも黄金の林檎と同一視されている果実(オレンジ)】と【(黄金の林檎で結ばれた恋人達の変じさせられたとされる)獅子二匹】があわせて描かれているとのことで表記の絵はオレンジおよびレモン入りの籠を手にした女性を描いている画から【黄金の林檎】の寓意を隠喩的に含んでいるとも「解される」画へと化けもするのだ。

さて、そうもした話は、だが、解釈「論」を出はしない。偶然の可能性が排除しきれない、(彼が操れていようとなかろうと)画家が意図的にそうもした寓意を込めた(あるいは込めさせられた)と

の可能性以外にたまたまそうもなったとの可能性が排除しきれない。

そうした【偶然の可能性が排除しきれない解釈「論」】とそれとは隔たるところ、【恣意性が明確化しきっている関係性】を明確に分かつ材料は

- ・関係性の多重性（複数の関係性が成り立っており、それらが別方向からでありながらも相互に繋がり合っているとのことが「ある」といったかたちでの多重性）
- ・関係性にあつて【ある種の巧妙さ】が露骨に具現化しているとのありよう（明らかに自然でこのようなものは具現化しはしなかつたとの堂に入った【人工物】としてのありようが目立つとの側面）

の二点となると述べても過言ではなかつた（別段おかしいことは述べていないであろう？）。

そして、人間の歴史にあつては【エデンの園での墮落】や【黄金の林檎による破滅】に通じもする寓意が

[巧妙さを伴つて、かつ、対話法がかつての式でもつてして確として組み込まれている]

との関係性がよくも具現化しているとのことが「ある」、そこら中に見受けられるとのものとして具現化しているとのことが「ある」。

のみならず、それら具現化している関係性にあつて「最終的決着法が今まで騙してきた人間存在を皆殺しにすることである」とのこゝを隠喩的・間接的に明示し茶化すが如く「悪意」を蔵していることが透けて見えるとのことが往々にしてありもする。

以上のことに通ずる、宗教体系に見る終末観（ドゥームズ・デイ）を介しもして通ずるとの【具体的「例示」】を最前の段まで事細かになしてきたわけだが（勘違いしないでいただきたいが、たゞしもつて、直上の【オレンジの籠を持った女の絵画にまつわつての話】はそうした【具体丁例示】にはあたらぬ、そう、一まどろっこしかつたかとは思ひながらも—【見るべき関係性】と【世人を瞞着する（騙す）ような根拠薄き話】の区別・分水嶺を明確化するために引き合いに出した話にすぎぬ、いわばもの【話の枕】と解してもらつても構わないとのものである）、同じくもの【具体的「例示」】にまつわつて、たとえば、さらに次のような振り返つての表記をなしておくこととする。

以下、長くもなりもしての従前本稿摘示事項の振り返り表記部とする

本稿先立つての段では【次のこと】らを指摘していた。

・近代になって再発見され、ノアの洪水との似通つた内容より物議を醸すことになつたとのギルガメシュ叙事詩に内包される洪水伝承「以外」にも

【バビロンに淵源を持つ（とされる）洪水伝承】

が—ギルガメシュ叙事詩のように近代になって再発見されるとはかたちではなくにもその連綿とそれを伝えた古文献が今日に受け継がれてきたとの式で—昔から伝存しているとのことがある。

その【バビロン由来の洪水伝承】とは

【「クロヌス神」（と記録に表記されての神格）が夢見にてバビロンの王に洪水の到来を警告、その王が方舟を建造して旧文明を破壊しきつた洪水をやりぬけたとの伝承】

として—（ギリシャ語を解し話したとされるバビロン神官（ベロソスという人物）の遺物

とされるものを經由しとして) 初期キリスト教著述家(エウセビオス)らを介して— 今日に伝わっているとのものとなる。

そして、その特定のバビロン由来の洪水伝承が

【432000年】

との極めてユニークな時間単位 —いいだろうか。(強意のために平仮名で表記するとして)【よんじゅうさんまんにせん年】との際立って特異なる時間的スケール— と結びつけられている —世界が洪水にて終焉を迎えるまでの王権統治年代が432000年になっていたと伝わっている— とのことがある(のが問題になる)。

・上にて言及の【432000年】との極めてユニークな時間単位と結びつけられての【世界の(一端もってしての)終末】に対する観点はまるで暗号か何かのようにバビロンの洪水伝承以外に別の宗教・別の伝承体系にも組み込まれている(と指摘「されて」いる)ものである。

インドのカリ・ユガ —循環する時間区分の中の最後の段階(現時現代がそれに含まれているとされる時間サイクル)とインド哲学体系にてされるもの— の周期が432000年とされているとのことがそうである。また、(こちらは年度との単位系が外れての話とはなるが) 北欧神話における最終決戦ラグナロクにまつわるエッダ叙事詩の中であって分解されての数値規則が432000に通ずるものとして見受けられるとのことがあるとの指摘もなされている。

・以上のことらはアメリカの著名な神話学者ジョセフ・キャンベル(物故者)がおそらくもってして最初に指摘したことである(本稿前半部にあってジョセフ・キャンベルの手になる Occidental Mythology『西洋の神話』、その Chapter 9 EUROPE RESURGENT より “ I have discussed this interesting figure in Oriental Mythology, where it appeared that in the Germanic deity Odin's warrior hall there were 540 doors through each of which 800 warriors fared to the "war with the Wolf" at the end of the cosmic eon. $540 \times 800 = 432,000$, which is the sum of years ascribed, also, in India to the cosmic eon. The earliest appearance of this number in such an association, however, was in the writings of the Babylonian priest Berossos, c. 280 B.C., where it was declared that between the legendary date of the "descent of kingship" to the cities of Sumer and the date of the mythical deluge, ten kings reigned for 432,000 years. ” (拙訳として)「わたしはオリエント(中近東)の神話にあつてのこの興味深い数(432系統の数)について[ゲルマンの神オーディンの戦士達のホールにて悠久の宇宙の終末にあつての狼(注記:フェンリル・ウルフという北欧神話の怪物)との戦いに際して(戦士)800人づつが540の扉に控えるものとして存在している]との式でそれが現われているとのところについて議論したばかりだ。(オーディンの戦士のホールに見る)540(の扉)×800(人)=432000とのこととなり、それはインドにあつて悠久の宇宙に対する年数合算で出てくる単位でもある(訳注:お分かりか、とは思うが、ここではカリ・ユガのことを指しての表記がなされている)。そうもした関係性にあつてのこの数の最も初期の具現化は、しかしながら、紀元前280年に生きたバビロニア領域の神官ベロソス由来の書物にみとめられるところとなり、(そこでは)伝説上のシュメール都市群に対する始祖王権の頃から神話上の洪水に至るまで10人の王が統治なしたとされる432000年とされている」(訳を付しての引用部はここまでとする)との記述を引いたとおりである。

・本稿では(直上にて紹介のように) 著名神話学者として知られていたジョセフ・キャンベルらに指摘されている、

【432000年にまつわる終末観にあつてのアナロジー(類似性)】

の問題から一歩進んでのことを指摘せんと努めてきた。

にまつわっては【432000年】とのサイクルと結びつけられているインドのカリ・ユガが

【時間のサイクルを司る悪魔カリ】

を語源としているとされているにとどまらず、

【黒・死・時間と結びつく破壊の女神カーリー】

「とも」語感として結びつく風があり(ただカリ・ユガが女神カーリーと結びつくとの観点は通常容れられていない)、 そうもしたカリ・ユガと女神カーリーのありうべき結びつき — そうもした結びつきは明示的に語られるような筋目のことではないとオンライン上の情報流通態様から判じられもするとの語感上の結びつき — が【バビロンの洪水伝承を夢見で警告したとされるクロノス神】が【時間の神】とされていることにも通ずるとのことが意をなしてくるとのことを従前指摘していた (: 【語源の問題として[時間]と結びつく女神カーリー】と【時間と結びつくクロノス】が【432000年の破滅の周期】にまつわって巧妙に相通ずるようになっていて従前指摘していた)。

次いで、

【(バビロン版洪水神話で王の夢見に警告なしたとギリシャ語をものしたヘレニズム期祭司ペロソスを通じて伝わる) ギリシャのクロノス神】

が転じもして、

【ローマ神話体系にあつてのサターン神】

と結びつくこと、そして、サターン神ありようが【キリスト教の終末観】や【フリーメーソン象徴主義】と「できすぎたかたちで」結びついていることまでを本稿従前の段では指摘せんと努めてきた (: 「多重的」関係性の堂の入りよう) から【恣意の問題】がこれ当然に観念されるとのことを訴求するために、である)。



Fenrir Wolf and Ragnarök

540 (doors) × 800 (warriors) ↔ End of Time

上の図は Project Gutenberg のサイトにて全文公開されているとの 20 世紀初

頭に世に出た著作 **Myths of the Norsemen From the Eddas and Sagas (1909)**にて掲載されている [北欧神話にて終末に解き放たれるとされる狼の怪物 Fenrir (フェンリル・ウルフ) がグレイプニルという魔法の紐で (終末の刻まで) 縛れるさまを描いた画] である。さて、決定論的世界観が極めて色濃くも見受けられる —たとえば、滑稽なことに神自身が自分の遠未来の死に様を「克明に」自己言及するとの詩が伝存を見たりしている— との北欧神話にあつて [(図に見る) フェンリル・ウルフ —北欧神話にあつて主催神たるオーディンを呑み込んで殺すとされる狼— との終末の最終決戦] に関わるナンバーが 432000 であるとのことを指摘している —正確には 540 の扉から 800 人の戦士が立ち現れ、総計が 432000 となるとのことを指摘している— のがその著作より引用をなしたとの神話学の大家ジョセフ・キャンベルであるが (: 同ジョセフ・キャンベルの指摘に間違いはない. たとえば、本稿筆者が内容検証した『エッダー古代北欧歌謡集』(新潮社刊) にあつて (その p.257 [ギェルヴィたぶらかし] の収録部よりの引用をなすとして) “すると、ハールが答えた。「なぜ、ヴァルハラにはいくつ扉があるか、どれくらいの大きさの扉かとたずねないのかな。もし、それをきいたら、誰でも好き勝手に出入りできなければ不思議だというに違いない。そして、中に入るより、中で席をとる方が楽だということは事実どおりといっておかなくてはなるまい。グリームニルの歌にこう歌われている。/ ヴァルハラには五百と四十の扉があらん / 狼との戦に赴くとき / 八百人の戦士 一つ扉より / 一度に打って出るなり (グリームニルの歌 (二三)) ” (引用部はここまでとする) と表記されているとおりで、そこに見る、

[終末局面と結びつく 432000 とのユニーク・ナンバー]

と [洪水伝承] 絡みで関わるクロノスのありようについてはよりもって問題となるどころが「ある」。

以上のことを部分的に振り返つての指摘 —本当にそうであるのか(批判的視座にてでも) 是非とも検証いただきたいところとして我々全員の生き死にに関わるどころの指摘— をここではなすこととする。

まずもつてしての図解部として

432000 Year (extremely) "unique"

つい先立っての段では【終末に至る期間】にまつわる伝承に見る数値規則として、

[カリ・ユガに見る数値規則とバビロニア洪水説話に見る数値規則 (432000 とのユニーク・ナンバーが [年] との単位系を同一にして登場してくるとの数値規則) に際立っての一致性がみとめられること]

に注意を向けもした。そちら注意喚起なしたことに関わることを訴求すべくも下の

図らを挙げる。

Saturn (Cronus)



**Father Time
(Grim Reaper)**



Symbolism

図は [ローマの神格サトルナス Saturnus] (英語表記サターン Saturn) および [時の神クロノス Chronos] とが結びつけられていることを強調し、そして、彼ら [サトルナス] および [クロノス] が

[死と時間の象徴] ([作物の収穫と命の刈り取りと結びつく鎌] [砂時計])

と往々にして結びつけられていることを示すためのものとなる。

まずもってして上掲図にあっての [上の段] にて挙げている図らの出所と概要の紹介をなすこととするが、それら図らは左右とも英文 Wikipedia の [Saturn (mythology)] 項目 — [サターン (神話)] 項目 — に現行もって記載されているものとなり、 [左側 (の図)] の方が

[16 世紀頃に製作された (とのことである) ローマの豊穡の神サトルナスを描いたものとして (当該の英文ウィキペディア項目にあって) 紹介されている版画]

となり、対して、 [右側 (の図)] の方が

[18世紀から19世紀に活動したロシア人画家である Ivan Akimov との人物の
手になる 1802 年製作の Saturn Cutting off Cupid's Wings with a Scythe
『キューピッドの羽を鎌で刈り取るサターン神』との題の画]

となる。

以上、上の段の図葉らでもってからして [ローマのサターン(サトルナス)神] が
[羽が生えた鎌持つ老人] との似姿で描かれることはよくお分かりいただけること
か、とは思うが (Saturn Cutting off Cupid's Wings with a Scythe との画題でまさに
そうした似姿のサトルナスを描く絵画が存在している)、 そうもしたサターンの似
姿、[羽が生えた鎌持つ老人] は [時の翁 Father Time] との名で欧米圏にて認
知されている、

【 [時間] の体現存在の似姿 】

そのものの似姿「でも」ある。

そのことを示すために挙げもしたのが前掲図にあつての [下の段の図] である。
そちら図の出所も同文に目につくところとしての英文 Wikipedia [Father Time]
項目 ([時の翁] 項目) に掲載されての図、

[ワシントン D.C. にての議会図書館 (ライブラリ・オブ・ kongress; 日本の国会図書館の米国版で世界最大の図書館) の存するジェファーソン・ビルディングに敷設のジョン・フラナガンという 19 世紀美術家の手になる [時計] に供されての像]

となる (: 表記の [時の翁] の米国議会図書館敷設の時計に見る像については英文 Wikipedia [Father Time] 項目で、 “ Father Time is the anthropomorphized depiction of time. [. . .] Father Time is usually depicted as an elderly bearded man, dressed in a robe and carrying a scythe and an hourglass or other timekeeping device (which represents time's constant one-way movement, and more generally and abstractly, entropy). This image derives from several sources, **including the Grim Reaper and Cronus, the Greek Titan of human time, reaping and calendars, or The Lord of Time.** ” (訳として) 「時の翁(ファーザー・タイム) は時の擬人化存在である。時の翁は通例、ローブをまとい、鎌と砂時計、そして、あるいはもの他の時間計測用具(時間が一方向的なものであること、より包括的・抽象的な式ではエントロピー(の増大) それそのものを示すもの) を手に持った姿で描かれる。この [時の翁] の似姿ありようはいくつかの材源、[グリム・リーパー(死神)] および [人間の時間を司る大いなるギリシャのタイタンであるクロノス]、[刈り取りと暦]、言うならば、[時の君主] との材に由来するものである」との説明にてはじまる同 Wikipedia [Father Time] 項目にあつて “ Detail of Father Time in the Rotunda Clock (1896) by John Flanagan, Library of Congress Thomas Jefferson Building, Washington, D.C. ” と紹介されているものでもある)。

上掲図の一目もってしての検討で瞭然としたかたちでお分かりいただけることかとは思うが、時の体現存在、[[命と時間を刈り取る鎌]と[砂時計]を手に持っている時の翁(ファーザー・タイム)]が[ローマのサターン]の描画形態そのものの格好をまさしくも呈している(とのことがある)。

直上図解部をもつてして

[[ローマの神サターン](サトルナス)と[時の体現存在](ギリシャの時の神クロノスとほぼ同じくもの存在)の接合]

がいかように堅い話なのか、ご理解いただけたか、とは思う。

では、何故、そうしたことをくださと解説なしたのか。

「この世界の [結末の付け方] にまつわっての意志表示 (と解されるもの) にも同文のことが関わっている節がある」

とのことがある (と判じざるをえない) からである。

そのことに関しては下の [A]、および [B]、と振っての解説を順々に検討いただければ理解なしていただけるであろう。



フリーメーソンの外部の人間、しかも、非事情通にはおよそ識られているようなことではないが (本稿筆者もフリーメーソンの外部の人間だが、色々と思うところがあって彼らのことを精査していくなかで事情には多少、詳しくもなった [つもり] ではある)、彼らフリーメーソンには [命を刈り取る鎌] [砂時計] [髑髏] を彼らの [瞑想の根本] と結びつけるカルチャーがある。確として根深くもある。

フリーメーソンにあつての

[沈思熟考の部屋] (英語表記は Chamber of Reflection となる)

とのかたちで【イニシエーション】の局面なども込みで利用されている空間、そして、彼らの位階シンボルは

[命を刈り取る鎌] [砂時計] [髑髏]

と濃密に結びつけられているとのことがあるからである (: 無慈悲なる刈り取り手たる [グリム・リーパー; 死神] [時の翁] [サトルナス] の象徴そのものとメーソンの象徴体系は結びつけられている — フリーメーソンが [瞑想の部屋] や [位階シンボル] にかように [命を刈り取る鎌] [砂時計] [髑髏] を用いているかは、そう、皮相的な解説から深いところの解説まで Chamber of Reflection や Weeping Virgin といったキーワードで検索なして表示されてくる英語媒体などを参照することでよく理解いただけることか、とは思う (: ただし、[相応の者達ら] (質的に狂っているか頭の具合が過度によろしくはないかのどちらかであるとのことらをそれらばかりが目立つように撒布している (似非) 神秘主義者や同文にシステムが好むような情報操作個体ら) の手仕事として [賢き向き・真摯誠実を求む向きには軽侮反応しかきたさぬように調整されている節ある煙幕] ばかりしか出てこない日本語のオンライン上情報 (正確には情報未満のジャンクラ) は度外視してそうも述べる) —)。

さて、フリーメーソンにはサタン崇拝 (サトルナスことサターン崇拝ではなく [悪魔の王] たるサタンの崇拝) の陰謀「論」Conspiracy Theory がつきまとっている (頭の具合もよろしくはない、人間的気風もよろしくはないとの陰謀論者の言辞ばかりが目立つがゆえに [陰謀「論」] がつきまとっている] とここでは表している)。

本稿の後の段で詳説することになるが、フリーメーソン自身は

「自分達の神は [グレート・アーキテクト・オブ・ユニバース] (Great Architect of Universe こと GAOTOU) であつてサタンでもなければ、ルシファーでもない」

と強弁し、彼ら自身、一自己欺瞞の問題もあつてか— そうした論法を信じきっている節もあるのだが、ここではきと述べ、フリーメーソンの枢要な象徴がそれ絡みの象徴「とも」なっていると

のローマの神サターン(サトルナス)は現実には悪魔の王サタンと結びつく、純・記号論的に次の観点(i. からiv. と分けても呈示していく観点)から悪魔の王サタンと結びつく存在であるとのことが「ある」(勘違いはいたさくはないのだが、ここでは「フリーメーソンは悪魔崇拝団体である」などとの陰謀論を鼓吹・主張したいの「ではない」。「問題は、質的・記号論的にそうも表せられるようになっているとのことであり、そして、そうしたかたちで人間操作がなされているところの背景・背面にある意図が奈辺にあるかとのことである)。

(以下、何故、サトルナスが悪魔の王のサタンと結びつくのかの理由を順々に挙げていくとして)

i. ローマのサトルナスに対する英語呼称サターン Saturn と悪魔の王の英語呼称サタンは綴り・響きの面から近いところがある(読み手たる貴殿が[サターン](日本にてはテレビゲーム産業のやりようとしてゲーム機の名前にも用いられているサトルナスによって象徴されてきた天体、[土星]の呼称でもある)および[サタン]との名詞を耳にしてそれらが響きとして近くはないというのならば、そうとらえればいいが、とにかくも両者の[響き]が近いと述べることになんら無理はない)。

ii. [冬至]の折、現代社会にはキリスト降誕祭、要するに、クリスマスと呼称される行事が執り行われているその[冬至]の折にてローマ時代、[サトルナリア Saturnalia]との祭りが催されていたとのことが知られている(については和文ウィキペディア[サートゥルナーリア祭]項目や英文 Wikipedia[Saturnalia]項目程度のものでかなり込み入った解説がなされているところとなる ——ちなみにサートゥルナーリア祭では主従転倒、大量の奴隷に支えられての社会構造となっていたローマにて主人が奴隷に礼儀を尽くすとの慣行が見られたとされるが、それはフリーメーソンの理念と一般的に鼓吹されていもするもの、[自由]・[平等]・[友愛]に相通ずる慣行でもあると言えなくもなかろう——)。

ここで臆面もなく言及するが、何故なのか、著名な複数絵画を接合させて見ることで

[冬至にて祝祭が実施されるキリスト降誕](サトルナリア祭が行われていた[冬至]にてクリスマスと呼ばれる祝祭行事が今日実施されているとのキリスト降誕)と

[黙示録の悪魔の王(七つの頭を持つ赤い竜)のにじりより]

の構図がそのままにオーバーラップするようになっているとのことが「ある」——本稿を公開しているサイトの一(現行、どういうわけなのか、「極めて」表示されにくくもなっており、また、さして閲覧されている節もないとのサイト)でも細かくも解説しているが、具体的には美術史にあつて著名なる15世紀の画家であるFilippo Lippi(フィリッポ・リッピ)のAdoration in the Forestとの画題の絵画(現行、「英文の」Wikipediaにあつては同絵画のためだけの一項目が設けられているとのかなり有名な絵画)に見る構図と彼なくして欧州美術史は語れないと
いったほどに著名なる15世紀末から16世紀初頭にかけての版画芸術の巨匠アルブレヒト・デューラーの手になる版画[黙示録]シリーズの一葉を重ね合わせることで[キリスト誕生を祝う聖母マリアの構図]が[黙示録にて悪魔の王がにじりよってくる構図]がオーバーラップするようになっているとのことが「ある」(下の段に、にまつわつての図解も付しておくこととする)——。

そうもして

[赤い竜との形態をとる悪魔の王のにじみより]

と視覚的に歴史的絵画の中で対応するように「させられている」(解説図は下に挙げるが、とにかくも、そうも「させられている」とのキリスト降誕の折、降誕際た

るクリスマス —— 赤い竜との描写が聖書・黙示録にてなされている[サタン]のアナグラム(綴り入れ替えことば)としても成立している[サンタ]なる存在が来訪するなどとの[設定]が付されての行事でもある—— は本来的には異教の祭、**[サターン神に捧げるものとしてのサトルナリア祭]**のキリスト教サイドによる習合・踏襲がなされて今日にあって実施されているものであると広くも指摘されているものとなっている。

(:例えば、本稿執筆時現行時点では和文ウィキペディア[サートウルナーリア祭]項目にての[クリスマスとの関係]の節にて次のような記載がなされているところとなる→(以下、引用なすとして)“紀元1世紀ごろの初期のキリスト教徒がイエス・キリストの誕生日を知っていたという歴史的証拠はない。実際、当時のユダヤ人の法律や慣習では、誕生日は全く記録されなかったと見られている。World Book Encyclopedia (第3巻、p416)によれば、初期のキリスト教徒は誕生日を祝う習慣は異教徒のものだと見なしていた。実際イエスが自分の生涯について何らかの記念に類することを命じたのは、死に際してのことだけだった(ルカによる福音書、22:19)。クリスマスに類する祝祭が初めて記録に見られるようになるのは、イエス・キリストの死後数百年後のことである。…(中略)…この祝祭には現代のクリスマスと同様に贈り物をしたりご馳走を食べる習慣があった”(引用部はここまでとする)。また、同じくもの極めて基本的かつ目につくところとして英文 Wikipedia[Saturnalia]項目にての[Influence on Christmas]の節には次のような記載がなされているところとなる → (以下、引用なすとして)“A number of scholars, including historian David Stephens from the University of Central Florida and Professor Parker-Ducharme from Tulane University, view aspects of the Saturnalia festival as the origin of some later Christmas customs, particularly the practice of gift giving, which was suppressed by the Catholic Church during the Middle Ages.”(訳として)「セントラルフロリダ大の歴史家 David Stephens およびトゥレーン大の Parker-Ducharme を含めての一群の学者らがサトルナリア祭が後のクリスマスの習俗の起源となっている、殊に中世の間、カトリック教会に抑圧されていたところの贈り物の授受の実施といった点でクリスマス習俗の起源となっていると見ている」(訳付しての引用部はここまでとする)

表記の如しで「キリスト教の降誕際(クリスマス)のひとつの淵源はサターン神の祝祭であるサトルナリアにあり」とも指摘されている)。

iii. 上の ii. の点に加えて、である。キリスト降誕祭としての[冬至]にて実施されるクリスマスがサートウルナーリア祭と同じくローマ時代に執り行われていた[ミトラ教]の祭儀よりの習合・踏襲がなされてのものであるとの指摘もがなされていることもあり、そのことがまたサターン(サトルナス)という存在が悪魔の王サタンと結びつくことと関係していると述べられるだけの事由がある。どういふことかと述べれば、一先立ってそれにまつわる図をこれより呈示するとも申し述べたわけだが— [[キリストの降誕の画]と[悪魔の王のにじりよりの画]の視覚的対応関係]などが極めて著名な作品らにあって見受けられるとのことがこの世界にはありもし、またもってして、同じくもの不快なる人を食ったような対応関係の環には往古ローマのミトラ教の遺物との接点もがみとめられるとのことまでもが「ある」のである(それがゆえに繰り返すが、「キリスト降誕祭としての[冬至]にて実施されるクリスマスがサートウルナーリア祭と同じくローマ時代に執り行われ

ていた [ミトラ教] の祭儀よりの習合・踏襲がなされてのものでもあるとの指摘がなされていること、そのことがサターン(サトルナス)という存在が悪魔の王サタンと結びつくことの判断に関わる」ことになりもする。詳しくは下に呈示の図解部を参照されたい)。

(:[キリスト教の冬至の折の祭り(クリスマス)と往古ローマのミトラ教祭儀の関係]については極々基本的なところより「それで充分であろう」と判じて引用するが、英文 Wikipedia [Mithras in comparison with other belief systems] 項目 ([ミトラと他の信仰体系の比較] 項目) にあつては次のような記載がなされている、多少、[ミトラ教に対するキリスト教の踏襲見解] に批判を呈するようなかたちでながらも次のような記載が「現行」なされている → “ **It is often stated that Mithras was thought to have been born on December 25. But Beck states that this is not the case. In fact he calls this assertion "that hoariest of 'facts'". He continues: "In truth, the only evidence for it is the celebration of the birthday of Invictus on that date in Calendar of Philocalus. Invictus is of course Sol Invictus, Aurelian's sun god. It does not follow that a different, earlier, and unofficial sun god, Sol Invictus Mithras, was necessarily or even probably, born on that day too."** Unusually amongst Roman mystery cults, the mysteries of Mithras had no 'public' face; worship of Mithras was confined to initiates, and they could only undertake such worship in the secrecy of the Mithraeum. Clauss states: "the Mithraic Mysteries had no public ceremonies of its own. The festival of natalis Invicti [Birth of the Unconquerable (Sun)], held on 25 December, was a general festival of the Sun, and by no means specific to the Mysteries of Mithras." ” (訳として)「ミトラ神はよく12月25日に生まれた(キリスト降誕祭が催される[冬至]の折にて誕生した)とよくも言われている。が、ベック (訳注: 英文 Wikipedia にて出典表記されている資料の著者となる Roger Beck という人物) は「これは問題にならぬ」という。事実として彼ベックはこのミスラにまつわる世間的断定のありようをして [事実群の中の極めて言い古されたもの] と表している。に続けて、彼ベックは「実際、『フィロカルスの暦』 (訳注: 4世紀成立とされる装飾写本、The Chronography of 354 にて収録の暦) にあつてのインビクタス神の祝祭にまつわる記述にしか(同じくものことの)典拠がない」とも言う。この場合のインビクタスとは無論、(ローマにて崇められていた)アウレリアヌス帝期の太陽神ソル・インビクタスのことを指す (訳注: アウレリアヌスは3世紀のローマ皇帝であるから、キリスト降誕の折より後の存在とのことでキリスト教降誕祭との一致性は問題にならないとの文脈であろう — だが、このレトリックには問題がある。というのも、初期キリスト教勢力にて何時、冬至の祭りが祝われ出したのが模糊としており、また、キリスト降誕の日付上の証跡がなんらないことに変わりはなんらないからである—)。これは太陽神ソル・インビクタスと異なる、より初期のローマの非正規の太陽神たるソル・インビクタス・ミトラが必ずしも、あるいは、多分の問題として同じくもの日に生まれたとのことに当てはまるところではない。ローマ人の間にあつての秘儀実施カルトの[ミトラ神の密儀]にあつては公的な顔というものが無い。ミトラの崇拝は一部の秘儀参入者に限定されており、ミスラ教関連施設(ミスライウム)にての崇拝に限られていたことである。対してクラウス (注記: 表記ウィキペディア項目にて出典表記されている著作の著者としての

Manfred Clauss という人物) は「ミトラ教は何ら公的な祭儀を持っていなかった。冬至の折に催される [征服されざりしところの太陽] に対する祝祭 (注記: 日照の力が弱化的極を見て、それより回復に転ずるとの一般的な冬至の折柄に対する理解に因るところの祝祭かとは思われる) はミトラ教のそれに固有のものではなくより一般的なものであった」と述べている (引用部はここまでとする)

繰り返す。

キリスト教降誕祭がミトラ教祭儀との習合しているとされてきた (この際、どちらが本地 (オリジナル) でどちらが垂迹 — オリジナルの影響を受けての仮の現われ — かの別は問題ではない) とのその一事がサトルナスと悪魔の王サタンとの接合性問題に何故もってして相通ずるのか。

直上にてても委細省きながらも言及したところとして

[美術史にあつて著名なる **Filippo Lippi** (フィリッポ・リッピ) の **Adoration in the Forest** との絵画 (現行、英文 Wikipedia にあつて同絵画のためだけの一項目が設けられているとの有名な絵画) に見る構図と著名なるアルブレヒト・デューラーの手になる版画 [黙示録] シリーズの一葉を重ね合わせることで [キリスト誕生を祝う聖母マリアの構図] が [黙示録にて悪魔の王が首をもたげてくる構図] がオーバーラップするようになっている]

とのことがあるだけではなく (それ自体からして実にもって [奇っ怪] とのことではある)、ミトラ教遺物 (にての神棚のように様式化された構図ととれるもの) を介して

[**Fra' Filippo Lippi** (フライヤー (修道士) たるフィリッポ・リッピ) の 15 世紀絵画 **Adoration in the Forest** との絵画に見る構図 (現行、英文 Wikipedia にあつて同絵画のためだけの一項目が設けられているとの有名な絵画) にて描かれるキリスト降誕の構図が (画家フィリッポ・リッピがそれを目にしていたとは考えがたいとの) [蛇の杖を掲げる異教神ミトラの典型的レリーフ] (発掘によって再発見されたレリーフ) と視覚的に重なるようになっている]

とのこと「も」があるからである。そちらもまた本稿を公開することにしたサイトの一 (どういふわけなのか「極めて」検索エンジンに表示されにくくなっており (煮詰める過程でどういふ料簡でどういふ筋目の輩がそういうことに助力しているのかは不快な広告産業領域に配置された相応の家畜との兼ねあいでおおよそ押し量りがなせるとのありようとなっている)、またもってして、顧みられることもないと判じているとつい先ぞの段で述べもしたとのサイト) にても具体例挙げて解説していることとなりもし、

[[古代ミトラ教の再発見された典型的レリーフ構図にての蛇の杖を掲げる異教神の構図] と [ルネサンス期の著名絵画 **Adoration in the Forest**] にてみとめられる構図がそのままにオーバーラップするようになっている]

とのことがあるのだ (細かくもは下の図解部を参照されたい)。



Adoration in the Forest
(Filippo Lippi / 1459)
 フィリッポ・リッピの聖母子像



The Apocalypse
(Albrecht Durer / 1498?)
 アルブレヒト・デューラーの版画
 『黙示録』に掲載の構図

【上掲図左】:美術史にあつて著名なる15世紀の画家である Filippo Lippi(フィリッポ・リッピ)の Adoration in the Forest との画題の絵画 (同画、現行、英文の Wikipedia にあつては同絵画のためだけの一項目が設けられているとのかなり有名な絵画となる —英文 Wikipedia[Adoration in the Forest (Lippi)]項目にあつて Adoration in the Forest is a painting completed before 1459 by the Carmelite friar, Filippo Lippi, of the Virgin Mary and the newly born Christ Child lying on the ground, in the unusual setting of a steep, dark, wooded wilderness. **It was painted for one of the wealthiest men in Renaissance Florence, the banker Cosimo de Medici.** In later times it had a turbulent history. と記載されている画ともなる—)。

【上掲図右】:彼なくして欧州美術史は語れないといったほどに著名なる15世紀末から16世紀初頭にかけての版画芸術の巨匠アルブレヒト・デューラーの手になる版画[黙示録]シリーズの一葉。

以上、呈示の両図像を重ね合わせることで[キリスト誕生を祝う聖母マリアの構図]が[黙示録にて悪魔の王(多頭の竜ないし多頭の蛇であるサタン)がにじりよってくる構図]とオーバーラップするように「なっている」とのことがある。



"rediscovered"
Mithraic relief
(2-3th century AD?)
 往古に潰え再発見されたミトラ教のレリーフ。(捏造物ではないと看做されており)2-3世紀作成のものだと推定されている

英文 Wikipedia[Mithraic mysteries]項目にも同様のレリーフが呈示されている

ところの往古ローマ時代にて信仰された異教、ミトラ教の典型的なレリーフ。どれくらい呈示のレリーフが汎用的な構図であったのか、また、そちら発掘されて「再」発見されたとされる遺物が既に15世紀のフィリッポ・リッピ(の作者)やアルブレヒト・デューラー(の作者)の目に入るようなかたちでも「再」発見されていたのか、そして、異教シンボルたる同ミトラ教レリーフをわざわざ模倣してここで取り上げもしている作品ら — 絵画 Adoration in the Forest および木版画 the Apocalypse series — を芸術家リッピやデューラーが構築する必要があるかそもそもあったのかが問題になる。



The Adoration, with the Infant Baptist and St. Bernard
(Filippo Lippi / 1459)
フィリッポ・リッピの聖母子像



The Apocalypse
(Albrecht Dürer / 1498?)
アルブレヒト・デューラーの版画
『黙示録』に掲載の構図



Mithraic relief
(2-3th century AD?)
往古に潰え再発見されたミトラ教のレリーフ。(捏造物ではないと看做されており) 2-3世紀作成のものとは推定されている

Details

【構図上部】



【構図左下部】





[delivered or only-co-incident?] question arise .

(問題となる構図上の類似性をまとめもしての図。起点となる視覚的類似性を呈しての[後光が射している神](ミトラ教の神およびローマ帝国滅亡後、それに取り替わったキリスト教の神)を軸にして画中の人物が似たようなセクションに配されている中で【救世主誕生をもたらした処女懐胎のマリア】←→【救世主ににじみよる多頭の爬虫類としてのサタン】/【救世主誕生をもたらした処女懐胎のマリア】←→【絡み合う蛇の杖を掲げるミトラ教の神格】←→【救世主ににじみよる多頭の爬虫類としてのサタン】との構図的類似性が[記録的事実]の問題として見てとれるようになっていく)

iv. [冬至]にあつてのサートゥルナーリア祭が同神を祝してのものであるとのサトルナス(サターン)は悪魔の王としてのサタンと記号論的に相通ずる側面を有してもいる。

第一。サターンというのは古代ローマにて[文明の恩人]として崇拝されていた存在である(時間の費消を厭い、極々皮相的なるところから引けば、和文ウィキペディア[サートゥルヌス]項目にて(現行記載内容より引用するところとして)“クロノスと同一視された後の神話では、ユーピテルにオリンポスを追放された彼は地上に降り立ち、(サトルナスは)カピトリヌスの丘に一市を建設してイタリアの王となった。そして当時、未開野蛮の民だった人々に農業やブドウの木の剪定などを教え、法を發布して太古の黄金時代を築いたという(文化英雄)”(引用部はここまでとする)と記載されているところである)。他面、サタンをエデンの誘惑の蛇と比定する見解から見れば、また、サタンたるエデンの蛇は人間に[知恵と文明を授けた存在]となりもする。

第二。サトルナス(サターン)は天の主催神となった神(自らの息子たるゼウス神)との戦いに敗れて[地の奥深くものタルタルスの領域]にて幽閉されていると

神話が語る存在である（英文 Wikipedia[サートウルヌス]項目にて（現行記載内容より引用するところとして）“ In a vast war called the Titanomachy, Zeus and his brothers and sisters, with the help of the Hecatonchires, and Cyclopes, overthrew Cronus and the other Titans. Afterwards, many of the Titans were confined in Tartarus, however, Atlas, Epimetheus, Menoetius, Oceanus and Prometheus were not imprisoned following the Titanomachy. ”（訳として）「ティタノマキアと呼ばれる規模すさまじい戦争にてゼウスと彼の兄弟姉妹らはヘカトンケイル、サイクロプスらの援助あってタイタン・クロノス（注：ローマにおけるサトルナス）と他のタイタンらを放伐した。結果、多くのタイタンらがタルタルスの領域に繋ぎ止められることになったが、アトラス・エピメテウス・オケアヌス・プロメテウスらはティタノマキアに連座して獄に繋がれることはなかった」と記載されているところである）。他面、サタンは 一子なる主催神との戦いか父なる主催神との戦いかに差分もあるのだが一 神に敗れて[地の底たる地獄]に幽閉されているとの設定が伴っている悪魔の王である（本稿こここれに至るまで聖書の黙示録にあっての同じくものことにまつわっての記述を引いているとおりである）。

（何故、サトルナスが悪魔の王のサタンと結びつくのかとのことの原因にまつわっての i. から iv. と分けもしての部はここまでとする）

【ローマのサトルナス(サターン)神】（フリーメーソンのシンボル体系と結びつく髑髏・砂時計・鎌にて表象される時の体現神格クロノスと同一視される存在、それがゆえに[432000年の終末サイクル]を呈示する洪水伝承とも接合する存在）と【悪魔の王サタン】を結びつける事由について i. から iv. と振っての解説をなしてきたとして、である。

以上の流れからご察しいただけるかとは思うのだが、

【サトルナスの象徴】

と結びつけての組織構築・運営がなされている（先述）とのフリーメーソンに

【サタン崇拝】

にまつわっての陰謀論がつきまとっていることは

（ここまで指摘してきた）

【サトルナスのサタンとの多重的結びつき】

を顧慮してもできすぎている（：だがもってして 一（愚劣な、そう、知的程度が異常異様に低いとの意味で愚劣な虚偽欺瞞を含んでの陰謀論的言辞の撒布者に言論を汚されぬようにとの配慮もあって）繰り返しておくが 一 本稿それ自体では「フリーメーソンが悪魔主義陰謀団である」などとの陳腐なる陰謀論（とどられよう話）を唱導・鼓吹しようというわけではない。同じくも繰り返しておくが、「この際、[人形・駒としての範疇に留まってる者達がなにをどう考えているか（できあがった頭で崇拝している気になさしめられているか）]は問題にならない、代わって、どうしてそのようなことがあるのか、そのことが（未来という時制の問題として）何に通じているかとのことこそが重要視してしかるべきことになりもする（と強調したい）」）。



サターン(土星)を体現し、ギリシャの時の神にも接合するローマのサトルナス神に悪魔の王

サタンとの記号論的結びつきがあるとして、である。

[サターンことサトルナスが元来、蛇崇拜の神である、さらに言えば、その延長線上にサタンとつながるアバドンという存在との結びつきがある]

との観点がフリーメーソンの成員ともされる向きの手仕事ともされる近代の著作からして(後述するように「他の先賢著作よりの出典明示せじもの剽窃」の臭いも如実に伴うのだが)言及されていることがある。

下の引用部を参照されたい。

(直下、Project Gutenberg にて全文公開されている著作 OPHIOLATREIA, OR SERPENT WORSHIP『オフィオラテレイアすなわち蛇崇拜』(1889 年に出版されての著作)よりの原文引用をなすとして)

The ancients had a notion that when Saturn devoured his own children, his wife Ops deceived him by substituting a large stone in lieu of one of his sons, which stone was called Abadir.

[...]

Abadir seems to be a variation of Ob-Adur, and signifies the serpent god Orus. **One of these stones, which Saturn was supposed to have swallowed instead of a child, stood, according to Pausanias, at Delphi. It was esteemed very sacred, and used to have libations of wine poured upon it daily; and upon festivals was otherwise honoured. The purport of the above was probably this: it was for a long time a custom to offer children at the altar of Saturn; but in process of time they removed it, and in its room erected a stone pillar, before which they made their vows, and offered sacrifices of another nature. This stone which they thus substituted was called Ab-Adar, from the deity represented by it. The term Ab generally signifies a father, but in this instance it certainly relates to a serpent, which was indifferently styled Ab, Aub, and Ob. Some regard Abaddon, or, as it is mentioned in the Book of the Revelation, Abaddon, to have been the name of the same Ophite god, with whose worship the world had been so long infected. He is termed Abaddon, the angel of the bottomless pit—the prince of darkness. In another place he is described as the dragon, that old serpent, which is the devil, and Satan. Hence the learned Heinsius is supposed to be right in the opinion which he has given upon this passage, when he makes Abaddon the same as the serpent Pytho.**

(細かくも補いもしての拙訳として)

「古代人らは

[サターン(サトルナス)が我が子らを喰らった折、彼の妻たるオプス神(注:ギリシャ神話にあつてのタイタン・クロノスの妻となっているレアー神に対応するローマの大地母神)が彼サトルナス(タイタン・クロノス)をたばかつて[石]を子と思わせて子の代わりに食べさせた]

との観点を有している。

…(中略)…

そこにみる[石]は Abadir と呼ばれるものとなっている。この場合の Abadir とは Ob-Adur の派生語とも受け取られ、その Ob-Adur は(往古の)蛇の神オラスを示すもの「でも」ある。

サターンが我が子と思つて呑み込んだこれら[石]のひとつはパウサニアス(注:ローマ期(2世紀)にあつてのギリシャ出身の著名な地理学者/主著は日本語にも訳されて刊行されている Description of Greece『ギリシャ案内記』)によるとデルフィにて存在しているとのことである。それはとても神聖なる

ものとして祝されていたものとなり、御神酒(おみき)としてのワインを常日頃注がれ、いざ祭りとなれば、よりもって祝されたものとなっている(とされる)。そのことに鑑みるに、おそらく、サトルナスが呑み込んだとされる「石」がゆえにこのようなことがなされていた(のであろう)。「土星の座として子供らをそこに(生け贄として)供する慣習が長期にあってそこにあった。だが、それを除く過程で彼ら(古代デルポイのギリシャ住人)は別の石の柱を建立し、その前で誓約をなして他の自然の産物を生け贄へ供することとなった。この(サトルナスことギリシャ神クロノスの呑み込んだ石に)代わって建立されることになった石はそれが表象する神に由来するところとして「アブ・アダール(Ab-Adar)」と呼ばれるものだった。そこに見るAbとの語は一般的に「父」を表象するが、この場合にてはおそらく「蛇」、違い乏しくもAbあるいはAubそしてObと表されての蛇に由来するところのものであろう。幾人かの向きはこれをしてアバドン(「Ab」addon)、すなわち、新約聖書にあっての黙示録に登場する長らくも世界がその崇拜風潮に冒されていたとの蛇崇拜の神と同じくもの神の名前ととらえている。アバドンとの語を与えられての同存在は闇の皇子、底無し穴の天使の名となる(訳注:実際に聖書の黙示録9章11節にアバドンという存在が「底無し穴の王」として登場しているとのことがある)。別の場所では同存在は竜あるいは古き蛇たる悪魔、サタンとして形容されてきた存在である。そのうえで教養を有していたハインシウス(Heinsius)はアバドンをしてピュートーン(訳注:デルポイで崇められていた蛇の怪異)と同じ存在であるとの意見を呈していたことは正しいのであろうと思われる」

(以上、補つてももの訳を付しての引用部とする 一※一)

(※直上引用部にまつわたの「長くもなつての」補足表記として
→

表記の著作 **OPHIOLATREIA, OR SERPENT WORSHIP**、正式名称は極めて詰め込み過ぎの風がある、

Ophiolatrea: an account of the rites and mysteries connected with the origin, rise, and development of serpent worship in various parts of the world, enriched with interesting traditions, and a full description of the celebrated serpent mounds & temples, the whole forming an exposition of one of the phases of phallic, or sex worship

との表題の著作はアマチュアの比較神話学者にして性的文学の挿絵家・著者などをもやっていたとのことが英文 Wikipedia にて一項設けられて紹介されている Edward Sellon との向きになる著作なのか、あるいは、同文に

Wikipedia に一項設けられて紹介されている Freemason として知られていたアマチュアの比較神話学者である Hargrave Jennings の著作なのか、版權の問題として判然としないとのことがある(望見するに Edward Sellon に由来するオリジナルとなった著作をフリーメーソンの Hargrave Jennings が前者の死後に(改訂を加えてか)刊行したものと解される)。

そして、著者からして模糊としているとのものであることを差し引いて見て「も」同じくもの著作には問題がある。

第一点目。同・引用元著作に関しては[蛇崇拜]の多くを古代の男性器崇拜の問題に帰着させ、結局のところ、蛇崇拜にまつわる怪奇性をその程度の問題で説明しきらんとしている側面が如実に伴っており、そこからして自ずとしての限界が透けて見えるとのことがある(穿てば問題を矮小化させるとのそのこと自体が狙いともとれる)。

第二点目。言い様の典拠として歴史的著述家(パウサニアスやハインシウス

ス)の名が同著にては挙げられているのだが、それが果たして文献的事実の問題なのか、情報収集に慣れていないとの一般人には後追い確認しづらいと
のことがあり(現代社会でも後追い確認しがたいとのものばかりを典拠にしている
節がある)、ゆえに、[調査意欲ある向きにとっても信憑性との点で[曰く言い
難い。]と受け取られかねない]とのことが同著にはある ("seems" unreliable
because of lack of philological evidences との問題が伴う)。

フリーメーソン手仕事とされる表記著作には以上二点の如き欠陥性の介在
「も」観念されるのだが、ただしもって、である。表記の著作 (OPHIOLATREIA,
OR SERPENT WORSHIP) にあつてのここで引用なして問題視しているとの、

「クロノス(サターン)が自分の子だと思つて[石]を喰らっていた → その
[石]は[Abdir]とも呼ばれ、それは蛇の神 Orus の派生語[Ob-Adur]と相
通ずる蛇崇拝と結びつくものである → サトルナスが喰らつたその[石]
(Abdir)のひとつはパウサニウスによると(古代ギリシャの)[デルポイの蛇
崇拝]の(かつての)御神体と関わるものである → [デルポイの蛇崇拝]
の対象となるパイソンについては蛇崇拝・そして、Ab との蛇を意味する言
葉を介してアバドンともサタンと相通ずるようになっている(との解釈がなさ
れているし、それは妥当と解される)」

との流れでの記載内容については信憑性との面で重きもって見て然るべきと
の側面が伴う。

他に同じくものことを記載している真つ当な古典が存するとのことがあるから
である。につき、(極めて悪質なことに表記著作の中それ自体では出典紹介さ
れて「いない」わけだが)、たとえば、同文に Project Gutenberg より全文ダウン
ロードできるとの著作である、

A New System or Analysis of Ancient Mythology との著述 (同著著者は
Jacob Bryant、英文 Wikipedia [Jacob Bryant] 項目表記によると 18 世
紀から 19 世紀にあつて他を逸して屹立していた碩学であつたともされる(
"the outstanding figure among the mythagogues who flourished in the
late eighteenth and early nineteenth centuries" と表記される) 神話学を専
門にしていた近代スコラ学分野にての大家のヤコブ・ブライアントという人
物となる)

にあつて[ほぼ同文のこと]が記載されているとのことがありもすることが重んず
べきこととしてあるのだ(: はきと述べ、ここで問題視していることが表記されて
の部に関しては著者さえも模糊としている(筆名が用いられているとのことでは
なく版權・帰属関係すら模糊としている)とのこと、先述した OPHIOLATREIA,
OR SERPENT WORSHIP との著作にあつて[出典を挙げないで先賢手仕事と
なる A New System or Analysis of Ancient Mythology (1807) との著作をその
まま文言大量流用するとの式で[剽窃] (plagiarism) をなしている]とのやりよう
が具現化している。日本の大規模カルトの成員とこれまた同様に[相応の道]
(何ら自分の頭で考えないとの途だ)を歩むだけの内面しか有していないと透
けて見える、空っぽの多くのフリーメーソンの成員に本質的なところでは本当
の創造的・自律的思考など期待しようがないからこそ、多く他より盗み奪うこと
しかなさぬような筋目の「彼ら」には深く考えることなぞおよそ出来ないからこそ、
そうした団体の成員の輩の手になる(とされる)著述としてそうもなっているの
ではないかと私的にはとらえているのだが、それは置く)。

同じくものことについて

(以下、Project Gutenberg サイトより全文ダウンロードできるところの A New
System or Analysis of Ancient Mythology Vol.II. (1807) にての OB, OUB,

PYTHO, SIVE DE OPHIOLATRIA にての節より引用なすところとして
 “ But Ops, and Opis, represented here as a feminine, was the serpent Deity, and Abadir is the same personage under a different denomination.
 [464]Abadir Deus est; et hoc nomine lapis ille, quem Saturnus dicitur devorasse pro Jove, quem Græci βαϊτυλον vocant.—Abdir quoque et Abadir βαϊτυλος. Abadir seems to be a variation of Ob-Adur, and signifies the serpent God Orus. One of these stones, which Saturn was supposed to have swallowed instead of a child, stood, according to [465]Pausanias, at Delphi. It was esteemed very sacred, and used to have libations of wine poured upon it daily; and upon festivals was otherwise honoured. The purport of the above history I imagine to have been this. It was for a long time a custom to offer children at the altar of Saturn: but in process of time they removed it, and in its room erected a στυλος, or stone pillar; before which they made their vows, and offered sacrifices of another nature. This stone, which they thus substituted, was called Ab-Adar, from the Deity represented by it. The term Ab generally signifies a [466]father: but, in this instance, it certainly relates to a serpent, which was indifferently styled Ab, Aub, and [467]Ob. I take Abadon, or, as it is mentioned in the Revelations, Abaddon, to have been the name of the same Ophite God, with whose worship the world had been so long infected. He is termed by the Evangelist [468]Αβαδδων, τον Αγγελον της Αβυσσου, the angel of the bottomless pit; that is, the prince of darkness. In another place he is described as the dragon, that old serpent, which is the devil, and Satan. Hence I think, that the learned Heinsius is very right in the opinion, which he has given upon this passage; when he makes Abaddon the same as the serpent Pytho. [469] ”

との式での[ほぼ同文のこと]が

[事細かな典拠]

を挙げながらも遙かに真つ当な著述 —神話学の大家にして近代スコラ学の大家とされるヤコブ・ブライアントの著述— に典拠付で解説されている ([464]から[469]は[ギリシャ語表記の事細かな典拠(Source)の紹介番号となる]とのことがある(ことまで筆者の方で調査して特定しているところとしてある。ただし、以上引用部については即時訳に面倒が伴う、時間の費消に過ぎると判じたために「先にての **OPHIOLATREIA, OR SERPENT WORSHIP** からの引用部とほぼ同文のことが記載されているところの」表記引用部に対する訳は付さないこととする)。

ゆえに、ここにて指摘している、

[学者といった筋目の人間からは後ろ指を指されようとの

OPHIOLATREIA, OR SERPENT WORSHIP 『オフィオラテレイアすなわち蛇崇拜』との著作に伴う欠陥性]

を顧慮したうえでも直上、引用なしたところの書かれよう —(クロノス神転じての)サターン神にはデルポイ蛇崇拜を介してのアバドンやサタンとの接合性が観念されもするようになっているとの書かれよう— については【古文献・古人の言及がなされていることである】【古代の習俗習慣に関わる】との意では信憑性が伴うとの旨、再度もってして強調しておく)

引用部にまつわっての補足表記が長くもなったが、蛇崇拜関連著作よりの引用部それ自体にみとめられることより問題になるのは

「サターンことサトルナス(の吐きだしたその象徴たる石)が蛇崇拜の思潮と結びつくとの指摘、かつ、そのサターン・サトルナス(に由来する石)にまつわっての[蛇崇拜の思潮](デルポイにて実施されていた蛇崇拜の思潮)が —デルポイの蛇崇拜とアバドンという

黙示録登場の悪魔との接合性などあって— [サタン] と結びつくとの指摘までもがなされていた」

とのことである（ローマの土星の体現神格サターンが悪魔の王サタンと結びつくとの指摘はまったくもって見受けられないのだが、表記の引用部にあってはそのことに通ずることが異彩を放つところとして言及されている）。

上のような引用部にみとめられもする観点については —同じくものがいかほどまでに一般性を有しているのかには疑義もある中でながらも、そして、キリスト教的思考法にどっぷり首まで浸った向きらによる古代ギリシャの神らを悪魔の類と結びつけようとする意図が介在している可能性も否定しきれはしない中ながらも— 「はきと言える」ことがある。同観点が(ここB. の段に入る前に)A. の段にて挙げていたi. からiv. のことら —(ローマ神格サトルナス(サターン)と悪魔の王サタンの間の(明示的繋がり合いではない中ながらも)視覚的繋がり合いについて解説してきたとのi.からiv.のことら)— とびたりと符合するようになっている、「各々、別側面にて成立している」ことながらも「びたりと符合するようになっている」とのことが「はきと述べられる」ようになっているとのこと、そのことが問題になる、と述べたいのである(Aの段、i. からiv. にて言及してきたことと直上までにて引用してきたことは根拠の面で完全に別個のものとして成り立っているわけであるが、帰結の面では符合している)。

ここまでにて

【ナンバー・432000 と結びつく複数宗教・複数伝承にみとめられる[終末]に通ずるサイクル】 → 【432000 年などと伝わるバビロン「前」洪水時代の終わりを告げたと伝わるクロノス神】 → (ギリシャのクロノス神) → 【ローマのサトルナス(サターン)】 → (多層的結びつき) → 【悪魔の王サタン(エデンの園の誘惑を奏功させて黙示録の[終末]の因ともなる原罪をもたらしたなどともされる古き蛇)】

との繋がり合いについて解説したことになる(疑わしきには再度、直前までの内容をよく検証いただきたい次第でもある)。

従前摘示事項の再提示部はここまでとする

以上、繋がり合いの問題について言及したうえで書くが、次の各点らが「さらにもってして」問題になる(【黄金の林檎】や【エデンの禁断の果実】に通ずるところの寓意混入との式で「さらにもってして」問題になる)との判断があった、ゆえにこそ、最前までの振り返りをなしてきた次第でもある。

「さらにもってして」問題となりもすること、指摘せんとしている事柄らとして

・クロノス神がバビロンの王の夢に現われたとされる [432000 年のサイクル] と結びつく洪水伝承 — (ペロソス(ギリシャ語を解したとされるバビロン神官)の古文献内容、それを逸文形態(引用形態)でキリスト教初期識者エウセビオスが今日に伝えているがゆえに伝存しているとの本稿にて先だって取り上げてきた洪水伝承) — 以外の古代中近東の洪水伝承が近代になって「再」発見されたものとして存在しており、そちら別の洪水伝承のこと「をも」本稿前半部ではかなり細かくも問題視してきたとの事前経緯がある。

それは

【『ギルガメシュ叙事詩』の中に含まれているウトナピシュティムという人物が登場

する洪水伝説]

にまつわっての話となり、同じくもの洪水伝説（ギルガメシュ伝承に内包されるウトナピシュティムという人物が登場してくる洪水伝説）が古代ギリシャに由来する、

【ヘラクレス 11 功業の黄金の林檎の探索の物語】

と多重的な類似関係を呈しているとのことまで本稿では入念に指摘しもしてきたとの経緯がある——1.【『ギルガメシュ叙事詩』内包の洪水伝承に見る主人公ギルガメシュの目的もヘラクレスの 11 功業の目的物も双方ともどもに[不死]と結びつく】、2.【『ギルガメシュ叙事詩』内包の洪水伝承もヘラクレス 11 功業も双方共々に大洋の彼方、世界の果て(ワールド・エンド)を目指しての英雄(ギルガメシュおよびヘラクレス)の冒険が描かれているとのものである】、3.【『ギルガメシュ叙事詩』内包の洪水伝承もヘラクレス 11 功業も主人公の目的達成に際して蛇(状の存在)との一悶着が生じている(ギルガメシュは不死の霊薬を蛇に奪われ、ヘラクレスは不死と結びつくとの神話が数多伝わる黄金の林檎を得ようとする過程で百の頭を持つ蛇ないし竜の類であるラドンと闘ったと伝わっている)】、4.【『ギルガメシュ叙事詩』内包の洪水伝承もヘラクレス 11 功業も、(ヘラクレス 11 功業で探索されていた[黄金の林檎の園]を洪水で大洋に没したとされる伝説の陸塊アトランティスの同等物と見る見方に照らし合わせた場合)、双方共に[往古の文明滅尽を招いたとされる洪水]と結びつくとのものである】、5.【『ギルガメシュ叙事詩』内包の洪水伝承もヘラクレス 11 功業も主人公に類似性がみとめられる。すなわち、ギルガメシュもヘラクレスも「半分神の血を引くとの存在(デミ・ゴッド;半神)にあたり」「狂乱の態に陥ったことがある存在であり」「獅子をいなし、獅子の皮を被ったと伝わる存在である」との共通項がみとめられる】とのことらを本稿では従前摘示してきたとの経緯がある——(出典(Source)紹介の部 63 (3)などを参照のこと)。

また、(ヘラクレス第 11 功業と近似しているとの)『ギルガメシュ叙事詩』に見る洪水伝承というものは、と同時、

【エデンの誘惑、次いで失樂園(樂園喪失)をメイン・モチーフとしているとの著名古典であるミルトン『失樂園』に見る、[アビスを飛行渡航するルシファーの物語](最終的に林檎でもって人類を墮落させて失樂園をもたらすことになったとされる[ルシファーのアビス;深淵の単身飛行の物語])】

とも——「時期的に奇怪であると解されるかたちで」(ミルトン『失樂園』執筆時には『ギルガメシュ叙事詩』は再発見されていなかったために「時期的に奇怪と解されるかたちで」)——多重的接合関係を呈しているとのものであることをも本稿前半部では指し示さんとしてきたとの従前経緯がある——1.【『ギルガメシュ叙事詩』内包洪水伝承もミルトン『失樂園』も最終的に[不死]が奪われるとの流れを見せている(典拠挙げて先述なしのように樂園エデンよりの追放は人間が不死を奪われた過程と見る見方もある)】、2.【『ギルガメシュ叙事詩』内包の洪水伝承もミルトン『失樂園』も[不死の喪失]をもたらした存在が[蛇]の形態を取っている】、3.【『ギルガメシュ叙事詩』内包の洪水伝承もミルトン『失樂園』も(ミルトン『失樂園』にあってその中に(ギルガメシュ伝承のような洪水伝承が伝わっている理由がそれに求められてもいるとの)[黒海洪水伝承]や[黒海洪水伝説]との属地的結びつき、水流の海峡貫通にまつわる表現上の結びつきを見出した場合に)双方ともどもに[滅尽に結びついた洪水]絡みのものとなるとのことがある】、(4.【古代中東のエンリル神なる多神教の神による人類を滅せようとした洪水に言及しての『ギルガメシュ叙事詩』内包の洪水伝承もミルトン『失樂園』も人間存在に対する神の肅清(と限定的な赦し)をテーマとしているものでもある / ([エデンの園の禁断の果実]に[黄金の林檎]との接続関係がある(とされている)ことを顧慮すると)『ギルガメシュ叙事詩』がそれと結びつくヘラクレスの 11 功業(黄金の林檎の取得を目指しての冒険)

を介しての『ギルガメシュ叙事詩』とミルトン失樂園の繋がり合いもが観念されることになる、といったこと「も」がある】)とのことから本稿では従前摘示してきたとの経緯がある——(出典(Source)紹介の部 57(3)以降の長くもなつての解説部を参照のこと)。

以上、従前摘示事項を細々と繰り返して言及なしもしたとの、

【『ギルガメシュ叙事詩』内包の洪水伝承とヘラクレス第 11 功業およびミルトン『失樂園と』の繋がり合い】

については 一本稿の内容を理解しているとの向きには食傷の感をもたらす指摘とはなろうが— であるから重要なこととして、

【ブラックホールと結びつく繋がり合い】

となるもの「でも」ある(比較対象として俎上にのぼるミルトン『失樂園』の特定セクションが【ブラックホール(現代科学にあってブラックホールと呼ばれているもの)との質的近似物である(とのことを従前解説してきた)[アビス](深淵)絡みのセクション】とまさになつている(出典(Source)紹介の部 55から出典(Source)紹介の部 55(3))とのことが問題なら、同じくものことがよりもつて問題になるとのこととして『ギルガメシュ叙事詩』のその意で問題となるセクションがヘラクレス 11 功業の黄金の林檎取得の物語と結びついている、そこに見る【黄金の林檎】といえ、一本稿で厭となる程に解説してきたこととして— LHC 実験にあってのブラックホール探索挙動と結びつくようにさせられているものであるとのことが現実に確とありもするとのことが挙げられる(LHC 実験では ATLAS ディテクターという検出器で【(発見が望ましいと強弁される)「安全な」ブラックホール】の探索もが行われているが、そこに見る ATLAS 検出器がその名を冠せられているとの巨人アトラスは【黄金の林檎】の所在地を識る存在としてヘラクレス 11 功業に登場する巨人でもある。またもつてして、LHC 実験では ATLANTIS とのイベント・ディスプレイ・ウェアでブラックホールを検知する可能性があるとして銘打たれもしているが(出典(Source)紹介の部 35)、その ATLANTIS の名称由来となつている古の陸塊アトランティスは【大洋の彼方の黄金の林檎の園】と結びつくとの見解が呈されてきた場所ともなる(出典(Source)紹介の部 41 など))。

表記のような式でバビロン、古代中近東の洪水伝承には【黄金の林檎】および【エデンの果実】の接点が —ブラックホール(の質的近似物描写)と通ずる式でも— あるわけであるが、そこに最前まで、にまつわつての振り返り表記をなしてきたとの、

【終末へのサイクルと通ずる [432000 年との際立ってユニークな 6 桁の年数] の不可解なる具現化 (於て:クロノス・サトルナスと結びつく洪水伝承)】

との接点までもがあるからして実に不気味である、そして、重大である(盲(めしい)での状況になれば分かつたこととして重大である)とのことにもなると申し述べるのである(:ただし、【『ギルガメシュ叙事詩』にみとめられる洪水伝承】と【クロノスが夢見に現われたとされる 432000 年と通ずる洪水伝承】は —再言するが— 基本的に別物である、【双方共に古代メソポタミア領域の洪水伝承である】【双方共に方舟の類を建造しての種の保存がテーマにされている】との質的接点はある中ながらも基本的には別物であるとのことがありもし、それがゆえ、同じくものことを単体で指摘する上では重みが減じるとのものらとなりもする —といったものらにまつわることでありながらも、【クロノス→サトルナス→悪魔の王サタン→エデンの誘惑の蛇に比定される存在→ギルガメシュ叙事詩(に見る洪水伝承)との多層的接合性】との流れが【古代中東由来の洪水伝承】に通ずるところとしてそこにあるからこそ重みが際立ってくると申し述べるのである—)。

・重大なることの重みをさらに増さしめもすることになる、そうしたこととして重視すべきことについて指摘する。先立って([ギリシャのクロノス]と同一視される)[ローマの神格サトルナス]が[悪魔の王サタン]とも接合するとの極一部見方が存在すると紹介したわけだが 一同じくものことについてヤコブ・ブライアントの手になる A New System or Analysis of Ancient Mythology (1807)との古文獻にあつて古典上の典拠が(現代社会に至るまで同種の解析事例が他に見受けられない中ながらも例外的に)示されて言及されていることについて紹介したわけだが—、そうした見方・言われよう、

【(432000年の夢見の啓示をなしたと伝わるクロノスと同一視される)ローマの神格サトルナスが悪魔の王サタンとも結びつく】

との見方・言われようについてはクロノス・サトルナスが我が子と~~思~~って呑み込み吐きだしたと伝わる石(神託の地デルポイにて蛇崇拝の対象とされもしたと先立って紹介した石)が語源から【パイソン】(ピュートーン)や【アバドン】との蛇崇拝上の崇拝対象存在と結びつくとの指摘もがあわせてなされているとこのことがある(先賢の言及をそのまま写し取っただけの問題ある著作であるとの欠陥性についても紹介した一品ながらも、引用内容それ自体は軽んじられるところでもあると解説してきた OPHIOLATREIA, OR SERPENT WORSHIP との著作よりの再引用なせば、“This stone which they thus substituted was called Ab-Adar, from the deity represented by it. The term Ab generally signifies a father, but in this instance it certainly relates to a serpent, which was indifferently styled Ab, Aub, and Ob. Some regard Abaddon, or, as it is mentioned in the Book of the Revelation, Abaddon, to have been the name of the same Ophite god, with whose worship the world had been so long infected. He is termed Abaddon, the angel of the bottomless pit—the prince of darkness. In another place he is described as the dragon, that old serpent, which is the devil, and Satan. Hence the learned Heinsius is supposed to be right in the opinion which he has given upon this passage, when he makes Abaddon the same as the serpent Pytho.”(補いもしての拙訳として)「(サトルナスことギリシャ神クロノスの呑み込んだ石に代わって建立されることになった)この石はそれが表象する神に由来するところとして[アブ・アダール(Ab-Adar)]と呼ばれるものだった。そこに見る Ab との語は一般的に[父]を表象するが、この場合にあつてはおそらく[蛇]、違い乏しくも Ab あるいは Aub そして Ob と表されての蛇に由来するところのものであろう。幾人かの向きはこれをしてアバドン(「Ab」addon)、すなわち、新約聖書にあつての黙示録に登場する長らくも世界がその崇拝風潮に冒されていたとの蛇崇拝の神と~~同~~じくもの神の名前ととらえている。アバドンとの語を与えられての同存在は闇の皇子、底無し~~の~~穴の天使の名となる。別の場所では同存在は竜あるいは古き蛇たる悪魔、サタンとして形容されてきた存在である。そのうえで教養を有していたハインシウス(Heinsius)はアバドンをしてピュートーン(パイソン)と同じ存在であるとの意見を呈していたことは正しいのであろうと思われる」とされているところともなる 一尚、表記引用部については元となった記述を含むヤコブ・ブライアント著作 A New System or Analysis of Ancient Mythology にてギリシャ語による典拠が事細かに呈示されている—)。

さて、クロノス・サトルナスとサタンが同一視される中で引き合いに出されている【ピュートーン(パイソン)】および【アバドン】という存在ら「も」[次の観点]から本稿にて延々指摘もしてきたこととの兼ね合いで軽んじられない存在となっている。

大地神ガイアの子たる怪物としての【ピュートーン(パイソン)】という存在は本稿の先立っての段でそれ絡みの異様な先覚的言及について解説してきたとのデルポイの巫女の類と結びつく「神託」の能力の源泉ともされる蛇の怪物となるのだが(本稿の補説4と振つての段では古代ギリシャのデルポイ地帯の蛇巫たるピューティアたる存在が大地に埋められたピュートーンの腐乱ガスとされるものを吸ってトリップ、予言をなしたといった言い伝えが存する(ことに通ずる)ところの記

載を引いている)、そこに見る蛇の怪物【ピュートン】、ギリシャの太陽の体現神格である【アポロン】に退治された存在であるとされつつ、元はと言えば、(かの蛇の怪物を退治したとの)【アポロン】と存在そのものとして結びつくとの指摘もがなされている存在でもある(往古崇拜神格であったピュートンが新発の神であるアポロンの信仰に習合して取り込まれたともされる。本稿[出典 Source]紹介の部 100 にあってはそれに通ずるところの近代にあっての言われようを **CRITICAL EXAMINATION OF THE LIFE OF ST. PAUL** (一八二三年刊行版、『聖人パウロの人生についての批判的検証』と題されての書) よりの引用とのかたちで紹介している — Project Gutenberg のサイトにて全文公開されているとの表記ソース(1823年版 **CRITICAL EXAMINATION OF THE LIFE OF ST. PAUL**) にあって “The miracle wrought by our saint at Philippi in Macedonia, did not meet with more success, he there cured a girl, who had a spirit of Python, and being by that means possessed of the power of divination, gained great profit to her masters. These, far from acknowledging and admiring the power of a man who reduced to silence Apollo, one of the most powerful gods of paganism, brought Paul and Silas before the magistrates, and excited the people against them. It is right to remark in this place, that Apollo (i. e. the Devil) who resided in this prophets, laboured to destroy his own empire. In fact having perceived Paul and his comrade, the girl followed them, crying, these men are the servants of the Most High God, which shew unto us the way of salvation.” と記載されている(細かいところを補いもしてのそちら記載の訳は先立っての出典紹介部に譲る)ようにポリシエズム、多神教時代の【太陽神アポロン】はモノシエズム、一神教・キリスト教が支配的になった欧米社会では【悪魔 (Devil)】にして【パイソン (Spirit of Python)】と同一視されもする存在であると伝統的に見られてきた存在であると分かるようになってい —)。

ここで述べるが、ギリシャ神話のアポロンにあっては同存在が落魄、多神教崇拜から一神教崇拜の時代への変遷の中で落ちぶれもしてキリスト教体系における【アバドン】

という悪魔 — クロノス・サトルナスと悪魔の王サタンと同質性についての指摘がなされる中でサトルナスに通ずる存在としてピュートンと共に言及されていること、つい直上にて先述の存在でもあるとの【アバドン】という悪魔 — に変じたとの指摘がなされているとのことがある (:アバドンという聖書に登場する悪魔はギリシャ語ではアポリオンと記述されるとされているが、その名称アポリオンがアポロンと近いといったことがその典拠となる — 例えば、目立つところでは和文ウィキペディア [アバドン]項目には、現行、(以下、引用なすとして) “ギリシャ語では「破壊者」を意味するアポリュオン (Apollyon)、アポリオン (Apollion)、アポルオン (Apollon) と呼ばれており、一説ではギリシア神話におけるアポローン (Apollon) が自ら打ち倒したピュートンと同一視されることによって零落した姿とも言われている ” (引用部はここまでとする) と表記されているところとなりもする —)。

そこにいう ([蛇神ピュートンに対する信仰] が [人間形態をとる存在への信仰] へと変遷したともされるところでの崇拜対象である) 太陽神アポロン、彼がその存在へと落魄したとされるアバドンという存在が聖書のどの部分に登場するのかたとえば、 — 敬虔なキリスト教信者などはそこまで把握していることか、と見えもすることとして — 、

『黙示録』 第9章11節 (英語で表記するところの Revelation 9:11)

がアバドン登場箇所となる。その黙示録9章11節 — いいだろうか。英語で黙示録のことをも意味する【レベレーション】に(先述のように) [暴露]との意味合いがある中での Revelation 9:11 である — にあっては

黙示録9章第11章が短くもの【アバドン】および【底無し穴としてのアビス】に対する言及箇所となるのではあるが、本稿のp.220からp.221で(委細を先の段に譲って)の振り返り表記をなしているように古典『失樂園』にあっての【アビス】を突破するルシファー(すなわちもってアバドンと同一視されるサタン)にまつわる表現が【ブラックホール】と近似していることがある。また、本稿p.156からp.162にあって解説しているように「人間とは超人と動物の間の【深淵:アビス】を渡るロープである」とのニーチェの有名な文句と接合する大御所作家アーサー・クラークのやりようが【ブラックホール】および【911の予見的言及】と結びつくようになっているとの現実的状況がありもする。につき、黙示録9章第11節、Revelation 9:11に【アビス】と【アバドン】が登場することの出来すぎ度合いをそこからして推し量りたきたいものではある。

【底無し穴(ボトムレス・ピット)たるアビス】

にまつわっての描写がなされている(オンライン上にPDF形式で広く流通している邦訳版聖書、新約聖書(1954年改訳版)9章11節にあっては(以下、引用するとして)“彼らは底知れぬ所の使(つかい)を王にいただいており、その名はヘブル語でアバドンと言い、ギリシャ語でアポルオンと言う”(引用部はここまでとする)と表記され、流布されもしているオーサイライズド・バージョン、ジェイムズ王欽定訳聖書では(以下、引用するとして)“They had over them a king, an angel of the abyss, whose name in Hebrew is Abaddon, but in the Greek he is called Apollyon.”(引用部はここまでとする)との式での表記がなされている。

ここまで指摘したうえで声を大にして述べたきところとして、本稿では、

【底無し穴(ボトムレス・ピット)たるアビス】

が—「ミルトン古典『失樂園』にあっての特定部描写を通じて」— 今日的な意味で見た場合のブラックホールの質的近似物の描写と結びつくようになっていることを指摘しもしてきたのが本稿従前の流れである(出典(Source)紹介の部55)。

本稿がいかようにもってして(予言をなすような)【911の先覚的言及】と【ブラックホールをテーマにしている文物】の結びつきについて入念に解説をしているものとなっているのかとのことを押さえている向きにあってはそこからして「できすぎている」と理解いただけることか、とは思う。

そして、(であるから筆を割いているところとして)、この話にはまだ続きがある。

唐突となるが、

【アポロ計画】(アバドンとの関係性について直近先述のアポロの名を冠する計画)

については初の月面有人着陸を実現なさしめた計画として多くの向きがご存知であろう。そのアポロ計画に至る前に合衆国はいくつかの宇宙開発計画を段階的に実行しており、その概要は目立つところでは英文 Wikipedia [Apollo program] 項目からして一目での確認がなせるところとなっている(英文 Wikipedia [Apollo program] 項目の冒頭部からして“The Apollo program, also known as Project Apollo, was the **third** human spaceflight program carried out by the National Aeronautics and Space Administration (NASA), the United States' civilian space agency, and the program was responsible for the landing of the first humans on Earth's Moon in 1969. **First conceived during the Presidency of Dwight D. Eisenhower as a three-man spacecraft to follow the one-man Project Mercury which put the first Americans in space,** Apollo was later dedicated to President John F. Kennedy's national goal of "landing a man on the Moon and returning him safely to the Earth" by the end of the 1960s, which he proposed in a May 25, 1961, address to Congress. **Project Mercury was followed by the two-man Project Gemini (1962-66).**”(大要訳)「アポロ計画はNASAにて実施された「**三度目の**」有人宇宙探査計画であり、1969年にはじめて地球側月面表面に人間を立たしめた。最初の宇宙開発計画はドワイト・アイゼンハワーの大統領時代に於けるアメリカ人を初めて宇宙空間に送ったとの【マーキュリー計画】となり、アポロ計画はその後、60年代末葉のケネディ大統領時代の「人間を月に着陸なさしめ、そのうえで無事に帰還なさしめる」との(ケネディが61年に議会に示した)国是に帰せられるものである。アポロ計画に先行するところとしての【マーキュリー計画】については二人の人間を宇宙に送るとの【ジェミニ計画】(66年まで実施)に引き継がれもした」(引用部はここまでとする)とアポロ計画に先立っての有人月面探査計画の流れが分かり易くも表記されているところとなる)。

こちら本稿(vol.4と振っての本巻)p.156からp.162およびp.174からp.177にて解説しているとの大御所作家アーサー・クラークの【ブラックホール】【911の予見的言及】の双方に関わるとのやりようは彼クラークの『2001年宇宙の旅』およびその続編たる『2010年宇宙の旅』にまつわってのやりようともなる。そして、『2001年宇宙の旅』『2010年宇宙の旅』両二作を合算して見ての特性は(深淵の王とされてきたアバドンと「史的に」同一存在ともされてきた)【悪魔の王ルシファー】とも通ずるものとなりもし(クラーク当該作品シリーズでは木星が恒星化されてのルシファーが誕生する)、と同時に、それはアポロ計画(アバドンと結びつくアポロの名を冠するかのアポロ計画/サタン・ルシファーとの関連性を先行する段で論じてきたサトルナス・サターンの名を伴ってのサターン・ロケットが打ち上げに用いられてのアポロ計画)における月面有人探査にまつわる陰謀「論」→

直上より言及なししているとの【アポロ計画】にて有人月面探査へと結実した(と世間的に常識視されている)との合衆国の初期宇宙開発計画では、その初期、

【A119 計画】

というものが策定されていたとのことがある。

実行されることなく青写真だけで終わったとの同【A119 計画】は二〇〇〇年になってその全容が明かされもしたとの計画、その概要は長らくも秘されていたとの未実行計画となり、宇宙開発による抑止力（撃墜困難性を伴うICBM(大陸間弾道ミサイル)実現技術の指標ともなった宇宙開発競争での競争相手・ソ連への抑止力)を狙って米軍部が【月面での核爆弾起爆】を企図したとのものであったことが近年明かされることになったとのものである（目につくところとして英文 Wikipedia[Project A119]項目にて“Project A119, also known as "A Study of Lunar Research Flights", was a top-secret plan developed in 1958 by the United States Air Force. The aim of the project was to detonate a nuclear bomb on the Moon which would help in answering some of the mysteries in planetary astronomy and astrogeology, and had the explosive device not entered into a lunar crater, the flash of explosive light would have been faintly visible to people on earth with their naked eye, a show of force resulting in a possible boosting of domestic morale in the capabilities of the United States, a boost that was needed after the Soviet Union took an early lead in the Space Race and who were also working on a similar project. Neither the Soviet nor the US Project A119 were ever carried out, being cancelled primarily out of a fear of a negative public reaction, with the potential militarization of space that it would also have signified, and because a moon landing would undoubtedly be a more popular achievement in the eyes of the American and international public alike. The existence of the US project was revealed in 2000 by a former executive at the National Aeronautics and Space Administration (NASA), Leonard Reiffel, who led the project in 1958.” (即時意識として)「A119 計画は[月調査飛行研究]としても知られるもので、1958年に米空軍によって最重要機密計画として策定されたものとなる。同計画の目標は惑星天文学および天体地理学上のいくつかの疑問に応えることにも資するとの式で核爆弾を月面にて起爆させるとのものであり、核爆弾はクレーターに収まらないような式で実行、地球上の人々の肉眼でも明らかに目視可能なるその光の現出をもってして米国の能力にまつわる国内士気を鼓舞、米国との宇宙開発競争で米国より一歩先を進んでいた、そして、同様の計画をすすめていたソ連に対する士気を鼓舞しようとしたとのものであった。ソ連および合衆国にあっての A119 計画は今まで実施を見ることはなかった、というのも、主には宇宙空間の軍事利用に対しての公衆における(考えられるところの)否定的反応がゆえに中止の力が働いたこと、そして、月面着陸の方が合衆国国民そして世界の人々の目に人気を博するとの達成成果ともなろうとの見方があったからである。同計画の存在は 1958 年に同計画を主導していた NASA の高官であるところの Leonard Reiffel によって 2000 年 (注記:とすると二〇〇一年のかの事件の一年前) になってはじめて明かされたものである」と表記されているところである)。その点、同計画【A119 計画】にはまだ大物科学者として名をなす前のカール・セーガンが参画していたとのことも知られてもいるのだが(同じくも英文 Wikipedia[Project A119]項目にて“A young Carl Sagan was part of the team responsible for predicting the effects of a nuclear explosion in low gravity and in evaluating the scientific value of the project. The project documents remained secret for nearly 45 years, and despite Reiffel's revelations, the United States government has never officially recognized its involvement in the study.” (即時意識として)「若かりし頃のカール・セーガンが A119 計画の低重力

→ すなわち、ムーン・ランディングは米政府が偽造した大衆に対するフィクションだった云々の陰謀「論」にも関わるところのものともなる。『2001年宇宙の旅』小説版とタイアップして撮られていた映画版『2001年宇宙の旅』の製作者スタンリー・キューブリックが(映画に見るような美麗・迫真性を極めたの月面シーンをもたらした才能・技法を活かして)アポロ計画捏造に関わっていたというのがそうした陰謀「論」の筋立てであるとのことで、である(ご存知なきは調べてみるとうい)。といった陰謀論の類に「さえも」通ずるところとしてここで問題視しているのは馬鹿げて響く陰謀論の適否などではなく、アポロ計画が【アバドン計画】【黙示録9章11節登場の深淵の王の計画】とも質的に一まさに問題となる文脈にて質的に相通ずるようになってきているとのことである(クラーク作品『2001年宇宙の旅』がアバドンと結びついているルンファアをアポロ計画「とも」結びつけているのは一例にすぎない)。

環境下での核爆発の効果を予測し、同計画の科学的価値を評価付けするチームに参加していた。A119 計画関連の資料は向こう 45 年間の間、秘され続けたとのものとなり、同計画を主導した NASA の高官である Leonard Reiffel の(2000 年の)暴露にもかかわらず合衆国政府は公的には同計画への関与を一切、認めていない」と表記されているところでもある)、長じもして米国科学界を代表するオピニオン・リーダーともなった(本稿でも先述したことである)とのカール・セーガンといえば、トロイアの崩壊に通ずる嗜虐的対話法がいくつも込められている(と細かくも典拠挙げながら指摘してきた)小説『コンタクト』、奇怪な 911 予見言及事物たる物理学者キップ・ソーン著述とも接合するようになっている(とこれまた細かくも典拠挙げながら指摘してきた)との八〇年代小説作品『コンタクト』—地上にゲート装置であるブラックホールないしワームホールを生成するとのことをテーマとしている八〇年代小説—の作者(本業の傍らでの作者でもある)としてのやりようを本稿で問題視してきたとの向きでもある。そうもしたカール・セーガンも参画していた【A119 計画】(2000 年に NASA 高官によって存在暴露されたとの計画)から容易に【911】との数値が想起されるようになっているのは「実にもって不気味。」であり、かつ、現実的危険性が感じられるとのことでもある。

何故か。

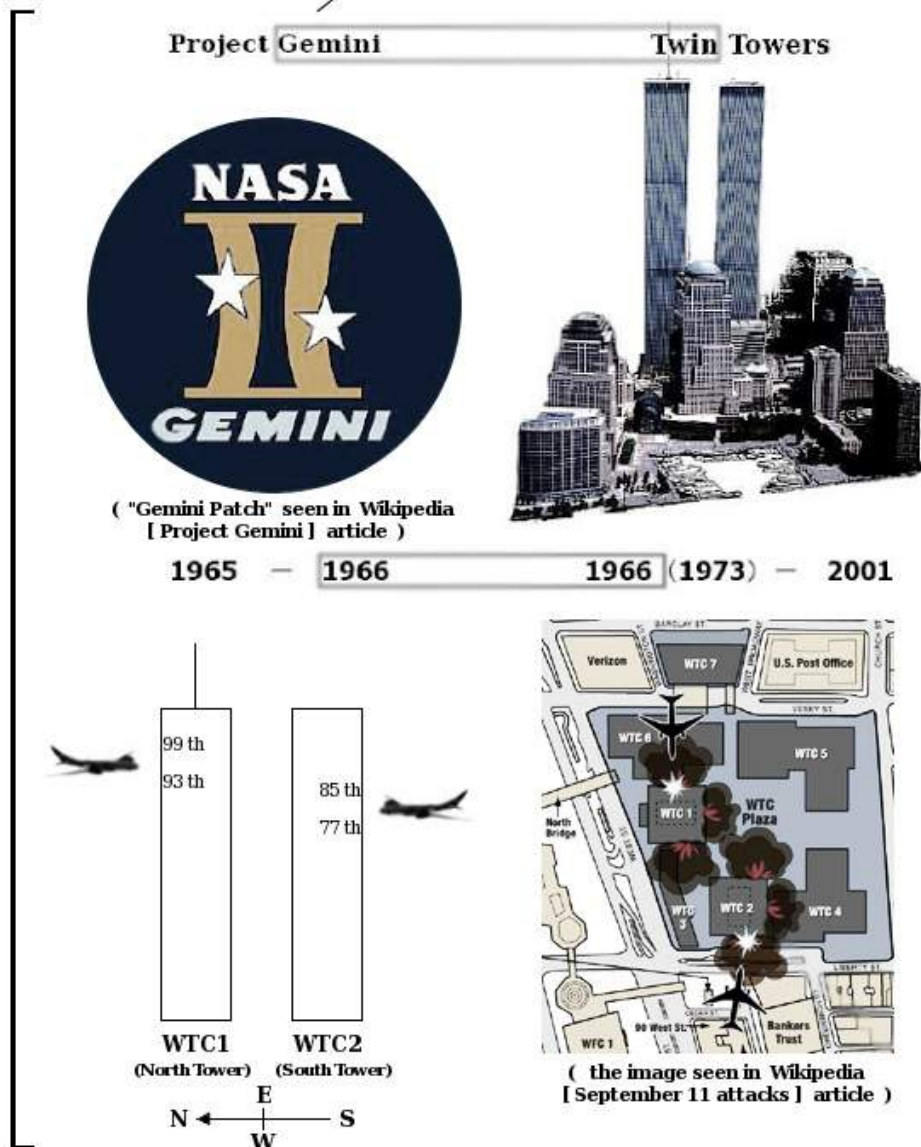
A119 計画 (2000 年に存在が明示されだしたとの計画) に後続するかたちで合衆国にて実施されることになった宇宙開発計画、アポロ計画に至る前段階の宇宙開発計画の中にはツインタワーの建造開始年次と計画の具体的実行年次を一にする【ジェミニ計画】(双子計画) といったものが含まれているとのことがあり(ツインタワーを含むワールド・トレード・センター全体の起工が開始されたのが 1966 年であるとのことについては英文 Wikipedia[World Trade Center]項目にあつての Planning and construction の節に現行、“ Groundbreaking for the construction of the World Trade Center took place on **August 5, 1966.** ” 「ワールド・トレード・センター建設の起工式は 1966 年 8 月 5 日に実施された」(引用部はここまでとする)と記載されている通りである。またもってしてジェミニ計画の打ち上げが 65 年から 66 年に集中していたとのことについては、(計画自体は 62 年からスタートしていたともされるが)、現行、英文 Wikipedia[Project Gemini]項目にあつて “ Project Gemini was the second human spaceflight program of NASA, the civilian space agency of the United States government. Project Gemini was conducted between projects Mercury and Apollo, with ten manned flights occurring **in 1965 and 1966.** ” (即時訳として)「ジェミニ計画は NASA によって実施された(マーキュリー計画に次ぐ)二番目の有人宇宙飛行計画であり、同計画ではマーキュリー計画とアポロ計画の間をなすものとして **1965 年から 1966 年にかけて 10 回の有人宇宙飛行が実演を見た**」(引用部はここまでとする)と表記されているところである。ゾンビ・傀儡(くぐつ)ではなくにも頭がきちんと機能しているのならば、前身の(頓挫して現実化を見ずに計画案それ自体が秘匿されていたとされるものだが)【A119 計画】と【ジェミニ計画】の流れから何が述べたいのか分かることか、とは思う)、 またもって加えもして、他の宇宙開発計画たる【マーキュリー計画】やそれに後続する【ジェミニ計画】などの合衆国宇宙開発計画でスペースシャトルを打ち上げるのに用いられたロケットらが、 こともあろうに、【サターン・ロケット】(終末への 43200 との繋がりを最前まで論じてきたサターン)や【アトラス・ロケット】(ブラックホール関連事物として取り上げてきたアトラス)といったものとさせられていたとのことが「ある」、このふざけた世界に具現化している「特定の意思表示の問題(における執拗さへの懸念)」を増さしめることとしてそういうことが「ある」とのこともあるからである (：アトラス・ロケットやサターン・

ロケットなるものが用いられているとのことについてはよくもって目につくところでは和文ウィキペディア[マーキュリー計画]項目、[サターンロケット]項目などを 英文 Wikipedia では[Project Mercury]項目、[Saturn (rocket family)]項目などに解説されている (たとえば、和文ウィキペディア[マーキュリー計画]項目では(以下、引用なすとして) “ マーキュリー計画(マーキュリーけいかく)は 1959 年から 1963 年にかけて実施された、アメリカ合衆国初の有人宇宙飛行計画である。目標は人間を地球周回軌道に到達させることであり、1962 年 2 月 20 日、アトラス・ロケットで発射されたマーキュリー 6 号によってそれは達成された” (引用部はここまでとする)と解説されている)。その点、【サターン】や【アトラス】との名称が何故もってして問題になるのかはつい直上の段の内容の一読でもってしても想像いただけることか、とは思(うので細かくも繰り返し表記をなすことはしない)。

Project A119

(planed in 1958 , revealed in 2000)

(Project Mercury)



上掲図の趣意については図を目で追うことで大体にして理解頂けるか、とは思(うので

あるが、伝えんとしていることを一応、文字情報にも落とし込んで述べれば、次のこと「も」また問題になるとのことである。

1958年に Project A119 が計画段階で頓挫した計画として考案されていたと「2000年になって」明かされて物議を醸した(最前部にて既述)。そうもした2000年にあつて明かされた計画とは異なり、実際に実行に移されていたのが

【マーキュリー計画】→【ジェミニ計画】→【アポロ(⇔アバドン(『レベレーション』= [暴露との意味を持つ新約聖書末尾文書] = 『黙示録』の [9章11節] に登場する、[深淵(ボトムレス・ピットないしアビス)の王]と形容される悪魔のような存在たるアバドン)の語源ともされるギリシャ神格アポロン)計画】

との流れとなるわけだが(これまた先立って解説したとおりである)、うち、二番目の有人宇宙探査計画である双子計画こと「ジェミニ計画」で用いられた徽章(Gemini Patch とのかたちで現行にて目立つように英文 Wikipedia [Project Gemini] 項目に公開されているもの)が「奇怪なことに」2001年、911の事件で現出したありようと視覚的類似型を呈しているとのことがありもする。

図の一目でもってして瞭然となるべくもしているつもりではあるが、そこを詳しくも書けば、

【ジェミニ計画(双子計画)を表象する徽章が占星術記号、いわゆるアストロジカル・サインというものにて双子座を示すII状のシンボルの二つの柱の左右反対方向、その上下に衝突マークのような五芒星がどういわけか描画されているとのものとなりもする、といったことがありもする中で、2001年の事件では同様に双子の塔であったツインタワーの左右反対方向の上下に(問題となる徽章と視覚的対応関係が成立しているように)ジェット機 — 既述のように(黙示録との接合性について既述の)ボーイング 7x7 シリーズに属する航空機ら — が特攻したとのありようが具現化している】

とのことがある。その点、そこでは異論など普通には生じえないだろう(と上にて書いた)との【飛行機の突撃】については、である。

[壁面にて対称を呈する位置になっており、ノースタワーの「北側」の外壁に突撃した飛行機は99階から93階の合間、サウスタワーの「南側」の外壁に突撃した飛行機は85階から77階の合間に風穴をあけることになった]

とのことが公式発表にして共通認識となっているとのことがある(上の図でも図示しているところでもある)。

については、たとえば、英文 Wikipedia [Collapse of the World Trade Center] 項目([ワールド・トレード・センターの崩壊]項目)にあつて現行、“In its final moments, American Airlines Flight 11 flew south over Manhattan and crashed at roughly 440 miles per hour (710 km/h) into **the northern facade of the World Trade Center's North Tower at 8:46 am, impacting between the 93rd and 99th floors**. Seventeen minutes later, United Airlines Flight 175 approached from the southwest, over New York Harbor, and crashed into **the South Tower's southern facade at 9:03 am between the 77th and 85th floors** at 540 miles per hour (870 km/h).”と表記されているところなどからも即時即座に同じくものことを確認できるところとなっている。

そして、より細かくも補いもしながら繰り返すが、ここで問題視しているのは

【1965年から1966年にかけて度々もってしての有人宇宙探査を成功させてきたジェミニ計画(双子計画)の計画徽章デザイン】

が

【1966年に起工式を見たとのワールド・トレード・センターにあつてのツインタワーのビル崩落状況】

を予見的に示しているが如きものとなっているとのことである（少なくとも双子計画と銘打たれての計画で双子状の柱のシンボルの左右対称の方向に上下を別にするかたちで激突マークよろしくの五芒星が書かれているとの一事は双子の塔、ツインタワーズにあつてのノースタワー、サウスタワーの対称をなす外壁に上下別ある式で飛行機が突撃させられたこととの相似型を見出せることとなろう。そのことに言い過ぎはないと考える）。

そうもしたことがある中で1958年にはジェミニ計画（およびその前身となるマーキュリー計画）に先立つてのA119計画なるものが考案されていた（要するに右から左に文字認識を逆転させると911A計画なるものが考案されていた）と「2000年になって」NASA高官に暴露されて耳目を引さらった（月で抑止力のために核爆弾を爆発させるとのその無茶な内容を含めて耳目を引さらった）とのことがあることにつき、

【偶然】

の断を下すのは、たとえ無理にでも、困難かとは思ふ。

（末段に付しての図解部などがまどろっこしいものとなってしまったが、これにて**【黄金の林檎】**および**【エデンの禁断の果実】**に通ずる執拗性がいかようなものなのかについてさらに加えての説明をなす、**【432000年と結びつく[終末]への道筋】** / **【ギリシャのクロノス神・ローマのサトルナス神を[アバドン]（アポロン（アポロ）と同一視される存在）・[ピュートーン]（アポロン（アポロ）との習合が問題視される存在パイソン）を媒介項にサタンと結びつける論理の歴史的存在】**との各点らに依拠してさらに加えての説明（アトラス・ロケットやサターン・ロケットといったもので打ち上げられた宇宙開発計画に伴う奇怪性「にも」言及しての説明）をなすとの部を終えることとする）

以上、指摘したうえで[「包括的」恣意性]がそこにあつたと指し示すべくもの、

【意味上の繋がり合いにまつわつての分析】（ [多重的關係性が成立している折にあつての[恣意]か[偶然]かの問題に対する分析、**【 Is the existence of such a [Multiple Connectivity] as above [only co-incident] or [deliberate] ? 】** Analysis における**【Semantic】** Analysis —Analysis based on the consideration of meaning— と述べられもしようとの分析）

に一区切りを付けもし、これ以降、

【計数的な分析 —大学レベルの確率論における教養を有して「いない」との向きを想定の下、大学レベルの数学を高等学校卒業時点の知識水準にて理解できるそれにグレード・ダウンしてなすとの話（数式の説明も懇切丁寧になすとの話）—]（**Mathematical Analysis** とでも表せようもの）

の部に入りたい。

本稿のここまでにあっての指摘事項に対する〔計数的視座;確率論的視座〕に依拠しての分析をなすとして —(読み手を選ぶ、それゆえ主軸をなさぬ補遺と位置付けてもしての部)—

これ以降の段では[複雑な意味上の繋がり合い]から離れての計数的側面を強く問題視しての分析をなすかどうかの解説をなしていきたい、そう、

〔ここまでに「段階的に説明を講じ」多くの人間にそういうものであるとの理解をなしていただけるように努めるとのかたちで延々と証示してきもしてきた事柄ら〕

に対していかなる[確率論的分析]がなせるのか ———特定の事実関係の存在がはきと呈示されている場合にそうしたことが【偶然】として成立している目算はどれくらいか、【恣意的】にそうもなっている目算はどれくらいか、とのことについていかなる[確率論的分析]がなせるのか——— の解説をなしていきたい (より具体的には文系理系の有無を問わずにももの高校卒業程度の見識にて理解なしていただける程度にグレード・ダウンしての[ベイズ確率論(というもの)に基づいての懇切丁寧を心がけての説明]を講じていきたい)。

そうした確率的分析をなしての以降のセクションでも無論、

【「遺漏無くも理解なしていただけるように、」との微に入り細を穿ちての[数式]及び[数式が示すところの概念]に対する段階的説明】

もきちんとなすつもりだが(何度も何度も申し述べているように本稿スタンスは【異論が生ずるようなところではないとのこと】であり、かつもって、【重篤な状況を指し示すこと】を[語るに足りる向きら]に「必要十分な式で」訴求することもありもし、筆者この身にそうしたものに対する自負と責任の意識があるからそこまでは、【微に入り細を穿ちての数式および数式が示すところの概念の段階的説明】までをもなす所存である)、 だがもって「最低限の」数式の類すら毛嫌いするとの方々に辟易される(小難しすぎるを受け取られる)とのありようは危惧懸念の問題を超えて避けられないことか、ともとらえている。

そこで以下のことをまずもって申し添えておきたい。

「これ以降の部は高等学校卒業程度の見識程度で把握できるとの式で [(ベイズ確率論というものにおける)ベイズ推定の理念・応用] を軸となしての確率分析をなしていく所存だが、といったものである同部は(本論に対する)付録が如き位置づけを与えての部に留まる。

であるから、もしなんでもあれば —数式に対する拒否反応の問題として苦痛を感じるのであれば— ここ確率論を扱ってのセクションは無視していただいても構わない。

何にせよ先立っての部までに長大な本稿にて訴求すべきことはあらかじめ訴求し終えたのかたちとなっており、その真偽検討にここ確率的分析の部は絶対的必要であるといったところでは「ない」がゆえにそうも述べる (ここセクションは現況がどれだけ危険な状況にあると判じられるか、そのありようを単純な計数的モデルにてバロメーターとして「補って」示すことにある) 」

それでは以下、本題に入る。

まずもっては

〔前提となる確率論についてのあれやこれや〕

に関する話を極々基本的なところからなすこととする。

本書(本稿全体を vol.1 から vol.4 と分割したうえでの vol.4 と振っての本書)における(極めて長くもなっている)【これ以降 p.546 に至るまでの計数的分析にまつわる解説】をすべて読み飛ばして頂いても構わないことである。

A

ここでは最初に極々 基本的なところ、

【確率】

との概念について[中学校卒業程度の識見の保持]で理解できるとの式での話をなすことからはじめたい。

さて、極々単純化させて記しもするが、読み手たる貴殿がサイコロを振ったとしよう。

その際にあつて、

【サイコロを振って特定の目が出るとのその結果】

を確率論では【事象】と呼ぶことになっている（そちら【事象】について英語では[一回の出来事]との語感で Event イベントと呼ぶやりようがとられている。[一事象=ワン・イベント]（「サイコロを「一回」振ったというワン・イベントだね」）との認識で見てもらえれば、何のことはない、との式での【事象】のざっくりした理解がなせることか、と思う）。

さらに述べれば、サイコロを振るというその[行為]は【試行】などとも呼び慣わしもする —サイコロを一回振るとの【試行】の結果としてサイコロの目のどれかが出るとの【事象】が発生するというわけである—。

繰り返すが、

【サイコロを振って特定の目が出るとのその結果】

を確率論では【事象】と呼ぶわけだが、「ただ一回だけ」サイコロを振るとのケースではそうしたものとして定義できる【事象】は全部で6通りになる。

すなわち、1の目が出る、2の目が出る、3の目が出る、4の目が出る、5の目が出る、6の目が出る、の6通りである（別段、難しい話をしているわけではないことはお分かりだろう。要するにサイコロの目の出方という確率を考える際に考察対象となっているサイコロの目の出方のパターン —考えられるところの出目のありよう— を【事象】などという小難しい言葉で表現している、ただそれだけのことである）。

以上のように「ただ一回だけ」サイコロを振るとのケースを例にした場合は

【全ての事象】

は[6通りの目の出方]（及びそれら [6通りの目の出方に対応する確率 —イカサマなどとは無縁なるよくできたサイコロを顧慮すれば、各々の目の出方がきっかりと[1/6]となるとの確率—）に収斂（しゅうれん）している。

そうもして【事象】らによって指し示される [ただ一回だけサイコロを振っての目の出方を顧慮した際の（観念上の）確率の[配分され度合い]の枠組み] を

【確率分布】

という（との呼び方の決まりが定められている）。

これまた極々単純化させて述べれば、サイコロの1の目が出る、2の目が出る、3の目が出る、4の目が出る、5の目が出る、6の目が出る.....そうもした各事象らがそれぞれ6分の1、6分の1、6分の1、6分の1、6分の1、6分の1、6分の1、6分の1、6分の1との確率を伴って「分布」しているとの確率の[配分

され度合い]の枠組みを【確率分布】と表す(仮にサイコロに分銅が仕込まれていた場合、何回もサイコロを振るとのかたちで[試行]を繰り返していく内に確率分布は例えば、1が $3/5$ も出ており、その他の出目の確率の和が $2/5$ となるようなものになるかもしれないが(いかさまゆえに1の目が5回中3回も出る傾向となっている)、ここでは分布の中身は問題とせず、取りあえども、確率分布とは何か、にまつわっての中学生でも分かるのと説明をなしている)。

といった【確率分布】はより複雑なケースであろうとそれを構成する事象を足し合せると[100%]が導出されるものとして表されるものである(たとえば、ここでの[サイコロを一回だけ振る]との例では1から6の目が各々出るそれぞれの確率たる $1/6$ を足し合せての可能性が1、すなわち、100%であるのことは「中学生でも把握している」ような基本的なる確率の話である)。

B

さて、上にて例示したようなサイコロの出目にまつわる確率分布については、である。

そのありようは[「ちりぢり・てんでばらばら」すなわち離れて散じている、「離散的」な事柄にまつわるもの]となる(たとえばサイコロを振って1が出た、2が出た、3が出た、といったかたちで【事象】が([1試行]→[1事象]との判断にあつて)「明確に区分け」されている、すなわち、目が決まり切った式でばらばらにでてくる「離散的」ありようである)。

といった離散的ケースとはまた異なる場合も考えることができちゃう。たとえば、

【「～以上」「～以下」といった括りで普通には見られるような対象(連続性の問題が観念される対象)】

の確率分布を妥当なるものとして呈示せよとのことになると高校卒業程度の識見を持っていても一知性の問題ではなく知識の深度の問題として一 世間人並みの人間には理解がなかなかもって及ばない領域に入ることか、と思う(：[「～以上」「～以下」といった括りで普通には見られるような対象を想定しての確率分布]は連続確率分布、日本の数学教育における数学Cの領分に最近では分類されているとのそちらがそこにかぶるところともなると思うのだが(ただし改訂は顧慮しない)、多くの大学生が理解しているかの別なく学ぶことを強要される統計学と確率論の根本原理にしてそれらを橋渡しをなす[確率密度関数]と呼ばれるものの領分となる—そして、その奥まっの背景まで理解するには確率測度というものにまつわる[測度論]というものの深い理解が要されるようになっている—)。離散的ではない、連続的な値を取る対象の確率を分析しするというのが[確率論主戦場]を巡る話だが(そして[統計学]がそれなくして成立しない話となる)、実のことを言って、といったところの解説、確率密度関数の細々とした解説さえ必要ないとの式、複雑なモデルを極めて単純化してしまうとの式での

【近代までに概念提唱されてきた確率論の基本的発想法】(数学史にあつての大家ピエール＝シモン・ラプラスの時代までに広くも発表され、実演は計算機能力の未熟さから応用はできなかったが、概念としては理解されていた確率論の基本的発想法)

でもってして「ある程度複雑な仮説の枠組み」を「計数的に」分析することもできるとのことがある、そう、「相当程度、現実的状况から背面の実体を分析する確率分析がなせるようになっていく」とのことがある(※そして本稿では懇切丁寧に説明しながらそのなしようをこれより解説していくこととする—尚、筆者は経営学修士号などを保持しているからでは断じてないが(事業をなすうえで知識・人脈を広げる一助にならぬかなどと考えていたとはいえども現行、『[下らぬもの][人を眩惑し最後には裏切るのであろうとのシステムに忠実なだけの[役者][紛い物]ら好みのもの]を取得したものだな』とそちら経営学修士号というものについては心底、冷めた眼で見るに至っている)、この身は計数的なことに普通人よりは親和性が高いとの者であるため、世間一般の人間よりは説明が流暢になせるとの背景がある—)。

にまつわってここで取り上げるのは

【ベイズ確率論の基礎的手法】

である（これより分解して段階的に数式および数式にて示される概念の意味を段階的に解説していく所存であるが、【ベイズ確率論】における【ベイズ推定; Bayesian Inference】と呼ばれる手法を厳密に定義付けして対象に対して適用していくことをなす）。

さて、それが一体全体いかなうなものなのかについての解説、公式の意味にまつわる説明を付しての解説は後々の段にてなすとして、である。ここでは先駆けて【ベイズ確率論】というものが、そも、いかに説明されるものなのか[最近世に出た書籍にての説明のされよう]をまずもって引いておこう — 一数式しか見ず、概念も理解できていないとのありよう(日本の高等学校などで用いられる[考えぬ馬鹿を造り出すためのものか]とすら見える愚書ら、「最初に天ありき」的なる見るに堪えぬ[物理]や[数学]の科目の教科書ではそうしたありようしかもたらされまいと見るところのありようでもある)を望ましく思わず、であるからこそ、自分の言葉で十分に説明できるとの段階に至れるまで自助努力することにしたとの筋目の人間が筆者なのではあるが、にもかかわらず、ここで引用形式での紹介をなすことにしているのはひとつに[多少専門的なことにまつわる説明]を筆者自身がなしたとしても、である。(世間一通りの普通人にとっては)「こいつはおかしなこと(容れがたいこと)ばかりを言うやつだからどうせ真つ当な話ではない。「異端の」論調だ」などとの[決めつけ; 予断]に囚われ、そうした[予断]の影響がゆえに[筆者を信用したくはないとの人間]の心に一石を投ずることとはできないか、と考えているがためである — 。

出典 (Source) 紹介の部 114

SOURCE

114

(coordinates) 38.87099° N
77.05596° W

setting American Airlines Flight 77
(Boeing 7x7 Series)

'ugly' **Book of Revelation** filled with [number 7]
7 stars, 7 lampstands, 7 churches, 7 seals,
lamb having 7 horns, 7 angels, 7 trumpets,
7 thunders, 7 visions, 7 bowls, 7 plagues,
7 words, 7 headed dragon

(Greek Ἀποκάλυψις Ἰωάννου, **Apocalypsis Ioannou**)
means 'un-covering'

11 12
9
Doomsday Clock
(Last) Judgement Day
for religious people

Collapse of 1 WTC - 7 WTC
and Boeing 7x7 Series
7-7 London bombings (2005)

[そも、確率論におけるベイズ主義とは何か、とのことにまつわつての世間的解説のなされよう]について紹介をなしておくこととする。

(直下、2008年に世に出た英国の数学者兼サイエンス・ライター、そして、スタンフォード大の影響力ある職員でもあるとのことであるキース・デブリン(という著者)の手になる **The Unfinished Game: Pascal, Fermat, and the Seventeenth-Century Letter that Made the World Modern** (邦題)『世界を変えた手紙 パスカル、フェルマーとく確率の誕生』(岩波書店刊行)の130頁から133頁よりの引用をなすとして)

保険などに確率論を応用する場合の未来予測は、本質的に同じタイプのものがたくさんあるとき、その平均の意味で信頼できるに過ぎない。しかし今日の我々は、また別の方法で確率論を用いている。つまり、我々が「ある特定のできごと」を予測しようとするとき、その予測が正しい可能性を測ることである。この発想が実りをもたらすにはコンピュータの発展を待たねばならなかったが、今日のリスク管理社会へ向け、この問題を解決するための最後の数学的ステップは、
とてつもなく強力で巧妙な数学公式
だった。この公式は、趣味として数学を研究していた、一八世紀イギリスの目立たない長老派牧師によって開発された。トーマス・ベイズは一七〇二年にロンドンで生まれた。

…(中略)…

今日では、ベイズは輝かしい数学的精神の持ち主として知られているが、存命中には一つも独自の数学論文も出版しなかった。(死後に私的なノートが発見され、そこには確率論、三角法、幾何学、方程式の解法、級数、微分学、電気学、光学、天文力学についての研究が残されていたのである)。

…(中略)…

ベイズの方法は「新たな」仮説の確率をどのように計算するかを教えてくれるのではない。むしろ、新たな情報がもたらされたときに確率を「更新する」方法なのである。

まず、ある仮説Hの確率を表す値から出発する。この数値を仮説Hの「事前確率」と呼ぶ。いま、ある新しい情報Eがもたらされたとき、Hの確率を更新するための計算をする。この新しい値を「事後確率」と言う。この更新は、ベイズの公式(ベイズ則)として知られる数学的公式に適切な値を代入することで得られる。事前確率は当て推量や見積りでよい。新しい情報が十分に与えられれば、ベイズの更新手続きによって、もっと正確な確率が導かれる。ベイズの方法を繰り返す用いることで(普通はコンピュータを用いる)、相当に乏しい事前確率からでも、毎回新しい情報が得られるたびに、十分に信頼できる事後確率へと変換していくことができるのだ。(とは言え、この方法もコンピュータに頼り過ぎることへの、有名な金言から免れているわけではない。つまり、「ガベージイン、ガベージアウト(ゴミを入れれば、ゴミが出てくる)」)。

この方法は(最初の)事前確率である「種」となる初期値に依存するので、ベイズの方法が知られてから二〇〇年もの間、統計学や確率論分野の人々からほとんどに無視されてきた。しかしながら、一九七〇年代からは、強力なコンピュータによって膨大な量の情報を繰り返して処理できるようになり、しばしば最初の事前確率の不正確さを乗り越えられるようになったため、一般的に広まるようになった。

(邦訳版よりの引用部はここまでとする ー※ー)

(※上にあつて[とてつもなく強力で巧妙な数学公式]と言及されているものの式、及び、その数学的意味合いについて以降続いての段にて高校生でも分かる程度に噛み砕いて解説する。尚、上の引用部にては[この方法は(最初の)事前確率である「種」となる初期値に依存するので、ベイズの方法が知られてから二〇〇年もの間、統計学や確率論分野の人々からほとんどに無視されてきた。しかしながら、一九七〇年代からは、強力なコンピューターによって膨大な量の情報を繰り返して処理できるようになり、しばしば最初の事前確率の不正確さを乗り越えられるようになったため、一般的に広まるようになった]「とも」記載されているが、そうした記載は[【主観確率】(その概念としての説明も後ほどになす)のあやふやさを繰り返し与えられるデータのコンピューティングによる処理で克服出来る]との意味合いの書きようともなり、70年代にあつて(今までに比べて)「強力な」コンピューターが登場してきたとのその時代趨勢に乗じるとの式で今日に生きる研究者、そして、市井の数学的教養ある向きら(ときとしてハイ・パフォーマンスを挙げんとする本当に職務に熱心なマーケティング分野担当者であったりもする)がExcelのような基本的表計算ソフト、スプレッドシート上での出来合いの関数使用機能の応用によって行列上にて瞬時にベイズ確率論を用いられるようになっていたとのその状況を指しもし(ただし統計学の利用や金融数学計算で威力を発揮する普通の高機能電卓ではそうした確率分布にまつわる計算はまずもって意をなすようなかたちではできなかりとも述べておく)、そちらソフトウェアに基づいての分析のなしようをも再現方法込み(無論、意味を懇切丁寧に説明しながら)本稿では呈示することとする)

(さらにもつてしての付記として)

上の書籍よりの引用部にてはイギリス国教会牧師ベイズが[ベイズの法則を世界にもたらした恩人である]との趣意の記載がなされているが、但し、ベイズ死後、同概念の流布に貢献したのは(万物を把握する存在を想定しての【ラプラスの悪魔】の仮定でも有名なフランスの数学者であるところの)ピエール＝シモン・ラプラスであると一般には認知されているので、(要らぬことか、とは思ふのだが)、にまつわつての世間的説明のなされようも下に引いておく。

(直下、現行にての和文ウィキペディア[ピエール＝シモン・ラプラス]項目の記載内容より一言のみの引用をなすとして)

「天体力学概論」は、1799年から1825年にかけて出版された全5巻の大著で、剛体や流体の運動を論じたり、地球の形や潮汐の理論までも含んでいる。数学的にはこれらの問題はさまざまな微分方程式を解くことに帰着されるが、方法論的にも彼が発展させた部分もあり、特に誤差評価の方法などは彼自身の確率論の応用にもなっている。また、現在ベイズの定理として知られているものも、ラプラスが体系化したものであるので、ベイズよりもラプラスに端を発するという見方も強い。

(引用部はここまでとする ー※ー)

(※なお、ラプラスがベイズの方式を確たるものとしたと上にて表記されているが、ラプラスの時代にはベイズの法則を用いての確率計算は([理論

上の困難さ]ではなく[膨大な数値を処理する手間暇]から)実行が困難であったのことがあり、そうした事情が計算自動処理技術の発展によって克服されたとのことがある。それが先に『世界を変えた手紙 パスカル、フェルマーと<確率>の誕生』との著作より引用なしたところの“しかしながら、一九七〇年代からは、強力なコンピューターによって膨大な量の情報を繰り返して処理できるようになり、しばしば最初の事前確率の不正確さを乗り越えられるようになったため、一般的に広まるようになった”との意味するところである(そうしたことについては【ベイズ分析】を実地で片手間にでもやったことがある人間ならばすぐに分かるもの)。因(ちな)みに本稿ではこれよりラプラスの代表的著作とされる *Essai philosophique sur les probabilités* (1814) にて目立ってもちだされたものであることが英文 Wikipedia [Pierre-Simon Laplace] 項目程度のものにも現行記載されているとの [ベイズ推定の一般公式] (意味・導出の仕方も「高校生でも分かるよとのやりようで」後の段にて丁寧に解説する所存であるとの著名な公式) を原始的かつ即席的やりようで用いることでどういった確率的目分量が呈示できるのか、説明をなしていく)

(出典(Source)紹介の部 114 はここまでとする)

直上の出典紹介部にて紹介したようなかたちでの解説がなされもする、

【ベイズ確率論に依拠しての分析】

が[本稿にて摘示してきた多重的因果関係成立事例の束ら] (ここに至るまでワープロソフトの文字カウント機能にて数百万字に達するとの文量を割きもして摘示してきた多重的因果関係成立事例の束ら) に対していかように具体的に適用できるのか、の説明をこれ以降、噛み砕きながら、そう、くどくも同文の言いまわしを用いれば、文系理系問わずにも高等学校卒業程度(高校生程度)の見識にてでも理解出来るように噛み砕きながら、なしていくこととする。

C

先立っての A. の段で【事象(確率論における事象)】とは何か、【確率分布】とは何か、の話を(高校生レベルとすら言わずにも)中学生レベルの識見で理解できるような式で説明をなした(その上で続いての直前 B. の段では多少込み入っての付説を(まったくもってして委細に踏み込まずにも、の式で)加えもした)。

さて、といった【事象】や【確率分布】に関する基本的理解だけはこれ必須とのかたちでまずもって要されるとの確率論、その確率論を展開するうえで[最初にそれを決めねばならぬ]のは

【一体何を確率論の対象に据えるか】

とのことである。

そう、確率の枠組みとして

「一体全体、何の確率を分析するのか」

を決する必要がある（対象となる確率的枠組みは出目が8面あるサイコロを振る【試行】にての確率の枠組みである、といったかたちにて、である 一もってまわった言い方をしているが当たり前のことを述べているつもりではある（確率の対象として何を考えるのか考えてもしない段階で確率論の話を展開しようなどというのは落語に出てくるおっちょこちよいの話のようなものだというわけだ）一）。

ベイズ確率論の場合、そうした確率的枠組み（確率に詳しく向き流に言えば[確率空間]といったものにも通ずる枠組み）に分析者の主観の問題を導入するようなものとなるのだが（直近にてのB.で引いた書籍『世界を変えた手紙 パスカル、フェルマーとく確率』の誕生』にてからして“事前確率は当て推量や見積りでよい”とのかたちでそういうことが言及されているところでもある）、しかし、さはさりながら、「いい加減なことを論じようというのか」などと勘違いしていただきたいくはないところである。

その点もってしてベイズ確率論では

【基礎となる仮説(の枠組み)】

というものをまず「計数的に」設定・定義付けしなければならない（それら仮説が現実になり立ち得るものなのか、あるいは、成り立ち得ないような排除して構わぬものなのか、それは手持ちの具体的データから逐次判断していくとのプロセスを踏むとしても、そも、計数的に設定・定義付けしての【仮説】の類 一後にどういふものか具体例をもってして厭となる程に解説する所存であるとの【仮説】の類一 がそこになければ確率論は展開できない）。

それら計数的に定義付けしての仮説らの確からしさの目算にベイズ確率分析をなす人間は（後々、数式とデータによって修正していくとの）[曖昧さ]を導入するわけだが（たとえば、仮説Aでは～%のことが～%で成り立つ）等等とのことについて最初は目分量・当て推量の側面が強いかたちでの数的処理をなすことが許容されるとのやりようをなす。ベイズ確率論が「主観確率」にまつわるものであると言われる所以(ゆえん)はそこにある）、そもした仮説らの成り立ち度合いを検討する上での基礎となるデータ、現実的状况を体現しての「観測事象」のありようは厳密に定義され、そもしたものとして「事実」として「間違いなく」捕捉されている必要がある。

(はきと観察されるデータの集積から法則性、結果の再現性を論じようというのが「主観を排しての「科学;サイエンス」というものの本質的ありよう)であることは論じるまでもないことであろうが、(仮説定立・仮説らの計数的枠組みにて主観を介在させるものでありはしても)、ベイズ確率論「にも」当然にそうした科学の本質たる性質は強くも当てはまる。

問題はベイズ主義にあってもデータの捏造がなされる、あるいは反証となるデータが一切合財ないし多く無視されるとのことがまかりとおり、もってして、

【仮説の計数的定義付け】

が適切でも

【データ ←(対応付け)→ 仮説の適正さ判断】

とのプロセスが詐欺的に他を瞞着する(騙す)ものたりうる危険性があるとのことである（これは実際にベイズの公式を活用したことがある者として他を欺瞞する詐欺を構築しようとした場合、どういふやりようがなされるのかを考えたこともある人間として述べていることである）。

その点、見る限り、科学的手法をとっていはするが、実体は科学の名を騙った詐欺であるとのことは社会に往々にしてある（ある実験結果が出ているとしつつも実はデータが捏造・歪曲されている、反証データが無視されているとの式で、である）。そもしたことがある中で【科学の線引き問題】では【容れるべきところ】と【容れるべきではないところ】を分けもして前者をして【真っ当な正当科学】、後者をして Pseudo Science【疑似科

学】・ Pathological Science【病的科学】と表するわけであるが(尚、フリンジ・サイエンス、いわゆる、【境界科学】との言葉もあるが、そちらはレッテルの問題も介在しうところのもの、定義上の問題として正当派にランクアップする可能性があるものに対しても用いられる呼称とされ、後者の【容れるべき「ではない」ところ】とは無条件には見れないものである)、ベイズ確率論の場合、そもそもその前提自体がねじが数本飛び出ており狂っているとの傾向が強い【疑似科学】には縁があまりないと見えるのではあるも、ただもって、Pathological Science【病的科学】というものには親和性が強いと受け取れるようになっていものではある。どういことかと述べれば、(証拠のまったくないところで空中楼阁を造っているわけではないが)微少なる証拠しかないところでそれら証拠を過大評価する、所与の事前確率(前提たる確率)の状況を異常に自身の帰結に近いとの式で見積もるとの式でのベイズ主義の悪用濫用がまかりとおる、それでもってして話者が科学の名を騙りながらも現実を自身の主張に近い方向に曲げるとの病的科学が具現化する、というより、病的科学の言い分そのものが往々にしてベイズ主義「的」であるとのことがある、ゆえにベイズ主義のそういうところには注意をなす必要があると受け取れるようになっていものである。

だからこそ申し述べたいのだが、ベイズ主義それ自体は歴(れっき)とした科学的手法の一角をなすものではあるも、それを悪用濫用しての病的科学のそれと筆者申しようが言えはしないのかきちんと判断いただきたい、にまつわっては、言える、あるいは、言えないとすれば、それは何故なのか、との観点で(識見ある向きには)きちんと批判的に分析いただきたいと考えている(：尚、向きによっては【実態的状况(呈示データ)それ自体の異常さ】をもってして[容れる・容れない]にあつての[容れない]の理由にするだろうが、データにて示唆される状況が異常異様である、たとえば、[人間の、人間による、人間のための世界という観点がまったくの虚偽であることを示すものである；この世界に対する霊長類たる我々以外の存在の関与を示唆するような側面がある][といった中で一部の人間は人間の名に値せじのただの糸繰り人形にすぎぬと示唆するような側面がある](ある種人間が小学生に毛が生えた程度の知能しか有していないとの性質しか有していないにもかかわらずいきなりアインシュタインの相対性理論にまつわつての式を展開しだすような、あるいは、絶対に予見できないようなことを奇怪な式で、それも恣意的な式で知り得もしないことを予見するような口の動きをなさしめられるマーベラスな糸繰り人形となつていると示唆するような側面がある)といったことがあれば、無条件にそうしたデータで示される方向にまつわつての仮定(e.g.一部の人間は人間「未満」の糸繰り人形である)をも排除しないのもまた科学というものであろう。一般論としてであるが、自分の容れたくはないことを認めない、自分の見たくはないことを見ない、自分のそうだと信じた状況を[現実]と混同するのは典型的暗愚下愚の兆候ともなろう、かつ、[宗教](なるもの)の領分であろうとはきと述べもするところとして、である——さらにいえば、暗愚下愚に留まり続けるとのありようでは[知性]([情報・状況を正確に捕捉・見据え対策を考案するとの能力]でもいい)が生存の条件になつていところでは「生き残れなどしなからう」とも冷たくも言い放ちたくもあるのだが、そうしたマインド(属人的観点)の話は(そも耳を傾げるだけの心の実質をもった人間がこうもした世界にそうそういるのかにさえ希望的観測を抱けない人間として)ここではこれ以上なさぬこととする——)。

とにかくも、筆者としては数式を用いての科学言語であれ、日常言語を用いての自然言語であれ、きちんと手順を踏む、詰(つ)むとの上で行き過ぎがないようにと努めているつもりである、従前の自身の行き過ぎたやりようを心底恥じ入りもして「本稿では」そうも努めているつもりであるわけだが、その点についてのこの身の言いように行き過ぎ・言い過ぎのきらいがないか(【真実を巡る盤面】で詰(つ)みを試みる過程にて手駒をまったく的外れに動かしていないか)とのこと、真つ当な読み手にはきちんと批判的に検証いただきたいと考えている次第である(そして、結果、目立っての欠陥がないという状況ならば 自身の足下をよく理解できただらう、であれば、出来れば、そう、押しつけなど

できはしないが、彼我の力量の差が歴然としている死地にあっても「できればもってしての」行動をなして頂きたいものではあると求めたいとも思っている。

いささか逸れすぎてのことを申し述べた節があるので話を引き戻す。

なんら委細に踏み込んでいはいはしないとのこの段階ではいまだご理解いただけないかもしれないが、話が進んでいく中で（理解する気があるとの[ここでの話をなすに見合った特性を有しておられるとの向き]には）ご理解いただいてもするように努める、そうしたことに通ずるところとしてここまでの話が含意していることには

[計数的に定義されていても個々の仮説が [正しいこと] が求められているということ「ではない」]

とのこともまたある。ベイズ主義ではどの仮説が正しいと判じられるのか、どの仮説を残すべきか見極めるうえでの体系であって個々の仮説に過度の思い入れはなさないし、なしてはいけないこととなっている。

そして、といった中で、(再言するが)、

「「まずもっては」仮説らの【基礎となるデータら】がきちんと捕捉されていると言えるのか、かつ、さらに捕捉されていくだけの(それらデータら性質に対する)定義付けをなす必要がある」

とのことだけは必須条件として求められていること、お含みいただきたい)

(直上最前の断り書きの部から引き戻しもし、) 直覚的に当たり前であると判じられるところに落とし込むとの式で極々単純化させて話を続けよう。サイコロを振ることを問題視していることさえ [あやふや] ならば、よりもっては、サイコロを投げて1から6が出るだろう(あるいは出そうである)といったことさえ [あやふや] ならば(そして、といった中で甚だしくは[観測データ]として149や1万などといった数が出てきているのならば)、そのような状況は何にせよ、

[出目が6つあると「想定」してのサイコロにまつわる確率論]

の対象とはなすべきではないし、ならない(のは言うまでもない)。

であるから、

[出目が6つある(あるいは8でもいいし100でもいい)と「想定」してのサイコロにまつわる確率論]を顧慮していると言えるだけのデータの枠組みを明確化しておく必要がある。

反言反対解釈の問題として押し広げて申し述べれば、[観測対象]が確率論の領分となるきちんとした定義を伴ったものとして顧慮されることにならなければ、そもそも確率論の対象にならず、放逸を見ての印象論の領分にしかならぬとのことになる（:それは[科学的手法]と[神秘主義的な類による当てにならぬ純然たる主観・印象論的目分量]の間に横たわる圧倒的な垣根の問題とも言えるであろう）。

といったことが一般論として述べられる中で([主観確率]などとは言いが)特定のデータにまつわるものとしての仮説らの確率論的枠組みを純・計数的に構築し、に対して、厳密にそうしたものであると特定してのデータらを当てはめていく 一具体的やりようはこれより呈示していく— ことで

【どの仮説が一体全体、もっとも現実的状況に近いのか】

とのことを計算していく 一きちんとそうなるべくしての数学的裏付けがある定型的な式・方法で計算していく— のがベイズ確率論となる。

くくだ・くどくどと総論的な解説を続けるようではあるのだが、そうした意味ではベイズ確率論「では」—(いや、[[飛躍]を[跳躍]ではなく字義通りの[飛躍]にしか出来ぬとの神秘主義者や宗教的な徒輩、あるいは、それに類する[事実に対する認識][諸々の事実の意味判断]さえなせぬとの相応の部類のやりよう]「ではない」)ところのすべてのまっとうな事実分析の論理的・理性的プロセスにあって「では」、としてもいいのだが)—

【そうしたものであると定義付け・分類がなされている事実を反映してのデータ】(ないしは具体的サンプルが不足を見ている中ではベイズ統計学にて統計的意味付けを与えるべくものデータ

定義)

と

【データの選り分けの方式】

が非常に重視されることになる（と強調したい —それはこれより解説するところとして【数学】未満の話、システムエンジニアなどがそれを重視する【手順】のレベルでの話だが、極めて重要なところであるとも言える—）。

以上申し述べたうえで続いている段では

【何を確率論の基礎に据えて考えていくのか】（いいだろうか、一事が万事の式で本質を狙うように極々単純化して述べれば、分銅が仕込まれていないかとの式でサイコロの目の出方を問題にするにしてもそのサイコロの目は1から6なのか、1から8なのか、といったことを確定させる、そういった話に通底するところと見てもらってもいい）

に関わるところとして、

[[事実としての情報]を念頭にしての具体的な[データの選り分けの方式]]

を明示していくこととする(※)。

※いまひとつもってしての補足説明(めかしての表記)を一応なしておく。

直上、これよりもってして、

[[事実としての情報]を念頭にしての具体的な[データの選り分けの方式]]

を明示するとしたが、データ選り分けを本質をえぐる式で適切に考案・定立することは

[本当に人間に相応しい特性を有している者]

にしかできぬことであろうと筆者は見ているし、そう判すべきだけの理由がある。

それがいかに複雑なものであれ、数式を手繰り、その解答を呈示することだけならばはっきりと述べ、

[単純機械]（[人工知能]に「満たない」単純機械）

にでも出来る、あるいは、

[思考作用を伴わないマニュアル遵守人間]

にも出来ることであろうと受け取れるが、

[複雑性を呈する現実世界の諸相をよく見ながら事実を(それが事実と裏取りなしながら)収集して、それら収集事実の間に横たわる枠組み(事実関係)のありようを捕捉同定し、捕捉同定もした枠組み(事実関係)の意性を判断する—特定の規則に合致する関係性が数多あるのならばそれはどういうことなのかの重み付け判断をなす—]（極々単純化させもして述べれば、(思索対象となるのがサイコロ関連の話であるとして)[それは果たして出目が1から6となるサイコロにまつわるところとなると適正に述べられるのか]についてデータ収集結果から判断をなし(1や6との数が漫然としてそこにあってもそれがサイコロの出目であるとは限らない)、の後、1から6の出目としての頻度からサイコロに分銅が仕込まれているとのことがないか、といったデータ特性につき判ずる]と

の式での判断をなす)

といったことには

[本当の意味での能動性・率先性 — 計算能力の多寡はともかくも指示待ちの機械「的」存在には欠けている特性 — を伴っての分析的思考]

が要求される場所となる(：換言すれば、ナレッジ[知識; 収集情報]の集積から適正なる状況判断を不断になし続けようとするとの[意志]の発露たる[自身の生きる世界を他人事・絵空事ととらえて生きているわけではない高等生物固有のウィズダム[知恵]]が要される場所となる — (サイコロなどではなく)複雑な諸相を呈しての現実的状況、その性質を多角的な情報収集を通じて出来るだけ幅広く、かつ、深くも把握しようとしながら、その際立って特異なる一特性を適切に切り分けして、その意味性を適正に呈示するとの行為に[真に人間に相応しい知恵]の作用が要らぬというならば話は別だが、—)。

そうした特性が強くも要される場所 — [事実を事実として収集して、それら事実に対する然るべき枠組みのありようを模索し、その意味性を(更改・修正しながらも)判断する]との式 — を主軸として展開するべくものものとしてしたためていた本稿にあつては最大限、(属人的主観から離れたことを[証示]するとのかたちにて)、知的に誠実たらんとしてきたとのことがある — 少なくとも自らが[重大事]と見ることの[告発]をなすべくものものしてきた、極めて長大なものとしてものしてきた本稿にあつては謬見(誤った見方)を呈示していないか、関係性にあつて疎結合(関係はあるも希薄であるとのありよう)しか呈示していないとの事実関係の意味性を誇大に強調しているきらいがなかったか、といったことを絶えず自己批判しながらもの執筆をなしてきた——。

詰まるところ、長大な本稿にてのそもそもの書き出しの部、劈頭(へきとう)の部にてエピグラフ(題句)として以下に呈示するような引用をなしていたのは読み手に本稿がいかようなことをいかように重要事として訴えんとしているのか、それは神秘主義者・宗教主義的狂人ら(世間に横溢しているとの不快な隣人らとしての内面の実質すら疑われるとの手合いら)のたわごと・ざれげん — 何かを変える可能性が潜在力としてゼロとなる、むしろ、何かを変える可能性を減衰させるとの言いよう — では決して済まされるようなものではないと理解なしていただきたかったことに因る。

(直下、本稿にての冒頭より題句として呈示していた 1979 年 Godel, Escher, Bach: an Eternal Golden Braid (邦題)『ゲーデル、エッシャー、バッハ——あるいは不思議の環』よりの再度の引用をなすとして)

知的でない行動と知的な行動との間の境界線がどこに引かれているのかは、誰も知らない。実際、正確な境界線が引けると考えるのは、おそらくばかげたことである。しかし知性の本質的な能力として、次のようなものを挙げることはできる。

- ・状況に非常に柔軟に対応すること、
- ・偶然的な環境を利用すること、
- ・曖昧な、あるいは矛盾する情報からその意味を読みとること、
- ・いろいろな相違によって分離されかねない状況の類似点を発見すること
- ・いろいろな類似点によって結ばれている状況を区別すること、
- ・古い概念を新しいやりかたで結合することによって新しい概念を構成すること、
- ・新奇な着想を思いつくこと、

ここで一見、逆説的なことにぶつかってしまう。コンピュータというものは、その

本性からして、最も硬直的で、欲求をもたず、また規則に従うものである。いくら速くても、意識がないものの典型にすぎない。それなら、知的な行動をプログラム化することがどうして可能なのだろうか？これは最も見えすいた用語の矛盾ではなからうか？

(上記訳書表記に対する原著原文は下のようになっている)

No one knows where the borderline between non-intelligent behavior and intelligent behavior lies; in fact, to suggest that a sharp borderline exists is probably silly. But essential abilities for intelligence are certainly:

to respond to situations very flexibly;
to take advantage of fortuitous circumstances;
to make sense out of ambiguous or contradictory messages;
to recognize the relative importance of different elements of a situation;
to find similarities between situations despite differences which may separate them;
to draw distinctions between situations despite similarities may link them;
to synthesize new concepts by taking old them together in new ways;
to come up with ideas which are novel.

Here one runs up against a seeming paradox. Computers by their very nature are the most inflexible, desireless, rule-following of beasts. Fast though they may be, they are nonetheless the epitome of unconsciousness. How, then, can intelligent behavior be programmed? Isn't this the most blatant of contradictions in terms? One of the major theses of this book is that it is not a contradiction at all.

(訳書および原著よりの引用部はここまでとしておく —※—)

(※ちなみにたかだか[機械が如き存在]に[知的な推論]を約束する技術(知的生命体としての人間のように、そう、まるで生きているかのような推論を魂の無い存在になさしめる技術)としてベイズの法則に基づく Bayesian network ベイジアン・ネットワークとの推論方式が用いられているとのことがある。については(所与の情報から問題となる意味を導出するのがそれだとするのなら) [知性の本質]がベイズ確率論と極めて親和性が高いからであると解されるし、そのように主張されているところではある)

直近申し述べたように、これよりもってして【何を確率論の基礎に据えて考えていくのか】に関わる
ところとして、

[[事実としての情報] を念頭にしての具体的な [データの選り分けの方式]]

を明示していくこととする —— 厳密に【事象】 (e.g. 先述のようにサイコロを振るとのこをなして1という目が出た、2という目が出た、そのように【試行】に対して結果としてそこに現われる現象・ありようを【事象 Event】という) としてどのような事柄を問題視するのかを明確化させて、の上で、計数的側面が問題になる確率論を展開していくのに必要な範囲付けをなすとの手順を明示していくこととする——。

すなわち、データ処理のアルゴリズム (この場合、データ処理のデータとは世にあまねくもひしめく情報の不特定の束、アルゴリズムとは【情報を区別・分類する(処理する)手順の仕様】ととらえていただきたい) をいかようなものとするのか

[切り分けの手順 —「情報処理」の手順—]

を事細かに呈示していくこととする。

その点、まずもって述べるが、ここ確率論の話に入る前から本稿では、従前、ファクト・ファインディング(証拠収集)の問題、そして、それに次いでの関係性摘示の流れにて次の[要素]の複合的具備が問題になる関係性を数多摘示してきた。

(ここでは便宜的に A. から J. と振っての本稿にあつての従前摘示事項の【ありよう】の分類をなす)

要素 A: [911 の事件の発生を事件発生前に先覚的に言及しているとの要素を具備している] (e.g. [[911]と[双子]との言葉の双方と関わる式での描写を目立ってなしている][ニューヨークのビル爆発とペンタゴンの攻撃を同時に描き、また、911 と親和性が高い数値列を用いている]等等)

要素 B: [[ブラックホール] ないし [ワームホール] ないし(機序不明概念としての) [異界との扉] のどれか一つないし複数と明示的に結びつけられている] (e.g. [特定フィクションが[ワームホール]を登場させている][特定ノンフィクションが[ブラックホール]を作中の主要テーマに据えている]等等)

要素 C: [粒子加速器と結びついている] (e.g. [特定文物が粒子加速器に関わるものである]等等)

要素 D: [アトランティスと命名されての概念と関わっている] (e.g. [特定フィクションが[伝説の沈んだ大陸アトランティス]に目立って言及している]等等)

要素 E: [古のトロイアにまつわる伝承との結節点 (1. 【叙事詩『イリアス』というトロイア崩壊にまつわるプロセスを扱った古典の際立っての構成要素】あるいは 2. 【叙事詩『オデュッセイア』というトロイア崩壊にまつわるプロセスを扱った古典の際立っての要素】などとの結節点) を色濃くも具備している] (e.g. [特定フィクションが[トロイアの木製の馬]と直接的に結びつく作中要素を具備している][特定フィクションが叙事詩『オデュッセイア』や叙事詩『イリアス』(の主要登場キャラクター)と結びついている]等等)

要素 F: [ヘラクレスの 12 功業と直接的に関わっているとの特性を具備している] (e.g. [特定文物がヘラクレス第 11 功業と関わる]等等)

要素 G: [爬虫類の知的異種族([聖書の蛇]や[悪魔]といった存在は除く)と濃厚に結びついている] (e.g. [特定フィクションが知能を持った蛇の種族を登場させている]等等)

要素 H: [垣根としての五芒星・五角形と濃厚に結びついている] (e.g. [特定フィクションが垣根としての五角形を作中の重要要素に据えている]等等)

要素 I: [キリスト教大系におけるサタンないしルシファーと「直接的に」結びついている] ([特定フィクションが聖書におけるサタンを作中にて悪役として登場させている]等等)

要素 J: [聖書における禁断の果実と「直接的に」結びついている] (e.g. [特定フィクションが聖書における禁断の果実のことを扱っている])

さて、本稿にての従前摘示事項が帯びている特性を要素 A から要素 J と振って直前にて示したうえ

で述べるが、世の中には膨大な数の【情報】が存在している。その【情報】を適切に処理することが情報を分析する者には求められている（これは言うまでもなく一般論である）。

その点、文字情報といえば、そう、ひとえに文献的記録と述べても【個人の備忘録としての数百字のメモ】から【「長大な」文献的記録】（フィクションならば、近代文豪マルセル・プルーストの『失われた時を求めて』の日本語訳にして数百万字に及ぶという超長編フィクション、対して、ノン・フィクションならば、分厚いハードカバーの科学書やある一定以上の文字数を有した科学論文など）に至るまで種々様々な文字情報が世の中には横溢している。

音声記録といえば、【ちょっとした知人との会話を録音したものや自然音を録音したもの】から【長大な取材テープ】【盗聴して収集した犯罪組織の重大なる会話】など色々と性質は分かたれてくる。

対して映像記録と言えば、【モバイル機器で撮った街の風景】から【長大な映像作品（映画作品やドキュメンタリーフィルム）】【秘密会合に対する盗撮記録】など性質・意味合いも多岐に亘る。

そうもして世の中に種々様々な形態で存在している【情報】に対してここではまずもって[間口(まぐち)にての制限]の問題として

【第三者が容易に確認出来る刊行物とのかたちで流通している日本語文字数換算にして1万字以上(英語単語数においては3000語以上)の過去の「文献」記録(古典から現代小説などフィクション、そして、特定のトピックについて解説を加えているノン・フィクションら問わずもの文物)】

あるいは

【第三者が容易に確認できる商業作品として市場市中に流通している過去の「映像」記録(映画作品など)】

のいずれかにあたり、そして、先行して顧慮したものと差異が乏しい引用情報・仄聞(伝聞)情報を扱っているとの(公)文書を除外したもの

のみを情報処理の対象とするとの制限を設けることとする（:実際、広くも本稿では上のようなかたちで定義付けなしのもの【証示】(証して示す、とのこと)の基礎に据えての[ファクト・ファインディング](材料収集及び呈示)をなしている。たとえば、筆者がいかなる犯罪行為にもやぶさかではないカルト組織の組織犯罪を立証するうえで申し分ない寄り合いに対する盗聴会話を保持していてもそれは広くも第三者が確認しようのないもの(たとえばカルト紐帯に取り込まれていてもなんとも思わぬとの筋目の相応の人間で溢れかえっている世間というやつで公にしたならば筆者自身が面倒なことになることであるために秘密記録として第三者が確認しようのないもの)とのことでその存在に言及するだけでは何の意味もない、陰謀論者の話柄上のもので大差ない—あるいは[表沙汰にはできない行為判断の材料]になるにすぎない—とのものになるであろう）。

さらに、である。ここでは直前、そのみを問題視するとした、

【第三者が容易に確認出来る刊行物とのかたちで流通している日本語文字数換算にして1万字以上(英語単語数においては3000語以上)の過去の「文献」記録(古典から現代小説などフィクション、そして、特定のトピックについて解説を加えているノン・フィクションら問わずもの文物)】

あるいは

【第三者が容易に確認できる商業作品として市場市中に流通している過去の「映像」記録(映画作品など)】

のいずれかにあたり、そして、先行して顧慮したものと差異が乏しい引用情報・仄聞(伝聞)情報を扱っているとの(公)文書を除外したもの

という対象に対して、加えもしての条件として、先掲の【要素A】から【要素J】のいずれかの要素の具

備を特定しているデータのみを思索の対象とするとの切り分けをなすこととする（：[要素 A] から [要素 J]（たとえば [要素 J] ならば、[ある情報が聖書における禁断の果実と結びつく内容を有している] との要素になる）の具備の判断まで機械に任せたいところなのだが、ビッグデータに対するデータマイニング技術（大量の情報から意味ある規則を導き出す技術）は進化の一途を辿っているも、意味論的な複雑な関係性が絡んでくるところでの判断を機械の器械的やりようでもってして代行させるには（人類の現行のマシンの検索能力および関係性抽出能力では）限界があるであろう——といったところでも機械はベイジアンネットワークという、統計とベイズ確率論の融合方式などを用いて類推処理をも上手くもなせるようになってきているとは言いが、[多重的ながらも「間接的」関係性特定]となると機械の抽出能力には未だ限界がある（たとえば機械には特定の映像作品に[性質の悪いやり方で隠喩的に犯罪を起こすことの前言]が含まれていた際に事件発生後、それを事後的に突き止める能力などは未だないだろう）——と判断、ここでは[[要素 A] から [要素 J] を具備にまつわる人力(人の手)によるマニュアル判断]を介在させてそれ以外の部でもってして入力データの「機械的」定型プロセスによる除外を実行するとの流れを想定・顧慮することとする）。

繰り返す。ここでは確率論の基礎となる対象の切り分けに際して世に膨大数多にある情報の中から取り立てて、

【第三者が容易に確認出来る刊行物とのかたちで流通している日本語文字数換算にして1万字以上(英語単語数においては3000語以上)の過去の「文献」記録(古典から現代小説などフィクション、そして、特定のトピックについて解説を加えているノン・フィクションら問わずもの文物)】

あるいは

【第三者が容易に確認できる商業作品として市場市中に流通している過去の「映像」記録(映画作品など)】

のいずれかにあたり、そして、先行して顧慮したものと差異が乏しい引用情報・仄聞(伝聞)情報を扱っているとの(公)文書を除外したもの

であり、なおかつもってして、

要素 A: [911 の事件の発生を事件発生前に先覚的に言及しているとの要素を具備している]

要素 B: [[ブラックホール] ないし [ワームホール] ないし(機序不明概念としての)[異界との扉] のどれか一つないし複数と明示的に結びつけられている]

要素 C: [粒子加速器と結びついている]

要素 D: [アトランティスと命名されての概念と関わっている]

要素 E: [古のトロイアにまつわる伝承との結節点 (1. 【叙事詩『イリアス』というトロイア崩壊にまつわるプロセスを扱った古典の際立っての構成要素】あるいは2. 【叙事詩『オデュッセイア』というトロイア崩壊にまつわるプロセスを扱った古典の際立っての要素】などとの結節点) を色濃くも具備している]

要素 F: [ヘラクレスの12功業と直接的に関わっているとの特性を具

備している]

要素 G: [爬虫類の知的異種族 ([聖書の蛇] や [悪魔] といった存在は除く) と濃厚に結びついている]

要素 H: [垣根としての五芒星・五角形と濃厚に結びついている]

要素 I: [キリスト教大系におけるサタンないしルシファーと「直接的に」結びついている]

要素 J: [聖書における禁断の果実と「直接的に」結びついている]

のいずれかの要素を帯びているものである

との情報「のみ」をもってして

[確率論の基礎になる【事象】の特定化に際して顧慮する情報]

とする — どの情報処理の手続き(後述)を定める— ことにする (きちんとご覧いただければ、お分かりかとは思いますが、膨大な数多なる数の対象がそこにある、たとえば、**要素 I: [キリスト教大系におけるサタンないしルシファーと「直接的に」結びついている]** といった要素や **要素 J: [聖書における禁断の果実と「直接的に」結びついている]** を帯びている、ある程度の尺の文献記録・映像記録などだけでも膨大な数多あるとのかたちともなっている)。

そも顧慮対象となる情報の色合いを規定した上で記すも、これより機械的に情報を選び分けするうえでの処理図「ら」も表記する情報処理のプロセスでは

[要素 A] から [要素 J] の各要素

のどの要素とどの情報処理対象データ(どの映画、どの文物といった個々ひとまとまりとなっているデータ)が紐付いているのかについてなんら感うことがないようにする、ナンバリングなしで処理手順で処理するといったかたちでの仕様を定める。

例示なせば、特定段階の情報入力 — この場合の[情報入力]とは[情報顧慮]とも置き換えてもよいものである— にあって(入力(顧慮)されたデータである)文物 X1 が [要素 A] および [要素 C] を具備している場合には文物 X1 に対するそもしたありようを [A-X1] と [C-X1] とナンバリングして記録、次いで、また別の段階での情報入力対象である映画 X2 が [要素 A] を具備している場合にはそもしたありようを [A-X2] と記録、同文の映画 X2 がまたもってして [要素 B] を帯びている場合には [B-X2] とナンバリングして記録するとのやりようでの分類をなす、魂の無い、自律的思考能力など本来的に皆無であるとの単純機械でも言われた通りに実行できるとの方式での分類をなす(処理対象に[要素 A] から [要素 J] のいずれかが具備されていると言えるのかの[判別]はさておきも [要素 A] から [要素 J] がそこに具備されているとのデータが入れ込まれているとのことが明確化しているのならば、処理対象の[分類]自体は「機械的」情報処理、アルゴリズムでことが済むかたちとなる)。

以上の分類のプロセス — 実にもってくどくも繰り返すが、膨大な数多なる世の中の[情報]から【日本語文字数換算にして1万字以上(英語単語数において3000語以上)の「過去の」確認容易な公共空間流通の文献記録として具現化しているもの】ないし【「過去の」市場市中に流通の映像記録として具現化しているもの】であり(ただしもって先行して顧慮したものと差異が乏しい、そのままのもの引用情報・仄聞(伝聞)情報を扱っているとの(公)文書は除外)、かつもってして、[要素 A] から [要素 J] のいずれかを具備しているとのもののみを[情報処理]の対象と見做し(それ以外は敢えて全部除外する)、その中で[要素 A] から [要素 J] の具備状況を一つの情報処理対象毎に A-X1、A-X2、C-

X1、C-X10などとナンバリングしていくとの機械的分類をなしもするプロセス—— を通じて

【いくつかの「色が付いた」(e.g. 文物 X1 に由来している、映画作品 X2 に由来しているなど「個別の色が付いた」) ユニークな切り分け要素ら ([要素 A] から [要素 J]) の束】

が分類・導出されてくる。

本稿でのベイズ主義に基づいての確率判断、その具体的概念や数式の説明は噛み砕いて後に詳説なす所存だが、ベイズ主義に基づいての確率判断ではそうもして導出されてきた【「個別の色が付いた」ユニークな切り分け要素らの束】をして同じくもの確率判断をなすうえでの材料 (【事象】と述べてもいい) の捕捉に役立てるとのやりようを採択する —— いいだろうか、履き違えていただきたくはないのだが、この段階ではまだ【数学】の話にはなんら入っておらず、【数学】の話を展開するうえで必要な舞台設定を整えるための【手順】の話、それもその【手順】にあつての間口のとっかかりの部にまつわつての話をなしているにすぎない——。

ここで直上よりその言及をなしだしているとの【「個別の色が付いた」ユニークな切り分け要素らの束】をどのように評価・活用していくのかについて — (委細についてはさらに続いての段階で詳説していくことにするとの中で) — おおよそのプロセスの説明をまずもって下になしたいと思う。

膨大数多なる世の中の「情報」から【日本語文字数換算にして1万字以上(英語単語数において3000語以上)の「過去の」確認容易な公共空間流通の文献記録として具現化しているもの】ないし【「過去の」市場市中に流通の映像記録として具現化しているもの】であり、かつもつてして、[要素 A] から [要素 J] のいずれかを具備しているとのもののみを
【情報処理】

の対象と見做す(先述)として、である。

そうした色つきの情報を含めて情報をいかように処理していくのかの【手順】について
【骨組みとしてのアバウトな構図】
をまずもって呈示しておく。

その点、膨大数多なる情報については続いて詳説なしていく段階的処理手順、【処理手順 1】から【処理手順 6】をもつてして"ふるい"にかけるように顧慮・活用していくこととする。

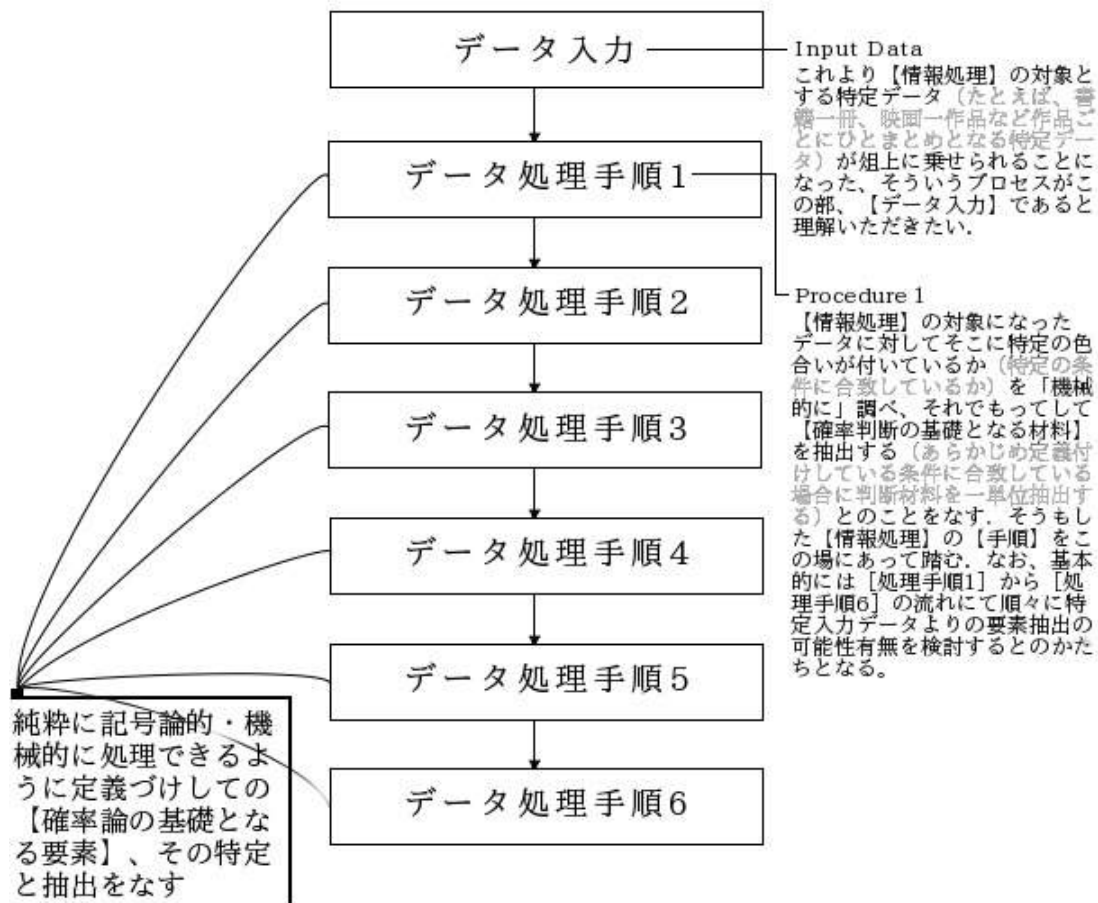
しかし、などと述べもしていることについて以降掲載の【処理手順 1】から【処理手順 6】の委細について説明しての処理図などを一目などいただいてもこの段階ではコンセプトについてご理解いただくことは困難かとも思う。であるから、できるかぎりコンセプトについて簡略化してさらに述べると、である。次のようなやりようになつわつての詳細なプロセス(情報処理手順)をこれより呈示しようというのであるとのこと、推し量っていただければ光栄である。

「あらかじめ色つきの情報であると捕捉されている「いくつかの」情報が【処理手順 1】から【処理手順 6】にて機械的に要素分析されるとの手順を定めもする。

の際、情報が【処理手順 1】の領域に流れると —— 機械的にそれが判断できるようにしている仕組み(後述)に応じて —— それらデータの【色つき度合いの色の濃さ】を「自動」判断、確率論の基礎にする上で【恣意性】がそこにあると「強」判断する (【偶然】であるとは考え難いと判断する) 上での【事象】(いいだろうか、先述のようにサイコロを振って1が出たといった【イベント】のことを【事象】と確率論では呼ぶ) を特定した(と判断する)との処理をなす。

またもつてして、【処理手順 2】から【処理手順 6】でも同様のことをなす。その点、【色つき度合いの濃さ】を自動判断する(純・機械的に判断する)との処理は下位処理手順の方がより薄くもの関係性を特定化するように処理手順を定めているため、下位手順で【事象】が捕捉される場合、それは確率判断において【恣意性】がそこにあると判断する上での否定「的」材料となりがちとなる。……」

単純化して記せば、【任意のデータ】一単位毎に対して【以下の流れ】での情報処理をなしていく（そして、十分な数の判断材料が出揃うまで、多数のデータに対して同じくもの処理をなしていく）とのかたちとする。



（上のそれだけ骨組みの図、この段階ではよくご理解いただけないかもしれないが、さまざまな【事象】を捕捉するための段階的処理手順を定めているとの図は

【何重にも編み目状のふるい(フィルター)が内部に設けられている容器】

の如きものであると見ていただきたい。

その容器に情報という名の液体をジャブジャブと注ぎ込んだとしよう。情報の中には大小の問題となる関係性が【石】のように含まれている。それら関係性を（ここで問題としている説明の便宜として引き合いに出している）容器にあっては段階捕捉する、情報という液体の中に大小の石のように含まれているそれらを各々の段階のふるい(フィルター)で捕提取集するとのかたちとなる。

に際しての捕捉集塵傾向に関わることとして述べれば、上のフィルターの方が編み目が粗い。となれば、そこで捕捉されてくる「関係性の石」はより大きな、露骨でゴツゴツしているものとなる。他面、下にいくにつれてフィルターが目が細かい。より微細なる、本来的には無視してもいいような細かい「関係性の石」までをも集塵することになる。

そうもして上から下への流れの中で捕捉していく関係性の石らをもってして【事象】と見ることとするわけであるが、捕捉の階層（それを捕捉したフィルター的位置／上層のフィルターか下層のフィルターか）に応じてそれら【関係性の石】（転じての【事象】）が等級付けされる（より大きい石の方が重篤なものと判ずる）との手順を定めての中で捕捉されてくる【事象】の比率に応じて所与の（あらかじめ設定している）仮説らの成立しやすさ度合いを確率論で判断するとのこととなる。……。以上のようなことをこれよりなそうと

おおよそアバウトな骨格としての処理にまつわっての概念を上にて呈示したところで、である。続きもして具体的にどういふスクリーニング・分類付けを膨大数多なる世の情報に対して（上掲図にも記載しての）【データ処理手順1】から【データ処理手順6】とのかたちでなすのか、よりもって具体的な処理手順についての記載をこれよりなす。

これより膨大数多なる世に横溢する【情報】の中から確率論基礎となる【事象】に関わること —たたとえば、それは骰子を振った折の1から6の目の出方に関わることか— といったこと— を切り分けするべくもの【情報】処理手順を記述する。そちら情報処理手順にあつては、いいだろうか、「段階的に」情報色合いを切り分けていくとの形式をとることにし、ここでは【手順1】から【手順6】と分けもしての式でそのありようを事細かに定めている（ただし

（以下、下述するところはさらにもって後の段にて表記するアルゴリズム（機械的情報処理フロー）に見る処理手順に対する細かい自然言語による解説となる。あまりにもややこしいと思われるのならば、あるいは、そこまで検証する必要も無いなどと思われるのならば、放念いただいても構わないが、検討意欲ある向きにあつては、できれば、どういうことをやっているのかとの点についての「おおよその概要」の把握をなしていただければ、と考えている）

【切り分け手順1】（最優先切り分け手順）

（先述のように）[要素 A]は

要素 A: [911 の事件の発生を事件発生前に先覚的に言及しているとの要素を具備している] (e.g. [[911]と[双子]との言葉の双方と関わる式での描写を目立ってなしている) [ニューヨークのビル爆発とペンタゴンの攻撃を同時に描き、また、911 と親和性が高い数値列を用いている] 等等)

と定義付けしているものとなり、その[情報としての特異性]が際立っている（問題はそれが[ただの偶然の産物]なのか[恣意の賜物]なのかであるとしつつも取りあえずもそのことは置いておいて（最終的な確率論にての見極め対象として取りあえずもは置いておいて）の話として、である）。

従つて、その特異性に鑑（かんが）み、

「特定の対象（たとえば文物 X1 や映画作品 X3 等等）ら二つより**要素 A** [と]その他の別の要素の重なり合い関係をワンセット抽出した段階で」それら要素らを

[一回しか顧慮の対象に出来ないもの]

として用いて

[「特定事実関係蓋然性「強」」の関係性判断材料（便宜的に [判断材料 Black] とする)]

を切り分けしたこととする（こちら切り分けプロセスも無論、[アルゴリズムの問題]として機械的に処理できるものとして定義している）。

との情報処理[手順]を定めることとする（具体的処理手順のフローチャート(処理手順記述流れ図)も下にて表記するが、ここでの手順は流れのデータ処理プロセスにての第一処理手順として位置付けることとする）。

[表記の情報処理の一例として]

【水と石をすくい取るうでのふるい】の喩（たと）えの部を再読いただきたい次第である。

たとえば、である。

筆者が本稿にて取り上げている事例として

映画『スーパーマリオ 魔界帝国の女神』（額面上は荒唐無稽子供向け映画作品にしかすぎないとの作品）

という作品については

（先述の[要素 A]に該当するところとして）

[911の予見見作品]（表記作品は出典(Source)紹介の部 27にて説明のように[1993年初出作品として上階に風穴が開き、片方が崩れるツインタワーを(飛行物体横切り描写とあわせ)ワンカットで描いての作品]となる）

にして、なおかつ、

（先述の[要素 B]に該当する）

[[ブラックホール]ないし[ワームホール]ないし(機序不明概念としての)[異界との扉]のいずれかでないし複数と明示的に結びつけられている作品]（表記作品は出典(Source)紹介の部 27にて説明のように[異界の扉が開かれるとの筋立ての作品]となる）

にして、なおかつ、

（先述の[要素 G]に該当する）

[爬虫類の知的種族の侵略とのモチーフと濃厚に結びついている作品]（表記作品は出典(Source)紹介の部 27にて説明のように[恐竜人が侵略を企図しているとの筋立ての作品]となる）

となっている。一何度も何度も繰り返し述べたいところなのだが、そうした要素らを情報処理の対象となる特定映像作品が複数帯びていることが[偶然]か[恣意的結果]なのかまでの判断は「この段階では」問題にしていない(同じくもの判断をなすための確率分析の材料(【事象】)を「機械的処理にて」集めているにすぎない)。

他面、本稿にての出典(Source)紹介の部 28から出典(Source)紹介の部 33-2にてその問題性について具体的摘示なさんとしているとの物理学者キップ・ソーンの手になる作品、

BLACK HOLES & TIME WARP Einstein's Outrageous Legacy 邦訳版『ブラックホールと時空の歪み アインシュタインのとんでもない遺産』（原著の方は1994年刊行、邦訳版は白揚社より1997年刊行）

という科学関連書籍は

（先述の[要素 A]に該当するところとして）

[911を予見しているが如く作品]（表記作品、本稿の出典(Source)紹介の部 28から出典(Source)紹介の部 33-2にて原著および訳書よりの原文引用それのみから示しているところとして[[「双子」と「911」と結びつく概念(双子のパラドックス)を主軸にしての思考実験]の「位置的」スターティング・ポイントが[[2001年9月11日]の略記とそのまになる数値列を郵便番号上のはじまりとする一画]に設定され、かつ、その実験の「時間的」スターティング・ポイントが[2001年9月11日]と通ずる日付表記に設定されている(他の事情からもそのように判じられるようになっている)との作品]となっている）

※【(再度もって
しての)外挿表記
としまして】：こ
でのそのように
本稿では「頻繁
に」文字色と背
景色を変えての
【出典紹介部】呈
示のための表記
をなしています。
本稿全体の指し
示し内容の重大
性を顧慮して【後
追い可能な典
拠】の細部に至る
までの呈示からし
て必須事項とら
えているからでは
ありませんが、無
論にして、後追
い「可能」である
だけではなく後追
い「容易」である
必要もあるとの認
識が書き手この身
にはございます。
にまつわって後
追い「容易」性
の方をもちます
方式、すなわち、
【都度、即応的
にすべての出典
紹介部の内容を
即時確認するた
めの方式】を本稿
にあつての冒頭
p.2で細かく紹介
しておりますので
【頻繁に本稿の
典拠内容の確認
をなす必要】を
感じておられる
の方々におかれ
ましてはそちら本
稿 p.2で案内さ
せていただい
ております方式
を採択いただ
ければと考
えます(典拠
内容確認を容
易・即応的にな
すとのその紹介
方式とは本稿を
収めたPDF文書
を別名保存で二
ファイル用意し、
うち、片方を閲
覧用、もう片方
を(巻末数ページ
の出典紹介部一
覧表記部「だけ」
を印刷して役立
つもの)出典確
認用の電子文書
として活用いた
だくとの方式とな
ります)

にして、なおかつ、

(先述の[要素 B]に該当する)

[[ブラックホール] ないし [ワームホール] ないし(機序不明概念としての)
[異界との扉] のいずれかでないし複数と明示的に結びつけられている作品]
(表記作品は本稿にての上と同じくもの出典紹介部にて論じ、かつ、表記作
品タイトルそれ自体がそうであることを示しているように[ブラックホール]及び
[通過可能なワームホール]をテーマとしているものとなる)

となっている。

であるから、映画『スーパーマリオ 魔界帝国の女神』および科学関連書籍『ブ
ラックホールと時空の歪み アインシュタインのとんでもない遺産』の両二作品が情報
としてのそれぞれ別単位のデータとして捕捉(入力)され、情報処理手順 1(ここでの
切り分け手順 1)にて処理されるとのこととなると、

(便宜的に作品にコード X5 などと振って[A-X5]などのかたちでデータ処理しても
いいのだが、ここではタイトルをそのまま付しての表記をなすとして)

[A-『スーパーマリオ 魔界帝国の女神』] (映画『スーパーマリオ 魔界帝
国の女神』から抽出された要素 A)

[B-『スーパーマリオ 魔界帝国の女神』] (映画『スーパーマリオ 魔界帝
国の女神』から抽出された要素 B)

[A-『ブラックホールと時空の歪み アインシュタインのとんでもない遺産』]
(書籍『ブラックホールと時空の歪み アインシュタインのとんでもない遺産』
から抽出された要素 A)

[B-『ブラックホールと時空の歪み アインシュタインのとんでもない遺産』]
(書籍『ブラックホールと時空の歪み アインシュタインのとんでもない遺産』
から抽出された要素 B)

との固有要素が自動抽出されもすることになり(色つきのデータ入力の問題として、で
ある)、といった中で、「(確率計算と機械的処理手順の問題上)一回しか顧慮の対象
としてなせない材料として」、

[「特定事実関係蓋然性「強」」の関係性判断材料 (便宜的に[判断材料
Black]とする)]

が「一単位」切り分けされてくることになる —先掲の[切り分け手順 1]の定義に基づ
き、そういうことになる— (このことをここでは例示の話として呈示している。その点、確
率論に明るく、かつ、聡い向きは『そうもしたかたちでの判断材料を複数、アルゴリズ
ムにて選り分けして、その判断材料を(さらに微に入っの)[事象]として顧慮、[それ
らデータ(判断材料)の存在「想定」比率をもってしてあらかじめ Likelihood[尤度]と
して定めもしての複数仮説らに対する事前確率・事後確率の推移を分析しての仮説
検討]をなしていくつもりなのか』といったことまでこの段階からして慮りいただけるか
しれない、とも思うのだが、「その通りである」と申し述べつつ、のような[(初見の人間
から見れば)何を言っているのか理解に苦しむであろうとの分析の方式]が適正なもの
としてなせるとの説明、その説明も無論、続いての段階で懇切丁寧になしていく。

(処理手順 1 にあつての情報処理の一例表記はここまでとする)

以上のような「切り分け手順 1」にて処理をなすとのケースは厳密に定められている

とのかたちにする。まずもってAを具備していないとその要素は「切り分け手順1」にて情報処理されることはない(続いての情報処理手順にて処理されることになる)。アルゴリズム(アルゴリズムというものが一体、いかなるものかについては下にかなり細々とした図示をなすことにする)にて容易に分岐なせるポイントとしてそのことを厳密に定義する。また、Aだけ具備していてもその他の要素を具備していないとこれまた「切り分け手順1」にて情報処理されない、関係性顧慮の材料とされないことになる。単純な処理フローにて容易に分岐定義なせるところとしてそうも設定する(当然に下にてフローチャート方式の処理手順図示をなす)。

上のことを踏まえたうえで

[Aの要素も具備していない(ないしはAの要素しか具備していない)との分析対象物よりの抽出要素]

は続いての「切り分け手順2」「以降」の処理にて確率的分析の材料 —材料 Black, 材料 Grey, 材料 White とここでは(計算の労を厭うての)三類型に分類しての材料—として選り分けていくこととする。

[切り分け手順2] (優先度として第二順位の情報処理手順)

さて、次いで、

要素 B:[ブラックホール]ないし[ワームホール]ないし(機序不明概念としての)[異界との扉]のどれか一つないし複数と明示的に結びつけられている] (e.g.[特定フィクションが[ワームホール]を登場させている][特定ノンフィクションが[ブラックホール]を作中の主要テーマに据えている]等等)

との要素の特殊性に鑑(かんが)みて、同要素と

要素 D:[アトランティスと命名されての概念と関わっている] (e.g.[特定フィクションが[伝説の沈んだ大陸アトランティス]に目立って言及している]等等)

要素 E:[古のトロイアにまつわる伝承との結節点 (1.【叙事詩『イリアス』というトロイア崩壊にまつわるプロセスを扱った古典の際立っての構成要素】あるいは2.【叙事詩『オデュッセイア』というトロイア崩壊にまつわるプロセスを扱った古典の際立っての要素】などとの結節点)を色濃くも具備している] (e.g.[特定フィクションが[トロイアの木製の馬]と直接的に結びつく作中要素を具備している][特定フィクションが叙事詩『オデュッセイア』や叙事詩『イリアス』(の主要登場キャラクター)と結びついている]等等)

要素 F:[ヘラクレスの12功業と直接的に関わっているとの特性を具備している] (e.g.[ヘラクレス第11功業と関わる]等等)

要素 H:[垣根としての五芒星・五角形と濃厚に結びついている] (e.g.[特定フィクションが垣根としての五角形を作中の重要要素に据

えている]等等)

要素 I: [キリスト教大系におけるサタンないしルシファーと「直接的に」結びついている] ([特定フィクションが聖書におけるサタンを作中にて悪役として登場させている]等等)

要素 J: [聖書における禁断の果実と「直接的に」結びついている] (e.g. [特定フィクションが聖書における禁断の果実のことを扱っている])

の各要素らのうち、いずれかもう一つの要素を具備する情報処理対象のありようが[二つのデータ(としての顧慮作品)から「ワンセット」以上、抽出された段階]にてそれら関係性を二度と再び顧慮できないとの前提の下に

[「特定事実関係蓋然性「強」」の関係性判断材料 (便宜的に[判断材料 **Black** オプション]と呼称する)]

が得られるとの処理手順を定める(便宜的に[処理手順 2]とする)。

ただし、ここで(処理手順 1 に劣後して情報処理すると定義付けなしてとの)同処理手順 2 にあっては

要素 B: [[ブラックホール]ないし[ワームホール]ないし(機序不明概念としての)[異界との扉]のどれか一つないし複数と明示的に結びつけられている] (e.g. [特定フィクションが[ワームホール]を登場させている][特定ノンフィクションが[ブラックホール]を作中の主要テーマに据えている]等等)

との要素と

要素 C: [粒子加速器と結びついている] (e.g. [特定文物が粒子加速器に関わるものである]等等)

要素 H: [垣根としての五芒星・五角形と濃厚に結びついている] (e.g. [特定フィクションが垣根としての五角形を作中の重要要素に据えている]等等)

の両立は除外することとする(データ処理にまつわる機械的処理手順、すなわち、アルゴリズムの条件付けで「はじく」)。

何故除外をするのか。第一に[ブラックホールやワームホールの類]と[加速器]の類が結びついているのは 一世間的言われようの問題として 一 さして問題にならないことであると見立てられるからである (厳密には[1999年「以前」ではそうした結びつきは不自然なことである]との[時期]に依拠しての分析もなせるのだが(本稿にて前半部の内容は予言「的」言及の問題としてそういうことを扱っている)、それは置く)。

また、第二に[何らかの垣根・境界としての役割を帯びての五芒星・五角形の類]が[異界との境界]そのものとなっているとのことも相当昔の文物に遡って述べられるところとしてよくもそうもなっている 一たとえば、[出典\(Source\) 紹介の部 72](#)を参照のこと

— ところであり、といったものらとしての五芒星・五角形が[異界の扉]と結びつけられていることの意味性もここでは除外するほどに顧慮しないことと敢えてもする（同じくもの併存問題「も」アルゴリズムで「はじく」。ちなみに、[五芒星や五角形の類(要素 H 関連事項)が異界のゲート(要素 B 関連事項)と結びつけられてきた]ということについては、である。[五芒星と五角形の無限に続く相互内接関係]が[極小の領域に向けての力学]を体現しているものとなっていることが知られており(文献引用なしてきたように数学史にて歴年そういう物言いがなされてきた)、そちら [極小の領域]にての暴力的改変作用たる [原子核破壊] がマンハッタン計画で利用されることになった、そう、[ペンタゴン(正五角形をとる米国国防総省)主導で行われて核兵器登場をもたらし、かつ、今日にあっての諸々の粒子加速器機関の産みの親ともなったマンハッタン計画] で最大限有効に利用されることになったとのことがありもし、かつ、そのことがブラックホールの人為生成挙動と結びつくようになって見えてくる(というのも加速器におけるブラックホール人為生成とは極小領域にての暴力改変作用たる原子核破壊の中で招来される事態であるからである)とのことなども(意味上の分析にあって重くも問題となりうるようなところとして)観念されるのではあるが、本稿の先立っての段で取り上げもしてきたそうした「複雑な」関係性の問題はここでのデータ処理(計数的分析)では [意をなすことではない] と敢えても完全無視しての情報処理を ([要素 B] と [要素 H] の共有関係についても) なすこととする — そこまで顧慮するとさらにもって話がややこしくなるからである—)。

そうした除外項目を設けていることに関しては — (処理手順の背後にある[思想; 発想法]について後にて当然によりもって細かくも解説する所存ではあるが) — [結びつく傾向が「本然的特性として」強くもある関係性] などをもってして [[偶然] か [恣意] かの機微なる選り分けのための材料抽出プロセスにての [恣意性判断] の支持材料(便宜的に材料 Black と呼ぶこととしている【事象】)] として分類付けして顧慮することはできはしないし、してはならないとの判断が背景にある(そうした関係性は「一般に」【恣意性】判断の支持材料としてではなく、【偶然性】判断の支持材料とするとの判断がある)。

[表記の情報処理の一例として]

処理手順 2 の一例としてここでは

『**「第二の」エメラルドタブレット**』 (同作品は、本稿の **出典(Source) 紹介の部 34** にて取り上げている表層的には「より以前より存在していたパルプ雑誌掲載小説内容を受けての神秘家との人種による妄言録」に留まるとの 1939 年初出の作品となる)

『**リアンの剣**』 (同作品は、本稿の **出典(Source) 紹介の部 65(6)** から **出典(Source) 紹介の部 65(9)** にて取り上げているように原著オリジナルが(改題前の作品として) 1949 年に刊行されているとの小説作品となる)

のこたらを取り上げてみることにする。

以上作品らについてまずもって

『**「第二の」エメラルドタブレット**』

という一品については

([要素 B]に該当するところとして)

[機序不明概念としての][異界との扉]を登場させている作品] (表記作品は出典(Source)紹介の部 34にて説明のように1939年初出作品として【蛇の種族のアトランティスに対する[異次元](異界)の扉(境界)を介しての支配】を描く作品となっている)

にして、なおかつ、

(先述の[要素 D]に該当する)

[アトランティスをモチーフとしている作品] (上述)

にして、なおかつ、

(先述の[要素 G]に該当する)

[爬虫類の知的異種族([聖書の蛇]や[悪魔]といった存在は除く)と結びついている作品] (上述)

となっている——再度繰り返すが、そうした要素を情報処理の対象となる特定作品が複数帯びていることについてそれ単体では[偶然]か[恣意的結果]なのかの判断まではなさない(そうした判断をなすための確率分析の材料を前段階として「機械的処理にて」集めているにすぎない)——。

次いでもってして

『リアンの剣』

という作品については

([要素 B]に該当するところとして)

[半ばブラックホール的なもの、半ば機序不明概念たる[異界との扉]と なっているものも登場させている作品] (表記作品は本稿にての出典 (Source) 紹介の部 65 (6) で原文引用して紹介しているように主人公が[リアンの遺産]と作中表される[真っ黒な異空間(時空間に穿たれた穴)]を越えて過去の火星に降り立つとの作品となっている)

にして、なおかつ、

([要素 C]に該当するところとして)

[粒子加速器と結びつくものを意味深くも登場させている作品] (表記作品は本稿にての出典(Source)紹介の部 65 (7)、出典(Source)紹介の部 65 (8) で原文引用して紹介しているように主人公が[リアンの遺産]と作中表される[真っ黒い異空間(時空間に穿たれた穴)]を越えて過去の火星の遺跡に降り立つことになったと設定付けされているわけだが、そちら設定では主人公はプロトンガン(陽子銃)なるフィクション上の武器を持って過去に跳んだ、とのかたちとなっており、その陽子銃(なるもの)で過去の火星の遺跡の壁面を同・陽子銃(プロトン・ガン)がエネルギー切れを起こすまで破壊したとの描写がなされている。対して、LHCをはじめ加速器もまた、陽子ビームを発射するものであり、ある種、巨大陽子銃とも言えるようになっている)

([要素 G]に該当するところとして)

[[蛇の種族]の間接統治と侵略を描いている作品] (表記作品は本稿にて

の**出典 (Source) 紹介の部 65 (9)**で原文引用して紹介しているように[リアノンの遺産] (主人公が過去に跳ぶことになったとの黒い穴も[リアノンの遺産]と描写される)を狙う蛇の種族の暗躍と間接統治を描く作品である)

となっている。

以上より、『「第二の」エメラルドタブレット』および『リアノンの剣』が相次いでデータとして入力された場合(他のデータが入力されていない中でそれらのみが入力された場合)、ここ[切り分け処理手順2]では、(『リアノンの剣』が直上言及のような[要素C]を帯びていることまでは顧慮の外に置くとし)、

[B-『「第二の」エメラルドタブレット』]

[G-『「第二の」エメラルドタブレット』]

[B-『リアノンの剣』]

[G-『リアノンの剣』]

とのありようを自動抽出しもすることになる。そして、それらを(確率計算と機械的処理手順にてそのように定めてのこととして)「一回しか顧慮の対象としてなせない材料として」用いて、

[「特定事実関係蓋然性「強」」の関係性判断材料 (便宜的に[判断材料 Black オプション]とする)]

を「一単位」、自動的に切り分けすることにもなる([ブラックホール・ワームホール・異界の扉]と[爬虫類の異種族]を結びつけている作品らにまつわる特定の関係性を一単位抽出したとする)

(処理手順2 にあつての情報処理の一例表記はここまでとする)

以上のような[切り分け手順2]にて処理がなされるとのケースは厳密に限られている(とのかたちとする)。まずもって[切り分け手順1]を終えておらずそちら[切り分け手順1]のデータ処理領域に保持され続けているとのデータに対しては[切り分け手順2]のデータ処理領域で切り分け処理されることはない(と機械的処理の厳密さを求めるうえで定義する 一機械的処理手順、すなわち、プログラマがプログラム可能であるとのアルゴリズムに落とし込んでの処理手順については下に図示、委細呈示することとする)。また、[要素B]との要素を具備していないデータ(たとえばもってしての映画作品や文物などの各々一作品)もここ切り分け処理手順2の処理対象とはならない(とアルゴリズムと呼ばれる方式にて厳密に定義する)。字面だけ見る限りでは何を述べているのか分かるか、とも思うのだが、いいだろうか、具体的かつ細かくもの処理手順のフローチャート(処理手順流れ図)をさらに続いての段で示すため、それでもって(ここ[付録と位置付けての確率論展開の部]の細かきところまで検討しようとの向きにあつては)何を述べているのか検証いただけることか、とも思う(尚、IT業界ではプログラマやシステムエンジニアの類がよく鉛筆で紙に書いたアルゴリズムに仮想的にデータを流してみるとのこことをやるのが知られるが、本稿でもそうしたことに堪えうる処理手順図をより汎用性を高めて記述しているつもりではある)。

[切り分け手順3] (優先度として第三順位の情報処理手順)

ここ [切り分け手順3] では

要素 C: [粒子加速器と結びついている] (e.g. [特定文物が粒子加速器に関わるものである] 等等)

要素 D: [アトランティスと命名されての概念と関わっている] (e.g. [特定フィクションが [伝説の沈んだ大陸アトランティス] に目立って言及している] 等等)

要素 E: [古のトロイアにまつわる伝承との結節点 (1. 【叙事詩『イリアス』というトロイア崩壊にまつわるプロセスを扱った古典の際立っての構成要素】あるいは 2. 【叙事詩『オデュッセイア』というトロイア崩壊にまつわるプロセスを扱った古典の際立っての要素】 などの結節点) を色濃くも具備している] (e.g. [特定フィクションが [トロイアの木製の馬] と直接的に結びつく作中要素を具備している] [特定フィクションが叙事詩『オデュッセイア』や叙事詩『イリアス』(の主要登場キャラクター) と結びついている] 等等)

要素 F: [ヘラクレスの 12 功業と直接的に関わっているとの特性を具備している] (e.g. [特定文物がヘラクレス第 11 功業と関わる] 等等)

要素 G: [爬虫類の知的異種族 ([聖書の蛇] や [悪魔] といった存在は除く) と濃厚に結びついている] (e.g. [特定フィクションが知能を持った蛇の種族を登場させている] 等等)

要素 H: [垣根としての五芒星・五角形と濃厚に結びついている] (e.g. [特定フィクションが垣根としての五角形を作中の重要要素に据えている] 等等)

要素 I: [キリスト教大系におけるサタンないしルシファーと「直接的に」結びついている] ([特定フィクションが聖書におけるサタンを作品中にて悪役として登場させている] 等等)

要素 J: [聖書における禁断の果実と「直接的に」結びついている] (e.g. [特定フィクションが聖書における禁断の果実のことを扱っている])

の各要素らのうち、いずれか三つの要素を具備しているとのありようが(二つの顧慮データ(としての作品)より) [関係性]として「ワンセット」抽出された段階でそれら関係性を二度と再び顧慮できないとの前提の下に

[「特定事実関係蓋然性「強」」の関係性判断材料 (便宜的に [判断材料 Black オプション] と呼称する)]

を切り分けるとの処理手順を定める。

但し、要素 H と要素 I と要素 J の三要素は —「それらが結びついているのは不自然ではない、むしろ、自然なことである」ために— ただの一要素しか共有データとして認めない(との処理手順を定める。については「自然言語にての字面だけでは何を述べているのか理解頂けないだろう」とのここでの処理手順を含むフローチャート(処理手順記述流れ図)も当然に下に付す)。

[切り分け手順 4] (優先度として第四順位の情報処理手順)

情報処理にて[切り分け手順 1] から[切り分け手順 3]の対象にそもそもならないデータはここ [切り分け処理手順 4]の対象とする。につき、ここ [切り分け手順 4] では

要素 A: [911 の事件の発生を事件発生前に先覚的に言及しているとの要素を具備している] (e.g. [[911]と[双子]との言葉の双方と関わる式での描写を目立ってなしている)[ニューヨークのビル爆発とペンタゴンの攻撃を同時に描き、また、911 と親和性が高い数値列を用いている]等等)

との要素「のみ」しか有さぬデータ(情報処理対象としての作品)が二つ捕捉された時点でそれらを「確率計算と機械的処理手順の問題上」一回しか顧慮の対象とせない材料として」用いて、

[「特定事実関係蓋然性「中」」の関係性判断材料 (便宜的に[判断材料 Grey オプション]とでもしておこう)]

を「一単位」切り分けることとする。

[表記の情報処理の一例として]

ここ [情報処理手順 4] の切り分け例を挙げておく。情報処理の対象となるデータ(膨大数多なる世の中の[情報]から「日本語文字数換算にして1万字以上(英語単語数において3000語以上)の「過去の」確認容易な公共空間流通の文献記録として具現化しているもの」ないし「「過去の」市場市中に流通の映像記録として具現化しているもの」)であり(ただしもって先行して顧慮したものと差異が乏しい、そのままのもの引用情報・仄聞(伝聞)情報を扱っているとの(公)文書は除外)、かつもってして、すくなくとも [要素 A] から [要素 J] のいずれかを具備しているとのデータ)として次の事例が挙げておく。

映画『タワーリング・インフェルノ』(1974年より米国にて公開開始の映画)
映画『ルパン三世 くたばれ! ノストラダムス』(1995年封切りの日本国内荒唐無稽アニメ映画)

以上の作品らにつき、切り分け処理手順 4 にあつて問題視するうえでは[要素 A]、すなわち、

要素 A: [911 の事件の発生を事件発生前に先覚的に言及しているとの要素を具備している] (e.g. [[911]と[双子]との言葉の双方と関わる式での描写を目立ってなしている)[ニューヨークのビル爆発とペンタゴンの攻撃を同時に描き、また、911 と親和性が高い数値列を用いている]等等)

との要素を具備していることのみが問題になる(よう処理フロー定義をなしている)。

まずもって、

『タワーリング・インフェルノ』

に関しては

(先述の[要素 A]に該当するところとして)

[ツインタワーと結びつくようなかたちで原作小説からの作品設定流用がなされている世界最高層のビル(映画ポスター表示にツインタワー上のもので描かれているビル)が炎上して多くの閉じ込められた人間に災厄がもたらされる/結局、ビルは「消化のために C4 爆弾で爆破される」ことになるのだが、の際、[116]との 180 度回転させると 911 と結びつく数値がワンカット表示されてくるとの作品] (出典(Source)紹介の部 106 から 出典(Source)紹介の部 106(3))

となっている。

対して、

映画『ルパン三世 くたばれ！ノストラダムス』(1995 年封切りの日本国内荒唐無稽アニメ映画)

に関しては

(先述の[要素 A]に該当するところとして)

[ツインタワーとそのままたに見立てることもなせるとのビル —かつて世界最高層ビルとしての立ち位置にも一時期あったとの現実世界の(今は倒壊した)ツインタワー、そのツインタワーの谷間にかつて据え置かれていた[ザ・スフィア(巨大な球形オブジェ)]のことを露骨に想起させるような[巨大な球形のバランサー]が建物が二つに分かれた谷間に据え置かれているとの設定の「世界最高層の」ビル— が爆破されるとの筋立ての作品 / フィクション上のドゥームズデイ・カルト (世界の終焉の予言を自作自演して教勢を伸張させようとしているとのノストラダムス教団なるフィクション上でのカルト) が作中にてリモート・コントロールで飛行機ハイジャック・テロ後のジェット機爆破を実現しており、飛行機テロに決着をつけたのと同様の手法、リモート・コントロールによる爆破が(ツインタワーと描写上結びつく)ビルに対して同じくものカルトによってなされているとの設定が採用されもしている作品]) (出典(Source)紹介の部 107 から 出典(Source)紹介の部 107(2))

となっている。

以上より

(便宜的に作品にコード X5 などと振って[A-X5][A-X6]などのかたちでデータ処理してもいいのだが、ここではタイトルをそのまま付しての表記をなすとして)

[A-『タワーリング・インフェルノ』]

[A-『ルパン三世 くたばれ！ノストラダムス』]

との関係性を、(確率計算の基礎データ収集にあつての機械的処理手順の問題として)、「一回しか顧慮の対象となせない材料として」、

[「特定事実関係蓋然性「中」」の関係性判断材料 (便宜的に[判断材料 Grey オプション]と呼称する)]

とのかたちで一単位切り分ける (:再度、繰り返そう。確率論に明るく、かつ、聡い向きは 『判断材料を複数、アルゴリズムにて選り分けして、その判断材料を[データ]と

して顧慮、[データ(判断材料)の比率をあらかじめ Likelihood[尤度]として定めての仮説に対する事前確率・事後確率の推移を分析しての仮説検討]をなしていくつもりか』といったことまでこの段階からして慮りいただけるかしれないな、とも思うのだが、「その通りである」と申し述べつつ、のような[(初見の人間から見れば)何を言っているのか理解に苦しむであろうとの分析の方式]が適正なものとしてなせるとの説明、その説明も無論、続いての段階で懇切丁寧になしていく所存である)。

ここでの

【「特定事実関係蓋然性「中」」の関係性判断材料（便宜的に[判断材料 Grey オプション]と呼称する）】

とはいくつかの仮説の検討をなすための材料として切り分けているものとなる。そして、それら仮説とは(後にも説明するが)[執拗性を伴っての巨視的な意味での恣意性]がそこにあるものなのか、おおよそもってしてただの[偶然]として特定の関係性が具現化しているにすぎないのか、とのことにまつわる仮説として「純・計数的に」定義・構築するものらとなる(後の段にて詳述するが、尤度設定という行為にて仮説としての枠組みを「純・計数的に」定義・構築するものらとなる)。

尚、以上問題視した『タワーリングインフェルノ』と『ルパン三世 くたばれ！ノストラダムス』とのツインタワーに比べ見られるものを爆破するとの映画らには
[フリーメーソン・シンボリズムと通底する側面]

もが両作共々に伴っているのだが(特に前者にてはそれが露骨となる、といったことについては本稿にての[出典(Source)紹介の部 106(4)]から[出典(Source)紹介の部 106(6)]および[出典(Source)紹介の部 107(2)]に後続する段でそれぞれ解説してきたことである)、意味論的分析に大いにからめて然るべきとのそうした要素についてはここでの計数的分析・確率論分析にあっては割愛、顧慮しないものとしての敢えてもデータ処理をなすこととする。—そこまで顧慮対象にしての確率的分析のスキームを構築することも当然にできたのだが、基本的に大学生向けの(ところを高校生程度の識見でも理解出来るところの水準に落とし込んで)計数的分析までなしてのところで(多く下らぬ人間ばかり揃えたなといった風情の)陰謀論者らの領域の話柄であろうと見られてもつまらぬ、と考へ、といったことは顧慮対象外とすることとした(と断っておく)。

[切り分け手順 5] (優先度として第五順位の情報処理手順)

ここ [切り分け手順 5] では [切り分け手順 4] までの検討がなされた段階で

要素 B: [[ブラックホール] ないし [ワームホール] ないし(機序不明概念としての) [異界との扉] のどれか一つないし複数と明示的に結びつけられている] (e.g.[特定フィクションが[ワームホール]を登場させている][特定ノンフィクションが[ブラックホール]を作中の主要テーマに据えている]等等)

要素 C: [粒子加速器と結びついている] (e.g.[特定文物が粒子加

速器に関わるものである]等等)

要素 D:[アトランティスと命名されての概念と関わっている] (e.g. [特定フィクションが[伝説の沈んだ大陸アトランティス]に目立って言及している]等等)

要素 E:[古のトロイアにまつわる伝承との結節点 (1.【叙事詩『イリアス』というトロイア崩壊にまつわるプロセスを扱った古典の際立っての構成要素】あるいは2.【叙事詩『オデュッセイア』というトロイア崩壊にまつわるプロセスを扱った古典の際立っての要素】などとの結節点)を色濃くも具備している] (e.g.[特定フィクションが[トロイアの木製の馬]と直接的に結びつく作中要素を具備している][特定フィクションが叙事詩『オデュッセイア』や叙事詩『イリアス』(の主要登場キャラクター)と結びついている]等等)

要素 F:[ヘラクレスの 12 功業と直接的に関わっているとの特性を具備している] (e.g.[特定文物がヘラクレス第 11 功業と関わる]等等)

要素 G:[爬虫類の知的異種族([聖書の蛇]や[悪魔]といった存在は除く)と濃厚に結びついている] (e.g.[特定フィクションが知能を持った蛇の種族を登場させている]等等)

要素 H:[垣根としての五芒星・五角形と濃厚に結びついている] (e.g.[特定フィクションが垣根としての五角形を作中の重要要素に据えている]等等)

要素 I:[キリスト教大系におけるサタンないしルシファーと「直接的に」結びついている] ([特定フィクションが聖書におけるサタンを作中にて悪役として登場させている]等等)

要素 J:[聖書における禁断の果実と「直接的に」結びついている] (e.g.[特定フィクションが聖書における禁断の果実のことを扱っている])

の各要素らのうち、いずれ二つ以上の要素を具備するデータからの関係性が(顧慮されているデータとしてのふたつの作品らより)「ワンセット」、抽出された段階でそれら関係性を二度と再び顧慮できないとの前提の下に、

【「特定事実関係蓋然性「中」」の関係性判断材料 (便宜的に[判断材料 Grey オプション]と呼称することとする)】

を「一単位」切り分けることとする (但し、留保条件として【[要素 B]と[要素 C]】、【[要素 H]と[要素 I]】、【[要素 J]と[要素 J]】の共有は[灰色]の判断材料に当たらずに[あまりにもありふれたもの]として顧慮の対象外としてはじくこととする ——ちなみにここ [切り分け手順 5] については(注視して見ていただければお分かりいただけることかと思われる)として [切り分け手順 2]と一部もってして重複するように映るところがあるものなのだが、ここ [切り分け手順 5] にあつては ([切り分け手順 2] から [切り分け手順 4] の対象外となっている)【[要素 B]と[要素 H]】の関係もが顧慮されるようになっていることを(細かくもなりすぎているくらいありの話の中にあつてのさらにもの一応のこととして)付記しておく——)。

[切り分け手順 6] (優先度として第六順位の情報処理手順)

ここ [切り分け手順 6] では [切り分け手順 5] までの検討がなされた段階で

要素 B: [[ブラックホール] ないし [ワームホール] ないし (機序不明概念としての) [異界との扉] のどれか一つないし複数と明示的に結びつけられている] (e.g. [特定フィクションが [ワームホール] を登場させている] [特定ノンフィクションが [ブラックホール] を作中の主要テーマに据えている] 等等)

要素 C: [粒子加速器と結びついている] (e.g. [特定文物が粒子加速器に関わるものである] 等等)

要素 D: [アトランティスと命名されての概念と関わっている] (e.g. [特定フィクションが [伝説の沈んだ大陸アトランティス] に目立って言及している] 等等)

要素 E: [古のトロイアにまつわる伝承との結節点 (1. 叙事詩『イリアス』というトロイア崩壊にまつわるプロセスを扱った古典の際立っての構成要素) あるいは 2. 叙事詩『オデュッセイア』というトロイア崩壊にまつわるプロセスを扱った古典の際立っての要素) などとの結節点) を色濃くも具備している] (e.g. [特定フィクションが [トロイアの木製の馬] と直接的に結びつく作中要素を具備している] [特定フィクションが叙事詩『オデュッセイア』や叙事詩『イリアス』(の主要登場キャラクター) と結びついている] 等等)

要素 F: [ヘラクレスの 12 功業と直接的に関わっているとの特性を具備している] (e.g. [特定文物がヘラクレス第 11 功業と関わる] 等等)

要素 G: [爬虫類の知的異種族 ([聖書の蛇] や [悪魔] といった存在は除く) と濃厚に結びついている] (e.g. [特定フィクションが知能を持った蛇の種族を登場させている] 等等)

要素 H: [垣根としての五芒星・五角形と濃厚に結びついている] (e.g. [特定フィクションが垣根としての五角形を作中の重要要素に据えている] 等等)

要素 I: [キリスト教大系におけるサタンないしルシファーと「直接的に」結びついている] ([特定フィクションが聖書におけるサタンを作中にて悪役として登場させている] 等等)

の内、いずれかたった一つでも共有するとの作品らを捕捉した時点で (顧慮されているデータとしての二つの作品らより) それら関係性を二度と再び顧慮できないとの前提の下に

[「特定事実関係蓋然性「弱」」の関係性判断材料 (便宜的に [判断材料 White オプション] と呼称する)]

として一単位切り分けることにする (但し、留保条件を付けもし、[要素 B —ブラックホール関連の要素—] や [要素 C —加速器関連の要素—] にまつわる文物らを

繋ぎ合せることは非常に易くなっている(ように見えもする)ために、[要素 B]および [要素 C]絡みの科学論文・研究機関発表文書などノン・フィクション分野のデータは敢えても除外する(よう処理手順を定める)。【[要素 B]:[ブラックホール]ないし[ワームホール]のどれか一つないし複数と明示的に結びつけられている】および【[要素 C]:粒子加速器と結びついている】と関わるものとして扱っているノン・フィクションの数はそれこそ日々大量に「量産」されており、そのような[ありふれたもの]を意味判断の材料にすることはできないと判ずるわけであるが、について、極論すれば、「最近刊行された加速器実験関連の特定研究者論文と過去に刊行された加速器関連の解説書籍をつなぎあわせて、それらには[要素 C]の共有がみとめられる、だから、[恣意性][偶然性]の是非を決めるうえでの恣意性否定の論拠となるかたちで情報処理できる」とはなせないだろうと想定するのだ。一上にて White オプションと便宜的に表記しているものは後に呈示する複数仮説にあって恣意性否定の論拠として必ず影響する(後述)ものであるが、その導出からしていい加減なことがまかりとおらぬように注意している。また、同じくこの理由でここでは【[要素 I]:キリスト教大系におけるサタンないしルシファーと直接的に結びついている】、および、【[要素 J]:聖書における禁断の果実と直接的に結びついている】も処理にて格別にはじくこととする(e.g.[特定フィクションが聖書における禁断の果実のことを扱っている]との要素「のみ」を具備しているだけのデータもフィクションであろうとノン・フィクションであろうと膨大な数存在し、またもってして日々大量に量産されているとのことで間口のレベルで検討対象として除外する(ように情報処理のフローを設定する)。尚、この処理手順6にてWhiteの抽出に一旦使われた作品に由来する要素は残余部があっても全削除する(Whiteは一つの関係性のセットからは一単位を越える量では導出出来ないように手順を定める))。

以上、細々と見るだに七面倒くさいかたちで、だが、それは最小限数的処理に「要る」ことであろうとの観点でその手順概要を定義しましたとの

[情報処理手順1] から [情報処理手順6]

の順を追っての処理の流れでもってして、(確率計算を念頭に置いての)情報処理の処理対象、すなわち、

【第三者が容易に確認出来る刊行物とのかたちで流通している日本語文字数換算にして1万字以上(英語単語数において3000語以上)の過去の「文献」記録(古典から現代小説などフィクション、そして、特定のトピックについて解説を加えているノン・フィクションら問わずもの文物)】

あるいは

【第三者が容易に確認できる作品として流通している過去の「映像」記録(映画作品など)】

のいずれかにあたり、そして、うち、先行して顧慮したものに対する評論などにおける純然たる引用情報・仄聞(伝聞)情報、そして、同一事項を扱っている(公)文書は除いてのもの

であり、なおかつ、

要素 A:[911の事件の発生を事件発生前に先覚的に言及しているとの要素を具備している](e.g.[[911]と[双子]との言葉の双方と関わる式での描写を目立ってなしている)[ニューヨークのビル爆発とペンタゴンの攻撃を同時に描き、また、911と親和性が高い数値列を用いている]等等)

要素 B: [[ブラックホール] ないし [ワームホール] ないし (機序不明概念としての) [異界との扉] のどれか一つないし複数と明示的に結びつけられている] (e.g. [特定フィクションが [ワームホール] を登場させている] [特定ノンフィクションが [ブラックホール] を作中の主要テーマに据えている] 等等)

要素 C: [粒子加速器と結びついている] (e.g. [特定文物が粒子加速器に関わるものである] 等等)

要素 D: [アトランティスと命名されての概念と関わっている] (e.g. [特定フィクションが [伝説の沈んだ大陸アトランティス] に目立って言及している] 等等)

要素 E: [古のトロイアにまつわる伝承との結節点 (1. 叙事詩『イリアス』というトロイア崩壊にまつわるプロセスを扱った古典の際立っての構成要素) あるいは 2. 【叙事詩『オデュッセイア』というトロイア崩壊にまつわるプロセスを扱った古典の際立っての要素】 などとの結節点) を色濃くも具備している] (e.g. [特定フィクションが [トロイアの木製の馬] と直接的に結びつく作中要素を具備している] [特定フィクションが叙事詩『オデュッセイア』や叙事詩『イリアス』(の主要登場キャラクター) と結びついている] 等等)

要素 F: [ヘラクレスの 12 功業と直接的に関わっているとの特性を具備している] (e.g. [特定文物がヘラクレス第 11 功業と関わる] 等等)

要素 G: [爬虫類の知的異種族 ([聖書の蛇] や [悪魔] といった存在は除く) と濃厚に結びついている] (e.g. [特定フィクションが知能を持った蛇の種族を登場させている] 等等)

要素 H: [垣根としての五芒星・五角形と濃厚に結びついている] (e.g. [特定フィクションが垣根としての五角形を作中の重要要素に据えている] 等等)

要素 I: [キリスト教大系におけるサタンないしルシファーと「直接的に」結びついている] ([特定フィクションが聖書におけるサタンを作中にて悪役として登場させている] 等等)

要素 J: [聖書における禁断の果実と「直接的に」結びついている] (e.g. [特定フィクションが聖書における禁断の果実のことを扱っている])

ら各要素らのいずれかないし複数を具備しているとの処理対象に対する [情報処理] ([情報の分類付け]) を実行する。

そうした式で (要件を充足している作品らを同じくもの処理フローにかけることで) 自動的に抽出されてくるとの、

[「特定事実関係蓋然性「弱」」 の関係性判断材料 (便宜的に [判断材料 White オプション] と呼称する)]

[「特定事実関係蓋然性「中」」 の関係性判断材料 (便宜的に [判断材料 Gray オプション] と呼称する)]

[「特定事実関係蓋然性「強」」 の関係性判断材料 (便宜的に [判断材料 Black オプション] と呼称する)]

との関係性判断材料を個数単位で切り分けられもしてくる中で、それらをもってして確率論の基礎としての事象(サイコロを振った折の目として1が出た、2が出た、そうしたかたちでの【事象】)ととらえることとする(そして、続けてのバイズ主義に依拠しての確率計算の話に入る)。

以上、ここまでの話は、いわば、

【手順】

の話であって、

【数学】

の話「ではない」(まだその段階に入っていない)。

その点、どうしてもってここまで表記のようなかたちでの手順を定めたのか、【事象】のとらえかたの定義をなしているのか、その思想(思考法)についての解説は後の段にて「さらに」細かくもなすとして、取りあえずもってして、ここまでの【手順】の委細について仕様を定めてのフローチャート図を下に挙げておくこととする。

処理手順の事細かやなフローチャート図を下に付す。

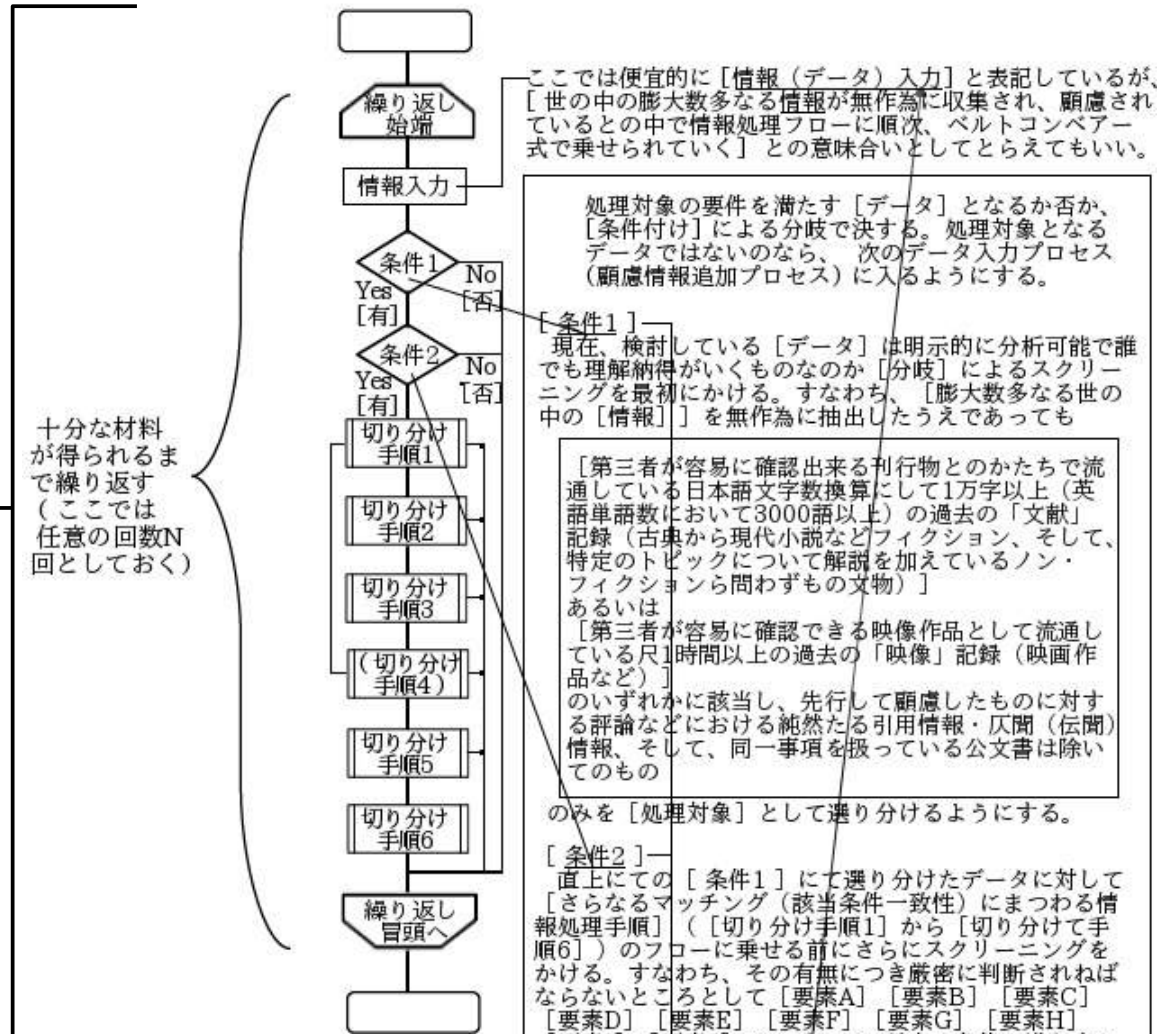
(心意気はある、だが、そうしたものに親近感を抱く余地がなんらないとの向きが仮にもし当該フローチャート図の内容まで検討することがあった場合のことを念頭に置いての注記として)

・フローチャート図は多くプログラミング可能、要するに、機械にて器械的に処理することを念頭にしての流れ図として表記しているものである(いわゆるアルゴリズムとしての書式特性「も」帯びている)。であるから、書式が機械の処理に親和性が高いとのものとなっているとのこと、お断りしておく——たとえば、「～のデータを処理領域(特定の情報処理をなすための領域)に移す」「～との「マッチング」(「一致要素のすりあわせ」)処理を行う」「処理は□>□>□の順序で行う」といった表現を鼻につきもしようとかたちで用いている——。そうも断らせていただいたうえで「処理手順の客観性(同じ情報に対する情報処理を走らすと誰がやっても同じような結果が返ってくるとの側面としてもいい)にあつての厳正厳密さを求める(適正に確率論の話にもっていくためにそうもすること、求める)と必然的にそういうかたちへと落着せざるをえなかった」と申し述べさせていただきたい。

・機械的処理を多く念頭に置いての記述をなしているものであるが、きちんと読み解けば、処理図はプログラミング的思考などとは無縁なる向きでも「特定の結果」を返せる(情報に対して一様なる情報処理を実行できる)とのものとしてしつらえているつもりである(愚拙胸中ではその「つもり」である)。

以上、お断りしたうえで、それでは【処理手順1】から【処理手順6】とかたちでの「情報処理—情報を選び分けし自動的に分類する処理—」を段階的になしていくとのフローチャート図を下にて呈示しておく。

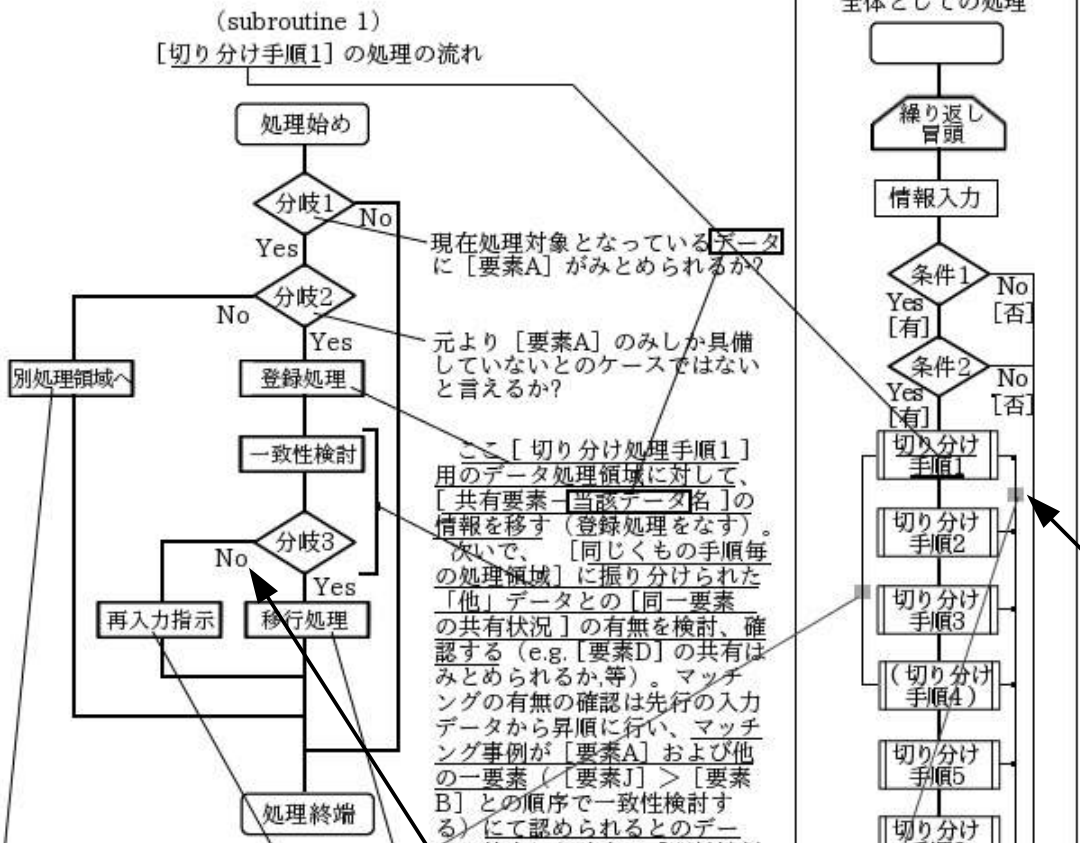
これ以降のベイズ確率論に依拠しての分析の基礎となる「事象」（データ属性）を厳密に規定するうえでの「情報処理手続き」を示してのフローチャートとして



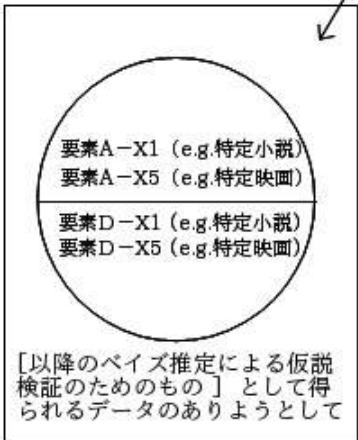
十分な材料
 が得られるまで
 繰り返す
 （ここでは
 任意の回数N
 回としておく）

（※ 「条件1」「条件2」適合性の判断は「人の手」に頼ることを想定している（推論型人工知能にまつわる技術やデータマイニング技術の類が長足の進歩を見ているとしても間接的で意味的かつつながりが重くも作用している中での一貫性を見出すには限界がある、と判じて、である）。
 対して、「切り分け手順1」から「切り分け手順6」は「単純なプログラム」でも実行できるものと想定しての記述をなす（データを放り込めばお定まりの処理結果が出てくるとの記述をなす）。尚、「人の手による適合要素判断部」にあつてはきちんと第三者が誰でも適否確認できる「要素具備ないし要素欠如判断の論拠」が明示されていることを必須とする（それについては最低限の典拠を挙げての多重的事実関係「証示」プロセス並みの論拠明示を要するものとする））

こちら図が【情報処理 —情報を特定の規則に基づいて分類・整理するための処理— の全体の流れ】を示しての図となる。次いで、次頁以降、ここでの「情報処理の」全処理図を構成する各処理 —（都度、呼び出されるように実行される副次的処理とのことでサブ・ルーチンと呼称するし処理）— としての「切り分け処理手順1」から「切り分け処理手順6」の具体的な内容を順次記載していくこととする（「切り分け処理手順1」から「切り分け処理手順6」については、それらについての自然言語 —日常使用言語— による「大まかな」内容解説を処理例を示しながら既に紹介しているわけではあるが（本書 p.371 から p.372 を参照のこと）、本セクションでは【不分明なところを排して一律なる結果を連続して導出するための機械「的」処理】としての記述を心掛ける）。尚、そもそももってして何故、こういう処理をしているのか理解に失すとのことがあるのであれば、本書 p.372 から p.387 の内容の再読を求めたい。



元より「要素A」しかない場合はここ「切り分け処理手順1」にては度外視、そのうえで「切り分け手順4処理用に設けた処理フローの部」に（入力データ（e.g.文献記録）と紐付けて特定した）「要素A」具備の記録を移行する（そして、その移行領域にてそちら領域への同じくもの条件を満たしている「他」入力データとの一致性検出をなす）。



現在処理対象となっているデータに「要素A」がみつめられるか？

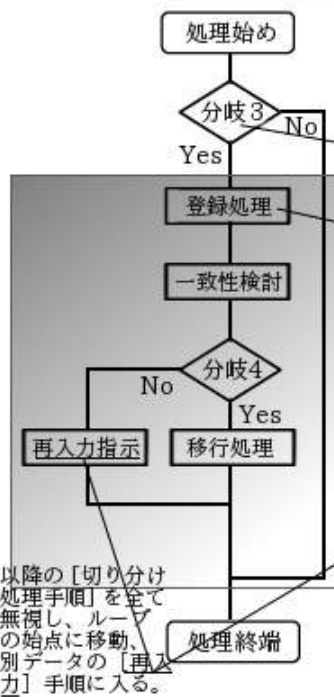
元より「要素A」のみしか具備していないとのケースではないと言えるか？

ここ「切り分け処理手順1」用のデータ処理領域に対して、「共有要素-当該データ名」の情報に移す（登録処理をなす）。次いで、「同じくもの手順毎の処理領域」に振り分けられた「他」データとの「同一要素の共有状況」の有無を検討、確認する（e.g.「要素D」の共有はみつめられるか等）。マッチングの有無の確認は先行の入力データから昇順に行い、マッチング事例が「要素A」および他の一要素（「要素J」 > 「要素B」）との順序で一致性検出する）にて認められるとのデータを特定した時点で「関係性判断材料【強】」を「一単位」切り分けしたと記録することとする。そして、「次順位の切り分け手順」に入る。その際、同一要素捕捉データらにての共有特定要素の情報は完全消滅し、「非」共有要素の情報はここ「切り分け手順1」用の処理領域から「下位手順」の情報処理フローにそのまま分類を踏襲したかたちにて移行する（たとえばの例示をなせば、A-X5、D-X5、E-X5、F-X5との要素データを持つX5にてA-X5、D-X5が一致要素情報となっている際にA-X5、D-X5のレコードのみを削除し、E-X5、F-X5のデータは以降処理に新規データ扱いにて流していく）。対して、共有要素がここ「切り分け要素手順1」の情報処理領域に存在しない場合は以降の切り分け手順（切り分け手順2）に一切入らずにループの始点、「次のデータ（情報）入力手順」にダイレクトに戻るようにする。

以上のような機械的情報処理手順にて（先立って例示したような）左に描写の如き「関係性」が「機械的に」抽出されていくことになる（：最初にX1という小説の「要素A」から「要素J」の保持にまつわるデータ（先行するファクト・ファインディングのプロセスにて「要素A」から「要素J」の保持が事実と特定されているとのデータ）が入力なされた後、X5という映画の「要素A」から「要素J」にまつわる情報がデータとして入力される……そうした流れを辿ると左記のような関係性が「自動的に」抽出されるとの処理手順を定めている。

【切り分け処理1】の処理フロー（処理の流れ）にある分岐3と呼称しての部の条件に当てはまらねば（分岐3でNOならば）、次の情報の入力プロセス——すなわち、「別の」映像ないし文書（それは全処理過程での条件1に該当しないと無視され、「また別の」情報の検討に入るとのものでもある）——に一連の流れ作業が進んでいくようにここでは定義をしている。

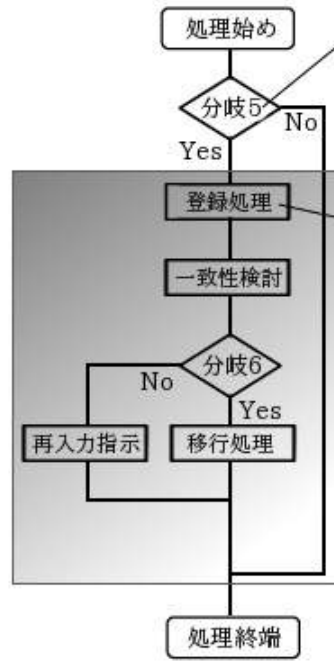
(subroutine 2)
[切り分け手順2]の処理の流れ



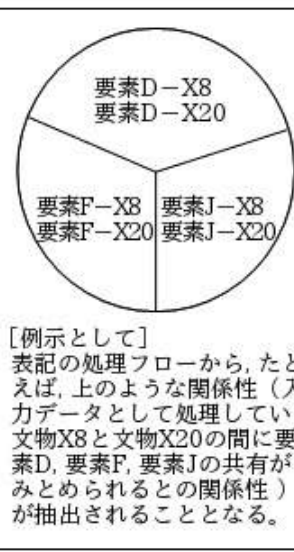
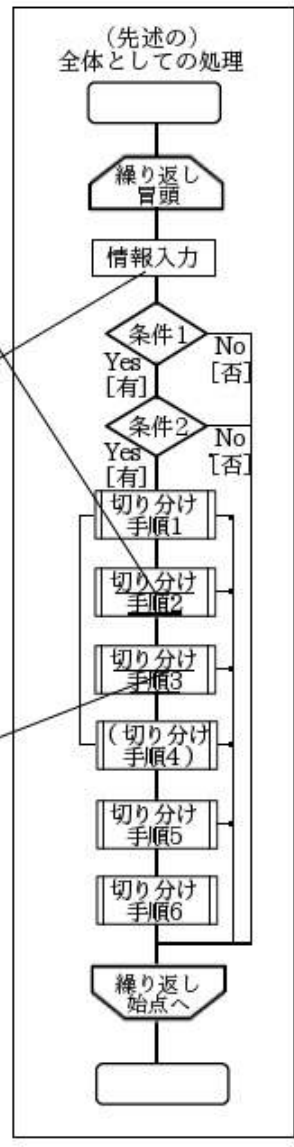
[要素B] (必須) と他要素D,E, F,G,I,Jをあわせての二つ以上の具備がみとめられるか?
 [切り分け手順2]用に設けている情報処理領域に情報(データ)を移し、そこで一致性検討をなす(登録処理)。
 ここ枠で括った部の処理手順は先行する[切り分け処理手順1]にての[分枝2]以下の流れとほぼ同じ処理フローとなる。異なるところがあるとすれば、[分枝4]にての分枝条件(およびその直前の一致性検討のありよう)が[要素B]以外の他の要素の共有がみとめられるか、といったものとなっていることだけである(移行処理では関係性判断要素を一単位記録するとの処理を先と同じくも行い、かつ、同一要素を捕捉したデータからの同一要素を削除、非同一致要素関連情報は新規データ入力との扱いで続いての処理手順に順次流す)

以降の[切り分け処理手順]を全て無視し、ループの始点に移動、別データの[再入力]手順に入る。

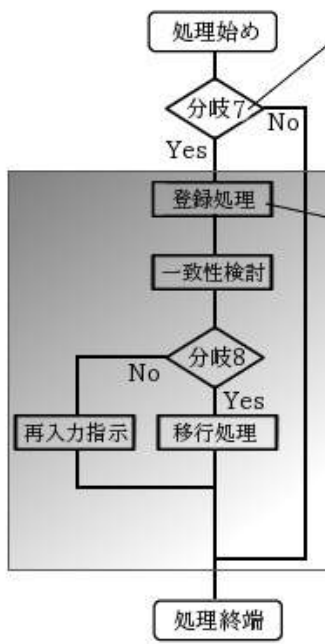
(subroutine 3)
[切り分け手順3]の処理の流れ



[要素C] [要素D] [要素E] [要素F] [要素G] [要素H] [要素I] [要素J]の各要素のうち、いずれか「三つの」以上の要素を具備しているか否か。但し、[要素H] [要素I] [要素J]らは一要素までのみ共有が許されるものとする(それらに競合がある場合はJ>Hの順にてデータ認識する)。
 [切り分け手順3]用に設けている情報処理領域に情報を移し、そこで一致性検討をなす。
 ここ枠で括った部の処理手順は先行する[切り分け処理手順1]にての[分枝2]以下の流れとほぼ同じ処理フローとなる。異なるところがあるとすれば、[分枝6]にての分枝条件(およびその直前の一致性検討のありよう)が[要素C] [要素D] [要素E] [要素F] [要素G] [要素H] [要素I] [要素J]の各要素のうち、いずれか「三つの」要素を共有しているか否か(但し、[要素H] [要素I] [要素J]らは一要素までのみ共有が許されるとし、それらに競合がある場合はJ>Hの順にて一致性判断する)とのものとなっていることだけである(尚、[移行処理]の部は上位処理手順からのデータの移行処理とそれが下位処理手順に流れてきての移行処理が重複した場合、上位処理過程にての移行処理用データの移行をそちらでのデータ到着順に準拠して優先して行っていくように移行順序を制御する)。



(subroutine 4)
[切り分け手順4]の処理の流れ

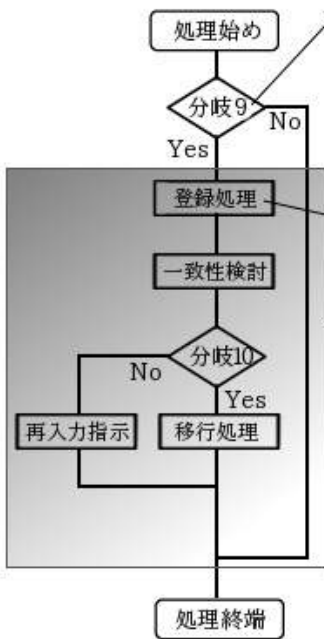


現在処理対象となっているデータに[要素A]がみとめられるか? (ここ分枝条件は実質上、切り分け手順1から迂回をなして降りてきたデータ以外、処理しないとの分枝条件となっている)

[切り分け手順4]用に設けた情報処理領域に情報を移動し、そこで一致性検討をなす。

ここ枠で括った部の処理手順は先行する[切り分け処理手順1]にての[分枝2]以下の流れとほぼ同じ処理フローとなる。異なるところについては、[分枝8]にての分枝条件(およびその直前の一致性検討のありよう)が[要素A]を伴っての処理データが二つ以上揃っているか、とのものとなっており、そして、[要素A]が二つ以上、揃った段階で記録されるデータが[関係性判断材料「強」]一単位ではなく、[関係性判断材料「中」]一単位となっていることである。

(subroutine 5)
[切り分け手順5]の処理の流れ



[要素B][要素C][要素D][要素E][要素F][要素G][要素H][要素I][要素J]の各要素のうち、いずれか「2つ」以上の要素を具備しているか? (但し留保条件として[BとC][HとI][IとJ]の共有は「あまりにもありふれたもの」としてデータとして省くこととする。[切り分け手順2]の対象にならなかった[BとH]の関係は対象とする。)

[切り分け手順5]用に設けた情報処理領域に情報を移動し、そこで一致性検討をなす。

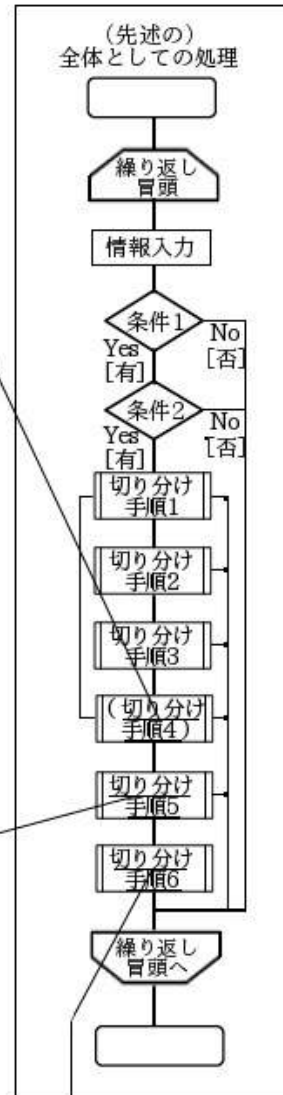
枠で括ったこの部の処理手順も先行する[切り分け処理手順1]にての[分枝2]以下の流れとほぼ同じ処理フローとなる。異なるところについては、[分枝10]にての分枝条件(およびその直前の一致性検討のありよう)が要素B,C,D,E,F,G,H,I,Jの各要素のうち、いずれか二つ以上のデータ間共有を確認するためのものであり(但し、BとC,HとI,IとJの関係は除外する)、そして、記録される情報が[関係性判断材料「中」]一単位となっていることである。

入力されてきているデータは[要素B][要素C][要素D][要素E][要素F][要素G][要素H]の各要素のいずれかひとつでも帯びているだろうか? ([要素I][要素J]の単一具備はあまりにもありふれたものとして関係性判断の条件にはしない)。また、(この[切り分け手順6]にのみ適用する条件として)データは[日々大量生産されている実験関係の茶飯的な研究文書の類]などではないものと言えるか? ([要素B]や[要素C]らをそれだけ具備しているデータにつき同じくもの文書を対象内とすると膨大な雑情報が入り込みすぎ、バイズ仮説検定の前提となる適正なデータの意味付けができなくなるためにそういう条件をつける。——ここ分枝11

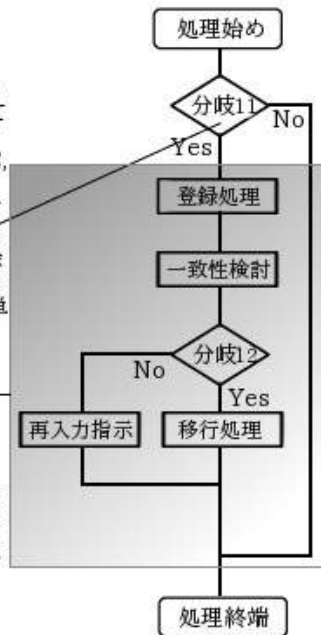
の部だけ[切り分け手順1]以降にあってながらもデータに対する[人の手]による分析が必要となる部のように見えます。ところが、そもそもの[切り分け手順1]に入る前のデータの要素Aから要素Jの判断の部にて要素Aから要素Jの適合状況を手動入力要求する(先述のように人の手での判断を求める)過程にてデータ性質につき[茶飯的な実験関連文書か否か]の情報入力項目を設けておけば、この分岐も機械的にプログラミング処理で済ませることができるようになる。)

ここ枠で括った部の処理手順はいままでそのそれに準じる。

(先述の)全体としての処理



(subroutine 6)
[切り分け手順6]の処理の流れ



(説明が煩瑣になりもする、かつ、幅広くもの読み手に理解を求めるとのことでは手前には手に負えるとの認識があるところがある統計学と接合する「～以上」「～以下」といった連続するものを対象とする確率論などではなく、代替するところの「離散的な」【事象】を「単純な手法にて」「有効であろうとの式で」分析すべくもの確率論(その気があるのならば、文系(なるもの)に分類されての高校生でも理解できようとの単純な確率論)、そうしたものの領分に[複雑な現実社会の諸相の問題]をいかに適正・正確に落とし込むのか、とのことにまつわっての離散的なる【事象】の機械的定義・選り分けの手順の表記の部はここまでとする 一尚、離散云々とは書いているが、ここでの話は【離散数学】的なる思考におけるアルゴリズム定義といったものと言う程に高度なもの「ですらない」とのところとなる(位置付けとしては基本的数学 Primary Mathematics のみを用いての分析をなす上での道具立てとしての手順紹介の部となる)一)

※本稿本段にての【確率論】にまつわる話は先にて断っているように

【ある程度の知識 一高校卒業程度の数学知識一 を有した向きを前提にしての「付録」としての位置付けを与えての話(既に訴求すべきことをおおよそ訴求し終えているとの判断がある中で識見ある向きに念を押すべくもの話)】

となる。

といったいわばもってしての人を選んでの(付録としての)話にあつてのこととし、ここでの情報処理手順についての話は 一それもまた再言となるが一

【確率論展開の前提となるところにまつわる「事細やかな」【手順】にまつわるもの】(確率論の基礎としての【事象】、その【事象】の抽出の【手順】にまつわる話)

に留まるとのものであり、であるから、本稿の結論のみを(最も問題となるところで)とにかくもってして理非検討したいとの向きにあつてはなおさらもってしてここでの話は無視・放念いただいても構わない(とはなから前提に置いたうえでの実にもって微に入つての細々とした記述をなししている)。

ただし、本稿にての立論展開の適正さをそれこそ端から端まで検討しようとの向き(であり、なおかつ、高校(卒業)程度の数学的知識をもちあわせている向き)にあらはれては、である。望ましくはここでのたかだかもってしての【手順】の説明ありようの適正さからして検討なしにいただければ光栄、そのように考えている次第でもまたある。

(ここまで話を進めたうえで言うが) いちいちもって言の葉にするまでもないかと思えるようとなるところとして [話が細々と、そして、単調に、無為に長くなっている] きらいが如実にある。 だが、[ベイズ確率論] というものの性質が [観測事象] から [原因事象] を推定するものであり (: 基本的なところとしては例えば、法廷でも用いられる数学概念の典型となる [ベイズ推定] について和文ウィキペディア [ベイズ推定] 項目の冒頭部にて(原文引用するところとして) “ベイズ推定とは、ベイズ確率の考え方に基づき、観測事象(観測された事実)から、推定したい事柄(その起因である原因事象)を、確率的な意味で求めることを指す”(引用部はここまでとする)と記載されているとおりである)、 のような中で [基礎となる観測事象] が、(主張者が良好なパフォーマンスについて良心的ならんとすればする程)、[その性質を厳密に定義されなければならないもの] であるとのことがあるために不可避的となるとの話、観測【事象】の性質を厳密に「データ整理・分類」する 一「情報処理」する一 とのことによつて話の今しばらくも続けることとする (書き手たるこの身自身が(最早残された時間も少ないとの判断がある中で) ついつい煩瑣面倒であると思つているところともなってしまうのだが、(ベイズ推定の一般公式の道筋への(高校生でも分かろうとの式での)解説をなすに先駆けもしての)切り分け手順

による分類にまつわる話を今しばらくも続けることとする)。

さてもってして、ここ以降ではここまで解説を延々となしてきた処理手順に

「一体どのようなデータを流すのか (そして、によって、どのようなデータに対する情報処理がなされるかたちとしているのか) 」

についての話に入りたい。にまつわっては直下にて一覧表記するとおりのデータを一覧表記なした順序そのままに「切り分け処理手順にかける」とのこをなしてみることにする。

尚、LHC 関連の科学論文および公文書などの現代的記録(映像も込みにしての記録)については

「先行して顧慮したものに対する評論などにおける純然たる引用情報・仄聞(伝聞)情報、そして、同一事項を扱っている(公文書は除いたもの)」

との情報処理対象のそもその定義付け(先述)に依拠してただ一点しか扱わないこととする(以後、同様のものが出来ても対象として除外する)との情報処理をなすこととする。

でなければ、質的には同じような情報が延々と顧慮されることになるからである(：また、同様のことは — そのままの内容踏襲・仄聞(純然たる引用)が問題になるケースを除いては — 基本的には古典や純フィクションにはこうした制約はあてはまりにくい。日々大量生産されているものでない古典は点数も少なく一意性が多く保たれていると判じられるからであり、同文に【一見、フィクションとの形態を取る情報】についてもそれぞれ一意性が保たれている(同じものではない)と判じられるからである)。

入力順序	データとしての入力作品	データ属性	最小最低限の【要素抽出】にまつわる解説として
1	LHC関連資料のうち任意の一品(：ここでは【ブラックホール生成可能性】[実験供用イベント・ディスプレイ・ツールATLANTIS] [LHC構成検出器ATLAS] 全てに言及している資料を任意で一点ほど顧慮対象とする — たとえば、オンライン上流通資料ではLarge Extra Dimensions and Quantum Black Holesとの文書(表記文書供給元はオハイオ州立大学関係者)といったものが【条件に適合するもの】としてダウンロードなせるようになっているのでそうしたものを顧慮対象とする —)	要素B, 要素C, 要素D, 要素E, 要素F	LHC実験が要素B、すなわち、ブラックホールやワームホールの類と結びつくとの点については本稿にての【出典 (Source) 紹介の部1】以降の部を参照いただきたい(うちワームホールとLHCとの結びつきについては【出典 (Source) 紹介の部18】 [出典 (Source) 紹介の部19] [出典 (Source) 紹介の部89]にて典拠解説をなしている)。また、LHC実験は巨大加速器実験として当然に要素C、加速器と結びつくものとなつていいる。さらに同LHCが要素D、[Atlantis] (アトランティス)との名称と結びつくものとなつていいることについてはLHC実験関係者らがブラックホール生成観測をも射程内に置いていると号しているEvent displayツールとしてATLANTISというツールを用いているとのことがあるからである(【出典 (Source) 紹介の部35】)。LHC実験が要素Eを具備している、[トロイア]と結びついているとの点についてはトロイアに木製の馬の計略で引導を渡した謀将オデュッセウスら一行をトロイアからの帰途、呑み込んだと伝わる渦潮の怪物カリュプディスCHARYBDISを実験にてのブラックホールイベントジェネレーターというツールに用いたりすることが挙げられる(【出典 (Source) 紹介の部46】/エクトル・ベイリオーズという19世紀のオペラ作品としてLes Troyens『トロイアの人々』との作品があるのだが、同作とLHCを結びつけての公演をなしている劇団も存する。LHC, Les Troyensとの画像検索で劇関連写真も特定できるようになっている)。さらにLHCが要素Fを具備している、ヘラクレス関連事物と結びついているとのことについては同実験がヘラクレス第11功業にて登場した巨人アトラスと命名規則上結びついているからである(【出典 (Source) 紹介の部35】)。
2	原著1994年初出のキップ・ソーン著作 BLACK HOLES & TIME WARP Einstein's Outrageous Legacy 『ブラックホールと時空の歪み アインシュタインのとんでもない遺産』	要素A, 要素B	物理学者キップ・ソーン著作『ブラックホールと時空の歪み アインシュタインのとんでもない遺産』がいかにもって要素A、すなわち、[911の事前言及]と多重的に結びついていると述べられるのかについては本稿にての【出典 (Source) 紹介の部28】から【出典 (Source) 紹介の部33-2】にて一次資料の原文引用のみからは指し示せるところを明確かつ客観的に呈示している。また、同著が要素B、ブラックホールやワームホールと結びついているとのことについては書名より明らかであるが、要素Aと関わる部自体が【タイムマシンの構築仮説】としても知られる同著の【通過可能なワームホールの思考実験】にまつわる部となつているとのことがある(詳しくは要素Aにまつわる出典紹介部を参照のこと)。

3	1993年米国映画 Super Mario Bros.『スーパーマリオ魔界帝国の女神』	要素A, 要素B	表記映画作品が911の事前言及作品となっていること、そして、ワームホールの如き異界との扉をモチーフとしていること（[要素A] および [要素B] そ具備していること）については長大なる本稿にての [出典 (Source) 紹介の部27] を参照されたい。
4	第二のエメラルド・タブレット（神秘主義者による1939年「手仕事」；捏造古文書）	要素B, 要素D, 要素G	より以前から存在していたパルプ雑誌掲載小説『影の王国』の影響を文言込みに受けて捏造されたと解されるようになっている神秘主義者由来の自称古代文書としての [「第二の」エメラルドタブレット] という1939年初出の文書が要素B, 要素D, 要素Gを具備している（「アトランティスに対する」「蛇の種族による」「異界の扉を介しての」侵略を扱っている）ことについては本稿にての [出典 (Source) 紹介の部34] を参照されたい。
5	米国テレビドラマ『スターゲイト・アトランティス』	要素B, 要素D	2004年から米国にて放映されだした（1994年初出の映画『スターゲイト』の続編として放映されだした）テレビドラマ『スターゲイト・アトランティス』は [別銀河との扉] を登場させているとのことで要素Bと結びつく。また、タイトルからしてアトランティスの名称を冠しているように要素Dと結びつく。
6	『ジ・イルミナタス・トリロジー』（七〇年代ヒット小説）	要素A, 要素B, 要素D, 要素F, 要素G, 要素H	70年代、欧米にてヒットを見た小説『ジ・イルミナタス・トリロジー』が要素A, B, D, F, G, Hを具備していることについては [出典 (Source) 紹介の部37] から [出典 (Source) 紹介の部37-5] ,そして, [出典 (Source) 紹介の部38-2] を参照いただきたい。
7	古典『神曲；地獄篇』	要素B, 要素F, 要素H	古典『地獄篇』が今日的な観点で見た場合のブラックホール近似のものを登場させている作品となっていること（要素Bを具備しているとの作品となっていること）については [出典 (Source) 紹介の部55] から [出典 (Source) 紹介の部55 (3)] を参照されたい。また、同古典がヘラクレスの十二功業と多層的に結びついている（要素Fを具備していること）については [出典 (Source) 紹介の部90] から [出典 (Source) 紹介の部90 (10)] を参照されたい。（さらに述べもすれば）、『地獄篇』はルシファーを地獄の中核として登場させている作品であるため、ルシファー関連の作品（要素Hに適合する作品）と当然に分類できる。
8	古典『失楽園』	要素B, 要素G, 要素H, 要素J	古典『失楽園』が今日的な観点で見た場合のブラックホール近似のものを登場させている作品となっていること（要素Bを具備しての作品となっていること）については上の『地獄篇』と同じくもの箇所としての [出典 (Source) 紹介の部55] から [出典 (Source) 紹介の部55 (3)] を参照されたい。加えもして、『失楽園』が意に添わぬかたちで [爬虫類の眷族に変異変容させられた墮天使ら] を描く作品となっている（要素Gを具備している作品となっている）ことについては [出典 (Source) 紹介の部54 (2)] を参照されたい。さらに『失楽園』は [エデンの園の禁断の果実] を用いてのルシファー（サタン）による誘惑を主軸としている作品であるために当然に要素Hおよび要素Jを具備していることになる。

9	イタリアにて伝存の地誌『新年代記』	(要素D), 要素E	イタリアのジョヴァンニ・ヴィッラーニの手になる地誌としての位置づけの古典『新年代記』にあつては〔アトラス王(という名の王)〕と〔トロイアの始祖ダーダネルス〕が親子であったとの内容が見てとれる(〔出典(Source) 紹介の部45〕)。につき、欧州に伝わる他の古典におけるアトラス王とは〔天を支える伝説の巨人〕の名を冠するアトランティスの王〕のことを指すのが一般の認識となっている(〔出典(Source) 紹介の部36〕/そもそものアトランティスの名称の由来は〔アトラス王〕にあるとプラトン古典にて説明されている)。以上のことより古典『新年代記』は〔アトランティスと接合する古典〕であると述べられもし(要素Dを具備している)、かつ、トロイアの建国を扱っている古典でもあると述べられるようになっている。
10	古典『トロイア戦記』	(要素D), 要素E	15世紀にて遺物として発見を見、今日に伝わっているとの古典『トロイア戦記』ではトロイア攻囲戦の顛末が(木製の馬の計略が用いられた後の)〔ギリシャ勢を巻き添えにしての洪水による滅亡〕であったと描写されている(〔出典(Source) 紹介の部44-3〕,〔出典(Source) 紹介の部44-4〕)。他面、古のアトランティスも〔ギリシャ勢を巻き添えにしての洪水による滅亡〕との最期を見ている(〔出典(Source) 紹介の部36〕)。加えて〔古のトロイアの破滅の原因〕となった〔黄金の林檎〕に関わるところとして古のアトランティスの比定地を〔黄金の林檎の園〕とするの見立てが存在している(〔出典(Source) 紹介の部41〕)。また、トロイア陥落のための木製の馬の計略を用いた謀将オデュッセウスが漂流の末、辿り着いたのもアトランティスと(上と別方向で)同一視されるカリュプソの島オーギュギア島であったとある(〔出典(Source) 紹介の部43〕)。そこから〔トロイア〕と〔アトランティス〕には相通ずるところがある。となれば、洪水によるトロイア最期を描いている『トロイア戦記』はトロイア関連の古典(要素E具備古典)であるのみならずアトランティスと通ずる古典(要素D具備古典)と見ることができると述べられる。
11	1999年米国映画作品『ファイト・クラブ』	要素A, 要素F	映画『ファイト・クラブ』がいかにして〔911の事前言及作品〕(要素A具備作品)となっているかについては〔出典(Source) 紹介の部102〕から〔出典(Source) 紹介の部102(9)〕を包摂する解説部にて膨大な文量にて詳説に詳説を加えていることである。また、映画『ファイト・クラブ』が〔黄金の林檎〕を介してヘラクレスの12功業と結びつくこと(要素F該当作品となっていること)については本稿の前半部、〔出典(Source) 紹介の部37-5〕に後続する段より言及をなしはじめていることであり、その細かき解説を〔出典(Source) 紹介の部104〕にてなしていることである。

処理対象についての細々とした補足として:古典『トロイア戦記』はここで一端顧慮対象としているため、事後、「先行して顧慮したものに対する評論などにおける純然たる引用情報・仄聞(伝聞)情報、そして、同一事項を扱っている(公)文書は除いてのもの」
との条件がために『トロイア戦記』そのものの内容を踏襲・引用しているだけの文物は顧慮対象として除外する。

12	『タイタンの妖女』(1959年初出小説)	要素B,要素E	押しも押されもせぬ米国文壇の寵児(現代アメリカ文学の旗手)との評価を与えられることになった大物作家カート・ヴォネガットがまだ世に知られていなかった時代にもものした小説『タイタンの妖女』は[宇宙の遙か彼方への扉](としての時間等曲率漏斗 Chrono-synclastic-infundibulumなるもの)を作中の重要モチーフに据えている([出典(Source)紹介の部65(4)])。その意味で 要素B 具備作品となる。また、同作については原著表題(サイレンズ・オブ・タイタン)にその名が用いられている[サイレン]という存在がトロイアを木製の馬で滅ぼしたオデュッセウス関連の叙事詩『オデュッセイア』に登場してくる船乗りらを座礁させる海の妖怪となっているとの観点で 要素E 、トロイアと結びつく作品であるとの要件を具備しているとも述べられるようになっている([出典(Source)紹介の部65(2)]) / 『ザ・サイレンズ・オブ・タイタン』については「純・記号論的に」後に世に出たアーサー・クラークの手になる著名作品『2001年宇宙の旅』こと『2001:スペース・オデッセイ』と結びつくとのことがあり(両作内容は[スペースシップの旅の過程で時空間を超越した超人に変化した存在が人類文明を育て上げた操作者の代理人として活動することになる]「など」といった側面で似通ったものとなっている)、アーサー・クラーク『2001:スペース・オデッセイ』の方がタイトルにトロイア崩壊をもたらした男オデュッセウスにまつわる叙事詩『オデュッセイ(ア)』の名称を冠し、またかつ、内容も『オデッセイア』と結びつくようになっていると指摘されているとのことがある。その意でも『ザ・サイレンズ・オブ・タイタン』とトロイア崩壊伝承の結びつきが観念されるところでもある——が、同じくものことについては本稿それ自体では解説を加えていないとのことで割愛する——)。
13	『タイム・クエイク』(1997年初出の小説『タイタンの妖女』作者と同じくもの作家の手になる小説)	要素A,要素B	上小説と同じくもの作家カート・ヴォネガットによってもとのされた小説『タイム・クエイク』が何故にもって[911の先覚的言及作品]と述べられもするのか(要素A を具備していると言えるのか)については[出典(Source)紹介の部65(12)]から[出典(Source)紹介の部65(15)]を参照されたい。また、『タイム・クエイク』は過去の世界とのつながりをもたらすタイムクエイクを主題に据えているとの作品となるため、過去との結節点になるとされる時空の迂回路たるワームホールとの接合性もが 要素B の具備に関わるところとして——観念されるところである([出典(Source)紹介の部18)]なども参照のこと)。

処理対象についての実に細々とした補足として：現代文物『タイタンの妖女』については、である。同作が【ブラックホール関連事物】、そして、【加速器による災厄の予見的言及「に関わる」作品】、【911の事件の予見的言及に「通じている」作品】との複合的特性を帯び、それがゆえに問題になると本稿前半部で(ひたすらに念密を心掛けて)詳説しているわけではあるが、ここでは同作『タイタンの妖女』にあつて【要素B】(異界との扉やワームホールとの結節点)と【要素E】(トロイア関連の側面)の具備しか問題にしていない——(【要素A】(911の予見的側面)や【要素C】(加速器関連事物としての側面)は伴って「いない」との扱いでの処理をする——。ひとつにそれは『タイタンの妖女』という作品はそれ単体で見ると、【加速器による災厄の予見的言及に関わる作品】そのもの、【911の事件の予見的言及作品】そのものとのありようは指摘「できない」からである(そうした側面が『タイタンの妖女』「でも」問題になるのは同作を筆業にあつての初期の佳作として世に出した大御所作家カート・ヴォネガットやりよう、他の近接する作品らにみとめられる露骨なやりようを顧慮した時「のみ」である——それゆえ、『タイタンの妖女』が【加速器による災厄の予見的言及「に関わる」作品】、【911の事件の予見的言及「に通じている」作品】であることに変わりはないのだが、ここでの確率的処理ではそういうことまでは顧慮しない——)。

14	カール・セーガンの手による小説『コンタクト』（原著1985年初出のミリオンセラー作品）	要素B,要素E 要素I	1985年に鳴り物入りで世に出、小説執筆のための科学考証を求められた物理学者キップ・ソーンに[通過可能なワームホールアイディア]の天啓を与えたとのことでも知られる（[出典（Source）紹介の部20-2]）との小説『コンタクト』はその主題となるところの[ゲート装置]がブラックホールないしワームホールを利用したものと設定付けられているために 要素B と結びつく（[出典（Source）紹介の部80]）。また、『コンタクト』はトロイア寓意と多層的に結びつくために 要素E とも結びつく（：については作中にて登場する異星系から設計図が送られてきた[マシン]が[木馬]と評されるシーンが10回以上も出てくる — [出典（Source）紹介の部80（3）]に後続する段で原文引用をなしているところである— こともそうだが（ただし『コンタクト』ではそちらゲート装置は人類にとって恩恵をもたらすものなどと結局は設定付けられている）、作者カール・セーガン本人にまつわる属人的特性や作中の隠喩的寓意の問題として（[911の事前言及作品]と相通ずるかたちで）『コンタクト』にはトロイア寓意が「露骨に」込められているとの指摘がなせるようになっていく — 『コンタクト』という小説がその式でいかに嗜虐的な反対話法で満ち満ちた作品であると指摘できるかについては本稿にての[補説3]全体、なかんずく、[出典（Source）紹介の部82（5）]以降の部の内容を参照されたい— ）。さらに『コンタクト』の作中登場するゲート装置が[五角形を十二枚重ねての正十二面体]となっているために同作は 要素I とも結びつく（[出典（Source）紹介の部80（3）]）。
15	『ジョジョの奇妙な冒険 スターダストクルセイダース』（国内漫画家による世界的ヒット漫画作品）	要素A,要素F	国内のみならず世界的にもヒットを見ている国内漫画家による漫画作品『ジョジョの奇妙な冒険 スターダストクルセイダース』がいかようにして[911の先覚的言及（と述べられるに相応しいもの）]としての要素を帯びているか — 要素A を具備しているか — は[出典紹介部108]を参照のこと。同作が[911の予見描写に関わる]ところにて[黄金の林檎]と通ずる命名規則をいかように用いているか、すなわち、[ヘラクレスの第11功業に関わるもの]と通ずる(要素F を具備している)との命名規則を用いているかについては本稿[補説4]の部の後半部を参照のこと。

処理対象についての実に細々とした補足として：『ジョジョの奇妙な冒険 スターダストクルセイダース』という作品が911の事件の発生の予見的言及をなしているとのことが都市伝説などというものの範疇に留まらないとのことについては — 理由と根拠とをそれぞれ細やかに呈示しながら — 本稿の先だつての部で細かくも解説しているわけだが、本稿筆者は【事件の発生の既知】のありようがそこにあったということ人間レベルの状況として問題視しているわけでもなければ、当該作品作者がなんらかの[秘密の紐帯]の構成員だったとの誹謗的、かつ、あやふやなる陰謀論を展開したいわけでもない（そのことは先んじての段でも細かくも断っていることである／当該の漫画の予見描写がフリーメーソン・エンタード・アプレントイス位階のトレーニングボード構図と視覚および意味の両二点で際立っての接続性を帯びていることも[記録的事実]の問題として先に指摘しているが、であるが、「考えずに書いていた」と予見描写についてコメント発している当該の漫画作品の作者がフリーメーソンである可能性の有無などはなから問題にならない、そうであろうとなかろうと、やらせの力学は介入しえるだろう、問題はそのやらせが本当にあるか、あると明朗に述べられるだけの事情があるのなら、それは[「目的論的に」いかな性質のものなのか]とのことにあるとの強調をなしている）。また、『ジョジョの奇妙な冒険 スターダストクルセイダース』が予見「的」作品であるとして、ここ確率論で問題視しているのはその【機序】(具現化原理)でさえなく、それ以前のこと、そもしたことがあるのが【何らかの「根深い」意図によるところなのか】あるいは【「根深い」意図は問題にならぬとの閑却に付しているものなのか】の確率論的目分量がそれぞれいかにほどの按配で堅い線と呈示できるか、だけである。また、同作品（『ジョジョの奇妙な冒険 スターダストクルセイダース』）がヘラクレス第11功業と結びついているとのことだが、一細々と先述しているように — 予見描写が現われているのが[爆弾仕かけのオレンジ]の巻となっており、オレンジが欧州各領域で「広範囲に」「濃厚に」史的に黄金の林檎と結びつけられてきたとの事実があること（黄金の林檎はヘラクレス第11功業の目的物である）、また、当該作品の予見描写それ自身が[黄金の林檎に眩惑された乙女]の名を冠する錬金術書などに見る錬金術象徴体系と重なるようになっていくとのこと「も」が大ききところとしてある（ちなみに錬金術の二大探求目標とは[黄金]と[不死]だが、黄金の林檎は[不死]と結びつく[黄金]の果実である）。

16	1983年映画作品『トレーディング・プレイシズ』（邦題『大逆転』）	要素A, 要素F	映画『トレーディング・プレイシズ』（邦題『大逆転』）は主人公らが [911] との数値を想起させる番号付けがなされたタクシーにて [ワールド・トレード・センター] に乗り入れた直後、ワールド・トレード・センター内（の商品先物取引所）に据え置かれた時計が印象深くも時針として「9」「11」を指すものとして登場してくる。そこから同作は [911の事前言及をなしている作品] としての顔を持つと述べられもするようなものとなるのだが（本稿の [補説4] の部にて詳解を講じているところである）、同作の911の予見描写には直上表記の国内漫画作品『ジョジョの奇妙な冒険 スターダストクルセイダース』と同じくもの理由で [黄金の林檎] との関わりあい問題視されるところがある（『トレーディング・プレイシズ』（邦題）『大逆転』は要素Fをも有している）。
17	1985年映画作品『バック・トゥ・ザ・フューチャー』（邦題『大逆転』）	要素A, 要素B	映画『バック・トゥ・ザ・フューチャー』がいかように [911の事前言及作品] としての要素を帯びている（要素A具備作品となっている）かとのことについては本稿にての補説4、の中の、[出典（Source）紹介の部108] に後続するかたちでしたためての部を参照されたい。また、同作については過去と未来との行き来との兼ね合いで時空の扉とも関わりもすると申し述べられるのものでもある（要素B該当作品となる）。
18	米国内子供向けテレビアニメ番組『シンプソンズ』	要素A	米国内子供向けテレビアニメ番組『シンプソンズ』（の中の1997年初出の The City of New York Vs. Homer Simpson とのエピソード）が [911の事前言及事物] としての要素を帯びている（要素Aを具備した作品となっている）とのことについては本稿前半部にて解説をなしている。視覚的に表せば次のようなシーンが同作に登場していることが問題になる。  表記のような描写がテレビアニメ『シンプソンズ』には登場している（ことが諸所にて指摘されている）。無論、ツインタワーを11としてそこに9ドル表示を並べる蓋然性など本来的にはなんら「ない」。
19	国内子供向け映画作品『ルパン三世 くたばれ！ノストラダムス』	要素A	国内青少年向けアニメ映画作品『ルパン三世 くたばれ！ノストラダムス』（1995年封切り）がいかようにして911の先覚的言及作品となっているか—要素Aを具備している作品となっているか—については本稿にての [出典（Source）紹介の部107] から [出典（Source）紹介の部107（2）] を参照されたい。

以上のように一覧表記しての（一例としての）入力データを情報処理する（分類付けする）にあたって呈示のアルゴリズムを作用させるといかな関係性が[自動導出]されてくることになるのか（字義通りアルゴリズム —プログラムに対する指示書式— として機械的にはき出されてくるように仕様を定めている中でいかな関係性が[自動導出]されてくることになるのか）の記述をこれよりなすこととする。

その点もってして、

膨大数多なる世の中の「情報」から「日本語文字数換算にして1万字以上(英語単語数において3000語以上)の「過去の」確認容易な公共空間流通の文献記録として具現化しているもの」(ただし先発顧慮対象の引用・仄聞情報としての側面が強いもの —殊に現代科学動向にまつわっての日々大量に量産されている(公)文書等— は除く) ないし「「過去の」市場市中に流通の映像記録として具現化しているもの」であり、かつもってして、[要素A]から[要素J]のいずれかを具備しているとのもののみを

[情報処理の対象]

と見做す(先述)

として、上にて一覧表記したデータに対して最前にて記述のアルゴリズム(情報処理手順フロー)での情報処理をなすと下のような結果が出てくる。

(以下、先立っての表にて一覧表記したデータらを表記順序通りに呈示の処理手順で処理するといかなる要素が自動抽出されてくるのかの結果表記として —疑わしきは呈示のアルゴリズムに御自身手ずからデータを流してみても確認いただきたい次第だが、基本的に『そうなのか、そのような結果が出てくるのか』程度に受け取っていただいても構わないものとして呈示をなしておく—)

(入力の先後関係に依拠しての出力順序通りのかたちでの) 関係性判断材料要素における [黒] の出力

(: 【[要素A]—(紐付けられてのデータ)キップ・ソーン著作『ブラックホールと時空の歪み アインシュタインのとんでもない遺産』】 ⇔ 【[要素A]—(紐付けられてのデータ)1993年公開映画『スーパーマリオ魔界帝国の女神』】、 【[要素B]—(紐付けられてのデータ)キップ・ソーン著作『ブラックホールと時空の歪み アインシュタインのとんでもない遺産』】 ⇔ 【[要素B]—(紐付けられてのデータ)1993年公開映画『スーパーマリオ魔界帝国の女神』】 とのかたちでの [要素A] (911を事前言及していると判じられる描写を含んでいるとの要素)および [要素B] (ブラックホール・ワームホール・異次元との扉にまつわる要素) の共有関係より自動抽出)

(入力の先後関係に依拠しての出力順序通りのかたちでの) 関係性判断材料要素における [黒] の出力

(: 【[要素B]—LHC 関連長文実験資料一点(ここでは米国研究者ら由来の Large Extra Dimensions and Quantum Black Holes を典型的資料として用いた)】 ⇔ 【[要素B]—第二のエメラルド・タブレット(と銘じられての太平洋戦争勃発に先立つ神秘主義者由来の捏造文書)】、 【[要素D]—LHC 関連長文実験資料一点】 ⇔ 【[要素D]—第二のエメラルド・タブレット】 とのかたちでの [要素B] (ブラックホール・ワームホール・異次元との扉にまつわる要素) および [要素D] (アトランティスにまつわる要素) の共有関係より自動抽出)

(入力の先後関係に依拠しての出力順序通りのかたちでの) 関係性判断材料要素における [白] の出力

(: 【 [要素 G] - 1993 年公開映画『スーパーマリオ魔界帝国の女神』】
⇔ 【 [要素 G] - 第二のエメラルド・タブレット (と銘じられての太平洋戦争勃発に先立つ神秘主義者由来の捏造文書) 】 とのかたちでの [要素 G] (爬虫類の種族を扱っているとの要素) 「のみ」の共有関係より自動抽出 —— ※アルゴリズム(プログラミング可能なる処理フローにまつわる手順書式)の問題として入力順序 4 番目のデータ(上の表を参照のこと)である[第二のエメラルド・タブレット(とタイトル付けされての太平洋戦争勃発に先立つ神秘主義者由来の捏造文書)]をデータとしてエントリーさせた時点で 1 番目に入力していた[LHC 実験関連資料よりの「抽出」要素]とのすりあわせ処理(マッチング処理)がアルゴリズム上にて発生しているのだが、その際、(一回処理の後の特定要素削除との規則にて削除されなかった)残余の要素として(処理手順上)削除されなかったデータとしての[[第二のエメラルド・タブレット]]に由来する要素 G が[第 6 の切り分け処理手順処理用領域]に(処理手順のありように応じて)自動的に落ちて行き、そちら領域に先のデータ入力時処理段階で既に落ちていた[1993 年公開映画『スーパーマリオ魔界帝国の女神』]に由来する要素 G のデータとのすりあわせ処理(マッチング処理)が連続して発生、上のような[白]のデータが自動抽出されているとの運びとなっている(直感には多少ずれるところがあるのだが、機械的処理フローの硬直性を拭えぬところとして[白]のアウトプットがなされるとのかたちで仕様を定めもしているとのことがある) ——)

(入力の先後関係に依拠しての出力順序通りのかたちでの) 関係性判断材料要素における [黒] の出力

(: 【 [要素 B] - 古典『地獄篇』】 ⇔ 【 [要素 B] - 古典『失樂園』】、
【 [要素 C] - 古典『地獄篇』】 ⇔ 【 [要素 C] - 古典『失樂園』】 との
[要素 B] (ブラックホールにまつわる要素) および [要素 C] (ルシファーにまつわる要素) の共有関係より自動抽出)

(入力の先後関係に依拠しての出力順序通りのかたちでの) 関係性判断材料要素における [灰] の出力

(: 【 [要素 D] - 中世地誌『新年代記』】 ⇔ 【 [要素 D] - 発掘遺物『トロイア年代記』】、
【 [要素 E] - 中世地誌『新年代記』】 ⇔ 【 [要素 E] - 発掘遺物『トロイア年代記』】 との [要素 D] (アトランティスにまつわる要素) および [要素 E] (トロイアにまつわる要素) の共有関係より自動抽出 —— ※オーソドックスな神話伝承およびにまつわっての理論では【アトランティスとトロイアとの結びつき】が問題視されることはないに等しい(たとえもってしてアトランティスが【黄金の林檎の園と結びつけて見られもするもの】、【洪水伝承と結びつけられるもの】であり、対して、トロイアが【黄金の林檎による滅亡した都市】、【創始伝承(および一部滅亡伝承)にあって洪水伝承との結びつきある都市】であっても、である)。にも関わらず、両者(アトランティスとトロイア)の間に記号論的つながりあいが存在していることを問題視している、縷々(るる)詳述してきたとのそれなりの理由があって問題視しているのが本稿となっており、そうもしたところから【アトランティスとトロイアのつながりあいの関係】の捕捉をもってして[[灰

色]の関係性判断の材料]を切り分けるとの事をなしている——)

(入力の先後関係に依拠しての出力順序通りのかたちでの) 関係性判断材料要素における [黒]の出力

(:【 [要素A]—小説『ジ・イルミナタス・トリロジー』】 ⇔ 【 [要素A]—映画作品『ファイト・クラブ』】 , 【 [要素F]—小説『ジ・イルミナタス・トリロジー』】 ⇔ 【 [要素F]—映画『ファイト・クラブ』】 との [要素A] (911の事前言及と結びつく作品) および [要素F] (ヘラクレス 12 功業) の共有関係より自動抽出)

(入力の先後関係に依拠しての出力順序通りのかたちでの) 関係性判断材料要素における [黒]の出力

(:【 [要素B]—テレビドラマ『スターゲイト・アトランティス』】 ⇔ 【 [要素B]—小説『ジ・イルミナタス・トリロジー』】 , 【 [要素D]—テレビドラマ『スターゲイト・アトランティス』】 ⇔ 【 [要素D]—『ジ・イルミナタス・トリロジー』】 との [要素B] (ブラックホール・ワームホール・異界の扉にまつわる要素) および [要素D] (アトランティスにまつわる要素) の共有関係より自動抽出 ——※ペンと紙だけで再現できる処理手順の中身について述べれば、である。アルゴリズムのありようとして入力順序 11 番目のデータ(上の表を参照のこと)である映画『ファイト・クラブ』を入力した時点で先立って入力していた『ジ・イルミナタス・トリロジー』とのマッチング処理が[第1 切り分け手順]用の処理領域にて発生。の折、(顧慮、そして、後にての消除の対象とならなかった) 残余の要素として消除されなかった[[ジ・イルミナタス・トリロジー]に由来する要素 B および要素 D のデータ]が[第2 の切り分け処理手順処理用領域]に機械的に落ちて行き、そちら領域に先のデータ入力時の処理で既に落ちていた[[スターゲイト・アトランティス]に由来する要素 B および要素 D のデータ]とのマッチング処理が連続してなされて上のような[黒]のデータが自動抽出されているとの運びとなっている——)

(入力の先後関係に依拠しての出力順序通りのかたちでの) 関係性判断材料要素における [黒]の出力

(:【 [要素B]—小説『タイタンの妖女』】 ⇔ 【 [要素B]—小説『コンタクト』】 , 【 [要素E]—小説『タイタンの妖女』】 ⇔ 【 [要素E]—小説『コンタクト』】 との [要素B] (ブラックホール・ワームホール・異次元との扉にまつわる要素) および [要素E] (トロイアにまつわる要素) の共有関係より自動抽出 ——※小説『コンタクト』と小説『タイタンの妖女』の間には[ヘラクレス]を介しての関係性があるとのことも本稿本文にて原文引用なしながら論じているのだが(出典(Source)紹介の部 65(11)) および出典(Source)紹介の部 66)、ここでは両者のヘラクレスを介しての関係性は関係性の自動抽出に影響して「いない」。というも『コンタクト』と『タイタンの妖女』の両作に[ヘラクレス]の要素が目立って現れているとデータ入力して「いない」からである(両作共々、[ヘラクレス座 M13 星雲]を目立って作中にて登場させているのだがそれが両作の主だつての筋立てを規定しているとは判じておらずデータ入力にあってはそのことは省いて

いる)——)

(入力の先後関係に依拠しての出力順序通りのかたちでの) 関係性判断材料要素における [黒] の出力

(:【[要素A]—漫画作品『ジョジョの奇妙な冒険 スターダストクルセイダース』】 ⇔ 【[要素A]—映画作品『トレーディング・プレイシズ』】、【[要素F]—漫画作品『ジョジョの奇妙な冒険 スターダストクルセイダース』】 ⇔ 【[要素F]—映画『トレーディング・プレイシズ』】との[要素A] (911の事前言及と結びつく要素) および [要素F] (ヘラクレス12功業と結びつく要素) の共有関係より自動抽出 ——※[911の事前言及と結びつく要素]を二つの作品が共有している段階で尋常一様ならざるところなのだが、ここではその事前言及描写に[ヘラクレスの第11功業に登場する黄金の林檎(の質的等価物と歴年見做されてきたことが知られる「オレンジ」)]が関わっていることをも「機械的手順で」切り分けして[関係性「強」]の判断材料を一単位、プロットしている——)

(入力の先後関係に依拠しての出力順序通りのかたちでの) 関係性判断材料要素における [黒] の出力

(:【[要素A]—小説『タイムクエイク』】 ⇔ 【[要素A]—映画作品『バック・トゥ・ザ・フューチャー』】、【[要素B]—小説『タイムクエイク』】 ⇔ 【[要素B]—映画作品『バック・トゥ・ザ・フューチャー』】との[要素A] (911の事前言及と結びつく要素) および [要素B] (ブラックホール・ワームホールら時空間の穴と結びつく要素) の共有関係より自動抽出 ——※小説『タイムクエイク』および映画作品『バック・トゥ・ザ・フューチャー』が[複線的な意味合いでの911の事前言及文物]としての要素(要素A)を帯びているとのその理由については本稿本文を参照いただきたい(そうしたデータ入力以前のデータ具備の判断は[プログラム処理をひたすらに機械的に動かすような機械]には難しく多層的に物事を見る人間の脳ではないと判じ難いところであると見てとれるものである)。につき、[911の事前言及と結びつく要素]を二つの作品が共有している段階で奇怪であるというのは(再度繰り返し)論を俟たないことなのだが、それら作品らが[時空間に開いた穴]といったものと接合する要素を帯びていることはさらにもって([偶然]として見た場合)尋常一様ならざることである(であるからこそ、仕様の問題としてそうした関係が捕捉された時点で偶然性を強くも否定するとの確率論的ありように関わる[関係性「強」判断材料]を一単位プロットするようにアルゴリズム設定している)。尚、ここでは入力データとして『バック・トゥ・ザ・フューチャー』のことを問題視したわけだが、同じくものところを代替できるような例として本稿では『スーパーマリオ魔界帝国の女神』やキップ・ソーン著作『ブラックホールと時空の歪み』を挙げてもしてきた。が、それらは既にデータ入力順序に基づいて(問題を単純化させるために重複使用を許さぬように「わざと」仕様設定している)アルゴリズムの問題で省きもしている。だが、しかし、たとえば、同様に本稿本文にてその存在について論じてきた映画作品『ジェイコブズ・ラダー』といった作品を見様見方によって『バック・トゥ・ザ・フューチャー』らに代えることもできるであろう(多少無理があるためにそうしたオプションは取るつもりはないのだが)。というのも、映画作品『ジェイコブズ・ラダー』は(本稿にての[補説4]の部にてDVDの再生時間を例示しなが

ら) [爆発にまつわる描写と 119 との数値を結びつけている作品] となり (かの 911 の事件に対する事前描写とも述べられる)、また、同映画表題『ジェイコブズ・ラダー』に見る [ジェイコブズ・ラダー] とは [天界とのゲート] として旧約聖書に登場を見ているものであり、また、フリーメーソンのシンボリズムにあって [異界の領域への通路] といったヴィジュアルのものとして描写されるものであるからである (細かくもの解説は本稿本文を参照のこと) ——)

(入力の先後関係に依拠しての出力順序通りのかたちでの) 関係性判断材料要素における [灰] の出力

(:【[要素 A]—国内青少年向け映画作品『ルパン三世 くたばれ! ノストラダムス』】 ⇔ 【[要素 A]—米国青少年向けアニメ作品『ザ・シンプソンズ』】 との [要素 A] (911 の事前言及と結びつく要素) および [要素 E] (ヘラクレス 12 功業と結びつく要素) の共有関係より自動抽出 —— ※くどくも当たり前のことを繰り返そう。[911 の事前言及と結びつく要素] を二つの作品が共有している段階で「このようなことが偶然で起こるのか?」といった性質のことなのだが、であっても、本稿での確率的分析 (ベイズ推定による [まったくの偶然] か [曰 (いわ) く言い難し] か [明らかで根深い恣意の問題] かの分析) のための材料抽出の本プロセスではそれをもってしても [関係性「中」] の材料としての灰色の材料としてしか重み付けしていない。というのも、筆者はそうした予見文物が「ざらにある」とのことを「識っ」ているからであり、といったものを全て「恣意の賜物」と顧慮してしまうと膨大な人間の知的成果物を所定のフローで関係性判断の材料に供しても「恣意は動かない」とのことになり「お話にならない」とのことを把握しているからである (については強調したいことなのだが、筆者はわざと自分の訴求せんとしていることに [不利] なる条件設定をなして、「それでも、、、」の問題を強くも呈示していこうとの [良心的ベイズ主義者] (good Bayesian) としてのやりようをなさんとしているつもりである) ——)

以上のように「呈示順序の通りに一覧表記なしたデータらを [入力] したならば」機械的に

[黒][黒][白][黒][灰][黒][黒][黒][黒][黒][灰]

との関係性判断材料がアルゴリズム —その意味性については間を経ずに再述することとするが、実にもって単純なアルゴリズムではある— に基づいてプロットされてくる(ようにしている)。

※補足 1: 表記アルゴリズムに応じて自動出力されてくる [「入」「出」カデータ性質] についての補足として

データ (色づけのありようが問題となる場所の特定の文物や映像作品ら) を [入力] した、そのデータ入力に応じて関係性判断の材料が [出力] されてきた、との流れにあっての [入力] ならぬ [出力] 情報 (先述のように確率論的にサイコロの目の出方 1 から 6 を【事象】と表するわけだが、ここでの [出力] 情報もまた関係性判断における「黒」「灰」「白」と色づけての【事象】となる) の方については機械的に抽出されてくるものであるために属人的主観が問題視されるような側面がない、そう、そちら [出力] 情報の [出力] 手順の「仕様」

の定立の仕方が俎上にあげられる以外に属人的主観が問題視されるようなものではない。

それは特定の情報をインプットしたらお決まりの情報加工プロセスが発生するとのものであるから出てくる結果、[黒][灰][白]に対して何故もってして黒色なのだ、何故もってして灰色なのだ、何故もってして白色なのだと文句の付けようはないということである（そこで文句を付ければ、「アルゴリズムで機械的に導出するとの仕様です」「アルゴリズムで機械的に導出するとの規則です」としか返答が返ってこない）。

そうした出力データについては 一規則・仕様それ自体に対して「こういう決まりは現実を近似的にもモデル化するのには不備があるのではないか」などと文句を付ける以外には――

「個人の主観だろうが、これは」

などと文句を付けるのは妥当ではない（そこで文句を言うのは[議会で制定された法律]そのものに異議を呈するべきところで[法律に準拠しての役所のお決まりの事務処理]に文句を言うようなものである）。

対して、

[(出力ならぬ)入力]データの(処理過程での)位置付けのありよう]

に関しては大いに

「属人的主観の先行が問題になるとのことはないか」

「誰でも納得がいくとのことをきちんと問題視しているのか」

とのことが検討されて然るべきところとなる。

たとえば、特定入力データにあって[要素 A]と[要素 B]の具備が本当にみとめられもするのか、ということは 一機械的処理の外側で―― きちんと検討されて然るべきところとなる（手続きが厳密に定められた事務処理の手順（および、による分類結果）ではなく、そも、事務処理に供される資料に捏造贋造の類がないのか（あるいは文書意味合いについての処理実行者の不等な評価付けがなされていないか）、そういう問題である）。

ここで述べるが、本稿この段で確率論の基礎とすべくも「情報処理」する（すなわち、[(離散的)確率論の対象としての明確に色分けした【事象】]のありようを捕捉すべくも「情報処理」する)との[データ]については顧慮対象となるべくものものとして最低限の条件として

[要件 1]

【第三者が容易に確認出来る刊行物とのかたちで流通している日本語文字数換算にして1万字以上(英語単語数においては3000語以上)の過去の「文献」記録(古典から現代小説などフィクション、そして、特定のトピックについて解説を加えているノン・フィクションら問わずもの文物)】

あるいは

【第三者が容易に確認できる商業作品として市場市中に流通している過去の「映像」記録(映画作品など)】

のいずれかにあたり、そして、先行して顧慮したものと差異が乏しい引用情報・仄聞(伝聞)情報を扱っているとの(公)文書を除外したもの

であって、なおかつ、

[要件 2]

[[要素 A]から[要素 J]のいずれかの具備しているとのもの]

との前別条件を定めている(前掲処理フロー図の[分岐 1]および[分岐 2]の部)。

そうしたデータのありように関して

[要件 1]

【第三者が容易に確認出来る刊行物とのかたちで流通している日本語文字数換算にして1万字以上(英語単語数においては3000語以上)の過去の「文献」記録(古典から現代小説などフィクション、そして、特定のトピックについて解説を加えているノン・フィクションら問わずもの文物)】

あるいは

【第三者が容易に確認できる商業作品として市場市中に流通している過去の「映像」記録(映画作品など)】

のいずれかにあたり、そして、先行して顧慮したものと差異が乏しい引用情報・仄聞(伝聞)情報を扱っているとの(公)文書を除外したもの

に対象が合致するものか否かは「ほぼ」容易に明確に線引き出来るところであろうが(文書の質的同質性といったことの度合いはともかく文字数カウント・尺の計算などは機械でもできるであろう)、

[要件 2]

[要素 A]から[要素 J]のいずれかの具備しているとのもの]

に対象が合致するものか否かはあらかじめもってして —たとえばデータ入力前の[要素 A]から[要素 J]の具備状況のラベリングの段階でもってして— 「嘘・偽りがなされていないか」との[比較的手間がかかる判断]が必要になる(とのところであって然るべきである)。

であるから、果たして本当に[要素 A]から[要素 J]を具備しているのか、筆者はつい先立っての入力データ一覧表の箇所にて[要素 A]から[要素 J]をいかに具備しているのか、そして、その典拠となるところは奈辺にあるのか、本稿にてあつての典拠紹介番号を付している — 請け合うが、本稿にあつては(自身の主観を先行させての話の避ける中で)典拠については第三者が具体的にすぐにこれだと確認できるものを選んで挙げており、また、それら典拠は「折り紙付きである」とのレベルで誤りが介在しにくいものを見繕っている — 。

そうもしてここにて「機械的に処理されて出てくる」出力情報 — 関係性判断にまつわる[黒][灰][白]のデータら(本当に[黒]なのか、[灰]なのか、[白]なのかとの意味では問題にならぬとの定型的処理にて導出されてくるデータら) — は云うに及ばず、入力情報も「賽の目が1から6と厳密に定まっているように」厳密にそうだと定まっているものであると申し添えておく(：尚、サイコロの目が1から6から定まってもそこに分銅が入っているように1から6の内、[偶数]ばかりが出る、じゃあ、いんちき・いかさまじゃないのか、とのこととは話の性質が違うとのことも一応断っておく。ここでの確率論を展開しているとの意図は、そも、いんちき・いかさまの有無があるのかの検証の仕方を比較的複雑な事物に対するやりようとして示すためであつて[目的]と[手段]を履き違えてはならぬところでもある([目的]とのことについてよりもって述べれば、いかさま師がいかさまの対象を破滅させる[意志]を有していることを白日に曝すことを念頭に置いているわけでもあるが、にまつわつては

銘々がこれまでの本稿の内容及びこれよりの本稿の内容の(批判的視座にてでも)検証でもってご判断いただきたいと考えている)。また、上にての例示事例では[黒]のデータばかりが出ているわけだが、それは筆者がそういう材料を選んで入力しているがゆえであること、論を俟たないわけであるも、それは[いかさま]ではない。これより筆者はそうしたデータを確率論(ベイズ確率論におけるベイズ推定)における【事象】、検証仮説らのありようを判ずるうえでの【事象】として材料にしての計数的分析をなしもするが、「自身の示したい結論とは真逆の」大量のダミーデータも用意しながら、それらでもってして確率分布がいかによりに変異していくのか、厳密なる数式上の話を呈示していく所存である——といったことをやらなければ無論、まともな確率論とはならない。自身の呈示したい論理論拠を挙げ連ねる一方で他面、反証(となりうる)データを一切問題視しないとの式で計数的な話をなそうなどとのことになれば、詭弁の徒輩が数式を手繰っているにすぎない、そうしたやりようはこの身はなさないと述べている——)。

※補足 2:これより展開していく確率論それ自体の性質についての補足として

今しばらくも補足としての表記を続ける。

『データの客観性が担保されたものとして呈示されて「も」——(七面倒くさいとのことでそれが検討されるかは別としてとにかくも検討されれば適正であると分かる)との【手順】を通じて分類付けが機械的になされもする対象、そうしたものとしてのデータが客観性が担保されたものとして呈示されて「も」——呈示されたデータに対して終局的にそれが適用されるとの【数式】(および、よりもって重要なところとしての、【数式】の背後にある数学上の思考法)が難解ならば、適正さの判断が困難なものであるのならば、[多くの人間]にとって検証不能なのではないか(であるからそうした話をなすことはほとんどもってして意味が無いのではないか)』

と思われる向きもあるであろう。

だからこそもってして述べるが、

「これ以降の確率論の話は高等学校にて理系進路の選択をなし、また、「大学レベルでの確率論の基礎」を学んだ向きには「ほとんど惑う余地がない」との性質のものである(むしろ単純さでもって軽侮される可能性もあるかと懸念する)。

さらに述べれば、文系進路で大学に進んだ向きにも基本的に理解に窮するようないないようなもの「ですら」ある(：筆者などにとってはそも、何故、高校レベルで理系・文系と人間を選り分けするのか、得手・不得手への配慮以上には理解に失すところがあるのだが(に関して合理的目的があるとすれば「思考を支えるツールを与えずにの人間の部品化・歯車化」を「より一層」押し進めるとのことにもあろうか)、といったことも問題にならないようなところである)。

そう、(専門家以前に理系「的」人間に本当ならばその理解が基礎として求められる)基本的な数学知識だけで理解せせるとの話をこれ以降、心がけてなす。

その点、大学の単位取得過程にて、いや、それ以前に高等学校での理系進路の選択をなしていてもそこで用いられる[数式]の意味さえ理解できていないとの向きも多くいるようではあるものの、(そう、属人的目分量を過度に強調しての話をなしていると思われる向きもあるかもしれないが、東京大学の偉い学者のセンセイなぞらが監修しているとの名目でのこの国の教科書の内容が「まともな脳味噌を有した人間」には理解に窮するほどに質が低い(理解に要るとの最低限の説明さえなされていない、たとえば、高等学校で用いられる数学の教科書にあつて積

分にあつて[取り尽くし法(的なる概念の沿革)]の説明さえなされていないのだから、それが理解できるとすればその類は[回路付きの機械人間]あるいは[本質的知能無き傀儡(くぐつ)]であるといったありようが見てとれる)といった按配の相応の「まず最初に天ありき」のものであることが往々にしてあるためにそうもなっている節がある——かくいう筆者も高校で微分の式を見ながら『どうして沿革・意味さえまともに説明なさずにこうした式を[最初に天ありきなもの]が押しつけられるんだ? こういう教科書をこさえている連中は、また、こうしたものを意味も分からずに唯々諾々と理解した気になって活用できている気になっている連中は頭の具合がやっぱり本当におかしいんじゃないのか?』などと、(往時未熟であり手前が今以上に頭が悪かったがためかもしれないが)、真剣に思い悩んだり(のような発想法も出てきてしまうような中で進学校で良い教師にも出会えず、だが、といったことまで考えられる人間ならば今時分ならばたとえばそもそも概念の説明をなしている基礎的解説書にまで食指を伸ばすことであろうかとも思う)、大学にて必修指定されていた統計の科目を学んでいた折柄には『この説明でここでの積分の意味が本当に分かっている人間が一体どれくらいいるっていうんだ? 教育課程の問題っていうやつでほとんどいないんじゃないのか(俺もさっぱりもってわからねえな)』などと周囲をきよろきよろ眺めながら深刻に首をかしげていたものである(そして関数処理機能付きの高機能電卓を適切に用いられればといった風情の人間でもそうした中でAが取れてしまう(実際、筆者は経済学部にも属していた折、何も分からないでとりあえず要領として手順だけ暗記していた計算に持ち込み許可電卓でもって臨み、適正回答をなんとか導出、「俺でAなのかよ。びっくりだね、こりゃ」などと思わざるをえぬところでAを取ってしまった)との式で世の大学教育というものにも首をかしげていたものである/頭の具合がよろしくはないとのことでなければ履き違えないかとも思うのだが、説明がなされておらず、直感的に理解出来る素地があまりないと科学言語を主軸とした世界にて参入条件を満たして「いない」にもかかわらずまるで完全に理解しているように振る舞い続けられる存在は天才などではなからう、断じてなからう。「鬼才」との言葉も世にあるわけだが、仮にといった者がいれば、その「鬼」才の一語が悪い意味で意をなすとの本来的には「妖しき」存在であろうと思う——)、紛い物にも本物のような権威を与えうるとの世のありようを脇目にしてきた中で述べれば、これよりの話は「数式の意味さえ理解出来ていないで複雑な数式の話を展開しているようなロボット」(一々もって毒を含めての言いようで失敬ではある)でなくとも易々と理解出来るものにする、そう、「必要以上に難解な」数式の話はしない(だからこそ「惑う」余地がほぼない、と)。また、文系人間(と自らを規定してしまっている人間)にも出来るだけ話を単純化させての「単純な」利用数式の説明の事細かに付すこととする

以上のような方向性——文系人間とラベリングされているような人間でも高校卒業程度の知識水準があれば理解なせるであろうとの事細やかな確率論にまつわる解説をこれよりなしていくとの方向性——にまつわる話をなした上で、である。微に入つてのベイズ確率論の話に入る前に、ここ補足その2と銘打つての段で

[それをなすことが限局化した意味でしか意味をなさぬとの「極めて「よろしくはない」確率論」にまつわる話]

をまずもってなしておく(「そうした話を展開することには意味がないと判じられる」との反面教師的な性質を呈示する、その意でのみ取り上げるに値するとの「極めて「よろしくはない」確率論にまつわる話」をまずもってなしておく)。

その点、筆者が「訴求の用に供するためだけに」提訴していた、

[LHC 実験に携わる実験機関(権威の首府でもある国際加速器実験の国内調整

研究機関)を対象に提訴した日本国内行政訴訟] (本稿前半部にての**出典**
(Source)紹介の部 17 から**出典**(Source)紹介の部 17-4 を包摂する部でそちら
にまつわる説明を多少なしているように筆者は「常識的な」訴求を行政訴訟提訴と
それによる欺瞞の摘示 — 実験に公金でもってして関わる公的機関が国民に対
する説明責任の問題に背馳(はいち)し、また、法に触れるとの[欺瞞]ある応対を
平然となし、[実験のリスク問題(ブラックホール生成が取り沙汰されてきたとの問
題)]に関して衆をたばかるようなこと]をなしたとのことが法律上の争点となっていも
したとの訴訟— とのかたちでなさんとしもしてきた人間ともなる)

にて — 先方の弁護士らが二転三転する主張をなし、二年以上も「無為に」(効果として結
果的に「無為に」)続いた第一審を経て— 控訴審(東京高裁法廷)に提出した、

[控訴理由書] (『行政訴訟など訴外的手段に用いる意味を越えては意義が無
い挙に陥りがちだ』と(諸所より話を聞いたり、関連文献ら紐解きもして)分かっ
た中でながらも力んで作成していたとの計にして 120 頁超にも及ぶ長大な文書/
訴外でも水面下訴求用に用いられるようにとの観点で作成なしていたのもので
はあるが、現況もってしてネットでダウンロード可能とはして「いない」との文書)

における記述内容からの引用を

[限局化した意味でしか意味をなさぬ確率論にまつわる例示] (いわばもってし
ての[反面教師]としての例示)

としてなしておくこととする。

(直下、自身が第一審原告あらため控訴人として東京高裁に提出していた控訴理由
書、同控訴理由書にあって[法律上の争訟に直に関わらない補足の部である]と手
ずから明示して付していたとの部、p.115からp.122の内容を(部分部分省略しなが
らも) 転載しておくこととする)

2. 確率論的縛りとして普通人には承服できぬような安全性予測が だされていた、とのことが粒子加速器実験に関しては存すること について

ケンブリッジ大に奉職する学者にエイドリアン・ケント(Adrian Kent)という人
物がいる。

原告第一準備書面 p.38—p.40 にてもその加速器にまつわる意見内容を問題
視したとの人物が同エイドリアン・ケントとなるが、同人物、確認できるだけで下
のようなきらびやかな来歴を有した人物となる。

Reader in Quantum Physics, DAMTP, University of Cambridge (⇒ケ
ンブリッジ大 DAMTP (Faculty of Mathematics 数学科と訳せる)の量
子物理学分野主任)

Distinguished Visiting Research Chair at Perimeter Institute for
Theoretical Physics in Waterloo, Ontario (⇒カナダ、オンタリオ、ワー
テルロー大のペリメーター理論物理学研究所(と訳せる)の特別招聘
調査主任)

Fellow of Wolfson College, Cambridge (⇒ケンブリッジ大ウルフソン・
カレッジのフェロー)

Director of Studies in Mathematics at Darwin College, Cambridge (⇒

ケンブリッジ大ダーウィン・カレッジの数学科主任)
Affiliate at the Institute for Quantum Computing, University of
Waterloo, Ontario (⇒カナダ、オンタリオ、ワーテルロー大の量子コ
ンピューティング研究機関にあつての会員)
Visiting Scholar at Wolfson College, Oxford (⇒オクスフォード大ウル
フソン・カレッジ客員研究員)
Visiting Scholar at Massey College, Toronto (カナダ、トロント、マッ
セー大学客員研究員)

…(中略)…

さて、以上のようなきらびやかな来歴の持ち主たるエイドリアン・ケント Adrian Kent であるが、同人物が 2000 年に世に出した論稿に下のような現時、オンラインから誰でもダウンロード可能な(そして、ある程度、有名な)論稿がある。

(論稿名) **A critical look at risk assessments for global catastrophes**
(配布 URL ⇒ <http://arxiv.org/pdf/hep-ph/009204v6.pdf>) (タイト
ルを和訳すれば、『地球規模の大災厄に対するリスク・アセスメントに
対する批判的視座』とでもなろう論稿。表記のタイトル(A critical
look at risk assessments for global catastrophes)の検索エンジン上入
力で PDF ファイルを特定、ダウンロードできるもの / 日付表記では
2000 年に初版がものされ、2003 年に修正を見ている —— April
2003 (revised)—— とのものとなる(写しを甲第八十四号証として本
書に付しておくこととする))

これまた当然に文献的事実の問題に関わるところとして写し(甲第八十四号
証)を本書に付した上記論稿、

A critical look at risk assessments for global catastrophes

の冒頭ページ(の中段)には

For example, DDH's main bound, $P \text{ catastrophe} < 2 \times 10^{-8}$, implies
only that the expectation value of the number of deaths is bounded by
120 ; BJSW's most conservative bound implies the expectation value
of the number of deaths is **bounded by 60000**.

との記載がなされている。

以上文章については難解とも受け取られてしまう素地があるのですぐに細か
き部の解説を付すが、同文章同部位、取り敢えずも訳せば、次の通りの意のも
のとなる。

「たとえば、DDHらの主たる縛り、[P catastrophe (カタストロフ; 破滅
の可能性) $< 2 \times 10^{-8}$ (5000 万分の 1)]は詰まるところの死の期待
値として 120(人)と紐づいていることを含意している。(他面)、
BSJWらの最も用心深き(最悪の事態を想定しての)縛りでは死の
期待値が **60000(人)と紐づいている**ことを含意している」

ここでまず上にての[DDH]や[BSJW]といった文字列についてあるが、
[DDH]、[BSJW]というのは人名頭文字の略称となる。[特定の D1 氏、D2 氏、
H 氏]の三名を DDH と略記し、[特定の B 氏、S 氏、J 氏、W 氏]の四名を
BSJW と略記しているのである。

同点については同じくもの論考(甲第八十四号証 **A critical look at risk assessments for global catastrophes**)にあっての冒頭部にて

Recent papers by Busza et al. (BJSW) and Dar et al. (DDH) argue that astrophysical data can be used to establish small bounds on the risk of a “killer strangelet” catastrophe scenario in the RHIC and ALICE collider experiments.

(訳として)

「**[Buszaら(BJSW)の最近の報告書]**と**[Darら(DDH)の最近の報告書]**らは

[RHIC および ALICE の衝突型加速器 (collider) を用いての実験にてのキラール・ストレンジレット破局シナリオにてのリスク]

に対する小さき境界を設ける(「狭く細やかな境界線を引く」)ために天文物理学上のデータを用いることを議論している」

(訳文における専門用語などについて本書ページ脇に付した別枠解説部の内容確認を請うこととして)上提出文書には

[Buszaら(BJSW)の最近の報告書]

と

[Darら(DDH)の最近の報告書]

と書かれている、そこより、「BJSW および DDH が特定の報告書の作成者のことである」とは察しがつくことか、と思われる。

うち、**[Buszaら(BJSW)の最近の報告書]**については1999年初版刊行2000年改定の著名な安全報告書で W. Busza, R.L. Jaffe, J. Sandweiss, F. Wilczek の各氏らによる、

Review of Speculative "Disaster Scenarios" at RHIC (『RHIC における[投機的(と述べられる)破局シナリオ]の分析』)

との報告文書のことを指す — 本件控訴人が第一審原告との立場で**甲第四十五号証**として第一審法廷にて提出しているものとなる(BJSWとは上報告書の作者たる W. Busza, R.L. Jaffe, J. Sandweiss, F. Wilczek の各氏の姓の頭文字となっている(執筆者らの姓は第一審提出の**甲第四十五号証**の表紙に記載されている))。

さて、上にて言及の

Review of Speculative "Disaster Scenarios" at RHIC

という報告書は1999年にブルックヘブン国立研究所の運用する粒子加速器(加速器 RHIC)のリスクが問題視された折に出されてきたものとなり、同 **Review of Speculative "Disaster Scenarios" at RHIC** がブルックヘブン国立研究所が出していた1999年の安全報告書であるのに対して、CERN … (中略) … による1999年安全報告書「も」存在しており、そちらの報告書、

Will relativistic heavy-ion colliders destroy our planet ? (『Relativistic Heavy-Ion Collider (RHIC) は惑星を崩壊させるか』と訳せる報告書で、先立って解説をなしながらも**甲第六十七号証**として本書に付しているものともなる)

となる(同**甲第六十七号証**として写しを提出の文書は表記のタイトル入力でオンライン上より特定・ダウンロード可能なものともなっている)。その執筆者らた

る Arnon Dar, A. De Rujula, Ulrich Heinz らの著者らの頭文字をとって執筆者表記に DDH を充てている、とのこととなっている。

前置きが長くなったも、以上より Adrian Kent の論稿、

A critical look at risk assessments for global catastrophes

冒頭頁にあつての

For example, DDH's main bound, $P \text{ catastrophe} < 2 \times 10^{-8}$, implies only that the expectation value of the number of deaths is bounded by 120 ; BJSW's most conservative bound implies the expectation value of the number of deaths is **bounded by 60000**.

については

「たとえば、DDHら(甲第六十七号証として法廷に供している CERN 報告書たる Will relativistic heavy-ion colliders destroy our planet?の執筆者ら)の主たる縛り、

[$P \text{ catastrophe}$ (カタストロフ;破滅の可能性) $< 2 \times 10^{-8}$ (5000 万分の 1)]

は詰まるところの死の期待値として 120(人)と紐づいていることを含意している。

(他面)、BSJW ら(甲第四十五号証として法廷に供しているブルックヘブン国立研究所報告書たる Review of Speculative "Disaster Scenarios" at RHIC の執筆者ら)の最も用心深き(最悪の事態を想定しての)縛りでは死の期待値が **60000(人)と紐づいていることを含意している**

と言いかえられるとのこととなる。

さて、ここでいくつか付言しておくが、まずもって

[$P \text{ catastrophe}$]

とは Possibility of Catastrophe [世界の破滅がもたらされる確率]の略記 (本書の「後の段」(p.120-p.121)にて引用なす斯界の有力筋マーチン・リース氏による書籍からの引用部でもその通りの意のものであることを示す記述が含まれている) のことを指し、その [破滅の可能性] が

[$2 \div 10$ のマイナス 8 乗 \Rightarrow 5000 万分の 1]

であると論じられていることとなる (:尚、本書に写しを付してのエイドリアン・ケント氏の論稿内では 3 と振られたページの中段にて “ DDH's bounds, derived from the observed rate of supernovae, range from 2×10^{-6} (their pessimistic bound for a very slow catastrophe, in which the Earth is prematurely destroyed at some point in the billion years before it would anyway be consumed by the expanding Sun) to 2×10^{-8} (their main bound) [2]. ” 「とも」記載されている。その趣旨は 一 続く段にて解説することにも関わるところとして 一 主たる予測上では破滅の可能性は「5000 万分の 1」、悲観的な予測として呈示されていたところでは「50 万分の 1」であるということとなる)。

そちら DDH(CERN 報告書執筆者ら)の縛りが

[5000 万分の 1]

となり

[120(人)]

枠で括っての転載部の内容から離れてのこととして述べるが、ここで「本書の後の段」p.120 から p.121 と表記しているのは転載元の本稿筆者に由来する文書、『控訴理由書』にあつてのことではない。そのこと、何卒、履き違えないで頂きたい次第である。

と紐づけられているということは[死の期待値] (that the expectation value of the number of deaths と訳出部に表記されている箇所) の話となり、同じくもの 5000 万分の 1 の確率で破滅をもたらされるということは

「5000 万分の 1 の確率で 60 億人を殺害することに等しい」(報告書初期版が出された「2000 年の」地球人口は現時点より 10 億人以上 少なく 60 億人とされている — 疑わしいとのことであれば、たとえば、ウィキペディア[世界人口]項目などで確認なせることではある—)

とのことで[期待値] —— (※[期待値]とは「初等数学」上の概念で、[ある確率と紐づいた結果の態様からある確率の挙動に出ることで[平均、どの程度の結果が出されるか]を示すとの概念]になる (たとえば、[100 分の 1 の確率で 200 点のリターンが得られる]のなら、[100 分の 1×200=2(点)]がその挙の期待値であるといったこととなる)) —— は[5000 万分の 1×60 億人=120 人]となる、と述べられているということである (⇒ 期待値として 5000 万分の 1 で地球を破壊することは 120 人を殺害することに等しいということとなる)。

対して、

BJSW's most conservative bound implies the expectation value of the number of deaths is bounded by 60000.「BSJW ら (ブルックヘブン国立研究所) の最も用心深き(最悪の事態を想定しての) 縛りでは死の期待値が 60000(人)と紐づいていることを含意している」

と記述されているのがどういうことであるか、と述べれば、最悪の縛りとしては [10 万分の 1]

の確率で地球を破壊する可能性があるとの試算が出されていた、とのことを意味する(5000 万分の 1、すなわち、120 人殺害ではなく 6 万人を殺害する結果が期待値として出されているのなら、60 億(往時世界人口)を 10 万を分母にして割っているとのことになる、すなわち、[10 万分の 1]が問題になっているということとなる。ちなみに、10 万分の 1 というのはエイドリアン・ケントの論考、(ここにて内容問題視している論考)にての他所に

BJSW refined their calculations in the second version of their paper, extracting an extra factor of ten and producing bounds for a ten year run of the RHIC experiment of (Cases I-III): Pcatastrophe $<2 \times 10^{-11}$, Pcatastrophe $<2 \times 10^{-6}$, Pcatastrophe $<2 \times 10^{-5}$ と表記してあることから分かるように

「10 年間装置を運転させた」

うえでの破滅の可能性となる —— 余事であるが、実験機関は(リスク算定に際しての)[想定運転期間]について誤魔化し(ないし誤謬)を含む報告書を出した、ということでも欧米圏有識者らの世界で一時、非難を浴びていた、とのこととも根を一にしていることとなる——)。

さて、(国内外マス・メディアなどはその点について一切、報じていないも)

『[最悪の見立て]ベース (most conservative bound) では 10 年間、運転させることで地球を 10 万分の 1 で壊す確率があるなどと実験を実施している機関てずから発表している実験とは一体全体何なのか。そうした実験について[リスクアセスメント]ひいては査定に基づいての[適切なリスクマネジメント] はきちんとなされているのか』

ということが当然に問題になる(BJS「W」の報告書の「W」は後にノーベル賞を受賞したフランク・ウィルチェックであるとのこともある加味して、また、most conservative boundとして[10万分の1]との数値を出しているブルックヘブン国立研究所(BNL)がRHICというその10万分の1の可能性の結果を引き起こしかねない粒子加速器実験の運用主体であったということ「も」加味して問題になる)。

以上、述べてきたことに係ること(本書の表記記述内容の適正さを側面から示すこと)として

書籍(マーティン・リース著 Our Final Century: Will the Human Race Survive the Twenty-first Century?『今世紀で人類は終わる?』(草思社)——邦題タイトルに付された原題は Our Final Century?——)

よりの引用をなしておく(表記著作『今世紀で人類は終わる?』に関しては前審にての原告第一準備書面にも甲第十九号証として写しの部を提出していたが、本控訴審では別の部の写しを甲第八十五号証として付しておく)。

p.159-160よりの原文引用(ただし、中略・太字化・下線付与の方は控訴人の方でなす)

ふつう、脅威がどのくらい深刻かをはかる場合は、発生率と危険にさらされる人の数をかけて、死者の「期待値」を算出することで行く。当時、全世界の人々に危害が及ぶおそれがあるとして、専門家は死者数の期待値(ここでいう「期待」とは専門用語での意味)が一二〇人(世界人口を六〇億人として仮定し、それを五〇〇〇万で割った数)にも達するだろう、と説明していた。だが、実験の「副産物」で一二十人の死者が出るという予測を聞いた上で、物理実験に同意する気になる人はどう見てもいそうにない。したがって、もちろん、そのようには書かれなかった。代わりに、六十億人の死者が出る確率は五〇〇〇万分の一以下と記されたのである。

(中略)

ケンブリッジ大学の同僚エイドリアン・ケントは、もうひとつの問題点を強く指摘している。このシナリオでは、すべてが跡形もなく消滅してしまうおそれがあるのだ。自分たちが死んでもせめて生物学的・文化的遺産だけは残ってほしいという大方にとっての切なる願い、いいかえれば、自らの生命や仕事が連綿と続く進化の鎖のひとつになれたらとの希望を粉々に打ち砕く。

以上の Our Final Century: Will the Human Race Survive the Twenty-first Century?『今世紀で人類は終わる?』(草思社)よりの抜粋部から述べられることはこうである。

第一。英国物理学会の権威(マーチン・リース氏)によって確率5,000万分の1が死者の期待値120人と結び付けられている(先の本

書 p.118 に挙げている論稿内表記法に則れば bounded by 120

)とのことについて先立っての本書 p.119 にて控訴人が表記したことの内容の真正さが示されている(：換言すれば、引用なしの論文で確率10万分の1で死者の期待値60000人(**bounded by 60000**)との予測が(リスクを高めに見積もる上で慎重、) [もっとも保守的なもの]として明示されていたことも事実であると予測がつくとのことである)

第二。エイドリアン・ケントがマーティン・リース(最も権威ある学者と看做されている人間)のケンブリッジ同輩と紹介されていることからエイドリン・ケント氏が相応の学者筋(権威筋の学者筋)であることが分かる。

以上、述べたうえで本書に付しての甲第八十五号証(流通書籍 Our Final Century: Will the Human Race Survive the Twenty-first Century?『今世紀で人類は終わる?』(草思社))よりの引用を続ける。

p.164 よりの部分引用(ただし、太字化・下線付与の方は控訴人の方でなす)

イギリス政府の放射線障害に関するガイドラインでは、原子力発電所の職員という限られた集団に対してすら、放射線被曝によって死亡する確率が年間一〇万分の一を超えることは容認できない、としている。この極端に危険回避的な判断基準を粒子加速器の実験に当てはめたらどうなるか。危険にさらされるのが世界の全人口だとして、最大死者数はやはり厳格に制限するなら、大惨事の発生率は一〇〇〇兆分の一(一〇のマイナス十五乗)以下である、という確約がおそらく必要になってくる。

上より述べられることはこうである。

「イギリス政府の放射線障害に関するガイドラインでは「限られた」個々の原子力発電所職員の被曝死亡確率を年間 10 万分の 1 以下にする」

との要請がなされているが、そこに見る個々の職員の被曝死亡確率に対する要請確率は一九九九年粒子加速器リスク関連報告書(甲第四五号証の Review of Speculative "Disaster Scenarios" at RHIC)に普通人には読み解けないような科学言語で示されていた(とケンブリッジ大のエイドリアン・ケント氏の論文で間接的に言及されているとの)最悪の地球人類絶滅確率「10 万分の 1」

と同じであるということである —— 尚、1999 年報告書に見る 10 万分の 1 というのはストレンジレットという仮想の粒子に起因する地球崩壊確率であり、ブラックホールに至ってはその生成可能性自体が[ありえぬこと]と度外視されていた(本書 p.10-p.16) —— 。

(ここではいちいち[チェルノブイリ]、[スリーマイル]、[東海村 JCO] (死者 2 名・被曝者 667 名とも)、[福島]の話はなさない。馬鹿馬鹿しいがゆえに、である。

尚、以上の(直近引用文書 p.164 に見る)記述を自著にてなしているマーティン・リース氏は —— 少なくともそちら書籍の邦訳版(甲第八十五号証)を見る限りにおいては——
「粒子加速器リスクが最悪の見立てとして 10 万分の 1 と見繕われていたこと」

とのエイドリアン・ケント論稿記述については一言だに言及していない(「放射線被曝による死亡する確率につき原子力発電所職員に関しても年間 10 万分の 1 を超えることは容認できないとの放射線障害に関する英国のガイドライン」には言及していてもブルックヘブン国立加速器の最悪の見立て(同じくもの「10 万分の 1」)については一言だに言及していない)。

要するに(エイドリアン・ケントの名を出しつつ、ケントの指摘事項で

もあった「10 万分の 1 の死亡期待値の縛り」についてはなんら言及していないとの) マーティン・リース氏は[関係者にしか分からないブラック・ユーモア]を見せたのではないか、あるいは、「世論の反感を買うことはやるな」と関係者にしか察することのできない二重話法(ダブル・ミーニングあるいはダブル・スピーク)を込めたのではないかと「とも」解されるわけだが、一であるから、「成程。」と思われることとして — ロード・マーティン・リース (アイザック・ニュートンがそうであったのと同様、英国王立協会会長経験者として令名を馳せているとの旨が本法廷提出書証にも記載されている人物)は「1980 年代、粒子加速器にて真空の相転移というものに伴うリスクが問題視された折に」

「宇宙線との比較による安全性検討を考案したのは自分らである」と自認している向きともなっており(要するに今日の粒子加速器リスクにまで転用されている[宇宙線]を論拠にしての安全性検討方法を提案したと自認している向きともなっており — その点については本件控訴人が原告として既に甲第一九号証として本訴訟第一審にて該当部写しを提出している *Our Final Century?* (邦題)『今世紀で人類は終わる?』(草思社)の p.155 に記載されていること「でも」ある —)、なおかつ、現況、CERN の LHC 実験に対するその容認コメントを CERN ウェブサイトに掲載されているとの向きともなる — 第一審にあって原告が甲第四号証として写しを提出した CERN の *The safety of the LHC* と題された英文ページ(のその写し)にマーティン・リースに由来するコメントとして次のように記載がなされている。" *There is no risk [in LHC collisions, and] the LSAG report is excellent.*" Prof. Lord Martin Rees, UK Astronomer Royal and President of the Royal Society of London (大要)「LHC の衝突にあっては何ら危険性はない。LSAG レポートはエクセレントである」ロンドンにての王立協会会長マーティン・リース卿。 —)

とにかくも、加速器リスクについては — 宗教などを奉ずる向きが「神ならぬ人の身ながら」などとも表すような特性であるか否かは論じないとしても — 万事万端遺漏なくも顧慮されているとの言明がはきとされているわけだが (たとえば、第一審に供していた[原告第五準備書面] p.19—p.21 には米国の 2008 年の LHC 実験差し止め訴訟で法廷助言人(アマカス・キュリエ)となったノーベル物理学者がそのようなことを述べている旨、紹介している)、1999 年のリスク関連報告書(甲第四十五号証)には「10 万分の 1」

との数値が最悪の見立てとして呈示されていたと第一級の有識者たるエイドリアン・ケントによって(ある程度の識見がある人間でなければ把握できぬこと、そして、マス・メディアなどは国内外で一切、報道しなかったこととして)その論稿 — 甲第八十四号証として呈示した *A critical look at risk assessments for global catastrophes* のことである — 内に指摘されているとのことは[事実]である。

そうした「最悪の可能性は 10 万分の 1 である」とするとの実験機関報告書 — — 1999 年のストレンジレットによる最悪の地球滅亡リスクを 10 万分の 1 と見積もり、ブラックホールに至っては生成される可能性だに「ない」としていた実験機関報告書(本書 p.13—p.16 でも性質解説をなしているとの甲号四十五号証の *Review of Speculative "Disaster Scenarios" at RHIC*) — よりリスクは理論的

に絶無であると強調する 2008 年の CERN 報告書(甲第二十号証)にバージョン・アップするまでのリスク評価は果たして「適切に」なされているのか。

(以下略 —— 続く段では本稿筆者がその国内法規に違反する行為がために法廷に引きづり出した(リスク管理文書を当初やりとりで最初存在しないとした上で、あまつさえ、それを「存在しない」と強弁するやりように[国民に対する深刻な背信行為]があった判じられるところがあったとの事情を受けて法廷に引きづり出した)との国内の LHC 実験参画機関の不品行にまつわる話に入っているわけだが、その部は割愛する——)

(ここまでをして本稿筆者自身が第一審原告あらため控訴人として東京高裁に提出していた控訴理由書、同控訴理由書にあって「法律上の争訟に直に関わらない補足とはなるが、」と明示して付していたとの部、p.115 から p.122 よりの(自身作成文書よりの)転載部とする —— 本稿筆者は自身が「試験的」に運用していたウェブサイトの類をフリーク・ショー(畸形を売り物にするどぎついショー)と同様のものにも見せたいのかとの情動的価値・情緒的価値にて相応の程度の媒体に無断転載をなしてきた輩らもいままで捕捉してきたのだが、以上は一層、といったこと(言論劣化)がなされることを赦すつもりはないとの真つ当な常識的活動に由来するところの文書よりの転載部ともなる——)

上の筆者自身の手になる法廷提出文書 —— 再言するが、第一審からして年度にして 2 年間続いた LHC 関連の国内行政訴訟(国内では現行、唯一かつ初の訴訟)のための供用文書として作成した控訴理由書と銘打つての文書(一ヶ月で証拠説明書など添付文書も含めて寸暇惜しみ猛烈に手を動かして用意作成したとの A4 にして計 100 頁超の文量多き文書)—— よりの転載部にあつては —— それこそを [「限局化した意味でしか意味をなさぬ」との「よろしくはない」確率論] に関わるところのもの例示としてここ本段にて持ち出しているのだが—— 大要、次の通りの [事実関係] を指摘している。

ケンブリッジ大学に奉職の数学・量子物理学畑の学究エイドリアン・ケントの手になる論稿、

A critical look at risk assessments for global catastrophes (2003 年に修正版が刊行されたものとして本稿筆者がかかづらわってきた裁判にても甲第八十四号証 — 84 番目に提出した証拠文書 — として写しを裁判所に呈示しているとの論稿) にあつては CERN の加速器安全性検討に関わつたとの者達 (DDH らとの頭文字で略記されているとの Arnon Dar, A. De Rujula, Ulrich Heinz の各人) が「粒子加速器によるストレンジレット (という仮説上の粒子) 生成にて人類が減ぶリスクは最小限にして 5000 万分の 1、最大限にして 50 万分の 1 と明示していた (期待値として 120 人が死ぬに等しいとの試算を出していた) 」

とのことが指摘される一方でブルックヘブン国立加速器研究所の加速器安全性検討に関わつたとの者達 (BJSW との頭文字で略記されてので W. Busza, R.L. Jaffe, J. Sandweiss, Wilczek ら各人) が

「粒子加速器によるストレンジレット (という仮説上の粒子) 生成にて人類が減ぶリスクは最大限にして 10 万分の 1 とするような話を展開していた (期待値として 6000 人 (→訂正: 60000 人) が死ぬに等しいとの試算を出していた) 」

とのことがある、との旨が記載されている

さて、以上のような話にあつて呈示されている、

[期待値の「理論としての」正確性]

は 一当たり前なのだが— 本稿筆者程度の者が保証できるものではない（上にて転載をなしている控訴理由書ではそういう期待値にまつわる記載をなしていたエイドリアン・ケントという学究が加速器実験を推進する側の斯界の泰斗、[宇宙線]の安全性論拠を編み出したとされるマーチン・リース（元・英国王立協会会長）にその言行が重んじられている向きとなるとのことも文献的事実の問題として指摘されるようなことがある中ながらもそうしたことでその「期待値」にまつわる指摘— 加速「実験」実施の死者の期待値が 120 人である、あるいは、~~6000~~人（→訂正:60000 人）であるといった発表がなされていたことにまつわる指摘— が「理論的に」正しいとは本稿筆者程度が保証できるものではない）。

については

「筆者を含め一般人・門外漢にはエイドリアン・ケント氏が述べていることの信憑性を判断できる(ないしはエイドリアン・ケント氏が論評の対象としている論稿にみとめられるありようを判断できる)だけの[専門的数式][物理学理論]に対する理解力が根本的に欠けている」

とのことがあるから「当然に」そも述べざるをえないわけである（：[権威による論証 Argument from authority]、ラテン語で言うところの argumentum ad verecundiam とは「ある権威がこれこれこういうふうに言っているからそのことは正しいのだ」などと主張・強弁し、説明中身ではなく説明の発信者に伴う後光をもってして話題になっていること、その適否自体を論じようという詭弁の一類系のことを指すわけだが（同様の事例の反対例は[人身攻撃]とされる外法が法廷にて行われる理由として「主張者はこういう輩であるからそうした主張者論法には信が置けない」との[論理それ自体の信憑性]を[話者それ自体の悪い意味での属人的特性]に置き換える式ともなる）、いくらその方面での大家である（と認知されている）専門家の口や筆によるところでもその論理の適正さまでは— 思考を放棄した人間ではないとの知的に誠実真摯たらんとする読み手・聞き手たる判じ手をそこに想定した場合— [専門性の壁]が却(かえ)って仇になりもし、折り紙をつけることはできない筋目筋合いのものとなるということである— 英文で同様のことを端的に表記すれば、である。Basically, I, as an author of this evidence-based paper, think it is no use pointing out such facts as an Cambridge eminent scientist, Adrian Kent referred to Collider's P catastrophe 10^{-5} (implies the expectation value of the number of deaths is bounded by 60000), because arguments which are based on "advanced" mathematical analyses are "unmanageable" for not only the general public but most of educated people.との筋目の話をなしている—）。

そうした意味で上のような確率的目分量（確率論と表裏をなす期待値計算）にまつわつての専門家意見を取り上げることには

「[加速器実験にはそこまでのこと— 死者期待値 ~~6000~~人（→訂正:60000 人）との目算の呈示— が今まで具現化してきているのに目立って同じくものことに「常識的に」非を鳴らすことをなす向きがない、メディア関係者などに目立っていないのはどういうことなのか?」との疑義を呈す」

「[重用されての専門家によって本来ならば耳目をひっさらって然るべきようなリスクに対する見積もり記載がなされているのであるから、(10 万分の 1 の可能性で人類を皆殺しにするなどと「常識の世界ですら」述べられもしたものは一体全体どういふものかとの観点で)、加速器実験で真摯誠実に安全性検討がなされているのか検討されて然るべきであろう]との訴求をなす」

とのこと以外ではさして意味がないと見えるわけである（：といったことがありもする中で本当に危険であると易々と判じられる材料が脇にて存在しているような状況であるのならば、同じくものこと、専門的論議のあれやこれやへの固執をなすとのそのことは却(かえ)って LHC に異を呈さんとする向きらが負った枷(かせ)になりうる、拘泥すべきでない領域での

けつまずきに通ずることであると見立てられもするようになっていく(と私はとらえている)。その点、本稿前半部で紹介していたように **"HONEY I BLEW UP THE WORLD!": ONE SMALL STEP TOWARDS FILLING THE REGULATORY "BLACK HOLE" AT THE INTERSECTION OF HIGH-ENERGY PARTICLE COLLIDERS AND INTERNATIONAL LAW** とのオンライン公開論稿(ジョージア大ロースクールで法学博士の資格をとっているとのことであるサミュエル・アダムス(Samuel Adams)という人物の手になる論稿)にあって(以下、同論稿公開版の上に p.153 と付された部にあっての端的なる記載よりの再度引用をなすとして) **"First, as seen in the RHIC case, it is difficult for a plaintiff to prove that there is a danger when relying solely on theoretical physics."** 「一義的に(かつてワグナーらが 1999 年の騒動の後、加速器 RHIC にて提訴した訴訟に見られるように)原告にとって理論物理学にのみ依拠していることが問題となっている時点で[危険]があると立証することが困難である」(引用部はここまでとする)と記載されていることがまさしく同じくこの状況を適切・端的に表している手前 — (日本のノーベリストである小柴昌俊の肝煎りで造られた権威の首府たる国内の加速器研究機関(国際加速器マフィアの日本分局ともいべき研究機関)による異様な国民を欺くような行政措置に対して「わざとらしくも」常識のレベルに落とし込んで非を鳴らすための材とした訴訟(社会にあって誰もそういうことをやろうとしない中でなんとか非を鳴らすさんとしての挙のひとつでもある)を卑小なる身ながらも提訴なしでいたとの人間としての手前) — は考えるに至っている — ※その点、「基本的にさして意味はない」との話にあっての例外的な有意義さというものを期しもして筆者は法廷にて(問責の一助とすべくも)確率論・期待値にまつわるエイドリアン・ケントにまつわる少数派サイドの専門家指摘の話「をも」敢えてわざとらしく供出文書に反映させていたのだが(それが上の控訴理由書よりの引用部である)、といったやりようとして結果的に前審に増しての[愚劣なる流れ]、明らかな外れ(聖書マタイ伝の言い方やポーカーの状況ではないが、[豚に真珠][豚のカード配分]でもいい)を引いた(というよりはなからそうなるべくも計算付くで引かされたか、か)ゆえに同じくこの控訴審ですべて無為になるべくしてなった節があるのであるも、といったことはここでは置いて話をなしている(いわば、根本根底からして八百長の節もあるこの世界のありようを望見して延々続いていた訴訟が異様なかたちで明後日の方向に流されるとの覚悟も当然にはなからあったわけだが、といった筆者を心底、落胆させたとのことは訴訟それ自体というより訴外の自身の挙で訴求対象とした向きの過半にあっての[空虚な反応]を延々見せつけられ続けた、心が「欠」を見た、そう、まるで[(臨機応変に)機械風情に(下手に)人間のフリでもさせているのか]といった反応を見せ続けられてきたことにありもするのではあるも、そうした落胆のありようについて「も」ここでは置いて詳説しないこととする) —)。

脱線などしつつ、自明なことをくどくどと申し述べているとの感もあるのだが、専門家論議における専門家呈示の確率的目分量などについては直上記述のことを期す — [専門家ら意見の分かれようを示すことでもってしてマス・メディアの怠慢や周囲の無関心に疑義を呈するとのこと] [専門家ら意見の分かれようをもって本当にきちんと安全性検討がなされているのと白々しく、かつ、ねちっこくも常識面で非を鳴らすとのこと]を期す — 以外には

「ほとんどの人間から見て理解なせない — そもそも下らぬ家畜にすぎぬとのありよう、意志力の欠如から理解「なさない」とのよりもって悪くもとらえられる状況ではなく、生育環境に依存しての能力からそもそも理解「できない」理解「できる素地が全く無い」との完全に仕方なしの状況で大部分の人間に理解「できない」 — ことを訴求するとの伝では(それがたとえ真実を穿っていても)さして意味もない」

と申し述べたいのである。

といった[特定の(都合のよい)理想的局面でしかそれを取り上げる意味がない]との専門家由来の確率論に対して、である。

本稿では、

「論拠があやふな確率論（並みの人間には理解が及ばないと物理学専門理論に基づいての確率論）」

のようなものは展開「しない」。

「典拠となるところが明確であり」（「科学言語 —数式の類— ではなく自然言語 —日常使用言語— のみによって記述表現されるものであり」、かつ、「インターネット上より当該情報のダウンロードが可能となっているとの式で第三者が容易に確認できる [流布された文献に見る文献的事実] 及び [流布された映像的記録に見る視覚的事実] に基づいている」との意で「典拠となるところが明確であり」）、かつ、「数式も初歩の数学知識で易々と理解されるようなものしか用いない」との間口が広い確率論（そして、ベイズ推定の一般式をいかに単純に活用するのかに重きを置いての確率論）」

「しか」展開しない。

そして、少し勉強すれば、文系人間（と分類されている向きら）でも —高校卒業程度の知識水準があれば— 難なく理解せよとの意味での懇切丁寧なる解説も付す。

これ全て、多くの語るに値する第三者が後追いでき、かつ、理解させるとの話をなさないかぎり意味がない（あるいは今後意味をなしうるとの潜在的可能性が全くない、またもってあるいは、そも、家畜のようなありように追い込まれた存在でも生き残らんとする潜在力があるのか否か見極めをなす上でも意味がない）との本稿を支える基本理念からである。

（これより展開していく確率論それ自体の話に先駆けてまずもって述べもしておくか、と判じて引き合いに出した [補足 2] の部はここまでとしておく）

（補足としての枠で括っての部から話を本題に戻すとし、）

さて、つい先立っての部にあっては

「**所与の条件を与えられた [データ] が入力された際に特定の結果(確率論における [事象]) が機械的に導出されてくるとの手順**」

を呈示した —いわばもの機械的手順、その仕様を事細かに示すとのフローチャート図を付しながらも呈示した— 。

これ以降はそうもした先掲の[処理手順]に基づいて導出されてくる【結果】（賽の目 1 から 6 の出方、そうしたものとなる【事象】— 離散的な、結果がてんでばらばらにひとつの試行に対して顧慮されるとの原始的確率論における【事象】— こそが[データ]がランダムに投入される(この場合、【ランダムなデータ投入】のプロセスは【サイコロを振る】とのことに置き換えてもいいことを「想定」しての[処理手順]から導出されるまさしくものその【結果】に照応するものとなる) に対する観測を通じていかなる確率分析をなしていくのか、その解説を極々基本的なところからなすこととする。

※既に本稿の先行する段では所定の情報処理プロセス（本書 p.373 から p.394 にて呈示の所与の情報処理プロセス）を経ることで情報の入力 —（p.395 から p.400 にて一覧表記して例示の情報の入力）— からいかなる結果が機械的に導出されてくるのか（いかなる【事象】が捕捉されてくるのか）について言及しもしている（：具体的には【黒】【黒】【白】【黒】【灰】【黒】【黒】【黒】【黒】【黒】【灰】との結果が導出されてくることについて細々と言及している）。そうもして一例呈示したような結果 —黒や灰や白といったものが呈示のデータから出てきもしているとの結果— と膨大なダミーデータ入力の比較対象から確率論的にいかなる事態が呈示できるのか、黒や灰の意味合いと共に後、細やかに解説する所存なのではあるが、に先立ち、そも、問題を分析する上でのツールとしての確率論がいかなるものなのか、その「基本的なところからの」説明をこれよりなすこととする。

まずもって述べるが、

[条件付き確率] (Conditional probability)

との確率論における通用化された概念が存在する。

そちら [条件付き確率] は字義通りの意味合いのものとなり、

[特定の条件の下、特定の結果が現出する確率]

のことを指す。そして、通例、初等数学 (Primary Mathematics) には

$P(A|B) \cdots [1]$

とのかたちでそちら【「Bという条件の下で」Aが発生する確率】($P(A|B)$)におけるPはProbability [確率] の頭文字である) を [お定まりのもの] として記述する (:同 [条件付き確率]、 「ここ最近の」日本の高校の教育でも基礎中の基礎として学習範囲に入っているようであるから、多くの人間が聞き及んでいる概念か、とは思う)。

「基本的なこととはなるのだが (「Primary」 「Basic」 といった形容詞を付けられもする基本の「き」となるところなのだが)、 といった中でも式の意味合いについては続けて細かい解説をなしていく所存である」と申し述べたうえで示せば、同じくもの [条件付き確率] の代表的な式は下のようなものとなる。

$P(A|B) = P(A \cap B) / P(B) \cdots [2]$

上の [2] の式の意味合いだが、その「皮相的な」意味 — その指し示すところをきちんと説明せずにも「皮相的な」意味 — としては

[左辺の $P(A|B)$ たる【 Bという条件の下でAが起こる確率】は右辺の【 AかつBが起こる確率】 $P(A \cap B)$ を【 Bが起こる確率】 $P(B)$ で割った確率に等しい]

とのものとなる。

では何故、表記のような式が導出されるのか。そこからして説明をなす、 $P(A \cap B)$ を具にして説明を講じておくことにする (本稿の理念は — 再度もってして述べるが — (段階的に検討いただけもすれば) 多くの向きに理解なしにいただけるであろうとの確率論を展開することにある)。

については、そう、直情表記のような条件確率の一般公式がなぜもって導出されてくるのかについては英文 Wikipedia [Conditional probability] の現行記事に

[非常に分かり易い例]

が現行は載せられているのでそちら内容をほぼ踏襲しての方式にての視覚的説明をなすことから始める (以下、解説部をご覧ください)。

(基本的なところとしての [条件付き確率の基本式] の意味についての解説として)

きわめて基本的なところである、それがゆえ、事後の (数式らの) 説明に根本としてかかわっているとこのところとなりもするため、先掲の条件付き確率の基本式の意味合いをここにて多少細かくも解説しておくこととする (その程度のことはお分かりになられているとの向きは何卒、ご放念いただきたい)。

さて、読み手たる貴殿とその友人がそれぞれサイコロを振ったとする。サイコロは貴殿のサイコロをサイコロ X1 とし、友人のサイコロをサイコロ X2 としよう。

貴殿及び貴殿友人のサイコロ X1・X2 を振った際の賽の目方は 計 36 パタンとなることは 一少しお考えいただければ— お分かりのことか、とは思う（二人で各々サイコロを振るとのその 1 回の[試行]で 6×6 の目の出方がある）。につき、その折の賽の目の出方にあつてそれら合計の値(サイコロ X1 とサイコロ X2 の合計の値)を顧慮すると下のよう な極めて単純な表が描画できるとのことも —表にきちんと目をお通しいただければ— お分かりいただけることかと思ふ。

サイコロX1の出方はこの6通り。

X2 \ X1	1	2	3	4	5	6
1	2	3	4	5	6	7
2	3	4	5	6	7	8
3	4	5	6	7	8	9
4	5	6	7	8	9	10
5	6	7	8	9	10	11
6	7	8	9	10	11	12

サイコロX2の出方はこの6通り。

この部はサイコロX1とX2の目の出方の和を指す。
たとえば、X1=4、X2=2のところでは6が表記
されるといったかたちにて、である。

ここで X2 (貴殿友人のサイコロ X2) の賽の目について
[2 が出るケース(【事象 A】と便宜的に表してのケース) の確率]
を P(A) としてみよう。

対して、
[X1 (貴殿サイコロ) と X2 (貴殿友人サイコロ) の目の出方の合計が 5 以下となっている
ケース(【事象 B】と便宜的に表してのケース) の確率]
を P(B) としてみよう。

先程の表に色分けをして、直上言及の P(B) のケースのありうべき全ての出目における
比率問題、すなわち、確率を示せば、下のようになる(賽の目の出方として 6×6=総計
36 の中にて合計の部が 5 以下となる部に色を付しているわけだが、その確率は図からも
お分かりいただけるように $10/36=5/18$ となりもしている)。

サイコロX1の出方はこの6通り。

X2 \ X1	1	2	3	4	5	6
1	2	3	4	5	6	7
2	3	4	5	6	7	8
3	4	5	6	7	8	9
4	5	6	7	8	9	10
5	6	7	8	9	10	11
6	7	8	9	10	11	12

サイコロX2の出方はこの6通り。

この部はサイコロX1とX2の目の出方の和を指す。
たとえば、X1=4、X2=2のところでは6が表記
されるといったかたちにて、である。

ここに強調している色つけ部(数値の5を境界とする部)が
X1+X2が5以下となる部である。その確率は「36部屋中の10
部屋」、 $5/18$ となる。

ここまできたところで書くが、

[B という [条件] が確実に満たされる中で A の事態が具現化しているとのケー

スの確率] (言い換えもすれば、[BならばAであるとの確率] → [Bである折にAであるとの確率])

が[条件付き確率]たる $P(A|B)$ の意味であることを思い出していただきたい。

直上の図をベースにその数式上の意味を解説することとする。

まずもって $P(A|B)$ ではなくにも $P(A \cap B)$ —AかつBである確率— がここで例示している事例についてどういう値を(解答として)とるのかとのことを図に基づいて説明すれば、である。下のような申しようがなせるようになっている。

「先立って挙げもした図をご覧くださいことでお分かりいただけるところとして[事象A] (再述すれば、貴殿友人サイコロであるサイコロX2を振って2が出ているとの[事象; イベント])と[事象B] (再述すれば、貴殿サイコロであるサイコロX1と貴殿友人サイコロであるX2を足し合せた目の総計が5以下となる[事象; イベント])の双方が満たされている確率的状況、記号論的に表せば、 $P(A \cap B)$ の確率 —AかつBの確率— は「1/12」となっている。図をご覧くださいればお分かりいただければしようところとして色つけして示している[事象B]と貴殿友人のサイコロの出目が2となつての条件Aが「重なりあつて起つてゐる」との箇所は3部屋だけであるとのことで36部屋(6通りの目の出方があるサイコロを二人で一緒に振つた場合の36通り)中の3、すなわち、1/12となつてゐるのである」

図を一目いただければ、瞭然ともしてゐるところとして単純にここでの例では

[AとBの双方の条件を満たしている可能性]

としての $P(A \cap B)$ は1/12となるわけだが、さてさてもつてして対しても条件付き確率 $P(A|B)$ とは — 先程来よりその旨、くどくも述べてゐるとおり —

【確率 $P(B)$ にての[条件]が満たされる場合に「なおかつ」 $P(A)$ との事象が発生してゐるとの確率】

を指しもし、その $P(A|B)$ の確率にあつて解答として出てくる値は($P(A \cap B)$ のそれである)1/12とは「ならない」(「何が違ふんだ? 同じじゃないか」とのことのでそこで心得違ひしてしまう向きもいるかもしれないなど考えつつも書くところとして単純にはそうはならない)。

同じくものことについては $P(A|B)$ —Bという条件が満たされてゐる(Bという事象が発生してゐる)場合にあつてAという条件が満たされもする(Aという事象が発生する)確率— というものが

[$P(B)$ との確率で示される事態] (Bが生じてゐる確率、繰り返しもするも、X1(貴殿サイコロ)とX2(貴殿友人サイコロ)の目の出方の合計が5以下となつてゐるケースでの確率としての $10/36=5/18$)

の発生の前[条件]があらかじめ満たされてゐる中で、かつもつてして加えて、

[$P(A \cap B)$ との確率で示される事態] (AかつBが生じてゐる確率、繰り返しもするも1/12との確率で示される事態)

がどのくらいの割合で発生してゐるのか考えるが如し確率であり、とどのつまりは同じくもの $P(A|B)$ というもの(の値)が

【[$P(B)$ との確率で示される事態]「の中での」[$P(A \cap B)$ との確率で示される事

態]の発生比率]

を指しているとのことにもなる。

それを数式に引き落とすと $P(A \cap B) / P(B)$ となり、の解答としての値は(そしてここでの例では $P(A | B) = P(A \cap B) / P(B) = 1/12 \div 10/36 = 3/10$ となる —— 字面だけでは理解しづらいところかとも当然に思うので下の図をよく見ていただきたい ——)。

サイコロX1の出方はこの6通り。

X2 \ X1	1	2	3	4	5	6
1	2	3	4	5	6	7
2	3	4	5	6	7	8
3	4	5	6	7	8	9
4	5	6	7	8	9	10
5	6	7	8	9	10	11
6	7	8	9	10	11	12

サイコロX2の出方はこの6通り。

色つけ部の現出確率は先程も申し述べているように [X1とX2の出目の合計が5以下となる (条件B適合) との確率] となり、そちら確率は36パターン中、10パターン、10/36となる。

さて、条件B適合事例たる色付けされた部の中にて [X2の目が2となる場合 (条件Aに適合するケース)] を考えると枠で囲っている部、すなわち、3パタンのみがそれに該当することになる (36パターン中3パターンに相当するそちらの確率3/36 あらため1/12は「条件A適合かつ条件Bの確率」、すなわち、 $P(A \cap B)$ となる)。

ここでサイコロの出目のありかたに優先順序に通底する問題を考え、

[「条件Bが満たされる確率的枠組みの中で」 (英語Wikipedia [Conditional probability] 項目の表現を引けば、If we wish to measure the probability of the event A knowing that event B has or will have occurred we need to examine event A as it is restricted to event B. 「ある確率 (条件B) が既に起こったか起こると想定される中で」) 条件Aが現出する可能性] ($P(A | B)$)

→

[「B発生ならばA発生」とおおよそにして表現できるかたちとあいなっている確率]

を顧慮すると、その可能性 ($P(A | B)$) は、

[サイコロの出方の全可能性顧慮の中での条件Aかつ条件Bが現出するケース (確率)] ÷ [全体の中の (まずもつての外枠としての) 条件Bが現出する ケース (確率)]

と定義されるところとなる (本事例では $3/36 \div 10/36 = 3/10$) 。

(※初学者が条件付き確率の意味を考える際にまずもってけつまづくとのことがあるとすれば、「何故、除算をしているのか」に対する素朴な疑問となるのでなかろうか、と個人的には思う。通例、初歩的確率論では事象発生の同時性が問題になるところで乗算をよくもなす。賽の目を二回投げて1が二回でる可能性ならば $1/6 \times 1/6$ であろう、などといった按配で、である。そこを条件的確率では除算が式に出てきているために初学者は「同時性が問題になるような響きでの条件付きってことでどうして除算なんだ?」と思うこともあろうかと受け取れもする。

そこで基本的なところとして書くが (分かっておられるとの方々、かつ、冷笑的であるとの方々にあつては『当たり前のことを何を延々と書いているのか』『世の中のことをよく分かっちゃいないが、往々にして生意気さだけには恵まれているっていう育ち盛りの坊ちゃん・嬢ちゃん、小僧・小娘らに給金もらってお仕事として基本的なことに対する教えってやつを垂れているなにかのセンセイ気取りか。こいつは?』と内心での棘のある響(ひんしゆく)を買いそうなことで

はあると承知の上である中で、そして、(基本的なことを忘れてしまっているか、機会に恵まれず把握していないとの)責任を伴っている立ち位置にある(つもりである)との語るに値する大人に[おのれ及びおのれの児孫が全員殺される予定であるとの畜舎で無様に何も遺せぬとのままで殺されるに任せるつもりか]との状況を訴求するためのものが本稿であり、その本稿の適正さの検証・確認を求めたいのが本稿筆者であると申し添えたいとの中で実にもって基本的なことながら書くが)、**条件確率の基本式** — $P(A|B) = P(A \cap B) / P(B)$ との式(左辺の $P(A|B)$ たる【**Bという条件の下でAで起こる確率**】は右辺の【**AかつBが起こる可能性**】($P(A \cap B)$)を【**Bが起こる確率**】($P(B)$)で除したものに等しいとの式) — が除算で導出されているとのそのことについて自然言語(数式ならぬ日常語)で表せば、それは

【(【既に起こったか、起こることが確定していること】と【これより起こること】)の先後関係】あるいは

【**複数の確率(にて表される事象の現出度合い)の内包比率関係**】

の問題と置き換えてもらうと分かり易いことかとは思ふ。

まずもってある枠組みとしての別事態の発生が[先]に、あるいは、[大枠]として決まっている(【先後関係】あるいは【内包関係】が定まっている)と想定する、そう、「擬制的に」(「そうしたものであるかのように」)でもそのように想定する — [条件付き確率]で物事の同時性が問題になっていると思ってもらっては困る一方で以上のように考えてもらうのは望ましいことかと思ふ。

のあと、そも「まず先立って」そこにありきの枠組みの中でさらにそちら枠組みに応じて付随的に発生することの確率 — 先行する枠組みに完全に規定されきっている、先行顧慮する事態が確実に具現化しているのならばとの中にあって顧慮対象の事態「も」付随してそも具現化するのであろうとのケースの確率でもいい — の[比率]を考える...

あの者の骰子の出目がBならば、そして、「そのBとの関係でこうならば、」の状況に限局化してこちらのサイコロの出目が「付随して」Aになる確率を考える、全体のあるべき(確率的分析にあって「それであらねばならない」「そもなっている」と想定する)パターンである「先立っての」条件の確率である $P(B)$ のさらにその中の具現化条件に付随して発生する $P(A)$ の[比率] (とくれば、 $P(B)$ と $P(A)$ が同時に具現化しているとの確率である $P(A \cap B)$ ともなる) が問題にされている... とのことを考えていただければ(上にて呈示の図を見ながらでも考えていただければ)、ご理解いただけることか、とは思ふ。

その点、比率問題となれば、そう、それは除算の問題になる。そういうことである(: 全体で[1] (100 パーセント) となる中でのある出来事 B が起こりうるとの確率 $P(B)$)は確率論的小数で表されることになる(40%ならば0.4 等等)。そも小数にて示される領域にマスト、なればこそ、絶対そうであらねばならぬとの式で「さらにもって内包包摂される」ように規定されている特定事象の起こる確率 $P(A \cap B)$ (たとえば10%分としての0.1 等等)とくれば、除しての割合が大前提として B が起こると想定される中での A が起こる条件付き確率として定義されるわけである(40%分の領域が先に規定されている中でのその中での10%分の領域の発生が問題にされているとのことであれば、 $0.1/0.4=1/4$ がターゲットの出目として問題になるということである — (ここでのサイコロの事例にそのまま引き直して述べれば、一人でサイコロを振って2の目が出るとの確率は6分の1だが、ここでは貴殿と友人が同時にサイコロを振ってそのサイコロの目の和が「確実に」5以下であるとの条件が付いている。従って、2を引き当てている確率は単純に一人でサイコロを振った場合の確率より「高めに」見繕われるとのかたちとなっており(和して5になるとの事態が既に先行して確定しているとらえる

のだから片方が2である目算はより強くなる)、それは計算してみると、(一人で振った場合の1/6より実際に目算強くもの)3/10であるとのことになる。そのように条件付き確率とは【所与の条件が確実に具現化している条件下での確率】を考えるとのことでその値は条件無しの場合に比べてそれなりの変動を見ている)——)。

以上、条件付き確率についてはいわゆるベン図(ないしオイラー図)を用いてその式の意味性を説明するやり方もあるのだが、上のような「単純化させての図」で表象させての説明(「サイコロを二つ振った場合の出目の組み合わせに【先後関係】(がかったのもの)を持ち出しつつもの説明」でもいい)をなすことの方がよりもって話が早いなどの観点で表記図を用いての説明をなした——そうした「高校卒業程度の識見を有した世間人並みの向きらを想定しての」説明ありようは先立って述べているように英文 Wikipedia[Conditional probability]項目記述内容を(そこに見る記述が分かり易いか、と)そのまま多く踏襲させてもらったものともなる——。

ここまでは「理解する意志があるのならば」図をよく見て、の後、言の葉による説明を検討をなしでの中学生、いや、極めて聡ければ、小学校高学年の者でも理解できる話とはなることかとは思(尚、世の真っ当な向きらに伍していくための知性を獲得する前のそのまた前段階の小学生の頃、筆者などは極めて頭が悪かったがゆえにまずもって同じくものこと、理解なせなかったことかとは思)。現在は高等学校の数学で条件付き確率のこの「学習」がなさしめられている聞(が、概念それ自体としては至極単純なものとなるというわけである)。

無論、筆者はまだこの極めて残酷な社会・世界に責任をもって挑むことが出来はしない立ち位置にあるとの成長途上の未成年の若年者を想定して本稿をものしているわけではないが(責任を負うべきはこの社会・世界の構築要素として機能させられている大人らであろう)、誰にでも分かろうとの説明をなすべくも、『ティーンでも理解出来るであろう』との水準でもってしてのとにかくもってしてのここでの説明をなしているわけである)。

さて、【条件付き確率】の式は先述のように

(B が起こるとい条件の下で A が起こる確率はどれくらいかにまつわる式としての)

$$P(A|B) = P(A \cap B) / P(B) \cdots [2]$$

となるわけだが、一式の単純変形の問題として——上記式を「単純変形」させると、

$$P(A \cap B) = P(B) \times P(A|B) \cdots [3]$$

となる(ただ単純に両辺に P(B) をかけているだけである)。

ここで述べるが、

$$P(A|B) = P(A \cap B) / P(B) \cdots [2]$$

との上にて呈示の式が成り立つのと全く同じ理由で

(A が起こるとい条件の下で B が起こる確率はどれくらいかにまつわる式としての)

$$P(B|A) = P(A \cap B) / P(A) \cdots [4]$$

との式もまた導出できるようになっているとのことがある——話を $[P(A|B)]$ から $[P(B|A)]$ にまつわる式へと移し替えたにすぎない——。

につき、直上 [4] の式を ([2] → [3] と全く同文のやりようで) 変形すると、

$$P(A \cap B) = P(A) \times P(B|A) \cdots [5]$$

との式が導出されることになる（何のことはない。これも上の [2] の式から [3] の式への変換と「ほぼ」同文に両辺に $P(A)$ をかけているだけである）。

上の [5] と [3] の式を共通の $P(A \cap B)$ を媒介項にただ単につなぎあわせただけのこととして

$$P(B) \times P(A|B) = (P(A \cap B) =) P(A) \times P(B|A)$$

との関係性が成り立っている、すなわち、

$$P(B) \times P(A|B) = P(A) \times P(B|A) \cdots [6]$$

との関係性が成り立っている（以上、 $P(A \cap B)$ を媒介項にして導出されるとの関係性がトーマス・ベイズという 18 世紀に生きた牧師が編み出したとされる、そして、数学史にその名を燦然と輝くものとして遺している数学者ピエール・ラプラスが精緻化したとされる数学上の魔術、【原因(考えられる仮説)と結果(観測データ)を有機的に入れ替えながら状況分析をなせもする】とのベイズ確率論の根本に関わるところになっているのだが、にまつわっては、以降、順次もってしての解説をご検討いただくことで次第次第にご理解いただけることか、とは思ふ）。

ここで上の [6] の式をそれぞれに変形することで

$$P(A|B) = P(B|A) \cdot P(A) / P(B) \cdots [7] \quad ([6] \text{の式の両辺を } P(B) \text{ で割っただけである})$$

$$P(B|A) = P(A|B) \cdot P(B) / P(A) \cdots [8] \quad ([6] \text{の式の両辺を } P(A) \text{ で割って、かつ、左辺と左辺の表記順序を逆にしただけである})$$

がそれぞれもってして導出されてくる。

以上の [7] (あるいはそちら [7] と同様、[6] の式の単純変形から導出されてくる) の [8]) の式が

[ベイズ確率論の根本]

をなすものとなり、一般に

$$P(A|B) = P(B|A) \cdot P(A) / P(B)$$

をもってして「ベイズの公式」と呼称する（英文 Wikipedia [Bayes' theorem] 項目や和文ウィキペディア [ベイズの定理] 項目にも全く同文の式が掲載されているので確認してみるとよからう）。

上の単純な観点で導出されてくる —— しかしもって数式に対する意味説明が「欠」を見ており、窮理、物事を突き詰めて見る真っ当な知性を有している人間にはおよそ読むに堪え得るものではない日本の高等学校の数学教科書(及びそれを補完するにすら不足があるとの相応の参考書類)などにはその意味合いや応用可能性が解説されているような性質のものではない —— との単純な式が「何故ゆえに」極めて重要なものとなるのかの細々とした説明はさらに後の段でなすとして、である。取りあえずもの式の皮相的な意味、それを示すこととする。

$$P(A|B) = P(B|A) \cdot P(A) / P(B) \cdots [7]$$

との式の額面上の意味について教科書的な説明（日本の体裁上、不親切極まりないとの教科書に照応するような説明）をなせば、

【Bという[事象]（英語で言うところの Event、[事象]の意味は先の段で解説したとおりである）が発生する確率的枠組みに収まるとの条件の下で A という事象が発生

【**する確率**】 ($P(A|B)$)

というのは

[【**A**という**事象**が発生する確率的枠組みに収まるとの条件の下で**B**という**事象**が発生する確率】 ($P(B|A)$) と 【**A**が起こる確率】 ($P(A)$) の積を 【**B**が起こる確率】 ($P(B)$) で除したもの]

に等しい

とのものとなる（式の指し示す方向性に終局的に何が横たわっているのかの解説はこれよりなすとして何故もってしてそうした「皮相的意味合いの」式が【式の単純変形】を通じて導出されてくるのか、そうした事態とはいかようなことなのかについては [1] および [2] と振っての条件付確率 [$P(A|B)$] (の展開式) に対する説明をお読みいただき、かつ、その後の [2] 式に対する「単純変形」のことを顧慮いただければ感う素地はほぼないことか、とは思う）。

ここからが本題である。

そう断りもしてから、以上のような皮相・表層的な側面を有している[ベイズの定理]が驚異的な力(と表される効果)を発揮する理由がなんたるかの段階的解説に入ることとする。

まずもって書くが、上の式 [7] 左辺に見る $P(A|B)$ というのは

【**B**という**事象**】 (英語で言うところの Event、[事象]の意味は先の段で解説したとおりである) が発生する確率的枠組みに収まるとの条件の下で **A** という**事象**が発生する確率]

と表現できもするものだが ([1] の意味合いについてくどくも繰り返しての話である)、それは次のようなかたちで表せられるもの「でも」ある。

(大卒レベルの数学知識を持ち合わせていないとの方を対象に高校生でも分かるのと
のやりようでの説明をなしているここでの話を理解する気があるとの向きにおかれては
以下のような観点が[[ベイズ確率論]の発想法の根源]にあるとのこと、きちんと押さ
えていただきたい)

(世界を確実にそうであると規定している数式の世界の事柄を 一言葉の問題として
— 恣意的に代替的に表現した場合にどうなるのかの話として)

「 $P(A|B)$ というのは **B** という [データ・情報] (いいだろうか. ここでは条件付き確率における【前提条件】たる**事象**】を【データ・情報】と「便宜的に」表しているのだ) が具現化している場合に、**A** という[仮説]ないし[原因] (ここでは条件付き確率における【前提条件】(たる**事象**の発生)に伴って必ず起こる**事象**】をここでは【仮説】ないし【原因】と便宜的に表している) が成り立っている確率が (**B** という [データ・情報] が具現化しているとその確率の範囲・枠組み内に) 規定されきっているとのことを意味するものともなる……」

すなわち、(A や B とのなんとでも表してもいい数学上の純粋たる記号に対して[仮説]や[データ]との名称を「意図的に」与えてのこととして)、

「 $P(A|B)$ という式が示す状況は **A** という[仮説] ([ほにやら] でもいいが、[仮説]と表する) がそこに「ある」との確率が呈示されるとのあり

ようがBという[データ・情報](が具現化する確率的枠組み)がそこにあるとすることによって確実・完全に規定されきっている状況を示している.....」

との云いようがなせるもの「でも」ある(：単純に確率論における[Event: 事象]をどういった言いようでもってして定義するのか、[仮説](と表してのもの)のありようについての[事象]の確率を考えるのか、あるいは、よりもって単純に「サイコロの出目がいくつになるのか」といった意味合いでとらえるのか、の話にすぎない)。

よりもって噛み砕きもして換言すれば、 $P(A|B)$ とは

「A(という[仮説]あるいは[原因]との呼称をここでは与えてのもの)がB(という[データ・情報]との呼称をここでは与えてのもの)というものに完全に条件付け・規定されきっているとの確率が示されている(⇒Aという仮説ないし原因がそこにあるとの事態がそれに先立つ大前提としてのマストとなるもの、絶対にそうになっているとの前提として控えているBという[データ]と不可分に紐付いている)」

との表現が「ただの言葉の言い換え上の問題として」なせもするものである(言い様・言い方によってはデータBと確率論的に完全に紐付いている、「Bならば(必ず)A」といった按配でBと紐付いているAは[B存立にまつわるそうであるとの仮説]ではなく[Bにまつわる原因・真因]と形容するに足りるもの「とも」になっている)。

(※本書 p.422 以降の部にて $P(A|B)$ の式の説明 — 事象 B 現出との条件での事象 A 現出の確率にまつわっての式の説明 — を懇切丁寧にしていたわけだが、の際、事象 B が「二人のサイコロの目が計 5 以下になっている」との中でその条件に拘束されるかたちで事象 A が「サイコロの目が 2 である」とのケースの条件付き確率の値を一式の解説にあって視覚的に例示した。全く同じくものことをこの話に当てはめて述べれば、【情報; データ】として既に「二人の者 X1 と X2 が振ったサイコロの目の和が 5 以下である」とのことが分かっている状況、そして、といった状況下で【仮説】として「二人の内の X1 のサイコロの目が (4 でも 1 でもなく) 2 である」との見方が適正であるとの確率を考えている... そのように【純然たる言葉の問題】として言い換えている(だけである)ととらえてもらってなんら構わない)

表記のように特定のデータ・情報としての B が[確率論的枠組み]としてそこに具現化している場合に、特定の仮説 A が想定される場合、そちら仮説 A がデータ・情報 B の行き着く先にある(と言っているほどに枠組みに完全に規定されている)ことを意味するのが

$$P(A|B) = P(B|A) \cdot P(A) / P(B)$$

の[ひとつのとらえかた]であるということである。

対して、同じくもの[7]式における右辺 $P(B|A)$ とは — (A を「特定の仮説」(と紐付いた確率)と上と同様に見立て、また、B を「特定のデータ」(が見受けられる場合の確率)と同様に見立てる、「ただ単純に言葉の問題として」見立てる場合のこととして) — 、次のように言い換えられるものとなる。

「 $P(B|A)$ というものにあっては A という[仮説]ないし[原因] (と便宜的に呼称するもの) がまずもってそこにて成り立っているとの確率的状況を想定した場合、B という[データ・情報] (と便宜的に呼称するもの) が A たる[仮説]ないし[原因] (と表してのもの) にまつわる確率的状況に確実・完全に紐付けられたものとして導出されてくる可能性が呈示されて

いる…」

すなわち、 $P(B|A)$ というものに関しては

「**【Bという[データ・情報]が具現化するとの確率】が【Aという[仮説]あるいは[原因]（と便宜的に呼び慣わしてのもの）が成り立つケースの確率】の確率論的枠組 —確率成立状況— によって「完全に」規定されきっている場合の確率が呈示されている。**

との云いようがなせるものである（先立っての式[1]の説明にて説明を講じているように $P(B|A)$ が「AならばB、の確率」を意味することとなっている中にて、である）。

以上表記の上で「念にも念を押してのくどくもなるが、」のところとして、

$P(A|B)$ が

【データB（と便宜的に表してのB）が事象として具現化している場合、その具現化の確率的枠組みに完全に紐付けられてのものとして仮説A（と便宜的に表しもしてのA）が成り立っている場合の確率】

と形容することができるもの「でも」あるのに対して

$P(B|A)$ は

【仮説A（と便宜的に表してのA）が事象として具現化していると想定される場合にデータBが導出・具現化するとの確率がそちら可能性に完全に規定されきっている確率】

と形容することができるものとなっている

とのことがある（この段階ではいかようにも言いまわしを換えられる言葉によって【確としてそこにある数学概念】を引き合いにだしての屁理屈を展開しているように見えるかもしれないが（当たり前前の反応かとは思）、そうではない、直上表記のような言い分がいかに適正に機能するものなのかについての説明も無論、これよりなす）。

よくベイズの一般公式 —先だつてより取り上げている[7]の式、 $P(A|B) = P(B|A) \cdot P(A) / P(B)$ — に関しては

【【原因】（仮説）から【結果】（データ）を推論すること、また、同文のことを「反対方向からも」やること、その双方向が有機的に結合している式】

と端的に表されることがあるが、それは大きくは（同[7]式の）構成要素たる（ $P(A|B)$ 及び $P(B|A)$ ）にまつわる上のような定義上のとらえかたに大きくも拠っていることとなる。

ここで表記の式のAを以下、英単語でのハイポーセシス、Hypothesis [仮説]の略字[H]にて置き換えて表示、また、BをData [データ]の略字[D]に置き換えての話をなそう（これ以降、上の[8]の式 $P(B|A) = P(A|B) \cdot P(B) / P(A)$ を $P(D|H) = P(H|D) \cdot P(D) / P(H)$ と表し、上の[7]の式 $P(A|B) = P(B|A) \cdot P(A) / P(B)$ を $P(H|D) = P(D|H) \cdot P(H) / P(D)$ とのかたちで表記することとする）。

さて、以上ここまでの話については「数式それ自体には何ら変更を加えない」程度の[言の葉による定義付け]を加えての皮相的な話でしかないと思われるかもしれない（とくどくもあってしての推し量りの弁明をなしたい）。

だがもってして、

（上の[8]式 $P(B|A) = P(A|B) \cdot P(B) / P(A)$ あらため） **$P(D|H) = P(D|H) \cdot P(H) / P(D) \cdots [9]$**

$$(上の[7]式 P(A|B) = P(B|A) \cdot P(A) / P(B) あらため) \quad P(H|D) = P(H|D) \cdot P(D) / P(H) \cdots [10]$$

によって定義されるベイズの定理、更に述べれば、によって代表されるベイズ確率論が「極めて問題になる」(後の段にて先にて引用なしたところとは別のところから続いて引用するように極めて今日において重要視されている)のは上記のような入れ替えなしでの定義が成り立つことと表裏をなしている、

[ベイズ更新]

というプロセスを働くように「なっている」からである。

そこにいう [ベイズ更新] がいかようになるものであるのかの説明をする前に先掲の、

$$P(D|H) = P(H|D) \cdot P(D) / P(H) \cdots [9]$$

$$P(H|D) = P(D|H) \cdot P(H) / P(D) \cdots [10]$$

の式らの関係性に着目する。

その点、両式は 一式の皮相的ありようを考えもすれば自明のこととして— A と B のどちらを仮説 (H) と便宜的にとらえ、どちらをデータ・情報 (D) ととらえるかで式の意味合いがすぐに逆転するとの全く同一の式なのだが (単純に「方程式の a や b といった記号の意味合いが式の定立者の目分量に由来している」といったことと同じである)、ここでは [7] 式改めてのそうもした [10] 式の $P(D|H) = P(H|D) \cdot P(D) / P(H)$ をベイズ確率論の根本をなすところとしての話をなしていく。

以上申し述べたうえで、再言するも、

[$P(H|D)$] —くどいが、特定のデータ (D) がそこにある場合にそれによって特定仮説 (ハイポセシス、H) の確率的枠組みもが完全に規定されきっているとのその確率となる ⇒ すなわち、[結果] ([データ]; たとえば先述の [1] 式にまつわる例では [サイコロ X1 とサイコロ X2 を振って出た目同士の和を足したらば 5 以下となっていることまでは判明しているとのデータ] の枠組み) の中で [結果成立状況の中での「特定の」ありよう] ([仮説]; たとえば先述の [1] 式にまつわる例では [X2 の方のサイコロが 2 の出目のものとなっているとの仮説]) が 确实絶対に導きだされるうえでの確率となる—]

および

[$P(D|H)$] —これまたくどいが、特定仮説 (H) がそこにある場合、それによってデータが「規定」されている (データが特定仮説の枠組みの中に収まっている) との確率となる ⇒ すなわち、[仮説] ([仮説]; たとえば先述の [1] 式の例では [サイコロ X1 を振って出た目は 2 となっていると想定されるとの「特定の」枠組みとしての仮説]) が まずそこにあると想定される場合にあって副次的なところとしての [結果] ([データ]; たとえば先述の [1] 式の例では [サイコロ X1 とサイコロ X2 を振って出た目同士の和を足したらば 5 以下となっているとのデータ]) が 完全确实に規定されて導出されてきもするとの確率となる—]

の両要素については

[原因 (と便宜的に表しもしての特定の [事象]) が仮説 (と便宜的に表しもしての特定の [事象]) を規定するプロセス]

および

[仮説 (と便宜的に表しもしての特定の [事象]) が原因 (と便宜的に表しもしての特定の [事象]) を規定するプロセス]

が相補関係を呈しているとも述べられもするようになっている。

にまつわって、これより

[ベイズの公式] (本稿では一般にそうも表されているところの[7]式あらためての[10]式、 $P(H|D)=P(D|H) \cdot P(H) / P(D)$ のかたちで表現しているもの)

を現実世界の諸事象に当てはめての計数的分析がいかなうものなのか、イメージしやすき例を挙げながらも説明を講じていく。

さて、ここに至る今までの流れでは[サイコロを振ってその結果の出目]を問題とすることで([1]式における問題として)[条件付き確率]の説明をし、また、そこから[ベイズの定理]へと話をつないでいったわけだが(式[7] および [8] および単純にそれらの表現形式を換えての [9] および [10])、以降は

[病気検査の陽性・陰性にまつわる(よくもなされる)確率分析]

を例にしての分解、噛み砕きながらも簡明を心がけての解説を試みることとする(便宜的に病気陽性・陰性事例を引き合いに出しての方が話が早いと考えたとの理由からである——病気検査の陰性・陽性結果の信憑性、そう、たとえば、乳癌特定のマンモグラフィー検査の有効性といったことはベイズ理論にまつわる説明に多用されるテーマとなりもする(疑わしきにあっては試みに [mammography, breast cancer, Bayesian Inference] といったキーワードで検索されてみるとよからう。それ絡みの英語圏でのベイズ理論の説明文書がオンライン上より多く捕捉されてくるはずである)——)。

ある人物が病気 X の診断を受けたとしよう。同人物が受けた診断というものは[陽性]・[陰性]との結果のうち、必ずどちらかが返ってくるものとなる(ガン有無などについてはっきりと特定化がなせてこそその医者稼業(および医者稼業に沿うように構築されているガンなどの検査)であるとのありようを考えれば、至極当然のこととして、その二者しか結果は出ないという状況をここでは敢えても「想定」する)。

ここで述べるが、診断・検査にて問題となる[陽性]か[陰性]か、それはいわばもってしての[結果]である。そして、[結果](観測がなされての[データ]としてもいい)についてはそれが本当に実情を反映してのものなのか、[原因](ないしは観測される現象にまつわっての[仮説])について次のような例題呈示を(例えば、のこととして)なせるところでもある。

(【例題設定】として)

[結果(たるデータ)の背面にある「実情」にまつわる [仮説 1] (H1)の特性]

⇒

全数は把握できていないが、診断結果などに照らしあわせて特定の疾病 X の発病状況として[陰性]である人間の比率は全人口にておおよそにして 98%、対して、[陽性]である人間の比率は全人口比おおよそにして 2%であると「推定」されている(との例題設定をなす。につき、全人口における病気に罹(か)かっている率、[罹患率] 2%との[推定]は揺らぎうるとも例題上、設定する)。

そのような推定がなされている中で特定疾病の罹病有無を判断するための特定検査を実施すると

[実体陽性状況 —H1 の状況—]

にある場合には 99%はその通りの結果(データ;D)が出るが、うち、1%は誤検知がなされて、額面上、[陰性]と出てしまう状況であると——(後日調査で判明している検査精度の問題から)——判断できるところとなっている(と例題設定する——※検査としては[実体として陽性であるのにも関わらず陰性との結果が出る]と非常に問題になる)のでそうした結果を出来るだけ避けるための慎重な設計がなされている、だが、後日調査でそれでも 1%は誤検知がなされる(病気の取り逃がしが具現化してしまう)と判明している... そういう現実的状況を念頭に置いての例題設定をここでは付している——)。

[結果 (たるデータ) の背面にある「実情」にまつわる [仮説 2] (H2) の特性]

⇒

(前半部は繰り返しとして) 全数は把握できていないが、診断結果などに照らしあわせて特定の疾病 X の発病状況として「陰性」である人間の比率は全人口にておおよそにして 98%、対して、「陽性」である人間の比率は全人口比おおよそにして 2%であると「推定」されている (との例題設定をなす。その対象に見る [罹患率] 2%との [推定] は揺らぎうるとも例題上、設定する)。

そのような推定がなされている中で特定疾病の罹病有無を判断するための同じくもの特定検査を実施すると

[実体陰性状況 —H2 の状況—]

にある場合には 95%はその通りの結果(データ;D)が出るが、うち、5%は誤検知がなされてしまう(実体的状況として陰性であるにも関わらず検査結果では額面上、陽性、病気に罹っていると結果が出てしまう)と —(後日調査で判明している検査精度の問題から)— 判断できるところとなっている(と例示設定する — ※検査が「陰性兆候が強くとも油断ならない」との観点から (現実には病気に罹っていない、実体陰性状況になるような局面でも) 陰性結果・陽性結果が出る割合が高めに 95 対 5 になるように検査設計されている. . . そういう現実的状況を念頭に置いての設定をここでは付している —)。

上のように具体的数値までを所与のものとして設定しているとの例題事例にあつては

[【捕捉された検査結果というデータ;D】の背面にある (データの確率論的枠組みを厳として動かぬものとして背面から規定している) 【「真の状況」たる原因ないし仮説;H1 あるいは H2】]

にまつわつての関係性が次のようなかたちで図示できるものとなっている。

(便宜的に持ち出してもいる) [例示事例] の数的側面についての整理

全人口ベースで見ての疾病罹患率「推定」

$$\text{陰性 : 陽性} = 98 : 2$$

※全数は把握されていないところだが、従前の状況では特定疾病 X の罹病率は人口比 2%であると「推定」されている。

個人に対する疾病検査結果の背後にある [原因] (実体的病気動態) の割合 — (実体としての [陰性] 状況と実体としての [陽性] 状況の比率) —

原因	データ	
	データとしての [陰性] (検査結果)	データとしての [陽性] (検査結果)
検査結果背後に控える真なる原因として 原因 2 (実体 [陰性] 状況)	95	5
検査結果背後に控える真なる原因として 原因 1 (実体 [陽性] 状況)	1	99

※特定疾病の罹病率が現在のデータから 2 パーセントであると推定されている。といった状況下にて同じくもの特定疾病の罹病有無を判断するための特定検査を実施すると (後日調査で判明している検査精度の問題から) 実体陽性状況にあつては 99%はその通りの結果が出るが、1%は誤検知がなされてくると判明している。他面、実体陰性状況では (これまた後日調査で判明している検査精度の問題から) 95%はその通りの結果がでるが、5%は陰性であるのに陽性との結果が出てくると判明している (との例示事例とする。につき、一般論として病因検査というものが [陽性であるのに陰性との結果が出てくる] との損害多くもなるケースを可及的に忌避するものとなっている (陽性であるのに陰性が出るなど) のことがあつては困るので慎重に判定するものとなっている) のに対して、陰性兆候が強くとも油断ならないとの観点から (実体陰性状況になるような局面では) 陰性結果・陽性結果が出る割合が高めに 95 対 5 になるように検査設計されていることを想定しての例題呈示をなしている)。

この場合、「実体として陰性」であるにもかかわらず「陽性である」との検査検査が出てくるのであるから、のような状況は [「偽陽性」 False positive の発現] と表せられるものとなる (反対は [「偽陰性」 False negative の発現])。

以上、整理しての図示がなせるような事例にてここである人物が検査を受けたら「陽性」との検査結果を得た(と想定してみる)。

そうした中で [データ] として検査を受けもした人物に呈示されてくるとの結果 (検査で診断されてくる陽性か陰性かとの結果) がそちらデータの背面にある現実的状况、[真因;原因(仮説)] と紐付く式で関わっている (確率論上の枠組みとして背景にある [真因] と紐付くとの式で関わっている) とのケース、すなわち、「H(H1 あるいは H2) である時に確実絶対に D(データとしての観察結果)ともなっている」とのケースの確率、 $P(D|H)$ は以下呈示のどちらかのケースしかないようになっている (ここでは例題設定している)。

すなわち、一問題となるのはそれぞれの可能性としての大小なわけだが—

「陽性との [結果データ D] が出ている状況では」

⇒

[[原因 1] (ないし[仮説 1]; H1 と表記) に結びつくところとして [実体ありよう(真因)として陽性のところ] (H1) をその通りのものとしての検査結果 — [陽性] としてのデータ(D) — が出ている] (すぐにありよう図示して解説するところとしてそちら確率的ありようは $P(H1 \cap D)$ の一部をなすのかたちともなる)

[[原因 2] (ないし[仮説 2]; H2 と表記) に結びつくところとして [実体ありよう(真因)として陰性である] (H2) のに [陽性] との検査結果(D)が「誤って」出ている] (すぐにありよう図示して解説するところとしてそちら確率的ありようは $P(H2 \cap D)$ の一部をなすのかたちともなる)

「陰性との [結果データ] が出ている状況では」

⇒

[[原因 1] (ないし[仮説 1]; H1 と表記) に結びつくところとして [実体ありよう(真因)として陽性である] (H1) であるのに [陰性] との検査結果(D)が「誤って」出しまっている] (すぐにありよう図示して解説するところとしてそちら確率的ありようは $P(H1 \cap D)$ の一部をなすのかたちともなる)

[[原因 2] (ないし[仮説 2]; H2 と表記) に結びつくところとして [実体ありよう(真因)として陰性のところ] (H2) をその通りのものとしての検査結果 — [陰性] データ(D) — が出ている] (すぐにありよう図示して解説するところとしてそちら確率的ありようは $P(H2 \cap D)$ の一部をなすのかたちともなる)

とのケース「しかない」(ここにて表記の事例では上のケースらで [ありうべき[データ(検査結果; D)] に対しての [ありうべき真因(H)] のすべてのありよう] を網羅している)。

上のように検査結果としてのデータ(D)の背後にあつて

[ありうべき真の事態 (データの実相にまつわる仮説ないし「原因」ら H1, H2)]

が両立を許さずどちらか一方、択一的にしか存在しえないとの状況にあつては

[データ(検査結果[D])のありうべきすべての出方を示す「可能性」(P(D))]

を考えもして見た場合に、

(便宜的に「データの出方の全部顧慮」の上での「データありよう」を体現しての確率的枠組み P(D) — 総計 100% になるとの P(D) — につき)

$$P(D) = P(D \cap H1) + P(D \cap H2) \cdots [11]$$

との式での表記もがなせるようになっている —くどいが、「必ず H1 あるいは H2 のどちらかがデータ D の実相と紐付くものとして存在しており、」H1 と H2 の間に重複がないのならば、」の事例としてであ

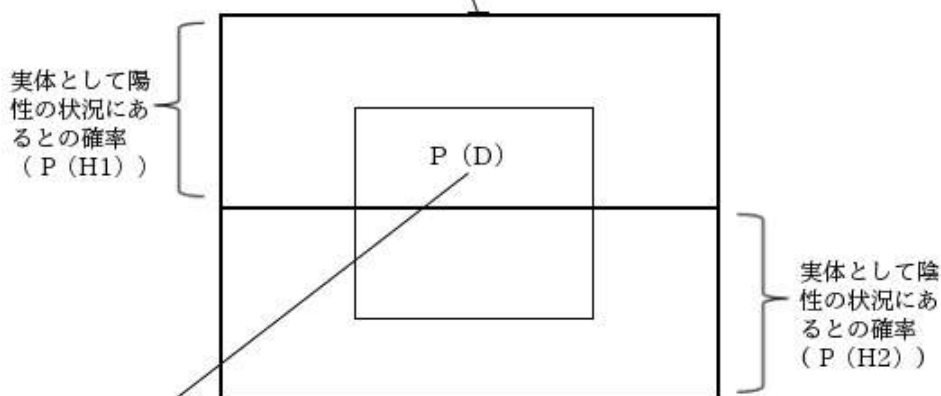
※ [くどくもの注記として]: ここで [仮説] や [原因] との形容をなしているが、そうしたいいまわしは本来的には純粹なる初等数学に見るありよう、A や B で現わされる条件付き確率式の特定要素に対して便宜的にそうした言いまわしを用いているにすぎない (だが、それで語が成り立つよう「にも」なっている)。同じくものことについては本書の p.429 から p.430、そして、に至るまでのパートで解説してきたところでもある。

る(実際に本事例ではH1とH2のケースに両立がないように「条件設定」している)——。

それこそが肝要なことにもなるのだが、何故そうした式でP(D)が表せられるのか。

については下の図、及び、同図に付しての解説部をきちんと読んでいただくことでご理解いただけるか、と思う。

※ここでの例示対象となっている導出データ (D) については
【[実体としての[陽性]状況][実体としての[陰性]状況]か検査の皮相的結果たるそちらデータ (D) に見る陽性・陰性の「背後に」確実・絶対に存在しているとのもの】
ともなる(と表現できる)。
換言すれば、
【データの背面にある真なところの[原因]——[実体としての陽性(H1)]および[実体としての陰性(H2)]——を全て足し合せもした確率】(H1かH2のいずれかの確率)の枠組み
にデータ(D)が表出するとの確率的枠組みたるP(D)が規定されているとのことともなる。物事の先後・優劣関係の問題として、である。



集合として見れば、「内側の」四角形の枠組み——P(H1)とP(H2)のいずれかが成立するとの外側の確率的枠組みに「内包」されての枠組み——となるP(D)は
 $P(H1 \cap D) + P(H2 \cap D)$
とのかたちで示せるものとなっているとことがある(病気には[実体としての陰性H1(白)]か[実体としての陽性H2(黒)]のいずれかしかないとの中で病気か否かを探る検査の皮相的結果D(白黒にまつわる「誤」検知はありうる)が具現化する確率は換言すれば、[H1が実体としてあり、かつ、皮相としてDが具現化している確率]か、あるいは[H2が実体としてあり、かつ、皮相としてDが具現化している確率]か、必ずそのどちらかである、とのことである)。

以上のようにD(データ)としての[検査結果](陽性か陰性か)の確率的特性が[原因](真因としてのH)によって定められるケースが2つしかないとのケースでは

(「観念上の全部事例顧慮」の上での100%化するとのP(D)につき)

$$P(D) = P(D \cap H1) + P(D \cap H2) \cdots [11]$$

との公式が成り立つことが示される(上のP(D)におけるDは全部のありうべきデータを網羅しているとの点でデータの一断面、たとえば、陽性であるD1、陰性であるD2と分けても顧慮を「なしていない」ことに留意いただきたい。いわばもってして、(検査結果たるDが陽性D1か陰性D2の二つに分かたれるとのここでの事例では)まとめもして $P(D) = P(D1) + P(D2)$ となるところのP(D)の話をなしていることを留意いただきたい)。

そして、のようなことは、そう、例えば、原因(ないし真因を想定しての仮説Hypothesis)の数がH1からH100までであろうとも話は同じである(のような場合は $P(D \cap H1) + P(D \cap H2) \cdots + P(D \cap H100)$ となる)。

より普遍化すると、

(n 個の原因がある場合において)

$$P(D) = P(D \cap H_1) + P(D \cap H_2) (+ \dots P(D \cap H_n)) \dots [12]$$

との公式が成り立つようになっている —— 同公式成立にまつわる概念図「も」これ以降、続いての段で挙げる —— (については、くどくも再言するが、の際には、 H_1 から H_n それぞれには重なり合いが無いとの想定の下での原因分析(仮説定立)をなす)。

ここで上の [12] の式を先にての [条件付き確率] の式、

$$P(A \cap B) = P(A) \times P(B | A) \dots [5] \quad (A \text{ あらため } H, B \text{ あらため } D \text{ としているとのここまでの流れから } P(D \cap H) = P(H) \times P(D | H))$$

に基づいて変形するとのことをなす —— [5] 式あらため $P(D \cap H) = P(H) \times P(D | H)$ を [12] 式の $P(D \cap H)$ に代入するとのことをなす —— (:背景にある [発想方法] の話をなせば、「ベイズ確率論がありうべきだけの仮説(原因)をすべて顧慮したうえでそれらのどれにデータが落ち込むのが(確率論的に)事理に適っているのか考える確率論である」とのことがあってそういう変形をなす)。

すると、下のような式が導出されてくることになる。

$$P(D) = P(H_1) \times P(D | H_1) + P(H_2) \times P(D | H_2) + P(H_3) \times P(D | H_3) + \dots + P(H_n) \times P(D | H_n) \dots [13]$$

以上の式 [13]、条件付き確率にまつわる基本的公式 ([3]) に複数の「ありうるだけの」原因ないし仮説 (H_1) の概念を反映させもしての式を先述のベイズ公式、

$$P(H | D) = P(D | H) \times P(H) / P(D) \dots [10]$$

に代入するとのことをなす (: [10] 式の $P(D)$ の部分に [13] 式の右辺を代入する)。

そうもした代入 (H_1 から H_n の計 n 個の仮説が相互になんら両立することなく成立している場合の事例、そうもした事例たる [13] 式で示される $P(D)$ のありようを [10] 式たる $P(H | D) = P(D | H) \times P(H) / P(D)$ の $P(D)$ に照応させて入れ込むとのかたちでの代入) の結果、

$$P(H_x | D) = P(D | H_x) \times P(H_x) / (P(H_1) \times P(D | H_1) + P(H_2) \times P(D | H_2) + P(H_3) \times P(D | H_3) + \dots + P(H_n) \times P(D | H_n)) \dots [14]$$

との式が導出されてくる ([14] 式については左辺および右辺の分数分子の部分にて H ではなく H_x との表示をなしているが、それは便宜的にそうしていると理解いただきたい)。

以上の [14] 式がベイズ確率論を展開するうえで先立って呈示した基本定理の式 [10] と同文に必須の式となる重要な式となる (目立つところでは試みに英文 Wikipedia [Bayesian inference] 項目 (の General formulation の部) でも和文ウィキペディア [ベイズ推定] 項目でもいい、検討してみればいい。意味合い的には [14] と全く同じくもの式が (分母により簡明に表すための Σ 記号などが用いられながら) 呈示されていること、ご確認いただけるであろう)。

これより [14] 式に基づいてどういう確率論的分析が現代社会にて行われているのか、部分的に摘示していくが、その前に直上表記 [14] 式の「意味」をさらに突き詰めもして解説しておく。

たとえば、[14] 式にまつわるところとして左辺に (H_x における x を $x=1$ として) H_1 を置いて、

$$P(H_1 | D) = P(D | H_1) \times P(H_1) / (P(H_1) \times P(D | H_1) + P(H_2) \times P(D | H_2) + \dots)$$

$$+ P(H3) \times P(D | H3) + \dots + P(Hn) \times P(D | Hn))$$

との式がそこに呈示されていたのならば、ベイズ確率概念に基づいて確率分析をなしたことがある人間にはその意味がすぐに分かりもし、それは

[仮説(ないし特定の事柄が起こる原因)がそれぞれ排他的にH1からHnまでのn個だけ存在すると想定される場合にあって特定のデータ(D)が与えられた際、そちらデータによって(H1からHnらのうち)特に仮説H1が正しいとの可能性が示されているとのその割合]

のことを指す。

については、[H1からHnとのn個だけあるとの特定仮説らの確率論的枠組み]がまずもってそこにあり、その確率的枠組みの中にデータDが導出されてくる確率が包含されきっているとのケースにあって、先立っての先立っての[12]式、

$$P(D) = P(D \cap H1) + P(D \cap H2) (+ \dots + P(D \cap Hn))$$

との式が呈示されるかたちとなっており、そちら[12]式の内容と条件付き確率 $P(H | D)$ を求めるための式である[5]式 ($P(A \cap B) = P(A) \times P(B | A)$) を融合させもするべくもの操作をなして、(ここでのベイズ推定の基本公式である)[14]式へと繋がっている時点で

[式の中にて顧慮されている仮説の数がH1からHnあるとのことが「当然に」[折り込み済み]である]

本書 p.436
のそれを
指す。

とのことがある (※先立っての[12]式の特殊事例となる[11]式の説明に際して呈示した図および同図に付しての説明とこれより挙げもする[下図](および、に付しての解説)をきちんと検討なせば、同じくものことは理解なせることか、とは思う)。

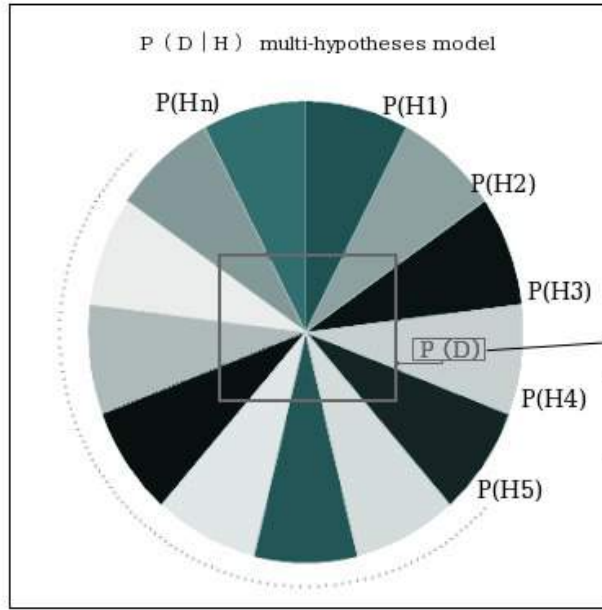
そう、といった中で[14]式左辺にての $P(Hx | D)$ が取り立てて仮説H1にまつわるもの、 $P(H1 | D)$ であるのだとすれば、その意味は必定、

[仮説(ないし特定の事柄が起こる原因)がH1からHnまで考えられる場合にあって特定のデータ(D)が与えられた際、そちらデータが示す先にて(H1からHnらn個の仮説らのうち)仮説H1こそが正しいものとして存在している確率]

とのものとなる (皮相的な話をなせば、「式左辺の $P(H1 | D)$ とは[DならばH1の確率]を指すものであるから上記のような申し分がなせる」ようになってい — そうもした教科書的な話が成り立つことを説明すべくもの図示もすぐ下になす —)。また、同文に(それだけ述べる限りは)皮相的ともなる話をなせば、[14]式左辺の $P(Hx | D)$ が $P(H2 | D)$, $P(H3 | D)$ であるのだとすれば、同じくものがH1あらためH2あるいはH3に関しても述べられるとのことになる — たとえば、 $P(H3 | D) = P(D | H3) \times P(H3) / P(H1) \times P(D | H1) + P(H2) \times P(D | H2) + P(H3) \times P(D | H3) + \dots + P(Hn) \times P(D | Hn)$ との式がそこに呈示されているのならば、これまたベイズ確率概念に基づいて確率分析をなしたことがある人間にはその意味がすぐに分かりもしようとのところとなり、それは[仮説(ないし特定の事柄が起こる原因)がH1からHxまで考えられる場合に特定のデータ(D)が与えられた際、そちら特定データの行き着く先にある真因が仮説H3(と形容されもしている事態の確率的具現化状況)に求められる可能性]のことを指す —)。

【 [14] 式が何故もってして [n 個の仮説が想定顧慮されての中での配分問題を示すものなのか] に関わるところの式変形にまつわる解説図として 】

(Image for [comprehensive understanding of Bayes' Theorem (of people whose only high school students' mathematical knowledge)])



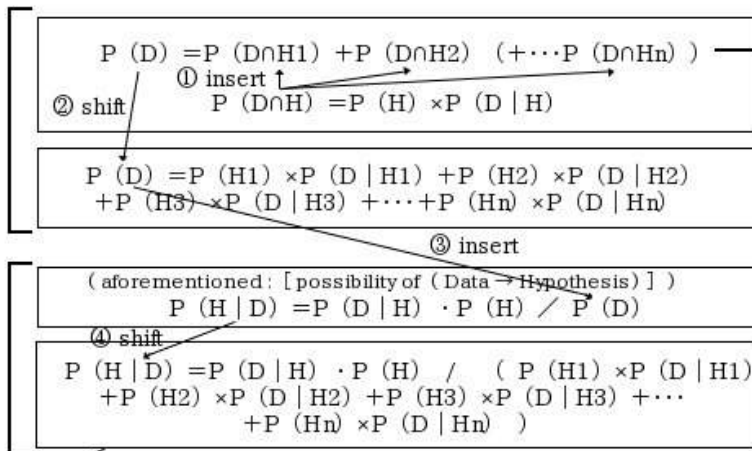
(くどくもの重複説明として)
 [仮説Hがn個ある場合にそれら仮説のどれかにてデータの可能性が規定されている場合の確率] (先に数式の意味を詳述したのP(D|H), [HならばDの確率] を想定する場合、のような中での総計100%になる P(D) の確率的枠組みは必然的に

$$P(D) = P(D \cap H1) + P(D \cap H2) + \dots + P(D \cap Hn)$$
 とのかたちで形容できるものともなる (隣の図を見つづ先立っての図示部の内容を検討されれば思うことではないかと思う)。

※ (先立ってはH1からH2しかありうべき実体的状態がないとの陰性・陽性にまつわる病気罹患状況にまつわる[図示]をなしていたのに対して) ここでの図示の部にあっては
 【 [仮説H1からHn] が [導出データ (D) ありようを規定している真なるところのもの] としてそちら個数分 (n個) だけ独立候補として存在していると想定される場合の確率の枠組み (P (D | H)) 】
 についての描画をなしている。

換言すれば、ここでは
 【 データ背面にあると考えられもする真なる [原因] ら —— 実体的状況にまつわるものとして想定・定立しての各仮説ら —— を考えられる分 (n個) だけ全て足し合せもした確率の枠組み】
 でデータ (D) が表出する可能性 (P (D)) が規定されているケース、同ケースでの P (D) ありようについての描画をなしている (: ここでの図の意味するところについては先立っての P (D | H) と P (D) の関係についての「一般人が理解できようとの水準にての説明を付しての」図示の部の内容を「把握できていれば」、理解に窮することはないことか、とは思)。

※上の P (D) の規定の仕方に基づき、先立って [詳述] してきた下の式らを単純変形すると、そう、以下、①と④と振っての順序で単純変形すると、広くも [ベイズ推定] に用いる一般公式の成り立ち過程が説明できることとなる (: 肝心なのはそもそ一般公式が [どういう発想法に依拠して何を意味しているものなのか] だが、についても、高校程度の知識水準を具備しているのならば思うこともないであろうとの説明を本稿では無論、講じている (つもりである)。何故、そもそしたことにまでわざわざこの身が労力を割くことになしたのかと言え、高校生でも理解出来ようとの汎用性・応用性に富む数学的分析手法、そうしたものによる分析結果ひとつとっても本稿の説明対象があまりにも凶悪なもの、[膨大な数なる人命を屠 (ほぶ) ろうとの露骨なる意図のありよう] として示すことができるようになっていくとの認識がこの身にあるからである (だのに、この世界ではその証示をなさんとする人間が全く見受けられないとのことがあるのだが、主張者の僅少さはその話柄が虚偽たること・重んずるに値せぬことの必要条件にも十分条件にもならぬとのある種、当たり前がこの世界の悲劇そのものに通底するようになっていく (と解される)。そもも申し述べおく)。



ここ枠内の式が [ベイズ推定] (Bayesian inference) と呼ばれる分析手法にあっての [単純化された一般公式] (「あちら立てばこちら立たず」の排他的性質を帯びての想定仮説らを対象にした一般公式) となり、

$$P(H_i|D) = \frac{P(D|H_i) P(H_i)}{\sum_{i=1}^n P(D|H_i) P(H_i)}$$

とのかたちで知られているものとなる。

(※ここで述べておくが、
「以上のような式を主として用いるベイズ確率論は決して現実を見ていない数式上のお遊びなどではない」(先立って言及しているところとして[主観確率]という[事理に通じていないとの第三者]の誤解を招くような言葉が巷間、よく取り沙汰されるようなことがあってもである)。

それが数式上のお遊びにとどまらぬところの最大の理由としてベイズ確率論というものが

[まずもって確率分析をなすことにしたモデル]

を

[現実世界のデータ]

に合致するように絶えず仕切り直していくものとなっていることが重きをもって関わってくることになる。

そう、問題たるところとしてベイズ確率論というものの肝は[追加]でデータ(現実世界で収集された具体的情報だ)が与えられていくにつれ、式の可能性論的枠組みがそれら現実世界のデータに準拠したものに徐々に「更新」されていくように数式として「できあがっている」とのことにある(：例えとしてはどうか、とも思うのだが、式の性質がそも、最初に標的の潜水艦の位置をおおよそながらものかたちで定め、に対して、ソナー(音波探知のための音波)を発して返ってくる反応から徐々に標的位置を厳密化していくような式の格好となっている)。

それがゆえにベイズ確率論というのはその強力無比な威力より、(後にもそれにまつわる言われようについては引用を交えながらも解説するところとして)、現代社会のありとあらゆるところで利用・応用されている。本稿筆者は「プログラミングのような人間が生きるうえでの優先順位として非本質的と受け取れることでやたらめっぽう細かくもなりがちであるとのことはおよそ好きになれない」との性分の人間なのだが、コンピューター・プログラムを動かすお決まりのライブラリ、出来合いのAPI(アプリケーション・プログラミング・インターフェース)のライブラリといったものにもベイズの式を活かしてのものが含まれているとのことが往々にしてあるのである——放念していただいて構わないとのほんの若干ながらも専門性が伴った話をなせば、である。メールフィルタに見る機能がその典型だが、[日常世界にて有効機能しているメールフィルタでさえこれより述べていくような【更新処理】(ベイズ更新)を発生させて「いない」極めて簡略なもの、ナイーブ・ベイズと呼ばれるやりようしかなさぬかたちで定義されている、状況を受けて進化していくといったことに多く乏しいものであるにすぎない(数式からして極めて単純に示せるものである)との[単純ベイズ分類器]の利用に往々にして留まってもする(基本的事実の問題として現行の英文ウィキペディアのベイジアン・スパム・フィルタリング項目、その冒頭部からして[ナイーブ・ベイジアン・クラシファァ(単純ベイズ分類器)がスパムフィルターに用いられている]と記載されている通りである)とのことが[ベイズ理論の応用の裾野の深さ・広さ]について傍証するかたちともなる、そのように述べられもするようになってもいる——。

他面、そうした強力なるベイズ確率論に対しては批判がある、同確率論が[本来そこに厳としてあるべき自然な状況]

をありのままの観察でもって煮詰めていこうとの科学的思考(とされるもの)からの逸脱を招きかねないもの、分析者の主観を確率分析のモデルに反映させようというやりようであるとして問題視する見方があるのもまた事実である。

たとえば、(それを言ってしまうえばありとあらゆる[科学的分析]が論者が不誠実な輩であった際にそういう欠陥を帯びてしまうところかと思われもするところなのではあるが)、ある論者が確率論の基礎になる仮説定立に際して極めて問題ある「設定」をなし(後にて解説する尤度(ゆうど)というものについてあざとくもの恣意的な設定をなし)、分立する仮説から見極めにあっても恣意的判断を多く差し挟

み、そして、呈示データも恣意的に抽出したものばかり集めれば、ベイズ確率論を用いて欺瞞に対する数値的裏付けを与えることもできるとのことになるとされている(往々にしてそういうやりようを取る者は数値設定にまつわる解説をわざとなしていないところか、と思われるが)。

ベイズ確率論に主観確率 — subjective Bayesian probabilities— としての胡散臭さが伴うとされるのは大なるところとしてそういう事情に因る。

尚、本稿では

[高校生でも数式・数的処理の有り様について分かるようなレベル]

にての事細やかな解説を付し(高校で[学習]する[条件付け確率]とにまつわつての[確率の乗法定理]の概念からのみでいかようにベイズの概念に行き着けるか、ベイズの概念を用いていかなうな分析がなせるかの事細やかな解説を付し)、

のような中で[ベイズ推定]の基本的モデルを用いもし、によって、おおよそにしてこういう計数的見立てがなせるとの目分量を懇切丁寧に呈示する所存だが、そうしたやりようでは[算定の対象]として客観的データを用い(何をもってして客観的とするのかの説明も付してのデータを用い)、主観と言われるような[推定]が作用している部分もブラックボックス化せずにきちんと明示しての話をなす所存である —客観的な手法 objective method を指向してのやりようをとる—

。など述べると「小難しいことをくださいと...」といった予断を招くか、とも思うが、本来的には単純なことに対して単純であるとの説明をこれ以降、注力してなす所存である。

その程度のものでなければ、読み手を限局化しすぎるか、との認識があつてそうもしているのだが、とにかくも、本稿で展開するのは、(じつにもってしてくども述べ)、基本的に高校生卒業程度の[知識](および[集積知識を活用する意志の力]としての[知性])を有していれば、何ら惑うものではないだろうとの単純なるモデルである)

ここまできたところで、である。先立って例題として引き合いに出した事例(以下、再度、呈示の病気検査の事例)に基づいてベイズ理論にあつての基本的特性についてさらなる解説をなす。

(事例再述として) ある人物が病気 X の診断を受けた....。同人物が受けた診断は[陽性]・[陰性]との結果のうち、必ずどちらかが返ってくるものとなる(診断というものの性質を考えれば、至極当然のこととして、その二者しか結果は出ないという状況をここでは想定する)。

診断にて問題となる[陽性]か[陰性]か、それはいわば[結果]である。そして、[結果]については次のような[原因](仮説)が考えられる。

(【例題設定】として)

[結果(ないしデータ)の背面にある「実情」にまつわる[仮説 1]としての H1 の特性]

⇒

全数は把握できていないが、診断結果などに照らしあわせて特定の疾病 X の発病状況として[陰性]である人間の比率は全人口にておおよそにして 98%、対して、[陽性]である人間の比率は全人口比おおよそにして 2%であると「推定」されている(との例題設定をなす。につき、その対象に見る[罹患率]2%との[推定]は揺らぎうるとも例題上、設定する)。

そのような推定がなされている中で特定疾病の罹病有無を判断するための

特定検査を実施すると

[実体陽性状況 —H1の状況—]

にある場合には99%はその通りの結果(データ;D)が出るが、うち、1%は誤検知がなされてきてのものであると —(後日調査で判明している検査精度の問題から)— 判断できるところとなっている(と例題設定する —※検査としては「実体として陽性であるのにも関わらず陰性との結果が出ると非常に問題になる」のでそうした結果を出来るだけ避けるための慎重な設計がなされている、だが、後日調査でそれでも1%は誤検知がなされると判明している... そういう現実的状況を念頭に置いての例題設定をここでは付している—)。

[結果(ないしデータ)の背面にある「実情」にまつわる[仮説2]としてのH2の特性]

⇒

(前半部は繰り返しとして)全数は把握できていないが、診断結果などに照らしあわせて特定の疾病Xの発病状況として「陰性」である人間の比率は全人口にておおよそにして98%、対して、「陽性」である人間の比率は全人口比おおよそにして2%であると「推定」されている (との例題設定をなす。につき、その対象に見る「罹患率」2%との「推定」は揺らぎうとも例題上、設定する)。

そのような推定がなされている中で特定疾病の罹病有無を判断するための同じくもの特定検査を実施すると

[実体陰性状況 —H2の状況—]

にある場合には95%はその通りの結果(データ;D)が出るが、うち、5%は誤検知がなされてきてのものであると —(後日調査で判明している検査精度の問題から)— 判断できるところとなっている(と例示設定する —※検査が「陰性兆候が強くとも油断ならない」との観点から(実体陰性状況になるような局面では)陰性結果・陽性結果が出る割合が高めに95対5になるように検査設計されている... そういう現実的状況を念頭に置いての設定をここでは付している—)。

※同事例については[偽陽性](実体は陰性なのにデータとしては陽性が出ている)・[偽陰性](実体は陽性なのにデータとして陰性が出ている)にまつわる解説に関わる図を先立って挙げているところとなる

説明の便宜のために持ち出しはじめた中、ここに再述したところの上のような事例の場合にあって、たとえば、検査にて「陽性」との結果を得たとしよう。とすると、その「陽性」が(悲観すべきものとしての)「真陽性」—検査結果としてのデータの通りに実体も陽性であるとのこと— となっている可能性はいかほどばかりか。

もっぱらベイズ確率論に依拠しての視点からそちら問題を見てみる (これまた以降の確率論に対するつなぎとしてなすとの話として、である)。

まず先立っての [14]式、

$$P(H_x | D) = P(D | H_x) \times P(H_x) / (P(H_1) \times P(D | H_1) + P(H_2) \times P(D | H_2) + P(H_3) \times P(D | H_3) + \dots + P(H_n) \times P(D | H_n))$$

から見れば、「真陽性」(実体として疾病に罹患している状況)に起因する可能性がいかにまでかは次のようなかたちで示せることとなる。

H1 を[実体としての陽性の状況] (表層的なデータの背後にある真因でもいい)として先立ちもして定義してきたとの話の性質上、 $P(H1 | \text{検査結果[陽性]データ})$ 、すなわち、

[陽性のデータ(D)が検査より得られたならば、それが実体としての陽性の状況をも示しているとの「条件付き」確率]

は次のかたちにて示せることとなる。

(H 関連要素(物事の背面を突いての仮説あるいは真因にまつわる要素)が H1 および H2 しかないとの表記事例にあって単純に[14]式より導き出せるところとして)

$$P(H1 | \text{検査結果[陽性]データ}) = P(\text{検査結果[陽性]データ} | H1) \times P(H1) / (P(H1) \times P(\text{検査結果[陽性]データ} | H1) + P(H2) \times P(\text{検査結果[陽性]データ} | H2))$$

上式における、

$P(\text{検査結果[陽性]データ} | H1)$

および

$P(\text{検査結果[陽性]データ} | H2)$

すなわち、

[H1(実体としての[陽性]たる真因)との状況にある中で検査結果データとして「も」陽性と出てしまっているとの確率] (真陽性、真に陽性なり、トゥルー・ポジティブの可能性)

および

[H2(実体としての[陰性]たる真因)との状況にある中で検査結果データとして「は」陽性と出ているとの確率] (偽陽性、実は陽性ならざるなり、フォールス・ポジティブの可能性)

は所与、そう、あらかじめ与えられもしているデータから、

[不変なるもの] (さらに後述しもすることとなるところの Likelihood[尤度]と呼ばれるもの)

としてあらかじめ定義できるものとなっているし、ベイズ確率論ではそのようなものでなければならないとのものである (そうではないと話基本的なベイズ確率論の適用対象にはならない)。

その点もってしてデータの背面にありもする、

[ありうべき真相としての原因] (ないしは [実体を衝きもしていうると想定される仮説ハイパーセシス])

としての H1 および H2 ら、それら H1 および H2 らがデータ(検査結果としての D)に先んじて存在しているとのもの「でない」とすれば、それらの計数的特質があらかじめ不変なるものとして算定されている(設定されている)との場合「でない」とすれば —たとえば、ここでの事例では「実体として陽性である(H1)のに間違っ陰性であるとのデータ(D)が出ている可能性は~%である」といった風に具体的に事前に計数的ありようを定めての例題設定をなしているわけではあるが、そういった場合「でない」とすれば—、そちら [ありうべき真相としての原因] (ないしは [実体を衝きもしていうる仮説] たる H1 や H2 など) の成立度合いにまつわっての確率を分析するとの議論を展開することは、そも、できない、ポシブル・インポシブルの問題としてできもしないとのことになる (：いいだろうか、[ベイズ確率論の本質に関わる最も基本的な一般論]の問題として[H1 や H2 が一体全体、データ(D)に先んじて存在しているとのものとしてどれくらいの確からしさ・尤(もつ)もらしさを帯びているものなのか)についてあらかじめもってして想定・算定していないと、 $P(D | H)$ の値が算定・想定されていないと、—最終的にはそうもってして計数的算定がなされての H1 や H2 が本当に当該の事例での取得データに対応する真因としてそこに存在している可能性が取り合うに足るものとなるのかが議論の終着点となるわけであるも— 確率上の分析そのものがそも、成り立たないことになる —※—)。

(※同じくものことに関してはこれよりおいおいもってしてより微に入っただけの意味合いの解説をなす所存だが、D(データ)に先んじてのH1やH2のありようが計数的に定義されて「いない」と(データの背面にあってそれらと紐づくものとしての成立しやすさ度合いが問題になる)[原因]や[仮説]は確率論的分析は、そも、数学上の分析の対象にはなりえない——事前はその値が目算でもいい、不変不動に定められている必要があるとのまさしくものここで述べもしている $P(D|H1)$ 、そう、先立って詳説してきたところの条件付き確率の公式の通りに述べての「H1ならばDである確率」(「Hypothesis1 仮説1が実体としてそこにある場合において「それによって規定されるかたちでの」想定されるどころのData データの出方の確率」)「ではなく」、確率分析においてその計数的変動度合いが終局的に問題にされるとの $P(H1|D)$ 、すなわち、これまた先立って意味合いを詳説してきたところの条件付き確率の公式の通りに述べての「DならばH1である確率」(「観察実体としてData データが得られている折に「それによって規定されている」(観察データが向かう先に確実絶対が存在している)H1の存立可能性」)にまつわっての確率論的分析は、そも、数学上の分析の対象にはなりえない、としてもいい——)

ベイズ確率論(の応用)について聞き及んだことがなかった、だがもってして、計数的論理的なる思考能力はある程度、有しているとの聡い向きであるのならば、またもってして、そうした向きがベイズ確率論におけるベイズ推定というものではHが「H1からHnといくつもある」との $P(H|D)$ の「相対的」成立度合い(いくつものHにおけるDと確実絶対紐付けられた成立の相対的成立度合い)が問題視されているとの一事さえ押さえることができているのならば(ここまでの手前の不十分な説明を通してでも押さえることができているのであれば)、不十分は不十分なりにもこの段階までにて敢えてねちっこくも言及してきたことら——殊に先立ってのベイズ推定にまつわっての一般公式(General formulation of Bayesian Inference)として有名な[14]式の意味合いについて言及してきたこと——からこの身、筆者が直上の段の記述にて何を述べんとしているのか大体はご想像いただけることかとも考えもするのだが、ただ、通常一般の向きら(の中でも本稿筆者が語るに値すると見る向きは「殺されると知れた状況であるのならば現実に抗う意思の力を有した向き」[家畜に過ぎぬとのありように抗う向き]である(残念ながら、本稿はもうすぐ殺されるとの目算が成り立ってしまう状況で無為なる好奇心に應えるためにもものしているのではなく生きる覚悟と意思を問うためにもものしているつもりであるとのものである))にはここまで説明したことだけではいまだもってして話の機微がご理解いただけないことか、とも思う(であるのでこれよりもってしてさらに細々と説明をなしていく所存でもある)。そうも述べつつも書くが、とにかくもって、 $P(D|H)$ 、すなわち、「HならばDの確率」としての「Hypothesis1 仮説1が実体としてそこにある場合において「それによって規定されるかたちでの」想定されるどころのData データの出方の可能性——後にもその意味合いを解説するが「尤度(ゆうど)」というもの——」は「ベイズ確率論にあっては」計数的にあらかじめ定義されて不変なるものとなっている必要があるし、ここでの病気陽性・陰性にまつわる事例設定もそれに適合するようになっていること、ご理解いただきたい(問題は「実体を衝く原因」や「真相を衝く仮説」(H)にまつわる目算があまりにも曖昧模糊としている、不確実極まりないとのときなのだが、といった場合でも、いや、といった場合においてこそその真価を發揮するところとしてベイズ確率論(におけるベイズ推定)ではデータが大量に与えられており、かつ、「想定される原因あるいは仮説の候補」(例えばH1からH100の100つの「計数的に定義された」原因的状況ないし仮説の候補)が必要十分なだけ呈示されているのであれば、それら原因(ないし仮説)の内、どれが最も現実的状況(データの導出され度合い)に近似的に近しいのものなのかの見極めがなせるようになっている(同じくものことについては先立っての[14]式の意味合いを煮詰めるのかたちでこれよりさらに細々とした解説を加えていく))。

(ベイズ確率論では「尤度ゆうど」との呼称が一般になされる $P(D|H)$ の値があらかじめ算定されている必要があるとのことを取りあえずも申し述べたうえで)ここでの事例、上にて「原因1」「原因2」とのかたちで原因を規定している(不確実性をより前面に押し出したければ「仮説1」「仮説2」と表してもいいがここでは原因と規定している)とのここでの事例では尤度たる $P(D|H)$ が

(「H1 —実体は陽性— という[原因]がそこにある場合にてデータが[陽性]となっている」ものである)

⇒

$$P(\text{検査結果[陽性]データ} | H1; \text{実体としての陽性}) = 99 / 100$$

(「H2 —実体は陰性— という[原因]がそこにある場合にてデータが[陽性]となっている」ものである)

⇒

$$P(\text{検査結果[陽性]データ} | H2; \text{実体としての陰性}) = 5 / 100$$

となるように厳密に規定している (何故、上記のような値がここでの例題設定で出てきもするのかについては、である。上に見る条件付き確率、 $P(\text{検査結果[陽性]データ} | H1; \text{実体としての陽性})$ が[実体として陽性であるとの状況(原因)に確実に紐付く中で検査で陽性結果がデータとして出ている可能性]を意味していること、ご理解いただいたうえで、下の再掲なしの表を参照されれば、惑うところはないことか、とは思う)。

個人に対する疾病検査結果の背後にある [原因] (実体的病気動態) の割合
— (実体としての [陰性] 状況と実体としての [陽性] 状況の比率) —

原因 データ	データとしての	
	[陰性] (検査結果)	[陽性] (検査結果)
検査結果背後に控える真なる原因として 原因2 (実体 [陰性] 状況)	95	5
検査結果背後に控える真なる原因として 原因1 (実体 [陽性] 状況)	1	99

※特定疾病の罹病率が現在のデータから2パーセントであると推定されている。といった状況下にて同じくもの特定疾病の罹病有無を判断するための特定検査を実施すると (後日調査で判明している検査精度の問題から) 実体陽性状況にあっては99%はその通りの結果が出るが、1%は誤検知がなされてくると判明している。 他面、実体陰性状況では (これもまた後日調査で判明している検査精度の問題から) 95%はその通りの結果が出るが、5%は陰性であるのに陽性との結果が出てくると判明している (との例示事例とする。につき、一般論として病因検査というものが [陽性であるのに陰性との結果が出てくる] との損害多くもなるケースを可及的に忌避するものとなっている (陽性であるのに陰性が出るなどのことがあっては困るので慎重に判定するものとなっている) のに対して、陰性兆候が強くとも油断ならないとの観点から (実体陰性状況になるような局面では) 陰性結果・陽性結果が出る割合が高めに95対5になるように検査設計されていることを想定しての例題呈示をなしている)。

以上、記した上で続けるが、ここでの例題設定では $P(H1)$ および $P(H2)$ は — それらが意味するのが [H1 および H2 が成り立つ確率] であるところ — それぞれに

$$P(H1) = 2 / 100$$

$$P(H2) = 98 / 100$$

となる (ように先立ってより例題設定している。その点、初期の状況における罹患率の [推定] の問題として H1 および H2 が成り立つ比率を (全国民における想定されるところの) H2 [実体陰性] 状況は 98%、(全国民における想定されるところの) H1 [実体陽性] 状況は 2% とのかたちでの例題設定をなしている — お忘れの向きは上の記述内容を参照のこと —)。

上の

$$P(\text{検査結果[陽性]データ} | H1) = 99 / 100$$

$$P(\text{検査結果[陽性]データ} | H2) = 5 / 100$$

$$P(H1) = 2 / 100$$

$$P(H2) = 98 / 100$$

をデータがまずもって与えられたときに、である。ベイズ推定にあつての一般公式([14式])をそのまま活用しての本事例にあつてのH1成立可能性判断の式 — $P(H1 | \text{検査結果 [陽性] データ}) = \frac{P(\text{陽性} | H1) \times P(H1)}{(P(H1) \times P(\text{陽性} | H1) + P(H2) \times P(\text{陽性} | H2))}$ 、すなわち、[検査結果 [陽性] データがそこにある場合、それに確実に紐付く(それを絶対的に規定している)ものとしてのH1(実体陽性)の状況が背後で成立しもしている確率]にまつわつての式 — に呈示の値らを代入すると、

$$P(H1 | \text{検査結果 [陽性] データ}) = (2 / 100 \times 99 / 100) / ((2 / 100 \times 99 / 100) + (98 / 100 \times 5 / 100)) = 0.28779 \dots \dots \text{(小数点 6 桁以下切り捨て。パーセント表記では 28.779\%)}$$

との結果が導出されてくることになる。

上記式から示されることは

[全数は把握できていないが、従前診断結果などに照らしあわせて特定の疾病 X における[陰性]である人間の比率は全人口にあつておおよそにして現行データでは 98%、対して[陽性]である人間は全人口比おおよそにして 2%であると「推定」されてもいる。そのような中で特定検査にて[陽性]であるとの結果を呈示されるとの場合は 95%そのとおりのものとなっていると [検査精度の問題] (検査固有の限界性の問題) として後日事後調査より判明しているが、換言すれば、それは陽性ではない[実体陰性状況]であるのに関わらず[陽性]との検査結果(データ)が導出されるとの偽陽性率(パーセンテージ・オブ・フォールス・ポジティブ)が 5%となっているとのことである。他面、[陰性]であるとの検査結果が出された際には 99%はその通りだが(実体も陰性状況にある)、1%は本当は陽性となっているのに陰性との検査結果が出てしまっている(と後日事後調査より厳密に判明している)。換言すれば、偽陰性率が 1%となっているとのことである]

以上のような状況下で仮に検査で[陽性]との結果が出ると [実体的陽性状況] にそのような検査結果が由来している可能性は、、、、

(たかだかもつてしての) [28.779%]

にとどまる

とのありようである(※)。

(※表記のような事例(病気検査の事例)についてはベイズ確率論の効果効用を訴求するためによくも取り上げられるものでもある。

すなわち、

「[検査結果[陰性]状況にあつての誤検知率]が(きちんと科学的に経験則化されている疾病検査キット精度などの問題として)5%ならば、そして、そうした検査で(全人口のうち、2%がそれに罹(かか)っているとの病気の罹患有無について)陽性と出れば、極めて高い割合(9割越え等といった極めて高い割合)で病気に冒されているのであろう」

などとの誤解が往々にしてなされ、そのため、[検査結果に対する過剰過分なる信頼] (に基づく悲観)がまかりとおっている。、、、しかし、そういう風潮が正しくはないことを計数的にベイズ確率論(における分析)は教えてくれる(本件事例では精度 95 パーセントと判明している検査を受けて陽性と診断されても病気にかかっている確率は 30%未満にすぎないとの計算上の実態がそこにあることが計算で分かる)、突き詰めて見れば、物事を一面的に見て予断に囚われるのは望ましくはないとのことをベイズ確率論は計数的に教えてくれる。、、、などとの説明がよくもなされるようなところでもある — ※その点、[現実としての罹病陽性状況]に対して「圧倒的多数を占め

る]実状としての罹病陰性状況（人口のうちの98パーセントが罹病陰性と初期状況では想定されているような圧倒的多数性が問題になる状況）であって「も」[陽性]と診断されるケースが5%「も」あるために陽性結果が出てもその結果については（偽陽性と通ずる[実体陰性]（本例示事例ではH2）の比率の多さゆえに）強くもの希釈化力学の影響下にあることになる．．． そうもしたことが本事例では述べられるようになっている。そして、同じくもの病因検査にまつわる事例はベイズ確率論（スパムメール・フィルターから（原始的）人工知能の類推エンジンに至るまで活用されているとの確率的分類法）の効率性を示すものとして、（先立っても申し述べたが）、[乳癌におけるマンモグラフィー検査を引き合いにしての事例]といったかたちで極めてよく引き合いに出されるものである。因みに、[実体的状況]と[取得情報]の離隔の問題、そう、真陽性・偽陽性、真陰性・偽陰性に起因する同じくの問題は[第一種過誤および第二種過誤（の問題）]という呼称で統計的かつ科学的思考法を旨としている向きには[「半ば」常識的なるもの見方]となっている（大学では経済学部、多くの理系人と己を規定している向きらに似非科学と見られやすき経済学を学ぶための学部（[効用]を重視して）属していた筆者ですらその程度のことは大学の時点で聞き及んでいた）——）

ここまできたところで話をさらに進めるが、「一般的に用いられる用語の問題として」ベイズ確率論では

[$P(H|D)$ — 何度も何度も述べるが、特定のデータ(D)が[結果]としてそこにある場合にてそれによって特定の原因(特定仮説(H))に対応する確率的枠組みが規定されているとするケース $P(H|D)$ （たとえば、[検査で陽性との結果(データ)が出た場合、それが実体としての陽性状況(真因たるH1)を確実に規定する方向を示している(DならばH1であることを示している)との確率]との直前紹介事例もこちら $P(H|D)$ に該当する) —]

をもってしてその変動具合をまさしくもの分析対象とすべくもの、

Posterior probability [事後確率]

との概念で便宜的にとらえるとの数学上の慣行慣例が定まっている（何故、[「事後」確率]なのかと述べれば、[データ]が現物として「新しく」出てきた(e.g.「検査対象が病気Xに罹患している(病気Xの陽性になっている)とのデータが「新しく」出てきた」等等)とのそれ「以後」の確率を考えるからである)。

他面、ベイズ確率論では

[$P(H)$ — 特定の仮説が成り立つ可能性と「あらかじめ想定されている」確率 —]

をもってして

Prior probability [事前確率]

との概念で便宜的にとらえるとの数学上の慣行慣例が定まっている（何故、[「事前」確率]なのかと述べれば、ベイズ確率論ではいくつかの仮説ら、例えば、H1からH2らが成り立つ可能性($P(H)$ や $P(H2)$)を可變的なもの、状況(データの追加取得)に応じて変動していく初期状態にあつてのもの、あるいは後に修正されていく「前もってして」のものであるとの観点でとらえているからである — (e.g. 先程の病因検査の事例ではそもそも病気にかかっている・かかっていないとの確率($P(H1)$ および $P(H2)$)は大枠としての全人口罹病率、陽性2%・陰性98%と呈示していたわけだが、といった罹病率は[まずもつての全数に対する予測]にすぎず、データとしての標本の新規具現化ありように基づいて全数に対して予測が変動していく事前確率として規定している) — 。については後にてイメージしやすくもしての例示紹介をなす)。

そして、

[$P(D|H)$ —特定仮説(H)がデータに先立つものとしてそこにある場合にあってそちら仮説によっていろいろなデータの出方それ自体が計数的に「規定」されるうえでの確率(仮説H「ならば」データDの出方は~となろうとの確率)—]

を「値不変なる」(初期状態の設定に完全に依存して変動要因とはならない)、

Likelihood [尤度]

との概念で便宜的にとらえると数学上の慣行・慣例が定まっている (何故、 $P(D|H)$ たる $P(\text{Data}|Hypothesis)$)、「特定仮説がその確率的枠組みを規定しているとのその先に特定のデータがあるとの確率」が「尤度(ゆうど)」というものとして定義され、かつ、その値が不変であるか、 と言え、である。「尤度」というもの、「尤(もっと)もらしさの度合い」を意味する(英語でのライクリフッドもそうした意味の語となる) という「尤度」というものが「ある仮説の枠組みが現実的データに先んじて、そちらデータ「の出方・表出のありよう」の枠組みを規定するかたちで存在している確率」($P(D|H)$; 「HならばDの確率」) として「(仮説内における)データの尤(もっと)もらしさ」にまつわるものとなっているからである——先立っても申し述べたが、ベイズ確率論については[主観確率]を問題視するものであるとの拒絶反応がよくも呈され、実際に(これまた先述のように)同確率論は Pathological Science[病的科学](何も無いところにデータを捏造して科学的ありようを偽装する[疑似科学]よりはましたが、根拠やデータを過剰評価してのその側面より不健全で信を置けぬことには変わりはないとの[病的科学])の手段にそれ(主観確率)がゆえに用いられることがある。にまつわっては先述の事前確率の初期設定にあって主観が関わるようになっていくことがあることが大なるところとして影響しているのだが、同じくもの主観確率というものに対する拒絶反応についてはここでいう「尤度」、それが検討対象の仮説毎にある程度のいい加減さを許容する式で設定付けされるとのことも「科学に主観を導入するものだ」と毛嫌いされている理由となっている(そうした毛嫌いの問題を回避するために良心的たりたいとのベイズ論者は事前確率の「初期」設定と、また、尤度の設定にまつわる理由付けをきちんと明示し、かつ、公平客観的なデータを投入し続けてどの仮説が最終的に生き残るのか、すなわち、どのような尤度設定をなしている仮説が確率論的に最終的に生き残るのかに対して公平中立な目分量を呈示するとのやりようをとる必要がある)。以上、この段階では難解にも響くかも知れないことを申し述べた上でさらに断っておくが、「後に仮説毎にそれが設定付けられての「尤度」が何なのかについてイメージしやすくもしての解説も細々となす所存である」。また、先程の病因検査の事例を引き合いにすれば、である。「特定の検査結果のデータとしての具現化が実体としての原因(と同義のものを指してのH1あるいはH2)と確実に紐付けられている確率 ; Hである折にあってのDの確率」($P(D|H)$) としての「実体[陽性]状況(H1)にある中ではその通りの[陽性]の検査結果(データ;D)が99%として出てくるとの確率的状況」および「実体的[陽性]状況(H1)にある中でも[陰性]との検査結果(データ;D)導出が1%ながらも出てきてしまう(と経験則に基づいて判明していると事例設定しての)確率的状況」 をもってしてH1における尤度と見ている(事後調査で判明していると例題設定しての「データ」(陽性・陰性か)に対する硬直的検査精度の問題が「尤度」となっている)——。さらに解説しておけば、固有の性質として「尤度」が(分析者の視点で定められているというのに)不変であるとのことだが、各仮説の中身、そう、それらがどういう確率論的状況をデータ(具現化データ)に対して定義・予測するものなのかの枠組みがころころと変わってしまえば、その確率論的軽重の判断対象とする仮説らは(最終的に棄却されるか棄却されないかは別として)仮説として要をなさなくなる、それがゆえに尤度は当然に不変なるものと想定されることになるのである(先程の事例では(「尤度」的意味合いを帯びての)「検査精度」が定まったの状況は二つしか設定していない、しかも、それに対しては(硬直的検査として)[生き残りが問題になる暫定的仮説]との位置づけを与えていないわけではあるが、現実の分析にあっては少し異なる意味合いを求め、呈示する)。尚、H1からHnとn個の仮説を設定しての確率分析をなすうえで不適切な尤度設定をなしている仮説は(計数的に)淘汰されるとのことでベイズ確率論が真っ当に展開される限りは尤度設定の硬直性は(先述のように毛嫌いされる場所ではあるのだが)前提として問題視されていない)。

以上のように概念ありようについてさしあたりの解説を付し、

[事後確率] ($P(H|D)$)

[事前確率] (P(H))

[尤度] (P(D | H))

がベイズ確率論の根幹をなすものである。

(直上・最前の段での言及事項、その整理のための図として)

[ベイズ推定] (Bayesian inference) の根幹をなす 基本式の各部呼称について

(※下記の式の導出方法については [条件付き確率] の基本公式からの変形プロセスとして先立っての段で比較的念密に解説してきたところとなる)

$$P(H_i|D) = \frac{P(D|H_i)P(H_i)}{\sum_{i=1}^n P(D|H_i)P(H_i)}$$

Prior probability [事前確率]

ここ P(H) は先にて言及のように [事前確率] として定義してのものとなる (P(D|Hi) それ自体の意味は「仮説Hiが現実的状況に合致するもので仮にあるのならば (所与の確率に基づいて仮にそうであるのならば)、特定の情報・データたるDはいかような確率で具現化するか」とのことを意味するものとなる — 先述なしているところである —)

Likelihood [尤度]

ここ P(D | Hi) は 一細かい解説は続いても段でもなすが — [仮説i (Hi) が特定データ (D) の原因として呈示されている折の当該仮説 (Hi) における尤度 (ゆうど)] と表されるものとなる。につき、そちら [尤度] とは

[尤 (もっと) もらしさの度合い] (英語で言うところの Likelihood)

との語感が示すように

[該当仮説におけるあらかじめ分析をなす者が推論していたデータにて特定性質が具現化する割合]

のことを指す (そちら値がいい加減なもので現実的状況に合致しなければ、データに応じての P(H|D) の見極めに対してより多くのデータが呈示され、また、より多くの仮説が呈示されているべきとのことになる)

Posterior probability [事後確率]

ここ P(H|D) は先にてそうもなすと言明のように [事後確率] として定義してのものとなる (: P(Hi|D) それ自体の意味は「Dが現実的状況として呈示されている折、[データの割合 (比率) によって規定されている仮説Hi] が成り立ちうる確率はどれほどのものと「なる」「なっていく」か」とのことを示すものとなる)

さて、[事後確率] [事前確率] [尤度] がいかようにベイズ確率論にあって重要なものとなるのか、その解説をこれよりなす。

ここで再度もってして繰り返すが、

[事後確率] および [事前確率]

との言葉でもって

[$P(H|D)$] —特定のデータ(D)がそこにある場合、そのデータによって特定仮説(H)の確率的具現化度合いが規定されきっている場合の確率；[DならばHであるとの条件付き確率]—

[$P(H)$] —特定の仮説H具現化の確率と「あらかじめ」想定される事前確率—

をとらえるとのことがベイズ確率論の特色をなすと直前の段にて言及したわけだが、そうもしたベイズ確率論の肝となるところは、である。[事後確率]、先立っての段でその式としての意味合い・成り立ちについて順を追って細々と解説してきたとのベイズ推定モデルにおける一般公式たる、

$$P(H_x|D) = P(D|H_x) \times P(H_x) / (P(H_1) \times P(D|H_1) + P(H_2) \times P(D|H_2) + P(H_3) \times P(D|H_3) + \dots + P(H_n) \times P(D|H_n)) \dots [14]$$
 (仮説(ないし特定の事柄が起こる原因)がH1からHnまでのn個だけ存在すると想定される場合にあって特定のデータ(D)が与えられた際、そちらデータによって(H1からHnのうちの)仮説Hxが正しいものと示される割合を呈示しているとの式)

の(左辺にあっての) $P(H|D)$ として規定されるものでもあるそちら[事後確率]の検討が[確率分析プロセスに際してのデータ連続顧慮]にあって活かせるとのことにある。

以上のこと、ベイズ確率論の肝となるところが

[事後確率が確率分析プロセスにあたっての連続データ顧慮に活かせるとのことにある]

とのことについて順次説明をなす。

まずもって先立ってその適用なしようについて解説してきた[14]式を用いて特定のデータが得られた場合にあって各仮説H(仮説H1からHnのn個の仮説ら)がその原因ともいべき紐付き度合いでそちらデータの背後に控えているとのことを算定したとみたとしよう。詰まるところそれは、なんのことはない、特定データ(D)に対する $P(H_1|D)$ から $P(H_n|D)$ の値を求めたに等しいわけではあるが、の後、追加のデータが出てきたすればどうか。

ベイズ確率論の特質をなすことだが、そこで、追加のデータが出てきた時点で直前求めもした事後確率($P(H|D)$)をもってして

[「所与の」(既に確定している) 確率的状況]

に仕切り直して見、それを続いでデータ顧慮時にあっての[事前確率](再述するが、[事前確率]は $P(H)$ にて示されるものとなり、その意味するところはある仮説Hが成り立つ可能性を指す)に仕切り直して代入するとのことをなすのである(：[直前データにまつわるものとして求めた事後確率—あるデータが得られた折に、によって、特定の仮説が成りたつと判じられる確率($P(H|D)$)—]を[次データにまつわる確率計算での事前確率—特定の仮説が成り立つ可能性としてあらかじめ顧慮されているところの事前確率($P(H)$)—]に仕切り直しての計算をなす、従前[事後確率]の新規[事前確率]への採用をなす、とのことをなすのである)。

特定データ(D)が捕捉された折、その原因であるといった紐付き度合いで特定の仮説(たとえばハイポーセシスxたる H_x)が成り立つ可能性 $P(H_x|D)$ が既に捕捉されているとの状況でその事後確率の値を仮説xが成り立ついわばもってしての素地たる $P(H_x)$ —[取得されたデータに依拠しての次なる計算]における事前確率—に代入し、「一連の」確率的状況の分析プロセスにあたっての続いでデータ捕捉時の事前確率ととらえての確率分析をなそうというわけである。

(：直上表記の数式処理—従前[事後確率]の新規[事前確率]に向けての採用(代入)をなすとのベイズ確率論の特色たる数式処理—の背景にある思考法(この場合、思考法というが、それは[数学という純粋理論の世界にあっての数式処理のアイディア]との極めて厳密なもののご理解いただきたい)についてであるが、それは

【**事象**】（先立って定義したようにサイコロを振った折の賽の目の出目が1である、2であるといったその確率的ありようが問題になる〔試行〕に対応する結果が【事象】だ）の束がそこにある]

とのありよう、そう、いくつもいくつもデータとしての【事象】が導出されてくるとの環境—確率論の分析対象としての環境—がある中でそうした続々と捕捉されてくるデータ（【事象】ないし【事象】選り分けの基礎となる情報）と紐付きうるものとして顧慮される【仮説】ら（それら自体の中身はあらかじめ計数的に硬直的に定義されている【仮説】らでもある）のどれが最もデータ現出動向に適合しているのか、絶えず状況を仕切り直ししながら考える思考法とも言える。

が、などと詰め込みすぎのきらいがあるかたちで書いてもイメージしづらいことか、とは当然に思う。

であるから、できるだけイメージしやすいようにつとめて書きもすれば、そう、物事を出来るだけ分解・単純化して説明するとのやりようにて書きもすれば、（直上言及のこと、ベイズ確率論では従前〔事後確率〕の新規〔事前確率〕への採用をなすとのことをなすとのことについては）、次のような説明がなせもするところである。

第一。

「ベイズ確率論にあつて顧慮される仮説(ら) —Hypothesis の頭文字を取つてのHら— に各々いかような意味での違いがあるのか、とのことについてより説明する（仮説らH1とH2を分かつのは何か、とのことについてより説明する）。「確率論においての」仮説らに差異性をもたらすものは何かだが、一言で述べれば、それは尤度(ゆうど)設定である。たとえば、サイコロの目を振つた場合に1から6の目が均等に出る等々との予測に依拠して〔尤度(ゆうど)〕が設定され、その尤度の計数的ありよう「のみ」が(ベイズ推定における)仮説らの違いをもたらしているのかたちとなっている。

と、述べはしても、当該の分野に明るくはないとの向きにはまだ、お分かりいただけないかとも思う。

であるから、よりもつて噛み砕いて述べるが、まずもつて尤度(ゆうど/Likelihood)とは(先述なしてきたところでもあるのだが)不変の値としてあらかじめ仮説毎に設定されているとのものであり、数式上の要素としては、(つい先立つても述べているように)、

【 $P(D|H)$ (高校生程度の知識でその導出の仕方、数式上の意味合いを先程来、延々解説してきたとのベイズ推定一般公式である〔14〕式の右辺の一部を構成する $P(D|H)$)】

の部のことを指しもする、すなわち、〔尤度〕とは

【ある仮説(H)が成り立つ場合に特定データ(D)もがそれと紐付けられて具現化するとの条件付き確率】(極めて基本的なところからその一般公式(先述の〔2〕式)の意味合いを解説してきた条件付き確率)

のことを指しもする。

ベイズ確率論でそうした〔尤度〕に基づいて仮説の差異性が規定されているということについては、単純化させて述べれば、サイコロの1から6の目の出方(データたる【事象】)を問題視しているとのケースでは

【〔尤度〕としての $P(D|H)$ について〔 $P(\text{賽の目の出目が1であるデータ}|H)$ 〕から〔 $P(\text{賽の目の出目が6であるデータ}|H)$ 〕と計6通りのサイコロの目の具現化確率が仮説設定者によって各仮説毎によって主観であらかじめ事前に変化するものとして定められている】

とのその状況を指しもする。そう、たとえば、分析者が自儘(じま)に目分量で設定しての仮説1では1から6の目が均等に出ると推定しているから、〔 $P(\text{賽の目の出目が1であるデータ}|H1)$ 〕から〔 $P(\text{賽の目の出目が6であるデータ}|H1)$ 〕

の条件付き確率(1から6の目の出方にまつわっての尤度)のすべてが1/6に設定されている(換言すれば、「H1」との仮説がまず先に顧慮されるとの状況で個々のデータ(1から6の目の出方)が具現化する可能性たる $P(D | H1)$ は6通り設定されており、それらはすべからく6分の1であるとのかたちになる)とのことになる。対して、仮説2ではサイコロの2の目に微妙な重さの分銅が仕組まれている「かもしれない」から、2を除く1から6の目の出目の出方は13分の2、2だけ13分の3で出るといった(そうした按配でカモ(犠牲者)をひんむくために仕組まれた悪辣なイカサマ賭博での1から6の目の出方、計100%となる配分が決せられている)かたちでの「推定」をなしての尤度設定をなす。

この段階ではまだイメージいただけないかもしれないが(後に仮説の尤度設定のなしよう、そしてその具体的計算での利用については細かくも解説する)、ベイズ推定の分野ではそもそも仮説らが純・計数的に定義されている(計数的に硬直的にあらかじめ定義されるもそれら仮説らについては(計算リソースが追いつくのなら)10個でも1000個でも何個、仮説設けてもいい。なんにせよ[14式]でもってしてデータの捕捉動向([事象]の捕捉動向)に応じて死に堪える仮説ら、検討に値する仮説らの違いはおのずと次第次第に見極めがついてくる(その見極めプロセスがどういうものになるのかについても具体的手法込みで後に呈示する)―」。

第二。

「上に言及のように(ベイズ確率論にみる)仮説らは(尤度というものに応じて)計数的に定義されているわけだが、そう、(ベイズ確率論にみる)仮説らはあらかじめ分析者に指定されているそちら尤度($P(D | H)$)に応じてのみ独自の顔を持つものとして定義されているわけだが、要はそうした仮説らのうちどれが「現実世界のデータの束のありよう」に一番近しくもあるのかの近似的判断がなされる、それこそが「ベイズ推定」となるとのことである。

サイコロの出目に関しての仮説定立があらかじめ予測されてなされている状況であれば、何度もサイコロを振り続ける、でもってして、1から6の目の出方との事象がどういう傾向で現実世界にあって出るかに応じてどの仮説が適切なのか(言い換えれば、どのような尤度が現実的状况に最も近似的に設定されていると言えそうなのか)が計られるわけであるが、といった思考プロセスの中ではデータは連続して顧慮されることが「はなから折り込み済み」である、というより、データは連続して顧慮されなければ、仮説らの現実的近似性度合いの検討は「はなからなせない」との発想がある。

データは次々と入力されてこそそのものとして顧慮されるとは述べるが、そも、そこにいうデータとは何か。詰まるところ、それは【事象】である。

その【事象】が明確に定義されていることが
[単純な離散的なる対象を想定しての確率論]
を展開するうえにあってマスト、不可欠であるとは本稿の先立っての段でも詳述しているわけだが(そもそもサイコロの目が1から6であること自体があやふやならば本稿で取り上げるような確率論の対象にはならないとは細かくも先立って解説しているとおりである)、そのありようが明確に定義されている場合、【事象】たるデータが次々と特定されてくる状況では仮説の検証プロセスにあって先立ってのデータの事後確率を次のデータ特定時にあっての事前確率に代入すると発想・思考法が「自然なるもの」として出てくる。

聡い向きはここまでの話でお分かりいただけていることかもしれないと思うのだが、

(先立ってもそうした言われようを引いているところとして)

[トマス・ベイズとの18世紀の牧師、次いで、フランス人数学者ラプラスが強力な

単純ながらも強力な数式を案出した]

とのことは詰まるところ、そういう発想・思考法とワンセットとなる(とも本当にベイズ確率論が理解できている向きには分かりもする)ところとなりもし、そのことは各仮説が硬直・不変なるものとして尤度に(先述のように)規定されきったものとして存在しているとのその中で、硬直不変なるそれら仮説がいかに現実的状况に合致しているのか、合致していないのかについて先行するデータらの具現化度合いから絶えず修正されて考えられていきもする、仮説の存立性向にまつわる目分量は(仮説らそれ自体が硬直的なものであっても)絶えずもってして「状況修正」されていくとのことと同義となる 一再三再四述べるが、死に絶える仮説(適切な尤度設定をなしていない仮説)と検証に値する仮説(より現実的状况に近いと判じられる尤度設定をしている仮説)の見極めがついてくる。

先立って導出方法と数式の意味合いを段階的に解説していったベイズ推定の一般式([14]式)の左辺に相当する $P(H|D)$ 、すなわち、
[Dの具現化狀況が確実にH成立に直結している確率](DならばHの条件付き確率)

は

[あるデータの顧慮時にあつての「事後」確率 ー特定データ入力時に「事後的に」導出されてくるとの各々の仮説成立にまつわつての確率ー]

を厳として意味するのだが、その事後確率の導出によって各々、硬直的に存在しているとの仮説らのありえやすさのトレンドに対する目分量は絶えず変化していくことになる (:数式に依拠して表現すると、 $P(H_x)$ 、「一連のデータの outf の配分比率たる尤度によって各々ユニークさを呈している」仮説 H_x らが「一連のデータ」の背後にあつて成立していると「事前に」見繕われているとのその確率 $P(H_x)$ が変化するととの狀況が具現化する)。

サイコロの目が2ばかり出てきたらば、サイコロの目に分銅など入っていないと想定する H_1 の成立可能性は次第次第に縮減していく、そして、サイコロの2の目に分銅が仕込まれていると考える H_2 などの別仮説の成立見込みが相対的に多め多めに見られていく、そういうことになるとのことである(ここで理解しているとの向きには思い出していただきたい、理解していないとの向きにはそこからして確認いただきたいところでもあるのだが、本稿で既に意味合いを解説しているベイズ推定における一般式である [14]式、[事後確率] (と呼び慣わされてのもの) をそれひとつで右辺に置く同式は[複数ある仮説のうち、どの仮説がどのような比率で成立しやすいのか、成立しにくいのかとの総計 100%を想定しての中での相対的仮説成立度合いにまつわる式]となる)。

そうもした各仮説のトレンド変化を適正に一連のデータ(がそこにあつてそれが次々と具現化しているとのありよう)に即応するようにするととの自然なる数式処理とは何かだが、それはなんのことはない(だが、しかし、ベイズ確率論の本質をなすところでもある)ところとして先立って特定しているデータ(事象)に対応するものとして導出されてきた $P(H|D)$ ー意味合い・導出の仕方を先立って詳説してきた [14]式の右辺に相当する事後確率ー の値を次いでデータ(事象)を特定してそれを顧慮する際に $P(H)$ の部に代入する、すなわち、(先立ってのデータに照応するものとしてもたらされていた各仮説成立度合いにまつわつての)「事後確率」を(次データ顧慮時にあつての各仮説の成立度合いにまつわつてのいわばもってして逐次「更新」されていく「事前」確率である) $P(H)$ ー(修正される方向性にある)仮説 H の成立確率を意味する要素ー に代入するとのこととなす、との数式処理となる(具体的にどういう数式処理をなすかは本稿のこれ以降の段で微に入つてのかたちで詳述する)

以上のような数式処理 —先立ってのデータ入力時に(ベイズ推定の一般公式から)事後的に導出された事後確率(P(H | D))の値を次いでもってしてのデータ入力時にあつての事前確率(P(H))の部に代入するとの数式処理— をもってして日本語では俗に

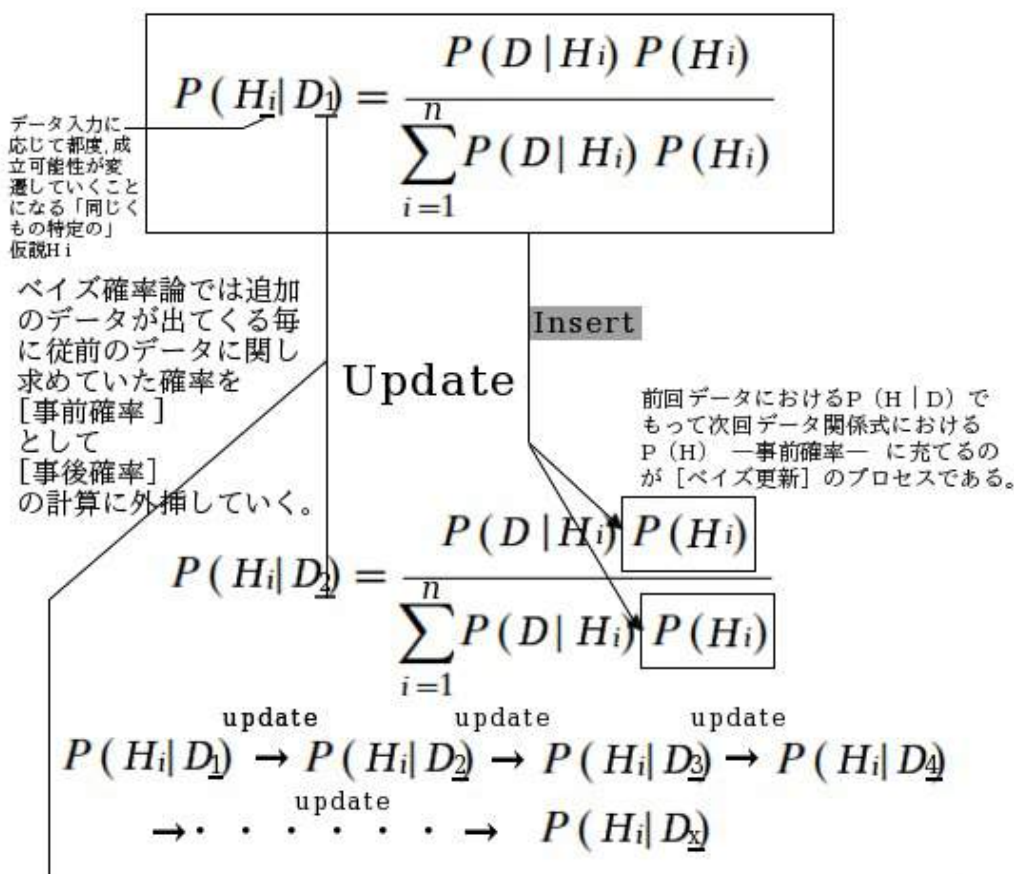
[ベイズ更新]

のプロセスと言う。

式にあつての P(H | D) および P(H) の意味が分かっているならば、また、ベイズ確率論というもので顧慮されている状況が次々と投入されるデータに応じての確率のありようであるとのことが分かっているならば、以上のプロセスは数学的操作として理に適っていると理解出来るようなものとはなる (ただし、直上、いささか細々とした説明をなした同じくものことについては理解なそうという意思がある向きにあつても具体的な例示をなさねば理解に窮するところがあるか、とも当然に思う。そもそも、どういうやりようをなすのか漠然としすぎている、計算モデルからして分からない、と。であるから述べておくが、以上の理念、ベイズ更新の理念を体現しての具体的確率計算がいかようになるものなのかはこれよりの確率モデル呈示の過程にてきちんと入念に呈示する所存である)。

上に言う [ベイズ更新] についてどういう数式上の処理をなすかは取りあえずもってしての下の図を参照されたい。

ベイズ確率論のアドバンテージ (利点) となっている
[ベイズ更新] のプロセスとして



データ1に続いてデータ2が得られた際、従前データ1にあつて計算された $P(H | D)$ を事後データ2の計算にて(公式に見る) [事前確率] として再利用するの事をなす (ここではデータの数は任意の x とする)。よって、(データの性質が厳密に現実を反映したものであるのならば、そして、データに対して「仮説毎にて」想定されている割合が無茶なものではないならば、との留保条件を顧慮したうえで) ベイズ確率論は現実的状况に何が仮説として最も合致しているのか、すなわち、データの背後にある [原因] が何なのか、との確率論的な詳細を示していくことになる。

上掲図にてまとめたような式で「ベイズ更新」のプロセスが発生するからこそベイズ確率論は「強力な現実分析ツール」と見られているし、そうしたものとして利用され、

[標的となる搜索物の所在地絞り込み]

[スパムメール振り分けに対するメールフィルター]

などの分野で成果をあげている。

同じくものことを示すところとして次の先立っての引用(出典(Source)紹介の部 114)にての引用)を繰り返そう。

(直下、2008年に世に出た英国の数学者兼サイエンス・ライター、そして、スタンフォード大の影響力ある職員でもあるとのキース・デブリンの手になる The Unfinished Game: Pascal, Fermat, and the Seventeenth-Century Letter that Made the World Modern (邦題)『世界を変えた手紙 パスカル、フェルマーとく確率の誕生』(岩波書店刊行)の130頁から133頁よりの「再度の」引用をなすとして)

保険などに確率論を応用する場合の未来予測は、本質的に同じタイプのものがたくさんあるとき、その平均の意味で信頼できるに過ぎない。しかし今日の我々は、また別の方法で確率論を用いている。つまり、我々が「ある特定のできごと」を予測しようとするとき、その予測が正しい可能性を測ることである。この発想が実りをもたらすにはコンピュータの発展を待たねばならなかったが、今日のリスク管理社会へ向け、この問題を解決するための最後の数学的ステップは、とてつもなく強力で巧妙な数学公式だった。この公式は、趣味として数学を研究していた、一八世紀イギリスの目立たない長老派牧師によって開発された。トーマス・ベイズは一七〇二年にロンドンで生まれた。

…(中略)…

今日では、ベイズは輝かしい数学的精神の持ち主として知られているが、存命中には一つも独自の数学論文も出版しなかった。(死後に私的なノートが発見され、そこには確率論、三角法、幾何学、方程式の解法、級数、微分学、電気学、光学、天文力学についての研究が残されていたのである)。

…(中略)…

ベイズの方法は「新たな」仮説の確率をどのように計算するかを教えるのではない。むしろ、新たな情報をもたらされたときに確率を「更新する」方法なのである。まず、ある仮説Hの確率を表す値から出発する。この数値を仮説Hの「事前確率」と呼ぶ。いま、ある新しい情報Eがもたらされたとき、Hの確率を更新するための計算をする。この新しい値を「事後確率」と言う。この更新は、ベイズの公式(ベイズ則)として知られる数学的公式に適切な値を代入することで得られる。事前確率は当て推量や見積りでよい。新しい情報が十分に与えられれば、ベイズの更新手続きによって、もっと正確な確率が導かれる。ベイズの方法を繰り返す用いることで(普通はコンピューターを用いる)、相当に乏しい事前確率からでも、毎回新しい情報が得られるたびに、十分に信頼できる事後確率へと変換していくことができるのだ。(とは言え、この方法もコンピューターに頼り過ぎることへの、有名な金言から免れているわけではない。つまり、「ガベージイン、ガベージアウト(ゴミを入れれば、ゴミが出てくる)」。

この方法は(最初の)事前確率である「種」となる初期値に依存するので、ベイズの方法が知られてから二〇〇年もの間、統計学や確率論分野の人々からほとんどに無視されてきた。しかしながら、一九七〇年代からは、強力なコンピューターによって膨大な量の情報を繰り返して処理できるようになり、しばしば最初の事前確率の不正確さを乗り越えられるようになったため、一般的に広ま

るようになった。

(邦訳版よりの再度の引用部はここまでとする 一※一)

(※上にては「新たな情報 E がもたらされたとき、、、」と表記されているが、本稿では[新たな情報 D]との表現を用いている)

上だけで納得いただけないかもしれない。そこでベイズ更新を利用するがゆえにベイズ確率論は強力な力を有している. . . .、そのことに通ずるところの[ベイズ確率論の応用]にまつわる引用を(いまままで未言及のソースより)続けてなすこととする。

(直下、上著作と同じくもの著者たるキース・デブリンらの手になる THE NUMBERS BEHIND NUMBE3RS : SOLVING CRIME WITH MATHEMATICS (邦題)『数学で犯罪を解決する』(ダイヤモンド社)よりの引用をなすとして)

サイト・プロファイラーは一九九九年にアメリカ国防総省の認可を受けて、統合脆弱性分析ツールという企業規模のテロリスト管理システムを開発した。

…(中略)…

標的候補の弱点を理解して攻撃に対する防御法を知るには、一般的に様々な専門家によるインプットが必要だ:物理的セキュリティ専門家、エンジニア、科学者、軍事参謀。一つか二つのリスクを理解して対処できる専門家なら多少はいるかもしれないが、何百というリスクの構成要素をすべて同時に処理できる人間はいない。解決法はコンピュータで数学的手法を実行することにある。

サイト・プロファイラーは——ある程度の精度で——巨大リスクのポートフォリアを推定し、ユーザに対処を可能にしてくれる数多いシステムの一つだ。これはベイズ推定(ベイズ・ネットワークという形態で提供されているが、これについては後述)を使って以下の異なるデータソースからの証拠を統合している:分析モデル、シミュレーション、歴史的データ、ユーザの判断だ。一般的にこのようなシステムのユーザ(専門分析班であることが多い)は、たとえば軍事施設の強み情報などを、税金の確定申告書類作成ソフトに似た質問・回答のインターフェースで入力する(サイト・プロファイラーは本当に確定申告ソフトのターボ・タックスのインターフェースをモデルにしている)。ソフトウェアは集めた情報から、その施設の様々な強みと脅威を示す数学的オブジェクトを構築して全体の状況をベイズ・ネットワークとしてあらわし、ネットワークを利用して様々なリスクを評価し、最終的に脅威リストを出力する。各脅威は可能性、結果の重大性などに基づいて数値で順位付けされる。ここで興味があるのは、こうしたシステムの「中身」である数字だ。

(以上、引用部とした 一※一)

(※1 ちなみに上の書籍『数学で犯罪を解決する』の原題にみとめられる THE NUMBERS BEHIND NUMBE3RS の[NUMBE3RS]とは米国でロングランを記録した数学者を主人公に据えての犯罪者追い詰めテレビドラマである(「滑稽」かつ「悪辣」と受け取れるのは、(高度な数学を利用して犯罪者を追い詰めるのは良いとしても)、この世界では[より下等な数学](たとえば本稿で意図して用いているようなそれ)の応用だけで悪質性が示せるような重要なことが「悉く無視されている」節があるとのことだが、そうした申しようの至当性については本稿での従前の段での危難にまつわる指し示し内容および本稿の続いての段を検討いただきながら判じていただきたいものである))

(※2 上にての引用部にて引き合いになされているベイジアン・ネットワークとは [ベイズ確率論] に有向グラフ(ある方向性が矢印付きで示唆されている対象同士の関係性を示す図、とても単純にとってもらって構わない)の観念を差し挟んでの分析手法のことを指す(これよりなす本稿での分析では往々に人工知能の処理構造に用いられているそちらベイズ・ネットワークの概念は顧慮しない)。そうしたベイジアン・ネットワークを利用して取得情報の連なり度合いから[脅威]を察知、細かくもその脅威の程度を示すソフトを米国保安筋(度々、茶々を入れるようで何ではあるが、何に対する保安か、[やらせの花戦争]に対する保安ならば、「内側に敵がいるのに外側に敵を無理矢理、求めさせられてのこれ実に醜悪な[人形]劇にすぎない」と受け取れるところようなどとなるだろう)が用いていると上にては表記されているわけである。

本稿ではそうした、[資金や人員が大量に投入されての大規模システム]など用いなくとも[[選り分けた情報]で[危険の度合い]を呈示する手間暇かからぬ原始的仕組み]をこれより呈示することとする。

につき、メソッドは多くの人間が簡単に思いつけるところでも、そも、メソッドに流す情報それ自体について

「[情報処理]の初期手順の時点でけつまずく、[重要な事実]らを[事実]として認識することが「できない」(あるいは認識しては「ならない」)ような状況を押つけられている」

「無意味(非本質的)あるいは信憑性が薄いとの情報ばかりが却(かえ)って重大な情報として処理されるようにこの人間世界ができあがっている」

とのことが散見されるもするとのことが人類の問題捕捉に付きまとうところとしてあるように受け取れる、そのようにここでは 一要らずもがな、とも思うのだが一言及なしておく(:Dataとして nonsense なゴミ、狂人や詐欺師の類に由来する捏造事物としてのゴミが横溢している中でそうした取り合に足らぬものばかりを [云われたようにしか情報処理しない語りあうに値せぬ人形のような空っぽの存在]が分析しようともゴミしか出てこない. . . 先にての引用部で言及されている [Garbage in, Garbage out]とは単純化して述べれば、そういうことでもある。それを言ってしまうと、『下らぬ人形劇・猿芝居の類が魂(本当の人間としての内面の実質)のない政治屋などに演じられ、それを同文に実質が欠を見ているマス・メディアおよびその関係者なぞにさも大事のように報じさせしめているのが家畜小屋であろう』などと斜に構えて見てとれるようなことがこの下らぬ世界にはなくもない、そうも見えもしてしまうのだが、それについては取りあえず置く))

さらに事後確率を事前確率にすげ替えることに特質を持つとのベイズ確率論が威力を発揮することにまつわる引用を続ける 一法廷にてもベイズ確率論が意味なすものとなると認知されていることについて英文 Wikipedia 記事を引いておく。

(続けて、直下、英文 Wikipedia [Bayesian inference] 項目にての現行記載内容よりの原文引用をなすとして)

Bayesian inference can be used by jurors to coherently accumulate the evidence for and against a defendant, and to see whether, in totality, it meets their personal threshold for 'beyond a reasonable doubt'. **Bayes' theorem is applied successively to all evidence presented, with the posterior from one stage becoming the prior for the next.**

The benefit of a Bayesian approach is that it gives the juror an unbiased, rational mechanism for combining evidence.

It may be appropriate to explain Bayes' theorem to jurors in odds form, as betting odds are more widely understood than probabilities. Alternatively, a logarithmic

approach, replacing multiplication with addition, might be easier for a jury to handle.

If the existence of the crime is not in doubt, only the identity of the culprit, it has been suggested that the prior should be uniform over the qualifying population. For example, if 1,000 people could have committed the crime, the prior probability of guilt would be 1/1000.

(補いもしての訳として)

「ベイズ推定 Bayesian inference は陪審員が被告にまつわる証拠を正確に見積もるのに用いられるもの、そして、概して[「合理的な疑いを越えて」の法理]の陪審らにおける個人的見極めに通ずるとの事になりうるものである(訳注:ここで引き合いに出されている[「合理的な疑いを越えて」の法理]、すなわち、beyond reasonable doubt の法理がいかなものかだが、端的に述べれば、それは検察側は被告が有罪であるとの点について合理的な疑いを差し挟む余地すらないとのレベルにまでの証明をなすことを要されるとの法理のことである)。ベイズ理論は「事後」(事後確率の顧慮)が「次なる事前」(事前確率の顧慮)のステージに至るとのありようで所与のすべての証拠に適用されえる(“Bayes' theorem is applied successively to all evidence presented, with the posterior from one stage becoming the prior for the next.”)。

ベイズ確率論を用いての分析の利点は陪審員に

「偏見から解放され、合理的に証拠を結合してものを見るメカニズム」

を提供することである (本稿筆者が強くも述べておきたいところとしての訳注:ただし、法廷に供されるデータ属性それ自体が犯罪的挙動にて捏造されたものならば(たとえサイコロを振って偶数が出ているのに関わらず奇数が出ているといった捏造データが捏造証拠としてあたかもそれ自体が実体のように呈示されているのならば)、先にその引用部にも取り上げられているように Garbage in, Garbage out「ゴミを入れてもゴミしか出てこない」との問題は残置し続けることになる)。

賭け事のオッズ比は確率論の話より幅広くも理解されているわけだから、ベイズの公理を陪審員らに説明するには「オッズ」形態にて説明するのが有効かもしれない。加重しながら(確率を)重複計算で示していくとのやりように代えての代替的やりようとして対数概念に着目しての訴求手法もまた陪審員らには扱いやすいことか、とも思われる。

犯罪の存在それ自体については疑いようがなしとのこと、犯人の特定化に至るとのことのみが問題であるのならば、(容疑の)対象となる人間の数を凌駕する(打ち消しの反対効力として凌駕する)との事前確率が導出されるべきであろうとの提案がなされもしてきたところである。たとえばもし 1000 人の人間が犯罪を犯しえたというのならば、犯人特定の計算のための事前確率は 1000 分の 1 以下となろうとのことである」

(訳を付しての引用部はここまでとする —※—)

(※上の引用部に見る物言いは(この世界にて数式を振りまわす類に往々にみとめられる兆候であるとは思うのだが)重要なポイントがひとつ抜けている、それゆえに、「極めて危ういものである」と筆者は見ている。

すなわち、

[当局から呈示された証拠が捏造を完全に排除しうるのか]

とのこと、そして、

[事実認定をなす人間らに予断の虜(とりこ)となるような事情がないか否か]

とことが何ら顧慮されていないとことがそうである(たとえば、当局に悪辣な[無罪化工作]や[冤罪化工作]を仕掛けるような犯罪的紐帯、カルトや秘密結

社などでもいいが、その成員が紛れ込んでいたりしてその影響力を行使し得ないか、あるいは当局そのものが人形遣いに操られての人形劇の舞台装置のように用いられている力学が何ら介在していないか、そういうことを一切、顧慮に値しないとの[絶対的善性]の前提を置かないと、そう、法廷にて提出される当局由来の証拠が全て完全に信用に値すると述べられるとの前提を置かないと、法廷におけるベイズ主義も画餅と成り下がらう、というわけである(そも、法廷にあって[事実を見る能力すらない判断者]しかそこにいないのならば裁判など[愚劣なショー]になりうるとのことに通底するところでもある)。尚、筆者は[入力データ捏造]にまつわる問題がベイズ確率論にも伴うことをよく「識っ」ているから、本稿この段での確率論分析では[第三者が容易にその通りであると確認できる公衆に流布されている事実(文献的事実、そして、映像記録上の事実)の類]しか(「何故、そうしたものと言えるのか」との論拠を呈示しつつも)本稿では問題にしないこととしている)

直前の部をもってしてベイズ確率論がいかように現実的局面で利用されている・利用されうるかの紹介、そう、[従前データ投入時に求められた事後確率を次データ投入時の事前確率に代入するとのかたちで実行されるベイズ更新]にまつわる言及を含んでの現実世界でのベイズ確率論の利用のされよう(それは先立って導出方法・数式の意味性を延々解説しているとの [14] 式をいかに応用するのかとの話ともなる) にまつわる紹介を終えらるるとし、これ以降は

[ここまで解説してきたベイズ確率論モデルに基づいて本稿でいかなる分析モデルを構築していくかの話に入る]

ことにする。

さて、ここで繰り返すが、

$$P(H_x | D) = P(D | H_x) \times P(H_x) / (P(H_1) \times P(D | H_1) + P(H_2) \times P(D | H_2) + P(H_3) \times P(D | H_3) + \dots + P(H_n) \times P(D | H_n)) \dots [14]$$

との [ベイズ推定における一般公式] に関し、その意味は一言で述べれば、

[仮説(ないし特定の事柄が起こる原因)が H1 から Hn までの n 個存在していると考えられる場合において特定のデータ (D; 単純化すればサイコロの目の出目などの厳密に状況分類付けされた事象) が与えられた際、そのデータ取得時にあって(H1 から Hn のうちの) 特定の仮説 Hx がデータと確実に紐付いたものとしてそこにあるとのその確率を示す式] ([Dならば Hx の条件付き確率] とのことではいわばもってしての D の具現化の背後にある実体的状況の成り立ち具合にまつわる確率)

となるとのことを説明してきた (: 「分かりづらい」と思われる向きもあろうが、といった向きにおかれて(一点目として)いかに[11]式から[14]式を導き出せるかについての先行するところの解説を検討いただき(それ以前に遡るところとして理解が及んでいないのならばそれ以前の部の解説の読解をあわせてなすとのかたちで検討いただき)、かつ、(二点目として) [14]式の意味合いを病因検査の事例などの絡みで図示しながら解説しているとの先立っての段の内容を検討いただければ、「14 式の意味合いが何故そうしたものとなっているのか」、理解に窮する・難渋するとのことは基本的にはないことか、とも思う —— 本稿では確率論の基礎の基礎から入るとの式をとっての仔細なる解説を付しての段階的説明方式を採択しもし、のような式は[高校生程度の知識とこれまた高校生程度の(知識を活用するうえでの) 知能程度があれば理解に窮することはないようにしているとのものである(と任じている)]つもりではある。 だが、しかし、理を解するとの作用不全が [意志の欠如] にあるところが大きいと考えてもいる人間として申し述べれば、いくら単純明朗なる段階的解説を心がけても理解する気がそもそもない、生理的に数学的な話は NG であるとの向きに対しては理解は求められないとも見ている。 といった申しよう、「水を飲む気がない馬を水場に連れて行こうとする行為には意味がない」などと神経を逆撫で

するような典型的な言い様で教育現場などで引き合いにだされる申しように通ずるところの口上を「敢えても」前面に出したうえで書くが、「であっても (そういう性向の読み手に拒絶反応が引き起こされてしまっても) 問題にならない」と見ている。 というのもここでの話は念には念を押しての付録としての位置づけを与えているものにすぎない、そう、 大学で用いられる基礎的数学の話を高校生レベルに完全に落とし込んでの[付録]と位置付けてのこの部(本稿本筋についての訴求を既になし終えもしている段階で[付けたしの部]として付しているにすぎないと断つての部)は理解する気がないとの向きを想定して書き記しているのものでは「そもそもない」、そして、計数的な話・初等数学にまつわっての話について理解する気がない向きらに対して「も」既に[おのが足下状況を示すだけのことら]はここまでの段にあって十二分に(数式言語ではなく)日常使用言語のみで摘示してきたとの認識が筆者にはある、であるから、ここでの話についての理解を無理に求める必要も無いと判じているのである (などと述べもする筆者は人間が生きることそれ自体に向き合うだけの意志の力を有しているのか有していないのか、(重要なるところでの)意志の欠にいざなわれた歪なる者らで満ちあふれている節ある[このような世界]でも試したい、それ自体も窮理の対象としているとの人間でもある))——)。

上にて [14] 式(の意味)への振り返りをなしたうえで書くが、先立っての段までにて取り上げてきた [ベイズ更新]が同じくもの [14] 式に適用されていくとのケース — 繰り返すと先行して求めた [事後確率 $P(H|D)$] が「続いての」計算で [事前確率 $P(H)$] に代入されていくとのケース— というのは

[複数のデータの顧慮]

が問題視されているケースであり(かする程度に先述したことである)、それはとりもなおさず、

[複数のデータの背後に特定の仮説がそれらデータに関わるものとして存在していることを顧慮している — 複数のデータの投入に応じて仮説 H_x らの成立可能性の変動を検討していく—]

とのケースでもある (ベイズ推定の本質的発想法に関わる重要なところである)。

それについて

『データが投入されることで(問題となる)仮説 H_x の成立可能性が変動していく? どういうことなのだ?』

と思う向きもあろうことかと考えるが (それが前提知識を有していない健全な頭脳の働きか、とも思う)、についてはほんのつい先立ってサイコロの目を例に出しての(不十分ながらも)端的なる説明を講じたところとなり、繰り返すも、そのこと、複数のデータの投入に応じて仮説 H_x らの成立可能性が変動するとのことは

(具体例でもって後にどういうことか指し示すところとしてそれは)

「仮説 H_x (ら) というものが「計数的に定義されている」、そう、データの性質を色づけするなどしてあからじめ分類してその可能性配分を定めるといったかたち「でのみ」定義されているとの純・計数的なるものであることと表裏をなす」

とのことでもある (：仮説などと述べれば自然言語で書かれたものを想起するかもしれないが、そも、自然言語は計数分析では、否、ありとあらゆる科学的分析で意味をなさない。であるから、ここでの数式計算にて問題視している仮説も黑白明確化する数によって「のみ」定義されているものとなる(これはある意味、当たり前のことなのだが、知識水準の意味で文系人間などと世間的には分類されている向きらを想定しての話をなしているとお断りしておく)。たとえば、である。極々単純化させて述べれば、[特定の病気の陽性・陰性比率がまさしくも問題になっている]とのケース(仮説をいくつか定立して分析なそうとしているとのケース)にあって仮説 H_1 が [病気[陽性][陰性]の人間の割合を 3%、97%と見繕うもの]となっており、別の仮説 H_2 は [病気[陽性][陰性]の人間の割合を 10%、90%と見繕っているもの]となっている。 . . . それが数的に定義されての仮説というものである。そういうケースで次々と仮説と照らしあわせての検証に用いられるべくも与えられていくデータが病気 [陽性] [陰性] 患者らの膨大なるデータとなりもし、それら入力データに照応するものとして構築された各仮説らのうちのど

の比率的状況(尤度設定のありよう)が現実的状況に照応するものとなっているのか、詰まるところ、現実的状況にもっとも近似的なのかと見繕う、推し量るといのがベイズ推定が作用するとのケースなのである。などと細々と述べてもこの段階ではイメージしてもらいたいであろうから、「複数のデータの投入に応じての仮説 Hx らの成立可能性の変動(の検証)」とのことについては具体的計算事例を示していくこれ以降の内容でもってしてどういうことなのか、ご理解求めたい次第である)。

以上、くたくたと申し述べた上でここではこれよりのベイズ推定に関わるところとして仮説を「便宜的に」五つほど設定・呈示する。

具体的には

H1: 明らかに「執拗なる意志」の賜物がゆえに「特定の」事実関係が現出していると判じられる (判断の確度としては「明らかである」歴然としている」とのことで「強」)

H2: おそらく「執拗なる意志」の賜物がゆえに「特定の」事実関係が現出していると判じられる (判断の確度としては「おそらくそうであろう」)とのかたちで上の H1 に劣る)

H3: 「執拗なる意志」か「部分的思惑の発露」か「偶然」かにつき「予断・楽観的見方をまったく許さない」との灰色の状況に由来するものとして「特定の」事実関係が現出していると想定される (尚、「ことの本質」があまりに重要なものである、体系的に「皆殺しにするとのオペレーションの実施」にまつわる「執拗な」意思表示がなされてきたか否かに直に関わる、との領域では「予断・楽観的見方をなんら許さない」とのことはすなわち「危機の分析と回避」に全力を尽くして然るべき状態と同義であろう)

H4: おおよそ(おそらく)にして「部分的思惑の発露」ないし「極めてよくできた偶然」として「特定の」事実関係が現出していると想定される (判断の確度としては「おそらく」との程度で「弱」)

H5: ほぼ確実に「部分的思惑の発露」ないし「極めてよくできた偶然」として「特定の」事実関係が現出していると想定される (判断の確度としては「強」)

以上の仮説 1 (H1) から 仮説 5 (H5) までのいずれかの五類型に落とし込ん「でのみ」特定の事実関係 —データ(D)にまつわる事実関係— の確率論的枠組みを考えるようにする、そうした近似的ありようのみしか問題にしないように意図的にするとのスタンスをここでは採択する(話を極力単純化、「初等レベルの数学」に「簡易化」するために敢えてもってして擬制的にそうする)。

そうした「仮説ら(確率の枠組み)の擬制的モデル付け」に関してここでは

$$P(H1 | D1) + P(H2 | D1) + P(H3 | D1) + P(H4 | D1) + P(H5 | D1) = 100\%$$

$$P(H1 | D2) + P(H2 | D2) + P(H3 | D2) + P(H4 | D2) + P(H5 | D2) = 100\%$$

・

・

・

・

$$P(H1 | Dx) + P(H2 | Dx) + P(H3 | Dx) + P(H4 | Dx) + P(H5 | Dx) = 100\%$$

との見方を「便宜的に」なすこととする —H1 から H5 の和が四〇%でもいいのだが(それでもベイズ確率論を用いることができる)、ここでは H1 から H5 が全ての現実的状況を全てカヴァーしているとの見方を「便宜的に」なすこととする— (※)。

(※[無視して貰っても結構である]との話として:

ここでは H1 から H5 の仮説が

[D(データ)らにまつわる確率分布の全領域をカバーする]

と(擬制し)見ての話をなしている。

その点、たとえばもってして、

[H6: 予謀・策謀などの類は「絶対に」なく、完全に偶然と言い切れる]

といった仮説らも据え置くべきと受け取れもする。が、そうもしたことは(現実に「状況を楽観視出来ない」材料がある中で) [おおよそ断言できぬこと] との観点で近似的に H5 がそちらを包含するものとしての話をなすこととする。

また、さらに述べれば、本来的には [H1 から H5 の仮説] との 5 つ程度の仮説で [サイコロの目] のようにそれらしかないとの点 (スポット) として確率分布を語ることも妥当なることではない。単純なこととしてそうした状況を無理に煮詰めんとすれば、仮説を事細かに計数的定義なしながら 100 ぐらい定立してもよさそうなものと見えもする。しかし、に対しては現実的状况に近いと思われる仮説らをあらかじめ選定、スクリーニングを (表に出していない計算で) あらかじめかけもする (たとえば、限りなく成立ゼロパーセントに近い仮説らを端折って、そうならずに生き残るであろうとの仮説のみを顧慮対象とすることにする) とのかたちでの仮説呈示をなしているとのことで納得いただきたい (これは良心的やりようであるとも正しいやりようでもあるとは思わないが、説明の手間暇の問題を考えてそうもする)。

また、H1 から H5 の仮説らの中身は性質上、—「ほぼ」「多分」「ないし(あるいは)」との言いまわしを用いることで—「以上」「以下」の問題を扱うものら「でも」あるように見える (とのかたちにて定義している)。となれば、そう、「境界線がスポット(点)として存在しているわけではなく [連続] 関係の中で存在している」とのことの確率を考えているとのことで、といったものの確率分布というのは **Probability Density Function** [確率密度関数] として分析しなければならないのでは、より根源的なところで不適切 improper であるのでは、とも受け取られるところであろうかと思う (そも、離散的ではないデータを扱う統計学などにおいて積分のプロセスが重んじられるのはそうした確率密度関数との概念と不可分な関係にあり、といったことは多くの人間に周知されていることとなる)。だが、ここではそうした問題を全て端折りもして (何度も何度も断るが) [高校生でも理解出来るとの数式処理のみに落とし込んでの単純化・標準化で擬制的にそうもならず (equate) とのかたちでの話] をなすこと、斟酌いただきたい次第である)

向きによっては「説明するまでもないことをくどくどと . . . 」と受け取られるかもしれないが、上にて呈示の式 — $P(H1 | Dx) + P(H2 | Dx) + P(H3 | Dx) + P(H4 | Dx) + P(H5 | Dx) = 100\%$ との式 — の意味は

「D (D1 や D2 といったデータら) との情報 (事象) が提示されてきた時にそれらデータが仮説 1 (H1) から仮説 (H5) のうちのどれかに完全に紐付いている可能性 ($P(H1 | D)$ から $P(H5 | D)$) を顧慮し、[それしか現実的枠組みの顧慮対象は存在しないとのモデル] [それらで現実的なデータにまつわる仮説の枠組みをほぼ決せられもするとのモデル] で ($P(H1 | D)$ から $P(H5 | D)$) の和を — それら仮説に重複が無いとの想定の下でのこととして — [顧慮される状況の全て] と便宜的に見繕っている」

とのものとなる (: つい先立っての段にて述べた同趣旨のことをくどくも繰り返しておくが、どうして直上の如き観点が導出されるかは [陽性・擬陽性] [陰性・偽陰性] のデータの出方 — それらしかデータの出目がないとの出方 — にまつわる先立っての [11] 式に絡んでの話、そして、それに先行する解説を読み直していただければ納得はいくことかとは思。ゆえにそちらの方、乞う御検討、と申し述べて

おきたい)。

ここで繰り返すが、

H1: 明らかに [執拗なる意志] の賜物がゆえに「特定の」事実関係が現出していると判じられる (判断の確度としては [明らかである] [歴然としている] とのことで「強」)

H2: おそらく [執拗なる意志] の賜物がゆえに「特定の」事実関係が現出していると判じられる (判断の確度としては [おそらくそうであろう] とのかたちで上の H1 に劣る)

H3: [執拗なる意志] か [部分的思惑の発露] か [偶然] かにつき「予断・楽観的見方をまったく許さない」との灰色の状況に由来するものとして「特定の」事実関係が現出していると想定される (尚、[ことの本質] があまりに重要なものである、体系的に [皆殺しにするとオペレーションの実施] にまつわる「執拗な」意思表示がなされてきたか否かに直に関わる、との領域では「予断・楽観的見方をなんら許さない」のことはすなわち [危機の分析と回避] に全力を尽くして然るべき状態と同義であろう)

H4: おおよそ(おそらく)にして [部分的思惑の発露] ないし [極めてよくできた偶然] として「特定の」事実関係が現出していると想定される (判断の確度としては [おそらく] との程度で「弱」)

H5: ほぼ確実に [部分的思惑の発露] ないし [極めてよくできた偶然] として「特定の」事実関係が現出していると想定される (判断の確度としては「強」)

というのが問題視している仮説 H1 から仮説 H5 の概要となる。

では、上記のような仮説 H1 から仮説 H5 を

「計数的に」

そうしたものとならしめるとの事柄は何か。

それは仮説が [データの具現化度合い] (事象の具現化度合い) に対してどのような

[比率]

を顧慮しているのか、に拠る (物事を計数的かつ確率論的に考えれば、当然にそうした発想法に帰着するようなところである)。

そうも述べたうえで本稿では上に言う [データの具現化度合いの比率] に関わる場所としてまずもってデータとはなにか、問題となる事象とはどういうものなのかについて

[特定の事実関係]

を「厳密に属性・性質定義されている」手順 — 誰が見ても異動が生じえないとの「厳密に属性・性質定義されている」手順 — でもってしてそれらをデータ(事象)に昇華する (※)。

(※既に手順を先掲しているところなのだが、具体的には

[共有要素それ自体に基づいての分類]

[共有要素の個数に基づいての分類]

に基づき

[事実関係]

を

〔際立ったもの;恣意的関係性としての「黒さ」が窺われるもの〕
〔それなりに際立ったもの;恣意的関係性としての「灰色さ」が窺われるもの〕
〔ありふれたもの;恣意的関係性としての「白さ」が窺われるもの〕

のいずれかに分類するとのことをなす)

次いで本稿では【データ(D)として属性定義している事実関係】の比率を各〔仮説〕ら(ここではH1からH5と設定している)毎に割り振るとのことをなす(さらに後ほどにも言及するが、それは各仮説毎に総計100%となるデータの特定仮説の枠組みの中での配合比率、すなわち〔尤度〕の設定をなすとの行為である——先立ってLikelihood〔尤度〕というものについて〔ベイズ推定の主軸をなす[14]式〕にあつて(右辺一要素たる) $P(D|H)$ のことを指すと言及していたわけだが、それは $P(D|H)$ というものが本然的に〔「HならばD」の条件付き確率〕を意味することと表裏をなすことである(:これまた繰り返しての話ともなるのだが、 $P(D|H)$ が【まずもってそこにて成立している仮説・原因たるHがそちら仮説の方向からデータ(D)の確率的ありようを規定しているとのその確率】を数式として本然的に意味しもする中で特定仮説(任意のH)に紐付いたデータの比率、たとえば、「特定仮説にあつて」黒(のデータ;事象)は何%で出るのか灰は何%で出るのか白は何%で出るのか、との比率を設定するとのその行為、データ現出における尤(もつと)もらしさ :尤度を設定するとの行為は〔 $P(D|H)$ 〕を定義することでもつてして【仮説を他と区別するうえでのユニークさ】を定義する行為と同文のものとなる)——)。

以上のような手法(ベイズ推定の一般的手法)でこれ以降、問題視することになる仮説ら(H1からH5)は〔純・計数的に〕定義できるものとなる(同様の話は先にもなしたところだが、ここではH1からH5なるものを持ち出してのよもつて本稿やりように即しての話をなしていること、お含みいただきたい)。

端的に述べれば、ベイズ確率論における〔仮説〕とは

〔(特定のデータの配合比率としてあらかじめ設定した)尤度($P(D|H)$)〕の違いに応じて他の仮説らと差異化されてそこに存在しているとのものとなる〕

ということであり、本稿ではそうした仮説としてH1からH5なるものを用意し、に対する尤度設定のためにデータ(としての事実関係)の分類を厳密な式でなさんとしているのである(その点について理解を求めるべくものより微に入つての解説はこれ以降の段でも入念になす)。

まずもつて関係性判断の材料として現実世界の関連するところの情報を

〔「特定事実関係蓋然性「強」」の関係性判断材料(便宜的に〔判断材料 Black オプション〕と呼称する)〕

〔「特定事実関係蓋然性「中」」の関係性判断材料(便宜的に〔判断材料 Grey オプション〕と呼称する)〕

〔「特定事実関係蓋然性「弱」」の関係性判断材料(便宜的に〔判断材料 White オプション〕と呼称する)〕

の三者に「切り分けして見る」とのことを発想の根本に置く(先立って呈示し、かつ、直下再述する情報処理の切り分け手順、プログラミング可能である(すなわち魂の無き存在、機械にもやらせることができる)とのアルゴリズムを呈示しての切り分け手順で以上三パタンの【事象】を膨大数多なる不特定多数の情報から抽出することとする)。

そして、以上三つの関係性判断材料(データでもいいし、確率論の基礎たる事象と表してもいい)

をどのような割合で具備しているのかの比率をもってして直上にて呈示の仮説ら、H1、H2、H3、H4、H5 に差分を設ける（そうした方式は[典型的なベイズ確率論の分析手法]である）。

ここで表記の要素ら、

[「特定事実関係蓋然性「強」」の関係性判断材料（便宜的に[判断材料 Black オプション]と呼称する)]

[「特定事実関係蓋然性「中」」の関係性判断材料（便宜的に[判断材料 Grey オプション]と呼称する)]

[「特定事実関係蓋然性「弱」」の関係性判断材料（便宜的に[判断材料 White オプション]と呼称する)]

らが具体的に一体どういったものとなり、膨大な数多なる現実世界の情報からのその切り分け手順はいかようなものなのか、「実にもって細かくも先述なしていた」ところを端的に振り返ってみることとする。

まずもって

[「特定事実関係蓋然性「強」」の関係性判断材料（便宜的に[判断材料 Black オプション]と呼称する)]

とのところの中身だが、そちらについては —長くもなるところを細かくも再述するとして— 次のようなものとするべしと先に[手順]定義している。

([特定事実関係蓋然性「強」の関係性判断材料] (便宜的に [判断材料 Black オプション] と呼称する) の「厳密に定義しての」抽出プロセスを再掲するとして)

前提条件として [膨大な数多なるかたちで世の中に横溢している [情報]] のうち、

【 第三者が容易に確認出来る刊行物とのかたちで流通している日本語文字数換算にして1万字以上(英語単語数においては3000語以上)の過去の「文献」記録(古典から現代小説などフィクション、そして、特定のトピックについて解説を加えているノン・フィクションら問わずもの文物) 】

あるいは

【 第三者が容易に確認できる商業作品として市場市中に流通している過去の「映像」記録(映画作品など) 】

のいずれかにあたり、そして、先行して顧慮したものと差異が乏しい引用情報・仄聞(伝聞)情報を扱っているとの(公)文書を除外したもの

との条件に合致しているもののみを処理データと見る(それに適合しない情報(データ)は無視することとする)。 そのうえで、そうした処理データらのうち、特定の二つのもの(e.g.特定の文献資料、特定の映像作品といったデータら)から、

要素 A: [911 の事件の発生を事件発生前に先覚的に言及しているとの要素を具備している] (e.g. [911] と [双子] との言葉の双方と関わる式での描写を目立ってなしている) [ニューヨークのビル爆発とペンタゴンの攻撃を同時に描き、また、911 と親和性が高い数値列を用いている] 等等)

要素 B: [[ブラックホール] ないし [ワームホール] ないし (機序不明概念としての) [異界との扉] のどれか一つないし複数と明示的に結びつけられている] (e.g. [特定フィクションが [ワームホール] を登場させている] [特定ノンフィクションが [ブラックホール] を作中の主要テーマに据えている] 等等)

要素 C: [粒子加速器と結びついている] (e.g. [特定文物が粒子加速器に関わるものである] 等等)

要素 D: [アトランティスと命名されての概念と関わっている] (e.g. [特定フィクションが [伝説の沈んだ大陸アトランティス] に目立って言及している] 等等)

要素 E: [古のトロイアにまつわる伝承との結節点 (1. 【叙事詩『イリアス』というトロイア崩壊にまつわるプロセスを扱った古典の際立っての構成要素】あるいは 2. 【叙事詩『オデュッセイア』というトロイア崩壊にまつわるプロセスを扱った古典の際立っての要素】などとの結節点) を色濃くも具備している] (e.g. [特定フィクションが [トロイアの木製の馬] と直接的に結びつく作中要素を具備している] [特定フィクションが叙事詩『オデュッセイア』や叙事詩『イリアス』(の主要登場キャラクター) と結びついている] 等等)

要素 F: [ヘラクレスの 12 功業と直接的に関わっているとの特性を具備している] (e.g. [特定文物がヘラクレス第 11 功業と関わる] 等等)

要素 G: [爬虫類の知的異種族 ([聖書の蛇] や [悪魔] といった存在は除く) と濃厚に結びついている] (e.g. [特定フィクションが知能を持った蛇の種族を登場させている] 等等)

要素 H: [垣根としての五芒星・五角形と濃厚に結びついている] (e.g. [特定フィクションが垣根としての五角形を作中の重要要素に据えている] 等等)

要素 I: [キリスト教大系におけるサタンないしルシファーと「直接的に」結びついている] ([特定フィクションが聖書におけるサタンを作中にて悪役として登場させている] 等等)

要素 J: [聖書における禁断の果実と「直接的に」結びついている] (e.g. [特定フィクションが聖書における禁断の果実のことを扱っている])

のうち、[要素 A] あるいは [要素 B] のうちいずれか「と」その他の要素のどれかを兼ね揃えているとの [一貫性] が特定されもした状況にあるか (ただし [要素 B] に加えての [要素 C] あるいは [要素 H] のいずれかの相互具備についてはそうもしたことは「さもあつた」ことなので黒い関係性の判断のためのこの部では除外する)、ないしは、(同文に二つの処理対象データから) [要素 C], [要素 D], [要素 E], [要素 F], [要素 G], [要素 H], [要素 I], [要素 J] のうちの三要素を具備しているとの [一貫性] が特定されもした (ただし [要素 H] と [要素 I] と [要素 J] の三つの要素らは「ありふれたもの」としてこじつけがましさを排するために一要素しか共有データとして認めないように処理する) との事例にあつてのみ、

「特定事実関係蓋然性「強」」の関係性判断材料 (便宜的に [判断材料 Black

オプション]と呼称する)]

を切り分けられるとの処理手順を定める —※たとえば、特定映画作品(先行処理データ)にて「要素A」と「要素G」の具備の側面が見出されもしている中でそのまた別の特定小説作品(後続処理データ)にて「も」「要素A」と「要素G」の具備の側面が同様に見出された際にそうしたありようを二度と顧慮しない・できないとの条件の下で [「特定事実関係蓋然性「強」」の関係性判断材料(便宜的に「判断材料 Black オプション」と呼称する)]との事象を一単位抽出できるものとするとの手順を定める。

(表記のような関係性をいかようにして半ば(というより大部分)機械的に処理することができるのか、【アルゴリズム】との言葉で表せられるのかについては本書の先立っての段を参照されたい)

具体的には
本書 p.390 -
p. 392 を参
照されたい。

次いでもってして、

[特定事実関係蓋然性「中」の関係性判断材料(便宜的に「判断材料 Grey オプション」と呼称する)]

との関係性をいかように抽出するか^{の再述をなすこととする。}

([特定事実関係蓋然性「中」の関係性判断材料] (便宜的に [判断材料 Grey オプション] とする) の「厳密に定義しての」抽出プロセスを再掲するとして)

(先行する処理手順と全く同文に、^{とのかたちで共有されているものたる})前提条件として

【**第三者が容易に確認出来る刊行物とのかたちで流通している日本語文字数換算にして1万字以上(英語単語数においては3000語以上)の過去の「文献」記録(古典から現代小説などフィクション、そして、特定のトピックについて解説を加えているノン・フィクションら問わずもの文物)**】

あるいは

【**第三者が容易に確認できる商業作品として市場市中に流通している過去の「映像」記録(映画作品など)**】

のいずれかにあたり、そして、先行して顧慮したものと差異が乏しい引用情報・仄聞(伝聞)情報を扱っているとの(公)文書を除外したもの

をデータとして最低限の処理要件としている中で、なおかつ、

要素 A: [911 の事件の発生を事件発生前に先覚的に言及しているとの要素を具備している] (e.g. [[911]と[双子]との言葉の双方と関わる式での描写を目立ってなしている] [ニューヨークのビル爆発とペンタゴンの攻撃を同時に描き、また、911 と親和性が高い数値列を用いている] 等等)

要素 B: [[ブラックホール] ないし [ワームホール] ないし(機序不明概念としての)[異界との扉] のどれか一つないし複数と明示的に結びつけられている] (e.g. [特定フィクションが[ワームホール]を登場させている][特定ノン

フィクションが[ブラックホール]を作中の主要テーマに据えている]等等)

要素 C:[粒子加速器と結びついている] (e.g. [特定文物が粒子加速器に関わるものである] 等等)

要素 D:[アトランティスと命名されての概念と関わっている] (e.g. [特定フィクションが[伝説の沈んだ大陸アトランティス]に目立って言及している] 等等)

要素 E:[古のトロイアにまつわる伝承との結節点 (1.【叙事詩『イリアス』というトロイア崩壊にまつわるプロセスを扱った古典の際立っての構成要素】あるいは2.【叙事詩『オデュッセイア』というトロイア崩壊にまつわるプロセスを扱った古典の際立っての要素】などとの結節点) を色濃くも具備している] (e.g. [特定フィクションが [トロイアの木製の馬] と直接的に結びつく作中要素を具備している] [特定フィクションが叙事詩『オデュッセイア』や叙事詩『イリアス』(の主要登場キャラクター)と結びついている] 等等)

要素 F:[ヘラクレスの 12 功業と直接的に関わっているとの特性を具備している] (e.g. [特定文物がヘラクレス第 11 功業と関わる] 等等)

要素 G:[爬虫類の知的異種族 ([聖書の蛇] や [悪魔] といった存在は除く) と濃厚に結びついている] (e.g. [特定フィクションが知能を持った蛇の種族を登場させている] 等等)

要素 H:[垣根としての五芒星・五角形と濃厚に結びついている] (e.g. [特定フィクションが垣根としての五角形を作中の重要要素に据えている] 等等)

要素 I:[キリスト教大系におけるサタンないしルシファーと「直接的に」結びついている] ([特定フィクションが聖書におけるサタンを作中にて悪役として登場させている] 等等)

要素 J:[聖書における禁断の果実と「直接的に」結びついている] (e.g. [特定フィクションが聖書における禁断の果実のことを扱っている])

との要素らの内、

要素 A:[911 の事件の発生を事件発生前に先覚的に言及しているとの要素を具備している] (e.g. [[911]と[双子]との言葉の双方と関わる式での描写を目立ってなしている] [ニューヨークのビル爆発とペンタゴンの攻撃を同時に描き、また、911 と親和性が高い数値列を用いている] 等等)

との特定一要素を帯びている作品を二作品程、特定・捕捉した段階で、(それらに見る同じくもの共有関係を二度と顧慮することができないとの条件の下)、

[特定事実関係蓋然性「中」の関係性判断材料 (便宜的に [判断材料 Grey オプション] と呼称する)]

を一単位切り分けられると定めることとする。

またもってして、

要素 B: [[ブラックホール] ないし [ワームホール] ないし(機序不明概念としての) [異界との扉] のどれか一つないし複数と明示的に結びつけられている] (e.g. [特定フィクションが [ワームホール] を登場させている] [特定ノンフィクションが [ブラックホール] を作中の主要テーマに据えている] 等等)

要素 C: [粒子加速器と結びついている] (e.g. [特定文物が粒子加速器に関わるものである] 等等)

要素 D: [アトランティスと命名されての概念と関わっている] (e.g. [特定フィクションが [伝説の沈んだ大陸アトランティス] に目立って言及している] 等等)

要素 E: [古のトロイアにまつわる伝承との結節点 (1. 【叙事詩『イリアス』というトロイア崩壊にまつわるプロセスを扱った古典の際立っての構成要素】あるいは 2. 【叙事詩『オデュッセイア』というトロイア崩壊にまつわるプロセスを扱った古典の際立っての要素】などとの結節点) を色濃くも具備している] (e.g. [特定フィクションが [トロイアの木製の馬] と直接的に結びつく作中要素を具備している] [特定フィクションが叙事詩『オデュッセイア』や叙事詩『イリアス』(の主要登場キャラクター)と結びついている] 等等)

要素 F: [ヘラクレスの 12 功業と直接的に関わっているとの特性を具備している] (e.g. [特定文物がヘラクレス第 11 功業と関わる] 等等)

要素 G: [爬虫類の知的異種族 ([聖書の蛇] や [悪魔] といった存在は除く) と濃厚に結びついている] (e.g. [特定フィクションが知能を持った蛇の種族を登場させている] 等等)

要素 H: [垣根としての五芒星・五角形と濃厚に結びついている] (e.g. [特定フィクションが垣根としての五角形を作中の重要要素に据えている] 等等)

要素 I: [キリスト教大系におけるサタンないしルシファーと「直接的に」結びついている] ([特定フィクションが聖書におけるサタンを作中にて悪役として登場させている] 等等)

要素 J: [聖書における禁断の果実と「直接的に」結びついている] (e.g. [特定フィクションが聖書における禁断の果実のことを扱っている])

の各要素らのうちのいずれか二つの要素の共有関係が(顧慮されているデータとしての二つの文物より)ワンセット抽出された段階でそちら共有関係を再び顧慮できないとの前提の下に、同文に、

[特定事実関係蓋然性「中」の関係性判断材料]

を一単位切り分けられると定めることとする (但し留保条件として「要素 B と要素 C」「要素 H と要素 I」「要素 I と要素 J」の共有は「灰色」の判断材料に当たらず「あまりにもありふれたもの」として顧慮しないこととする —— 同処理手順は「切り分け手順 2」と重複するよう見られるかもしれないものであるものの、(「切り分け手順 2」から「切り分け手順 4」の対象外となっている)「要素 B と要素 H」の関係が顧慮されるものとなっている——)。

紋切り型・杓子定規的な物言いに響くものとなっている(ならざるをえぬ)とのここでの表記に対してさらにもって紋切り型・杓子定規的なものながらも「具体的」処理手順については本書 p.393 にて(機械的処理に適した)処理フローを記している。

何をもって[灰色判断材料]を特定・捕捉したとするかは直上にて表記したとして、次いで、

[関係性判断「白色」材料(目立っての因果関係が巨視的に認められないとの判断に資する材料)]

をいかように特定するか、下にその再述をなす。

(〔特定事実関係蓋然性「弱」の関係性判断材料〕(便宜的に〔判断材料 White オプション〕とする)の「厳密に定義しての」抽出プロセスを再掲するとして)

(先行する処理手順と全く同文に、とのかたちで共有されているものたる)前提条件として

【第三者が容易に確認出来る刊行物とのかたちで流通している日本語文字数換算にして1万字以上(英語単語数においては3000語以上)の過去の「文献」記録(古典から現代小説などフィクション、そして、特定のトピックについて解説を加えているノン・フィクションら問わずもの文物)】

あるいは

【第三者が容易に確認できる商業作品として市場市中に流通している過去の「映像」記録(映画作品など)】

のいずれかにあたり、そして、先行して顧慮したものと差異が乏しい引用情報・仄聞(伝聞)情報を扱っているとの(公)文書を除外したもの

をデータとして最低限の処理要件としている中で、なおかつ、

要素 B: [[ブラックホール]ないし[ワームホール]ないし(機序不明概念としての)[異界との扉]のどれか一つないし複数と明示的に結びつけられている] (e.g. [特定フィクションが[ワームホール]を登場させている][特定ノンフィクションが[ブラックホール]を作中の主要テーマに据えている]等等)

要素 C: [粒子加速器と結びついている] (e.g. [特定文物が粒子加速器に関わるものである]等等)

要素 D: [アトランティスと命名されての概念と関わっている] (e.g. [特定フィクションが[伝説の沈んだ大陸アトランティス]に目立って言及している]等等)

要素 E: [古のトロイアにまつわる伝承との結節点 (1. 叙事詩『イリアス』というトロイア崩壊にまつわるプロセスを扱った古典の際立っての構成要素)あるいは2. 【叙事詩『オデュッセイア』というトロイア崩壊にまつわるプロセスを扱った古典の際立っての要素】などとの結節点) を色濃くも具備している] (e.g. [特定フィクションが[トロイアの木製の馬]と直接的に結びつく作中要素を具備している][特定フィクションが叙事詩『オデュッセイア』や叙事詩『イリアス』(の主要登場キャラクター)と結びついている]等等)

要素 F: [ヘラクレスの12功業と直接的に関わっているとの特性を具備している] (e.g. [特定文物がヘラクレス第11功業と関わる]等等)

要素 G: [爬虫類の知的異種族([聖書の蛇]や[悪魔]といった存在は除く)と濃厚に結びついている] (e.g. [特定フィクションが知能を持った蛇の種族を登場させている]等等)

要素 H: [垣根としての五芒星・五角形と濃厚に結びついている] (e.g. [特定フィクションが垣根としての五角形を作中の重要要素に据えている] 等等)

の内、いずれかたった一つでもの共有関係が(顧慮されているデータとしての二つの作品らより)捕捉された時点でそれら関係性を二度と再び顧慮できないとの前提の下に

[特定事実関係蓋然性「弱」の関係性判断材料(便宜的に[判断材料 White オプション]とする)]

を一単位切り分けられるとのことにする(留保条件を付けもしており、要素 B —ブラックホール関連の要素— や要素 C —加速器関連の要素— にまつわる文物らを繋ぎ合せることは非常に易くなっている(ように見えます)ために、要素 B および要素 C 絡みの科学論文・研究機関発表文書などノン・フィクション分野のデータは敢えても除外するよう処理手順を定める(フィクションならば要素 B や要素 C の相互具備は認可される)。要素 B [[ブラックホール]ないし[フォームホール]のどれか一つないし複数と明示的に結びつけられている]および要素 C [粒子加速器と結びついている]と関わるものとして扱っている[ノン・フィクション]の数はそれこそ日々大量に「量産」されており、そのような[ありふれたもの]を意味判断の材料にすることはできないとの判断があるからである——極論すれば、「最近刊行された加速器実験関連の特定研究者論文と過去に刊行された加速器関連の解説書籍をつなぎあわせて、それらには要素 C の共有がみとめられる、だから、[恣意性][偶然性]の是非を決めるうえでの恣意性否定の論拠となるかたちで情報処理できる」とは妥当性の問題としてなせないだろうと判じられもするわけである——。また、同じくもの理由でここでは要素 I [キリスト教大系におけるサタンないしルシファーと直接的に結びついている]および要素 J [聖書における禁断の果実と直接的に結びついている](e.g. [特定フィクションが聖書における禁断の果実のことを扱っている]との要素「のみ」を具備しているだけのデータもフィクションであろうとノン・フィクションであろうと膨大な数存在し、日々大量に量産されているとことで間口のレベルで検討対象として除外する(ように情報処理のアルゴリズムを設定する)——尚、こちら白ラベルの導出手順にあっては White の抽出に一旦使われた作品に由来する要素は残余部があっても全削除するように手順定めもする(White は一つの関係性のセットから一個以上導出出来ないように手順を定める —データの過剰な重複顧慮を避けるために、である—)。

細々と長くもなりもした。以上のようにくどくも再掲したようなかたちでの切り分け手順にて

[「特定事実関係蓋然性「強」」の関係性判断材料(便宜的に[判断材料 Black オプション]と呼称する)]

[「特定事実関係蓋然性「中」」の関係性判断材料(便宜的に[判断材料 Grey オプション]と呼称する)]

[「特定事実関係蓋然性「弱」」の関係性判断材料(便宜的に[判断材料 White オプション]と呼称する)]

を膨大数多なる情報の海から抽出することとするように「厳密に」定めるとして、である(具体的処理フローは先行するところの具体的やりようの例示部やチャート図を参照のこと)。

以上の

[判断材料 Black オプション]

[判断材料 Grey オプション]

[判断材料 White オプション]

ら —社会の諸相から特定されてくる観測 [事象]— がそれぞれ現実世界に実体としていかほどまでに存在するののかについて「想定しての」仮説設定をなすこととする。

すなわち、その意味合いについて先述なしてきたところの、

[尤度(ゆうど)] (尤(もつと)もらしさの度合い、「計数的に定義される」仮説らにあつての色づけしてのデータらの存在比率)

にて決せられる、

[ベイズ確率論(におけるベイズ推定)における「仮説」]

のありように関わるどころとして[尤度]算定の材料に(直上にて言及の)[判断材料 Black オプション]、[判断材料 Grey オプション]、[判断材料 White オプション]の(予想される)割合を用いもし、それでもつて、

「どの仮説(のどの尤度)が現実的状況に(確率の問題として)もつとも合致しているのか」

とのことを探るべくもの計数的分析の足がかりとする。

尤度(Likelihood)たる $P(D|H)$ についての定義・解説は本書のここまでの段では p.448 から p.449、p.451、p.460 から p.461 にてなしているわけだが、一言で述べれば、 $P(D|H)$ とはベイズの一般公式における仮説 Hypothesis を仮説(H)とならしめる値、「特定仮説が真なれば、各データ(データ; 白・灰・黒と分類表記しているならば、データ「白」、データ「灰」、データ「黒」でもいい)はいかようなかたちで具現化しうるか」との点についての条件確率となる(条件確率の基本式の定義に忠実な言い分ともなる)。尚、一般的に【尤度】によって固有なものとならしめられる【ベイズ推定における仮説】においてどうしてそういう仮説設定を本事例でなしているのかについての思想的側面についてはこれより続いての段にて解説する。

以降、White オプションを[白]、Grey オプションを[灰]、Black オプションを[黒]と言い換えての話をなしていくとして、である。

白ラベルから灰ラベル、黒ラベルの順序で

[関係性(特定事実らの特定要素の共有とのかたちで機械的に導出される関係性)の自然にはおよそ成り立ちがたいとの度合い]

が高まっていくように筆者は具体的手順を定めもしている(黒に近づくほど、ラベルが貼られるうえで[より普通には成立し難い要件]を定めながらも、である)。

そう、[白]というラベルは

「そんなことが成り立っているのは当たり前、そこに関係性を求めるなどというのは牽強附会(こじつけ)であろう」

と思われるような事実関係に貼られるものとなり(「所定の要素らの中でアトランティスとの要素だけを具備している流通度の高い作品ら」を二作品ほど同定した段階「ですら」も[白]は1単位導出されてくる)、そうした白ラベルを貼られるとの関係性が数多もつてある中では(重複しないようにしながらも[白]の関係性をも包摂するようにラベル貼りの情報プロセスを定義している)[黒]や[灰]といった関係性が若干ながらあつたとしても深刻視するに足りないとの式を「仮説にての尤度設定では」取るよう

にすることとしている。

察しがいいとの向きは説明なすまでもなくご理解いただけることかとは思うのだが、そうもしたことを手前が本稿にてのベイズ推定でなしている思想（背景にあるコンセプト）というのは次の通りのものとなる—重要なところであるため、ここでの確率分析を理解する気があるとの向きにあってはきちんと押さえていただきたいところではある—。

「～との事実関係が存在しない」との[否定的事実]を証明することは難しい(衆をたばかるがごとくことをなしている著名な一部陰謀論者の「特定の」やりように反駁(はんぱく)してのことを書いていた本稿にての従前の段でも若干ながらそれについて取り上げていた **Probatio diabolica** [悪魔の証明] との概念に関わるところとなる)。

否定的事実の立証が問題になるケースでは万象無数に存在するデータの中から「～との事実がない」との否定的事実の証拠を全て呈示できるのか、できなかつたとの反論を許すことになりかねない。

そう、たとえば、エイリアンがこの世界に存在して「いない」—頭の具合のよろしくはないと受け取られるような例で恐縮ではある— との否定的事実を証明したい場合にエイリアンが存在して「いない」との証拠を全て挙げるができなければその証明は出来ないであろうといった話が持ち出されてきうる(エイリアンがいないとの1億の証拠を挙げ連ねようともエイリアンがいないとは言い切れないとの論法である)。

そこでそうもした否定的事実の問題にも関わりもする領域(たとえば人間を皆殺しにする意図などそこにありえないと見るといった否定的事実に関わりもする領域)にあつて曰く言い難しの困難をものともせずに「ありえること」と「ありえそうにもないこと」について複雑多岐なる事実関係の編み目を確率論的にとらえようとする際には、である。

本稿筆者としては

[～との事実関係を慮(おもんばか)るのはこじつけがましい]

との[こじつけ度合い]を増さしめる、

[問題となる事実関係と包摂・近接関係にあるが、ありふれている「疎」結合の関係性(の成立ケース)]

と

[問題となる多重的關係性(の成立ケース)]

の比率を「それら関係性に於いて近似的なところで」分析するとの視点を採択すべきであると見ている(悪魔の証明の議論を類似領域関連事物らの関係性の密結合・疎結合の問題から可及的に排除しようとの発想法、そうしたものは少し目端が利き、知識があるとの向きならば誰もが思い浮かべるようなやりようか、とは思うのだが、(寡聞にしてながら)、そういう確率の分析手法が高度なところで応用される傾向があるとは聞かない—同じくもの式は[魂のない機械という存在]風情にまるで人間であるかのような類推プロセスを模倣させるとの手法にも広く応用できそうではあるところながらも、そういうところでここでの単純な話を殊更に問題視しようとの向きはいないように見えもする。に関してはベイズ確率論に指向性をもたせてのベイジアン・ネットワークの理論が人工知能の研究領域でよりもって適正に用いられるところであるからそうもなっている(ここでの発想法の出番はあまりない)のであろうかと思われもするとのこともあるにはある(換言すれば、筆者は[普通なら、そういうことを取っても考えるような人間がいない]との[ニーズ]の伴わぬ話、[高校生レベルで十二分に足りる知識]でもってして[機械](エキスパート・システムなどと呼ばれてもう随分前から応用されてきたそれ)に[複雑な社会諸相に対応する推論]を(人力で介添えしながら)なさしめる仕組みの骨組みを構築するにはどうすべきかとの話をなしている、極めて原始的な式で[たかだかもの魂のない存在](機械)に[人間の真似事(擬態)]をさせるための

ここ線で囲っての部にあって

【本稿にあつてのベイズ確率分析における仮説設定そのありよう、というより、確率論展開とのその行為それ自体の背景にある基本的な理念】

について記述している。

であるから、本稿の確率論にあつての「大きくもの流れで」、(理解する気あれどものこととして)、筆者の言わんとしていることに不消化感をきたすようなことがあるのならば、とにかくもって、この部の内容をよくよく注視なして頂きたいものである。

原始的思考回路の構築]を試みるとどうなるのか、などとの(ニーズ伴わぬ)ことに通ずる話をくだくだ延々となしもしている、と個人的には見ている)——)。

たとえば、である。ある特定の執拗な意志表示が特定の事実関係の背後にあるのか、ないのか、の確率論的分析をなす際に

[ある特定の意図を表明しての意志表示が「ない」]

というある種、悪魔の証明の問題、否定的事実の問題に関わりうる反論が出てきうる (のような中で目立っての(否定にまつわる)証拠が現行なんら見受けられなくとも隠れたところにそれを示す強力無比なる否定的事実まつわる証拠や否定的事実まつわる事実関係が山とあったらばどうかの事を自身主張をさして論拠もなく押し売りしようとの類に主張されうる)と解されるわけだが、そうした確率論— 一下らぬ駄法螺を撒くだけの陰謀論者仕様のものではなく知的に真摯たらんとする人間が聴くに堪えうるとの確率論— を展開するうえで邪魔となりうる「悪魔の証明」の詭弁に通ずる反論者の言い分— (「問題となる意思表示などないということを証明する義務を負った俺たちはいわばもってしての[悪魔の証明]の責任を負った者らであり(意志表示などないというのは否定的事実だからである)、であるがゆえ、兆候の有無を無理矢理にでも主張しようとする、僅少なる材料でも重んじられるとの立ち位置にあるようであるそちらさんに対して確率論を展開するうえで圧倒的に不利な立ち位置に俺たちはあるのだ。だから、そちらさんの確率論的目分量などはなから取り合うに足りないね」等々の詭弁に通ずる反論者の言い分)— を計数的に十二分に退(しりぞ)ける手段として

[問題となることと相通ずるところとはなる、だが、それは関係性の薄さを示すものとなるとの事実関係] (「～といったことはやはりもってしてない」との否定的事実の[成り立ちやすさ]度合いを間接的・近似的に示すとの事実関係)

のことまでを「敢えても」視界に入れ、そうもした否定的事実関係と「極めて悪臭を放つ」事実関係— だが、だからといってそれ単体では否定的事実の主張を覆すには足らぬと敢えても紳士的に想定しての事実関係— の比率を顧慮することで、そう、[近似的に見繕っての否定的事実(～がないとの事実)の証左材料]と[肯定事実(～があるとの事実)の証左材料]の比率を顧慮することで

「いかにほどまでに特定の事実関係の有無が観念されるのか」

とのことを顧慮するとの確率モデルを構築することとするわけである(※)。

(※手前舌足らずゆえに意図せんとしているところが上手く伝えきれていないか、とも思うため付け加えて書くが、[悪魔の証明]云々といったもってまわったことを言わずにも極々単純化すれば、次のようなことである。

→

「墨汁・若干濁った水・透明な水を混ぜ合わせてその色の濃さがある一定以上を越えたらば、問題である— 清濁併せ呑むにしても許容限度を超えてそのまま呑み込んでしまうには「あまりにも」問題である— と判断する...」 ([墨汁]を「濃厚に疑わしいとの要素」とし、[若干濁った水]が「若干疑わしいとの要素」とし、[透明に見える水]が「無視してもよい程に疑わしくはないと(疑惑が関係性「疎」結合性、関係はあるも希薄であるとのありようがゆえに)楽観視できる状況にある要素」としての話として、である))

上の如き「核となる」思考法に基づきこれより、

H1: 明らかに[執拗なる意志]の賜物がゆえに「特定の」事実関係が現出していると判じられる (判断の確度としては[明らかである][歴然としている]とのことで「強」)

H2: おそらく[執拗なる意志]の賜物がゆえに「特定の」事実関係が現出していると判じられる (判断の確度としては[おそらくそうであろう] とのかたちで上の H1 に劣る)

H3: [執拗なる意志]か[部分的思惑の発露]か[偶然]かにつき「予断・楽観的見方をまったく許さない」との灰色の状況に由来するものとして「特定の」事実関係が現出していると想定される (尚、[この本質]があまりに重要なものである、体系的に[皆殺しにするとオペレーションの実施]にまつわる「執拗な」意思表示がなされてきたか否かに直に関わる、との領域では「予断・楽観的見方をなんら許さない」とのことはすなわち[危機の分析と回避]に全力を尽くして然るべき状態と同義であろう)

H4: おおよそ(おそらく)にして[部分的思惑の発露]ないし[極めてよくできた偶然]として「特定の」事実関係が現出していると想定される (判断の確度としては[おそらく]との程度で「弱」)

H5: ほぼ確実に[部分的思惑の発露]ないし[極めてよくできた偶然]として「特定の」事実関係が現出していると想定される (判断の確度としては「強」)

との H1 から H5 の仮説に対して [尤度] を定めての「計数的な」定義付けをなす —※—。

(※ベイズ確率論のことが分かっている向きにあつてはこれまた

「何を自明なることをくどくど…」

と思われるかもしれないが、誤解をきたす向きがいるかもしれないのでここでは以下のこと、一応、断っておく。

「ベイズ確率論における仮説設定を巡るありようはともすれば [話者・思索者が勝手に設定した確率] について云々する空論のように「勘違い」する向きもあるかもしれないようなのだが ([主観確率] subjective Bayesian probabilities との言葉でもってベイズ確率論を毛嫌にする向きがいるのはそういう勘違いされやすき状況も大きくも作用していると先述のことである)、[仮説] 設定が複数なされている中でそれら複数の仮説らのうち、どれがもっとも現実的状況 (より正確に述べれば現実的状況の一断面を示している [生(なま)のデータ] の実体的具現動向) に近いかの確率論的見極めは現実的状況に即応するかたちでなせるようになってい

たとえば、である。複数の仮説らが呈示されている中で仮説 A に対して仮説 B の方が現実的状況に「相対的に」どれだけ合致しているのか、そういうことまでは分かるようになっていというのがベイズ確率論となる —— ([それら仮説らが現実的状況に果たして合致しているような尤度設定・事前確率設定をなしているものなのか] [与えられていくデータによって仮説らの確率分布がいかように推移していくものなのか] は要精査事項となるわけだが、とにかくものこととして、である) ——)

以上、仮説の計数的定義を支える基本的思考法に言及したうえでこれより具体的 [尤度] 設定をなすこととする (Likelihood [尤度] がいかようなものかお忘れなし、把握していないとの向きにあつては、そして、把握する意志があるとの向きにあつては本稿の先の段にての折々の解説部を参照いただきたい)。

まずもって

H1: 明らかに[執拗なる意志]の賜物がゆえに「特定の」事実関係が現出していると判じられる (判断の確度としては[明らかである][歴然としている]とのことで「強」)

にあつての尤度(の設定)だが、

[判断材料 Black オプション]

[判断材料 Grey オプション]

[判断材料 White オプション]

の比率をそれぞれに **Black オプション 3%、Grey オプション 4%、White オプション 93%**とここでは設定して
みることにする。

すなわち、仮説 H1 一明らかに[執拗なる意志]の賜物がゆえに「特定の」事実関係が現出していると断じられるような状況にあるとのことにまつわつての仮説— が仮にもし真実を穿っている(一連のデータらが導出されてくる背後にてそれこそが真実を穿っている)のであるのならば、特定の属性を帯びたデータら — [要素 A]から [要素 J] のいずれかを要素として確実に含んでいるとのデータら— から抽出できる黒・灰・白との事象らの現実世界での配分が Black,Grey,White それぞれ 3%、4%、93% の比率に近似したかたちで存在しているとのことになるとの想定をなす(たとえば、100 程の事実関係が実際に捕捉されている状況では、うち、3 は判断材料 Black と見られる事実関係、4 は判断材料 Grey と見られる事実関係、そして、内、97 は判断材料 White と見られる事実関係となりやすいとのことになるのかたちでの条件付けをなす —※—)。

※ 仮説 H1 のありよう設定にまつわつて断つておきたきこととして

上記のような仮説設定について二点ほど、断つておきたいところについて記しておく。

まず断つておきたきところの一点目として、である。

ここで

[判断材料 Black オプション]

が **4%程度存在している**ことをもつてして[歴然とした恣意性あり]などとするのは

「恣意と偶然の問題を判断するうえで妥当では無い」

と思われる向きもあるかもしれない。

といった向きを想定しもして次のことを(断つておきたき第一の点として)申し述べておきたい。

「[特定事実関係蓋然性「強」の関係性判断材料(便宜的に[判断材料 Black オプション]と呼称する)]を対象となるデータら — 膨大数多なる母集団規定しての情報 — から抽出する条件は「きわめて厳しく」設定している。

通常であれば、(火のないところでは煙は立たぬとの意味で通常であれば)、そのような関係性はまったくもつて導出されがたいのものとして(抽出の)条件設定をしているわけである」

具体的には —「実にもつてくどくもの」再度の繰り返し表記をなすが— 次のような条件を設定している。

[要素 A] から [要素 J] のうち、

要素 A [911 の事件を事件の発生前に先覚的に言及しているが如

き要素を具備している] (e.g. [[911] と [双子] との言葉の双方と関わる式での描写を目立ってなしている] [ニューヨークのビル爆発とペンタゴンの攻撃を同時に描き、また、911 と親和性が高い数値列を用いている] 等等)

要素 B [[ブラックホール] ないし [ワームホール] ないし (機序不明概念としての) [異界との扉] のどれか一つないし複数と明示的に結びつけられている] (e.g. [特定フィクションが [ワームホール] を登場させている] [特定ノンフィクションが [ブラックホール] を作中の主要テーマに据えている] 等等)

の内のいずれかと別の他の要素、[要素 C][要素 D][要素 E][要素 F][要素 G][要素 H][要素 I][要素 J] のうちのいずれか一つを共有しているとの作品らが 一対象としている母集団の中に 二作品存在している (ただし [要素 B] と [要素 C] あるいは [要素 H] の併存は「ありふれたものに近い」とのことで関係性顧慮しない) とのことで特定したときにはじめてもってして

[特定事実関係蓋然性「強」の関係性判断材料 (便宜的に [判断材料 Black オプション] と呼称する)]

を一単位抽出する

(あるいはもってして)

[要素 A] から [要素 J] の中であって

[要素 C] [要素 D] [要素 E] [要素 F] [要素 G] [要素 H] [要素 I]

の内、三つの要素を全く同じ組み合わせで共有している二作品を特定したときにはじめて

[判断材料 Black オプション]

を一単位抽出する (また、の際には要素 H と要素 I と要素 J の各要素は一要素しか共有データとして認めない)

以上のような極めて厳しい要件を充足しない限り、処理手順 (アルゴリズムのフローチャートを先に事細かに呈示しての処理手順) 上、

[特定事実関係蓋然性「強」の関係性判断材料 (便宜的に [判断材料 Black オプション] と呼称する)]

は導出できないとのかたちとしている。

対して、仮説 H1 一明らかに [執拗なる意志] の賜物がゆえに「特定の」事実関係が現出していると断じられるような状況にあるとのことにまつわっての仮説 一 では全体にあつての 93% 以上のパイを占めていることが仮説それ自体の十二分な説得力の保持にあたって求められているとの、

[判断材料 White オプション]

にあつては膨大な数多なる情報の中で

[要素 B] [要素 C] [要素 D] [要素 E] [要素 F] [要素 G] [要素 H]

のうち、僅か一要素でも具備している特定作品らが二作品ほど特定された段階でそこから White 要素にまつわる関係性が導出されるようにしている——留保条件の問題として[要素 B]、すなわち、[ブラックホール]ないし[ワームホール]のどれか一つないし複数と明示的に結びつけられているとの要素、および、[要素 C]、すなわち、粒子加速器と結びついていると関わるものとの要素についてはノン・フィクションのみ適合条件から除外する。[要素 B]および[要素 C]に関わる [ノン・フィクション] (科学論文・科学資料の類) の数はそれこそ日々大量に「量産」されており、そのような [ありふれたもの] を意味判断の材料にすることはできない(たとえば、粒子加速器にまつわっての説明案内資料などは日々量産されているであろう)と判じられるために、科学論文・プレゼンテーション資料や研究機関発表文書に見るノン・フィクション分野の文物は[要素 B]及び[要素 C]に関わるところでは除外対象とするわけである(ただしもってフィクションであれば、除外しない)。また同文の理由で[要素 I]および[要素 J]の共有関係(聖書の蛇に関わる文物が二作品特定されているといった共有関係)は諸共、除外事由としている——。

上のような条件では材料 [Black] が「極めて抽出しにくくなっている」ように見えもする中で材料 [White] は現実世界で「容易に抽出される」ところと普通には推し量れるようになっている(まったくもって想像に易いところとして、である)。

たとえば、である。

判断材料[Black]を一単位抽出しようとする試みでの思索者 (データさえあれば官僚機構にがんじがらめにされたデータ入力者でも機械でも代替できるがここでは四苦八苦して関係性を抽出しようとの[思索者]を想定するとして) は

[[911の先覚的言及をなしているが如く文物] にして、なおかつ、[アトランティス]に関わる文物]

との特性を有している作品を二作品、見つけだすことをなさねば、材料[Black]を特定したと言えないように条件付け設定をなしている中で、他面、同じくもの[思索者]は材料 [White] に関しては [アトランティス] との要素だけを含む作品を二作特定した段階で材料 White を抽出できる、というより、抽出せざるをえぬようにしている (たとえば、[アトランティスを舞台とした活劇小説やアトランティス伝説について扱ったノン・フィクション]と[アトランティスを舞台にした映画作品]が捕捉された時点で(それら作品らが要素[Black]の潜在的適合条件該当作品らとして処理フローの中に継続して置かれ続けていない限り) 材料[White]は自動的に必ず抽出されてくることになる)。

別の事例を挙げれば、である。同じく判断材料[Black]を抽出しようという[思索者]は、たとえば、

[[ブラックホールに関連する文物] にして、なおかつ、[アトランティス]に関わる文物]

との特性を有している作品を二作品、見つけだすことをなさねば、材料[Black]を特定したと述べられないようになっている中で他面、同じくもの思索者は材料[White]に関しては [アトランティスにまつわる作品] や [トロイア崩壊にまつわる作品] や [ブラックホールにまつわるフィクション]、そういった風に [アトランティス] [トロイア] [ブラックホール] といった要素を帯びている作品を二作品特定しただけで材料 White を抽出できることにしている (たとえば、トロイアの崩壊を主要テーマとする小説や映画

を二作品捕捉した時点で材料 White が抽出されてくることになる)。

さらに述べれば、である。本稿で実にもって細かくも

[プログラミング可能となるようなフローチャートで示してきた処理手順]

にあつては

「[複数要素を具備しているために材料 Black の抽出の検討対象となりもした作品] については [材料 Black に関連するところの要素ら] それ自体からは [材料 White の材料] を導出できないようにしている中でありながらも一端、材料 Black を抽出した「後」に Black 抽出判断に際しての相互具備特定対象となった要素「以外」の残余の部に関して材料 White 抽出に用いられる」

ようにまでしている (段階的処理手順ステップの問題としてそうも定めている)。

以上ここまで表記してきたような処理手順の問題から関係性の束、膨大数多に抽出可能であると想定される材料 White らを大量に含む関係性の束の中で材料 Black を示す事象が白・灰・黒よりなる全事象の中で数%でもであると想定されるような状況では根本的不自然性が際立つ、「不」自然であるとのこと、それがゆえに恣意性が際立つ。... そのようなことを見極めるうえでの [情報処理] のプロセスをここでは定めているわけである (100 ある中に黒が 3 つでもあれば、「それは明らかに異常である」との性質の話をここではなしているとしてもいい —— どんなに鈍感な者でも単純な条件付けの問題さえ理解していれば、そして、問題となる比率現出のありようがこの世界に仮に実際に具現化しているのだとすれば、(検討者にあつての脳機能が何らかの理由で破壊されている、正常に機能していないとすることがない限り)、そこら中で人間存在をどこにいざなおうとしているのか嘲笑っているとの力学の発露が見てとれるはずであろうとの異常異様な状況 ([執拗な恣意性明らかなる状況]) について「の」仮説の話をなしている、でもいい——)。

上が Black オプション 3%、Grey オプション 4%、White オプション 93% との設定をなしている仮説 H1 について断っておきたきところの第一点目 —「[判断材料 Black オプション] が 3% 程度で [歴然とした恣意性あり] とするのは恣意と偶然の問題を判断するうえで妥当と言えないのではないか」などとの申しようはナンセンス極まりないものであるとのことにまつわつての指摘 — となる。

次いで仮説の定立について断っておきたきことの「第二として」以下のことをも一応述べておく。

「(既に同じくものことを述べもしてきた中でくどくも書くとして) ここで問題視している仮説らは [現実的状况をそのまま正確無比に反映しているありよう] として問題視しているものではない。

各々仮説にあつての絶対的な妥当性を問題視しようとのもの「ではなく」、各々仮説が「相対的に」より楽観的な仮説あるいはより悲観的な仮説に対してどれだけありえそうなのか (あるいはありえにくいのか) とのことを所与のデータから計数的に示すためのものとどまる」

たとえばここでの H1 にスポットライトを当てるのならば、それがより [楽観的な見方] (H2, H3, H4, H5) に対して

[より問題となる見方]

としてどれだけありえそうなのか、あるいは、ありえなさそうなのか、そのことが「現実的データの現出具合に比して」計数的に示せもできるようになっているとのことがここで

の分析にての肝である。

以上をもって断っておきたきこととする。

続いて、

H2: おそらく[執拗なる意志]の賜物がゆえに「特定の」事実関係が現出していると判じられる(判断の確度としては[おそらくそうであろう]とのかたちで上のH1に劣る)

にあつての尤度だが、

[判断材料 Black オプション]

[判断材料 Grey オプション]

[判断材料 White オプション]

の比率をそれぞれに **Black オプション 1.5%、Grey オプション 3.5%、White オプション 95%**とのかたちで設定をなしてみることとする(黒色・灰色の要素の累計がアウトプットされてくる中での5%を占めると見繕う)。そう、こちら仮説H2が仮にもし真実を穿っている方向にあるのならば、現実的状况としてBlack, Grey, Whiteの関係性がそれぞれこの世界に1.5%、3.5%、95%の比率で存在していることになるとの設定をここではもちだしている。

さらに続けてもってして

H3: [執拗なる意志]か[部分的思惑の発露]か[偶然]かにつき「予断・楽観的見方をまったく許さない」との灰色の状況に由来するものとして「特定の」事実関係が現出していると想定される(尚、[この本質]があまりに重要なものである、体系的に[皆殺しにする]とのオペレーションの実施]にまつわる「執拗な」意思表示がなされてきたか否かに直に関わる、との領域では「予断・楽観的見方をなんら許さない」とのことはすなわち[危機の分析と回避]に全力を尽くして然るべき状態と同義であろう)

にあつての尤度だが、

[判断材料 Black オプション]

[判断材料 Grey オプション]

[判断材料 White オプション]

の比率について **Black オプション 0.8%、Grey オプション 1.2%**(黒色および灰色の比率が全体の2%)、**White オプション 98%**とのかたちで設定してみることとする。

すなわち、仮説H3が真実を穿つ方向にあるのならば、現実的状况として(他の類型は考えないとの単純なる全事象のモデルの中で)Black, Grey, Whiteの要素がそれぞれこの世界に0.8%、1.2%、98%の比率で存在しているとのことになるとのかたちでの条件付けをなす。

加えて、

H4: おおよそ(おそらく)にして[部分的思惑の発露]ないし[極めてよくできた偶然]と

して「特定の」事実関係が現出していると想定される(判断の確度としては[おそらく]との程度で「弱」)

にあつての尤度だが、

[判断材料 Black オプション]

[判断材料 Grey オプション]

[判断材料 White オプション]

の比率をそれぞれに **Black オプション 0.4%、Grey オプション 1%(黒色および灰色の比率が全体の 1.4%)、White オプション 98.6%**と設定してみることにする。

※注記として

膨大数多あるであろうと見てとれる(先述)との判断材料 **White** に対して判断材料 **Black** の比率が 0.4%、判断材料 **Grey** の比率が 1%、せしめて 1.4%が黒か灰かのどちらかであるとの状況設定をなしている時点で

H4: おおよそ(おそらく)にして[部分的思惑の発露]ないし[極めてよくできた偶然]として「特定の」事実関係が現出していると想定される(判断の確度としては[おそらく]との程度で「弱」)

との尤度としては現状認識が甘すぎることになりかねないか「とも」筆者は考えている(：[灰色判断の材料]である Grey オプションですらも、たとえば、[911 の先覚的言及をなしていると判じられる作品]が二作品ほど、そこになれば成立しないようにしている中で、である)。

だがしかし、

「ベイズ確率論における尤度設定の離隔をあまりにも大きくすると悪辣な確率論的詐欺をなすことに通ずる」

との認識が筆者にはあるからこそ敢えてもそういう尤度設定をなしている。

たとえば、である。尤度設定の問題として仮説 H1 では判断材料 **Black** の比率を 3%(100 の中に 3 つ)と設定している中で仮説 H4 にては判断材料 **Black** の比率を 0.01%(10000 分の 1)としたとしてみよう。

そのようなことをすると判断材料 **Black** を 2、3 同定した段階で事前確率(後にこちら事前確率の意味合いは再度説明する)をいかように低く見積もってもあつという間に H4 以下が計数的に全く成り立たない仮説であるなどとの計算結果が計算ソフト — 表計算ソフトのスプレッド上の高速演算 — より導出されてくることになる(それもそのはずである。表記のように仮に黒要素 0.01%などとの数値を採用すると[おおよそにして偶然であろう]との仮説(H4)に対して[恣意的である]との仮説(H2)では判断材料 **Black** が「150 倍も出やすい(1.5%と 0.01%の差分)」、[どちらかと言えば曰く言い難し]との仮説(H3)に対して「80 倍も出やすい(0.8%と 0.01%の差分)」などとのことになるがためにである — 黒が 3 ある状況で白が 100 ある状況での H1 の成り立ち易さと黒が 1 あり白が 10000 ある状況での H4 の成り立ち易さが近くもなっているとのありよう「とも」なる —)。

そうしたケースを想定すると 一仮にそれがよりもって現実的事例に当てはまっていたとしても 一 まともな確率論の計算は成り立たなくなりがちである(少なくとも仮説を 100 個ぐらい設けて仮説 1 と仮説 100 の離隔を問題にしているようなケースでなければ、である)。そうしたやり方で計算をなすとデータを入力していく過程で判断材料 Black のデータがいくつか出てきた段階で確率分布は明らかに H1 から H3 の三者が H4 以下のものらに対して優勢に傾き、一方で 0% (に限りなく近しくもある方向) と一方で 100% (に限りなく近しくもある方向) の方に話がすぐに分極化していくことになっている。といったケースでは特定の説を確率論との体裁でオブラートにして正しくも見せたいとの手合いの詐欺 Fraud が容易にまかりとおることになりうる(確率分布の計算は後に呈示するが、実際にベイズ確率論にて仮説検討をなした向きにはここで述べていることの機微が分かるようなところか、とも思う)。

であるから、ここ本稿では「大量のデータ入力」(実際に自分の示したい立場にとって反証となるようなところのダミーデータの大量投入もなす)にあつてこそ「意味ある試算」が出てくるとの中にあつても硬直的にはならぬ式での尤度設定での仮説の呈示を努めてなしている(よく見れば分かるが、筆者がこの段で呈示している仮説 H3 と仮説 H4 の間の判断材料 Black および Grey の比率として「微々たるところ」でたかだかおよそ 1.43 倍程度 (H3 にて Black 0.8% および Grey 1.2% の計 2%、H4 にて Black 0.4% と Grey 1% の計 1.4%) の差分しかないのかたちでの尤度設定をなしている)。

最後にもつてして

H5: ほぼ確実に「部分的思惑の発露」ないし「極めてよくできた偶然」として「特定の」事実関係が現出していると想定される(判断の確度としては「強」)

にあつての尤度だが、

[判断材料 Black オプション]

[判断材料 Grey オプション]

[判断材料 White オプション]

の比率をそれぞれに Black オプション 0.2%、Grey オプション 0.6% (黒色および灰色の比率が全体の 0.8%)、White オプション 99.2% と設定してみることにする。

(まとめて述べれば、[歴然たるかたちで執拗な意志表示の賜物として一連の特定の事実関係が現出している]とのことを想定する仮説 H1 では全体の 7% が黒・灰の領域となっているとの予測をなし、[ほぼそうであろうのかたちで執拗なる意志表示の賜物として一連の特定の事実関係が現出している]とのことを想定する仮説 H2 では全体の 5% が黒・灰の領域となっているとの予測をなし、[「執拗なる意志」か「部分的思惑の発露」か「偶然」かにつき「予断・楽観的見方を許さない」との状況に由来するものとして「特定の」事実関係が現出している]とのことを想定する仮説 H3 では全体の 2% が黒・灰の領域となっているとの予測をなし (そういう状況が背景としてあると考えてそれに照応してのモデルを構築し)、[関係性具現化状況が「おそらく」「部分的思惑の発露」ないし「偶然」に由来する]とのことを想定しする仮説 H4 では黒・灰が全体の 1.4% であるとの予測をなし、そして、[関係性具現化状況が「ほぼ」「部分的思惑の発露」ないし「偶然」に由来している]ことを想定する仮説 H5 では全体の 0.8% が黒・灰

の領域となっていると予測をなすのかたちでの見積もりを採用していることになる)

直上までにてどういう尤度設定をなしてきたのか、下に [整理のための図表記] をなしておく。

ゆうど 設定 [Likelihood (P (D | H))] setting

	P(D H1)	P(D H2)	P (D H3)	P (D H4)	P (D H5)
black	0.03 (3%)	0.015 (1.5%)	0.008(0.8%)	0.004 (0.4%)	0.002(0.2%)
white	0.93 (93%)	0.95 (95%)	0.98 (98%)	0.986(98.6%)	0.992(99.2%)
grey	0.04 (4%)	0.035 (3.5%)	0.012(1.2%)	0.01 (1%)	0.006(0.6%)
sum	1. 0(100%)	1. 0(100%)	1. 0(100%)	1. 0(100%)	1. 0(100%)

※ここでは上にて表記の通りの [尤度] 設定にて仮説H1から仮説H5の計数的定義付けをなすこととする。

"Basic" Mathematical Approach

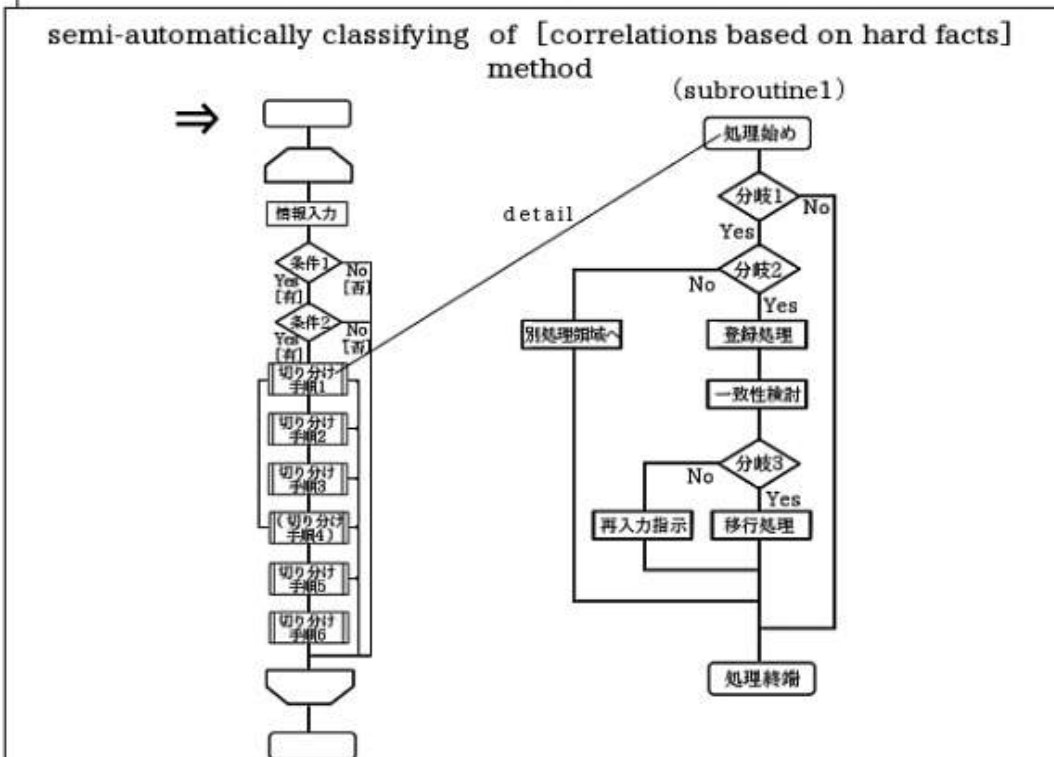
Bayesian approach

$$P(H_i|D) = \frac{P(D|H_i) P(H_i)}{\sum_{i=1}^5 P(D|H_i) P(H_i)}$$

H ⇒ Hypothesis
D ⇒ Data

H₁, H₂ = [the existence of long-term Premeditation (& extermination notice)] Hypothesis
H₃ = ["Its hard to say" state (grievous Grey Zone)] Hypothesis
H₄, H₅ = [(probably) only co-Incidental] Hyphotesis

(仮説H1からH5の意味・特質については先にて解説を講じている)



※本稿では [堅い事実群から導き出された関係性] からのいかようにして「機械的に」黒・灰・白の属性 (ベイズ確率論の仮説のありようをその比率が決する属性) を データとして抽出するか、その厳密なるアルゴリズムの提示・解説にも当然に努めている。

以上のような尤度設定にて[仮説]の計数的定義をなしてきたわけであるが、これよりは本稿ここに至るまでに具体的にその切り分け手順を指し示してきた[事象ら] — [事象]とは(くどくもなるが)[サイコロを振って1や6の目が出たとの試行と紐付いたイベント]のことを指すわけであるも、本段では[[はきと存在していることを示しもした複数の情報]より「機械的プロセスにて導出した」関係性判断材料 Black,Grey,Whiteら]のことを指す — の配分比率にて区別を設けているとのそれら[仮説]らの[成り立ち度合い] (各[仮説]が他の仮説に対してどれだけ尤(もっと)もらしく成立しうるかの割合) がいかように呈示されるのか、現実的データの捕捉動向に即応していかように確率的比率(確率分布)を変化させながらも呈示されるのか、具体的な計算手法を紹介することとする。

さて、仮説 H1 から H5 の成り立ち度合いについて呈示する前に述べておきたいのだが、つい先立っての段で解説を試みてきたようにベイズ確率論では

[**ベイズ更新のプロセス** — 先行する試算にて導出された事後確率 ($P(H|D)$) を [修正された確率] として後続する式の事前確率 ($P(D|H)$) の部に順次代入していくとのやりよう —]

が何よりも重視されているとのことがある。

ベイズ更新のプロセスによってすぐ直前のデータに対する事後確率導入のための式たる、

$$P(H_x|D) = P(D|H_x) \times P(H_x) / (P(H1) \times P(D|H1) + P(H2) \times P(D|H2) + P(H3) \times P(D|H3) + \dots + P(Hn) \times P(D|Hn))$$

の解 $P(H|D)$ が続いての事後確率導入のための式の事前確率 ($P(D|H)$) の部に代入されるとのプロセス、延々と続けられもするそうした、

[[直前式にての事後確率(左辺)の導出] \Rightarrow [続いてデータが与えられた際の新しい式 — これまた左辺に事後確率を置いての式 — にあつての事前確率(右辺の一部)に対する直前式の解答(事後確率)の代入] \Rightarrow …… のプロセス]

から漸次、追加されていく入力データに各々別々同じくものものとして紐付けられた仮説らの成り立ち度合いがより [現実的状況] (集積されていった過去のデータの比率のありよう) に近似していくというのがベイズ確率論 — 広くもベイズ推定 ([Bayesian inference]) と言われているやりよう — にあつての主たる特色をなすところとなっている。

【ベイズ更新】とは何かについてはその意味合い、著名さ、効用について本稿の p.449 から p.459 にて解説を講じている。

そうしたベイズ推定では

[**事前確率**] (ここでは検討対象となる仮説を H1 から H5 との格好で設けているので [事前確率] である $P(H1)$ から $P(H5)$ は、たとえば、9 番目のデータ $D9$ の入力時にあつては $P(H1|D8)$, $P(H2|D8)$, $P(H3|D8)$, $P(H4|D8)$, $P(H5|D8)$ とも定義されてベイズ更新プロセスにて更新されていく [先データ入力時の事後確率] ともなる)

の**初期値**を設定することから話がようやとはじまる。

その点、一般にベイズ推定を用いての確率分析では [初期確率]

の指定 — ここまで解説のために筆を割ってきた[ベイズ更新]のプロセスにより、データ取得に応じて次第次第にその確率が変遷していくとの $P(H)$ 、仮説 H が成り立つ状況の初期確率にまつわたつての指定 — に際して各仮説間の可能性は平等であるとの推定の下で話をはじめるときらいもある (:たとえば、H1 から H5 から仮説を設けているのなら、 $P(H1)$ から $P(H5)$ の各仮説にまつわたつての初期成立確率を極めてアバウトに 100%を五等分、20%ずつと見繕うといった式の分析がなされるきらいもある — そうしたやりようを理由が十分に捕捉されていない、であるからこそもつての [不十分理由の法則] であるなどとよくも表現されるところである。対しては、そうした馬鹿げている程にアバウトである (と受け取られてしまう) ようなやりようでもデータが大量に与えられもすれば、次第次第に実態に近付

いていくとの発想法が背景にある—)。

初期確率を平等に配分するような傾向もある中で、だが、本稿での分析にあつては [初期確率] については我々人類にとって望ましくはないとの結果招来に通ずる仮説の成立可能性ほど成立可能性を低くも見繕うとの式を「敢えても」とることとする (反言すれば、H1 を最も剣呑なるものとして呈示している中で H1→H2→H3→H4→H5 の順序で初期確率を高くも見繕っていくとのことをなす)。

具体的にはまずもつて**仮説 H1** —Hypothesis1:明らかに[執拗なる意志]の賜物がゆえに「特定の」事実関係が現出していると判じられるとすところの仮説— が真なる原因としてある (他の仮説らと [こちら立てばあちら立たず] の排他的関係にある真なる原因としてある) がゆえに関連するところの情報 (データ; 事象) が出てきもすると見繕う上での可能性 (にあつてのデータらの具体的捕捉の前にまずもつて設定しておく「初期状態の」事前確率) についてはその話柄の異常性に鑑(かんが)みて、

[0.3%] (1000 に 3 つ、日本には嘘つき・ほら吹き^{の類}の言いようの伝をして「たった千に三つの真実のもの」との語感で千三せんみつと称する伝統があるわけだが、それに倣わせてもらつての確率設定とする)

と見繕うこととする — 世間一般の— 普通人は「人間とは皆殺しにするとの帰結を伴つての効用・プランある中で[畜舎](無痛収容所でもいいが)でだまくらされながら馬草を与えられてきた家畜のようなものである」などとの話を聞けば、条件反射的に[ほら吹きや狂人の戯れ言・よまい言]の類にしか受け取らないであろう (実際に世間にはそういうことを見巧者にはすぐにそれとわかる幼稚極まりない宗教的話柄で口に出す類がおりもし、といった輩らは大概、ねじが何本かとんでしまっている、左巻きにもほどがあるとの見るからにおかしな類であることが多い。自身、おかしいと受け取れようことを敢えても口に出すのにもやぶさかではないとの者として寛容を旨としたいとの筆者のような人間でもウェブ・ブラウジングなどしている中で、あるいは、街頭で宗教的な活動をしているそういう筋目の終末論者の類を見ると(その者らが[中身が空っぽの役者]であると分かつたうえでも)吐き気を催したくなるころとして、であるから、ここでは(かぐわかしいところが実際にある中でも)千三つ、1000 に 3 つとの初期確率設定を敢えてもなしている — 。

また、**仮説 H2** —Hypothesis2:おそらく[執拗なる意志]の賜物がゆえに「特定の」事実関係が現出していると判じられるとすところの仮説— が真なる原因としてある (他の仮説らと [こちら立てばあちら立たず] の排他的関係にある真なる原因としてある) がゆえに関連するところの情報 (データ; 事象) が出てきもすると見繕う上での可能性 (にあつてのデータらの具体的捕捉の前にまずもつて設定しておく「初期状態の」事前確率) は (H1 と同文に) その異常性に鑑みて、

[0.5%] (200 に 1 つ)

と見繕うこととする。

さらに**仮説 H3** —Hypothesis3:[執拗なる意志]か[部分的思惑の発露]か[偶然]かにつき「予断・樂觀的見方をまったく許さない」との灰色の状況に由来するものとして「特定の」事実関係が現出していると想定されるとすところの仮説— が真なる原因としてあるがゆえに関連するところの情報 (データ; 事象) が出てきもすると見繕う上での可能性は

[9.2%]

と見繕う (こちら 9.2% という数値が『果たして謙虚 modest なるものなのか?』とのことについては下に断り書きを付しておく) 。

続いて**仮説 H4** —Hypothesis4:おおよそ(おそらく)にして[部分的思惑の発露]ないし[偶然]として「特定の」事実関係が現出していると想定されると見る仮説— が真なる原因としてあるがゆえに関連するところの情報がでてきもすると見繕う上での可能性 (初期確率) は

[30%]

と見繕うこととする。

そして、**仮説 H5** —Hypothesis5: ほぼ確実に[部分的思惑の発露]ないし[偶然]として「特定の」事実関係が現出していると想定されると見る仮説— が真なる原因としてあるがゆえに関連するところの情報が出てきもすると見繕う上での可能性(初期確率)は

[60%]

と見繕うこととする。

(以上をもってして各々を和して 100%となるとするとの初期確率にまつわる「便宜的」設定を(話を単純化するために)採用する —※—)

※事前確率における初期的設定についての断り書きとして

直上までにそうもしたセッティングの言明をなしてきたところの、

H1: 明らかに[執拗なる意志]の賜物がゆえに「特定の」事実関係が現出していると判じられる(判断の確度としては[明らかである][歴然としている]とのことで「強」) ⇒ **初期設定確率 0.3%**

H2: おそらく[執拗なる意志]の賜物がゆえに「特定の」事実関係が現出していると判じられる(判断の確度としては[おそらくそうであろう]とのかたちで上のH1に劣る) ⇒ **初期設定確率 0.5%**

H3: [執拗なる意志]か[部分的思惑の発露]か[偶然]かにつき「予断・楽観的見方をまったく許さない」との灰色の状況に由来するものとして「特定の」事実関係が現出していると想定される(尚、[この本質]があまりに重要なものである、体系的に[皆殺しにするとのオペレーションの実施]にまつわる「執拗な」意思表示がなされてきたか否かに直に関わる、この領域では「予断・楽観的見方をなんら許さない」とのことはすなわち[危機の分析と回避]に全力を尽くして然るべき状態と同義であろう) ⇒ **初期設定確率 9.2%**

H4: おおよそ(おそらく)にして[部分的思惑の発露]ないし[極めてよくできた偶然]として「特定の」事実関係が現出していると想定される(判断の確度としては[おそらく]との程度で「弱」) ⇒ **初期設定確率 30%**

H5: ほぼ確実に[部分的思惑の発露]ないし[極めてよくできた偶然]として「特定の」事実関係が現出していると想定される(判断の確度としては「強」) ⇒ **初期設定確率 60%**

との[事前確率](何度も記しているように[与えられた[データ]に基づき]、漸次、事後確率が外挿されていく中で変更されていくとのP(H)の部の「初期」設定が[謙虚ならざるもの](持説強弁の徒のやりように近きもの)と述べられるか、たとえば、

「断じてそうではなかろう」

と申し述べておきたい(H3の確率を9.2%と見繕うやりようはフェアと言えるのか否か

とのことを考えながらも書くところとして、である)。

元より「事前確率の初期設定」は追加のデータが与えられていくにつれ、修正されていくものなのだが、データが与えられる前から「最も危険である(ものとして枠組みを決めもしている)」H1 —[恣意]の賜物がゆえに「特定の」事実関係が現出していると判じられるとの Hypothesis1(仮説1)— が0.3%程あると見繕いもしていること、また、明確な断定は出来ないが予断を許す状況ではないとする Hypothesis3(仮説3)について9.2%であるの見繕いもしていることについてすら断じて「行き過ぎ」にはならぬとのことがこの世界にはある。

それについて書いておくと、

H1 から H5 の仮説の枠組みを決めるとの尤度設定の基礎材料となっている判断材料 Black, Grey, Whiteら「事象」の切り分け・捕捉の方式からして —それはそれで「機械的導出方式」としては愚拙なりに出来る限り多くの関係性判断を包摂するやりようを取ったつもりなのだが— 現実にも存在している「問題となる」関係性らを数多無視しているとの仕様のものとなっている、それゆえに、[恣意性]がそこにあるとの判断材料を見逃すようなところが「強くも」ある

とのものとなっていること「も」ある。

先にて表記をなしてきたところの「要素 A」から「要素 J」、

要素 A:「911 の事件の発生を事件発生前に先覚的に言及しているとの要素を具備している」(e.g. 「[911] と [双子] との言葉の双方と関わる式での描写を目立ってなしている」[「ニューヨークのビル爆発とペンタゴンの攻撃を同時に描き、また、911 と親和性が高い数値列を用いている」等等)

要素 B:「[ブラックホール] ないし [ワームホール] ないし(機序不明概念としての) [異界との扉] のどれか一つないし複数と明示的に結びつけられている」(e.g. 「特定フィクションが [ワームホール] を登場させている」[特定ノンフィクションが [ブラックホール] を作中の主要テーマに据えている」等等)

要素 C:「粒子加速器と結びついている」(e.g. 「特定文物が粒子加速器に関わるものである」等等)

要素 D:「アトランティスと命名されての概念と関わっている」(e.g. 「特定フィクションが [伝説の沈んだ大陸アトランティス] に目立って言及している」等等)

要素 E:「古のトロイアにまつわる伝承との結節点 (1. 【叙事詩『イリアス』というトロイア崩壊にまつわるプロセスを扱った古典の際立っての構成要素】あるいは 2. 【叙事詩『オデュッセイア』というトロイア崩壊にまつわるプロセスを扱った古典の際立っての要素】などとの結節点) を色濃くも具備している」(e.g. 「特定フィクションが [トロイアの木製の馬] と直接的に結びつく作中要素を具備している」[特定フィクションが叙事詩『オデュッセイア』や叙事詩『イリアス』(の主要登場キャラクター) と結びついている」等等)

要素 F:「ヘラクレスの 12 功業と直接的に関わっているとの特性を具備している」(e.g. 「特定文物がヘラクレス第 11 功業と関わる」等等)

要素 G:「爬虫類の知的異種族 ([聖書の蛇] や [悪魔] といった存在は除く) と濃厚に結びついている」(e.g. 「特定フィクションが知能を持った蛇の種

族を登場させている]等等)

要素 H:[垣根としての五芒星・五角形と濃厚に結びついている] (e.g.[特定フィクションが垣根としての五角形を作中の重要要素に据えている] 等等)

要素 I:[キリスト教大系におけるサタンないしルシファーと「直接的に」結びついている] ([特定フィクションが聖書におけるサタンを作中にて悪役として登場させている] 等等)

要素 J:[聖書における禁断の果実と「直接的に」結びついている] (e.g.[特定フィクションが聖書における禁断の果実のことを扱っている])

の複数共有を呈している文物らの捕捉をもって関係性における判断材料 Black, Grey, White (との厳密に定義しての確率論の基礎たる【事象】ら) を導出するののかたちにて設定しているわけだが、[要素 A] から [要素 J] のただ単純な共有関係の捕捉だけでは

[[要素 A] から [要素 J] の間には相互に複合的多重的な繋がりあいがある] 歴然とそこにある]

とのことを十二分に顧慮しきれていることになるとは言えない — [言下・行間の問題] として「そういうありようがあるからこそ...」との思想がそこにはあるわけだが、十二分に顧慮しきれているとは言えない— ところがありもする。

たとえば、である。ここ [付録と位置付けての部] としての確率論の話に入る前の本稿本論の部では

要素 D:[アトランティスと命名されての概念と関わっている] (e.g.[特定フィクションが[伝説の沈んだ大陸アトランティス]に目立って言及している] 等等)

要素 E:[古のトロイアにまつわる伝承との結節点 (1.【叙事詩『イリアス』というトロイア崩壊にまつわるプロセスを扱った古典の際立っての構成要素】あるいは 2.【叙事詩『オデュッセイア』というトロイア崩壊にまつわるプロセスを扱った古典の際立っての要素】などとの結節点) を色濃くも具備している] (e.g.[特定フィクションが [トロイアの木製の馬] と直接的に結びつく作中要素を具備している] [特定フィクションが叙事詩『オデュッセイア』や叙事詩『イリアス』(の主要登場キャラクター)と結びついている] 等等)

要素 F:[ヘラクレスの 12 功業と直接的に関わっているとの特性を具備している] (e.g.[特定文物がヘラクレス第 11 功業と関わる] 等等)

が何故もって濃厚に結びついているのか、そして、同じくものが何故もって問題になるのかとのことにまつわっての指し示しを入念に、入念になしている。

にまつわって皮相的な話からなせば、[要素 D] に見る [アトランティス] が [要素 F] に見る [ヘラクレス 12 功業関連物] の中の第 11 功業登場の [黄金の林檎の園] および [巨人アトラス] と濃厚に関わっていると指摘できるようになっていること、そして、[要素 D] に見る同じくもの [アトランティス] と [要素 F] に見る同じくもの [ヘラクレス 11 功業に登場の黄金の林檎の園] が [要素 E] に見る [古のトロイア] と濃厚に関わっている — ポイントは本来的にそれらに関わり合いがあることに蓋然性があまりない中で互いに関わっている— ことの証示を本稿本段では入念に、入念になしている (: [古の陸塊アトランティス] (要素 D) とは [黄金の林檎の園] (要素 F) と極一部

識者に同一視されてきた地である。そして、[ヘラクレス 12 功業(のうちの 11 功業)]にて登場してくる[巨人アトラス](要素 F)は黄金の林檎の在処を知る巨人と伝わっている存在である。他面、[古のトロイア](要素 E)は[黄金の林檎](要素 F)が原因にて崩壊した伝説上の存在となり、そちらトロイアの崩壊説話には[アトランティス](要素 D)との記号論的な接合性存在している——といった各々の事柄らの出典内容および本稿にてのそれら出典原文引用部を示すための出典紹介番号についてはここでは再述しない(に関してはここに至るまで幾度も言及してきた出典(紹介番号)のための記述部をご覧頂きたい)——)。

以上のような皮相的側面より突き進んで奥まったところで捕捉されてくる関係性がよりもってして問題になるとのこと、そうしたこともでもが[要素 A]から[要素 J]までの具備の判断プロセス、そして、[要素 A]から[要素 J]の共有関係の特定化プロセスで最大限顧慮されているわけではない(ここ確率論の至らなさや計数的に定義しづらい問題の重篤性に関わるところとして、である)。

確率的分析の背景にある[発想法]には確かに関係性が存することまでの言下・行間での慮(おもんばかり)が含まれているわけではあるも、表層を越えてのありようで深い層での関係性への顧慮がなされているとは言い難い。

そうも述べられるところとしてこの世界には深層面で「現実」次のような関係性が「ある」ことが問題になる(とのことを本稿では延々と取り上げてききました)。

[長くもなつての問題となる関係性の例示表記として]

911の事件の発生を奇怪にも先覚的に言及している——問題はといったことがあることについて「偶然の賜物で説明がなせるのか」「恣意の発露なのか(であれば、その恣意はどの程度の悪質性・意志の強さを呈したもののなのか)」見極めることにある——が如き内容を有している文物には「黄金の林檎」と結びつくものらが含まれている。

その点、本稿では「根底からの傀儡(くぐつ)の問題」がいかにそこに介在していると受け取れるのかとの点については敢えてもってして仮定形のそれ以上の話柄では取り上げずにもながらも、いくつかの作品ら、すなわち、

■『ファイト・クラブ』(同作、ルネサンス期画家ルーカス・クラナッハに「黄金の林檎」として描かれていたものと同一のものを「ワールド・トレード・センター(ツインタワー合間)付設のオブジェ」に仮託させて登場させている1999年初出映画であり、ワールド・トレード・センターその界限にまさしくも仮託されると述べられる一帯にて「グラウンド・ゼロと劇中呼称されてのありようを現出すべくも」ビル複数連続倒壊が企図されていると描かれている映画ともなっていること、その具体的ありようについて本稿補説4の部で膨大な文量を割いて細かくも紹介してきたとの作品となる——※ 現実には911の事件ではWTC1からWTC7が倒壊を見た(うち、突如、パンケーキ状に突如頭から崩れていった第七ビルについては発破倒壊にまつわる言われようが専門家団体よりずっと主張され続けた)わけではあるも、映画ではワールド・トレード・センターと何度も何度もワンカットで示唆される場所にあつての連続ビル倒壊(パンケーキ状にビルが崩れていく発破倒壊)が具現化している。そうした1999年初出の映画『ファイト・クラブ』の原作小説である小説版『ファイト・クラブ』(1996

年初出)では不自然なまでに超に加えてもの超が付く程の高層ビルである「191階」建てのビルが発破倒壊の対象と描かれている——)

■『トレーディング・プレイズ(邦題:大逆転)』(同作、黄金の林檎と同一物であると欧州他領域にて長年見られてきたオレンジを【ワールド・トレード・センターとナンバー 911が相互描写されての部】と目立って結びつけている1983年初出映画(ワールド・トレード・センターに横付けされたタクシーに911と親和性高い数値列が認められ、かつ、直後のワールド・トレード・センター内の時計描写が[9][11]との時計と結びつけられているとの映画)となる)

■『ジョジョの奇妙な冒険』(同作、物議を醸してきたところとして[911の予見描写とされる描写](そちら描写は[月][一つ目][太陽]を並べてのフリーメーソンの絞首刑者にまつわる儀式が執り行なわれるエンタード・アプレンティス位階(徒弟位階)のトレーシング・ボードとそっくりの構図を絞首刑との式で意味論的にもつながるやりかたで登場させている部でもある)を[オレンジ(→黄金の林檎)と爆発物]と結びつけもして登場させている漫画作品となる)

■『ジ・イルミナタス・トリロジー』(同作、副題に[黄金の林檎]を冠する70年代欧米圏にて大ヒットした小説作品となり、マンハッタン・ビル爆破、ペンタゴン爆破を描きもし、【マンハッタン象徴物とペンタゴン象徴物の並列描写をなしているシンボル】の多用頻用をなし、また、その他側面での予見描写も問題となる作品となる)

らを[黄金の林檎](要素F)と相通ずるところで[911の事前言及](要素A)をなし、ている作品の例として例示してきた(:またもってして「予見的作品としての側面からは外れる、というのも911の事件が起こった後の作品であるからである」とのこと、申し述べつつ、【ナンバー911と黄金の林檎の結びつき】についてはここ最近(2012年後半)にあって封切られた **September Eleven 1683** とのタイトルの洋画——直訳すれば、『1683年、9月11日』ともあいなるタイトルの洋画作品——が[黄金の林檎]との語を含むナレーションではじまりもする、黄金の林檎と歴史的に呼び慣わされていた(とされる)ウィーンに対するオスマン・トルコのウィーン包囲を描いた歴史スペクタクルとなっているといったことがあるといったことも本稿では紹介している——そうした映画のことは予見作品(要素A)の条件に適合しないとのことでここでの確率論の顧慮対象「外」になるのだが——)。

他面、本稿[補説4]の部にて取り上げもしていた映画 **Armageddon** 『**アルマゲドン**』(1998年初出の映画)では

[劇中冒頭シーンにて【アトランティス】(黄金の林檎の園とも同一視されてきた伝説上の沈んだ陸塊)と命名されている(実在の)スペース・シャトルが隕石によって破壊される](そして、ニューヨークはマンハッタンにて The shuttle Atlantis exploded in space at 3:47 a.m, Eastern Standard 「スペースシャトル・アトランティスが東部標準時間午前三時四七分、宇宙にて爆発しました」とのテレビ放映がなされるとの描写がなされる)

⇒

[冒頭の[スペースシャトル・アトランティス破壊(のアナウンス)]]の直後のシーンにて[ニューヨーク]に隕石が降り注ぐとの描写がなされ、その途中過程で、「911番(緊急連絡番号)に電話してくれ!(英語では **Somebody dial 911!**)」との悲痛の叫びが上げられもする(:[ブルドックをペットとしている男]と[ゴジラの着ぐるみを持った男]の登場している一連のシーン、さらに述べれば、前者の男のブルドックが飼い主の手から離れて後者のゴジラ男と一悶着を起こしている一連のシーンの後、ブルドックが隕石によって開けられた穴に落下し、そ

うもした状況を受けて飼い主の男が「誰か 911 に連絡してくれ！」と叫ぶシーンがそれとなる ——ディレクターズ・カット版ではない方のノーマル・カット版の DVD にあっては再生時間にして本編開始後およそ [00 時間 07 分 40 秒] にて該当シーンが登場する——)。

そして、[911 にダイアルしてくれ!]との男の戯画化された悲痛なる叫びの後、[エンパイアー・ステート・ビル]や[ツインタワー]に隕石が激突するとの描写がなされる(ディレクターズ・カット版ではない方のノーマル・カット版の DVD にあっては再生時間にして本編開始後およそ [00 時間 09 分 44 秒] にて [半壊したツインタワー] も登場してくる ——※「911 番に電話してくれ!」との描写それ自体ではさして不可解なことではない(日本で 110 番や 119 番に相当する緊急時連絡番号は従前より 911 番だったからである)。だが、[[911]]と[ニューヨークのビル群倒壊]が一連のシーンにて結びつけられている]のは、他にも同じくこの映画『アルマゲドン』に着目すべき点があることに鑑み、その時点「でも」「かぐわかしい」と受け取れるところではある——)]

⇒

[冒頭のニューヨークへの隕石(の欠片)襲来シーンの後、[地球に迫る巨大隕石を破壊するためのオペレーション] が急遽進められていくとのなかで [電光時刻表示板] および [電光カウントダウンタイマー] が目立つように登場するシーンが幾シーンもあり、うち、2 つのシーンは

[[611] (反転させると 911 と通ずることになる数値列) および [911] との 電光表示式カウント・ダウン・タイマー (各々別地所別物のタイマー) にあっての数値が登場するシーン]

ともなっており、それら双方共に

[[「ツイン」・シャトルズ (双子のように「瓜二つの」シャトル)]

と結びつけられている、すなわち、

[隕石を破壊するための人類の命運を決するために急場を縫って改装され双子のように瓜二つの外観で同時発射されることになるスペース・シャトル] (フリーダム Freedom とインデペンデンス Independence と名付けられた瓜二つのスペースシャトルら)

と視覚的に結びつけられているとのことがなされているとのことがある] (: ディレクターズ・カット版ではない方のノーマル・カット版の DVD にあっては再生時間にして本編開始後 [00 時間 43 分 05 秒] にて隕石衝突時の世界崩壊までの電光式カウントダウンタイマーが登場、その数秒後から [双子状のスペース・シャトルの模型] と [地球儀 (ワールド・グローブ)] がブリーフィングのシーンにて結びつけられるとのことがなされている。また、スペースシャトル打ち上げが差し迫った折の電光式カウントタイマー (先のタイマーとは別のタイマー) が表示されるシーンでは双子のように並ぶスペースシャトルの描写がなされた直後、タイマーが [9:11 から 9:10 へと数値が移行する] との描写がなされている。そちらはディレクターズ・カット版ではないノーマル・カット版にての本編開始後およそ [00 時間 59 分 07 秒] から [00 時間 59 分 09 秒] のシーンが該当シーンとなる (ので疑わしきにおかれては DVD レンタルされるなどして確認してみるとよからう ——尚、映画『アルマゲドン』のそうしたシーンについては(本稿筆者が「映画『アルマゲドン』もかぐわかしいということか. . . 」と気付くことになった契機となった作品として) YouTube にて流通している 911 Hidden in Hollywood との一連の動画シリーズの中の PartII と振られた部にも端的に紹介されている——)

⇒

[ツイン・シャトルズとでも表すべき瓜二つのシャトルらによる隕石「爆破」(デモ

リッション)の作戦がいよいよクライマックスに到達しようとのシーンにて(和文字幕ではニュアンスが伝わりにくいのだが) Nine and a half Gs for 11 minutes. 「ナイン・アンド・ア・ハーフ・ジーエス・フォー・「イレブン」・ミニッツとの「9」「11」との数値を含む言いまわしが用いられている(日本語字幕では「9.5Gが11分間続く」となるが、英文字幕をDVD再生環境にてオンにして表示させれば、瓜二つのスペース・シャトルによる[爆破]作戦が佳境を迎えようとのシーンが[9]と[11]との数値表現と(ハーフとの語を介在させつつ)結びつけられていることが視覚的にも分かるようになってい) (ノーマルカット版DVDにては本編開始後およそ[1時間21分19秒]あたりの部として確認させる)

とのことが見受けられる。

本段の話との絡みでネックとなるところは複層的に911の事前言及と解される描写が見受けられる映画『アルマゲドン』—直上言及の「911関連数値列と近接して描写される双子のシャトルによる隕石爆破が主軸となっている作品」—という作品が『アトランティス』とも結びつけられていることである(冒頭にてスペースシャトル・アトランティスが隕石に破壊される)。

くどくもなるが、そこに見るアトランティスは「黄金の林檎の園」ともまた欧米一部識者によって史的に結びつけられてきたとのものであり、その伝で

- 『ファイト・クラブ』
- 『 트레이ディング・プレイシズ(邦題:大逆転)』
- 『ジョジョの奇妙な冒険』
- 『ジ・イルミナタス・トリロジー』

が911と結びついていることとの連関が想起されるところともなるというわけである。

長くもなつての例示のための表記を続ける。

ここ [付録と位置付けての部] としての確率論の話に入る前の本稿本論の部では

要素 B: [[ブラックホール] ないし [ワームホール] ないし (機序不明概念としての) [異界との扉] のどれか一つないし複数と明示的に結びつけられている] (e.g. [特定フィクションが[ワームホール]を登場させている] [特定ノンフィクションが[ブラックホール]を作中の主要テーマに据えている] 等等)

要素 C: [粒子加速器と結びついている] (e.g. [特定文物が粒子加速器に関わるものである] 等等)

要素 D: [アトランティスと命名されての概念と関わっている] (e.g. [特定フィクションが[伝説の沈んだ大陸アトランティス]に目立って言及している] 等等)

要素 E: [古のトロイアにまつわる伝承との結節点 (1. 【叙事詩『イリアス』というトロイア崩壊にまつわるプロセスを扱った古典の際立っての構成要素】あるいは2. 【叙事詩『オデュッセイア』というトロイア崩壊にまつわるプロセスを扱った古典の際立っての要素】などとの結節点) を色濃くも具備している] (e.g. [特定フィクションが[トロイアの木製の馬]と直接的に結びつく作中要素を具備している] [特定フィクションが叙事詩『オデュッセイア』や叙事詩『イリアス』(の主要登場キャラクター)と結びついている] 等等)

要素 F: [ヘラクレスの 12 功業と直接的に関わっているとの特性を具備している] (e.g. [特定文物がヘラクレス第 11 功業と関わる] 等等)

要素 I: [キリスト教大系におけるサタンないしルシファーと「直接的に」結びついている] ([特定フィクションが聖書におけるサタンを作中にて悪役として登場させている] 等等)

要素 J: [聖書における禁断の果実と「直接的に」結びついている] (e.g. [特定フィクションが聖書における禁断の果実のことを扱っている])

の各要素らが何故もって濃厚に結びついているのか、との指し示し「をも」入念に、入念になしている。以下に一例摘示するようなかたちにて、である (そちら直下枠内記述部にて下線を付した部が [要素 B] から [要素 J] の何れかに該当しているとの箇所となる)。

[トロイア崩壊に至るまでのプロセスとそこに関与したと伝わる金星体現神格としてのギリシャ神話における女神アフロディテにまつわたの黄金の林檎を巡るやりとりに関わるエピソード; パリスの審判として知られる[女=ヘレン]が誘惑に用いられてのエピソード] (要素 E) ⇔ (濃厚なる純記号論的一致性が存在) ⇔ [林檎とも同一視される禁断の果実を巡るやりとりが[女=イヴ]を用いてなされたエデンの園の誘惑が金星と歴年結びつけられてきたルシファーに仮託される古き蛇によってなされているとの宗教教義] (要素 I および要素 J)

[トロイア崩壊の元凶ともなった黄金の林檎がたわわに実るとされる黄金の林檎の園] (要素 E) ⇔ (不死の果樹園/失われた理想郷/蛇との繋がり合いなどから相通ずるものであるとの視点の近代よりの呈示) ⇔ [エデンの園] (要素 J)

[黄金の林檎の園] (要素 E) ⇔ (西方は大洋の彼方の島との側面/アトラスと関わるとの側面より相通ずるものであるとの視点が呈示され続けていただけの背景が存在) ⇔ [アトランティス] (要素 D)

[アトランティス] (要素 D) ⇔ (相通ずるものであるとの視点が呈示され続けてきただけの歴史的事情が存在) ⇔ [新大陸アメリカ] ⇔ [新大陸アメリカにて崇拝されていた土着の神格ケツアルコアトル] ⇔ (複合的相関関係の存在) ⇔ [ルシファーに仮託されるもするエデンの誘惑の古き蛇] (要素 I および要素 J)

[新大陸アメリカにて崇拝されていた土着の神格ケツアルコアトル] ⇔ (「冥界に双子の片割れを持つ存在」「金星の体現存在」としての複合的類似性の存在) ⇔ [トロイア崩壊に至るまでのプロセスとしてトロイア戦争の原因となった約定を提案してきたと語り継がれる金星体現神格としての女神アフロディテ、および、その原初的似姿とされている古代メソポタミアの女神イナンナ・イシュタル] (要素 E)

[トロイア崩壊に至るまでのプロセスとしてトロイア戦争の原因となった約定を提案したと語り継がれる金星体現神格としての女神アフロディテ、および、その原初的似姿とされている古代メソポタミアの女神イナンナ・イシュタル] (要素 E) ⇔ (古代中近東の金星体現存在による冥界下りのエピソードをルシファーの冥界落ちと結びつける一部見解

の存在) ⇔ [代表的古典たるダンテ『地獄篇』にみとめられる地獄門の先にあるルシファー(ルチフェロ)の領域および代表的古典たるミルトン『失樂園』に見る地獄門の先にあるサタン(ルシファー)構築の通路とエデンの喪失の物語] (要素Iおよび要素J) ⇔ [どういうわけなのか、今日的な意味でのブラックホールと「近似」する描写が「極めて多重的に」ダンテ『神曲;地獄篇』およびミルトン『失樂園』の[地獄門の先と結びつけられたルシファーに由来する災厄]関連の描写にみとめられるとの文献的事実ありよう] (要素Bおよび要素Iおよび要素J) ⇔ [ブラックホールを加速器検出器「ATLAS」にて検出(イベント・ディスプレイ・ツール「ATLANTIS」によって検知)するとされるに至ったLHC実験に見るATLASアトラスおよびATLANTISアトランティスとの繋がり合い] (要素Bおよび要素Cおよび要素Dおよび要素E)

[代表的古典たるダンテ『地獄篇』にみとめられる地獄門の先にあるルシファー(ルチフェロ)の領域] (要素I) ⇔ [ダンテ『地獄篇』] ⇔ [ヘラクレス12功業と「純・記号論的に」「多層的に」相通ずるかたちでルシファー領域への到達を描いている古典] (要素E)

[代表的古典たるミルトン『失樂園』に見る地獄門の先にあるサタン(ルシファー)構築の通路にまつわっての描写 —エデンよりの追放プロセスの描写—] (要素Iおよび要素J) ⇔ [トロイア崩壊伝承と複合的に通ずる(黒海界限との属地的な意味「も」含めて複合的な側面で通ずる)描写をなしている部] (要素E)

(各々の関係性にまつわる出典内容および本稿にてのそちら出典原文引用部の番号を示すための出典紹介番号については再述しない(ここに至るまで何度となくそのために筆を割いてきた出典(紹介番号)のための記述部をご覧頂きたい))

上記枠内関係性表記に関わるどころとしてさらに本稿従前の段でなしてきた一部図解部の再掲をも以降なしておくこととする

フランシス・ベーコンの著作ではアメリカはグレート・アトランティスと呼称されている

Atlantis ⇔ America

[太平洋に浮かぶ広大な陸地] と伝わるアトランティスは [アトラスの娘ら] に管掌される [西の果てにあつての果樹園] たる [黄金の林檎の園] と同一視されることがある

Atlantis ⇔ the garden of the golden apple

黄金の林檎の園はエデンの園とも同一視されることがあった場所となる

the garden of the golden apple ⇔ the garden of Eden

Serpent deities of Aztec

(Mesoamerican civilization)

黄金の林檎の園とアト
ランティスが接合する
とのことを示すのにも
力点
を置
きもしてきたのが本稿
である。

Francis Bacon's
New Atlantis

Great Atlantis civilization

the garden of Hesperides
& Golden Apple



Coatlicue (Teoyamiqui)

フランシス・ベーコンの古典にあって大アトランティスであるとされているアメリカで栄えたアステカ文明、そこでは蛇の神々が崇められていた（左上図は大地母神コアトリクエの発掘彫像の模写、右上はコアトリクエの息子、主要神ケツアルコアトルの古写本内似姿）



Quetzalcoatl



Milton's Lucifer (Satan)



the morning star
Planet Venus

黄金の林檎の園と同一視されることもあるエデンの園、その場にての誘惑を奏功させたサタンは

【知の接受者（善悪の樹の実を食べさせての知の接受者）】／【人類を裏切って破滅にいざなった存在（エデンでの策略、および、黙示録の描写）】／【蛇としての似姿を持つ存在】／【金星の体現存在（ルシファーとしての側面）】

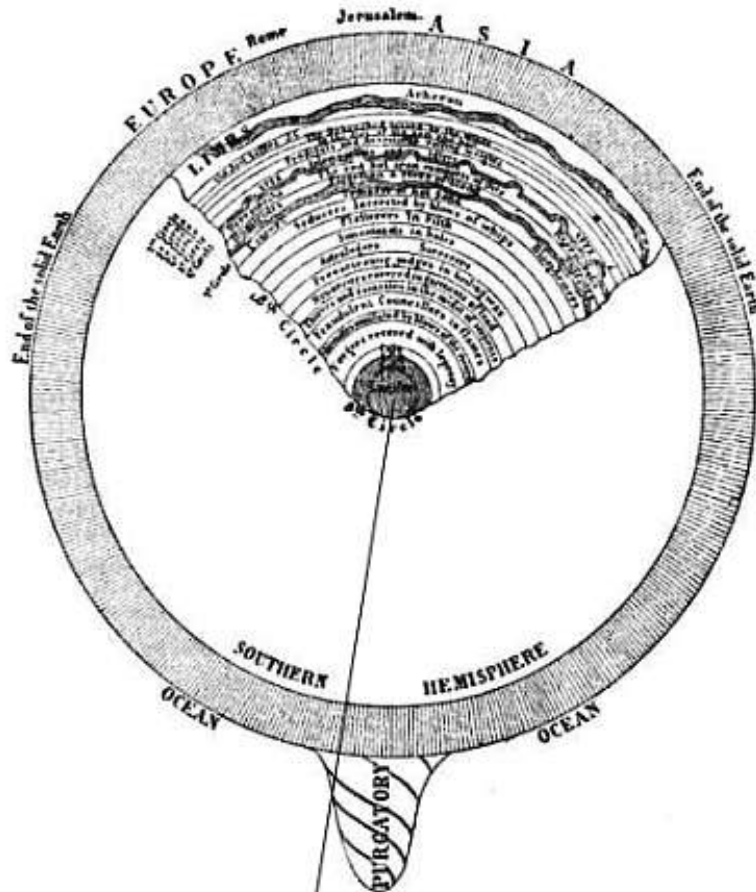
としての特性を持つ存在である。

他面、黄金の林檎の園と同一視する視点があるアトランティス、その場にも比定されてきたアメリカ大陸での崇拝対象であったケツアルコアトルは

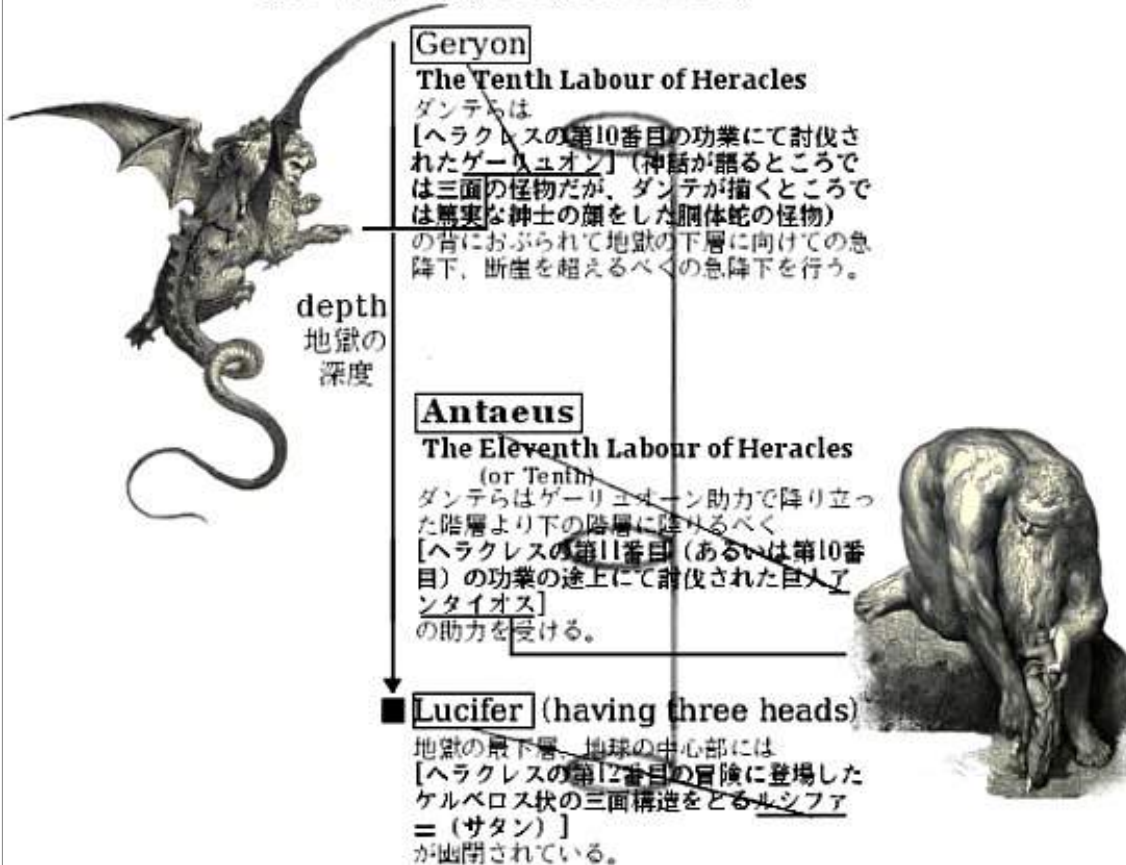
【知の接受者（文明発達の恩人としての神）】／【信徒を裏切って破滅にいざなった存在（ケツアルコアトルの再臨をスペイン征服者に見たアステカ帝国の破滅のプロセス）】／【蛇としての似姿を持つ存在】／【金星の体現存在】

としての特性を同様に持つ存在である（⇒ 文献的根拠の指し示し箇所としては本稿にての【出典 (Source) 紹介の部53】から【出典 (Source) 紹介の部53 (4)】を包摂する解説部、そして、【出典 (Source) 紹介の部54】から【出典 (Source) 紹介の部54 (4)】を包摂する解説部を参照のこと）。

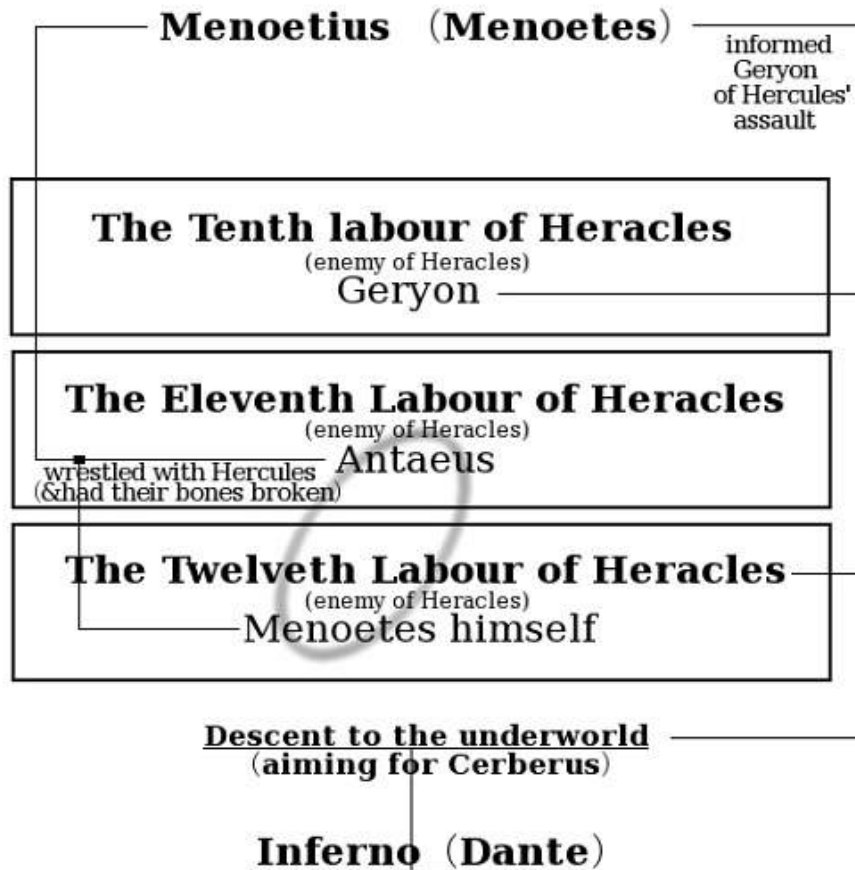
(ダンテ『地獄篇』にての[ヘラクレス 12 功業]との接合性に関する図解部として)



地獄の中核(地球のコア)に向けての踏破行後半部を一直線で表すと次のようになる。



(ダンテ『地獄篇』と[ヘラクレス 12 功業]との接合性に関する図解部一例として [2])



メノイテースは以下のような側面でヘラクレス10番目の功業、11番目の功業、12番目の功業と接合性を有する存在である。

- ・(第10の功業との接合性として) メノイテースは[ゲーリュオン](ヘラクレス「第10の」冒険にて登場した三面六臂の怪物にしてダンテ『地獄篇』にて第7圏から第8圏への降下を助力した存在)にヘラクレス乱入・暴虐を報せた存在となっている。
- ・(第11の功業との接合性として) メノイテースは[アンタイオース](ヘラクレス「第11の」冒険にて登場した巨人にしてダンテ『地獄篇』にて第8圏から第9圏への降下を助力した存在)と同様にヘラクレスと相撲勝負して同様に骨砕きの憂き目に遭った存在となる。
- ・(第12の功業との接合性として) メノイテースはそれ自体が冥界下りと強くも結びつく存在(冥界の王ハーデースの牛を飼う牛飼いであり、また、ヘラクレスの「12番目の」功業の目的地たる冥界にてヘラクレスと相撲勝負をなした存在)となっている。

以上、メノイテースを介して相互に結節点を観念できるとのヘラクレス10番目の功業、11番目の功業、12番目の功業らがダンテ『地獄篇』との結節点を[恣意的な側面]として帯びていると述べられるか否かがここにて問題視をなしていることとなる。(くどくも繰り返すが、10番目の功業に登場のゲーリュオンが『地獄篇』地獄巡りにてダンテらを地獄第7圏から地獄第8圏に降下なさせしている存在であるとのことがあり、11番目の功業に登場のアンタイオースが同古典にてダンテらを地獄第8圏から地獄第9圏(最下層)への降下をなさせしているとのことがあるとの点からして接合性を観念できる。そうしたことに加えてのこととして、ヘラクレス第12功業が[三面のケルベロスを目指しての地獄降下の物語]となっており、といったギリシャ伝承筋立てが欧州ルネサンス期成立の『地獄篇』の方の内容、[三面のルシファーをゴールにしての地獄降下の物語]との内容と類似性を呈しているとのことがある、それにつき、『地獄篇』にヘラクレス12功業を「濃厚に」意識してのわざとのやりようが影響しているかどうかを(ここでは)問題視しているのである。メノイテースの話はそれが10番目功業・11番目功業・12番目功業は接合性を観念させるとのものである、それがゆえ、10番目・11番目・12番目が性質上通巻としているものらであれば、ダンテやりよう、ゲーリュオン・アンタイオースにそこに向けての順序降下をなさせしている最下層に三面のルシファーを配するとのやりようもヘラクレス最後の功業に見る三面のケルベロスに仮託しての恣意性の賜物であるように受け取れる、とのことを(同じくもの文脈で)指摘するために持ちだしているとのものである)。

さらに振り返れば、次のような関係性もが摘示できるようになっている（このことを本稿の[補説3]の部にて証示なさんと努めていた）。

[**ペルセポネPersephone**] ⇔ (媒介項Medium: [冥界降下 descent to the underworldをなした女神としての特性] [双方が愛人としている神TammuzおよびAdonisの際立つての同質性]) ⇔ イナンナ・イシュタル Inanna / Ishtar

イナンナ・イシュタルInanna/Ishtar ⇔ (媒介項Medium: [金星を神格化した存在 (divine personification of planet Venus)としての共通性] [冥界に双子の片割れエレシユキガルEreshkigalおよびショロトルXolotlを持つとの共通性]) ⇔ ケツアルコアトルQuetzalcoatl ⇔ (媒介項Medium: [蛇と結びつく文明の接受者 — promoters of civilizations related with serpent— としての特性(アメリカ大陸に伝わる伝承および聖書に見るエデンの智慧の樹の実を食すことの教唆のエピソード)] [金星Planet Venusと結びつくとの特性] [期待を裏切るとのかたちで災厄をもたらした蛇としての共通性 — betrayal and disaster (the fall of Aztec civilization and Quetzalcoatl like conquistadors & the fall of man, betrayal and disaster caused by old serpent seen in "Revelation") —] [アメリカ大陸 American Continent → アトランティスAtlantisとの見立てが存在し(e.g. Francis Bacon's Great Atlantis)、また、アトランティスAtlantis → 黄金の林檎の園 Garden of Hesperides (Atlantides) → エデンの林檎の園 Garden of Edenとの見立てが存在するとの背景]) ⇔ サタンSatan(ダンテ『地獄篇』Dante's Infernoに登場するルチフェロLucifero)。

サタン(ダンテ『地獄篇』に登場するルチフェロLucifero) ⇔ (媒介項Medium: ダンテ『地獄篇』Infernoに見るケルベロス捕縛で終結するヘラクレスの計12の功業の後半部との際立つての近接性 (continuity between Dante's Inferno and 12 labours of Hercules), そして、その近接性を介してのダンテ『地獄篇』に登場する三面のルシファーと三面のケルベロスの接合性) ⇔ ケルベロスCerberus

(以下、ケルベロスCerberusを介しての関係性がいかように多重的にペルセポネPersephoneに回帰するかの複数パターンを羅列するとして)

ケルベロスCerberus ⇔ (媒介項Medium: 本稿にての先の段で詳述に詳述を重ねてきたところとして、[ヘシオドスのTheogony『神統記』に見るところの50の頭を持つケルベロス fifty headed Cerberus]が[アヌビスAnubis]・[ヘカテHecate]といった別神格を通じてシリウスの伴星、50年の公転周期を持つ白色矮星シリウスBと奇怪無比に結びつくと述べられるだけの背景 — 例としてのプルタルコス古典に見る記述(e.g. "strange" description about [Isis = Sirius] of Plutarch's Moralia) — が存在) ⇔ シリウスB(SiriusB) ⇔ (媒介項Medium: エジプトよりのグレコ・ローマン・ワールド(古代ギリシャ・古代ローマ世界)への渡来神でもあった女神イシスの犬の星シリウスの体現神格としての特質) ⇔ イシスIsis ⇔ (媒介項: [ローマ期古典『黄金の驢馬』the Golden Assに見る三面構造のペルセポネ triple headed PersephoneやヘカテHecateとイシスIsisを同一視する叙述]あるいは[ペルセポネ・デメテルを崇拝するエレウシス秘儀 Eleusinian Mysteriesとイシスにまつわる伝承との類似性]) ⇔ [**ペルセポネPersephone**] (回帰)

理手順をご覧いただければお分かりいただけるであろうが—

[特定二作品にあっての要素らの双方向的関係性(共有関係)以上の関係は
顧慮して「いない」]

とのことがある中で「現実には」「複数要素の円環状の多層的關係性」が成立している
とのことがあり、それが現われているところのものとしての上にて一部摘示しているが
如き再述したような関係性であるとのことがあるからである（：[関係性1] ⇔ [関係
性2] が複数成立していることの問題性を[黒][灰][白]の導出プロセスは最大限
顧慮出来るようになっているが、[関係性1] ⇔ [関係性2] ⇔ [関係性3] ⇔ [関係
性1](回帰)といったかたちで成立している円環状の關係性が複数成立していること
の確率的問題についてまでは顧慮が十二分に及んでおらずそうしたことは背景に
ある「のであろう」との「であらう」付きの背景事情として—情報処理にあっての重
み付けの「思想」にあって—顧慮しているにすぎない）。

そうした多層的關係性が「厳然・冷厳と現実に存在している」(論拠を挙げ連ねての
その存在の証示をなすための長大なる本稿でもある)とのことがある中で

H1: 明らかに[執拗なる意志]の賜物がゆえに「特定の」事實關係が現出
していると判じられる（判断の確度としては「明らかである」「歴然として
いる」とのことで「強」）⇒初期設定確率 0.3%

H2: おそらく[執拗なる意志]の賜物がゆえに「特定の」事實關係が現出
していると判じられる（判断の確度としては「おそらくそうであらう」とのか
たちで上のH1に劣る）⇒初期設定確率 0.5

H3: [執拗なる意志]か[部分的思惑の発露]か[偶然]かにつき「予断・
楽観的見方をまったく許さない」との灰色の状況に由来するものとして
「特定の」事實關係が現出していると想定される（尚、[この本質]があ
まり重要なものである、体系的に[皆殺しにするとのオペレーションの
実施]にまつわる「執拗な」意思表示がなされてきたか否かに直に関わる、
との領域では「予断・楽観的見方をなんら許さない」とのことはすなわち
[危機の分析と回避]に全力を尽くして然るべき状態と同義であらう）⇒
初期設定確率 9.2%

H4: おおよそ(おそらく)にして[部分的思惑の発露]ないし[極めてよくで
きた偶然]として「特定の」事實關係が現出していると想定される(判断の
確度としては「おそらく」との程度で「弱」) ⇒初期設定確率 30%

H5: ほぼ確実に[部分的思惑の発露]ないし[極めてよくできた偶然]とし
て「特定の」事實關係が現出していると想定される(判断の確度としては
「強」) ⇒初期設定確率 60%

とのかたちでもってして

[初期値としての事前確率]（はなから更改することを前提にあらかじめそれ
ぐらいか、と見積もり設定しておく初期確率、P(H1)からP(H5)）

を設定する、そう、H1,H2にあって0.3%及び0.5%として設定し、H3は9.2%と設定す
ることは—話がエキセントリック(奇矯)なものであれ—[至当なもの]であっても決して
[自説強弁のやりよう]ではないと申し述べておきたい(そうした仮説が成り立つと判
じられるだけの「その他の」十全に顧慮しきれていない多重的關係性がそこにあるの
であるからそうした背景事情を顧慮してH1やH2の初期確率を0.001%であるといっ

た値でスタートするのは妥当ではない、だから最も剣呑である H1 も[1000 に 3 つ]ぐらいの事前確率でシミュレーションをスタートさせ現実世界のデータでもってしてその確率的変動を分析していく、そして、H3 のようなところの目算も 10% に近いところに見繕うのが妥当であろう、と申し述べる)。

さて、ここまでにあつてベイズ確率論(の中のベイズ推定の手法)について確率計算の前提となることの説明を一通りなし終えた — [仮説設定(仮説の計数的定義)とはいかなる行為か]、[尤度とは何か]、[事前確率と事後確率の意味合いはいかなるものか] (ベイズ更新による事後確率の次の計算にあつての事後確率への更新とはいかなるものか)との解説をなしたうえで、次いで、仮説設定(尤度設定)・事前確率設定の具体的数値設定をなしもした — ところで、である。これ以降の段では具体的計算の話に入ることにする。

(本稿本段、確率論について物怖じせず理解しようとの意志のある方にあつては)

まずは下の表を参照されたい。

	P(H1 D)	P(H2 D)	P(H3 D)	P(H4 D)	P(H5 D)	Sum
P(H)	0.003 →	0.005 →	0.092 →	0.3 →	0.6 →	
black	0.02726446531....	0.02272038776....	0.22296273856....	0.36352620418....	0.36352620418....	1

同表では

[判断材料 **Black** という情報 **Data** が与えられたとき、(それぞれ設定なした[尤度]によって計数的に別々なるものとして成立している) [仮説]ら — H1 から H5 の [仮説] ら — にまつわる [事後確率]ら — P(H1 | D) から P(H5 | D)ら — の相対的比率; 確率分布) が 「→」 (矢印) の値へと変化している]

ことを示している。

(例: P(H1 | D)、特定 Data に対して仮説 H1 の確率論的枠組みが決められている(Data の向かう先が H1 となっている)との事後確率が所与の事前「初期」確率 0.3% (「千の内の三」たる 0.003) からデータ[Black]の一単位捕捉によって 2.7% (0.02726446531) へと増大しているとのことを表にあつては示している)

より具体的には、である。

上の表は

[下図にて示すような計算]

を体現させながらも [判断材料 **Black** という情報が与えられたとき、設定[仮説]らの相対的比率が 「→」 (矢印) の値へと変化している] ことを示すものとなっている (下段の四角枠で囲った部がデータ入力の一例摘示とのかたちで直前にて簡易なる表を呈示した部となる)。

いかように【事前「初期」確率(P(H))】から【次いでもってしての事後確率(P(H|D))】への移行をなしているのかについて —先立ってベイズ推定一般公式として呈示している[14]式に基づいての解説図として—)

[尤度設定] 表記部 (再述の部)

	H1	H2	H3	H4	H5
black	30	15	8	4	2
white	930	950	980	986	992
grey	40	35	12	10	6
仮説H1からH5のLikelihood [尤度] (%表記)					
	P(D H1)	P(D H2)	P(D H3)	P(D H4)	P(D H5)
black	0.03	0.015	0.008	0.004	0.002
white	0.93	0.95	0.98	0.986	0.992
grey	0.04	0.035	0.012	0.01	0.006
sum	1.0(100%)	1.0(100%)	1.0(100%)	1.0(100%)	1.0(100%)

※上の尤度設定表では、たとえば、仮説H1における判断材料Greyの比率は1000のうちの40(4%)、仮説H3における判断材料Whiteの比率は1000のうちの980(98%)である、とのことを示している

[事前確率] 表記部

仮説H1からH5のPrior probability [事前確率] (ベイズ更新により順次、データがインプットされる毎に更新Update)					
	P(H1)	P(H2)	P(H3)	P(H4)	P(H5)
	0.003	0.005	0.092	0.3	0.6
H1からH5の [事前確率] のProbability distribution 確率分布					

※上の事前確率表記部では(本稿直前の段にて言及のように)仮説H1が成り立つ可能性は0.3%、仮説H2が成り立つ可能性については0.5%、以下、H3からH5毎に[表記の通り]となしている(「任意の discretionary」ものたる[初期確率]設定の問題として、である)。

[データ入力] の一例摘示部

P(H)	P(H1 D)	P(H2 D)	P(H3 D)	P(H4 D)	P(H5 D)	Sum
black	0.02726446531	0.02272038776	0.22296273856	0.36352620418	0.36352620418	1

※この部では判断材料Blackのデータが導出されている時、P(H1|D)、P(H2|D)、P(H3|D)、P(H4|D)、P(H5|D)の確率的比率がいかように[ベイズ更新]発生プロセスにて変化していくのかのを示している。具体的には[事後確率P(H|D)]([事前確率]へと順次あらためてなっていくとの[事後確率])が下にて表記の計算式(先に意味の詳述をなしての式)で段階的に導出されるところの示している。

$$P(H_1|D) = \frac{P(D|H_1)P(H_1)}{\sum_{i=1}^5 P(D|H_i)P(H_i)} = 0.02726446531$$

$$P(H_2|D) = \frac{P(D|H_2)P(H_2)}{\sum_{i=1}^5 P(D|H_i)P(H_i)} = 0.02272038776$$

$$P(H_3|D) = \frac{P(D|H_3)P(H_3)}{\sum_{i=1}^5 P(D|H_i)P(H_i)} = 0.22296273856$$

$$P(H_4|D) = \frac{P(D|H_4)P(H_4)}{\sum_{i=1}^5 P(D|H_i)P(H_i)} = 0.36352620418$$

$$P(H_5|D) = \frac{P(D|H_5)P(H_5)}{\sum_{i=1}^5 P(D|H_i)P(H_i)} = 0.36352620418$$

※表記の式らは(H1からH5がHの部に収まる)[事後確率P(H|D)]にあつてD(データ)の部がBlack属性であった場合に(所与の[事前確率P(H)]および[尤度P(D|H)]の値をベイズ推定の一般公式に代入することで)いかなる解答が導き出せるのかを指し示したものとなる(：たとえば、一回、Blackのデータが与えられると特定データが導出されたときの仮説H1が成り立つ可能性たる[事後確率P(H1|D)]が0.003あらため0.027264465(2.7264465%)として導出される——に対して、次回以降の計算でたとえばWhiteのデータが与えられると事後確率は(求めもした事後確率を事前確率に外挿するベイズ更新のプロセスが働く中で)再度、縮減を見ることになる——)

上にての枠内図解部での数式(ベイズ推定の一般公式として内容を解説してきた[14]式)の意味合いについて理解に欠けるところがある(理解する気がある中でありながらも理解に欠けるところがある)との向きにあつては「高等学校程度の知識量で理解できるような水準に落とし込んでの」ここまでのくどくもの解説をご覧いただきたいと申し述べもし(尚、一応解説するが、分母のところの数列記号を用いて表記しているところの計算については $P(H1|D) \times P(H1) + P(H2|D) \times P(H2) + P(H3|D)$

$\times P(H3) + P(H4 | D) \times P(H4) + P(H5 | D) \times P(H5)$ との式を計算するかたちとなりもしており、そちら分母の部の式構成要素、[尤度]であるところの $P(H1 | D)$ から $P(H5 | D)$ については(表に示している通り)Black でそれぞれに 0.03 (3%)、0.015 (1.5%)、0.008 (0.8%)、0.004 (0.4%)、0.002 (0.2%) との値不変の数値設定をなしているわけであるからそちら値を代入し、同じくもの分母にあつての $P(H1)$ から $P(H5)$ については初期設定している事前確率の値、先述の通り、0.03、0.05、0.092、0.3、0.6 の値をまずもって代入し、計算をなしていくのかたちとなる)、話をさらに進める——条件付き確率にまつわる話の部から順々に精読なしているとの向きで、かつ、数式に物怖じしないとの向きが理解に失すといったような話は特段なしていないつもりである——。

表記のような数式計算によって導出されてくる $P(H1 | D)$ 、 $P(H2 | D)$ 、 $P(H3 | D)$ 、 $P(H4 | D)$ 、 $P(H5 | D)$ から事後確率ら(の確率的比率; 確率分布)については

[データが与えられる毎に更新されて次式にあつての事前確率に漸次入れ替わっていく (たとえば X 番目のデータ入力に対する事後確率 $P(H1 | D_x)$ ならば X+1 番目のデータ入力に対する事前確率 $P(D_{x+1} | H1)$ へと漸次入れ替わっていく) との[ベイズ更新](先にその発想法について解説してきた数式処理)]

の対象となるわけであるが、そちら[ベイズ更新]にまつわる計算も

[基本的表計算ソフト(の類)]

を用いることで瞬時・容易になせるようになっている(※)。

(※これが同じくものところよりの三度目の引用になるのだが、下の引用部が[機械計算のベイズ確率論における必需性]についてよくも示すものとなっている。

(直下、2008 年に世に出た英国の数学者兼サイエンス・ライター、そして、スタンフォード大の影響力ある職員でもあるとのキース・デブリンの手になる The Unfinished Game: Pascal, Fermat, and the Seventeenth-Century Letter that Made the World Modern (邦題)『世界を変えた手紙 パスカル、フェルマーと<確率>の誕生』(岩波書店刊行)の 132 頁から 133 頁よりの「再再度の」引用をなすとして)

ベイズの方法は「新たな」仮説の確率をどのように計算するかを教えてくれるのではない。むしろ、新たな情報がもたらされたときに確率を「更新する」方法なのである。まず、ある仮説 H の確率を表す値から出発する。この数値を仮説 H の「事前確率」と呼ぶ。いま、ある新しい情報 E がもたらされたとき、H の確率を更新するための計算をする。この新しい値を「事後確率」と言う。この更新は、ベイズの公式(ベイズ則)として知られる数学的公式に適切な値を代入することで得られる。事前確率は当て推量や見積りでよい。新しい情報が十分に与えられれば、ベイズの更新手続きによって、もっと正確な確率が導かれる。ベイズの方法を繰り返す用いることで(普通はコンピューターを用いる)、相当に乏しい事前確率からでも、毎回新しい情報が得られるたびに、十分に信頼できる事後確率へと変換していくことができるのだ。(とは言え、この方法もコンピュータに頼り過ぎることへの、有名な金言から免れているわけではない。つまり、「ガベージイン、ガベージアウト(ゴミを入れれば、ゴミが出てくる)」。)

この方法は(最初の)事前確率である「種」となる初期値に依存するので、ベイズの方法が知られてから二〇〇年もの間、統計学や確率論分野の人々からほとんどに無視されてきた。しかしながら、一九七〇年代からは、強力なコンピューターによって膨大な量の情報を繰り返して処理できるようになり、しばしば最初の事前確率の不正確さを乗り越えられるようになったため、一般的に広まるようになった。

(引用部はここまでとする 一尚、上の情報 E とは Event (事象) のもじりでそういう表記がなされているものと推し量れるが、ここ本稿では Data の頭文字を取って D と表記しているものがそれに相当する—)

以上の引用部に見るようにコンピューター(による機械式計算)がベイズ確率論における分析に必須なるものとなっていることはお分かりいただけるだろうが、それに関しては、表計算ソフト(マイクロソフトのエクセルに典型例を見出せるスプレッド・シートを特徴とするソフト)で多くの計算に対応できるようになっている。表計算ソフトとくると、世間一般には手軽に単純な表やグラフを製作したり、あるいは、少し高度なところとして入力値に応じて自動数値変換していく経理資料の作成などに役立つものとして生み出されたと勘違いされている向きもいるかもしれないが、表計算ソフトの本来の誕生はベイズ確率論における多層計算のような多層計算を瞬時に済ますことにある(とされている 一細かくはコンシューマー向け表計算ソフトが金融数式効率化のために編み出されたといった表計算ソフトの沿革について各自お調べいただきたい—)

それでは表計算ソフト — 表計算にあつての代表的オープンソース、(いくつもの行政組織および堅い筋目の企業でも導入されているとの) Open Office .org の Calc — を用いて以下、(話を極めて単純化させてのここ確率論の肝となるところとして)、確率分布の一例摘示をなしてみることとする。

(確率分布の具体的計算の呈示にあたっては) 数式に

[現実世界で特定されているところのデータら (事象)]

を当てはめて考えると、その背景に一体全体、どういう確率的状況があると推測されることになるのかの説明をなすこととする。

これら[黒]
[灰][白]
らの導出プロセスについては【所定の情報処理手順】(本書 p.373 から p.394 で呈示の【所与の処理手順】)を経ることで【データの入力】— p.395 から p.400 にて一覧表記して例示の【データの入力】— からいかように「機械的に」導出されてくるのか細かい解説をなしているものである。

その点、顧慮対象とするデータとしては先述のところとして既に導出の具体的プロセスを紹介していた関係性の判断材料ら(事象ら)としての、

[黒] [黒] [白] [黒] [灰] [黒] [黒] [黒] [黒] [黒] [灰]

との要素データをまずもって試しに入力してみることにする — ベイズ推定一般公式([14]式)に本稿で延々呈示してきた計数的特性を反映させている中でそちらに表記の事象ら検出結果を順々に代入し、(意味合いについてくどいほどに書き記してきたところの)[ベイズ更新]を働かせながらもの計算をなしてみることとする— 。

すると、下のような結果が導出される。はなから明日などない。

		P(H1 D)	P(H2 D)	P(H3 D)	P(H4 D)	P(H5 D)	Sum
1	black	0.02726446531	0.02272038776	0.22296273856	0.36352620418	0.36352620418	1
2	black	0.15964051321	0.06651688051	0.34813457104	0.28380535683	0.14190267841	1
1	white	0.15251837540	0.06491597519	0.35048491854	0.28747071568	0.14461001519	1
3	black	0.46726140096	0.09943959026	0.28633590084	0.11742757247	0.02953553547	1
1	grey	0.69330831091	0.12910227004	0.12745696051	0.04355886863	0.00657358991	1
4	black	0.86870501622	0.08088161343	0.04258711426	0.00727714872	0.00054910737	1
5	black	0.94269806577	0.04388540363	0.01232387350	0.00105293188	0.00003972522	1
6	black	0.97379104527	0.02266643723	0.00339476038	0.00014502143	0.00000273570	1
7	black	0.98756856305	0.01149356474	0.00091807749	0.00001960976	0.00000018496	1
8	black	0.99396693391	0.00578401527	0.00024640683	0.00000263158	0.00000001241	1
2	grey	0.99485979164	0.00506555956	0.00007398845	0.00000065848	0.00000000186	1

上記表が意味するところは

「何も未だ判断材料がない」ところで [黒] [黒] [白] [黒] [灰] [黒] [黒] [黒] [黒] [黒] [黒] [灰] と順序でデータが与えられていくと、仮説 H1 ならば、その相対的成立可能性 — それより

も楽観的な見方を呈しているとの他の仮説らに比しての成立のしやすさ・しにくさにまつわっての可能性— の値が（初期確率 0.3%から）、

0.02726446531 (2.7%) → 0.15964051321 (15.9%) → 0.15251837540 (15.2%) →
0.46726140096 (46.7%) → 0.69330831091 (69.3%) → 0.86870501622 (86.8%) →
0.94269806577 (94.2%) → 0.97379104527 (97.3%) → 0.98756856305 (98.7%) →
0.99396693391 (99.3%) → 0.99485979164 (99.4%)

とのかたちで増大していく」

とのことである（※ ここまで細々と解説してきたとの [14] 式の意味合いが分かっているとの向きにはいちいち説明をなす必要もないとのことだが、一応、次のこと、言及しておく → [尤度]との物差しで計数的に現実社会のありうべき物事の比率を考えもしてみた場合、そう、ある一定の計数的目分量でとらえられる環境（たとえば、特定有害物質は～%で含まれているといった計数的なかたちでとらえられる環境）が検出データの背後の実体的状況となっているのであろうと明確なモデルらを構築した場合に、そうした計数的目分量で見た環境が仮説 1 で持ち出しているような領分（あるいはそこから領分以上に悲観的なるところ）の範疇に入っている可能性が過半を占めると実際の現実世界のデータから予測されてくる（サンプルを取った屋外環境の標本から特定有害物質が～%で検出されたがゆえに予測されてくるといったことに通ずる式で予測されてくる）、「実体的なデータの現実的捕捉の動向によれば」それよりも楽観的なるところの範疇に入っている場合に比してより悲観的な H1 に落ち込む可能性が 100%中、99.4%を占めると計数的に厳密に予測されてくるというのが上にての [P(H1|D)] の変遷の意味となる — ただしもってそのような見積もりは暫定的なものにしかすぎず、データを入力している中途段階でそれだけしかデータがないと想定した場合の状況の話に留まってもいる— ）。

既に本稿の先の段で呈示しているようなデータ「のみ」が与えられているのならば、

H1: 明らかに [執拗なる意志] の賜物がゆえに「特定の」事実関係が現出していると判じられる（判断の確度としては [明らかである] [歴然としている] とのこと「強」）

が成立する可能性が 99.4%超とのことになる（ [他のより楽観的な仮説らが真たるものとして背景にある確率] に対して仮説 H1 の示す帰結が導出データの背景にある可能性が —他の H2 から H5 の成立確率が残余の 0.6%未滿のパイを分け合う中で— 99.4%超を占めるとのことである）との上のような確率が呈示されてくる中では H1 —客観的に導出できるとの事実関係の数的側面に着目して尤度設定している仮説— の成立する目算が

「必定。」

「それでなければおかしい」

と受け取れるくらいに高くもなるのだが、無論、「他の」反証となるデータが与えられてくると話は異なってくる（ベイズ確率論はデータによって問題となる確率が絶えず更新されていく確率論であると先立って申し述べたとおりである）。

ここでは「反証となる」(H1 を否定する方向、すなわち、本稿にての訴求事項を重大なものに見なさせしめないとの意味で「反証となる」)膨大なダミーデータを入力するとどうということになるかとのモデル呈示をなすこととしてみる。

ただもって、そちら [膨大なダミーデータ入力によるモデル呈示] をなす前に以下の二点のことを説明する必要があると思うのでそうすることとする。

(膨大なダミーデータ投入に先立って説明しておく必要があるととらえることとして)

- ・(一点目)ここでの確率的分析にあつてはデータ入力の「順序」は「数多のデータ入力プロセスの中では」確率の変動比率にほとんど影響を与えない。確率の変動比率に強くも影響を与えるのはデータの属性(判断材料 Black,Grey,White の属性)それ自体だけである。
- ・(二点目)ここでの確率論分析では「膨大なデータ入力方法、および、データ入力に対する瞬時の計算結果導出方法」を含めて「誰でも容易に再現できるだけの手順」を示したうえで話をなしていくとのものとなる。

まず上記一点目から説明なすが、つい直上の段にて筆者は

[厳密に仮説の計数的定義(そして、そうもした計数的定義のさらに前提となるデータ(事象)の切り分け・導出の手法の明確化)をなした]

うえで所与の状況、(既に切り分けのプロセスを呈示してみせたところの事象としての)[黒][黒][白][黒][灰][黒][黒][黒][黒][黒][黒][灰]との事象がそこにあつた場合、そして、それだけしか顧慮しなかつた場合、極めて悲観的な(それに対処しない種族に明日などあるわけがないとの意で極めて悲観的な)H1の相対的成立可能性 —より楽観的な他の仮説らに対しての成立のしやすさの割合— が99.4%になるとのこと、申し述べた。

だが、そうしたH1成立の99.4%の可能性は

[関係性密結合(濃厚なる関係がみとめられる状況)に反する関係性「疎」結合(関係はあるも希薄であるとの状況)]

にまつわるものたる[白]のデータが与えられていく度に漸減を見ていく(：何故、そうした確率論における仮説の定義を計数的になしているのか、尤度設定をなしているのかのコンセプトの説明も先立ってなしている。猛獣の生息密度が異常に緊密な環境に置かれれば喰われて殺される可能性が増えるが、それらの生息密度が低くなれば襲われる可能性は縮減していく、そういうことにもある種、通底するところとして【似たような関係性ではあるもそれは「偶然を出ない」疎結合であるとの関係性】が数多くも特定化されれば、「一部みとめられる凶悪な皆殺しオペレーション実施の表現形式ともとれる堂に入った関係性」の意味合いがたまさかそうも見えるようになっていくとの可能性、筆者のような人間が物事を偏執的に危惧しすぎているとの可能性が高まる、それゆえに楽観視ができるとの論法である)。

そうした反証となるデータが続々と呈示されてくる状況でそれらデータが膨大な数に及ぶのであれば、H1は限りなく0%に近い値にも縮減していく(ようにバイズ推定計算式にての[尤度]設定を本稿では敢えてもなしている — [白]データが出ると尤度としてより低い[白]比率を設定している仮説らの成立にまつわる事後確率が縮減していくのは数式の問題として必定である—)。

といった縮減プロセスにあつては、である。データが与えられてくる【順序】が大きくも影響しているということはない(直にコンピューター表計算ソフトを用いて計算をなしている人間としても請け合う)。

たとえば、

[[黒]ばかりのデータが最初に連続集中して入力されているケース]

と

[大量の反証データの入力がなされる中で[黒]のデータがまばらにての形式で入力されているケース]

の両ケース間で(白の尤度を最も低く設定している)仮説H1の成立可能性の縮減率が大きくも変わっていくとのことはない。

同じくものことにまつわつては

『情報(事象)としての[黒]ラベル付きばかりが連続して投入されれば、いくら大量の反証デー

タが入力されても H1 が覆しがたくもなり、他面、[黒] のデータがまばらに入力されているのなら、「黒のデータの総数自体に変動はなくとも」H1 は比較的、否定しやすくなっている、そういうこともあるのかもしれないのでは . . . ? 』

といった誤解を抱く向きもあるかもしれない — 換言すれば、確率論的な詐欺を働くような式として特定材料の「意識的」選択集中投下のやりようが悪用されるのではないかととらえる向きもあるかもしれない —

それゆえ繰り返しもってして述べておくが、ここでの確率論的分析モデルではデータ入力順序はあまり意味をなさないものである。Black, Grey, White が 1000 ある中で、たとえば、最初に Black を一挙に 10 単位投入しようと、1000 の中にばらばらにまぶして計 10 単位投入しようと 1000 単位の入力となされた上での結果には異動は「計数的に」何ら生じない（異動が生じ得るとしたならば、データ入力直後の値の出方だけであり、[1000 番目のデータが入力された時点] での確率分布に異動が生じることはなんら無い）。

ベイズ推定がデータの入力順序に影響を受けるようなものであるのならば、元より、ベイズ推定は実用に堪ええないとのことになるだろうが、そんなことはないのである。

ここでは高校卒業程度の知識でもってしても理解出来るところに単純化させてはいるつもりなのだが、よりもって単純化しての、というより直覺的な物言いと言い換えれば、である。後の段にて具体的計算事例を引き合いにデータ呈示もなす所存だが、

[墨汁・真水をコップの中にそれぞれに垂らしていき、最終的な濁り度合いから状況の見通し度合いを論じる(より黒くも濁っている方が状況は芳しいものではないとのことである)との際に水滴の投入順序はさして意をなさない]

といったことに通底するのがここでの確率論の性質と見てもらってもいい (: 「問題なのは、」[厳密に計数的に定義される仮説らの間の相対的確率論的比率としてどういうモデル(仮説)が [現実的状況] に合致するものとして導きだせるか指し示す] とのことにある、としつつも、である)。

次いで上記二点目 — ここでの確率論分析では「膨大なデータ入力方法、および、データ入力に対する瞬時の計算結果導出方法」を含めて「誰でも容易に再現できるだけの手順」を示したうえでの話をなしていくとの点 — についてだが、ここよりなすのも

[基本的数学概念に基づいての単純な話]

であるのではあるが、いかにして同文の計算結果が機械的に瞬時に導出できるのか、ある程度の器用さ (表計算ソフトのようなものを日常的に操作する必要がある社会人や学生に「最低限」求められる程度の器用さでもいい) を伴った人間ならば易くも再現できるとの計算再現手順を一応、事細かに下の枠内部で呈示しておく (筆者以外が再現できないようなことを説明しても納得なしがたいと思う向きもいるか、と思いつつ、である)。

もし筆者の計算結果を再現・追試したいとの向きがおられるならば、まずもって以下の通りの表計算ソフト・スプレッドシート(表形式データ)をそのまま踏襲させるかたちで用意してもらいたい (: もし表記計算ソフトの基本的操作方法が分かっていないということであるのならば、A から G までの表記をなしているアルファベットの [列] の部のアルファベット順序および 1 から順々に続いていく [行] の部の順序とセル内表記 (マス目内表記) を含めて完全踏襲するとかたちにての表計算ファイルを用意いただきたい — 但し、ここで呈示しているスプレッドシートはマイクロソフトの Excel の表記方法とは微妙に異なる書式を用いるソフトウェア、無償完全利用可能である、それがゆえにここでの例示に用いることとした Open Office. Org 表計算ソフト Calc (カルク) のスプレッドシート(の表記方法解説図) であるため、表計算ソフト Excel を用いるとかたちでの再現を試みるのならば、[セル B18] (縦 [B] の列の横 [18] 番目の行) から [F18] (縦 [F] の列の横 [18] 番目の行) の 5 つのセルの部にあってだけは [;] (セミコロン) 表記の部を [,] (カンマ) 表記に変換していただきたい —) 。

フリーの表計算ソフトウェアを用いての [具体的計算「再現」方法] として
calculation method using "OpenOffice.org Calc"
 (Free and open-source software)

Step1 Prepare the stylesheet (like below)

	A	B	C	D	E	F	G	
1								
2		H1	H2	H3	H4	H5		
3	black	30	15	8	4	2		
4	white	930	950	980	986	992		
5	grey	40	35	12	10	6		
6		仮説H1からH5のLikelihood [尤度] (%表記)						
7		P(D H1)	P(D H2)	P(D H3)	P(D H4)	P(D H5)		
8	black	0.03	0.015	0.008	0.004	0.002		
9	white	0.93	0.95	0.98	0.986	0.992		
10	grey	0.04	0.035	0.012	0.01	0.006		
11	sum	1.0(100%)	1.0(100%)	1.0(100%)	1.0(100%)	1.0(100%)		
12	仮説H1からH5のPrior probability [事前確率] (ベイズ更新により順次、データがインプットされる毎に更新(Update))							
13		P(H1)	P(H2)	P(H3)	P(H4)	P(H5)		
14		0.003	0.005	0.092	0.3	0.6		
15	H1からH5の [事前確率] のProbability distribution 確率分布							
16		P(H1 D)	P(H2 D)	P(H3 D)	P(H4 D)	P(H5 D)	Sum	
17	P(H)	0.003	0.005	0.092	0.3	0.6		
18	black							
19	black							
20	white							
21	black							
22	grey							
23	black							
24	black							
25	black							
26	black							
27	black							
28	grey							

input

=IF(\$A18="white";B\$4*B17/(\$B\$4*B17+\$C\$4*C17+\$D\$4*D17+\$E\$4*E17+\$F\$4*F17); IF(\$A18="black";B\$3*B17/(\$B\$3*B17+\$C\$3*C17+\$D\$3*D17+\$E\$3*E17+\$F\$3*F17); IF(\$A18="grey"; B\$5*B17/(\$B\$5*B17+\$C\$5*C17+\$D\$5*D17+\$E\$5*E17+\$F\$5*F17);""))

input (-)

=IF(\$A18="white";C\$4*C17/(\$B\$4*B17+\$C\$4*C17+\$D\$4*D17+\$E\$4*E17+\$F\$4*F17); IF(\$A18="black";C\$3*C17/(\$B\$3*B17+\$C\$3*C17+\$D\$3*D17+\$E\$3*E17+\$F\$3*F17); IF(\$A18="grey";C\$5*C17/(\$B\$5*B17+\$C\$5*C17+\$D\$5*D17+\$E\$5*E17+\$F\$5*F17);""))

input (---)

=IF(\$A18="white";D\$4*D17/(\$B\$4*B17+\$C\$4*C17+\$D\$4*D17+\$E\$4*E17+\$F\$4*F17); IF(\$A18="black";D\$3*D17/(\$B\$3*B17+\$C\$3*C17+\$D\$3*D17+\$E\$3*E17+\$F\$3*F17);IF(\$A18="grey";D\$5*D17/(\$B\$5*B17+\$C\$5*C17+\$D\$5*D17+\$E\$5*E17+\$F\$5*F17);""))

input (----)

=IF(\$A18="white";E\$4*E17/(\$B\$4*B17+\$C\$4*C17+\$D\$4*D17+\$E\$4*E17+\$F\$4*F17); IF(\$A18="black";E\$3*E17/(\$B\$3*B17+\$C\$3*C17+\$D\$3*D17+\$E\$3*E17+\$F\$3*F17);IF(\$A18="grey";E\$5*E17/(\$B\$5*B17+\$C\$5*C17+\$D\$5*D17+\$E\$5*E17+\$F\$5*F17);""))

input (-----)

=IF(\$A18="white";F\$4*F17/(\$B\$4*B17+\$C\$4*C17+\$D\$4*D17+\$E\$4*E17+\$F\$4*F17); IF(\$A18="black";F\$3*F17/(\$B\$3*B17+\$C\$3*C17+\$D\$3*D17+\$E\$3*E17+\$F\$3*F17); IF(\$A18="grey";F\$5*F17/(\$B\$5*B17+\$C\$5*C17+\$D\$5*D17+\$E\$5*E17+\$F\$5*F17);""))

= B18+C18+D18+E18+E19

多くの表計算ソフトにて共通の機能として提供されている [相対参照] と [絶対参照] の機能を用いつつもここでは

$$P(H_i|D) = \frac{P(D|H_i) P(H_i)}{\sum_{i=1}^5 P(D|H_i) P(H_i)}$$

との [ベイズ推定の一般公式] と同じくもの計算が結果的になされるようにしている (: P (H | D) のDの部、データ属性については表計算ソフトの基本的関数であるIF関数を用いて [材料Blackデータ] [材料Greyデータ] [材料Whiteデータ] との事後入力されてくるデータに応じて式への代入値が融通無碍 (ゆうずうむげ) に変化するように設定している。P (D | H) の部は比率が反映される) 。
 以上の記述部にあつては大して高度なことを述べているわけではない ([知識] の面では [大学初歩の数学] と [表計算ソフトの基本的な扱い方] についての知識があれば誰なく理解できるとの話をなしているにすぎない。さらに述べれば、 [完全把握] に必要な数学概念としては高等学校で学習し終えること「のみ」を応用しているにすぎないとの話にとどまりもする。——そして、本稿では順を追って検討すれば、高等学校レベルの人間でも理解できるだけの解説を段階説明方式にて懇切丁寧になしているつもりである (基本的な [条件確率の概念説明] から入り、 [ベイズ確率論の発想法] に至るまでの説明を懇切丁寧になしもしているからである) ——) 。

上掲のスプレッドシート —表計算の[列]属性(AからGの属性)および表計算の[行]ナンバリング(1からはじまってるナンバリング)をそのまま踏襲するとかたちでセル(表計算ソフトのマス目)内表記を再現することで全く同一の計算手順機械化手段が得られるように調整しているとのスプレッドシート(表書式)— ではB18からF18のセルにて([A18のセルでの記述が White か Black か Grey かに呼応するようになっている IF 書式] での分岐を設けて) 尤度計算に用いられるデータのありようを規定している(除算にて比率的に尤度設定の Black から Grey のどの部の数値が反映されてくるかを規定している)。

A 列の black や grey の記述を表記のスプレッドシートを利用する者が操作することで、に応じて、各仮説毎に固有に定められた P(H) の値が ([black] [grey] [white] との [入力データ] に照応するかたちで) 変動する、そして、その結果、ベイズ推定にまつわる一般公式 ([14] と振ってその意味合いにつき本稿で実にもってくどく細かくも解説してきたとの式) より応分の [事後確率 —データ特定後の各仮説 (H1 から H5) それぞれの相対的成立比率を示す P(H|D) —] が自動的に導出されるように書式規定しているわけである (のようなやりようは慣れた人間には別段、高度なことではないと受け取れる、オンライン上には英文でのベイズ確率計算用のエクセル形式ファイルなどが公開されていたりしている (無論、筆者もそちらダウンロードして参考に供している) ところとなっている) 。

初期値の問題に関わるところで言い換えなせば、である。同じくものスプレッドシートでは A18 のセルの内容 (IF 書式でそれらへの反応を規定している black, grey, white) に基づき、B18 から F18 にあって

表計算ソフト表記数値の比率問題で同じくもの結果が導出されるようにしている [ベイズ推定の事後確率の基本式] の再掲

$$P(H_i|D) = \frac{P(D|H_i) P(H_i)}{\sum_{i=1}^n P(D|H_i) P(H_i)}$$

(ここでの簡易モデルでは仮説 (Hypothesis) は5つ設けているとのことで nは5として設定し、P (D|H1) P (H1) からP (D|5) P (H5) の和を計算する)

とのベイズ推定の基本公式 ([14]式) と全く同様の計算結果が —仮説 H1 から H5 の相対的成立確率に紐付くものとして— 出てくるように設定している。

細かくもの書式内容について分け入っての解説をなせば (俗塵にまみれたハウツー的なことを、下賤なる小手先の技のことをなにを延々と... などと高尚を気取る向きには馬鹿にされてしまうことかとも承知の上で、そして、そうした記述は大局的視野でもってして【致命的な事態】を訴えるべくものしている本稿には不釣り合いなものであるとのことも承知のうえで敢えてもってして細々とした分け入っての解説をなせば)、 同じくものスプレッドシートでは B18 から F18 のセル(マス目)にて表計算ソフトにて頻用される絶対参照・相対参照の書式 ([\$ マークによってマウス操作だけで作動させられる自動計算の自動改変機能がどこまで及ぶようにするか規定する] との [絶対参照] [相対参照] 書式を用いての基本的書式) にて自動計算にて同じくもの計算結果が簡単に導出されるように調整している —絶対参照と相対参照の違いを微妙に設けることで直前式解答(直上のセルの内容)が次式に代入されるように調整している (B18 のセルの計算結果が次の B19 のセルで示される計算結果に反映されるように調整している等等) といった按配にて、である) — 。

(以上細々と書いてしまったが、[小手先だけの技術論] (あるいは技術論と呼ぶにも値しない[ハウツー的方法論]か) に傾きすぎているきらいもあるかと当然に判じ、上のそれ以上の表計算ソフトの具体的振る舞いそれ自体についての記述は避ける (ここでの確率論がベイズ「統計」の応用、Bayesian search theory 等等(実際に

沈んだ原潜スコーピオン号の搜索などに応用された手法)などの高度なやりように通暁している向きらにとり【児戯にも等しきもの】であることを慮りつつ、そう、用いている数学概念や数式それ自体の誤解を招きかねない[単純さ]のこともあるため、誤解を招いても詰まらぬかと小手先の方法論にまつわっての記述はこれ以上は避ける——本稿のコンセプトは[高等学校卒業レベルの人間にも理解できる説明]を講じることにあると先立って申し述べもしている中であるがゆえに恥じ、慚愧(ざんき)の念に苦しめられるといった心境を抱いているわけではないのであるも、この身、筆者には[マス(衆人)のロゴス(理性)にではなくパトス(情念)の機微を重んずるといったサービス精神を一切抜きにした、耳に苦しいことをひたすらに理性的に詳説しようとの本稿のようなもの]では低レベルの話をなすのに逡巡する心情が強くもある——)。としつつ、
「いちいちもって深くも考える必要もなく[機械、表計算ソフト風情にやらせればいい]との単純な部である(とされるような事柄ら)は全て無視したうえで」
ただ単純に上記の表に見るB18からF18のセルに入力する、
[=(イコール)以下のIF文に特色がある式ら]
をそのままに転用してもらっただけでも筆者と同文の計算結果が得られるであろうとだけ、とにかくもってして、申し述べておく)

上にて呈示のスプレッドシート(表計算書式)に対して
[マウス操作]

による以下のような単純操作をなせば、膨大な計算(単純計算)の解答、手計算でなせば、文字通り日も暮れようとの手間暇がかかるとの解答が瞬時に導出されてくる。

calculation method using "OpenOffice.org Calc" (Free and open-source software)

Step2

	A	B	C	D	E	F	G
1							
2		H1	H2	H3	H4	H5	
3	black	30	15	8	4	2	
4	white	930	950	980	986	992	
5	grey	40	35	12	10	6	
6							
7		P(D H1)	P(D H2)	P(D H3)	P(D H4)	P(D H5)	
8	black	0.03	0.015	0.008	0.004	0.002	
9	white	0.93	0.95	0.98	0.986	0.992	
10	grey	0.04	0.035	0.012	0.01	0.006	
11	sum	1.0(100%)	1.0(100%)	1.0(100%)	1.0(100%)	1.0(100%)	
12							
13		P(H1)	P(H2)	P(H3)	P(H4)	P(H5)	
14		0.003	0.005	0.092	0.3	0.6	
15							
16		P(H1 D)	P(H2 D)	P(H3 D)	P(H4 D)	P(H5 D)	Sum
17	P(H)	0.003	0.005	0.092	0.3	0.6	
18	black	0.02726446531	0.02272038776	0.22296273856	0.36352620418	0.36352620418	1
19	black						
20	white						
21	black						
22	grey						
23	black						
24	black						
25	black						
26	black						
27	black						
28	grey						

(1) : select cells with a mouse

(2) : drag

尚、瞬時的に導出されてくる計算結果は次のようなものになる（先にて呈示した表と同様のものである）。

calculation method using "OpenOffice.org Calc"

	A	B	C	D	E	F	G
1							
2		H1	H2	H3	H4	H5	
3	black	30	15	8	4	2	
4	white	930	950	980	986	992	
5	grey	40	35	12	10	6	
6							
7		P(D H1)	P(D H2)	P(D H3)	P(D H4)	P(D H5)	
8	black	0.03	0.015	0.008	0.004	0.002	
9	white	0.93	0.95	0.98	0.986	0.992	
10	grey	0.04	0.035	0.012	0.01	0.006	
11	sum	1.0(100%)	1.0(100%)	1.0(100%)	1.0(100%)	1.0(100%)	
12							
13		P(H1)	P(H2)	P(H3)	P(H4)	P(H5)	
14		0.003	0.005	0.092	0.3	0.6	
15							
16		P(H1 D)	P(H2 D)	P(H3 D)	P(H4 D)	P(H5 D)	Sum
17	P(H)	0.003	0.005	0.092	0.3	0.6	
18	black	0.02726446531	0.02272038776	0.22296273856	0.36352620418	0.36352620418	1
19	black	0.15964051321	0.06651688051	0.34813457104	0.28380535683	0.14190267841	1
20	white	0.15251837540	0.06491597519	0.35048491854	0.28747071568	0.14461001519	1
21	black	0.46726140096	0.09943959026	0.28633590084	0.11742757247	0.02953553547	1
22	grey	0.69330831091	0.12910227004	0.12745696051	0.04355886863	0.00657358991	1
23	black	0.86870501622	0.08088161343	0.04258711426	0.00727714872	0.00054910737	1
24	black	0.94269806577	0.04388540363	0.01232387350	0.00105293188	0.00003972522	1
25	black	0.97379104527	0.02266643723	0.00339476038	0.00014502143	0.00000273570	1
26	black	0.98756856305	0.01149356474	0.00091807749	0.00001960976	0.00000018496	1
27	black	0.99396693391	0.00578401527	0.00024640683	0.00000263158	0.00000001241	1

finished.

上にての枠内表記部をもってして膨大なデータ入力に先立っての話としての、

・(一点目)ここでの確率的分析にあつてはデータ入力の「順序」は「数多のデータ入力プロセスの中では」確率の変動比率にほとんど影響を与えない。確率の変動比率に強くも影響を与えるのはデータの属性(判断材料 Black, Grey, White の属性)それ自体だけである。

・(二点目)ここでの確率論分析では「膨大なデータ入力方法、および、データ入力に対する瞬時の計算結果導出方法」を含めて「誰でも容易に再現できるだけの手順」を示したうえで話をなしていくとのものとなる。

との点らにあつての二点目の点についての解説(兼・断り書き)の部としておく。

それではこれより 一直上にて具体的手法を解説した表計算ソフトによる計算方式を利用したうえで

[H1 成立にとってその反証材料となる材料 White のデータ]

を 1000 単位、ダミーデータとして投入、その確率分布の推移を見てみることにしよう(※)。

※材料 White のデータを 1000 単位用意するとのことがどういうことか、と述べれば、である。

そうした状況は

【第三者が容易に確認出来る刊行物とのかたちで流通している日本語文字数換算にして1万字以上(英語単語数においては3000語以上)の過去の「文献」記録(古典から現代小説などフィクション、そして、特定のトピックについて解説を加えているノン・フィクションら問わずもの文物)】

あるいは

【第三者が容易に確認できる商業作品として市場市中に流通している過去の「映像」記録(映画作品など)】

のいずれかにあたり、そして、先行して顧慮したものと差異が乏しい引用情報・仄聞(伝聞)情報を扱っているとの(公)文書を除外したもの

であるとの要件を充足し、かつもってして、

要素B:[[ブラックホール] ないし [ワームホール] ないし(機序不明概念としての)[異界との扉]のどれか一つないし複数と明示的に結びつけられている] (e.g. [特定フィクションが[ワームホール]を登場させている] [特定ノンフィクションが[ブラックホール]を作中の主要テーマに据えている] 等等)

要素C:[粒子加速器と結びついている] (e.g. [特定文物が粒子加速器に関わるものである] 等等)

要素D:[アトランティスと命名されての概念と関わっている] (e.g. [特定フィクションが[伝説の沈んだ大陸アトランティス]に目立って言及している] 等等)

要素E:[古のトロイアにまつわる伝承との結節(1.【叙事詩『イリアス』というトロイア崩壊にまつわるプロセスを扱った古典の際立っての構成要素】あるいは2.【叙事詩『オデュッセイア』というトロイア崩壊にまつわるプロセスを扱った古典の際立っての要素】などとの結節)を色濃くも具備している] (e.g. [特定フィクションが[トロイアの木製の馬]と直接的に結びつく作中要素を具備している] [特定フィクションが叙事詩『オデュッセイア』や叙事詩『イリアス』(の主要登場キャラクター)と結びついている] 等等)

要素F:[ヘラクレスの12功業と直接的に関わっているとの特性を具備している] (e.g. [特定文物がヘラクレス第11功業と関わる] 等等)

要素G:[爬虫類の知的異種族([聖書の蛇]や[悪魔]といった存在は除く)と濃厚に結びついている] (e.g. [特定フィクションが知能を持った蛇の種族を登場させている] 等等)

要素H:[垣根としての五芒星・五角形と濃厚に結びついている] (e.g. [特定フィクションが垣根としての五角形を作中の重要要素に据えている] 等等)

の各要素のうち、僅か一要素でも具備している. . . .との作品を計二作ほど、特定・捕捉したとのその事実をもってして一単位ずつ導出されてきもする、

(膨大なるダミーデータの中身としてまさしくも問題となる)

[特定事実関係蓋然性「弱」の関係性判断材料(便宜的に[判断材料 White オプション]と呼称)]

を 1000 単位程、切り分けているとのその状況を指す（：ただし、にまつわってはカウ
ントの対象外となる留保条件を付けてもいる。すなわち、要素 B —ブラックホール
関連の要素— や要素 C —加速器関連の要素— にまつわる文物らを繋ぎ合せる
ことは非常に易くなっている（ように見えもする）ために、要素 B および要素 C 絡みの
科学論文・研究機関発表文書などノン・フィクション分野のデータは敢えても除外する
（よう処理手順を定めている；反言すれば、要素 B および要素 C の共有でもフィクショ
ンに限ってはそれを許容するとのかたちで手順を定めている）。要素 B [[ブラック
ホール]ないし[ワームホール]のどれか一つないし複数と明示的に結びつけられてい
る]および要素 C [粒子加速器と結びついている] と関わるものとして扱っているノン・
フィクションの数はそれこそ日々大量に「量産」されており、そのような[ありふれたも
の]を意味判断の材料にすることはできないとの判断があるからである——極論すれ
ば、「最近刊行された加速器実験関連の特定研究者論文と過去に刊行された加速器
関連の解説書籍をつなぎあわせて、それらには要素 C の共有がみとめられる、だから、
[恣意性][偶然性]の是非を決めるうえでの恣意性否定の論拠となるかたちで情報処
理できる」とはなせないだろうと判じられもする——）。

（→ここでの White1000 単位投入とのダミーデータ投入事例については
要素 B から要素 H までのいずれかひとつの要素を共有している作品らを
各々二作品ワンセットになっているものとして 1000 作品ずつ、すなわち、
[計 2000 の特定の色のついた作品ら]を呈示しなければならないとの状況
でそれができているとのことを念頭に置いている——またもってして述べて
おくが、先にアルゴリズム呈示したように事象の捕捉に際してはその基礎と
なる関係性を重複顧慮出来ないようにしてもいる（わけだが、問題となる
関係性を導出するのは比較的、というより、かなり易い。たとえば、アラン
ティスを作中モチーフとして重きに置いている作品は現代文化事象として
数多あり、そちらは Wikipedia などにも具体的事例が多く載せられている）
—）

超高性能コンピューターをその探査のためだけに働かせるか、あるいは、それ専従
の有志がある程度数結束しているとの状況でなければ、問題となる関係性を 1000
単位導出・呈示する（問題とする文物らを 2000 単位導出・呈示する）ことはできないだ
ろうが、ただもってして、その探索それ自体はそれほどまでに難事とはならぬであらう
との式で

[判断材料 White]

導出供与材料はこの世界に数多あると考えられる（ただし筆者の目文量ではそれ
でも 2500 単位ぐらいから探索は困難になる、要するに、5000 作品以上、該当作品を特
定することは難しかろうとの観点がありもする）。

さて、筆者は既に判断材料 Black を 8 単位、判断材料 Grey を 2 単位、そして、判断材料 White を 1
単位を（それらが捕捉できるとの実状と共に）示して仮説 H1 から仮説 H5 のベイズ推定における確率
分布がどうなるかの指摘をなしている。その指摘のプロセスで H1 の[初期確率]を 1000 の内 3 つ、
0.3%と置いた段階から H1 の事後確率——換言すれば、恣意でなければ成立し難いような関係性が常
軌を逸して数多成立しており、それによって執拗かつ嗜虐的に殺害予告に等しき行為がなされている
のが示唆されているとのこと（がデータ現出の背後にあるとのこと）にまつわっての仮説—— が 99.4%
にまで増大するとの[ベイズ更新]が発生している（上の解説部を参照のこと）とのことも述べている。

そうした状況に加えもして 1000 単位、H1 の成立を強くも否定する（代わりに確率分布にて H1 とパ

イを分け合うかたちとなるより楽観的な仮説らの成立可能性を増大させる)材料 White を投入してみるとどうなるのかの話はここではしている。

その結果は下のように計算されてくるとのものである(そうもした計算結果をそのままに瞬時導出可能であるとのものとしての具体的計算書式も上にて呈示しているところとなる)。

ダミーデータを付け加えていく中で判断材料 White の総数が計 223 に到達した時点で H1 の見込みは 10%を下回る(H1 は小数点以下 12 桁まで表示にて 0.098150906025 およそ 9.81%になる)。

その時点 —White が計 223 単位、Black が 8 単位、Grey が 2 単位ほど投入されている時点— で H2 の見込みは 0.056258177004(およそ 5.6%)、H3 の見込みは 0.817091335143(およそ 81.7%)、H4 の見込みは 0.028192833562(およそ 2.8%)、H5 の見込みは 0.000306748266(およそ 0.03%)へと変じる(ここでは小数点 12 桁を越えての計算をしないでの概数値を挙げており、桁数丸めての%表記の和も厳密には 100%にはならないが、実際には和は 100%になるようになっている)。

White が累計にして 600 単位入力されもしている時点で H1 の見込みは概数値 —小数点以下 12 桁まで表示— で 0.000000000232(0.00000000232%)、すなわち、限りなく 0%に近くもなり、H2 は 0.000000404714(およそ 0.00004%)となり、H3 の成立見込みは 0.723877262523(約 72.3%)、H4 の成立見込みは 0.249401725908(約 24.9%)、H5 の成立見込みは 0.026720606623(約 2.6%)へと変ずる。

さらに表計算ソフトでの瞬時大量計算における結果について記述なせば、最初に入力されたもの以上に新規に Grey も Black も出てきていないとの状況で(膨大なダミーデータ含めての)White が累計にして 1000 単位入力されることになっている時点で H1 の成立見込みはほぼ 0%(1 を 100%としたときに小数点 20 桁まで表示すると 0.00000000000000000002 になるとの「超」極小の値ともなる)になり、同文に H2 の成立見込みもほぼ 0%、H3 の成立見込みは約 10.24%(表計算ソフトの 12 桁表示の概数では 0.102450236371)、H4 の成立見込みは約 40.55%(0.405586212732)、H5 の成立見込みは約 49.1%(0.491963550897)となる。

(※尚、先程にて呈示の計算方法を用いて即時再現なしていただければご理解いただけることかとは思いますが、1000 単位の White のデータを入れた「後」に Black8 単位 Grey2 単位を入れようと、あるいは、White 大量投入の「前」に Black8 単位 Grey2 単位を入れようと、あるいは、1000 ある White の中に Black8 単位 Grey2 単位をまぶして入れようと、「結果的に」出てくる確率分布が H1,H2,H3,H4,H5 それぞれに実質 0%、実質 0%、約 10.3%、約 40.6%、約 49%となりもすることに何ら異同・相違はない)

以上より述べられることは下に表記のようなところとなる。

極々単純化させての確率計算 —確率計算の前提になる情報処理、データ導出プロセスの定義付けにあっては知性の多寡(生き残るために[知識]という名の情報リソースを役立てようとするとの意志の力の働き具合)が大きくも作用するところと見えも

するが、既に切り分けした導出済みデータ〔事象〕に対するやりようとしては高校生程度の数学知識でもってして多くの人間に理解なせようのものへと極々単純化させもしているとの確率計算—の問題として White が 1000 単位程捕捉されている—すなわち、先述の情報処理手順 6 にて White 導出に供される材料らが〔2000 作〕程、捕捉されている—とすると、そして、といった状況下で Black が 8 単位程捕捉され、Grey が 2 単位程捕捉されている(実際にそうした捕捉データは既に「導出手順込みで」呈示している)とのそのケースにあっては、である。

「その時点での情報だけを考える限り」においては

H1:「情報処理の対象となる作品らから情報処理プロセスを経て導出される〔黒〕〔灰〕〔白〕と色づけしての関係性の枠組み内において(ベイズ推定での仮説検証における〔尤度〕設定の問題として) Black3%, Grey4%, White93%の状況を体現したものである」と便宜的に見繕いもしている仮説—自然言語による意味付けとしては〔明らかに〕〔執拗なる意志〕の賜物がゆえに「特定の」事実関係が現出していると断じられる(判断の確度としては〔明らかである〕〔歴然としている〕とのことで「強」)との意味合いを見出しているの仮説—

および

H2:「情報処理の対象となる作品らから情報処理プロセスを経て導出される〔黒〕〔灰〕〔白〕と色づけしての関係性の枠組み内において(ベイズ推定での仮説検証における〔尤度〕設定の問題として) Black1.5%, Grey3.5%, White95%との状況を体現したものである」と便宜的に見繕いもしている仮説—自然言語による意味付けとしては〔おそらく〕〔執拗なる意志〕の賜物がゆえに「特定の」事実関係が現出していると判じられる(判断の確度としては〔おそらくそうであろう〕とのかたちで上の H1 に劣る)との意味合いを見出しているの仮説—

ら成り立つ、「他のより楽観的な状況を考える」仮説とパイを奪わんとするとのかたちで成り立つ可能性は

〔0% (限りなくゼロに近いとのことで実質上の 0%)〕

であるとの分析結果が出てくるとのことであり、といった状況下でも

H3:「情報処理の対象となる作品らから情報処理プロセスを経て導出される〔黒〕〔灰〕〔白〕と色づけしての関係性の枠組み内において(ベイズ推定での仮説検証における〔尤度〕設定の問題として) Black0.8%, Grey1.2%, White98%の状況を体現したものである」と便宜的に見繕いもしている仮説—自然言語による意味付けとしては〔〔執拗なる意志〕か〔部分的思惑の発露〕か〔偶然〕かにつき「予断・楽観的見方をまったく許さない」との灰色の状況に由来するものとして「特定の」事実関係が現出していると想定される(尚、〔この本質〕があまりに重要なものである、すなわち、体系的に〔皆殺しにするとのオペレーションの実施〕にまつわる「執拗な」意思表示がなされてきたか否かに直に関わるとの意であまりに重要なものであるために「予断・楽観的

ここでの確率論を延々それまた解説してきたとの数式言語ではなく日常言語・日常的感覚でもってして把握いただく上で
の要諦としては
〔黒〕〔灰〕〔白〕と観測事実関係にラベル貼りをしての〔事象〕らが一体全体どういう意味合いのものなのか〔事象〕意味合いそれ自体については本書 p.464 から p.469、〔事象〕らを選び集めている理由としては(ここでの確率論の核たる思考法に関わるところとして) 本書 p.473 から p.474 に記述している、また、それら〔事象〕らの比率問題が現実的にどういう状況に通じているのか(事象らの比率問題が現実的にどういう状況に通じているのか、の解説は本書の p.475 から p.483 にてなしている)について理解していただくことに(その要諦が)ある、と強調しておきたい。

見方をなんら許さない」とのことはすなわち[危機の分析と回避]に全力を尽くして然るべき状態と同義である)との意味合いを見出しているの仮説――

が成り立つ可能性は未だに 10%超ほど残置しているとの分析結果が出てきている(正確には小数点以下 12 桁表示で 0.102450236371 となる 10.2 パーセント残置を見ているとのことである)とのことである (:膨大な White のダミデータを入れ込んでの White1000,Black9,Grey2 の状況では Black,Grey の数的比率はおよそ全数 1011 における 11、 1.08%となる. といった中でも Black,Grey が計 2%程存在していると想定しての H3 は(確率論における大数の法則にも屈服せずに)White1000 単位入力の時点でも 10%以上残置し続けているとのことである。但し、[Black オプション 0.4%、Grey オプション 1%(黒色および灰色の比率が全体の 1.4%)、White オプション 98.6%]との状況を想定しての H4 をたとえば、[Black オプション 0.5%、Grey オプション 0.5%(黒色および灰色の比率が全体の 1%)、White オプション 99%]などと表記のデータ入力状況に(そのまま、全くに、といったレベルではないが)「あまりにも近いもの」にわざと改定してしまうと H3 の成立可能性は相対的に「2.9%」にまで落ち込む ―統計学的手法をとってのやりようであれば仮説棄却領域などを見る人間もいるだろう領域に落ち込む、でもいい―。だがもってして、といった確率のあやふやなる有り様の問題は「元より White1000 投入状況とて「も」一時的なる状況に過ぎない」こととして脇に置く(本来ならば「確率論における大数の法則の問題として 1000 における黒 0.8%、灰 0.2%、白 99%の精度の違いは揺るぎがたいものとなっている、であれば、仮説設定を切り替えて、H1 から H5 を 0.8...%、0.2...%、99.....%と小数点 2 桁以下の正確性を問うものに切り替えて何がよもって現実的状况に合致するのか、さらにもの仔細なる分析をなそう」との[より細々とした分析]に移るとのこともあるのか、とも思うのだが、ここではまだサンプル数が少ない、また、異同の生じ度合いが不確実であるとの状況を扱っているため、フロー(変動的状況)の分析からストック(固定的状況)の分析に重きを置く方向に切り替えてのそういう発想法には行かない))。

要するに 1000 単位ほど判断材料 White が連続して出てくる状況を仮現的にシミュレートしても H3 が現実的状况としてそこに成り立ちやすい、あるいは、成り立ちうるとの状況、10%成立(成立しにくいように対立仮説のモデルチェンジを極めて意図的になしても 3%成立)との状況が「所与の」仮説間にては横たわっているとのことになる。

ここで 1000 単位、White を投下した後さらにもって(「それをなすことが「できる」との目分量が実際にある」とのこととして) Black を新たに 7 単位、また、Grey のデータを順次 28 単位投入「できる」としよう(これは自身捕捉しているデータより導き出している私の現実的目分量を反映させての数値である)。すなわち、ここまでの入力データ(本稿の先の段にてそれがいかように導出できるかのプロセスを例示として示してきた Black8 単位および Grey2 単位)と合算して Black を計 15 単位、Grey を計 30 単位程、順次用意できるのだとしてみよう(※)。

※『材料 Grey を 28 単位特定することが易々と出来るのか?それが物理的に出来たとしても、そのような分析を情報量(を規定する手持ち時間)が限られている個人にできるのか?』

と思われる向きもいるかもしれないが、それが比較的易々と出来るようになってきているのが ―その気があるとの式でアテンション(注意力)およびリテラシー(情報真偽判別能力)が働いているとの向きが周囲を望見した際に諸種材料が捕捉できるとの―現代社会というやつである。

たとえば、ここでの確率論的アプローチのようなものに臨んでの標本ら (samples of probalistic approach) の捕捉が容易なところとなっているとのことについては本稿執筆時「現行」、一連のシリーズものとしてオンライン上に流通している (YouTube など画像サイトを介して流通している)、

911 Hidden in Hollywood

という動画シリーズを通してでもってご覧いただければお分かりいただけようが、異論を許さぬクリッピング映像を紹介するとの式で

[911 の先覚「的」言及をなしているハリウッド映画ら]

が数多紹介されているといったことがある 一問題はそれら存在が偶然ないしは (意図ありとてもの) 些細な意図の相乗的発露で済むか否かである (※) 一。

(※たとえば、上にて言及の表記動画シリーズでは半世紀以上前に初出のものである (一九四九年初出とも) 米国アニメ作品である Often an Orphan という作品にて

「ルック! イッツ・ザ・タワー! ゼイ・アー・フォーリング! ウアー」 (「見てよ、タワーだ! ああ崩れていく、ああ、塔が崩れていく! ウアー」)

などと都会恐怖症を患った犬のキャラクターが自分のツインタワー状の耳を掴むなどする所作を伴いながら錯乱しながら全身でぶるぶると震え狂わんばかりに都会を恐怖し、ついには断末魔染みだ叫び声を上げて卒倒してしまうとの描写 (原文表記では Look! It's the towers! THEY'RE FALLING!

[Screams, then collapses onto ground] などと英文 Wikipedia [Often an Orphan] 項目にも現況わざとらしく紹介されている不自然な描写がなされてのパートでゼイアーフォーリング、塔が崩れていくよ! の台詞が発せられる部でツインタワー状の両耳が錯乱した卒倒間近の犬によってつかまれるとの描写) が例示紹介され、短編アニメーションである同一作品でおなじくもの都会恐怖症の犬のキャラクター (チャーリー・ドッグなるキャラクター) が彼をペットにするとしつつもその実、厄介払いしたいとの地方の豚の擬人化キャラクター (ポーキーとして世間一般に認知されているそれ) に「77」が刻字された列車に向けて袋詰めになされて放り込まれる (都会への逆送致が試みられる) などといった描写がなされているといったことも同時に例示紹介されたりしている 一先立って申し述べたように【双子の塔】(1966年に建設起工式が執り行なわれたことも先述のツインタワー) が崩れおちたとの先の911の事件は多重的に【77】という数値と結びついている (そして表記のツインタワー建設着工にかなりもって先立つ、青写真すらなかったとの頃に遡って先立つとの短編漫画作品ではツインタワー状の耳を掴むなどして「塔が崩れる」と喚きつつ卒倒した犬が【77】を刻印された列車に放り込まれるとのありようが具現化している) 一。

そういったことが字義通りこの世界には山とある (そして、うち一部はかなり克明に現物映像が切り抜かれて指摘されている)。

そうもしたことをしてどこまで [偶然の賜物] (only-co-incidenta lなるもの) と見るのか、あるいは、[長期的計画に基づいての恣意的事前言及の賜物] (intentional なるもの) と見るかその判断のありようが肝要となると強調したいのだが、とにかくもってして、事前言及「がかった」予見「的」言及事物がそこら中にざらにあることに違いはない (たとえば、である。国内にての邦画、東映が満を持して1980年に世に出した戦争スペクトル映画『二〇三高地』(往時および今時にてよく知られている大物俳優らが多く顔見せしているバジレットの面でも力の入れようが分かる) との映画 / 数々の人権侵害行為をなしてきたとの大規模宗教団体のプロモーション映画なども撮っ

た監督がメガホンをとっているとの作品)、日露戦争での二〇三高地の泥沼の戦いと愚将との歴史的評価が伴う[殉死]でよく知られた乃木希典やりようが描かれる同映画作品『二〇三高地』のDVDを借りるなどして、の中の、1時間06分45秒経過時以降の5分ほどのシーンをとおして見ていただければお分かりいただけるようなところとしてそこにあっては「両肩に[7]の数値が刻まれた部隊識別ナンバー(兵士の肩における部隊識別ナンバー)をつけた」兵士らがナンバー77と共に[自殺命令に近しき軍令]で特攻していく様が旅順戦地外観地図にあつての(日本軍の)[第1師団][第9師団][第11師団]の地図上の陣地描写の「後に」印象深くも描かれているといったことがあつたりなどもする(911の事件では目立って[77]と結びつくところでの自殺挙動がなされた事件と認知されもしている —ナンバー「9」「11」、ナンバー「77」、特攻による自殺オペレーションとの要素共有がある—)。といったことを[偶然の問題]以上に取り上げるのは無論、馬鹿げていることと見られやすきことかとは思ふ、「勇者は一度しか死なず、臆病者は二度死ぬ」とのシェイクスピアの言ではないが、二度目の死を近々進呈されることになつても、そう、殺されても、[常識]というものに隷従しているような奴原にあつては殊にそう決めつけられることか、とは思ふ。だが、[そういうこと]がそこら中に山とある、そして、そうもした予見描写が言われれば命も差し出そうとの筋目の玩具(おもちゃ)の兵隊のようなものにされた人間らの無謀無為なる自殺挙動が如くものと結びつけられている(スペースモンキーの意味するところとファイト・クラブの話は先だつてなしている)ことが散見されるというがこのふざけた世界である)。

一九八〇年初出の(洋画ではなくにも)邦画にあつての描写にまで筆を割いたのは余事記載も過ぎたところだったかとも思うのだが、そこら中に散見される予見「的」作品の中にあつて、殊に問題になるような作品ら、ヒンターラント(後背地)にあつてごろごろと転がっている予見「的」言及事物らのうち、少なからず存在しているとの「際立って厭なにおいを放っているものら」を多く確率論の材とできるとの判断が(情報収集より)本稿筆者にはある)

その点、本稿では判断材料 Grey の抽出条件 —それなりに厳しくもしているつもりである— として

(処理手順4との手順に関わるところとして)

要素 A: [911の事件の発生を事件発生前に先覚的に言及しているとの要素を具備している] (e.g. [[911]と[双子]との言葉の双方と関わる式での描写を目立ってなしている)[ニューヨークのビル爆発とペンタゴンの攻撃を同時に描き、また、911と親和性が高い数値列を用いている] 等等)

との要素の共有関係が2つの作品らより特定された時点で Grey を一単位導出する]

との条件を設けている。にまつわつて、(遺漏無くもの典拠紹介には手間暇がかかるが問題となる作品らを挙げる分では)造作も無く、Grey はかなりの単位、抽出できるようになっているとのことがあるのがこの世界であると述べたいのである。

ここで既に Black8 単位、Grey2 単位、White1000 単位を投入している段階で Black を追加で7単位、Grey を追加で28単位投入する —くどいが私が手持ちのデータよりそれをさして労苦伴わずに投入

できると踏んでいる追加データ量でもある— とその時点で H1 から H5 モデルの(便宜的に話を単純化させるために離散的にパイを奪い合うようにしている)確率分布は次のようなものに向けて急激に「変位」していく。

H1:約 0.0619%成立見込み有り(小数点以下 12 桁まで表示で 0.000619730307)
H2:約 99.884%成立見込み有り(上と同じくもの表示で 0.998849083781)
H3:約 0.0531%成立見込み有り(同上 0.000531086268)
H4:実質上 0%の成立見込(同上 0.000000099644)
**H5:実質上 0%の成立見込み(小数点 12 桁を越えてもゼロが延々と続
く.0.0000000000 とのかたちで、である)**

White を 1000 単位投入しているとの段階で限りなくゼロに近い状況になっていた H2 の成立可能性が急激に増大、ほぼ H2 成立であろうとの状況に至る(すなわち、仮にもし、White1000 単位(基礎となる作品 2000 作品より抽出しての 1000 単位)、Black15 単位、Grey30 単位しか情報が手元になら[所与の条件の中では H2 ぐらいしか成立しない](としか「その時点では」述べられない)とのことになっている —H2 より楽観的なる仮説は実体的状況としては(所与のデータからは)確率上、ほぼ成り立ちえないとの計算結果が出てくる— とのことである)。

さて、に対して、さらに再び膨大な判断材料 White のダミーデータを投入してみる(投入することができる)とのケースを考える。

ここでは便宜的に White をさらにもってして
「1500 単位」

投入してみる、それができるのだとしてみよう —何故、1500 単位なのかと述べれば、White を易々と導出できるとのひとつの限界線は計 2500 近辺にあるのではないか(先述の処理手順 6 で明確に白ラベルを貼れもする作品らの易々とした特定のひとつの限界線は 2500 単位導入するための「5000 作品」が限界なのではないか)との筆者の[おおよその目測]があるからである(ただし実体はさらに多く、ないし、少なくなっているとの可能性の双方がある)——。

とすると、そう、「さらにもって」White を漸次 1500 単位程投入できるのだとすると、その過程にて White を「追加で」1000 単位投入しもしている時点(White が累計 2000 単位に達し White 導出のための作品が 4000 作品ほど捕捉されもしてきている時点)での確率は

H1:実質的 0%の成立見込み(小数点以下 12 桁まで表示で 0.000000000000)
H2:実質的 0%の成立見込み(同上 0.000000000055)
H3:約 92.225%成立見込み有り(同上 0.922534502178)
H4:約 7.746%成立見込み有り(同上 0.077465303348)
H5:実質的 0%の成立見込み(小数点以下 12 桁まで表示で 0.000000194419)

となり(H3 が圧倒的過半を占める状況となる)、の後、White を追加で 1500 単位投入するに至った時点(White が累計 2500 単位に達して White 単位導出のための作品が 5000 作品ほど捕捉されている時点)で

H1:実質的 0%の成立見込み(小数点以下 12 桁まで表示で 0.000000000000)
H2:実質的 0%の成立見込み(同上)
H3:約 36.016%成立見込み有り(同上 0.360164797441)

H4:約 63.398%成立見込み有り(同上 0.639801855610)

H5:実質的 0%の成立見込み(小数点以下 12 桁まで表示で 0.000033346949)

となるとの計算結果が出てくる。

要するに、である。

計 5000 作品以上 (White2500 単位の材料となる作品 5000 作品、Black15 単位の材料となる作品 30 作品、Grey30 単位の材料となる作品 60 作品 一処理手順上、White 導出と Black,Grey 導出には幾分かの重複が発生する可能性があるとのかたち に仕様を定めている(先述)ため、5090 作品とは厳密にはならない—) との材源となる作品らを顧慮した際に、Black 比率はおよそ 0.5%、Grey 比率はおよそ 1.1 パーセントになるとの状況を顧慮した際に、

H3:情報処理の対象となる作品らから情報処理プロセスを経て導出される [黒][灰][白]と色づけしての関係性の枠組みに関して(ベイズ推定での仮説検証における[尤度]設定の問題として) [Black0.8%, Grey1.2%, White98%]の状況を体現したものであると便宜的に設定しもしている仮説—
—自然言語による意味付けとしては[[執拗なる意志]か[部分的思惑の発露]か[偶然]かにつき「予断・楽観的見方をまったく許さない」との灰色の状況に由来するものとして「特定の」事実関係が現出していると想定される]との意味合いを与えての仮説—

の成立可能性は、(より楽観的なる仮説となる)、

H4:情報処理の対象となる作品らから情報処理プロセスを経て導出される [黒][灰][白]と色づけしての関係性の枠組みに関して(ベイズ推定での仮説検証における[尤度]設定の問題として) [Black0.4%, Grey1%, White99.6%]の状況を体現したものであると便宜的に設定しもしている仮説—
—自然言語による意味付けとしては[おおよそ(おそらく)にして[部分的思惑の発露]ないし[偶然]として「特定の」事実関係が現出していると想定される(判断の確度としては[おそらく]との程度で「弱」)]との意味合いを与えての仮説—

の成立可能性が 63%を越えている中ながらも未だに 35%を優に越えて計算されてくるといふ状況にあるとの計算結果が出てくる(:そして膨大な判断材料 White の 2500 単位特定についてはさておきも Black と Grey の材料となる作品が必要分だけ特定できるであろうとの具体的知識が筆者にはある。あとは、そう、White を果たして本当に 2500 単位用意できるのか、それに超過させることができるとしてどうなのか、の問題にすぎない)。

以上の計数的ありようをひとつのモデリングとして呈示したことをもってして、である。ベイズ推定で何が述べられるのか、とのことについて(「話を単純化させようとして、」では)大体のありようを示してきたかと考えてもしている。考えもしているので、それでは直下、[まとめ]となることを表記して、

[筆者の主張を叩き折るにはいかようなことが必要か] (言葉を換えれば、[筆者の問題意識と

は計数的に表せば、どのような性質を有しているものなのか))

とのことについて呈示、「高校生でも理解できるようにしつらえているつもりである」との分析に一区切りを付けたいと思う。

[計数的問題として呈示してきたことの「まとめ」として]

ここまでの段にて、である。[現実をそうしたものであると見繕った仮説]らが[次々と与えられていくデータ群]に即応・照応していかように成り立ち易くなっていくのか、あるいは、成り立ちにくくなっていくのかについて —([確率論における大数の法則]が働く中でありながらも相対的な確率的枠組みの比率を呈示するとの紋切り型の話に終始したきらいもあるかとの自己認識もあるのだが) — とにかくも、計数上の問題として

[以下(段階的に)表記する通りの話]

がなせることを指摘してきた。

段階 A: 厳としてそこに存在している問題となる事実関係(機械的に所与のデータより導出できるとの事実関係)に手順を厳密に定めた式で[黒][灰][白]とのラベルを貼るとのことをなす。そして、それら[黒][灰][白]ラベルの実体的現出動向をもってして確率論における[事象]の現出動向と同義なるものととらえるとのことをなす。

(※上にてのラベルの貼り方としては[白]ラベルから[黒]ラベルの順序で[関係性(特定事実らの特定要素の共有とのかたちで機械的に導出される関係性)の自然にはおよそ成り立ちがたいとの度合い]

が高まっていくように手順を定めている(ラベルが貼られる手順についても厳密な定義付けをなしている中にてである)。

につき、[白]ラベルとは関係性が成立していても「そんなことが成り立っているのは当たり前、そこに関係性を求めるなどというのは牽強付会(こじつけ)であろう」

と見られるような事実関係に貼られるものと手順定義しており([所定の要素らの中でアトランティスとの要素だけを具備している流通度の高い作品ら]を二作品ほど同定した段階ですら[白]は1単位導出されてくる)、そうした関係性 — 特定の事物らの「疎結合状態;関係はあるも希薄であるとのありよう」を示す関係性— が数多ある中では([白]ラベルを貼っての「疎結合状態を呈する関係性と同一の事実らを基礎・基盤としながらも事物ら繋がり合いの多重性がゆえによりもって関係性が特異かつ色濃い、関係性「密」結合状態にあるところにそちら分類をなすとの)[黒]や[灰]といった関係性が若干ながらあっても深刻視するに足りないとの判断が導出されるとの見繕いをなす。そして、また、それと逆のことも述べられるとの見繕いをなす)

(⇒再言する。

「~との事実関係が存在しない」

との[否定的事実]を証明することは難しい(先述なしてきたところの *Probatio diabolica*[悪魔の証明]との概念に関わるところである)。状況の楽観的ありようを主張しようとの向きらがそも[否定的事実]指し示しの困難さの主張を

前面に出せるとのハンディを負っていることを顧慮・斟酌し、ここでの確率的分析もそうした向きら — 懷疑主義者を気取りたいとの向きらの中でも[獣声に等しい理なき否定の決めつけ]しかなせぬとの取り合うに値せぬ紛い物(世の中のことが分かっている人間に内心で「総会屋がかった馬鹿の振りもなせるとの節操・節義をなんら伴わぬとの敵手の相応の手先、でなければ、頭の具合が本当によろしくないだけの輩か」程度に愚弄軽侮しかなされまいだろうといった按配の下等な者達)ではなく本当に取り合うに足りるだけの知性を持った者ら— の言い分に確率論として応えられるものとしている(つもりである)。すなわち、

「問題となる意思表示など「ない」ということを証明する義務を負った俺たちはいわばもってしての[悪魔の証明]の責任を負ったものであり、あることを無理矢理にでも主張しようとする、僅少な材料でも重んじられるとの立ち位置にあるそちらさんに対して確率論を展開するうえで圧倒的に不利な立ち位置にいるのだ。だから、そちらさんの確率論的目分量など取り合うに足りないね(等々)」

との言い分に真っ当な確率論でもってして応えられる途を選択している、すなわち、[こじつけ度合い]を増さしめる[問題となる事実関係と包摂・近接関係にあるが、だが、ありふれているとの「疎」結合の関係性]の成立と[まさしくも問題となる「密」結合を呈しての「多重的」関係性]の成立をそれぞれに — 類縁の事実関係を基礎にして— 捕捉し、それら比率を分析することで「～が成り立ちうるか」「～が成り立ちえないか」の確率論的ありようをベイズ推定でもってして煮詰めていくとの途を選択している)

段階 B: 表記の[黒][灰][白]のラベルの貼られた事実関係らが現実世界にどれだけの比率で存在しているのか、いくつか仮説を実際に定立する — それら仮説らは[黒][灰][白]ラベルの比率でだけもって定義されるとの式で純粹に計数的に定義されてのものらとなる — (:その点、複数仮説の仮説定立にあつては特異なものである[黒][灰]ラベル付きの関係性の比率が高まる毎に一連の関係性の背後に[「執拗な」恣意的やりようの介在]が想定されることになる。純・計数的に[恣意性][執拗性][悪意(害意)]の程を「推測」しようとの発想法である)

段階 C: [話を高校生の数学的知識でも対応できる公式に単純化させる]ために(直上表記の)段階 B で定立した複数仮説らがあまねくも思索対象の分類を決しきつていとの意図的モデル付けをなし(確率密度関数の問題を考えずに[離散的なものとして存在している顧慮の対象となるモデル]らの総計のパイの奪い合いをいくつかの相互に排他的な仮説が分け合っているとの状況を意図的に想定し)、データら([黒][灰][白]のラベルが付けられた事実関係らの存在データ)が与えられていった際に[ベイズ更新](高校生にも分かるように先述なした通りの数式処理)にて問題となる仮説らの成立可能性が — ベイズ推定の一般公式に基づいて — いかように変化していくのか測定してみる

以上の段階 A から段階 C の中身に関わるところとして

H3: 情報処理の対象となる作品らから情報処理プロセスを経て導出される[黒][灰][白]と色づけしての関係性の枠組みに関して(ベイズ推定での仮説検証における[尤度]設定の問題として)[Black0.8%, Grey1.2%, White98%]の状況を体現したものであると便宜的に設定しもしている仮説 —自然言語による意味付けとしては[[執拗なる意志]か[部分的思惑の発露]か[偶然]かにつき「予断・楽観的見方をまったく許さない」との灰色の状況に由来するものとして「特定の」事実関係が現出していると想定される]との意味合いを与えての仮説—

が圧倒的な分量の判断材料 White のダミーデータ(材料 5000 作品「超」存在を想定してのダミーデータとしての White2500 単位のダミーデータ)の投入に対しても、(現実的にそれを支えるだけの黒・灰が導出できるとの目分量がある中で)、

成立見込み 35%超

をなおもって保持しているとのことを指摘しました。

同じくものことについて言葉を換えての形容を(以下、)なす。

⇒

H3: 情報処理の対象となる作品らから情報処理プロセスを経て導出される[黒][灰][白]と色づけしての関係性の枠組みに関して(ベイズ推定での仮説検証における[尤度]設定の問題として)[Black0.8%, Grey1.2%, White98%]の状況を体現したものであると便宜的に設定しもしている仮説

の成立する確率は

[それ以上に楽観的な状況を想定する仮説ら —よりもって関係性の薄さを示す[白]の比率が高くもなっているとの仮説ら—]

に対して、(用意できるとの現行目算がある材料を念頭に置きもしての中)、

要素 B: [[ブラックホール]ないし[ワームホール]ないし(機序不明概念としての)[異界との扉]のどれか一つないし複数と明示的に結びつけられている] (e.g.[特定フィクションが[ワームホール]を登場させている][特定ノンフィクションが[ブラックホール]を作中の主要テーマに据えている]等等)

要素 C: [粒子加速器と結びついている] (e.g.[特定文物が粒子加速器に関わるものである]等等)

要素 D: [アトランティスと命名されての概念と関わっている] (e.g.[特定フィクションが[伝説の沈んだ大陸アトランティス]に目立って言及している]等等)

要素 E: [古のトロイアにまつわる伝承との結節点 (1. 【叙事詩『イリアス』というトロイア崩壊にまつわるプロセスを扱った古典の際立っての構成要素】あるいは 2. 【叙事詩『オデュッセイア』というトロイア崩壊にまつわるプロセスを扱った古典の際立っての要素】などとの結節点) を色濃くも具備している] (e.g.[特定フィクションが[トロイアの木製の馬]と直接的に結びつく作中要素を具備している][特定フィクションが叙事詩『オデュッセイア』や叙事

詩『イリアス』(の主要登場キャラクター)と結びついている]等等)

要素 F: [ヘラクレスの 12 功業と直接的に関わっているとの特性を具備している] (e.g.[特定文物がヘラクレス第 11 功業と関わる]等等)

要素 G: [爬虫類の知的異種族([聖書の蛇]や[悪魔]といった存在は除く)と濃厚に結びついている] (e.g.[特定フィクションが知能を持った蛇の種族を登場させている]等等)

要素 H: [垣根としての五芒星・五角形と濃厚に結びついている] (e.g.[特定フィクションが垣根としての五角形を作中の重要要素に据えている]等等)

のいずれかの要素を共有する作品ら 5000 作品を捕捉させる (2500 単位、white 分類の関係性を導出できる/ただし要素 B および要素 C の共有関係についてはフィクションは可能としても日々大量生産されているノン・フィクションにあっては顧慮しないとのこととする)と仮定しての状況「でも」35%超の比率で成り立つことになり、に至る過程では同じくものうちのいずれかの要素を共有する作品らを 4000 作品程捕捉している (2000 単位で、white 分類の関係性を導出できる) とのその段階では H3 の他のより楽観的なる仮説に対する成立比率は 92.225%となってしまうとことがある

すなわちもってして、

[ここ本稿で採用している確率論モデル —【よりありふれた「疎」結合を呈する関係性】に対して、そちら関係性と部分的に接合するも、【特異性が際立っての「密」結合】を呈する多層的關係性の比率を(現実的状况での中で)の捕捉データらに関して)問題視するとの確率論モデル—]

にあっては

[「執拗な意志表示が観察される中で危険性が濃厚に見てとれる」との状況分析]

を斥けるうえで、少なくとも、

[楽観視を助長する疎結合を呈する材料(その特定方式を定めもしての材料ら)を 5000 点を優に越える点数で特定・披瀝する必要があると見繕える]

との式が呈示されている

上のようなモデル —高校卒業程度の数学知識で理解なせるように、との仔細な説明を付しもしてきたとのモデル— にあつての妥当性の検討をなす者はいかような観点からその妥当性の判断をなすべきか。

ひとつに「計数的に定義された仮説」が「自然言語による意味付け」(日常用いられる非数学概念としての意味付け)と適切に対応付けされているものなのか、検討することがなされるべきであろう(：欠陥・欠点とのことで述べれば、「確率密度関数の領分となるようなところを離散的確率論を基盤にしてのモデルを不適切に用いているのではないのか」といったより根本的な問題もあるのだが、そちらは筆者より言い分記しているところでもあり、置くこととする)。

その点もってして [仮説](純・計数的に定義された仮説) が [自然言語による意味付け] と適切に対応付けさせられているのか、とのことに関しては先立ってほぼ同文のことにまつわつての断り書きを細々となしているように、

「計数的に定義されての H1 から H5 の仮説に対する[意味付け](現実的状况に対する意味合い見積もり)に問題はない」

と(筆者としては)当然に強調したい次第でもある。

たとえば、[仮説 H3]に関して述べれば、である。判断材料 Black・判断材料 Greyら導出につながる事実関係が

[類縁となる事実関係でありながらも遙かにありうるところの事実関係](White 導出につながる事実関係)

をも顧慮しての母数の中で 0.8%、1.2%ずつ存在している、計 2%存在しているとのことを想定するとの同じくもの仮説(H3)が現実的状况に近似しているものとして成り立っているのならば、本稿にて一意専心して示さんとしてきた、

[執拗な目的意識]

の偏在を感じさせる状況に近い、そのように述べて差し障りないところであろうと「当然に」強調する次第である(極めて幅広くもありふれた特性を帯びている作品らの関係性を見ていった場合、うち、2%が一群の相互連関を呈して「臭気放つ」露骨に濃厚な事実関係に相通ずるところのものとなっているとのことがあるとの状況として、である)。

であるから、H3 のような状況に対する自然言語による意味付け、

H3: [[執拗なる意志]か[部分的思惑の発露]か[偶然]かにつき「予断・楽観的見方をまったく許さない」との灰色の状況に由来するものとして「特定の」事実関係が現出していると想定される]

との自然言語による意味付けに関しては言い過ぎ・不適切となるところは何らないと筆者としては「当然に」強調する次第である(：そして、先程来までの流れとして仮説(H3)の如き状況が「[データ(情報)の有無と比率]によって定義・観測される[世界の実質]を示すものとして極めて成り立ち易くもなっている」と計数的に論じもし、「その時点で危険性を体現しての異常なる状況である」と訴求なしもしてきた(仮説 H3 成立可能性が 35%超なのであるから、[話柄としていることの危険性]からここでの情報処理量だけ考えるのならば、「弾丸が 2 発装填されている 6 発弾倉の標準的リボルヴァー式拳銃でロシアン・ルーレットをやれ」と言われているが如き危険・不条理な状況ともとれる——正確には人類全体が[種族の運命]を質草にそういう状況に通ずる馬鹿げた賭けをやらされているのだともとれる、そして、そういう馬鹿げた賭け事をやらされている中で「少なからぬ人間が具体的・客観的な式で異を呈しなればそのような種族は(過半成員が不都合なことに意を向けられぬとの式で脳機序が大々的に意識ないし無意識的に操作されていようとなかろうと【事情】の問題は抜きにして)「終わっている」状況だとすらとれる——))。

以上、ここまでの段にて、である。

[「先行するところとしての意味論的分析で既に本稿にての本筋としての解説はなし終えてい」との中で [付録] と位置付けを与えて展開してきた確率論(初等確率論)]

にて訴求すべきところは大体訴求したつもりである(：一言で述べれば、「極々単純な式で計数的に分析しても現況が非常に危険な状況であると容易に指し示せるようになってるのがこの世界である(だのにもってして世の中ではそういうことがことごとく[無きが如し]の扱いを受けている)。であるから、問題である」とのことである)。

計数的に何を示さんとしてきたのかのまとめ表記はここまでとする

最後に — 「本稿をきちんと読み解いておられるとの向きにあっては断るまでもないことか」とも思うことについてなのだが— 以降、

[(付録としてのここまでの確率論展開に対する)補足説明の部]

を付しておくこととする。

最早、数学の話をなすつもりはないわけではあるも、以下よりの補足表記を諸賢が内容把握の用に役立てていただければ、幸いと考えている次第である。

(確率論展開の部に対する) 長くもなつての補足表記として

本段、最前までの確率分析の部 (ベイズ推定によるモデル紹介の部) に関する補足表記のために設けた本段にあつてとにかくもってして強調したいことはここまでの確率論に依拠しての分析を通じて訴求せんとしてきたとのことが

[(一部)人間存在は薬籠中の存在として尋常一様ならざる意思表示をなさしめられていると考えられる(その可能性が計数的に取り合うに足りることである)]

ではないということである。

以上表記のこと — [人間が薬籠中の存在として尋常一様ならざる意思表示をなさしめられていると考えられる]とのこと— との絡みでは確率論の部に入る前から多角的に、にまつわつての本質を衝くが如きことについて具体的論拠を山ほど、いいだろうか、それこそ山ほどに挙げてきたつもりである。

膨大な文量を割いての本稿本論部にて確率論に先立つところからして

「これでもまだ異論が生じることがありうるのか？」

とのかたちにて [人間が薬籠中の存在として尋常一様ならざる意思表示をなさしめられていると考えられる] とのことになつわつての具体的論拠 (第三者が容易に後追い・検証できるとの論拠でもある) を摘示してきたわけである。

極々一例を挙げるとして、たとえば、である。本稿の [出典\(Source\)紹介の部 28](#), [出典\(Source\)紹介の部 28-2](#), [出典\(Source\)紹介の部 28-3](#), [出典\(Source\)紹介の部 31](#), [出典\(Source\)紹介の部 31-2](#), [出典\(Source\)紹介の部 32](#), [出典\(Source\)紹介の部 32-2](#), [出典\(Source\)紹介の部 33](#), [出典\(Source\)紹介の部 33-2](#)にて容易に後追いできるとの問題となる文献の原文を必要な分だけ網羅的に抜粋しながら [次の如きこと] を指し示してきた。

1994年初出の著作である、

BLACK HOLES & TIME WARP Einstein's Outrageous Legacy『ブラックホールと時空の歪み アインシュタインのとんでもない遺産』

という科学書にあつての

[通過可能なワームホールにまつわる思考実験] (にしてタイムマシン構築にまつわる思考実験)

に関わるところについて

・[「[双子の](#)」パラドックス] (1911年提唱の概念)の機序の利用による

二点間時差の応用とのテーマを扱っている

・91101(米国にての日付け表記上、911の事件が発生した2001年9月11日と同文になる9/11/01と同じくもの数値列)との郵便番号(ZIPコード)ではじまる地パサデナを[時空間(時間軸・空間軸)にあつての空間軸での始点]に置いてのタイムワープにまつわる設定付与をなしている

・(上にて言及の地たる)パサデナで疾走させた爆竹付き自動車を用いての他の思考実験—爆竹の順次爆発に言及しての思考実験—による[双子のパラドックスに通ずる時間の相対性]にまつわる説明付与が関連するところ(まさしくも問題となる[通過可能なるワームホール]にまつわる思考実験に関連するところ)でなされている

・同一のタイムワープにまつわる設定付与の部では[時空間(時間軸・空間軸)にあつての時間軸での始点]に関わるところで[2001年9月11日]と通ずる[日時表記]の使用が認められる(:具体的には科学著作 **BLACK HOLES & TIME WARP Einstein's Outrageous Legacy** 『ブラックホールと時空の歪み アインシュタインのとんでもない遺産』では同著にあつての【カリフォルニア州パサデナ—全米でそこだけが91101との数値を郵便番号として持ちえるとの地所となり、そして、91101が最も若い郵便番号ともなっている地所—を空間軸上の始発点とする双子のパラドックス(1911年提唱の科学概念)を用いてのワームホール利用にまつわる思考実験】の開始時刻が目立つように2000年1月1日9時に設定されている(同著が1994年刊行の書籍であるにも関わらず問題となる思考実験のスタートポイントが2000年元旦の午前9時に設定されている)とのことがあり、それにつき[時⇒日⇒月⇒年]と若い順にそちら日時表記を並び替えると[9月11日2000年と通ずる数値列]が導出されてくるとのことがある(9,11,2000の導出)。にまつわって問題となることとして西暦2000年と西暦2001年、そのどちらがニュー・ミレニアムの始点なのか、曖昧模糊としているとの見方が呈されてきたとのことがあり(であるから、同じくもの実験での空間軸上の始点のみならず時間軸上の始点「でも」2001/9/11という日付と親和性が高い数値列が用いられているとのことになる)

・直上の部(簡条書き部における上の点(・)の部)にあつてそのことを問題視しているとのこと、【[2000年]⇔(視差として同一視する視点が存在)⇔[2001]】とのことをも分析テーマとして扱い、また、「通過可能なるワームホールにまつわる思考実験」(まさしくもここで問題視している思考実験)につきキップ・ソーンのここで問題としている著作 **BLACK HOLES & TIME WARP Einstein's Outrageous Legacy** 『ブラックホールと時空の歪み アインシュタインのとんでもない遺産』と同じくものイラストレーターを起用しての図を挙げまでしているとの書籍が存在している。同著、2000年刊の『異端の数ゼロ』という著作なのだが、さらに奇怪なることとしてそちら著作(『異端の数ゼロ』)にあつて【ブラックホール⇔グラウンド・ゼロとの対応図式の介在】が垣間見れるとのこと「も」がありもする(:グラウンド・ゼロとの言葉—原子爆弾を生み出したマンハッタン計画の副産物たる言葉—は911の事件が起こるまで【核兵器の標的】および【核兵器の爆心地】といった文脈を除き滅多に

用いられるものではなかったとの事情がある中にて [ブラックホール] と [グラウンド・ゼロ] とが結びつけられている、問題となるワームホール実験絡みのことを問題となる著作 BLACK HOLES & TIME WARP Einstein's Outrageous Legacy『ブラックホールと時空の歪み アインシュタインのとんでもない遺産』と同じくものイラストレーターを起用して取り扱いもしているとの他書にあって [ブラックホール] と [グラウンド・ゼロ] とが「不自然に」結びつけられているとのことまでもが現実にある))

との各事由が具現化しているとのことが現実にある。

以上、論拠を先行する出典紹介部 (出典 (Source) 紹介の部 28 から 出典 (Source) 紹介の部 33-2) に譲りもして再述しているとのことにつき、

【「双子 (のパラドックス)」・[911 (よりもって述べれば、2001 年 9 月 11 日) と結びつく数値列] の「1994 年」初出著作での「多重的」使用】

をもってして

【「双子」(ツイン・タワー) の塔が [2001 年 9 月 11 日] に崩落させられた事件の先覚的言及とならない】

などと強弁したければ、そのように強弁すればいいだろう (: この世界にあっての『魂が抜けきった人間の残骸か』『主体的思考能力などはなから持ち合わせていない歯車の部品か』といった心証しかもたらさぬ動き方しかなさない、そうとすら見えてしまう大概の人間は反論をなす以前に [問題を解決する最も手っ取り早い策はそちら問題を無いものとして扱うことである] 方式で [存在無視] するとの式をとることかとも思うのだが (そういうやりようをとっても [銃口を突きつけられている際に銃口が消えるわけではない] が、[力なき者の最期の現実逃避] とはなりえ、筆者にも「死を従容として[覚悟]したうえで」それならば現実的逃避を責めるだけの権利はない)、何かを語りあうに値しない臆病者「以下」の存在であるのならば、[問題無視] 以下のやりよう、[何も中身検討せずにももの全面否定] の理なき声、[獣声] をあげるだけか、とも見ている) 。

現実を見ない ([事実] を見ない、でもいい) との向きが何を述べようと、とにかくも、以上のように

「人間が薬籠中の存在として尋常一様ならざる意思表示をなさしめられている」

と判ずるに足りる材がこの世界には確として数多ありもする。

そうもしたこと — [人間が薬籠中の存在として尋常一様ならざる意思表示をなさしめられていると考えられる] — の具体的論拠を易々と確認できようとの一次資料よりの原文引用の羅列といった式で懇切丁寧になしもしてきたのが本稿であり、またもってして、そうもしたことをアプリアリ (先立ってそこにある、所与の前提) たることとしての話として最前にあっての確率的分析をなしてきたのが本稿である。

ここまでの筆致にてお分かりかとは思のだが、本稿にあっての確率論の分析対象として念頭に置いているのは

「人間が薬籠中の存在として尋常一様ならざる意思表示をなさしめられている」

など「ではない」わけである。では、何のための確率論か。きちんと解説していることを理解いただいている向きにあっては感うところもなからうし、わざわざもってしてここで補足表記をなす必要もないことかとも思うのだが、

【窺い知れるところの[恣意性][執拗さ][悪意(害意)]の程】

を訴求するための確率論である。

にまつわっては最前までの確率論 — ベイズ推定を用いての計数的分析 — で引き合いにだした仮説らの中身、下に再掲しもすることとした仮説ら中身をよく見ていただきたい。

H1: 明らかに[執拗なる意志]の賜物がゆえに「特定の」事実関係が現出していると判じられる (判断の確度としては[明らかである][歴然としている]とのことで「強」)

H2: おそらく[執拗なる意志]の賜物がゆえに「特定の」事実関係が現出していると判じられる (判断の確度としては[おそらくそうであろう]とのかたちで上の H1 に劣る)

H3: [執拗なる意志]か[部分的思惑の発露]か[偶然]かにつき「予断・楽観的見方をまったく許さない」との灰色の状況に由来するものとして「特定の」事実関係が現出していると想定される (尚、[この本質]があまりに重要なものである、体系的に[皆殺しにするとオペレーションの実施]にまつわる「執拗な」意思表示がなされてきたか否かに直に関わる、との領域では「予断・楽観的見方をなんら許さない」とのことはすなわち[危機の分析と回避]に全力を尽くして然るべき状態と同義であろう)

H4: おおよそ(おそらく)にして[部分的思惑の発露]ないし[極めてよくできた偶然]として「特定の」事実関係が現出していると想定される(判断の確度としては[おそらく]との程度で「弱」)

H5: ほぼ確実に[部分的思惑の発露]ないし[極めてよくできた偶然]として「特定の」事実関係が現出していると想定される(判断の確度としては「強」)

ピックアップしたところをご覧いただければ、お分かりいただけることかとは思うのだが、確率論にあつての計数的分析の対象である仮説らでは「特定の」事実関係、すなわち、(自然ではこうはなるまいとの色合いがあるという意味で) 不自然な事実関係が — 判断材料たる事象としての基礎基盤となるところとして — まずもってそこにあることに着目、その背後にある

[通貫しての恣意性(執拗なる意志)の有無]

を問題視しているのである。

以上もってして、

「ここ確率論では人間存在(の一部)が[傀儡(くぐつ)][チェスの駒]となっている、なさせられしめているとの状況を問題視しているのではなく、特定の事実関係が[傀儡(くぐつ)化の問題を[前提]として観念せざるをえないところ]で根深くも現出している、そこに[執拗なまでの恣意性]が見てとれる(ゆえにあまりにも危険である)とのことを問題視している」

との断り書きをなし終えたとして、次いでもってして、

[(既にそれが[人間に破滅をもたらす]と判じられる側面についての[意味論的分析]もなしできたところに加えて)「計数的にも」何が問題になるのかを極々単純なモデルからの指し示しをなさんとしてきた]

とのここでの話に関わる[事実関係]がどういった性質のものなのか、直下、長くなるもの確認の部(復習整理を兼ねもしての部)を — 確率論それ自体からは離れるものながらもってして — 付しておくこととする。

[確率論の基礎としてきた事実関係の性質について整理なすべくもの部として]

計数的分析で問題視した関係性、それがどのような性質を帯びたものなのか解説するための「長くもなつての」部をここに設けることにしたわけだが、(図を呈示するに先立ち)、唐突ながらも述きたいところとして、次のようなことがある。

「2012年に到達した段階の【キリスト教徒の世界人口】は総計「22億」に達したとされている。また、キリスト教(とその前身たるユダヤ教)の聖典・神の教え(なるもの)を「啓典」として踏襲、よりもって神にまつわる崇拝思潮を強めたイスラム教の教徒人口は同文に2012年に到達した段階で総計「16億」に達したとされている」(：英文 Wikipedia「Religion」項目、の中の Religious groups の節にて —(現行、Pew Forum on Religion & Public Life. "The Global Religious Landscape". Retrieved December 18, 2012 と出典が付されるとのかたちで書き記されている限りは) — “Christianity 2.2 (billion)、Islam 1.6 (billion)” と表記されているところでもある。尚、イスラム教とキリスト教は異質なるものであるととらえる向きもあろうかとは思いますが、—ここでの話にも関わるところとして— 両宗教は「一神教の神(なるもの)の概念」のみならず「救世主たるイエス・キリストの観念」や「終末と最後の審判の到来の観念」も共有している — ※基本的なことながらイスラム教ではイエスを「イサー」と呼んで尊崇視している(和文ウィキペディア「イスラム教」項目現行記載内容より引用すれば、(以下、引用なすとして) “「イスラーム」とは、唯一神アッラーへの絶対服従を意味しており、モーセ(ムーサー)やイエス(イサー)も預言者として認めている。ただし、イエスもムハンマドもあくまで人間として考えており(以下略)” (引用部はここまでとする) とあるとおりである。また、イスラム教におけるキリスト教のそれと通ずるところがある終末観については基本的なことが英文 Wikipedia「Islamic eschatology」(イスラムにおける終末観)項目に端的にまとめられているところである —)。

直上にあつての唐突なる話にての趣意たるところとして、

[共通の背景を持つ一神教を奉ずる向き]ら

が世界人口の半数を2012年にあつて占めているとのことがあるわけだが(地球人口の半数超が同様の側面を多く帯びている共通の唯一神を崇める宗教の会衆としての位置づけを与えられている)、彼らが奉ずる「一神教」のドグマ、の中の、キリスト教教徒ならば誰でも知っているとの、

[人間の不幸の根源に横たわるとされる「原罪」の観念](人間の祖たるアダムとイヴが神の言いつけを守らなかったために寵を失いつつ、また、罪を負ったとのオリジナル・シンの観念)

[人間存在が最終的に至る道 —[失樂園よりの復樂園の達成]か[永劫の墮地獄]かに人間存在が終末に選り分けられるとのその道— にまつわる観念](神による最後の審判を経て「永劫の救いに向かう向き」と「古き蛇にたぶらわかされて永劫の苦痛に向かう向き」に人類が二分されるとの聖典＝聖書にあつての黙示録に見る観念)

もその双方が

[古き蛇による禁断の果実をもってしてのエデンでの誘惑]

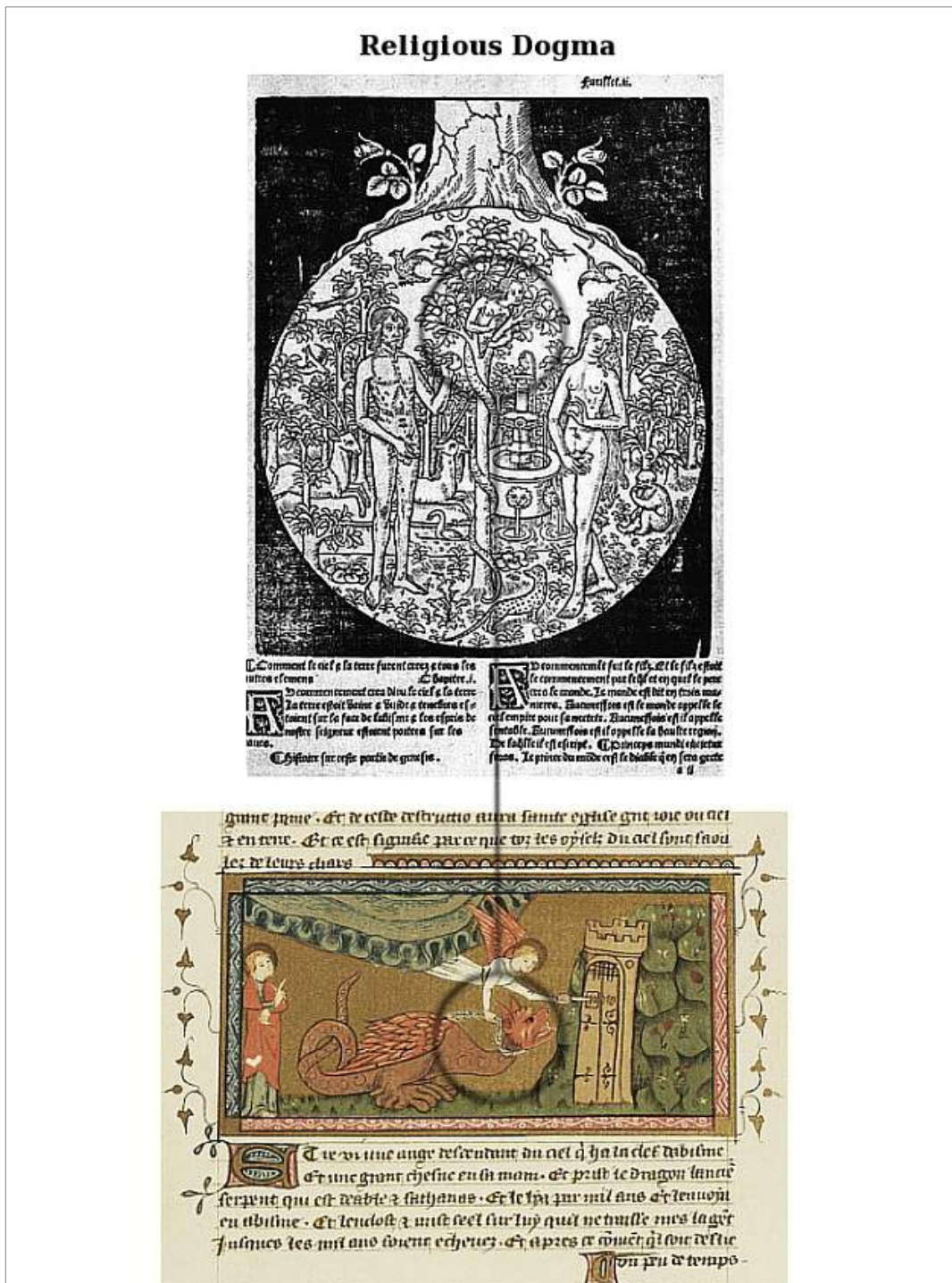
とのコンセプトに根深くも関わっているものとなっている(：「原罪」と「禁断の果実」の関係に

については言うまでもないとして、新約聖書の末尾にあつての黙示録にて [神の恩寵に浴して赦される人間] と [古き蛇・悪魔の会衆として永劫に罰せられる人間] が二分されるとされていることについては本稿にての **出典(Source) 紹介の部 54(4)** などにも聖書そのものよりの引用をなしつつ (無宗教の人間として悪辣な反対話法の賜物であろうとは見つつもの) 事細やかな解説を講じている。

要するに、[(苦界とも表せられるような)この世界にての人間存在の罪の根源][救いの究極形態]、転じて述べれば、[人間の歩みの始まり] と [人間の歩みの終わり] にまつわる 世界人口の多くを占める向きらが奉じているとの宗教の基本的観点にあつては

[古き蛇による禁断の果実をもつてしてのエデンでの誘惑のエピソード]

が根深くも影を落としているとのことが「ある」 (: 一体全体、そのような [ドグマ] を本気で信じている向きがいかほどまでにいるのか、との話は別にして、取りあえずも [関連性] の問題を述べれば、そうなる)。



[**上掲図上の段の図**]:同図は[人間的存在に模されての古き蛇]による誘惑によって原罪に駆り立てられるアダムとイヴを描いた版画より抽出したものとなる、より具体的には、(同図が掲載されている Project Gutenberg サイトにて公開の FINE BOOKS (1912 / 版本学関連の著作とでも言うべき書)の記述によると)、16世紀初頭(1505年)にパリにて世に出たとされる聖書の一頁にみとめられるとの図葉となる。

[**上掲図下の段の図**]:同図は「[古き蛇]などとも呼称される存在にして[赤き竜]でもある」と新約聖書黙示録に言及されているサタンという存在が(黙示録にあっての最終戦争前段階の記述内容の問題として)地上にて猛威を振るうべくも出現した後、しばし、神の使者らによって[鍵を掛けられた獄]に閉じ込められることになったとのその有様を描いた挿絵となり、(それがみとめられる Project Gutenberg サイトにて公開されている 1894 年刊行の PALAOGRAHY —NOTES UPON THE HISTORY OF WRITING AND THE MEDIEVAL ART OF ILLUMINATION との著作(『古文書学:歴史的文物および彩飾中世芸術にまつわる覚え書き』とでも表題訳すべき著作)によると)、1360 年作成の『黙示録』写本表紙絵となっているとの図葉となる。

以上絵図らに見られるように、

[**(旧約聖書『創世記』に見る)人間の悲劇の発端・原罪の付与(に関わる一幕)**]

と

[**(新約聖書『黙示録』に見る)終端・最終戦争(に関わる一幕)**]

のその双方に

[**禁断の果実とも結びつけられる誘惑者**]

などというものが目立つように登場させられてきたというのが宗教的ドグマというものである。

以上、基本的なことについて言及したうえで書くが、本稿では世界人口の過半を占めるとの一神教の会衆ら —この世界が唯一神に主催されているとのドグマを容れているとの一神教の信徒ら— の、

[**人間(という種)の始まりと終わりにまつわる観点**]

に関わっているとの、

[**古き蛇による禁断の果実をもってしてのエデンでの誘惑**]

なるものが

[**一神教が世界を覆い尽くすことになった前から見て遙か昔から存在していたギリシャ多神教時代の神話体系**]

そしてもってして、

[**一神教勢力が進出する前に固有の宗教社会を築いていたアメリカ大陸にあって15世紀まで残存していた神話体系**]

と多重的な接続性を呈しているとのことがあるとのことを細かくも指し示さんとしてきた。

およそ直下、図を付しながらも訴求するようなかたちにてである。

Begining & Ending (bind minds of two billion people)

『創世記』 Genesis

Revelation
(Apocalypse) 『黙示録』

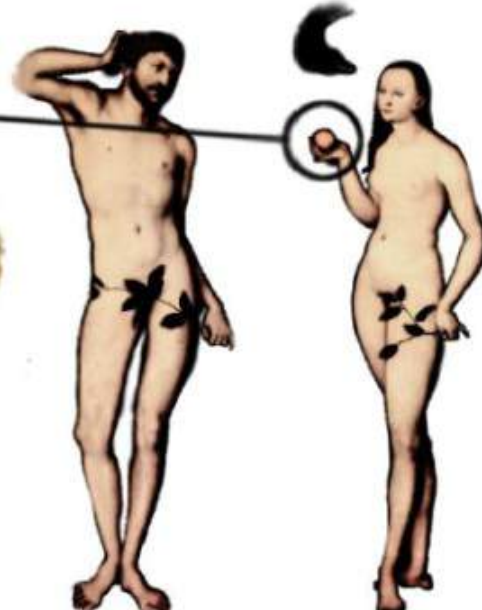
Fall of Man & Old Serpent & Forbiddien Fruit (→Apple)

キリスト教単体で見ても [20億人超の人間の思考様式] を多かれ少なかれ規定している聖書筋立て。その冒頭部 (旧約聖書『創世記』) にも結末の部 (新約聖書『黙示録』) にも関わってくるとの [古き蛇による林檎とされる禁断の果実による [原罪] 付加のエピソード] が [(問題となる) 多重の恣意的関係性の弧] に組み込まれているのならば (実際に組み込まれていることを本稿では示してきた)、 [多くの人間の精神構造を規定している一大ドグマ] からして人間存在をどう料理したいのかとの [執拗極まりない意図] に関わるものとして構築されてきたものであると解されるところともなる ([救いの教え] に [人を滅ぼす寓意] を込める悪辣なやりやうに通ずるところとして、である)



[Golden Apple]

(seen in [The Garden of the Hesperides] by Frederick, Lord Leighton (1892))



[Forbidden Fruit]

(seen in [Adam and Eve] by Lucas Cranach the Elder (1528))

" But the garden of the Hesperides was none other than the garden of Paradise; consequently the serpent of that garden, the head of which is crushed beneath the heel of Hercules, and which itself is described as encircling with its folds the trunk of the mysterious tree, must necessarily be a transcript of that Serpent whose form was assumed by the tempter of our first parents. We may observe the same ancient tradition in the Phœnician fable representing Ophion or Ophioneus. "

—— George Stanley Faber, The Origin of Pagan Idolatry (1816)

" The Gardens of the Hesperides with the golden apples were believed to exist in some island in the ocean, or, as it was sometimes thought, in the islands on the north or west coast of Africa. They were far-famed in antiquity; for it was there that springs of nectar flowed by the couch of Zeus, and there that the earth displayed the rarest blessings of the gods : it was another Eden. "

—— Alexander Stuart Murray, Manual of Mythology, Manual of Mythology (1873)

19世紀の頃より欧州一部識者には [黄金の林檎の園] と [エデンの園] がパラレルな存在であるとの指摘がなされてきた……

表記図にて線をつないでいるように、

[38億人超 (キリスト教22億・イスラム教16億との先述の宗教人口の合計にして現行現在の地球人口の過半) にあつての「種族としての起源と種族としての末期

のありようにまつわっての精神風景]に影響を与えている(ユダヤ教旧約聖書創世記から踏襲されての)キリスト教ドグマにてのエデンの禁断の果実の物語]

は [ギリシャ神話の黄金の林檎(の園)] との接合性が歴年、一部にて取り沙汰されてきたものとなる。

図に付しての 19 世紀洋書よりの引用文 —既に本稿にての先立っての段にて引用なしていた著作よりの再引用文ともなる— に見るように、すなわち、

(上にての図葉内でもそちら一文を挙げているとのジョージ・スタンリー・フェイバー (英文 Wikipedia にも一項目設けられているとの 19 世紀の英国国教会系の神学者) の手になる著作 The Origin of Pagan Idolatry (1816 年初出.表題訳すれば『異教の偶像崇拜の起源』となる著作) 内の記述に拙訳を付すとして)

But the garden of the Hesperides was none other than the garden of Paradise; consequently the serpent of that garden, the head of which is crushed beneath the heel of Hercules, and which itself is described as encircling with its folds the trunk of the mysterious tree, must necessarily be a transcript of that Serpent whose form was assumed by the tempter of our first parents. We may observe the same ancient tradition in the Phoenician fable representing Ophion or Ophioneus. (訳として)「しかしヘスペリデスの園(黄金の林檎の園)は楽園の園に他ならなかったとのものであり、従って、その果樹園の蛇、その頭もてヘラクレスの足下に踏みしだかれています、そして、神秘的な果樹園樹木の幹に覆い被されるように巻き付いているとの描写がなされているとの蛇一文脈上、ヘラクレスが 11 功業にて相対したラドン(Ladon)のこと— は「我らが始祖(訳注:文脈上、アダムとイヴのこと)への誘惑者にそのかたちが模された蛇の類似型]にちがいなかりうとの存在と必然的になる。我々は同じくもの古代の伝統(的描写)をオピオーンないしオポオネウス(訳注:ギリシャ神話にてタイタンのクロノスらと主導権を争い、消えていったとされる古の神/蛇の姿と結びつけられることもある)にまつわるものたるフェニキア伝承に見出せるかもしれない」

(訳を付しての引用部はここまでとしておく)

(上にての図葉内でもそちら一文を挙げているとのアレクサンダー・ムーレイ (英文 Wikipedia にも一項目設けられている 19 世紀活動の主流派歴史家) の手になる著作 Manual of Mythology (1873 年初出.表題訳すれば『神話学の手引き』となる著作) 内の記述に拙訳を付すとして)

The Gardens of the Hesperides with the golden apples were believed to exist in some island in the ocean, or, as it was sometimes thought, in the islands on the north or west coast of Africa. They were farfamed in antiquity; for it was there that springs of nectar flowed by the couch of Zeus, and there that the earth displayed the rarest blessings of the gods : **it was another Eden.** (訳として)「黄金の林檎が実るヘスペリデスの園は大洋にあつてのどこかの島に存在する、あるいは、アフリカ沖から北ないし西に向かった先にあると考えられている。それらは古典古代の時代にあつて[ゼウス寝所のそばにて流れるネクター(神々の不死の飲料のこと)の発する場]にして[この地上にあつて神々の最も得がたき祝福が施された場]として非常に有名であつた。すなわち、ヘスペリデスの園はもう一つのエデンであつた」

(訳を付しての引用部はここまでとしておく)

とのところに見るように識者言いよう (とは述べても 19 世紀という今より 150 年から 200 年ほど前の一部識者の言論とはなる) にあつて「[エデンの園]は [ヘスペリデスの黄金の林檎

の園]と同質性を帯びている」との申しようが見てとれるようになっている。

以上のように「黄金の林檎の園」が「エデンの園」と通ずるものがあるとの指摘がなされてきた（上にての引用部では「蛇と結びつけられし地」「理想的果樹園にして不死の神々の林檎が名乗る地」との共通点しか挙げられていないが、とにかくも同じくもの共通項にまつわる指摘がなされてきた）との点については、である。

まったくもって露骨なところでそれら、

「エデンの禁断の果実」「黄金の林檎」

の間に以下にて図示するような多重的關係性「も」が成立しているとのことを細かくもひたすらに具体的典拠に基づいて指し示してきたのが本稿となる。

(直下、(左側)「ダンテ『地獄篇』流通版に付されるべくも製作された16世紀版画;ルネサンス期のAlessandro Vellutelloの手になる1534年の作」と(右側)「19世紀著名絵画『ヴィーナスの誕生』;画家アドルフ・ウィリアム・ブグローの手になる1879年の作」を材に作成したコラージュを「ただただ強調のためだけに」付しも、同図によって示される問題となる関係性についての振り返っての表記をなすこととする)



Co-incidental ?

表記図に見る関係性、その細やかなる内容および典拠については関係図それそのものの中にあつて「も」そちら番号を呈示しているとの本稿の出典紹介部の内容を確認いただきたいとして、俯瞰すれば、どういふ純・記号論的關係性が「黄金の林檎」と「エデンの禁断の果実」の間に横たわっているのか、(図にて似姿挙げているよふな)「悪魔の王ルシファー」と「ギリシャ(ローマ)の美の女神アフロディテ(ヴィーナス)」を介しもしながら横たわっているのか、下におおよそもつてしてのまとめの表記をなしておく。

・(「黄金の林檎とエデンの園の關係性 —1—」)

ギリシャ神話では美の女神アフロディテが「黄金の林檎」を得るためにトロイア皇子パリスを美女ヘレン(ファム・ファタール、男を破滅の運命に誘うとの役回りの女)を用いて籠絡せんとしたと伝わる。トロイア皇子パリスが世界一の美女を具にしてのそふもした女神の贈賄工作(黄金の林檎を入手すべくもの贈賄工作)に応じたがゆえに美女ヘレンはパリスのものとなつたとされるのだが、彼女ヘレンが人妻であり、その夫がギリシャ有力諸侯であつたため、ヘレン夫の兄を盟主としてのギリシャ軍がパリスが王族となつていたトロイアに雲霞のよふに押し寄せることになりもした(そして、長らくものギリシャ・トロイア間の戦争を経て最終的に木製の馬の計略が奏功してのトロイアの陥落、フォール・オブ・トロイアとの状況に至る —出典(Source)紹介の部 39—)。

他面、エデンの園では悪魔の王サタン(墮天使ルシファー)が変じた存在との解釈が付されているとの蛇によつてエヴァ(ファム・ファタール、男を破滅の運命に誘うとの役回りの女としてのイヴ)を用いての誘惑が「林檎」を食させしめんとされた、そして、結果的に人類が墮落を見た(フォール・オブ・マンとの状況を見た)との筋立てがよくも知られている——「禁断の果実は林檎とは限らない」との見方もあるが、ルシファーが林檎を誘惑の具に使つてるとの典型例はミルトンの古典『失樂園』などに見受けられるところとなつている(出典(Source)紹介の部 54(2)など)——。

ここで着目すべきところとして、

[林檎(「黄金の林檎」及び「林檎と解釈されることの多き禁断の果実」)にまつわる誘惑]

[ファム・ファタールとしての女(「ヘレン」及び「イヴ」)を具にしてるとの誘惑]

[結末が被誘惑者(の身内)に破滅的なものであつたとされること(「トロイアの陥落:フォール・オブ・トロイア」及び「人類の墮落:フォール・オブ・マン」)]

との特性から誘惑それ自体に類似性が伴っているとのこともあるのだが、誘惑をなした誘惑者「にも」一致性が伴っているとのことがある——誘惑者らに極めて多層的な接続性が伴っているとのことがある——。

それにつき、背後の關係性までを見ずにまづもつて表層的な關係性について述べれば、

「誘惑者ら —黄金の林檎に関わるところの誘惑をなしたギリシャの女神アフロディテとエデンの果実に関わるところの誘惑をなしたエデンの園の蛇(に比定されるサタン)— が相応共々、[金星の体現存在]としての側面を帯びている」

とのことがある(ギリシャの美の女神アフロディテが金星の体現存在として伝わっている、そして、同アフロディテと同一視されもするローマの美の女神ヴィーナスの名が現代にあつて金星を指す英語呼称、ヴィーナス Venus になっているとのことに見るよふに「トロイア皇子パリスへの誘惑者」は「金星

の体現存在]としての顔を持つ。他面、エデンの園の誘惑の蛇に比定されるサタンも墮天した天使の長ルシファーとしての来歴にあつてのルシファー Lucifer という語の[明けの明星;金星 Morning Star]を意味しする語の特性から金星と濃厚に結びつく — [出典\(Source\)紹介の部 49](#) —)。

・ ([黄金の林檎とエデンの園の関係性 —2—])

直上表記の点以外に[林檎にまつわる誘惑]に関わる誘惑者ら (エデンの蛇に比定されるルシファーとギリシャの美の女神であるヴィーナス) の間には背後にての「複線的な」繋がり合いが存在する。

順々に表記するとして、まずもって、

[ヴィーナスが古代メソポタミアにてのイナンナ・イシュタルという女神から派生してきた存在であると歴年、指摘されてきた (本稿にての [出典\(Source\)紹介の部 61\(2\)](#) で示しているように歴史的資料や学者ら論稿 — THE RELIGION OF ANCIENT PALESTINE (1908)等の論稿— の中で指摘されてきた)]

とのことが問題になる。

それらメソポタミアの神格であるイナンナ・イシュタルという存在 — アフロディテ・ヴィーナスの始原的存在とされも論じられてきた古代中近東の女神ら — については彼女らがルシファーと結びつくとの指摘がなされてきたとのことがあり、問題になりもする (イナンナ・イシュタルおよびルシファーについては双方共に[冥界下りをなした存在(そして望まずに冥界に囚われることになった存在)][金星の体現存在]であるといった観点からそういう指摘が学者らによってなされてもいる — たとえば、現行にての英文

Wikipedia[Lucifer]項目にあつて “ it thus portrayed as a battle the process by which the bright morning star fails to reach the highest point in the sky before being faded out by the rising sun. Similarities have been noted with the East Semitic story of Ishtar's or Inanna's descent into the underworld, Ishtar and Inanna being associated with the planet Venus. ” 「それ (文脈上、ルシファーと神との戦いの物語との連続性が感じられる中近東由来の神話) は [光輝く明けの明星(金星;ルシファー)]が空にあつての最高地点に達しようとする中で昇り行く太陽の存在の前に霞み視界より消滅なさしめられ(フェード・アウトし)最高点に上ることに失敗するとのことを[闘い]として描いたとのものである。イシュタルおよびイナンナは惑星の金星に関係付けられる神格なのであるから、一致性問題は東部セム系に伝わるイシュタルまたはイナンナの冥界下りに関しても着目させられようとのことがある」との記述がみとめられるのも同じくもの状況の反映となる——)。

加えて、である。[イナンナ・イシュタル]が [冥界に双子(カウンター・パート)を擁する存在] にして、かつ、

[金星の体現存在]

となっていることが[他の神話体系の神格]を通じて問題になるとのこと「も」ある。

コンロブスの発見、次いでスペイン進出まで欧州文明が流入することがなかった[他文明圏から見ての孤立系]としてのアメリカ大陸にての土着文明(アステカ文明)の崇拝対象である

[ケツァルコアトル]

という神格が

[冥界に双子(カウンター・パート)を擁する存在]にして、かつ、[金星の体

現存在]]

との純・記号論的特性を女神イナンナ・イシュタルらと共有していることが問題になるように映るようになっていくとあるのである（一部識者にルシファーとの結びつきが指摘されてきたイナンナ・ケツアルコアトルは金星の体現存在であり、またもってして、イナンナにはエレシュキガルという冥界にての双子の片割れがいるとされる。他面、アメリカ土着文明にあつて崇められてきたケツアルコアトルという存在が冥界にてショロトルという双子の片割れを持っている金星の体現神格となっているとのことは本稿にての**出典(Source) 紹介の部 61**にて説明している）。

そうしたケツアルコアトルが

[知恵(文明)を授けた蛇]

[予言(一五一九年の望ましき帰還との現地神話体系に見る予言)の反対解釈の成就 —再臨したケツアルコアトルに仮託されて見られもしたスペインよりの侵略者らの到来— によりその会衆をたばかるような式で「[戦禍]と[疫病]の苦しみ」が極めつての聖書『黙示録』的状況での「破滅をもたらした存在」]

[金星の体現存在(こちらは重複表記でもある)]

との側面を介してルシファー(サタン)と記号論的一致性を呈しているがゆえにひとつに問題になるのである（文献的事実より指し示せる純・記号論的一致性にまつわる問題であり —本稿では**出典(Source) 紹介の部 53**から**出典(Source) 紹介の部 54(4)**にて事細かに指し示さんとしているところである—、そこで問題になるのは「ただの偶然で済むことなのか」「何らかの恣意的な作用の結果なのか」ということだけであるとの筆の運びを本稿でなしてきたところでもある）。

まとめれば、彼・彼女らの結びつきが語られもしてきたルシファーとイナンナ・イシュタルの間には

[冥界へ降下し、そこに幽閉された存在としての類似性]

[金星の体現存在としての類似性]

[別神格(ケツアルコアトル)を介しての類似性]

が存在しており、イナンナ・イシュタルと同一起源を有するとされる美の女神アフロディテ(ヴィーナス)が関与しての

[黄金の林檎にまつわる誘惑]

にあつて「も」「古き蛇」としてルシファーと同一視されている存在が関与しての「エデンの禁断の園での誘惑」との接合性が見てとれるとある、それがゆえに多重接合性がその程度のことからして問題になるとある。

・(**[黄金の林檎とエデンの園の関係性 —3—]**)

直上にてヨーロッパ勢が進出してくる前よりアメリカ大陸にて崇拝されていた人間に文明を授けたとされる所の蛇の神ケツアルコアトル神がエデンの園の誘惑者と記号論的一致性を呈していると述べたが(具体的典拠紹介は本稿にての先立っての段に譲りつつものこととして再述したが)、欧州より隔絶されていた土着文明にてケツアルコアトル神が崇められていたアメリカ大陸は後にヨーロッパの一部識者に

[古のアトランティス]

と同一物であると見なされるようになった領域でもある（本稿では**出典(Source) 紹介の部 52**にてフランシス・ベーコンの手になる古典『ニュー・アトランティス』の記述を原著・訳書より原文抜粋したり、往時の欧州人のそうした認識を反映しての地図を挙げたりして同じくものことの指し示しに努めてき

たところである)。

さて、ケツアルコアトルが崇められていた(欧州人が「発見」しての)新大陸アメリカと同一視されるに至った古のアトランティスではあるが、同アトランティスはアメリカ云々といったこととは別観点にて

[黄金の林檎の園]

と結びつけられてきた存在でもある(本稿では出典(Source)紹介の部 41 などにてその点についての指摘をなしている。一つにそういうことがあるのはプラトン古典を介して今日に伝わるアトランティス伝承に見るアトランティスの位置が伝わる場所の黄金の林檎の園の属地的特性と相通ずるところがあったこと、また、黄金の林檎を管掌するヘスペリデスという存在が[アトラスの娘ら]であり、[アトラスの娘]をもってして[アトランティス]ととらえる語法があること、また、古のアトランティスそれ自体が[アトラス]という名称と関わるものであるとのことらが原因となっていると自然に解されることとなっている)。

同じくものは

[ルシファー(エデンの誘惑にかかずらった古き蛇と同一視される存在)と記号論的一致性を帯びている文明の授け手にして会衆に破滅を進呈した蛇の神(ケツアルコアトル)の崇拝地域(アメリカ)]

が

[エデンの園との記号論的一致性を帯びている[黄金の林檎の園]]

と純記号論的に相通ずるようになっていることと同義である。

であるから、アメリカという領域、そして、そこにての土着文明にて崇められていた蛇の神ケツアルコアトルを介してからして[エデンの園(の一幕)]と[黄金の林檎]との結びつきが問題になるとのことにもあいなる(：尚、アメリカ大陸にも歴年假託されてきた黄金の林檎の園を管掌していると神話が伝えるヘスペリデスという存在は「宵の明星としての金星」(体現神格たるヘスペロス)と結びつく存在ともされており、その意「でも」明けの明星としての金星と結びつくルシファーとの相関関係が感じられるところともなる。そして、黄金の林檎の園に見る黄金の林檎が皇子パリスに対する女神アフロディテ(ヴィーナス)の誘惑を介してトロイアの崩壊原因になっている(先立ってエデンの園での人間の祖とされるアダムに対する誘惑の具となっていると言及したものと相通ずるかたちとなっている)だけではなく、黄金の林檎の園と相通ずるものとされるアトランティス大陸それ自体にもトロイアとの類似性がみとめられることを入念に論じてきたのが本稿となる(本稿にての出典(Source)紹介の部 40 から出典(Source)紹介の部 45 を包摂する部にて漸次典拠を挙げているところである)。

・([黄金の林檎とエデンの園の関係性 —4—])

上にての[黄金の林檎とエデンの園の関係性 —2—]と振っての部で指摘しているところ、

[(アフロディテ同質物たる)古代メソポタミアのイナンナ・イシュタルもルシファーと結びつく]

とのことに関わる点ともなるが、古代メソポタミアの女神イナンナ・イシュタルはギリシャ神話の冥界の女神ペルセポネと多層的な記号論的一致性を呈している存在である(要するにイナンナ・イシュタルはギリシャの美の女神アフロディテと結びつくのみならずギリシャ神話の冥界の女神ペルセポネ「とも」一致性を呈している)。

イナンナ・イシュタルおよびペルセポネの双方が

[冥界下りをなして、そのうえで、現世に再臨することになった女神]

[(これが大きいところとして) 質的同一存在であるとされるタンムズ神とアドニス神という植物の体現化神格を愛人としている女神 (イナンナ・イシュタルが愛人化しているタンムズ神にもペルセポネが愛人化しているアドニス神にも[死と復活の教義]が付きまとい、にあってはイナンナ・イシュタルとペルセポネとの関係性が問題視されることもある)]

となっていることがそこに見る共通性である (さらに述べれば、ペルセポネが冥界で愛人化しているアドニス神は冥界以外ではアフロディテ神によって愛人化されているとされる。そして、アフロディテとはイナンナ・イシュタルに愛人化されている存在である)。

同じくものことは本稿にての **出典(Source) 紹介の部 97** で入念に指し示している (当然にせせこましい個人の属人的目分量など介在する余地がないとのことでそういう関係性が濃厚に成立していることを入念に指し示している) こととはなるのだが、さて、ペルセポネという存在については — 本稿では同ペルセポネが【イシス】というエジプトからギリシャへの渡来神にまつわる秘儀体系を通じてフリーメーソンの儀式体系と濃厚極まりなくも関わっている存在、そうした指摘が歴年なされてきたとのことも摘示しているとのことまでなしているのではあるも — 【ヘカテ】という女神と結びつく存在となっている。

そこに見るペルセポネ — 繰り返しもすれば、イナンナ・イシュタルを介しもしてルシファーとの接合性を呈する女神でもある — との同質性を伴っている女神、ヘカテという女神は複合的に

[地獄の犬ケルベロス]

と結びつくとの女神ともなっている (本稿にての **出典(Source) 紹介の部 94(7)** で指し示しに努めていることである)。

そうしたことを念頭に「三面形態をとる」地獄の犬ケルベロスらを介してダンテ『地獄篇』に登場する「三面形態をとる」ルシファーが濃厚にヘラクレスの 12 功業と結びつくようになっていることの証示に努めてきたのが本稿である (典拠を **出典(Source) 紹介の部 90** から **出典(Source) 紹介の部 90(10)** にて事細かに挙げているところとなる)。であるから、[ペルセポネ ↔ ヘカテ] とのコネクションを介して「も」ルシファーはイナンナ・イシュタルという古代中近東の女神と結びつくようになっているわけではあるが (とすれば、[エデンの誘惑の蛇にも比定されるルシファー] が [黄金の林檎にまつわっての誘惑をなしたアフロディテ・ヴィーナスの始原的形態とされる古代中近東の女神イシュタル・イナンナ] とよりもって根深くも結びつくということにもなる)、 そうもした結びつき関係にあって着目しているダンテ『神曲; 地獄篇』という著名古典が「実にもって濃厚に」ヘラクレスの計 12 の功業(の後半部)と結びつくようになってもしており、そちらヘラクレス 12 功業(の後半部)のうち、第 11 功業が[黄金の林檎の取得のためのもの]、第 12 功業が[冥界下りをなしてのケルベロス捕縛のためのもの]となっているとのことがあり、そこから、[ヘラクレス 12 功業と濃厚極まりなく結びつく、冥界下りのダンテ『地獄篇』が三面構造を取るルシファーの目撃] で終わっていることは、すなわち、[イナンナ・イシュタル ↔ ペルセポネ ↔ ヘカテ (↔ ケルベロス ↔ ルシファー)] との流れはよりもってして [黄金の林檎とエデンの園の繋がり合い] にまつわってのここでの話に通ずるところがあるとのことになりもする。

直上にあって振り返りのうえで「一部」羅列表記してきたことら、すなわちもってして、

一部羅列表記としていくつも同じくもの関係性で問題になることがあるのにも関わらず、ここでは少なからずの割愛をなしている。たとえば、である。トロイアは黄金の林檎を巡る諍いのために滅んだと伝わるわけだが、黄金の林檎が破滅に繋がったそもそもの(神話上の)約定をもたらしたのは武人オデュッセウスとされる。そして、オデュッセウスという存在については後に【渦潮の怪物カリュプデイス】に呑まれ、のうえで行き着いた先が【アトランティス(すなわち黄金の林檎の園)に仮託されもしている島】(アトラスの娘たる女神カリュプソの島)に漂着した存在とされるのだが、同オデュッセウスの女神カリュプソの島への漂着プロセスが極めて著名な古典、ジョン・ミルトン叙事詩『失楽園』でエデンでの禁断の果実と結びつけられているといったこと「も」がある。そうした従前摘示事項をここでは割愛している。

【黄金の林檎とエデンの園の関係性 —1— 】

から

【黄金の林檎とエデンの園の関係性 —4— 】

とのかたちで振り返りのうえで一部羅列表記してきたことが

【偶然の問題】(only co-incidental)

として具現化していると斥けられるのか、そうではなく(斥けられず)、

【あまりにも執拗な意志の賜物】

として具現化しているのならば、その行き着く先に何があるのかとのことを問題視してきた(のが本稿である)。

(頭の具合が望ましくはない状況にある向きならば、えてして勘違いするかもしれないなどは考えるのだが、ここではくさくさと

【日常生活に関わらぬ無駄な知識;トリヴィア Trivia(微細なる事柄ら)】

のことを問題視しているわけではない。断じてない。[それらの行き着く先に人間を一体全体どうしたいのかとの明確な意志が透けて見えもしようとのこと]に相通ずる話を引き合いに出しているのである ——※[脇に逸れての表記として]：尚、[どうでもいいことを扱っているわけ「ではない」]とのこととながりで「一応」表記しておくが、[「どうでもいい」雑学知識]を意味する語たるトリヴィア Trivia とは元来、ラテン語における [三叉路(さんさじ)] がその語源にあるとされる語句ともなり、そうも述べられるところの趣旨は [三叉路がローマ時代にありふれたものとなっており、転じて、[ありふれている⇒どうでもいい]とのことになった] とされているところとなっている(その程度のこととはたかだかもの和文ウィキペディアのようなものにも記載されていることである)。といったこと、「トリヴィアの由来は三叉路にあり」といったこととともが [このような世界] で実際問題は額面上、[どうでもいい雑学知識] で済まされないと考えられもするところとして、同[トリヴィア]は実に悪質な名詞となっている(と解される)とのことがある。ヘカテという女神の[別称]もまたそちらトリヴィア、淵源を同じくもするところとしてトリヴィアとなっているとのことがそのこととなる(:後に黒魔術の本尊ともなった三面の女神たるヘカテの別称が[トリヴィア]となっているとのことが目立ってあるとのことについては、英文

Wikipedia[Hecate]項目にて現行、冒頭部より “ **She also closely parallels the Roman goddess Trivia, with whom she was identified in Rome.** ” 「ヘカテは「彼女がローマにて一致視されていた」ところの女神[トリヴィア]と緊密な対称性を呈している」と記載されているところでもある／ペルセポネと多層的につながるようになっていることを本稿で摘示してきたヘカテはグレコ・ローマン時代(ギリシャ・ローマ時代)に遡る三叉路など交差点を司る女神であり、のために、結果的に三叉路(体現神格)を意味するトリヴィアとの別名を冠するに至ったとされるのだ)。本稿ではそうも[トリヴィア](些細なること)を別称とするとされるヘカテという女神にまつわって [地獄の番犬ケルベロスとの繋がりがあい] を、そして、[フリーメーソン密儀と濃厚なる関係性を呈するイシス・ペルセポネら女神らとの繋がりがあい]を指摘してきた、そして、のようなことが果てはブラックホールを巡る問題にも「多角的に」接合してしまうようになっているとのことまでもがあるとのことを指摘してきた —長大な本稿にての補説

3と振っての部が同じくものことの具体的根拠を細かくも呈示している部となる — 。ここで述べるが、ヘカテ・ケルベロスらと記号論的に複合的に通ずるようになっている事柄らが[人間らを最期には嗜虐的に皆殺しにするとの内容と

密接に結びつく「奇怪」なる予言的事物ら] (何故なのかルネサンス期に今日の科学的観点で見た場合のブラックホール近似のものが持ち出されているといった「奇怪」なる予言的事物ら) と結びついているとのことがあれば、どうか (そして、悲劇的なことにそれは[仮に～ならば]の話では済まされず、[実際に濃厚にそうもなっている]ところとなる; 本稿の補説 3 の部を参照されたいものである)。といったことは実に悲劇的なところである (あるいは詐害意思を有している者らにとっては[標的の愚劣さ]を演出しての喜劇的なことかもしれないが)。人間存在というものが [ケルベロスと繋がる女神ヘカテ] の別名たるトリヴィアを [下らぬ、どうでもいい雑学的知識] との意味合いで情報処理するように「強いられている」、実際にはそれで済まされない事柄をそうも、Something of small importance たることとして情報処理するように「強いられている」との感じさせられるからそうも述べるのである (閑話休題) ——)

ここで何故もってして執拗な意志の賜物か否かとの問題が重くものしかかってくるのか、とのことに関わるところとして — これまた本稿をきちんと読まれてきたとの向きにあっては食傷感を催させるようなあまりにも[くどくもの話]とはなるのだが— 次のようなことらが

[目を向けて当然であろうとのところ]

としてある。

・現在、CERN (欧州原子核研究機構) のおこなっているブラックホール生成可能性が取り沙汰されるに至っている「実験」とされる営為 (LHC「実験」については [[黄金の林檎]との関係性] が次のような観点で多重的に見てとれるとのことがある。

⇒ブラックホールを検出しようとされる検出器 ATLAS にあつての名称由来となっている巨人アトラスは [黄金の林檎の在処を知る巨人] として伝承 —ヘラクレス第 11 功業にまつわつての伝承— に伝わっている存在である (: 検出器アトラス (ATLAS DETECTOR) を巡るそうした話については出典 (Source) 紹介の部 36 (2) を参照のこと) 。

⇒LHC 実験でブラックホール検出に資するとされる検出器 ATLAS に供されてのイベント・ディスプレイ・ツール (ブラックホール生成イベントを表示する可能性がある「実験」関係者に発表されているディスプレイ・ウェア) には ATLANTIS との名称が付されている。

ATLANTIS とは [黄金の林檎の園との一貫性] が一部識者に取り沙汰されてきた古の大陸の名称である (LHC を巡る ATLANTIS の話は本稿出典 (Source) 紹介の部 35 を参照のこと) 。

⇒LHC 実験で用いられているブラックホール生成イベント・ジェネレーターたる CHARYBDIS (同 CHARYBDIS、ブラックホール生成挙動を仮想的に再現しようとのソフトウェアで直上言及のイベント・ディスプレイ・ツール ATLANTIS とは別物となる) にみとめられるカリュブディスという名称は [トロイアを木製の馬で滅ぼした謀将オデュッセウス (本稿でも先述

しているように同オデュッセウスは黄金の林檎を巡る女神ら駆け引きにあつてのパリスのヘレン取得の拳がトロイア攻城戦につながることに
なった盟約の発起人となっていた男でもある) がトロイア絶滅戦完遂
後にての船旅にて呑まれた渦潮の怪物]

から命名されている。 そうもして渦潮の怪物カリュブデイスとはトロイ
ア滅亡の後日譚に登場する存在となるわけだが、トロイア滅亡は黄金
の林檎にて引き起こされている(LHCを巡るCHARYBDISの話は出
典(Source)紹介の部46を参照のこと)。 また、トロイアに引導を渡し
た男オデュッセウス、同存在はカリュブデイスに呑まれたことが契機に
なって女神カリュプソの島に漂着したとホメロス古典には語られる者な
のだが、そのオデュッセウス漂着の島であるカリュプソの島、オーギュ
ギア島という固有名詞が与えられての島は欧州一部識者(かのアイ
ザック・ニュートンも含む一部識者)に「アトランティス」と同一物で
あるとの視点が呈されていた島ともなり(出典(Source)紹介の部43)、
アトランティスということとなれば、(直上先述のように)黄金の林檎の
園と目されていた地所でもある。

・LHCは上述のように黄金の林檎と関わる命名規則がブラックホールと相通
ずるところで多重的に用いられている「実験」なのだが、にまつわっては次の
ことが述べられるようになっている。

⇒LHC実験にあつてブラックホールが生成されるのではないかとの疑義
が呈されるようになったのは1999年であり、同時期「以前」にはそういうこと
が目立って取り沙汰されたことはないと観察されるようになっている(本
稿にての前半部、出典(Source)紹介の部21から出典(Source)紹介の部
21-5(2)を包摂する段で事細かに呈示しているように「プランク・エネル
ギー」というものを極小領域に投下しないと人工ブラックホールなど生成し
えないとの観点があつたからであるとされる)。 また、学界関係筋にLHC
によるブラックホール生成の可能性が「肯定的文脈で」認容されだした —
「科学の進歩に資する」即時蒸発を呈するブラックホールが観測される可
能性があるとの式で認容されだした— のは2001年以降であり、それは
1998年に呈示されるに至ったADD模型という理論を発展させてのこと
だった(「プランク・エネルギー」を実現せずともプランク・エネルギーの
極小領域投下力量に天文学的なレベルで下回るLHCでもブラックホー
ル生成をなしうるとの観点が2001年より肯定的に流布されだした —本
稿の冒頭部からはじめての前半部全般を介して努めて細かくもの証示に
努めていることである(出典(Source)紹介の部1から出典(Source)紹介の
部5に至るまでの段などを参照されたい) —)。

⇒直上表記のようなことがあるとの中であつてLHC実験にあつての「黄金
の林檎」と結びつくATLASの命名規則が定まったのは計画策定段階で
あつた1992年のことであると発表されている(出典(Source)紹介の部
36(2)にて典拠を挙げている)。 とすれば、「トロイア崩壊の原因となつた
もの「でも」ある黄金の林檎」と結びつく巨人ATLASの名を実験関係者が
「警告」のためにブラックホール生成と結びつけられることになつた実験関
連事物の名称 —2001年よりブラックホール生成を観測しうると肯定的に
論じられ出した検出器の名称— に付したわけではないと「判じられる」と

ころとなる(純粹に物事の先後関係の問題である)。

⇒また、LHC 実験関係者はブラックホール生成が取り沙汰されるに至って
から今日に至るまで実験に関わる学界関係筋の者らが
「生成されうると(近年考えられるようになった)ブラックホールは即時蒸発
する、ではなくとも、成長に天文学的時間を要するとの[人畜無害のもの]
である」
「科学理論の発展に資するため、ブラックホール生成は極めて有意義有
用なることである」
と強弁・主張されているとことがある(そして、そのことは[科学界全体
のコンセンサス(総合的同意事項)である]との風潮が見てとれる。当事
者機関における主張内容、ブラックホール生成可能性に危惧感を表して
いる極一部の外部・外野の市民運動家らが関与しての訴訟における当事
者機関の物言いを本稿前半から数多原文抜粋しているように、である。尚、
LHC によるブラックホール生成が何故、物理学における理論深化に資す
るなどとされているかについては本稿にての [出典\(Source\)紹介の部 81](#) で
[標準理論に対する代替案の呈示][統一理論候補の呈示]との観点で
[学究]らにどうい主張がなされているのかとのことにまつわる説明をな
している)。

以上のことからより「も」、繰り返すが、

[[事前警告の意図] が関係機関筋にあつて、それがゆえ、[アトラ
ス](黄金の林檎の在処を知るとされる巨人) との名称がブラック
ホール探索挙動(と後付けになったこと) への命名規則に用いら
れるようになったとは「言えない」]

と判じられるところとなっている 一にも関わらず[実験]とされる営為は[黄金
の林檎(トロイア崩壊の原因ともなった黄金の林檎)の在処を知るとされる伝
説上の巨人の名前(ATLAS)を付された装置]でもってしてブラックホールの
検出をさえ期してきたとのものとなつてもいる一。

・[黄金の林檎]と[エデンの禁断の果実]が「純・記号論的に」多重的に結び
つくとのことは上の段にてくどくも指し示していることだが、
「どういうわけなのか」

[エデンの禁断の果実の誘惑と結びつけられてのルシファーを登場させる著
名古典らの相互に関連する特定部分]

に

[「今日的な意味で見た場合の」ブラックホールの質的近似物]

が多層的に具現化しているとのことまでがこの世界には「ある」(該当古典ら
から細かくも原文引用をなし、それらが何故、問題になるのかの解説を付
しての部は本稿にての [出典\(Source\)紹介の部 55](#) から [出典\(Source\)紹介の
部 55\(3\)](#) となる)

・加速器実験のことから打って変わつてのこととして [黄金の林檎] と結びつ
く寓意が

[911 の事件が起こることを先覚的に言及している(としか記号論的には評し
ようがないとの) 奇怪な文物ら]

と「多層的に」結びついているとのことでもが現実にはこの世界では具現化してい
る(意味論的思索を一切無視しての確率論の入力データにまつわるどころで
も先立って再説明を講じたところである)。

さて、

[911の事件が起こることを先覚的に言及している(としか記号論的には評しようがないとの) 奇怪な文物ら]

の中には、と同時に、

[ブラックホールや時空の扉(ワームホールと呼称されようもの)に関連するものら]

が見てとれるとのことがある(:先程来再言及したばかりの [[双子(のパラドックス)] [911(あるいは2001年9月11日)と相通ずる数値列] の多重的使用をもってして [双子(ツイン・タワー)の塔が2001年9月11日に崩落させられた事件の先覚的言及をなしている(としか述べようがない)] との「凄まじい」の一語に尽きる性質を帯びての作品、[出典\(Source\) 紹介の部 28](#) から[出典\(Source\) 紹介の部 33-2](#)にて前言の典拠を事細かに原文引用だけで呈示しているとのキップ・ソーン著作 BLACK HOLES & TIME WARP Einstein's Outrageous Legacy 『ブラックホールと時空の歪み アインシュタインのとんでもない遺産』との著作がその代表例である)。

上もて [正常なる人間] にはお分かりいただけるかとは思うのだが (とは述べても魂の抜け殻のように思考能力をろくすっぽ伴わぬ、一方で愚劣さとワンセットになったマイナスの感情ばかりはときにふんだんに作用している節があるとの向きらが多いとのこのような世界にどれだけ正常なる人間というものがあるのか、私という人間は何の楽観的期待・希望的観測もなせないでいるのであるも) 、

[計数的分析(先立っての確率論的分析)の対象とした関係性]

について以上述べたきたようなことがひとつに「ある」から、筆者は[この本質]が極めて重要・重大なるものであろうと見ているのである。

その点、「降車に振るうはこれ蠅螂の斧か」といった非力の身の上 (正確に述べれば、そういう立ち位置にあることをさんざんばらに段階的に「思い知らされてきた」身の上) でありつつも、権威の首府とされる加速器実験にまつわる国際的オルガナイザー(の一部局)としての役割をも担う国内機関を「法廷の場に引きづりだし」(知人法曹なぞの話や書籍書かれようから心底、『行政訴訟など提訴するに値せぬ下らぬものである』との観点があつたもの) そちら[年にして二年間も一審からして続いた行政訴訟]に意と労を割くなどしたのもそのためである(※)。

(※半ばもってしての余事記載として：ただただ [訴求のためだけに起こした訴訟] である直上言及の訴訟、国内で初めて、かつ、(現行)唯一の LHC 関連訴訟であるところの同訴訟からして

[聞く耳を持たぬ向きら 一話せば話す程にその内面の空虚さに落胆させられてきたとの多くの人間存在一]

の前ではただただ無意味か、との感をひたすらに覚えさせられることとなった、そして、『結局は(自由に物言える、振る舞えるとの)我が身とて幽閉された愚か者・死刑囚のようなものであろう』とのおのれの無力さ・非力さについての確信を「よりもって」強めさせられた、とシビアなところにその位置付けが落ち込みつつあるものなのだが、そうした挙にまで出ていたとの筋合いの者がこの身、本稿筆者となる。

といった人間であるとの本稿筆者ありようについて御自身が置かれている状況を理解出来ていないとの向きにおかれては勘違いするかもしれないが、

筆者（ときに冗談・洒落のめした態度で聞き手に重篤な状況を絶望的に見せまいとしてしまうが如しの甘さ、若い折よりの自分自身と他者に対する甘さがいまでもってして若干、残っているとこの者ながらもの筆者）はたかだかもってしての伊達や酔狂でやっているわけではない、死命死線の縁にあるとのなんら甘さが許されぬ状況であるとの観点で —その挙が結果的無駄無為無意味なるものかは置き— 現行、動いている（『どこぞやの輩が男を上げるためか、粹がって妙ちきりんなことをなしているな』などと考える向きもあるかもしれないが、そういうお呼びではない者らの観点とは全く異質なことに筆者意中の問題としては『間もなく殺されるとの懸念が極めて現実的なものとしてある。そうした中では非力非才なる我が身としてもやれるだけのことをやらざるをえぬ』といった観点がある）。

に関しては、

[LHC 実験の語られざるどころの異様さそれ自体について非を鳴らすべくも（[法律上の争訟]の対象となる）関係者不品行を問題視する裁判]を提訴することになった 2012 年中葉より幾分前の折柄より訴求のためだけに採算度外視で会社まで造りもしていた、「練れていないものであった」と反省するところなのだが、社用のウェブ媒体などを用意しながら、「そのための訴求の用に特化した」株式会社などを設立しもすることまでなしていることからもおもんばかりいただきたいとも思っている（そちらおのれが代表務める会社からして結局、[諸種の嫌がらせ行為]（その者達に本来的にはそうする動機もないところであろうと判じられるところでうち続いた大宗教団体の関係者らの嫌がらせ行為などを捕捉している）ぐらいしか目立っての反応を得られていないとのありさまではある、元より採算などどうでもいいとの会社であるものの、現行、税金だけを食う会社となっている節がありもするのだが、そこまでしての腰の入れようでの訴求をなしてきた筆者の行いの背景について本来の合理主義や悟性から逸脱しての愚昧さがあるかどうか推し量りいただきたいと思っている（経営学修士なぞの実利志向社会ならではのどうでもいい学位、筆者もそれを保持している下らぬ学位が依拠しているものもの見方、「資本主義社会にては勝ってこそであろう」「会社組織の究極的目的とは利潤を獲得することである」との観点では明らかに馬鹿げている挙なのだが、本然的な意味での合理主義や悟性から逸脱しての愚昧さが筆者やりようにみとめられるかどうか推し量りいただきたいと思っている） —)

以上、ここまでの表記でもってして

[高校(卒業)程度のレベルに留まってる数学知識保持者でも分かるように、]とグレード・ダウンしての(ベイズ推定を用いての)計数的分析で問題視した関係性、それがいかような性質を帯びたものなのかにまつわっての補足表記の部]

を終えることとする。

ホワイダニット(何故そうもなされているのか)の問題、人の身として およそ考えられるところの【動機】についての分析として

直前までにあって各々極めて長くもなつての

[意味的分析]

[計数的分析](データにおける記号論的な結びつき(における多重性度合い)に着目しての初歩的な式での確率論的分析)

と分けもしての分析の段にあつての

[計数的分析]

についての解説をなしてきたわけではあるが、これ以降は

[ブラックホールに通ずる異常異様なる先覚的言及が内破・終末に関わるところで執拗になされてきた(と遺漏なくも摘示できるようになってしまっている)]

とのそのことについて考えられるところの【動機】の問題について書き記していきたいと思う。

(以降、[動機]に関する分析のための記述部に入る)

さてもつてして、明らかに人為によってそこにあるとの、

[犯行の証跡] (無惨に引き裂かれている、それでいて、野獣に殺害や自然災害による死歿ではありえないかたちでグロテスクに[装飾]されているとの死体などでもいい)

は見てとれるし、本稿ではその指し示しにひたすらに注力なしてきたわけではあるも、他面、本稿では

[犯行の動機] (何故、そうもした犯行をなしたのか)

[犯行の機序] (どうやって殺人を起こしたのか)

の両二点については満足に論じてこなかったとのことがある。

何故か。

同じくものことは折に触れて長大な本稿の中の他所でも言及してきたこととはなるのだが、については、そう、[犯行動機]や[犯行機序]について満足に論じてこなかったとのことについては

[犯行 —そこに罪悪感はあるかは別にしても人類という種族に対する犯行— をなした存在「以外」には全面的理解が及ばぬとの式]

がそこに関わることとなる、それがゆえに、といった話を延々なすと

「属人的な揣摩憶測の類の如きものであらう」

との非難を不可避的に受けることになる、それでもつて本稿の値打ち —(理ではなく情でばかりものをとらえるとの向きが多いとの世人がどう見るのかによって玉虫色に変化する[相対的値打ち]の類ではなく具体的事実を遺漏なくも摘示しているとの意味での[絶対的値打ち]でもいい)— が減じることになるとの判断があつたからである。

以上、先立つての段でも記した[犯行動機]や[犯行機序]についての【(本稿内での)言及の僅少さ】にまつわる断り書きを繰り返しなした上で申し述べるが、ここ以降の段では敢えて、

(本稿にて忌避していた(きた)ところとして)【犯行動機分析】

を呈示しておくこととする。

その点については前もって強くも断っておきたきところとして次のことらがある。

「これ以降論じていく「犯行動機」の問題については属人的目分量が影響している(というより影響せざるをえぬ)ところであるために何であれば、「一つの考え」に過ぎぬと斥けていただいても構わないところである」

「本稿の真価は問題となる事実関係ら — 第三者が容易に裏取りなせるとの事実関係ら — 、および、そこに伴っての露骨な恣意性の指摘をなしたことそれ自体にある」(人間存在の尊厳を徹底的に軽視し、「歌会で歌の雅趣を競うように」人間に対する殺人行為を戯(たわむ)れになしてきた節とある【種族】が存在している、そして、そうした【種族】によって「人間存在を(何らかの効用のために)圧倒的な犠牲に供する必要がある」との執拗な意思表示がなされてきたとのことがある、とのことを遺漏なくも示している時点で本来的には(人間が滅ぼざるをえぬ種なら格別、)本稿はそのあるべき役割を全うしているはずであろうと筆者は考えている)

表記のこと、先行して断りもしたうえで

【犯行動機の問題】(「何故、それがなされたのか」、ホワイ・ダニットの問題)

についてこれより推し量れるところを述べていきたい。

(:そうまですることにしたのは「自身で物事を判断するのに手間取るとの読み手」を想定して「何故、そういうことを見てとれるのか」とのことについて「考えられるところ」を呈示することも必要かとの観点がありもし、またもってして、「悲劇」(そこにある犯行の「証跡」の問題でもいい)が現出しているとのその背景にありうるところの事情について「費用;コスト」と「効果効用;ベネフィット」の面で考えられるところの呈示までをもなすのも極めて長大なる本稿のようなものをしたため、その内容を世に問おうとしている人間に最低限求められている「節義」か、との判断があったとのこと「も」ある — ※「義務」「節度」「節義」等等と述べると、「背負(しよ)っていやがる. 何様のつもりだ. こいつは. . .」「大した誇大妄想の徒輩だ. お偉い救世主さまかなにかにでもなったつもりか」などと「筆者の側に決して立たぬ人間ら」[筆者のような人間の前に石を置こうとの者達](劣化した諸種の紛い物の供給母体かもしれない)は否定的な申しようをなすことかとは思ふ。当然にそう思うのではあるも、それが「個人意中ひとつの問題で済むか」との点に関わるところとして、(つい先立ってもそれについて断ったように)筆者は伊達や酔狂でこのような長大な文をしたためているわけではない。また、このような世界に対するいわばもってしての愛郷の念、相応の輩らを大量に含む人間存在に対する自己犠牲精神、そんなものはナンセンスであると考えており、「救世主」などとの観念をおよそ馬鹿げたものであると見つつ(「闘士」ならいざ知らず、筆者は「救世主」などとの概念は揶揄ややらせの産物、そうでなければ、「闘わぬ者達が世を救うとのスタイルを押しつけられた役者あるいは人形に対して抱くくだらぬ甘え」以外の何物でもないと見ている)、筆者はただただ「この身自身および自分が守ろうとする者(そして信ずるところの道義的に正しいと判じられるところ)のために命を賭ける」との自然なる情に基づき伊達や酔狂などとは全く別の心境にてこのような長大なる文書をしたためている(と強調したい)。であるから、「節度」「節義」といった言葉をこの身、筆者が使おうとも何卒、「伊達や酔狂の産物」「背負(しよ)っている類の自己陶醉がゆえの妄覚・妄言の類」と軽々に判じないでいただいものではある。尚、「必死さ」をして「ださい」「痛い」と厭うの

は勝手だが、[生き死ににダイレクトに関わる(と具体的材料より判じられるところ)で [必死]になれぬ手合い]は「ださい」「痛い」にすら値しないもの、[存在として[殺され][食われる]のを是とするような「極めて」愚劣な存在]と見られてもやむなしと心ある者は認識すべきであろうとも申し述べておきたい——)

前置きはここまでとして、それではこれ以降、

[特定事実関係現出の背後にあると解される動機にまつわる問題] (ホワイ・ダニット「何故それをなしたのか」にまつわる問題)

について —[具現化しての人間悲劇]の背後にある[執拗さ]についてそこまでの見解を呈示しなければ語るに値する読み手らにおかれても膝を叩かれるとのことはなかろうとの判断から— [ひとつの可能性]を推察(guess)として呈示していくこととする。

さて、(唐突とはなるが)、筆者は2012年上半期からして自身が設立した会社の名前で加速器実験機関に足を運んでそこへの取材活動をなし、エポックメイキングなことをなしもしていたと知られている国内物理学者(迷惑をおかけしたくはないので具体的姓名は挙げない)の向きなどに

[フランク・ティプラー]

という米国人物理学者の手になる著作、

The Physics of Immortality: Modern Cosmology, God and the Resurrection of the Dead
(直訳すれば、『不死の物理学:現代の宇宙観、神、そして死者の復活』ともなろうタイトルの著作となるが、現時、未邦訳)

を引き合いにしての質問を自身[推理]にまつわるところでの質問を相対でなしだしていた——(常識的話柄に落とし込んでのそももした質問をなしだした時分にあつての取材活動の趣意としては[LHC問題について関係者がどういった目分量を抱いているのか]とのことを把握したかった、そういうことが「主には」あつたわけだが)——。

今を去ること数年前(2012年上半期)から専門家らにそれにまつわつての質問「をも」あわせてなすとのことをなしはじめていたのは

[そこまで力を入れて「推理」をなすべきかと判じたところのホワイダニット (何故そうなのか)に関わりうる問題]

として米国人物理学者フランク・ティプラーの著作たる The Physics of Immortality : Modern Cosmology, God and the Resurrection of the Dead『不死の物理学:現代の宇宙観、神、そして死者の復活』に「重要な示唆」がなされている節が如実にある —異常異様な二重話法の臭いが伴いもするところとして「重要な示唆」がなされている節が如実にある—との判断が筆者にあつたからである。

につき、往時を振り返り、[推理の材を得るのに注力していたものの、ただ、の中にあつても今ひとつのところがあつた]とのところも他面であるのだが (自分自身に言い訳がましくも述べれば、[往時、極めて体調が悪かつた]そして[絶望と通ずる心根に苛まれていた][マルチ・タスクで配分がおろそかになりもしていた]等等とのことがあつて詰めに欠けるところがあつた)、とにかくもってして足を動かして判断材料の収集をなす程度に力を入れていた[推理]の問題に関わるところとして、フランク・ティプラーという物理学者の著作、The Physics of Immortality: Modern Cosmology, God and the Resurrection of the Dead((現時未邦訳)『不死の物理学:現代の宇宙観、神、そして死者の復活』)には以下のような内容が見てとれる。

[返らずもの死者を「黄泉」返らせる]

[神に見紛う究極機械を造りだし、万難を排せるとの世界を実現する]

[時の呪縛を超越して[時の果て]にある理想郷を実現する]

以上のことから、世間一般の普通人にはあまりにも突き抜けた絵空事と当然に見えもしようとのティプラー著作にみとめられる内容は筆者が2010年に遡るところとしてオンライン上情報や洋書書籍(原著および訳書)にてその概念について煮詰め続けてきたとの概念、

[オメガポイント] (Omega Point Theory)

と「濃密に関わる」ところのものとなる(※)。

(※筆者が[オメガポイント]について思索を深めていったとのそもそもの経緯は直近先述の **The Physics of Immortality: Modern Cosmology, God and the Resurrection of the Dead (1994/現時未邦訳)** との著作の読解をなしたとのことに遡るところなのだが、同概念について突き詰めて考える必要があると判じたとのそのことについてさらに述べれば、長大なる本稿の冒頭部エピグラフの部(冒頭にてのコンセプト明示のための引用の部)にてその文言を引用してもいるとの著作、

The Singularity Is Near: When Humans Transcend Biology (原著は2005年刊、こちら「は」訳書も出ており、日本語訳書2007年刊)

との著作 — (原意に近しくもタイトルを訳せば、『特異点の時は近い。人類が生体組織を超越するとき』とあいなるとの著作なのだが、(現)NHK出版より出されているとの訳書に見る邦題は『ポストヒューマン誕生 コンピューターが人間の知性を越えるとき』となっているとの著作(かなり大胆なる意識である) — の内容を検討しもして、そちら著作内容からして(強くも抱いての推察 guess の問題として) 二重話法; Double Meaning に関わっていそうである、[人間の不幸の本質]に関わっていそうであるとのことを [Singularity; 特異点] との概念との絡みで思料するに至ったとのことがあるからである (: 筆者はブラックホール生成問題との絡みで何が問題になるのかここ数年来、探索をなすとのことをなしていたのだが、の中で、(ブラックホールの中心にも重力にまつわるパラメーターの問題としてそれがあるとの) [特異点] との概念についての思索もできる範囲でなすとのことをもなしており、そうした中でレイ・カーツワイルの表記著作『ザ・シンギュラリティ・イズ・ニア (特異点のその時は近い)』の意味合いを深くも考えるに至ったとのことがある))

物理学者フランク・ティプラーの手になる **The Physics of Immortality: Modern Cosmology, God and the Resurrection of the Dead (1994/現時未邦訳)** の内容にあって何がどう二重話法がかつての側面を帯びているのかについて原著それそのものの内容を引きながら懇切丁寧を心掛けての解説をなす前に、まずもっては、

[オメガポイント]

とは何かについて概説的な説明をなすことから始める。

その点、オメガポイントという概念については、(筆者が物理学者にそれにまつわっての取材活動などでの突き詰めての質問までをなすにまで至っていたとのその後に)、

[陰謀論系の[役者]の国内特定出版物を介してのそれ(オメガポイント)にまつわってのたわごと・ざれげんの放出 — (差し障りなからうとの範囲で述べれば、[思考し意志力ある人間に相応しいとの明瞭明晰な思索]を伴わぬ馬鹿げた抽象論・観念論をもっぱらに展開し、あわせて、裏取り出来る余地が何らないとの伝聞ばかりを[詐狂者めかしてのわざと戯画化している節ある誇大妄想および被害妄想]とごった煮にして流布しているといった手合いらによるざれげんの放出(具体的な[芸名][社名]は付さないが、計画的に用意された節ある愚書の類によるざれげんの放出ともなり、それは「本稿筆者自著『人類と操作』の出版経緯にあつての背面から刺すような介入やりようから」動向観察してきた(せざるをえなかった)大手出版社出入りのスピンアウト人脈(大規模宗教団体とも接合する人脈と把握している)がそのままに関与している節あ

る特定出版物を通じてのざれげんの放出ともなる)——]

の動きなど「も」目立って捕捉することになっていたとの概念とはなるものだが (そうした類を介してのオメガポイント理論の取り扱いを不愉快に捕捉した折には「真実に近いところであるから、却(かえ)って、相応の紛い物 —この国で産業として陰謀論を流布させられている国際的「仏教系」宗教団体とも接合する人脈— を用いて陳腐化がなされているのかもしれないな」「人間にはそうした[層](としか述べられぬ戯言)しか与えぬとの悪意の賜物か」などとも見たものではある)、 同オメガポイント、

[歴(れっき)とした科学哲学の仮説上の概念としての地歩]

を確立しつつあるものでもある。

にまつわってはオメガポイントについて衆目につきやすきところでなされている通俗的説明を引くことからはじめたい。

(直下、まずもっての基本的なところとして、英文 Wikipedia[Omega Point]項目よりの引用をなすとして)

The Omega Point is the purported maximum level of complexity and consciousness towards which some believe the universe is evolving. The term coined by the French Jesuit Pierre Teilhard de Chardin (1881 – 1955). In this theory, developed by Teilhard in The Future of Man (1950), the universe is constantly developing towards higher levels of material complexity and consciousness, a theory of evolution that Teilhard called the Law of Complexity / Consciousness.

[...]

Frank Tipler uses the term Omega Point to describe what he maintains is the ultimate fate of the universe required by the laws of physics. Tipler identifies this concept as the Christian God and in later writing, infers correctness of Christian belief from this concept. Tipler (1994) has summarized his theory as follows:

[...]

Key to Tipler's exploration of the Omega Point is that the supposition of a closed universe evolving towards a future collapse. **Within this universe, Tipler assumes a massive processing capability. As the universe becomes smaller, the processing capability becomes larger, due to the decreasing cost of communications as the systems shrink in size. At the same time, information from previously disconnected points in space becomes visible, giving the processors access to more and more information. Tipler's Omega Point occurs when the processing capability effectively becomes infinite, as the processors will be able to simulate every possible future before the universe ends - a state also known as "Aleph".**

(補いもしながら訳を付すとして)

「**オメガポイント** (訳注:ギリシャ語アルファベットにての「最後の」文字 Ω オメガから【終着点】のポイントとの意味合いがある) とはそこに向けて宇宙が進化していく方向であろうと幾人かの向きが信ずる[複雑性の構造及び意識レベルの絶頂のポイント]のことを指す。 同用語オメガポイントはフランスのイエズス会士ティヤール・ド・シャルダン(1881年生 1955年没)によって造語されたものとなり、ティヤールによってその著作『未来の人』(1950)によって発展させられたオメガポイント理論によれば、ティヤールが複雑性・意識性の法則と呼ぶ進化の理論にて宇宙は定常的に物質的複雑性および意識の高みに向けて発展していくことになるとされる (訳注:尚、本稿筆者もティヤール・ド・シャルダンの著作、例えば、みすず書房という「堅い」書籍ばかり出す出版社から出ている『ティヤール・ド・シャルダン著作集 2 自然における人間の位置 人間のエネルギー』といったものを読み、彼の思想が【精神圏; Noosphere】、惑星のような巨視的存在にまで拡大した人間存在で示されるものであることを把握している)。

…(中略)…

(物理学者の)フランク・ティプラーは(テイヤール・ド・シャルダンによって編み出された)オメガ点という言葉

[物理学の法則によって要求される宇宙の究極的運命]

について自己の考えるところを表するために用いている。ティプラーは同概念(オメガ点)を後の書き物にて[キリスト教の神]として同定、同概念からキリスト教信仰の正当性を暗に示すとのことをなしている。

…(中略)…

(物理学者の)ティプラーの[オメガ点]概念の説明のキーとなるところの説明は未来の崩壊に向けて歩みを進める[閉じ行く宇宙]を想定するとのものとなる。ティプラーはそうした崩壊していく宇宙にて大規模な処理能力を想定するとのことをなしており、宇宙が(収縮にて)縮小していく中でサイズ縮退に伴う通信コストの減退に応じて処理能力が向上していくとのことを想定している。と同時に、従前、宇宙にて不連続であった各点らが可視化、処理装置がより多くの情報にアクセスできるようになると想定している。ティプラーのそうしたオメガポイントは(機械の)処理能力が無限大に近しくも効率的になった際に生じ、そこでは処理手順が[宇宙が終わる前に生じた全てのありうる未来]をシミュレートできるようになる(機械が世界のすべてをありうる限りに再生できるようになる)との「アレフ」との状況に至るとするものである

(訳を付して引用部はここまでとする —※—)

(※尚、フランク・ティプラーの提唱したオメガポイントについては[宗教と科学を融合させての「似非科学」の決定版](縮退を続ける宇宙にて縮退がゆえに機械によって再生されえるようになった世界とキリスト教における天国の観点を結びつけるなど宗教と科学を融合させての「似非科学」の決定版)などとの批判もなされている。

同じくものことについては英文 Wikipedia における [Frank J. Tipler] 項目にあつて(以下、引用なすところとして) “ Tipler's Omega Point theories have received criticism by physicists and skeptics. George Ellis, writing in the journal Nature, described Tipler's book on the Omega Point as "a masterpiece of pseudoscience ... the product of a fertile and creative imagination unhampered by the normal constraints of scientific and philosophical discipline", and Michael Shermer devoted a chapter of Why People Believe Weird Things to enumerating what he thought to be flaws in Tipler's thesis. Physicist Sean M. Carroll thought Tipler's early work was constructive but that now he has become a "crackpot" ” 「ティプラーのオメガポイント理論は物理学者らおよび懐疑論者らよりの批判に曝されている。ネイチャー誌書評にての寄稿にて(物理学者の)ジョージ・エリスはオメガポイントにまつわるティプラー著作を「疑似科学の傑作、通常の科学および哲学の規範の縛りから解放された肥沃(放埒)なる独創的想像の賜物。」と表し、そして、(職業的懐疑論者の)マイケル・シャーマーは自著『何故、人は奇怪なものを信じてしまうのか』(早川書房から出されている邦題タイトルは『なぜ人はニセ科学を信じるのか?』)にあつて自身がティプラー理論の欠陥と考えることを挙げるのに一章を割いている(訳注:同著内記述については意図して本稿の後の段に引用する)。物理学者のショーン・M・キャロルはティプラーの初期の著作を建設的なものとしつつもティプラーが[変人](Crackpot)に成り下がったと考えているようである(訳を付しての引用部はここまでとする)と記載されているところでもある)

上のたかだかウィキペディア程度の媒体にてなされている通俗的説明の引用をもってして[オメガポイント]

がいかなるものなのかについて一面でご理解いただけたものか、と思うのだが、同オメガポイントにまつ

わる現代物理学に依拠しての概念は(上の引用部に見る向きたる)物理学者フランク・ティプラーの独創のみによって構築されたもの「ではない」(:実体実質はともかくも、俗間にて何かを識り、考える能力があるなどとされている「識者階層」に分類されているような人間でも当該分野について何も識らぬとの人間などは往々にしてそこからして、そう、「概念提唱の経緯の問題」からして誤解曲解を呈しうる(何も識らぬ中で中途半端に調べもした段階で「ティプラーという旋毛(つむじ)が左向きがかった者が一人でオメガポイントなる概念をこさえたのであろう」云々と誤解なしえる)かとも思うのだが、本稿本段で重んじているとのオメガ点には一すぐ後にて解説するように— [科学哲学概念]と表するに足りる歴とした沿革・理基盤板が伴っている)。

その点、世間一般ではオメガ点の旗手とされる物理学者フランク・ティプラー自身が(彼がその体系的ヴィジョンを示して見せたことで知られる)オメガポイント理論というものについて

「己一個のアイデアとして煮詰めたものではない、先達らの事績・一般的科学法則から導き出せるものである」

と懇切丁寧に解説しているとのことがある。

に関しては(上にての英文 Wikipedia にもその名が表記されている)イエズス会士ティヤール・ド・シャルダンがおおよそ今日のそれに通ずる先覚的概念としてのオメガ点を提唱し(先述なしたところの著作、そのエポックメイキングなる内容で知られるティプラー著作である **The Physics of Immortality: Modern Cosmology, God and the Resurrection of the Dead**『不死の物理学:現代の宇宙観、神、そして死者の復活』にあつての **III. Progress Against the Eternal Return and the Heat Death**(第三章『永劫回帰と(宇宙の)熱的死に抗つての進歩』)にあつて Frank Tipler はティヤール・ド・シャルダン(Teilhard de Chardin)の視点が現代物理学の観点でもって見た場合のオメガポイント理論と相通ずる側面をいかに先覚的に呈していたのかにつきティヤール申しようを事細かに引用なしながら懇切丁寧なる解説をなしてもいる)、ティヤールの先覚的理論が既に登場していた段階で [オメガポイントにまつわる科学的解法] が著名物理学者フリーマン・ダイソンら(の提唱した式に対する「反対」解釈)によって先行して現われもしてきていたとティプラーが手ずからその自著にて細かくも解説しているとのことがあるのである。

そう、物理学者フランク・ティプラー(同輩の「科学者」らにはクラックポット、[変人]との評価をなされているようだが、[神]を[終末に到来する万能機械]で説明なそうとしていたとの意味で話題を引っさらった物理学者)は「先達ら専門家の知的成果を自著にて最大限援用しながら」、オメガポイントのことを世に呈示しようとのことをなしているのである(:本質的などころではすかすかになっている節もある和文情報のことは脇に置き、往々にして衆人の目につきやすき英文情報ではオメガポイントがティプラー一個の独創であるように論じたてるものが多いとも見えるわけだが、ティプラーの著作にはアカデミズムの世界で生きていた人間らしい節義かとも受け取れるところが多分にみとめられる)。

同じくものことを示すティプラー著作よりの端的なる引用をなしておくこととする(:尚、これよりそこよりの引用を度々なしていく所存であるとのティプラー著作 **The Physics of Immortality: Modern Cosmology, God and the Resurrection of the Dead**『不死の物理学:現代の宇宙観、神、そして死者の復活』は幅広くもの読者層を想定したものであると見受けられる書籍として(理系での大卒程度の[教養]を有し、かつ、英語を読み解ける(あるいは読み解く意志の力がある)限りにおいては)比較的分かり易いものであるとのものとなっている——※何故、そうした「平易」かつ「エポックメイキングな内容を有した」九〇年代初出書籍が今日に至るまで日本語版として訳出されてこなかったのか、国内の理学系の学者ら(学者との肩書きがそも、唾棄すべき偽りの世界の空虚な立ち位置上のことかとも見えもするところとして常識的なことしか言わぬしやらぬであろうとの役者揃いかと映りもする国内の学者ら)が諸共、訳業に逡巡・忌避でもしたとでもいうのか、その不可解性は置くとして、とにかくものこととして、同著、[比較的分かりやすいもの]となっている——)。

SOURCE 115

Abaddon, to have been the name of the same Ophite God, with whose worship the world had been so long infected. Oh, I take Abaddon, or, as it is mentioned in the Revelations, Abaddon, to have been the name of the same Ophite God, with whose worship the world had been so long infected. He is termed by the Evangelist Αβαδδων, τον Αγγελον της Αβυσσου, the angel of the bottomless pit; that is, the prince of darkness. In another place he is described as the dragon, that old serpent, which is the devil, and Satan. Hence I think, that the learned Heinsius is very right in the opinion, which he has given upon this passage; when he makes Abaddon the same as the serpent Pytho.

Jacob Bryant, A New System or Analysis of Ancient Mythology Vol.II. (1807) OB, OUB, PYTHO, SIVE DE OPHIOCLATRIA

the September 11 attacks (coordinates) 38.87099° N 77.05596° W
↑
setting American Airlines Flight 77 (Boeing 7x7 Series)

recall

'ugly' Book of Revelation filled with [number 7]
7 stars, 7 lampstands, 7 churches, 7 seals, lamb having 7 horns, 7 angels, 7 trumpets, 7 thunders, 7 visions, 7 bowls, 7 plagues, 7 words, 7 headed dragon

(Greek Αποκαλυψις Ιωαννου, Apocalypsis Ioannou) means 'un-covering'

[bottomless pit]
They had over them a king, an angel of the abyss, whose name in Hebrew is Abaddon, but in the Greek he is called Apollyon. (Revelation 9:11)

(in Satan's voyage through abyss) → 'Original Sin' for religious people
The secrets of the hoary deep; a dark illimitable ocean, without bound, / Without dimension, where length, breadth, and height, / And time, and place, are lost; where eldest Night And Chaos, ancestors of Nature, hold Eternal anarchy, amidst the noise Of endless wars, and by confusion stand.

John Milton Paradise Lost (1667) BOOK II, lines 890-895

(peculiar) BH like properties (seen in 17th century)

Collapse of 1 WTC - 7 WTC and Boeing 7x7 Series
7-7 London bombings (2005) (referred as 7/7)

Appolo (and his predecessor Pytho)

ここ出典(Source)紹介の部 115 にあつては

[物理学者フランク・ティプラーが主唱するオメガポイント理論は先行する物理学者ら思索を煮詰めてのものであるとティプラー自身によって細かくも解説されている]

とのことの典拠を挙げておくこととする。

(直下、The Physics of Immortality : Modern Cosmology, God and the Resurrection of the Dead『不死の物理学:現代の宇宙観、神、そして死者の復活』にあつてのオメガポイント理論登場経緯にまつわる端的な記載部 (III. Progress Against the Eternal Return and the Heat Death 第三章『永劫回帰と(宇宙の)熱的死に抗つての進歩』にての The Triumph of Progress『進歩の勝利』(ないしトリアム・[勝利の凱歌]と訳すべきか)の節) よりの引用をなすとして)

Although Teilhard's work inspired the name of the Omega Point Theory, the

actual content of the theory was inspired by Freeman Dyson's extraordinary 1979 paper Time Without End: Physics and Biology in an Open Universe. This paper is important because it is the first attempt to calculate in a rigorous way, using the known laws of physics, what life must do in order to survive forever. Where Bernal, Haldane, and Teilhard speculated, Dyson computed. His mathematics established beyond question that infinite survival is very difficult: it cannot occur in just any universe. But thereby Dyson established the field of physical theology, because this very difficulty means the Eternal Life Postulate has experimental consequences: only if our own universe has certain very special properties can the postulate be true. Dyson attributes the Eternal Life Postulate to Bernal (and, to a lesser extent, Haldane), but he claims the idea of applying it to the remote future he got from a 1977 paper by the Muslim astrophysicist Jamal Islam, who comes from and now lives in Bangladesh. What Islam did was to calculate how matter would evolve in universes which expand forever. Dyson then asked what life would have to do in order to exist on matter that behaves in this way.

[. . .]

Interestingly, Dyson's "philosophical bias" was the exact opposite of Teilhard's, who believed, as I do, that life can evolve into infinity only in a finite closed universe. **Dyson dismissed the idea of life continuing forever in a closed universe in a single paragraph:**

[. . .]

But I do know the answer to Dyson's question: it's not possible. More precisely, I shall prove in the Appendix for Scientists that if a closed universe starts to collapse, if gravity is always attractive, and if determinism holds, **then every part of the entire universe, without exception, collapses in finite proper time to zero volume while the temperature goes to infinity. There is no way life could stop this collapse.**

[. . .]

But stopping the collapse is the last thing life would want to do. It is the very collapse of the universe itself which permits life to continue forever.

(かなり細かくも[訳注]で補いもしての拙訳として)

「(ティプラーが自らの理論深化の経緯に語っているとの[主語ティプラー]との文脈にて) オメガポイント理論名称はティヤール・ド・シャルダン著作よりインスピレーションを受けて決めたのだが、**理論の現実上の内容はフリーマン・ダイソン** (訳注:同フリーマン・ダイソンは[ダイソン球]といった概念の提唱者としても知られる向き、数学畑出の天才肌の著名物理学者となる) **の1979年の際立ちもしての論文、**

Time Without End: Physics and Biology in an Open Universe『開かれた宇宙における物理学と生態系における「終焉無き」時間』

よりインスパイアされもしたものとなる (本稿にての訳注として:ティプラーは[フリーマン・ダイソンの書く Open Universe[開かれた宇宙]]ではなく[Closed Universe[閉じていく宇宙]]こそが [[神と化す機械]の物理的登場可能性]に関わると専らに論じている、そこにこそ、オメガポイントを導き出す解法があると論じている)。

フリーマン・ダイソンの同論文 (Time Without End: Physics and Biology in an Open Universe) は

[生命が永劫に生き続けるためになさねばならぬ]

ことを厳密なやりようで計算する最初の試みをなしたとのものがゆえに重要たるものである。

バナール (訳注として:欧米では著名な科学者となっている英国のジョン・デズモンド・バナール **John Desmond Bernal** のことを指す 一同バナール、主

著として **The World, the Flesh & the Devil: An Enquiry into the Future of the Three Enemies of the Rational Soul** 『世界、肉体、そして悪魔. 理性的精神の三つの敵の性質に対する問い』(1929) をものしている学者、他に訳書として筆者もその古書化した版を試みに読んだことがある『生物の起源』(岩波新書) をものしている学者となりもし、Biophysics [生物物理学] を切り拓いたことで有名な学者である—)、**ホールデン** (訳注: J.B.S Haldane ことジョン・バードン・ホールデンのことを指す— 同ホールデン、世間的には『ダイダロス あるいは科学と未来』との人工子宮による機械的養殖人間にまつわる初期的言及小説の作者としてもよく知られる生物学者だが、ティプラーはその最終稿に至らずにも **Dialectics of Nature** 『自然にての論理的答弁』との書の内容を問題視している—)、**そして、テイヤールが推察を巡らしたところでダイソンが計算をなしたのである** (訳注: ジョン・デズモンド・バナールの **The World, the Flesh, and the Devil** 『世界、肉体、そして悪魔 (副題: 理性的精神の三つの敵の性質に対する問い)』がフリーマン・ダイソンに永劫に生きる道を計算することになる契機を与えたともティプラーは別の段で解説している。この際、影響・被影響の環の中にある書名がそれからして [二重話法がかってかぐわかしくも映る] ことは置き、である)。

ダイソンの数学(的やりよう)は永遠なる命が
[とてつもない困難を伴う] (infinite survival is very difficult)
とのことを [疑いもなくに (beyond question)、] のところとして確認なしもした。
すなわち、そうしたもの(永遠なる命)はいかなる宇宙にても生じえなかりうとしていた。

しかし、ダイソンは [永劫の命の仮説] をして実験的な結果の問題としもした、すなわち、
[我々の宇宙が特定の仮説が真なりし場合にのみの極めて特殊な特定の属性らを帯びている場合にあっての実験的な結果]
を問題としもしたことで [物理的な意味での神学] を定立することとなった。

ダイソンは永遠の命の仮説をしてバナールに帰さしめている(そしてそれに劣後するかたちでホールデンに帰せしめている)のだが、彼は遠未来に当てはめての同観点をバングラデッシュ出身にして同バングラデッシュ在住のムスリム(イスラム教徒)の天体物理学者ジャマル・イスラムの1977年の論文から得たと主張してもいる。

ジャマル・イスラムがなしたことは永劫に拡大する宇宙にていかように物質が進化するかであった。ダイソンはそこから生命はそうした環境で振る舞う物質として存在する場合にて何をなさねばならぬのかとの問いを發することになる。
…(中略)…

興味深いことに [ダイソンの哲学上の偏見] は
[テイヤール (訳注: オメガポイント理論の旗手たるテイヤール・ド・シャルダン) の信じたもの]
と正確にももの反体の性質を呈するものとなっており、このように私(ティプラー)は(ダイソンの前提に置いている [開かれた宇宙] に対して) [無限に閉じ行く宇宙] にてのみ生命は永遠に発展していくことが出来るとの帰結を見出したのである。

ダイソンは [閉じた宇宙にての生命の継続の観点] をたったの一文のみで斥けようとしている。
…(中略)…

しかし、私はダイソンの呈示している疑問に対しての回答を知っている。「それはありえるような話ではない」。より端的に述べれば、[閉じた宇宙] がもし崩

壊を始めたのならば、そして、重力は常に引き寄せの力を呈しているのであれば、そして、決定論的観点が当てはまるのならば、例外もなく全宇宙の全パートが温度が無限に近付くなかで無限にゼロサイズに近しくも有限時間の中で崩壊していくことを示すことができるのであり、私は科学者らのための付録の部にてそのことを呈示するつもりである。生命がこの崩壊を食い止める方法は無い。

…(中略)…

が、崩壊を食い止めるとのことは生命がおよそ望むべくもないとのことである。その崩壊こそが生命をして永劫に生きることを許さしめるものとなるからである (訳注として:ティプラーはこうもしてダイソンの呈示する [開かれた宇宙] に代替する [閉じた宇宙] にまつわる主張の間隙を突くとのかたちで [無限に収縮していく閉じた宇宙] にてその収縮過程そのものをコンピューターの計算リソースの飛躍的向上に利用なさせ、神なる領域、世界そのものの機械的再生を実現する縁(よすが)とするのだと強調している —同じくものことについては細かくも後述する—) 」

(長くもなつての注記付きの訳を付しての引用はここまでとする)

出典(Source) 紹介の部 115 は以上とする)

上に原文引用なしたようなこと —それだけ見るならば、「ぶっ飛んだ」(などとの俗語的表現が与えられる) 科学者による普通人には理解しがたいような物言い— が何故、本稿この段にて問題視している、

[Whydunit の問題 (ホワイ・ダニット、犯行における [何故、それをなしたのか] の問題) の [推理]]

に通ずるのかとの解説は続けて後の段でこれよりなすとして、とにかくも、フランク・ティプラーは自著にて [オメガポイントにまつわる理論が成立するに至るまでの細々とした理論的背景がある] とのことを明示している (: 彼ティプラーはまずフリーマン・ダイソンとの大物科学者に由来する [よりもって先達の科学者らの目分量を踏襲しての宇宙における生命の永続性の不可能性の観点] を呈示し、そこから、その間隙を衝くとのかたちで反対に [宇宙における生命の永続性の条件] を論ずるとのやりようをとっている、そのように手ずから言及している)。

さて、(その事細やかな解説を後になすとの) フランク・ティプラーのオメガポイント理論に関しては [次の観点] から本稿にて延々と証示に努めてきたことと関連性を呈している (と指摘できるように「なってしまう」)。

第一。

オメガポイント理論にまつわってティプラーが明示している観点は「史的」側面で [現行の加速実験実施機関の「誕生」経緯] との [繋がり合い] が観念されるとのものとなっている。そして、その繋がり合いは本稿にて問題視してきた [予言的作品] との共通項が問題となる [繋がり合い] 「とも」なっている (※)。

(※上の第一の点については、字面、その響きからして

「この段階では」何を述べているのかさえ理解いただきたいところであろう」とのことであると重々承知の上ではあるが、これより詳述をなしていく中でまじめな読み手には理解いただけることか、とは思う)

第二。

上記第一の点と一緒に考えてこそ意をなすこととしてティプラーのオメガポイントにまつわる言いように関しては

[加速器実験機関と結びつけられてのブラックホールの人為生成問題]

「とも」(「奇怪な式で先覚的に」と受け取れるかたちで)相通ずる側面が見受けられるようになっているとのことがある。

上記の二点の事柄ら — 極めて不快な事柄らでもある — について順々に詳説を講じる。

まずもって、

第一。

オメガポイント理論にまつわってティプラーが明示している観点は「史的」側面で

[現行の加速実験実施機関の「誕生」経緯]

との[繋がり合い]が観念されるとのものとなっている。そして、その繋がり合いは本稿にて問題視してきた[予言的作品]との共通項が問題となる[繋がり合い]「とも」になっている。

とのことより説明を講じることとする。

同じくものことにまつわってはティプラーが

[オメガポイント理論との兼ね合いでナチスのドグマを強くも否定する反ナチス主義者]

となっている(ナチズムのような[偏狭かつ嗜虐的なドグマ]を否定することそれ自体は批判される謂われもないところではあるがそうもなっている)ところから指摘をなしはじめるとあると思うのでそうすることとする。

その点、物理学者フランク・ティプラーのナチスのやりようを強くも批判・否定するスタンスには(ティプラー自身は敬虔なバプティストであってユダヤ系ではないようだが)妻の祖父母が強制収容所の露と消えたとの来歴を有していることが強くも影響している節もある。下に引用するように、である。

(直下、職業的懐疑論者マイケル・シャーマーの手になる著作 Why People Believe Weird Things (邦題)『なぜ人はニセ科学を信じるのか?』にあつての第16章[ティプラー博士、パングロス博士に会う]409ページよりの引用をなすとして)

アラバマ州の小さな田舎町アンダルシアで育ち、一九六五年に卒業生総代として高校を卒業したティプラーは、その卒業式でのスピーチで人種差別反対論 — 一九六〇年代半ばの深南部で、しかも一七歳の青年にとってはめずらしい意見 — を語るつもりだった。ティプラーの父親は、個人の代表として大企業と対する代理人であり、人種差別に反対する弁護士だったが、フランクが大学へ行ったあとも家族はこの町に残らなければならないのだから、そういう物議をかもしような意見を控えるようにと注意した。ティプラーはキリスト教原理主義者の強い影響を受けた南部バプティストとして育ったにもかかわらず(いや、おそらくだからこそだろう)、自分は一六歳ですでに不可知論者だったと語る。

(引用部はここまでとする)

(直下、職業的懐疑論者マイケル・シャーマーの手になる著作 Why People Believe Weird Things(邦題)『なぜ人はニセ科学を信じるのか?』にあつての第16章[ティプラー博士、パングロス博士に会う]425 ページよりの引用をなすとして)

わたしの話したある著名な天文学者は、ティプラーがこの途方もない本を書いたのは、金を必要としていたからにちがいないと語った。しかし、ティプラーと少しでもこの本の話をしたことのある者なら、彼が金や名声のために書いたのではないことはすぐにわかる。彼は、おのれの主張にうんざりするほどまじめであり、みずから受ける非難を知ったうえで、十分にその覚悟をしていたのだ。私見を述べさせてもらえば、フランク・ティプラーこそ、人類とその未来を深く気にかけている人物である。彼の本は、妻の祖父母であり、ホロコーストで殺された「子供たちの曾祖父母」に捧げられている。

「彼らは最後の審判の日に復活する希望をいただいていたし、その希望はわたしが本書に示すように、時の終末にかなえられるだろう」。

この部分がより深い動機づけになっている。 結局のところティプラーは、バプティストとして、そしてファンダメンタリストとして受けた教育を、完全にふりきれていないのだろう。

(引用部はここまでとする)

一個の人間に対するプロファイリングをなすのは元より本稿の本義ではないが、フランク・ティプラーは以上のような人間性 — 表向きには[善意の人]として[来世にての([機械の神]による)復活]を唱道するとの人柄でもいい— を有しているためにか、ナチス・ドグマを強くも否定している。

それにつき、(それがどうして[嗜虐的反対話法としての色合い]を帯びていて問題となるのかとのことはこれ以降、仔細に論じていくとして)、フランク・ティプラーは

The Physics of Immortality: Modern Cosmology, God and the Resurrection of the Dead 『不死の物理学:現代の宇宙観、神、そして死者の復活』

にて次のような書きようを — 道徳的観念も交えて— 「オメガポイント理論それ自体との絡みで」強くも前面に出している。

(以下、ティプラーによる特定の思潮明示の部を要約するとして)

ナチスのイデオロギーにはフリードリヒ・ニーチェ ([神は死んだ] との言葉で有名な哲学者のかのニーチェである) の哲学が強くも関わっている。ナチスが奉じていた[超人思想]はニーチェに由来しているのだ。

ナチス・イデオロギーにも影響を与えているニーチェの哲学の軸をなすのは [永劫回帰 (エターナル・リターン) の思想] となり、同 [永劫回帰] 思想は

[世界の運命に介入するとの[神]の存在は否定される([神]は死んだ)。そうもした中で、神もおらず、万物がただただあるべきところに到着すべくも無常に繰り返される[永劫回帰]の世界にありながらも [超人] 的な強さをもって世界の宿命に自身を重ねるべし]

といったものとなっている。

ナチスの[超人思想](ウーバー・メンシュにまつわる思想)と強くも結びつくそうした永劫回帰の思想を否定することはナチスの醜悪な人種差別主義を否定する道徳的に正しきやりようと接合しするし、また、[オメガポイントの理論の適正さ]を論ずるうえでも

[極めて重要]

なこととなる。

というのも、(ニーチェの哲学の主軸をなしていた)永劫回帰の観念は現行の物理学的観点から見た宇宙論にも合致するような側面を有しているところがあるのだが、そうした永劫回帰と接続する宇宙論にての世界像が否定されることこそがオメガポイント—(ナチスのような醜悪かつ邪悪な憎悪のイデオロギーとイデオログとは無縁なる善なる[機械の神]によって[復活]が達成させられるとのポイント)—の実現に不可欠であるからである。

(ティプラーによる特定の思潮明示の部を要約はここまでとする)

よく知られてもいる、

[フリードリヒ・ニーチェの永劫回帰思想 ——(「現行にての」和文ウィキペディア[永劫回帰]項目より引用なせば)“リセットしてカセットテープを巻き戻しただけの状態になる。これが「一回性の連続」である。それを永遠に繰り返す。故に、己の人生に「否」(いな)と言わず、「然り」(しかり)と言う為、強い人生への肯定が必要なのである。ツァラトストラは自ら育てた闇に食われて死して逝く幻影を見る。最高へは常に最深から。超人は神々の黄昏に力強く現れる。闇を知り、闇を破し、死してなお生への強い「然り」を繰り返す。今、ここにある瞬間の己に強く頷く態度、それこそが超人への道であり、永劫回帰の根幹である”(引用部はここまでとする) といった説明のされかたをよくもされる思想——]

がいかようにして

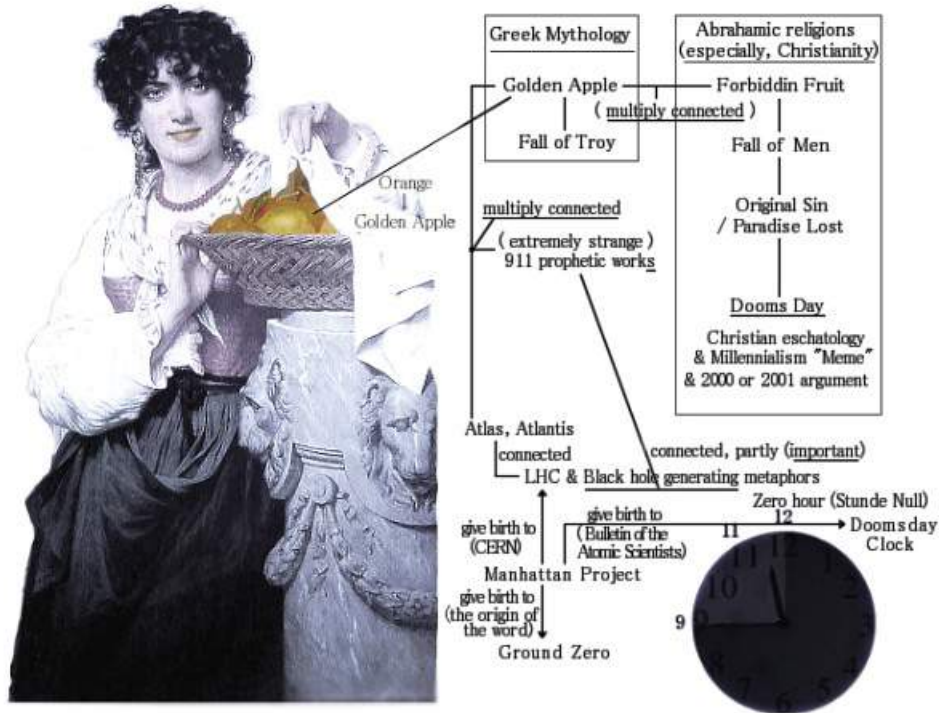
[ナチス・ドグマと接続している]

[[科学としての宇宙論]にての繰り返される世界像にまつわる科学的仮説と接合する((一面で[永劫回帰を「否定」する科学的説明]をなせる一方で[永劫回帰を「肯定」する説明]もなせてしまう))]

とされているのかについては銘々にティプラー『不死の物理学』読解などを通じて検討いただきたいところでもあるのだが、上にて要約して呈示したティプラー申しようを概説的に示してもいるところであるティプラー著作『不死の物理学』内の特定パートよりの引用を、「最低限」、下になしておくこととする。

SOURCE

115(2)



ここ出典 (Source) 紹介の部 115(2) にあつては

[フリードリヒ・ニーチェの永劫回帰思想がいかにナチス・ドグマと結びつくのか]

についてまさしくも本段で問題視しているフランク・ティプラー著作『不死の物理学』よりの引用を通じての紹介をなすこととする。

(直下、The Physics of Immortality : Modern Cosmology, God and the Resurrection of the Dead 『不死の物理学: 現代の宇宙観、神、そして死者の復活』の III. Progress Against the Eternal Return and the Heat Death 第三章『永劫回帰と(宇宙の)熱的死に抗つての進歩』にての The Eternal Return in Philosophy, Religion, and Politics 「哲学・宗教・政治に見る永劫回帰」の節よりの引用をなすとして)

The political consequences of Nietzsche's Eternal Return philosophy have been catastrophic. Perhaps the simplest way to show this is to point out that the Eternal Return is sufficiently ancient and important a concept in philosophy and religion to have its own symbol. The old Anglo-Saxon word for the symbol of the Eternal Return is fylfot. So dominant had the idea of progress — the antithesis of the Eternal Return — become in England that, when the English encountered the Eternal Return symbol again in the twentieth century, they had, to their credit, forgotten their ancient word for it. **Instead, they used the Sanskrit word for the symbol: SWASTIKA.** **From the very beginning the Nazis affirmed a deep connection between**

Nazism and Nietzsche's philosophy. The Nazi philosopher Alfred Baumler asserted that “whoever says ‘Heil Hitler!’ salutes Nietzsche's philosophy at the same time.” Baumler, professor of philosophy at the University of Berlin from 1933 to 1945, was an important figure in Nazi philosophical circles. He was the chief spokesman for Alfred Rosenberg, the editor-in-chief of the official Nazi party newspaper Volkischer Beobachter.

(多少補いもしての訳として)

「ニーチェの永劫回帰哲学の政治的帰結は災厄を撒き散らすものであった。

そのことを示す単純なやりかたはおそらく、

[永劫回帰] 思想が相当程度昔から存在しており、[それ自体を表象するシンボル] を有していた哲学および宗教上の重要観念であった]

とのことを指摘するとの式であろう。

永劫回帰を表象するシンボルのための古アングロサクソン語は[三脚巴](fylfot. triskelとも呼称)となっている。[進歩]の観念、永劫回帰の対極にあるその[進歩]の観念が英国では支配的なるものであったために、英国が[永劫回帰]シンボルに20世紀に再度出会うことになるまで、英国(の民)は永劫回帰を示す往古の言葉を忘れていた。その代わり、彼らはサンスクリット語のシンボルにまつわる語、スワスティカをもってして永劫回帰を示す語句として用いていた(訳注:スワスティカこと鉤十字はナチスのシンボルである)。

そのまさしくもの発端からナチスは

[ナチズムとニーチェ哲学の間の深い関係性]

について強くも主張なしてきた。ナチスサイドの哲学者アルフレート・ボイムラー(訳注:ナチス党お抱えの哲学者となり1934年論文『ニーチェとナチス』でヒトラーとニーチェを同一視した者) は「総統万歳!と口に出すものはニーチェ哲学に対する賛辞をも同時に述べている」と断じていた。

1933年から1945年にかけてベルリン大学の哲学教授の職にあったボイムラーはナチス内の哲学サークルにて枢要な立ち位置にあった。彼アルフレード・ボイムラーはアルフレート・ローゼンベルク(訳注:権力闘争に敗れて権力中枢外延部に置かれていたとされるもニュルンベルク裁判の結果、処刑されるだけの立ち位置にはいたナチス党最高幹部)の主席顧問であり、ナチス党機関誌『フェルキッシャー・ベオバハター』(訳注:一説には1944年時点のナチスドイツ内発行数1700万部の一大機関紙)の編集主任との地歩にもあった」

(訳を付しての引用部ここまでとする)

(出典(Source)紹介の部115(2))はここまでとする)

上にてのティプラー著作『不死の物理学』よりの引用部では

「ニーチェ哲学およびニーチェの永劫回帰思想が政治的に(ナチスに利用されることで)欧州に災厄を撒き散らした事/ナチス党のシンボルのスワスティカ(鉤十字)からしてそもそもからして永劫回帰の体現物であること」

が主張されている(※)。

(※尚、上にてはナチスドイツの象徴たる鉤十字(SWASTIKA)が元来、永劫回帰を示す象徴であったとの表記がなされてはいるが、それは「一純粹に正確なのかそうではないのか、との意味で— 言い過ぎではないか?と判じられるようなところもあるにはある。鉤十字はナチスがそれをその代表的シンボルにしつらえる前から欧州をはじめ世界中にて頻用されていたとのシンボルとはなるが(については英文 Wikipedia[Swastika]および同 [Western use of the swastika in the early 20th century] 項目にていろいろな事例が具体的写真付きで紹介されており、また、Project Gutenberg のサイトにて[世界中にての往古に遡るスワスティカ紋様使用の事例の紹介]をなしている The Swastika: The Earliest Known Symbol, and Its Migrations; with Observations on the Migration of Certain Industries in Prehistoric Times. (1896) —直訳すれば、『スワスティカ(鉤十字);先史時代における特定の産業的使用事例変遷の観察に見る最初期既知の象徴使用とその変遷』とでも訳せようか— との書名を冠してのアメリカ国立博物館(現:スミソニアン博物館)のキュレーター(学芸員)であったとの Thomas Wilson という人物の手になる書籍などが「19世紀末」発のものとしてダウンロードできるようになっている)、しかし、スワスティカが[太陽]や[永遠](こちらは[永劫回帰]との観点に近い)と結びつけられることはあってもはきと

[永劫「回帰」思想]

とそのままに結びつけられていたとは言い難い(筆者が色々と[キーワード一致式]で最大限効率的に調べてみてナチス登場「前」にスワスティカが永劫回帰と結びつけられていたとの文書は捕捉できないでいる、と申し述べたい。但し、ナチスが後付けでスワスティカ・シンボルをそれがニーチェの[永劫回帰]思想と結びつくものであると喧伝するようになったとのことは大いにありうることではある —ナチスがスワスティカを[古代から連綿から続く神聖なシンボル]であると組織を挙げて吹聴しまわっていてもした中で、である—)。

その点、ニーチェの[永劫回帰思想]そのものと結びつくような歴史的シンボルがあるとすればそれはむしろ

[ウロボロス紋様](尾を噛む蛇の紋章)

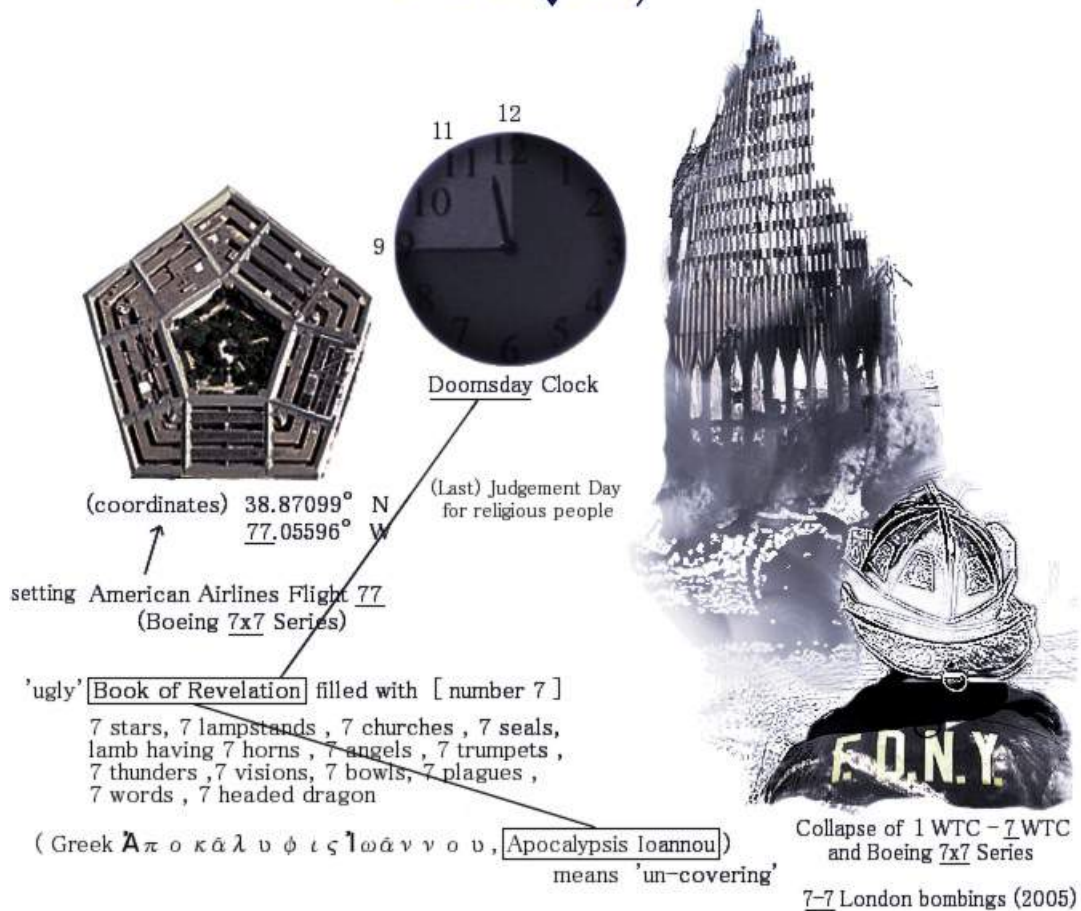
であり、錬金術体系にあって重きをなしていたとの同ウロボロス紋様(尾を噛む蛇のシンボル)のことは広く認知されているところではある —本稿では紙幅にしてそう遠くはない後の段でそちらウロボロス紋様が永劫回帰思想と結びつくことまでもが何故にもってして悪質な比喩的表現に通ずるのか、そうしたことこの解説をなす所存ではある—)

(長く、また、入り組んだ内容を扱いもしているので出典紹介部を分かちもし)

さらに「多少順序を違えての」ティプラー著述 The Physics of Immortality : Modern Cosmology, God and the Resurrection of the Dead『不死の物理学:現代の宇宙観、神、そして死者の復活』よりの引用を続ける。

SOURCE

115(3)



ここ出典(Source)紹介の部 115(3)にあつては

[フリードリヒ・ニーチェの永劫回帰思想がいかようにティプラーのオメガポイント理論と紐付けられているのか]

についてフランク・ティプラー著作『不死の物理学』それ自体よりの引用を通じての紹介をなすこととする。

(直下、The Physics of Immortality : Modern Cosmology, God and the Resurrection of the Dead『不死の物理学:現代の宇宙観、神、そして死者の復活』の III. Progress Against the Eternal Return and the Heat Death 第三章『永劫回帰と(宇宙の)熱的死に抗つての進歩』にての The Eternal Return in Philosophy, Religion, and Politics「哲学・宗教・政治に見る永劫回帰」の節よりの引用をなすとして)

The attempt by the German philosopher Friedrich Nietzsche to prove recurrence is interesting because it is almost a valid argument, given certain (untrue) presuppositions about the nature of the physical universe. That is, Nietzsche's proof contains all the essential ideas needed for a rigorous proof of recurrence of a finite physical system evolving in a particular chancelike way. Nietzsche began his “proof of recurrence as follows:

... we insist upon the fact that the world as a sum of energy must not be regarded as unlimited — we forbid ourselves the concept of infinite energy, because it seems incompatible with the concept of energy.

Thus Nietzsche argues for the finiteness of energy of the universal system. This is indeed an essential assumption in any valid proof of recurrence. Nietzsche's argument for finiteness has a parallel in modern physics. According to general relativity, only in spacetimes where the total energy is necessarily finite (in the so-called asymptotically flat spacetimes) does “energy” have a well-defined meaning. In particular, total energy does not have a meaning in a closed universe (and I shall use this fact in my proof that infinite progress is possible in closed universes).

(上に対する拙訳として)

「それが物理的宇宙の性質に対する特定の(あやまてるものたる)前提を置く限りはほとんど至当なる議論となるために」ドイツ人哲学者フリードリヒ・ニーチェによる(永劫回帰における)永劫・再現性を示そうとの試みは興味深いものとなっている。

どういふことかと述べれば、ニーチェの指し示しは
[特定の機会としてありうべきありようで進化してくる有限の物理的システムの循環性にまつわる厳密なる指し示しにあって必要となる本質的観念をすべからずも内包している]

とのものとなっているのである。

ニーチェは、(手ずから)、
[(永劫回帰を容れようとの)我々は[一個のエネルギーの総量としての世界]を際限ないものである(無尽蔵である)と見てはならぬとの事実^に依拠しての説明をなそうというのである]

と述べることから [[再現性・永劫性]の指し示し]をはじめている。

このようにニーチェは世界システム(訳注:あるいは宇宙体系とでも訳すべきか)のエネルギーの有限性にまつわる議論をもちだしている。これは[再現性(永劫回帰の性質)のいかなる「適正なる」指し示し]にあっては「本当に」本質的なる前提となるものである。ニーチェの有限性にまつわる論議は現代物理学とパラレルな関係(訳注:一致性を呈しての関係でもいい)にある。

(アインシュタインの)相対性理論によれば、総エネルギー量が(ニーチェよろしく)有限である時空間にあってのみ(いわゆる「漸近的に(曲率にて)平坦なる時空」にあってのみ)[エネルギー]という観念は「よく定義されている」と述べられるだけの意味を持つことになり、といった中で総エネルギー量は「閉じた宇宙」では意味をなさぬことになる。そして、著者(ティプラー)はこの事実をもってして自身の理論にて(回帰せざる)「無限なる進歩」が可能であるというのである」

(訳を付しての引用部はここまでとする —※—)

(※尚、ニーチェの永劫回帰思想が現代的物理学に通ずる側面を帯びていることを(委細に踏み込まずに)上にてティプラーは論じているのだが、永劫回帰思想をして[エントロピー(熱力学における[系]の乱雑さ)の増大]における不可逆性などの観点から否定しようとの見方もある。が、といったことはここでは置く)

(続けて直下、The Physics of Immortality : Modern Cosmology, God and the Resurrection of

the Dead 『不死の物理学: 現代の宇宙観、神、そして死者の復活』の III. Progress Against the Eternal Return and the Heat Death 第三章『永劫回帰と(宇宙の)熱的死に抗っての進歩』にての The Eternal Return in Philosophy, Religion, and Politics 「哲学・宗教・政治に見る永劫回帰」の節よりの引用をなすとして)

I have discussed the social and political implications of the Eternal Return at length because I want it to be clearly understood why I explicitly reject such a view. **As we shall see in the next chapter, the rejection of the Eternal Return is expressed in the third of three postulates which I shall claim codify in mathematical language what is meant by “eternal life.” Since it is this anti-Eternal Return Postulate that gives the Omega Point Theory its real predictive power, it is very important to justify the postulate in detail.**

(拙訳を付すとして)

「著者(ティプラー)はそうした観点を何故もってはつきり否定したいのかを明瞭に理解いただきたいとこのことがあるために永劫回帰が社会的、政治的に含意するところを委細に論じてきた。次章にて見るように「永遠の生命」によって意味されるところを数学的言語にて体系化するに際しての三つの仮説の三番目の部にて「永劫回帰の否定」が表明されることとなっているのである。この「反・永劫回帰仮的側面」がオメガポイント理論に(オメガポイント実現を約束するとの)真に予言的なる力を与えるがゆえに仮説を委細に渡って正当化することが重要になるとのところである」

(訳を付しての引用部はここまでとする)

さらにもって『不死の物理学』よりの引用を続ける。

(直下、The Physics of Immortality : Modern Cosmology, God and the Resurrection of the Dead 『不死の物理学: 現代の宇宙観、神、そして死者の復活』の III. Progress Against the Eternal Return and the Heat Death 第三章『永劫回帰と(宇宙の)熱的死に抗っての進歩』にての The Eternal Return in Philosophy, Religion, and Politics 「哲学・宗教・政治に見る永劫回帰」の節よりの引用をなすとして)

A rejection of racism, that is, a belief in the inherent superiority of any group of intelligent beings — as I showed above, a notion intimately connected with the Eternal Return — is also essential for the Omega Point Theory. As I demonstrated in the previous chapter, a crucial step toward the Omega Point is the colonization of the universe by intelligent robots, by self-reproducing machines. Many humans (including many who should know better) regard the creation of such people — I call intelligent robots “people,” because that is what they are — with horror, and initially feel that the creation and reproduction of such machines (people) should be prohibited by law. For example, when I first proposed colonizing the galaxy with von Neumann probes, the astrophysicist Carl Sagan demurred:

... the prudent policy of any technical civilization must be, with very high reliability, to prevent the construction of interstellar von Neumann machines and to circumscribe severely their domestic use. If we accept Tipler's arguments, the entire Universe is endangered by such an invention; controlling and destroying interstellar von Neumann machines is then something to which every civilization — especially the most advanced — would be likely to devote some attention.

As I showed in Chapter III, one can prove that the Eternal Return will occur in

a Newtonian universe provided said universe is finite in space and finite in the range of velocities the particles are allowed to have. I also showed in Chapter III that, in classical general relativity, the Eternal Return cannot occur. That is, the physical relationships existing now between the fields will never be repeated, nor will the relationships ever return to approximately what they now are. History, understood as an unrepeatable temporal sequence of relationships between physical entities, is real.

(補いもしながら拙訳を付すとして)

「人種差別主義(レイシズム)、すなわち、

[知的存在のいかなるグループの中でもの生得的優位性にまつわる信念 — 著者(ティプラー)が先立っての段で示したように永劫回帰の理念とも緊密に結びついている観念—]

に対する[否定]はオメガポイント理論にとって本質的なものである。

先行する章にて論じているようにオメガポイントに向けての重大な一理塚は[知的ロボットによる宇宙の植民地化]

である(訳注として:フランク・ティプラーは[自己複製機械](セルフ・リプロデュースング・オートマタ)としてのフォン・ノイマン・プローブと呼ばれるものを宇宙空間に「自己複製による指数間的な空間的拡大方式で」播種(はしゅ)して[オメガポイントを構築するための情報統合体]を構築しようとの前提を整えるべきであるとの発想法を強くも前面に押し出しているとのことをなしている — ちなみに同じくものこと、フォン・ノイマン型探針による宇宙開発の可能性については英文 Wikipedia[Self-replicating spacecraft]項目に多少、微に入つての解説がなされている — (訳注の部はここまでとする))。

多くの人間(それは分別をもって然るべき多くの人間を含む多数の人間のことも指す)は

[そのような「人々」 — わたしティプラーは事実彼らが知的であるがゆえに[知的ロボット]をして[人々]と呼ぶ—]

をして恐怖をもって見ることとなり、そして、まずもってはそのような機械ら

(人々)の創造および再生産をして法によって禁止されて然るべきことと感ずることであろう。

例えば、である。(現実的な今までの経緯に関わるどころとして)私フランク・ティプラーがまずもって銀河をしてフォン・ノイマン・プローブらで植民地化することを提案した際、カール・セーガン(訳注:本稿にての[補説2]の部にてその問題となる予言的やりよう・露骨に反対話法がかったのやりようについて具体的典拠に基づいて指し示してきたとの米国のカリスマ科学者(故人)がこちらからカール・セーガンとなる)は次のように異議を呈してきた。

(セーガン曰くのところとして)

[いかなる技術文明にあっても用心深き政策・施策というものは高度の確実性を期すとのかたちで恒星間を異動するフォン・ノイマン機械らの建造を妨げるとのものでなくてはならないところであり、そして、それらの地球圏での使用も制限されるべきである。我々が仮にもし(そうしたものを生産・播種しようとの)ティプラーの論議を容れたのならば、全宇宙がそのような発明にて危険に曝されるとのことになる。恒星間移動のフォン・ノイマン機械(宇宙に播種されてのフォン・ノイマン・プローブ)を制御かつ破壊するとのことは全文明、殊に最も先進的な文明が注意を向けそうなことである(訳注:この場合、セーガンの原文英語でのここ申しようには二通りの解釈がなせる。第一の解釈は繰り返し表記として高度な文明とはフォン・ノイマン・プローブを構築しないとの再確認がなされているとの解釈となる。第二の解釈は行間の意味まで汲み取ればなせるとのものとなり、本稿[補説2]の部でも述べているようにカリスマ科学者カール・

セーガンが外宇宙文明探査計画 (SETI プロジェクトなど) の唱道を推進してきたとのスタイルを前面に押し出しての人間であったこと、それゆえにそうした人間 (ないしそうした人間を動かす力学かもしれない) なの視点として外宇宙に高度文明があった場合、人類に由来するフォン・ノイマン・プローブが破壊の対象となり、宇宙を汚染した迷惑な種族 (この場合、人類) の駆逐作戦が超高度宇宙文明にて開始されうるとの文脈が含まれていると受け取れもする、そういう解釈である (訳注の部はここまでとする)。

著者 (ティプラー) が本書 *The Physics of Immortality* 第三章にて示したように [永劫回帰] は歴史的な相対性理論 (解釈) の下では (厳密には) 生じ得ない。これは [決して同じ場が繰り返されることもなく、現行、およそそれらがそうあったようなところに関係性が復することもない] どのことらの間にある物理的な関係性である。歴史、それが物理的実体の間にあっての「繰り返すことなき」一時的関係性の連続として理解されるのが現実というものである」

(訳を付しての引用部はここまでとする)

(出典 (Source) 紹介の部 115 (3) は以上とする)

上もて物理学者フランク・ティプラーが

[永劫の命を約束する自身の理論の至当性を確約する理論的環境の構築]

とのことのためにいかようにもってして

[永劫回帰思想 — [生命が何度も何度も同じ状況を繰り返しているとの思想] —]

を否定する必要があると述べているのか、

[永劫回帰思想とワンセットのものである (とフランク・ティプラーが何度も何度も強調する) ナチスの人種差別主義・優生学思想]

を否定しながらもとの式にて同じくものこと — 永劫回帰の否定 — が必要であるといかようにもってして「執拗に」述べているのかとのことにつき、(委細はともかくも)、おおよそのありようについておもんばかりいただけることか、とは思う(※)。

※長くもなつての付記として

物理学者フランク・ティプラーはオメガポイント理論と結びつく上記のような

[永劫回帰否定]

の観点をして

[仏教徒の涅槃 (ニルヴァーナ) の境地に通ずるところのもの]

すなわち、

[繰り返す輪廻を絶ち、至福の境地に至るとの発想法]

に通底するものであるとも述べもしている。

涅槃寂靜の観点にあっての寂靜・寂滅 (存在自体をむなしくする、無に帰する) の部

を除いてそうもしたものであると述べもしている。

非本質的 inessential なことを延々と述べるようで何ではあるのだが、例えば、次のような式にて、である。

(以下、The Physics of Immortality : Modern Cosmology, God and the Resurrection of the Dead『不死の物理学』より引用なすところとして)

There is no doubt that “Nirvana” means an escape from the cycles of reincarnation, an escape from the endless cycles of rebirth into other living beings after death. **The undeniable goal of Buddhism was to escape the Eternal Return. But one could escape by becoming extinct, by ceasing to exist, or one could escape by entering an abode of happiness, by going to Heaven.** The word “nirvana” literally means “extinction” or “blowing out” as in “blowing out a candle.” This Jiteral meaning doesn't sound very encouraging for the Nirvana = Heaven interpretation.

「ニルヴァーナ(仏教徒の涅槃の観念)が輪廻の環からの脱却、[死後の他の生命への絶え間なくもの復活のサイクルからの脱却]を意味することには何の疑いを差し挟む余地もない。仏教の否定しようがないとの目的(の観念)は[永劫回帰]から脱することである。しかし、そこでは信徒は[滅する]こと、[存在することを止める]ことで脱却をなす、至福の境地に入る(天に入る)とのことでのみそれを実現できる。ニルヴァーナ(涅槃)との語は字義通り[蠟燭の火を吹き飛ばす]が如く[滅][吹き消えること]を意味している。この教典に見る意味合いは[ニルヴァーナ=天国]との解釈を押し進めるかたちで耳に響くようなものではない」

(引用部はここまでとする 一ちなみにニルヴァーナ(涅槃)との語が原義として[(火が)吹き飛ばす]との語と照応していることはティプラー申しようが持ち出さぬまでもなくよく知られたことである—)

以上、[涅槃](死と滅を意味する涅槃;ニルヴァーナ)を巡る話に通ずるところにあって「悪魔的にできすぎている」と受け取れるところがティプラー著作『不死の物理学』(フィジックス・オブ・イモータリティ)に認められもすると筆者は見るに至っており(「悪魔的」とはこの場合、[嗜虐的に凝っている]といったニュアンスと考えてもらいたい)、それは[永劫回帰]が

[マルコフ連鎖](端的に述べれば、[現在の確率状況が過去の確率分布の状況から独立している]との数学概念)

とティプラー著作内にて明示して結びつけられているとのことと関わることもなる。

その点、フランク・ティプラーは[永劫回帰]が[マルコフ連鎖]と結びつく、ニーチェの永劫回帰思想が同数学上の概念(マルコフ連鎖)と結びつくとのことをその自著の中でくぐと述べるとのことをなしている(例えば、Frank Tipler の The Physics of Immortality『不死の物理学』より引用するところとして “I shall show in the section on Physics and the Eternal Return that **Nietzsche's world model can be compared fairly closely to a system undergoing a particular type of random evolution — a Markov chain — whose state must recur.**” といった表記がなされている)。

同じくものことについて筆者は「こじつけがましきやりようだ。わざとらしいこと限りなしであろう」ととらえているのだが、ティプラー流の[マルコフ連鎖の機序 ⇄ ニーチェの永劫回帰思想]との観点が導出される理由としてティプラーはニーチェの思想にての

[永遠の時間の中でランダムな状態遷移が無限に演じられる]

とのところをもってして(過去の状態に依存しないとの)マルコフ連鎖と結びつけ、その否定を強くもなしているとのことをなしている(繰り返すも、筆者としてはこじつけ・わざとであろうとはとらえているところなのであるが)。

そのこと、永劫回帰思想(の否定)がティプラー著作内でマルコフ連鎖と結びつけられていることが何故をもってして、

[悪魔的な出来すぎ度合い]

の問題に関わると判じられる(筆者は当然にそうであろうととらえもしている)のかと述べれば、—ティプラーという男がその旨まで述べて「いない」からこそ問題なのだが—「ひとつに」、

[[マルコフ連鎖の状態(ティプラーが[永劫回帰]と結びつけている状態)を呈する牢獄からの脱出] を [仏教における(本源的には滅と死を意味する)涅槃 Nirvanaのプロセス] と結びつける欧米では比較的良好に知られた伝統的ゲームが存在している]

とのことが問題になる。

具体的には

Snakes & Ladders (スネークス・アンド・ラダーズ、すなわち、[蛇と梯子(はしご)])

とのゲームがそれでその内容は一言で述べれば、

[寛容・信頼・知識・禁欲などといった善行関連のマスを多く踏み、虚栄・俗悪・虚偽・傲慢・情欲といった悪行関連のマスから得られる煩悩を克服する、[蛇にて体現される煩悩と結びつく美德の梯子]を踏破し、涅槃の状況を約束する Moksha [解脱;モクシャ]を達成する(のを双六形式で競う)]

とのものとなる —であるから Snake & Ladders の別名はモクシャ・パタム、Moksha Patamu(解脱 moksha,そして、畜類への輪廻 Patamu を結びつけての[輪廻よりの解脱])ともなっている— (詳しくは和文ウィキペディアないし英文ウィキペディアの該当項目の内容を確認されたい。尚、いかようにして Moksha Patamu[蛇と梯子]のゲーム盤が[マルコフ連鎖の超克・否定](Overcoming of the Prison of Markov Chain)と通じているかについては(たとえば、英文 Wikipedia [Snakes and Ladders] より引用なすところとして) **“ Any version of Snakes and Ladders can be represented exactly as an absorbing Markov chain, since from any square the odds of moving to any other square are fixed and independent of any previous game history.”** 「スネーク・アンド・ラダーズのいかなる版も吸収的マルコフ連鎖によって正確にそのありようが示されるところとなり、それは足を踏み入れたマスのどのオッズもが従前のゲームの流れから独立したものとなっているからである」といった解説がそこにてはなされていることでも端的に理解なせるようになっている)。

ここでまでにて

[マルコフ連鎖状態の否定 = 永劫回帰状態の否定]

とのティプラー流の強引なる式と

[涅槃(「滅して」輪廻の状況から脱出するとの仏教思想に見る状態)の肯定]

が(当のティプラーが書き記して「いない」とのところながらも)別のコンテキストで結びつく、欧米圏でよく知られた『蛇と梯子』とのゲームを介して結びつくとのことが 一本当に

語るに足りるとの向きが読み手であった場合には— 理解いただけることかとは思ふ。

(脇に逸れての記述の中にあつてのそのまたさらにも余事記載として:

尚、

[マルコフ連鎖状態の「恣意的」否定]

とのことになると

[検索エンジン上での検閲行為]

とも話は結びつくこと「も」ある —有名所として検索エンジンにあつての [自然に作用するアルゴリズム] がマルコフ連鎖の機序を利用しているものとなるからである—。

検索エンジンの本来のアルゴリズムからは導き出せないような検閲行為(日本語ではサーチエンジン八部、海外ではサーチエンジン・センサーシップといった言葉で表される行為)は [理なきところ] でそれがなされれば違法なものだが(日本では民法 709 条、そして、場合によっては憲法の私人間効力の論点が関わりと弁護士から聞き及んでいる)、それがたとえば、[涅槃(ティプラー流に言うところのマルコフ連鎖の否定)を目的とする仏教から派生したカルト]

などに属する [内発的倫理観とも自律的思考力などとも無縁なる細胞]([セクト]Cultと [飛び火しての細胞の運営システム] Clandestine cell system はワンセットであるとは見る)によっておこなわれていればどうか。

であれば、そう、[薬籠中の者達]の相応のコロニー(横断軸に組織の中枢からの指令系統を嚙ませた「仏教系」カルト成員集住地域)をそこら中に「培養」したうえで、そうしたところに入り出るその実の現益重視との [煩惱]でがんじがらめにしつらえた、(真実とも徳義ともより包括的な善性とも一切無縁なる)偽善の塊としての悪い意味の情動だけは付属させたロボット人間達、自分達でさえ自分達の偽らざるところの属性に気づけてさえないとのロボット人間達にそういうこと —普通には作用しえない検索エンジンアルゴリズム(としてのマルコフ連鎖)の否定としての能動的締め出し行為、センサーシップ行為なぞ— をやらせているのだとすれば、そうしたことをなしている存在はほくそ笑んでいるかもしれない。計画に基づき思考能力を奪って、の中で、知と理なき攻撃性だけを増大させての相応の心根を生じさせるとのかたちで[機械]を通じて手繰っているが如し者達とはいえ、宗教的スタイルをとる者達の[最期]へのプロセス —輪廻否定(マルコフ連鎖的ありようの否定)と涅槃寂靜の成就(完全なる死の成就)との意味での「仏教」の【本願の成就】とのありようでもいい— にはそれなりの[装飾]を施すが相応しかろうとの式で、である(繰り返すがティプラーは涅槃をマルコフ連鎖の否定を【涅槃=完全なる死との仏教徒における本願成就局面】と結びつけており、また、マルコフ連鎖の作用機序が恣意的に否定される状況こそが検索エンジンの検閲の状況となっているとのことがある —半ば(手前言論に関わりとる)として) [恨み節]ともなるのだが、弁護士と違法検閲などについて話し合うことを強いられたいくつかの状況のことを差しはさめば、現実的状况をヴィヴィットにとらえているだろうとの見立てとも自身判じている—))

(長くもなつての付記を続けるとして)

さて、ティプラー申しようを書籍から出でての現実世界の娯楽のありよう (正確には人間が Snakes & Ladders (スネークス・アンド・ラダーズ; 蛇と梯子(はしご))に見るような娯楽を強要されてきたとのありようか) まで顧慮して見てみると、

[滅とも結びつく][涅槃寂靜:ニルヴァーナ]の思想の部分的肯定 = 永劫

回帰の否定 = マルコフ連鎖の否定 = [涅槃に達するための[解脱(モクシャ)]状態を目指してのゲーム盤 [蛇と梯子] の機序の超克 (美德の梯子を昇りながら煩惱の蛇を克服してのマルコフ連鎖の克服)、次いで、涅槃の達成]

とのコンテキストが成り立つようになっている — 欧米圏でよく知られた『蛇と梯子』とのゲーム盤とティプラー申しようの (ティプラー自身はなんら指摘せざるところながらも、の) マルコフ連鎖を通じての接合のコンテキストが成り立つようになっている — とのことに加えて、である。やりようが悪魔的にとれる (くどいが、この場合の悪魔的とは [嗜虐的に凝っている] とのことである) のは以下のことが「ある」からである。

フランク・ティプラーの (未邦訳である) **The Physics of Immortality : Modern Cosmology, God and the Resurrection of the Dead** 『不死の物理学』にあつてはその扉絵にあつて

[天に伸びる梯子]

がそれだけ目立つように描かれており、その下に

A doozy of a book... it's 2001: A Space Odyssey meets The Divine Comedy — Esquire 「あまりにも群を抜いた書...これはまさしく(アーサー・クラークの)『2001年宇宙の旅』が(ダンテの)『神曲』が出会ったようなものだ (エスクエア誌)」

との書評がキャプションとして付けられているとの版 — 筆者が検討している版もそれである — が目立って存在しているとのことがある (天に伸びる梯子で意図されているところはフリーメーソン・シンボリズムにも幅広く採用されているとのことで本稿でも先立って取り上げてきたところの Jacob's Ladder [ヤコブの梯子]であろう)。

そうした表紙それ自体での天に昇る梯子の使用との式で

[[マルコフ連鎖の否定] [永劫回帰の否定] すなわち [(煩惱を捨てての)涅槃;滅・死の境地の肯定]

に通ずるようになり「も」している、

[ゲーム盤 [蛇と梯子] ([梯子]を上へ上へ登り切って涅槃の境地 — 先立って死・滅と結びつくものでもあると言及してきた境地でもいい — に達するとの道德観と結びつけられもするゲーム) のマルコフ連鎖の梯子を超克すべくもの機序]

に通ずるようになりもしているとのことで

[天の梯子は蛇の梯子と照応し、その昇った先には涅槃([死]ないし[滅])とも同義たりうること先述のニルヴァーナ)が待つ]

との式で

「悪魔的なやりよう」

がそこにあると申し述べるのである。

に絡んでは「第一に」『不死の物理学』にて記載された概念(オメガポイント)の目指す究極位置が([不死]などではなく)[死][滅]であるとの二重話法が透けて見えるとのことがある — ※ティプラー本人は「オメガポイントの志向する永劫回帰の否定は仏教の(死・滅を意味しもする)涅槃の観点と通ずるとこ

ろがあるが、仏教のそれは天の国を目指しているわけではない（機械の神による世界の再生を志向していない）。であるから、涅槃の境地は機械の神が約束しもする再臨再生のオメガポイントと目指す方向性が違う」といったありようのことを（先立って引用しているようなかたちで）述べているのだが（再引用なせば、“There is no doubt that “Nirvana” means an escape from the cycles of reincarnation, an escape from the endless cycles of rebirth into other living beings after death. **The undeniable goal of Buddhism was to escape the Eternal Return. But one could escape by becoming extinct, by ceasing to exist, or one could escape by entering an abode of happiness, by going to Heaven.** The word “nirvana” literally means “extinction” or “blowing out” as in “blowing out a candle.” This literal meaning doesn't sound very encouraging for the Nirvana = Heaven interpretation.”との部がそれである）、実際にはオメガポイント唱導の書がその表紙絵それ自体で[涅槃]（ニルヴァーナ）という名の[死と滅の境地]への隠喩的表現と（特定のゲーム盤を介して）結びつけられている節ありとのことで二重話法の問題が透けて見えるとのことがある。

あまりにも堂に入っの嗜虐的対話法の問題が首をもたげてくる理由として「第二に」ティプラー書籍の表紙絵と結びつけられている **A doozy of a book... it's 2001: A Space Odyssey meets The Divine Comedy —Esquire**「あまりにも群を抜いた書...これはまさしく（アーサー・クラークの）『2001年宇宙の旅』が（ダンテの）『神曲』が出会ったようなものだ（エスクエア誌）」とのキャプションが非常に問題になるとのことがある。

次の理由からである。

・タイトルにあって（マルコフ連鎖否定の[蛇と梯子]のゲーム盤に見るような）[天に向けての梯子]と結びつけられつつも「あまりにも群を抜いた書...これはまさしく（アーサー・クラークの）『2001年宇宙の旅』が（ダンテの）『神曲』が出会ったようなものだ」などと表紙に表記されているとこのことについて、まずもって、（ダンテの）『神曲』にあつての Inferno『地獄篇』が異常異様に現代的観点で見た場合のブラックホール（の重力の特異点）と結びつくとの見立てをなせるようになっているとのことがある。そのことは本稿にて非常に問題視してきたことである（**出典**（Source）紹介の部 55 から **出典**（Source）紹介の部 55 (3) よりそちら典拠について解説をなしてから、度々もってして同じくものことを問題視している）。そして、—これより詳述することにもなるのだが— フランク・ティプラーの言うところのオメガポイントを約束する「**特異点**（Singularity）とはブラックホールのそれと接合性を呈しているとのことがある（続いての段の解説部を参照されたい）。

・上の点（・）だけならば、望み薄ではあるが、たかだかもってしての人間の恣意の問題 —たとえばフランク・ティプラーの『不死の物理学』の装幀に携わった向きらに起因するわざと、の問題— で説明が付いたことかもしれない（というのもダンテ『地獄篇』における描写が現代的観点で見た場合のブラックホールと近似しているとの言いようは幾人もの著名物理学者によってなされている —その引用も本稿ではなしている— とのことであり、にまつわつての[情報流通態様]から『不死の物理学』表紙部にて普通にそういう寓意付けがなされてもなんらおかしくは

ないであろうと受け取れるからだ)。だが、話が人間レベルに留まっ
ての寓意付けでは済まされないとのことにまで通じってしまうとのところ
として、表紙に見る【天国に至る梯子】（同【天国に至る梯子】も（す
ぐ直下にて再述なすよう）【911の予見的言及】及び【「重力」機序を
利用しての世界の破壊と再生の寓意物】とを結びつけるものであると
の式で問題となるものなのだが）、そちら【天国の梯子】のすぐ下にて
の **A doozy of a book... it's 2001: A Space Odyssey meets The Divine
Comedy** との表紙部掲載書評言いまわしに見る（アーサー・クラーク
の『2001年宇宙の旅』という作品からして【ブラックホール】とも、そし
て、「であるから重篤である」との点として）【911の事件の予見事象】と
も多重的に関わっているとのことも問題になる（クラークの『2001年宇
宙の旅』がいかようにしてブラックホールと結びつくのか、物理学者な
ぞにそうも指摘されるような特色を伴っているのかは先行するカート・
ヴォネガットの小説作品 The Sirens of Titan 『タイタンの妖女』の内容
にも通ずるところとして本稿の前半部、補説1と銘打っての一連のセク
ションにあつてのとりまとめの部にて解説しているとのことでもある）。

その点もってアーサー・クラーク『2001年宇宙の旅』という作品が
【911の事前言及事物】

としての顔を持つとのことに関しては 一本稿で細かくも先述している
ところとして— 同作が哲学者フリードリヒ・ニーチェ（の著作 Thus Spoke
Zarathustra 『ツァラストラはかく語りき』）の物言いに関わるところ「とも」
なる（いいだろうか、「とも」なる、である）。フリードリヒ・ニーチェ（の著作
Thus Spoke Zarathustra 『ツァラストラはかく語りき』）に関わりもすること
言えば、「永劫回帰思想」とのことになり、その永劫回帰の思想の否定
こそがフランク・ティプラーのオメガポイント理論の核に据えられていると
のことがある。そうもしたことがあるのは無論にしてできすぎている。

（：直上にての「できすぎている」との言いよりの伝はアーサー・ク
ラークの『2001年宇宙の旅』が（ニーチェ『ツァラストラはかく語り
き』を介して）【911の事前言及事物】としての側面を帯びていると
のこと、そのことの時点で異常異様に「できすぎている」とのことがある
中で「加えもして、できすぎている」とのことである。

その点もってしてアーサー・クラーク『2001年宇宙の旅』がニー
チェ『ツァラストラはかく語りき』を介してもして【911の事前言及事物】
としての側面を帯びているとのことについて本稿では（委細をすべて
先立っての段に譲って振り返るとして）次の1. から5. の観点に分け
もしての話をなしてきたとのことがある

⇒

1. [アーサー・クラークの1956年の小説 The City and Stars 『都市と
星』では【道化師と結びつけられたツインタワー（双子との語と結び
つけられての超高層ビル）の綱渡り】の描写がなされる]
2. [[道化師と結びついた二つの塔の綱渡り]とのことでは、
ニーチェ著作 Thus Spoke Zarathustra 『ツァラストラはかく語りき』に
あつて「も」【二つの塔の間を綱渡しし、落下死する男の比喩】が道化
師と結びつけられて登場しており、それが同作『ツァラストラはかく語
りき』の作品テーマ[人間（終わりの種族）とは[動物]と[超人]の間
に横たわる深淵（アビス）を渡るロープである]との比喩に結実するよ
うに（ニーチェ当該古典の中で）なっているとのことがある]

3. [現実世界のワールド・トレード・センターのツインタワーの綱渡りをした者が実際におり(関連著作・関連映画が幾作も出されるなどのセンセーションを巻き起こした者が実際におり)、その男はフィリップ・プティという有名な大道芸人である]

4. [フィリップ・プティのワールド・トレード・センターのツインタワー綱渡りに先立つこととしてアーサー・クラークは小説『2001年宇宙の旅』を世に出しているわけだが、同作のあまりにも有名な映画版にはリヒャルト・ストラウスの Thus Spoke Zarathustra 『ツァラストラはかく語りき』の曲が用いられているなどニーチェ思想との連続性が根深くもあるとの指摘がなされている(再言するが、ニーチェ『ツァラストラはかく語りき』は初期のクラーク作品(『都市と星』)に見るツインタワー綱渡りの寓意とも結びつくとの式で「道化師絡みの二つの塔の綱渡り」の比喩が登場してくる古典である)]

5. [以上の1.から4.よりクラークの『2001年宇宙の旅』には911の事件(「2001年」に起きたツインタワーの崩落事件)との接点があると見てとれるようになっているわけだが、クラークは七〇年代に出された小説 Rendezvous with Rama 『宇宙のランデブー』にて [2077年の9月11日に起こった災厄] を描いており、そのフィクション上の災厄(にまつわる作中設定)が現実世界のスペースガード構想といった有志運動の命名規則に通じているとの式でよく知られているとのことがある。そして、七〇年代アーサー・クラーク小説に見る「20「77」「年の9月11日」に起こった災厄」との77と9月11日を結びつけるやりようは9月11日に発生したかの事件が異常異様に77と結びつくようになっていることと平仄が合いすぎるとのことがある][また、クラークは、の後に、隕石—黒い破滅と語感と結びつくカーリーという印度の女神の名を冠する隕石—の襲来を回避すべくものマス・ドライバー・アトラスによる人類救済プランを描く小説をものとしているのだが、マスドライバーというものが「ローレンツカ」という加速器と同文の機構をとまなっているとのこと、そして、マスドライバーあらためて加速器のアトラス(本稿で911の予見事物ともなっていること、詳述の黄金の林檎の在処を知るとされる巨人の名を冠する検出器)がブラックホールを検知しうるとより後の日を考えられるようになったことから、多くも出来すぎて繋がるようになっている](以上委細を先の段に譲っての振り返っての表記とする)。

以上の1.から5.のことがあはることは—「問題は、」それらが偶然の賜物で済むのか、あるいは、執拗な恣意の賜物であるか、であると申し述べつつ—容易に裏取りできるし、その裏取りのための典拠を本稿で事細かに挙げている)

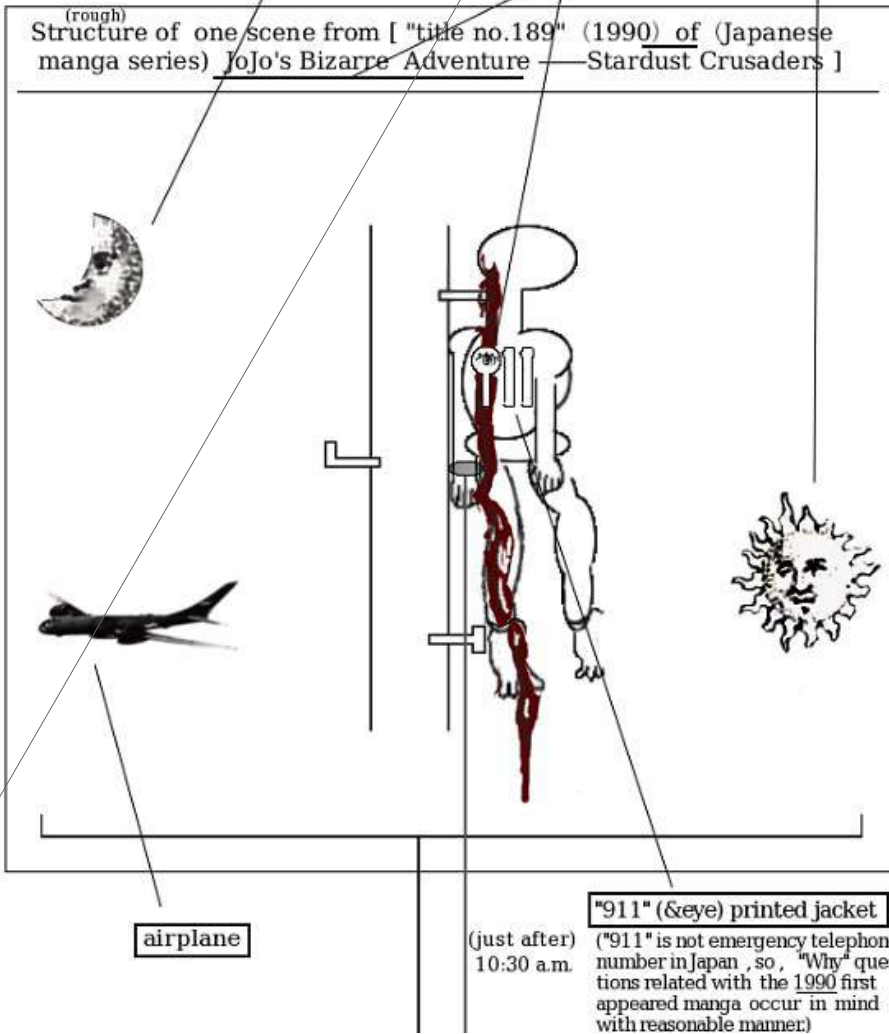
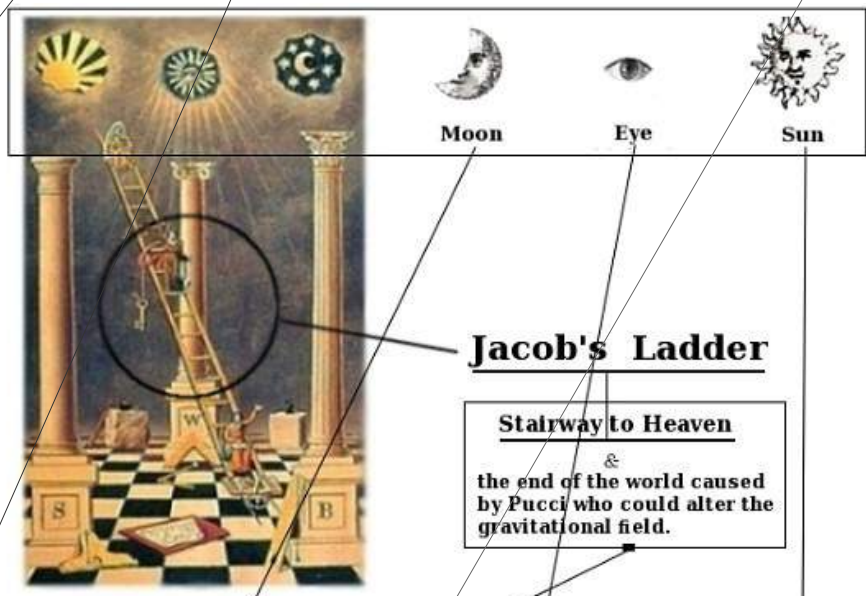
・さらに述べれば、『不死の物理学』(の本稿筆者が検討している版)に見る「あまりにも群を抜いた書...これはまさしく(アーサー・クラークの)『2001年宇宙の旅』が(ダンテの)『神曲』が出会ったようなものだ(エスケイア誌)」とのタイトルキャプションと結びつけられている、[天国に至る梯子](の図像)

だが、それはジェイコブズ・ラダーとのシンボリズムとも接合し、そのジェイコブズ・ラダーが複数のフリーメーソン・シンボリズムで溢れた作品らの中にあつて [911の予見的言及](として成立してしまっている作中内表現)と接合していることがあり、またもつてして、そうもした側面を帯びての(怪物じみた)予見的作品らにあつての一部には [重力の機序の

ここに
1. から5.
と振って表
記のこら
の委細・典
拠につい
ては本書
本巻 vol.4
にあつて
の p.153 から
p.170 の部
(およびそ
の基礎とし
ての従前
の部の内
容)を参照
いただきた
い。

「大の大人が肩肘ばって青少年向けの漫画作品などについて細かくも分析を加えることは滑稽と映るかもしれないが、そういったところ、大の大人が真っ当に取り上げられない領域であるからこそ、却(かえ)って、臭気を放つものが具現化させられやすいものの見方も成り立つであろう」との趣旨の断りを先んじてなしている中で表記の漫画作品(ジョジョの奇妙な冒険)における問題となる描写(「俗間でも911の予見描写として語られている描写」)が【ヘラクレスの11功業】【フリーメーソン・エンタード・アプレンティス位階シンボリズム】【重力の崩壊と天国の梯子を結びつけている(当該シリーズ作品の中の)他の内容】といかように濃密な接合関係を呈しているのか、(本稿の) vol.3 と振っての巻における p.813 から p.855 にかけての部にあって長くもの詳述をなしている(また、同じくものは委細端折っての式ながらも本書本巻、vol.4 と振ってのセクションでも後の段、p.719 から p.722 にてほんの若干ながらも再度振り返り表記を →

操作による世界の破壊(と再生)] とそちら [天国に至る梯子はしご] (あるいは [天国に至る階梯かいてい(ステアウェイ・トゥ・ヘブン)]) が結びつくとの側面までもが伴っているとのことまで「も」がある (といったことが人間存在(のコントロール影響下度合い)に対する諦観に近いき感情に筆者が苦しめられている理由の一ともなっている。ちなみに、そうした作品が国内の著名漫画作品として存在しているとのことは本稿の補説4では入念に解説していることである 一下図は『ジョジョの奇妙な冒険』とのそちら作品にまつわって振り返りなしてのものである)。



→なすこととする)。そしてもってして、ここで問題視しているのはフランク・ティプラーの書籍『不死の物理学』がタイトルレベルで【天国の梯子】と【世界の(後の段にて後述する式で「重力の特異点」に近いものによる)崩壊と再生のポイント;オメガポイント】を結びつけているとの文物であるのに対して漫画作品『ジョジョの奇妙な冒険』という作品が【「重力」「特異点」とのキーワードと結びついた天国への階梯(ステアウェイ・ヘブン)】という(言い換えて)【天国への梯子】とはきと通ずるようになっていたものを【世界の(重力による)崩壊と再生のポイント】の具現化の手段として描いている作品ともなっている、しかも、そのやりよう(あるいはやらされようとした方が遙かに至当か)がまさに当該作品における【911の予見描写】と(普通人にそこまで気づくだけの目分量を期待するのは酷であろうが)接続するようになっていたことである。

original scene of above illustration appeared as the [prophetic vision] of the fictional character (named Oingo) through his manga work

Real World Event

The North Tower collapsed at 10:28 a.m.



hanged man's wristwatch time
→ 10:33~34 a.m.

who had referred to 10:30 a.m.
before he died.



← rotate 180°



(直上、一例としての再現図を呈示している ([天国への階梯ステアウェイ・トゥ・ヘブン] と同義であるとの) [ヤコブの梯子(はしご)] と結びつきもする [911の事前言及事物] (国内漫画作品『ジョジョの奇妙な冒険』に於ける911の事前言及がかったの描写をなしているパートとして巷間語られもしている箇所にして、かつもってして、フリーメイソンの徒弟(エンタード・アプレンティス)階級のトレーシング・ボードと露骨な視覚的かつ意味論的な接合性を呈しているとの指摘しているとの箇所) についての解説は先の段に譲る)

ここまで幾分もってして微に入つてのところまで解説してきたとの、

[永劫回帰(にまつわる[マルコフ連鎖]のことなどを持ち出してのティプラー否定の弁)と涅槃寂靜の境地との部分的近接性(にまつわるティプラー言い分)およびティプラー著作『不死の物理学』表紙部内容、それらの事柄らより導き出せもする[解脱(涅槃寂靜)と天に向かう梯子]に関わる寓意]

は 一再言するが フランク・ティプラーが [そういうことがある] と明示的に一切言及していないものとなっている、そう、[思考能力を蔵した人間] (自律的思考能力などはなから有しておらずやることなすことといえは種族の生存に石を置くことぐらいであろうと いった按配の偽物・紛い物だらけになったこの世界では希少種へと追込まれていることかとも見えもしてまう存在かもしれない) がアテンション(特段の注意)を向けて思索した際にのみ特定化できるかたちでそこに体現させられている隠喩的な式 (いわばもってしての [隠れ要素]) であると判じられるものとなっているからこそ、そして、そこにあつては [911の事前言及事物] および [ブラックホール(の特異点)] との多重的な接合性までもが見て取れもするからこそ、[悪辣なやりよう] であると申し述べる。

(以上をもつてして長くもなつてのフランク・ティプラーの[永劫回帰否定]の申しようにつつまる長くもなつての付記の部を終える)

(長くもなつての付記の部から本題に立ち戻るとし)

これよりの内容が

[何故、ティプラーの申しようが問題になるのか — [[犯罪の「極悪なる」具体的証跡]が (本稿にて挙げ連ねてきたような式で)眼前に目につくようになっている (明らかに人為的な式で嗜虐的な殺され方をしている死体が眼前にあるような式で目につくようになっている)との状況での(考えられるところの)[犯行動機]、Whydunit[何故、彼らはそうしたのか]との点に関わりうるところでいかようにして問題になるのか、でもいい——]

とのことにまつわる[推理] (先立っての段でも強くも申し述べているようにここでの話は証跡指し示しをなしたうえで[申し分け]程度に付している[推理(guess)]の領域に留まるとのものである) に直接的に関わるところとなる。

すなわち、

第一。

オメガポイント理論にまつわってティプラーが明示している観点は「史的」側面で[現行の加速実験実施機関の「誕生」経緯]との[繋がり合い]が観念されるとのものとなっている。そして、その繋がり合いは本稿にて問題視してきた[予言的作品]との共通項が問題となる[繋がり合い]「とも」になっている。

第二。

上記第一の点と一緒に考えてこそ意をなすこととしてティプラーのオメガポイントにまつわる言いように関しては[加速器実験機関と結びつけられてのブラックホールの人為生成問題]「とも」(「奇怪な式で先覚的に」と受け取れるかたちで)相通ずる側面が見受けられるようになっているとことがある。

との点らにあつての

第一。

オメガポイント理論にまつわってティプラーが明示している観点は「史的」側面で[現行の加速実験実施機関の「誕生」経緯]との[繋がり合い]が観念されるとのものとなっている。そして、その繋がり合いは本稿にて問題視してきた[予言的作品]との共通項が問題となる[繋がり合い]「とも」になっている。

に主軸として関わるところとなる。

その点もつてして、

[フランク・ティプラーが永劫回帰とワンセットになって否定に力を入れているナチス思想 ([出典 \(Source\) 紹介の部 115\(2\)](#), [出典 \(Source\) 紹介の部 115\(3\)](#))]

への科学者らが大同団結して結集してのカウンター・アクションこそが

[(ブラックホール生成をなしうるとされるに至った)現行の加速器実験機関ら]

を世に産み出すことになったとことがある (との点が問題になるだけの事情が存在している)。

さて、同じくものこと (現行の加速実験機関の誕生を促進したのがナチスへのカウンター・アクション

であるとのこと)に関わるところとして本稿の補説 2 の部にあつては以下、振り返りもするようなことの証示に努めもしてきた。

(振り返りもしての表記として —「以下、相当程度、長くもなる」と断つておく—)

カリスマ科学者カール・セーガンの手になる小説作品、「同ジャンルの小説としては記録的ヒットを残すことになった」ハード SF 分野の小説作品『コンタクト』(原著初出 1985 年)では

〔この地上にブラックホール(ないし通過可能なワームホール)と結果的に判明したものを生成するとの挙動〕

が主軸として描かれている。

小説『コンタクト』では偉大なる先進文明(に由来するメカニズム)が銀河にあつて未熟な後発種族である人類をテストするとのかたちで地球に電波送信して

〔「マシン」(と呼ばれるもの)の設計図 —すなわち、結果的にブラックホールないし通過可能なワームホールを構築するための装置であると判明したものの設計図—〕

を送ってくるとの筋立てが作品の骨格となっているのである。

そうした小説『コンタクト』に見るマシン、人類サイドでは完成させて動かすに至るまでいかなる機序を有しているのかさえ理解されていなかった(ブラックホールやワームホールを生成することになるとのことさえ理解されていなかった)との作中設定を伴つてのものとして同マシンが「明示的に」作中にて

〔トロイアを滅した木製の馬〕

に何度も何度も結びつけられているとのことがあるだけではなく(本稿補説 2 の部では〔作動機序不明なるマシン〕を作中登場人物らが〔トロイアを滅した木製の馬〕にかこつけてその建設に批判をなしているとの小説『コンタクト』内記述を、計 10 数カ所、〔オンライン上より労せずして全文確認できるとの原著内記述〕および〔国内で広くも流通している訳書内記述〕からそれぞれに引用している)、明示的方式から離れて隠喩的な式「でも」これ執拗に作中内にて登場のそちら「マシン」が

〔トロイアを滅した木製の馬〕

と執拗に執拗に結びつけられていると指摘可能となつて「しまっている」とのことがある。

その点、『コンタクト』作中内登場人物らに〔トロイアを滅した木製の馬〕と結びつけられながら「明示的に」批判されている様が描かれもしている、

〔(完成後、)結果的にブラックホールないしワームホールを構築したようであると判明した装置(マシン)〕

は終局的には —物語の結末がそちらに向かう方向として—

〔後発種族を見守らんとする温かい先進文明の仁慈溢れる贈り物〕

であった(と判明した)などと描かれているのだが(明示的な批判がなされつつ大団円に終わったとの明示的結末が描かれもする物語の運び、筋立ての問題として、である)、にも関わらず、そうした表向きの耳に心地良い設定に関わらず、隠喩的に同「マシン」をトロイアの木製の馬と結びつけているとの式の方が悪い意味で実によくできているとのものとなつているとのことがある。

具体的には隠喩的なトロイアの木製の馬とマシーンの結びつけ方が「世間一通りの教養しか伴わぬ(ギリシャ神話やニューヨークにまつわる属地的特性といったことにまつわっての関連情報知識を持ち合わせていない)との向きらが小説 CONTACT『コンタクト』(原著 1985年初出)を丁寧に読んでもおおよそ気づけぬようなもの」となり、かてて加えて(さらに性質が悪くも)、「人間業でそれができたとも思えぬような他の奇怪な事物らと接合しているありようが見てとれるもの」「とも」なっており (本稿はでその暗号がかった堂の入りようを顧慮して[隠喩的な表現方法]にまつわる懇切丁寧を心掛けての解説を講じている)、また、そこに「嗜虐的な反対話法の臭い」が濃厚如実に伴っているとのこと「も」があり (小説『コンタクト』額面上では[マシーン]は[人類を先進文明の用意した進化のステージに導く望まじきもの]と描かれているのであるから、Doublespeak [(隠喩的)反対話法]の問題が首をもたげてくるところとしてそうもなっている)、それがゆえ、当然に問題と受け取れるようになっているとのことがあるのである。

以上のことに関わることとして先立っての部で解説しもしていたことをここに振り返ることとする。

(委細は補説 2の部、数十万字超との文量を割いての同セクション補説 2の部に譲るとして小説『コンタクト』には次のような[露骨]かつ[悪質]な側面が見受けられる)

1. 小説『コンタクト』作中にて[ゲート]となる[マシーン]は

[黄金比と結びつく正五角形(を 12 枚重ねての正十二面体)]

として描写されている。同じくもの点に通ずるようなところとしていわばもってしての[ゲート]として

[(本然として黄金比と結びつく)正五角形]

を登場させているとの記録的ヒットを見た 70 年代米国小説が存在しており、そちら小説『ジ・イルミナタス・トリロジー』は

[「黄金の林檎」を副題に掲げる作品にして、なおかつ、(何故、そうもなっているのか、奇怪極まりないところとして)後に 911 の事件が発生することを先覚的に言及しているが如くの複数要素を帯びての作品]

「とも」なっているとのことがある (：本稿で先立って詳述しているところとして『ジ・イルミナタス・トリロジー』では【異空間との境目(いわばもってしての錠前付きの異空間との間にある扉)としての意味合いをもった五角形と「黄金の」林檎を並列描写させているシンボル】が一(同じくものものが【ペンタゴンとニューヨークを並列描写しているシンボル】として問題になりうるの中で)一 頻繁に登場しており、かつもってして、同シンボルとの連関が想起されるとのかたちで作中内にてニューヨークのビルが爆破されたり、ペンタゴンが爆破されたり、その他の 911 の予見的言及がかった描写がなされているといったことがある)。

さて、911 に対する予見めかした描写でも問題になる作品であると直上言及した『ジ・イルミナタス・トリロジー』にあつての副題にそちら固有名詞が付されていもするとのもの、

[「異界との境界である五角形」と並列描写されながら同じくもの『ジ・イルミナタス・トリロジー』に 何度も登場しているとの[黄金の林檎]]

というものについてはギリシャ神話の故事に基づき、

[トロイア滅亡の原因ともなった果実]

とも言い換えられるものである(本稿の[出典\(Source\)紹介の部 39](#)にて古典などより原文抜粋しながらも紹介しているようにギリシャ神話においてよく知られた[パリスの審判]とのエピソードにまつわってのことである)。

であるから、そう、[(黄金比と結びつく)正五角形]を[ゲート装置]として登場させている小説『コンタクト』と同文に[(本然として黄金比と結びつく)正五角形]を[異界とのゲート]として登場させている小説作品『ジ・イルミナタス・トリロジー』にあって[黄金の林檎](トロイア崩壊の原因)とそちら[五角形]をこれ執拗に結びつけるとのやりよう「も」が見てとれるとのことがあるから、小説『コンタクト』の[五角形(を12枚重ねての正十二面体)状のゲート]と[トロイアを滅した木製の馬]との結びつきがそこからして想起されるとのことがある(同じくものが[穿ちすぎ]で済まされないとの理由は下述する)。

⇒

2. 上の1.にて述べたことについて偶然の可能性 一米国初の小説として世界的ヒットを記録した70年代初の『ジ・イルミナタス・トリロジー』と同文に米国初の小説として世界的ヒットを記録した80年代初の『コンタクト』の間に横たわる「偶然の」繋がり合いの可能性一を斥けるようなこととして次のことが指摘出来るようになってしまっている。

[小説『コンタクト』における[ブラックホールないしワームホールによるゲート装置](黄金の林檎ではじまったトロイア戦争、同戦争に決着を付けた木製の馬との関係性が問題になるとのことでここにて問題視しているゲート装置)にまつわってのアイデアを[科学考証における協力]とのかたちで1980年代中葉にカール・セーガンに提供したのは物理学者キップ・ソーンである。そして、彼キップ・ソーンは(小説『コンタクト』をものしたカリスマ科学者である)カール・セーガンへの科学考証にあってのアイデア提供の核をなしていた概念、[通過可能なワームホール]にまつわる思索を踏まえて後に[タイムマシン化しての通過可能なワームホール]についての思索を自著 BLACK HOLES & TIME WARP Einstein's Outrageous Legacy (邦題)『ブラックホールと時空の歪み アインシュタインのとんでもない遺産』にてまとめている。問題はその BLACK HOLES & TIME WARP Einstein's Outrageous Legacy における[タイムマシン化しての通過可能なワームホール]における思考実験を扱っての記述部が多重的に[911の事件が発生することになった先覚的言及]との特性を帯びていることにある(本稿にてくどくも強調してきたように原文引用部からだけでもって容易に摘示できるように BLACK HOLES & TIME WARP Einstein's Outrageous Legacy にあっては[[双子(のパラドックス)] [911(そして2001年9月11日)と相通ずる数値列]の「多重的」使用を少量少なくも同一箇所にてなしている]との特質がみとめられる。それは 一[宗教的狂人]や[機械と思考を一体化させた(人間未満の)ロボット人間]でないのならば 一[双子(ツイン・タワー)の塔が2001年9月11日に崩落させられた事件]との911との事件との露骨なる一致性をみとめざるをえぬとのところである)]

ここで直上1.にて言及した作品、[小説『コンタクト』と同文に[正五角形]を[異界とのゲート]として登場させている]との作品たる『ジ・イルミナタス・トリロジー』が

[後に911の事件が発生することを先覚的に言及しているが如くの複数要素を帯びての作品]

となっていることと話が通じる。そこから[トロイアの木製の馬]を介しての接合性もが「よりもって」重きをもってくることになる。

⇒

3. 小説『コンタクト』におけるゲート装置の形状、 [黄金比と結びつく正五角形を重ねての正十二面体]

という際立っての形状をして

[宇宙を司る元素]

として表していたのはプラトンの手になる古典『ティマイオス』である（本稿補説2の部では無論、証示のために当該プラトン古典よりの原文引用を — Project Gutenberg のサイトより全文確認(ダウンロード)できるとの英訳版を引き合いに— なしている）。

プラトニック・ソリッド、そうもして表されるプラトン流の自然界元素の体現形態にてそちら正十二面体(ドデカヘドロン)は[宇宙を司る元素]（プラトンの思考を半ば踏襲してのアリストテレス学派の見方では[第五元素]を指す）であるとされているのではあるも、同じくもの[宇宙を司る元素としての正十二面体(正五角形十二枚重ねの図形)]に言及してのプラトン古典『ティマイオス』は

[古のアトランティス]

のことに言及しているアトランティス伝承の源流古典として「も」非常によく知られているものでもある（: 今日に伝わるアトランティス伝承の根源はプラトンの同古典『ティマイオス』と連続するプラトン古典『クリティアス』にあると述べても言い過ぎにならぬようになっている）。

さて、

[古のアトランティス]

は(1. にて取り上げた)70年代欧米圏ヒット小説『ジ・イルミナタス・トリロジー』の

[[黄金比と結びつく正五角形 —それを十二枚重ね合わせると正十二面体になるとの図形—] としての [異界との境目]]

と当該作品『ジ・イルミナタス・トリロジー』作中にて結びつけられているもの「とも」になっている（: 小説『ジ・イルミナタス・トリロジー』ではいかな非情・無慈悲なことでも平然としてやってのける情性欠如の人造生物たる蛇人間らを用いてのアトランティス侵略がなされたと描写され、それに並行して、錠前付きの扉のようなものとして異界の存在を封印していた五角形、ペンタゴンが破壊されたとの描写もがなされている）。

そこからして直上2.の部にて言及したことにも通ずる結びつきが観念される場所である——※プラトン古典『ティマイオス』にて[宇宙の根源とされる正十二面体(の構成要素たる正五角形)]と同古典にて目立って言及されている[アトランティス]だが、それら両者の同一古典を介しての近接性の問題を感じさせるように[アトランティス]と[正五角形のゲート]を通じての繋がり合いが問題となる複数作品（一作品は[正十二面体]をゲート装置として描く小説『コンタクト』となり、もう一作は[正五角形]をゲートの如きものとして描く小説『ジ・イルミナタス・トリロジー』となる）を介して観念されるようになっている、とのことである——。

そして、荒唐無稽小説(との体裁を呈するも実態は[911の事件発生と記号論的に相通ずることの多重的事前言及作品]となっている旨、本稿にて解説してきたとの)『ジ・イルミナタス・トリロジー』は[黄金の林檎]を(副題に添えるなどしながら)目立って登場させている作品となるが、そのやりようは

[[黄金の林檎]を[正五角形]と並べての構図]

を図示までするなどして多用するもの「でも」ある（いわゆるディスコーディアニズム・シンボルとの兼ね合いでそうもしたことをなしていると本稿の先だつての段では詳述なし）。

ゴールデン・アップルはトロイア崩壊の元凶と神話が語り継ぐものであるがゆえにそうした『ジ・イルミナタス・トリロジー』のやりようは

[[トロイア崩壊の元凶]を[正五角形]と並べての構図]

とも言い換えることができるわけだが、ここで同じくものこととあわせて既に言及してきた、

[以下にて(くどくも)箇条表記のことら](ここでの表記が振り返っての復習・整理のための表記であるところ、の中の既に言及なしでの表記を再提示しているがために、いわば、復習の復習、といった性質を帯びてのことら)

をも顧慮すると[関係性の根深さ]がより一層見えてくる。

・(整理のためのくどくもの表記部として) 小説『ジ・イルミナタス・トリロジー』にては[アトランティスへの蛇人間が用いられての侵略]と結びつけて[異界との垣根たる正五角形](終局的には合衆国国防総省ペンタゴンと重なるように作中描写されているペンタゴン)が崩されるとの描写がなされているわけだが、当該小説ではそうした[五角形]と[黄金の林檎](トロイア崩壊の元凶)とが並置されてのシンボルが図示までされて多用されているところとなっている中で、である。同じくもの小説『ジ・イルミナタス・トリロジー』に後続して世に出ることになった小説『コンタクト』では[正五角形を十二枚重ねてのゲート装置]が[地球上にブラックホールないし通過可能なワームホールを構築するためのものであることが使用後、「結果的に」判明したとのゲート装置]として登場してくる。そちら[正五角形]を十二枚重ねてのゲート装置は使用前の機序不明段階にて人類サイドにて[トロイアを滅ぼした木製の馬]であると何度も何度も作中、懐疑的に仮託されているものともなっている(が、[結果的に銀河系の後進種族である人類を仁慈溢れる宇宙文明が彼らの仲間入りをさせるための手段として彼らへの領域への通路としてのブラックホールないし通過可能なワームホールをもたらすものである]とすることが判明することになった]などと同フィクション中では描写される)。

・(同文に整理のための表記部として) 以上のことがゆえに小説『ジ・イルミナタス・トリロジー』にての[ゲート(錠前付き異界との扉)としての正五角形]と小説『コンタクト』にての[ゲートとしての(正五角形を十二枚重ねての)正十二面体]には[トロイア崩壊事由]との兼ね合いで濃厚なつながりあいがあるように見てとれるわけだが、同じくものことが[たかだかもの記号論的一致性]の問題では済まされないようなところとして次のようなことがある → (先立っての2.の部にて述べたことを繰り返すとして) 小説『ジ・イルミナタス・トリロジー』は[911の事件の発生にまつわる先覚的言及文物]としての側面を露骨に帯びているがゆえに、そう、それであるからこそ、問題視して然るべき作品となっている(典拠は本稿にての[出典(Source)紹介の部 37]から[出典(Source)紹介の部 37-5])。他面、小説『コンタクト』は(まさしくもの[ゲートとしての(正五角形を十二枚重ねての)正十二面体]および[トロイア崩壊事由]と関わるころにての)[通過可能なワームホールにまつわるアイデア]を物理学者キップ・ソーンより供与されての作品となっており、そうした小説『コンタクト』へのキップ・ソーンへのアイデア供与がキップ・ソーン著作 BLACK HOLES & TIME WARP Einstein's Outrageous Legacy (邦題)『ブラックホールと時空の歪み アインシュタインのとんでもない遺産』に結実しているとのことがある。そして、そちらキップ・ソーン著作『ブラックホールと時空の歪み アインシュタインのとんでもない遺産』にみとめられる小説『コンタクト』へのアイデア供与がなされた[通過可能なワームホール]にまつわる部が[多重なる911の事件の発生にまつわる事前言及事物]となって

いるとのことがこの世界には現実にある（典拠となるところを本稿にての**出典 (Source) 紹介の部 28**から**出典 (Source) 紹介の部 33-2**にて「容易に後追い出来る」原文引用のみで示してきたところでもある）。

上が背面にある悪辣なやりように関わりうる、人間存在（あるいは操り人形ないしその群落）を愚弄しきっていないかなせないような悪辣なやりように関わりうるのはこの段階でも推し量りいただけるかと思う。

（:さらに述べれば、本稿[補説2]の部ではジュール・ベルヌの著名小説 *Twenty Thousand Leagues Under the Sea* 『海底二万里』の内容もが同じくもの一致性の枠組みの中に濃厚に関わるとのことの証示をも努めてなさんとした。すなわち、『海底二万里』に登場する、

[潜水艦ノーチラス号(海中に没したアトランティス遺構を探索したとの描写もなされる潜水艦)]

が小説『ジ・イルミナタス・トリロジー』に登場する、

[黄金の潜水艦レイフ・エリクソン号(海中に没したアトランティス遺構を探索したとの描写がなされている潜水艦)]

と(『ジ・イルミナタス・トリロジー』作中にて)「明示的に」結びつけられているとのことを引き合いに[以下の繋がり合い]に伴う意味性をつまびらやかにせんとした。

- i. 繰り返すが、[アトランティス]のことを今日に伝えるプラトン古典『ティマイオス』が[宇宙の構成元素]としての「正十二面体」を登場させている(小説『コンタクト』に登場する正五角形12枚重ねの形状を[アトランティス]に関わるところで印象的に登場させている)とのことがある。
- ii. [プラトン古典『ティマイオス』に見るアトランティス崩壊伝承]と[トロイア崩壊伝承]には接合性がある。双方共に「ギリシャ勢との戦争の果てに洪水に呑まれた」(トロイアの方は異本としての『トロイア戦記』という遺物にそういう結末にまつわる表記が付されている)、双方共に「黄金の林檎」と関わる(トロイア滅亡の原因は黄金の林檎にあり、また、アトランティスは黄金の林檎の園に仮託されてきた場である)、双方創建者に接合性を見出せる異伝の類が存在する(アトランティス創建者アトラス王とトロイア創建者ダルダネスの血縁性を問題視するイタリアの地誌などが存する)とのことらがそうである。一本稿では以上のことらについて古典そのものとの一次資料の内容の原文引用をなすなどして遺漏なくもの解説につとめてきた。
- iii. ジュール・ベルヌの著名小説『海底二万里』にあつてアトランティスへの海中探索をなしたと描かれるノーチラス号は[オウムガイ]号とも訳せる存在である(ノーチラスとはオウム貝、アンモナイトの近縁のその[生きていた化石]とされる生物の英語呼称である)。そちらオウムガイとは外殻構造が渦を巻く[対数螺旋構造]を呈する存在であり、のみならず、

[黄金螺旋構造] (五角形が本然としてそれと結びつく比率である[黄金比]を体現するピッチで渦を巻く螺旋構造)

を呈しているとの話が広くも語られてきた存在である(オウムガイの外郭構造が黄金螺旋構造を呈するとのことについては半ば都市伝説がかっているとのこととなりもすると本稿[補説2]では入念に出典挙げながらも解説しているところながらも、である)。

ここで小説『海底二万里』潜水艦ノーチラス号のモデルとなったノーチラスに見る「黄金螺旋」とそれと作中内にて明示的に結びつけられての小説『ジ・イルミナタス・トリロジー』の潜水艦レイフ・エリクソン号 — 「黄金の林檎と(本然として黄金比を呈する)正五角形を並列描写してのシンボル」を掲げもする者達の旗艦たる潜水艦でアトランティスの海底遺構を探検している様も描かれる潜水艦 — の「黄金色」の外観のことが結びつくように受け取れるとのことがある
(「黄金比を体現する外殻構造を呈するとの話が広くも語られてきたオウムガイの名を冠する潜水艦ノーチラス号」と「黄金色の潜水艦レイフ・エリクソン号」が『ジ・イルミナタス・トリロジー』内にて明示して結びつけられているからである)。

そして、「アトランティス探検をなした黄金色の潜水艦」を目立って装飾装置として登場させる『ジ・イルミナタス・トリロジー』ではトロイアを滅したとの果実でもある「黄金の」林檎が潜水艦それ自体と結びつけられているのみならず、作品副題に目立って付されているのであるから一致性の枠組みはさらに恣意的多重性を感じさせるものと見受けられるところとなる。

さらにもってである。

[アトランティス探検をなした, [(黄金螺旋と結びつく) オウムガイ号] とも言い換えられるノーチラス号]

が小説『海底二万里』の方にあつては作品結末部にて

[ノルウェーのメイルシュトロム] ([モスケンの大渦])

に呑まれて末期を迎えたように描写されていること「も」同じくもの式に関わるところで問題になる(と解されるようになっていく)。(本稿の[補説2]の部にてオンライン上より確認可能な英訳版から原文引用している)そちら『海底二万里』の[メイルシュトロムへの被吸引]の描写が

[不帰の地としての深淵(アビス)への凄まじい渦動の力の発現の中での被吸引]

と「過剰」描写されている(現実のメイルシュトロムの驚異を過度に誇張して描写している)ことにも

[不帰の地たるイベント・ホライズンに呑まれるブラックホール被吸引者]

のことを想起させるとの側面が感じさせられもするのだが(本稿にあつての[補説2]と振っての部ではそうした描写の源流にあるエドガー・アラン・ポーの小説 A DESCENT INTO THE MAELSTRÖM『メエルシュトレムに呑まれて』(Project Gutenbergを通じて全文公開されている THE WORKS OF EDGAR ALLEN POE VOLUME II The Raven Edition にて収録の版)にみとめられる描写からして多層的にBH、ブラックホールに通ずるような側面を

伴っていることを原文引用なしながら言及したりもしている)、[ノルウェーの大渦(モスケンの大渦;メイルシュトロム)]とくれば、

[2009年に発生して物議を醸したノルウェー中空の渦巻き光線現象 —ノルウェイ・スパイラル・アノマリーとして広くも欧州にて認知されている現象—]

を想起させるものとなっているとのことがある、それがゆえに問題となると解されるとのことがある (尚、本稿の[補説2]で報道のされようを詳説・詳解してもいる2009年のノルウェー・スパイラル・アノマリーについては[ノーチラス号]同様の[潜水艦]であるロシア海軍の潜水艦から訓練時に発射されたSLBM((S「サ」ブマリン・L「ラ」ーンチド・B「バ」リスティック・M「ミ」サイル/[潜水艦]発射弾道ミサイル)が異常軌道を現出してそれが渦巻き型光源発生原因となったとの理由付けが幅広くもなされている)。

その真因となる機序は奈辺にあるのかとのことはともかくも2009年のノルウェー中空にての渦巻き光の発生現象については「頭の具合が目立ってよろしくはない」「極めて胡散臭い」とのカラーを露骨に前面に出しての陰謀論者 Conspiracy Theoristsらに[CERNのLHC実験]とを[「非」科学的]に結びつけられているとのやりようが見てとれることがあるから問題となると解されるのである(巷間見てとれる陰謀論らに見るridiculousなる側面、非科学性について「も」本稿の[補説2]では懇切丁寧に解説している)。

に関しては

[[ノルウェーの大渦] と結びつくノーチラス号 (『海底二万里』潜水艦/黄金比と結びつけられる対数螺旋構造にて知られるオウムガイの名称を冠する潜水艦) の末期の描写 —凄まじい吸引力にがんじがらめにされながら、不帰の領域たる大渦に吞まれての末期の描写—]
[[ノルウェーの大渦] との結びつきを想起させる中空の異常光源発生現象および同現象をCERNのLHC実験と(不適切・非科学的に)結びつける(馬鹿げた)論調の存在]

の関連性が —ノルウェーの大渦つながりで— まずもっては想起されるところではあるが、

[ノーチラス(オウムガイ)外殻構造がそれとの関連性を問題視される「黄金比体現構造」]

については

[ブラックホール(の中のカー・ブラックホール)]

との関連性が近年問題視されもするようになったとのことがある。

ノーチラス(オウムガイ)の外殻構造がそれと結びつく渦巻き構造、対数螺旋構造(ログリスミック・カーブ)が銀河の中核にあるような大規模ブラックホールの渦を巻く構造との親和性を感じさせるものであるとのこともあるのだが(対数螺旋構造がいかようにして大規模ブラックホールを中核に据える銀河構造と結びつくかなどといったことについても無論、世間一般での説明なされようを先行する段にあって原

文引用などしている)、「渦を巻く」カー・ブラックホールの変異には黄金比がパラメーターとして深くも関わっているとの論調が科学者に由来するところとして主張されるようになったとのあるのである(本稿[補説2]の部にてその内容も無論、事細かな引用をなしつつ仔細に紹介している)。

そうもしたカー・ブラックホール —黄金比と結びつくとの意見が目立って呈されだしたとの渦巻くブラックホール— がLHC実験にて生成される可能性も一部にて取り沙汰されてきたとのあることがあり、また、なおかつ、そちらカー・ブラックホール、[別宇宙とのゲート]たりうるものと思案されてきたものがカール・セーガンの「正五角形十二枚重ねの正十二面体構造のゲート装置」とも(小説『コンタクト』作中それ自体にて) 結びつけられているものとなる(但し、映画版DVDコンテンツに付されての解説部はともかくも小説『コンタクト』原作版では明示的にはゲート装置が[加速器]と結びつけられていることは何らない。隠喩的に解すれば話は多少異なってくるが、—(についても先立っての段で解説をなしている)—)。

そうした観点から著名小説『海底二万里』を合間に介しての『コンタクト』の性質が問題になるとのこと「も」ある。

(※再度繰り返せば、小説『コンタクト』では[カー・ブラックホール具現化]とも作品内で結びつけられる[正五角形を12枚重ねての正十二面体体現装置]が登場してくる。そうもしたカー・ブラックホールと結びつけられてもいる[正十二面体]はプラトンの『ティマイオス』との古典、そちらにあつての[アトランティス]にまつわる記述で有名な同古典で[宇宙の本質を示す立方体](後にプラトンの後を継いだアリストテレスの学統から第五元素と言われるに至ったもの)であると見なされているものである。ここでプラトン『ティマイオス』、正十二面体を宇宙の構成単位として言及し、アトランティスについても言及している同古典に見るアトランティスの方についてだが、そちらアトランティスの潜水航海を作中の潜水艦になさせている小説が二作品あり、一作品はカール・セーガン『コンタクト』と[異次元異空間と結びつく五角形]を介して、そして、[911の先覚的言及文物としてのありよう]を介しめて結びつく(と先立って振り返りもした)『ジ・イルミナタス・トリロジー』となり、そして、[アトランティスへの潜水航海]を作中登場の潜水艦になさせているもう一つの小説作品は有名なジュール・ベルヌの『海底二万里』である。それら両作『ジ・イルミナタス・トリロジー』と『海底二万里』に見る[アトランティス航海の潜水艦]は『ジ・イルミナタス・トリロジー』の方の作中にて明示的に結びつけがなされており、その結びつき関係には(といったことに対してまでは作中内での明示的言及はないものの)[渦と結びつく黄金比の問題]が関わっているように解されるようになっていることがある。ここで[渦と結びつく黄金比]とのことにあつての[渦]との側面に着目すると、『海底二万里』の潜水艦、ノーチラス号(黄金比と結びつくうずまきを外殻とするオウムガイ、その名を冠する潜水艦)が[ノルウェーの大渦]に吞まれての最期を迎えたと描写されていることが気がかりなところとなる。[ノルウェーの大渦]となると、

[2009年にて発生したロシア海軍[潜水艦]発のSLBM([潜水艦]発射弾道ミサイル)に由来すると広くも見なされている中空にての怪奇光発生現象(海外メディアにも幅広く報じられてきた現象)が陰謀論 ridiculous conspiracy theoryにてCERNのLHC実験と結びつけられていること]があるからであり、ラージ・ハドロン・コライダーにては[渦を巻く黄金比体现構造とも昨今になって考えられるようになったカー・ブラックホールを生成する可能性]もが(物理学者らに)主張されるに至っているとのことがあるからである(述べておくが、ただし、ノルウェイの怪奇光現象が発生した折にはLHC実験は停止していたし、また、LHCのように地下で粒子衝突をなさしめてもそれが離れた場所の中空に怪奇光現象を発生させるなどとのことは科学的にはおよそありえない、であるから、そういう論調を「非科学的に」広めている者達の背景に何があるのか、そのことが却って問題になる)。そして、話が回帰するところとしてカー・ブラックホールはカール・セーガン『コンタクト』にて[正十二面体のゲート装置]がそれと結びつけられているものとなる。．．．以上、くどくも繰り返しての振り返り表記を終える)

⇒

4. 上記3.の部までにて小説『コンタクト』がプラトンの手になる古典『ティマイオス』を介して、そして、その中に描かれる[アトランティス]を介して悪質な事前言及の類 —911の事件の発生的事前言及— と結びつく理由を(典拠・委細を全て[補説2]の部に譲るとの式でながら)再言及したが、

[いまだ人間の手で人為的ブラックホール生成がなされるとは考えられていなかった折柄] (本稿の前半部、[出典\(Source\)紹介の部21](#)以降の複数典拠紹介部を包摂する箇所にて注力して示しているようにブラックホール人為生成がプランク・エナジーの極小領域投入の実現不可能性よりまったくもって現実視されていなかったとの八〇年代)

にあって

[加速器とは(額面上は)結びつけられていないゲート装置によるブラックホールないしワームホールの地球上での生成]

を主軸として描いていた『コンタクト』(の「原作小説版」)は

[現実世界で後にそうであると言われるようになったブラックホール生成挙動の前言「的」側面]

をも帯びている、そう、

[トロイアの木製の馬の寓意]

に関わるところで同じくもの側面を帯びている作品ともなっている。

についてはひとつにカール・セーガンの小説『コンタクト』との接合性が観念されるところのプラトン古典『ティマイオス』(カール・セーガンがブラックホールないしワームホール構築装置と結びつけている正十二面体を後に第五元素と結びつけられるようになったとの式、宇

宙の構成要素として描いている古典であると上の3.にて先述なした古典) および『ジ・イルミナタス・トリロジー』([異界の境界(錠前付きゲート)としての五角形] [911の事前言及がかったの側面] の双方でセーガン小説『コンタクト』との結びつきが観念される作品)の双方に見てとれる、

[アトランティス]

が

[LHC 実験におけるブラックホール探知挙動]

の中でその名を —[黄金の林檎]にも通ずるところで— 後に持ち出されることになっているとのことがある(のが問題になる)。

LHC 実験では ATLANTIS という検出ウェア —イベント・ディスプレイ・ウェア— の名にアトランティスの名が用いられることとなりもしており、そのことにまたブラックホール人為生成問題との接合性「も」が見てとれるようになっている、そのことが問題となると述べられるようになってしまっている (: 何度も何度も本稿で指摘してきたとして LHC 実験(の関係者)は伝承が[[黄金の林檎]の在処を知る巨人]として語り継ぐ巨人アトラスの名称をもってして[ブラックホール検出をなしうると後に考えられるようになった検出器 ATLAS]の名称としているとのことがあるのだが(ちなみに検出器 ATLAS にあつての ATLAS との名称が定まったのは小説 CONTACT 原著が世に出た 1985 年より 7 年程後の 1992 年からであると公式発表されている —[出典\(Source\) 紹介の部 36\(2\)](#)—)、その ATLAS 検出器に用いられるイベント・ディスプレイ・ツール ATLANTIS が「無害で」「科学の発展に資する」と大音声(だいおんじょう)で呼ばわれての極微ブラックホール生成の証拠の検出をなしうるとも実験関係者に発表されてきたとの経緯がある —本稿前半部解説あるいは[出典\(Source\) 紹介の部 81](#)を参照のこと—)。

につき、[アトランティス]とは(本稿にて何度も何度もその典拠について言及をなしてきたところとして)[黄金の林檎の園 —ヘスペリデスの園—]と結びつけられるだけの背景がある伝説上の陸塊「でも」あり(たとえば、[出典\(Source\) 紹介の部 41](#))、黄金の林檎とくれば、[トロイア崩壊の原因]となっているとのことがある(黄金の林檎がトロイア崩壊の原因となっているとの他の伝承が存在する中でそういうことが指摘できるようになっている)。

対して、再言するも、カール・セーガンの小説に見る、

[ブラックホール(作中ではカー・ブラックホールと表記)ないしワームホールによるゲート構築装置]

は同小説作中にて明示的側面ですら「トロイアを滅した木製の馬ではないのか」と登場人物らに(10 数カ所がそれにまつわつての表記となるところとして)何度も何度も疑義を呈されるものとなっており(ただし、額面上の小説の帰結では然にらず、ゲートは人類の進化にあつて恩恵をもたらすものであつたなどとの方向に物語が落ち着する)、そのこととフィクションならぬ現実世界にあつて【「小説『コンタクト』が 80 年代中葉に登場した後に」ブラックホール生成をなしうると考えられるようになった加速器】が[アトランティス]、換言すれば、[トロイア崩壊の原因となった黄金の林檎「とも」通ずる伝説上の陸塊]と結びつけられるに至っているとのことと平仄が合うとのありようを呈している。

そういう意味「でも」カール・セーガンのやりようは

[現実世界で後にそうであると言われるようになったブラックホール生成挙動の前言「的」挙動]

とも

[トロイアの木製の馬の寓意]

を通じて結びついていると述べられるものである。

⇒

5. 上の4. のことに加えもしてのこととして、—それこそが最も問題になるようなことなのだが— カール・セーガン小説『コンタクト』(におけるゲート装置)は

[極めて隠喩的な式]

でトロイア崩壊との結節性がはきと見受けられるようになっているもの「でも」ある([補説2]の中でも解説に注力をなしているようにカール・セーガンという人間それ自身が[色を付けてのトロイア関連の寓意を嗜虐的に反対話法がかって表に出すように使役されていた「役者」]であったと臭わせるやりようとも通じている)。

まずもってそこから述べるが、小説『コンタクト』では

[アーガス計画]

とのギリシャ神話に由来する百眼巨人の名称に由来するとの(多層のパラボラアンテナを用いての)[外宇宙由来の電波探査計画]にて[マシンの設計図]が混入された怪電波が受信されるとの作中設定が採用されている —※本稿[補説2]では[アーガス計画]が現実世界で執り行われる運びであったとのサイクロプス計画のことを意識してのものであろうこと、また、カール・セーガンが[米国を代表するカリスマ科学者]として外宇宙電波探査計画(異星人文明なるものを発見しようとの今日に続くSETIプロジェクトに至るまで連綿として続いている計画)の重要な仕掛け人となっていたとのことをも詳説している—。

そこにてのアーガス(ギリシャ神話の百眼巨人)とは

[ギリシャのヘルメス神(ローマのマーキュリー神に後に特性継承を見た神)]

にメスマライズ、催眠術で眠らされて殺害された存在として伝わっている巨人である。

そうしたアーガス計画に由来するところとしてセーガン小説『コンタクト』では

[外宇宙より[マシン]の設計図が受信され]

[設計図受信の結果、反対の意見も強くも出されていたものの、(作中)機序不明とされる[マシン]の建設が結果として着々と進められ]

[主人公らが[マシン]に乗って銀河中心にあるブラックホールないしワームホールのゲート装置の集積地たるグランド・セントラル・ステーション(と作中人物らに呼称されることになった領域)に至る]

との式で通貫してのプロットが進行していくわけだが、

[アーガス計画の電波受信の結果、主人公ら(作中主要人物のエリーことエレノア・アロウェイ博士らを主軸とする主要登場人物ら)に代表される人類がいざなわれることになったブラックホールないしワームホールの集積地たるグランド・セントラル・ステーション(と目立って呼称される場)]

とは現実世界のニューヨークはマンハッタンに存在している世界最大のターミナル駅、[グランド・セントラル(ステーションないしターミナル)]から命名されたとのことが歴然としているものである。

さて、現実世界のグランド・セントラル・ステーションの象徴的アイコンとは何か、だが、有名なマーキュリー像、要するに、

「アーガスを殺したギリシャ神話のヘルメス神と同一視されるローマの神の像 —グ
ローリー・オブ・コマースとの題が付けられての像—」

となっているとのことがある(本稿[補説2]ではその悪質性に鑑み、かなり事細かに紹介に努めたことでもある)。

以上のことについて一言で述べれば、小説『コンタクト』では

「百眼巨人アーガスを催眠術にかけて殺したヘルメス(マーキュリー)の像を掲げる
地所の名を冠する領域(グランド・セントラル・ステーション)に殺された同じくもの百
眼巨人の名を冠するアーガス計画の結果、ブラックホールないしワームホールに
よっていざなわれた」

との流れが見てとれるのかたちとなっており(普通に小説を読んでいる限りはその比喩には絶対に気づけない。気づけるケースとしては、「ニューヨークの地名・モニュメント」に通じており、かつ、「神話の縁起由来」に通じているとの人間が注力して小説を「分析」した場合だけである)、そもした粗筋に見る隠喩的「反対」話法 一何故、反対話法かと述べれば、小説『コンタクト』ではグランド・セントラル・ステーションへの到達が人類を引き上げようとする外宇宙文明の温かい試みによる結果であるなぞと描写されているからである— が込められている作品たる小説『コンタクト』では

「アーガス計画にその名が流用されているとの百眼巨人アルゴス(アーガス)」

を介しての、そして、カール・セーガン(米国を代表するカリスマ物理学者としてメディアに露出し、世界中でその死が悼まれもした人物でもある)という人間そのものの特性を介しての、

「トロイア関連の寓意」

もが含まれていると判じられるだけのことがあり、それはおよそ以下のようなことらとなる。

一点目。アーガス・アルゴスとは(本稿[補説2]の段で事細かに解説しているように)ギリシャ語綴りで Ἀργος となる存在であり、そちらギリシャ語綴り Ἀργος と表象される存在が強くもトロイア絡みの存在となっているとのことがある。すなわち、アルゴス(Ἀργος)は以下のようなかたちで[トロイア関連の存在の呼称]ともなっている。

- ・トロイアを滅亡に追い込んだギリシャ勢の総称としてのアルジャイブ(アルゴス人)、アルゴス勢との呼称の綴り
- ・トロイアに[木製の馬]の計略で引導を渡した知将にして謀将のオデュッセウスの愛犬アーガス(アルゴス)の名称

以上のようなことになっている(百眼巨人アルゴスの名称がトロイアに相対するギリシャ勢力の総称となっている)とのことの考えられる典拠も本稿の[補説2]では紹介しているのであるが(ドイツのギリシャ古典学者ヴァルター・ブルケルトの著述 Homo Necans(邦題)『ホモ・ネカーンス 古代ギリシャの犠牲儀礼と神話』内容を引いたりしてアルゴスとの名称がトロイア攻めをなしたアガメムノンの故地に通じるところがある名称であること、百眼巨人と牛の生け贄の寓意が通じていることなどに言及もしている)、とにかくも、セーガンが「多重的にあまりにもかぐわかしい(との理由について直上に至るまで委細を他所に譲っての復習をなしてきた)との小説『コンタクト』」

にあって

「外宇宙からマシーンの設計図を受信させしめることになった計画」

と描くアーガス計画の名称 —その悪辣な反対話法がかった側面について直上にて再述なしもしたとの計画— はトロイアを滅ぼしたギリシャ勢の名称そのものともなっている。

といったことがあることに加えて、(小説『コンタクト』にアーガス計画およびセーガン特色を介してのところとしてトロイアの木製の馬との結びつけ挙動が隠喩的な式で介在していると

のことについて) 二点目として、である。カール・セーガン本人についても

【アーガスとの犬を飼っていたとの伝承がホメロス古典を介して伝わる木製の馬の計略でトロイアを滅ぼしたオデュッセウス】

との接点を強くも有しているとの向きとなるとのことがある。

具体的には彼セーガンが自身の[終(つひ)の住处]としていた地域、また、セーガンを記念する巨大モニュメント([セーガン・プラネット・ウォーク]とされる[公衆広場中心からサイエンス・センター、実際は博物館であるとのそこに向けて1.2キロの広がりを持っているとのモニュメント])が存在している地域である合衆国のニューヨークはイタカ(イサカ)の地 —セーガンが奉職していたコーネル大の存在する地域でもいい— はそもそももってギリシャ神話のオデュッセウスの故地(故郷)たるイサカ(イタカ)から命名された土地となっているとのことがあるのである。

[斯界の泰斗][米国の科学界の代表者]果ては[人類文明を代表する偉人の一人]などとも評されることが多いカリスマ科学者である、

【カール・セーガン (本稿のそれ自体極めて長くもなつての**出典(Source) 紹介の部 82(6)**の部にてたとえば、(現行和文ウィキペディアに見る記述を再引用するところとして) “カール・エドワード・セーガン(Carl Edward Sagan, 1934年11月9日 — 1996年12月20日)は、アメリカの天文学者、作家、SF作家。元コーネル大学教授、同大学惑星研究所所長。NASAにおける惑星探査の指導者。惑星協会の設立に尽力。核戦争というものは地球規模の氷河期を引き起こすと指摘する「核の冬」や、遺伝子工学を用いて人間が居住可能になるよう他惑星の環境を変化させる「テラ・フォーミング」、ビッグバンから始まった宇宙の歴史を”1年という尺度”に置き換えた「宇宙カレンダー」などの持論で知られる…(中略)…闘病中にはセント・ジョン大聖堂、ガンジス川の川辺にてヒンドゥー教徒が、北アメリカのイスラム指導者が回復祈願の祈りを願った。病人である当人は懐疑主義者で宗教にも輪廻転生にも懐疑的であったが、このような多くの善意ある振る舞いに勇気づけられたと感謝の言葉を贈っている”(引用部はここまでとする)などといった事績まとめらようを紹介してきたとの「カリスマ」科学者) 』

については —そのことを否定しようがないところとして—

【トロイアを木製の馬で滅ぼしたオデュッセウス(アーガス;アルゴス勢の一人)の故郷を名前の由来にする地にて没し、そこで彼を記念する巨大なモニュメント([セーガン・プラネット・ウォーク]と呼ばれる一大モニュメント)を構築された向き】

ともなるわけである(いわばもってしてセーガンという偉人を讃えての(孔子廟ではないが)セーガン廟といったものがニューヨークはイサカの地にあるということであり、そこにいうイサカの地が【トロイアを滅ぼしたオデュッセウス】の故地(ギリシャのイサカ)より命名されているとのこととなっており、そして、オデュッセウスといえば、(セーガンがその小説『コンタクト』にて仁慈溢れる異星文明からのゲート装置を人間が受信した端緒となったと描写するアーガス計画と同じ名を冠する)アーガスとの犬を飼っていた存在として伝わっているとのことが「ある」わけである)。

以上表記のこらについてはここに至るまでの **1.** から **4.** まで振り返り述べてきたこととあわせて考えてみた際に「極めて悪辣なやりよう」の介在を感じさせるところでもある(「[虚偽][欺瞞]に浸かりきった糸繰り人形に導かれる人類には絶対に望ましい未来などありえはしない」とのこと嗜虐的に身内で確認しあって悦に浸るが如きやりようともとれる)。

上のようなかたちで小説『コンタクト』に登場するゲート装置は問題となる**隠喩的な式で【トロイアを滅した木製の馬】**と「執拗に」結びつけられていると指摘できるようになっている。

Contact (1985)

Project Argus (of human race) → Grand Central Station (of Black holes or Worm holes)

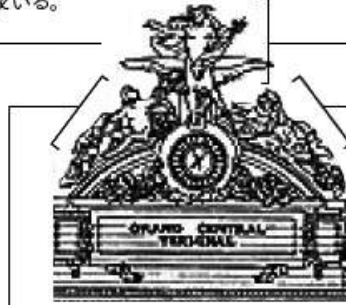
the side of the slaughtered giant → the side of the slaughterer

カール・セーガン小説『コンタクト』では「アーガス計画」の結果、宇宙にてブラックホール・ゲートないしワームホール・ゲートが集まるとのグランド・セントラル・ステーション行きが「人類の進歩に好ましいこと」として実現を見る。が、そこに見る「アーガス計画」の由来となった百眼巨人アーガスが現実世界にあってのグランド・セントラル・ステーションの代表的アイコンとなっているマーキュリーの同等物ヘルメスに振りこまれ殺された存在であるとの神話的・地理的な理解がなせるため、「殺される存在の名を冠した計画」が「殺す存在を象徴とする場」への導きをなしているとのことになる。すなわち、「反対話法」の臭いが如実に伴っている。

kill

Hermes Argeiphontes

ヘルメス・アルゲイボンテース、すなわち、アルゴス殺しのヘルメスとの通り名を有するヘルメスは、その名の由来するところとして振りこけさせるのかたちでアルゴスの目を封じ、同巨人を殺したと伝わっている存在である。



Hercules

Minerva

Mercury

Grand Central Station



ビッグ・アップルことマンハッタン、同地の世界的に群を抜いているプラットフォーム数を誇っているグランド・セントラル・ターミナル（別称グランド・セントラル・ステーション）には Glory of Commerce との名称を持つ、商業神マーキュリー（錬金術の神でありヘルメスの同等物たるローマ神）とワンセットになった巨大時計のオブジェが駅それ自体を象徴するものとして存在している。

Contact (1985)

Project Argus (of human race) → Grand Central Station (of Black holes or Worm holes)

the side of the slaughtered giant → the side of the slaughterer

Troy destroyers & Argus (→Argos)

Argos (Argives commanded by Agamemnon)

Odysseus' dog, Argus

殺された側の巨人の名の「アルゴス」はトロイア陥城をもたらしたギリシャ勢（ギリシャ勢も結局は洪水にて壊滅したと伝わる）ことについては本稿の「出典 (Source) 紹介の部44-4」にて詳述）と複合的に、かつ、色濃くも結びつく名詞である。「攻囲勢総称としてのアルゴス勢」・「トロイの木馬の考案者オデュッセウスの犬アルゴス」といったかたちにて、である。

Ithaca & goal of life

トロイア戦争後の艱難辛苦の船旅の目的は故郷であるイサカに辿り着くことにあった（オデュッセウスはイサカの王である）。

Contact (1985) → Carl Sagan

「アルゴス計画」と「アルゴス殺しのヘルメスとつながるグランド・セントラル・ステーション」を結びつけた（**& Sagan Planet Walk**）セーガンはイサカに埋葬され、同地イサカにはセーガンを記念しての規模大きくものモニュメントが存在する

SETI (1960s)

セーガンは1960年代からスタートを見たSETIプロジェクトで主要な役割を果たした男だった。そして、そのSETIにはフィクションに見るアルス計画と類似するサイクロプス計画が接合している。

Project Cyclops (abandoned)

Trojan Horse creator, Odysseus (the great-grandson of Hermes) blinded Cyclops Polyphemus .

large numbers of radio telescopes to search for Earth-like radio signals

Project Argus (fiction)

Hermes (→ Mercury) blinded Argus (put all of Argus's eyes asleep) .

(本題に立ち戻りもし)、ここまで振り返りしてきた式で [トロイアを滅した木製の馬] との繋がり合い —それは極めて遺憾なことに[911の事件が発生することを露骨に言及しているとの節ありとの先覚的言及]とも結びつく繋がり合いでもある) — を伴っていることについて[復習]なしもしてきた作品『コンタクト』では次のような粗筋が「ここ本段で問題視しているフランク・ティプラーの申しようにも関わるところとして」具現化を見ている。

オリンピックを中継するべくも用いられたナチスドイツのテレビ映像(正確に述べれば [ナチスの1936年のベルリン・オリンピックの映像])は宇宙に漏出したはじめての地球初のテレビ映像ともなったのだが、それが外宇宙からそっくりそのまま返送されてきて、の中に、

[ブラックホールないしワームホールを生成するためのマシンの設計図] が入れ込まれていた...

表記のこの典拠については本稿にての [出典\(Source\) 紹介の部 83](#) にあって細かくも原文引用なしながら紹介していることなのだが、何故、といったこと(小説作品『コンタクト』筋立て)を問題視していたのか。

それは以下のことが摘示できるようになっているからである。

ナチスのユダヤ人に対する迫害、そして、そのナチス・ドイツの征戦を勝利のうちに完遂させる可能性があったナチスドイツの原始爆弾開発可能性。そうした状況に [生存上の危惧] を感じたユダヤ人科学者らが大同団結して開始を促したとの言われようが(現代史にまつわるところで)なされているのがかのマンハッタン計画 —(本稿の先の段にて既述のように)原爆爆心地に対してグラウンド・ゼロとの言葉を生みだした計画でもある— となる。

そして、同マンハッタン計画に関しては史的事実の問題として

[後にLHCに進化するに至った円形加速器、その円形加速器の[真の発明者]とされる人間(レオ・シラード)がそもそもの計画のプロモーター(推進者)となっていた計画]

[公式上の円形加速器の発明者とされる人間(アーネスト・ローレンス)が初期段階にてとりまとめ役として重要な役割を果たしていた計画]

[公式上の円形加速器の発明者とされる人間(アーネスト・ローレンス)に計画に招聘された人間たるロバート・オッペンハイマーが[ブラックホール(とかなり後に呼ばれるようになった[縮退星]というもの)の研究で既に業績を挙げている科学者]として科学者陣を率いることになった計画]

[戦後影響力を増した同計画関係科学者によってブラックホール生成問題で矢面に立たされることになった研究機関らの主要なるもの(フェルミ国立研究所/ブルックヘブン国立研究所/CERN)らを設定させしめることになった計画]

となっているとのことが現実にある。

要するに、[ナチスによる迫害][ナチスによる原爆開発に対する危惧]が原因となってスタートを見たとのマンハッタン計画については [次のこと] が指摘できるようになっている。

「ブラックホール生成装置となるのでは、と遙か後の日にて判じられるに至った円形加速器の発明者「ら」(レオ・シラードとアーネスト・ローレンス)によってマンハッタン計画とは提案・推進されるに至った計画であり、といった同計画の指揮を後になすことになったのは(ブラックホールという言葉がなかった折ながらも

の)ブラックホール理論開拓者であるとの男(ロバート・オッペンハイマー)となっており、同計画によって戦後、後にブラックホール生成問題で主としてその挙動を問題視されるに至った機関ら(フェルミ国立研究所/ブルックヘブン国立研究所/CERNら)が誕生を見ている」



(The Hoover Cabinet)

アメリカの中央銀行、FRBの象徴。

(e.g. the passing of Smoot-Hawley Tariff Act)

上は1929年、ハーバート・フーヴァー政権成立直後に描かれた政治諷刺画としてウィキペディアに記載されている画よりの抜粋だが、同面に描かれる米国大統領としてのフーヴァーの無策あるいは百害あって一利無し政策がフーヴァー政権成立後に発生した世界大恐慌に起因する災厄を増大させるに役買ったとの言われようがよくなされる。

通貨供給量の経済への影響度合いを重要視するマネタリズムを信奉する学者らの申しようではFRBの不適切な金融政策が世界恐慌の長期化を招いたにとどまらず、否、むしろ、大恐慌を引き起こしたのはその引き締め政策であったのだとのことになっている。

worsen

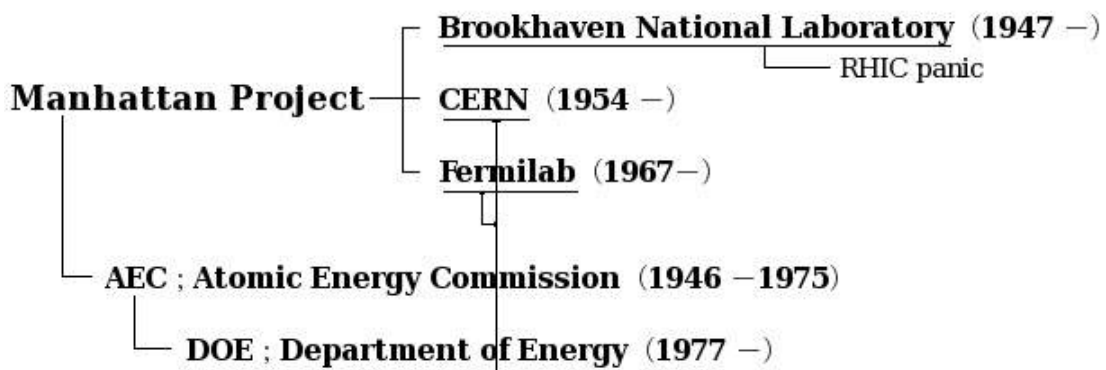
(or "cause"
— according to monetarists' view)



The Great Depression

The Rise of





Defendants of Black hole injunction cases in USA

マンハッタン計画と人脈的・組織的に接合する存在として [アメリカ原子力委員会] 転じての [合衆国エネルギー省] [ブルックヘブン国立加速器研究所] [CERN] [フェルミ国立加速器研究所] が産み落とされたとのことが史実としてあるわけであるが、それら [合衆国エネルギー省] [ブルックヘブン国立加速器研究所] [CERN] [フェルミ国立加速器研究所] がブラックホール生成問題で主として矢面に立たされた組織体となっている。アメリカにて同一人(ウォルター・ワグナー)によって提訴された一群の訴訟——ブラックホール生成可能性を顧慮しての指し止め要求訴訟; ブラックホール・インジャンクション・ケースとでも形容されるとの一群の訴訟——の被告となりもしているとの組織体となる。権利関係の存否を争う [法律上の争訟] というものにあつて [差し止め] を求めるだけのリスクがある / 差し止めを求めるだけの法源がある (適用可能法規が存在している、法的根拠がある) とのことまつわるワグナーの訴訟での主張内容が正しい正しくないとの問題は抜きにして、裁判の被告席に立つことを強いられただけの沿革・役割上の特性を (揃いも揃ってマンハッタン計画の直系の子らであるとの) それら機関が具備しているとのことにここでは着目している。

上にて枠内表記のことはつい先ぞの段にてもその内容を振り返ってきたとの部、本稿補説2の部に包摂されているところの長くもなつての出典紹介部、

[出典(Source)紹介の部 84 と振つての部]

で仔細に解説をなしているとのこととなる (主には上にて振り返りをなしているような観点から当然に問題となる小説『コンタクト』を世に出していたカリスマ科学者カール・セーガンが何故もってブラックホールやワームホールの類を生成するとの設定を付していたゲート装置——(小説版では)明示的には加速器の類とは小説原作それ自体では結びつけられていないとのゲート装置——を [ナチスのテレビ中継] などと結びつけていたのか (あるいは結びつけられ「させられていた」のか) との問題に関わるところとして、である)。

ここまでくれば、本稿内容をきちんと理解しているまじめな読み手におかれては

[加速器実験実施機関らおよび加速器実験そのものがナチスのユダヤ人迫害による反作用の結果、登場してきた結果であるとの史実]

を踏まえることで、フランク・ティプラーのオメガポイント理論との「繋がり合い」が

[ナチズムに対する否定]

との観点で観念されるとのこと、理解頂けることか、とは思う。

物理学者フランク・ティプラーはナチスのレイシズム(人種差別主義)を否定し、また、ナチスのレイシズムと密接不可分にある(と彼ティプラーがナチスドイツ政権下での哲学者ら主張内容を踏まえて主張する)永劫回帰思想を否定することが

[オメガポイントを実現する上で不可欠なることである]

とのことを述べている（長々と先立ってフランク・ティプラーの著作『不死の物理学』よりの引用をなしたとおりである）わけだが、[ナチズムへの断固とした否定]（を宗教民族の生存問題との絡みで危惧した一群の科学者ら）こそがマンハッタン計画始動をもたらし、そのマンハッタン計画のいわば子供といふべき存在が

[今日、ブラックホール生成問題と結びつけられるようになった加速器実験機関ら]

となっているとのことがある、そういうことを取りあえずここでは指摘しているわけである —— そして、といったことが共通項（ここでの話を読む限りは『こじつけましくも些事をあげつらっている』と誤解されるやもしれないにとらえる共通項でもある）として観念されるところには [地上に特異点とでも表すべきブラックホールの類を生成することを描いた奇怪な予言的作品である小説『コンタクト』の筋立て] との接合性もが観念される場所であると指摘してきたところでもある——。

以上ここまでの内容をもってして

第一。

オメガポイント理論にまつわってティプラーが明示している観点は「史的」側面で [現行の加速実験実施機関の「誕生」経緯] との [繋がり合い] が観念されるとのものとなっている。そして、その繋がり合いは本稿にて問題視してきた [予言的作品] との共通項が問題となる [繋がり合い] 「とも」になっている。

第二。

上記第一の点と一緒に考えてこそ意をなすこととしてティプラーのオメガポイントにまつわる言いように関しては [加速器実験機関と結びつけられてのブラックホールの人為生成問題] 「とも」(「奇怪な式で先覚的に」と受け取れるかたちで) 相通ずる側面が見受けられるようになっているとのことがある。

との点らにあつての第一の点について解説をなしたとして、である。次いで、— そこまで説明したうえでようやくここでの話が意をなすところとして —

第二。

上記第一の点と一緒に考えてこそ意をなすこととしてティプラーのオメガポイントにまつわる言いように関しては [加速器実験機関と結びつけられてのブラックホールの人為生成問題] 「とも」(「奇怪な式で先覚的に」と受け取れるかたちで) 相通ずる側面が見受けられるようになっているとのことがある。

とのことについての説明を講じることとする。

さて、(上に本稿従前内容を振り返りつつも表記したように)、

「マンハッタン計画とは「後の日に」ブラックホール生成装置とされるに至った円形加速器の発明者「ら」(レオ・シラードとアーネスト・ローレンス)によって提案・推進されるに至った計画であり、その指揮を後になすに至ったのは(ブラックホールという言葉がなかった折ながらも)ブラックホール理論開拓者であるとの男(ロバート・オープンハイマー)となっており、同マンハッタン計画によって戦後、後にブラックホール生成問題で主としてその挙動を問題視されるに至った機関ら(フェルミ国立研究所/ブルックヘブン国立研究所/CERNら)が誕生を見ている」

とのことがある中でマンハッタン計画始動背景とティプラーのオメガポイント理論が共に[ナチズムの断固たる否定]と結びついているとして、である。 ティプラーのオメガポイント理論それ自体が

[マンハッタン計画にて生まれ落ちた加速実験機関らがそれを具現化しようと近年考えられるに至ったブラックホールの人為生成]

と濃密に関わっている —「先覚的に関わっている」とも述べられるかたちで関わっている— のことがここにて問題視している第二のポイントである。

その点に関しては、ティプラーのオメガポイント理論が [ブラックホールとも結びつく特異点] (というものの) と結びついているとのことについてはまずもって次のような引用をなしたい。

(直下、職業的懐疑論者マイケル・シャーマーの手になる著作 Why People Believe Weird Things (邦題)『なぜ人はニセ科学を信じるのか?』にあつての第 16 章 [ティプラー博士、パングロス博士に会う]の節、417 ページよりの引用をなすとして)

オメガポイントに到達した瞬間に、生命はその宇宙だけではなく、論理的に存在が可能なすべての宇宙において、物質と力の全コントロールを手中にしてしまう。生命は、論理的に存在が可能と思われるすべての宇宙の隅々にまでひろがり、そして論理的に認識することが可能であるすべての断片も含めて、無限の情報をたくわえることになる。そこが行き着く果てである」(六六七ページ)。このオメガポイント、あるいはティプラーが時間と空間の「特異点」と呼ぶものは、伝統的な宗教で言うところの「来世」にあたる。特異点はまた、宇宙論者がビッグバンの理論的原点やブラックホールの中心点、そして宇宙の大収縮(ビッグクランチ)の限界終端点を示す際にも用いられる用語でもある。宇宙のすべてのもの、すべての人間がこの最終点に収束するといふのだ。

(引用部はここまでとする)

(続けて、直下、職業的懐疑論者マイケル・シャーマーの手になる著作 Why People Believe Weird Things (邦題)『なぜ人はニセ科学を信じるのか?』にあつての第 16 章 [ティプラー博士、パングロス博士に会う]の節、423 ページから 424 ページよりの引用をなすとして)

フランク・ティプラーは、謙虚さではなく、かぎりない楽観主義をもって、偉大なる未知と向かい合っている。自著をひと言で要約してくれるようにたのむと、「合理性の増大に限界はない。進化は永遠につづく。そして生命は決して消えることがない」と答えてくれた。ではその根拠は?ティプラーの入り組んだ主張は三つの点に要約できるだろう。(1)この宇宙のはるか未来では、人類——ティプラーによれば、宇宙で唯一の生命体——は地球をあとにし、天の川銀河のほかの星域だけでなく、すべての銀河に住み着いている。でなければ、太陽が膨張して地球をのみこんでしまい、燃え殻にする時点で命運はつきる。それゆえ、選択の余地はないのである。(2)もし科学と技術が現状の率で進歩しつづければ(一九四〇年代にはひと部屋分もあったコンピューターが、今日ではラップトップ・サイズとなっていることを考えてみよう)、一〇〇〇年後、あるいはおそくとも一〇万年後には銀河系や宇宙全域への植民が可能になるだけでなく、スーパーメモリを搭載したスーパーコンピュータやスーパーヴァーチャル・リアリティが、従来の生物学的な生命(生命と文化はまさに情報システム——遺伝子とミーム——として、スーパーコンピュータの中で再生される)に置きかわっている。(3)宇宙が最終的に崩壊しても、人類とスーパーコンピュータは、その崩壊によって生じるエネルギーを利用して、過去に存在したすべての人類を(これは有限な数値だから、スーパーコンピュータに積まれているメモリで、十分にこの偉業を達成できる)を再創造する。このスーパーコンピュータは事実上、全知全能であ

り、それゆえ神のごとき存在となる。そしてその「神」によってわれわれはヴァーチャル・リアリティに再創造されるので、全人類は事実上不死となる。

(引用部はここまでとする)

(続けて、直下、The Physics of Immortality : Modern Cosmology, God and the Resurrection of the Dead『不死の物理学:現代の宇宙観、神、そして死者の復活』にあつてのオメガポイント理論登場経緯にまつわる端的な記載部(III. Progress Against the Eternal Return and the Heat Death 第三章『永劫回帰と(宇宙の)熱的死に抗つての進歩』にての The Triumph of Progress「進歩の勝利」(ないしトリアム・勝利の凱歌と訳すべきか)の節)よりの「再度の」引用をなすとして)

But I do know the answer to Dyson's question: it's not possible. More precisely, I shall prove in the Appendix for Scientists that if a closed universe starts to collapse, if gravity is always attractive, and if determinism holds, **then every part of the entire universe, without exception, collapses in finite proper time to zero volume while the temperature goes to infinity.** There is no way life could stop this collapse.

[...]

But stopping the collapse is the last thing life would want to do. **It is the very collapse of the universe itself which permits life to continue forever.**

(上に対する拙訳として)

「しかし、私はダイソンの呈示している疑問に対しての回答を知っている。「それはありえるような話ではない」。より端的に述べれば、[閉じた宇宙]がもし崩壊を始めたのなら、そして、重力は常に引き寄せの力を呈しているのであれば、そして、決定論的観点が当てはまるのなら、**例外もなく全宇宙の全パートが温度が無限に近付くなかで無限にゼロサイズに近しくも有限時間の中で崩壊していくことを示すことができるのであり**、私は科学者らのための付録の部にてそのことを呈示するつもりである。生命がこの崩壊を食い止める方法は無い。

...(中略)...

が、崩壊を食い止めるとのことは生命がおよそ望むべくもないとのことである。**その崩壊こそが生命をして永劫に生きることを許さしめるものとなるからである**(訳注として:ティプラーはダイソンの呈示する[開かれた宇宙]に代替する[閉じた宇宙]にまつわる主張の間隙を突くとかたちで[無限に収縮していく閉じた宇宙]にてその収縮過程そのものをコンピューターの計算リソースの飛躍的向上に利用なさせ、神なる領域、世界そのものの機械的再生を実現する縁(よすが)とするのだと強調しているのである)」

(訳を付しての引用部はここまでとする)

以上の引用部(一部、再度の引用を含む)にあつては大要、次のことと同文のことが記されている。

フランク・ティプラーの述べる

[オメガポイント]

とは

「[閉じた宇宙モデル]にて宇宙が最終的に[無限小のポイント]へと崩壊していく(**collapses in finite proper time to zero volume**)との中で —宇宙が崩壊していく[時間と空間の特異点]が現出する中で— 崩壊の機序をそのまま利用して

[全知全能なる機械 (スーパーコンピュータ)]

が人類を機械の中に再生、そこでは事実上、不死であるとの状況が実現す

る」

とのことを指す。

同じくものことはより端的に述べれば、次のことと同文であるとのことでもある。

[閉じた宇宙論]モデルにあつて[ビッグバン]で産まれた宇宙が[ビッグクランチ](大収縮)でゼロのサイズに収縮していく中でその収縮プロセスをコンピューターの計算リソース向上に活かす

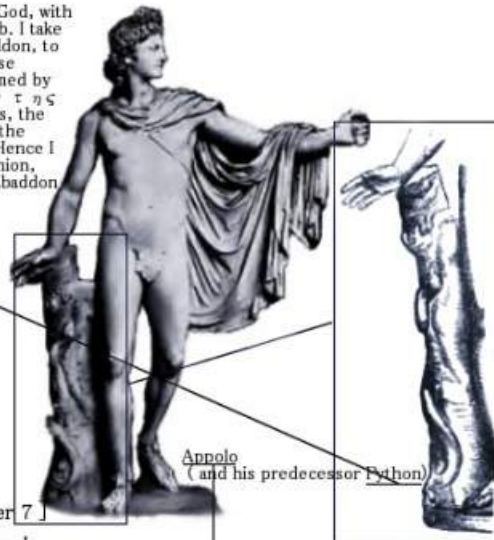
につき、一般論の話として「も」述べられることだが、ティプラー本人の弁を引けば、ビッグクランチ(宇宙の崩壊/ゼロへの収縮)は以下、出典紹介部にて示すが如きこととされている。

出典 (Source) 紹介の部 115(4)

SOURCE 115(4)

"Abaddon, to have been the name of the same Ophite God, with whose worship the world had been so long infected. Ob. I take Abaddon, or, as it is mentioned in the Revelations, Abaddon, to have been the name of the same Ophite God, with whose worship the world had been so long infected. He is termed by the Evangelist Αβαδδων, τον Αγγελον της Αβυσσου, the angel of the bottomless pit; that is, the prince of darkness. In another place he is described as the dragon, that old serpent, which is the devil, and Satan. Hence I think, that the learned Heinsius is very right in the opinion, which he has given upon this passage; when he makes Abaddon the same as the serpent Pytho."

Jacob Bryant,
A New System or Analysis of Ancient Mythology
Vol. II. (1807)
OB, OUB, PYTHO, SIVE DE OPHIOLATRIA



Apollo
(and his predecessor Pytho)

the September 11 attacks
(coordinates) 38.87099° N
77.05596° W
↑
setting American Airlines Flight 77
(Boeing 7x7 Series)

recall
'ugly' Book of Revelation filled with [number 7]
7 stars, 7 lampstands, 7 churches, 7 seals,
lamb having 7 horns, 7 angels, 7 trumpets,
7 thunders, 7 visions, 7 bowls, 7 plagues,
7 words, 7 headed dragon

(Greek Αποκαλυψις Ιωαννου, Apocalypsis Ioannou)

means 'un-covering'

[bottomless pit]

They had over them a king, an angel of the abyss, whose name in Hebrew is Abaddon, but in the Greek he is called Apollyon. (Revelation 9:11)

Collapse of 1 WTC - 7 WTC
and Boeing 7x7 Series

7-7 London bombings (2005)
(referred as 7/7)

(in Satan's voyage through abyss) → 'Original Sin' for religious people
The secrets of the hoary deep; a dark illimitable ocean, without bound, / Without dimension, where length,
breadth, and height, / And time, and place, are lost; where eldest Night And Chaos, ancestors of Nature,
hold Eternal anarchy, amidst the noise Of endless war, and by confusion stand.

John Milton
Paradise Lost (1667)
BOOK II, lines 890-895

(peculiar) BH like properties
(seen in 17th century)

ここ出典(Source)紹介の部 115(4)にあつては

[物理学者フランク・ティプラーが「特異点」概念としてのビッグクランチ(宇宙の崩壊/ゼロへの収縮)を「オメガ点実現の条件」としていかように論じているのか]

[物理学者フランク・ティプラーが「オメガ点実現の条件」として論じているビッグクランチの「特異点」についてはブラックホールの「特異点」との親和性が高いとの指摘がなせる]

とのことらについて紹介することとする。

(直下、The Physics of Immortality : Modern Cosmology, God and the Resurrection of the Dead『不死の物理学:現代の宇宙観、神、そして死者の復活』にてのオメガポイント理論登場経緯にまつわる端的な記載部(III. Progress Against the Eternal Return and the Heat Death 第三章『永劫回帰と(宇宙の)熱的死に抗つての進歩』にての PROBABILISTIC MARKOV RECURRENCE[ありうべきマルコフ連鎖における再帰的プロセスについて]の節よりの引用をなすとして)

If the material sources of gravity are such as to make gravity always attractive, then **such a universe starts from an initial “Big Bang” singularity where time begins, expands to a maximum size, and then recontracts to a final “Big Crunch” singularity where time comes to an end. As the universe approaches the final singularity, the volume goes to zero. The spatial part of the phase space is certainly bounded and finite; not only is it bounded and finite, it goes to zero.**

「仮に重力の物的なる源が重力をして常に引き寄せの性質を帯びさせるものであるのならば、(付記として:数多ありうるとの多宇宙解釈の中にあつての) そうした特性をもつ宇宙は時間がはじまる原初のビッグバンの特異点から最大サイズへと拡大をしていき、そして、そこから時が終焉を迎える最後のビッグクランチの特異点へと再編されていく。宇宙が最後の特異点に近づくにつれて、そのサイズはゼロに近付いていく。この局面の空間のありよう(特性)は確かに制限され有限なるものであり、のみならず、ゼロへと向かっている」

(訳を付しての引用部はここまでとする)

直上にて引用なしている、

[ビッグクランチ (宇宙論にてビッグバンで始まった宇宙が崩壊を迎える巨視的収縮のポイント)における最後の特異点(final “Big Crunch” singularity)についてのティプラー申しよう]

はティプラーの全般としての主張の中にあつての

[閉じ行く世界にてブラックホールの特異点と似通つたものを利用して神と等しきコンピューターを構築するとの物言い]

に通ずるところのものとなっている (つい先立って職業的懐疑論者マイケル・シャーマーの手になる著作 Why People Believe Weird Things (邦題)『なぜ人はニセ科学を信じるのか?』にあつての第16章 [ティプラー博士、パングロス博士に会う]の節、424 ページより “ (3)宇宙が最終的に崩壊しても、人類とスーパーコンピュータは、その崩壊によって生じるエネルギーを利用して、過去に存在したすべての人類を(これは有限な数値だから、スーパーコンピュータに積まれているメモリで、充分にこの偉業を達成できる)を再創造する。このスーパーコンピュータは事実上、全知全能であり、それゆえ神のごとき存在となる。そしてその「神」によってわれわれはヴァーチャル・リアリティに再創造されるので、全人類

は事実上不死となる”との記述を引用した通りである)。

さて、一般論の問題として

[ビッグクランチのその時のポイント、特異点 —空間がゼロに近いところに圧縮されていき、
数的な枠組みで際立っての特異性を呈するとの点— はブラックホールの特異点 —無限
小に近付いていく空間へ無限大に近い質量(重さ)が落ち込んでいくポイント— と近し
い]

との言われようがなされてもいる。

その点については目立ってのところから引用するが、英文 Wikipedia [Big Crunch] 項目の冒頭部
からして次のように記載されているところとなる。

(直下、英文 Wikipedia[Big Crunch]項目冒頭部にての現行記載内容よりの引用をなす
として)

In physical cosmology, the Big Crunch is one possible scenario for the ultimate
fate of the universe, in which **the metric expansion of space eventually
reverses and the universe recollapses, ultimately ending as a black hole
singularity or causing a reformation of the universe starting with another
big bang.**

(上に対する訳として)

「物理的宇宙論にあつて、ビッグクランチとは宇宙の究極的運命に対するありう
べきシナリオのひとつであり、それは宇宙の測量上の拡大の式が結果的に逆
転を呈し、宇宙は再度「破綻」を見、究極的には「ブラックホールの特異点」と
しての終焉を迎えるか、あるいは「別のビッグバンのスタートに見る宇宙の再建」
の発生がもたらされるか、との状況に至るとのものである」

(訳を付しての引用部はここまでとする)

(**出典(Source)紹介の部 115(4)**はここまでとする)

ここまでの話の背景にあることまでを理解させている向きは次のように考えるかもしれない。

『ティプラーの考えるオメガポイントがブラックホールの特異点と結びつくとして、だが、それは
宇宙の崩壊とのマクロのスケールの状況に当てはまるものであろう。地球程度のものがブラック
ホール化して... 云々といった状況とは異質なるものなのではないか?』

だからこそ述べる。

[ティプラーのオメガポイント(万能なる機械の到来の瞬間)にまつわる理論には「人為的ブラッ
クホール生成」の問題「とも」接合するとの側面が見てとれる]

とのことがある (：ティプラー著作『不死の物理学』が世に出た 1994 年の時点では人間の手によって
ブラックホールの人為生成が可能とは目されていなかった(本稿前半部を参照のこと)とのこともあつ
てもかもしれないが、フランク・ティプラー自身は「オメガポイントが人的ブラックホール生成と結びつく」
などとのことには露も触れていないのだが、とにかくも、そうも述べられるようになっている)。

については長大なる本稿の冒頭部エピグラフの部(冒頭にてのコンセプト明示のための引用の部)

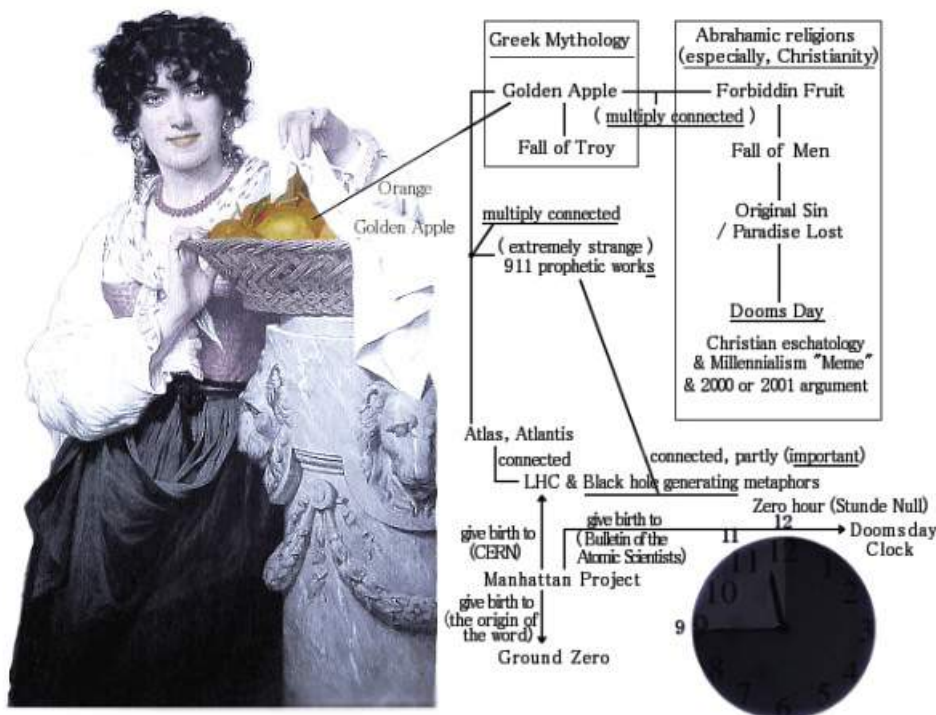
からしてその文言を引用してもいるとの著作、

The Singularity Is Near: When Humans Transcend Biology (原著は2005年刊、日本語訳書2007年刊)

との著作 — (原題ザ・シンギュラリティ・イズ・ニア... を訳せば『特異点の時は近い. 人類が生体組織を超越するとき』とあいなるとの著作なのだが、(現)NHK 出版より出されているとの訳書邦題は『ポストヒューマン誕生 コンピューターが人間の知性を越えるとき』となっているとの著作) — の記述などを下に引いておく。

出典(Source)紹介の部 115(5)

SOURCE 115(5)



ここ出典(Source)紹介の部 115(5)にあつては

[(最前の出典紹介部にて問題視した)ティプラーのオメガポイント(万能なる機械の到来の瞬間)にまつわる言いようには[人為的ブラックホール生成]の問題「とも」接合するとの側面が見てとれる]

とのことに通ずる特定書籍よりの引用をなすこととする。

(直下、オンライン上より原文確認もなせるところの The Singularity Is Near: When Humans Transcend Biology 『特異点の時は近い.人類が生体組織を超越するとき』(邦題は原著原題とかなり語感異なるところの『ポストヒューマン誕生 コンピューターが人間の知性を越えるとき』) にあつての CHAPTER SIX The Impact ... (第六章[まさにその衝撃]) よりの引用をなすとして)

We can fashion a conceptual bridge between Susskind's and Smolin's idea of black holes being the "utility function" (the property being optimized in an evolutionary process) of each universe in the multiverse and the conception of intelligence as the utility function that I share with Gardner. As I discussed in chapter 3, the computational power of a computer is a function of its mass and its computational efficiency. Recall that a rock has significant mass but extremely low computational efficiency (that is, virtually all of the transactions of its particles are effectively random). Most of the particle interactions in a human are random also, but on a logarithmic scale humans are roughly halfway between a rock and the ultimate small computer.

A computer in the range of the ultimate computer has a very high computational efficiency. **Once we achieve an optimal computational efficiency, the only way to increase the computational power of a computer would be to increase its mass. If we increase the mass enough, its gravitational force becomes strong enough to cause it to collapse into a black hole. So a black hole can be regarded as the ultimate computer.** Of course, not any black hole will do. Most black holes, like most rocks, are performing lots of random transactions but no useful computation. But a well-organized black hole would be the most powerful conceivable computer in terms of cps per liter.

[...]

In 1997 Hawking and fellow physicist Kip Thorne (the wormhole scientist) made a bet with California Institute of Technology's John Preskill. Hawking and Thorne maintained that the information that entered a black hole was lost, and any computation that might occur inside the black hole, useful or otherwise, could never be transmitted outside of it, whereas Preskill maintained that the information could be recovered. The loser was to give the winner some useful information in the form of an encyclopedia. In the intervening years the consensus in the physics community steadily moved away from Hawking, and on July 21, 2004, Hawking admitted defeat and acknowledged that **Preskill had been correct after all:** that information sent into a black hole is not lost. It could be transformed inside the black hole and then transmitted outside it. According to this understanding, what happens is that the particle that flies away from the black hole remains quantum entangled with its antiparticle that disappeared into the black hole. If that antiparticle inside the black hole becomes involved in a useful computation, then these results will be encoded in the state of its tangled partner particle outside of the black hole.

(上の原著表記に対する訳が記されてのハードカバー版『ポストヒューマン誕生 コンピューターが人間の知性を越えるとき』(現 NHK 出版刊行の初期版) にての第六章[衝撃.....]478 ページから 479 ページより中略なしつつもの引用をなすとし)

サスキンドとスモーリンの、ブラックホールはマルチバースの中の個々の宇宙にとって効用関数(この場合、ある進化の過程で最大限に活用される特性)であるとする考えと、私とガードナーの、知能を効用関数と見なす考えの間には概念上の橋を架けることができる。第三章で述べたように、コンピューターの能力はその質量とコンピューティング効率によって測られる。岩はかなりの質量であるがコンピューティングの効率はきわめて低いということを考えてみよう(この

場合、コンピューティング効率とは内包する粒子の処理を指し、実質的にそれはランダムと言えり。人間も、その粒子の相互関係の大半はランダムだが、対数目盛りで計ったコンピューティング効率では、岩と究極の小型コンピュータのおよそ中間に位置する。究極のコンピュータになるとそのコンピューティング効率はひじょうに高い。いったんコンピューティング効率が最適化されれば、コンピュータの能力を増す唯一の方法は、その質量を増やすこととなる。質量を十分に増やせば、その重量はブラックホールへの崩壊を引き起こすほど強力になる。それゆえ、ブラックホールは究極のコンピュータと見なすことができるのだ。

もちろん、どんなブラックホールもそうだというわけではない。たいていのブラックホールは、たいていの岩と同じく、多くのランダムな処理を起こっているが、コンピュータとしては役立っていない。しかし、よく組織されたブラックホールは容積あたりのCPSという点では、もつとも強力に思考できるコンピュータとなる。

…(中略)…

一九九七年、ホーキングと仲間の物理学者キップ・ソーン(ワームホールを研究した科学者)は、カリフォルニア工科大学のジョン・プレスキルとある賭けをした。ホーキングとソーンは、ブラックホールに落ちた情報は失われると主張し、ブラックホールの中で起こったいかなるコンピューティングも、それが有用であるなしにかかわらず、外側へ送られることはありえないとしたが、対するプレスキルは、情報は取り出せると主張した。敗者は勝者に、役に立つ情報を辞典という形で贈ることにした。

それから数年の間に物理学界のコンセンサスはじわじわとホーキングから離れていき、そして二〇〇四年七月二日、ホーキングは敗北を認め、結局はプレスキルが正しかったと言明した。

(原著および訳書表記を引いての引用部はここまでとする 一※一)

(※上の引用部に対する注記として1:

まづもって述べておくが、レイ・カーツワイル 一米国を代表する著名な発明家にして起業家でOCR装置やスキャナーなどの発明をなしているうえに[技術的特異点]にまつわる持論にて知られる向き一 の著作 The Singularity Is Near: When Humans Transcend Biology (直訳すれば『特異点の時は近い。人類が生体組織を超越するとき』となるとの書)は

[ブラックホールの特異点(グラビティショナル・シンギュラリティ)が近々実現する]

とのことを主張している書籍など「ではない」(引用部にての表記を見るかぎりそうも受け取れるようになっているのだが)。

同著『シンギュラリティ・イズ・ニア』の主たる主張とは[技術的特異点(Technological singularity)]、すなわち、

[統計としてのこれまでのデータから判じられるところのコンピューティング技術の飛躍的向上 一(収穫逡増を指数関数的なかたちに引き直しての)収穫加速との式での飛躍的向上一 を受けてこれより実現が予測されるコンピューターがあたかも知能を持つが如くの「自らを」再生産・再設計なしはじめるポイント(従前の基準ではコンピューターの行く末について予測ができなくもなる特異なる点)]

が具現化するに至り、人間のありよう・機械のありようが本質的に変化をきたすようになるとのことを主張しているとのものである。

そうもした同著にあってレイ・カーツワイル（マサチューセッツ工科大学在学時代に起業し多くの発明を世に出してきた天才的起業家として知られる向き）は

[コンピュータが究極的進化を迎える一つの可能性]

としてブラックホールを用いてのコンピューティングのことに言及している、そう、「オメガポイントの実現といったこととは別文脈にての」技術予測の問題として言及しているのである（：他にもカーツワイルは「部分的過去改変機序」を用いたコンピューティング（トッド・ブルンとの学究が研究しているとのことであるクロズド・タイム・サークルにて因果律破壊をもたらさない式での過去遡行作用を利用したコンピューティング）らにさえ論文記述に依拠して言及している — カーツワイルのそうもした指摘を非常に興味深いと感じて本稿筆者も思わずそれ絡みの論文を精査したとのことがあるため、ある程度はそれにまつわっての顧慮もなせる（つもりではある）— ）。

であるから、話としては

[Technological singularity [技術的特異点] が Gravitational singularity [重力の特異点] という別概念 — 従前の法則が当てはまらなくなる点 (特異なる点) との概念が共有されての中での別概念 — が重なっているところについての言及]

がなされているとの言いようもなせるわけだが、とにかくも、技術的特異点概念についての誤解をなさないでいただきたいものではある ———くどくも補うべくも申し添えれば、[技術的特異点を実現するためのひとつの手段が重力の特異点にあるかもしれない] というのがここでの引用部の性質である。また、さらに言えば、そうもした指摘がなされての技術的特異点の招来状況が機械の神たるオメガ到来の前提条件ともなっているため、オメガ実現のための条件（[重力の特異点の活用] と [技術的特異点の招来]）が重なっているとの申しようもなせもすること、把握なしにいただければ、とも思う）———)

(※上の引用部に対する注記として2：

直上呈示の引用部表記にみとめられる

[サスキンドとスモーリンの、ブラックホールはマルチバースの中の個々の宇宙にとって効用関数(ある進化の過程で最大限に活用される特性)であるとする考え]

とはリー・スモーリン(権威筋の著名物理学者)とレオナルド・サスキンド(権威筋の著名物理学者/同サスキンド、本稿でのせんだっての段でその衆を瞞着する(欺く)が如く言行を強くも問題視してきたとの向きともなる)らによるこれより引用なす書籍に見てとれる観点ともなる)

(次いでもってして上の卓抜した発明家として知られるレイ・カーツワイルの著述よりの引用部にも関わるところとして、直下、職業的懐疑論者マイケル・シャーマーの手になる著作 Why People Believe Weird Things (邦題)『なぜ人はニセ科学を信じるのか?』にあっての第16章[ティプラー博士、パングロス博士に会う]の節、419 ページから420 ページよりの引用をなすとして)

[運の問題]。われわれの住む宇宙は、それぞれにわずかずつ物理的法則を擁した、数多くの泡宇宙(それらすべてが多元的宇宙(マルチバース)となって

まとまっている)のうちのひとつにすぎないかもしれない。近年リー・スモリン(一九九二)とアンドレイ・リンド(一九九一)によって提唱された、まだまだ議論の余地が残っているこの理論によれば、ブラックホールが崩壊するたびに、それはわれわれの宇宙をつくりだした原材料にも等しい特異点へと崩壊していく。しかし、新生児とも言える宇宙をつくりだすそれぞれのブラックホールの崩壊は、その内部の物理法則をわずかながら変えてしまう。おそらくこれまで数千億というブラックホールが崩壊してきているから、少しずつ異なった物理法則をもつ泡宇宙も数千億個存在するはずだ。われわれの宇宙のような物理法則をもった泡宇宙だけが、われわれのようなタイプの生命をうみだすことができるのだ。たまたまそういう泡宇宙のひとつにうまれることになった生命は、どうしても自分たちの泡宇宙こそ唯一の宇宙であり、だからこそ独特で特別な形態をしているのだと考えてしまう。それは運のようなものなのだ——誰が勝つとは決して言えないが、かならず誰かが勝つ!

(引用部はここまでとする)

上はいくつもの並行宇宙の存在を考え、かつ、それらにおける生物存在の可能性(〔人間原理〕と呼ばれる観念に強くも関わる場所である)を考えもする中でブラックホールの役割を〔進化に有用であるとの効用関数〕との観点で論じようとの発想法である。

注記もあわせての引用部はここまでとして、直上までの

The Singularity Is Near: When Humans Transcend Biology (邦題『ポストヒューマン誕生 コンピューターが人間の知性を越えるとき』)

からの引用部でもってして何故にもってして

〔ティプラーのオメガポイント(万能なる機械の到来の瞬間)にまつわる理論には〔人為的ブラックホール生成〕の問題「とも」接合するとの側面が見てとれる〕

と述べられるのか、ご理解いただいたことかとは思う。

すなわち、人為的にブラックホールが生成され、それが有効活用されれば、〔ビッグランチの特異点〕ならぬそれと似通ったものとされる〔ブラックホールの特異点〕にあっても〔究極のコンピューター〕が実現できるのではないかと解されるようになっているとのことがあるということである。

(出典(Source)紹介の部 115(5)は以上とする)

ここまでで問題として指摘せんとしているところが奈辺にあるのか、まじめな読み手にはおおよそにご理解いただけているものか、とは思うのだが、まとめれば、問題となるところが次のようなかたちで呈示できるように「なってしまう」とのことがある。

フランク・ティプラーがオメガポイント理論について論じた時点は【**加速器実験によるブラックホールの人為生成**】が観念されて「いなかった」折柄となる(再言するが、LHCによるブラックホール生成が —プランク・エネルギーに達せずものこととして— 現実視されるようになったのはここ10数年であるとのことを典拠に基づいて解説してきたのが本稿である —本稿の前半部、**出典(Source)紹介の部 21**以降の複数典拠紹介部を包摂する

箇所にて注力して示しているようにブラックホールの人為生成はそれに必要とされる極小領域へのプランクエネルギー投入がほぼ不可能とされてきた関係上、人間業では無理、太陽系がすっぽり収まるレベルの途方もない規模の加速器を建造することなしには不可能であると考えられていた。それが本稿にての前半部にて解説しているようにADDモデルという理論が90年代末葉より登場しだした、すなわち、兆単位の電子ボルト、マクロでは蚊が飛ぶに等しいレベルの運動エネルギーを蚊の一兆分の1のスペースに詰め込めば、ブラックホールが生成できる可能性がある、そして、それはこれよりのLHCで可能たりえるとの(21世紀初頭より具現化しだした)科学界論調のそもそもの発端・契機たるものが90年代末葉(1998年)から出てきたとのことがある。 に対して、フランク・ティプラーがオメガポイントの問題を一意専心して論じもして物議を醸すことになった The Physics of Immortality: Modern Cosmology, God and the Resurrection of the Dead との著作(現時未邦訳)を世に出した時点は問題となる理論が提唱されるのに遡ること数年前の「1994年」である)。

といったことがある、ティプラーのオメガポイント理論の主唱はブラックホール人為生成の可能性が(「予想外に...」と学界筋学者らに言及されているかたちで)取り沙汰されることになったのに先行しているとのことがある中で、同ティプラーのオメガポイント理論には

[ブラックホール(重力の特異点)を利用するのコンピューティングの問題]

もが目的に通ずるところで関わっていると解されるようになっている(直上にて解説の通りである)。

そして、ティプラーは [オメガポイントの実現] にあつて [ナチスのドグマの否定] (そして、ナチスドグマと結びつく永劫回帰思想の否定) をとにかくもって自著の中で強調・重視している。

他面、[ナチスのドグマの否定]の力学がマンハッタン計画を推進なさしめ、そこから、現代の加速器実験機関らが産み出されることになった、すなわち、[ティプラーが『不死の物理学』(1994年刊)にてオメガポイントの理論を広くも唱道することになったとのその後になってブラックホール人為生成をなすと考えられるようになった実験機関ら]が産み出されることになったとのことがある。

そうもした順序逆転しての繋がり合いが関連されるわけだが、といったことらがただの[偶然]で済むのか?との問題については悪い意味で[偶然]の可能性について消極的にならざるをえないところがある。

その点については次のことがあるとのことをつい最前の段にて解説してきたところではある。

⇒

高次存在へのゲートとしてのブラックホールあるいはワームホール人為生成を80年代に言及している作品としてカール・セーガンの手になる小説『コンタクト』が存在している(映画版DVDコンテンツに付されたトピックはともかくも小説『コンタクト』原作それ自体にはブラックホールあるいはワームホールの人為生成をなす装置として加速器のことを「明示的に」持ち出しているとの側面は伴っていない。小説『コンタクト』は[正五角形を12枚重ねての人類には「機序不明なる」正十二面体の装置]をブラックホールあるいはワームホールのゲート装置として登場させている作品となる)。そちら小説『コンタクト』にあつてはブラックホールないしワームホールによるゲート装置にまつわるところで

[911の事件の事前言及事物と接点がある作品]

としての側面が具現化を見ており、またもってして同『コンタクト』は(ブラックホールを生成すると考えられるに至った)LHC実験とも

[命名規則 —ATLANTIS やトロイア崩壊、そして、黄金の林檎といったものを介

して直接的ないし間接的に、多重的に通ずる命名規則— および概念(ブラックホールを生成するとの概念)上のつながり]

が見てとれるようになっていて作品となっている(つい上の段で長くもなつての本稿補説2の部の長くもなつての振り返りをなしたとおりである)。

そして、『コンタクト』にあって「も」ゲート装置が[ナチスのやりよう]と結びつけられて人類にもたらされたとの描写がなされているとのことがある。

以上、概括したことに加えもして、である。「1994年の」フランク・ティプラーやりようについては

[LHCや(結局頓挫したLHCに匹敵、あるいは、それ以上のものとなりえもした)【巨大加速器SSC計画】の必要性を—ここが重要なのだが—「ブラックホール人為生成とは全く異なる観点で」オメガポイントに向けての道筋にあって有用有為なりしものと述べている]

とのことまで「も」が問題になる(それであるからこそのここでのティプラー言動の取り上げでもある)。

同じくものことについてはまずもって下の出典紹介部を参照されたい。

出典(Source)紹介の部 116

SOURCE 116

(coordinates) 38.87099° N
 77.05596° W

↑
setting American Airlines Flight 77
(Boeing 7x7 Series)

'ugly' **Book of Revelation** filled with [number 7]
7 stars, 7 lampstands, 7 churches, 7 seals,
lamb having 7 horns, 7 angels, 7 trumpets,
7 thunders, 7 visions, 7 bowls, 7 plagues,
7 words, 7 headed dragon

(Greek Ἀποκάλυψις Ἰωάννου, **Apocalypsis Ioannou**)
means 'un-covering'

11 12
9
Doomsday Clock
(Last) Judgement Day
for religious people

Collapse of 1 WTC - 7 WTC
and Boeing 7x7 Series

7-7 London bombings (2005)

ここ出典(Source)紹介の部 116 にあつては

[フランク・ティプラーが LHC や(結局頓挫した LHC に匹敵、あるいは、それ以上のものとなりえもした)巨大加速器 SSC 計画の必要性を「ブラックホール人為生成とは全く異なる観点で」オメガポイントに向けての道筋にあつて有用有為なりしものと述べている]

このことの文献的典拠を挙げておくこととする。

(直下、The Physics of Immortality : Modern Cosmology, God and the Resurrection of the Dead『不死の物理学:現代の宇宙観、神、そして死者の復活』にあつての XIII. Conclusion: Theology as a Branch of Physics 第八章[結論として:物理学一分野としての神学]にての The Significance of the Omega Point Theory for the Average Person[標準的な向きにとつてのオメガポイント理論の特異点]の節よりの引用をなすとして)

Sciences are sciences because they can be tested experimentally. I argued in Chapter IV that, **to really test the Omega Point Theory, we will need the Tevatron upgrade and either the SSC — the Texas Supercollider — or the European LHC.** The latter two machines are quite expensive. But perhaps it would be worth several billion dollars to establish that God exists, and that one day we will all be resurrected to live forever with Him/Her.

[...]

The SSC and the LHC are often compared to the cathedrals of the Middle Ages and to the pyramids of ancient Egypt. The cathedrals were built to help the medieval Europeans find God and the Egyptian kings find their immortality. **If I am right, the SSC and the LHC could do both for all humanity.**

The Omega Point Theory says the Higgs will be discovered by 2000 in the Large Hadron Collider (LHC). If the Super-Conducting Supercollider (SSC) had been completed in 2002 as was scheduled, it also would have found the Higgs by 2003.

All of these dates depend on the instruments being completed as originally scheduled. Unfortunately, completion depends not on physics or engineering but on politics. As I write this, there is even some doubt as to whether the Tevatron main injector upgrade will be funded. The cost of the upgrade is only about \$200 million, which is tiny by the standards of the LHC (\$2 billion) and the SSC (\$10 billion), but in these days of huge budget deficits . . .

(補いもしての拙訳として)

「科学が科学たる所以は実験によって検証されうることにある。私が本書第四章にて論じたように、**真にオメガポイント理論を検証するために我々はテバトロン、そして、SSC — テキサスに据え置かれた超特大加速器** (訳注:計画頓挫を見ることになった同 SSC については本稿にての **出典(Source)紹介の部 10** を包摂する部などにて解説を講じている) — **あるいはヨーロッパ勢の LHC を必要とすることになるであろう。** 後者二つの[マシン]らは相当程度の費用負担を強いるものである。しかし、たぶん、おそらく、神の存在を(未来にて)定立するというのは、そして、遠く先の何時の日か(全能なる機械としての神たる)彼あるいは彼女と共に永劫に生きるべくも復活させられることになるとのことは今日の数十億ドルに値することであろう。

…(中略)…

SSC および LHC はしばしば中世にての大聖堂、古代エジプトのピラミッドに比較される。それら聖堂らは中世欧州人をして神を発見する縁(よすが)として建設されたものであり、そして、エジプトの王らをして不死を見出すために建設されたものである。**私が正しいのであれば、SSC および LHC はそれらを**

「全人類のために」実現しうるものとなりうる。

オメガポイント理論の予見するところでは「ヒッグス粒子」が2000年までにラージ・ハドロン・コライダー(LHC)にて発見されるであろう (訳注:ここでの引用元書籍 The Physics of Immortality『不死の物理学』が世に出たのは1994年となる。そして、執筆期間まで顧慮すれば、その内容はさらに以前の情勢に準拠しているとのことになるだろうが、とにかくも、往時の情勢では「ヒッグス粒子発見のための」LHCが2000年前後に運転開始するとの見立てがなされていたとのことがここでの記述、[2000年までにLHCによってヒッグス粒子が発見されるであろう]から推し量れる。だが、現実にはLHCには2008年9月10日まで運転開始されず、また、それが本格運転開始を見たのは2009年11月20日以降であり、そして、ヒッグス粒子(とされるもの)が捕捉されたとして物議を醸したのが2011年、それが「発見」されたと正式発表されることになったのは2012年(の米国独立記念日7月4日)までずれ込み、その提唱者ピーター・ヒッグスがノーベル賞を受賞したのは2013年となる)。

超伝導超大型加速器(SSC)がもし仮に予定されていた通りに2002年に完成していたのならば、同加速器によってヒッグス粒子は2003年までに発見されていたかもしれないのようになっていたであろう (訳注:フランク・ティプラーではここでの引用元たる『不死の物理学』にて Higgs-boson[ヒッグス粒子]が発見されることをして自身のオメガポイント理論が成り立つうえでの条件であるように論ずるとのことを折に触れてなしている。たとえば、端的なところとしては The Physics of Immortality における XI. Comparison of the Heaven Predicted by Modern Physics With the Afterlife Hoped For by the Great World Religions の章にての THE DEFINITION OF “REDUCTIONISM”より引用するところとして **“And, as I showed in Chapter IV, if it detects the Higgs boson at a particular mass — 220 GeV — the SSC, if ever completed, will provide some evidence that the Omega Point Theory is true.”**「第四賞にて呈示するように加速器 SSC がもし今までに完成を見、ヒッグス粒子が特定の質量—2200 億エレクトロンボルト相当—にて検知されるとのことがあるのならば、オメガポイント理論が正しいとのいくつかの根拠を呈示するであろう」といったかたちで、である)。

これら予測日付の全ては当初より予定されていたスケジュール通りに装置群が完成を見ていた場合に依存しての話にあつてのものである。「不幸なことに」、装置群完成は物理学や技術ではなく政治に依存している。私(ティプラー)がこれについて書くように、テバトロン (訳注:フェルミ国立加速器研究所が運営する加速器で本稿では前半部にての **出典(Source) 紹介の部 10**にてその性質に多少細かくもなつての解説をなしている加速器) のメイン・インジェクターのアップグレードに予算が供出されるのかさえ幾分かの疑義が呈されている。テバトロンのアップグレードに要されるコストはたった2億ドルであり、それはLHCの20億ドル、SSCの100億ドルを基準とすれば(今日の膨大な財政赤字を顧慮しても)微額となる(のに、である)」

(訳を付しての引用部はここまでとする)

上にて The Physics of Immortality (1994) より引用なしにしているようにフランク・ティプラーは

「(Higgs-boson [ヒッグス粒子] の発見がオメガポイント理論に資するとの観点から) LHC や SSC がオメガポイントのために必須なるものである」

と述べるとのことをなしている (:[ヒッグス粒子]の発見がオメガポイント理論を支えるものとの文脈で

もってして “ I argued in Chapter IV that, to really test the Omega Point Theory, we will need the Tevatron upgrade and either the SSC — the Texas Supercollider — or the European LHC ” 「私が本書第四章にて論じたように、真にオメガポイント理論を検証するためには我々はテバトロン、そして、SSC —テキサスに据え置かれた超特大加速器— あるいはヨーロッパ勢の LHC を必要とすることになるであろう」と述べるのとことをなしている —いいだろうか、オメガポイント「理論」を支えるヒッグス粒子の発見のためとは書いていてもオメガポイント(実現のための特異点)と相通ずるところがあるブラックホールの人為生成のためとの筆の運びをフランク・ティプラーは断じてなしていない (先述のようにそうしたかたちとなっている理由は「ティプラーが『不死の物理学』を刊行した折にはブラックホールの人為生成など人類にはまずもって不可能であるとの当然の如き科学的な大前提があった」とのことであると科学界動向を理解している向きには分かるようになっている) —) 。

(出典(Source) 紹介の部 116 は以上とする)

これにでもってして

第一。

オメガポイント理論にまつわってティプラーが明示している観点は「史的」側面で [現行の加速実験実施機関の「誕生」経緯] との [繋がり合い] が観念されるとのものとなっている。そして、その繋がり合いは本稿にて問題視してきた [予言的作品] との共通項が問題となる [繋がり合い] 「とも」になっている。

第二。

上記第一の点と一緒に考えてこそ意をなすこととしてティプラーのオメガポイントにまつわる言いように関しては [加速器実験機関と結びつけられてのブラックホールの人為生成問題] 「とも」(「**奇怪な式で先覚的に**」と受け取れるかたちで) 相通ずる側面が見受けられるようになっているとことがある。

とのことにまつわるおおよその解説を終える。

(:尚、**第二の箇所**にてティプラーの言い分が「**奇怪な式で先覚的に**」と受け取れるかたちでブラックホール人為生成問題と結びつく表記しているのは —まじめな読み手には理解いただけているかとも思うのだが— 以下の **1.** から **4.** の理由による。

1. フランク・ティプラーのオメガポイント理論のための特異点とは —気の遠くなる遠未来まで実現が期待されないとされているものだが— ブラックホールの特異点とも実現状況がかぶるものである。
2. フランク・ティプラーが『不死の物理学』をものした折にはブラックホールの人為生成が人間に建設可能なる加速器でもたらされるとの発想法は、そも、なかった(と科学界関係者らが上下団結して表明している)。
3. 直前 **2.** にて表記のありようが事情変転して(プランクエネルギーの従前通りの枠組みではなく)たかだかもってしてのテラエレクトロン・ボルトの極小領域投入でもブラックホール生成が可能たりえるとの新規理論(1998年のADDモデル)が登場し、LHCでもブラックホールが生成されうるとされるに至った。
4. 直前 **3.** のような事情を『フィジックス・オブ・イモータリティ』(不死の物理学)

執筆および刊行時 —1994年時— のティプラーは当然に「把握できたはずがない」であろうとの状況下で彼ティプラーは「LHCはヒッグス粒子(Higgs Boson)発見との観点でオメガポイント実現の検証と遠未来の目測を立てるのに役立つ」と述べるに留まっているのだが(『不死の物理学』全体を穴が開くほどに見てもそこに人間が「近々」人為的に特異点を生成するなどとの主張は見てとれない)、だが、(1. および 3. の事情を顧慮すると)「最近になってそれが可能たりえると考えられ出した、LHCによるブラックホール(の特異点)の人為生成」、そのことが(ティプラーの言う)究極のコンピューティングのための到達点されるポイントとも関連想起されるかたちともなっているため、ティプラーやりよう(LHCの必要性をオメガポイントとの絡みで強調しているとのやりよう)は—ヒッグス粒子云々といった「往時」の理由付け・名分の問題は脇に置いた上で—「目立っての予見的言及」(ティプラー書籍執筆時から見て事後の理論動向転換にまつわる予見的言及でもいい)をLHCとの絡みでなしているものとも「なる」)

ここまでの解説でもってして筆者が本稿全体を通じて延々摘示してきた「際立っての執拗性」を感じさせもするとのことらの背面にある、

[Whydunit (ホワイ・ダニット/「何故、そうもしたことをなしたのか」) の問題]

に絡んでのこととして、

[返らずもの死者を「黄泉」返らせる]

[神に見紛う究極機械を造りだし、万難を排せるとの世界を実現する]

[時の呪縛を超越して[時の果て]にある理想郷を実現する]

との状況を約束するものとされる(不完全・不十分極まりない人類の科学的目分量にあってはそうしたものとされる)オメガポイント理論のことが取り上げて然るべきことになろうとの理由が何なのか、—(部分的に、でも)— ご理解いただけただけのではないかと期待する次第ではある。

無論、にあっては忌々しい[前提] (それは[多く人間が(「フランク(正直な)」・ティプラーという識別子の付いたものも含めて) ただの糸繰り人形へと墮しているとのことにまつわる前提] でもある) をア・プリアリ(所与)なるものとして容れなければ話の間尺が多く合わないこと、自明なることでもあるのだが、たとえ忌々しきことでも(「種族が存続し続けるとのものであるのならば、そうしたこととて幅広くも履踐されることが必要であろう」との認識でもってして) 厭となる程に下のことに通じていることを指し示さんとしてきたのが本稿でもある。

(ここまで摘示してきたようなことが成り立っていることに説明をつける上で問題になるとの[所与の前提] に関わることとして)

・この世界には人間が意識的にか無意識的にか、とにかくも、操られもしていなければ、具現化しなかつたとの事柄らが山と存在している(：本稿全体を通じて折に触れもし具体的事例紹介なししてきた(下らぬ人間らが[都市伝説]で片付けることが[欺瞞]無くしては虚構と言えないものとなっていること、容易に後追い可能なるかたちで紹介なししてきた)とのこととして、[911の事件が発生することに対する「露骨な」事前言及をなしているが如く文物ら]がそうした状況を示すものとなるのならば、本稿補説4の部にて同文に極めて事細かに解説なししてきた【往時発見されてもしな

かった精子・卵子受精過程および DNA 構造を「受精過程における精子・卵子のサイズ比」や「受精過程における卵子に到達する精子の数」まで描写しつつ「露骨極まりなくも」描いていたとの「処女懐胎にまつわる」絵画がルネサンス期(15世紀)に作成されていたとのこと】もまたそうした状況を示す例となろうかとは思う。

・類推する以外に我々人類にそれを推し量る術は現行ないとの作用機序、人間がいかように誰によって操られているのかといった機序の問題——(ありうべきところとしてマルチバースを浸潤する重力波のような如きものが「非侵襲性(メスを用いない)ブレイン・マシン・インターフェース」の類と併用されており、人間が、(ティプラー博士の言うオメガではないが)、[神のフリをする高性能コンピューター]と結線させられ、自己決定さえ出来ぬ、自分で物事を考えぬことさえせぬ、最悪、自我さえも完全に失っている[端末](魂のある人間のフリをしている人間の「残骸」)へと変じさせられている可能性とてありうるだろうが、そうしたことは、(人は他人の中身まで正確に把握はできないのだから)、残念ながらも揣摩憶測を越えては云々なせはしないとの機序の問題)—— ほとにかくも置き、[犯行の結果]だけは明瞭として具現化を見ている中でフランク・ティプラーのような者もが「半・人間」(自我を残している人間だが、そうではない部分にも操られている類)ないし「本然としての内面を完全に喪った存在」として「騙されてか」ないし「人間存在を愚弄する意図でか」オメガポイント理論なるもの(愚弄、ただそれだけを念頭に置いての嗜虐的ジョークの類かもしれない)を展開している「可能性」も濃厚にあると判じられる、であるから、「危険」と解される。

(:本稿筆者がフランク・ティプラーをもってして胡散臭いと考えているのは「フランク・ティプラーが「このような世界」で「宇宙には人間以外に知的生命体がない」などと断言して主張しているとされる(先にて職業的懐疑論者マイケル・シャーマーの著作『なぜ人はニセ科学を信じるのか?』より以下の記述を引用している。(再度の引用をなすとして)“この宇宙のはるか未来では、人類——ティプラーによれば、宇宙で唯一の生命体——は地球をあとにし、天の川銀河のほかの星域だけでなく、すべての銀河に住み着いている(とティプラーは予測する)”とあるとおりである)]

とのことがある一方で「何故、それをやる動機があるのかまったくもって理解に失する(ゴキブリのように劣った存在と見なして軽侮しているかもしれぬ存在を好んで再生する[神]などあるのか?)」とのところで「仁慈溢れる人工知能」が「神」として人類を優しくも再生するなど主張していることである(同じくもの懐疑的見方は職業的懐疑論者にしかすぎぬとのマイケル・シャーマーのような類も常識論に落とし込んで述べている——ある意味、至極当然な疑念だろう——)。

同じくものことについてよりもって付け加えて述べれば、本稿筆者からすれば、

[ここではない別の宇宙で栄えることになった嗜虐的な介入者ら(マルチバース;多元的宇宙で生きる爬虫類の類から進化した存在かも知れない)が構築した超高度コンピュータ]

を「神」や「仏」と崇め奉ってきたような存在が我々人間という種族の偽らざる「愚劣極まりない」状況——近々、かねてよりの予告通りに刈り取られなくとも望ましい未来などこのまま行けば、絶対にありえなかつた「当然に」受け取れる紛い物で満たされた「愚劣極まりない」状況——であろうと「見える」とこの世界でティプラーのような人間、一方で極めて重要となるところを見ないで楽観的見方ばかりを呈する人間をして「全くもって信が置けない」と見るとのこともある——※このような世界で「額面だけの常識」をさも「真

実] のように見せんとすることに固執する者達（典型例はこのような世界にあっての[悲劇の真因]を人間レベルの問題としてしか語ろうとせぬ、そう、[人間の、人間による、人間のための世界] だけの問題としてしか人間の悲劇の問題を語ろうとせぬとのマス・メディアや言論人らや諸々のストーリーテラーあるいは嗜虐的サーカス興行の団員であろう）が[「本当の」良識良心を保持し続けようとするとの向きら] に[軽侮に値する下らぬ役者]（ないしは[偽善欺瞞もいいところの醜悪な徒輩]）と見られるであろうといったことに通底するところの臭いがティプラー博士「にも」濃厚に感じられるとのことである（但し、フランク・ティプラー、「正直な frank」ティプラーが人間性を半面で有しているところで[褒め殺し方式] で[ありうべきプラン] をばらさんとしたとの可能性もあるかもしれないとは見るが、物事はそうも楽観的にとらえるべきではないと(彼ティプラーの予見的やりようから)見ている))——)

上のことゆえに楽観的に、そう、ひたすらに楽観的に[絶対善なる機械の神による復活の教義]を主唱するフランク・ティプラーの物言いには相応の臭いがつきまとうと指摘するのである。

まどろっこしくも上記したうえで続けての内容に向けて話を振るが、これよりはフランク・ティプラーの言いようにまつわっての整理のための表記を(念押しに、と)加えてなしもし、その上で、さらにもってして問題視すべきと判じもしているところを呈示することとする。

さて、「フランク・ティプラー著述 The Physics of Immortality : Modern Cosmology, God and the Resurrection of the Dead『不死の物理学:現代の宇宙観、神、そして死者の復活』に具現化している「普通では説明がなしがたいような」先覚性とはいかようなることか」とのことについて解説を加えてきたわけではあるが、直前までの説明では細部についていささか説明不足のきらいがあったかもしれないとも思う。

であるから、—フランク・ティプラーの申し分に見る異様なる先覚性が何たるかについてよりもって明確化させて示すべくも— 念押しとも言うべきところとして、

[LHC のブラックホール生成問題にまつわる時系列]

と

[ティプラーのオメガポイント理論の特性]

とを以下、併記してみる。

そちら表記でもってティプラーの言いようが[悪い意味での先覚性]をも帯びていること、理解なせることか、とは思う。

[LHC のブラックホール生成問題にまつわる時系列] (本稿の前半部、[出典 \(Source\) 紹介の部 1](#)から[出典 \(Source\) 紹介の部 5](#)を包摂する解説部にてひたすらに出典に依拠して示してきた科学界発表動向のありようとして)

1999 : 同 1999 年、ブルックヘブン加速器研究所が運転開始しようとしていた加速器 RHIC によるブラックホール生成の可能性について市民運動家である Walter Wagner が問題視しだす (ワグナーはスティーブン・ホーキングの [原初宇宙における状況説明] から [加速器の極小領域へのエネルギー集中投下による原初宇

宙の近似的状況の再現] はブラックホールの生成をも意味するのではないかと疑義を呈しだした)。その際、後にノーベル賞を受賞することになった科学者らを含む「複数」加速器機関よりの公衆及び行政機関に対する状況報告文書ら — ブルックヘブン国立加速器研究所の **Review of Speculative "Disaster Scenarios" at RHIC** と題されての文書および CERN の **Will relativistic heavy-ion colliders destroy our planet?** と題されての文書 — では [今後ありうべき加速器にあってはどの加速器もブラックホールはなしえない] との明言がはきとなされていた — 案件分析をなした米国法学者文書の **THE BLACK HOLE CASE: THE INJUNCTION AGAINST THE END OF THE WORLD** より “ In 1999, when questions floated in the media about accelerator-produced black holes, physicists issued an assurance that no particle collider in the foreseeable future would have enough power to accomplish such a feat. ” 「1999年、加速器製ブラックホールについての疑問がメディアに浮かんできた折、物理学者らはそのような業(わざ)をなしうるのに十分な力を有した[予見しうる未来にあっての加速器]は存在しないとの保証を發した」との記述を先に引用なししているとおりである — (※同じくものことについては[加速器によってブラックホール人為生成がなされるといった主張は pipedream (阿片や大麻の酩酊者の盲覚・妄言)の類である]との書きようが加速器実験実施機関ブルックヘブン国立加速器研究所の公式報告書 **Review of Speculative "Disaster Scenarios" at RHIC** ではなされている(本稿でも当然にその部を原文引用している)。粒子加速器のブラックホール生成可能性をはじめ問題視しだしたとの節ある向き、ウォルター・ワグナーが[世の中にそういうものが横溢しているところの[下らぬ狂人] crackpot の一人]であると強くも印象づけたいのかといったかたちでそういう明言が公式報告書でなされてきたわけである。また、そうした愚弄めかした書きようを伴っての明言がなされていたのにはひとつに[プランク・エネルギー Planck Energy の極小領域への投入の実現不可能性](先述)が理由となっていると解されるようになっている)。

2001 : 1998年に呈示された ADD 理論 (ADD Model) を顧慮しての視点として LHC らが将来的に [ブラックホール] を生成する可能性がある — 通年にして数百万個の「安全な」「即時蒸発する」ブラックホールを生成する可能性がある — との複数論稿が同 2001 年より米国の複数物理学者らより發表され、それら内容がメディアに取り上げられるなどし、物議を醸すことになる(プランク・エネルギーを極小領域に投入せずとも遙かに下回るテラエレクトロン・ボルト — 蚊が飛翔するに等しい運動エネルギー — の蚊の一兆分の 1 の領域への投入でブラックホール生成がなされうるとの観点が新規理論より呈示されだした)。

2003 : 同年、粒子加速器 LHC の運転開始に先駆けもし、先行する 2001 年よりの動向を受け、LHC を建設中であった CERN が 「従前のブラックホール生成否定の状況とは事情が(理論の発展動向から)変わりもし、ブラックホールは生成されうると見られるようになった」 との公衆及び行政機関に対する状況報告文書を發表することになった(本稿にて事細かに原文引用なししているとの報告書タイトルは **STUDY OF POTENTIALLY DANGEROUS EVENTS DURING HEAVY-ION COLLISIONS AT THE LHC**)。そちら報告書の中で主として呈示されていたブラックホール生成問題に対する安全性論拠は [ホーキング輻射による生成ブラックホール蒸発] であった。

2004 : 同 2004 年、ホーキング輻射發現可能性、すなわち生成されうる大量の

極微ブラックホールらの即時蒸発の可能性にそれ専門の物理学者が疑義を呈し出す(ホーキング輻射を専心して研究なしていた一線の物理学者であるウィリアム・ウンルーという向きよりホーキング輻射の発現は[開かれた疑問]に留まるとの見解が呈され出す)。

2008 : 同 2008 年、LHC 実験開始に先立ち、LHC 運営元の CERN を代表する科学者らより、

「生成されうるブラックホールは即時蒸発しないかもしれないが、(宇宙線にて生成されうるそれとの対比研究から)いずれにせよ成長に天文学的時間を要するとの安全無害なるものである」

との筋立ての論稿 (俗に発表者の頭文字をとって GM Paper などと呼称される **Astrophysical Implications of Hypothetical Stable TeV-scale Black Holes**) が最も確度高いものであるとしてリリースされる —※CERN の安全性論拠の変転については本稿前半部で解説しきれてなかったところを本稿の [出典 \(Source\) 紹介の部 110\(6\)](#) にて解説している—。

2008 : 同 9 月 10 日、極微ブラックホールらが生成されれば、それはそれで科学の進歩に資するとの観点でもって LHC 実験が開始を見る。

(以上のような年表を事細かに挙げもしているとの筆者にまつわっての余事記載として: 因みに本稿筆者は[常識]の世界での訴求「にも」注力なそうとして — (「[常識]の先にあるのは[死]だけである. であるから、最終的には[常識]は(その場でやりとりなしても)部分的に崩壊させねばならぬ、[虚偽の歴史]には[真実]を指摘するとかたちでピリオドを打たねばならぬであろう」との視点(そして思想)を有しているとの身ながらも[常識]の世界での訴求「にも」注力なそうとして)— 国内で訴求の用に供するためだけに権威の首府(履歴事項全部証明書を取って見て驚かされたことに [資本金 1 兆円] にまで達しているとの独立行政法人としての東京大学、その「一部」としての名目でやっている権威の首府たる国際的研究機関)に彼らが国内外で推進している LHC との絡みで行政訴訟を提訴なしたりもした (法律上の争訟、すなわち、[訴訟]の領域へと持っていくには法を適用して法に照らしあわせて法律上の権利義務関係を確定するとの要件が満たされねばならぬとのことがある中、[実験に公金でもってして関わる公的機関が国民に対する(法の定めた)説明責任の問題に背馳(はいち)した]との明文でもってして彼らを —我ながら姑息なことをする、とは思っていたのだが— 無理矢理法廷に引きづり出した)。

の際、

「[LHC にまつわるリスクのやりとり文書] は [リスクやりとり不在] のために保持されていない」

などと法廷で馬鹿な(としか表しようがない)とのことを「当初」主張していたとの国内の権威の首府たる実験機関 (CERN にて LHC のリスク検討をなしている SPC という委員会組織にも人脈として根深くも通じている実験機関にして国内の国際的加速器マフィアの一大支部となっているとの機関でもある) の代理人たる弁護士らに対して、

「あなたがたはどうしてそうした欺瞞が平然となせるのですか. 税金の出所となっている国民に対する義務に背馳するところ、甚だしいでしょう」

[現実に存在しているブラックホール生成について扱った当該研究機関関係者の手になる文書]

を書証として提出したりしながら「極めて常識的に」非を鳴らしてきもした人間がこの身ともなるのだが（そうもした訴訟を巡る経緯 —(後にグローマー拒否との概念から公開義務の対象となる組織的文書は存在していないにリスクにまつわってのやりとりが存在していないとの言い分から被告主張内容が変遷したりとある種、異様な対応がなされていた訴訟を巡る経緯)— については本稿にての前半部に多少細かくも[差し障りない範囲]で解説なしている)、といった身の上として、筆者は[加速器実験を巡る史的経緯]についてかなり詳しくもなっていると断っておく。

尚、この世界ではそうした訴求活動をやると[紛い物]らに近付かれ囲まれることともなり、また、メインストリートサイドの住人ら（筆者の係累縁者もそうしたものばかりであるとの社会の良き構成員）よりは[総好かん]を食うとの式で[徹底無視]されることともなり（昨今では秘密保護法案について異議異論を呈すとの式を[ポーズ]として取るとのことをやっているも、現実には[種族の存続問題に関わる本質的なこと]には一切合財、目を向けぬとのメディアなどには「小僧が万引きをした程度の事件か」程度にそもそも存在「しない」ことにされ;[問題の最も手っ取り早い解決方法は対象が存在しないと見なすことである]との式をとられることになり）、他面、[相応の向き]らを集めて動かしている節ある宗教団体の関係者らには嫌がらせ（e.g.嫌がらせ電話）を圧力・反作用としてなのか「執拗に」なされることになった、そういうことがあるのを自身の経験に基づいて「ここでの記述とてものが他の心ある人間に役立ててもらえれば」との観点で書いておく（本文書の流布を妨げるような情報封鎖がなされずに、かつ、自分で物事を調べる人間が本当にこのような世界にいると想定したうで書いておく —※因みに[救世主コンプレックス]など露も有しておらず、ただただ[危機と判じられる状況での自身および守りたい者らの生き残りを期している一個の人間]として同文に[状況理解]を求めたくも書いておくが、[LHCにまつわる問題点]については[愚にも付かぬ「属人的」印象論]であるがために何かを変える可能性（潜在力）が[ゼロ]を出でぬような論調（ツイッターやフェイスブックに見るそれ程度のクオリティにて(思考の幅と深度の面で)[程度の低さ]が即時に窺われるとの門外漢が[ご意見番]を気取っている、そういったようなものとしての[「属人的」印象論]らに見る論調)を越えて「常識的」かつ「具体的に」批判をなそうとする、非を鳴らそうとする人間とて少なくとも国内では「まったくもって見受けられず」（現時点で把握するところでは長期間続いた裁判を提訴したのも遺憾なことに私が[最初]にして[唯一]の人間でもある）、海外批判者らやりようも（本稿にての**出典(Source)紹介の部 17**から**出典(Source)紹介の部 17-5**で呈示しているような）[「一般論としての」固有の欠陥]を伴っていると指摘できるようになってしまっている、それが[この世界]のありようである（:[矯激さ][神秘主義的側面]を本稿「では」前面に押し出したくはないので「比喩と受け取ってもらっても構わない」と申し添えつつも述べておくが、それこそが[魂が抜け落ちたが如くの機械人間のような者達]（視野角も狭く自律的思考を十分になしえるのかさえ怪しい者達）で溢れかえったこの世界の現状であるのとらえらるような按配ともなっている—）

■ 前世紀末葉（1999 — ）から今世紀初頭にかけての科学界論調

加速器によるブラックホール生成の可能性が「リスク」となるのではないかと研究機関部外の人間よりの質問が寄せられる（その質問の背景にあった考えが「粒子加速器が原初宇宙の高エネルギー状態を再現するとされること」と「原初宇宙には極微ブラックホールがあったとされること」に対する専門外の人間による推論であったと一般に説明されていることも本稿では解説している）。対して、研究機関ら（ブルックヘブン国立研究所およびCERN）は「今後実現されうるありとあらゆる粒子加速器によるブラックホール生成はありえない」との報告書を出す（：本稿では1999年における報告書らの内容（ブルックヘブン国立研究所およびCERNの報告書の内容）の原文引用 および2000年（2001年）にてのノーベル平和賞をバグウォッシュ会議を代表して受賞した物理学者フランチェスコ・カロジェロらの公衆に対する訴求を兼ねての論稿での申しようの原文引用を「出典(Source)紹介の部1」「出典(Source)紹介の部5」にてなしている）。

■ 2001年以降の新規理論に対する分析を受けての科学界の論調

余剰次元理論（1998年提唱）の発展動向を受け、同年（2001年）より権威を伴っての専門の物理学者らが「粒子加速器（LHC）による「年にして千万個単位のマイクロ・ブラックホールの生成」の可能性はある（生成されたブラックホールはホーキング輻射との現象で即時蒸発する）」との論稿を発表します（：本稿「出典(Source)紹介の部2」では表記のことにつき案件分析をなした米国法学者論稿よりの原文引用をなしている）。

■ 2003年以降の安全報告書にあつての明確化しての方向性

CERNが余剰次元理論によるブラックホール生成の可能性が観念されだした件につき、「潜在的な脅威」と看做しつつも「生成ブラックホールは即時に蒸発するから安全である」と専らに主張する報告書を出す（：本稿「出典(Source)紹介の部3」では表記のことにつき2003年のCERN安全報告書よりの原文引用をなしている）。

■ 2004年以降の科学界の変節（を受けての事後の安全報告書に見る兆候）

生成ブラックホール蒸発の論拠となっている理論、ホーキング輻射に対して専門の科学者が疑義を呈しだし、ホーキング輻射の発現に広くも疑義がもたれるようになる（：本稿「出典(Source)紹介の部3」では案件の解説をなしているとの米国法学者論稿およびホーキング輻射権威（William Unruh）の変節が現われているところの同権威の手になる論文よりの抜粋をなしている）。それを受けて、加速器実験機関は従前、ストレンジレット生成問題といった問題に対する安全性論拠として報告書の中で言及していたものである「宇宙線（宇宙を飛び交う高エネルギー放射線）現象と比較しての申しよう」をブラックホール生成問題に関して「も」強くも前面に押し出すようになる。

「文献的事実」の問題として摘示できるし、本稿にて実際に出典に依拠して呈示しているとの「変節」の流れ

[物理学者フランク・ティプラー（ Frank Tipler ）が前面に出しもしていたとの論調]

1994： 同 1994 年、物理学者フランク・ティプラーが「不死を実現する機械の

神] [オメガポイント] の概念 (従前からそこに存在していた技術的特異点の概念とも通ずる不死を実現する機械の神) についてエポック・メイキングなる著作として知られる The Physics of Immortality : Modern Cosmology, God and the Resurrection of the Dead 『不死の物理学: 現代の宇宙観、神、そして死者の復活』にて目立っての訴求を公衆 (幅広くもの書籍読み手) に対してなす。 その際、フランク・ティプラーは「ブラックホールの特異点」と近しき「ビッグクランチにおける宇宙終末の特異点(ファイナル・シンギュラリティ)」をしてオメガポイント実現のための手段であるとの理論を目立って前面に出している (にまつわってはティプラーのオメガポイント理論の要諦たる究極のコンピューターに親和性高いものを「ブラックホール」を利用して実現しようとの観点があることを扱っている [技術的特異点] 関連の特定書籍 (2005 年に原著が刊行されている The Singularity Is Near: When Humans Transcend Biology) の記述も見てとれ、その引用も本稿の先だつての段でなしている)。そして、オメガポイント理論を扱った 1994 年初出のフランク・ティプラー著作 (『フィジックス・オブ・イモータリティ』こと『不死の物理学』(現時未邦訳)) の中でフランク・ティプラーは SSC (計画頓挫した超大型加速器) や LHC をして [オメガポイント実現に資するもの] と見なしての申しようをなしている。1994 年時点では LHC や SSC が [オメガポイントを実現するが如くの特異点] を人為生成するとは (プランクエネルギー極微領域とは程遠く) 論じられていなかったものの物理学者フランク・ティプラーは

[(SSC や LHC の類が発見模索するものであると当初より銘打たれていた) ヒッグス粒子の発見がオメガポイント理論を支える理論的環境を一面で示して見せる]

との観点で SSC や LHC 超巨大加速器 (上掲のように 2001 年からようやくブラックホール生成をなしうると考えられるに至った加速器) をして「遠未来の」オメガポイントに資するものである — (ティプラー著作刊行時たる往時、人類には人為生成できるとは考えられなかった) ブラックホールの特異点の類、オメガポイントに通ずる究極のコンピューティングにも利用可能であると一部でされているブラックホールの特異点の類を「近々」生成するとの文脈ではなく「間接的に」「遠未来の」オメガポイントの理論を支える知識を与えてくれる (に留まるものである) — と言及もしている。

以上、それぞれ枠で括りもしてのことらの併記をもってして

第一。

オメガポイント理論にまつわってティプラーが明示している観点は「史的」側面で [現行の加速実験実施機関の「誕生」経緯] との [繋がり合い] が観念されるとのものとなっている。そして、その繋がり合いは本稿にて問題視してきた [予言的作品] との共通項が問題となる [繋がり合い] 「とも」になっている。

第二。

上記第一の点と一緒に考えてこそ意をなすこととしてティプラーのオメガポイントにまつわる言いように関しては [加速器実験機関と結びつけられてのブラックホールの人為生成問題] 「とも」(「奇怪な式で先覚的に」と受け取れるかたちで) 相通ずる側面が見受けられるようになっているとのことがある。

との先述のオメガポイント理論をかぐわかしいとする二点の理由らのうちの二点目のこと、

[[加速器実験機関と結びつけられてのブラックホールの人為生成問題] と (「先覚的に」 と受け取れるかたちで) 相通ずる理論となっている]

とのことからのみで何が問題になるのかよりもって深くも理解いただけただけなのではないかと期待する。

くどくも繰り返せば、

「フランク・ティプラーは往時、ブラックホールを生成するとはおよそ考えられていなかった大型加速器をして(ブラックホール生成とは全く別なる観点で) オメガポイント理論の検証に必須なるものとしていたわけではあるも、それら大型加速器らはそうもしたティプラー申しようの後に [オメガポイント実現に直接関わりうる (この世界での究極のコンピュータの実現を約するにつながりうる) と見えもするブラックホール生成をなしうる] とまで考えられるようになっており、ティプラーの [LHC および SSC に対する必要性] に対する言及それ自身が [ある種、予言的なるもの] となっている」

とのことが当然にそうだと述べられるところとしてそこに「ある」のである。

付記としての訴求表記として

ここでは

[直上の段までにて事細かに解説なしてきたとのフランク・ティプラーの申しようを反対解釈した場合に何が問題になるのか]

とのことについて付記による訴求をなしておく。

さて、フランク・ティプラーが次のように主張していること、先立ってティプラー主著『不死の物理学』から原文引用にて示してきた。

遠未来にあつてのオメガポイント実現には前提条件として [宇宙権を得る (宇宙空間を幅広くリソースとして活用する) ための自己増殖機械らを撒布する必要] がある。そして、「彼ら」機械は知的なるものとなっているために人間に見紛う存在となっている (必要がある)。そうもした人間に等しき機械は [差別] の対象となりかねない。人種差別の最たるものであるナチズムはそうした観点からも全否定されなければならない。 [優れた機械] を [差別] するような存在はオメガポイントには至れないのである (“ A rejection of racism, that is, a belief in the inherent superiority of any group of intelligent beings — as I showed above, a notion intimately connected with the Eternal Return — is also essential for the Omega Point Theory. As I demonstrated in the previous chapter, a crucial step toward the Omega Point is the colonization of the universe by intelligent robots, by self-reproducing machines. Many humans (including many who should know better) regard the creation of such people — I call intelligent robots “people,” because that is what they are — with horror, and initially feel that the creation and reproduction of such machines (people) should be prohibited by law. ” とのかたちで訳を付しながら The Physics of Immortality : Modern Cosmology, God and the Resurrection of the Dead 『不死の物理学: 現代の宇宙観、神、そして死者の復活』より先に引用した記述が同じくものを扱った部位である)。

フランク・ティプラーがナチズムにあつての優生学思想・人間に垣根を設ける差別の思想

の類を取り上げもし、全否定されるべきものとしているのは上の点に留まるところではないが（ティプラーが永劫回帰思想を [ナチズムとワンセットにされての克服すべき対象] として見もし、そちらナチズムとワンセットの永劫回帰状況が特定の [物理的条件と合致しない] ことこそがオメガポイントの到来に必須の要件であると強調していることは先立って引用にて示さんとしてきたところである）、反面もってして、人間の歴史では「醜悪極まりない」ナチズム（それが現出したマクロ・レベルの悲劇とマイクロ・レベルの悲劇については直下、引用なして示すことにする）がティプラー言い分と反対の効用をもたしてきた、すなわち、ナチズムが

[オメガポイントが人間に望ましくはないかたちで実現するための「強くもの」推進材料]

として機能している節が「如実に」見てとれるとのことがある。

については最前の段でも解説をなしてきたことである（そちらありようが何たるかについて理解が及んでいないとのことであれば、先立っての段で述べてきた[二つの理由]の内容をいま一度検討いただきたい次第でもある)1。

※ナチスのもたらした結果について

ここではナチズムがいかようなものであったのかその [結果] についての一般でのまとめられようを引いておくこととする。

(直下、マクロ・スケールでナチスのやったことについての引用を和文ウィキペディア [ホロコースト] 項目より引用なすとして)

ドイツによるホロコーストによって殺害されたユダヤ人は 600 万人以上、最多で 1,100 万人を超えるとされている。また同時期にナチス・ドイツの人種政策によって行われたロマ人に対するポライモス、身体障害者・精神障害者への T4 作戦、同性愛者(ナチス・ドイツによる同性愛者迫害)、エホバの証人に対する迫害などもホロコーストに含んで語られることもある。主に独ソ戦における戦争捕虜、現地住民が飢餓や強制労働による死亡者に対しても「ホロコースト」の語が使用されることがあるが、この語を他の民族にも拡大して使用することに反発する個人・団体がある。こうした広い概念でとらえた場合の犠牲者数は、九〇〇万から一一〇〇万人にのぼるとも考えられている。

(引用部はここまでとする。尚、表記にては紛らわしい記述がなされているがユダヤ人が最大 [1100 万人] 殺されたというのは誤記と思われる。ホロコーストではソ連のスラブ人およびドイツ内の反体制派・社会的少数者および社会的弱者が組織的に殺害されていった比率が極めて高くなっており、そうしたホロコースト全体での殺害数が 1100 万人程度と見繕われているとのところは正しいところであろうと見えもする一方で、である（唯一神を信ずる者らの紐帯たる宗教民族たるユダヤ系の犠牲者数については 500 万人との試算が最近では強くも出されている。その点、ホロコースト全体の犠牲者については英文 Wikipedia にて全体で 1100 万人(内、子供は 100 万人)との表記が次のようになされているところである ⇒ “Crimes against humanity committed by the Nazi regime (macro scale): Between 1941 and 1945 Jews, Gypsies, Slavs, communists, homosexuals, the mentally and physically disabled and members of other groups were targeted and methodically murdered in the largest genocide of the 20th century. **In total approximately 11 million people were killed during the Holocaust including over 1 million children.** Of the nine million Jews who had resided in Europe before the Holocaust, approximately two-thirds were killed.” ——Wikipedia [The Holocaust]

article)——)

(直下、マイクロ・スケールでナチスのやったことについての引用を和文ウィキペディア [ヨーゼフ・メンゲレ] 項目より引用なすとして)

ヨーゼフは実験対象である囚人をモルモットと呼び、加圧室に置く、有害物質や病原菌を注射する、血液を大量に抜く、熱湯に入れて麻酔なしで手術をする、様々な薬剤をテストする、死に至るまで凍らせる、生きたまま解剖するなど、囚人達に致命的の外傷を与える実験を繰り返した。

…(中略)…

メンゲレはまた、双子に特別な興味を持っていた。双子に対する実験は1944年に始まり、メンゲレの助手はプラットフォームに立ち「双子はいないか、双子はいないか」と叫び何千もの実験対象を集め、特別室に収容した。実験のほとんどは倫理を無視したものだ。当初の実験は身体を比較するだけであったが徐々にエスカレートしていき、子供の目の中へ化学薬品を注入して瞳の色を変更する実験や、人体の様々な切断、肢体や性器の転換およびその他の残忍な外科手術が行われた。他にも、2つの同じ臓器が1つの身体で正常に機能するかを確認するために、双子の背中同士を合わせて静脈を縫い合わせることで人工の「シャム双生児」を作ることを試みたが、この手術は成功しないばかりか単に悪性の感染症に罹患させただけだった。この癒着した双子は目撃の証言も多く残され、二人は痛みに泣き止まないばかりか姿があまりにも見るに耐えなかったため、手術の3日後に両親によって窒息死させられたという(モルヒネを用いたという説も存在する)。

ヨーゼフの実験対象にされ実験から生還できた囚人達も、そのほとんどが解剖されて殺害され、役に立たない実験体は処分された。双子達はヨーゼフを「おじさん」と呼び、ヨーゼフも双子の、特に少女を車に乗せて楽しげにドライブしたと言われるが、その双子達も次の週には解剖台の上に乗せられた事を側近の医師達も理解できなかったという。戦争が終結する直前に人体実験の証拠隠滅のために囚人を皆殺しにすることを試みたが、毒ガスが底をついたので解放している。この時、約3,000人の双子のうち180人が生き延びたが、後遺症や精神的ショックが後を引いた。

(引用部はここまでとする)

二点目の引用部は

[アウシュビッツで生者と死者を選り分ける選別者としての役割]

を極めて効率的にやり遂せ、常人ならばおよそ直視できぬような目を覆わんばかりの残虐実験(殊に「人工的に」[存在自体が苦痛で満ちていたシャム双生児]を造り出すなどの双子をもちいてのそれなどが有名)を執り行ったことでも知られるナチスの医学博士ヨーゼフ・メンゲレ医師、戦後も法網を掻い潜り続け、南米で老年まで生き遂せたことがよく知られているそのメンゲレのやりようを紹介した部となる。

(:メンゲレの表記のようなやりようをもってして

『馬鹿げているほどに嗜虐的だ。人間が人間に対してやるようなことではない。嘘であろう?』

と思われた向きはメンゲレ関連の著作(訳書も数冊出ている)を読まれてみるか、あるいは、たとえば、英文 Wikipedia [Action T4] 項目に何が書かれているのか検討してみるとよからう(ホロコースト規模を極めて過小に見積もるか、否定するとの歴史修正主義者の申しようにどこまで信が置けるかを判ずるのに先立ちそこからはじめる必要があると手前などは見ている)。

その点もってしてアクション T4 の問題を突き詰めて見ることで

[ナチス優生学] (言うまでもないことだが、[ユージュニクス(優生学)]というのは[魂といった言葉で表されるような内面実質]の問題がなおざりにされる中で皮相的に見て[知能]・[人格] 双方共に劣った者ら、ナチス親衛隊にはそういう[たいして頭もよくないうえに気位ばかりが不相応に高い] との輩が山ほどいたというが、そういう類がそれを率先してそれを説けば「よりもって」[醜悪][陋劣]になる人種優越性にまつわる[似非科学] でもある)

というものが

[自国民すらも法的手続きによらずに大量に殺していけるだけの医学的マシン(機構)]

を伴っていたことがお分かりいただけるであろう。

そうした歴史の振り返りをなせば、そう、

[我々人類という種族がつい半世紀程(と加えて少々)前まで押しつけられていた内面のありようを示す外面的記録]

としての歴史的記録に直面すれば、

「成程、このような者達ならば何でもやるであろう・・・」

とご理解いただけるところか、とはおもう (因みにナチスがユダヤ人のホロコーストに手を染め出す「前に」自国民を対象におこないだした T4 作戦ことアクション・テー・フィアにて[遺伝的劣等者][精神病質者]とラベリングされたユダヤ系に限らぬドイツ国民らが「いいなりの」医療関係者らによって(見積もりによって増減するが)およそ 10 万人程殺されていったことが知られている — ナチスはユダヤ系や自国内の目立っての政治的反対派や進出地域の敵性劣等人種(と見なしたスラブ系)などを組織的に殺していく前に「違法に」(法律手続きによらずに)大量の自国のドイツ人(遺伝的劣等種と見なしたドイツ人)を公(おおやけ)から見て秘密裡に大量殺害なすとのことまでやり遂げていたことが史的事実として知られている—)。

尚、ヨーゼフ・メンゲレの双子に固執しての「実験」については英文 Wikipedia については次のように紹介されているところともなること、付記しておく ⇒ “ Crimes against humanity committed by the Nazi regime (micro scale): Mengele's experiments with eyes included attempts to change eye color by injecting chemicals into the eyes of living subjects and killing people with heterochromatic eyes so that the eyes could be removed and sent to Berlin for study. His experiments on dwarfs and people with physical abnormalities included taking physical measurements, drawing blood, extracting healthy teeth, and treatment with unnecessary drugs and X-rays. Many of the victims were sent to the gas chambers after about two weeks, and their skeletons were sent to Berlin for further study. Mengele sought out pregnant women, on whom he would perform experiments before sending them to the gas chambers. Witness Vera Alexander described how he sewed two Gypsy twins together back to back in an attempt to create conjoined twins. The children died of gangrene after several days of suffering. ”
—Wikipedia [Josef Mengele] article—)

ここまでに

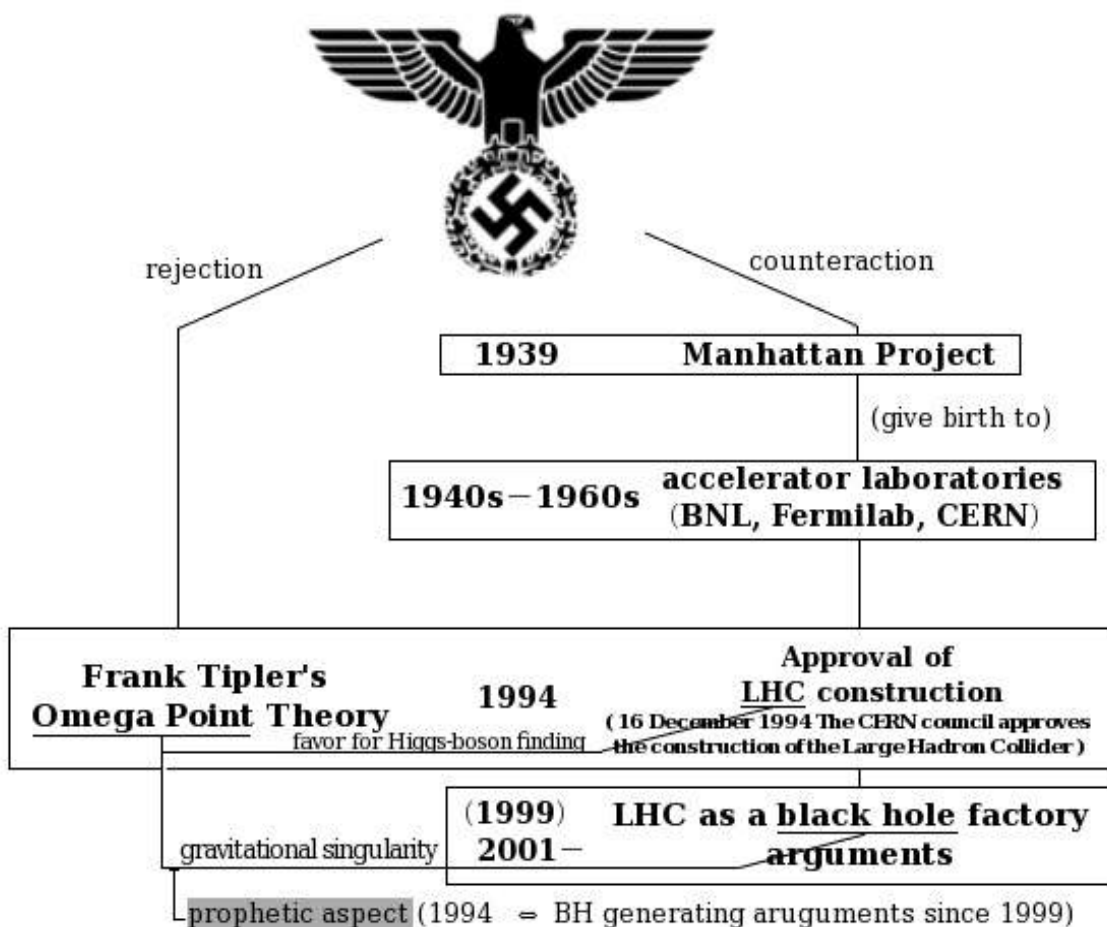
[フランク・ティプラーが優れた人工知能の [人格] を否定して「差別」する思考のありように通ずると評して、それがゆえにもってして「も」批判対象としているナチズム]

によって具現化した結果が何たるかの 一皮相的ながらも— 説明としておく (: そうもしたナチズムについて筆者としては「これさえ読めば、[一般教養として(常識から出でぬ範疇で)見た場合のナチスの特質]について多くのことが分かりもする」であろう書物として『SS 国家 強制収容所のシステム』との書籍 —戦前ドイツの識者階級としてのリベラル派ドイツ人オイゲン・コーゴンが収容所に入所させられ、どういう体験をしたのかについてまとめた書籍— を挙げておきたい次第でもある)。

さて、酸鼻を極めての惨禍を(宗教民族たるユダヤ系にとどまらず)人類全体に及ぼし、それを嬉々として実行していく一群の大衆ありようでもって「我々人間という種族の「そうもある」状況」を示してみせていもしたとのナチズム、そのナチズムが

[ブラックホール生成 (その特異点がオメガポイント理論の中枢をなしてもいるとも解されるブラックホールの生成) を取り沙汰されるに至った実験機関ら —人類文明がようやくそこに至ったとの現代技術の粋を集めての巨大装置で相応の営為に励んでいるのであるもその役割・特質が(川上の部品メーカーなどが一流企業でもほとんど知られないように)ほとんど大衆に知られるとのことがないとの実験機関ら— を産み出す推進材料]

となったとのことは先立ってマンハッタン計画にまつわっての事柄として詳説を講じている。



以上のことを念頭に —(ここからが訴求したいことともなるのだが)— フランク・ティプラーがそれをして[ナチス象徴]にとどまらず、

[オメガ(たる人類をあまねくも救済する[機械の神])の実現を阻む[永劫回帰](との言葉で問題となる物理的状況)の象徴]

であるなどと強弁なしている紋様たる[スワスティカ紋様] (ハーケンクロイツ／鉤十字紋様) を引き合いに

[続いての部で示すような式]

での指摘もがなせるようになっているのがこの世界である。

直上にての訴求の指し示す方向性との絡みで問題となることについての図解部として

ティプラーの主張する[人類救済]をなす —正確には人類を含めて万物をコンピューティング環境下にて再生する— 機械の神はその性質上、と同時に、

[あまねくもの人間の内面を規定できもする存在]

となりうる (人間を思うままに再現再生できるのならばその内面も当然に改変可能である)。あまねくもの内面の規定。

それはあたかも [蛸(タコ)の如き巨大頭脳がその脚を自在自儘に操るが如きありよう] を想起させもするものであるが、翻って、そうした巨大頭脳、人間を触手のように扱えもしようとの [オメガ] (ティプラーの「想像」する人類再生を約束する仁慈溢れる機械の神) に至るまでの人類の歩んできた歴史的状況 —まさしくもの今日を含めての歴史的状況— はどうなっているのか。

はきと述べ、人間が [大なる思惑] によって [触手] のように操られていなければ説明がつかない、そう、「とおり一通りの状況では絶対に説明できないような式で」人間が操られていなければ説明がつかないようなありようが出ているとのことが垣間見れるようになっている —※くどいが、にまつわって、本稿では [911 の事件が発生することを「露骨」かつ「嗜虐的」に事前言及しているが如く作品らが数多ある] とのことが [容易に後追いできるのかたち] で具体的該当作品の問題となる箇所の摘示 (秒単位で示しての DVD 再生時間の呈示やオンライン上よりも確認できる該当文物の原著および訳書よりの原文引用による摘示) をなしたりもしてきた—。

人間がまるで [触手] のように操られていなければ成り立たぬ証跡がそこかしこに山と存在しているとして、である (本稿のこここれに至れりの段までにて呈示してきた証拠らの確認を請いたい次第である)。そうしたものが果たしてもってして [遠未来のオメガ] による手仕事・犯行かどうかは「別」問題であるものの (因みに筆者個人は [未来のオメガ] による犯行とは考えていないこと、一応、断っておく — [超光速通信] と呼ばれる技術と人間の脳機能操作を併用して用いることが出来るのならば、高性能機械が [近未来] から人間を葉籠中のものにできるとの発想法も出てくるが、そうしたことがありうるところとして大いにあったとしてもそれが [遠未来のオメガによる犯行] とは筆者は見えておらず、[「下位」機械知性] を人間に [神] (がかったコントローラー) として与えて目的のために手繰っているとの別の「肉体的実体を伴った」存在・種族による文明がそこにあると考えている—)、 [ラジコン人間 (電極を刺されて行動・感情両面にてコントロールされた猿の話は本稿 [補説3] にてなしている) の兵隊] のように [一条乱れずにグース・ステップをなしていた向きら] に支えられたナチス・ドイツの奉ずるスワスティカ(鉤十字)については、事実、

[蛸(タコ)の触手の象徴図式]

であるとの分析が前世紀よりなされていたし、現行でもナチス・ドイツそっくりのシンボルを

[世界を創造した蛸の触手]

として奉ずる少数民族がアメリカ大陸はパナマに存在しているとのことがある (これまた冗談

であろう?と思う向きもいるかもしれないが、すぐ後に具体的なる紹介をなす)。

だけではない。ナチス自体は [スワスティカ] (鉤十字/ハーケンクロイツ) をもってして

[ナチス・イデオロギーの体現物たる古代アーリア民族(と彼らが定義した人種的枠組み)の神聖なる象徴]

と唱道しもしていた中であってそれ(鉤十字)をして

[蝘(頭脳)の触手(頭脳に操られるだけの足)のシンボライズされたもの]

などとは当然に主張しなかったわけではあるが、彼らナチスのイデオロギー、なかんずく、[フォルクスゲマインシャフト](ドイツ語で民族共同体)のイデオロギーにまつわるころでは

「[個人]とは[民族]という名の精神・魂の[部品][分枝]にすぎぬのであって[個人]の人格は共同体の前では[無]なるものである」

との観点が色濃くも現われていたとのことがある(：ファシズム、すなわち、[全体主義]とはそういうものである。そうした思潮では個人はマス・ゲーム —[闇夜に松明で浮かび上がらせるハーケンクロイツ映像]によくも見られるようなマス・ゲーム— を実演するためのパーツとしてのみ存在をみとめられるとされており、そうしたありようと矛盾しない範囲でのみ [人格・属人的利益]をみとめられていたにすぎない —すくなくとも建て前上は、である—)。

換言すれば、

[蝘(頭脳)に操られるだけの触手のシンボル]

ともされ(下に図示するようにナチス台頭「前」よりそうも主張され)、実際に他所でそうしたものとして用いられているもの(スワスティカ;鉤十字)を

[人間は頭に対する触手であることを是とするイデオロギー]

をもってして奉じていたのがナチス・ドイツであったとのことがあるわけである。

そして、繰り返すが、[人類の歴史]というものは [一糸乱れぬ行進を「美」とする暴力装置] をもってして欧州に惨禍をばら撒いたナチス・ドイツが [葉籠中の存在] であれば、大いに得心もいこうとの、

[「とおり一通りの式では説明がつかない」コントロールの証跡]

で満ちている(：直上にて述べたこと、[後の出来事の発生に対する先覚的言及文物らの存在]にまつわる再言をくどくもなしたくなるようなところである。といったところでおよそ [金髪碧眼の生粋のゲルマン人の血統の者] には見えぬヒトラーのような男がいかにもゲルマン的な外貌を持つ者達を集めるべくも入隊資格を厳しく設定していたとの親衛隊組織を中核とするナチ国家にて [アーリア人(との仮想概念)の「現人神」] のように崇められていたことにも [ブラックユーモア] の問題が感じられるところではある)。

さて、ナチスの存在が反作用の問題として「結果的に」[オメガポイント(とされる重力の特異点の応用)の実現] にマンハッタン計画の是が非でもの推進(とその遺産の隆盛)を通じて寄与することになった —フランク・ティプラーはそれを否定するだろうが「結果的に」寄与することになった— として、である。そうした機序の中で到来が予見されている [機械の神](蝘の頭でもいい)が [仁慈溢れるもの] であると思えるだろうか。思えるはずがないではないか。

そもそもこの世界がたとえもってして

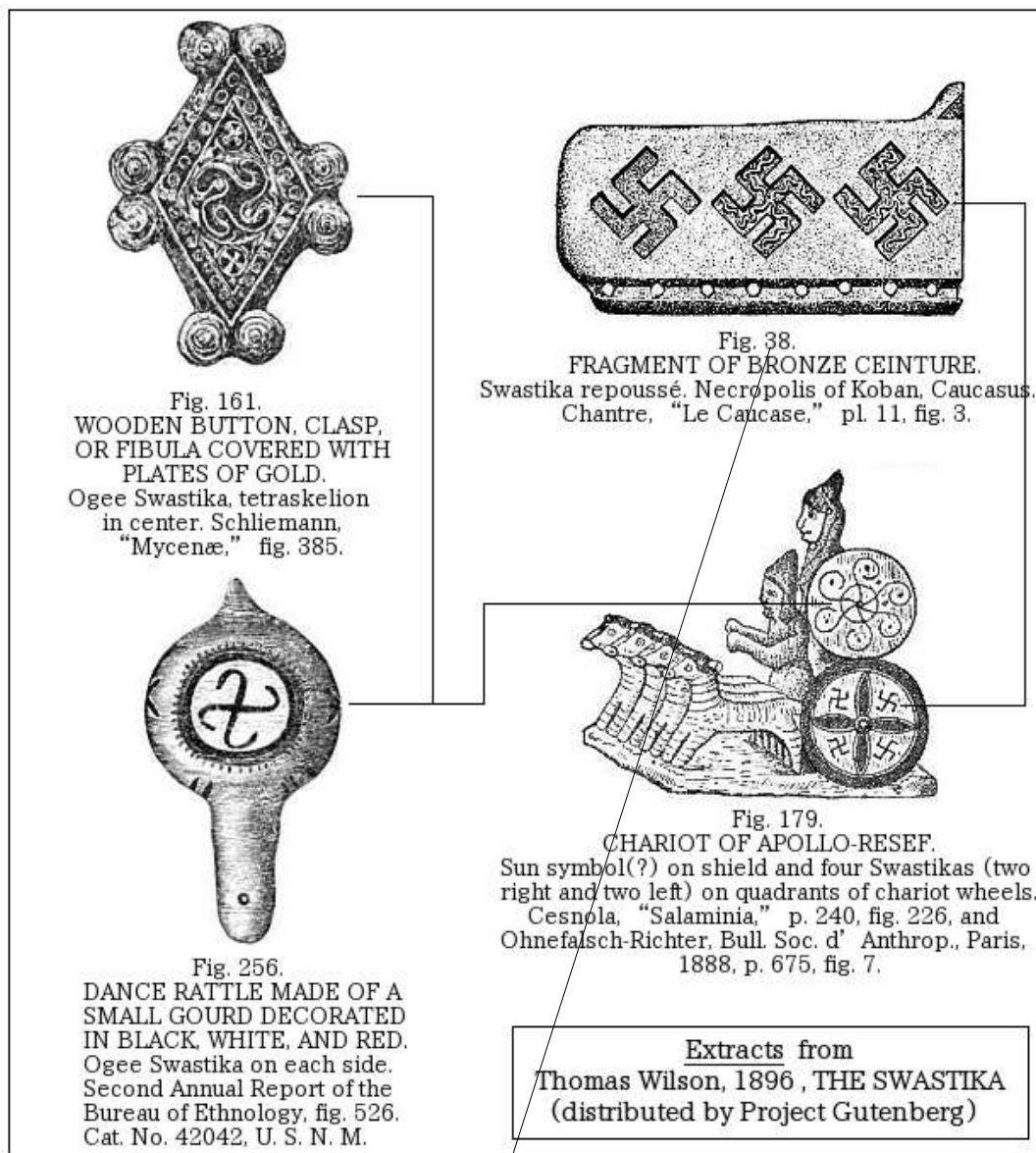
[オメガポイント]

にて終焉を迎えるとしても絶対にそれは人間のためではないと解されるようなことがこの世界

には山積しているとのことを忘れてはならない（上にて法網を掻い潜り罪を贖わなかったヨゼフ・メンゲレが〔双子「実験」〕と自称してやったこと（ただの嗜虐的殺人行為）がどういったものであるかにつき挙げたが、そうした残虐非道な「もの」（人間「未満」とも受け取れる存在には「もの」で十分であろう）が「結果的に」舗装してきた節ある領域に〔人間のための曙光〕が射していると考えの方がどうかしている、でもいい）。

以上のことに関わるところの図解をこれよりなす。

[図解として]



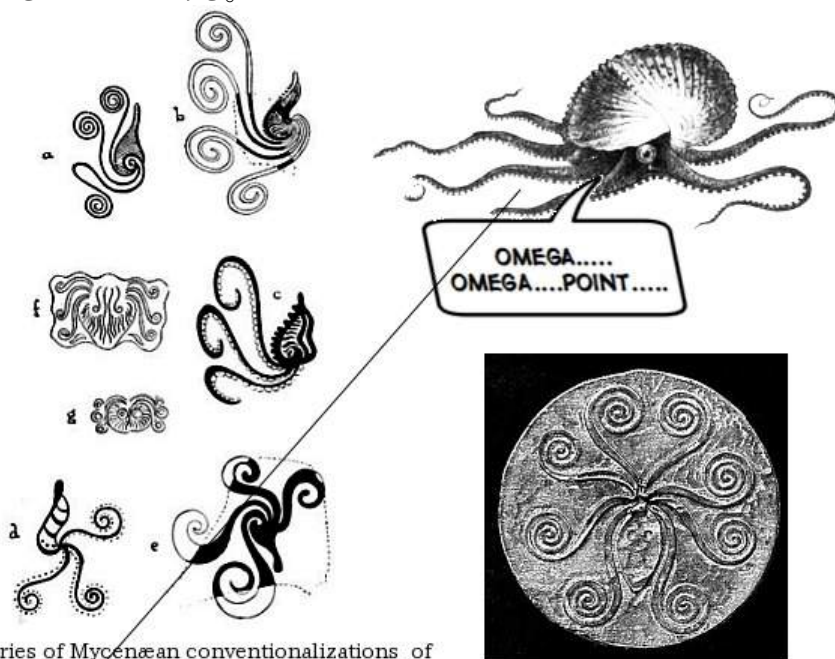
上掲図は 19 世紀末葉（具体的には 1896 年）に世に出た書籍でトーマス・ウィルソンという [スミソニアン博物館（大英博物館の米国版みたいなもの）とらえてもらってもよい] のキュレーター（学芸員）との来歴を有してもいたとの 19 世紀人の手になる *The Swastika* という書（Project Gutenberg サイトより全文ダウンロードできるとの書で 19 世紀末葉時点に特定されていた鉤十字使用事例について分析的に記しているとの書）にて掲載の挿絵らから解説文もそのままに抜粋をなしたものとなる —— 面倒なので一々細かい解説はしないが、そっくりそのままに上に図葉挙げている Fig.38（と出典たる 19 世紀末葉著作に振られてのもの）は現時点で紀元前 12 世紀から紀元前 5 世紀にコーカサス近辺で栄えた後期青銅器時代から鉄器時代移行期のコバン文明（Koban culture）にての墳墓地区より発見された遺物に見受けられるものとして紹介されている鉤十字紋となり、Fig.161 と振られてのそれはシュリーマ

ン(トロイア城址の遺構とされるものの発見でも知られるシュリーマン)も発掘に携わったミケーネ文明の遺物復元品に刻まれていたとされるもの、[鉤十字紋(スワスティカ)とトリスケリオン紋様(三脚巴紋)の中間形態の紋様]として紹介されているものとなる。対して、Fig.179と振られてのものはキュプロス島で発見された三脚巴紋(トリスケル)に類似する複合渦巻き紋とスワスティカが同時に刻まれた遺物として紹介されているものとなる。Fig.256はインディアンの集落(プエブロ)に由来するスワスティカおよびトリスケルと結びつく舞踏用の楽器と紹介されているものとなる——。

お分かりのことかとは思うのだが、上の19世紀末葉(ナチス台頭前)の著作 — Project Gutenberg 公開のものとして誰でもオンライン上より全文・全図葉の確認がなせるもの— に見るようにスワスティカ紋様は古今東西で用いられてきた紋様とされている。 そうもして「人類の歴史」と根深い関係にあるスワスティカ紋様(日本や中国など東アジアにて使用事例が見受けられる万字紋様のことは言うに及ばずインドなどあちらこちらで太古より用いられてきたとの鉤十字紋章) については以下、図示するような式で

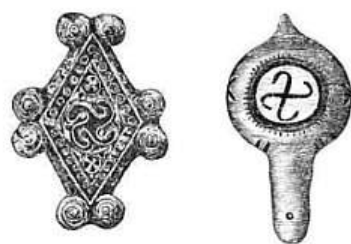
[蛸(たこ)の触手]

との関係性が早期より学者らに主張されてきたことがある、そして、実際に[世界を表象する蛸の触手の体現物]としてスワスティカを使用するインディオの民族集団が現行もってしてパナマに暮らしているとのことがある。



" A series of Mycenaean conventionalizations of the Argonaut and the Octopus (after Tümpel), which provided the basis for Houssay's theory of the origin of the triskele (a, c, and d) and swastika (b and e), and Siret's theory to explain the design of Bes's face (f and g) "

— Grafton Elliot Smith, 1919, THE EVOLUTION OF THE DRAGON (distributed by Project Gutenberg)



Nonsense?
(I don't think so.)



前掲図像群左上の図の出所は 20 世紀初頭に活動なしていた著名なオーストラリア人学者グラフトン・エリオット・スミス (Grafton Elliot Smith) の手になる 1919 年刊行の著作、**THE EVOLUTION OF THE DRAGON『竜の進化』**との著作となる ——※同著 THE EVOLUTION OF THE DRAGON、筆者が「相応の」者ら介在でトンデモ書籍化を強くもされそうになったために「相応の」商業出版を拒否することとした自著『人類と操作』の執筆に際し、その情報収集の中で検討をなしていた書籍ともなる。より具体的には英国論客デーヴィッド・アイクの流布した爬虫類人支配説の分析の一環として [世界各国の竜・蛇の伝承の調査] をなす一貫として筆者が検討なしていたとの 20 世紀初頭敢行著作ともなり、[竜伝承に見る構造上の進化] を「ひたすらに常識的目分量にて」説明しようというのがそちら著作、**THE EVOLUTION OF THE DRAGON** の内容となりもする (述べておくと、筆者は[伝承上の竜の形態変遷] などとの観点で説明がなしがたい奇怪なる竜・蛇伝承に伴う事柄らがこの世界に数多存していることにも知悉・通曉するに至っており、そうした竜・蛇伝承に伴う事柄に関しては、オンライン公開版に何とか焼き直した自著『人類と操作』(現時、往時の予断・偏見が強くも出過ぎているか、との一事では反省してもいる著作にして、他面、縁もゆかりもないとの下らぬ輩らのゴミの創造行為にしか活用(悪用)されていない節もあるとのことでその短期間での執筆行為に関して憤慨半分・失望半分の心境を抱きもしている著作)にも部分的なる言及をなしている) —— 。同著作 **THE EVOLUTION OF THE DRAGON** にての上抜粋部にはスワスティカ紋章がいかように [蛸の足] から形状発展してきたと考えられているのかについての往時 (今よりおよそ 100 年前の 20 世紀前半) の目分量が図示を伴って紹介されている (Project Gutenberg のサイトより誰でも全文ダウンロード、内容確認出来るようになっているとの THE EVOLUTION OF THE DRAGON にあってはその The Swastika の節の冒頭から “ Houssay (op. cit. supra) has made the interesting suggestion that the swastika may have been derived from such conventionalized representations of the octopus as are shown in Fig. 23.” 「Houssay は図 23 に見るようにスワスティカ(鉤十字紋様)がタコの因習化された表現形態から発展したものであるとの興味深い提案をなしもしている」との式で往時にあって [スワスティカ(鉤十字)紋様が[蛸の触手の因習的表象]であった]と目立つように表記されている —— そしてすぐ続いての段で言及するように事実、タコの足の表象としてのスワスティカを尊崇視しているパナマの部族が世界には存在している ——)。

上掲図の他図像についても一応、紹介しておくが、一部は先立ってそこより引用なしたとの **The Swastika** (1896)との著作にて掲載の図像の再掲であり、他の部は **Sea Monsters Unmasked and Sea Fables Explained** との 1883 年初出の著作 (こちらも Project Gutenberg サイトより全文ダウンロードなせるとの著作で今日のプレシオサウルス生存都市伝説、ネッシー絡みのそれのような[しょうもない]としか表しようがないとのシーサーペント絡みの伝説が巨大イカ・巨大タコの触手と結びついていることを示唆する多くの図葉らを(プレシオサウルス図像らと共に)はやくも 19 世紀末より持ち出していたとの伝で興味深くとれる著作)より抜粋なしたとの図像らとなり、の中には(上にて挙げているような)[ヒドラと死闘を繰り広げるヘラクレスを描いた遺物の模写の図葉]もが含まれている。

上もてスワスティカ紋様(ナチスの用いた鉤十字)が[蛸の触手]と結びつけられてきた、ナチスの台頭「前」より学者筋らに結びつけられてきたことはお分かりいただけることか、とは思いますが、物理学者フランク・ティプラーが[オメガ]と呼ぶ、ビッグクランチの特異点にて来臨するという[機械の神]がその計算リソースによって再生する人類をして当然に触手のように葉籠中のものにできるであろう(し、人間の歴史はこれまでからしてそうしたものであったとの風がある)とのここでの話に関わるところとしての[蛸とナチスと触手らの話]を今しばらく続ける。

次いで下の解説部をご覧頂きたい。

"Nazis gave a great deal of prominence to this new "folk community" in their propaganda, depicting the events of 1933 as a Volkwerdung, or a people becoming itself. The Volk were not just a people; a mystical soul united them, and propaganda continually portrayed individuals as part of a great whole, worth dying for."

——Wikipedia [Volksgemeinschaft] article

ナチズムの世界観において個人は独立の人格ではなく、共同体の精神と生をともに担う「共同体の分枝」、「民族の同胞」としてのみ存在を許された。これを端的にあらわしたヒトラーの言葉が、「民族が全てであり、個人は無である」である。またヒトラーが「自分自身のためだけに過ごせる時間というものは誰にも存在しない」と述べたように、一人一人の人生は民族への奉仕のみに貫かれるべきものであった。

——和文Wikipedia [ナチズム] 項目「現行」記載内容よりの引用（英文ウィキペディア [フォルクス・ゲマインシャフト] 項目よりの上にての抜粋部、[民族の魂の統合体] との発想にまつわるところからの抜粋部に照応する箇所よりの引用）

"A swastika shape is a symbol in the culture of the Kuna people of Kuna Yala, Panama. In Kuna tradition it symbolizes the octopus that created the world, its tentacles pointing to the four cardinal points."

——Wikipedia [Swastika] article

パナマに土着のインディオ末裔、クナ人の伝承では世界中で住古より用いられたスワスティカ型紋様（鉤十字）を「世界を創造した蛸（タコ）」に仮託しているという。そうした伝承を語り継ぐクナ人のコミュニティのシンボルはまさしくナチス・ドイツの国旗の「露骨なる」相似形となっている



[The flag of the Kuna Yala community] Image from Wikipedia [Kuna people] article



13th Mosaic by Coppo di Marcovaldo which has been said to inspire Dante.

数段に分けての図解部にあつての**最上段の部**で

[ナチスのドグマでは「個人は考える必要のない手足のようなものである」とされていた]

このことを示していることは —図解部をきちんとご覧いただければ— お分かりいただけることか、と思う。

(:上にあつての引用部に見るようにナチス・イデオロギーの軸をなしていたところの [フォルクス・ゲマインシャフト] の観念では [民族精神共同体とのものの中にあつて個人は全体に劣後するもの、全体のために人格も時間も全面的に捧げる(無なるものとする)べき存在である] とされていた 一目に付きやすいウィキペディアにあつて「現行、」“ The Volk were not just a people; a mystical soul united them, and propaganda continually portrayed individuals as part of a great whole, worth dying for.” と表記されているとおりである。それは [ファシズム体制下における民族共同体での人間は蝮の足の如きもの、全体のために死ぬことも厭わぬ(自身立命をときに考えぬ)触手であるべし] との考えと同義である)

同じくもの解説部にあつての中段の部では

[スワスティカ紋様 (ナチス・シンボルであつた鉤十字紋様) がパナマに住まう先住のインディアン部族クナ族にて [世界を創造した蝮(たこ)] を表象するものとされ、かつ、クナ族は現在に至つてなおスワスティカ紋様を [世界を創造した蝮のシンボル] として同部族の旗に用いもしている]

このことを呈示している (:これまた目につきやすい英文 Wikipedia の現行記述を引用なし、もつて、クナ族がスワスティカ紋様をいかにして 一ナチスのシンボルと視覚的に接合するような式にて— 世界を表象する蝮の足となしているのかは図内でもつて訴求している)。

また、同じくもの解説部にての下段の部では

【 [Sea Serpent (伝説上の巨大なウミヘビの怪物) のその実の正体ではないのか?] などとされた巨大蝮が船に襲いかかる図] (Sea Monsters Unmasked and Sea Fables Explained との 1883 年著作よりの抜粋図)

および

【 蝮のように蛇の触手を這わせて人間の魂を葉籠中としている悪魔を描いた宗教画] (13 世紀にコッポ・デル・マルコヴァルド Coppo di Marcovaldo との修道士によつて製作されたモザイク画となり、同画を目にしたフィレンツェ出身のかのダンテに [三面でもつてして人類の裏切り者を喰らうルシファー Lucifer] に関するインスピレーションを与えたのではないかとされているようであるとのフィレンツェの教会画)

を挙げもしたものとなる。

(どうして、以上、一言概要解説なしでの図像らを呈示することにしたのかは続いての記述内容からご判断いただきたい (先立って述べれば、そこには [神] そのもののフリをなし、社会契約によつて [リヴァイアサン Leviathan; 聖書にみとめられる大海獣] と呼称される国家を形成させもしていたのだと考えられる [巨大なる意志] の体現を見出しているとのことがある、[欺く存在] [ありとあらゆる醜悪な八百長 (Match Fixing) で人類の歴史を彩つてきた存在] の代行者を見出しているとのことがあるからである))。

さらに続いての図らをご覧いただければ、と思う。

" Social Contract " & Leviathan (1651)



Leviathan symbolized by the uroboros

法制史上でもその事績が極めて重要視されている17世紀英国の著名哲学者トーマス・ホブズ Thomas Hobbes は [万人に対する万人の闘争] (英語: war of all against all, ラテン語: Bellum omnium contra omnes) を否定するとの名目で [自由なる個人らが国家に権力を一部委譲する] とのいわゆる [社会契約思想] (Idea of Social Contract) を唱えたことで知られる。部分的には至極、理に適った申しようともとれるが、問題はホブズが [社会契約にて成立する統治体] を「何故なのか」リヴァイサン ー旧約聖書に登場する巨獣で [尾を噛む蛇] (ウロボロス) にて体现されると伝わる存在、そして竜にして蛇たる Satan にも中世では仮託された存在ーと表したことにある。リヴァイアサン (終末に屠られるとも伝わる獣) は [永劫回帰] (Eternal Return) の象徴であるウロボロスにて表現されてきた存在となっており、永劫回帰とは (先立って詳述なしているように) ティプラーが [ナチズム] とワンセットにしてオメガ (終末に到来する機械の万能神) の実現のためになんとしても否定せねばならないとしている概念となっていることが着目されて然るべきだけのことがあるのである (ひとつに Frank Tipler がトーマス・ホブズ Thomas Hobbes 由来の思考法として否定すべくものとして [テセウスの船] Ship of Theseus との概念を挙げていること「も」ある)

" Crimes against humanity committed by the Nazi regime (macro scale) : Between 1941 and 1945 Jews, Gypsies, Slavs, communists, homosexuals, the mentally and physically disabled and members of other groups were targeted and methodically murdered in the largest genocide of the 20th century. In total approximately 11 million people were killed during the Holocaust including over 1 million children. Of the nine million Jews who had resided in Europe before the Holocaust, approximately two-thirds were killed. " — Wikipedia [The Holocaust] article

人類史上に現出した政治権力の中で最も巧緻に長けた虐殺行為を組織的に演じて見せたナチズム。その犠牲者数は1100万に迫るとの見立てがなされている (: 第二次大戦中の枢軸国・連合国の総死亡者のかなりの割合が [無抵抗下で組織的に虐殺された人間] となっているとのことである)

Symbol of Eternal Return

" A rejection of racism, that is, a belief in the inherent superiority of any group of intelligent beings — as I showed above, a notion intimately connected with the Eternal Return — is also essential for the Omega Point Theory. As I demonstrated in the previous chapter, a crucial step toward the Omega Point is the colonization of the universe by intelligent robots, by self-reproducing machines. Many humans (including many who should know better) regard the creation of such people — I call intelligent robots “people,” because that is what they are — with horror, and initially feel that the creation and reproduction of such machines (people) should be prohibited by law. " — Frank Tipler, 1994, The Physics of Immortality

物理学者フランク・ティプラーは上の再引用部記述に見るように [人種差別] を [オメガ (機械の神) の先駆となる知的機械ら] にまで適用しかねない「人間の」気風を批判し、ために、Frank TiplerはOmega Point成立のために [Eternal Return [永劫回帰] とワンセットになったのナチズムの否定] と同時にNazi的人種差別の否定をも執拗になしている。

Nonsense ? I think so .

(because I think of [Rise of Nazi Germany supported by the masses of people (brain dead "nodes")] as "Match Fixing" .)

図に付しての細々とした解説文を検討いただければ、呈示の図らによって何を示したいのかは大体にしてご理解いただけることか、とは思うのだが、上記の図らにて示したいことはまとめれば次のようなところとなる。

17世紀英国に生きた思想家としてトマス・ホブズという人物がいた。同トマス・ホブズ、法制史（今日の日本国憲法もその流れで論じられることが多い）との今日の法律体系に至る歴史的道筋）を学ぶ者にとり、政治学（なるもの）を学ぶ者にとり、そして、日本で[世界史]の科目を「お受験」にて使うことを選択することにした者にとり、その名の把握が避けては通れぬとの歴史上の著名人となっており、その主著『リヴァイアサン』にて

[万人の万人に対する闘争状態を脱するために人間 一この場合、ホブズ流に述べるところの野生の王国にあっての「自由」人— は [社会契約] (ソーシャル・コントラクト) を結んで権力を国家に委譲する必要がある]

とのことを主張した向きである（上にて呈示の図はそうした内容のホブズ主著『リヴァイアサン』のよく知られた口絵となっている）。

何故、[国家]という存在が暴力装置を独占でき、また、人々の上に権力を行使できるのかについての合理的説明を人類史にあって目立って呈示してみた 一頭の具合がよろしくはない（あるいはそうもしつらえられた）との向きからはそこからして理解できているのかには疑義があるのだが、今日の我々文明人から見れば至極当たり前のこととして、私怨に基づく私闘を許せば殺し合いに次ぐ殺し合い、際限なくもの闘争に発展しうるから権力を取っても国家に委譲し法による支配を徹底なさしめるとの言い分を示して見せた— とのこと

で有名なそのホブズの主著『リヴァイアサン』にて [「社会契約」による権利委譲によって成立している国家（との名が与えられての人間集合体）] はリヴァイアサンと呼称されているのだが、リヴァイアサンとはそも、どういった存在か。

リヴァイアサンとは旧約聖書に登場する大海獣のことを指す。

その聖書に見るリヴァイアサン、

[[渦] との語と語感として強くも結びつくことされ、また、[頭を噛む蛇の形状] (いわゆるウロボロス形状) にて表象される存在]

[旧約聖書にて [世界の終末に屠られる] と規定されている存在]

「とも」になっている。

同リヴァイアサンについては英文 Wikipedia [Leviathan] 項目にて

(以下、引用なすところとして)

“ In Psalm 74 God is said to "break the heads of Leviathan in pieces" before giving his flesh to the people of the wilderness; in Psalm 104 God is praised for having made all things, including Leviathan; and in Isaiah 27:1 he is called the "wriggling serpent" who will be killed at the end of time. ” (訳として) 「旧約聖書詩篇 74 篇 (Psalm 74) にて神は野生の者らにその肉を与える前にリヴァイアサンの頭を粉々に砕いたと表記されている。旧約聖書詩篇 104 節 (Psalm 104) では [神がリヴァイアサンを含む万物を生成した] とのことで礼讃されるような記載がみとめられる。そして、

イザヤ書 27 章第 1 節 (Isaiah 27:1) でリヴァイアサンは [終わりの時 (訳注: 旧約聖書にて記される唯一神に従わぬ不義なる者達が誅される時) に殺される, のたうつ獣] と表されている (引用部はここまでとする)

と記載されているような存在となる。

尚、上掲図に付したリヴァイアサンの構造が [尾を噛む蛇] の似姿を呈していることに見るように同存在は

[ウロボロス(Uroboros)構造]

にて表象されてきたことが知られている —— ※リヴァイアサンが [ウロボロス構造] を呈することについては Project Gutenberg のサイトにて公開されている著作 **The Astronomy of the Bible: An Elementary Commentary on the Astronomical References in the Holy Scripture** 『聖書に見る天文学 神聖なる文書にあつての天文学的言及に対する初歩的解説として』 (1908 / 著者は Edward Walter Maunder という往時、太陽黒点の研究で名を馳せていた天文学者との著作) にあつて (以下、そちらより引用なすとして) “ **"Leviathan" denotes an animal wreathed, gathering itself in coils: hence a serpent, or some great reptile.** The description in Job xli. is evidently that of a mighty crocodile, though in Psalm civ. leviathan is said to play in "the great and wide sea," which has raised a difficulty as to its identification in the minds of some commentators. In the present passage it is supposed to mean one of the stellar dragons, and hence the mythical dragon of eclipse. Job desired that the day of his birth should have been cursed by the magicians, so that it had been a day of complete and entire eclipse, not even the stars that preceded its dawn being allowed to shine.” (訳として) 「リヴァイアサンは [環をなす獣] [それをしてとぐるをなすようにまとまりもしている獣] として示されもし、その上、蛇、相当程度巨大なる爬虫類とされてもいる。旧約聖書詩篇ではリヴァイアサンは大洋にて自儘に振る舞っているとされているのだが、旧約聖書ヨブ記にての描写では同リヴァイアサン、明らかに強力な鱈の類として描写されている。今日の観点ではリヴァイアサンは星座に見る竜らの一をなすような類とも考えられており、[蝕を体現する神秘的なる竜]とも見られている。(旧約聖書ヨブ記に見る)ヨブが彼の生誕の日を(厳しい試練の中で)呪われたものであるように、その日こそは完全かつ全般的な蝕の日である呪われた日であるようにとまじない師の類に望んだ折、夜明けに先立って輝くことを許された星々とてないようにと希求しもしていた (こともそうした観点に拍車をかける (訳注として: 旧約聖書ヨブ記にてリヴァイアサンの名が登場してくる段でヨブ記主要人物ヨブが自身の生誕の日をして [日がな一日中、闇に覆われた日であれ] と希求していることを受けての申しようにとれる) (引用部はここまでとする) との記述がなされているように (リヴァイアサンは [皆既日食を体現したドラゴン] であるなどとされつつ) [環をなす獣] [それをしてとぐるをなすようにまとまりもしている獣] としてよく形容され、それがゆえに、[ウロボロス紋様の体現存在] と見られ、かつ、描写されてきたとの経緯があるとの存在である (につき、ものの言われようとしてはエルアザール・カーリール (Eleazar Kalir)、5 世紀に生きたとされる初期のタルムード (ユダヤ系民族の口伝律法) 伝道者でもあった同人物が遺した詩句にてリヴァイアサンが [世界を囲み頭で尾を啣(くわ)える存在] といった描写をなされているといったことが巷間語られもしていたり、上にて抜粋なした古文書に見るように「実際に」同じくもの [頭で尾を啣えた形態] (ウロボロス形状) に

てリヴァイアサンが描写されたりもしている))——。

リヴァイアサン —再言すれば、トマス・ホブズが規定するところの人間存在が [ソーシャル・コントラクト; 社会契約] にて権力を委譲する先の統治体の総称でもある— が

[頭で尾を喰える蛇]

としての

[ウロボロス紋様]

の象徴であるとして、である。

そちら **[ウロボロス紋様]** というのはフランク・ティプラーがナチス・ドグマとワンセットのものとして全面否定していたとの [永劫回帰] の象徴物「でも」ある (:たとえば、エターナル・リターン、永劫回帰にまつわっての英文 Wikipedia [Eternal Return] 項目にあって(そちら現行記載内容を引用するとして) “ The symbol of the Ouroboros, the snake or dragon devouring its own tail, is the alchemical symbol par excellence of eternal recurrence.” 「ウロボロス・シンボル、自身の尾を喰らうとの蛇あるいは竜の象徴は [永劫の回帰再現にまつわってのもの] に相当する錬金術上のシンボルである」と表記されているとの存在がウロボロスである)。

国家権力 (政治権力・行政権力・官僚的統治体、言い方は何でもあり、であろう) の表象物たるリヴァイアサンが [永劫回帰] 表象物でもあり、また、その [永劫回帰]

が否定されるとの状況でこそ、物理学者フランク・ティプラーの言によれば、 [機械の神 (オメガ) が未来にて到来し、過去に遡って全ての人間を機械の中にて再生するポイント]

が実現されるなどと「目立って」主張されているとも述べられる。

といったことが「揶揄する」とのレベルを越えて「嗜虐的となっている」とのほどにまで [アイロニー] (皮肉) として機能してもいる理由として次の **i.** から **iii.** のことが挙げられる。

i. 「このような世界で」永劫回帰が全否定されるような中でこそ [人類を救済する神] が到来する —— 正確にはビッグクランチの最中にある閉じていく宇宙の特異点 (ブラックホールの特異点にも類似するそれ) にあって計算リソースを究極レベルにまで拡大することが出来し、のような中では機械が世界そのものを再現できる万能機械ともなり、となれば、そうした機械は神に見紛う情報処理能力で一瞬のうちにありとあらゆる状況をシミュレート、人類を再生する神となりうる—— とする物理学者フランク・ティプラーではあるが、そのティプラーが [閉じゆく宇宙の中での宇宙の復活] とは相容れぬものとする [永劫回帰] (ティプラー流のリソース活用できるビッグクランチとの状況に至らずに繰り返していくありよう) の表象物となるウロボロス紋様にて体現される大海獣リヴァイアサンが

[旧約聖書にあって [終末の折に神によって殺される獣] と規定されている (旧約聖書イザヤ書 27 章 1 節等を典拠にそうも規定されている)]

とのことは [不気味] と受け取れるところである。

リヴァイアサン —再言するが、旧約聖書にて終末の折に屠られるとされ、永劫回帰の象徴物としてのウロボロス形態をも取る存在— は著名古典を介して ([「万人」の万人に対する闘争] を部分的に否定してこそ成り立つ) [国家・人類の統合体] と解されるようになっていくわけではあるが、リヴァイアサンが斃 (たお) れるとのことは詰まるところ、人類の文明 (正確には [人間存在が養殖種とされながらも構築することを強要されてきた「それらしい」紛い物] かもしれ

ないが)が否定されることにも通底し、ティプラーの申しようはシンボリズムの観点からは[人間文明の否定]によってこそ成り立つ[理想郷の到来]とも受け取れるとのことがあるから問題になる(ティプラーはそうもしたことを無論、明示的に述べていない)。

ii. そこまで言及なしてこそ意味をなすこととして、上記 i. の点 ([リヴァイアサンの最終的存在否定](あるいは旧約聖書にて規定される終末の時にての役割終了)と同義ともなる永劫回帰の否定との点) とのアナロジーを感じさせる ところとしてティプラー著書 The Physics of Immortality にあっては『リヴァイアサン』をものしたことで極めてよく知られるトマス・ホブスへの批判的言及もが なされているとのことがある。 およそ次のようなかたちにて、である。

(直下、The Physics of Immortality : Modern Cosmology, God and the Resurrection of the Dead『不死の物理学:現代の宇宙観、神、そして死者の復活』にあっての IX. The Physics of Resurrection of the Dead to Eternal Life 第九章[永遠の命に向けての死者の復活の物理学]の章にての The Pattern (Form) Theory Versus the Continuity Theory of Identity [パターン(形態)論と[同一性における連続性にまつわる理論]の対立]の節よりの引用をなすとし)

The English political philosopher Thomas Hobbes used the Ship of Theseus to attack the pattern identity theory which I require for the Omega Point resurrection theory:

... two bodies existing both at once would be one and the same numerical body. For if, for example, that ship of Theseus, concerning the difference whereof made by continued reparation in taking out the old planks and putting in new, the sophisters of Athens were wont to dispute, were, after all the planks were changed, the same numerical ship it was at the beginning; and if some man had kept the old planks as they were taken out, and by putting them afterwards together in the same order, had again made a ship of them, this, without doubt, had also been the same numerical ship with that which was at the beginning; and so there would have been two ships numerically the same, which is absurd. The nonidentity of systems in different spatial positions is not true in quantum mechanics, and actual physical systems are quantum systems. In particular, a human being is merely a special type of quantum system. Thus the quantum criterion for system identity applies to humans, and hence two humans in the same quantum state are the same person: if a “replica” of a long-dead person were made which was identical to the quantum state of the long-dead person, the “replica” would be that person.

(補ってもの拙訳として)

「英国の政治哲学者トマス・ホブスは私ことティプラーがオメガポイントにあっての[復活]の理論のために要求もしている[パターン同一説] (訳注:死亡した人間の喪失した脳を再生することができるのか、そして、再生された脳は果たして本人のそれと述べられるのかとのことにまつわる理論) を攻撃するようなところに通ずるものとして[テセウスの船]の論理を用いている (多少長くもなつての訳注として: [テセウスの船]とは[あるもの(船でも何でもいい)の部品が漸次的に交換されていった際、最終的に全部の部品が入れ替えられたのなら、それは[元と同じもの]と言えるのか?]との問題にまつわる用語となり、[人間の脳を漸次的にナノマ

シン由来の人工物などに置き換えていった場合、それは元と同じものと言えるのか?』といった[精神転送](機械に人間の脳や精神を移植しようとの試み)にまつわるトピックなどにてよく持ち出される「一部で有名な」概念となる——現行の和文ウィキペディアにての端的なる解説を引けば、(以下、引用なすとして)“テセウスの船(テセウスのふね、英: Ship of Theseus)はパラドックスの1つであり、テセウスのパラドックスとも呼ばれる。ある物体(オブジェクト)の全ての構成要素(部品)が置き換えられたとき、基本的に同じであると言えるのか、という問題である”(引用部はここまでとする)との部がそちら[テセウスの船]にまつわる通俗的解説となる——(訳注の部はここまでとする)。

([テセウスの船] にまつわるところとしてトマス・ホブズ曰くのとおりとし)

「二つの物が同時に存在しており、数的なる側面に着目したうえでも同じであるとする。たとえば、古い板材が新しい板材へと何度となく交換されていって成り立っているがために[違い]が問題になるとの [テセウスの船] についてアテナのソフィスト(弁論家)が論ずるところとして、結局、板材は交換されているのであり、まったく同じ注文単位でそれらを後にあって取り付けることで船を再びしつらえているのだとすれば疑いもなく数的な単位で見て当初の船とまったく同じものがあるとのことになる、数的な側面で見れば、二つの船は同じものである、とのことになるが、しかし、それは不合理な観点ではある」

(以上、トマス・ホブズが呈示する [テセウスの船] にまつわる問題に応ずるところとして) 量子力学にあっては異なる空間的位置にての系の「非」同一性は真実ならざるところであり、そして、現実の物理的な枠組みは量子力学の系として成り立っている (訳注: シュレーディンガーの猫の論理、観測することによって確率にて定義される存在が収縮し存在が確定するとの論理に見るように量子力学にあっては[存在]は確率の波によって成り立っている、それがゆえに、物体は(元とは異なる)異なる位置にても存在しえるとのことを述べたいのであろうと容易に判じられるところである)。

押し進めれば、人間存在もまた [量子的な系にあっての特殊な一類系] にすぎない(との言いようがなせる)。そうもして系の同一性にまつわる量子的基準が人間にも当てはまり、同一の量子的状態を呈する二人の人間は同一人物であると言える。

すなわち、もし仮に

[長らくも死んでいた(復活対象となる)人間に固有の量子状態]と同じ量子状態で成り立っているレプリカを顧慮するならば、そのレプリカはまさにその人間であるとのことになる」

(補つても訳はここまでとする —※—)

[直上引用部に対する(多少長くもなつての)補足として]

因みにフランク・ティプラーは

[量子的特質より同じ存在と定義できる(と彼ティプラーが強弁する)人間の再生]

については [計算リソース] の問題からの解説にも注力している (上にての引用部とあわせてティプラーの [復活] 思想にまつわる思考法の両輪をなすところである)。

すなわち、The Physics of Immortality にあつての前半部にて人間の脳およびそのニューロン構造を

[CPU (パソコンなどの中央処理装置) 同様の演算回路]

としてとらえもして (日本語では [神 (かみ) の経] と書くニューロンこと [神経] は電流をやりとりする情報素子としての機能を伴っており、その意で機械との類似性があるためにそうもとらえもして)、そちら処理速度、1 秒間に浮動点処理演算を CPU よろしく何回実行できるかを基準にしての人間の脳の処理速度を

[記憶 (の再現物) としての情報の処理パフォーマンス (記憶の脳内再生と情報に対する分析) のありよう]

としておよそ [10 兆フロップス (10teraflops / 1 秒間に 10 兆回浮動点処理演算をなす機械と同等の情報処理速度) 相当] から (ティプラー自身は強く支持しないとす多めの見積もりであるとの) 上限値 [10 万 × 1 テラフロップス (1 兆フロップス)] までであろうなど見積もりもしており (ティプラーは [人間] として振る舞える、そう、コンピューターに詳しい向き流に言えば、[チューリングテスト] ([毒入り林檎] を喰らって自殺したとされるコンピューター発展の恩人とされるアラン・チューリングに由来するコンピューターの知能にまつわる基準) に易々と受かるぐらいのコンピューターの演算能力を どんなに多めに見繕っても [100000teraflops 程度 = 10 万 × 1 兆フロップス、100petaflops] であろうとし、1994 往時にはよくも見積もったものだど解されるオプションを呈示している)、その点に関して次のような話をなしている。

(以下、The Physics of Immortality にての II. The Ultimate Limits of Space Travel 第二章 [スペーストラベルの究極的限界として] にあつての Can a Machine Be Intelligent? [機械は知的なりうるのか] の節より引用なすとして)

So how rapidly does the brain process information? Well, about 1% to 10% of the brain's neurons are firing at any one time, at a rate of about 100 times per second. If each neuron firing is equivalent to a flop, the lower number gives 10 gigaflops. If each synapse is equivalent to a flop at each firing, then the higher number gives 10 teraflops. Jacob Schwartz estimates 10 million flops as an upper bound to the amount of power required to simulate a single neuron. If this is the actual requirement, then 100,000 teraflops would be required to simulate the entire brain.

(拙訳として)

「ではどのぐらいの速度で人間の脳は情報を処理するのか? よろしい。[およそ一秒に 100 回の水準] を一回分とすれば、人間の脳のニューロンのうちの 1% から 10% が発火 (電氣的通電とでも訳すべきか) していることになる。各々のニューロンにての電氣的プロセスを 1 flop (フロップ / 1 秒間に浮動点少数演算 (Floating-points Operation) が何回できるかの処理速度を指す) と等しいものととらえれば、低く見繕つての 100 億 flops との情報処理効率が導出されることになる (訳注: ここでは人間が眼にてとらえた映像を [機

械的解像度] や(そのレベルでの解像度での)[映像の脳内での再現処理能力]と結びつける、そういった観点と親和性強いものの見方が呈されており、については、ティプラー自らが別の段にて解説しているところである)。もしシナプスそれぞれの電氣的発火作用が 1flop と等しいとするのならば、高く見繕っての人間の脳の情報処理量は 10 兆 flops となる。ヤコブ・シュバルツ (訳注: 著名なコンピューター科学者兼数学者) は 1000 万 flops が一つのニューロンを機械的に再現するうえで必要な処理量の上限值となると見繕っている。もしこの試算が現実の要求水準となっているのならば、脳の全作用をシュミレートするのに要求されるのは 100,000teraflops (100 ペタフロップス) とのことになる」

(訳を付しての引用部はここまでとする)

(上に対する補足 一補足の中の補足一 として)

以上引用なしたような
[ティプラーの申しよう]

については Super Computer の水準が既に [1 兆フロップの 1000 倍に相当する petaflops の水準に達している] との(本稿本段執筆時点での) 現在の状況にあつてはいささか妥当性を失っていると解されるようにもなっている。

現在では人間の脳活動の計算機上の再現 (すなわち、機械の中に人間の脳と同様の電氣的情報処理活動を純粹再現するとのやりよう) に必要な浮動点少数計算量についてはティプラーの最もハードな見通し「よりも」およそ 10 倍スケールに見積もられるに至っている。に関しては英文 Wikipedia [Mind Uploading] 項目 (マインド・アップローディング、すなわち、機械に精神を移送するとのトピックにまつわる [精神転送] にまつわる項目) にあつて Spiking neural network [人間の脳の神経活動] の再現に要される Flops が

[10 の 18 乗] フロップス (10^{18} flops; 1 exaflops すなわち 1 teraflops $\times 1000 \times 1000$ 、1 兆フロップスの 100 万倍に相当する 1 エクサフロップスすなわち 1000 petaflops)

と呈示され、そうもしたエクサフロップス・クラスの処理速度のコンピューテーション実現可能見積もり年が 2019 年であるなどと表記されている (ただし人間の脳活動の十分なシュミレートには 2045 年まで半導体集積率の倍々増加などに後押しされての流れを見守る必要があるとの見立て「も」ある) とのことがある。以上、本稿執筆時現在時点での科学界目分量に触れた上で書くが、ティプラー言い分は「それなりには」との伝では、現行現時点での見積もりに近いのではないかと受け取れるところではある (引用部に見る計算機学者ヤコブ・シュバルツの申しようを引いての 10 万「テラ」(兆)フロップスを必要とするとの申し分では数 10 分の 1 のオーダーで現行のエクサフロップス—100 万「テラ」フロップス— に近いようにも「とれる」)。

話が細かくもなっている風もあるが、といったことを全て割愛、脇に置いておいても、とにかくも、「ティプラーの目線では」
[人間の機械的・計数的再生]
が可能とみなされている —実際にそうなのかどうかはここでは問題視していない— ことはよく分かろうところか、とは思う(理解しようとの意志の力があるのならば大学卒ぐらいの英語力と理解力、そして、情報処理技術にまつわる基本的知識があれば難なく理解できようとの式にてティプラーは同じくものことにまつわる目分量を彼の一九九四年の著作『不死の物理学』の中で呈示している)。

ティプラーのそうした見解披露のなしようについては

[人間に [意志] や [内面にてのここに存在するとの認識] (いわゆるクオリア)をもたらず機序] ([魂]との言葉で表されるものにまつわる機序)

を「顧慮していない」との意味でナンセンスと受け取れる側面(本稿筆者のような人間から見ればナンセンスと受け取れる側面)があるとのことはあるのだが(情報工学の基礎が分かっている人間からすれば自明だろうが、コンピューターというものはプログラムされた通りに振る舞うものであり、の一貫として、[ベイズ数学の応用機序] から人間の行動(モニタでとらえた動作やマイクでとらえた発声)に応じてどういうシチュエーションでどういう応答をなすべきかを [学習] していくこともあるだろうが、根本的にそこに [魂] があるかといえば「ない」としか言いようがない、「プログラムされた枠組み; [プログラムされたドグマや思考らしく見えるもの] はあっても [精神性] はないとの機械が「人間のフリ」をしているにすぎない」としか言えないとのことがある —若造の折柄にこれ修行か、と考えて、情報処理業界に身を置いたこともある人間として「[類推エンジン]といった名前を与えられていてもプログラムは所詮はプログラムにすぎない」と見聞きし納得させられたことを念頭・前提に書くが、それが世界における人工知能というものの本質である。ただし、CPUリソースの奪い合いにて進化することを強いられてのプログラム世界の住人である [人工生命;アーティフィシャル・ライフ] についてはあたかも本当の生き物のような動き方を呈することはある(だが、超高度人工知能に対して [遺伝子機械とも時に(皮相的に)表されるような肉体を伴った生体] よろしくの自己保存・生存欲求をプログラムするようなことをするのは映画『ターミネーター』よろしくの [自殺行為] たりえるから当然にそのようなことが企図されることはないのではと思う—)。といった重要なこと、機械に人の魂を再生できるのかとの加えもしての [(内発的衝動を有さぬ) 機械は機械にしか過ぎぬ] とのことを敢えても置けば、とにかくも、フランク・ティプラーが人間の脳機序の機械の中での再現を計数的に述べているとの向きとなることに相違はない。

(引用部に対する補足はここまでとする)

上にての先行引用部（及び、にまつわっての補足の部）が必要以上に長くなった感もあるが、ここでの本題に引き戻しもし、ティプラーが『リヴァイアサン』主唱者トマス・ホブズの申しよう —（『リヴァイアサン』それ自体から離れてのホブズの [テセウスの船] にまつわる申しよう）— をそのオメガ実現のための反論の対象としている —ホブズの持ち出していた [テセウスの船] を引き合いに出しての批判が的を射ているのだとすれば、脳の中身をすべて取っ替えられた人間は元と同一のものであるわけではないとされる（から機械の神による復活なるものを主唱するティプラーには都合が悪い）のでそのことを反論の対象としている — とのことは

〔(旧約聖書に見る大海獣としての)リヴァイアサン —ホブズ主著と同じくもの [リヴァイアサン]— にて体现されるウロボロスとワンセットの永劫回帰〕

の否定がこれまたオメガ実現のためにティプラーによって強弁されていることと併せて見もし、「出来すぎ」と映るとのことがありもし、そこからして不気味であるとのことがある。

iii. (ティプラーの申しようが問題になることについての「分けてもの」箇条表記を続けるとして) ティプラーが [[永劫回帰] とワンセットのもの] としてその忌むべき特性をあげつらねているナチズムではあるが、([社会契約]を個人を無にするとかたちで押しつけ、かつ、敵対者(と認定した者)は滅ぼすとのドグマを押し進めたとのナチス体制に見る) ナチズムに対するカウンター・アクションによってスタートを見たマンハッタン計画、同マンハッタン計画より産まれ落とされることになった粒子加速器研究機関らが「後付けで」(ティプラーが物議を醸した書籍、The Physics of Immortality 『不死の物理学』を世に出した折から見ても「後付けで」)

[フランク・ティプラーがオメガポイントと結びつけて語りもしている [特異点]] に近接するもの(ブラックホールの重力の特異点)をこの地上に実現すると考えられるように「なった」とのことがある(事細かにその時系列的な意味での不審さについてつい先立ってくどくもの解説をなしてきたことである)。

だけではない。

そういう時系列的に見ての不気味さが際立つティプラーの申しように側面から関わるようなところとして [ナチス(ティプラーに言わせると(ウロボロスにても示される) [永劫回帰]を体现してのスワスティカ・鉤十字を礼讃していたニーチェかぶれの政党)の悪行] を [ブラックホール・ワームホールの類を地上に再現する装置の建設計画設計図] と結びつけた小説が 1980 年代に世に出ており、その小説『コンタクト』からして [嗜虐的な反対話法で溢れた小説] となっていると指摘することができるようになっており、かつ、同『コンタクト』については [奇怪なる予言的言及 — 何らかの条件にまつわる意思表示としてか、かの [911 の事件] を起こすとのことにまつわる予言的言及 — と多重的に結びつく小説] と指摘できるようになっているとのこともあるのだからいよいよもってしてティプラーの申しようの胡乱(うろん)なところが際立ってきもする(カール・セーガン小説『コンタクト』にあつてのそうした側面については(委細を先行する段に譲るとの式でながら) 振り返っての細かき再言及をつい先ぞの段にあつてもなしている)。

(i. から iii. と分けもしての部位の記述は以上とする)

先に挙げた図 —(国家に人間は権力を委譲すべきと説いたホブズ『リヴァイアサン』と

渦と結びつけられ永劫回帰のウロボロスとも結びつけられるとの聖書に見る怪物リヴァイアサンの関係性にまつわる図) — を通じて

[フランク・ティプラーによるナチズム (⇔国家全体主義体制) および永劫回帰 (ウロボロスにて体现される永劫回帰) の執拗なる否定]

との兼ね合いで訴求すべきかと判じたことを述べるための部、その委細表記としてはここまですとしたい — ※まじめな読み手には理解頂けることかと思うが、問題はテセウスの船 (⇔ホッブス主張) のティプラー否定との兼ね合いひとつとってもあまりにも多くが多重的に接合するように仕上がっているとのことである (についてはティプラーがリヴァイアサンのことをなんら述べていないため、そうした心証がよりもって強くもなる) — 。

さて、(話があまりにもややこしくなりすぎているくらいがあるとも思うので)、ここ枠で括っての図解部で何を述べてきたのか、もう一度あらためてみることにする。

(ここ図解部では次のことらに帰着することを事細かに解説してきた)

a. [ティプラーがオメガポイントの実現のためにその存在そのものを強くも否定しているとの [ナチズム] および [ナチズムと結びつき永劫回帰を体现しもする(とティプラーに主張されての) 鉤十字; スワスティカ] の両者だが、それらナチズムおよびスワスティカの双方が極めてできすぎているとのかたちで[蛸(たこ)の触手]に通ずる沿革と結びついているとのことがある (→スワスティカ紋様の人類にあっての始原的使用は蛸と縁起由来として深くも結びつくとの言われようが相当昔、ナチス台頭前よりなされてきたとの背景があり(文献的論拠も先に挙げている)、またもってして、ナチスハーケンクロイツ紋章にそっくりなるパナマのクナ族の紋章は世界の創造者たるタコを表象してのものとされている。他面、ナチスのフォルクスゲマインシャフト(民族共同体)のドグマは各個人が(巨大な蛸の脳なき触手の如き)[部品]に撒するべしといったことを唱道するものであった)。翻って、オメガポイントにおけるオメガとは全生命を自己の触手のように思うままにできる万能全能なる蛸の脳髓のようなものである「とも」とらえられる]

b. [伝説上のシーサーペントや絶滅したプレシオサウルスなどの巨大な海の爬虫類に通ずるようなものとして聖書にはリヴァイアサンという存在が登場してくる。そのリヴァイアサンはシンボリズムの観点上、永劫回帰を意味するウロボロス — 尾を噛む爬虫類 — と結びつけられもし、永劫回帰のことになれば、オメガポイントの実現のためにティプラーがそちら観念をナチズムと共に躍起になって否定しようとしている観念である。他面、リヴァイアサンは — 永劫回帰と結びつくだけではなく — [社会契約によって成立した人間の国家共同体 — ナチスのような全体主義国家がその極北にあるとの国家共同体 —]のことも意味すると英国の思想家トマス・ホッブス(極めて著名な歴史上の人物)の用法によって定立されるに至った存在である。とすれば、[リヴァイアサンにて表象される永劫回帰の否定が終末の折のオメガポイント — 特異点招来の時 — に必要である]とのティプラー言い分は [社会契約によってなる共同体(リヴァイアサン)が否定] とも通じるように「見えもする」とのことなるわけだが、にまつわって、まずもって「できすぎ」と判じられるところとしてリヴァイアサンという存在が終末の折に屠られるとの設定が旧約聖書にあって付されているとのことがある (ティプラーの物言いにも通ずるところとして[社会契約の体现物たる人間の共同体]がオメガ(のパラダイス)実現のために屠られる存在であるとの筋立てが聖書

のようなものに見受けられるとのことに通底するところでもある)]

c. [直上表記の b. の[トマス・ホッブスの社会契約思想にあつてのリヴァイアサン]に着目しての見方がこじつけ・穿ちすぎにならぬようなどころとしてフランク・ティプラーは[同一性の欠如にまつわる[テセウス]の船の観念の否定]を他ならぬトマス・ホッブス言い分にまつわるところとして—リヴァイアサン云々といったことは一切言及せずに—自著にてなしている(ティプラーはトマス・ホッブズに由来するテセウスの船の論理を否定することがオメガによる機械の神の天国での人間の再現に必要な観点であると述べもしているのだ)。そうもしたことがあるのは[社会契約の委譲がなされた国家]の全体主義的怪物であるナチズムの否定が執拗に永劫回帰(=リヴァイアサンにても表象される概念)の否定と共にティプラーによってなされていることと平仄が合うとのことになる(そして、ナチズム否定にまつわる反対話法の側面がティプラーの異様な予見的言及に通ずることとなっている)のだから一層問題である)。社会契約によって成立している、程度の多寡こそあれ、全体主義と結びつく人間の社会的共同体をオメガの[特異点]によって否定されきる存在と見なしているとの言い分が—普通に素直に分析する限りではそこまで気づくのは一難事であろうとの式で—ティプラーの申しように隠し要素(がかったもの)として含まれていると判じられる、そのことがティプラーの二重話法めかした異様な「先覚的」言及(オメガの特異点とブラックホールの特異点が結びつきもうるとのところでの加速器重要性にまつわる「先覚的」言及)のなしようをあわせて問題になる]

以上、a. から c. と振つてのことらについて端的に確認言及したうえでここ脇に逸れての枠内訴求部を終えることとする。

本書 p.573
から p.577
にての部
が該当セク
ションとな
る。

さて、フランク・ティプラー(の【オメガポイント】にまつわる主張)にまつわる事柄としては

[問題となるティプラー著作 **The Physics of Immortality: Modern Cosmology, God and the Resurrection of the Dead**『不死の物理学:現代の宇宙観、神、そして死者の復活』はその表紙絵にあつてからして【ダンテ『神曲』】(本稿で(911の先覚的言及らとの兼ね合いで問題視してきた)ヘラクレス12功業と結びつくこと、また、ブラックホール近似物の多重的先覚描写との絡みで問題視してきた最も著名な古典のひとつ『地獄篇』を内包する『神曲』)および【アーサー・クラーク小説『2001年宇宙の旅』】(本稿で911の予見的性質およびブラックホールとの結びつきの兼ね合いで取り上げもしてきたアーサー・クラーク作品)および【ヤコブの梯子(はしご)】(先に911の先覚的物事らにあつての使用との兼ね合いで取り上げてきた象徴物)との結びつきを体現したもとなっている] (“A doozy of a book ... it's 2001: A Space Odyssey meets The Divine Comedy”—Esquire「あまりにも群を抜いた書...これはまさしく(アーサー・クラークの)『2001年宇宙の旅』がダンテ『神曲』に出会ったようなものだ(エスクァイア誌)」との字面が表紙部にみとめられ、かつ、そこに【ヤコブの梯子】の象徴化図像が用いられているとのありようがそうである)

との兼ね合い「でも」問題になるとのことを先述してきたわけではあるが、主には—再三再四筆を割くようでは何であるのではあるも—、

第二。

オメガポイント理論にまつわってティプラーが明示している観点は「史的」側面で
[現行の加速実験実施機関の「誕生」経緯]
との[繋がり合い]が観念されるとのものとなっている。そして、その繋がり合いは本稿
にて問題視してきた[予言的作品]との共通項が問題となる[繋がり合い]「とも」なっ
ている。

第二。

上記第一の点と一緒に考えてこそ意をなすこととしてティプラーのオメガポイント
にまつわる言いように関しては
[加速器実験機関と結びつけられてのブラックホールの人為生成問題]
「とも」(「奇怪な式で先覚的に」と受け取れるかたちで)相通ずる側面が見受けられる
ようになっているとのことがある。

との両二点に関わるところでフランク・ティプラーやりように伴う不快なる非人間的側面 —それは「あまりにも」非人間的な側面でもある— の分析をなしてきた。

以上、端的に振り返りもしたうえで

「ここまで摘示してきたような関係性が具現化しているとのことはそこに執拗な意図・恣意性の片鱗が具現化していることとほぼ同義と考えられるが、詰まるところ、それはオメガポイントに接合するところが遠大な人間操作の目的に通じている可能性があるとのことでもある」

と申し述べ、

[ホワイダニットの問題] (何故犯行がなされたのかとのことに関わる問題)

に相通ずるオメガポイント理論との兼ね合いでの [ありうべき動機] の [推理 guess] としての解説に一
区切りを付けることとしたい —※— (:ただしオメガポイント理論から離れもしての動機についての分
析は継続してなす、ホワイダニットの問題についての解説自体はここまでの話では終わらせず、何故、
証跡が露骨なかたちで残されているような [犯行] が執拗におこなわれてきたのかの他の「考えられ
る」動機にまつわる推察を続いて呈示することにする)。

※ここまでの[オメガポイント理論に関わる「ありうべき」動機]の解説について以下のこ
とを「一応」申し添えておく

それこそ機械に押しつけられたような教条的思考法(決められた枠組みの思考法)
しかなせぬような輩らの話柄かとは思うのだが、筆者は

[現行人類主導のものとしての人間超越の機械の万能存在が到来しうる
こと]

を[可能性]として危惧、それに非を鳴らすとの式をとっているの「ではない」(世間
でいうところのネオ・ラッドライト運動 —産業革命における機械化に反対した向きの
運動を史的にラッドライト運動と呼称するのに対して新・機械化排斥論者とされる一群
の人種の運動をネオ・ラッドライトと呼称する— に見る話柄でもってここでの話をなして
いるのではない)。

このような世界で今更、「白々しくも」、

[人間レベルのコンピューティング(計算能力)の飛躍的増大が災厄をも
たらしうる]

などと識者ぶってこのような局面で論ずるといふその行為のは頭の具合がよろしくはない(失敬)、そう、相応の向きらぐらいのものかとは思っているとの人間が筆者ともなる。

死地にて具象論ならず印象論を口にするのは愚物、あるいは、愚物未満の魂無き存在ぐらいであろうととらえもしている人間として本稿筆者が問題ととらえていることは「オメガポイントが危険である」「それは将来の人間に引き起こされるかもしれないのだ」云々などという意味なき印象論ではなく、

[はきとそうしたものが存在していると示せる犯行 —主語を人類と離れたところに置かざるをえないとの犯行— の証跡が「どういうわけなのか」相応の論客のオメガポイント理論「とも」接合している、であるから、もしかたしたならば、オメガポイント理論が一面で示唆するありようが犯行(この地球に住まう人類ならざる存在による犯行)の〔動機〕になっている可能性がある]

とのことにある。

以上の観点から既にそれを避けては通れぬであろうとの、

[明確化した犯行それ自体の証跡]

が明示できるようになっているし実際に明示されている中で「申し分け程度に付け加えて」の話 —先にそうしたものであると断つての話でもある— の中で〔動機にまつわる推理〕の一つとしてオメガポイント理論のことを取り上げているのである。

その点、「かもしれない」の話だが、そう、いわばもってしての付録として付していることを明言なして展開しているとの部が付録たる所以(ゆえん)であるところの「かもしれない」付きの話だが、先述のようにティヤール・ド・シャルダンに端を発したものと云われており、フランク・ティプラーによって精緻化されたとのオメガポイント理論の帰結とは

(繰り返すも)

[返らずもの死者(人間の死者ではない)を「黄泉」返らせる]

[神に見紛う究極機械を造りだし、万難を排しうるとの世界を実現する]

[時の呪縛を超越して[時の果て]にある理想郷を実現する]

との誰が見ても比類ない価値を示しているとのものとなり、「仮に」そうした話柄に見るようなことが目的ならば(葉籠中に出来る世界(地球か地球を内包する広くもの領域か)そのものを終末の特異点に変じさせしめたくうえで究極のコンピューティングを実現するといったことが目的ならば)、確かに納得がいく説明はつく。

すなわち、

[奇怪な先覚的言及を体系的かつ堂に入ったやりようでな「させられ」さえする[人形化]しての人間という種族] (本稿筆者がといったものに随しているものが自分自身の属する種族であることに怒りと失望を禁じ得ないとの種族たる人類のことである)

を[蚕](かいこ)として永年養殖し(重力波など用いてマルチバースを貫通する機能などを有した幻影幻像を脳に押しつけることもできるとの[神]のように振る舞いもする機械装置を用いて「かもしれぬ」とのやりようにて養殖し)、最後に刈り取るとの意思表示が執拗に、極めて、執拗になされている(とこちらは確として観察なせてしまえるようになっている)ことにも「納得がいく」説明がつく。

その意で取り上げるに限って「のみ」オメガポイント、あるいは、技術的特異点にあつ

ての機械の万能存在に伴うリスクのことを問題視することには意味がある、そう当然に判じられると付してもってして指摘しておきたい。

次いで、[オメガポイント実現]「以外」の

[ホワイダニットの問題] (はきと証跡が具現化していると示せるようになっていたとの犯行がそもそも何故もって具現化しているのか、との問題)

に関わる事柄についての解説をなすこととする。

[遠大な操作]、そして、[嗜虐的犯行] が執拗に執拗になされてきたとのことに関わるところの動機としては(先述なしたところの) [オメガポイント(への橋頭堡か)のこの世界にての実現] とも[両立]するところとして

[次のような[推察]]

もがなせるだけの [現実的兆候] が「ある」 —いいだろうか、続いての内容を検討いただければ分かるが、純然たる印象論ではなくにももの推論を支えるべくもの [現実的兆候] が「ある」— とのことにまつわる解説をなす。

(他の)ホワイダニット whydunit の問題、何故、相応の犯罪的やりようが執拗に具現化なさせられてきたのかとのその[動機]に関わりうるところとしてそちら方向に通ずる言及が[嗜虐的予見をなしているとの文物ら]に見受けられるようになっていること
らとして)

ブラックホールやワームホールの生成によって

[こことは異なる空間との垣根の破壊(そして、それに次いでもこの世界への侵出)をなす]

(あるいはもってして)

[裸の特異点を安全地帯から[ガラス越し科学実験用のゴム手袋 —要するに我々人間存在がそうしたものに押しつらえられてしまっている節あるありよう—]を介して生成して、それをを用いて空間と時間の中での覇権の確立をなす]

とのことが企図されているとのこととてありうるように「見える」ようになってしまっている

上にあつての

[ブラックホールやワームホールの類の生成を介してこことは異なる空間との垣根の破壊(そして、それに次いでもこの世界への侵出)をなす]

とのことについてはそうした奇矯と響きもしよう観点(特定の思潮動向について把握していなければ殊に奇矯とも響こうとの観点)が何故、問題になるのか、そのことに通ずるとのことを長大なる本稿にての前半部から実にもって細々と指摘もしてきたとのことがある。

その点もってしてまずもってそこから振り返るが、[ブラックホールやワームホールを通じて異なる時空間に侵出する] との発想法については我々人類の世界の表だつての [科学予測] にあつて次のような言われようがなされているとのことがある。

(以下、出典(Source)紹介の部 20にて取り扱ったことの再言及をなすこととする)

(直下、ハーヴァード卒の米国ではメディアにもよく露出する著名物理学者カク・ミチオの著作たる Parallel Worlds; A Journey Through Creation, Higher Dimensions and the Future of the Cosmos 『パラレルワールド ——11次元の宇宙から超空間へ』(邦訳版の版元は日本放送出版協会(現NHK出版)で原著の米国にての初出は2005年)384ページよりの「再度の」原文引用をなすとして)

カー・リングの中心にワームホールがあれば、われわれの宇宙をまったく別の宇宙と、あるいは、同じ宇宙のなかにある別の地点と、結びつけてくれるかもしれない。

…(中略)…

現在、おおかたの物理学者は、ブラックホールを生きて通り抜けることはできないと考えている。しかし、ブラックホールの物理的解釈はまだ未熟な段階で、この推測は検証されていない。ここでの議論のために、ブラックホールを通り抜けることができ、とくに回転するカー・ブラックホールでそれが可能だと考えてよう。すると、どの先進文明も、ブラックホールの中を探索しようと真剣に考えるだろう。

(以上をもってして訳書よりの引用となした —※—)

(※上記訳書よりの引用部に対応するところの原著記載部、(検索エンジンにての下記長文テキストの入力などを通じ)「オンライン上よりその通りの記載がなされている、すなわち、[文献的事実]であるとのことを確認できるところの」原著 Parallel Worlds; A Journey Through Creation, Higher Dimensions and the Future of the Cosmos の原文該当部表記も引用しておく。(以下、原著 CHAPTER ELEVEN Escaping the Universe の節よりの引用として) “The wormhole in the center of the Kerr ring may connect our universe to quite different universes or different points in the same universe. [. . .] Currently, most physicists believe that a trip through a black hole would be fatal. However, our understanding of black hole physics is still in its infancy, and this conjecture has never been tested. Assume, for the sake of argument, that a trip through a black hole might be possible, especially a rotating Kerr black hole. Then any advanced civilization would give serious thought to probing the interior of black holes.” (原著よりの引用部はここまでとする))

(さらに続いて直下、邦訳版『パラレルワールド ——11次元の宇宙から超空間へ』403ページよりの「再度の」原文引用をなすとして)

ワームホールのなかでは潮汐力や放射が猛烈になりそうなので、未来の文明は、向こう側の宇宙で再生するのに必要な燃料やシールドや養分を、最小限にして運ばなければならないだろう。そこでナノ・テクノロジーを使えば、それらを詰めた小さな鎖を細胞ほどの大きさの装置に入れて、ワームホールの向こうへ送れる可能性がある。

ワームホールが非常に小さくて原子サイズだとしたら、その向こう側で全人類を再生できるだけの莫大な情報を、原子でできた長いナノチューブに詰めて送ることになるだろう。さらに小さくて、ワームホールが素粒子のサイズだったら、原子核をそこへ送り込み、向こう側で電子をつかまえて原子や分子を再構成するようになるしかない。

(以上をもってして訳書よりの引用となした —※—)

(※上記訳書よりの引用部に対応するところの原著記載、(検索エンジンにての下記長文テキストの入力などを通じ)「オンライン上よりその通りの記載がなされている、すなわち、[文献的事実]であるとのことを確認できるところの」原著 *Parallel Worlds; A Journey Through Creation, Higher Dimensions and the Future of the Cosmos* の原文該当部表記も引用しておく。(以下、原著 CHAPTER ELEVEN *Escaping the Universe* の節よりの引用をなすとして)
“Because the tidal forces and radiation fields would likely be intense, future civilizations would have to carry the absolute minimum of fuel, shielding, and nutrients necessary to re-create our species on the other side of a wormhole. Using nanotechnology, it might be possible to send microscopic chains across the wormhole inside a device no wider than a cell. If the wormhole was very small, on the scale of an atom, scientists would have to send large nanotubes made of individual atoms, encoded with vast quantities of information sufficient to re-create the entire species on the other side. If the wormhole was only the size of a subatomic particle, scientists would have to devise a way to send nuclei across the wormhole that would grab electrons on the other side and reconstruct themselves into atoms and molecules.” (原著よりの引用部はここまでとしておく))

上は本稿の前半部で解説しているように米国にてのメディア露出型物理学者が欧米でよくも流通している科学読み本『パラレルワールド』(初出 2005)の中にみとめられる、

[「仮定上の」超高度文明の水準に関してのニコライ・カルダジェフという物理学者の分類法(英文 Wikipedia にもそのためだけに一項が設けられている *the Kardashev classification*) に見るタイプ III 文明(銀河規模に達してのエネルギー利用効率を有した文明)が —我々人類の文明(人類文明が[それらしくも構築された紛いもの]であるか否かはここでの論点にはならない)の科学予測から見たうえで— 何が出来るのかとの科学予測にまつわる記述部]

となる。

同じくもの記述部に接合するところとして本稿の前半部ではかなり事細かに次のことらについての解説をなしてきた。

1. プランク・エネルギー規模のエネルギーを極小領域に投入すると[ブラックホールが(その自然(ジネン)として予測されている性質より)構築できる]との計算に依拠しての物理学者見解が導出されていたとことがある (:因みにプランク・エネルギーがいかほどのものかとのことについては —現在、人類が全長 27 キロメートルの LHC にて極小領域(蚊の 1 兆分の 1 の領域)に投入できるエネルギーたるテラエレクトロン・ボルトがマクロ・スケールでは[蚊が飛ぶ程度の運動エネルギー](電子を 1 兆個動かすのに相当するエネルギー)であるのに対して— マクロ・スケールでは[45 リットルガソリンで車を駆動させ続けるに相当するエネルギー]に相当するとされることを本稿にての [出典\(Source\)紹介の部 21](#) で解説している)。

2. プランク・エネルギーを極小領域に投入するためには現行の[加速器技術]上の枠組みでは

【太陽系サイズクラスの巨大加速器】（人類がこの世界で構築した 27 キロメートルの LHC に対して人間には絶対に建設できないとのスケールであるとの超が何個も付くような加速器、地球直径でさえそれに比べれば僅少となるとの巨大加速器）

を建設する必要があると言われている（本稿にての [出典 \(Source\) 紹介の部 10](#)（の補足部）にあつての原文引用部でもって摘示しているように [加速器でもっていかほどに極小領域にエネルギーを投入できるのか] は二つのパラメーター、[用意できる磁石の強さ] と [加速器サイズ] に依存するとされる（その旨、加速器実験機関の主導者に解説されている）。にあつての [用意できる磁石の強さ] については現代文明になってようやく [超伝導技術の利用可能化] との兼ね合いでそれなりの要件が充足できるようになったとされているとのことがあり、また、[加速器サイズ] については建設技術の向上によって実現できるようになったものであるなどとされるが、といった中でも [プランクエネルギー規模の加速器] となると [太陽系サイズ] の巨大さが要されるとのことになり、なれば、絶対に人間に用意できるようなものではないとのことになる —— そうした事情があるためにブラックホールの「人為」生成など絵空事であると「従前までは」考えられていたことを本稿では解説している —— ）。

3. 上の 1. から 2. のようなことがあるために時空の扉たりうるカー・ブラックホールの類やワームホールの類を生成する文明はタイプ III の文明、ニコライ・カルダジェフが提唱するカルダジェフ・スケールにて銀河規模のエネルギー活用が可能となるまでに進化進歩した（仮想上の）文明を想定する必要があるとされてきた。

以上のような物理学界に属する科学者らの理論的枠組みに基づいて物理学者カク・ミチオは先述のようなカー・ブラックホール生成やワームホール生成に関する科学予測をなしているとのことがある（※）。

※同じくもの点に関しては本稿にての [出典 \(Source\) 紹介の部 21](#) にあつて端的に次のような記述を引いている。

（直下、同著邦訳版『パラレルワールド ——11 次元の宇宙から超空間へ』の p.392 から p.393 より「再度の」原文引用をなすとして）

「タイプ III 文明の場合、太陽系サイズの粒子加速器が作れる可能性がある。先進文明は、素粒子のビームを宇宙に発射してプランクエネルギーまで加速できると考えられるのだ。…（中略）…二本のビームを、片方は太陽系を時計回りに、もう片方は反時計回りにめぐらせてもいい。この二本が衝突すると、物質／反物質の衝突でプランクエネルギーに至るエネルギーを生成するだろう」（引用部はここまでとする）

（以上をもってして訳書よりの引用となした —※— ）

（※上記訳書よりの引用部に対応するところの原著記載、（検索エンジンにての下記長文テキストの入力などを通じ）「オンライン上よりその通りの記載がなされている、すなわち、[文献的事実]であるとのことを確認できるところの」原著 Parallel Worlds; A Journey Through Creation, Higher Dimensions and the Future of the Cosmos 内表記も引用しておく。（以下、原著 CHAPTER ELEVEN Escaping the Universe の節よりの再度の引用をなすと

して) “ But for a type III civilization, the possibility opens up of making **an atom smasher the size of a solar system or even a star system. It is conceivable that an advanced civilization might fire a beam of subatomic particles into outer space and accelerate them to the Planck energy.** ” とのものとなる)

さて、

[カク・ミチオがプランク・エネルギーを投入しなければ実現できないこととして論じているブラックホールの生成]

が

[現行人類技術にあって実現可能たりえるもの]

と「近年」考えられるようになった、すなわち、プランク・エナジーを投入せずともテラエレクトロン・ボルト(兆単位の電子ボルト、マクロスケールでは蚊の飛ぶ程度のエネルギー規模)で実現できると「つい最近になって」考えられるようになったとのことがある。

それが本稿にての前半部にて仔細に解説している LHC 実験によるブラックホール生成の可能性に関わる余剰次元理論(ADD モデル)まわりの理論上の地殻変動にまつることとなっているのだが(門外漢でも入念に資料精査なせばそこまでは捕捉できるようになっている)、そうした理論上の地殻変動を受けて、人間がワームホールをこの時代の [リング](加速器) にても生成できる可能性が現実視されるようになったわけである。

本稿にあっては出典(Source)紹介の部 18, 出典(Source)紹介の部 19, 出典(Source)紹介の部 21-2, (かなり後の段にずれこんで)出典(Source)紹介の部 76 (3), (さらに後の段にずれこんで)出典(Source)紹介の部 89らをその点 一人類の現行の技術水準にてワームホールが人為構築されうる可能性があるとして「考えられるようになった」との点について事細かに解説するための出典紹介部としている。の中から、(面倒を厭わず、冗長の誹(そし)りをおそれずに)、以下、一部の記述を再度引用することとする。

[本稿出典(Source)紹介の部 18]にあつての摘示内容の「再度の」引用部]

(『神の素粒子 一宇宙創成の謎に迫る究極の加速器一』(原著表題 COLLIDER: The Search for the World's Smallest Particles/邦訳版刊行元は日経ナショナルジオグラフィック社で本稿の序盤部でもその内容を問題視した実験機関担ぎあげ本としての色彩強き書籍ともなる)の p.287-p.289 より「再度の」原文抜粋をなすとして)

これまでの議論は明確な科学的根拠に基づいているが、最後に紹介するのは、SF 小説のような、あるいは夢のような話である。CERN がここまで太鼓判を押してまだ不安ならば、未来から何の警告もないことで安心すればよいのだという。ロシアの数学者イリーナ・アレフエワとイゴール・ヴォロビッチによれば、LHC は現在と未来を結ぶ時空の通路、通過可能なワームホールを生み出すだけのエネルギーを持っている。もし、LHC が危険なら、未来からのメッセージがあったり、LHC の完成を阻止して歴史を改変する科学者が出てくるであろう……

通過可能なワームホールは、アインシュタインの一般相対性理論方程式を解くことで得られるもので、時空の離れた二点をつなぐという特徴が

ある。ワームホールもブラックホールと同じく、物質が宇宙という織物を強力に曲げてできる重力井戸だ。しかし、そこに含まれる幽霊物質(未知の物質)という仮想の物質が負の質量とエネルギーを持っているため、侵入者に対する反応が違ふ。ブラックホールに落ちた物質が崩壊するのに対し、幽霊物質は通過可能なワームホールを開け、時空に通路をつくって宇宙の別の場所へつなぐ。

…(中略)…

1980年後半以来、通過可能なワームホールはCTC(時空曲線)をつくり、これをたどれば過去へタイムトラベルできるという説が唱えられてきた。

…(中略)…

勇敢な宇宙船が飛び込めるほど大きいワームホールなら、ループは完全につながっているので、理論的にCTCが出来た後のどの地点にも戻る事ができる。

…(中略)…

アレフエとヴォロビッチは、LHCの衝突現場のエネルギーなら過去との通信が可能なワームホールが出現すると推測する。LHCの研究者たちはもし未来の日付の奇妙なメッセージがモニターに現れたら、このことを真っ先に知るだろう。

(書籍『神の素粒子 一宇宙創成の謎に迫る究極の加速器—』よりの再度の引用部はここまでとしておく)

[本稿出典(Source)紹介の部 21-2]にあつての摘示内容の「再度の」引用部]

(英国物理学者ポール・ディヴィス ——カリスマ英国人物理学者としてテレビ出演を頻りにこなし、マイケル・ファラデー賞(英国で科学を普及させた科学者に与えられる賞)ら複数の著名なる賞を受賞している科学者—— の手になる科学読み本 How to Build a Time Machine『タイムマシンをつくらう!』(草思社)p.120より「再度の」原文引用をなすとして)

「従来の電磁気技術では、プランク・エネルギーは太陽系に匹敵するぐらい巨大な加速器を建造しないと獲得できないが、まったく新しい加速器技術が開発されれば、はるかにコンパクトな装置を用いて非常に高いエネルギーを得ることができるかもしれないのだ。

またいくつかの理論によれば、空間の大規模な改変はプランク・エネルギーよりもずっと低いエネルギーで実現できるかもしれず、技術的にも見通しがつけられる可能性があるという。もし重力をほどほどのエネルギーで操作できれば、これまでにのべたような途方もない圧縮や加速を必要とせずにワームホールを作ることができるだろう」

(引用部はここまでとする)

[本稿出典(Source)紹介の部 89]にあつての摘示内容の「再度の」引用部]

(ロシアの名門物理学研究機関たる ITEP (Institute for Theoretical and Experimental Physics)に所属の物理学者らに由来するオンライン上よりダウンロード可能となっている論稿 IF LHC IS A MINI-TIME-MACHINES FACTORY, CAN WE NOTICE? (2006/訳すれば『LHCがミニ・タイムマシン工場になったとしたらば、我々は気づける

のか?』)、同論稿冒頭部にての Abstract の部(大要紹介の部)よりの「再度の」抜粋として)

Assuming the hypothesis of TeV-scale multi-dimensional gravity, one can imagine that at LHC not only mini-black-holes (MBH) will be intensively created, but also other exotic gravitational configurations, including hypothetical mini-time-machines (MTM).

「(LHC 実験での)兆単位の電子ボルト領域(テラ・エレクトロン・ボルト単位の領域)にての多次元的重力にまつわる仮説について想起をなせば、LHC にてマイクロ・ブラックホール(MBH)が集中的に生成されうるとも想起されるばかりか、[ミニ・タイム・マシン(MTM)が如く他の「エキゾチックな」重力の構造体]が生成されうるとも想起される」

(訳を付しての引用部訳はここまでとしておく 一※一)

(※上に見るミニ・タイム・マシンは[ワームホールに通ずる重力の妙技]であると解されるようなものとなる(因みに上の論稿はロシアの研究機関 ITEP に所属の研究者ら由来のものではあるが、最も早期にか、LHC にてのワームホール生成を提唱しだした節あるロシアのステクロフ数学研究所所属の研究者ら(イリーナ・アレフエバ(アレフエ)とイゴール・ヴォロビッチら)とはまた別の研究者ら由来の論稿となる))

以上に一例見出せるようなかたちにて

[LHC によるブラックホールないしワームホールの生成 ——(うち、ワームホールについては本稿にて度々問題視してきた著作 Parallel Worlds; A Journey Through Creation, Higher Dimensions and the Future of the Cosmos 『パラレルワールド——11次元の宇宙から超空間へ』にあつて([文献的事実]の問題としてオンライン上より文言確認できるところの原著記述よりの引用をなすとして) “ The wormhole in the center of the Kerr ring may connect our universe to quite different universes or different points in the same universe ” [カー・リングの中心にワームホールがあれば、われわれの宇宙をまったく別の宇宙と、あるいは、同じ宇宙のなかにある別の地点と、結びつけてくれるかもしれない]とされているようにその存在特性は[重力の怪物]との観点でブラックホールに通底するところがある) ——]

が問題視されているわけであるが、さて、そうしたことから —トラバーザブル(通過可能)なるワームホール、traversable wormhole に通ずるようなこと— を解説することそれ自体には意味はさしてない(敢えても頭の具合のよろしくはないと受けとられもしようとのジャーナリズム性云々との言いまわしを用いれば、[ジャーナリズム性があるとはとてもではないが言えない]でもいい)。

だから何なのだ?

マーベラスなことが「ありうる」と考えられているだけであろう?

普通人、殊に「状況がよく理解出来ていない」との向きであるのならば尚更もってしてそうであろうところとして、世の中というものに対して懐疑的な向きですら上のようにとらえて手仕舞。それが直近呈示の話柄に対する往々にしての反応ありようであろう ((却(かえ)って、「であるかこそ」だと思うのだが、そういう話柄に留まってる話を「低レベルに」(一定以上の知性を持った者に響くところが何らないとの[頭の具合がよろしくはない]との式で)なす相応の類の申しようが[このような世界]では目立つようになっているともとれる)。

そう、上のようなことだけを聞いただけでは

[生存問題に関わるとの「具体的」認識]

も生じえなければ、[生存問題に関わるとの認識]を受けての[行動]も生じ得ない、[どうあっても掻き消えるだけの意味のないもの]であるか、とも思う。

だが、である。

[上の話が特定の人間の尊厳を愚弄・軽侮しきっての質的犯罪行為の束（その中には先立って述べたように見立て殺人、Ritualistic Murder でもいいが、[特定の意図意思を明示するためだけに多くの人間を殺している]と判じられる行為さえも含まれている）と「執拗に」結びつけられているとの[具体的証拠]の摘示がなされる]

とのことになれば、同じくもの上の話をなすとのその行為には意味がある、そう、[証示]と述べるに足りるだけのことが前提・背景となる事情として共に呈示されているのならば、[有為性]とのことで意味があるとのことになるであろう（偽りだらけの世界で紛い物らが白々しくも好きこのんで用いるような言いまわし、心ある向きには[頭の具合のよろしくはない]とみなされもしようとの言いまわし、それを敢えても用いれば[ジャーナリズム性がある]とのことにもなるであろう。尚、ここで有為と述べるのは諸々の[障害][制約]を排することができれば、との文脈で「可能性としてゼロではなく有意義たりうる」とのことである——※についてくださと申し述べておくと、仮に意味・意義が[ありうる]とのやりようをなしたとしても、である。この世界では世人にそうした危機的状況にまつわる話に関しての[認識]をもたらすのに奏功する(相応の者達の手になる言論統制の間隙を突いて[認識]作用の誘発に奏功する)のも一難事となっている節があり、かつ、何とか世人に話を[認識]なさせたいうでもそこで[認容]を生じさせるだけの検討がなされるのか(人形のようにすかさず空っぽの目をした者らが相手方ならば当然にそこで検討がなされるのかとのことすら問題になる)、また、[認容]がなされたうでの[行動]が期待できるのか(臆病者やシステムの奴隷に状況を適切に把握したうでも[死ぬるならばこそ]との覚悟に基づいての[行動]が期待できるのか)とのことらに何ら楽観的な期待を抱けないようになさせられている節がある(と筆者などは当然に思い知らされている)。そう、このような世界では[認識]⇒[認容]⇒[行動]の通貫してのプロセスをもたらすことができるのかについて可能性として悲観的にならざるをえない(最悪、限りなくゼロに近い)ものであるとの見立てもなせてしまうことを(何もやらない者達を脇目に色々とやってきた)本稿筆者などは「学習」させられているとのことがある(さらに述べれば、この世界では[世人に何ら危機意識を生じさせ得ない話](ノイズでもいい)がマジョリティを占め、[危険な状況を認識させるたかだかもの「可能性」の話](シグナルでもいい)ですら圧倒的少数派として閉め出しをくらう機構がビルトイン(組み込み)されていると判じられるようにすらなっている(「人間一般」が主体的に何かを調べようとせずの中であれど何かを調べる人間がいたとしてもそうした人間の目に[シグナル]が入りづらくするような(本来的には)違法な規制としてインターネット上などでは働いていると判じられるだけの材料がある)。兵法三十六計には自陣営が圧倒的に優位なる状況にある中で用うべしとの計略(いわゆる勝戦計)として[瞞天過海(まんてんかかい)の計]との計略が挙げられもしている、すなわち、[敵手に敢えても情報を組織的にそれとなく与えて危難に慣らせしめたうで「またか」の危機慣れの状況、[油断]を与えて一挙に攻め滅ぼすとの計略]が挙げられもしている。そうした[瞞天過海]のやりように通ずるところとして掌中・薬籠中の者らに製作なさせしめたサブ・カルチャーなどのフィクションに敢えても[予定の問題]をオブラートで包んで人間に[楽観的予断]をきたすようなかたちで示して見せているようなことがあるようにすら露骨に見えもする(一部の人間らがさもあるうとの[予定の問題]に立ち向かいそれを斥けるといったご都合主義的ストーリーがわざと流布されている節すらもが露骨にある)中でも「大人がそれで動かなければどうしようもない」との式での具体的かつ客観的な証示、それ自体は[言論統制]にて徹底的に脇の領域——なんら人目につかないとの領域——に追いやられるとのことになっていると見立てられるようになっている(筆者は言論の流通動向も当然に精査している)——)。

以上のこと、申し述べたうで書くが、

[現実にブラックホールやワームホール生成に関わることらが「先覚性の面で異常さが際立った式

で】**【人間の尊厳を愚弄・軽侮しきっての質的犯罪行為の束】**と「執拗に」結びつけられている]

ということが証して示す、[証示] とのかたちで示せるようになっているのがこの世界である。

実に遺憾なことに筆者のような人間 —自分で述べるのも何ではあるが、[魂(と神秘主義者に表されるような内面の実質)を売ることを断固拒否した人間]となりもし、[命を賭けての戦いの中で命を失う覚悟も当然にしているとの相当の頑固者]ではある— 以外にそうした[証示]をなそうとするような人間はこの世界にはいない・見当たらないようだが、とにかくも、この身は「我々人類の生き死にに関わることであるから」との観点で極めて長大なものとしてしつらえている本稿にては、たとえば、

[以下、(再度もってして)、一例表記すること]

のような事実関係について [証示] をなしてきた (この場合、[証示]とは「誰でも容易に確認できる文献的事実らを証拠として挙げ」「その呈示[証拠]だけから導き出せることを」「属人的主観が問題にならないとのレベルで」呈示するとのことを指している)。

[[古代アトランティスに対する蛇の種族による次元間侵略] との内容を有する (一見すれば妄言体系としての) 神秘家由来の申しようが今より 70 年以上前から存在している —(所詮はパルプ雑誌に初出の小説『影の王国』(1929) などの筋立てをその言い回し込みにして参考にしたのであろうと解される形態でながら前世紀、第二次世界大戦勃発の折柄(1939年)から存在している)— とのことがある] (: [出典\(Source\) 紹介の部 34](#) から [出典\(Source\) 紹介の部 34-2](#) を包摂する解説部を参照されたい)

→

[(上にて言及の) [アトランティスに対する蛇の種族の次元間侵略] との内容 (の一見する限りはもの神秘家妄言録の類) と類似する側面を有しての [恐竜人の種族による「次元間」侵略] という内容を有する映画が [片方の上階に風穴が開きつつ][片方が崩落する] とのツインタワー —(恐竜人の首府と融合するとの設定のツインタワー)— をワンカット描写にて登場させながら 1993 年に封切られているとのことある (子供向け荒唐無稽映画との体裁をとる『スーパーマリオ魔界帝国の女神』がそちら作品となる)] (: [出典\(Source\) 紹介の部 27](#) を包摂する解説部を参照されたい)

→

[ある種、911 の先覚的言及をなしているとも述べられるような性質を伴っての上記映画は[他世界間の融合]といったテーマを扱う作品ともなっていたわけだが、そうした内容([異空間同士の架橋]との内容)と接合する[ブラックホール][ワームホール]の問題を主色として扱い、また、同じくものところで[911の事件の発生に対する先覚的言及とも述べられる要素]をも「露骨」かつ「多重的に」帯びているとの著名物理学者由来の著作 — BLACK HOLES & TIME WARP Einstein's Outrageous Legacy 『ブラックホールと時空の歪み アインシュタインのとんでもない遺産』という著作— が原著 1994 年初出のものとして「現実に」存在しているとのことある] (: 疑わしきにおかれては(羅列しての表記をなし)本稿にての [出典\(Source\) 紹介の部 28](#), [出典\(Source\) 紹介の部 28-2](#), [出典\(Source\) 紹介の部 28-3](#), [出典\(Source\) 紹介の部 31](#), [出典\(Source\) 紹介の部 31-2](#), [出典\(Source\) 紹介の部 32](#), [出典\(Source\) 紹介の部 32-2](#), [出典\(Source\) 紹介の部 33](#), [出典\(Source\) 紹介の部 33-2](#) を包摂する解説部を参照されたい. 表記の部にては **BLACK HOLES & TIME WARP Einstein's Outrageous Legacy**『ブラックホールと時空の歪み アインシュタインのとんでもない遺

産』という1994年初出の作品が「双子のパラドックス(1911年提唱)の機序の利用による二点間時差の応用」／「91101(2001年9月11日を意味する数)との郵便番号で「はじまる」地を実験に対する「空間軸上の始点」に置いてのタイムワープにまつわる解説」／「2000年9月11日⇒2001年9月11日と接合する日付けの実験に対する「時間軸上の始点」としての使用」／「他の「関連」書籍に見るブラックホール⇄グラウンド・ゼロとの対応付け」を「僅か一例としての思考実験」にまつわるところで「すべて同時に具現化」なさしめ、もって、「双子の塔が崩された「2001年の」911の事件」の前言と解されることを事件勃発前にいかようになしているのかについて(筆者の主観など問題にならぬとの客観事実に関わるところとして)仔細に・緻密に摘示している。また、それに先立つところ、本稿にての出典(Source)紹介の部29から出典(Source)紹介の部30-2を包摂させての解説部ではその前言問題に関わるところの「双子のパラドックス」(1911年提唱)というものと「際立っての類似性」を呈しているとのことが指摘される浦島伝承(爬虫類の亀の化身と人間の異類結婚譚との側面も初期(丹後国風土記)にては有していた浦島子にまつわる伝承)が欧州のケルト伝承と数値的に不可解な一致性を呈していることを解説、その「伝承伝播では説明がなしがたい」ような特異性についての指摘「も」なしている)

→

「「加速器」および「(時空間の)ゲート開閉に関わる要素」および「爬虫類の異種族の侵略」らの各要素のうち複数を帯びているとの作品「ら」が従前から存在しており、の中には、【カシミール・エフェクト】といった後に発見された科学概念(カシミール効果は安定化したワームホール構築に必要と考えられるようになったエキゾチック・マターという物質の提唱に関わっている概念ともなる)につき尋常一様ならざるかたちにて先覚的言及なしているとの1937年初出の作品『フェッセンデンの宇宙』—「人工宇宙にての爬虫類の種族による人類の皆殺し」が描かれているとの作品—も含まれている」(：疑わしきにおかれては出典(Source)紹介の部22から出典(Source)紹介の部26-3を包摂する一連の解説部を参照されたい)

→

「CERNのLHC実験は「実際の命名規則の問題として」1990年代の実験プラン策定段階にての1992年(米国にて2004年に放映されていたテレビドラマ『スターゲイト・アトランティス』といったものを包摂する一連のスターゲイト・シリーズの嚆矢たる映画作品『スターゲイト』が1994年の公開にて世に出ることになった折より2年程前)からもってして「アトラス—ヘラクレスの11功業にて登場した「黄金の林檎」の在所を把握すると伝わる巨人—」との名詞と結びつけられており(ATLASディテクターという「後の」2000年代よりブラックホール観測「をも」なしうるとされるに至った検出器)にまつわる名称が1992年に確定したとも、また、同LHC実験、後にその「アトラス」と語義を近くもする「アトランティス」ともブラックホール探索挙動との絡みで結びつけられるに至っている(そのうえ、同LHC実験にあつてブラックホールの生成を観測しうるツールと銘打たれているイベント・ディスプレイ・ツールのATLANTISについてはプラトン古典『クリティアス』記述から再現できるところの古のアトランティスの城郭構造を意識させるようなディスプレイ画面を用いているとの按配での堂の入りよう「とも」なっている)。CERNのLHC実験と結びつけられての巨人アトラスは「黄金の林檎の在処(ありか)を知る巨人」として伝承に登場を見ている存在でもあるが、そこに

見る「黄金の林檎」は「トロイア崩壊の原因」となっていると伝わるものである。とすると、CERNがATLAS検出器でブラックホールの観測 —その観測が「科学の発展に資する」と中途より喧伝されるに至った即時蒸発を見る極微ブラックホールらの観測—をなしうると後に発表するに至ったことは「黄金の林檎（トロイア崩壊の原因）の在り処を知る巨人」によってブラックホール探索をなさしめていると呼ばわっているに等しい（：疑わしきにおかれては出典(Source)紹介の部35から出典(Source)紹介の部36(3)および出典(Source)紹介の部39を包摂する解説部を参照されたい）

→

「古の陸塊アトランティスの崩壊伝承」は「古のトロイアに対する木製の馬の計略による住民無差別殺戮「後」の洪水による城郭完全破壊伝承」(Posthomerica『トロイア戦記』)と同様の側面を伴っているものとなる(アトランティスおよびトロイアの双方とも「ギリシャ勢との戦争の後」、[洪水]による破壊を見たとの筋立てが採用されている)。また、「巨人アトラスの娘」との意味・語法での「アトランティス」—(「古の陸塊の名前」以外に Daughter of Atlas との響きを伴う語ともなり、LHCのATLAS検出器に供されているイベント・ディスプレイ・ツールに供されている ATLANTIS の名にも転用されているとの名詞)— については「トロイア崩壊の原因となった果実たる黄金の林檎の園が実るヘスペリデスの園」とも「史的に結びつけられてきた」とのことがあり、といった絡みから、「黄金の林檎の園」は(アトラスと共にCERNのLHC実験の命名規則とされているとの)「伝説上の陸塊アトランティス」の所在地と結びつけられもしていたとのことがある（：疑わしきは出典(Source)紹介の部40から出典(Source)紹介の部45を包摂する一連の解説部を参照のこと）

→

「ヘラクレスの11功業」というものは「アトラス(1992年よりLHC実験関連事項としてその命名が決せられたATLASと同じくもの名を冠する巨人)」および「黄金の林檎(トロイア崩壊の原因)」の双方と通じているもの」となっているが(出典(Source)紹介の部39)、先の911の事件の前言と解せられる要素を「多重的に」含む特定作品らがそうした「ヘラクレスの11功業」と濃厚に関わっていると指摘出来るとのこと「も」がある。

具体的には(ヘラクレス第11功業と911の事件の関係性を示すべくもまずもって挙げたところの作品としての)『ジ・イルミナタス・トリロジー』という70年代にヒットを見た小説作品などは

【ニューヨーク・マンハッタンのビルの爆破】

【ペンタゴンの爆破】(時計表示を180度回転させて見てみると時計の911との数値が浮かび上がってくるとの5時55分にペンタゴンが爆破されたと描写 —[180度反転させることで911との数値が浮かび上がる数字列]をワールド・トレード・センター(の崩落)などと結びつけている文物「ら」は(複数形で)他にもあり、本稿でそれらの特性について解説することになっていながらも中での一例としての描写となる—)

【「ニューヨーク象徴物」と「ペンタゴン象徴物」の並列配置シンボルの作中にての多用】

【米軍関係者より漏洩した炭疽菌の災厄の描写】(現実の911の事件では事件後間もなくして米軍関係者と後に判明したブルース・イヴィンズ容疑者の手になるところの炭疽菌漏洩事件が発生しているが、そちら現実の状況と照応するような[米軍関係者より漏洩した炭疽菌の災厄]との筋立ての具現化)

【関連作品からもってしてのツインタワー爆破・ペンタゴン爆破描写】

との要素らを帯びつつヘラクレスの第11功業と接合している(『ジ・イルミナタス・トリロジー』という作品ではヘラクレス第11功業に登場する「黄金の林檎」が作品の副題

「アトランティスに対する蛇人間による侵略」という作品モチーフを従前フィクション（『影の王国』より踏襲しての詐欺的人種（捏造をこととする神秘家）由来の申しようが前世紀前半よりなされている（最前の段にて再言及）とのこととともが問題になるとの
[予見的物事らの間の多重的関係性]を本稿では念密に摘示しもしてきた。その点もってしてThe Sword of Rhiannon『リアンの剣』という大戦後間もない前世紀中葉に世に出たフィクションなどでは同じくもの関係性に関わるところとして【あまりにも奇怪なる】加速器関連事柄とブラックホール接合事柄のゲートとしての利用の「予見的」結びつけ】【蛇人間による（人間を利用しての）間接統治の終焉との作品モチーフ】が相互に接合しながらも作品特徴を見せもするといったことを本稿では懇切丁寧に解説してきた。

に付されていたり、黄金の林檎を描いたものとされるシンボルが何度か図示までされて登場してきているといったことがある）】（：疑わしきにおかれては出典(Source)紹介の部 37 から出典(Source)紹介の部 37-5 を包摂する一連の解説部、オンライン上より全文現行確認できるようになっているとの原著よりの原文抜粋および国内で流通している訳書よりの抜粋をなしつつ「どこが」「どのように」[911 の事件に対する奇怪なる前言と呼べるようなパート]となっているかにつき事細かに解説してもいるとのそちら一連の解説部を参照されたい)

→
[上にて言及の『ジ・イルミナタス・トリロジー』（【ヘラクレス功業と結びつき、かつもってして、911 の予見的言及と結びつきもする作品】の例としてまずもって挙げるところとしたとの 70 年代欧米圏ヒット小説）は

【蛇の人造種族を利用しての古代アトランティスの侵略がなされる】

【アトランティスと現代アメリカのペンタゴンが破壊されたことによるのそこに封印されていた「異次元を媒介に魂を喰らうべくも介入してくる存在」の解放がなされる】

といった作中要素を内に含んでいる小説作品「とも」なる——そこに見る[蛇の人造種族を利用しての古代アトランティスの侵略]という筋立ては一見すると先述の神秘家話柄（蛇の種族によるアトランティスに対する異次元間侵略）と同様により従前より存在していたロバート・エルヴィン・ハワードという作家の小説『影の王国』をモチーフにしていると解されるところでもあるのだが、であろうとなかろうと、奇怪なる先覚性（ナイン・ワン・ワンの事前言及）にまつわる問題性はなんら拭（ぬぐ）えぬとのことがある——。

といった[異次元との垣根が破壊されての干渉の開始]との筋立ては上述の著名物理学者キップ・ソーンに由来する著作、BLACK HOLES & TIME WARP Einstein's Outrageous Legacy『ブラックホールと時空の歪み アインシュタインのとてもない遺産』という著作が（異次元との扉にも相通ずる）[ブラックホール][ワームホール]の問題を主色として扱い、また、同じくものことで[911 の事件に対する前言とも述べられる要素]をも「多重的に」帯びているとの作品として存在しているとのこと、そして、それがまた、映画『スーパーマリオ 魔界帝国の女神』のような「露骨な」911 の予見的物事としてのありよう、そして、[爬虫類異種族の次元間侵略]との作品モチーフ、その双方の特徴を帯びている作品が存在していることと平仄が合いすぎる程に合う】（：疑わしきにおかれては出典(Source)紹介の部 37 から出典(Source)紹介の部 37-5 に加えての出典(Source)紹介の部 38 から出典(Source)紹介の部 38-2 を包摂する一連の解説部の内容、そして、出典(Source)紹介の部 28 から出典(Source)紹介の部 33-2 を包摂する解説部の内容を参照されたい)

本稿前半部、そのうちの一部の摘示事項を挙げての一例としての上の振り返り部 —（意思がある（虚無たる死に抗い生き残るための努力をなす可能性がある）向きには是非とも裏取り・検討をなしていただきたいとの部）— の内容をもってして、である。

再掲しもするところとして、

ブラックホールやワームホールの生成によって

「こことは異なる空間との垣根の破壊(そして、それに次いでもこの世界への侵出)をなす」

(あるいはもってして)

「裸の特異点を安全地帯から「ガラス越し科学実験用のゴム手袋 一要するに我々人間存在がそうしたものにとしつらえられてしまっている節あるありよう」を介して生成して、それを用いて空間と時間の中での覇権の確立をなす」

とのことが企図されているとのこととてありうるように「見える」ようになってしまっている

との申し分がなせる —「であるからも、」の異様な多重的關係性を呈する予見的言及の束の存在指摘と共になせる— そして、そのことが「ホワイダニットの問題」に関わっているとのこと、「半面で」、ご理解いただけることかとは思ふ（直上にあつての振り返りもしての事柄らとの兼ね合いでは「異なる空間との垣根の破壊(そして、それに次いでもこの世界への侵出)」を実現するためのブラックホールないしワームホール構築計画などが遠大なものとしてそこにあり、にまつわる「こだわり」が反映されたところとしてお互いに進捗を確認するためだけなのか、「見立て」殺人行為の類までもが執拗に行われてきたと推理推察することができること、ご理解いただけることかとは思ふ）。

以上、まずもってしての「一面での」理解を期しもしてのことを申し述べたうえで話を続ける。さて、ホワイダニットの問題 — ありうるどころの「何故、それをなしたのか」の推理に関わる問題 — として取り上げているところの、

ブラックホールやワームホールの生成によって

「こことは異なる空間との垣根の破壊(そして、それに次いでもこの世界への侵出)をなす」

(あるいはもってして)

「裸の特異点を安全地帯から「ガラス越し科学実験用のゴム手袋 一要するに我々人間存在がそうしたものにとしつらえられてしまっている節あるありよう」を介して生成して、それを用いて空間と時間の中での覇権の確立をなす」

とのことが企図されているとのこととてありうるように「見える」ようになってしまっている

とのことらにあつての「裸の特異点」(についての世間的解説のされよう)の説明は少し後の段に譲るとして、である。

ここでは

「ブラックホールやワームホールの生成によるこことは異なる空間との垣根の破壊(そして、それに次いでもこの世界への侵出)」

がいかなる結果・結末をもたらすと判じられるのか、(それが(その「響きとしての荒唐無稽さ」)にも関わらず)、何故、現実的危険性を伴っていると見受けられるようになっていと述べられもするのか、との論拠とあわせての解説をまずもってなしておく。

その点、唐突となるが、『インベーション』という映画がハリウッド女優ニコール・キッドマン主演にて2007年に封切られている(同映画、バジェット(制作費)が相当程度割かれてのかなりメジャーな部類の映画となり、ために、レンタル店での流通度合いも高くその内容を容易に確認できる作品ともなる)。

同映画『インベーション』、1955年に初版刊行を見、何度か映画化されている **The Body Snatchers**

『盗まれた町』との作品を原作としているものなのだが、その粗筋は、(原作小説『盗まれた町』に見るそれが[宇宙からやってきた植生の外宇宙生命体]が[人間を複製しその過程でオリジナルの人間を殺しもつつ乗っ取りを企図している]との存在であったのに対して)、

[宇宙からやってきた微生物が人間のDNAと自分達のDNAを融合させ、(最後部にて融合下では本来の人間の知覚・記憶が失われていると判明するものの)融合された人間らの保持している知覚と記憶をリソースとして用いつつ、それでもって騙す対象としている[融合なしでない人間ら]を次々に自分達のDNAの種子に「感染」させていく(気色が悪いこと限りなしなのだが吐瀉・嘔吐物入りの飲料を非感染者に騙して飲用させる、注射針で自分達のDNA構造を無理矢理体内に侵入させて感染させていく)。結果、合衆国主要部は外宇宙生命体(微生物)に「静かに」侵略(Invasion; インベージョン)されるに至ってしまう]

との内容を有した映画となる。

そちら映画内容に関しては露骨に諷刺があった側面、そう、隣人ら内面が

[全く異質のもの]

と成り果てており、といった隣人らが常識では説明が付きがたいような侵略行為(微生物混入がなされた彼ら吐瀉物を飲ませようとするなど実にもって浅ましい行為によって[戯画化]される侵略行為)に邁進しているといった式での露骨に諷刺があった側面を見てとれなくもない。

さて、ここで問題視したいのは無論、[(常識でも問題となりうるどのレベルでの)諷刺があった内容]ではない。ここで問題視したいのは映画『インベージョン』に見る、

[人間の特性は遺伝子によって規定されている。従って遺伝子に融合作用が及ぼされれば、その個体は全く[異質]なものになる]

との作品設定である。

言わんとしていることが何かはお分かりいただけることかとは思。遺伝子が別の存在と融合して別存在に切り替えられるとの発想法は[遺伝子治療](こちら[遺伝子治療]についてはどういうことが執り行なわれているか、あるいは試行されているかは各自お調べいただきたい)を荒唐無稽に揶揄しての非科学的フィクションの類に見えるかも知れないが、しかし、

[漸次的切り替えの問題]

を考えればどうか。

その点、(これまた唐突となるが)、

[精神転送](英語では Mind Uploading)

というトピックを調べていただければよくお分かりいただけることかとは受けとれるところとして、そして、比較的真つ当なものである(とされている)科学予測の問題として

[人間の脳構造を超高度スキャナーでスキャンしてそれをナノマシンにて再現する(そして新しく再現した[容れ物]に人間の実質を宿らせる)との未来技術に対する予測]

[別の世界からナノマシンで播種をなすとの未来技術予測]

がなされていたりする。

上の事柄らにあつての[人間の脳構造を超高度スキャナーでスキャンしてそれをナノマシンにて再現する(そして新しく再現した[容れ物]に人間の実質を宿らせる)との未来技術に対する予測]との点について目につくところとして和文ウィキペディアの現行記述を引用なしてみよう。

SOURCE 117

*Abaddon, to have been the name of the same Ophite God, with whose worship the world had been so long infected. Ob, I take Abaddon, or, as it is mentioned in the Revelations, Abaddon, to have been the name of the same Ophite God, with whose worship the world had been so long infected. He is termed by the Evangelist Αβαδδων, τον Αγγελλον της Αβυσσου, the angel of the bottomless pit; that is, the prince of darkness. In another place he is described as the dragon, that old serpent, which is the devil, and Satan. Hence I think, that the learned Heinsius is very right in the opinion, which he has given upon this passage; when he makes Abaddon the same as the serpent Pytho.

Jacob Bryant,
A New System or Analysis of Ancient Mythology
Vol.II. (1807)
OB, OUB, PYTHO, SIVE DE OPHICENTRIA

the September 11 attacks
(coordinates) 38.87099° N
77.05596° W

↑
setting American Airlines Flight 77
(Boeing 7x7 Series)

recall

'ugly' [Book of Revelation] filled with [number 7]

7 stars, 7 lampstands, 7 churches, 7 seals,
lamb having 7 horns, 7 angels, 7 trumpets,
7 thunders, 7 visions, 7 bowls, 7 plagues,
7 words, 7 headed dragon

(Greek Αποκαλυψις Ιωαννου, Apocalypsis Ioannou)
means 'un-covering'

[bottomless pit]

They had over them a king, an angel of the abyss, whose name in Hebrew is Abaddon, but in the Greek he is called Apollyon. (Revelation 9:11)


(in Satan's voyage through abyss) → 'Original Sin' for religious people
The secrets of the hoary deep; a dark illimitable ocean, without bound, / Without dimension, where length,
breadth, and height, / And time, and place, are lost; where eldest Night And Chaos, ancestors of Nature,
hold Eternal anarchy, amidst the noise Of endless wars, and by confusion stand.

John Milton
Paradise Lost (1667)
BOOK II, lines 890-895

(peculiar) BH like properties
(seen in 17th century)

Collapse of 1 WTC - 7 WTC
and Boeing 7x7 Series

7-7 London bombings (2005)
(referred as 7/7)



Apollo
(and his predecessor Pytho)

ここ出典 (Source) 紹介の部 117 にあつては

[人間の脳構造を超高度スキャナーでスキャンしてそれをナノマシンにて再現するとの類のありうべき未来技術予測が [(幅広くも膾炙(かいしゃ)している)世間的言われよう] の問題としてどのようにとりあげられているのか]

このことを紹介しておく。

(直下、和文ウィキペディア [精神転送] 項目にての現行記載内容よりの引用をなすとして)

精神転送(英: Mind transfer)とは、トランスヒューマニズムやサイエンス・フィクションで使われる用語であり、人間の心をコンピュータのような人工物に転送することを指す。精神アップロード(Mind uploading)などとも呼ばれる(英語では、mind downloading、whole brain emulation、whole body emulation、electronic transcendence などとも呼ばれる)。

…(中略)…

精神転送は未だ机上の空論でしかない。精神転送を実現する技術はまだ存在しない。しかし、理論的な精神転送手法はいくつも提案されてきた。

…(中略)…

より進んだ理論上の技法として、ナノマシンを脳内に注入し、脳の神経系の構造と活動をナノマシンが読み取るという方法が考えられる。さらに積極的に、ナノマシンが神経細胞を人工的な神経に置換していくという方法も考えられ、この場合、有機脳から人工脳への移行が徐々に進行し、その間に意識が途切れないことになる。これは例えば、インターネット上のコンピュータを徐々に新しいハードウェアに置き換えていくのと似ている。

…(中略)…

このような哲学的な問題に関連して、徐々に脳を置き換えていく手法(上述のナノマシンによるものなど)の方が好ましいと考える者もいる。その間意識を失うことがないならば、これは通常の新陳代謝で脳を構成する分子が常に入れ替わっているのと何ら変わらない。

(引用部はここまでとする)

(出典(Source)紹介の部 117 はここまでとする)

上にて引用したような世間的言われようは馬鹿げた話に「響く」かもしれない(まったくもって、である)。

だが、逆に、上をして馬鹿げた話とする見方をもってして

[我々人間の文明(押しつけられたものであれ、とにかくもの人間の文明)の技術上の制約に拘泥しての観点]

と説得力ある式にて問題視する見方が一部にて呈示されているのも一まことにもって遺憾であるが— 事実なのである。

指数関数的に増殖する(周囲の炭素を材に自己再生産をなして増殖する)ナノマシンがその底無し
の増殖作用がゆえに地球を埋め尽くしてしまう懸念(いわゆる[グレイ・ゲー]にまつわるトピック)などは
様々な科学者が提言、英国の皇太子チャールズのような類の賛同者を得ての深刻な[ありうべき懸念]
として表明されるに至っていることが知られているが(ご存知なきはグレイ・ゲーにまつわる科学界での
言われようを調べてみるといい)、[別宇宙]から物理的実を伴わぬ操作の媒質が投射されている可
能性があるといったこと「だけではなく」—(電磁波にそれを転換する機序も考え出されているとのこと
を本稿出典(Source)紹介の部 87(2)にて紹介してきたマルチバース(多宇宙)間を貫通するとされる
[重力波](や[重力波に乗せられての情報]のようなもの)、そう、[操り人形(ラジコンのように電磁波で
生物をスティモシーバーというもので操るテクノロジーが 1960 年代からエール大などで「人間レベルで
も」研究されてきた(出典(Source)紹介の部 87(3), 出典(Source)紹介の部 87(4))ところとも関わりと
判じられるような機序による操り人形)を操る糸]たりうるものが投射されている可能性があるといったこと
「だけではなく」— 物理的実体を伴ったもの、ナノマシンのようなものが仮にもしこの世界に侵出して
きたとすれば、といった局面では、[何でもあり]とのことになる(そういうことをなせる先進文明を想定
するのならば、そして、人間が[利用済み廃棄物]としてではなく[再資源活用される存在]と想定する
のならば、人間の脳をナノマシン化しての[精神転送](ないしは後述するところのありうべきところの[精
神転送]の下準備)が企図される可能性もある)。

そして、LHC 実験にて構築されうるとされるカー・ブラックホールやワームホールは

[ナノマシンを送るゲートのようなものにもなりうる]

と考えられても「いる」(本稿 [出典 \(Source\) 紹介の部 19](#) にて引用なししている CERN 技術部主任のセルジオ・ベルトリッチの申しよう、「(LHC が未知の扉を開くとして)この扉を通過して何かがあるかもしれないし、それを通じて我々が何かを送れるようになるかもしれない」との申しようは詰まるところ、そういう発想法が成り立つことと表裏をなししていると解される)。

LHC 実験にて構築されうるとされるカー・ブラックホールやワームホールが「ナノマシンを送るゲートのようなものにもなりうる」と考えられても「いる」とのことを解説する前に、ここではまずもって、

「そもそも「何故」、ナノマシン (ないしゲートが極小のサイズであるのならば原子核サイズのフェムトマシンのようなものが用いられうる) である必要があるのか」

とのことにまつわるくどくもの再引用をなしてみる(以下、本稿にての [出典 \(Source\) 紹介の部 20](#) にて取り扱ったことの再々度の引用をなすこととする)。

(直下、ハーヴァード卒の米国ではメディアにもよく露出する著名物理学者カク・ミチオの著作たる *Parallel Worlds; A Journey Through Creation, Higher Dimensions and the Future of the Cosmos*『パラレルワールド ——11 次元の宇宙から超空間へ』(邦訳版の版元は日本放送出版協会(現 NHK 出版)で原著の米国にての初出は 2005 年) 384 ページよりの「再々度の」原文引用をなすとして)

ワームホールのなかでは潮汐力や放射が猛烈になりそうなので、未来の文明は、向こう側の宇宙で再生するのに必要な燃料やシールドや養分を、最小限にして運ばなければならないだろう。そこでナノ・テクノロジーを使えば、それらを詰めた小さな鎖を細胞ほどの大きさの装置に入れて、ワームホールの向こうへ送れる可能性がある。

ワームホールが非常に小さくて原子サイズだとしたら、その向こう側で全人類を再生できるだけの莫大な情報を、原子でできた長いナノチューブに詰めて送ることになるだろう。さらに小さくて、ワームホールが素粒子のサイズだったら、原子核をそこへ送り込み、向こう側で電子をつかまえて原子や分子を再構成するようになるしかない。

(以上をもってして訳書よりの引用とする —※—)

(※原著にての英文表記は “ **Because the tidal forces and radiation fields would likely be intense, future civilizations would have to carry the absolute minimum of fuel, shielding, and nutrients necessary to re-create our species on the other side of a wormhole. Using nanotechnology, it might be possible to send microscopic chains across the wormhole inside a device no wider than a cell. If the wormhole was very small, on the scale of an atom, scientists would have to send large nanotubes made of individual atoms, encoded with vast quantities of information sufficient to re-create the entire species on the other side.** If the wormhole was only the size of a subatomic particle, scientists would have to devise a way to send nuclei across the wormhole that would grab electrons on the other side and reconstruct themselves into atoms and molecules. ” となる。ここで原子核云々のサイズ上の制約の問題について考えるような向きならば「何故もってして」Femto-machine フェムト・マシンのことが問題になるかご理解いただけるかとは思う)

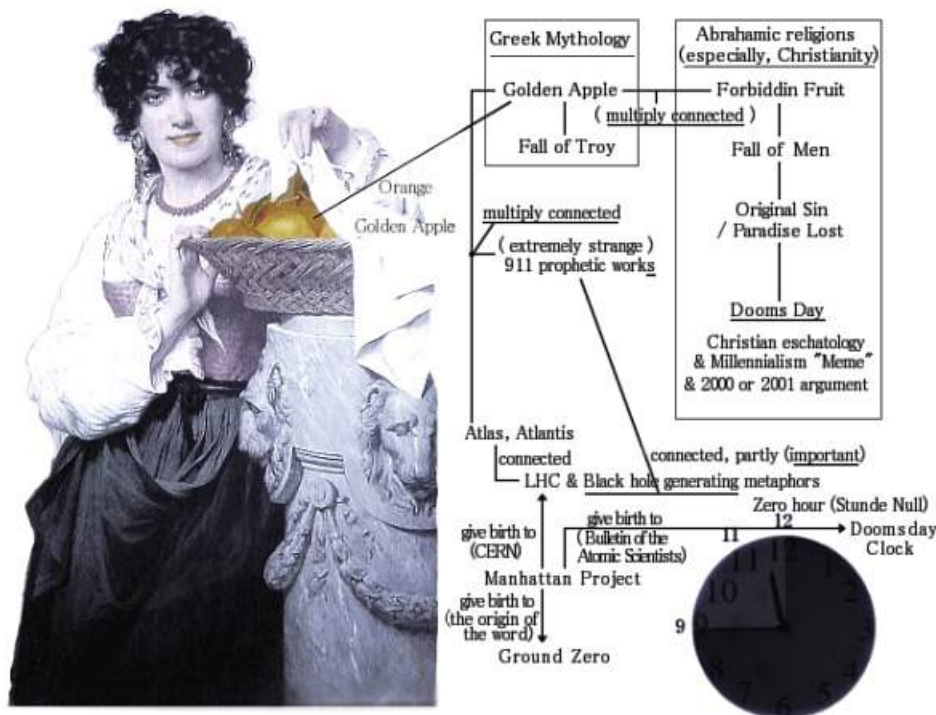
(ワームホールやカー・ブラックホールの類が生成されうるとして) [潮汐力] や [放射線被曝] に耐えうるとの極小さがゆえにナノマシンである必要がある、そういう言われようが科学者に科学的になされているわけである。が、まだ、納得がいかないとの向きもあるやもしれない。そこで長大なる本稿にてのそもそのエピグラフ(冒頭序言)の部からしてそちら記述を引いているとの著作、

The Singularity Is Near: When Humans Transcend Biology (原著 2005 年刊、日本語訳書 2007 年刊の著者をカリスマ起業家・発明家として知られるレイ・カーツワイルとする著作となり、同著原題『ザ・シンギュラリティ・イズ・ニア』を忠実に訳せば、『特異点の時は近い。人類が生体組織を超越するとき』とあいなるものなのだが、(現)NHK 出版より出されているとの訳書邦題は『ポストヒューマン誕生 コンピューターが人間の知性を越えるとき』とされもしているとの著作ともなり、先にも申し述べたところとしてその内容が(強くも抱いての推察 guess の問題として)[二重話法; Double Meaning]に関わっていそうである、[人間の不幸の本質]に関わっていそうであるとのことを [Singularity; 特異点] との概念との絡みで本稿筆者が深刻に検討するに値すると見ている著作となりもする)

より次の記述の引用をなしておく。

出典 (Source) 紹介の部 117

SOURCE 117(2)



ここ出典 (Source) 紹介の部 117(2) にあっては

[ワームホールを介してナノマシンとのかたちで情報を対象領域に送るとのことがいかに学術者に提唱されているのか]

とのことについて紹介しておくこととする。

In 1935 Einstein and physicist Nathan Rosen formulated "Einstein-Rosen" bridges as a way of describing electrons and other particles in terms of tiny space-time tunnels. In 1955 physicist John Wheeler described these tunnels as "wormholes," introducing the term for the first time.

[. . .]

In 1988 California Institute of Technology physicists Michael Morris, Kip Thorne, and Uri Yurtsever explained in some detail how such wormholes could be engineered.

[. . .]

They also pointed out that based on quantum fluctuation, so-called empty space is continually generating tiny wormholes the size of subatomic particles. **By adding energy and following other requirements of both quantum physics and general relativity (two fields that have been notoriously difficult to unify), these wormholes could be expanded to allow objects larger than subatomic particles to travel through them. Sending humans through them would not be impossible but extremely difficult. However, as I pointed out above, we really only need to send nanobots plus information, which could pass through wormholes measured in microns rather than meters.**

Thorne and his Ph.D. students Morris and Yurtsever also described a method consistent with general relativity and quantum mechanics that could establish wormholes between the Earth and faraway locations. Their proposed technique involves expanding a spontaneously generated, subatomic-size wormhole to a larger size by adding energy, then stabilizing it using superconducting spheres in the two connected "wormhole mouths." After the wormhole is expanded and stabilized, one of its mouths (entrances) is transported to another location, while keeping its connection to the other entrance, which remains on Earth.

[. . .]

Matt Visser of Washington University in St. Louis has suggested refinements to the Morris-Thorne-Yurtsever

concept that provide a more stable environment, which might even allow humans to travel through wormholes. In my view, however, this is unnecessary.

By the time engineering projects of this scale might be feasible, human intelligence will long since have been dominated by its nonbiological component. Sending molecular-scale selfreplicating devices along with software will be sufficient and much easier. Anders Sandberg estimates that a onenanometer wormhole could transmit a formidable 10^{69} bits per second.

Physicist David Hochberg and Vanderbilt University's Thomas Kephart point out that shortly after the Big Bang, gravity was strong enough to have provided the energy required to spontaneously create massive numbers of selfstabilizing wormholes. A significant portion of these wormholes is likely to still be around and may be pervasive, providing a vast network of corridors that reach far and wide throughout the universe. It might be easier to discover and use these natural wormholes than to create new ones.

(上の原著表記に対する訳が記されてのハードカバー版『ポストヒューマン誕生 コンピューターが人間の知性を越えるとき』(現 NHK 出版刊行の初期版)にての第六章[衝撃・……]466 ページから 468 ページより中略なしつつもの引用をなすとして)

一九三五年、アインシュタインとネイサン・ローゼンは[アインシュタインーローゼン橋]という、電子やその他の粒子がとおる小さな時空トンネルについて発表した。一九五五年、物理学者ジョン・ホイーラーはこのトンネルを「ワームホール」と表現し、その言葉を初めて世に知らしめた。…(中略)…一九八八年、カリフォルニア工科大学の物理学者マイケル・モリス、キップ・ソーン、ウーリー・エルツヴァーは、そのようなワームホールを設計する方法についてくわしく説明した。…(中略)…量子ゆらぎに基づけば、「真空の空間」は絶えず原子より小さなサイズの小ワームホールを作りだしているとも指摘した。エネルギーを加え、量子物理学と一般相対性理論(この二つの分野は統合が難しいことで知られる)双方の要求を満たすことにより、このワームホールは拡張され、原子より大きい物体も通れるようになるだろう。そこへ人間を送り込むことは不可能ではないものの、きわめて困難である。しかし、上述したように、実際には情報を付加したナノボットさえ送ればいいわけで、そうなるとワームホールの直径は、数メートルどころか数ミクロンもあれば十分だ。ソーンとその博士課程の学生モリスおよびエルツェヴァーは、一般相対性理論と量子力学のどちらにも矛盾しないで、地球と遠い場所を結ぶワームホールを作る方法についても述べた。彼らが提唱した技術は、自然発生した原子より小さいワームホールにエネルギーを加えて拡大し、さらに超伝導状態の球を用いて二つの[ワームホールの口]を安定させるというものだ。…(中略)…ワシントン大学(セントルイス)のマット・ヴィサーが提案したモリスーソーンーエルツェヴァー構想を改善したワームホールは、いっそう環境が安定しており、人間も通行できるようになっている。しかし、わたしの考えでは、これは不必要だろう。この規模の技術計画が実現するころには、人間の知能は非生物的部分が優位を占めるようになって久しいだろう。ソフトウェアとともに分子サイズの自己修復するデバイスを送れば十分であり、そのほうが簡単だ。アンデルス・サンドベルイは、一ナノメートルのワームホールは一秒あたり10の69乗ビットもの膨大な情報を送ることができると試算している。物理学者デヴィート・ホッホベルクとヴァンダービルト大学のトマス・ケップハートは、ビッグバンのわずかのちに重力はひじょうに強くなり、そのエネルギーがあれば自己安定するワームホールが大量に自然発生できたはずだ、と指摘する。このようなワームホールの大部分はまだあちこちに残っていて、宇宙全体にわたって遠く幅広い地点を結ぶ広大なネットワークの回廊を作っているそうである。新しいものを作るより、このような自然のワームホールを発見し利用したほうがずっと簡単かもしれない。

(原著および訳書表記を引いての引用部はここまでとする 一※一)

(※上の引用部に対する注記をいくつかなしておく。

まずもってしての一点目。

[10の69乗ビットの情報を1ナノメートルのワームホールを介して他領域に送れるとの試算が出されている](a onenometer wormhole could transmit a formidable 10^{69} bits per second.)

との引用部にての表記の出典ではあるが、Physics of Information Processing Superobjects.との Anders Sandberg アンデルス・サンドベルイという調査畑の科学者による資料が出典として引用元著作に挙げられている(そちら著者たる Anders Sandberg はレイ・カーツワイル著作 **The Singularity Is Near: When Humans Transcend Biology** の中にて度々もってして言及されているとの調査畑の科学者で computational neuroscience、脳の神経の計算機「的」なる振る

舞いを分析するとの学問を専門としてやってきたとの向きとなる；ちなみに [10 の 69 乗ビット] などと述べても情報技術(の基本的なところ)に疎いとの向きはピンとこないかもしれないから書いておくが、10 の 10 乗ビットが 10 ギガビット、すなわち、およそもってしての 1.25 ギガバイト((1 ギガ「バイト」byte が 8 ギガ「ビット」bits であるところの 1.25 ギガ「バイト」)に相当し、その 1000 倍、10 の 13 乗ビットが 1.25 テラバイト、すなわち、2014 年時点の標準レベルの小型外付け「ポータブル」ハードディスクの容量 1TB に相当する(圧縮具合により事情も変わるだろうが、大体にして映画が何十本も入るといった容量を想起いただきたい)。そこからまたもってし 1000 倍の 10 の 16 乗ビットで 1.25 ペタバイト、すなわち、1250 テラバイトとなる。そして、そこからさらに 10 万倍してのそれが 10 の 22 乗ビット(10^{22} bits)、すなわち、1.25 ゼタバイト(zettabyte)となる—2013 年時点での世界全体のワールド・ワイド・ウェブ上の情報の総体量は 4 ゼタバイトとされているので(英文 Wikipedia [Zettabyte] 項目にあつて現行現時点で “ As of 2013, the World Wide Web is estimated to have reached 4 zettabytes ” (動画データなど含めて)2013 年時点でワールド・ワイド・ウェブは 4 ゼタバイト分の容量に拡大していると見積もられている)との表記が Richard Currier (2013-06-21). "In 2013 the amount of data generated worldwide will reach four zettabytes".との典拠が挙げられながらもなされている)、そちら 1.25 ゼタ「バイト」は 2013 年時点での世界全体のワールド・ワイド・ウェブ上の全情報をおよそ 3 分の 1 を少し多めに見た程度のものとなると想起いただきたい。お分かりか、とは思うのだが、従いもして、(1 ナノメートル、すなわち、 10^{-9} メートル、[1メートルの 10 億分の 1] とのサイズのワームホールでそれが 1 秒にて送れるなどと表記引用部でされている)10 の 69 乗ビットというのはすさまじい情報量となり、それは 2013 年時点での(膨大な容量の動画データなどをひっくるめての)全世界ワールド・ワイド・ウェブ上の情報量の 3 分の 1 程度の情報量をさらに[10 の 47 乗]倍も増大させた—1 兆が 10^{12} なのだから[1 兆×1 兆×1 兆×1000 億]倍も増大させた—天文学的数値の情報量が送られうるとの表記と同文になる)。

次いでもってして補足したきことの二点目。

引用部にあつては

“ 物理学者デヴィット・ホッホベルクとヴァンダービルト大学のトマス・ケップハートは、ビッグバンのわずかのちに重力はひじょうに強くなり、そのエネルギーがあれば自己安定するワームホールが大量に自然発生できたはずだ、と指摘する ” (“ **Physicist David Hochberg and Vanderbilt University's Thomas Kephart point out that shortly after the Big Bang, gravity was strong enough to have provided the energy required to spontaneously create massive numbers of selfstabilizing wormholes.** ”)

との表記がなされている。

その伝で行けば、そう、[ビッグバンのわずかのちに重力はひじょうに強くなり、そのエネルギーがあれば自己安定するワームホールが大量に自然発生できたはずだ]との伝で行けば、CERN のラージ・ハドロン・コライダーが[ビッグバン直後の状況を再現するとされること]が気がかりなところとなりもする(ラージ・ハドロン・コライダーがいかようにしてビッグバン・宇宙創成の状況を再現する装置だと評されているのかについては、たとえば、本稿にての [出典 \(Source\)](#) [紹介の部 24](#)などを参照されたい)。そして、現実には LHC はワームホールを生成する可能性が取り沙汰されているものである(先立っての段で振り返りも

したばかりのこととなる)。以上をもってして引用部に対する注記としておく)

(**出典(Source)紹介の部 117(2)**はここまでとする)

直上の部までにて

[**精神転送の発想法として脳をナノマシンに代替するとの観点がある**]

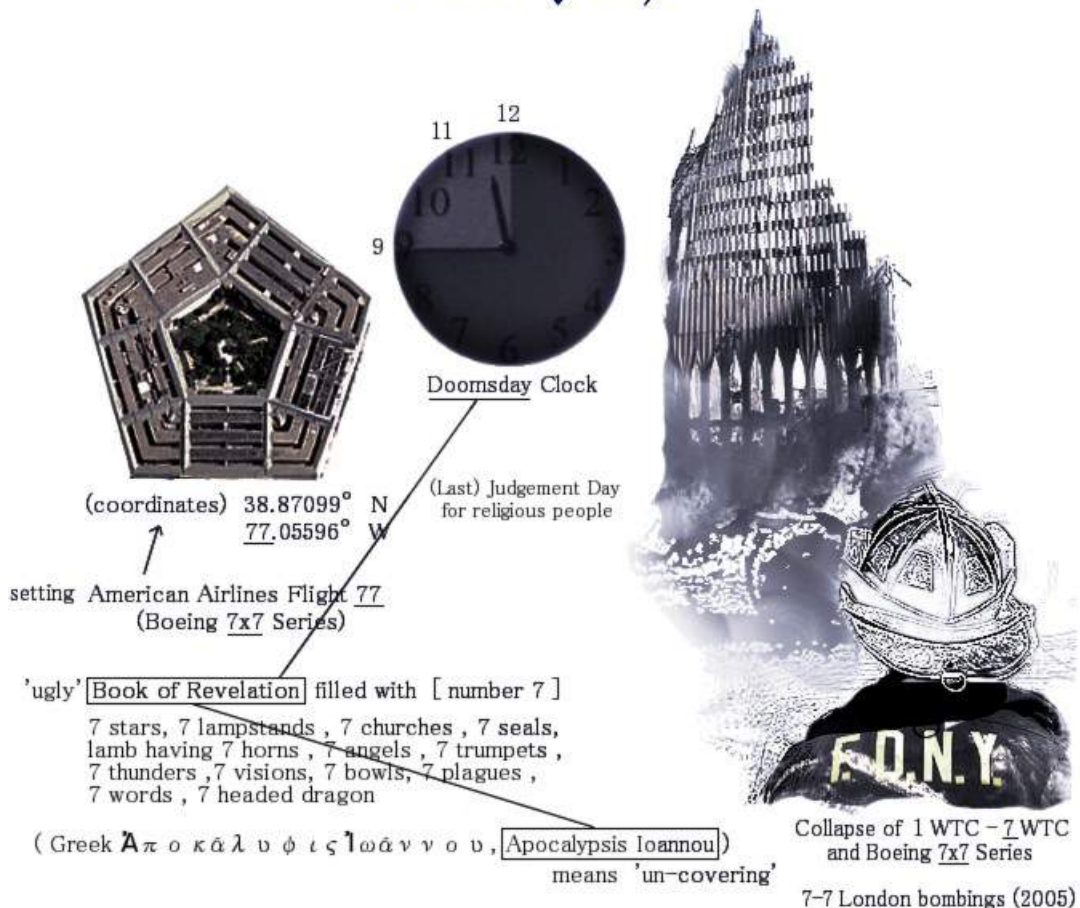
⇒

[**「それ自体、微小なるワームホール」越しであっても「膨大な情報」(1ナノメートルのワームホール越しに一秒毎に10の69乗ビットとも)をナノマシンを介して(他宇宙に)送ることができるとの科学予測が呈されている**]

このことを示す引用をなしてきたわけだが(それらが何故、「それ単体だけなせば」「科学予測にすぎない話」から「人間滅亡の執拗なる意思表示に通ずる事柄」へと変じ、「**ホワイダニット**」の問題と結びついていようと判じられるのか、その理由となる具体的根拠については繰り返さない)、さらに以下、引用なすような表記もカーツ・ワイル著作になされていることを紹介しておく。

出典(Source)紹介の部 117(3)

SOURCE 117(3)



ここ出典(Source)紹介の部 117(3)にあつては、

[人間の生体構造をナノマシンに置き換えるとはいかようなことであるとされているのか]

[ナノマシンの電力供給に関してはいかような言いようがなされているのか]

とのことについて紹介しておくこととする。

(直下、レイ・カーツワイル著作 The Singularity Is Near: When Humans Transcend Biology (2005) にての(何故かドイツ語にて章題表記されての) CHAPTER SEVEN Ich bin ein Singularitarian の章よりの引用をなすとして)

Consider replacing a tiny portion of my brain with its neuromorphic equivalent. Okay, I'm still here: the operation was successful (incidentally, nanobots will eventually do this without surgery). We know people like this already, such as those with cochlear implants, implants for Parkinson's disease, and others. Now replace another portion of my brain: okay, I'm still here ... and again....At the end of the process, I'm still myself. There never was an "old Ray" and a "new Ray," I'm the same as I was before. No one ever missed me, including me. The gradual replacement of Ray results in Ray, so consciousness and identity appear to have been preserved. However, in the case of gradual replacement there is no simultaneous old me and new me. At the end of the process you have the equivalent of the new me (that is, Ray 2) and no old me (Ray 1). So gradual replacement also means the end of me. We might therefore wonder: at what point did my body and brain become someone else

(上の原著表記に対する訳が記されてのハードカバー版『ポストヒューマン 誕生 コンピューターが人間の知性を越えるとき』(現 NHK 出版刊行の初期版)にあつての第七章 [わたしは特異点論者だ] にての 495 ページより引用をなすとして)

わたしの脳のごく小さな部分を、同じ神経パターンをもつ物質と置き換えることを考えてみよう。そう、わたしは依然としてここにいる。手術は成功したのだ(ちなみに、ナノロボットなら、外科的処理を行わずにそれをやりとげられる)。すでにこのような人は存在する。たとえば、内耳の蝸牛管の移植を受けた人や、パーキンソン病の症状を抑えるために神経移植を受けた人などだ。さて、次にわたしの脳の別の部分を置き換えよう。それでも、わたしはもとのわたしのまま……そしてさらにまた移植を……。一連の移植のあとも、わたしは依然としてわたしだ。「古いレイ」も「新しいレイ」も存在しない。わたしはもとのわたしのままだ。わたしがいなくなったと悲しむ者は、わたしも含め、誰もいない。

徐々に身体を置き換えていっても、レイはもとのままで、意識もアイデンティティもそのまま維持されているようだ。しかし、全てのプロセスが終わったとき、そこにあるのは新しいわたしに相当する存在(すなわちレイ二号)で、古いわたし(レイ一号)はもはやいない。したがって、穏やかな置き換えもまた、わたしの死を意味する。ここで疑問がわき起こるかもしれない。いったいどの時点で、わたしの身体と脳は、別の誰かになってしまったのだろう、と。

(原著および訳書表記を引いての引用部はここまでとする 一※一)

(※上の引用部に続くところとして天才発明家として知られるレイ・カーツワイルは[人間機械化問題]に対して好意・肯定的と受けられる所信を表明しているのだが(Ray Kurtwail のその部の申しようを引用すれば、“ I do

believe that we humans will come to accept that nonbiological entities are conscious, because ultimately the nonbiological entities will have all the subtle cues that humans currently possess and that we associate with emotional and other subjective experiences.” (訳として)「私ことレイ・カーツワイルの信ずるところでは人類が[非生物的な存在]が意識を持っているの
ことをみとめる日がいつぞか来ることになる。というのも究極的には(そうもした)
[非生物的な存在]らが我々人間が現在保持し、また、感情的および主観的
経験に応じて連想・導出する微妙な心中機微を持つに至るであろうと(見える)
からである」との観点が明示されている)、カーツワイル言いつ分に見る
機械の人間的特性の獲得の問題はさておきも

[人間の[再生]可能性への回答]

それ自体は明確化しているのではないかと本稿筆者などは見ている。

生体組織の造化の妙、そして、生体組織を伴っての苦節哀楽伴っての[経験]
[記憶]によって構築された人格・魂の再現、そう、[魂の再生](無論、その機序
さえ未だに科学的に解明されていない)は[ナノマシンの集合体]には出来ぬこと
であろうと考えられもすると筆者は見ているのである(本稿にての
出典(Source)紹介の部 87(3), 出典(Source)紹介の部 87(4)でもブレイン・
マシン・インターフェースを用いていかにどのように[生体の脳を操作する]との
科学的研究が人間レベルで今までに執り行われてきたかを呈示したが、[生体
の機械化]によって出来ることと言えば、[魂の本然的作用を希薄化させること
だけだろう][さも生体の魂があるかのように振る舞わせることだけだろう]
とこの身、筆者はとらえている)。

が、といったことら、

[機械による精神の再生の可能性] (ここにて問題視している著作 **The Singularity Is Near: When Humans Transcend Biology** の著者たるレイ・
カーツワイルは「クオリア(意識)・存在認識の哲学は(人は)[主観の共有]
はできないのであるから、主観的問題にとどまらざるをえない」と強調するの
だが、[機械の人間存在への近似化]と[機械による精神の再生]とは別問題
と見えもする)

といったこと云々以前に

[そもそもナノマシンが異物として脳に侵入してくるのであれば、どちらにしる、
ナノマシンに「物理的に」置き換えられた人間の生体脳は[完全に食われた]
とのことになる(露骨ないいようをなせば、脳味噌を食べられて空洞とな
ったところに[別のもの]が入ったとの話となる)]

と考えられるところである)

尚、移送ナノマシンが[人間の脳の生体構造]に取って代わりうるとの未来予測——同じくもの未
来予測は人間の生体の脳が[人類の眼前に表出しているテクノロジー]にても操られうる、現行、応用
技術化検討が進んでいるとのブレイン・インターフェースによって操られうるとの問題とは異質なもので
ある([生体組織における脳波(電磁波)]⇒(操作)⇒[機械]とは反対方向で[機械]⇒[電気的
刺激]⇒[脳内電流にて動く脳]との方向で生体が操られうることがある、そういった話とは「全く異質」
のものである、そう、[ウイルスに感染して妙な振る舞いをしているパーソナル・コンピューター]と[中身
がごっそり基板ごと取り替えられた、しかし、外面だけは同じように見えるコンピューター]が違うぐらい
に異質なものである)——については、である。電力供給面「でも現実的と受け取れる素地がある
(たかだか現行にて我々人類が捕捉しているテクノロジーの面から見たうえでも現実的と受け取れる素
地がある)。そのことについても下に引用しておく。

(直下、レイ・カーツワイル著作 **The Singularity Is Near: When Humans Transcend Biology**(2005)にての CHAPTER FIVE GNR Three Overlapping Revolutions の章よりの引用

Scientists at the University of Texas have developed a nanobot-size fuel cell that produces electricity directly from the glucose-oxygen reaction in human blood. **Called a "vampire bot" by commentators, the cell produces electricity sufficient to power conventional electronics and could be used for future blood-borne nanobots. Japanese scientists pursuing a similar project estimated that their system had the theoretical potential to produce a peak of one hundred watts from the blood of one person, although implantable devices would use far less. (A newspaper in Sydney observed that the project provided a basis for the premise in the Matrix movies of using humans as batteries.)**

[...]

Nanotubes have also demonstrated the promise of storing energy as nanoscale batteries, which may compete with nanoengineered fuel cells.

[...]

The most promising approach to nanomaterials-enabled energy is from solar power, which has the potential to provide the bulk of our future energy needs in a completely renewable, emission-free, and distributed manner.

(上の原著表記に対する訳が記されてのハードカバー版『ポストヒューマン誕生 コンピューターが人間の知性を越えるとき』(現 NHK 出版刊行の初期版) にあつての第 5 章[GNR]にての 311 から 312 ページより中略なしつつもの引用をなすとして)

テキサス大学の研究者が開発したナノサイズの燃料電池は、人間の血液中のブドウ糖と酵素の反応から直接、電気を起こすことができる。**識者に「ヴァンパイア・ボット(吸血鬼ロボット)」と名付けられたこの電池が供給する電力は、既存の電子機器を動かすことができ、将来的には血液をエネルギー源とするナノボットに利用できそうだ。同じような研究を行っている日本の科学者が試算したところ、このシステムでは、理論上は人間ひとりの血液から最大 100 ワットの電力を生産できるはずで、それは人間に埋め込む機器の消費電力を優に上回る(シドニーの新聞は、映画『マトリックス』シリーズでは、このプロジェクトを根拠として人間を電池として使う設定を考えたのだと報じている)。**

自然界に豊富にある糖を電力に転換するもうひとつの方法が、マサチューセッツ大学のスワデス・K・チョードリとデレク・R・ラヴリーによって実証された。彼らの燃料電池は、実際の微生物(ロドフェラックス・フェリドゥケンスというバクテリア)を採用し、エネルギー効率はなんと八パーセント、アイドリングモードではほとんどエネルギーを消費しないという。

...(中略)...

ナノチューブも、ナノ電池としてエネルギーを貯蔵できることがわかっている。将来はナノ燃料電池と競合するようになるかもしれない。これによってナノチューブの用途はさらに広がる。

...(中略)...

ナノ材料によって可能となるエネルギーのうち、もっとも有望なのは太陽光発電だ。それによって将来のエネルギー需要の大半を、完全に再生可能かつゼロエミッションの分散方式で提供できるようになりそうだ。

(原著および訳書表記を引いての引用部はここまでとする)

上にての引用部にて呈示したような観点（“Biofuel Cell Runs on Metabolic Energy to Power Medical Implants”とのNature誌オンライン版にての記事を出典にしての観点）から、たとえば、太陽光発電でもいい、そういうものを動力に用いるナノマシンが撒布された場合、それが第一段階で空中に浮遊、呼吸器を介して人体に吸収されてから、次いで、人間の中で糖を電力にしての活動を開始し（さながら先述の映画『インベーション』に見る「微生物」である）、徐々に人間の脳をナノマシンに置き換えていくとのことを考えればどうか。であれば、確かにナノマシン投入をなして対象文明を完全に抹殺・代替することができることになる（対象文明の成員の脳組織（不完全にしか操れぬ、たとえば、他世界を貫通する重力波を通じてふざけた人工知能に結線させて不完全にしか操れぬとの脳組織）を「生体構造」から「機械構造」に置き換え、完全に「脳死」させて皆殺しにしたうえでその「肉体」だけをリソースとして一代のみ利用できるとのやりようもなせる。—まさしく悪夢の如きシナリオである—）。

人間の文明を、いや、種族としての人間そのものを

「皮だけは人間かもしれないが、」といったレベルでの完全に自儘に出来る機械装置

に「置き換える」ことが果たしてできるかがここでの問題となる（現行の人間の世界では全人類がいきなりお互いに狂ったように殺しあうとのことはない（歴史的な「踊狂伝承」、日本のええじゃないか騒動や西欧のダンシング・マニアに見るような多くの人間が狂ったように踊り出す、現代でいうところのフラッシュ・モブのパフォーマンスのようなありようで狂ったように踊り出すとのことはあったようだが一表向きにはそういったことは集団ヒステリーのように説明されるが、西洋のダンシング・マニアなどでは倒れるまで、時に、死ぬまで踊り狂うといったことが具現化したとの歴史的記録がある—、多くの人間が容易に殺し合うなどの兇悪な挙動を他律的になさせられるようにはできあがっていないように見える）。[メス(医療切断器具としてのメス)を使わぬ非侵襲的なやりよう]で間接的に操作されて愚劣極まりない挙をなさせられるような向きら—ラジオコントロールされもして[他我(人工知能のそれかもしれない)]と[本然としての自我]の別さえ曖昧となってしまう類(機械結線個体)とも—で充満しているようにすら「見えてしまう」忌々しい世界でも多くの人間がデス・ゲームをはじめなどの状況には「流石に」至っていない。だが、[生体の脳が機械に置き換えられた存在](CTスキャンでチェックすればすぐに人間の皮をかぶっているだけの紛い物と分かりもしようとの存在)が主要構成単位となれば、どうか。[機械]とは指示された通りに動かされるだけの存在であり、その領分では極めてハイ・パフォーマンス、いかなる極性帯びでの挙動をもなしうる。漫画チックに表すれば、「年齢的には四則演算もままならぬ小児」の皮を被った存在が黒板に他の高度機械の設計図をつらつらと無表情にいきなり書き出すといったことさえ具現化しうる)。そうした最早完全に人間ではなくなってしまう機械の群体を用いて次に何がなされうるか。人類文明では実現しないような装置がこの世界にて山と構築されはじめ、中には、[遺伝子操作工場によって[別種族の赤子らあるいはクローンら]をこの世界に再生する施設]が含まれているといったことにもなりうる。そこまで来て人間の世界への別種族の[植民]が成功したことになるであろう。そういうことにまつわる話をここではなしているわけである（語るに値しない程に意志の力が弱い、ゆえに、意志の力に根差しての頭の働き具合が実にもってよろしくはないとの者達にあっては[ナノマシンがこの世界に入ってくる「現実的」可能性はある]とのことが何を意味するのか、ついで理解・情報処理すらしようとしもない(あるいは「鈍きこと限りなし」)の中でようやく理解出来ても陋劣なる品性から[取るに足らぬ命のほんの少しの間の安泰]のために飼い主の指示で反抗に対する足の引っ張りをなすか、良くても意志薄弱さがゆえに何もしない)とも思うのだが、とにかくも、[ナノマシン侵入]と[絶滅戦争の完遂と植民の達成]は当然にワンセットのことである（でなければ、

[人間が既に間接的に藁籠中にされきっている節があるこの世界へのナノマシンの侵入] などそもそも企図される[必要]がないし、[意味]もない)。まずもって従前から被影響下にあった —「向こう側の」機械回路と重力波などそれなりの機序にて間接的に結線されてきた等等— と解される人間の魂の基盤(要するに脳である)が完全に壊され、入れ替えられる。そして、人間は[機械化第一世代]のみで使い捨てられる[人間の脳なき人間の皮のみの存在](どんなに常軌を逸した行為でも「完全」リモートコントロール・ドローンとしてやり遂げる存在)へと変じさせられ「うる」との予測も成り立つ。そういうことをここでは述べている —そしてまた、本稿にての[出典(Source)紹介の部 18, [出典(Source)紹介の部 19, [出典(Source)紹介の部 21—2, (かなり後の段にずれこんで), [出典(Source)紹介の部 76(3), (さらに後の段にずれこんで), [出典(Source)紹介の部 89]にて言われようの典拠を示しているように、LHCは、そして、「極小の」ワームホールを生成しうると目されるに至っている装置である—)。

これにて

[ホワイダニットの問題] (何故、[執拗な意思表示]を伴っての犯罪的状態が具現化させしめられているのか、とのことについての[動機]にまつわっての問題)

として[ナノマシン投入可能性]との絡みで筆者がどういふ可能性を呈示したいかについてお分かりいただけるかとは思ふ。

くどくも述べれば、要するに、

【(既に相応の「間接的」機序で藁籠中と考えられる) 人類 — [Mankind as the indirectly remote-controlled race] Phase (now)— 】 ⇒ 【魂を殺しての生体部品化 — [Nanobot(femtobot) Injecting via "Worm" Holes] Phase (Brain Conversion Phase; Soul of Mankind Extinction Phase)— 】 ⇒ 【その先にあるプランの達成 — [Genetic Engineering Operation Starting] Phase (Resurrection or Colonization Starting Point) — 】

といった流れが企図としてあってもおかしくはないと述べたいわけだが、それをもって

([「現実的」推理]ではなく) [論拠を伴っていない馬鹿げた憶測(ridiculous speculation)の類— かくもあるとの響きの通りそうした話をなすだけでは空想家の領分(サイエンスフィクション好きの揣摩憶測でもいい)に留まるとの話—]

と思われるだろうか。

だが、実に遺憾でならないのだが、筆者は上のようなこと、そう、聞き手の知識量に反比例、また、頭の固さ度合いには比例しもして[異常なる放言]と聞こえもする度合いがいや増しに増そうとのことまでもが

[「現実的」推理]

として成立するとの具体的論拠を「既に」挙げている。

疑わしきは次の各点 —今更繰り返す必要も無いまでにくどくも論じたててきたことなのだが、再度、呈示しもすることら— の意味合いをよく考えて見るとよい。

1. 「シンボルにおける相応の色合いの多重的具備が指摘できるようになっている」との[911の事件が発生することを事前言及しているが如き文物ら]が現実に存在している(奇っ怪なことではあるのだが、とにかくも存在しているとのことが細かくも指摘出来るようになっている)。

そして、そうした存在していること自体が奇態なるものらが

[トロイア崩壊(関連のギリシャ伝承)][ヘラクレス12功業]

にまつわる要素を多数伴っていることを摘示できるようになってしまっているとのことまで「も」がある（ここホワイダニットの話に先行するところの意味論的分析および確率論的分析の段でくどくも(出典表記番号を挙げ連ねながら)振り返り表記なしでしてきたことである)。

2. 直上の**1.**にて述べているように911の事件が発生することを多重的に事前言及しているとの按配の文物「ら」があり、そして、そこには

[トロイア崩壊(関連のギリシャ伝承)][ヘラクレス12功業]

にまつわる言及が多数伴っているとのことがある（については本稿にての呈示論拠の検証を請う）とのことが指摘できるように「なっている」わけだが、のみならず、そうしたものらには

[ブラックホール][ワームホール]

との接合点「も」が見てとれるとのことがある(同文に本稿にての呈示論拠の検証を請う)。

3. 上の**1.**及び**2.**のことと平仄が合うように —この世界にてブラックホール生成やワームホール開閉がなされるとすればそれしか手段がないと現行見られているところの— ラージ・ハドロン・コライダーを用いての加速器実験(これよりさらなる出力倍増が試みられている加速器実験)にも

[トロイア崩壊(関連のギリシャ伝承)][ヘラクレス12功業]

と通ずる命名規則が現実には確として採用されているとのことがある（本稿にての解説部を通じて[そうする動機が人間存在それ自体にはない]とのことを含めて確認を請いたいところでもある)。

4. 以上**1.**から**3.**と平仄が合いすぎる程に合うとの要素が人間の文明(一から十まで紛い物でも、とにかくもの文明)にあつての

[根本的なところ]

で数多指摘できるようになっているとのことがある（超が付くほどに著名、文明の基軸にすら影響力を与えていたとの評価から俗にウェスタンカノンと呼ばれる西洋古典ら(ホメロス古典、ヴェルギウス古典、ダンテ古典、ミルトン古典)に認められる相応の側面がいかようなものなのか原文引用なしつつも懇切丁寧に指摘なしでいる本稿の各部を検討頂きたい)。

以上のようなことが

[薬籠中の人間ら — [具体的機序] (具体的作動原理) は不分明であるが、[現象] としての予言(と言われるような予見的なる言及)の巧妙さに見る犯行結果から状況証拠レベルで [薬籠中にある] と明言できてしまうような人間ら—]

を多く内包して構築されているが如きこの世界にて指摘できるようになっているならば、である(膨大な文字数を割いてもものしている本稿では実際にそう指摘できるようになっているとのことの証示にひたすら努めている)。

お分かりかとは思うのだが、

[犯行動機が事前に犯行主体から明示されているとの節が濃厚にある — 少なくとも標的を騙して内側から破滅させるとの意図(トロイアの木製の馬の使用の意図)までが明示されている—]

との式で上のような

[推理]

が易々と [現実的懸念を体現してのもの] として成り立つとのことになると述べるのである。

(:トロイアを滅ぼした木製の馬とは何か。トロイアがいかように滅亡したと伝承に伝わっているのか。その程度のこと — 本稿にても古典それそのものからの引用をなしながら解説なしにしていることでもあるその程度のこと— を知っていれば、[トロイアの木製の馬の寓意が露骨に付されての超巨大装置(人類文明の精華などと評されもしていること、後述する巨大加速器)による極小構築ゲートから入ってくるのがナノマシンたりうる]との推察が成り立つ、[加速器実験に関してつい最近から取り沙汰されるようになったこと](ワームホールの生成可能性)との絡みでそうした推察が成り立つこと、その意味性についてご理解いただけることか、とは思)

これでもってして

ブラックホールやワームホールの生成によって

[こことは異なる空間との垣根の破壊(そして、それに次いでもこの世界への侵出)をなす]

(あるいはもってして)

[裸の特異点を安全地帯から[ガラス越し科学実験用のゴム手袋 一要するに我々人間存在がそうしたものにとしつらえられてしまっている節あるありよう] を介して生成して、それを用いて空間と時間の中での覇権の確立をなす]

とのことが企図されているとのこととてありうるように「見える」ようになってしまっている

とのことらにあつての

[こことは異なる空間との垣根の破壊(そして、それに次いでもこの世界への侵出)]

にまつわる考えられるところの帰結のありよう、その現実的可能性にまつわる話 — ホワイダニットの問題に関わるところの現実的可能性にまつわる話— を終える。

次いで、同じくものことらにあつての、

[裸の特異点を安全地帯から [ガラス越し科学実験用のゴム手袋] を介して生成して、それを用いて空間と時間の中での覇権の確立をなす] (とのこととて企図されていると見えるようなところがある)

との点についての解説をなすこととする。

まずもって — 肝心要たるところとして— 直上言及の点にあつての[裸の特異点]と呼ばれるものが何なのかについてであるが、それについて極々基本的なところ、ウィキペディアの引用をなすことよりはじめる。

(直下、和文ウィキペディア [裸の特異点] 項目にあつての現行記載内容よりの掻い摘まんでの引用をなすとして)

裸の特異点 (naked singularity) は、一般相対性理論における用語で、事象の地平面 (event horizon) に囲まれていない、時空の特異点である。通常、ブラックホールの特異点は、光も出て行くことができない空間に囲まれており、その外側にいる我々はその特異点を直接観測することはできない。つまり、特異点の情報は外に伝わら

ないため、事象の地平面の外側では特異点の存在にかかわらず、物理現象・因果律を議論することができる。それに対して、裸の特異点では、物質密度が無限大となる点あるいは時空の曲率が無限大となる点が、外側から観測することができてしまうことを意味する。

(引用部はここまでとする)

以上のように [裸の特異点] とは

[[事象の地平] (ブラックホールの外延部としてそこより先は光さえ脱出できぬことになるとの垣根) が存在していない中でブラックホールがかったの物質密度が無限大になる点]

と一言で定義されているものである。

そうした [裸の特異点] はそれが観察されると宇宙の法則が根本から崩れ落ちるようなあまりにも「露骨」なものであるために [検閲官] (の行為めかした) 作用が自然界に働いている、[宇宙検閲官] 仮説との見方が呈されているようなものとなる。

[宇宙検閲官] 仮説に見る検閲官とは [裸の特異点の存在] をして [卑猥な文物] であるかのように検閲する存在 —自然界のそのような存在は許さないとの機序を擬人化させての存在— に仮託されるもので、検閲官に検閲される [裸の特異点] の猥雑性とは

[物事の先後関係・原因と結果の関係(因果律)を破綻するようなルール無視が許されることになる]

[物理学が自然現象を予測する力を破壊するような式が許されることになる]

との文脈で語られるところの [学者(という筋目の人種)らから見ての猥雑性] となる(卑猥・猥雑であるとの見方を呈示したのは英国の主要物理学者のロジャー・ペンローズとなる)。

同じくこの点はこれまた極々基本的なところ、ウィキペディアのような目に付く媒体にあって次のように解説されているところとなる。

(直下、英文 Wikipedia [Cosmic censorship hypothesis] 項目にての現行記載内容よりの引用をなすとして)

Since the physical behavior of singularities is unknown, if singularities can be observed from the rest of spacetime, causality may break down, and physics may lose its predictive power. The issue cannot be avoided, since according to the Penrose-Hawking singularity theorems, singularities are inevitable in physically reasonable situations. Still, in the absence of naked singularities, the universe is deterministic —it is possible to predict the entire evolution of the universe (possibly excluding some finite regions of space hidden inside event horizons of singularities), knowing only its condition at a certain moment of time (more precisely, everywhere on a spacelike three-dimensional hypersurface, called the Cauchy surface).

(訳として)

「特異点の物理的振る舞いというものは分からぬものなのであるから、特異点が時空間の他の部分から観測されうるとのことになれば、[因果律](因と果、原因と結果の因果の流れ)が破綻を見、そして、物理学の未来を予測する力が失われることになる。このような問題(が具現化すること)はペンローズ及びホーキングの特異点定理によれば、特異点は物理的に理に適った状況では回避なるものとなる、とのことで避けえぬものである。だが、[裸の特異点が欠如を見ているとの状況]では宇宙は決定論的なるものとなる、すなわち、宇宙の進化の全プロセス(ただしありうべきところとして特異点らの事象の地平の中に隠された有限なる空間領域は除く)について予

見なすことが可能となる、そこにては時間の特定の瞬間ありよう(より端的にはコーシー・サーフェスと呼ばれる三次元空間の様相を呈す超曲面にあつての全部の部)「のみ」を知りえるところとしてそうなる(訳注:「であるから」裸の特異点を排除する宇宙検閲官仮説が成立するというのは理に適っているとの書かれようがここではなされている)」

(訳を付しての引用部はここまでとする)

さらに突き詰める。上の引用部に見る「裸の特異点を観測しうるとのことが[因果律]が破綻することを意味している」とはどういうことかに関しては以下、出典紹介部 — (他ならぬLHCが「裸の特異点」(がかったもの)を生成する可能性があるとの学者ら言われようがなされていることをも取り上げる所存であるとの出典紹介部) — にあつて引用なすような書籍内記述が多くを物語っている(と見えるようになっていく)。

出典 (Source) 紹介の部 118

SOURCE 118

"Abaddon, to have been the name of the same Ophite God, with whose worship the world had been so long infected. Ob. I take Abaddon, or, as it is mentioned in the Revelations, Abaddon, to have been the name of the same Ophite God, with whose worship the world had been so long infected. He is termed by the Evangelist Αβαδδων, τον Αγγελον της Αβυσσου, the angel of the bottomless pit; that is, the prince of darkness. In another place he is described as the dragon, that old serpent, which is the devil, and Satan. Hence I think, that the learned Heinsius is very right in the opinion, which he has given upon this passage; when he makes Abaddon the same as the serpent Pytho."

Jacob Bryant, A New System or Analysis of Ancient Mythology Vol.II. (1807) OB, OUB, PYTHO, SIVE DE OPHIOGONIA

the September 11 attacks (coordinates) 38.87099° N 77.05596° W
 setting: American Airlines Flight 77 (Boeing 7x7 Series)

recall
 'ugly' Book of Revelation filled with [number 7]
 7 stars, 7 lampstands, 7 churches, 7 seals, lamb having 7 horns, 7 angels, 7 trumpets, 7 thunders, 7 visions, 7 bowls, 7 plagues, 7 words, 7 headed dragon

(Greek Αποκαλυψις Ιωαννου, Apocalypsis Ioannou) means 'un-covering', [bottomless pit]
 They had over them a king, an angel of the abyss, whose name in Hebrew is Abaddon, but in the Greek he is called Apollyon. (Revelation 9:11)

(in Satan's voyage through abyss) → 'Original Sin' for religious people
 The secrets of the hoary deep; a dark illimitable ocean, without bound, / Without dimension, where length, breadth, and height, / And time, and place, are lost; where eldest Night And Chaos, ancestors of Nature, hold Eternal anarchy, amidst the noise Of endless wars, and by confusion stand.
 John Milton Paradise Lost (1667) BOOK II, lines 890-895

Apollo (and his predecessor Pytho)

Collapse of 1 WTC - 2 WTC and Boeing 7x7 Series
 7-7 London bombings (2005) (referred as 7/7)

(peculiar) BH like properties (seen in 17th century)

ここ出典 (Source) 紹介の部 118 にあつては

「裸の特異点が成立しているとの状況がいかようなものと解説されているのか」

[LHCで裸の特異点(めかしたもの)が生成される可能性があるとの言われようがいかなようになされているのか]

とのことらにまつわっての学者ら申しようを紹介しておくこととする。

(まずもって直下、訳書『タイムマシン ——ワームホールで時間旅行——』(本稿の先だつての段でも同書にあっての他の部よりの引用をなしていたとのてはポール・ハルパーン(Paul Halpern)、フィラデルフィア工科大学教職のポストにある同物理学者の著した書)にての p.174 -p.175 より引用をなすとして)

超カー天体には一方通行の地平面がなく、中心のリング状特異点が裸で存在することになる。したがって、抜け出すことが不可能になったり別の宇宙へ旅しなくてはならなくなるといった欠点をともなうこともなく、特異点に向かった運動や特異点方向からの運動が可能となるものである。そのうえ、回転軸のまわりでタイムトラベルを可能とするリング状の領域も大きくなって全宇宙を覆うことになる。したがって、こうした奇妙な天体が存在していれば、全宇宙がタイムマシンと化してしまう。宇宙飛行士は超カー天体を使うと、何の苦労もなくタイムトラベルをすることができる。恐ろしいブラックホールに入ることなく、超カー天体の回転軸がどこにあるかさえ見つけ出せばよい。そしてその軸のまわりを回転すればよいのである。

超カー天体はその軸をまわることによって、宇宙のどの場所であっても過去にも未来にも危険なしで到達できる。超カー天体の存在は困ったジレンマを引き起こす。ブラックホールも超カー天体も時空が存在をやめる特異点を持っている。これらの宇宙の端点に近づくと、物理法則はあてはまらなくなる。…(中略)…ブラックホールでは、特異点は覆い隠されているが、超カー天体では特異点は裸なのである。…(中略)…むきだしの天井にパイプが走っているように、数学的に醜い存在が外から丸見えなのである。科学者の目から隠されることのない裸の特異点は、物理理論の適用の限界を示すとともに、「倫理的な不快感」をももたらす。

(以上をもって引用部とする)

上にては超カー天体のような裸の特異点 —引用部にては[むきだしの天井にパイプが走っているように、数学的に醜い存在]とも定義されている— を伴っている存在を葉籠中のものに出来れば、

[(宇宙自体を超カー天体と化さしめるとのことが要されるような書きようでもあるが) 全宇宙のどこにでも「ブラックホールに伴う脱出不可能のリスクを冒さずに」タイムトラベルすることができるようになる]

との表記がなされている。因果律が破れる「外から観察可能な」特異点とはおよそ上の超カー天体(と呼称されるようなもの)の存在を許すことになるのであろうと、とにかくも、筆者をはじめ門外漢にも推し量れるようになっている。

尚、以上のような書籍 Cosmic Wormholes: The Search for Interstellar Shortcuts『タイムマシン ——ワームホールで時間旅行——』(訳書版元:丸善株式会社)に見る仮説上の天体 —[超カー天体]なるもの— が

[裸の特異点]

と本然的ありようとして結びついていることの示唆は(科学考証がしつかりなされているとのことで「硬い」hardとの形容詞が付けられての)ハードSFとの呼称がなされているジャンルの小説作品、ホーキ

ングと共に裸の特異点定理を煮詰めていったロジャー・ペンローズの故地ともなっている英国にあっての理学志向の強い作家に由来する特定フィクションの内容から「も」推し量れるようになってはいる。

具体的にはその方面ではよく知られたハード SF 分野のシリーズ作品として 90 年代前半から世に出されている、

『ジーリー・シリーズ』（英国人作家スティーブン・バクスター、来歴としてはケンブリッジ大学で理学系の女王とされる数学の学位を、そして、英サウサンプトン大学で工学の博士号を取得しているとの理学志向が極めて強い作家によってもなされているシリーズ）

にまつわってのこととして英文 Wikipedia に端的に次のような記載がなされていることから「裸の特異点」というものの「宇宙を時間と空間を越えて行ったり来たりできる」との「超カー天体（と呼称されるようなもの）との関係性を端的に推し量れるようになっていもする。

（直下、英文 Wikipedia [Naked singularity] 項目にての In fiction の節にあっての現行記載内容よりの引用をなすとして）

Stephen Baxter's Xeelee Sequence features the Xeelee, who create a massive ring that produces a naked singularity. **It is used to travel to another universe.** 「スティーブン・バクスターのジーリー・シリーズでは[ジーリー]（小説に見る宇宙最強の文明種族）が裸の特異点を産する巨大なリングを産み出しているとのありようが描かれる。その裸の特異点を伴ったリングは別の宇宙を旅するために用いられている」

（引用部はここまでとする —※— ）

（※上記に見るシリーズものの小説作品『ジーリー・シリーズ』の中の特定作品（具体的には筆者もその「興味深い」タイトル、リヒャルト・ワグナーの『ニーベルングの指輪』の英語呼称たる Ring と一緒であるとの理由で「興味深い」と見、その内容を精査したことがあるとの Ring (邦題)『虚空のリング』(1993) が該当作となる) にあってのリングが **Cosmic Wormholes: The Search for Interstellar Shortcuts** (邦題)『タイムマシン ——ワームホールで時間旅行——』に見る「宇宙を時間と空間を入ったり来たりできる」[超カー天体]の類とある種、照応するように解されるところとなっているとのことをここでは問題視している)

裸の特異点というものがいかほどのものか、それが薬籠中のものと出来れば、人間の存在そのものを永年養殖してきただけの[手間]（コスト）に余りある[効用・利益]（ベネフィット）が得られると受け取れること、なんとなくにでもご理解いただけたか、とは思う。

そして、以上のような
[裸の特異点]

のようなものすらも LHC にて生成される可能性が —世間一般には権威の存するとされるところの主流物理学者に由来する論稿（イタリアの名門ボローニャ大学にての Robert Casadio ロバート・カサディオという物理学者の論稿）にて— 指摘されてきたとのことがある。 については下の再度の引用部を参照されたい。

（既に本稿の **出典 (Source) 紹介の部 76 (7)** で挙げていたところのボローニャ大の物理学者 Robert Casadio の手になるオンライン公開学術論稿 **Can black holes and naked singularities be detected in accelerators?** 『ブラックホールらと裸の特異点は加速器によって検知されるか?』

Further, if the total charge is not zero, we argue that naked singularities do not occur provided the electromagnetic field is strictly confined on an infinitely thin brane. **However, they might be produced in colliders if the effective thickness of the brane is of the order of the fundamental length scale ($\sim \text{TeV}^{-1}$).**

「さらに言えば、仮にもし総電荷がゼロでなければ、極めて薄い膜にあつての電磁場が厳密に制限されていない限り[裸の特異点]は生じない。しかしながら、それら(ブラックホールの裸の特異点)はもし有効的な膜の厚さが最小長単位 (TeV のマイナス乗 / TeV の逆数) のオーダーに達するのなら粒子加速器によって生成されうる」

(訳を付しての引用部はここまでとする)

(**出典 (Source) 紹介の部 118** はここまでとする)

以上述べたようなことがあるゆえ、

[人間存在がトロイアの木製の馬にて滅せられる寓意]

とワンセットになっていると解される理由について先立って詳述なしてきた LHC 実験(あるいはそのさらにも発展型の粒子加速器を用いての実験)にて

[裸の特異点] (のようなもの)

がこの世界に生成されるのならば、それはまた、それにまつわるところのここでのホワイダニットの推理も正しいことたりうることと同義となる (この場合、おおよそ当てにならぬとの推論の式、二重の仮定、[もし粒子加速器がトロイアの木製の馬として構築されているのならば][もし裸の特異点が生成されるのならば]との二重の仮定を置いているわけ「ではない」と述べても差し障りないと思う。すなわち、ここで問題となる仮定は二つではなく一つのみ、[葉籠中のものでした裸の特異点が生成されうるのならば、] だけである(と当然に判じられるようになっている) ——※思考を掌握されている人間らを手駒として操っての遠大な目標がそこにあることが歴然としている、そして、LHC に執拗にトロイアに通ずる寓意が付与されているとのこともが歴然としている(そこまで本稿にては具体的根拠を山と呈示しながら仔細に解説している)、といった中で LHC で[裸の特異点]が生成される可能性が(実際にそれが当を得ているかどうかは置き)現実視されているのならば、問題となるのは(実現の可能性が述べられているところの)[裸の特異点]の実現と応用の可能性にまつわる仮定だけである——)。

これにて取りあえずもってして

ブラックホールやワームホールの生成によって

[こことは異なる空間との垣根の破壊(そして、それに次いでこの世界への侵入)をなす]

(あるいはもってして)

[裸の特異点を安全地帯から「ガラス越し科学実験用のゴム手袋 一要するに我々人間存在がそうしたものにとしつらえられてしまっている節があるとのありよう

一] を介して生成して、それを用いて空間と時間の中での覇権の確立をなす]
とのことが企図されているとのこととてありうるように「見える」ようになってしまっている

とのことにまつわるホワイダニットの問題 一本稿にて厭となる程にももの指し示しをなしてきた執拗な意思表示(を伴う犯罪的やりよう)の背面にある「何故そうもしたのか」の問題— に関わるところの[推理]を終える。

さて、ここまでにてホワイダニットの問題に関わりうるとして呈示してきた各点ら (「誰が見ても異論など生じえもなかりうとの重要なことはよもって先立っての段までにて論じ尽くしている」と明言・強調しての中で「重要な指し示しを既になしているともって任ずる者として[節義]の問題として取り上げることにしたに過ぎぬ、いわばもってしての付録としての話である」と申し述べ、の上で、[推理]Guessに留まっていたの事柄らとして呈示してきたとの各点ら)、すなわち、

[オメガポイントの実現]

[こことは異なる空間との垣根の破壊(そして、それに次いでもこの世界への侵出)]

[裸の特異点の機序を利用する仕組みの確立]

にまつわってのことは「相互に連続性が観念される」ところがある(ので、についても取り上げておく)。

まずもって上記の事柄らは全部が全部、

[ブラックホール(の類)の利用に関わっている]

と想定されるものであるとのことがある。

またもってして述べるが、

[一つの目標の実現が他の目標をも付随的に実現するものたりうる]

とのこと「も」ある。

例えば、入り口となったブラックホールと地球そのものを[橋頭堡]にし、

[よりスケールの大きい破壊と再生のためのオペレーション]

が企図されているといったこととて想起されるところである。

ワームホール越しやカー・ブラックホール越しに超極微機械を送り込む(の際、地球が壊されぬのならば[脳を完全破壊して生体部をナノマシンに置き換えての人間の肉体]のみ一世代だけ利用することもありだろうとはレイ・カーツワイル著作にて紹介されている未来予測を交えて先述なしたことである)とのことを第一段階としてやり、次いで、[旧世代の操り人形(現行人類)を用いてはおおよそ実現できなかったこと]を実行しようとする、そう、第二段階としてオメガポイント実現や裸の特異点のためのより強力な装置や仕組みが一挙にこの宇宙で構築されだすとのありうべきオペレーションのことも観念される)。

同様のことに通ずるところとしてはこの世界を破壊してまずもってオメガポイントを実現する(先述の[ティプラー主張内容]を暴力的に再現することを想起すれば、地球を破壊してビッグクランチの特異点の如きものを招来する中で世界そのものを再現するコンピューティングを実現する)とのことをなし、の上でそこに向けて、別世界(ここではない別のマルチバースの中の世界かもしれない)の自分達の実体を転送するための介入者の試行がなされていくのならば、それはまた、[この世界(「だった」もの)への進出]と[オメガポイントの実現]が表裏をなしていることと同義かと思う。

無論、「極めて荒唐無稽」(あるいは最大限好意的にとらえられても「気宇壮大にすぎる」か) としか
[条件付けされた思考] には受け取られないような話であるのは論を俟たないが、

「再三再四繰り返す」(そうする必要がある認識に駆られて三度目の繰り返しをなす)
ところとして、

[それ単体で呈示されれば「悪くて印象論、良くて興味深い科学予測にまつわるトピックにすぎない」(であるから[変化]をきたす余地など何らなくそうした話をなすことにさして意味は無い) と見做されるであろうとの(表記の如しの) 話、そこに通ずることが

【「はきとそこに存在していると摘示できるようになっている」人間存在の尊厳を愚弄・軽侮しきっての質的犯罪行為の束】(家畜(種族)に尊厳はないとの行為者観点のことは抜きにし、の中には、先立って述べたように見立て殺人、Ritualistic Murder でもいいが、[特定の意図意思を明示するためだけに多くの人間を殺していると判じられる行為]さえもが含まれている)

と結節するようになさしめられている節があり、その判断材料が幾重にも渡って呈示できようになっている]

とのことになれば、そうした話をなすことには意味があることになろう — 少なくとも「本来的には」そうなって然るべきところであろうとの式で意味があることになろう — (: 偽りだらけの世界で中途半端にその言いまわしを強くも鼻につくように用いれば頭の具合のよろしくはない者達か、屑のような欺瞞の徒輩らのやりようであると見られもしようとの言葉、それを敢えても用いれば、[ジャーナリズム性がある]、でもいい — 筆者は [ジャーナリズム] や [ジャーナリスト] などといった言葉、誰でも自由意思さえあるのならば即座に [紛い物としての性質] を呈示できる(だが、それをやろうとする人間存在がほとんど目につかない)との [嘘で造ったこの世界] ([忌まわしい畜舎]と判じられる世界)でのそうした言葉には反吐が出るような汚いものとの心証しか抱いていないのだが、そうしたことは置いての話となせば、である—)。

以上、極々皮相的なかたちで述べもしたような式で

[オメガポイントの実現]

[こことは異なる空間との垣根の破壊(そして、それに次いでこの世界への侵出)]

[裸の特異点の機序を利用する仕組みの確立]

との各点にまつわる話にも接合するようになっている — つい直上の段までにてそのための説明をなしてきたとのところである— からこそのここでの話でもある。

そして、(ご存知なきの方が当然もってして過半ではあろうが)、この世界には

[オメガポイントの実現]

などが企図されているとのこととて「諾(うべ)なるかな」(ああもつともなことだろうよと響く) と思えるような狂躁的な(俗な言葉で言えば、「ハイになった」) 米国論客達による「人間レベルの」、

[人を食ったような申しよう]

が — オメガポイント実現(全能なる機械の神による不死の実現)やブラックホールの工業的利用、そして、宇宙の制覇を一緒くたにしたようなものとして— 80年代よりなされてきたとのことがあり、そこからして [かぐわかしい臭い] がついてまわっているとのことまでもがある — ※80年代(かねてよりオメガポイントに通ずる主張をなしてきた物理学者フランク・ティプラーがオメガポイントについての理論の精

緻化をなした(本稿にて既述の)問題著作 The Physics of Immortality『不死の物理学』を発表した1994年に先立つ80年代後半)からして米国のある種、狂躁的なる論客らによってそうした申しようがなされていたとのことがあり、また、そうした申しようにまで[後にて具現化した嗜虐的やりようとの接合性]を観念できるようになっているとの知識が色々調べてきたこの身にはある——。

同じくもの点についての解説をこれよりなす。

まずもって下の引用部を参照されたい。

(直下、エド・レジス(Ed Regis/先端科学分野の研究・著作にて名を馳せている米国著述家)の手になる原著1990年初出の著作 Great Mambo Chicken and the Transhuman Condition: Science Slightly over the Edge(の訳書『不死テクノロジー』(邦訳版版元は工作社という出版社))にての9章[みんな愉快地にやろうじゃないか]454から455ページの内容を掻い摘まんで引用なすとして)

一九八七年キース・ヘンソンは「はるかな縁(ファー・エッジ)委員会を創設した。このグループの唯一の目的は、遠い未来のいつの日か天の川のはるか向こうで、転送(ダウンロード)された「複数の自分自身」の大群が集おうという、「はるかな縁パーティ」の計画をはじめることにあつた。

ヘンソンがこれを思いついたのはほかでもない、彼自身は無限に生きつづけるにせよ、コピーがたったの一つしかないのでは、銀河系旅行などとうていできはしないと悟ったからである。彼は永遠に生きつづけるかもしれないが、銀河系の方は永遠というわけにはいかないからだ。

「われわれの銀河だけでも星が一〇〇〇億から二〇〇〇億あるんだ」とヘンソンは言った。「ナノテクの助けがあるにしたって星系一つを訪れるのには、星間の道のりにかかる時間ぬきで、どうしても一、二年はかかる。面白そうな天体はそうそう永つづきはしないから、それを全部次つぎと訪ねることなど、どだい無理にちがいない。ほとんどみんないずれ燃え尽きてしまうような、小さな星の塊を調べるのに長い時間をかけるのはまっぴらだしね。」

…(中略)…

これこそがキース・ヘンソンの今から一〇〇万年そこそこという「近い」将来の旅行計画だった。一見いかにも大げさな方法のように見えるが、この転送(ダウンロード)の時代、ことに頭のよい連中がみな自分のコピーをたくさん作って保存しているこの時代には、ただ単に自分の「余備」コピーを作り、アSEMBラーの作った恒星船にのせて創造の果てへと送り出せばいいのだ。そうすればその転送(ダウンロード)された補助的な心は、好きなときに気に入った新しい星系に止まっては、暇なときにはもっとそれ自身や宇宙船のコピーを作って、その隣近所の太陽系に送りだし、そこでまたこの過程を繰り返すというわけである。新しい宇宙船を作るのも、何でもほとんどただでいくらでも作れるこの進歩した「過ナノテク時代」なら、わけのないことだ。

(引用部はここまでとする —※—)

(※表記引用部に見る[異質・異様なる言行]の背景事情としてはキース・ヘンソンという男が

[復活を企図しての脳の冷凍保存(いわゆる[クライオニクス])推進団体]

の主たる関係者となっていることが影響していること、後の段で解説する。

尚、キース・ヘンソンがナノテクによる銀河植民といったアイデアについて言及しえた背景には同男が(出典(Source)紹介の部20-3)にて紹介しているよう

な) ナノテク概念の開拓者として認知されているエリック・ドレクセラーらと

[L5 協会]

という組織(宇宙移民構想を熱烈に推進しようとの論客ら・科学者らがさながら梁山泊の観を呈ししているとかたちで集まり、かつて勢いをもっていた米国家論団体)を通じてつながりがあったからであると思われる)

(続いて直下、同じくものエド・レジスの手になる原著 1990 年初出の著作 Great Mambo Chicken and the Transhuman Condition: Science Slightly over the Edge の訳書『不死テクノロジー』の序章[世紀末のマッドサイエンティストたち]25 ページの内容を引用なすとして)

一九八六年すでに天文学者ジョン・バロウと、数理物理学者フランク・ティプラーは、ずばりそのとおりのことをオックスフォード大学出版局の共著『人間的宇宙論原理』のなかではっきり言っているのである。さてそのオックスフォード大学出版局は、出版史上もっとも慎重かつ保守的な出版社として世に知られる正当派のはずなのだが、どうしたわけかそれとこれとは関係がなかったとみえる。とにかくバロウとティプラーはその本の巻末に、遠い未来「人類がすべてを成就したあかつき」の「オメガポイント」には、どのようなことが実現するのか、彼らの信念を述べている。
「そのオメガポイントに到達したその瞬間、ただ一つの宇宙のみならず、理論上存在可能な限りの宇宙内の、物質および力のすべてを、支配するものとなっているはずである。生命は、理論上存在しうる全宇宙の全空間領域全体に広がり、理論上獲得できる全知識を含む、無限量の情報を格納(ストア)しているであろう」と彼らは言う。

(引用部はここまでとする)

(さらに直下、同じくものエド・レジスの手になる原著 1990 年初出の著作 Great Mambo Chicken and the Transhuman Condition: Science Slightly over the Edge の訳書『不死テクノロジー』の 8 章[不可能という言葉は死んだ]408 ページよりの引用をなすとして)

バロウとティプラーの『人間的宇宙論原理』によると、オメガポイントに達するや知的生命は、たちまち「そのオメガポイントに到達したその瞬間、ただ一つの宇宙のみならず、理論上存在可能な限りの宇宙内の、物質および力のすべてを、支配するものとなっているはずである。生命は、理論上存在しうる全宇宙の全空間領域全体に広がり、理論上獲得できる全知識を含む、無限量の情報を格納(ストア)しているであろう」。

かくてエリック・ドレクセラーのような人間が、物質構造を完全にコントロールする力を人類に与え、ハンス・モラヴェックは人間をほとんど全知全能の茂み(ブッシュ)ロボットに作りかえ、デイヴ・クリスウェルは産業星や養殖ブラックホールの作り方を教えてくれ、エリック・ジョーンズとベン・フィニーが、母なる自然自身の使う星間旅行を示してくれた今、科学者たちはもう、バロウとティプラーの全プログラムを成就するに必要な知識は何であるか、ほとんどわかってしまったようなものだった。なるほど野心的な考えかもしれないが、それが不可能であるとする理由などみじんもなかったのである。バロウとティプラーの予想は、どれ一つとして既知の自然法則に反するものはなく、しかも魔法や神秘主義などに頼るものでもなかった。むしろそれとは逆に、彼らが思い描いたものはすべて、まったく自然でありふれた科学の発達によって、すらすらと無理なく成就できるものばかりのよ

うにみえた。

(引用部はここまでとする)

(さらに続けもして直下、同じくものエド・レジスの手になる原著 1990年初出の著作 *Great Mambo Chicken and the Transhuman Condition: Science Slightly over the Edge* の訳書『不死テクノロジー』の8章[不可能という言葉は死んだ]473 から 474 ページよりの引用をなすとして)

「生命は一宇宙に限らず、理論上存在しうるすべての宇宙のなかのすべての物質と力を司り、理論上存在可能な宇宙のすべての宇宙のすべての空間に拡がって、理論上得ることのできる知識のすべての断片を含む無限の情報を記憶しているはずだ」といった、あのバロウとティプラーの予言どおりになる日も間近い。

かくなるうえはもう何もすることはない。ただくつろいで楽しい時を過ごすだけのことである。

キース・ヘンソンはしばらくのあいだ、「最後の陽子クラブ」を結成しようかと考えた。会員は集って最後の陽子が崩壊するのを見物する(むろんそれがみつけれられたら話だが)というものである。「まあこうなると問題もなくはないね」と彼は認めた。

…(中略)…

キース・ヘンソンの信念は「問題はすべて解決できるものだ」という一語に尽きる。だからそっちは放っておいて、キースとその仲間は時間とエネルギーが許す限り、もっと急を要する問題の「はるかな縁」パーティの計画に専心しているのである。

「僕の知っている連中は一人残らず来ることになってる。このパーティに来る予定の人なら、一〇〇〇人は知ってるよ」とキースは言う。

そのパーティのころには、その一〇〇〇人は転送(ダウンロード)だのコピーだの分裂だの何兆という人数に増えているはずだから、企画上かなりの問題が生じるのは目に見えている。

「もしパーティが大きければ、オードヴル用の豆のディップだけでブラックホール一個ぐらいできるだろうな。」(パーティ企画者のあいだではこれは「豆ディップ・カタストロフィー」と呼ばれているが)もう一つの悪夢的問題は、三人に一人はキース・ヘンソンということがあり得ることだ。「おまけに五〇〇万台の宇宙船をどこに「駐船」すればいいんだろうな?」と彼はつづけた。「それにこんな大規模なパーティをやるような大ホテルが見つかるかどうか?という問題もある」。

(引用部はここまでとする)

上にての枠内部で引用したのは

[1980年代後半に取り上げられていた「不死不滅の宇宙支配種族に人類が変ずる」ことにまつわる識者ら申しようを紹介した特定著作の内容] (より具体的には *Great Mambo Chicken and the Transhuman Condition: Science Slightly over the Edge* との著作に見る「冷凍保存運動の旗手として自身の脳の冷凍保存後、遠未来にて復活、遠未来テクノロジーでソフトウェア生命体化して全宇宙に不死身となった自身のクローンを播種しようとの「人間レベルの」夢想家—キース・ヘンソン—の言動」を紹介した部)

となる — ※引用元著作 *Great Mambo Chicken and the Transhuman Condition: Science*

Slightly over the Edge『グレート・マンボ・チキンと人体改造のありよう;幾分、縁から外れてしまった科学』(邦題『不死テクノロジー』)は[行き過ぎた領域]に足を踏み入れている科学者らおよび識者ら言い分・論調が軽妙、飄々としたユーモア溢れる筆致で半ば揶揄するように紹介されている(ニューヨーク大で哲学の博士号を取得しているとの文系人間的な臭いがするものの非常に調査・研究に力を入れている節が窺えるとのエド・レジスによって紹介されている)との著作となっている。因みに原題タイトルにみとめられる[グレート・マンボ・チキン]とは[絶えず回転する遠心分離器]の中で人工的に用意された高重力環境(ハイG環境)にて実験的に何代にもわたって養殖されたチキンのことを指す。それらチキンが遠心分離器から降り立ったとき、[通常的环境下ではありえないが如きに筋骨隆々としたチキン](著者エド・レジス曰くのところとして「一体全体、何の役に立つのか意味不明なるグレート・マンボ・チキン」)になっていたと紹介されもしており、同書籍タイトルは詰まるところ、そうした人為的ハイG環境下でのグレート・マンボ・チキンが如きものへの変化変容を[人間改造(トランス・ヒューマニズム)に拘る者達のある種狂躁的なるありよう]と結びつけて、揶揄するものとなっている――。

以上、特定書籍(**Great Mambo Chicken and the Transhuman Condition: Science Slightly over the Edge**)よりの直上引用部それ自体に如実にみとめられるところとして

[**フランク・ティプラー**および**ウィリアム・バロウ**の両科学者が著した書籍 **The Anthropic Cosmological Principle**『人間的宇宙論原理』(オックスフォード大学出版局刊行)に認められる[(オメガポイント的状况に至った暁には)生命はひとつの宇宙に限らず、理論上存在しうるすべての宇宙のなかのすべての物質と力を司り、理論上存在可能なすべての宇宙のすべての空間に拡がって、理論上得ることのできる知識のすべてを含む無限の情報を記憶・活用しているはずだ]との主張]

[**キース・ヘンソン**という論客(下に引用なすように「死後、脳を凍らせてナノテックでの復活を企図する」[人体冷凍保存]団体の運営陣にして**L5協会**という団体の発起人でもあるとの論客)の狂躁的に響くとの申しよう――[自分の分裂する無数のコピーら(ナノマシンと精神転送技術を駆使して生み出したコピーら)を星々の世界に播種して銀河の植民地化を進め、挙げ句にどんちゃん騒ぎをやろう]などといったことを(普通人には「どこまでおどけているのか(何の冗談だ)?」「正気なのか」としか受け取れぬかたちで)前面に押し出しているとの申しよう――]

らが結びつけられている。

詰まるところ、それは今を去ること、数十年前の「80年代後半」――本稿の前半部、**出典(Source)紹介の部 20-3**の部にも問題たることに関わるとの認識で取り上げもしていたとのところ、[科学者**エリック・ドレクスラー**が1986年にナノテック関連のエポックメイキングな書とされる**Engines of Creation: The Coming Era of Nanotechnology**(邦題『創造する機械』)を世に出した]との1986年に続く1987年――からして

[**オメガポイントの実現**]

[**ナノテクノロジーの活用による種族の種子の播種と宇宙の植民**]

の二つの観点が結びつけられていたとのことと同義でもある(: **Great Mambo Chicken and the Transhuman Condition: Science Slightly over the Edge**『グレート・マンボ・チキンと人体改造のありよう;幾分、縁から外れてしまった科学』(邦題『不死テクノロジー』)をものした著述家**エド・レジス**の弁を(注記を付しつつも)再度引けば、それは(再度の引用をなすとして)“かくて**エリック・ドレクスラー**のような人間が、物質構造を完全にコントロールする力を人類に与え(本稿にての注記:ここで取り上げられている**エリック・ドレクスラー**は本稿前半部にての**出典(Source)紹介の部 20-3**を包摂する部で紹介しているようにナノテック・コンセプトの提唱者として知られており、後述するところの[L5協会]という集いを通じて[遠未来に復活して自身コピーを全宇宙に播種しようとの発想法]を有している**キース・ヘン**

ソンという男に多大な影響を与えたとされる向きとなる)、 ハンス・モラヴェックは人間をほとんど全知全能の茂み(ブッシュ)ロボットに作りかえ、デイヴ・クリスウェルは産業星や養殖ブラックホールの作り方を教えてくれ、エリック・ジョーンズとベン・フィニーが、母なる自然自身の使う星間旅行を示してくれた今、科学者たちはもう、バロウとティプラーの全プログラムを成就するに必要な知識は何であるか、ほとんどわかってしまったようなものだった。なるほど野心的な考えかもしれないが、それが不可能であるとする理由などみじんもなかったのである。バロウとティプラーの予想は、どれ一つとして既知の自然法則に反するものはなく、しかも魔法や神秘主義などに頼るものでもなかった”(再度の引用部はここまでとする)といったものとなっているとの言いようでもある)。

同じくものことに関しては、ただしもってして、

[ナノテクノロジーの活用による種族の種子の播種と宇宙の植民]

(別の時空間への扉の存在の活用を企図しての)

[こことは異なる空間との垣根の破壊(そして、それに次いでもの「他」世界への侵出)]

とのことらまでもが 80 年代後半より結びつけられていたとのわけではないのだが(そちら背景としては [80 年代後半よりキップ・ソーンによって煮詰められた通過可能なワームホールの観点]と[通過可能なワームホールの先へのナノマシンを用いての植民との発想法]がまだ十分に深化させられていなかったことがあるとの見方はなせる)、 ただし、それら

[ナノテクノロジーの活用による種族の種子の播種と宇宙の植民]

[こことは異なる空間との垣根の破壊(そして、それに次いでもの「他」世界への侵出)]

もまた「後に」科学予測にて濃厚に結びつけられるようになりもしている (:[通過可能なワームホールの先にナノマシン(としての種族再生産の種)を播種する]との科学予測がいかようになされているのかの引用を先立って書籍 Parallel Worlds; A Journey Through Creation, Higher Dimensions and the Future of the Cosmos よりなしているとおりである ——尚、本稿の前半部では 70 年代に刊行された特定小説が(分子アセンブラとの概念と結びついたナノテクノロジーの概念自体が確立しておらず、また、通過可能なワームホールにまつわる科学予測なども出されていなかった折柄ながらも)極めて奇怪な式で同じくものことにまつわっての予言染みた言及をなしているとのかたちで存在している、すなわち、特定小説作品が [往時(70 年代)の粒子加速器出力よりも今日の LHC に 200 倍超のスケールで近いとの欧州加速器を登場させて、それとブラックホール生成を隠喩的に繋ぎ合わせるような式での筋立て]を伴っての極めて奇怪な式で同じくものこと(ワームホールやカー・ブラックホールの如きものに極小化された種子を送り込む)にまつわっての予言染みた言及をなしているとのかたちで存在していること「をも」問題視しているのだが(本稿前半部の **出典(Source) 紹介の部 20-3**らを含む 1974 年初出小説 Adrift Just off the Islets of Langerhans: Latitude 38°54'N, Longitude 77°00'13W 『北緯 38 度 54 分、西経 77 度 0 分 13 秒 ランゲルハンス島沖を漂流中』の先覚性を扱った部位で詳説を講じていることとなる)、 そうもしたこと(異常異様な先覚性を体現しての文物が存在しているとのこと: 文献的事実にまつわっての極めて重要な事柄)とここでの話(常識レベルの科学予測の変遷を扱っての話)は質的に異なるものであること、断りしておく——)。

そうもなった、後の日にあつて [ナノテクノロジーの活用による種族の種子の播種と宇宙の植民] と [こことは異なる空間との垣根の破壊(そして、それに次いでもの「他」世界への侵出)] との科学予測にての結びつけがなされるようになったとのことを顧慮すれば、である。

ここまでホワイダニットの問題との絡みで解説をなしてきた、

[オメガポイントの実現]

[こことは異なる空間との垣根の破壊(そして、それに次いでもの「他」世界への侵出)]

とのそれぞれの要素が ——[ナノテクノロジーの活用による種族の種子の播種と宇宙の植民]を介して

の間接的とは言えるかたちでながら— 80年代から「結びつけられる潜在的素地があった」と受け取れるとのことともなる（1986年には既に「ナノテクノロジーの活用による種族の種子の播種と宇宙の植民」と「オメガポイントの実現」とは部分的に結びつけられる素地はあった、だが、「ナノテクノロジーの活用による種族の種子の播種と宇宙の植民」と「こことは異なる空間との垣根の破壊(そして、それに次いでもの「他」世界への侵出)」とはいまだとは結びつけられていなかった、それが結びつけられるようになったのは少し後のことである、とのことがある中で、である）。

といったかたちで「何故、犯行をなしたのかの動機としてありうることら」（今まで解説してきたことら）それぞれの近接性—それはまた「ブラックホール(の特異点)を利用した[成果]として語られる事柄ら」の間に横たわる近接性でもある—が指摘出来るようになっていて、であるから、よもつて「目的が同じくものところへ収斂している」と見え、問題となる(ととらえられもする)とのことになる。

犯罪的行為の動機たりえると自然に見えるようになっていて事柄らが複数ありもし、それら複数の事柄らの間「にも」結びつきが観念されるのならば、「犯行主体の強い意志の介在」や「犯行主体の動機にまつわる推論の「重み」」がより一層強くも感じられもする、と筆者としては述べたいのである(※)。

※先立っての段では物理学者フランク・ティプラーのオメガポイント理論にまつわる物言い(一面で似非科学の傑作であるなどとされる一方である種、エポックメイキングとされる物言い)についてそちら物言いが

「永劫回帰思想との結節点」

「ナチス・ドグマの強否定との観点」

「粒子加速器実験機関の特異点(ブラックホール)生成問題への「先覚的」言及」

との観点でいかように問題になるかについて細かくも指摘してきたのだが、その絡みでは「同じくものオメガポイント理論との絡みで問題となる」「ブラックホール生成をなしうると判じられるに至った粒子加速器実験にあつての特性」が

「際立って特徴的な犯罪的メッセージ」

と接合しているとのことの重要性を取り立てて問題視もしていた(：そちら本稿の先だつての段で問題視しているとの「際立って特徴的な犯罪的メッセージ」、(物理学者ティプラーのナチス・ドグマの否定、そして、同ティプラーの粒子加速器による特異点生成の先覚的言及とのやりように関わりもしているものである)「粒子加速器実験にあつての特性」に通ずる「際立って特徴的な犯罪的メッセージ」とはトロイアの木製の馬に関わる寓意を「それ自体意味性を多層的に帯びている」911の事件と露骨に通底するところで具現化なさしめているとのメッセージとなる。複雑な話ともなり、筆者至らなさもあつて短くも摘要伝えることだに—難儀であるとのこととなるため、理解が至っておられぬとの向きであり、なおかつ、確認の必要ありと考えられているとの向きには先行するそれ絡みの委細表記部を精査いただきたいのだが、極々端的に記せば、それ(「際立って特徴的な犯罪的メッセージ」)とは小説『コンタクト』における側面設定に多層的に具現化を見てとれるとのものとなりもし、「マンハッタン計画を導き出したナチス躍進(の象徴)を地上にての特異点の現出と繋げているとの要素」「トロイア崩壊の寓意を「濃厚に」帯びている(識見伴った向きが精読をなして特定関係性を捕捉した場合にのみ理解出来るところながらも「濃厚に」帯びている)との要素」「911の予見的言及をブラックホール・ワームホール関連の描写でなしての要素」との各要素らをひとところに結線させているとのものともなる)。

他面、本稿ではまたもつてして「ブラックホールやワームホールの類を用いてのその先の世界への進出」といった特性を文献的事実として伴つての事柄ら(ワームホールや異界の扉といったものと結びつく大衆向け文物等々)が(直上言及の)「ティプラーのオメガポイント理論の絡みで問題となるところとはまた別の対象を媒介項にして」

〔際立って特徴的な犯罪的メッセージ〕

と接合していることを問題視しもしてきた（：そちらの**特徴的な犯罪的メッセージ**「もまた」**【911の事件発生にまつわる先覚的言及】**および**【トロイア崩壊にまつわる特性】**との要素らに関わるものとなりもする —いくつかの911の先覚的言及作品らが〔異界との扉〕と結びついている等等—）。

ここで整理のために〔**ティプラーのオメガポイント理論にまつわる問題**〕を便宜的に〔**A問題**〕とし、そこにて指摘できる先覚性を〔**A先覚性**〕と試みに表してみる。

他方、〔**ブラックホールやワームホールの類を用いてのその先の世界への進出(の科学予測)**〕にまつわる問題を便宜的に〔**B問題**〕として、それにまつわって指摘できる先覚性を〔**B先覚性**〕と試みに表してみる。〔**A問題およびA先覚性**〕と〔**B問題およびB先覚性**〕は(相互に重なり合う側面もあるものの)別個独立の論点として成りたつものとなる。

といった中で〔**次のような「複合的」関係性**〕が指摘できるのならば、それらと通ずるところの恣意性がよりもって明確性を帯びてくる... そういう話をここではなしていると理解いただきたい。

A問題・A先覚性 → (関係性が顧慮されるだけの事情が「ある」) → [[911の事件の先覚的言及] を [トロイア崩壊に通ずる側面] を伴ってなしているとの側面] ← (関係性が顧慮されるだけの事情(他の媒介項)が「ある」) ← **B問題・B先覚性**

(よりもって単純化させれば)

A問題・A先覚性 → (相互に関連性を観念できるだけの「際立って特異なる」共通項が(一見にして異なる方向性・媒介項から)導出されているとの側面) ← **B問題・B先覚性**

以上の「複合的」関係性が摘示可能なるがゆえに、

〔オメガポイントの実現〕

〔こことは異なる空間との垣根の破壊(そして、それに次いでもの「他」世界への侵出)〕

との要素双方に伴う〔**犯行主体の強い意志の介在**〕が「より一層」観念させられることになる

直上直近まで訴求してきたようなことがあることに加えて、である。以下のこともまた問題になる(と本稿筆者は然るべき理由あってとらえている)。

〔キース・ヘンソンという向き —直上引用なした Great Mambo Chicken and the Transhuman Condition: Science Slightly over the Edge (直訳すれば『グレート・マンボ・チキンと人体改造のありよう;幾分、縁(ふち)からはみ出してしまった科学』となるとところを『不死テクノロジー』とよりもって分かり易くものタイトルが付されての訳書が出ているとの書籍)に紹介されているその表されようを引くならば、[「はるかな縁(ファー・エッジ)委員会なるものを創設、そちらグループ唯一の目的として遠い未来のいつの日か天の川のはるか向こうで、転送(ダウンロード)された「複数の自分自身」の大群が集おうという、「はるかな縁パーティ」の計画を企図しもしている]との向き— が「元は、」と言えば、

[L5 協会] との団体を草の根活動から設立したとの者となり、宇宙移民を積極推進していたことでも知られるキース・ヘンソン設立の同団体 (L5 協会) 関連人脈から八〇年代米国にて [[人体冷凍保存] と [遠未来復活] と [オメガポイント「的なる」万能化のポイントへ向けての躍進] を特徴とする一連の思考様式] が「一層」深化を見ていった]

とのおおよその流れがありもし、その流れが[特定の命名規則を介してのつながり]より長大なる本稿にあって主筋として問題視なしてきた事柄らと接合しもし、まさしくものその繋がり合いに関わるところで軽んじざるべからず事物間の結びつきが浮かび上がってくるとのことがある

とのこと「も」問題になる (と判じているのでその点についての解説をこれより事細やかにす)。

ここまでの話に勝るとも劣らぬとのややこしい話とはなるのだが、まずもって(直上言及の) [L5 協会] という団体がいかようなものかについての説明を「引用方式にて」なすことからはじめる。

(直下、和文ウィキペディア [L5 協会] 項目にあっての現行記述内容より掻い摘まんでの引用をなすとして)

L5 協会とは、ジェラルド・オニールの宇宙移民のアイデアを広めるべく、1975年に Carolyn Henson (キャロライン・ヘンソン) と Keith Henson (キース・ヘンソン) が設立した団体である。その名称はオニールが描いた巨大な回転するスペースコロニーを設置する場所として候補にあがっている L4 および L5 のラグランジュ点から来ている。L4/L5 は地球と月から同じ距離で月の軌道上にある重力的に安定した地点である。L5 (または L4) に置かれた物体は、燃料を消費せずにその場に留まり続けることができる。一方、L1/L2/L3 は完全に安定ではなく、その場に留まるには燃料を消費する。

…(中略)…

Henson らは 1975 年 8 月に L5 協会を設立し、9 月には最初の 4 ページのニューズレターを上記会議で登録した人々とオニールのメーリングリスト参加者に送付した。その中には後に大統領候補となった Morris Udall からの応援の手紙も入っており、「我々の最終目標は協会の全体集会を L5 で開催することだ」と書いてあった。

…(中略)…

1986 年、協会の会員数は 1 万人に成長していたが、25000 人の会員を有する米国宇宙研究所 (National Space Institute) と合併した。米国宇宙協会はアポロ計画などで知られるロケット工学者ヴェルナー・フォン・ブラウンが創設した組織である。合併後は米国宇宙協会 (National Space Society) と改称している。

…(中略)…

L5 協会は宇宙移民という目標を達成できなかったが、同好の士が集まるシェリングポイントとしての役割を果たし、そこから後にナノテクノロジー、ミーム学、Extropianism、人体冷凍保存、トランスヒューマニズム、人工知能、テザー推進などの分野で活躍する人々を輩出した。例えば、K・エリック・ドレクスラー、ロバート・L・フワード、ハンス・モラベックなどが有名である。

(引用部はここまでとする 一同じくものことは英文 Wikipedia [L5 Society] 項目により詳しくも紹介されている)

上にての極々基本的なところ(たかだかものウィキペディア記述)から引用なしたところにその通りのものとして記述されているように [L5 協会] とは

「キース・ヘンソン（Keith Henson）とその妻キャロリン・ヘンソン（Carolyn Henson）の夫婦が1975年にジェラルド・オニールの宇宙移民構想を広げるべくも設立した団体にして」

「最盛期には会員数が10000名に到達し」

「同団体を通じて親交があった向きらからナノテクノロジーのアイデア、人体冷凍保存のアイデアなどの分野で活躍する向きらが世に知られることになり（直上引用部ではナノテクノロジー分野の旗手であるエリック・ドレクセラーや人工知能分野で有名なハンス・モラヴェック、テザー推進のアイデアで有名なロバート・フォワードの名が挙げられている）」

「最終的にはL5（後述するところのラグランジュ点というものの一つをなすものでスペース・コロニー設置の好適地とされている宇宙空間上の特定領域）にて会合を開く、すなわち、スペースコロニーで会合を開くことを目標としていた」

との団体であることが知られている——人類が宇宙空間への夢、種族の洋々たる未来に夢を馳せていた（あるいはその時代の人間がそういうスタンスを臆面もなく前面に押し出すことが良しとされていた）とのいかにもな70年代から80年代の団体らしい特性ではある——。

ここで先に話を進める前提として述べるが、以上のような団体の設立者キース・ヘンソンが

[自分の分裂する無数のコピーら(ナノマシンと精神転送技術を駆使して生み出したコピーら)を星々の世界に勇躍させて銀河の植民地化を進め、挙げ句にどんちゃん騒ぎをやる]

などの一見にして[冗談か]（あるいは[然にあらざるば...]）といった[何も前提知識がない向き]には受け取られるような主張をなした背景には同男キース・ヘンソンが

[人体冷凍保存運動の活動家]

へと変じていったとのことがある（: 冷凍保存にて死んだ後、解凍されて復活すれば、人類が高みに行き着くところまで行き着いた時代に復活、によって、ナノマシンを外骨格とする電脳生命体と化して、アメーバよろしく分裂しながら（正確には自己のソフトウェア人格を「コピー」しながら）悠久の時間をかけて宇宙を旅することができるようになるなどの発想の伝道者へと変じていったとのことがある）。

キース・ヘンソンという人物が人体冷凍運動の推進者へと変じていったとの点については次に引用するような言われようがなされている。

（直下、英文 Wikipedia [Keith Henson] 項目にあつての[Cryonics]の節の現行記載内容よりの引用をなすとして）

In 1985, having been convinced by Eric Drexler that nanotechnology provided a route to make it work, Henson, his wife, and their two-year old daughter signed up with Alcor for cryonic suspension. Henson's daughter was the youngest member ever signed up to Alcor. Following the Dora Kent problems, Henson became increasingly active with Alcor. After Alcor had to freeze their chief surgeon, he learned enough surgery to put several cryonics patients on cardiac bypass. He also wrote a column for Alcor's magazine, Cryonics, for a few years. Henson persuaded Timothy Leary to become an Alcor Member-although Leary eventually dropped his membership.

（補ってもの訳として）

「1985年、ナノテクノロジーが冷凍保存後復活達成への道を提供するとのことをエリック・ドレクセラー（の主張なし）から確信させられるに至り、キース・ヘンソンおよび彼の妻およびその二歳の娘は[アルコー延命財団]（訳注: 冷凍保存した人間は技術革新を経ての復活後、将来的に宇宙を目指す、ならば、インパクトのある名前を使おうとのことで北斗七星近傍のアルコルよりその名を取られたとの営利冷凍保存組織/同財団、筆者なども同団体関連内部告発著作の『フローズン』を読んでみて[研究所で飼っている猫の餌として使われたツナ缶の上に（不衛生にも）[人間の生首]が逆様に乗せられて冷凍保存されているとの写真に見るありよう]を含めて諸所で疑義呈されている同団体の特性をチェックしてみて、「存在自体が悪辣な

ジョークである節がある」と見るに至っている団体でもある) の [クライオニクス(冷凍人体保存)による保存処置]に関する契約書にサインした。ドーラ・ケント問題 (訳注:アルコール延命財団が冷凍希望者として頭部切断処置した老婆ドーラ・ケントに他殺疑惑が取り沙汰されるに至り、のために、既存の人体冷凍保存行為に犯罪的側面があるのではないかと疑念視された事件のことを指す) の煽りを受けるとのかたちでヘンソンはアルコール延命財団との(歩調を共にしての)活動にますます活動的に関わっていくことになる。アルコール延命財団がその主任外科医を閉め出さなければならなくなったとの後、ヘンソンは幾人かの冷凍保存希望者に対する心臓バイパス処理をなすのに十分な外科知識を学ぶに至る。ヘンソンは(アルコール延命財団の機関誌たる) [クライオニクス] に年数回のペースでコラムを書いている。ヘンソンはティモシー・リアリー (訳注:幻覚剤を使った意識拡張などにまつわる主張をこり押ししたこと有名な米国論客) にアルコール延命財団のメンバーになるよう説得したが、結局、ティモシー・リアリーはメンバーたることを放棄した」

(訳を付しての引用部はここまでとする)

以上のようにキース・ヘンソンは[人体冷凍保存運動](そして、それとワンセットになったの[復活(願望)成就運動])に深くも関わっているがゆえに

[[遙か未来にて復活し、そして、銀河の果てで自分のコピーらとの祝宴を開く] などこの言いよう] (ティプラーのオメガポイントに近似する状況に至った暁にまつわるところの下りとして **Great Mambo Chicken and the Transhuman Condition: Science Slightly over the Edge** 訳書『不死テクノロジー』の8章 [不可能という言葉は死んだ] 473 から474 ページにあって表記されているところより「再度の」引用をなせば、(以下、再度の引用なすとして) “そのパーティのころには、その一〇〇〇人は転送(ダウンロード)だのコピーだの分裂だので何兆という人数に増えているはずだから、企画上かなりの問題が生じるのは目に見えている。「もしパーティが大きければ、オードヴル用の豆のディップだけでブラックホール一個ぐらいできるだろうな。」(パーティ企画者のあいだではこれは「豆ディップ・カタストロフィー」と呼ばれているが)もう一つの悪夢的問題は、三人に一人はキース・ヘンソンということがあり得ることだ。「おまけに五〇〇万台の宇宙船をどこに「駐船」すればいいんだろうな?」と彼はつぶけた。「それにこんな大規模なパーティをやるような大ホテルが見つかるかどうか?という問題もある” (再度の引用部はここまでとする) などと軽妙・滑稽な筆致で書き記されているようなかたちで構想されての祝宴を開く、などという言いよう)

を前面に押し出しているとのことがある (といったところに典型例が見受けられるところとして80年代後半アメリカにての論調がいかにも狂躁的なものなのかは論を俟たないが、(繰り返すが)、そうもしたありようはここでの引用元のエド・レジス著述 **Great Mambo Chicken and the Transhuman Condition: Science Slightly over the Edge** にあっても揶揄するように何度も何度も取り上げられもしていることである)。

さて、(そこにては [世界の垣根たるワームホールの先にナノマシンとしての種族の種を播種するとの(別文脈にて問題と見て取り上げてきた)発想] までは見受けられ「ない」のだが)、

[ナノマシンにて復活・再生していく機械の神がかった機構(の一部)]

にまでなることを望んでいる(とのスタンスをとる)男、キース・ヘンソンが設立したL5協会 —ナノテクノロジーの旗手たるエリック・ドレクセラーの所属していた団体でもある— にその名称が冠されているとの

[L5点]

とは、そも、いかようなものなのか、(それこそが本稿ここにての話にあって問題になることであるとの認識で)、以下、世間一般での解説のなされようを引いておくこととする。

(直下、和文ウィキペディア [ラグランジュ点] 項目にあつての現行記載内容より掻い摘まんでの引用をなすとして)

ラグランジュ点(ラグランジュてん、英語: Lagrangian point(s)、ラグランジュ・ポイント、L点とも)とは、天体力学における円制限三体問題の5つの平衡解である。

…(中略)…

ラグランジュ点はまずレオンハルト・オイラーが1760年頃にトロヤ点以外を発見し、その後ジョゼフ＝ルイ・ラグランジュが1772年にトロヤ点を見つけ、同時に解を示すための条件も緩めた。

彼らの成果は運動方程式を解くことで理論的に得られたものだが、実際にラグランジュ点に天体が留まっている例が確認されている。

例えば太陽と木星のラグランジュ点には数千個(以上)の小惑星がある。この小惑星群の小惑星にはトロイア戦争における英雄の名が付けられ、このラグランジュ点は「トロヤ点」、小惑星群は「トロヤ群」とも呼ばれる。

ラグランジュ点はスペースコロニーを建設する軌道の候補でもある。

ジェラルド・オニールはコロニーを地球と月のラグランジュ点に作る事でコロニーの軌道を安定させるというアイデアを述べている。

2つの物体が両者の共通重心の周りをそれぞれ円軌道を描いて回っている場合、この2体に比べて質量が無視できるほど小さな第三の物体をある速度を与えてこの軌道面内に置くと、最初の2体との相対位置を変えずに回り続けられるような位置が5つ存在する。2体の共通重心を中心としてこれらと同じ周期で回転する座標系から見ると、ラグランジュ点では2体を作る重力場が遠心力と釣り合っている。このために第3の物体は2体に対して不動のままであることができる。各点はL1, L2, L3, L4, L5と呼ばれる。

1760年頃、レオンハルト・オイラーが制限三体問題の解として、主星と従星を結ぶ直線上にあるL1, L2, L3までの解を発見した。これらはオイラーの直線解と呼ばれる。その後、ジョゼフ＝ルイ・ラグランジュが1772年に

『三体問題に関するエッセイ』Essai sur le probleme des trois corps

という論文を発表し、オイラーの解は一般の三体問題の場合にも成り立つこと、主星・従星を一辺とする正三角形の頂点L4, L5も解(三角解)であることを示した。

(引用部はここまでとする)

(一般的・通俗的解説よりの) 上引用部に見てとれるところ、

ジェラルド・オニールはコロニーを地球と月のラグランジュ点に作る事でコロニーの軌道を安定させるというアイデアを述べている

との性質から — 機序として見たうえでの(引用部の別の言いまわしをほぼ忠実に繰り返すとして)[天体力学における円制限三体問題の5つの平衡解(その地点では2体を作る重力場が遠心力と釣り合っているために第3の物体は2体に対して不動のままであることができる、とのポイント)]としての性質から— ラグランジュ点は宇宙進出論者らが地球外への移民を企図してきた地点となりもしている、より具体的にはラグランジュ点のうちの地球と月を中心に据えて見てのL5点(地球と月から等距離にあるとの月の軌道上の特定領域)が宇宙進出論者らがある種、聖地と見做してきた最重要ポイントとなりもしている。そして、L5協会のL5もそこから名称が取られている。

そうしたL5協会に関しては、

[事実上の無尽蔵のエネルギー確保の現実的手段]

として有望視されるSpace-based solar power [宇宙太陽光発電] 構想 (宇宙空間で減損なしにもの効率的太陽光エネルギーの取得をなし、それを地球にレーザー光送信しようとの構想/何か政治的

遠因でもあるのか、[化石燃料が地球温暖化の原因に本当になっているのならば] そして [人類がこのまま人口増大を続けエネルギー需要をまかなう必要があるのならば]、本来的には開発が必須のものであるはずにもかかわらず、[資金不足] から各国が開発に足踏みする傾向があると諸方面にて囁かれてきた構想) を積極推進しようとしたといった側面、そう、

[人間世界に対する進歩(および安定的継続)の旗手たらんとする側面]

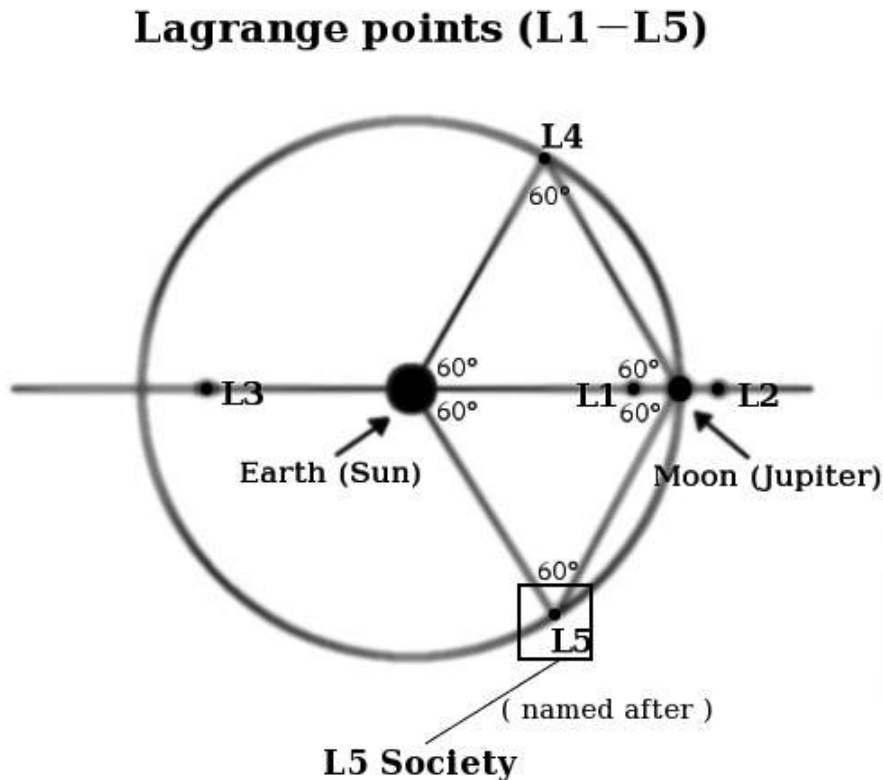
もあつたように見えるわけだが、他面、同 L5 協会ありように関しては

[相応の寓意の問題 —この人間世界が[根源からして欺瞞の体現物]であるならば「成程、」と納得させられようとの相応の寓意の問題—]

と相通ずる「嗜虐的対話法の特質」が垣間見れるとのこともある。

まさしくものその点について(問題たるところとして)これより段階的に説明を講じることとする。

まずもって下の図をご覧頂きたい。



図はウィキペディアにての [ラグランジュ・ポイント] 関連項目、[L5 協会] 関連項目にてもその位置関係が図示されているラグランジュ点 —くどくも述べれば、[天体力学における円制限三体問題の5つの平衡解(その地点では2体を作る重力場が遠心力と釣り合っているために第3の物体は2体に対して不動のままにすることができる、との場)] に伴っているとの性質から安定軌道で構造物を設置・運営できるとされる点— を巡る位置関係を示したものとなり、かつてあつた L5 協会とは詰まるところ、上の図に見る L5 の点(ラグランジュ・ポイント・ファイブ)にてスペース・コロニーを設置、そこを基点に宇宙進出をなそうとの主張をなしてきた向きの集いとのことになる —※尚、ラグランジュポイントについては地球・月とのミクロのスケールだけではなく、太陽・木星とのマクロのスケールの軌道でも問題になる(上の図にて Earth と Sun を、また、Moon と Jupiter を対応させるように表記しているのはそうした事情による) — 。

以上、ラグランジュ点(第5ポイント)の位置を呈示した上で書くが、ここで

「それこそが[嗜虐的対話法の複合的・複層的現出の指摘]とのからみで意味をなす」

との目分量があるために強調するところとして、L5 協会の名称と結びつくL5 点とは

[トロイア戦争の登場人物ら(の総出演)]

と深くも結びつけられているポイントとなっている。

どういふことかと述べれば、小惑星体が集中しやすい地点としてL4とL5は多くの小惑星を抱えもしており、の中にあつて観測されてきた多くの小惑星らに

[トロイア攻囲戦の物語(欧米古典の源流にあるホメロスのそれ絡みの一大叙事詩)の中の登場人物の名]

が逐次振られていったとの沿革があるのだ。

にまつわつては、一いつい先立つてのウィキペディアよりの引用部にそう記述してあるように—(地球と月とのミクロスケールではなく)太陽と木星の軌道とのマクロスケール上にあるL5点—[トロヤ点]—にあつての小惑星体らが

[トロイア(トロヤ)群]

と命名されているとの事情が上のことと表裏をなすところとしてある(：先の和文ウィキペディア[ラグランジュ点]項目にてよりの引用部をそこだけ抽出すれば、(再度の引用をなすとして)“太陽と木星のラグランジュ点には数千個(以上)の小惑星がある。この小惑星群の小惑星にはトロイア戦争における英雄の名が付けられ、このラグランジュ点は「トロヤ点」、小惑星群は「トロヤ群」とも呼ばれる”(再度の引用部はここまでとする)とあるとおりである)。

ラグランジュ・ポイント・ファイブたるトロヤ点にあつての小惑星らとしては**588 Achilles**(トロイア攻城戦にて包囲をなしていたギリシャ側にとっての戦争の帰趨を決する程に強力な武将であつたとされるアキレス、アキレス腱の由来でも有名なアキレスの名を冠する小惑星)であるとか**911 Agamemnon**(トロイア攻めを主導したギリシャ包囲勢側の総大将たる都市国家の王アガメムノンの名を冠する小惑星)であるとか**1143 Odysseus**(トロイアにての木製の馬の計略を考案・成功させた戦勝の最大の功労者としての謀将オデュッセウスの名を冠する小惑星)であるといった小惑星(アステロイド)らが[**Greek Camps**](ギリシャ軍駐留地)と名付けられての同ラグランジュ点内一部領域の小惑星体らとしてひしめきあつており、他面、**624 Hektor**(トロイア全軍の実戦指揮官にしてトロイア軍最強の戦士であつたヘクトルの名を冠する小惑星)や**884 Priamus**(ヘクトル・パリス・カサンドラといった欧米の伝承で極めてよく知られているトロイア王族らの父であつたトロイア王プリアモスの名を冠する小惑星)や**1172 Aneas**(トロイア落城の修羅場から主要なる武将として唯一、落ちのび(他の武将らは悉く討ち死にしたなかで唯一生き延び)、後にローマ建国叙事詩『アエネーイス』にてローマ建国者として最大限、知られるに至つたアイネイアスの名を冠する小惑星)といった小惑星(アステロイド)らがトロイア方駐留地(トロジャン・キャンパス)と名付けられての別の同ラグランジュ点内一部領域の小惑星体らとしてひしめきあつている。

そうしたトロイア包囲・防衛側の主要人物らの名を冠する小惑星(アステロイド)に彩られもしているのは主には太陽—木星(の中心点)を正三角形の底辺にしてのL4およびL5点(英語で表すところのthe Sun-Jupiter L4 and L5)となるのだが、L5 協会が[スペース・コロニー付設の好適地]としてきた[地球—月を正三角形の底辺にしてのL4およびL5点(英語で表すところのthe Earth-Moon L4 and L5)]にあつて「も」これ執拗に[トロイア戦争関連の命名規則]が踏襲されるに至つているとのことがある(：和文ウィキペディア[トロヤ群]項目にあつて「現行は」単に「トロヤ群」という場合は通常「木星のトロヤ群」を意味するとの表記がなされている中にて、である)。

同じくものこと —L5 協会がコロニー設置の最適地として重んじてきた「地球近傍の」L5 点にも[トロ

ヤ点としての意味付け]が与えられるに至っているとのこと— に関しては、

「(以前から地球一月を底辺としての正三角形頂点たる L4 点や L5 点がトロヤ点と呼ばれる側面が暗流としてあったからこそだろう)ともとれるのだが) 2010 年に地球一月を底辺とした L4 点にあって初めて発見された小惑星、

[2010TK7]

に対する定義付け・説明の中でそれが

「地球と月にまつわるラグランジュ点にあっての [トロヤ群小惑星] である」

との形容が広くもなされるに至っている」

とのことが確認なせるところとなっている(和文 Wikipedia[2010TK7]項目にあって(以下、引用なすとして) [2010TK7 は地球の軌道上でのラグランジュ点で最初に発見されたトロヤ群小惑星である…(中略)…この小惑星は、アメリカ航空宇宙局 (NASA) の広域赤外線探査衛星 (WISE) が地球近傍天体 (NEOs) の搜索を目的に行った観測ミッション“NEOWISE”によって、2010 年 10 月に発見された](引用部はここまでとする)とされており、他面、英語版 Wikipedia [2010 TK7] 項目にて冒頭部にあって **“2010 TK7 is the first Earth trojan asteroid to be discovered; it precedes Earth in its orbit around the Sun. Trojan objects are most easily conceived as orbiting at a Lagrangian point, a dynamically stable location (where gravitational and centrifugal forces balance) 60 degrees ahead of or behind a massive orbiting body, in a type of 1:1 orbital resonance.”** と表記されているところでもある)。

とすれば、である。L5 協会とは

[ナノテクノロジー、人体冷凍保存、トランスヒューマニズム、人工知能、テザー推進などの分野で活躍する人々を輩出した協会]

であるのと同時に、

[[トロイア戦争の登場人物らにて成り立つ[トロヤ群]の名にて表象される正三角形の頂点]の協会]

とも言い換えられるものとなっていることになる([純粋な記号論上の言い換え]の問題である)。

ここでつい先ぞ引用したところの特定書籍内よりの再度の引用を(訴求のために)なす。

(直下、エド・レジスの手になる原著 1990 年初出の著作 Great Mambo Chicken and the Transhuman Condition: Science Slightly over the Edge (の訳書『不死テクノロジー』) の 8 章 [不可能という言葉は死んだ]473 から 474 ページよりの「再度の」引用をなすとして)

「生命は一宇宙に限らず、理論上存在しうるすべての宇宙のなかのすべての物質と力を司り、理論上存在可能な宇宙のすべての宇宙のすべての空間に拡がって、理論上得ることのできる知識のすべての断片を含む無限の情報を記憶しているはずだ」といった、あのバロウとティプラーの予言どおりになる日も間近い。

かくなるうへはもう何もすることはない。ただくつろいで楽しい時を過ごすだけのことである。

…(中略)…

キース・ヘンソンの信念は「問題はすべて解決できるものだ」という一語に尽きる。だからそっちは放っておいて、キースとその仲間は時間とエネルギーが許す限り、もっと急を要する問題の「はるかな縁」パーティの計画に専心しているのである。

…(中略)…

そのパーティのころには、その一〇〇〇人は転送(ダウンロード)だのコピーだの分裂だの何兆という人数に増えているはずだから、企画上かなりの問題が生じるのは目に見えている。

「もしパーティが大きければ、オードヴル用の豆のディップだけでブラックホール一個ぐらいできるだろうな。」(パーティ企画者のあいだではこれは「豆ディップ・カタスト

ロフィー」と呼ばれているが)もう一つの悪夢的問題は、三人に一人はキース・ヘンソンということがあり得ることだ。「おまけに五〇〇万台の宇宙船をどこに「駐船」すればいいんだろうな?」と彼はつぶけた。

(「再度の」引用部はここまでとする)

上の引用部表記は 一同じくもの引用部に見るキース・ヘンソン(ナノテクノロジーによる復活可能性に感化されている人体冷凍運動の旗手)が[L5 協会]の元創設者なのであるから— 次のように言い換えられることになる。

(直上の再引用部の内容の[特定部のみを現実的状況を反映した他の形容方法]に置き換えての表記をなすとして)

「生命は一宇宙に限らず、理論上存在しうるすべての宇宙のなかのすべての物質と力を司り、理論上存在可能な宇宙のすべての宇宙のすべての空間に拡がって、理論上得ることのできる知識のすべての断片を含む無限の情報を記憶しているはずだ」といった、あのバロウとティプラーの予言どおりになる日も間近い。

かくなるうへはもう何もすることはない。ただくつろいで楽しい時を過ごすだけのことである。

…(中略)…

【ナノテク概念の流布・普及と結びつき、トロイア戦争と関わる宇宙空間上の特定ポイントとその名前に冠する団体の発起人】(たるキース・ヘンソン)の信念は「問題はすべて解決できるものだ」という一語に尽きる。だからそっちは放っておいて、キースとその仲間は時間とエネルギーが許す限り、もっと急を要する問題の「はるかな縁」パーティの計画に専心しているのである。

…(中略)…

そのパーティのころには、その一〇〇〇人は転送(ダウンロード)だのコピーだの分裂だので何兆という人数に増えているはずだから、企画上かなりの問題が生じるのは目に見えている。

「もしパーティが大きければ、オードヴル用の豆のディップだけでブラックホール一個ぐらいできるだろうな。」(パーティ企画者のあいだではこれは「豆ディップ・カタストロフィー」と呼ばれているが)もう一つの悪夢的問題は、三人に一人は**【ナノテク概念の流布・普及と結びつき、トロイア戦争と関わる宇宙空間上の特定ポイントとその名前に冠する団体の発起人】(たるキース・ヘンソンのコピー個体)**そのものということがあり得ることだ。「おまけに五〇〇万台の宇宙船をどこに「駐船」すればいいんだろうな?」と[ナノテク概念の流布・普及と結びつき、トロイア戦争と関わる宇宙空間上の特定ポイントとその名前に冠する団体の発起人](たるキース・ヘンソン)はつぶけた。

(引用部に対する言い換えをなした部はここまでとする)

馬鹿げている、あるいは、こじつけも甚だしいところと思われるだろう? (:について、話すに値せぬような向きはそも、[理解]のための努力さえなさぬとも思うのだが、[理解をなそうとの向き]にあってもそう思われるところか、と見る)。

だが、ここでの話、以上のような純粹なる記号論的入れ替え方式にまつわるところのここでの話にあっては

[嗜虐的反対話法 — [人間をトロイアの木製の馬にて皆殺しにするつもりである] とのことを宣言しているとのありようが露骨に透けてうかがえるとの存在らに由来する嗜虐的反対話法 (人間存在を[幻像投影機械にて管理させての魂の欠損を見た人形]にしつらえてきた節ある中で薬籠中の人間存在をさながらゴキブリのように見下していた節もある存在らによる嗜虐的反対話法でもいい) — の介在を示す他の材料「ら」]

が伴っており、そこにいう「他の」材料については続いて後の段にて摘示していくこととする。

そうも述べましたうえでまずもっては以下再掲しての本稿にて既に入念に証示してきたことらの把握をなしていただきたいものである（きちんと本稿内容を理解されている向きには「今更延々くどくどと繰り返すことではなかろうに。」と思われるようなところか、とも思うのだが、一応、繰り返すところとしての次のことらの把握をきちんとなしていただきたいものであると思っている）。

・**トロイア戦争**。それは（本稿にての**出典 (Source) 紹介の部 39**で事細かに伝承解説媒体からの引用をなして解説しているように）**[黄金の林檎]を元凶にしてはじまった戦争だが、といった黄金の林檎のみならずトロイア戦争と結びつくようになっていく実験が史上最大の科学「実験」とされるLHC 実験となっている**（：普通に見ていたら気づけぬようなところながら、伝承を理解している向きならば、気づけるところとしてLHC 実験とトロイア戦争伝承には複合的繋がり合いがある。そして、それは**[人類の科学の進歩に資すると当事者実験機関関係者らに鼓吹されてもいる (e.g. 出典 (Source) 紹介の部 81) とのブラックホール生成挙動]** それそのものとトロイア戦争関連の命名規則の結びつきでもあり、そして、「**時期的に**」ブラックホールが生成されることが科学界にて現実視されることになった「**前**」に遡る繋がり合いともなっている —— ※LHC 実験におけるブラックホール生成挙動と黄金の林檎などトロイア関連事物の結びつきについては**出典 (Source) 紹介の部 35**から**出典 (Source) 紹介の部 36 (3)**を包摂する解説部、および加えての**出典 (Source) 紹介の部 39**から**出典 (Source) 紹介の部 45**を包摂する解説部を参照されたい。また、LHC 実験のブラックホール生成が現実視されるに至る「前」からしてそういう繋がり合いの根が醸成されだすに至っていた（従って、ブラックホール生成にまつわる警告の意図が科学者らにあったとは考えがたいようにもなっている）とのことについては本稿序盤部のブラックホール生成にまつわる科学界申しようの変転動向ありよう（**出典 (Source) 紹介の部 1**から**出典 (Source) 紹介の部 5**にまとめたのありよう）を比較顧慮すれば分かるところとなっている——）。

・**どういわけなのか、ブラックホールを中心的トピックとして扱った文物が[911の事件]が起ることを数値的に示す先覚的文物**ともなっているとの奇怪極まりないことがこの世界にはある（：マリオネット仮説、[機序(作用原理)の問題も含めて仮説として述べるをえないとのこと]らはさておきも（実際に本稿では仮説の類としてどうやって人間が意識的ないし無意識的糸繰り人形になりうるのかとの指摘にも**補説 2**の段などで部分的に触れてはいるがそうしたことはさておきも）、現実にあつて具現化している現象として糸繰り人形手仕事であろうとしか判じようもない事柄が見受けられるようになっている。その点、頭の具合がよろしくはないか、種族を裏切りしようとの類は断じてみとめないことかとは思ふのだが（往々にして両者は一体なるものか、とは思ふ）、**【位置的始点および時間的始点にて[2001年9月11日]を指す数値規則と結びつき、双子との概念とも強くも結びつき、また、その他の意味でも911との事件と結びつく素地を含んでいるとの要素】**を僅かひとつの**【過去と未来を結ぶ通路にまつわる実験】**にまつわるところで取り沙汰している書籍は、そう、事前言及事物以外の何物でもないことになる —— **出典 (Source) 紹介の部 28**から**出典 (Source) 紹介の部 33-2**を参照のこと——）。のみならず、911の先覚的文物についてはその他にも露骨なものがあり、それらにあつては**[時空間の扉を開く]**との寓意を伴っているとのもの「**ら**」もが目につくとのことがある（**補**

説 1, 補説 2 及びそれらパートに先行するところの長大なる訴求部を参照のこと)。

・ブラックホール (LHC でそれが構築されると考えられるになったブラックホール) 関連の事物と結びつくようになっていく「特定の」[911 の事件の先覚的言及作品] (存在していること自体が奇っ怪なる先覚的言及作品) であるが、その「特定の」[911 の事件の先覚的言及作品] と「他の」[911 の事件の先覚的言及作品「ら」] の間には繋がり合い (純・記号論的に見ての記号論的繋がり合い) が「複合的に」存在しているとの指摘がなせるようになっていっているとのことがあり、その問題となるもの「ら」の間の [複合的繋がり合い] からしてこれまた [黄金の林檎] と結びつく [トロイア関連の要素 — LHC 実験とダイレクトに結びつけられているトロイア関連の要素 —] と濃厚に接続するようになっていっているとのことがある (その関係性の環の中にはこの地球上にブラックホールやワームホールの類を生成することを主軸とする粗筋とする 80 年代のハード SF 小説『コンタクト』も含まれている — 本稿にての補説 2 の段を参照のこと —)。

・フランク・ティプラーらのオメガポイントにまつわる主張 (正確にはオメガポイント理論を広めるに最大限活かされたと判じられる 1994 年書籍 The Physics of Immortality : Modern Cosmology, God and the Resurrection of the Dead『不死の物理学』に認められる精緻化に至るまでの 1986 年の The Anthropic Cosmological Principle『人間的宇宙論原理』に見る前身的主張) が L5 協会の発起人たるキース・ヘンソンらの申しようと「露骨に」接合している節があり、といったことがありもする中で、(L5 協会創設者たるキース・ヘンソン言い分に影響を与えていること、露骨であると窺い知れる) オメガポイント実現に関するフランク・ティプラー話柄 — その後のティプラー著述『不死の物理学』内容に着目した場合、特異点実現のためにナチスドグマを否定し、ナチスドグマと親和性が高い永劫回帰 (及び永劫回帰と親和性が高い物理的状況) を否定しようといったところにひとつの特徴がありもするとの話柄 — からしてロングスパンで見た場合、【LHC 実験必要性にまつわる先覚的言及】を含んでいる節があり、また、【トロイア関連の寓意を隠喩的かつ複合的に含むとのブラックホールやワームホールの類の生成を主軸とする特定作品 (『コンタクト』) と結節しているとの側面】を有しているとのもの「とも」になっている (ここ本段もその部に含まれるとの [ホワイダニットにまつわる本稿説明部] の先行する段にあって解説してきたことである)。

以上の実にもってくどくも繰り返してのことを念頭に置いた上で L5 協会にあってはこれより呈示することら (1. から 3. と振ってのことら) もが述べられるようになっていっているとのことの意味性について考えていただきたいものである。

1.

そもそもラグランジュ点の第五ポイントにスペースコロニーの類を設置しようとの構想を目立って提唱した向きはジェラルド・オニールとの人物だが (先の [L5 協会] 項目よりの引用部を繰り返せば、“L5 協会とは、ジェラルド・オニールの宇宙移民のアイデアを広めるべく、1975 年に Carolyn Henson (キャロライン・ヘンソン) と Keith Henson (キース・ヘンソン) が設立した団体である” とあるとおりである)、同男ジェラルド・オニールは素粒子物理学 (とすれば加速器運営にダイレクトに関わる学問領域) を専攻し、初期、加速器実験のために加速器関連の発明 — その機構のためだけに一項設けられているとの [Storage ring] との加速器供用機構のゼロからの発明 — をなしたとされる向き「とも」になっている。

(: 直上言及のジェラルド・オニールについては英文 Wikipedia [Gerard K. O'Neill] 項

目にて Storage-Ring Synchrotron: Device for High-Energy Physics Research とのアメリカの物理学会誌 Physical Review に掲載された論稿の内容が出典としてのリンク先として挙げられているとのかたちで

(以下引用なすところとして) “ O'Neill began researching high-energy particle physics at Princeton in 1954, after he received his doctorate from Cornell University. **Two years later, he published his theory for a particle storage ring. This invention allowed particle physics experiments at much higher energies than had previously been possible.**”

「ジェラルド・K・オニールはコーネル大学で博士号を取得した後、2年後にプリンストンにて高エネルギー物理学の研究を始めた。その二年後(1956年)、オニールはパーティクル・ストレージ・リングのための理論を世に発表した。このオニールによる発明によって素粒子物理学にての実験で従前可能であった以上の高エネルギーを実現なしえるようになった」(訳を付しての引用部はここまでとする)

とのことが紹介されているような向きとなる。

尚、のような[加速器実験を業とする者達の恩人の一人]であるかのように紹介されているジェラルド・オニールの発明したストレージ・リングがいかようなものなのか —LHCに至っての今日の加速器にあってもその機構がいかように利用されているのか— については英文 Wikipedia [Storage ring] 項目にかなり微に入っている解説がなされていること、申し述べておく)

以上のことがある、L4点およびL5点にスペース・コロニー(英語的ニュアンスではスペース・ハビタットの方が通用化した言いようとなろうか)を構築すべしとのことを述べていたジェラルド・オニールがブラックホールを生成しうると考えられるに至ったラージ・ハドロン・コライダーに至る加速器発展史にて(ストレージ・リングの発明にて)それなりに重要な役割を果たしているとのことがあるのは加速器進化が進みに進んだところにあるラージ・ハドロン・コライダー(スペース・コロニー構想の父たるジェラルド・オニールの発明ストレージ・リングがより高エネルギーでのビーム衝突を担保すべくも活用されているとのLHC)がそちら命名規則の問題として

[トロイア]

と複合的に結びついており(つい先立っての段にでも振り返り表記したことである)、また、L5点(ジェラルド・オニールのスペース・コロニー構想に触発されて設立されたL5協会の組織名命名の背景にあるラグランジュ・ポイント・ファイブ)もが[トロイア]と結びつくとのこととの兼ね合いで「よくできている」と受け取れるところではある。

2.

さらに話を進める。Storage ring(直訳すれば、[貯蔵リング]とでもなるうか)との加速器実験に供されるリング形状の特定機構を提唱・発明したことで知られるジェラルド・オニールがスペース・コロニーをそこに設置すべしとしたL4点、L5点に据え置かれるものとして構想されだした当のコロニーの類型として

[スタンフォード型トーラス]

という類型のものが「当初 —ジェラルド・オニールが目立ってスペースコロニー構想を主唱しだした70年代初頭から半ば(スペースコロニー構想自体の提唱はジェラルド・オニールによる1969年のそれが嚆矢ともされる)を判断基準にしての当初— より」目立って提唱されてきたとのことがある(とのことがその方面の科学史ではよく知られたところとなっている —※(以下、和文ウィキペディア[スタンフォード・トーラス]項目より引用なすところとして)“ スタンフォード・トーラスは、1975年にスタンフォード大学で行われたアメリカ航空宇宙局の夏期セミナーで提案された。(ジェラルド・K・オニールは、後にトーラスに代わるものとして、島1号を提案した。)「スタンフォード・トーラス」とは、この特定の設計のみ

を指すが、環状で回転するスペースコロニーのコンセプトは、これより前にヴェルナー・フォン・ブラウンやヘルマン・ポトチェニクによって提案されていた。スタンフォード・トーラスは、直径 1.8km のドーナツ状のトーラスから構成され、1 分間に 1 回転しすることで、遠心力により外側のトーラスの内部に 0.9G から 1.0G の人工重力を作り出している” (引用部はここまでとする)とされているところである——)。

さて、宇宙植民構想にあってスペース・ハビタット(宇宙居住島)の代表的モデルの一つとされているスタンフォード・トーラスについては [リング状] 形状を取る。ここで宇宙植民構想の先駆けとなっているリング周りのジェラルド・オニールのやりよう — ストレージ・リングを發明してリング状の加速器が用いられる加速器実験の進化に「貢献」したとのやりよう — との接合性を「極めて皮相的に感じさせられなくもない」のだが (ただ、スタンフォード・トーラスの構造提案をなしたのはジェラルド・オニールではないとされている)、問題はそうしたことはない(その程度のことであるのならば、わざわざ、スタンフォード・トーラスについて筆を割く必要などない)。

トーラス。それはいわゆる [単連結空間] ではない [多重連結空間] の代表的構造となっているものであることが知られる図形である。ポイントはそのことにある、[トーラス=多重連結空間の代表的構図] とのことが問題になる(だけのことがある)と強くも述べもし、書くが、多重連結空間 (単連結空間が英語で書くところの simply connected space ならば multiply connected space と形容されるもの) とは

[ワームホール・ブラックホールによる [時空の穴] をまさしくも表象する構造]

として語られ、かつ、知られているものとなる。

などと一口で述べるだけでは問題がある、「ソースを呈示しないと問題があるか」ともとらえるので(なにかんづく、不吉なることばかりを呈示しようとする筆者のことを信じたくはない、いや、存在自体も含めてその申しようを完全否定したいとの向きはソースが呈示されていないとのその一事だけで [不吉なるこの話] を「彼ら」の基準の [唾棄すべき対象] に分類してしまうか、とも思う)、 [事細かに典拠を示し、属人的主観の問題など(話柄の取捨選択を除いては) 介入するような余地がほとんどないとの堅い話をなすとのことを本義としている本稿スタンス] に忠実にソースを挙げておくこととする。

(直下、Parallel Worlds; A Journey Through Creation, Higher Dimensions and the Future of the Cosmos —— (ハーバード卒業の後、加速器実験ともマンハッタン計画とも密接に結びつく科学者アーネスト・ローレンスと縁あるローレンス・バークレー国立研究所にて博士号を取得した米国にてのマス・メディア露出型物理学者ミチオ・カクの手になる科学読み本(オンライン上の検索にて本文内容確認もなせるようになっていくとの著作)) —— にあっての CHAPTER FIVE Dimensional Portals and Time Travel の節より引用をなすとして)

Although Einstein thought that black holes were too incredible to exist in nature, he then ironically showed that they were even stranger than anyone thought, allowing for the possibility of wormholes lying at the heart of a black hole. Mathematicians call them multiply connected spaces. Physicists call them wormholes because, like a worm drilling into the earth, they create an alternative shortcut between two points.

(上のオンライン上より確認できる原著内容に対してその内容確認には(書が手元がない向きには) 図書館に足を運ぶ必要があるだろうとの上原著の邦訳版『パラレルワールド —— 11 次元の宇宙から超空間へ』(版元は日本放送出版協会(現 NHK 出版))にての第 5 章 [次元の入り口とタイムトラベル] にあっての 144 ページの内容を以下、引用するとして)

アインシュタインは、あまりに信じがたいのでブラックホールは自然界に存在しないだろうと考えたが、そんな思いとは裏腹に、その後、ブラックホールがだれも考えつかないほど奇妙で、中心にワームホールが存在する可能性すらあることを明らかにした。数学者はこれを
多重連結空間

と呼ぶ。物理学者がワームホールと言うのは、地虫(ワーム)が地中を掘り進むようにして、二点間を結ぶルートを作るものだからだ。あるいはまた、次元の入口と呼ばれることもある。呼び名はどうあれ、これはいつの日か次元間旅行の究極の手段となるかもしれない。

(原著および訳書表記を引いての引用部はここまでとする)

これにて[次元間ポータル]たりうると現代科学者に受け取られている(ブラックホール中枢とも結びつけられての)ワームホールが

[多重連結空間]

としての性質を呈している(Mathematicians call them multiply connected spaces. Physicists call them wormholes などと表されている)ことはお分かりいただけたかとは思いますが、そこにいう [多重連結空間] (単連結空間ではない空間構造) の代表的形状が (Mobius strip [メビウスの環]、Klein bottle [クラインの壺] などよく知られた構造体と同様に) スペース・コロニーたるスタンフォード・トーラスに見るトーラス、そちらドーナツ構造となっているとのことがあるのである。

につき、(スタンフォード・トーラスに見る)トーラス構造が多重連結空間の代表例であることについては、たとえば、英文ウィキペディアの[Simply connected space] (単連結空間) 項目にすら現行、

A torus is not simply connected. 「トーラスは単連結構造形状ではない (反言すれば、トーラスは多重連結構造である) 」

などと図が付されつつも解説されているようなところとなる。

(※ドーナツ構造などと述べると一見して何の変哲のない形状と思われるかもしれないが、トーラスの如きドーナツ構造は位相幾何学(トポロジー)的視点を介して実にもって深遠なる見方をなされており、については、和文ウィキペディア[トーラス]項目にあっての現行記載として(以下、引用をなすところとして) “平坦トーラス (flat torus) は、円柱面を平坦なまま曲げて、両側の端を合わせ貼り付けることで得られる。「平坦」とは「曲率0」ということで、円柱面のように1方向にしか曲がっていない面は曲率0なので平坦である。平坦な面は可展、つまり、伸縮なしで平面(や他の平坦な面)に変形可能である。3次元空間内で円柱面を曲げるにはどうしても伸縮が必要で、曲率のあるドーナツ型しか作れない。平坦トーラスを作るには、4次元空間が必要である。…(中略)…トポロジー的には、トーラスはどれだけ伸縮してもいい。有名な例は、ドーナツとコーヒーカップは同相である、というものである。つまり、コーヒーカップ(の表面)もトーラスである” (引用部はここまでとする)との記述からも推し量りいただけることか、とは思う

ここまでの話についてのまとめをなす。「L5点の名を冠するL5ソサイエティ(の代表者)の標榜する思想が(既述の観点から)[ブラックホールの特異点 一フランク・ティプラー言い様に見るオメガを約するシンギュラリティー]を用いての神の如き存在の進化」と結びつくとの観点が呈示出来るようになっていの中で」下のような関係性が示せるからこそ、[恣意性]が観念される、(であるから)、問題になる。

[多重連結空間] ⇒ こちら多重連結空間構造はメビウスの環、クラインの壺、そして、「トーラス」にて代表的にその性質が論じられる空間構造となる

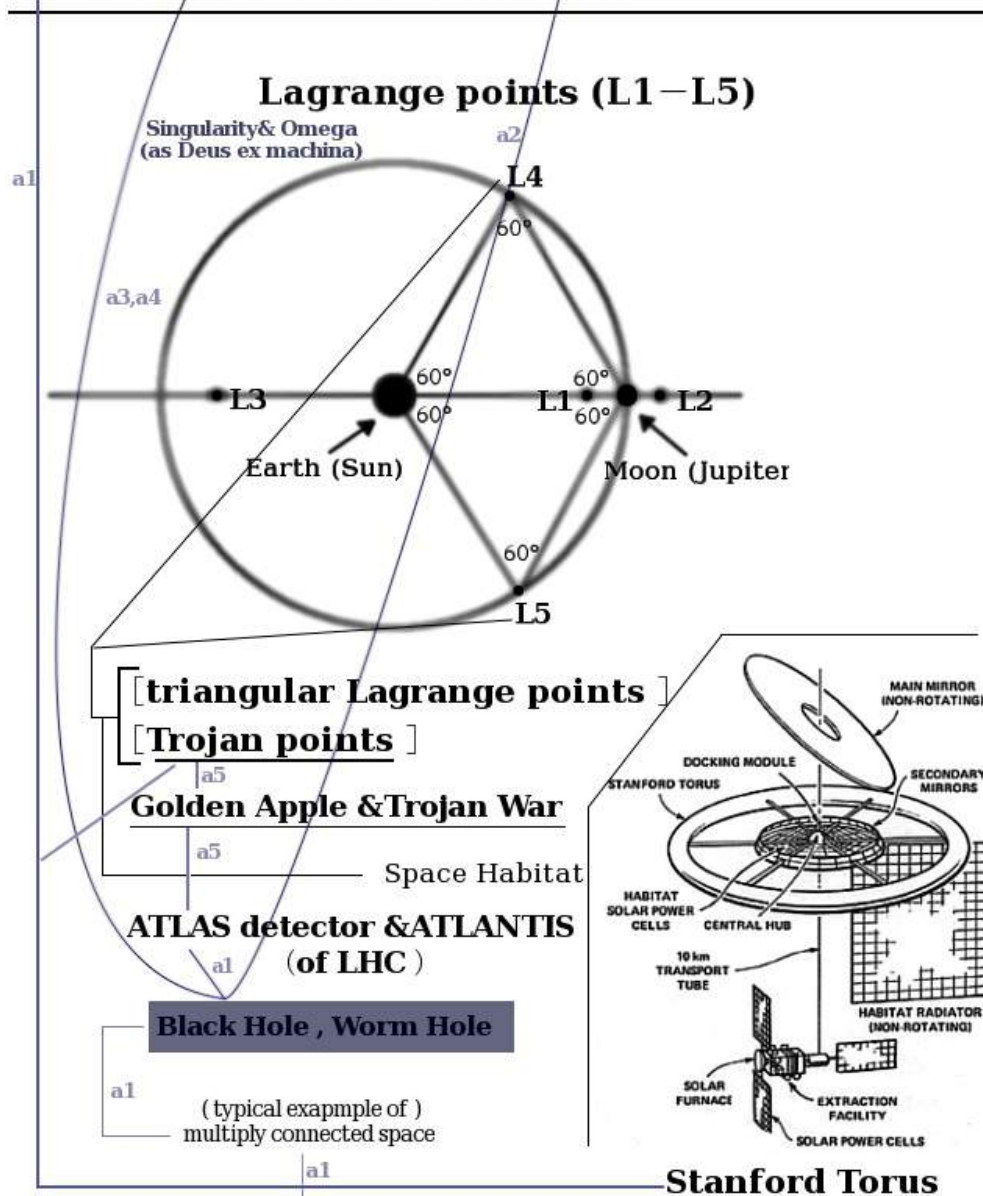
[トーラス] ⇒ こちらトーラスはL5点に設置されるべきスペース・コロニーの形状として提案されていた構造ともなる(スタンフォード・トーラス型)

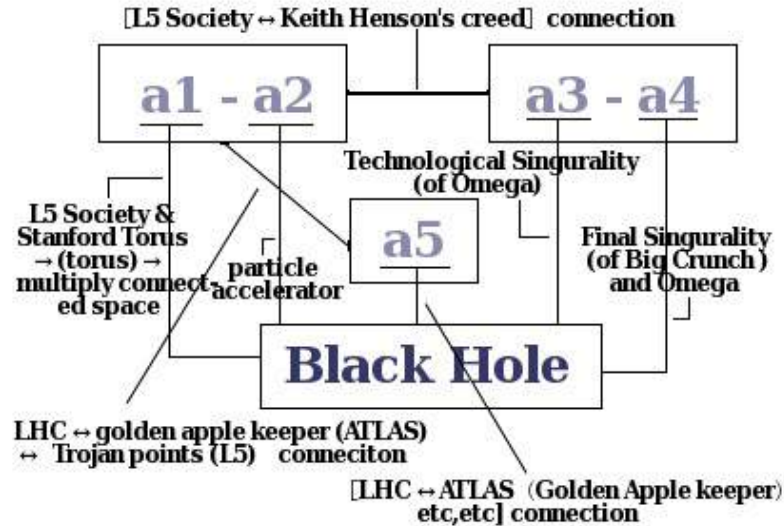
[L5点でのトーラス型のスペース・コロニー付設構想] ⇒ L5点にてのスペース・コロニー設置構想については[トロイアの物語][加速器実験発展]の双方との繋がり合いを見出せるとの事実がある(まずもって[加速器実験]発展史にあって名を残しもしている物理学者ジェラルド・オニールが提言・推進しだしたのが[L5点におけるコロニー

付設構想]となっているとのことがある. そこに見るL5 点は[トロヤ点]とも呼ばれ、トロイア戦争の登場人物らの名を冠する小惑星群を配されるとのかたちで数十年前から(古の)トロイア戦争と結びつけられるに至っているが、L5 点でのコロニー設置を提言したことで知られるジェラルド・オニールがその発展に貢献した加速器実験の極致、[LHC 実験]も「別個に」「多重的に」トロイアと結びついているとのことがある)

[L5 点にて付設が取り沙汰されてきた[トロイアの物語][加速器実験発展]と結びつくスペース・コロニー] ⇒ 再言するところとして、スペース・コロニー構想はスタンフォード・トーラス型に見るようにトーラス構造(加速器の形状を想起させる中身が空洞になったリング状構造でもある)と結びつけられて取り上げられてきた構想ともなるわけだが、そちらトーラス構造と同様に中身が空洞になったドーナツ状の[加速器](スペース・コロニー構想の提唱者である科学者ジェラルド・オニールがストレージ・リングの発明でその高エネルギー実現に貢献したとされている加速器)で生成されうると考えられるに至ったブラックホール・ワームホールは多重連結空間の体現物であるとの言われようがなされている([多重連結空間]より→(矢印)をはじめでの最初の部に回帰)

L5 Society (inspired by "particle accelerator scientist" Gerald K. O'Neill) ⇒ [Keith Henson's "Far Edge" Party as an "apparent" black humor & Technological Singularity & Tipler's Omega Point] connection (seen in Ed Regis, Great Mambó Chicken and the Transhuman Condition: Science Slightly over the Edge, 1990)





Is the existence of "Multiple Connectivity" as above

[only co-idental] or [deliberate] ?]

純・記号論的に上のように表せられる「多重的」関係性が存在するとのことが問題になるわけだが、本稿ではそうした「多重的」関係性が山と存在していることについて〔(確率論的)偶然〕で済むのか、あるいは、(作用機序はともかくも)〔恣意の賜物〕でそうもなりもしているのか、とのことの分析をひたすらになしてきたとのことがある。

上のようなつながりあいは何故もって問題と判じられるのかの話を下、さらに続ける。

3.

L5 点 (及び L5 点に重きを置いての L5 協会の面々が突き詰めていったドグマの先にあるところ) については

[フリーメイソンの空間から覗く目のシンボルとの結節点]

がそこにあると指摘出来るようになってきている(突拍子もない話の中にあつてさらにもつてして突拍子もない話と思われるであろうが、現実にそういうことまでが指摘できるようになっているのがこの世界のありようである)。

以下、本稿従前内容を振り返りもしながらも相当長くもなりもしての説明をなすところとして、以降呈示の **i.** および **ii.** の点らからそうも、

「L5 点 (および L5 協会のドグマの先にあるところ) については [フリーメイソンの空間から覗く目のシンボル] との接合性もが観念される」

と述べられるようになってきている。

i.

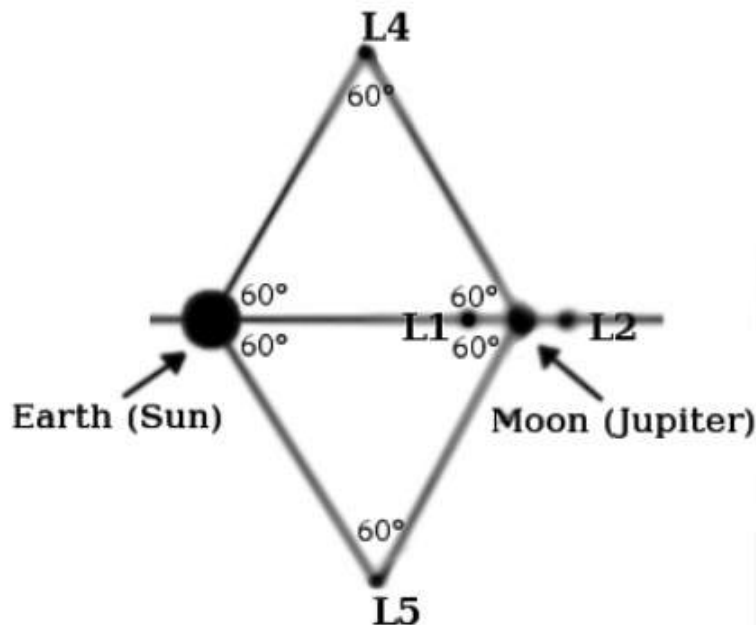
L5 点については —それが[地球—月]ラインを底辺とするものでも、[太陽—木星]ラインを底辺と

するものでもー

[ラグランジュ点導出の基準となる恒星(惑星)・惑星(衛星)ら二つの天体を底辺に置いての正三角形(equilateral triangle)の頂点]

との性質が伴っている(：オンライン上や諸書籍など諸所にて紹介されている図をご覧いただければお分かりいただけようが、この場合においては(L1点あるいはL2点を結んでのラインを底辺とした場合ではなく)[地球 Earth—月 Moon]のライン、または、[太陽 Sun—木星 Jupiter]のラインを底辺にした場合においてL5点が[正三角形の頂点]となるということである)。

正三角形。言うまでもないところだが、それは構成する三つの内角がすべて60°となっているとの三角形である。



さて、そうした正三角形の頂点たるところにL5点(ないしはL4点)が位置しているわけだが(直上図を参照のこと)、そこに

[【別の宇宙への入り口たるワームホールなどの特徴ともなる多重連結空間構造】の典型例とされるトーラス形状をとる構造体]

が配されるとの発想法が呈示されてきたのがスペースコロニー構想、加速器実験の進歩に貢献してきた者(先立っての引用部に示されているようにキース・ヘンソンらにL5協会設立の契機を与えることになった物理学者ジェラルド・オニール)が仕掛け人ともなったスペースコロニー構想である。

他面、唐突とはなるが、

[正三角形(内角が60°にて統一されている三角形)]

[別の空間より覗く目]

[幾何学象徴(Geometry)とされるG]

を結びつけるのがフリーメーソンが彼らの[神](グレート・アーキテクト・オブ・ユニヴァース)を表象するやりようであることが知られている。

同じくものことについては下の媒体(本稿にての[出典\(Source\)紹介の部 102\(8\)](#)及び[出典\(Source\)紹介の部 106\(6\)](#)でソースとして既に呈示しているとの書籍)よりの「再度の」抜粋をなす。

→

(そこよりの再引用をなすこととした出典として)

The Symbolism of Freemasonry: Illustrating and Explaining Its Science and Philosophy, its Legends, Myths and Symbols (同著、タイトル訳せば、『フリーメーソンの象徴主義:その科学と哲学、その伝説と神話とシンボルについての描写と説明』となる Project Gutenberg サイトにて公開されている 1882 年初出書籍となり、講学的にメーソンリー・インサイダー (Albert Mackey という元医者にして史家であったとの人物) がメーソン・シンボリズムにつき解説しているとの書籍となる —※全く同じくものは先立っての段でも論じているところとして「本稿筆者はといった蒼古とした書籍にまで食指を伸ばし、メーソンのシンボリズムについて「も」知悉しているとの人間ではあるが、(自身の名誉に賭けて述べるどころとして)フリーメーソンなどは「断じてない」)—

上のメーソンによるフリーメーソンリー象徴体系解説著作には次の通りの記述がなされている。

(直下、現時にあって Project Gutenberg のサイトよりダウンロードできるとの **The Symbolism of Freemasonry: Illustrating and Explaining Its Science and Philosophy, its Legends, Myths and Symbols**(1882)『フリーメーソンのシンボリズム:その技(サイエンス)と哲学、伝承、神話、そして、シンボルらにまつわる図解』にての XXIV. The Ineffable Name.[二十四節:(神聖さがゆえ)口に出すのがはばかれる御名]の後半部よりの「再度の」抜粋をなすとして)

We know, for instance, from the recent researches of the archaeologists, that in all the documents of the ancient Egyptians, written in the demotic or common character of the country, the names of the gods were invariably denoted by symbols; and I have already alluded to the different modes by which the Jews expressed the tetragrammaton. **A similar practice prevailed among the other nations of antiquity. Freemasonry has adopted the same expedient, and the Grand Architect of the Universe, whom it is the usage, even in ordinary writing, to designate by the initials G.A.O.T.U., is accordingly presented to us in a variety of symbols, three of which particularly require attention. These are the letter G, the equilateral triangle, and the All-Seeing Eye.**

(訳として)

「我々はたとえばのこととして最近の考古学者ら調査から

[民衆の間にて通俗的にも書かれていたとの古代エジプトの文書らすべてにて[神の名]が普遍的にシンボルによって示されていたこと]

につき知るところとなっており、ユダヤ民族がヤハウエの4子音文字を表するとのそれと異なるところの慣行についてはすでに(本書にて)触れている。類似しての(神の名に対する表記・呼称にまつわる)実践は他の古代国家に広まっていた。(翻って)フリーメーソンは同様の手法を採用しており、そして、それに応ずるところとして、**[ザ・グランド・アーキテクト・オブ・ユニヴァース]**

は —それは日常にて用いる書き物にてでさえ[G.A.O.T.U.]の頭文字で表されるとの方式に適しているところの御名だが— 様々なシンボルら、殊に三つのそれが注意要するとのシンボルの形態にて示される存在となっている。(三つの注意を要するとのシンボルにつき)それらは**[Gの字]**、**[正三角形]**、そして、**[万物を見通す目]**である」

(訳を付しての引用部はここまでとする)

上に見るようにフリーメーソン象徴体系では**[Gの字]** **[正三角形]**、そして、**[万物を見通す目]**が神の存在を示すものとしての彼らメーソンの代表的象徴となっているわけであるが、うち、**[万物を見通す目]**については凡百の陰謀論者ら —激情を古語・雅文調に隠して表せば、[真実を手ずから調ぶるに懶惰(らんだ)とし、隙間を埋むるべくもの妄言・妄覚を世に広めんとするを本源的役割としている

節がある唾棄すべき手合いら]と筆者なぞが見ている者達— によって

[(存在不確かなる)組織イルミナティの表象である]

などとひたすらに強調されてばかりいるがそうしたことは問題ではない。

(:ただしもって問題ではないところを取っても述べれば、である。筆者個人としては[イルミナティ]なるものを持ち出す者達を胡散臭くも見ている。その点もってして [ゾンビ・ワールド (がかったもの)] としての具体的現象としての指示材料にて溢れたこの世界では[浸潤性カルト]や[浸潤性秘密結社]の成員などである[相応の「被」操作「個体」]らを民族閥・宗教的閥・秘密結社閥(らを兼ねての各国政治的閥)との名目が与えられての紐帯以上のものとして幅広くも結びつける統一的組織構造はないであろうとこの身は判ずるに至っている、そう、人という種に「不統一感」と「分断」をもたらすことを主たる役割の一としている節があるとの「紐で無理矢理結びつけられている魂の抜けた傀儡(くぐつ)らの紐帯」はどこまでいってもその程度のものであり、「相互に相克を呈する与えられた「間に合わせの」ドグマ」(たとえば「マニフェスト・ディステニーの観念に基づいてのアメリカ覇権主義」や「宗教的選民主義」や「ソロモン神殿の具現化」といった間に合わせのドグマ) はあっても「確たる深奥の「共通」組織基盤」などそこにはないと判ずるに至っている(そして、そうも判じられる中で無知なる者を騙すように「統一的組織」としての「イルミナティ」なるものごとを強弁する者達については [[陰謀]をたかが人形(人間)レベルの陰謀「論」として「騙る」との式で胡散臭い者達] だと見るに至っている)。ただし、そうした現行の自身見立ての受容を強要しはしないし、するつもりもない(筆者が読み手諸賢に求めるのは[現象としてそこにはきと現われている事実の束]を認識してもらうこと、そして、事実の束が(偶然とは対極をなす執拗性が露骨に伴っていると窺い知れるとのかたちで)一方向を指している、そう、魯鈍になさしめられた人間種族全体を長期的オペレーションの一環として諸共処理しきるとの方向を指しているとのその事態に適切に向き合ってもらうことだけである)

陰謀論者の言いようの伝はとにかくものごととして直上言及のフリーメーソンそれ自体の手になる著作—(アルバート・マッキーという男の手になる『ザ・シンボリズム・オブ・フリーメーソンリー』)— にその旨、指摘されているように「**確実に「フリーメーソン団」(欧米の「たかだか人間レベルの」権力機構にての政治閥と結合して横断的影響力を行使してきた(とイタリアの露見した爆弾テロ絡みのやりようなどからも本稿で論じてきた)チェスの駒の紐帯) それ自体のシンボリズム体系に濃厚に組み込まれているとの「万物を見通す目」**が同じくものメーソン象徴体系にて

「中空よりこちらの世界を覗くように存在しているものとして描画されてのもの」

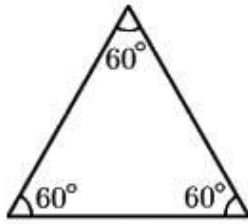
として**「正三角形」と「Gの字(幾何学 Geometry を体現するとされるGの字)」**とワンセットのものとしてされているとのことは、である。

取りも直さず、

【「正三角形(の頂点)」と「Gの字」と「他の世界との結節点をなす「目」】はワンセットである】

とのこと「とも」あいなる(：そして、同じくもの方向性を指示するものとして指摘できるところとして**【「フリーメーソンリーの一つ目のシンボルは彼らのトレーシング・ボードにて多く「ヤコブの梯子」、すなわち、「天(別世界)に至る通路」と結びつけて描かれることが多い】**とのこと「も」ある——については本稿にての先立っての段で先述のことであるし、これより不快なる事例にまつわることとして再述することとする——)。

となれば、直下呈示のような**関係性**が見てとれるとのことにもなる。



G

" the Grand Architect of the Universe, whom it is the usage, even in ordinary writing, to designate by the initials G.A.O.T.U., is accordingly presented to us in a variety of symbols, three of which particularly require attention. These are the letter G, the equilateral triangle, and the All-Seeing Eye . "

—The Symbolism of Freemasonry: Illustrating and Explaining Its Science and Philosophy, its Legends, Myths and Symbols (1882)

("officially") [G] od or [G] eometry

invisible Eye of "another" space



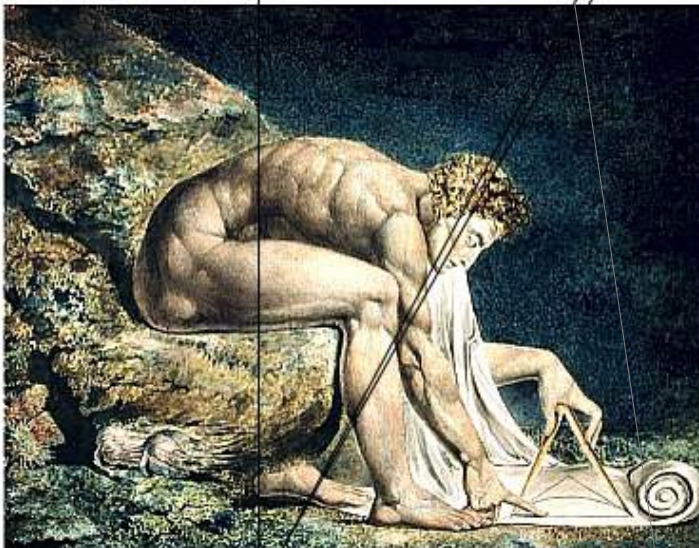
Equilateral Triangle (&L5)

Geometry

[Topological Space] Concept

Newton (1795)

The Ancient of Days (1794)



[Stanford Torus (as one of space habitat models) & Triangular Lagrange points (Trojan points)]

上の図は

[ウィリアム・ブレイク —著名なイングランド 18-19 世紀の芸術家— の銅版画]

を引き合いにしつつ、フリーメーソンの [コンパスとGを併せての紋章] におけるGが一面で

[Geometry 幾何学]

を示すとのよく知られたことを視覚的に訴求しようとのもの「でも」ある（：図内にそれらを挙げてもいるウィリアム・ブレイク版画らが【コンパスと結びつけて(万有引力の法則を確立した)アイザック・ニュートンを描いての版画】および【コンパスにて世界設計をなすとのユリゼン(フリーメーソンによって神のような存在と見られているグレート・アーキテクト・オブ・ユニヴァースと親和性が高いとの指摘があるブレイク流の造物主)を描いての版画】であることについては[メーソン紋章ありように通ずるところ]として本稿の先立っての段 — 補説 4 と区分付けての部の後半部 — にても訴求していたことである)。

さて、フリーメーソンの G 紋章の G がその頭文字を示すとされることの幾何学 Geometry、そこから発展していったのが相対性理論の基礎となったリーマン幾何学などに見る「非」ユークリッド幾何学、[曲率がマイナスとなるといった空間構造を扱う幾何学(双曲幾何学)]などにその典型例が見出せるそちら「非」ユークリッド幾何学となっていることは数学発展史ありようとしてよく知られていることではある。

そうもして多種多様な分野に枝分かれしていった幾何学体系の中にあつての、

[位相幾何学] (トポロジー)

の領分で取り上げられる [トーラス (Torus)] が

[多重連結空間 ; multiply connected space の代表的体現物]

となっていること、となれば、ワームホールが如き [時空の穴] と結びつくものともなるとされていることは先立って(引用なしながら)指し示さんとしたわけではあるが、そうもした、

[こことは異なる世界への時空間の穴の性質のありよう]

と相通ずるところがある(位相[幾何学]概念に見る) [トーラス] をもってして [正三角形] (こちら [正三角形] も [幾何学 Geometry の G の字] と共にフリーメーソンの神 — 幾何学者としての神 — を表象するシンボルであるとされている) と結びつけているのが

[トロヤ点(あるいは L4, L5 ポイント)にてのスペースコロニー設置構想]

となっていることの意味性をここでは問題視している — [フリーメーソンの神の表象物としての主要三点セット] ともされる [G(幾何 Geometry)の頭文字] [「亜空間から」覗く目] [正三角形] らと(他方にあつての) [正三角形における亜空間の窓に親和性が高い(位相「幾何」学における)多重連結空間の象徴ともなる構造体を配置しての宇宙植民島設置構想] との結びつきに目を向けるとの観点にて、である —)。

ii.

本稿では主要訴求事項のひとつとして

[ブラックホール関連事物が「尋常一様ならざる力学で」911の事前言及が如くことと結びついている]

とのことを指し示さんとしてきたわけだが、他面、[911の質的事前言及をなしていると露骨に評せられ

るようになっている作品「ら」]が

[フリーメーソンのシンボリズム体系 一直上にてその特性を問題視しているまさしくもの亜空間から覗く一つのシンボルにまつわるもの「をも」含んでのフリーメーソンのシンボリズム体系]

「とも」視覚的・意味論的に接合的しているとのことが[現実にある]とのことの具体的証拠をも(実にもってくども「容易に後追いできるかたちで」呈示しながら)摘示なさんとしてきた。

うち、一部について、そう、国内作品にさえそうしたものが見受けられるとのことについてここで再言及なすこととする(無論、[話柄として選択するに足ることである]と判じもじているから再言及をなすことにしたのである。については「先行するところのi. とそれとても密接に関わることである」と判じもじているからこそその再言及であるとも申し述べておく)。

につき、どこをどう確認すれば、即時一目瞭然なるところを確認できるかを含めての委細は先行する典拠紹介の部、[出典\(Source\)紹介の部 108](#)に譲るとして、せんだっての段では次のこと、解説してきたとことがある。

(振り返り表記部として)

巷間にて語られているところとして次のようなことがある。

「よく知られた国内漫画作品、その一シリーズとなる『ジョジョの奇妙な冒険 スターダストクルセイダース』(との作品)では90年代初頭、

【「予言」描写を現出できるとの作中設定を伴った、(オインゴ・ポインゴ兄弟という呼称が与えられての劇中悪役に由来する)漫画描写能力にまつわっての描写】

との絡みで

【[911]という数字が露骨に描かれた服を着た男が「電柱に突き刺されて死亡する」とのシーン】

が描かれている — 予言描写を具現化なさしめるとの作中設定を伴ったものにまつわるシーンでそういう描写がなされている — 。

そして、そのまさしくもの同じくものシーンでは[飛行機]と[月]もがあわせて描かれている。

その時点で[飛行機]と(服に刻字された)[911]の関係を連想させるが、については、また、[月]はイスラム勢力の象徴とも解されるところとがある(と巷間問題視されもしている)。

のみならず、当該漫画作品劇中 — 問題となる漫画『ジョジョの奇妙な冒険 スターダストクルセイダース』劇中 — に見られる、

【電柱に突き刺されて死亡する、911との数字が入った服を着た男の死亡局面】

が[10時30分]との時刻と結びつけられているとのこともがあり(劇中にて登場する「予言をなす漫画」(作中「内」漫画)では「911という数値が入った

上着を着た男]が「おっ10時30分だ!」と言ってから[横転して同男をはじきだし、結果、彼が電柱に吊されて死ぬことになるバス]に乗り込むことになるとの未来の予見描写が具現化したと描かれ、作中にて実際に同じくものキャラクターが同じくもの台詞(「おっ10時30分だ!」)を口にし、実際に事故に遭って死亡したと描かれることでそちら男の運命は[確定]したとの落ちが付けられている)、そこに見る10時30分という時刻は—フィクションならぬ現実世界で—ツインタワーが崩壊した時刻と(ほぼ)同じものである。

上の理由から漫画作品『ジョジョの奇妙な冒険(スターダストクルセイダース)』とは

(現実世界で同事件が発生することになったのよりも10年以上前の作品として)

[911の事件を予言しているような作品]

となっている....」

以上のようなかたちで巷間にて語られる話は—その現象としての[頓狂さ]の問題は置いておき—

[下にて呈示の事柄ら]

が「容易に検証可能なるところ」として、

[Philological Truth [文献的事実]の問題—特定の文献に特定の記載がなされているという[事実]にまつわる問題—]

として成立しているとのものとなる(: 大の大人が取り合うに足りないもの、アーバン・レジデント、【都市伝説】などと呼ばれるようなものが真偽確認できないようなものであるのに対して「容易に」第三者が【記録」的」事実】であると確認できるようになっている—※頭の具合が過度によろしくはないとのことでなければ分かつたこととして『ジョジョの奇妙な冒険』の予見描写(とされるもの)にまつわって問題となるのはそれが【恣意】による賜物なのか(また、仮に【恣意】ならば、それが人間業によるセルフ・フルフィリング・プロフェシー、自分達自身で成就させるつもりであるとのことにまつわる予言、人間業としての自作自演の予告的言及に関わるのか、あるいは、たかだかもってしてその程度のもので済まされるもの「ではない」と言えるか(傀儡(くぐつ)とされた人間の背後にある力学が問題になるのではないか)、との細分化してのことがさらに論点たりうる)、あるいは、**【恣意】ならずば)【偶然】の賜物で済むのかであって、【都市伝説】(便所の落書き、あるいは、時代がかつた表現をなせば、橋の軒下に書かれているといった話柄の吐露それ自体が目的化している狂歌狂句が如くものか)のように【そこで話柄になっている事柄】そのものがあらしいになるようなものではない**(頭の具合が過度によろしくはないとの手合いならば、あるいは、なんらかの工作人員のような類ならば、歴然としている事実そのものの有無が論点であるように振る舞うこともあるかもしれないが、本来的にはそういうことは既に「片が付いている」ことである)——)。

(容易に確認できる事実の問題として)

[事実1: 当該漫画作品悪役のオインゴ・ボインゴ兄弟の使用する[予言をなす漫画(作中「内」作品)]にて死ぬことが予言された男の服には [911] との

数字が目立って記載されている] ⇒ 「誰でも容易に確認できるようになっている」との「文献的事実」である

[事実2:劇中に見る上記の男の死亡予言描写(漫画作品『ジョジョの奇妙な冒険』の中の劇中の漫画作品(英文タイトルが付されており OINGO BOINGO BROTHERS ADVENTURE)にての予言描写)は[月][飛行機]の描写と確かに結びついている] ⇒ 「誰でも容易に確認できるようになっている」との「文献的事実」である

[事実3:劇中に見る上記の男の死亡予言が10時30分をキーワードにしてのバス乗車時間と結びついている] ⇒ 「誰でも容易に確認できるようになっている」との「文献的事実」である

[事実4:以上の事実1から事実3に見る描写を含む漫画作品が世に出たのは1990年代前半となっている] ⇒ 文献にまつわる情報(書誌情報)としてすぐに確認できることである

以上がまさしくもの「事実」であると指摘出来る所以(ゆえん)の詳説 —後追いにあつての確認方法— は従前の段(本稿「補説4」の段にあつての出典(Source)紹介の部108の部)に譲るとして、である。

ここで「再度もってして」問題視したいところとして当該の「国内」著名漫画作品特定描写(予見的描写とされるそれ)が

[フリーメーソンのエンタード・アプレンティス位階の象徴と同位階の儀式思潮]

を「視覚的特性」および「意味的特性」双方でそのままなぞる式をとっているとのことがありもする。

第一点目。視覚的特性の一致性の問題として

「([飛行機描写]などをも伴う国内漫画に見る予見描写(とされるもの)に関して)は[[太陽][一つ目][月]をその順序で並べるとの構図]は[フリーメーソンのエンタード・アプレンティス位階(入門徒弟位階)にて多用される特定トレーシング・ボード]そのものの構図 —下に再掲図を付しておく— となっている」

とのことがある(従前の段の繰り返し表記として:表記のこともまた【明確化している事実】を【真偽不明なること】に韜晦(とうかい. はぐらかし)するといった類らが頻繁に舌の先にのせる言葉としてのアーバン・レジェンドとのもの、「都市伝説」などではない。そこからして単純ですぐにたやすくも確認できるとの事実、すなわち、「記録的事実」として出典ら —単行本版『ジョジョの奇妙な冒険』第20巻ないしリニューアル見ての文庫版『ジョジョの奇妙な冒険』第13巻(後者ではp.9やp.17)に見る描写、そして、(流布され容易に捕捉できるようになっている)フリーメーソン・トレーシング・ボード構図— から後追い出来る「際立っての」図形的一致性の問題にすぎない。尚、「トレーシング・ボード」とは、(本稿の先の段にても言及していることとなるが)、「フリーメーソンの諸種様々なイラストレーションを組み合わせてかたちづくられ、メーソンの各位階にての講義に用いられるとのシンボル画」のことを指す —英文 Wikipedia[Tracing board]項目の冒頭にて “ Tracing boards are painted or printed illustrations depicting the various emblems and symbols of Freemasonry. They can be used as teaching aids during the lectures that follow each of the Masonic Degrees, when an experienced member

explains the various concepts of Freemasonry to new members.” 「トレーシング・ボードとはフリーメーソンの諸種様々な紋章・シンボルらを描いているとの描画・印刷されての図像らとなる。それらは古参のメンバーが新参者に対してメーソンの様々な概念を説明する際に各々のメーソン位階に応じて講釈の間にて教示の材として用いられうるとのものである」と記載されているとおりでである——)。

第二点目。(予見的漫画の描写と「問題となる」フリーメーソン・シンボリズムの間の)意味的特性の一致性の問題として劇中の予言漫画(作中内漫画)にての予見描写(と評価されている)シーンは

[[911と刻印されたジャケット] を着用した男が電柱に「吊されたまま」串刺しにされて死亡しているとの描写 — 同じくもの場面には直上、再述のようにフリーメーソンの徒弟位階シンボリズムそのままに [月] と [太陽] と [一つ目] が併せて描かれてもいる—]

となり、そこにみる「吊されたまま」串刺しにされて死亡しているとの描写特性のこともが問題になる。吊されたまま串刺しにされて死亡しているとの状況は広くも言葉の定義をとらえて見れば、ハングド・マン — 吊されての刑死者— のありようともなる(: その点、ハングド・マンとくれば、いや、吊された男ことハングド・マンと結びつけられる行為そのものに着目しての「ハンギング」と呼ばれる処刑方法とくれば、狭義には「窒息させるべくも首吊りにて処刑する」との処刑法(にて殺される者の末路)となるとはされるが、広義には「磔刑(十字架上の死)あるいは吊された上での「串刺し」のように吊されたまま死をもたらす行為」もそこに内包するとされている(であるから漫画作品『ジョジョの奇妙な冒険 スターダストクルセイダース』の予見描写(とされるもの)に見る「電柱に突き刺された911との刻字がなされた上着を着ている男」も(「首に縄を付けられている」わけではないが)「串刺しにされて吊るし上げ状態になっている男」としてのハングド・マンとなる)。につき、— 厳密さを重んじているとのことがあるため、一応、再言しておくが— 英文 Wikipedia [Hanging] 項目の冒頭部にあつて現行、“Hanging is the suspension of a person by a noose or ligature around the neck. The Oxford English Dictionary states that hanging in this sense is “specifically to put to death by suspension by the neck”, **though it formerly also referred to crucifixion and death by impalement in which the body would remain "hanging".**” (訳として)「ハンギングとは縄の輪あるいは首周りでの縄による吊るし上げを指す。公式にはそれは「磔刑」あるいは「吊るし上げ状態の維持なしでの串刺し」による死亡も含まれているが、オックスフォード英語辞典によれば、この意でのハンギングは取り立てて首吊りによる死をもたらすことであるとされている」(訳はここまでとする)と記載されていること — 広義解釈の部— も以上申しようとして一致するところとなる)。

予見描写とされるもの、著名作品『ジョジョの奇妙な冒険』に見る予見描写とされるものには表記のようにハングド・マンが描かれているわけだが、他面、フリーメーソンの第一階級、入り口にあたる徒弟位階へのイニシエーション(入門の儀)を受けるものは目隠しをされて絞首刑受刑者の格好 — 首に縄とくりつけられ、目隠しをされるとの格好— をさせられることがメーソン通ならば、外部の人間 — 筆者もメーソンなどに加入はしていない、その「外部」の人間である— にもよく知られている。そう、フリーメーソンという団体では「【太陽】と【一つ目】と【月】を中空に並べてのトレーシング・ボードを用いる」エントード・アプレントイス(入門徒弟)位階にて「刑死人としての吊された男(ハングド・マン)」のロールプレイング(役割再演)が強制されるわけである — 尚、吊された男を演じさせられたメーソン入団者は目隠しを取られて、「死刑囚たる立ち位置から光を与えられて」復活した者としてフリーメーソン団に迎えられもすることがよく知られている(本稿の **出典(Source)紹介の部 94(4)**にて Project Gutenberg のサイトより全文確認できるところのメーソンによる儀礼大系要覧書たる Duncan's Masonic Ritual and Monitor (1866)より

引用なししているように“ The Junior Deacon then ties a rope, by Masons called a cable-tow, twice around his arm. (Formerly, the rope was put twice round the candidate's neck.) ”などと幅広くも言及されているところであり、それ絡みの関連図も本稿で何点か呈示しているところである)。尚、そうした「光を与えられた」状態を英語における「イルミネイト」された状態と見、そうした人間の紐帯をしてイルミナティなどの言葉を用いる類が陰謀論者という人種となるわけであるが、筆者が彼ら陰謀論者らをして唾棄すべき輩であろうと強くも見る理由としては一つに彼らが「イルミナティとの語句の使用」を「フリーメーソンのエンタード・アプレンティス位階に始まる一連の儀式の流れありよう」とすら何ら結びつけずに「ネスタ・ウェブスター(という女流陰謀論者)が20世紀から反ユダヤ主義と接合させながら煽ったアダム・ヴァイスハウプトにて設立された組織イルミナティの亡霊としての暗躍」という「お定まりの」式の陰謀論として踏襲して用いていることばかりが見受けられることがあり「も」する。そうした踏襲方式を採用している時点で彼ら陰謀論者は自分達が情報操作者であることを半ば明言しているようなものだと見るのだが、彼ら陰謀論者をして唾棄すべき存在と筆者が見る理由は主には「言われれば自殺でも何でもしようとのチェス盤の駒」で満ちているようなこのような忌まわしい世界(言いよの伝によっては残念ながらもZombie Worldともあいなろう世界)で白々しくも「人間の」「人間による」「人間のための」深奥の陰謀団」なぞとの「馬鹿げた」存在を強くもアピールする、しかも、証拠不十分にアピールしている有り様が見受けられるとのことにある(「家畜小屋で羊が身内を屠殺しよう陰謀を巡らしている」などと馬鹿(失敬)でも口にはしないだろう。羊は身内が屠殺されていく状況に牛などよりも無頓着なる愚かな生き物であるとされる、そのくせ、群れたがるとの特性を有しているとされるわけだが、キリスト教やユダヤ教がその信徒を「神の羊」として、メシアの類を「羊飼」と呼び慣わし、のうえで、羊の生け贄の儀をよくも是認してきた史的背景にも通じそうなところとしての人間の「羊」化、いわゆる「シープル」(シープとピープルの合成語)の問題は人間の陰謀団によるところではないと判じられる論拠で満ち満ちているのがこの世界であろうと断ずるに足りる論拠を本稿では呈示しているつもりである)――。

下にて再掲の図と上の解説部を複合的に検討していただければ、お分かりか、とは思うのだが、

【国内漫画作品にみとめられる911の予見描写】

は、以上、**【視覚的構図 ―[月][一つ目][太陽]を一直線に並べるとの構図―】**および**【意味論的ありよう ―ハングド・マンと意味論的に結びつくとのありよう―】**の双方でフリーメーソンの入門徒弟階層 ―エンタード・アプレンティス位階― にまつわる特質と接合性を呈しているとのものとなっている(※)。

(※といったこととて「も」筆者から見れば、

「たかだかその程度のことにはすぎない...」

とのことなのだが(真に問題なのは本稿の先だつての段で委曲尽くして証して示す、[証示]に努めてきたように国内予見作品漫画作品とまったく同様のフリーメーソン・シンボリズムと結節接合するかたちでの海外でのよりもって露骨なる911の予見作品がごろごろと存在していることであり、そうしたことが容易に摘示・後追いできるかたちで存在している背景に一体全体何が、どういう意図があるかである)、物事の重みを理解していない[何も分かっていない]との人間(たかだかももの下らぬことに過度の重み付けをなすような小市民的人間など殊にそうであろう)はそうはとらえ「ない」ことかもしれない。

そういう向き・類になれば、

『漫画作品『ジョジョの奇妙な冒険』の作者はフリーメーソンではないのか』

などと「目立って」問題視しようとするかもしれないとも思うのだが(そして、筆者が従前やろうとしてきたことの前に石を置いてきたような(より悪くもの)[敵方葉籠中の害物としかならぬ類]はそうした陰謀「論」程度のものにこの忌まわしい世界の悲劇の本質を矮小化させるのに注力することかとも思うのだが)、はきと述べ、本稿筆者は特定漫画作品作者のフリーメーソン入団の有無などについては何ら拘(こだわり)をもっておらず、また、その伝では[白]たりうることも大いにありうる —問題となる漫画作者がメーソンと縁もゆかりもないことも大いにありうる— と当然のように見ており(たとえ当該漫画作品の作者が「白」でも本稿で延々諄々と示してきた[「マリオネット」仮説が成り立つだけの具体的証拠]を顧慮すれば、[この世界がいかんともしがたい傀儡(くぐつ)で満ち満ちていること]を幸か不幸か知らぬ存ぜぬとのそうした向きにあってもその[白]たる可能性に納得がいくことか、とは思う)、同じくものことについては本稿の先立っての段(補説4と分類なしの段)でしつこくも断り書きしているところである。

以上のようなことの絡みで「真に問題になるのは、」たかだかの漫画家絡みの特性程度の下らぬことではなく、

[911の予見事物と解される作品が数多存在しており]

[それらが[共通のシンボル体系](フリーメーソンのそれを露骨に呈するものも多く含まれている)と意味論的・視覚的側面との接合性を呈しつつ]

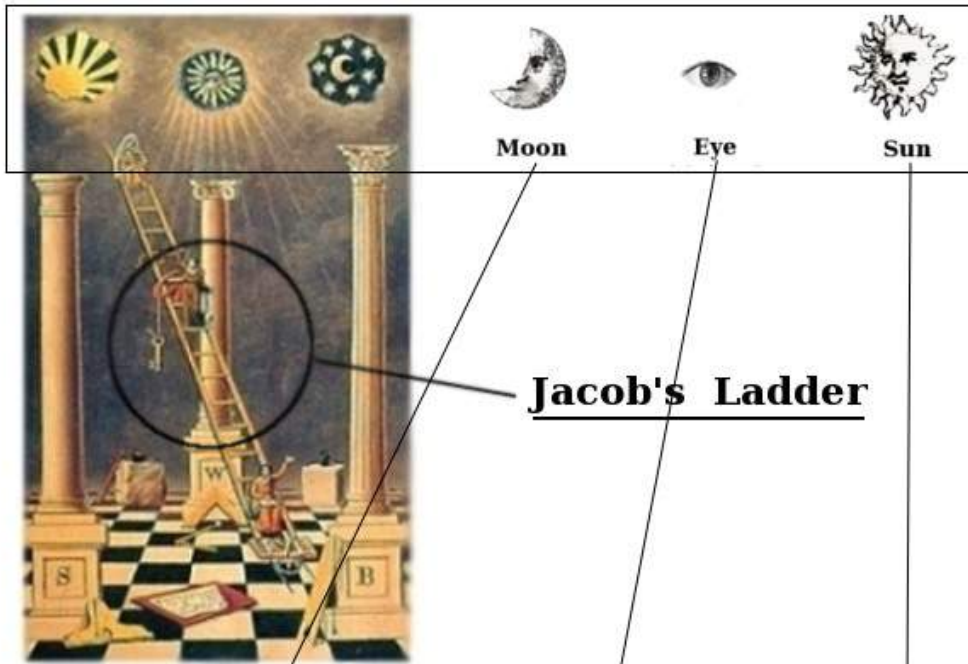
[(時限性の計画に基づき)人間を皆殺しにするとのことを「露骨に」示唆している(たとえば、『ジョジョの奇妙な冒険』との作品にての予見描写それ自体に関連するところで[黄金の林檎の寓意][重力の操作にまつわる寓意]との結節点が嗜虐的にみとめられるとのこと「も」本稿補説4の部で細々と解説しているところである)]

とのことであると筆者は何度も何度も述べているところであり(そのための[動かぬ証拠呈示]をなすためにしたためたのが長大なる本稿でもある)、また、

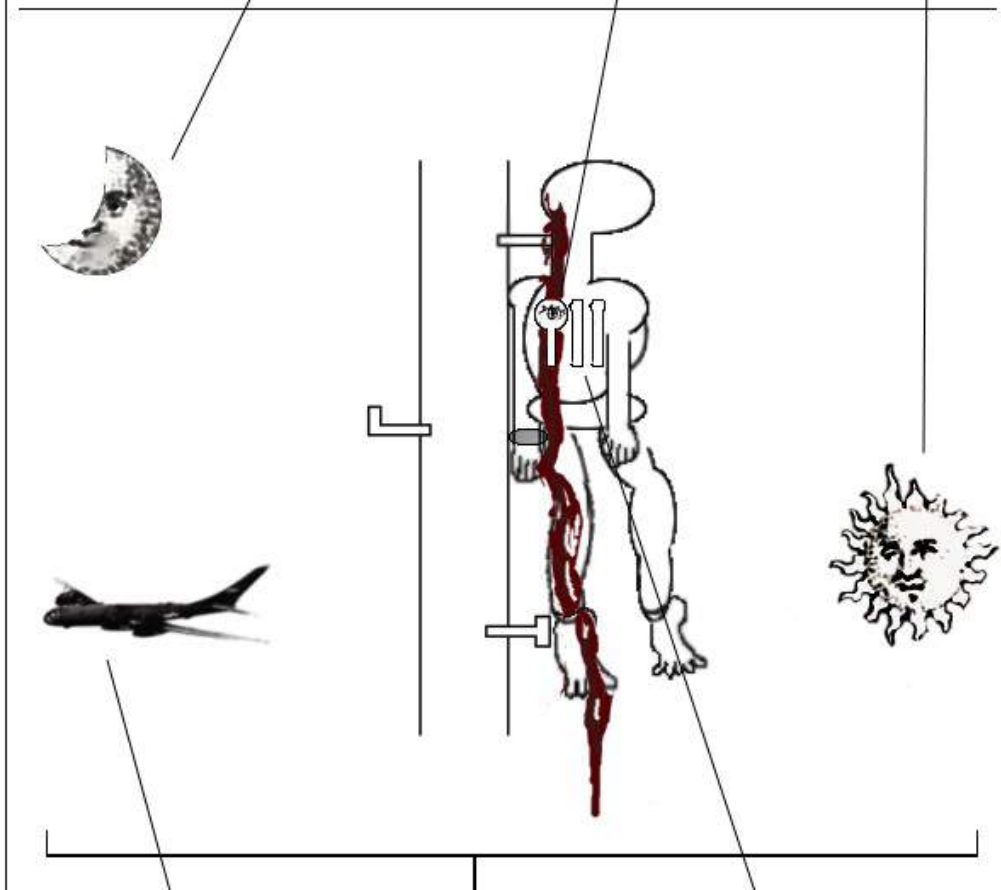
「といった[現実的状况]に[現実を変えうる態度]にて向かいあう能力がない種族には明日など望めないであろうが、それでいいのか」

との確認をなす必要があるとのことである —何かを自分で知り学ぼうとの気風などはなから持ち合わせていないとの類、口悪き向きに「よろしくはない世間の相応の類ってのは往々にしてそういうもんだろうが」などとありのままに評されるような類は物事の重み付けを死ぬまで適正になさずによくても[一連の状況における些事]をそればかり大なるところのように取り上げることもあろうかとは思うのだが(「仮に」付きで人類史にて連綿と続いてきたそうした愚挙に溺れる時間がまだ残されていれば、だが)、本稿の内容を適正に理解できる、理解しようとの向きならば、この[根源からして欺瞞によって成り立っている世界]がどこに向かおうとしているのかとのことの絡みでたかだか国内の青少年向け漫画の予言的描写などを[それ一個で完結したもの]として取り上げることなど愚の骨頂であることは理解させることかとは思う(筆者はその程度のことさえ理解できない、しようもしない、そういう頭の具合の向きらとは話したくもない、話す意味がそもそもないと受け取っている人間でもある)——)

直上にあつての断り書きの部が長くなってしまったが、問題となる「国内」漫画作品の予見描写にまつわつての再掲図を下に挙げることとする。



Reproduction of one scene from ["title no.189" (1990) of (Japanese manga series) JoJo's Bizarre Adventure —Stardust Crusaders]



airplane

"911" (&eye) printed jacket

(just after) 10:30 a.m. ("911" is not emergency telephone number in Japan , so , "Why" questions related with the 1990 first appeared manga occur in mind with reasonable manner)

original scene of above reproduction appeared as the [prophetic vision] of the fictional character (named Oingo) through his manga work

上の再掲再現図 —構図特徴のみに重きを置いての再現図— が国内漫画作品の予見描写をいかように説明せんとしているものなのかは(上に申し述べてきたところから)多く説明する必要がないことかとは思ふ (図でもって理解できないとの向きは上にて呈示の「事実1」から「事実4」の内容と図を照らしあわせてみるといいだろう。因みに同図が再掲図であるところ、再掲の元となった先立っての部では予見漫画とされる『ジョジョの奇妙な冒険 スターダストクルセイダース』にての「911と刻字されたTシャツを来た男の(飛行機とワンセットになった)宙吊り死亡描写」と当該作品内にて結びつけられている10時30分という時刻帯が(10時28分という)「現実世界のノースタワー崩落時刻」と結びつくばかりか、のみならず、「反転して見てみると時計にて「9」「11」との数値を指す時刻帯」であること「をも」問題視していた—) 。

(振り返り表記部はここまでとする)

以上、長々としての振り返り表記部にて指摘もしたことが、(話を回帰させ)、ここ本段にあつての最前よりの指摘事項、

「L5点(およびL5協会のドグマの先にあるところ)については「フリーメイソンの壺空間から覗く目のシンボル」との接合性もが観念される」

とのことに接合するだけの「事情」がある。

そして、そこにいう「事情」とは

「ブラックホール関連のトピックが「尋常一様ならざる力学で」911の事前言及が如くことを結びついている」とのことがありもし、他面もってして、911の質的事前言及をなしていると示すことができるようになってきている(なってしまうている)との作品「ら」が

「フリーメイソンのシンボリズム体系 一直上にてその特性を問題視しているまさしくも壺空間から覗く一つのシンボルにまつわるもの「をも」含んでのシンボリズム体系—」

と相通じているとのことがある

との本稿にあつての通貫しての訴求事項(のひとつ)との絡みで意をなしてくるとのこと「でも」ある。

に関して、次のことの指摘がなせるからこそ、問題となるのである。

まずもってそこより入るが、本稿ではここに至るまで

【以下の流れの通りの説明】

が講じられるだけのことを折に触れて典拠(あるいはその典拠の紹介番号)を呈示しながら解説してきたとのことがある。

・(何度も何度も本稿にて繰り返し訴求してきたところとして)トロイア戦争、それは「黄金の林檎」を元凶にしてはじまったとの戦争だが、といった黄金の林檎「ら」を介して「トロイア戦争」と結びつくようになっているのが史上最大の科学「実験」とされるLHC実験であり、そちらLHC実験とはブラックホール生成が中途より問題視されるに至った実験でもある。

(; [黄金の林檎を在処(ありか)を識る存在と伝承が語る巨人アトラス]の名前がラージ・ハードロン・コライダーを用いての実験の検出器まわりで用いられている(そちら検出器 ATLAS はブラックホール生成を検出しようものたりうるかもしれないとされている)、[黄金の林檎の園と同一視されるアトランティス]の名前が同じくもの実験のイベント・ディスプレイ・ツールの名前として用いられているとのことがある(そちらイベント・ディスプレイ・ウェアの ATLANTIS はブラックホール生成イベントを検知しようものたりうるともされている)、[黄金の林檎で滅ぶことになったトロイアに引導を渡した武将オデュッセウスを【アトランティスとも同一視される女神の島】にいざなった渦潮の怪物カリュプデイス]の名前を冠するブラックホール・イベント・ジェネレーターなるシュミレート・ツールが科学の進歩に資する(などと喧伝されている)ブラックホールの生成にまつわるシュミレートに用いられている等々)。

→

・(同文に何度も何度も本稿にて繰り返し訴求してきたところとして) どういっわけなのか、ブラックホールを中心的トピックとして扱った文物が「911の事件が起こることを数値的に示す先覚的文物」ともなっているとの奇怪極まりないことがこの世界にはある。

→

・ブラックホール(LHCでそれが生成されうると90年代末葉登場の新規理論登場を契機に考えられるようになったブラックホール)関連の事物と結びつくようになって「特定の」「911の事件の先覚的言及作品」(存在していること自体が奇っ怪なる先覚的言及作品)ではあるが、そうした「特定の」「911の事件の先覚的言及作品」と「他の」「911の事件の先覚的言及作品」らの間には繋がり合い —911の予見実物であるといった特性以外にまつわるところでの繋がり合い— が「複合的に」存在するとの指摘がなせるようになっており、その伝で問題となる文物らの間の「複合的繋がり合い」がこれまた「黄金の林檎」と結びつくトロイア関連の要素 —LHC実験「とも」ダイレクトに結びつけられているトロイア関連の要素— と濃厚に結びつくようになっていくとのことがある。

(; 物理学者キップ・ソーンの手になる科学読み本、

BLACK HOLES & TIME WARP Einstein's Outrageous Legacy (邦題)『ブラックホールと時空の歪み』

は本稿で折に触れて指摘してきた通りの側面から911の事前言及事物との様相を色濃くも帯びているが、といったキップ・ソーン著作『ブラックホールと時空の歪み』に見る911の事前言及事物であるところの所以(ゆえん)たる箇所—[通過可能なワームホールにまつわる思考実験]にまつわる箇所— にダイレクトに結びついている、というのも、[それがそちら箇所が記載されることになった理由そのものとなっているからである]との筋目の小説作品たる『コンタクト』(キップ・ソーンに科学考証の依頼との側面で[通過可能なワームホール]にまつわる思索をなさしめる契機になったことが世に知られている著名小説/米国科学界のオピニオン・リーダーだったカール・セーガンの手になる余技(表向きにあってはもの余技)がかったの手仕事たる著名小説)がこれまた多層的に「他の」911の予見言及事物と結びついており、その結びつき関係が[黄金の林檎]および[トロイア崩壊の寓意]に通ずる繋がり合いであったりするとのことが現実にある、人間存在を馬鹿にしきっているように「ある」とのことがある —同じくもの繋がり合いは著名小説『コンタクト』と著名小説『ジ・イルミナタス・トリロジー』の繋がり合い、そして、著名小説『コンタクト』と著名小説

『ザ・サイレンズ・タイタン』の繋がり合いにまつわるところの話となる(うち、著名小説『ザ・サイレンズ・タイタン』はアーサー・クラークの著名作品『2001年宇宙の旅』と[トロイアの物語]との兼ね合いでも[ブラックホール]との兼ね合いでも複合的に接合しているとの作品であり、911の予見的側面とも通ずる同作『ザ・サイレンズ・タイタン』と問題となる小説『コンタクト』が[トロイア崩壊]に通ずるところで複合的に繋がるような式での記述上のレトリックが複合的に仕込まれているのがこの世界である)。本稿ではそれで状況が理解出来ないようならば、そして、また、何もやらぬというのならば、「倫理的に」ではなく「質的に」だが、殺されてもしょうがなかろうなどの水準でもってしてのそうしたことらの指摘・解説に注力している、そう、各々の摘示に数万字超の文量を割いて注力している。

→

・紙幅にはついでに段にて指摘したところとしてフランク・ティプラーらのオメガポイントにまつわる主張(正確にはオメガポイント理論の1994年書籍 *The Physics of Immortality: Modern Cosmology, God and the Resurrection of the Dead*『不死の物理学』に認められる精緻化に至るまでの1986年の *The Anthropic Cosmological Principle*『人間的宇宙論原理』に見る前身的主張)がL5協会の発起人たるキース・ヘンソンら申しようとして露骨に接合しているとの節があり、のような中でオメガポイント実現に関する1994年著述『不死の物理学』の方に見る物理学者フランク・ティプラー話柄 —機械の神の到来を約束する【特異点】実現のためにナチスドグマを否定し、ナチスドグマと親和性が高い永劫回帰(及び永劫回帰と親和性が高い物理的状況)を否定しようといったところにひとつの特徴がありもする話柄— からしてLHC実験必要性にまつわるところで異様な先覚的言及を含んでいる節があり、また、そこには
[トロイア関連の寓意を隠喩的かつ複合的に含むとのブラックホールやワームホールの類の生成を主軸とする特定作品(著名小説『コンタクト』)]
と結節しているとの側面が伴っているとのことすらある。

以上の本稿の先行する内容にも関わるところとして、である。本稿の従前の部では以下のようなこと「をも」摘示してきたとのことがある。

「フランク・ティプラーの著書ザ・フィジックス・オブ・イモータリティ、『不死の物理学』(現時未邦訳)にあつてはその表紙に目立って【天に向けて伸びる梯子(はしご)】が描かれているとのことがある(本稿筆者が検討なしにしている *A doozy of a book... it's 2001: A Space Odyssey meets The Divine Comedy* —*Esquire*「あまりにも群を抜いた書...これはまさしく(アーサー・クラークの)『2001年宇宙の旅』が(ダンテの)『神曲』が出会ったようなものだ(エスクエア誌)」との書評がこれまた目立って表紙部に描かれている版に関してのことである)。そうした *The Physics of Immortality: Modern Cosmology, God and the Resurrection of the Dead*『不死の物理学:現代の宇宙観、神、そして死者の復活』表紙に見てとれる【天に向けて伸びる梯子(はしご)】は旧約聖書にみとめられる【ヤコブの梯子(はしご)】であると普通に解されるものである」

上にて振り返りもして言及のこと、オメガ点の概念流布に一役買っているとのエポックメイキングなる(ものとされる)フランク・ティプラー著作『不死の物理学』表紙に【ヤコブの

梯子(に当然に比定されもするもの)】が描かれているとのことに相通ずるところとしてつい最前の段にてその予見的特性について再述をなした日本国内漫画作品『ジョジョの奇妙な冒険』にみとめられる911の予見描写 —それはまったく同じくものフリーメーソンのシンボルの使用を通じてより露骨なる日本国外の予見事物と接合するようになっていること、本稿にて先述してきたところの予見描写でもある— 「にも」、

【ヤコブの梯子(ジェイコブズ・ラダー)】

をうちに含んでいるとのフリーメーソン・シンボリズムとの接合性が現実であり、それはまたフランク・ティプラーの著作、**The Physics of Immortality : Modern Cosmology, God and the Resurrection of the Dead**『不死の物理学:現代の宇宙観、神、そして死者の復活』にあつての表紙部の構図とそのまま好対照を呈するようになっているとのことがある。



上の図の左側はフリーメーソンのエンタード・アプレンティス位階のトレーシング・ボードを挙げてのものであり、の中には[太陽][一つ目][月]が中空にて浮かんでいる構図(漫画予見描写のそれと同じくもの構図)が具現化している)。

問題はそうしたフリーメーソンのエンタード・アプレンティス位階(入門徒弟位階)のトレーシング・ボード構図とこれまた同様の構図がフランク・ティプラーの(問題となる)著作の表紙イラストレーションにも —中空に向かって立てられている梯子(はしご)とのかたちで— 目立って見てとれるとのことである。

だけではない。本稿従前の段 —**補説4**と振つての部の後半部— でもそのことの解説にも注力してきたところに通ずるとのかたちで直上表記の[アナロジー(類似性)]の問題には

【世界終末と結びつく(ブラックホールあるいは重力の)特異点】

の寓意「とも」容赦なくも接合しているとのことがある(双方が似たような描写をなしているだけではなく、そこに[世界終末と結びつく(ブラックホールあるいは重力の)特異点]との結びつきもある)。

およそ以下のようなかたちで、である。

「(相応の音源的特性が伴うからこそ、そう、反対方向から再生すると悪魔の王サタンへの礼讃のフレーズを含んでいる(ように聞こえる)との特性が伴うからこそ米国州法における[バック・マスキング行為規制騒動]にまで発展したところの)『ステアウェイ・トゥ・ヘブン』という著名歌曲、音楽通ならばその名を知っていないとのことはまず考えられなからうとの著名バンドたるレッド・ツェッペリンの著名歌曲『ステアウェイ・トゥ・ヘブン』(悪名とのことでもよく知られているナンバー)と同一名称を冠する能力がここにて問題視している予見的作品、『ジョジョの奇妙な冒険』にて登場を見ており、そちらステアウェイ・トゥ・ヘブンと同一名称を冠する能力とは

【作品主人公らを皆殺しにし、既存の世界を徹底改変して別物にしてしまふとの[重力に根ざした力学]が体現するところの[天国への道]】
となっているとのことがある。

その点、[ステアウェイ・トゥ・ヘブン]とは直訳すれば、[天国への階段]だが、ニュアンスとしては[天国への梯子]、すなわち、**【ジェイコブズ・ラダー(ヤコブの梯子)】**
と同一のものともなる。

であるから、作品主人公らを皆殺しにし、既存の世界を徹底改変して別物にしてしまふとの[重力に根ざした力学]が体現するところの[天国への道]へ至らしめるとの漫画『ジョジョの奇妙な冒険』に登場する能力、ステアウェイ・トゥ・ヘブンは

【重力による世界崩壊とヤコブの梯子(当該の漫画作品の中での予見描写に通じているとのシンボリズム)を結びつける】

ものとのことにもなる」(:表記のことの細かい解説は本稿にあつての**補説4**と振っての部の後半部に譲るが、同じくものことは和文ウィキペディア[エンリコ・プッチ]項目にあつての現行記載として(以下、引用なすとして)“プッチが重力を最も軽減できる位置に到達したことで進化した、プッチのスタンドの完成形．それまでのプッチのスタンドとは全く異なる外見であり、前半身だけの馬に人の上半身が跨った姿をしており、顔の中心や手の甲には能力を象徴するかのように時計(或いは計器)のマークが描かれている．時を無限に加速させるスタンドであり、「天国へ行く方法」実現の鍵となる．プッチ以外の全生物は時の加速についていけず、傍目から見るとプッチが高速移動しているように見える．…(中略)…単行本17巻掲載のスタンドパラメータでは時間の加速の原理について「全宇宙の「引力」を利用して加速しているようだ」と説明されている．…(中略)…このスタンドの真の能力は時間を無限大に加速し続けることで世界を一巡させることである．一巡した間に全ての人間や生物は未来にいつ何が起こるかを体験しており、その運命を変えることは出来ない(多少の違いはあっても運命に変更は無い．例えば紙を踏んで転ぶと言う出来事を体験している人間が、紙を踏むまいと回避したとしても別の物に躓き転んでしまう)が、プッチ本人のみは自身や他者の運命に干渉、変更することが出来る．雑誌連載時は呼称が「ステアウェイ・トゥ・ヘブン(天国への階段)」であった”(引用部はここまでとする)と記載されていることに関わるところのものでもある)

ここまでの本段、枠で括りもしての表記の内容を通して検討いただくことで、

【「L5点(およびL5協会のドグマの先にあるところ)については[フリーメーソンの亜空間から覗く目のシンボル]との接合性もが観念される」とのことに接合す

るだけの[事情]があるとのことを訴求する中で敢えても日本国内著名サブ・カルチャー作品『ジョジョの奇妙な冒険』にあつての予見描写の如きものを取り上げた】

とのことを何故にもってして敢えてもなしているのかとのことについて、理解をなしていただけることか、とは思う（:それは詰まるところ、[911の予見言及事物]と[ブラックホール(の特異点)関連の事物]の複合的なる繋がり合いの環が極めて異様なるかたちで目立つようになって「いる」とのことに通ずる話でもある 一何度も何度も同文のこと、本稿の中で断っていることだが、次のことを再度もってして申し述べておきたい。「漫画作品のことなど、大の大人が肩肘ばって論ずるようなことではない(との社会慣行がある)とのことは(俗じみた言いようなせば「常識など屁とも思っていない」人間ながらもの)本稿筆者とて無論、百も承知のことである(それ専門のメディア露出のタレント・産業人ではない向きが漫画作品にまつわって薄いところで甲論乙駁をなしているのを見聞きしたらば「レベルの低い奴原だ」なぞと軽侮をなそうとの向き、社会の一線を生きる向きからも多いことであろう 一世間的に真っ当、堅い会社ならば平と部長とのゴルフで漫画ネタなどは(奇縁あつて双方が取り上げたくとも)取り上げられることはない、少なくとも、商材・経済的利益との意味を越えて取り上げられるようなことはまずもってないと言え、当たり前のことをくだ楚乃くだ言うな、馬鹿なことであろう、とあいなるだろう—)。だがもってして、である。そういう大人が大人社会の暗黙のルールで忌避しがちな青少年をターゲットにしての王国・領域のことであるからこそ、「わざと」相応の寓意が相応の存在によって入れ込まれている可能性は否定はできないだろうとのこと「も」問題になる」(そういうことを認識している人間として筆者などはサブカルチャーの領域をその製作力学の問題も含めてひたすらにコアな方向に多角的に煮詰めるとのこと「をも」なしてきた)—)。

そして、である。日本国内の予見描写を含む作品のことを【「L5点(およびL5協会のドグマの先にあるところ)については[フリーメイソンの亜空間から覗く目のシンボル]との接合性もが観念される」とのことに接合するだけの[事情]がある】との絡みで取り上げたことについてはさらにもってしての事情「も」がある(についてはここ枠内の部から外に出てとのかたちで直下解説することとする)。

直上にて枠で括りもして解説してきたことに加えもして、である。ここまで再言及・問題視してきた国内著名漫画作品にみとめられるとの、

[【フリーメイソンのシンボリズム】との結びつきを有している【911の事件の予見描写】の構図—(直上までの内容をもってしてまじめなる読み手にあられてはご理解いただけているかとは思ふのだが、[亜空間から覗く一目]らシンボルありようを通じてL5点におけるスタンフォード・トラスを巡る関係性とも接合しているものでもあるとの構図)—]

それ自体が

[黄金の林檎](すなわちトロイア崩壊の元凶となっているもの)

と接合しているとのことがあり(それもまたかなりもって前の段で先述したことはある)、によって、

「L5点(およびL5協会のドグマの先にあるところ)については[フリーメイソンの亜空間から覗く目のシンボル]との接合性もが観念される」

とのことの重みが本稿全体にて訴求せんとしてきたこととの絡みでさらに増しもするとのことになる(ことも問題になる)。

同じくもの点にまつわつての振り返りもしての委細表記をこれよりなすこととする(911の事件の予見描写が【黄金の林檎】と結びついているとの事例は複数あり、本稿では映画『ファイト・クラブ』・映画

『トレーディング・プレイシズ』・小説『ジ・イルミナタス・トリロジー』の各作品に伴っての同じくもの特性について事細かに解説してきたとことがある——のうち、『ファイト・クラブ』の黄金の林檎に関わる事前言及の部(ツインタワー付設のオブジェの露骨なイミテーションが爆破されるとの部)は国内漫画作品『ジョジョの奇妙な冒険』にての予見描写とぴったりと重なる、トレーシングボード構図を介してまったく同様のフリーメーソン・シンボリズムとぴったりと重なるようになっていたのを詳説してきたものである——のだが、ここ本段では補説4の部にて解説していた[日本国内漫画作品『ジョジョの奇妙な冒険 スターダストクルセイダース』にあつての予見描写](直近にあつて問題視した予見描写)がいかに黄金の林檎と関わるかに集中しての振り返り表記をなすこととする)。

その点、ここまでL5点(およびL5協会とそのドグマの先にあること)に通ずる接続性について解説してきたとの、

[国内漫画作品『ジョジョの奇妙な冒険 スターダストクルセイダース』にあつての直近にあつて(再度、)問題視した予見描写]

が含まれるのは

[爆弾仕かけのオレンジの巻]

と振られているとの集英社「単行本」版に収録されてのエピソードとなる。

にまつわって、

「そうした単行本タイトルのネーミングの由来としては時限爆弾を仕掛けたオレンジで主人公を暗殺しようとする悪役が描かれるからであろう」

と自然に想起されるかたちともなっている(※)。

(※既に[911の予言描写]が登場するセクションについては言及しているわけだが、ここでは和文ウィキペディア[スターダストクルセイダース]項目にての現行の記載内容を引いて、爆弾仕かけのオレンジによる暗殺挙動がどういったものなのか、再度の内容紹介をなしておくこととする。

→(以下、和文ウィキペディア[スターダストクルセイダース]項目にての現行の記載内容よりの引用をなすとして) “アスワンで待ち受けていたオインゴボインゴ兄弟の兄。弟のボインゴとコンビを組み、弟の予知能力を頼りに行動する。最初は喫茶店に先回りし、ジョースター一行に毒入り紅茶を飲ませようとしたが、イギーに邪魔されたことで失敗する。次に承太郎が爆弾の爆発に巻き込まれるという予知を実現させようとするが、爆弾仕掛けのオレンジを仕掛けようとする際に現れたジョセフとポルナレフに慌てて承太郎へ化けたため、本物の承太郎の代わりに予言に巻き込まれてしまう。ジョセフたちと同行する際に様々な仕草などで怪しまれながらもなんとか逃亡に成功するが、捨てられた爆弾仕掛けのオレンジをうっかり踏んでしまったことで自爆し、存在を気づかれないまま敗北してしまう ” (以上、引用部とした)

さてもってして[爆弾仕かけのオレンジ]などという「それが恣意的なものでなければ何だというのか」と受け取れもするとのタイトル及びそちらタイトルにて示される内容——オレンジに爆弾が仕掛けてそれで口腔内より爆死させるなどといったあまりにも突拍子もない内容——は

『時計仕かけのオレンジ』(英文原題はクロックワーク・オレンジこと、Clockwork Orange)

というタイトルの「他の」著名小説・映画作品が存在している中で同作品より影響を受けていることは瞭然、火を見るより明らかといった按配のものでもある。

そして、そこに見る『時計仕かけのオレンジ』という作品についてであるが、同作、元来は英国初の小説作品であるところながら、「世間一般——と述べても映画好きの類を想定しての世間一般だが——で知られているのは、」

[『2001年宇宙の旅』や『博士の異常な愛情』や『フルメタルジャケット』といった監督作品で知られる映画界の巨匠、スタンリー・キューブリックがメガホンをとった)「映画版『時計仕かけのオレンジ』]

の方となる(活字作品ではなく映像媒体の方が[「暴力描写の規制ボーダーを引き下げたがゆえに映画史に遺る」などと評されての著名なる作品]として知られている)。そちら映画版『時計仕かけのオレンジ』の映画通の間で「よく知られた」リリース・ポスター(国内でもレンタルDVDのパッケージにそのデザインが流用されているのが見受けられるとのもので数多の映画ポスターデザインに関わってきたグラフィック・デザイナーであるビル・ゴールドという向きの作品としてのリリース・ポスター)は

[三角形の中の一つ目]

を極めて印象的に描いたもの(ナイフを構えたこれぞ凶相との若者が[三角形・一つ目]と結びつけられているもの)となっている。一先の部でそちら図示をなしている中、ここでは図示はなさない。

よく知られた映画版『時計仕かけのオレンジ』は有名どころとしてのそのリリース・ポスターと結びつけられて想起・紹介されることが多いものと解されるようになってきているのだが、そちら『時計仕かけのオレンジ』ポスターに見る[中空に浮かぶ一つ目]ことオール・シーイング・アイはフリーメーソンの主要なシンボルのひとつ「とも」になっているものである(に関して陰謀論者はそれを、[中空に浮かぶ一つ目]をイルミナティという彼らが存在強調したい組織と結びつけたがる、また、職業的懐疑論者はとにかく「三角形の中の一つ目」はメーソン勃興前のキリスト教シンボリズム体系と結びつけられてきたものであるとしたがる(フリーメーソン団とそれを結びつけるのは陰謀論にすぎないと強弁する)きらいがあると見受けられもするが、事例紹介が広くもなされるとのかたちで[三角形と結びつけられた一つ目]がフリーメーソンの象徴体系「にも」組み込まれているとのことは事実として知られているところである。一きちんとした典拠も本稿にてくども呈示してきたところである)。

そうもしたかたちで日本国内漫画作品の問題となる特定描写 — (いかようにもってして911の事件の事前言及と通ずるとのことがあるのか、フリーメーソンリーのエンタード・アプレンティス位階のシンボリズムとの結びつきも含めて(委細を本稿従前の段に譲りながらも)つい先立っての段にあって再述もしてきたとの特定描写) — にそのまま関わるところで

[[爆弾仕かけのオレンジ] (フリーメーソンリーの徒弟位階シンボリズムと接続する式での予見描写を含むエピソードを包含する国内漫画作品の命名方式) → 『時計仕かけのオレンジ』 (三角形の中の一つ目のリリースで表象されること多き映画)]

という連想のプロセスが(フリーメーソン・シンボリズム絡みのものとして)自然に生じること「も」問題なのだが、そうもした連想プロセスに関わるものたる「オレンジ」が

[黄金の林檎]

の同一物であると歴史的に見做されてきた果実であることをここでは取り立てて重んじている(※)。

(※黄金の林檎がオレンジとの質的同一物であると見られてきたことの出典として: 英文 Wikipedia [Golden apple] 項目にての Identity and use in other languages ([他の言語にての(黄金の林檎)の定義のありよう、そして、使用])の節の記載を引けば、“ In many languages, the orange is referred to as a "golden apple". For example, the Greek χρυσομηλιά, and Latin pomum aurantium both literally describe oranges as "golden apples". Other languages, like German, Finnish, Hebrew, and Russian, have more complex etymologies for the word "orange" that can be traced back to the same idea. ” (訳として)「いくつもの言語にてオレンジは黄金の林檎として言及されている。例えば、ギリシャ語の χρυσομηλιά、そして、ラテン語の pomum は双方、字義通りの [黄金の林檎としてのオレンジ] を表しての言葉である。他の言語、ドイツ語、フィンランド語、ヘブライ語、ヘブライ語、ロシア語はオレンジとの言葉につき同様の観念に行き着きうるとのより複雑な語源を有している」と記載されているといったことがある)

(上にての言及事項を受けて書くが)

何故、[黄金の林檎]が[オレンジ]と同一視されていることを問題視するかと言えば、その絡みで
[[ヘラクレスの第11番目の功業にて登場してきた黄金の林檎]というものがひとつに[911の
予見作品ら](どうしてそうしたものが存在しているのかとのことも含めてその[偶然性][恣意性]
の選り分けが問題になるとの作品ら)と結びついている]

とのことがあるからである。

(:ここでくどくも再言するが、[黄金の林檎と911の予見の接続性]との特性の絡みでは映画『ファイト・クラブ』・映画『トレーディング・プレイシズ』・小説『ジ・イルミナタス・トリロジー』がそちら特性との絡みで取り立てて問題視してきたとの具体的作品らとなる(表記の作品ら以外にもたとえばギャング映画の金字塔とされる『ワンス・アポン・ア・タイム・イン・アメリカ』なぞの[ニューヨークの過去と未来を繋ぐワンカット描写]も同じくもの観点で問題になる(揺れる双子との英文表記などとの絡みで、である)のだが、そちらについては本稿では解説して「いない」)。他面、本稿にあつては先覚的言及とは関わらぬものの[911]と[黄金の林檎]が結びつけられている作品のこと「をも」取り上げもしており、の例としては(911の事件が起こった後、それも、本稿執筆現段階から見てここ最近にて封切られた映画作品としての) September Eleven 1683 一直訳すれば『1683年9月11日』—との2012年後半期公開の作品のこと、“On September 11th 1683, Islam was at the peak of of it's expansion in the West. Three hundred thousand islamic troops under the command of Kara Mustafa were besieging the city they called "The Golden Apple": Vienna.”「1683年9月11日、その折、イスラムは西洋に対する拡大基調にあつての絶頂期にあつた。カラ・ムスタファに指揮されての軍兵総勢30万が彼らが[黄金の林檎]と呼んでいた都市、ウィーンを包囲するに至っていた」との英文ナレーションが冒頭部より現出、オスマンのスルタンの代理たる軍司令官(パシヤ)に率いられての[9月11日]にての([第二次ウィーン包囲]渦中での)[黄金の林檎と描写されてのウィーン]を手中にすべくもの戦いありようが半ば Fiction として描かれているとのそうした作品のことなどをも問題視してきたとの従前経緯がある)

以上、きちんと内容を把握されているとの向きには食傷感をきたすだけかとの今更ながらものことを振り返りもしたうえで(何故、[黄金の林檎]が[オレンジ]と同一視されていることを問題視もしているのか、その背景となっているとのことを振り返りもしたうえで)書くところとして国内漫画作品『ジョジョの奇妙な冒険 スターダストクルセイダース』にあつての予見描写に関わる[オレンジ]が縁起由来、その点をもってして[黄金の林檎]へと変ずると(本稿で)述べている時点でうがちすぎ・こじつけではないのか、と[話の背後にあることを把握できて「いない」との向き]は思うことか、とはとらえるのだが、然にあらず、それ(こじつけ)にはあたらないところとして次のことらがある。

第一、『ジョジョの奇妙な冒険 スターダストクルセイダース』と同じくものかたちで、そう、
「全く同じくもの」フリーメーソン・シンボルと関わるところでツインタワー一帯の連続ビル崩落
を(爆破による崩落としてだが)ワールド・トレード・センターのビルらの崩壊と結びつける作品が存在しており、そちら映画『ファイト・クラブ』にあつての問題となる描写にも[黄金の林檎]との結びつきが歴史的凶像との絡みで観念されるようになってきているとのことがある(いいだろうか。問題なのは黄金の林檎に通ずる予見描写をなしている「他の」作品がありもし、それがオレンジとも関わる国内作品にあつての予見描写と「全く同種の」フリーメーソン・シンボリズムと接続するようになってきているとのことである(陰謀論でも何でもなく単純な記録的事実の問題として、である)。尚、映画『ファイト・クラブ』のビル「ら」爆破描写をしてそれが描かれているのがデラウェアのウィルミントンであるなどとの見立てを披露する向きらもいるようだが、当該の映画(『ファイト・クラブ』)の中では多重的にそれがニューヨークのワールド・トレード・センター界限そのものであることを「露骨に」ワン

カット描写しているシーンが複数含まれており 一流通 DVD を通じて秒単位で即時確認可能なる問題となる箇所を指定しての本稿にての補説 4 の部、の中の、**出典 (Source) 紹介の部 102 (4)** から **出典 (Source) 紹介の部 102 (5)** を参照のこと、またもってして映画版『ファイト・クラブ』の原作、小説版『ファイト・クラブ』およびそちら原作小説の作者チャック・パラニュークの挙動からして予見描写との観点で取り上げるに足る属性を幾点も帯びているとのことがある 一本稿にての **出典 (Source) 紹介の部 102 (8)** で取り上げているところとして映画原作たる小説版『ファイト・クラブ』のビル爆破の対象は 191 階のビルとされている。191 階とは現実世界におよそ存在しないような超高層建築だが、何故、そうした階数設定をされているのか、考えるべきような側面がある（一）。

（『ファイト・クラブ』予見性にまつわって(複層的に問題となるところがある中で)「一例として」問題となりもするところを取り上げもしての「再掲」図解部 以下、図示しての事柄が何故もってして【ここ本段にあつて問題視している国内漫画作品における予見描写】と同じくものを介して通じあっているのかについていまひとつ理解が及ばないとの向きにはもう一度、ここに至るまでの近々の流れを確認いただきたいところではある（一）



(DVD [Fight Club] time-record
(sold in Japan edition) :
[1:45:44] - [1:45:55])

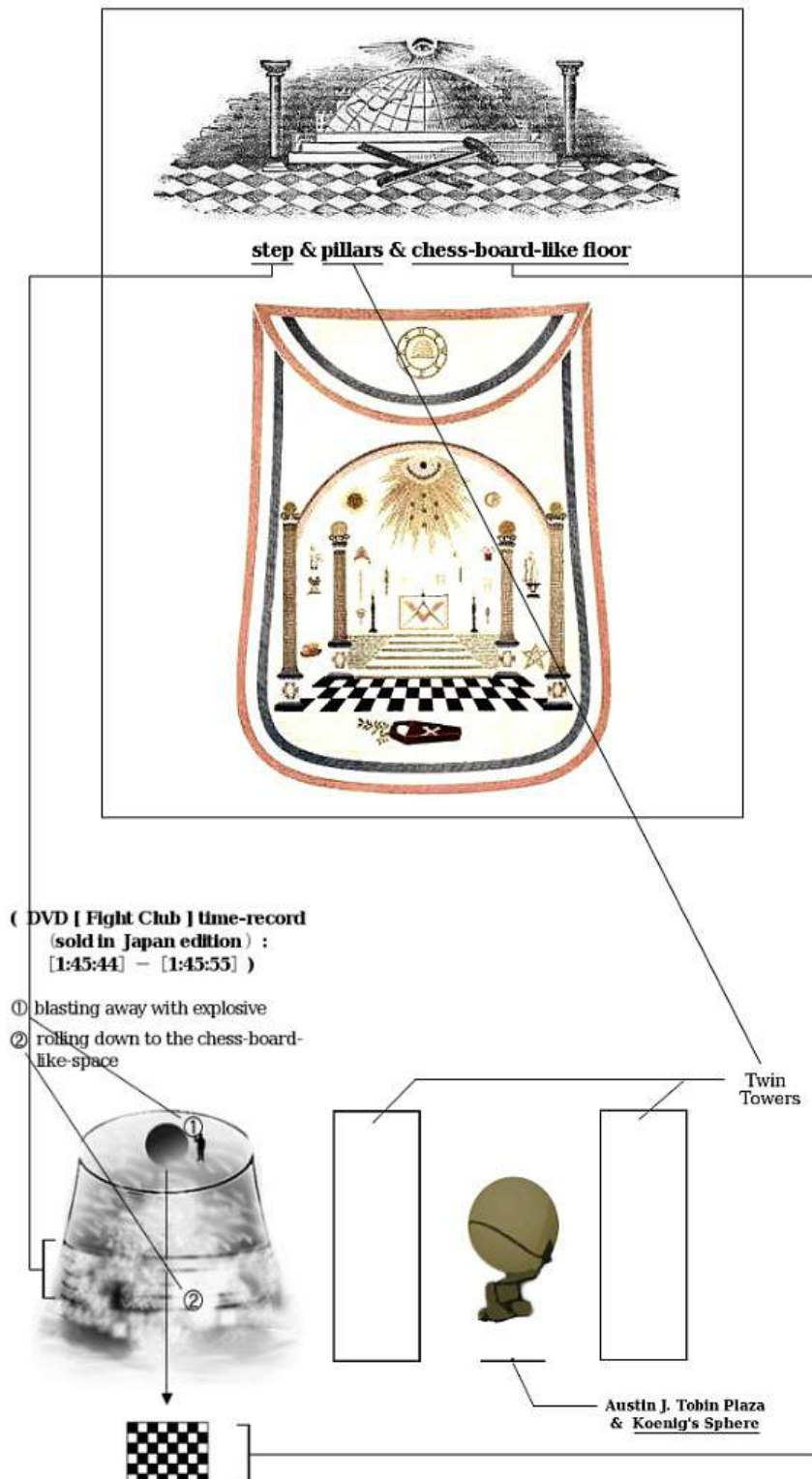
- ① blasting away with explosive
- ② rolling down to the chess-board-like-space



再掲図たる上画像らの左部はフリーメーソンにてのメンフィス儀礼 (Rite of Memphis-Misraim) の構築者とのことである Jacques Etienne Marconis de Negre との 19 世紀のメーソンがものした著作としてオンライン上に PDF 版 (1849 年刊行のフランス語書籍としての PDF 版) が現行流通している著作、Le Sanctuaire de Memphis にての 120 ページおよび 121 ページの間にて掲載されている図像よりの抜粋となる (フラ

ンス語著作にして、かつ古書であるとのことで筆者もその細かき内容までは解していないのだが、同著作にて同じくもの図が掲載されていることそれ自体はオンライン上よりメーソンの諸シンボルを分析していた折に筆者は捕捉しもしていた)。図にあつての[柱]の部についてはフランス語にて — 仏語を解さぬ向きでもある程度の識見があれば容易にそれが指す対象が何なのか想起もできようところとして— Colonne Jakin および Colonne Boaz との語句の付記からも分かるように【ヤキン(ジェイキン)・ボアズとしての柱】というメーソン象徴が描かれている。

上図像らの右側は映画『ファイト・クラブ』の特定部の流れを描き取つての図の再掲— ツインタワー敷設型のオブジェたるスフィアの露骨なるイミテーションが爆破されて、ボウリング・ボールのように転がり、チェス盤状の床の場に突入していくとの特定部の流れを描き取つての図の再掲— となる。



上掲図にあっての上の段の部、そこにて枠で括っているところは Project Gutenberg のサイトにて全文公開されている著作、ジョージ・ワシントンのフリーメーソンとしての書簡に対する分析をなしているとの 20 世紀初頭のメーソンの手になる著作、

Washington's Masonic Correspondence (1915 年刊行 / フリーメーソン (Julius Sachse という 20 世紀初頭にて執筆なしていたとのフィラデルフィアのメーソン) の手になる著作)

に掲載されている図像「ら」となり、それぞれ[図引用元著作にて掲載のメーソンの象徴主義体現図像(枠内上)]と[合衆国初代大統領ワシントンがフリーメーソン成員として用いていたエプロン(枠内下)]となる。

お分かりか、とは思うが、呈示の図像らにては

[ステップ] (完全なる別階層に移動するための階段ではない段差としての小規模階段) / [対をなす柱ら] / [チェス盤紋様の床]

があわせて描かれており、直上図解部にての下段の部にて再掲しての

[ツインタワー敷設のオブジェたるケーニツヒのザ・スフィアの配置場所] および [映画『ファイト・クラブ』にて登場を見ている WTC 敷設スフィアのイミテーションたるオブジェを介して導き出せる構図]

と顕著なる視覚的相似形が認められるようになっている (アウトサイダーである筆者でさえ気づくに至ったことなのであるから、ありし日のワールド・トレード・センターの地理的特徴を把握したフリーメーソンであるのならば、そうした問題、映画を視た際に即時気づけもしようと思えるところではある)。

国内漫画作品『ジョジョの奇妙な冒険 スターダストクルセイダース』にあっての予見描写に関わる [オレンジ] が縁起由来、その点をもってして [黄金の林檎] へと変ずると (本稿で) 述べている時点で「うがちすぎ・こじつけではないのか」とのこと、それにはあたらぬと述べるどころの理由の第二。1983 年に封切られた映画作品『トレーディング・スポット』(邦題『大逆転』) にあって「も」『ジョジョの奇妙な冒険』と同様、[オレンジ] が 911 の事件の予見的言及と結びつけられているとのことがあり (少なくとも [911 との数と相通ずるところがあるナンバーを刻字されたタクシー] (窓にワールド・トレード・センターが反射する描写もなされてのタクシー) で乗り入れた先たるワールド・トレード・センター内の先物市場で [時針にて「9」「11」を指す時計] が直後表示され、オレンジ市況が深くも関わる先物取引における死闘がはじまったとの描写をもってして「予見的ではない」と述べるのは相応の類だけだろう)、さらにまた、といった中で他にも [黄金の林檎] との副題を掲げつつ露骨な 911 の事件の発生にまつわる予見的言及をなしている他の作品 (本稿前半部で問題視してきた『ジ・イルミナタス・トリロジー』なぞの他作品) が存在しているとのことがある。そこからオレンジが歴史的なありようとして [黄金の林檎] と結びつけられてきたことをも顧慮するのは「理の当然」とあいなっている、であるからこそ、『ジョジョの奇妙な冒険 スターダストクルセイダース』の問題描写にまつわって [オレンジ] と [黄金の林檎] を結びつけてとらえるのはうがちすぎ・こじつけどころか、むしろ、自然な推論の流れに連なることだと申し述べもする。

長くもなった。これにて漫画作品 一大の大人をもって任ずるとの向きらには [高論卓説の如きものの対象にはおよそなりえない] [まじめに取り上げようとする事自体が下らぬことである] と見られもしうる漫画作品一 を介してさえ問題となる関係性 (黄金の林檎に通ずる関係性) の摘示がなせるようになっている . . . 、そのことにまつわっての話を終える。

さて、以上述べもしてきた上で繰り返しもするが、黄金の林檎については

[トロイア崩壊の元凶となっているもの]・[巨人アトラスが存在地把握をなしているもの]

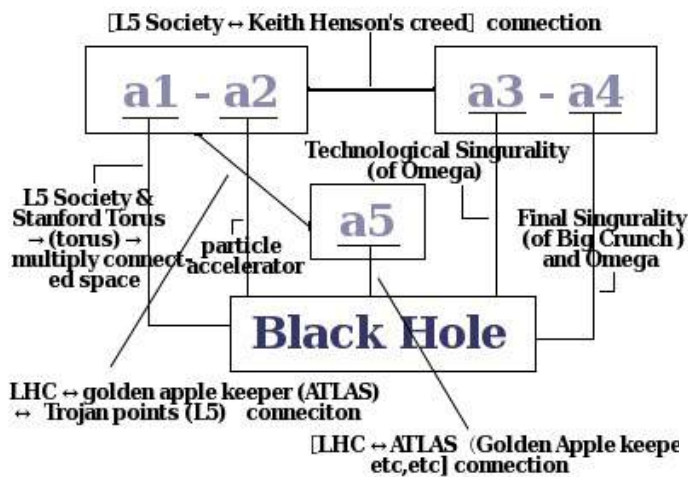
としての双方の特性をも帯び、またもってして同じくもの黄金の林檎は(つい先程にも申し述べたところのように)ブラックホール生成が取り沙汰されるようになった加速器実験とも複合的に通ずる(しかもその間に[911の先覚的言及事物]との異様な共通項を挟んでのかたち「でも」通ずるようになってい)とのものですらある(間欠的に長くもの時をかけたもして本稿を執筆してきた、前後の内容が時に茫洋とするぐらいのブランクが生じもしての中での執筆をなしてきたとの筆者自身からして「くどすぎた」とそのくどさに辟易するぐらいに同じくものことはしつこくも強調してきたことである)。

であるからこそ、

[国内予見漫画にあつての【911の事件の予見描写】の構図 —(「亜空間から覗く一つ目」らシンボルありようを通じて「L5点におけるスタンフォード・トーラスを巡る関係性」とも接合しているものでもあることをこの段では「重視」して問題視してきたところの構図) —]

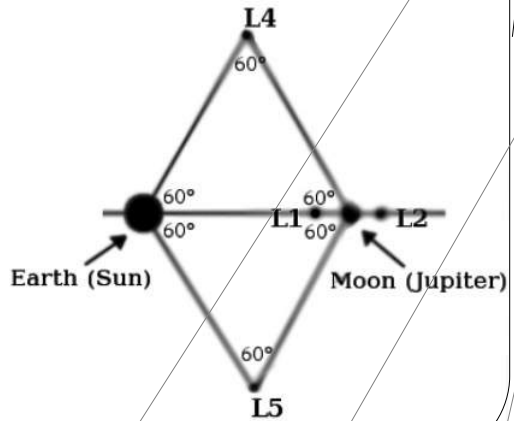
にあつての黄金の林檎と結びつく(と申し述べもすることが「こじつけ」にはならぬと直上、断り書きを付しもした)とのありようのことが尋常一様ならざるところとして問題になる、そのように述べるのである。

(最前まで指摘してきた事実関係についての関係図の再呈示として)



Is the existence of "Multiple Connectivity" as above
[only co-incident] or [deliberate] ?

純・記号論的に上のように表せられる「多重的」関係性が有するとのことが問題になるわけだが、本稿ではそうした「多的」関係性が山と存在していることについて [(確率的)然]で済むのか、あるいは、(作用機序はともかくも) [謎の賜物]でそうもなりもしているのか、とのことの分析をすらすらにできてきたとのことがある。



【亜空間から覗く目】
 【正三角形】
 はフリーメーソンの代表的象徴であるが、
 【異なる空間に通ずる梯子;ヤコブの梯子(はしご)】
 【亜空間から覗く目】
 にまつわるフリーメーソン象徴体系と完全にオーバーラップするようにできあがっているいくつかの大衆消費娯楽作品ら(中にはヒットを呈しての国内作品も含まれる)の特定描写には
 【911の予見的言及】
 および【黄金の林檎の象徴】との接合性がみとめられるようになってい

その【ブラックホールの特異点】との接合性について先述してきたフランク・ティプラーのオメガポイント思想、同オメガポイント思想の亜種ともいべき観点を先行して唱道してきた(キース・ヘンソン設立の)アメリカの団体L5協会の名称由来となっているL5点 —ラグランジュ・ポイント・ファイブ— は【正三角形(の頂点)】【異空間との接点(に親和性高い多重連結構造)】【加速器のエネルギー増大機序(をもちいたしたジェラルド・オニール)】と結びつく。そして、加速器のエネルギー増大の結果、産まれ落ちたLHCはブラックホールの生成を取り沙汰されるようになったばかりではなく【異空間との接点(たるワームホール)】の再現可能性についても取り沙汰されるようになったとのことがあり、そして、同LHCは【黄金の林檎】と(ブラックホール生成を検知するとされる検出器まわりの命名規則の問題などから)多重的に結びついている。

以上ここまで解説してきたことをもってして、

[日本国内漫画作品『ジョジョの奇妙な冒険 スターダストクルセイダース』にあつての直近にあつて問題視した予見描写 —(同じくもの予見描写については [特異点] (フランク・ティプラーのオメガポイントに通ずる特異点) や [天国への梯子] とそれがフリーメーソン・シンボリズムを介して結びつくのこともも上に解説している)—]

が [黄金の林檎] と関わりと述べられるところとなつており (というより接合するところの他の予見事物らありようからそも [述べざるをえぬ] ところとなつており) 、そのことが何故にもつて

[別称トロヤ点ともなるL5点(及びL5点に重きを置いてのL5協会の面々が突き詰めていった [特異点]とも結びつくドグマの先にあるところ)と [フリーメーソンの亜空間から覗く目のシンボル]との結節点]

との絡みでの [よりもつてしての問題性] に関わりもするのか、 —とおして内容をきちんと検討いただければ— 理解いただけることか、とは思う (:黄金の林檎(L5点別称たるトロヤ点に見るトロヤの破滅の因として伝わっている神話上の果実)にまつわる執拗な意志表示が一群の傀儡(くぐつ)、好意的に述べてもそうとしか述べられぬような者達を媒介(プロキシ)にしてなされていると判じきれるだけのことがそこにあり、それが「人間に(黄金の林檎による)トロイア崩壊と同じ運命・結果を与える」との強くも意思表示の発露となつていてと当然に解されるとのことが問題になる、そして、同じくものが【オメガポイント】や【時空の扉の開通】といったブラックホールやワームホールの人為生成に伴いうる絶大なる効用(ベネフィット)の問題と密接多重的に結びついているように見えるようになっていてとのことでさらにもつてして問題になるとのこと、理解いただけることか、とは思う)。

(これにてL5協会(のドグマに先にあるところ)にまつわつての「さらに突き詰めもつての」
説明 —1. から3. と分けもつての説明(うち、3. の部はさらに i. および ii. と細分化させもつてきた) — を終えることとする)

さて、延々と書き連ねてきたとの [ホワイトダニツト] にまつわつての一連の流れ、すなわち、

[オメガポイントの実現]

[こことは異なる空間との垣根の破壊(そして、それに次いでこの世界への侵出)]

[裸の特異点の機序を利用する仕組みの確立]

との各点にまつわつて何が述べられるのかとのことにまつわつての一連の流れ(何故もつてして相応の犯罪的行為ら —執拗な恣意性と嗜虐性を感じさせる、はきと観察できるようになっているところの異常なる現象らの束— が現出しているのかとのことにつき、「何故それをなしたと考えられるのか」との[動機に関する推理]を呈示してきたとの一連の流れ)にあつて本段までにて訴求すべきことは訴求しきつたか、概略を尽くしたかとも考えている。ゆえに[動機]にまつわつて考えられるところ、その説明に関してはここで一区切りをつけることとする。

[動機]に関する(具体的)分析の表記はここまでとする

お 筆を擱く前に訴求なしておきたきところとして

本稿も手仕舞いにする頃合いかとは考えているのだが、「最後にもう一押し。」とのこととして、である。つい最前の段までくださしくも解説してきたホワイダニットの問題 —「何故にもって」執拗な恣意の体現物としての予告がなされているのか、との問題— について整理のためのおおよそにしての振り返り表記を(これより)なしもし、のうで、よもって包括的なところ、従前、本稿全体を通じて指摘してきたことらにあつて殊に重要であると申し述べたき関係性について [まとめ] と位置付けての訴求をなすこととする。

さてもってして本稿ではつい最前の段までにあつて

[そこに現実にありもし、[恣意性]（[執拗なる意思]）を明らかに伴ったものである（との具体的判断材料についてひたすらに指し示すことに努めてきた）相互に連関しあう多重の関係性]

についてその背後にある [動機] について考えられるところのものうち、幾点かについて —そうであろうと判じられるところの論拠を挙げながらも— 解説してきた。

そちら [考えられるところの動機] について以下、振り返つての [整理] のための再表記を(委細には今回は踏み込まずに)なしておくこととする。

ホワイダニット、[何故、それをなしたのか] の問題にまつわつての(委細を先の段に譲つての)振り返り表記を以下、なす

人間を盆栽のように [歪に恣意的なるもの] として育てあげんとしてきたとの機序が作用しているのだとして、である(本稿ではそちら方向を指さしもする材料を多角的に呈示している)。その背後にある動機・目的が

α [オメガポイント(と呼ばれる状況)の実現] ([出典\(Source\)紹介の部 115](#) から [出典\(Source\)紹介の部 115\(5\)](#) および [出典\(Source\)紹介の部 116](#) を包摂する段にて解説)

β [こことは異なる空間との垣根の破壊(そして、それに次いでものこの世界への侵出)] ([出典\(Source\)紹介の部 117](#) から [出典\(Source\)紹介の部 117\(4\)](#) を包摂する段にて解説)

γ [裸の特異点の機序を利用する仕組みの確立] ([出典\(Source\)紹介の部 118](#) を包摂する段にて解説)

のいずれかないし複数であるのならば、それら効用は「絶大」であると判じられもするため、身内間の確認のためなのか、

[見立て殺人 —他の出来事らと意味的連関をもたせての殺人— としか表しようがないやりようを含む数々の執拗な意思表示の賜物としての(異様な)行為]

がはきとそうだと判じられるかたちでなされてきた(その証示に本稿では極めて多くの紙幅を割いてきた)とのことにもすんなりと納得がなせてしまうことになる。

その点もってして先立って海外で流通している物理学者フランク・ティプラーの著作よりの

細々とした引用をなしながらもその摘要紹介に努めもしてきたとのオメガポイントにての「万能機械」誕生にまつわる申しよう — (閉じた宇宙モデルにおける「最終的特異点」(ブラックホールのそれと類似するビッグクランチの特異点) 招来状況下の環境の無限の計算リソースを活かして実現可能となるとされる「万能機械」誕生にまつわる申しよう) — にあっては

α [神と見紛う、いや、神そのものであるとの究極機械(オメガ)の無限大のコンピューティング能力を活用することで時の呪縛を超越した「時の果て」にあって世界の再現および今までに生きた生命の無限再生を実現する]

とのことまでが可能であるなどと強弁されるが、そうしたことの理論的至当性や実現可能性の問題はともかくも、フランク・ティプラー著作 **The Physics of Immortality : Modern Cosmology, God and the Resurrection of the Dead**『不死の物理学:現代の宇宙観、神、そして死者の復活』(1994年初出で現時、未邦訳)に見るそうした申しようそれ自体に

[加速器によるブラックホール人為生成の問題に通ずる不可解な先覚的言及 — 現実世界でそうなることになった事柄らにまつわる先覚的言及— との接点]

が「現実」に垣間見れもし(出典(Source)紹介の部 116)に至るまでの解説部を参照されたい)、といったことがある中で、後、

[ブラックホールを「究極の」コンピューティングに活かせる]

との

[真っ当な筋(と解されるどころ)からの研究]

に基づいての意見呈示がなされている — (委細省いて振り返れば、物理学者フランク・ティプラーは「[閉じた宇宙]モデルにおける宇宙の終焉、ビッグクランチの折にあっての特異点をコンピューティングに用いると神と見紛う存在を生み出せる」と主唱しているわけであるが、対して、「ビッグクランチの宇宙終焉の特異点」に通ずるところがあるとされる「ブラックホールの特異点」をコンピューティングに活かせるとのティプラーとは「別方向からの」意見呈示がなされている) — というのは紛れもない事実である (先にてのレイ・カーツワイル著作 **The Singularity Is Near: When Humans Transcend Biology** (原著は2005年刊、日本語訳書2007年刊との著作、原題を訳せば『特異点の時は近い。人類が生体組織を超越するとき』とあいなるとの著作なのだが、(現)NHK出版より出されているとの訳書邦題は『ポストヒューマン誕生 コンピューターが人間の知性を越えるとき』となっているとの著作) からの引用部 — 出典(Source)紹介の部 115(5) — などを参照いただきたい)。

そうした中で「不愉快極まりないことに」物理学者フランク・ティプラー申しよう「それ自体」に、

[(聖書などに見る「予言の霊」の如き類が傀儡(くぐつ)を手繰ったかとも見える式での) それが存在していることだに異常異様な先覚性との接点]

がはきと見受けられるようになっている (から殊更にティプラーの言行録を問題視している) — 把握しておられぬとの向きにあらわれては紙幅にして然程遡るところではないとの本稿の出典(Source)紹介の部 115(2) から出典(Source)紹介の部 116 を包摂する解説部でよりもって先行する段の内容を振り返りながら何を指摘しているのか確認いただきたいものではある — とのことがありもし、そこから思料するに、

[世界そのものを再現する程度のコンピューティング能力の確保]

のため、そのために人間が[前提条件を整えるための構築種]として育てられてきた、それも

大いにありうることであり、映りもするようになっている——究極のリング(加速器)をこの世界に構築なさしめ、その運営に大義名分を与える(人間にその意味性を一切気取(けど)らせず、また、取り上げさせずもの非本質的事柄で世を埋め尽くしたうえで大義名分を与える)のには、(補っても話をこれよりの締めくくりの段にて述べるが)、文明(と呼ばれる[畜舎の水準]かもしれない)を今この時分のものにまで育てる必要があったと判じられるようになっていること「も」がある——。

また、優位文明(この場合、精神の、ではなく、技術にての際立っての優位文明)の極めて優れた機械、人工知能を媒質にしての介入を想定した場合、劣位文明に介入し、その劣位文明を自壊させないかたちでロング・スパンにて育て上げてきた動機——それにつわるところの何らかの理由で確認をなすための見立て殺人その他、メッセージングが行われてきたとも考えられるところの動機——は、

β [こことは異なる空間との垣根の破壊(そして、それに次いでものこの世界への侵入)をなす]

γ [裸の特異点の機序を利用する仕組みの確立をなす]

につわるところ「でも」十二分に想定されるとのものである(ことを最前の段まで解説してきた)。

そのうち、

γ [裸の特異点の機序を利用する仕組みの確立をなす]

とのことについては裸の特異点を(ビニール手袋とされた存在を介しなくても)構築して、それを活用すること(γ)ができるのならば、その周辺の過去にも未来にも思うように介入できるようになるのかもしれない、そうした万能性の問題については先立っての段で言われようから推し量れるところを解説したとおりである(出典(Source)紹介の部 118)。

そして、「本稿でそこに込められた多角的寓意性・メッセージングの問題を微に入って摘示してきた加速器たるLHCでも裸の特異点の類が生成されうるとの見立てがイタリアの名門大学ボローニャ大の物理学者の学術論稿に見てとれるようになっていたりもする(出典(Source)紹介の部 76(7))。

他面もってして、

β [こことは異なる空間との垣根の破壊(そして、それに次いでものこの世界への侵入)との行為、微少なるワームホール越しに極微機械を投入する]

とのこととの絡みではそのことがこの人間世界にての[科学予測]で微に入ってなされもしている(当たり前なのだが、であるから、本稿でもにつわっての思索を深くもなせている)。

すなわち、欧米圏科学者由来のものとしての、

[1 ナノメートルのワームホールを1秒構築しただけでそこを経緯に[10の69乗ビット](情報単位としてのその意味合い・程度については先述している)との情報を送れるとする未来技術予測](出典(Source)紹介の部 117(2))

といったことや

[[素粒子]大のワームホールに原子核サイズの文明再建の種子(とすればフェムト単位のものと解される)を投下するとの未来技術予測] (出典(Source)紹介の部 20)

といったことが「ここ最近」同じくものことにまつわっての科学予測 — 人類がそこに到達した場合の超先進文明としてのやりようの問題としての科学予測 — とのかたちで提唱されだしているとのことがある。

といったことが仮にもってして [養殖者] 由来のものとして実現を見るのだとすれば、である。第一段階として現行のこの世界の人間の脳 (すなわち我々人類の[魂](とでも表すべき存在の実質)の宿る場) をさながら[自律的微生物]のように振る舞う [極微機械](血中の糖や太陽光をエネルギー源にする自己再生産機械としてのナノマシン) に全部置き換える、あるいは、人間をナノマシン禍で滅ぼすとのやりようが現実的可能性として想起される(: どうしてそのような悪夢のようなシナリオが想定されるのか、それとて [現実的な技術予測と適合するところ] となっていることを [生体の機械化] [太陽光から離れての生体リソースを活用してのナノマシンの運用] との観点で事細かな引用をなしつつもこれまた先立っての段 (出典(Source)紹介の部 117(3)) で解説なした)。

の上で、第二段階に控えているところとして別の時空間から介入している(と想定される)ような存在が — 従前まではたとえ無意識的ないし意識しつつ操られていても自主性が強くもあり[マス(集団)としての自殺行為]まではなさなかったとの種族を諸共、[機械]に完全に置き換えたうえで — [今までおよそなしえなかった飛躍] を実現しようとするのが想定される。初期一世代だけで切り捨てられるとの [かつて人間だった存在](旧人類の[成れの果て]の「生体の」脳が欠損した存在) を完全なるラジコン、あるいは、極めて効率的な AI の走狗として動かし、あるいは、邪魔な人間をナノマシンで「完全に」滅ぼした後に構築した高度機械装置群を介しめて [オメガポイントがかかったものの実現の準備] や [この世界に自分達の種子(あるいはクローン)を播種すべくものプラントの建設の推進] といったことがなされることになり、によって、この世界(いくつかの多元宇宙を想定すれば [この宇宙] かも知れない) そのものの完全掌握あるいは神の如く発展を遂げる準備が急速度で進められるようになるのかもしれない。

たかだかもってしての「予測」の問題 — それも耳に苦しいこと限りなしとの悪夢的であり、かつ、誤解を誘発しやすいであろうとの遠大・気宇壮大に過ぎるとの「予測」の問題でもある — ばかりを云々しすぎたきらいがあるが、たかもってして、そうもした「予測」に通ずる[兆候]の問題として現実に LHC によって極小のワームホールが構築される可能性が「ここ最近」幾人もの研究機関研究者らに主張される(出典(Source)紹介の部 18 や 出典(Source)紹介の部 89 を参照されたい)とのありように至っており(それについては ADD モデルにおける重力の働き具合に対する目分量の変化からここ 10 数年で LHC 程度のものでワームホールが構築される可能性があると思われるようになったことによると解説されているところでもある — 出典(Source)紹介の部 21-2 およびそれに付随させての解説部を参照されたい —)、そうしたワームホール生成可能性にまつわる論文ら登場をもたらした理論動向の変遷の「前」から LHC というものに関しては「どういうわけなのか」【トロイアの木製の馬】(それを神に祝福されたモニュメントであると受け入れた者達の住処たる城塞を内側から皆殺しの状況にいだなったと伝わっているトラップ)に通ずる寓意が — 警鐘乱打・警告との観点とはなんら見えずにも「愚弄」がかかったやりようと受け取れるような式にて — 多角的に込められていると(本当に神話伝承に詳しい向きには)分かるようになってきているとのこともが「ある」(LHC でワームホールが生成されうると世間的に真っ当な筋より問題視されているのも【事実】ならば、同 LHC がワームホールやブラックホール生成の可能性が取り沙汰される「前」(1992 年に遡る計画策定段階)から執拗にトロイアとの結節点を有した命名規則が採用されてきたのも【事

実】である。容易に後追い確認なるそうもした【事実】らが無視するのは願望と現実の別もつけられぬような類の狂人(並みに頭の具合ができあがっている向き)か、あるいは、(いまは表向きには万民がそれに相当するとのことになっているとの[国家・社稷の主権者]の問題に置き換えれば)殺され滅せられて当然だろうとの暗君のやりようとのことになる(:それが重力波などを機序として用いている機械に脳を、たとえばもってしてのリンビック・システム、辺縁系をメスを使わぬ式で間接的に弄(いじ)くられた者達にはめられた枷(かせ)に通ずる問題だとしても観察事象からはそういう判断がなされるどころとなる)。そうも舌鋒鋭くも述べつつ書けば、問題は不愉快極まりない【事実】らが果たして本当に危機的な状況を指し示すものたりえるかということであり、(本当にそうした向きらがそうそうにこの世界にいれば、だが)本稿筆者は語るに値する向きにその見極めをきちんとなしていただきたいと考えている)。

繰り返しもすれば、

α [オメガポイント(と呼ばれる状況)の実現] (出典(Source)紹介の部 115 から出典(Source)紹介の部 115(5) および出典(Source)紹介の部 116 を包摂する段にて解説)

β [こことは異なる空間との垣根の破壊(そして、それに次いでもこの世界への侵出)] (出典(Source)紹介の部 117 から出典(Source)紹介の部 117(4) を包摂する段にて解説)

γ [裸の特異点の機序を利用する仕組みの確立] (出典(Source)紹介の部 118 を包摂する段にて解説)

が背面にあるのであるのだとすれば、執拗な意思確認がなされるだけのことも然もありなんと解されるわけではあるが、そのことが馬鹿げた印象論で済まされない — それ単体でなせば馬鹿げた印象論であること必定であると見做されるようなところが馬鹿げた印象論で済まされない — とのこととして、

[それら存在がゆえに、そも、ホワイダニット (何故それをなしたのか) が問題になるところの人類に対する犯罪 (的意思表示)、具体的証跡を伴って具現化していることを指し示せるようになっていその意思表示行為らが [奇怪な予見的言及を含んだ重力の特異点にまつわる文物ら] などと濃厚に結びつくようになっていとのことがあり] (奇態なることに露骨なる式で [911 のかの事件がかの態様で起こることを事前言及している] といったかたちの文物があり、同じくものものが [「タイムマシン」 として機能する通過可能なワームホールを扱っている] とのブラックホール関連の著作のタイムマシン実験の一部分となっているといったことがこの世界には現実にある)

[ブラックホールの重力の特異点というものが上記の三つの α [オメガポイントの実現] β [こことは異なる空間との垣根の破壊(そして、それに次いでもこの世界への侵出)] γ [裸の特異点の機序を利用する仕組みの確立] の全てに [そのための実現手段] として関わっているものであるとのことがあり] (そうもしたことを指摘していく過程で本稿では物理学者フランク・ティプラーのオメガポイント理論の説明著作がいかようにして [911 の事前言及] [トロイア関連の寓意] と接合しているのか、といったことの解説をもなしてきた)

[のみならず、以上のような背面の真なる意図に関わりうることら、 α [オメガポイントの実現] β [こことは異なる空間との垣根の破壊(そして、それに次いでもこの世

界への侵出)] γ [裸の特異点の機序を利用する仕組みの確立] にまつわっての事物ら「それ自体」が相互に通じ合うようになっているとのこともありもし、そして、そのことが人類に対する犯罪(的意思表示)と結びつくようになっているとのことすらある] (これもまたつい最前の段までにてそのことの指し示しに注力してきたことである)

とのことが現実に摘示できるようになっているから問題なのである。

ホワイダニットの問題にまつわっての(委細を先の段に譲っての)振り返り表記
はここまでとする

以上、直上までにて(はきと証示できるとの)[犯行]がなされている中での[推理]についての振り返り表記をなしてきたとして、である。付け加えての断り書きとして下のこと、申し述べておく。

何度も何度も強調してきたところとして

[本稿の真価](たるところとして本稿筆者が手ずから訴求したいところ)

はここまでなしてきたところのホワイダニットにまつわる推理 —たかだかもってしての「推理」— なぜ「にはない」。

ホワイダニットの問題が首をもたげもしてくるとのその背景にある、

[(本来的には誰であれ)向き合わざるをえないところとしての嗜虐的犯罪行為が執拗になされているとのことにまつわる「具体的」かつ「客観的」なる指し示し]

の部にこそ、そう、属人的主観など問題になりようはずもない(どの部を証示の材とするか、との話柄選択以外の意味で属人的主観など問題になりようはずもない)との、

[(第三者が容易に裏取り出来るようになっていもする「堅い」論拠らを挙げ連ねもしての)分厚いハードカバー本複数冊分での文量にての(スペキュレーション、たかだかもってしての推理など「ではない」ところの)指し示し]

の部にこそ本稿の真価があると強調したい(※)。

(※本稿筆者は 一類型化しての— 自身「のような」人間以外、その指し示しの挙をこの世界では誰もなそうとしない(またもってして指し示しをなそうとも人間存在一般にはそちら指し示し内容に対する [需要]も [受容]も生じえない) とのことに半ば絶望的心境を抱いているとのことを(本稿それ自体の中で)何度も何度も心中吐露せざるをえないとのポイントにまで至ってしまっているのだが、遺憾ながら「経験主義者として」そうも述べざるをえぬところの観測点に至るまでに諸種の活動に最大限力を入れてきたとの人間ともなり、のような中であって、

【常識的な面しか前面に出さないとの外的訴求活動】(普通人ならば恐れ戦(おのの)いて直視せずに逃げ惑うかもしれぬところに一切触れずにしての[欺瞞だらけの世界にての穴だらけの常識]に厭々なが

ら敢えても遠慮をなしての常識的訴求活動)

として

【LHC リスク問題にまつわるどころ】

で行政訴訟を提訴、長期化することとなりもした同訴訟にて、

【法的枠組みに照らしあわせても公金投下されての研究機関関係者らは公民に対する法的背信行為(説明責任を回避するための法的欺瞞をなしたとのかたちで撒き餌(ベイト)ではないが、こちらよりの挙で炙りだしての法的背信行為)の問責】

をなすとのことまでなしてきた者でもある(問責自体が【目的】ではなく他を「試」し他に「諮」るための【手段】であったところとしてそういうことをもなしていた。[聞き飽いた]との心証を読み手に抱かれるぐらいがむしろ望ましいと考えるところとして申し述べるところとして、である)。

そうした常識世界での**法的問責行為**(自身、辟易するような欺瞞で満ちているものであるとよく認識している、本当は屁とも思っていない[世間的常識]というものに配慮しながら【世間一通りの人間に機会を与えた際にどういう反応をなすのか】を探るべくもなした法的問責)では

「公金供与母体たる公民に対する法的背信行為にやぶさかではない、平然と情報隠蔽を違法になすような者達が彼ら実験機関の面々である。そのような彼らに重大なリスク胚胎が問題視されている【実験】(手前自身、【実験】などとは[白々しい阿呆のための題目]としての語法とはとらえているのだが、とにかくもってしての【実験】なるもの)を執り行なわせることを看過していいのか」

なぞとのことに通ずる式で実際に現実がそうしたありようを示していた法的問題について仰々しくも芝居がかかった問題視をなさんとしていたそう、「肩書きは立派でも間接正犯の手足が如きもの、実質は取るに足りぬ者達 一糸繰り人形に過ぎぬとの魂を既に売り払いきっているファウスト博士達およびその思考しない下位者ら— が相手方であり、それら程度のものを相手に(時間もおしてきていると判じられる中で)常識好きのする者達でも耳を傾けましょう(正常という意味で[普通]ならば傾けましょう)との訴求を白々しいと内心、厭々ながらもなしもし、権威の首府の付属機関としての国際的加速器研究機関(ノーベル賞受賞者の肝煎りで設立された戦略的研究機関)の雇った弁護士らと法廷で延々とやり合うとのことをなしていた(そして、それに付随する挙から[学習性無力感]ではないが、失望を深め続けてきた)との按配の人間が筆者となる。

そうした[問題となる事柄に対する絶えずもってしての力の入れよう]につき、何卒、お含みいただきたいものである——そう、そこからして、ぽっと出の素人論客(気取り)が適当な印象論を無責任に展開しているとのレベルでは済まれされるものではないこと、お含みいただきたいものではある(大概の人間は本稿それ自体の内容を少しでも検討すれば、筆者が一体全体どのくらいの知的程度の間でどの程度の

追求をなしている人間かご理解いただけるかとは思うのだが、一応、申し述べるところとして、である。ちなみに、筆者が原告席に立ち、権威の首府（[日本社会にあつての官僚輩出マシン]を母体としての大学付設研究機関）を向かいに回して執り行ってきたとの訴訟を巡る経緯については本稿にての**出典(Source)紹介の部 17**から**出典(Source)紹介の部 17-4**を包摂する段にて（[比較検討すべくものものとしての海外訴訟にての主張なされよう]などを原文引用しながら）若干ながらも解説をなしている）――。

尚、そうした訴訟、国内初かつ（本稿執筆時現行現段階にては）国内唯一のLHCリスク問題関連訴訟であるわけだが、それが、（即刻にての棄却とのかたちで門前払いを食うような「馬鹿な」（としか表しようがない）人間由来の狂態としてではなく）、一審では延々と続き、かつ、法廷にて[二転三転する滑稽なる言い訳]が被告サイドより講じられるところまでの追求がなされえた（いくら筆者やりようが世間人並みの水準とはかなりもの偏差をきたすところがあったとしても、そういう追求が実際になされえた）うえでもその挙がまるで「どこぞやの小せがれがつまらぬ窃盗でもやらかしたか」といった程度のバリューのものとして往時、2012年に遡るところとして何故もってして「徹底無視」され続けてきたのか（今風に言えば「見事にスルーされ続けてきた」のか）、（あまり期せずものところとしてそうした向きが仮にあれば、だが）**【[心]と[自由意思]の双方を残した向き】**にはその意味性について考えていただきたいものではある（:そうした訴訟を彼らこそが取り上げて然るべき立ち位置にいるのだらうと常識の世界では「勘違い」されている者達、だが、そうしたことを[一切無視]すること（存在しないとすること）が実体としての[役割]であると判じられる、（羊の飼い主にとって）忠実な実にもって良い子ちゃんとしてのメディア産業の者達はどいういった者達か。についてはテレビを点けてみてディスプレイに映じられる「虚構の」世界の出来事には多く[心]も[誠実さ]も伴っていないことの意味を考えていただきたいものである（筆者は人間存在のそうした現状を「確認」するうえで「のみ」テレビなどというものは視るに値するとらえている）。また、新聞（日本で表向きの情動的価値の面で大人が見るに値する主要紙は日本経済新聞ぐらいであろうも、とにかくもの新聞）を開いて見れば分かるだらうが、そこでは[建て前に対する建て前の批評・寸評]ぐらいしか具現化しておらず、[この世界]が実体としてどういものなのかの本質的分析などはそこ（新聞紙上）には見受けられないとのその[意味性]もあわせて考えていただきたいものである）

本稿の性質を強調するための直近の断り書きの部からして冗漫さが目立つものとなってしまったきらいがあるが、延々と重要な事柄を訴求するためにもものしてきた本稿もそろそろ書き納めにした方が良いでしょうと判ずるに至ってもいる。

といった中で、いや、といった中であるからこそ、次のことを申し述べたい。

[巨大加速器 LHC (およびその後裔として企図されている節がある VLHC) はあまりもってして主流メディアに取り上げられないものであるが、【現況現時点での文明水準でしか達成できもしなかったであろう人類文明 (文明、そう見えるだけの紛い物として構築されたものでもあったとしてもとにかくもの人類の「文明」) の精華】を結集させての【人類史上最大の装置】となっているとのものである]

表記のことについて、それでは以下、引用でもってしての訴求をなすこととする。

(直下、幅広くもの流通書籍 MASSIVE: The Hunt for the God Particle (邦題) 『ヒッグス粒子の発見 理論的予測と探求の全記録』(講談社ブルーバックス) 第七章 [加速器が放った閃光] にあつての [LEP 始動——月の満ち欠けにも影響を受けて] の節、250 ページから 252 ページより LHC がその全長 27 キロメートルのトンネルをそのままに流用して構築されているところの旧・加速器 LEP にまつわたつての記述を掻い摘まんで引用なすとして)

LEP の建設はそれ自体、他に類を見ない業績である。装置全体の大きさだけでも、骨の折れる技術上の挑戦の連続だった。しかし、建設作業はあくまで始まりにすぎなかった。LEP の運用に関する話となると、リン・エバンスはソファから身を乗り出して、さらに生き生きし始めた。さまざまな意味で、LEP は現実のものとは思えないほどで
きすぎているのだ。

新しい粒子衝突加速器・LEP を使った最初の研究として、CERN は Z 粒子の質量をより精密に計測することにした。

…(中略)…

1991 年、奇妙な出来事が発生した。観測結果の中に、変わったパターンが含まれていることが明らかになったのだ。粒子ビームがだんだん強くなっていったあと、今度はだんだん弱くなるという不可解な規則性が見出されたのである。

…(中略)…

その実験——そして、その結果判明したこと——は、CERN の伝説となった。ホフマンが記録したデータの中に、この問題を指摘したフィッシャーが疑った犯人、すなわち、私たちに最も近い天体である月の存在があつたのである。

私たちはみな、太陽と月の重力によって潮の干満が生じることを学校で習う。月は、太陽に比べればわずかな質量しかもたないが、地球の非常に近くにあるため、太陽よりも潮の干満に与える影響が大きいのだ。

あまり知られていないことだが、月と太陽は、地球の地殻にも潮汐を生じさせている(地球潮汐。固体部分も海面と同様に潮汐力を受け、多少の上下変動や傾斜などが日々、起きている)。

ホフマンの実験は、太陽と月が一直線に並ぶとき、その影響で地面が隆起すること、そして、その現象が CERN が位置する地表におよそ 25 センチメートルの上下動を生み出していることを明らかにした。

LEP の足下で、地面が(文字通り)変化していたのである。地球潮汐によって地面が隆起したとき、LEP のリングは 1 ミリメートル伸ばされていた。その装置に携わる誰にも感知できないようなわずかな変化が、加速器の中を飛ぶ粒子の 1 周あたりのスピードを変化させていたのだ。その影響はごく小さなものだが、粒子がもつエネルギー量を変化させるには十分だったのだ。「LEP はそれほど精巧にできていたんです」とエバンスはいう。

「あんなに巨大な装置なのに、あれほどの精度が得られるなんて、ただただ驚きでしたよ」

(引用部はここまでとする)

上にてつい最近、世に出た書籍 — 加速器実験および加速器実験機関礼讃本(提灯)としての側面が強い書籍、**MASSIVE: The Hunt for the God Particle**『ヒッグス粒子の発見 理論的予測と探求の全記録』— にて記載されているのは

「全長 27 キロメートルに達する超巨大なリング加速器 LEP (そのトンネルがそのまま LHC に流用されているとの加速器) が運転開始を見、運用されている最中に」
「ビーム衝突実験結果に不可解なデータが見出されたので精査してみたらば」
「月の潮汐力が大地に働いての地球潮汐力の作用で(全長 27 キロメートルの装置に) 1 ミリメートルの誤差が生じ」
「27 キロメートルに対する 1 ミリメートルの誤差が粒子の軌道を変えて予測外の観測結果が出てきた」
とのことが記され、に対して、
「極めて巨大な装置であるのにたったその程度の誤差で実験結果が出てくるとは驚異的精度である」
と却(かえ)って CERN の担当者(後に LHC 建設計画の責任者になったリン・エヴァンスとの人物)に称賛されていた

とのことである。

にまつわって — くだくもなりながら — ここで強調したいのは

「超長大、全長 27km のリング構造を呈し(英文 Wikipedia [LEP] 項目にて “LEP was a circular collider with a circumference of 27 kilometres built in a tunnel roughly 100 m (300 ft) underground and passing through Switzerland and France.” と記載されているとおりで)、LHC 加速器の前身となっている(同じく Wikipedia にて “Around 2001 it was dismantled to make way for the LHC, which re-used the LEP tunnel.” と記載されているところである)とのその装置が
「僅か 1mm の地殻変動による装置の地盤変化」でもその誤差を正確に抽出する品質を有している」
とのものになっていることは
「これぞまさしく人類文明の精華が具現化しての特質」
であろう

ということである。

さらに引用を続ける。続いては 世間にて [一流の物理学者] と評されている女流科学者リサ・ランドールがいかように LHC を [べた褒め] しているのか、それでもって LHC がいかように高度な水準に達してのものとされているのか、判断いただきたいもの引用をなす。

(直下、著名な物理学者リサ・ランドールの手になる著書 **KNOCKING ON HEAVEN'S DOOR** の邦訳版『宇宙の扉をノックする』(原著の刊行年は 2011 年 / NHK 出版よりの邦訳版刊行はここ最近のことで 2013 年) にての第 8 章 [すべてを統べるひとつの環] 190 ページから 191 ページの記載内容よりの引用をなすとして)

私は大げさな表現を好むたちではない。素晴らしい出来事や業績というのは、普通、それ自体が雄弁にその偉大さを語っていると思うからだ。しかしアメリカでは、きらびやかな言葉を使うことに抵抗を感じていると、えてして面倒な状況に陥る。誰もが最上級の表現を当たり前のように用いる国だから、「最」をつけない簡素な賛辞は、うっかりすると悪口のように受け取られてしまう恐れさえあるのだ。だから私などは、発言にもっとそれらしい言葉を加えて余計な誤解を招かないようにしたらどうかと、たびたびご親切に忠告される。しかし、そんな私でも、LHC については問題無用のた

いへんな偉業であると断言したい。LHC は、恐れを抱かせるほどの美と威容を誇る。そのテクノロジーはまさに圧倒的だ。

…(中略)…

科学者という立場からすれば、この信じがたいほど精密なテクノロジーの奇跡を芸術作品のように——たとえ立派な作品だとしても——捉えることにはためらいがあるのだが、それでも私はこれを見たときに、カメラを取り出して写真を撮りまくらずにいらなくなっていた。その複雑でありながら調和のとれた、とてつもない規模の全体像といい、縦横に交差した線と色彩といい、とても言葉では伝えきれない。それはもう荘嚴のひとつである。

(まずもっての引用部はここまでとする)

(さらに続いて直下、同じくものリサ・ランドール著作『宇宙の扉をノックする』(原著の刊行年は2011年/NHK出版よりの邦訳版刊行はここ最近のことで2013年)にての第8章[すべてを統べるひとつの環]196ページよりの引用をなすとして)

そして約二五年後、もともと LEP のために掘られたトンネルを、いまでは陽子ビームが駆け巡っているというわけだ(図 24 を参照)。大型ハドロン衝突型加速器(LHC)は当初の予定より二年ほど完成が遅れ、二〇パーセントほど予算を超過している。残念だが、それもいたしかたないところだろう。なにしろ LHC は、その規模、国際性、費用、エネルギー、実験の革新性と、どれをとってもすべてが史上最大級なのである。映画監督で脚本家のジェームズ・L・ブルックスは、LHC の稼働直後の不調と復調のニュースに対し、ユーモアを込めてこう言った。「壁紙の貼り直しと同じくらいの時間をかける人だっているよ。宇宙の解明のほうが多少スリリングかもしれないけどね。ともあれ、そこに素晴らしい壁紙が貼られることは間違いないよ」

(次いでもってしての引用部はここまでとする)

まさしくもの[べた褒め]ではあるが、カリスマ物理学者としての顔を持ったリサ・ランドール —本稿典(Source)紹介の部 76(6)にて解説しているように加速器によるブラックホール人為生成にまつわる理論に関わるところでの RS model の提唱者として知られるハーバード卒の女流物理学者— は LHC がいかように技術の粋を集めた一品なのか、そのパフォーマンスについて「も」かなり細々とした解説をなしている。すなわちもってして、

[この宇宙の外部領域のどこよりも低い温度を実現すると空間を見事に現出しているのが LHC であること] (KNOCKING ON HEAVEN'S DOOR にあつての CHAPTER EIGHT ONE RING TO RULE THEM ALL の表記によると、“ It is not merely cold: the 1.9 kelvin (1.9 degrees Celsius above absolute zero) temperature necessary for the LHC’s superconducting magnets to operate is the coldest extended region that we know of in the universe - even colder than outer space. ”)

[地球磁場の 10 万倍の状況を実現する工業生産された中で「史上最強の」超伝導双極磁石に見る絶妙さあつてこそその LHC であること] (KNOCKING ON HEAVEN'S DOOR にあつての CHAPTER EIGHT ONE RING TO RULE THEM ALL の表記によると、“ The magnetic field is not merely big: the superconducting dipole magnets generating a magnetic field more than 100,000 times stronger than the Earth’s are the strongest magnets in industrial production ever made. ”)

[陽子ビーム衝突のための陽子を入れる管に大気の 10 兆分の 1 の真空状態が具現化されていることに見る絶妙さあつてこそその LHC であること] (KNOCKING ON HEAVEN'S DOOR にあつての CHAPTER EIGHT ONE RING TO RULE THEM ALL の表記によると、“ The vacuum inside the proton-containing tubes, a 10 trillionth of an atmosphere, is the most complete vacuum over the largest region ever produced. The energy of the

collisions are the highest ever generated on Earth, allowing us to study the interactions that occurred in the early universe the furthest back in time.”)

といった側面で LHC がいかようにもってして「テクノロジーの極北にあるのか」 — Lisa Randall 女史曰くのところとして incredibly precise technological miracle「信じがたい技術上の奇跡」との式でのテクノロジーの極北にあるのか — とのことを同じくもの書『宇宙の扉をノックする』で解説している。

(また、ランドールは同書の別の章にて [「実験」の大義名分を支えるためのコンピューティング技術] について「も」多少筆を割いており、そこよりの引用をなせば、次のような記述がみとめられもする。(以下、訳書『宇宙の扉をノックする』にての 335 ページよりの引用をなすとし) “LHC を語るのに、その甚大な計算能力を抜きにしては終われない。いままで見てきた飛跡検出器やカロリメーターやミュオンシステムや磁石に投入されているハードウェアに加え、世界中を巻き込んで組織的に行われているコンピューター計算が、無数の粒子衝突を生み出す圧倒的な量のデータに対処するのに欠かせないものとなっている。LHC はテバトロン——かつての最高エネルギーの衝突加速器——より七倍もエネルギーが高いだけでなく、五〇倍も速いペースで事象を生み出している。したがって LHC は、それぞれが本質的にきわめて分解能の高い画像に対応するような事象を一秒につき最大およそ一〇億回も処理しなくてはならないわけだ。その各事象の「画像」には、およそ一メガバイトもの情報が含まれている”(引用部はここまでとする)。それがなければ、実験とされる営為が極めて不自然なるものへと成り下がろうとの大義、そう、[ヒッグス粒子から新種の物理事象の「観察」をなす]との大義 — 魂というものが欠如を見た紛い物の人間らに納得を強いるためだけのものかもしれないが、とにかくもの大義 — を加速器使用挙動に与えるためのものとなっている節がある[コンピューティング技術]とて今日、この水準に達していなければならなかったと解されもするとの書きようが直近引用なしたところでなされている)

上もて大体にしてご想像いただけたか、と思う。

「人間の歴年の進化が現況現在の科学技術水準に「ようやく」達していなければ、LHC のようなものの構築はなされえなかった」

とのが現実にあることを、である (: その点、筆者は本稿にてのつい先ぞの段で高校生でも理解できるかたちに単純化させてのベイズ確率論(にてのベイズ推定)の極々基本的なモデリングを呈示した——この国の高校の数学の教科書が「何故なのか」ロボットでなければ「本質的」理解に窮するようなかたちで数式を[原理説明なくして最初に天ありき的に提示するもの]と往々にしてなっている中で、そうした弊を踏襲せぬようにと極めて懇切丁寧に数式の意味を解説しながら高校生程度の数学知識でもってしても理解できるようなかたちで呈示した—— わけだが、たかだかものそうした単純な確率論にあつての計算式の解答を(小数点 20 桁以下四捨五入ぐらいの精度で)導出するための計算とてはきと述べ、コンピューティングの能力 ——コンピューターとは冷戦期の弾道ミサイル軌道計算の正確さを期すとの(見映え上の)死活問題の中で発展を遂げてきたものでもある—— が現代の水準にまで達した(正確にはここ半世紀でそれに見合うものに達した)からこそ瞬時に実行できるものとあいなっている(疑わしきは出典(Source)紹介の部 114 にて引いた著作内表記などを参照されながら本稿にあつての単純計算の性質がいかようなものとなっているのか、先の段を参照されたい)。かくのように単純な数式でもそれが膨大な計算の手間を要するとの場合が往々にしてあり、のような中で[この時代]になったからこそ実現できるようになったとのことはそれこそ数多あり、そうもした中でこそ実現しえたとの最も巨大な科学実験にして装置(技術の結集体)が LHC になっているとのことがある、極々単純化させれば、そういう言いようもなせようかと考えている)。

長くもなつての付記として

上にてはリサ・ランドールの著述 **KNOCKING ON HEAVEN'S DOOR** にあつての書か

れようを引用し、そちら記述をもってして、

[LHC とはまさしく現時点まで人間の文明が進歩しなければ実現しなかったものであると解される]

とのことを説明(かつ訴求)に供したわけであるが、そうした訴求事項から離れて、引用元とした著作(**KNOCKING ON HEAVEN'S DOOR**)それ自体に見るある種、人を食ったような側面について、それが

[実験の推進者らによる「人間存在そのものに対する背信の問題」に通ずるようになって]

とのことをここ付記の部 一本稿も書き納めが近いとのことがある中ながらも重要であるとの観点で付しもしての付記の部 で指摘しておく。

その点、まずもって申し述べるが、くだんの引用元著作、リサ・ランドールの手になる **KNOCKING ON HEAVEN'S DOOR** ではその第 8 章(**CHAPTER EIGHT**)にあつて

ONE RING TO RULE THEM ALL

との表題を掲げもし、もってして、

[LHC をして「全てを統べる指輪 ONE RING TO RULE THEM ALL」などと形容している]

とのことが見受けられる。

そこにあつての、

[全てを統べる指輪](**ONE RING TO RULE THEM ALL)**

とは元来、近年三部作で映画化されて多くの視聴者を得た —(日本でも数人に一人との按配で視聴者がいるのではないかと見えもするぐらいの按配で多数の視聴者を得た)— 著名作品『ロード・オブ・ザ・リング』、J.R.R.トールキンの手になる **The Lord of the Rings**『指輪物語』にあつての

[冥王サウロン —映画での描写をご存知の方も多かろう、[肉滅しての中空に浮かぶ一つ目]となっているとの劇中における悪の根源— が鍛造した一つの指輪：One Ring —それを身に帯びた者を誰からも攻撃されぬ透明存在にするなどの圧倒的な力を有しているが、と同時に、精神への侵蝕作用も呈し、終局的にはそれを纏う者に破滅にいやなもする指輪(にして「肉滅した」サウロンがその再取得をもってして現世での支配の確立を図っているとの設定の指輪)— に刻まれた銘文そのもの(綴り全て同じであるワン・リング・トゥー・ルール・ゼム・オール[全てを統べる指輪]との銘文)]

に拠っていると判じられるものである(:そこからして疑わしいとの方もいるかもしれないが、照覧あれ、にまつわたつての目立つところの説明のなされようも続いての段で引用なすことにする)。

以上述べたうえで申し述べるが、著名フィクション『指輪物語』にあつてのサウロンの **[一つの指輪](**One Ring**)** にあつて刻まれた

[全てを統べる指輪](**One ring to rule them all)**

とのフレーズは同じくもの指輪に刻まれた銘文より「一部のみを」切り取ったものに留まりもし、の背後背面には、

One ring to rule them all, one ring to find them, One ring to bring them all and in

the darkness bind them.「**全てを統べる指輪、全てを発見すべくもの指輪、全てをいざない闇の中に繋ぎ止めるべくもの指輪**」

との「全」銘文が存在している —— ※英文 Wikipedia[One Ring]項目にあつて(以下、引用なすとして) “ The One Ring is a fictional artefact that appears as the central plot element in J. R. R. Tolkien's The Lord of The Rings (1954--55). [. . .] The One Ring was forged by the Dark Lord Sauron during the Second Age to gain dominion over the free peoples of Middle-earth. [. . .] **Gandalf speaks the words in Black Speech in Book II, Chapter 2, "The Council of Elrond": / Ash nazg durbatulûk, ash nazg gimbatul,/ Ash nazg thrakatulûk agh burzum-ishi krimpatul./ Translated, the words mean: / One ring to rule them all, one ring to find them, / One ring to bring them all and in the darkness bind them.** ” (訳として)「[一なる指輪]はトールキンの『指輪物語』(1954－1955)にて登場する架空の被造物である。[一つの指輪]は(『指輪物語』作中設定に見る時代区分にあつての)第二期に闇の王サウロンによって中つ国の自由なる人々に支配を及ぼすために鑄造されたものとなる。…(中略)…**ガンダルフ**(『指輪物語』世界の善き魔法使い)は『指輪物語』第二巻第二章にあつてのエルロンドによって催された会議の席で「そこには闇の言語で **Ash nazg durbatulûk, ash nazg gimbatul,/ Ash nazg thrakatulûk agh burzum-ishi krimpatul.**と表記されている、その意味するところは「**全てを統べるべくものひとつの指輪 / 全てを発見すべくもの指輪 / 全てをいざない、闇の中に繋ぎ止めるべくもの指輪**」である」と言及している」と表記されているところがそれだ——。

くどくもなるが、といったことが文献的事実の問題としてありもする中でリサ・ランドールは **One ring to rule them all**, one ring to find them, One ring to bring them all and in the darkness bind them.

とのそのサウロンの指輪の銘文にあつての **One ring to rule them all** との特徴的フレーズを彼女の著書 **KNOCKING ON HEAVEN'S DOOR** の Chapter 8 のタイトルに充てている、そして、同フレーズでもってして **LHC** のことを呼び慣わしているわけではあるも、その点、そちらフレーズ (ブラックホール人為生成可能性についての革新的理論である **RS model** を構築したことでも知られるリサ・ランドール博士によって **LHC** に仮託されている『指輪物語』におけるサウロンの指輪の銘文に見るフレーズ) に続けてフィクションの中の指輪に刻まれている、

[全てをいざない闇の中に繋ぎ止めるべくもの指輪 (One ring to bring them all and in the darkness bind them)]

との部には [ブラックホール] とのアナロジー(類似性)を見出せなくもない (:言うまでもないことだろうが、銘文に見る [闇ダークネス] をして [いざなわれた者達を縛り付けるとの悪と悪に由来する絶望的状況] の比喩的表現と見ずに(完全黒体のようにまったく光を反射しない存在に近い)究極的な[闇]そのものの「ブラック」ホールの比喩と解した場合にはそうもとれるということである)。

だがもってして、サウロンの [ひとつの指輪] に刻まれた特徴的銘文に見るフレーズを一言一句違わずに「わざわざもってして」**LHC** の呼称に充ててているとのリサ・ランドールは

「LHC によるブラックホール生成のリスクはないし、また、生成されたうえでそれが安全なものか否か云々以前にブラックホール(完全黒体に近い究極の闇)生成それ自体がほぼありえないと考えられるに至っている」

とのことを彼女の同じくもの著作 **KNOCKING ON HEAVEN'S DOOR** にての **CHAPTER 10 BLACK HOLES THAT WILL DEVOUR THE WORLD** との章題を付しての続けてのセクションで強弁している。

引用なそう。

曰く、

(以下、オンライン上にての文言検索よりそちら記述がなされていることが文献的事実であることを現行確認できるとの書籍 **KNOCKING ON HEAVEN'S DOOR** 内記述より原文引用なすとして)

“ Hopefully this chapter and the next will convince you that **your time is better spent worrying about the depletion of the contents of your 401(k) than fretting about the disappearance of the Earth by black holes.** Although schedules and budgets posed a risk for the LHC, theoretical considerations, supplemented by careful scrutiny and investigations, demonstrated that black holes did not. ”

(即時拙訳として)

「本章および次章にての表記で読み手たるあなたにはっきりとお分かりいただくことを望みたいところとして [ブラックホールによる地球の消滅可能性に思い悩むより **401k(米国の確定拠出型年金)の目減りに時間を費やすという方が余程あなたの時間の使い方としてはよろしい、適切である**] とのことがある。スケジュール(日程)とバジェット(予算)の問題が LHC におけるリスクとなったことはあるわけだが、ブラックホールによる地球の消滅が実験存続に対するリスクになったとのことは入念なる精査・調査によって補われての理論的熟考らが指し示す方向として「なかった」(引用部はここまでとする)

(さらに続けもして、以下、オンライン上にての文言検索よりそちら記述がなされていることが文献的事実であることを現行確認できるとの書籍 **KNOCKING ON HEAVEN'S DOOR** 内記述より原文引用なすとして)

“ Patrick and I had not been concerned about dangerous black holes. We had wanted to know whether small, harmless, rapidly decaying higher-dimensional black holes could be produced and thereby signal the presence of higher-dimensional gravity. We calculated this could rarely happen, if at all. Of course, if possible, the production of small black holes could have been a fantastic verification of the theory Raman and I had proposed. But as a scientist, I'm obliged to pay attention to calculations. **Given our results, we couldn't entertain false expectations. Patrick and I (and most other physicists) don't expect even small black holes to appear. That's how science works.** ”

(即時拙訳として)

「同僚パトリックと私(ことりサ・ランドール)はなんら危険なる(LHC 由来の)ブラックホールについてそれがありうることだとは気にしていなかった。私たちはただ小さく、そして、無害な即時蒸発を呈するとの高次元領域でのブラックホールが生成されるのか、そして、によって、高次元重力の存在の兆候が見出せるのかのこのことを知っていたただけだ。私たちはまったくないとは言えないが、そうもしたことはほとんど起こりえないことであると計算することになっていた。無論、もしそれがありえるというのならば、小さなブラックホールの生成というのはラマンおよび私がかつて提唱した理論のまたとなく素晴らしき証明の材料になったであろう(訳注:この部はリサ・ランドールと彼女の同僚ラマン・サンドラムが提唱した RS model がブラックホール生成に関わっていることに通ずる記述となる)。しかし、科学者として私は計算(の結果)に注意を払うことを強いられている。**我々が計算より得た結果によって我々はあやまてる期待をもてあそぶことがなんらできないでいる。同僚のパトリックと私(そして他の大多数の物理学者達)は小さなブラックホールさえ生じることに何の期待もなしていない。それが我々の科学が有効に作用するうえでの仕組みというものである**」

(引用部はここまでとする)

このことを述べているわけである。

以上のような言い分を強くもなしているがゆえにランドール女史は「意図明示しない式で

の」警告のために『指輪物語』のサウロンの指輪に刻まれたフレーズ — [全てをいざない、闇の中に繋ぎ止めるべくもの指輪] とのブラックホールのことをも想起されるフレーズに先行する [全てを統べるべくものひとつの指輪] との特徴的フレーズ — をもってして巨大なリングたる LHC 呼称および彼女著述の特定の章の章題に充てたの「ではない」と考えられるように「も」になっている（すくなくとも外面から解釈する限りは、である）。

表記のこと、指摘したうえで書くが、だがしかしもってして、彼女ランドール女史はここにて問題視している著作 **KNOCKING ON HEAVEN'S DOOR** の同じくもの章 (**KNOCKING ON HEAVEN'S DOOR** にての **CHAPTER 10 BLACK HOLES THAT WILL DEVOUR THE WORLD**) にてブラックホール生成などありえないとのこと「以外」にも [現象の発現] と いかたちでの現実的状况に合致せぬとのことをも強くも述べている。

その点について以下、引用部を参照されたい。

(以下、オンライン上にての文言検索よりそちら記述がなされていることが文献的事実であることを現行確認できるとの書籍内 **KNOCKING ON HEAVEN'S DOOR** 記述より原文引用なすとして)

“ **Before the 1990s, no one thought about creating black holes** in a laboratory since the minimum mass required to make a black hole is enormous compared to a typical particle mass or the energies of current colliders. ”

(即時拙訳として)

「1990年代の前には誰一人として研究所でブラックホールが生成されるとは考えていなかった、というのも、ブラックホール生成に必要とされる最小限の質量が普通の粒子の質量あるいは現行加速器のエネルギー領域に比して圧倒的に大きいからである」

(引用部はここまでとする)

上に引用したようなランドール女史言い分 — (90年代以前には実験室でブラックホールが生成されるなどということは「誰も考えていなかった」との言い分にして本稿にて解説しているように $\text{planck energy} \rightarrow \text{trillion electronvolt}$ と極小領域に投下するエネルギー規模に応じてのブラックホール生成可能性のありえなさに対する目分量が ADD Model というもので変質することになった経緯を指しているのだと判じられる言い分) — がなされている一方でのこととして、である。本稿にあつては 1980年原著初出の **Thrice Upon a Time** (邦題) 『未来からのホットライン』との小説作品にあつて

[2009年年末から2010年の世界 (要するに小説 **Thrice Upon a Time** 刊行時たる 1980年からおよそ30年後の世界) にて「欧州の」加速器を用いてのレーザー核融合炉 (本稿前半部 **出典(Source) 紹介の部 4** で原文抜粋しながら指し示しているように正確には [加速器] を用いての **Laser fusion** 核融合) に起因する災禍として大量の蒸発しない極微ブラックホールが生成されたとの粗筋が現出を見ていること]

[上の小説粗筋が LHC 実験が 2008年9月10日にスタートを見、その直後、ヘリウム漏出事故を受けて 2009年11月20日まで機器調整のための停止を見ていた実験である (換言すれば、LHC 実験とは 2009年年末から本格スタートを見た実験である) とのありようとあまりにも平仄が合うようになっていること]

との側面が見受けられるなど

[「90年代以前に遡りもする」 [加速器によるブラックホール生成] に対する「数々の」予見的言及の問題]

をつまびらやかにすべくもの指摘をなしてきた (ちなみに **Thrice Upon a Time** の先覚的言

及について細かくもは出典(Source)紹介の部 110 を参照のこと。また、続いての段では同じくものことにまつわっての再掲図を挙げておく。

以上のことが「はきとして容易に確認可能なる現象」の問題としてそこにあるがゆえにランドール女史の物言い、本稿前半部でもその問題性について細かくも解説してきたとの、
“ **Before the 1990s, no one thought about creating black holes in a laboratory since the minimum mass required to make a black hole is enormous compared to a typical particle mass or the energies of current colliders.** ” 「1990年代の前には誰一人として研究所でブラックホールが生成されるとは考えていなかった、というのも、ブラックホール生成に必要とされる最小限の質量が普通の粒子の質量あるいは現行加速器のエネルギー領域に比して圧倒的に大きいからである」

との物言いについてはそちらについても先にて引用なした、

「ブラックホールより 401k(米国確定拠出年金)のことを心配した方がいい」

との同女史言い分のことも含めて「皮肉 Irony」の問題も観念できなくはないが(ただもってして情報の流通態様から分析するに「皮肉」を「皮肉」として情報処理している人間の似姿はどうやら俗世間には「全くいない」ようでもある)、他面、「嗜虐的ジョーク Sadistic Joke」の問題もまた観念出来なくもない(屠所の羊一般を一部の「電気仕掛けの羊」を用いて茶化している存在がいそうであると述べているのだ)。

その点、読み手諸賢には「ファウスト博士」の問題 — ゲーテの戯曲にて悪魔メフィストフェレスに魂を売り払い現世での栄耀栄華を享受することになったとの学者にまつわっての問題 — を考えた場合に於ての欺瞞の所在についても考えていただきたい次第ではある。

(「重畳的に」(曇みかけるような入れ子構造でもってしての)脇に逸れるとの式での指摘を以下、敢えてもなすとして)

上にてゲーテについて話を振ったわけではあるが、それは訴求上、計算しての挙である。

その訴求上、計算しての挙の「計算」がいかなうものなのかを示すためにそこから書くが、ゲーテの有名な戯曲『ファウスト』、うち二部では悪魔に魂を売ったファウスト博士が弟子ワグナーの手で生まれ落ちたホムンクルス(錬金術における人造人間)の助力を受けて、

「時を越えて(タイムスリップし)過去世界である古代ギリシャを訪問し」

「絶世の美女ヘレン(神話では黄金の林檎と秤量された絶世の美女にしてトロイア崩壊に通じた誓約に関わる絶世の美女)をものにするための挙を開始する」

とのありようが描かれている。

(和文ウィキペディア「ファウスト 第二部」項目に現行、(以下、引用なすとして) “ 舞台はかつてのファウスト博士の書齋へと転じる。未だ気を失ったままのファウスト博士を尻目に、メフィストは実験室へと赴く。そこではファウストのかつての弟子であったヴァーグナーが、自らの学識でもってホムンクルス(人造人間)の創造を試み、ついに瓶の中に肉体を持たない純粹生命体ホムンクルスが産まれる。その神通力によって失神しているファウストの夢を読み取ったホムンクルスは、自らもまた人生を体験したいと思ひ立ち、ヴァーグナーの元を離れてファウストに随行することを決心する。目を覚ましたファウストはヘーレナーを探すため、時空を超えてギリシアの古典的ヴァルプルギスの夜へと飛び発つ。” (引用部はここまでとす

る) と表記されているところである)

などといった話をなすと、『何を延々云々としているのか. 飛躍も過ぎるであろう』と思われる向きもあるかもしれないが(殊にリサ・ランドール女史のような[世に言う学界の大家らの話]からゲーテの戯曲『ファウスト』へと話を繋げているあたりから[順序・段階を重視しての論理的思考]が忌避するような跳躍がみとめられる節が濃厚にある —(ただファウストに話を振ったのには筆者なりの[指摘するに値する関係性]にまつわる認識があり、については、これより解説をなす)— と受け取られるところもあるかと手前自身も認識しているからそうもおもんぱかりする)、といった『飛躍が過ぎるであろう』との反応が内心もたらされるような中でさらなる同文の反応惹起をおそれずに「まずもって」述べたきところとして、上に見る、

【ファウストと弟子のワグナーとの関係】

にあつてのワグナーの名前から想起されるのはトールキン『指輪物語』—いいだろうか. ランドール女史がLHCをそれに仮託した[(魔王サウロンの)指輪]を中心に話が展開していく著名フィクションである— にも多大な影響を与えていることが知られる人物、

【音楽界・音楽史に屹立する偉人などとされるリヒャルト・ワグナー】

の名であり、そして、同ワグナー作の著名歌劇、

『ニーベルングの指輪』

のことである(：歌劇『ニーベルングの指輪』はワグナー愛好家(ワグネリアン)のサークルが大学にも見受けられるように日本でもかなりもってして知られている作品であると見受けられ、本稿の先行する段でも[黄金の林檎とリングの接続性]との絡みで寓意性について解説してきた作品である)。

その点、トールキン『指輪物語』とワグナー『ニーベルングの指輪』の間に多重的なる接続性があるとのことについては[一般論]として欧米圏の一部識者層には知られていることとなり、にまつわっては、英文 Wikipedia [Der Ring des Nibelungen] 項目 ([ニーベルングの指輪] 項目) にあつての、

“R. R. Tolkien's fantasy novels The Hobbit (1937) and The Lord of the Rings (1954) share elements with Der Ring des Nibelungen, but Tolkien himself denied that he had been inspired by Wagner's work, saying that "Both rings were round, and there the resemblance ceases." In spite of Tolkien's protestation, there are various similarities in addition to annularity: a ring of power which curses its bearer; a powerful wanderer in a large hat carrying a spear (Wotan) or staff (Gandalf the Grey); magical invisibility; the reforging of a powerful sword; a riddle contest; Sme'agol's murder of his cousin Deagol for possession of the ring and Fafner's murder of his brother Fasolt for the same reason; the slaying of a powerful gold-hoarding dragon; to name but a few.”

(即時大要訳として)

「トールキンの『ザ・ホビット』(1937) と『指輪物語』(1954) は —トールキン自身はワグナーの作風から影響を受けたことについて否定しているのだが— ワグナーの『ニーベルングの指輪』と作中要素を共有している。トールキン自身の否定的声明にかかわらず両者作品の間には数多岐にわたっての一致性が存する(以下略)」

との記述からもそのことが窺い知れるところとなっている（よくも語られる具体的
一緻性の中身についてはここでは割愛する）。

さて、(そうもした話の流れが[「額面どおり」の飛躍しすぎである]では済ま
されぬとのことの所以(ゆえん)はもう少し先の段に解説するとして)、

【ファウスト博士】【指輪の物語】【ワグナー】(と繋いでいったここでの話の 文脈)

より述べもするところとして、リングたる LHC にまつわる問題で「不完全な」問
責をなして愚弄軽侮ばかりを買ってしまった(そして、実験推進者の正当性を間
接的に強化することになってしまった)というのが本稿で先述なしていた市民運
動家ウォルター・「ワグナー」氏のやりようである(ワグナー氏について: ウォル
ター・ワグナー氏は LHC に抗しての運動家ではあるが —「生きる上で必要だ
からか」とは思われるのではあるも— 専従、そのことに一意専心しての運動家
ではない。につき、彼ワグナー氏は[果樹園運営者]にして、のみならず、[良
きシステムの守衛]といった印象を覚えさせる職種であるも、高校教師との職に
も就いているとのことである(筆者から見れば高校の教師という職種は多く[教
育]という名のやりようで[カリキュラム]という名のシステムの建て前の論理を拡大
再生産することを生業となさしめられている職種に見えもする。さらに言えば、
こらえ性がない筆者などからすれば『およそ[土]たらんとする者が取り合うにた
らぬ輩、実質、鶏鳴狗盗の如き無礼千万な輩なぞが[人格不問の部分社会]
にあつての諸々の中には一部ながらいるというのが世の常・慣いというやつだろ
う、といった中で、「槌」(暴力・威圧)でしんどくも統御するしかない下種小人ばら
でなくしても、往々にして生意気盛んな小僧・小娘共、もとい、ティーンらのお世
話、[教育]とかいう名のお世話稼業か...。当事者らには豚小屋で豚が尾を噛
み合っている、あるいは、畜舎で鶏がつつき合つて鬱滞した部分社会でのストレ
スを解消しつつ力関係を探る程度の意図しかなくとも「舐められたら仕舞い。」と
いうのが本当の大人の世界というやつだが、そこから見れば、高校での舐めた
がり盛りのティーンのお世話をする稼業なぞおよそ一般の大人がやりたがらぬ
仕事、世話好きで人格的に余程できている向きむけの、あるいは、[強いられて
の苦行]とも見える仕事だろう』と見受けれるもする(そうした視点の共有を求める
ことはしないが)。とにかくも、(人格に余剰というものがあるのか)、LHC 反対
運動家のワグナー氏は高校教師との職に就いているとのことだが、他面もつて
して、彼ワグナー氏は弁護士資格も持っているようで(アメリカでは往時一頃の日
本に比べて比較的楽に弁護士資格をとれるとのことがあるが、その過程でロー・
スクールでみっちり詰め込み学習をしなければならぬとされる)、また、同ワグ
ナー氏は物理学系の学士号を有した元・原子力安全監督官との来歴をも有して
いるようである。ために、当然に彼ワグナー氏は世間一般のレベルの人間よりは
遙かに知的程度が高い[なにがしかの人物]であるととらえられもする)。

粒子加速器実験の「主たる」(その点について読み手諸賢らに手ずからお調べ
頂きたいものだが、「それ以外目立っての動きがアメリカではほとんど見受けられ
ない)批判家の方のワグナー氏の動きとのことで述べれば、そちら動静が
[我々人間の世界の限界線]

を示しているように見えもすることが「ある」(ワグナー氏が科学界の甲論乙駁の
ありよう程度のものに準拠しての不完全な問責より軽侮愚弄を買ってしまった、
口撃の材料を主流派気取りの学者ばらやその追従者ばら(としての産業的培養
の上で運用されている物書きなど)に与えてしまったとのことは[存在しない者]
[居ない者]として完全無視される「よりも」悪かろうととらえられるところがあり(ゼ

ロどころかマイナスであるからである)、そのことが種族の(批判能力・現状改変能力の)限界性の問題に通じていると解されるだけのことが「ある」——※について、ワグナー氏がいかような軽侮愚弄に曝されることになってしまっているのかとのことに関して具体例を挙げれば、最前にてそちらよりの引用をなしたリサ・ランドール著作にて次のような「不愉快な」記載がなされていたりもする ⇒ (以下、Knocking on Heaven’s Door にての CHAPTER TEN BLACK HOLES THAT WILL DEVOUR THE WORLD より引用なすとして) “Walter Wagner, a high school teacher and a botanical garden manager in Hawaii, who is also a lawyer and was a nuclear safety officer, together with the Spaniard Luis Sancho, an author and self-described researcher on time theory, were among the most militant of the alarmists. These two went so far as to file a lawsuit in Hawaii against CERN, the U.S. Department of Energy, the National Science Foundation, and the American accelerator center Fermilab, in order to hinder the LHC’s start.” (続いて以下、Knocking on Heaven’s Door にての CHAPTER ELEVEN RISKY BUSINESS より引用なすとして) “Ideally, one of the first steps would be to calculate risks. Sometimes people simply get the probabilities wrong. When John Oliver interviewed Walter Wagner, one of the LHC litigants, about black holes on The Daily Show, Wagner forfeited any credibility he might have had when he said the chance of the LHC destroying the Earth was 50–50 since it either will happen or it won’t. John Oliver incredulously responded that he “wasn’t sure that’s how probability works.” Happily, John Oliver is correct, and we can make better (and less egalitarian) probability estimates.” (以上引用部に対する即時訳として)「ウォルター・ワグナーはハワイにての高校教師にして果樹園運営者(訳注:この場合、原文マネージャーはオーナーシップを伴ったものなのか不分明であるので運営者と訳した)となり、また、弁護士にして、元原子力監督官となりもし、彼ワグナーは自称 [時間の理論にまつわる調査者] であるとのスペイン人ルイ・サンチョと共に心配性の向きらの中で最も好戦的な部類に入っていた(訳注:原文にみとめられるアラームスツはこの場合、[心配性の向きら]と訳されるどころの語感のものである)。彼らワグナーとサンチョは CERN、合衆国エネルギー省、米国科学技術振興会、そして、アメリカの加速器研究のセンターであるフェルミ国立研究所を相手取って LHC 実験のスタートを妨げるべくもの訴訟を提訴した。…(中略)… 理想的に言えば、物事の起点はリスクを見繕うとのことにあるべきであろう。しばしば人は確率との概念を誤ってとらえてしまうものだ。(コメディアンにして政治風刺をこととするタレントでもある) ジョン・オリバーが彼の関わるザ・デイリー・ショー(米国にて深夜放送されている諷刺番組)にて LHC 訴訟当事者であるウォルター・ワグナーに対してインタビューをなした折、ワグナーが LHC が地球を破壊する性向について「起こるか起こらないかとのことなのだから、50 対 50 だろう」との発言をなしたその折、彼ワグナーは(幾分でも)信頼をそれまで得ていたとしてもそれを喪失することになった。(ワグナー発言を受けて)ジョン・オリバーは信じがたいといった風に「確率という概念がそういう風に働くとはちょっと確信できませんね…」と応じていた。幸運なことにジョン・オリバーは正しく、我々はワグナーよりも上手く(またワグナー程にフィフティ・フィフティ的に平等主義的ではなく) 確率的目算というものを見繕えるところとなっている」(即時訳付しての引用部はここまでとする)。以上ランドール女史のワグナー氏に対する言いようが [失言の類を必要以上にあてこすつての衆に対する瞞着(まんちゃく:騙くらかし)の意図を含んでの印象操作の物言い] か否かは置き、とにかくも、ワグナー氏の「どうして彼ほどの人物がそんな失言を呈してしまっているのか」とのやりようは「実験」(などとされる挙)の推進者らにとっての追い風になっている節すらある(話は逸れるが、リサ・ラン

ドールが「ワグナーの確率にまつわっての失言」を強調するような書きようをなしているとのことで書くところとして、本稿では高校生でも分かるようにと「ベイズ推定 (Bayesian inference) の単純化メソッド」を持ち出し、権威言いようの欠陥性を示しつつものかたちで状況がいかように切迫しているのか、(不確実ではなく専門的な「理論」などではなく) 現実に束とそこにある「観察事象」より導出出来るとの式での計数的目分量「をも」呈示している (のでその適否からして (このような世界にといった方々がそうそうにいれば、だが) 心ある向きには検討いただきたい)) —) 。

(批判家ワグナー氏のことから話を引きも戻し、)

ここでの話、[ファウスト博士][指輪の物語][ワグナー]と繋いでいったここでの話に関しては、である。 — 当然に観念される「飛躍」の問題についてはそれを否定するための補ってもの表記を「すぐ後に」なす所存であるとして — とりあえずもの道筋として

[ヨハン・ヴォルフガング・ゲーテおよびリヒャルト・ワーグナーとの近代ドイツを代表する二大文人の作品ら]

すなわちもってして

[【 悪魔に魂を売った男ファウストが弟子ワグナーの造りだした錬金術上の人造人間ホムンクルスの助力で過去にタイムスリップし、ギリシャの絶世の美女ヘレン(トロイア滅亡の原因として黄金の林檎の対価ともなっている美女) をものにしたとの粗筋が現出している作品】(ゲーテ『ファウスト』) と【 闇に全てを繋げとめるものとしての銘文が刻まれての一なる指輪を巡る攻防が展開するファンタジー作品 (ランドール女史がブラックホール生成はリスクではないと強弁している LHC、そして、ワグナーにはじめてブラックホール生成の可能性が問題視されだした加速器の極北にある LHC がそちら登場の [ひとつの指輪] に仮託されているとの『指輪物語』 のことである) に多大な影響を与えている歌曲】(ワグナー『ニーベルンゲンの指輪』)]

を媒介項にしてこの身、筆者が

[ワグナー (【 自ら創造したホムンクルスを介して師たるファウスト博士のタイムスリップおよび絶世の美女ヘレン取得を助長したゲーテ・フィクションに登場する男 】、【 トールキン『指輪物語』にも影響を与えている『ニーベルンゲンの指輪』の作者として知られる男 】、【 リングたる加速器にまつわる批判をなしたことで一部にて知られている人物 】、彼ら三名の姓となっているとのそのワグナー) とリングとを巡る問題性]

について何らかのことを述べたいのだとまじめな読み手には「おおよそ」にしてご想像いただけるか、と思う (この段階、つい上の段までの流れだけでは「馬鹿げたまでにこじつけがましい far-fetched ことである」との評価が伴うところでも、である)

ここでこじつけがましさに対して弁明し、かつ、さらなる訴求をなすために書くが、

1. [ランドール女史ら学界の大家の欺瞞の問題視する] → 2. [学界の大家の欺瞞に通ずるありようから学者が悪魔に魂を売る挙動を描いているゲーテの戯曲『ファウスト』に焦点をあてる] → 3. [ゲーテ『ファウスト』に登場するファウストの弟子ワグナーのやりよう (ファウスト博士のタイムスリップを助け、古代ギリシャの伝説上の絶世の美女ヘレンのファウストの取得を助長し

ているとのワグナーやりよう)に話を振る] → 4. [ワグナー繋がりでもリヒャルト・ワグナーの歌劇『ニーベルングの指輪』のことを問題視、同『ニーベルングの指輪』とランドール女史らがLHCに仮託する『指輪物語』の指輪の濃密なる関係性のことについて話を回帰させる]

との直上までのおおよそにしての話の繋ぎかたは無論、

「論理的な思考の筋道ではない」

と解され、揶揄されようとのところのものである(要するにとらえどころのない漫談並みの論理性しかないと映るところのものである)。

殊に上にて表記の1. →2. と話を繋げもする流れに目立っての[飛躍]がある(何故、いきなりファウストなのかの繋がりが[学者の衆を欺く瞞着(まんちやく)]との実に幅広くも共通性にしか求められていないのだから[飛躍]以外の何物でもない)うえに同文に3. →4. と話を繋げもする流れにも無理がある(ワグナーとの名称との共通だけで話を繋げているように見える、であるから、同文...)と受け取られるところである(書いている人間たる手前手ずからがそも当然に自認せざるをえぬところとして、である)。

だが、そうした評価を「その実...」の問題として斥けられるだけのことがここの話の背景に「ある」。

その「背景に「ある」」こととは何なのか、以下にての箇条表記の部を参照されたい。

- ・小さなことからまずは始める。『ファウスト』を遺したヴォルフガング・ゲーテと『ニーベルングの指輪』を遺したリヒャルト・ワグナーら、教科書にもお目見えしている彼ら近代ドイツの代表的文人らの生き様・作品には少なからずもってしての繋がりがあるとのことがある。まずもってしてゲーテもワグナーも双方共にライプツィヒの地にゆかり・えにしのある存在であったとのことがある(具体的にはゲーテがライプツィヒ大学で学び、同地ライプツィヒを代表する偉人がゲーテとされている一方で、他面、ワグナーはライプツィヒで生まれ育ち、ゲーテと同じくものライプツィヒ大学で学んでいる)。そして、ゲーテ所縁(ゆかり)のライプツィヒにルーツを持つワグナーは先達のゲーテ『ファウスト』を非常に重んじておりもし、ゲーテの『ファウスト』をモチーフにしての歌劇『ファウスト』を世に出していもする。したがいもして、**3. →4. の流れ**(すなわち、**[文豪ゲーテの戯曲にての【ファウストの弟子ワグナー】を持ち出すやりよう]**から**[ゲーテのファウストをモチーフにしての歌曲も製作しているリヒャルト・ワグナー(の歌曲)]**に話を繋げるとの流れ)を持ち出していることに関して「皮相的に見ても」それほどには[行き過ぎ]にはならないとのことがある。

- ・次いで述べるが、リサ・ランドールのLHCにまつわっての欺瞞性を感じる物言い(それは部分的にはウォルター・「ワグナー」を茶化しての物言いでもある)からゲーテのことを持ち出すことには無理がない。に関して述べたきところとして、**他ならぬLHC実験を作中小道具に登場させての芸術家団体が『トロイアの人々』という歌曲(オペラ)を公演しているとのことがあり** — 正確には**LHC実験に用いられているATLAS検出器のイミテーションを演出として舞台装置に登場させながらもスペインのヴァレンシアのオペラハウス、Palau de les Arts Reina Sofia(ソフィア王妃芸術宮殿)にて公演しているとのことがあり** — (『トロイアの人々』の原題である[Les Troyens]との語と[LHC]の両語を併せてグーグルで画像検索などいただければ、削除されていない限りはその絡みの画像を捕捉できるであろう/ちなみに相応の

人間がといった挙をサイエントロジーのような新興宗教 Religious Cult のやりようと同文のものとして矮小化してオンライン上で語りきる、いや、騙りきるとのありようも筆者が情報精査していた折には見受けられるようになっていた)、元来もってして、(LHC のアトラス・ディテクターのイミテーションが舞台装置に用いられもしている) 歌曲『トロイアの人々』とのそちらオペラの作者はエクトル・ベルリオーズという 19 世紀に生きたフランスの著名作曲家となっており、そうもしたことがここでの話との絡みで意をなしてくるとのことがある。LHC (のアトラス検出器) を作中舞台装置に用いての『トロイアの人々』との歌曲を世に出した同エクトル・ベルリオーズの代表作は 一彼ベルリオーズがゲーテのファウストに相当程度かぶれていたとされる中で一 ファウストをモチーフにした『ファウストの劫罰』(との歌曲) となっている。そうもした [ゲーテのファウストの焼き直しオペラ] で知られる音楽家エクトル・ベルリオールの名であるエクトルとは [ヘクトル] (英語呼称はヘクター) のフランス語呼称およびスペイン系呼称となりもし、そこに見るヘクトル = エクトル Hector とは [トロイア城塞に籠城したトロイア勢力の軍司令官にして最強の戦士ヘクトル] に由来している (ヘクターのことについてはオンライン上でキーワード検索してお調べいただければすぐにご理解いただけるであろう)。従って、[トロイアの軍司令官たるヘクター]・ベルリオーズの代表作が『ファウストの劫罰』となっているとのことがあることにもなるわけだが、同ベルリオーズの別の代表作たる先述の『トロイアの人々』でモチーフにされているトロイアとは元来にしてのギリシャ伝承では

[絶世の美女ヘレン(ゲーテの『ファウスト』にてファウストが弟子ワグナーの産み落とししたホムンクルス(錬金術体系の人造人間)の助力を受けてタイムスリップしてまで手中に収めようとした絶世の美女ヘレン)を巡る取引 一本稿にあって何度も何度も述べてきたように [美女ヘレン] と [黄金の林檎] を交換しての取引一]

で滅んだ都市であると伝わっている(エクトル・ベルリオーズの歌劇には [ヘレン] やヘレン取得に情熱を燃やしたパリスといった神話上の存在は目立って登場していないのだが、とにかくもってして、である)。

そして、LHC に関しては (ヘレンの対価となっていると伝承が語り継ぐ) [黄金の林檎] と複合的に結びつく側面がある 一現代にて焼き直されたベルリオーズの『トロイアの人々』舞台装置にもそのレプリカがお目見えする LHC の ATLAS 検出器とは [黄金の林檎の在処を把握していると伝わる巨人アトラス] からその名称を受け継いでいる等々の事由からである一。

お分かりであろうが、そうもした側面から

[LHC 実験関係者の欺瞞 (「ウォルター」・ワグナーを茶化しつつものランドール言いように見るそれ) とファウストの物語の繋がり合い]

に考えが及ぶ 一 [ゲーテの戯曲でファウスト(悪魔に魂を売った学者)の拘(こだわ)ったワグナー助力を得てのヘレンの取得] [ヘレンの取得で滅んだトロイアをモチーフにしての現代にての「ゲーテ関連劇で知られる 19 世紀音楽人(トロイア伝承守勢側主力の名を冠していた音楽人)の作である著名劇を焼き直しての」LHC に対する揶揄のありよう] [LHC とヘレン等価物(黄金の林檎)との現実世界それそのものでの多重的な繋がり合い] に考えが及ぶ一 との思考の流れには「さして」飛躍はない (1. [ランドール女史ら学界の大家の LHC にまつわっての欺瞞を問題視する] → 2. [学界の大家の欺瞞を悪魔に魂を売る挙動として描いているゲーテの戯曲『ファウスト』のワグナーにまつわる下りに焦点をあてる] との思考の流れにあって行き過ぎが

あるとは言えない)。

・上記のことら「のみ」では 一行き過ぎての飛躍であろうとの無条件の非難は斥けられても—、だが、いまだ自手流のこじつけ臭が残置している感もありもするか、と思う。

だから述べるが、

[ワグナー助力でヘレンの取得のためのタイムスリップまでなしえた
ファウスト博士の物語](ゲーテの『ファウスト第二部』)

のみならず

(ゲーテにかぶれもしていたこと、先述の) リヒャルト・ワグナーの歌
曲である『ニーベルングの指輪』

「も」が

[黄金の林檎を求めての諍(いさか)いの伝承]

と密接に結びつくことを(再)指摘し、そして、ゴールデン・アップルとのことになれば、**LHCと通ずる**とのことの問題性をあらためて強調しておく。

その点、くどくも繰り返すが、トロイア戦争は[黄金の林檎]と[絶世の美女ヘレン]の交換が元になってはじまったと伝わる欧米古典の源流としての神話上の戦争であり、ゲーテに由来するファウスト博士の物語ではファウストはタイムスリップしてまでトロイアの災厄たるヘレンをものにしたいと(黄金の林檎の対価であったと伝承が語り継ぐ)同ヘレンに恋情千々に惚れ込んでいるとの設定がみとめられる(人類の思考体系の変遷にあつての沿革上、[黄金の林檎]と[絶世の美女ヘレン]の交換にまつわる神話上の筋立て—本稿でくどくもそのありようについて解説してきたいわゆる[パリスの審判]にあつての筋立て—あつてこそそのゲーテのファウスト博士の物語であるとも述べられるようになってい)。他面、(そちらは本稿のかなりもって先立っての段で先述したことでもあるのだが)、**ワグナーの『ニーベルングの指輪』、英語呼称ではただ単純に The Ring とも呼び慣わされる同作品「でも」その前半にあつての Das Rheingold 『ラインの黄金』の部**で神々の主催者ヴォータン(オーディン)が

[神々に若さを提供する林檎(北欧神話における黄金の林檎)の製造元である女神フライヤ](元来北欧神話では女神イドウンがそちら存在に該当するところをリヒャルト・ワグナーが翻案してのフライヤという黄金の林檎の管理者)

を指輪—ランドール博士がLHCにそれを仮託していることを先述した魔の王サウロンに由来するのも[指輪]だが、と同文に(サウロンの指輪を巡る物語である『指輪物語』と同文に)『指輪物語』に多大な影響を与えていることが指摘されている『ニーベルングの指輪』にあつての指輪—にまつわる取引の具に使ったことが神々の秩序の崩壊—神々の黄昏—、そして、劇中悲劇の現出へと向かって物語が進んでいく原因として描かれていもする(ヴォータン=オーディンのすべてを支配せんとする強欲さの問題とあわせて描かれていもする)。

要するにゲーテの『ファウスト』と同文にワグナーの『ザ・リング』(トールキンの『指輪物語』に多大な影響を与えているとのことが知られる『ニーベルングの指輪』の英文略称)にも

[黄金の林檎(を管理する存在)を巡る取引と崩壊のエピソード]

が強くも影響していると述べられるようになっていいる。そして、再度に次ぐ再度とのかたちでくどくも申し述べるが、LHC —リサ・ランドールがトールキンの『指輪物語』のサウロンの世界を扼する指輪に仮託しもしている巨大なリングたる加速器— は黄金の林檎と「どういいうけなのか」実験実施サイドより多重的に結びつけられている実験である。

多くがかくも結びつく、黄金の林檎を介して結びつくようになっていいる。

(尚、本稿では

【黄金の林檎】が北欧神話の一部伝承で**【リング】**の対価とされているとのことがあること) (スキルニルの歌というエッダ収録の物語にそういう筋立てがみとめられること)

を引き合いにしつつ、そうしたことと関わりとるころとして、日本の一部著名ホラー作品およびその紡ぎ手ら挙動が [リングと加速器とワグナー戯曲との繋がり合い] の方向を指している、しかも、**【ブラックホール人為生成に通ずる奇怪な先覚性】**を伴ってそちら方向を指しているとのことの詳説「をも」なしている — 卑近な事例、その分だけ、レベルが低いと言われることもあろうかと思うのだが、ひとつにそれは小説『リング』(貞子という怨霊が登場する日本の大衆のみならず欧米のホラー好きにもある程度知られた小説)の続編小説『ループ』で**【加速器遺構のコンピュータによってシュミレートされた仮想世界(ループ世界)でのバグが怨霊の正体であった】**との落ちがつけられている、そして、そのことがブラックホール生成の異様な先覚的言及の問題「にも」複合的に通じているとのことにまつわっての話となる(といった一見にして馬鹿馬鹿しくも響くとの話について「も」委細確認する必要を感じたとの向きにあらわれては各自、そちら解説の段まで遡って確認いただきたい) —)

以上、各点にて箇条表記のようなことらがあるがために、である。先述のように「リヒャルト・ワグナー歌曲『ニーベルングの指輪』と多重的に接合しているとの指摘がなせるようになっていいる」との『指輪物語』にあって登場を見ている**【破滅をもたらす指輪】**(などとの銘文が刻まれているリング)をリサ・ランドールが加速器 LHC と意図明示せず結びつけていいること、そこからして相応の恣意性体現のやりようが介在していいると判じられると指摘するのである。

(その点もってして同じくものことについてはファウストの問題など介在させずに**【ワグナー『ニーベルングの指輪』と黄金の林檎の結びつき】** → **【トールキン『指輪物語』と『ニーベルングの指輪』の濃厚なる結びつき】** → **【LHC と黄金の林檎の結びつき】** とのよりもって単純な流れだけでの訴求もなせたのではあるが、筆者にはリサ・ランドールのような大物物理学者(との**【役割】**をその特性から与えられている者達)のやりようについて思い、かつ、含むところが大なるところとしてあったため、わざわざファウストのことも交えての話をなしたと断っておく — ちなみに現世の快樂・榮耀榮華を得るとの方向で悪魔に(死後の)魂を売り払ったファウスト博士についてのゲーテ戯曲では、である。ドクトル・ファウストは自身が一大事業を成し遂げようとしていいるとの幻想に取り込まれもしている中で満ち足りた心境で魂の破滅の危機を迎える(「逸樂のために悪魔に魂を売り払った」おのれが年を経て求めるに至った理想郷として今まさに自由を求める人民の理想郷が構築されているのだとのめしいた(盲目になった状態)で)妄信していいる中、そう、ファウスト博士が [自由な理想郷を造る

初期荒唐無稽
ホラー小説との
体裁を取っていた『リング』との
小説作品、その
続編にあたる作品(『ループ』と
いう作品)で
【加速器遺構に
て構築された仮想
世界にあって
の致死性ウィルス】
とのテーマ
が立ち現れてくる、
またもってして、
そのことがワグ
ナーの『ザ・リ
ング』と結びつ
きもしながら【ブ
ラックホール生
成問題にまつわ
る先覚性】に
「実態として」関
わっているとの
突拍子なくも響
きもしようこと
の委細については
長大なる本稿に
あっての PDF
頒布版、その
Vol.1 と振って
の巻の p.985
から p.988 の部
の解説を参照さ
れたい。

ための自身主導下にある民らの勤勉なる作業の音]と認識していたものが現実には[悪魔らが当のファウストの墓穴を掘っている音]であったとの状況でファウストは最期に満ち足りた心境で Verweile doch! Du bist so schön.「時よ止まれ、汝、なんと美しきかな」と叫んで死ぬ(そして博士は悪魔メフィストがかねてより質草として要求していた魂を回収しての中で本来的には地獄に落ちるところであったのをご都合主義的に救われる)。といったゲーテ『ファウスト』結末に見る有名なフレーズである「時よ止まれ、汝、なんと美しきかな」における[時が止まった]とはブラックホール特色であると本稿で解説してきたところのありようでもある。また、ゲーテの『ファウスト』は[初期のタイムスリップ作品]としての様相も帯びている(とされる)わけだが、【過去に対して「物理的」実体を投射・移送しうる】というのはLHCでそれが生成されうるとされるワームホールなどの業(わざ)であると語られるところでもある(閑話休題)——)

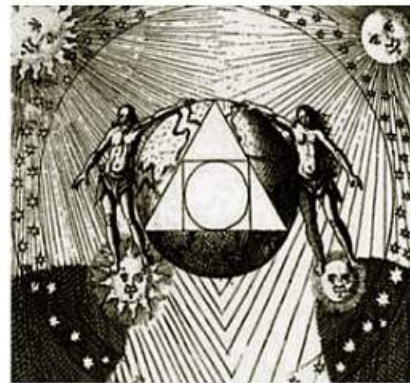
(付記の部の中に畳み込むように入れ込む、重畳方式で展開してきた脇に逸れての話はここまでとする)

(リサ・ランドールの「90年代まで実験室でブラックホールが生成されるとは誰も考えていなかった」との物言いと【抵触】が問題になりもする事柄ら、その一例にまつわっての再掲図として)



(※前掲図にみてとれるような先覚性を帯びた小説 Thrice Upon a Time (邦題)『未来からのホットライン』からして**多重的に【The Golden Apple 黄金の林檎】(が登場する【ヘラクレス第11功業】)**と濃厚に結びつくようになっている、またもってして、そこに**【人類に火を与えたプロメテウスの解放】**や**【ヘラクレスの多頭の蛇の毒による悶死】**といった事柄らとの**多重的結節性も** —ブラックホールとも相通ずるかたちで— **みてとれるようになっている**とのことについての解説をも本稿では**出典(Source)紹介の部 110(2)**から**出典(Source)紹介の部 110(8)**を包摂する段にてなしている)

(**【黄金の林檎】と【ヘラクレス功業】**が多くを繋ぐキーとなっている(させられている)とのことにまつわっての再掲図として)



Philosopher's stone



Iðunn & Loptr
(Loki)

Golden Apple

(※上掲図は**【(リヒャルト・ワグナー歌劇『ニーベルングの指輪』にもモチーフが転用されている存在である) 北欧神話に登場する女神イドゥン】**や**【錬金術シンボル体系】**と**【黄金の林檎】**との関係を強調すべくも本稿のせんだっての段で挙げていた図である。**【黄金の林檎】**はフリーメーソンの不快なシンボリズムにも影響を与えている**【錬金術シンボル】**、の中における、**【賢者の石(フィロソファーズ・ストーン)】**にまつわっての寓意にも影響を与えてい

ると判じられるものとなり、そこに不愉快極まりない — 歌会での歌の巧拙・雅趣を競うように人間を殺していくのを「是」とするようなやり方を不愉快極まりないのものではないと述べるならば別だが、の不愉快極まりない — 予見的言及との結節点もが存在していることをひたすらに細かくも摘示してきたのが本稿である)

付記の部はここまでとする

(直上までの枠で括っての付記の部を延々長くも続けすぎたとの感もあるが、とにかくもってして、)ここまでにて

[この時代でしか実現しえなかったであろうとの技術の粋を集めての LHC の特質]

についての訴求をなしたとして、最後に、である。「技術の粋を尽くしている」との粒子加速器に[ソフト]として提供されている ATLANTIS (との固有名詞が与えられているイベント・ディスプレイ・ツール)に通ずるところで次のような【こだわり】が見てとれるとのことを訴求しておく。

実験関係者に LHC 実験にあつてそれを介してブラックホール観測 (人類の科学の進歩に資するなど強調されての極微ブラックホールの観測) がなされうると諸所で主張されてきたのが「検出範囲が広めに設定されている」とのことであるアトラス・ディテクター、ATLAS 検出器となる (出典 (Source) 紹介の部 35, 出典 (Source) 紹介の部 81)。

その ATLAS 検出器に接合するところとして ATLANTIS などという名前が付されており、イベント・ディスプレイ・ツールを実験にて用いているのはそのツールで表示されてくるデータが「アトラス検出器の[目](イベント・ディスプレイ用の目)に引っかけられてのものであるから」と述べられるようになっていようなどころがある (:アトランティスがいかようにアトラスと結びつくのかとのことについては本稿にての 出典 (Source) 紹介の部 36 で解説をなしている — ※ —)。

(※海外では LHC と 2004 年より米国にて放映されだした『スターゲイト・アトランティス』(映画『スターゲイト』続編で時空のゲートを描くとの作品) を結びつけて、LHC を [ゲート構築装置] になぞらえるような論調が存在するが、ATLAS 検出器ネーミングが決したのは LHC 建設計画が正式に承認される前の [1992 年] となっている (出典 (Source) 紹介の部 36 (2)) のであるから、ATLANTIS の命名背景に関しては

[『スターゲイト・アトランティス』 ⇒ (影響) ⇒ イベント・ディスプレイ・ウェアたる ATLANTIS]

との流れは成立して「いない」と判じられる。

現実的状況に照らし合わせれば、
[イベント・ディスプレイ・ウェアたる ATLANTIS の名称がそちらに由来するところと解される ATLAS (1992 年に名称決定) ⇒ (影響) ⇒ 『スターゲイト・アトランティス』(2004 年リリース)]

との流れが時系列的に観念されるところとなる — 常識的に人間レベルのネーミングの背景を考える限りではそうもなる — 。

そしてもってして実験関係者 — 揃いも揃って LHC にて生成されるブラックホールの観測が科学の進歩にとり望ましいと主張しているような実験に率先して関わっているとの向きら — に由来するところとして

〔(現行、ATLANTIS によって観察されうると見られている)ブラックホール〕

がゲートたりうるものとして生成されうるとの寓意付けを強くもなさんとするとの意図が 90 年代よりあったとは普通には考えがたいようになっている (:先立っての **出典 (Source) 紹介の部 18**, **出典 (Source) 紹介の部 19**, **出典 (Source) 紹介の部 21-2** (かなり後の段にずれこんで) **出典 (Source) 紹介の部 76(3)** (さらに後の段にずれこんで) **出典 (Source) 紹介の部 89** で指摘しているところとして LHC では[プランクエナジーの極小領域投下]を実現せずともワームホールが生成されうるとの発想法も [ADD モデル]に基づいて近年、ここ 10 数年で提示されるに至っているとのことがある (が、といった科学界の一部見方の変遷のありように目を向けつつも反言すれば、ここ 10 数年より前、1990 年代にはブラックホール生成もワームホール生成もおよそ考えられるところではなかったと公式発表され強調されてきたとの背景があり、ノーベル賞級の科学者らからしてそうも主張・強調しているとのことを本稿では諸種ソースを挙げることで摘示している)。 またもってして LHC で仮に通過可能なワームホールが生成されればどういふことがありえるのかとのことについては、たとえば、レイ・カーツワイル著作 The Singularity Is Near: When Humans Transcend Biology (原著初出 2003 年、邦題『ポストヒューマン誕生 コンピューターが人間の知性を越えるとき』) に見る仮想の先進文明やりようの問題として、(以下、再度の引用をなすとし) “ Sending molecular-scale selfreplicating devices along with software will be sufficient and much easier. Anders Sandberg estimates that a onenanometer wormhole could transmit a formidable 10^{69} bits per second . ” [ソフトウェアとともに分子サイズの自己修復するデバイスを送れば十分であり、そのほうが簡単だ。アンデルス・サンドベルイは、一ナノメートルのワームホールは一秒あたり 10 の 69 乗ビットもの膨大な情報を送ることができると試算している] (引用部はここまでとする) といったことに接合する可能性すら考えられることになる —10 の 69 乗ビットという情報がいかように凄まじいものなのかの解説は従前解説部を参照のこと—)。

直上再言及のように 1992 年に由来するところとして、

〔ATLAS の名称の決定〕 (ATLAS との呼称から派生しての ATLANTIS の呼称が後に決せられることになる[芽]となる名称決定行為)

が見受けられるとのことになるわけだが、伝承上、(LHC に通ずる命名規則でもその名が用いられている)【アトラス】という名の王に戴いていたとされているのがプラトンの古典『クリティアス』に見る沈んだ陸塊アトランティスとなる (**出典 (Source) 紹介の部 36**にて出典提示しながら、古典字面それのみに基づいて論拠示しているところでもある)。

さてもってして、ここからが

〔LHC 実験にみとめられるこだわり〕

に関わるところとなるわけだが、プラトン古典『クリティアス』にて描写される「アトランティス」の宮殿都市のありよう (中央にアトラス王の血脈の王族が主となる宮殿を配するありよう) がそのまま LHC のイベント・ディスプレイ・ツールたる ATLANTIS と接合するようになってのことまでもが「ある」。

細かくは本稿にての **出典 (Source) 紹介の部 47** を包摂する部で古典そのものの字面だけに基いて仔細にそうもなっていることの典拠を古典よりの原文引用でもってして提示してきたことだが、端的に要約すれば、次の 1. から 3. のようなことらまでもがあるのである。

1. 古典では古のアトランティスの首府が【アトラス王】の一族が住まう宮城と なっていると描写されるのに対して LHC の Event Display Tool たる ATLANTIS は検出器【アトラス】ATLAS と紐付けられて存在している。

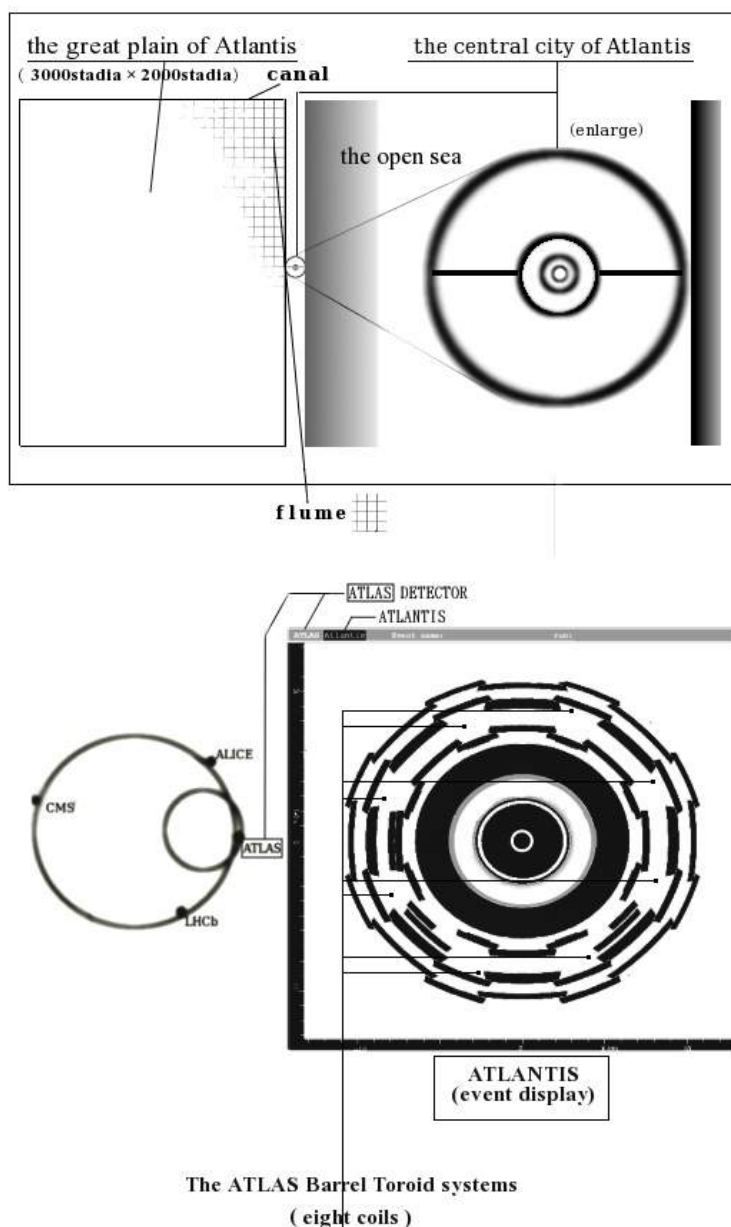
2. プラトン古典『クリティアス』によれば古のアトランティスの首府は環形構造の 島を幾重にも城壁が囲んでいるとの構造をとっている。

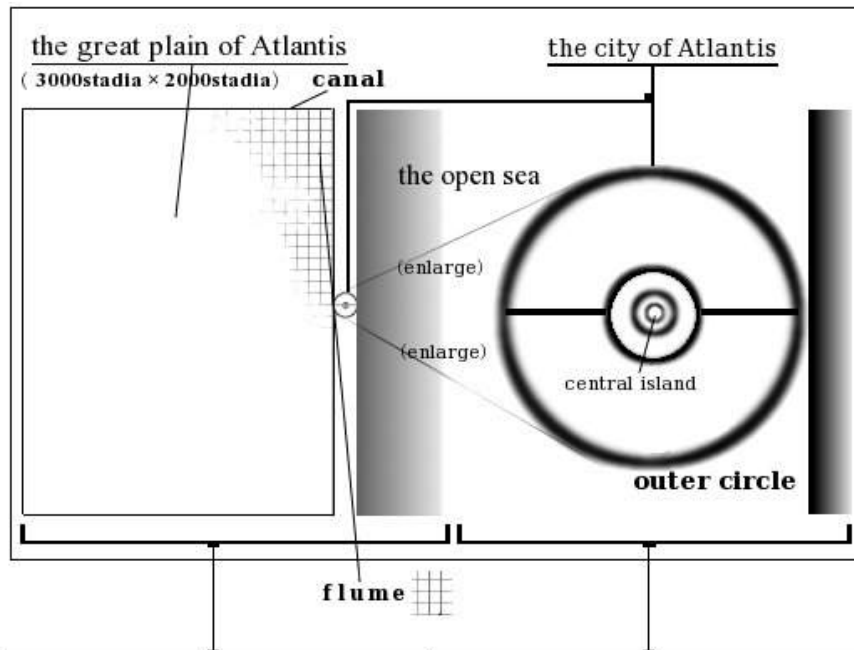
対して、LHC の Event Display Tool たる ATLANTIS も環形構造状の画面を呈し、 幾重にももの枠(城壁のような外枠)で囲まれているようなヴィジュアルを呈しており、 その環形構造の中心部でブラックホール生成その他のイベント — 関係者らに科 学の進歩に資すると強弁されてのイベント— を検知する可能性が取り沙汰され てきたとこのことがある。

3. プラトン古典『クリティアス』によれば古のアトランティスの首府は肥沃で広大 なアトランティス大陸平野の「端(はじ)の部に」「環形構造をなして」存在する。

対して、LHC の Event Display Tool たる ATLANTIS は巨大な LHC 加速器の 「端(はじ)の部に」「環形構造を呈しながら」具現化している ATLAS 検出器と紐 付けられもしている。

(1. から 3. と振ってのことらにまつわって従前呈示していた図の再掲として)





Critias

The whole country was said by him to be very lofty and precipitous on the side of the sea, but the country immediately about and surrounding the city was a level plain, itself surrounded by mountains which descended towards the sea; it was smooth and even, and of an oblong shape, extending in one direction three thousand stadia, but across the centre inland it was two thousand stadia.

(.)
It received the streams which came down from the mountains, and winding round the plain and meeting at the city, was there let off into the sea. Further inland, likewise, straight canals of a hundred feet in width were cut from it through the plain, and again let off into the ditch leading to the sea: these canals were at intervals of a hundred stadia, and by them they brought down the wood from the mountains to the city, and conveyed the fruits of the earth in ships, cutting transverse passages from one canal into another, and to the city.

ここで提示しているのはプラトン著作『クリティアス』文言から再現できるところの「古の」アトランティス再現図——運河水路が長方形区画状に張り巡らされた平野部に近接して王城を兼ねての国家中枢部(中央島)を含む円形都市が何重もの内部外壁によって仕切られながら外海に面して存在していると語られるところのアトランティス似姿——であるが(：似たような図は国内から出版されている岩波書店刊『プラトン全集』に見る学者の作品紹介部にも図示されており、についてはその解説テキストを本稿にての[出典(Source)紹介の部47]でも該当ページ数挙げて解説部文言引用とのかたちで紹介している)、本稿ではそうしたアトランティスの似姿が下にて呈示のLHCのEvent displayウェア「ATLANTIS」の管理画面、LHC実験関係者ら曰く「安全な」ブラックホール生成がなされれば、そこにてその観測がなされとのATLANTISの管理画面([出典(Source)紹介の部35])と「実によくできている」ことに相似形を呈していること、そのことの[意味性]について問題視している(たかだか実験関係者レベルの恣意でそういうことが具現化を見ているとのことで済むか否かという観点で、である)。

Critias

Towards the sea and in the centre of the island there was a very fair and fertile plain, and near the centre, about fifty stadia from the plain, there was a low mountain in which dwelt a man named Evenor and his wife Leucippe, and their daughter Cleito, of whom Poseidon became enamoured. He to secure his love enclosed the mountain with rings or zones varying in size, two of land and three of sea, which his divine power readily enabled him to excavate and fashion, and, as there was no shipping in those days, no man could get into the place. To the interior island he conveyed under the earth springs of water hot and cold, and supplied the land with all things needed for the life of man.

(.)
First, they bridged over the zones of sea, and made a way to and from the royal palace which they built in the centre island. This ancient palace was ornamented by successive generations; and they dug a canal which passed through the zones of land from the island to the sea. The zones of earth were surrounded by walls made of stone of divers colours, black and white and red, which they sometimes intermingled for the sake of ornament; and as they quarried they hollowed out beneath the edges of the zones double docks having roofs of rock. The outermost of the walls was coated with brass, the second with tin, and the third, which was the wall of the citadel, flashed with the red light of orichalcum. In the interior of the citadel was a holy temple, dedicated to Cleito and Poseidon, and surrounded by an enclosure of gold, and there was Poseidon's own temple, which was covered with silver, and the pinnacles with gold.

(.)
Also there were fountains of hot and cold water, and suitable buildings surrounding them, and trees, and there were baths both of the kings and of private individuals, and separate baths for women, and also for cattle. The water from the baths was carried to the grove of Poseidon, and by aqueducts over the bridges to the outer circles. And there were temples in the zones, and in the larger of the two there was a racecourse for horses, which ran all round the island. The guards were distributed in the zones according to the trust reposed in them; the most trusted of them were stationed in the citadel. The docks were full of triremes and stores. The land between the harbour and the sea was surrounded by a wall, and was crowded with dwellings, and the harbour and canal resounded with the din of human voices.

以上のようなLHC実験、そのATLANTIS周りのところに見受けられる【執拗さ】と以下呈示のこたら、4. から7. のこたら —それこそ何度も何度も本稿にて核となることとして繰り返し強調なしもしてきたこたら— を複合顧慮すれば、何が明確な犯行意思の表明か、それは分かるうとのものであろうと見る。

4. 【アトラス】と【アトランティス】は【(木製の馬の計略で滅んだ)トロイア】と伝承上、複合的に結びつくようになっているものである。

5. アトラスとトロイア(の滅亡)との結節点ともなる【黄金の林檎】は【エデンの禁断の果実】との多重的接合性を指摘できるものともなっており、にまつわっては、たとえば、【黄金の林檎の園】と【エデンの園】の一致性などが西洋の一部識者にて(近代以後)部分的に指摘されてきたといったことがある。

6. 【エデンの禁断の果実】は蛇によって【失樂園(樂園追放)の具】にされたと聖書に記載されているものだが、【蛇の種族】【次元間侵略】【加速器とブラックホールの寓意】【アトランティス】の各要素を複数具備している時代区分現代に入ってから「複数」存在しており、また、一であるからこそ極めて重篤であるとはきと判じられるところとして— それら現代的文物らにあつて「異様な」先覚性および互いにもつてしての接合性がみとめられるようになっている(と明確に指摘できるようになっている)とのことがある (たとえば、本稿にての**出典(Source)紹介の部 65(6)**から**出典(Source)紹介の部 65(9)**を包摂する解説部にあつては【**いまだ加速器によるブラックホール生成などがなんら考えていなかったとの折柄にて加速器の質的同等物(プロトンビーム)とブラックホールの質的同等物を結びつけている作品**】にして【**ブラックホールの質的同等物を含むテクノロジーを自儘(じま)にすることで間接統治の具であった人間を不要としての統治体制を企む蛇の種族を描く作品**】としての『リアンの剣』という半世紀以上前の作品の「異様な」先覚性のことを摘示・問題視もしており、本稿にあつての**出典(Source)紹介の部 22**から**出典(Source)紹介の部 25**を包摂する解説部では【**悲劇の宇宙でもある人造宇宙にて異なる領域の強制的接合が試みられることで人間に似た種族を爬虫類に似た種族が皆殺しにするとの粗筋を有している作品**】にして【**カシミール効果捕捉実験(後に通過可能なワームホールの要件となると考えられるに至った斥力を伴った負の質量を持つ負のエネルギーの存在を示すことになった実験)**と同様の行為をそちら実験実施の前に先覚的に持ち出している作品】であるとの1937年初出の作品『フェッセンデンの宇宙』のことを取り上げもしている。そうもした予見的言及をなしているとの作品ら、爬虫類の種族による人間の存在否定と結びつく中で他面、異様な先覚的言及をもなしているとの筋目の作品らが存在している一方でのこととして、先の大戦期以前に遡るところとして蛇の種族のアトランティスへの次元侵略を扱った捏造遺物としての文物 —表向きには神秘家妄言にしかすぎぬといった『第二のエメラルド・タブレット』なる愚劣な一品— が存在していたりする(**出典(Source)紹介の部 34**および**出典(Source)紹介の部 34(2)**)、そして、といったアトランティスへの爬虫類の種族による次元間侵略とのテーマを含む文物が[別方向での異様な先覚的言及]と記号論的に通じるようになっている、そういったことがあるのがこの「下らぬ」世界である(ここで「下らぬ」と表しているのはやりようの圧倒的高所から人間存在を執拗に愚弄するような

側面のこともそうだが、そういう露骨な愚弄と究極的加害意思の表明をなされてなお状況を理解できずに(なんら情報として認識・処理せず)、あるいは、理解してなお従容として死の道を歩みもしよう、との気風に満ちている節もある、そういう存在に自身の属する種族がなされているとのその唾棄すべき「世界的」現状を指しての申しようでもある))。

7. 【エデンの禁断の果実】による蛇の誘惑を聖書の筋立てを大幅に翻案して、【墮天したサタンによる神への意趣返しとしての林檎を用いての人間を墮落させる拳】として描く作品がジョン・ミルトンの手になる著名古典『失樂園』とはなるのだが、Western canon と呼称される代表的古典に含まれる(英文 Wikipedia [John Milton] 項目にて現行、“Once Paradise Lost was published, Milton's stature as epic poet was immediately recognised. He cast a formidable shadow over English poetry in the 18th and 19th centuries; he was often judged equal or superior to all other English poets, including Shakespeare.”(即時訳)「『失樂園』が刊行を見てより、(壮大な)叙事詩の紡ぎ手としてのミルトンの名声は即時に認容されることになり、同ミルトン(の詩)は18世紀から19世紀にあつての英文詩ありようにおそるべき隠然たる影響力をおよぼすことになった。ミルトンはしばしば「シェイクスピアを含む」他のいかなる英語による詩の紡ぎ手に比肩しえる、あるいは、優越しうると評価されてきた存在であつた」なぞと記載されていることにも著名性ありようが推し量れる)との同ミルトン『失樂園』の、

【トロイア崩壊関連事物への言及を含む箇所 一人間を失樂園にいざなうべくもルシファーがアビス(深淵)の領域を押し進んだとの描写がなされている箇所】

それそのものに

【(現代的観点より見ての)ブラックホールと見紛うもの】

についての描写「も」がなされているとのことがある(少なくとも[時間と空間が意味をなくなる領域][永劫の底無しの暗黒領域][自然の祖たる領域][光を名に冠する存在(ルシファー)をして「一端落ち込めば脱出不能」と言わさせしめている領域]との描写は全部、今日的な意味でのブラックホール理解に当てはまるところともなる、そう、時間と空間の法則が破綻し、かつ、底無しの暗黒領域にして、宇宙そのもの(たる自然)の祖とされ、光さえほぼ脱出不能となるとされるブラックホール理解に当てはまるところともなる。また、時間と空間を渾然一体なるものとして見る[時空間]の概念すらなかつた17世紀往時にあつての[時間と空間が意味を有さなくなる]などとは殊に露骨性が感じられるところでもある)。

そして、ミルトン『失樂園』にあつての

【(今日的観点より見た場合に)ブラックホールと見紛うものの描写】

が

【地獄門の先にてのルシファーに起因する災厄にまつわる描写】

として具現化を見ている(とのことがある)ことと照応・対応するように同じくもの、

【地獄門の先にてのルシファーに起因する災厄にまつわる描写】

としてブラックホールに近しくものものを多重的に描くとのありようがミルトン『失樂園』に数世紀遡るところの著名古典『神曲;地獄編』(こちら『神曲』も[ウェスタンカンオン]と呼ばれるその影響度合いにて西洋文化で最も重要な文物、そのひとつに含まれる「超」が付くほど欧米では著名な古典である)に見てとれるようになっているとのことがある(：少なくとも[そこに足を踏み入れれば不帰の身たることを覚悟せねばならないとされるところの先にある領域][「重力の中核」たる領域(とはきと明示されての領域)][光と同様の語源を持つ存在が囚われている領域][外側から見れば凍り漬の永劫の停止のありようを呈し、内側から見れば、噛み砕きを見ている状況が具現化している領域]との『地獄篇』に見るコキュートス・

ジュデッカのルチフェロ領域の描写は今日的な意味で見た場合のブラックホール一本稿の[補説2]の段にてそれが[フローゼン・スター]と呼ばれてきた経緯にも解説しているとのブラックホール— の特性に全て適合するところとなっている(であるからであろう、ダンテ『地獄篇』とブラックホールの結びつきについては詳説を欠く「中途半端に」留まっの式で言及する著名物理学者が何名もいることも本稿出典(Source)紹介の部55では紹介しもしている)。

といったことがある中でダンテ『地獄篇』にあつてはそのルシファー領域に至る歩みがヘラクレス12功業(の中の第10功業、第11功業、第12功業)と濃厚かつ多重的に結びつけられているとのことがありもし(膨大な紙幅を割いての本稿の補説3と区分付けしてのセクションで典拠紹介をなしてきたことである)、他面、『地獄篇』と[地獄門の先にてのルシファーに起因する災厄にまつわる描写]に関して[現代的観点で見た場合のブラックホール近似物描写]との側面で結びつくミルトン『失楽園』のまさしくものそのブラックホール近似物描写に関わるセクションではトロイア崩壊伝承と属地的に通ずる言及が色濃くもなされている(『失楽園』ではトロイア崩壊後日談であるオデュッセウス伝承が引き合いに出され、と同時に、伝説に見るトロイア所在地周辺であるボスポラス・ダーダネルス海峡突貫の言及が多重的になされている—主に本稿にあつての出典(Source)紹介の部55以降の部をそのことの典拠詳述に割いている—)とのことがある。そして、ヘラクレス第11功業は黄金の林檎を求めてのものであり、そもそももってしての伝説上のトロイア崩壊の契機が黄金の林檎にありと別に伝わっているとのことがある、ゆえに「できすぎもしている」とのことにあいなる(しかしもって、現在、黄金の林檎と命名規則上結びつけられている営為にしてブラックホール生成可能性が取沙汰されだした営為でもあるLHC実験ではブラックホール生成にまつわる関係者の警鐘乱打の意図のために黄金の林檎—木製の馬によるトロイア滅亡に通じた伝説上の果実—にまつわる命名規則が定められたとは判断できないとのことがあり(1992年のLHC実験計画策定段階から黄金の林檎に通ずる巨人アトラスの検出器まわりでの使用規則が定められているわけだがブラックホール生成の可能性がきたるLHC実験で「ありうる」とされるに至ったのはアトラスの名称使用に後続するここ十数年であるとのことがある)、どころか、実験関係者は現在に至るまでLHCによるブラックホール生成の可能性を科学の進歩と結びつけて好意的に解するとの物言いをなしてきた、そして、のことに衆生が黄金の林檎との絡みで明示的に異を唱えている様もなんら見受けられない)。

(最前、振り返りもして書き連ねてきた1.から7.と振つてのこらに関わるものとして本稿にて呈示してきた図らの「極一部」再掲の段はここまでとしておく)

以上、振り返りもしてきたようなことが加速器まわりにて用いられているATLANTISに通ずるところとしてありもし、そこに見る関係性が

[尋常一様ならざる予見描写] (911の事件が起こることを事件発生前に記号論的に示して見せていたとの奇態なる予見描写)

と複合的に接合するようにさせられ「も」している、そして、そこに[アトラス][トロイア]との接続性が根強くもみとめられるとのことの意味を問題視してきたのが本稿である。

ここまで訴求なしてきたことの背面にいかような[意図]があるとおもんばかれるのか、そこにどういふ悪意(加害意思)があるのかについては働くべきところが働いているのならば瞭然自明としてお分かりかとは思うのだが、そうした加害意思の発露の背後にある目標と結びついた動機(ホワイダニットの問題として先立っての段で論じたこと)の推察もが容易になっており、その具体的手段—考えられも

するところとして「多世界解釈理論」にあって他世界間を貫通するとされる Gravitational Wave [重力波] が人間に終焉をもたらす方向で作用するなどといった [推察] にも通ずる具体的手段 — が煮詰まったもの、そして、[相応の色彩を付されたもの] がいよいよ具現化してきたというのが昨今の状況であると判じられるようになっている（直前にて述べたように、LHC が今日の文明水準でしか実現がなせなかったようなものとして具現化してきたこと、しかも [あまりにも異様なるこだわりを感じさせる装置] として具現化してきたこと、その意味性について考えて頂きたいものである）。

最早、今はこれ以上語ることもないだろう。真実には本来的には飾る言葉も無用であろうとの中で、である。あとは御自分で運命を決する、種族に与えられた未来に異議を呈するだけの気概がある、そういう向きらに本稿を検討いただければ何よりと考えている。

それではこれにて筆を擱(お)くことにする。



本稿摘示事項を支える各【典拠紹介部】ら、それら掲載頁の一覧 (全巻共通表記部)

第一巻 (vol.1) にて呈示の各出典紹介部の掲載頁として

出典 (Source) 紹介の部 1 : p.39－p.52

出典 (Source) 紹介の部 2 : p.53－p.59

出典 (Source) 紹介の部 3 : p.59－p.70

出典 (Source) 紹介の部 4 : p.72－p.81

出典 (Source) 紹介の部 5 : p.84－p.90

出典 (Source) 紹介の部 6 : p.98－p.105

出典 (Source) 紹介の部 7 : p.105－p.114

出典 (Source) 紹介の部 8 : p.115－p.118

出典 (Source) 紹介の部 9 : p.119－p.123

出典 (Source) 紹介の部 10 : p.133－p.147

出典 (Source) 紹介の部 11 : p.157－p.163

出典 (Source) 紹介の部 12 : p.172－p.175

出典 (Source) 紹介の部 13 : p.175－p.177

出典 (Source) 紹介の部 14 : p.177－p.184

出典 (Source) 紹介の部 15 : p.186－p.189

出典 (Source) 紹介の部 16 : p.193－p.195

出典 (Source) 紹介の部 17 : p.199－p.200

出典 (Source) 紹介の部 17-2 : p.203－p.205

出典 (Source) 紹介の部 17-3 : p.209－p.212

出典 (Source) 紹介の部 17-4 : p.213－p.217

出典 (Source) 紹介の部 18 : p.228－p.231

出典 (Source) 紹介の部 19 : p.234－p.236

出典 (Source) 紹介の部 20 : p.236－p.240

出典 (Source) 紹介の部 20-2 : p.244－p.249

出典 (Source) 紹介の部 20-3 : p.252－p.256

出典 (Source) 紹介の部 20-4 : p.259－p.262

出典 (Source) 紹介の部 20-4 (2) : p.263－p.265

出典 (Source) 紹介の部 21 : p.271－p.274

出典 (Source) 紹介の部 21-2 : p.275－p.276

出典 (Source) 紹介の部 21-3 : p.277－p.279

出典 (Source) 紹介の部 21-3 (2) : p.280－p.281

出典 (Source) 紹介の部 21-4 : p.287－p.289

出典 (Source) 紹介の部 21-5 : p.292－p.294

出典 (Source) 紹介の部 21-5 (2) : p.295－p.297

出典 (Source) 紹介の部 22 : p.319－p.320

出典 (Source) 紹介の部 22-2 : p.320－p.322

出典 (Source) 紹介の部 23 : p.323－p.325

出典 (Source) 紹介の部 24 : p.328－p.333

出典(Source)紹介の部 25 : p.337—p.339	出典(Source)紹介の部 37-3 : p.559—p.562
出典(Source)紹介の部 26 : p.344—p.346	出典(Source)紹介の部 37-4 : p.569—p.571
出典(Source)紹介の部 26-2 : p.347—p.350	出典(Source)紹介の部 37-5 : p.572—p.575
出典(Source)紹介の部 27 : p.352—p.356	出典(Source)紹介の部 38 : p.596—p.598
出典(Source)紹介の部 28 : p.362—p.363	出典(Source)紹介の部 38-2 : p.598—p.602
出典(Source)紹介の部 28-2 : p.363—p.365	出典(Source)紹介の部 39 : p.611—p.619
出典(Source)紹介の部 28-3 : p.366—p.369	出典(Source)紹介の部 40 : p.624—p.626
出典(Source)紹介の部 29 : p.412—p.416	出典(Source)紹介の部 41 : p.629—p.631
出典(Source)紹介の部 30 : p.416—p.417	出典(Source)紹介の部 41(2) : p.638—p.639
出典(Source)紹介の部 30-2 : p.418—p.419	出典(Source)紹介の部 41(3) : p.642—p.643
出典(Source)紹介の部 30-2(2) : p.420—p.422	出典(Source)紹介の部 41(4) : p.644—p.645
出典(Source)紹介の部 31 : p.436—p.437	出典(Source)紹介の部 41(5) : p.646—p.648
出典(Source)紹介の部 31-2 : p.437—p.439	出典(Source)紹介の部 41(6) : p.648—p.649
出典(Source)紹介の部 32 : p.441—p.443	出典(Source)紹介の部 42 : p.654—p.657
出典(Source)紹介の部 32-2 : p.443—p.446	出典(Source)紹介の部 43 : p.658—p.662
出典(Source)紹介の部 33 : p.452—p.456	出典(Source)紹介の部 44 : p.667—p.668
出典(Source)紹介の部 33-2 : p.459—p.462	出典(Source)紹介の部 44-2 : p.669—p.670
出典(Source)紹介の部 34 : p.501—p.503	出典(Source)紹介の部 44-3 : p.671—p.673
出典(Source)紹介の部 34-2 : p.504—p.506	出典(Source)紹介の部 44-3 : p.674—p.677
出典(Source)紹介の部 35 : p.529—p.533	出典(Source)紹介の部 45 : p.680—p.687
出典(Source)紹介の部 36 : p.535—p.538	出典(Source)紹介の部 46 : p.695—p.701
出典(Source)紹介の部 36(2) : p.538—p.540	出典(Source)紹介の部 47 : p.702—p.710
出典(Source)紹介の部 36(3) : p.543—544	出典(Source)紹介の部 48 : p.721—p.723
出典(Source)紹介の部 37 : p.552—554	出典(Source)紹介の部 49 : p.723—p.726
出典(Source)紹介の部 37-2 : p.554—p.558	出典(Source)紹介の部 50 : p.728—p.731

出典(Source)紹介の部 51 : p.739—p.744	出典(Source)紹介の部 57 : p.879—884
出典(Source)紹介の部 52 : p.747—p.755	出典(Source)紹介の部 58 : p.886
出典(Source)紹介の部 53 : p.756—p.758	出典(Source)紹介の部 58(2) : p.887—p.888
出典(Source)紹介の部 53(2) : p.758—p.760	出典(Source)紹介の部 58(3) : p.889—p.890
出典(Source)紹介の部 53(3) : p.761—p.764	出典(Source)紹介の部 58(4) : p.891—p.894
出典(Source)紹介の部 53(4) : p.765—p.768	出典(Source)紹介の部 59 : p.908—p.911
出典(Source)紹介の部 54 : p.769—p.770	出典(Source)紹介の部 60 : p.913—p.915
出典(Source)紹介の部 54(2) : p.771—p.774	出典(Source)紹介の部 60(2) : p.924—p.935
出典(Source)紹介の部 54(3) : p.775—p.780	出典(Source)紹介の部 60(3) : p.983—p.984
出典(Source)紹介の部 54(4) : p.780—p.783	出典(Source)紹介の部 61 : p.996—p.1001
出典(Source)紹介の部 55 : p.801—p.825	出典(Source)紹介の部 61(2) : p.1002—1003
出典(Source)紹介の部 55(2) : p.831—p.835	出典(Source)紹介の部 62 : p.1009—p.1014
出典(Source)紹介の部 55(3) : p.839—p.847	出典(Source)紹介の部 63 : p.1031—p.1036
出典(Source)紹介の部 56 : p.861—p.865	出典(Source)紹介の部 63(2) : p.1036—p.1038
出典(Source)紹介の部 56(2) : p.868	出典(Source)紹介の部 63(3) : p.1039—p.1059
出典(Source)紹介の部 63(4) : p.1072—p.1080	

第二巻 (vol.2) にて呈示の各出典紹介部の掲載頁として

出典(Source)紹介の部 64 : p.11—p.12	出典(Source)紹介の部 64(8) : p.30—p.32
出典(Source)紹介の部 64(2) : p.13—p.14	出典(Source)紹介の部 64(9) : p.33—p.34
出典(Source)紹介の部 64(3) : p.14—p.15	出典(Source)紹介の部 64(10) : p.38—p.39
出典(Source)紹介の部 64(4) : p.16—p.18	出典(Source)紹介の部 65 : p.60—p.61
出典(Source)紹介の部 64(5) : p.18—p.20	出典(Source)紹介の部 65(2) : p.65—p.66
出典(Source)紹介の部 64(6) : p.20—p.23	出典(Source)紹介の部 65(3) : p.76—p.82
出典(Source)紹介の部 64(7) : p.25—p.27	出典(Source)紹介の部 65(4) : p.83—p.89

出典(Source)紹介の部 65 (5) : p.103—p.108

出典(Source)紹介の部 65 (6) : p.110—p.115

出典(Source)紹介の部 65 (7) : p.118—p.121

出典(Source)紹介の部 65 (8) : p.123—p.125

出典(Source)紹介の部 65 (9) : p.134—p.137

出典(Source)紹介の部 65 (10) : p.150—p.154

出典(Source)紹介の部 65 (11) : p.165—p.166

出典(Source)紹介の部 65 (12) : p.166—p.167

出典(Source)紹介の部 65 (13) : p.168—p.171

出典(Source)紹介の部 65 (14) : p.177—p.180

出典(Source)紹介の部 65 (15) : p.180—p.181

出典(Source)紹介の部 66 : p.191—p.198

出典(Source)紹介の部 67 : p.220—p.228

出典(Source)紹介の部 68 : p.232—p.234

出典(Source)紹介の部 69 : p.234—p.238

出典(Source)紹介の部 69 (2) : p.239—p.244

出典(Source)紹介の部 70 : p.244—p.252

出典(Source)紹介の部 71 : p.253—p.261

出典(Source)紹介の部 72 : p.263—p.269

出典(Source)紹介の部 73 : p.278—p.281

出典(Source)紹介の部 74 : p.286—p.288

出典(Source)紹介の部 75 : p.289—p.293

出典(Source)紹介の部 75-2 : p.294—p.295

出典(Source)紹介の部 75-3 : p.301—p.305

出典(Source)紹介の部 75-3 (2) : p.305—p.307

出典(Source)紹介の部 76 : p.329—p.331

出典(Source)紹介の部 76 (2) : p.334—p.335

出典(Source)紹介の部 76 (3) : p.341—p.342

出典(Source)紹介の部 76 (4) : p.345—p.349

出典(Source)紹介の部 76 (5) : p.352—p.353

出典(Source)紹介の部 76 (6) : p.358—p.360

出典(Source)紹介の部 76 (7) : p.361—p.363

出典(Source)紹介の部 77 : p.369—p.373

出典(Source)紹介の部 77 (2) : p.375—p.377

出典(Source)紹介の部 77 (3) : p.378—p.383

出典(Source)紹介の部 78 : p.411—p.413

出典(Source)紹介の部 78 (2) : p.414—p.416

出典(Source)紹介の部 79 : p.423—p.425

出典(Source)紹介の部 79 (2) : p.426—p.430

出典(Source)紹介の部 80 : p.473—p.475

出典(Source)紹介の部 80 (2) : p.480—p.484

出典(Source)紹介の部 80 (3) : p.484—p.490

出典(Source)紹介の部 81 : p.502—p.505

出典(Source)紹介の部 82 : p.554—p.555

出典(Source)紹介の部 82 (2) : p.568—p.571

出典(Source)紹介の部 82 (3) : p.571—574

出典(Source)紹介の部 82 (4) : p.576—578

出典(Source)紹介の部 82 (5) : p.579—p.581

出典(Source)紹介の部 82 (6) : p.586—p.602

出典(Source)紹介の部 83 : p.622—p.624

出典(Source)紹介の部 84 : p.627—p.643

出典(Source)紹介の部 85 : p.654—p.659

出典(Source)紹介の部 86 : p.661—p.665

出典(Source)紹介の部 87 : p.686—p.691

出典(Source)紹介の部 87 (2) : p.699—p.705

出典(Source)紹介の部 87 (3) : p.721—p.723

出典(Source)紹介の部 87 (4) : p.725—p.728

出典(Source)紹介の部 87 (5) : p.749—p.752

出典(Source)紹介の部 88 : p.861—p.864

出典(Source)紹介の部 89 : p.924—p.926

第三巻 (vol.3) にて呈示の各出典紹介部の掲載頁として

出典(Source)紹介の部 90 : p.18—p.24

出典(Source)紹介の部 90 (2) : p.26—p.32

出典(Source)紹介の部 90 (3) : p.36—p.42

出典(Source)紹介の部 90 (4) : p.45—p.48

出典(Source)紹介の部 90 (5) : p.50—p.52

出典(Source)紹介の部 90 (6) : p.54—p.56

出典(Source)紹介の部 90 (7) : p.59—p.61

出典(Source)紹介の部 90 (8) : p.61—p.65

出典(Source)紹介の部 90 (9) : p.65—p.67

出典(Source)紹介の部 90 (10) : p.78—p.80

出典(Source)紹介の部 90 (11) : p.85—p.92

出典(Source)紹介の部 91 : p.142—p.145

出典(Source)紹介の部 92 : p.145—p.149

出典(Source)紹介の部 93 : p.157—p.168

出典(Source)紹介の部 94 : p.170—p.174

出典(Source)紹介の部 94 (2) : p.174—p.176

出典(Source)紹介の部 94 (3) : p.178—p.183

出典(Source)紹介の部 94 (4) : p.186—p.189

出典(Source)紹介の部 94 (5) : p.192—p.195

出典(Source)紹介の部 94 (6) : p.196—p.201

出典(Source)紹介の部 94 (7) : p.202—p.207

出典(Source)紹介の部 94 : p.231—p.235

出典(Source)紹介の部 95 (2) : p.236—p.243

出典(Source)紹介の部 95 (3) : p.244—p.248

出典(Source)紹介の部 95 (4) : p.255—p.259

出典(Source)紹介の部 95 (5) : p.260—p.263

出典(Source)紹介の部 95 (6) : p.265—p.269

出典(Source)紹介の部 95 (7) : p.270—p.279

出典(Source)紹介の部 95 (8) : p.281—p.292

出典(Source)紹介の部 95 (9) : p.301—p.309

出典(Source)紹介の部 96 : p.311—p.320

出典(Source)紹介の部 96 (2) : p.322—p.324

出典(Source)紹介の部 97 : p.354—p.371

出典(Source)紹介の部 98 : p.414—p.417

出典(Source)紹介の部 99 : p.462—p.468

出典(Source)紹介の部 100 : p.540—p.542

出典(Source)紹介の部 101 : p.545—p.553

出典(Source)紹介の部 102 : p.559—p.562

出典(Source)紹介の部 102 (2) : p.562—p.564

出典(Source)紹介の部 102 (3) : p.565—p.568

出典(Source)紹介の部 102 (4) : p.569—p.577

出典(Source)紹介の部 102 (5) : p.577—p.587

出典(Source)紹介の部 102 (6) : p.592—p.599

出典(Source)紹介の部 102 (7) : p.600—p.601

出典(Source)紹介の部 102 (8) : p.603—p.609

出典(Source)紹介の部 102 (9) : p.618—p.623

出典(Source)紹介の部 103 : p.635—p.637

出典(Source)紹介の部 103 (2) : p.638—p.642

出典(Source)紹介の部 103 (3) : p.642—p.652

出典(Source)紹介の部 103 (4) : p.652—p.654

出典(Source)紹介の部 103 (5) : p.654—p.657

出典(Source)紹介の部 103 (6) : p.658—p.676

出典(Source)紹介の部 104 : p.690—p.695

出典(Source)紹介の部 105 : p.696—p.721

出典(Source)紹介の部 106 : p.731—p.736

出典(Source)紹介の部 106 (2) : p.736—p.738

出典(Source)紹介の部 106 (3) : p.738—p.742

出典(Source)紹介の部 106 (4) : p.751—p.753

出典(Source)紹介の部 106 (5) : p.754—p.755

出典(Source)紹介の部 106 (6) : p.761—764

出典(Source)紹介の部 107 : p.771—774

出典(Source)紹介の部 107 (2) : p.774—p.777

出典(Source)紹介の部 108 : p.784—p.788

出典(Source)紹介の部 109 : p.892—p.895

出典(Source)紹介の部 109 (2) : p.897—p.900

出典(Source)紹介の部 109 (3) : p.900—p.902

出典(Source)紹介の部 109 (4) : p.905—p.908

出典(Source)紹介の部 109 (5) : p.917—p.935

出典(Source)紹介の部 109 (6) : p.939—p.942

第四巻 (vol.4) にて呈示の各出典紹介部の掲載頁として

出典(Source)紹介の部 110 : p.19—p.33

出典(Source)紹介の部 110 (2) : p.39—p.43

出典(Source)紹介の部 110 (3) : p.49—p.52

出典(Source)紹介の部 110 (4) : p.57—p.58

出典(Source)紹介の部 110 (5) : p.63—p.74

出典(Source)紹介の部 110 (6) : p.76—p.81

出典(Source)紹介の部 110 (7) : p.86—p.95

出典(Source)紹介の部 110 (8) : p.104—p.105

出典(Source)紹介の部 111 : p.119-p.121

出典(Source)紹介の部 116 : p.609-p.612

出典(Source)紹介の部 112 : p.183-p.190

出典(Source)紹介の部 117 : p.661-p.662

出典(Source)紹介の部 113 : p.241-p.244

出典(Source)紹介の部 117 (2) : p.664-p.668

出典(Source)紹介の部 113 (2) : p.290-p.295

出典(Source)紹介の部 117 (3) : p.668-p.672

出典(Source)紹介の部 114 : p.357-p.360

出典(Source)紹介の部 118 : p.677-p.680

出典(Source)紹介の部 115 : p.554-p.557

※ 本稿にあって区分けの上で多くの紙幅をそこに割いているとの補説部、そちら補説部各部の記載頁についてもここに表記しておく

出典(Source)紹介の部 115 (2) : p.561-p.562

補説 1 の部 : p.9-p.213 ,vol.2

出典(Source)紹介の部 115 (3) : p.563-p.568

補説 2 の部 : p.234-p.927,vol.2

出典(Source)紹介の部 115 (4) : p.600-p.602

補説 3 の部 : p.8-p.537 ,vol.3

出典(Source)紹介の部 115 (5) : p.603-p.607

補説 4 の部 : p.537-p.1035 ,vol.3



【典拠紹介部ら一覧に付しもしての表記として】

上掲図は

【ギリシャ神話に見るケンタウロスと戦争をなすに至った部族ラピス族(の男)とケンタウロスの戦いを象(かたど)った彫刻】を挙げもしてのものとなる。

同・彫刻作品 — Centaur and Lapithとの題の彫刻作品— にてモチーフとされている半人半馬の存在、

【ケンタウロス (Centaur)】

があまりにも異様な予見的言及に通じているとのことがある。

具体的にはケンタウロスのうちの固有名詞付きの著名な存在、【ケイロン】および【ネッソス】という存在が

【妻を陵辱しようとしたケンタウロス (の【ネッソス】) を殺害するに至った著名なるギリシャ神話英雄たるヘラクレスありよう】

を介して重篤なる予見的文物 — 後の日にあっての加速器関連の「ブラックホール生成にまつわる」リスク論議の細かきありようという往時にはどんな専門家も予見できなかったはずであるとのことを「克明に」予見しているとの 1980 年初出文物 — の内容に、そして、ブラックホール生成可能性が問題視されることになった史上最大の科学実験とされる LHC 実験そのものに悪質な式で関わっているとのことが指摘できてしまう、【現象】としてはきとそこにあることとして指摘できてしまうとのことがありもし、本稿ではそのことの遺漏無くもの摘示に努めている (：直前出典紹介部一覧にてそちら掲載ページ数も無論にして呈示しているとの典拠紹介部 110 から典拠紹介部 110 (8) との出典紹介部を包摂する部の内容、四巻構成の本稿における第四巻 (vol.4) における p.19 から p.116 の内容が【自身を欺き、妻を陵辱しようとしたケンタウロス・ネッソスを殺害するヘラクレス】がブラックホール生成にまつわる克明なる予見文物に何故もってして関わっているのかの【多重的論拠】を仔細に呈示せんと心掛けての部となる)。

以上表記のこと — いいだろうか、異様な先覚性を帯びての加速器によるブラックホール生成にまつわる予見事物、そして、後にブラックホール生成が取り沙汰されるに至った LHC 実験というものそれ自体の双方が (ギリシャ神話英雄たる)ヘラクレスにまつわる【特定の属性】とはきと結びついているとのことが「ある」のである— がどうして「極めてもってして問題になる」のかについては本稿の内容をきちんとご検討いただければ、ご理解いただけるであろうとのこと、ここに請け合わせていただく次第である。

— 生きようとする人の意志に —

【著者および著作権について】

はきと述べて自身このありようなどどうでもいい、売名行為も「ビジネス」(なるもの)の範疇に入るのだろうとの種別の人間、あるいは、他の何らかの理由がゆえに名をなさんとする(鼻につく虚栄心であれ、英雄願望であれ、生き方それ自体をおのが作品としたいとの芸術家の美意識のあらわれであれ名をなさんとする)との願望を持ち合わせている向きよろしくおのれのことを知ってもらいたくてこの身は本稿の公開・頒布を試みているわけ「ではない」(その点からして勘違いしないでいただきたい)。

本稿 — (都度もってしての改訂を試みながら作製してきた **Entities that physicists refer to as Black holes , already fulfilled many extraordinary Predictions , and firm Guilty Intent『物理学者の類がブラックホールとよびならわしている存在ら、既に実現を見てきた異様な予見的言及、そして、確たる他害意志の介在問題について』**と(内容そのままに題しての)本稿) — の節々の記載内容をもってして[悟性]伴った向きにはお分かりいただけることか、と思うのではあるが、筆者は自身および自身が守るに値するのとらえた向きが物理的に生き残る術、

【環境変化によって「物理的に」生き残る術】

を模索して本稿の指摘事項の適正なる拡散を試みているのであってそこにあってはサーカス小屋と自身が目しきるに至ったこのような世界で「システムの罅間(太鼓持ち)・大道芸者・サーカスの子供ら」がそうするように矮小なる名を売ろうなどの意図・観点はない(この身は多くの虚偽・偽善が平然とまかりとおるこの世界にて表舞台にて見得を切っている[名をなしての富貴なる者・権勢ある者・学識(なるもの)を伴った向き]ら、そして、彼らとときに紐付いている社会貢献・慈善活動(なるもの)をして[状況がなんら分かっていないところ]に産がある、誰も永らえることができない死刑場における囚人の楽観主義がごとくところから発しているようではある、しからずんば、非人間的な空虚さに根があるやもしれぬとの意で胡散臭く見ているとの筋合いの人間である。そうした見方をなしている人間として本稿を世に[名] — 死ねば所詮は無であるのもの — や[道徳観点;善や良俗にまつわる自己の偏頗な価値観]を押し売りせんと観点でものしているわけ「ではない」、よくよくも斟酌いただきたいところとして、**本稿執筆の背景にある「思考」とのこと**で言えば、**我々が暮らすこの地球という水槽が人の住めぬものになったならば、おのれ・縁者も死ぬし、人間存在 — 羊のような従順さ・ロボットのような空虚さ・見え透いた愚昧さ・陋劣さが後天的に亢進させられている節も濃厚にあるように見受けれるとの式での碌でもないありようばかりが目につく種族ながらも我が属する人間存在 — のうちの徹々たる美風の体現者らも諸共滅びましょう、そうしたことが危惧される(下らぬ宗教的観点などではなく【具体的現象】【具体的兆候】に依拠してのこととして危惧される)中でただただ「【物理的生き残り】を図るとの原始的本能」に依拠しての観点でもって本稿を作製(十二分に練れたものとして作製)、その中身・指摘事項を世に適正に広めんと試みているにすぎない。**

直上にてそうも述べているようにシステムの用意したサーカスの子供らよろしく名を売ろうとする意図などこの身にはないのではあるが、ただ、(そこは踏むべきかと判じた)[節度]および(社会的にはなく物理的に生き残らんとする上での)[合理的観点]をもってして表記するところとしての筆者(たる大森健史という男)のありようについては、である。

「【情報の体系】(いわばもってしての「ミーム」とでも表すべきもの)を拡散するため、ただそれだけのために時間も最早なかりと考えつつながらも自身が設立した会社(名利嚙蠟出版株式会社という会社)のウェブサイト — (従前訴求事項を反映させるとの式で2012年前半期よりサイト公開をし出したとの社用媒体、本稿を公開することにしたオンライン媒体の一でもあるとの手前が代表を務める会社・名利嚙蠟出版株式会社における社サイト/この身が相応の結末・最期を迎えぬ限りは存続するとのかたち(現行)するつもりであるとのサイト) — にてその点についての最低限の表記をなしている、そうしたこと、手前ありようなどにも関心がある — すなわちもって、どういった者が問題となることを(それなりの媒体を作製して)指摘しているのかとの意で関心がある — との向きにおかれてはそちらを参照いただきたい」

とまでは申し述べておく。

またもってして、**本稿にあっては【著作権表示】を施してもいるが**(当頁下部参照のこと)、この期にあって著作権にまつわつての表示などを取ってもせせこましくもなしているのは

[バンダー(供給者)・供給チャネルを偽りながらも改悪・言論土壌汚染行為](馬鹿げた陰謀論ないそうしたもののバンダーであるとの相応の手合いらと十把一絡げにしての供給チャネル偽装行為・露骨な劣化言論作出の類を(先後関係など偽りながら)なして情報供給チャネルと情報それ自体に対する印象操作をなし、厳然とある事実関係、その指摘を晦(くら)まし・枉(ま)げるといったやりよう / 上より情報封殺が完遂できない局面におけるオプションととれるやりよう)

などが相応の人間の心性欠如の者ら — 本来ならばそうする理由もないところで[説得力乏しき劣化言論]を目立って拡散なしもしようとの空虚な者ら — によって「そればかりが目立つ」式でなされる可能性を可及的に抑止するための配慮がある(被害妄想がかっていて信じ難くもあろうが、この身には訴訟をなしていた折より同じくものことの経験がある)がゆえであって、(そうも**著作権表示などなしているのは**)**なにも「死に往く者」が知的財産権などに対する拘りをこれ滑稽にも呈しているわけでないとのこと、一応もってして断っておく**(第三者にその共感を求めるのは一難事かととらえているのだが、自身を[死に往く者]と表しもしての**【時間的切迫性】**とのこと)で言えば、である。「人の将(まさ)に死なんとする、その言や善し」(教条的ではないつもりではある(児孫死滅に通ずる不正に心底からの罵詈雑言することはあるが教条主義的に人に内観や教えといったものを押しつけるようなことはしたくない)、そして、胸中まだ若くあるつもりであるとの人間が引くのは何ではあるかと思うのであるもの儒教というもの)の徒・曾子の言として世に知られる言 / 死なぬために本稿の内容を問うつもりではあるとの人間ながらもそうした赤裸々さもまた他面であるとの意で引き合いに出しているとの英語で言うところの「ア・ダイニング・パースン・スピークス・トルルー」)との観点を[状況捕捉を真に望む向きら]に求めたいぐらいに時間的切迫性の問題が見え隠れしている、我が命とていくばくもない、健康面による事由ではなく、また、その他ありとあらゆるマイクロレベル(個人個人レベル)の災難ですらなくいくばくもなろうと当然に判じるだけのことが「ある」のだとここにあってからして申し述べておきたい — 私はことによっては極近々【人災】(非力なる羊のような者らにとっては神為などと受け取られもするかもしれぬ【人災】)によって「吞まれて」死することとて大いにありうると見ている、自身があと数年、安閑に永らえることに対してすらなんら希望的観測を抱いていない(そうもした【人災】と紐付いた**【時間的切迫性】**にまつわる危惧に通じている「数多の」論拠ら(具体的【現象】に依拠しての「数多の」論拠ら)は本稿にて厭となる程に呈示しているので、理なくしての獣声よろしくの否定、【愚者の否定】(情動的・条件反射的「拒絶」)をなすとの式ではなくにこの身を否定してやりたいと考えもしている向きらにはそれら論拠ら理非を検討いただきたい) —)。